岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 56

百間川原尾島遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 V

(本　文)

1984
建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 56

百間川原尾島遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 V

(本　文)

1984
建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

序

百間川遺跡群の発掘調査は，昭和52年４月から始め，現在も継続しています。発掘調査の報告書は年次ごとに刊行していますが，今回は５分冊目になります。

本報告書では，昭和53年９月から昭和57年３月まで調査を行った百間川原尾島遺跡をとりあげます。これらの調査区においては，弥生時代後期から古墳時代の住居址群，広域にひろがった弥生時代中・後期の水田および灌漑施設等の貴重な遺構・遺物が発見され，全国的にも注目されました。

この報告書が文化財の保護，保存，更には今後の研究の一助となれば幸いと存じます。

現地調査の実施，報告書の作成にあたって，建設省中国地方建設局，岡山河川工事事務所，並びに百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員をはじめとする関係各位から寄せられた多大の御協力と御指導に対し，厚く御礼申しあげます。

昭和59年３月

岡山県教育委員会

教育長　宮地暢夫

例　　言

1. この報告書は旭川放水路（百間川）改修工事に伴い，建設省中国地方建設局の依頼を受け，岡山県教育委員会が1978～1982年に発掘調査を実施した百間川原尾島遺跡の発掘調査概要である。なお，上記発掘調査部分は第１次確認調査における第１微高地および第１微高地と第２微高地の間である。
2. 調査期間は1978年９月18日～1982年３月31日である。
3. 発掘調査および報告書の作成にあたって，旭川放水路（百間川）埋蔵文化財保護対策委員会の助言を受けた。また，石材の肉眼同定には岡山理科大学三宅寛教授，平井典子氏，木器の樹種鑑定には岡山大学農学部畔柳鎮教授，種子分析には笠原安夫岡山大学名誉教授，^{14}C年代測定には京都産業大学理学部山田治教授，花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し，有益な教示と助言を得た。一部の木器については，元興寺文化財研究所保存科学研究室に委託し，研究所員松田隆嗣氏の教示を得た。また木器の用途，形態については，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター町田章氏の教示を得た。中世井戸出土の木簡の釈読については，奈良大学水野正好教授の教示を得た。また，赤外線写真撮影や釈読に際しては，草戸千軒町遺跡調査研究所，松下正司所長をはじめ，志田原重人，篠原芳秀両氏の暖かいご指導とご援助を得た。各氏に対し，記して深甚の謝意を表する次第である。
4. 報告書の作成は，1982年４月以降1983年３月まで文化課分室にて整理作業を実施し，文化課職員が執筆し，文責は文末に記した。
5. 遺物の整理，実測および実測図の浄写，遺構図の浄写は，おもに各担当者が行い，一部の土器・木器の実測に山本悦世，有森万久，武田恭彰，赤松光晴，竹本聡美，小竹森直子，石器の実測および浄写に平井典子，福田輝子，山田雅子，文章の浄写・拓本は，岡本香織，伊井瑞恵，小野晶子各氏の助力を得た。遺物の写真撮影は，正岡睦夫，井上弘，高畑知功，岡田博，平井泰男が行った。全体編集は正岡が行い，各調査区の編集には，光永真一，島崎東，平井，高畑があたった。

   また，遺物整理には森本耶須子，綱沢靖枝，平岩章子，平井典子，坂本由美子各氏の協力を得た。
6. 報告書で用いる断面図高度値は海抜高であり，方位は磁北である。
7. 報告書に掲載の縮尺率は，それぞれに示した。出土遺物の実測図で数値を示していないものは，1/4の縮尺である。
8. 報告書で用いる時代区分は，一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用した。
9. 調査地区は調査後，小字名に準拠し，中須賀，丸田，川内，三ノ坪の４区にわけた。
10. 報告書に関係する遺物，実測図，マイクロフィルム等は，文化課分室にて保管している。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境……1
第２章　調査の契機および経過……5
第３章　百間川原尾島遺跡……11
　第１節　中須賀調査区……11
　第２節　丸田調査区……209
　第３節　川内調査区……540
　第４節　三ノ坪調査区……573
第４章　ま　と　め……659
　第１節　百間川原尾島遺跡発掘調査概要……659
　第２節　水田遺構……663
　第３節　銅鐸形土製品について……694
　第４節　中世の遺構・遺物について……699

図　目　次

第１図　百間川位置図……1
第２図　百間川周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
第３図　グリッド設定と小字名（１）（1/5,000）……6
第４図　グリッド設定と小字名（２）（1/5,000）……7
第５図　包含層出土遺物……11
第６図　D-11北東壁土層断面(1/40)……11
第７図　土壙－１（1/50）・出土遺物……12
第８図　中須賀調査区弥生時代遺構配置図（1/500）……折込１
第９図　中須賀調査区古墳時代遺構配置図（1/500）……折込１
第10図　土壙－２（1/40）・出土遺物……13
第11図　土壙－３（1/30）・出土遺物……14
第12図　溝－１出土遺物……15
第13図　包含層出土遺物……15
第14図　竪穴式住居－１（左）・２（右）（1/80）……16
第15図　竪穴式住居－１出土遺物……17
第16図　竪穴式住居－３（1/80）・出土遺物……18
第17図　竪穴式住居－４（1/80）……19
第18図　竪穴式住居－４内土壙（1/30）・出土遺物（１）……20
第19図　竪穴式住居－４出土遺物（２）…21
第20図　竪穴式住居－５（1/80）……22
第21図　竪穴式住居－６（1/80）・出土遺物（１）……23
第22図　竪穴式住居－６出土遺物（２）…24
第23図　竪穴式住居－６出土遺物（３）…25
第24図　竪穴式住居－７（1/80）・出土遺物（１）……26
第25図　竪穴式住居－７出土遺物（２）…27
第26図　竪穴式住居－７出土遺物（３）…28
第27図　竪穴式住居－８（1/80）……29
第28図　竪穴式住居－８出土遺物（１）…30

第29図 竪穴式住居－8出土遺物（2）…31
第30図 竪穴式住居－8出土遺物（3）…32
第31図 竪穴式住居－9（1/80）・出土遺物……32
第32図 竪穴式住居－10（1/80）……32
第33図 竪穴式住居－10出土遺物……33
第34図 竪穴式住居－11（1/80）・出土遺物……34
第35図 竪穴式住居－12（1/80）・出土遺物……35
第36図 竪穴式住居－13（1/80）……36
第37図 竪穴式住居－13出土遺物（1）…38
第38図 竪穴式住居－13出土遺物（2）…39
第39図 竪穴式住居－14（1/80）・出土遺物（1）……40
第40図 竪穴式住居－14出土遺物（2）…41
第41図 竪穴式住居－15出土遺物……41
第42図 竪穴式住居－16（1/80）……43
第43図 竪穴式住居－16出土遺物（1）…44
第44図 竪穴式住居－16出土遺物（2）…45
第45図 井戸－1（1/30）……46
第46図 井戸－1出土遺物（1）……47
第47図 井戸－1出土遺物（2）……48
第48図 井戸－1出土遺物（3）……49
第49図 井戸－1出土遺物（4）……50
第50図 井戸－1出土遺物（5）……51
第51図 井戸－1出土遺物（6）……52
第52図 井戸－1出土遺物（7）……53
第53図 井戸－2（1/40）・出土遺物……54
第54図 井戸－3（1/40）・出土遺物……55
第55図 井戸－4（1/50）・出土遺物……56
第56図 井戸－5（1/30）・出土遺物……57
第57図 井戸－6（1/30）・出土遺物……57
第58図 井戸－7（1/40）・出土遺物……58
第59図 井戸－8（1/40）・出土遺物（1）……59
第60図 井戸－8出土遺物（2）……60
第61図 井戸－8出土遺物（3）……61
第62図 土壙－4（1/30）・出土遺物……62
第63図 土壙－5（1/30）・出土遺物……62
第64図 土壙－6（1/30）・出土遺物……63
第65図 土壙－7（1/30）・出土遺物……63
第66図 土壙－8（1/30）・出土遺物……64
第67図 土壙－9（1/30）・出土遺物……64
第68図 土壙－10（1/30）・出土遺物……65
第69図 土壙－11（1/30）・出土遺物……66
第70図 土壙－12（1/30）……66
第71図 土壙－12出土遺物……67
第72図 土壙－13（1/30）・出土遺物……67
第73図 土壙－14（1/30）・出土遺物……67
第74図 土壙－15（1/30）・出土遺物……68
第75図 土壙－16（1/30）・出土遺物……68
第76図 土壙－17（1/30）・出土遺物……69
第77図 土壙－18（1/30）・出土遺物……70
第78図 土壙－19（1/30）……71
第79図 土壙－19出土遺物（1）……72
第80図 土壙－19出土遺物（2）……73
第81図 土壙－20（1/30）・出土遺物……74
第82図 土壙－21（1/30）……74
第83図 土壙－22（1/30）・出土遺物……74
第84図 土壙－23（1/30）・出土遺物……75
第85図 土壙－24（1/30）・出土遺物（1）……76
第86図 土壙－24出土遺物（2）……77
第87図 土壙－25（1/30）・出土遺物……78
第88図 土壙－26（1/30）・出土遺物……79
第89図 土壙－27（1/30）・出土遺物……79
第90図 土壙－28出土遺物……80
第91図 土壙－29（左）・30（右）（1/30）……80
第92図 土壙－29出土遺物……80
第93図 土壙－30出土遺物……81
第94図 土壙－31（1/30）……81
第95図 土壙－31出土遺物……82
第96図 土壙－32（1/30）……82
第97図 土壙－32出土遺物（1）……83
第98図 土壙－32出土遺物（2）……84
第99図 土壙－32出土遺物（3）……85
第100図 土壙－32出土遺物（4）……86
第101図 土壙－32出土遺物（5）……87

第102図 土壙—33 (1/30) ……88
第103図 土壙—34 (1/30)・出土遺物
（1）……88
第104図 土壙—34出土遺物（2）……89
第105図 土壙—35出土遺物……89
第106図 土壙—36出土遺物……89
第107図 土壙—37 (1/30)・出土遺物 ……90
第108図 土壙—38 (1/30)・出土遺物 ……91
第109図 土壙—39 (1/30)・出土遺物 ……91
第110図 土壙—40 (1/30)・出土遺物
（1）……92
第111図 土壙—40出土遺物（2）……93
第112図 土壙—40出土遺物（3）……93
第113図 土壙—41 (1/30)・出土遺物 ……94
第114図 土壙—42 (1/30)・出土遺物
（1）……95
第115図 土壙—42出土遺物（2）……96
第116図 土壙—42出土遺物（3）……97
第117図 土壙—43 (1/30)・出土遺物 ……98
第118図 土壙—44 (1/30)・出土遺物 ……99
第119図 土壙—45 (1/30)・出土遺物 … 100
第120図 土壙—46 (1/30)・出土遺物 … 100
第121図 土壙—47 (1/30)・出土遺物
（1）…… 101
第122図 土壙—47出土遺物（2）…… 102
第123図 土壙—48 (1/30)・出土遺物
（1）…… 103
第124図 土壙—48出土遺物（2）…… 104
第125図 土壙—49 (1/30)・出土遺物
（1）…… 105
第126図 土壙—49出土遺物（2）…… 106
第127図 土壙—50 (1/30)・出土遺物 … 107
第128図 土壙—51 (1/30)・出土遺物 … 107
第129図 土壙—52 (1/30)・出土遺物 … 108
第130図 土壙—53 (1/40) …… 108
第131図 土壙—53出土遺物…… 109
第132図 土壙—54 (1/40)・出土遺物 … 110
第133図 土壙—55 (1/40)・出土遺物 … 110
第134図 土壙—56 (1/30)・出土遺物 … 111
第135図 土壙—57 (1/20)・出土遺物 … 112
第136図 土壙—58 (1/30) …… 112
第137図 土壙—58出土遺物…… 113
第138図 土壙—59 (1/30)・出土遺物 … 114
第139図 土壙—60 (1/30)・出土遺物 … 115
第140図 土壙—61 (1/30)・出土遺物 … 116
第141図 土壙—62 (1/30)・出土遺物 … 117
第142図 土壙—63 (1/30)・出土遺物 … 117
第143図 土壙—64 (1/30)・出土遺物 … 118
第144図 土壙—65 (1/30)・出土遺物 … 118
第145図 土壙—66 (1/30)・出土遺物 … 119
第146図 土壙—67 (1/40) …… 119
第147図 土壙—67出土遺物（1）…… 120
第148図 土壙—67出土遺物（2）…… 121
第149図 土壙—68 (1/40) …… 122
第150図 土壙—68出土遺物…… 123
第151図 土壙—69 (1/20)・出土遺物 … 124
第152図 土壙—70（右）・71（左）(1/40)
・出土遺物…… 125
第153図 土壙—72 (1/30) …… 125
第154図 土壙—72出土遺物…… 126
第155図 土壙—73 (1/30)・出土遺物 … 127
第156図 土壙—74 (1/30)・出土遺物 … 127
第157図 土壙—75 (1/30)・出土遺物 … 128
第158図 土壙—76 (1/30)・出土遺物 … 129
第159図 土壙—77 (1/30)・出土遺物 … 129
第160図 土壙—78 (1/40)・出土遺物 … 130
第161図 土壙—79 (1/30)・出土遺物 … 131
第162図 土壙—80 (1/30)・出土遺物 … 131
第163図 土壙—81 (1/40)・出土遺物 … 132
第164図 土壙—82 (1/30)・出土遺物 … 132
第165図 土壙—83 (1/40)・出土遺物 … 133
第166図 土壙—84 (1/30)・出土遺物
（1）…… 133
第167図 土壙—84出土遺物（2）…… 134
第168図 土壙—85 (1/30)・出土遺物 … 135
第169図 土壙—86 (1/30)・出土遺物 … 136
第170図 土壙—89 (1/30)・出土遺物 … 136
第171図 土壙—90 (1/20)・出土遺物
（1）…… 137
第172図 土壙—90出土遺物（2）…… 138

第173図 柱穴内出土遺物（１）…… 140
第174図 柱穴内出土遺物（２）…… 141
第175図 溝－１・４・７・８（1/60）… 142
第176図 溝－４・５・９出土遺物…… 143
第177図 溝－13（1/30）…… 144
第178図 溝－14・16・17出土遺物…… 145
第179図 包含層出土遺物（１）…… 146
第180図 包含層出土遺物（２）…… 147
第181図 包含層出土遺物（３）…… 148
第182図 竪穴式住居－17（1/80）…… 149
第183図 竪穴式住居－18（1/80）・出土遺物…… 149
第184図 竪穴式住居－19（1/80）・出土遺物…… 150
第185図 竪穴式住居－20（1/80）・出土遺物…… 151
第186図 竪穴式住居－21（1/80）・出土遺物…… 152
第187図 竪穴式住居－22（1/80）…… 152
第188図 竪穴式住居－23（1/40）…… 153
第189図 竪穴式住居－23出土遺物…… 154
第190図 竪穴式住居－24（1/80）…… 154
第191図 竪穴式住居－24出土遺物（１）…… 155
第192図 竪穴式住居－24出土遺物（２）…… 156
第193図 竪穴式住居－24かまど断面（1/40）…… 157
第194図 竪穴式住居－25（1/80）…… 157
第195図 竪穴式住居－26（1/80）…… 158
第196図 竪穴式住居－26かまど（1/30）…… 159
第197図 竪穴式住居－26出土遺物（１）…… 159
第198図 竪穴式住居－26出土遺物（２）…… 160
第199図 竪穴式住居－27（1/40）…… 161
第200図 竪穴式住居－27出土遺物（１）…… 162
第201図 竪穴式住居－27出土遺物（２）…… 163
第202図 井戸－９（1/30）…… 164
第203図 井戸－９出土遺物…… 165
第204図 土壙－91（1/30）・出土遺物 … 166
第205図 土壙－93（1/30）・出土遺物 … 166
第206図 溝－18出土遺物…… 167
第207図 溝－20・22・23出土遺物…… 168
第208図 包含層出土遺物…… 170
第209図 建物－１（1/100）…… 171
第210図 建物－２（1/100）…… 171
第211図 中須賀調査区中世以降遺構配置図（1/500）（１）…… 172
第212図 中須賀調査区中世以降遺構配置図（1/500）（２）…… 173
第213図 土壙－94（1/30）…… 174
第214図 土壙－95出土遺物…… 174
第215図 土壙－96（1/30）・出土遺物（１）…… 174
第216図 土壙－96出土遺物（２）…… 175
第217図 土壙－97（1/30）・出土遺物 … 175
第218図 土壙－98（1/30）…… 176
第219図 土壙－99・100・101出土遺物… 176
第220図 土壙－102（1/30）・出土遺物… 177
第221図 土壙－103（1/30）・出土遺物… 177
第222図 土壙－104（1/30）・出土遺物… 178
第223図 土壙－105・106（1/40）・出土遺物…… 178
第224図 土壙－107（1/30）・出土遺物… 179
第225図 溝－24出土遺物…… 179
第226図 溝－25土層断面（1/60）…… 180
第227図 溝－25出土遺物（１）…… 181
第228図 溝－25出土遺物（２）…… 182
第229図 溝－25出土遺物（３）…… 183
第230図 溝－25出土遺物（４）…… 184
第231図 溝－25出土遺物（５）…… 185
第232図 溝－25出土遺物（６）…… 186
第233図 溝－26（1/80）・出土遺物 …… 187
第234図 溝－27（上）・28（下）（1/30）…… 187
第235図 溝－29（左）・30（右）

(1/60)・出土遺物 …… 187
第236図 柱穴内出土遺物…… 188
第237図 包含層出土遺物（1） …… 191
第238図 包含層出土遺物（2） …… 192
第239図 包含層出土遺物（3） …… 193
第240図 包含層出土遺物（4） …… 194
第241図 包含層出土遺物（5） …… 195
第242図 包含層出土遺物（6） …… 196
第243図 包含層出土遺物（7） …… 197
第244図 包含層出土遺物（8） …… 198
第245図 包含層出土遺物（9） …… 199
第246図 包含層出土遺物（10） …… 200
第247図 包含層出土遺物（11） …… 201
第248図 包含層出土遺物（12） …… 202
第249図 包含層出土遺物（13） …… 203
第250図 包含層出土遺物（14） …… 204
第251図 包含層出土遺物（15） …… 205
第252図 包含層出土遺物（16） …… 206
第253図 包含層出土遺物（17） …… 207
第254図 包含層出土遺物（18） …… 208
第255図 包含層出土遺物（19） …… 208
第256図 丸田調査区弥生時代遺構配置図（1/800） ……折込2
第257図 丸田調査区古墳時代～近世・近代遺構配置図（1/800） …折込2
第258図 丸田調査区北壁土層断面（1/100）（1） …… 211
第259図 丸田調査区北壁土層断面（1/100）（2） …… 212
第260図 丸田調査区北壁土層断面（1/100）（3） …… 213
第261図 丸田調査区北壁土層断面（1/100）（4） …… 214
第262図 丸田調査区北壁抽出土層断面（1/50）（1） …… 214
第263図 丸田調査区北壁抽出土層断面（1/50）（2） …… 215
第264図 抽出土層断面（1/60）・包含層出土遺物…… 216
第265図 丸田調査区弥生時代前期遺構配置図（1/600） …… 217
第266図 竪穴式住居—28（1/80）・出土遺物…… 218
第267図 土壙—109（1/30） …… 219
第268図 土壙—109出土遺物 …… 220
第269図 土壙—110（1/30）・出土遺物… 221
第270図 土壙—111（1/30）・出土遺物… 221
第271図 土壙—112（1/30）・出土遺物… 222
第272図 河道土層断面（1/100） …… 225
第273図 河道出土遺物（1） …… 226
第274図 河道出土遺物（2） …… 227
第275図 河道出土遺物（3） …… 228
第276図 河道出土遺物（4） …… 229
第277図 河道出土遺物（5） …… 230
第278図 河道出土遺物（6） …… 231
第279図 河道出土遺物（7） …… 232
第280図 河道出土遺物（8） …… 233
第281図 河道出土遺物（9） …… 234
第282図 河道出土遺物（10） …… 235
第283図 河道出土遺物（11） …… 236
第284図 河道出土遺物（12） …… 237
第285図 河道出土遺物（13） …… 238
第286図 河道出土遺物（14） …… 239
第287図 河道出土遺物（15） …… 240
第288図 河道出土遺物（16） …… 241
第289図 河道出土鯨骨…… 241
第290図 木器出土位置図（1/100） …… 242
第291図 河道出土遺物（17） …… 243
第292図 河道出土遺物（18） …… 244
第293図 河道最終流路（1/30） …… 245
第294図 河道最終流路出土遺物…… 245
第295図 溝—31（1/30）・出土遺物 …… 247
第296図 溝—32（1/30） …… 247
第297図 溝—33（1/30）・出土遺物 …… 248
第298図 溝—34（1/30）・出土遺物 …… 248
第299図 溝—35（1/30）・出土遺物 …… 249
第300図 溝—36（1/30） …… 249
第301図 包含層出土遺物…… 249
第302図 丸田調査区弥生時代後期遺構配置図（1/600） …… 250

第303図 竪穴式住居—29（1/100） …… 251
第304図 竪穴式住居—29住居外周溝・土壙—124（1/30） …… 252
第305図 竪穴式住居—29（1/80）・出土遺物…… 252
第306図 竪穴式住居—29住居外周溝（1/30）・出土遺物 …… 253
第307図 竪穴式住居—29（1/80） …… 253
第308図 竪穴式住居—29床面出土遺物… 254
第309図 竪穴式住居—29住居外周溝北東部出土遺物…… 254
第310図 竪穴式住居—29住居外周溝南半部出土遺物（1） …… 255
第311図 竪穴式住居—29住居外周溝南半部出土遺物（2） …… 256
第312図 竪穴式住居—29住居外周溝南西部出土遺物…… 256
第313図 竪穴式住居—29住居外周溝北西部出土遺物…… 256
第314図 竪穴式住居—29出土遺物…… 257
第315図 竪穴式住居—30（1/80） …… 258
第316図 竪穴式住居—30関連溝（1/30） …… 258
第317図 竪穴式住居—30床面・柱穴・住居外周溝出土遺物…… 259
第318図 竪穴式住居—30関連溝出土遺物（1） …… 259
第319図 竪穴式住居—30関連溝出土遺物（2） …… 260
第320図 竪穴式住居—30関連溝出土遺物（3） …… 261
第321図 竪穴式住居—30関連溝出土遺物（4） …… 262
第322図 竪穴式住居—31（1/80）・出土遺物…… 262
第323図 竪穴式住居—32（1/80） …… 264
第324図 竪穴式住居—32出土遺物…… 265
第325図 竪穴式住居—32変遷図（1/120） …… 266
第326図 竪穴式住居—33（1/60） …… 267
第327図 竪穴式住居—33出土遺物…… 268
第328図 竪穴式住居—34（1/80）・出土遺物…… 269
第329図 竪穴式住居—34出土遺物（1） …… 270
第330図 竪穴式住居—34出土遺物（2） …… 271
第331図 竪穴式住居—35（1/80） …… 272
第332図 竪穴式住居—35出土遺物（1） …… 273
第333図 竪穴式住居—35住居外周溝出土遺物（1） …… 274
第334図 竪穴式住居—35住居外周溝出土遺物（2） …… 275
第335図 竪穴式住居—35出土遺物（2） …… 275
第336図 竪穴式住居—36（1/30）・出土遺物（1） …… 276
第337図 竪穴式住居—36出土遺物位置図 …… 277
第338図 竪穴式住居—36出土遺物（2） …… 278
第339図 竪穴式住居—36出土遺物（3） …… 279
第340図 竪穴式住居—37（1/30） …… 280
第341図 竪穴式住居—37出土遺物（1） …… 281
第342図 竪穴式住居—37出土遺物（2） …… 281
第343図 竪穴式住居—38（1/80） …… 282
第344図 竪穴式住居—38出土遺物…… 282
第345図 竪穴式住居—38（1/80・1/40）… 283
第346図 竪穴式住居—39（1/80）・出土遺物（1） …… 284
第347図 竪穴式住居—39P-5（1/30） … 285
第348図 竪穴式住居—39P-8（1/30） … 285
第349図 竪穴式住居—39P-5・8出土遺物（1） …… 285
第350図 竪穴式住居—39出土遺物（2） …… 286

第351図 建物－3（1/80）・出土遺物 … 287
第352図 建物－4（1/80） …… 288
第353図 建物－5（1/80） …… 288
第354図 建物－6（1/80） …… 288
第355図 建物－7（1/100） …… 289
第356図 建物－8（1/100） …… 289
第357図 建物－9（1/100） …… 290
第358図 建物－10（1/100） …… 290
第359図 建物－11（1/80） …… 291
第360図 建物－12（1/100） …… 291
第361図 建物－13（1/80） …… 292
第362図 建物－14（1/80）・出土遺物 … 293
第363図 建物－15（1/80）・出土遺物 … 293
第364図 柱列－1（1/80） …… 294
第365図 柱列－2（1/80）・出土遺物 … 294
第366図 柱列－3（1/80） …… 295
第367図 柱列－4（1/80） …… 295
第368図 井戸－10（1/30）・出土遺物 … 296
第369図 井戸－11（1/30）・出土遺物（1） …… 297
第370図 井戸－11出土遺物（2） …… 298
第371図 井戸－11出土遺物（3） …… 299
第372図 井戸－11出土遺物（4） …… 300
第373図 井戸－12（1/30）・出土遺物 … 301
第374図 井戸－13（1/30）・出土遺物 … 301
第375図 井戸－14（1/30）・出土遺物 … 302
第376図 井戸－15（1/30）・出土遺物（1） …… 303
第377図 井戸－15出土遺物（2） …… 304
第378図 井戸－15出土遺物（3） …… 305
第379図 井戸－16（1/30） …… 306
第380図 井戸－16出土遺物位置図…… 307
第381図 井戸－16出土遺物（1） …… 308
第382図 井戸－16出土遺物（2） …… 309
第383図 井戸－16出土遺物（3） …… 310
第384図 井戸－16出土遺物（4） …… 311
第385図 井戸－16出土遺物（5） …… 312
第386図 井戸－16出土遺物（6） …… 313
第387図 井戸－16出土遺物（7） …… 314
第388図 井戸－16出土遺物（8） …… 315
第389図 井戸－16出土遺物（9） …… 316
第390図 井戸－16出土遺物（10） …… 317
第391図 井戸－16出土遺物（11） …… 318
第392図 井戸－16出土遺物（12） …… 319
第393図 井戸－17（1/30） …… 320
第394図 井戸－17出土遺物（1） …… 321
第395図 井戸－17出土遺物（2） …… 322
第396図 井戸－17出土遺物（3） …… 323
第397図 井戸－17出土遺物（4） …… 324
第398図 井戸－17出土遺物（5） …… 325
第399図 井戸－18（1/30）・出土遺物 … 326
第400図 井戸－19（1/30） …… 327
第401図 井戸－19出土遺物（1） …… 328
第402図 井戸－19出土遺物（2） …… 328
第403図 井戸－20（1/30）・出土遺物 … 329
第404図 井戸－21（1/30） …… 330
第405図 井戸－21出土遺物…… 331
第406図 井戸－22（1/30）・出土遺物 … 332
第407図 井戸－23（1/30） …… 332
第408図 井戸－23出土遺物…… 333
第409図 井戸－24（1/30）・出土遺物 … 334
第410図 井戸－25（1/30） …… 334
第411図 土壙－121（1/30）・出土遺物（1） …… 335
第412図 土壙－121出土遺物（2） …… 336
第413図 土壙－121出土遺物（3） …… 337
第414図 土壙－122（1/30）・出土遺物… 338
第415図 土壙－123（1/30）・出土遺物… 338
第416図 土壙－124（1/30）・出土遺物… 339
第417図 土壙－125（1/30） …… 339
第418図 土壙－125出土遺物 …… 340
第419図 土壙－126（1/30） …… 340
第420図 土壙－126出土遺物（1） …… 341
第421図 土壙－126出土遺物（2） …… 342
第422図 土壙－126出土遺物（3） …… 343
第423図 土壙－127（1/30）・出土遺物… 344
第424図 土壙－128（1/30）・出土遺物… 344
第425図 土壙－129（1/30）・出土遺物… 345
第426図 土壙－130・131（1/30）・土壙－130出土遺物 …… 345

第427図 土壙—131出土遺物 …… 346
第428図 土壙—132・133（1/30） …… 347
第429図 土壙—132出土遺物（1） …… 348
第430図 土壙—133出土遺物 …… 348
第431図 土壙—132出土遺物（2） …… 349
第432図 土壙—134（1/30） …… 349
第433図 土壙—134出土遺物 …… 349
第434図 土壙—135（1/30）・出土遺物（1） …… 350
第435図 土壙—135出土遺物（2） …… 351
第436図 土壙—136（1/30）・出土遺物… 352
第437図 土壙—137（1/30） …… 352
第438図 土壙—137出土遺物 …… 353
第439図 土壙—138（1/30）・出土遺物… 354
第440図 土壙—139（1/30）・出土遺物… 354
第441図 土壙—140（1/30） …… 355
第442図 土壙—140出土遺物 …… 355
第443図 土壙—141（1/30）・出土遺物… 356
第444図 土壙—142（右）・143（左）（1/30） …… 357
第445図 土壙—142出土遺物 …… 357
第446図 土壙—143出土遺物 …… 357
第447図 土壙—144（1/30）・出土遺物… 358
第448図 土壙—145（1/30）・出土遺物… 358
第449図 土壙—146（1/30）・出土遺物… 359
第450図 土壙—147（1/30）・出土遺物… 359
第451図 土壙—148（1/30）・出土遺物… 360
第452図 土壙—149（1/30）・出土遺物… 360
第453図 土壙—150（左）・151（右）（1/30） …… 361
第454図 土壙—150出土遺物 …… 362
第455図 土壙—151出土遺物（1） …… 363
第456図 土壙—151出土遺物（2） …… 364
第457図 土壙—152（1/30）・出土遺物 …… 365
第458図 土壙—153（1/30）・出土遺物… 365
第459図 土壙—154（1/30） …… 365
第460図 土壙—155（1/30）・出土遺物… 366
第461図 土壙—156（1/30）・出土遺物… 367
第462図 土壙—157（1/30） …… 367
第463図 土壙—158（1/30） …… 368
第464図 土壙—158出土遺物（1） …… 369
第465図 土壙—158出土遺物（2） …… 370
第466図 土壙—159（上層）・160（下層）（1/30） …… 371
第467図 土壙—160出土遺物（1） …… 372
第468図 土壙—160出土遺物（2） …… 373
第469図 土壙—161（1/30）・出土遺物… 374
第470図 土壙—162（1/30） …… 374
第471図 土壙—163（1/30） …… 374
第472図 土壙—164（1/30） …… 375
第473図 土壙—165（1/30） …… 375
第474図 土壙—166（1/30）・出土遺物… 375
第475図 土壙—167（1/30）・出土遺物… 376
第476図 土壙—168（1/30）・出土遺物… 377
第477図 土壙—169（1/30） …… 377
第478図 土壙—170（1/30）・出土遺物… 378
第479図 土壙—171（1/30） …… 378
第480図 土壙—172（1/30）・出土遺物… 379
第481図 土壙—173（1/30） …… 379
第482図 土壙—174（1/30） …… 380
第483図 土壙—175（1/30） …… 380
第484図 土壙—176（1/30）・出土遺物… 380
第485図 土壙—177（1/30）・出土遺物… 381
第486図 土壙—178（1/30）・出土遺物… 382
第487図 土壙—179（1/30） …… 382
第488図 土壙—180（1/30） …… 382
第489図 土壙—181（1/30）・出土遺物… 383
第490図 土壙—182（1/30） …… 383
第491図 土壙—183（1/30） …… 383
第492図 土壙—184（1/30）・出土遺物… 384
第493図 土壙—185（1/30）・出土遺物… 385
第494図 土壙—186（1/30）・出土遺物… 385
第495図 土壙—187（1/30）・出土遺物… 386
第496図 土壙—188（1/30）・出土遺物… 386
第497図 土壙—189（1/30）・出土遺物… 387
第498図 土壙—190（1/30）・出土遺物… 387
第499図 土壙—191（1/30）・出土遺物… 388
第500図 土壙—192（1/30）・出土遺物… 388
第501図 土壙—193（1/30）・出土遺物… 389

第502図 土壙—194（1/30）・出土遺物… 389
第503図 土壙—195（1/30）・出土遺物… 390
第504図 南壁土層断面（1/80）…… 391
第505図 溝—37（1/30）・出土遺物 …… 392
第506図 溝—38（1/30）・出土遺物 …… 393
第507図 溝—39・40・41土層断面（1/30）…… 394
第508図 溝—39出土遺物…… 395
第509図 溝—40出土遺物（1）…… 396
第510図 溝—40出土遺物（2）…… 397
第511図 溝—39・40出土遺物…… 397
第512図 溝—41・42・43土層断面(1/30)… 398
第513図 溝—41南半東流路（1/30）…… 399
第514図 溝—41・43を結ぶ溝（1/50）… 399
第515図 溝—41出土遺物（1）…… 400
第516図 溝—41出土遺物（2）…… 401
第517図 溝—41南半西流路出土遺物（1）…… 401
第518図 溝—41南半西流路出土遺物（2）…… 402
第519図 溝—41南半東流路出土遺物…… 403
第520図 溝—42出土遺物（1）…… 404
第521図 溝—42出土遺物（2）…… 405
第522図 溝—42出土遺物（3）…… 405
第523図 溝—43（1/30）…… 406
第524図 溝—43出土遺物…… 406
第525図 溝—44（1/30）…… 407
第526図 溝—44出土遺物…… 407
第527図 溝—45（1/30）…… 408
第528図 溝—45出土遺物…… 409
第529図 溝—46（1/40）・出土遺物 …… 410
第530図 溝—47（1/60）・出土遺物 …… 410
第531図 溝—48（1/60・1/30）・出土遺物（1）…… 411
第532図 溝—48出土遺物（2）…… 412
第533図 溝—49（1/30）…… 413
第534図 溝—49出土遺物…… 414
第535図 溝—50土層断面（1/60）・出土遺物…… 415
第536図 溝—51（1/30）・出土遺物 …… 416
第537図 溝—52・53・54（1/30）・出土遺物…… 417
第538図 溝—55（1/30）・出土遺物 …… 417
第539図 溝—56出土遺物…… 418
第540図 溝—57・58・59（1/400・1/80）・…… 419
第541図 溝—57出土遺物…… 419
第542図 溝—59出土遺物…… 420
第543図 丸田調査区弥生時代後期水田遺構配置図（1/1100）…… 421
第544図 弥生時代後期水田・溝—41～44配置図（1/500）…… 423
第545図 足跡（1/80）…… 424
第546図 水田層出土遺物…… 424
第547図 取水口（1/30）…… 425
第548図 弥生時代後期水田遺構配置図（1/500）…… 426
第549図 丸田調査区水田番号…… 427
第550図 「島状高まり」遺構1a・溝—60・61・67・68(1/200・1/60)…… 428
第551図 溝—60（1/40）・出土遺物（1）…… 429
第552図 溝—60出土遺物（2）…… 430
第553図 溝—60出土遺物（3）…… 431
第554図 溝—61出土遺物…… 432
第555図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（1）…… 433
第556図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（2）…… 434
第557図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（3）…… 435
第558図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（4）…… 436
第559図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（5）…… 437
第560図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（6）…… 438
第561図 「島状高まり」遺構—1a土器溜り出土遺物（7）…… 439

第562図 「島状高まり」遺構—1 a
土器溜り出土遺物（8）…… 440
第563図 「島状高まり」遺構—1 a
土器溜り出土遺物（9）…… 441
第564図 「島状高まり」遺構—1 a
土器溜り出土遺物（10）…… 442
第565図 「島状高まり」遺構—1 a
土器溜り出土遺物（11）…… 443
第566図 「島状高まり」遺構—1 a
土器溜り出土遺物（12）…… 444
第567図 「島状高まり」遺構—1 a
土器溜り出土遺物（13）…… 445
第568図 「島状高まり」遺構—1 b
土器溜り（1/100）・出土遺物… 446
第569図 「島状高まり」遺構—1
土層断面（1/50）…… 447
第570図 小畦畔（1/40）…… 447
第571図 水田下層出土遺物…… 448
第572図 稲株痕（1/80）…… 449
第573図 「島状高まり」遺構—1 c
（1/200・1/100）…… 450
第574図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（1）…… 452
第575図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（2）…… 453
第576図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（3）…… 454
第577図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（4）…… 455
第578図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（5）…… 456
第579図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（6）…… 457
第580図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（7）…… 458
第581図 「島状高まり」遺構—1 c
土器溜り出土遺物（8）…… 459
第582図 「島状高まり」遺構—3
（1/200・1/100）…… 460
第583図 「島状高まり」遺構—1・2・3
出土遺物…… 460
第584図 柱穴出土遺物（1）…… 462
第585図 柱穴出土遺物（2）…… 463
第586図 柱穴出土遺物（3）…… 464
第587図 包含層出土遺物（1）…… 465
第588図 包含層出土遺物（2）…… 466
第589図 丸田調査区古墳時代遺構配置図
（1/1100）…… 467
第590図 竪穴式住居—40（1/80）…… 468
第591図 竪穴式住居—40中央部敷石
（1/30）…… 469
第592図 竪穴式住居—40出土遺物…… 469
第593図 竪穴式住居—41（1/80）・
出土遺物…… 470
第594図 竪穴式住居—42（1/80）・
出土遺物…… 471
第595図 竪穴式住居—43（1/80）・
出土遺物…… 472
第596図 竪穴式住居—43かまど土層
断面（1/30）・床面出土遺物 … 473
第597図 井戸—26（1/30）…… 474
第598図 井戸—26出土遺物…… 475
第599図 井戸—27（1/30）・出土遺物 … 476
第600図 井戸—28（1/30）・出土遺物 … 476
第601図 井戸—29（1/30）・出土遺物 … 477
第602図 土壙—254（1/30）・出土遺物… 478
第603図 土壙—255（1/30）・出土遺物… 478
第604図 溝—71（1/30）…… 479
第605図 溝—72（1/30）・出土遺物 …… 479
第606図 溝—73（1/250）…… 480
第607図 溝—73土層断面（1/50）…… 481
第608図 溝—73護岸（1/30）…… 482
第609図 溝—73出土遺物（1）…… 483
第610図 溝—73出土遺物（2）…… 484
第611図 溝—73出土遺物（3）…… 485
第612図 溝—73出土遺物（4）…… 486
第613図 溝—73出土遺物（5）…… 487
第614図 溝—73出土遺物（6）…… 488
第615図 溝—73出土遺物（7）…… 489
第616図 溝—73出土遺物（8）…… 490

第617図 溝—73出土遺物（9）…… 491
第618図 溝—73出土遺物（10）…… 492
第619図 溝—73出土遺物（11）…… 493
第620図 溝—73出土遺物（12）…… 494
第621図 溝—73出土遺物（13）…… 495
第622図 溝—73出土遺物（14）…… 496
第623図 溝—73出土遺物（15）…… 497
第624図 溝—73出土遺物（16）…… 498
第625図 溝—73出土遺物（17）…… 499
第626図 溝—73出土遺物（18）…… 500
第627図 溝—73出土遺物（19）…… 501
第628図 溝—73出土遺物（20）…… 502
第629図 溝—73出土遺物（21）…… 503
第630図 溝—73出土遺物（22）…… 504
第631図 溝—73出土遺物（23）…… 505
第632図 溝—73出土遺物（24）…… 506
第633図 溝—73出土遺物（25）…… 507
第634図 溝—73出土遺物（26）…… 508
第635図 溝—74（1/30）・出土遺物 …… 510
第636図 溝—74～76（1/30）・溝—75出土遺物…… 511
第637図 溝—76出土遺物…… 511
第638図 溝—77（1/30）・出土遺物 …… 512
第639図 溝—78（1/30）・出土遺物 …… 513
第640図 溝—79（1/30）・出土遺物 …… 513
第641図 溝—80（1/30）・出土遺物 …… 514
第642図 溝—81（1/30）・出土遺物 …… 514
第643図 溝—82～85（1/100）・出土遺物…… 515
第644図 溝—86（1/30）…… 516
第645図 土器溜り出土遺物…… 516
第646図 包含層出土遺物（1）…… 518
第647図 包含層出土遺物（2）…… 519
第648図 溝—87（1/60）…… 520
第649図 溝—87出土遺物…… 521
第650図 包含層出土遺物（1）…… 522
第651図 包含層出土遺物（2）…… 523
第652図 丸田調査区中世遺構配置図（1/600）…… 524
第653図 建物—16（1/80）…… 525
第654図 建物—17（1/80）・出土遺物 … 526
第655図 建物—18（1/80）…… 527
第656図 井戸—30（1/30）・出土遺物（1）…… 529
第657図 井戸—30出土遺物（2）…… 530
第658図 土壙墓（1/30）・出土遺物 …… 531
第659図 溝—89（1/80・1/30）…… 532
第660図 溝—89出土遺物…… 533
第661図 溝—90（1/30）・出土遺物 …… 534
第662図 包含層出土遺物（1）…… 535
第663図 包含層出土遺物（2）…… 536
第664図 丸田調査区近世～現代遺構配置図（1/1100）…… 537
第665図 溝—91・92（1/30）・出土遺物…… 538
第666図 溝—93出土遺物…… 538
第667図 包含層出土遺物…… 539
第668図 川内調査区土層断面（1/80）… 540
第669図 川内調査区弥生時代前期遺構配置図（1/800）……折込3
第670図 川内調査区弥生時代中期遺構配置図（1/800）……折込4
第671図 溝—112出土遺物 …… 541
第672図 溝—112・116・117断面（1/60）…… 541
第673図 E・F—33～F—34東壁断面（1/100）…… 542
第674図 溝—115出土遺物 …… 543
第675図 溝—116出土遺物（1）…… 544
第676図 溝—116出土遺物（2）…… 545
第677図 溝—117出土遺物 …… 545
第678図 川内調査区弥生時代中期水田遺構（1/500）…… 547
第679図 川内調査区弥生時代中期水田層除去中出土遺物…… 548
第680図 E—28北西壁断面（1/60）…… 548
第681図 川内調査区弥生時代後期遺構配置図（1/800）……折込5
第682図 土壙—261（1/40）・出土遺物…… 549

第683図 川内調査区土手樋門地区弥生時代後期遺構配置図（1/300） … 550
第684図 溝—124（左）・125（右）出土遺物…… 550
第685図 溝—129断面（北西壁）（1/30） …… 551
第686図 溝—130断面（北西壁）（1/40） …… 551
第687図 溝—119・148～152断面（1/60） …… 552
第688図 溝—120～122・124～129断面（北西壁）（1/60） …… 552
第689図 溝—131～134断面（北西壁）（1/80） …… 552
第690図 溝—133出土遺物 …… 553
第691図 溝—135断面（北西壁）（1/30） …… 553
第692図 溝—136断面（1/30） …… 554
第693図 溝—138断面（1/30）・出土遺物…… 554
第694図 溝—140出土遺物 …… 555
第695図 溝—141出土遺物 …… 555
第696図 溝—143断面（1/30） …… 556
第697図 溝—144出土遺物 …… 556
第698図 川内調査区弥生時代後期水田遺構（1/800・1/1500） ……折込 6
第699図 川内調査区土手樋門地区・土手樋門導入水路地区弥生時代後期水田遺構（1/500）・土手樋門地区南東壁断面（1/100） …… 558
第700図 川内調査区土手樋門導入水路地区北西壁断面（1/100） …… 559
第701図 D・E・F—26～29弥生時代後期水田遺構（1/500）…… 560
第702図 D・E・F-29～34・D-29～31 弥生時代後期水田遺構（1/500）… 561
第703図 D—29～31北東壁断面（1/100） …… 562
第704図「島状高まり」遺構—5（1/400・1/60）・出土遺物 …… 563
第705図「島状高まり」遺構—6（1/100・1/60）出土遺物 …… 564
第706図「島状高まり」遺構—7（1/100・1/60）・出土遺物…… 565
第707図「島状高まり」遺構—8断面（27ライン東から）（1/60）・出土遺物…… 565
第708図「島状高まり」遺構—9出土遺物…… 566
第709図「島状高まり」遺構—10出土遺物…… 566
第710図 畎畝—1出土遺物…… 567
第711図 溝—112・115・140・141・145—a・b断面（1/60） …… 567
第712図 溝—145・a出土遺物 …… 568
第713図 溝—145・b出土遺物 …… 568
第714図 川内調査区古墳時代以降遺構配置図（1/800） …… 折込 7
第715図 川内調査区土手樋門地区古墳時代以降遺構配置図（1/300） … 569
第716図 溝—151出土遺物 …… 569
第717図 溝—146断面（北東壁）（1/60）・出土遺物…… 570
第718図 溝—153断面（1/30）・出土遺物…… 571
第719図 溝—154断面（1/40） …… 571
第720図 溝—155～157断面（1/40）…… 572
第721図 遺構にともなわない遺物…… 572
第722図 三ノ坪調査区土層断面（1/60） …… 573
第723図 三ノ坪調査区土層断面（1/60） …… 574
第724図 32～37北壁土層断面（1/100）… 575
第725図 トレンチ北壁土層断面（1/100） …… 576
第726図 トレンチ出土遺物…… 577
第727図 三ノ坪調査区弥生時代前期遺構配置図（1/800） …… 578
第728図 土壙—262（1/40） …… 579
第729図 土壙—262出土遺物 …… 580
第730図 土壙—263（1/40）・出土遺物

（1）…… 581
第731図 土壙—263出土遺物（2）…… 582
第732図 土壙—264（1/40）…… 582
第733図 溝—158・井堰—1（1/120）… 583
第734図 井堰—1遺物出土地点位置図… 584
第735図 溝—158周辺出土遺物 …… 585
第736図 溝—158出土遺物 …… 586
第737図 溝—159（1/30）・出土遺物…… 587
第738図 溝—187・186・160（1/30）… 588
第739図 溝—160出土遺物 …… 588
第740図 溝—161（1/30）・出土遺物…… 588
第741図 用水路（1/600）…… 589
第742図 溝—162（1/100）…… 589
第743図 溝—162出土遺物（1）…… 590
第744図 溝—162出土遺物（2）…… 591
第745図 溝—163（1/30）・出土遺物…… 592
第746図 溝—164（1/30）・出土遺物
（1）…… 593
第747図 溝—164出土遺物（2）…… 594
第748図 溝—164出土遺物（3）…… 595
第749図 溝—164出土遺物（4）…… 596
第750図 包含層出土遺物（1）…… 597
第751図 包含層出土遺物（2）…… 598
第752図 溝—158（1/1000）…… 598
第753図 三ノ坪調査区弥生時代中期遺構
配置図（1/800）…… 599
第754図 土壙—265（1/30）・出土遺物… 600
第755図 土壙—266・267（1/30）…… 600
第756図 溝—162・171関連断面
（1/80）…… 601
第757図 用水路（1/600）…… 602
第758図 溝—171・井堰—2（1/80）…… 603
第759図 溝—171出土遺物（1）…… 604
第760図 溝—171出土遺物（2）…… 605
第761図 溝—171出土遺物（3）…… 606
第762図 溝—172・173出土遺物（1）… 607
第763図 溝—172・173出土遺物（2）… 608
第764図 井堰—3（1/80）…… 609
第765図 溝—172・173出土遺物（3）… 610
第766図 溝—174・175（1/30）・出土
遺物…… 611
第767図 水田遺溝（1/200）・溝—175
（1/30）…… 613
第768図 水田（1/200）…… 614
第769図 包含層出土遺物…… 615
第770図 三ノ坪調査区弥生時代後期遺構
配置図（1/800）…… 616
第771図 土壙—268（1/30）…… 617
第772図 土壙—269（1/30）…… 617
第773図 土壙—269出土遺物 …… 617
第774図 土壙—270（1/30）…… 618
第775図 溝—178～186（1/200・1/60）… 618
第776図 溝—178～186（1/120）・土層
断面…… 619
第777図 溝—178～186出土遺物…… 619
第778図 土器棺—1 …… 620
第779図 包含層出土遺物…… 620
第780図 三ノ坪調査区弥生時代後期水田
遺構配置図（1/800）…… 621
第781図 三ノ坪調査区水田番号
（1/1500）…… 622
第782図 三ノ坪調査区水田区画
（1/1500）…… 623
第783図 「島状高まり」遺構—11
（1/60）…… 624
第784図 「島状高まり」遺構—11
出土遺物…… 624
第785図 「島状高まり」遺構—12
（1/60）・出土遺物 …… 625
第786図 「島状高まり」遺構—13
（1/300・1/60）…… 626
第787図 「島状高まり」遺構—13
（1/400・1/100）…… 627
第788図 「島状高まり」遺構—13
出土遺物…… 628
第789図 畎畝—2下溝（1/60）…… 628
第790図 畎畝—1土層断面（1/100）… 629
第791図 水田遺構（1/300）…… 630
第792図 畎畝—1（1/200・1/80）…… 631
第793図 畎畝—1（1/60）・関連出土

遺物…… 632
第794図 畝畝－2（1/400・1/40） …… 633
第795図 大畦畔断面（1/30） …… 634
第796図 稲株痕跡（1/100） …… 635
第797図 水田217稲株痕跡（1/40） …… 636
第798図 水田209土層断面（1/40） …… 637
第799図 井戸－31（1/30）・出土遺物… 638
第800図 三ノ坪調査区古墳時代遺構配置図（1/600） ……折込 8
第801図 井戸－32（1/30）・出土遺物 … 639
第802図 井戸－33（1/30）・出土遺物 … 639
第803図 井戸－34（1/30） …… 640
第804図 井戸－35（1/30） …… 640
第805図 井戸－36（1/30） …… 640
第806図 溝－217・柱穴列－5（1/60)… 641
第807図 柱穴列（1/150・1/60） …… 642
第808図 溝・柱穴列（1/300） …… 644
第809図 柱穴列－18～20（1/60） …… 647
第810図 溝－218（1/100） …… 648
第811図 溝－218（1/30）・出土遺物…… 649
第812図 溝－219（1/200）・出土遺物… 650
第813図 包含層出土遺物…… 651
第814図 包含層出土遺物…… 652
第815図 三ノ坪調査区中世・近世・近代遺構配置図（1/800） …… 653
第816図 現存条里坪割…… 654
第817図 土壙－275（1/40） …… 654
第818図 土壙－276（1/40） …… 654
第819図 包含層出土遺物…… 655
第820図 時代別遺構配置図…… 657
第821図 時代別遺構配置図…… 658
第822図 微高地形状と弥生時代後期水田の分布（1/25000） …… 663
第823図 弥生時代中期水田遺構(1/2000)・水田番号（1/3000） …… 665
第824図 弥生時代中期の配水経路（1/600） …… 666
第825図 百間川原尾島遺跡水田遺構位置図…… 668
第826図 百間川弥生時代後期水田遺構の番号・名称（1/3000） …… 669
第827図 弥生時代後期末水田遺構全体図（1/2000） …… 670
第828図 百間川原尾島遺跡・周辺小字名…… 671
第829図 水田162～175（1/600） …… 672
第830図 「島状高まり」遺構内出土遺物…… 674
第831図 洪水砂層出土遺物…… 677
第832図 弥生時代後期末水田217稲株痕跡（1/60） …… 678
第833図 稲株痕跡（1/120） …… 680
第834図 プラント・オパール分析土層（1/60） …… 683
第835図 プラント・オパール分析結果… 683
第836図 花粉分析用土層断面（1/60）… 684
第837図 三ノ坪調査区弥生時代中期・後期末水田土層断面（1/60） …… 685
第838図 百間川原尾島遺跡川内調査区花粉分析…… 686
第839図 百間川原尾島遺跡丸田調査区・百間川兼基遺跡大上田調査区花粉分析…… 686
第840図 岡山県内出土銅鐸形土製品 …… 695

表　目　次

表－1 編年対比表……10
表－2 ガラス成分表…… 580
表－3 一坪内の株数…… 680
表－4 反別収穫量比較表…… 681
表－5 弥生時代中期の水田一覧表…… 690
表－6 弥生時代後期の水田一覧表…… 690
表－7 銅鐸形土製品一覧表…… 697
表－8 岡山県内石鍋出土遺跡地名表… 704

表－9　中世土器編年表……折込9
表－10　備前焼編年表……折込10
表－11　中須賀調査区竪穴式住居一覧表……711
表－12　中須賀調査区建物一覧表……713
表－13　中須賀調査区井戸一覧表……713
表－14　中須賀調査区土壙一覧表……713
表－15　中須賀調査区溝一覧表……716
表－16　中須賀調査区遺構番号対照表…717
表－17　中須賀調査区玉類一覧表……719
表－18　中須賀調査区土製品一覧表……720
表－19　中須賀調査区石器・石製品一覧表……727
表－20　中須賀調査区金属器一覧表……732
表－21　中須賀調査区土器観察表……737
表－22　丸田調査区竪穴式住居一覧表…792
表－23　丸田調査区建物一覧表……793
表－24　丸田調査区柱列一覧表……793
表－25　丸田調査区井戸一覧表……793
表－26　丸田調査区土壙一覧表……794
表－27　丸田調査区土壙墓一覧表……797
表－28　丸田調査区溝一覧表……798
表－29　丸田調査区遺構番号対照表……800
表－30　丸田調査区玉類一覧表……803
表－31　丸田調査区土製品一覧表……804
表－32　丸田調査区石器・石製品一覧表……805
表－33　丸田調査区金属器一覧表……812
表－34　丸田調査区土器観察表……814
表－35　丸田調査区出土土器胎土分析値（1）……873
表－36　丸田調査区出土土器胎土分析値（2）……874
表－37　Na と Fe の相関図……875
表－38　U と Mn の相関図……875
表－39　Fe と Mn の相関図……876
表－40　Sc と Cr の相関図……876
表－41　V と Fe の相関図……877
表－42　Fe と Cr の相関図……877
表－43　Fe と Sc の相関図……878
表－44　Co と Fe の相関図……878
表－45　Al と Cr の相関図……879
表－46　Th と Al の相関図……879
表－47　丸田調査区木器観察表……880
表－48　川内調査区土壙一覧表……883
表－49　川内調査区溝一覧表……883
表－50　川内調査区石器一覧表……884
表－51　川内調査区土器観察表……885
表－52　三ノ坪調査区遺構番号対照表…887
表－53　三ノ坪調査区土壙一覧表……889
表－54　三ノ坪調査区溝一覧表……889
表－55　三ノ坪調査区土製品一覧表……891
表－56　三ノ坪調査区石器一覧表……891
表－57　三ノ坪調査区土器観察表……894

図　版　目　次

図版1　1.中須賀調査区9～11弥生時代遺構（北西から）
2.中須賀調査区11～12弥生時代遺構（南から）
図版2　1.竪穴式住居－7（南西から）
2.竪穴式住居－16（南東から）
図版3　1.竪穴式住居－13（東から）
2.竪穴式住居－14（西から）
図版4　1.竪穴式住居－24（南東から）
2.竪穴式住居－26（南西から）
図版5　1.土壙－2（南から）
2.土壙－49（南東から）
図版6　1.建物－4・5・6（北西から）
2.丸田調査区（竪穴式住居，井戸）遺構検出状況（南東から）
図版7　1.竪穴式住居－29・34（南から）
2.竪穴式住居－30（北から）
図版8　1.竪穴式住居－34（南から）
2.竪穴式住居－35（南から）
図版9　1.竪穴式住居－36（南東から）

2.竪穴式住居—36P-3（西から）
図版10 1.竪穴式住居—40（南から）
2.竪穴式住居—40床面敷石(西から)
図版11 1.竪穴式住居—41（南から）
2.竪穴式住居—42（西から）
図版12 1.竪穴式住居—43（南から）
2.竪穴式住居—43炉（東から）
図版13 1.井戸—11（東から）
2.井戸—17（南から）
図版14 1.井戸—15遺物出土状態（東から）
2.井戸—15下層遺物出土状態（東から）
図版15 1.井戸—16土器埋積状況（西から）
2.井戸—16下層遺物出土状態（北から）
図版16 1.井戸—30検出状況（北から）
2.井戸—30木簡・足駄・漆塗椀出土状態（南西から）
図版17 1.土壙—126（南から）
2.土壙—155（東から）
図版18 1.溝—41～43（北から）
2.溝—41土層断面（南から）
図版19 1.E-15～17弥性時代後期水田（北から）
2.溝—41からの取水口(水田取水口)（北から）
図版20 1.E-22～24弥性時代後期水田（南東から）
2.「島状高まり」遺構—1外周溝（北西から）
図版21 川内調査区弥生時代後期水田（航空写真）
図版22 1.川内調査区「島状高まり」遺構と弥生時代後期水田（南東から）
2.川内調査区弥生時代後期水田（南東から）
図版23 1.川内調査区弥生時代後期水田（北から）
2.川内調査区弥生時代中期水田（南東から）
図版24 1.川内調査区（土手樋門地区）弥生時代後期水田（南西から）
2.川内調査区溝群（北西から）
図版25 1.土壙—262（南西から）
2.土壙—262（南西から）
図版26 1.柱穴列（南東から）
2.柱穴列（北から）
図版27 1.井堰—2（北から）
2.井堰—2（北から）
図版28 1.井堰—3（北東から）
2.E・F-36・37弥生時代中期水田遺構（北から）
図版29 三ノ坪調査区弥生時代中期水田遺構（北西から）
図版30 1.畦畔—1・水田・「島状高まり」遺構—12（南西から）
2.溝—162・171・畦畔—1等断面（北から）
図版31 1.E—40・41弥生時代後期水田遺構（北西から）
2.E—34・40弥生時代後期水田遺構（南東から）
図版32 1.D—39～41弥生時代後期水田遺構（北西から）
2.D—39～41弥生時代後期水田遺構（南東から）
図版33 1.「島状高まり」遺構—13（南東から）
2.稲株痕跡（南東から）
図版34 1.稲株痕跡（南東から）
2.水田土層（稲株痕跡）断面（南西から）
図版35 縄文式土器（晩期）
図版36 弥生式土器（前期）
図版37 弥生式土器（前・中期）
図版38 弥生式土器（後期）
図版39 弥生式土器（後期）
図版40 弥生式土器（後期）
図版41 弥生式土器（後期）
図版42 弥生式土器（後期）

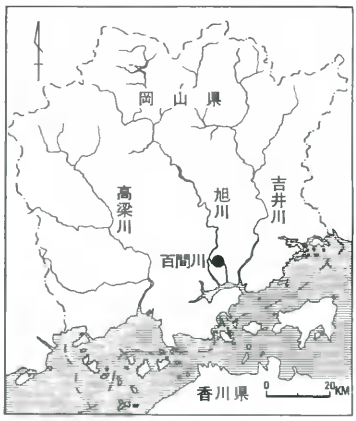
図版43　弥生式土器（後期・井戸—16）
図版44　弥生式土器（後期・井戸—16）
図版45　弥生式土器（後期・井戸—16）
図版46　弥生式土器（後期・井戸—16）
図版47　弥生式土器（後期・井戸—17）
図版48　弥生式土器（後期・井戸—17・19）
図版49　弥生式土器（後期）
図版50　弥生式土器（後期・土器溜り）
図版51　弥生式土器（後期・土器溜り）
図版52　弥生式土器（後期・竪穴式住居—36・37・39）
図版53　古墳時代土師器
図版54　古墳時代陶質土器（上段）・須恵器（下段）
図版55　古墳時代須恵器
図版56　古墳時代須恵器
図版57　中世土師質土器
図版58　中須賀調査区出土中国製陶磁器（1）
図版59　1.中須賀調査区出土中国製陶磁器（2）
　　2.中須賀調査区出土石鍋
図版60　1.玉類（1）
　　2.玉類（2）
図版61　1.銅鐸形土製品
　　2.絵画土器・舟形土製品
　　3.土錘
図版62　硯・紡錘車・石鏃・石錐・石庖丁・石匙
図版63　1.石剣・石鏃・石庖丁
　　2.砥石・石硯
図版64　1.小型仿製鏡（原寸）
　　2.銅鏃
　　3.鉄鏃
図版65　木製品（河道・井戸・溝—73）
図版66　木製品（溝—73）
図版67　木製品（溝—73）
図版68　木製品（溝—73）
図版69　木製品（溝—73）
図版70　木製品（溝—73・井戸—30・溝—89）

第１章　地理的・歴史的環境

百間川は江戸時代（寛文年間）に，津田永忠によって岡山城下を旭川の洪水から守るため築造された一大人工河川である。岡山市竹田から分かれた旭川放水路（百間川）は，旭川左岸を南東に流走して原尾島付近で東に向きを変え，操山山塊の北側を東進し，米田で再び南に流路を変え，沖元で児島湾に注ぐ。その幅200～300m，流程約13㎞におよぶものである。

百間川が位置する旭川の左岸平野（旭東平野）は，北に竜の口山系，東に山王山，南に操山山塊をひかえた肥沃な水田が展開する一大穀倉地であるが，近年市街化の波に押され，その景観は急激に変貌しつつある。

岡山平野は今から約7,000年前，縄文時代前期の海進をピークとして，それ以降の海退および旭川の堆積物によって形成された沖積平野である。この旭川も現在は一流路にまとめられているが，古くは数条に分かれており，また幾筋もの分流が平野一帯に流走していたらしく，それら旧河道の両岸にはいくつもの自然堤防が形成されている。



第１図　百間川位置図

岡山付近で確認されている遺物のうち，最も古いものとしては，後期旧石器時代のものである操山旗振台北部遺跡（註１）出土のナイフ形石器がある。

縄文時代の遺跡は，丘陵に散布する後期の朝寝鼻貝塚（註２）と他に数か所石器散布地が存在しているが，新たに百間川改修工事に伴い，百間川沢田遺跡（註３）から縄文時代中期の土器片２片，および同後期の土器片10片を採集した。この中期の土器片は磨滅が激しく，上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性も考えられるが，後期の土器片においては残りもよく，また昭和34年の国道２号線百間川橋建設の際にも出土していることなどから，岡山平野においてはこの時期から沖積地における集落の開始が考えられる。

縄文時代晩期の遺跡は，いずれも弥生時代につながる複合遺跡である。調査で明らかにされた例としては，津島遺跡（註４），百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡，同当麻遺跡，雄町遺跡（註

第2図　百間川周辺遺跡分布図（1/50,000）

５）などがある。百間川原尾島遺跡においては，遺構の性格を明らかにできなかったものの，縄文時代晩期の柱穴状土壙を検出している。津島遺跡は縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺物および弥生時代の水田遺構，竪穴式住居，高床倉庫，貯蔵穴などの遺構が検出されている。雄町遺跡は縄文時代晩期～平安時代にかけての遺物および，旧河道・溝・竪穴式住居・土壙墓などの遺構が検出されており，特に，弥生時代中期の水利施設が明らかにされるとともに居住区と墓域が明確に区分されていることが判明した。

弥生時代中期の遺跡は，前述の遺跡の他に南方遺跡（註６），赤田遺跡（註７），乙多見遺跡（註８）などがある。南方遺跡からは人骨および土壙墓，灰穴などが検出されており，赤田遺跡からは，高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川今谷遺跡は弥生時代中期を中心として，古墳時代におよぶ複合遺跡であるが，特に弥生時代中期の土器片とともにガラス滓が多量に出土しており，また１間×２間～５間までの建物を20数棟検出している。なお当遺跡の南側に位置する操山の谷部からは３個の銅鐸が出土している（註９）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は，急激にその遺跡数をふやし，当平野に形成された微高地の大半には集落が営まれた可能性が強い。一方，百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡，同兼基遺跡では，弥生時代後期終末の洪水によって埋没した水田が明らかになった。これによると，微高地縁辺部および旧河道上に水田が形成されており，前者は10㎡～40㎡前後の小規模な区画であるのに対し，後者は200㎡前後とその規模も大きい。また，百間川原尾島遺跡から弥生時代中期中葉に比定される水田も明らかにされた。

古墳時代の遺跡は，百間川原尾島遺跡，同兼基遺跡，同今谷遺跡，同当麻遺跡，雄町遺跡などでは竪穴式住居，井戸などの遺構が明らかになっている。一方，古墳についていえば，平野の北にある竜の口山系には13面の舶載鏡を出土した備前車塚古墳（註10）が，南にあたる操山山系には網浜茶臼山古墳，湊茶臼山古墳，金蔵山古墳（註11），東にあたる山王山には，山王山古墳群がある。これらの丘陵上には，これ以降後期古墳も含め200基をはるかに越える古墳が確認されている。

旭川の左岸に広がる平野には，ほぼ全体に条里制の遺構が見られる。この旭東平野に見られる条里遺構は，正確に南北方向（註12）を示している。この平野の北西部には，備前国府跡が推定されている。備前国府は，倭名抄（註13）によれば，備前国御野郡に所在すると記されている。その推定地については，大きく二説ある。一説は，国長宮を中心とする説（註14）と他の説は現在の国府市場を中心とする説である（註15）。現状では，いずれとも決し難い。推定国府跡を挟んでその北側には，賞田廃寺（註16）があり，南側には，幡多廃寺（註17）がある。また，国府市場の東には，成光廃寺も所在する。この国府跡の北西部（岡山市祇園）より，南東部（岡山市長利）にかけて，条里制に規制されない状態で，河道の痕跡が見られる。

この河道は，平野を斜めに横切っていたものが，長利付近からほぼ南へ流れを変えて海へ注ぐものである。この流路の変換点に百間川当麻遺跡が所在し，古代倉庫群および中世の建物群を検出している（註18）。

註

註1　鎌木義昌「第1編　原始時代」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962

註2　註1に同じ。

註3　岡山県教育委員会の昭和53年度の調査において出土している。

註4　『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会　1970

註5　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

註6　『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会　1971

註7　『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1976

註8　正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』3　1973

註9　鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961

註10　註1に同じ。

註11　西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館　1959

註12　高重　進「農村・耕地の歴史地理」『岡山県の地理』福武書店　1978

註13　正宗敦夫校訂『倭名類聚鈔』風間書房　1970

註14　石田　寛「第4編　第3章　旭川左岸平地の条里」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962
巌津政右衛門「第5編　第1章　備前国府」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962

註15　木下　良「国府と条里との関係について」『史林』50巻 5号　1967. 9
高橋　護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』1　岡山県教育委員会　1971

註16　『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1971

註17　註7に同じ。

註18　本章は，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39の「第1章　地理的・歴史的環境」をもとに，その後各報告書で一部加筆したものを再掲載したものである。

第２章　調査の契機および経過

建設省は旭川の放水路（百間川）の改修計画をたて，昭和49年には，耕作者・地権者との交渉の結着をみた。百間川河床には，「百間川遺跡」の所在が周知されていて，岡山県教育委員会文化課では，遺跡範囲の確認，遺跡の現状保存，発掘調査計画等について協議を必要とするため，建設省から文化財保護法第57条の３に先だつ事前協議の文書の提出を求めた。協議の結果，まず岡山県教育委員会による確認調査を実施した。

昭和51年11月から昭和52年３月までの確認調査によって，原尾島・沢田・兼基の３か所に微高地を確認し，昭和52年４月からは本格的調査に着手した。百間川原尾島遺跡にかかる左岸用水・新田サイフォン・新田樋門については，『百間川原尾島遺跡』Ⅰ（1980）で報告された。その他の調査地域については本報告書に収録する。確認調査で明確となった第１微高地（百間川原尾島遺跡の西部）と第２微高地（百間川沢田遺跡）の間については，昭和53年５～６月，トレンチによる調査を実施して，全域に弥生時代の水田がひろがっていることを確認した。昭和53年９～10月には，土手樋門地区の調査を行った。昭和54年４月からは低水路部分の調査に着手した。広域に検出された弥生時代の水田については，航空写真の撮影も行った。低水路部分に現代の用水路があるため，昭和55年４月からは前年度調査部分へ用水路を付け替えて残りを調査した。昭和56年度には土手樋門導入水路部分と県道下にあたる部分の調査を実施して，第１次５か年計画にかかる百間川原尾島遺跡の調査を終了した。

報告書の作成は，昭和54・55年度の２年間は１名の専従職員を配置し，各１冊の報告書を作成した。昭和56年度は，10月までに一部を残して調査が終了したので，全員が報告書作成に従事し，１冊の報告書を作成した。昭和57年度は，７名が専従し，第２次５か年の発掘調査と併行して報告書作成を行った。

百間川原尾島遺跡の調査では，百間川堤防上に打ち込まれている建設省基準杭11/200を利用し，両岸の杭を結んだ線を基準線とし，20×20m の最小基準区画を設定した（第３・４図）。海抜高は建設省の設置した水準点によっている。百間川原尾島遺跡としてまとめた全長800mに及ぶ範囲には，一部藤原が入るがここでは百間川原尾島遺跡に含めることにした。調査した地域が長大で，遺構数も多いことから小字名をとって４地域に区分し，それぞれ中須賀・丸田・川内・三ノ坪の調査区とした。現代まで利用されていた用水路を境としているため，一部は他の小字名に入る部分もある。それらの関係は第３・４図に示した。

中須賀調査区と丸田調査区の間には，中世河道で削られた部分があり，低水路では区別され

たが本来連続する微高地かどうかは判っていない。その他の地域は，弥生時代の遺構が連続するが，小字で区分した。川内調査区だけは藤原に入るが，遺跡名としては区分しなかった。この調査区には，樋門があり，土手樋門・同導入水路地区という呼称も用いた。　　（正岡）

調査の構成

発掘調査は建設省中国地方建設局と委託契約を締結した岡山県教育委員会があたり，調査の専門的指導および助言を得るため，岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「旭川放水路改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下，対策委員会）の委員を委嘱した。

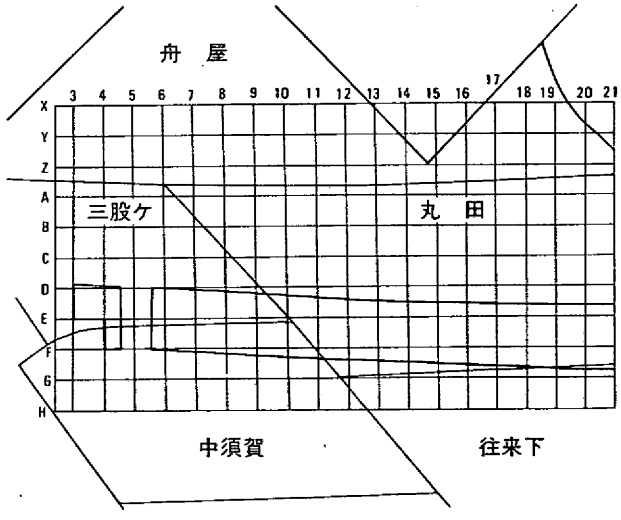
旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員（あいうえお順）

福南中学校	池葉須藤樹	岡輝中学校	角田　茂
岡山大学	小野　昭	岡山市教育委員会	出宮徳尚
岡山理科大学	鎌木義昌	岡山大学	春成秀爾
岡山大学	近藤義郎	岡山女子看護専門学校	水内昌康

昭和53年度

岡山県教育委員会

文化課長	飛田真澄	文化財保護主査	河本　清
課長補佐	吉光一修	同	正岡睦夫（調査担当）
主　　幹	小川佳彦	文化財保護主事	下澤公明（　同　）
文化財主幹	難波　進	同	井上　弘（　同　）
主　　事	小倉　昇	同	松本和男（　同　）
文化財二係長	光吉勝彦	同	岡田　博（　同　）



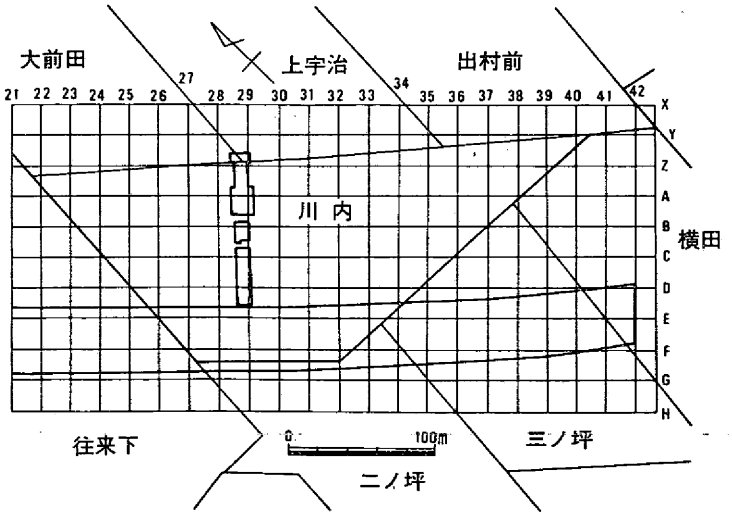
第３図　グリッド設定と小字名（１）（1/5,000）

文化財保護主事	高畑知功（調査担当）	主　　事	中野雅美（調査担当）
同	二宮治夫（　同　）	同	内藤善史（　同　）
同	浅倉秀昭（　同　）	調査補助員	平井泰男
同	福田正継（　同　）	同	島崎　東
同	江見正己（　同　）	同	堀川　純
主　　事	藤井守雄（事務担当）	同	山本悦世

昭和54年度

岡山県教育委員会

文化課長	近藤信司	文化財保護主事	高畑知功（調査担当）
課長補佐	吉光一修	同	二宮治夫（　同　）
主　　幹	光吉勝彦	同	江見正己（　同　）
文化財主幹	難波　進	主　　事	藤井守雄（事務担当）
文化財二係長	河本　清	文化財保護主事	中野雅美（調査担当）
主　　任	林　正人	主　　事	内藤善史（　同　）
文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）	同	平井泰男（　同　）
文化財保護主事	下澤公明（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	井上　弘（　同　）	同	光永真一（　同　）
同	渡辺　光（　同　）	調査補助員	平井典子
同	岡田　博（　同　）		



第４図　グリッド設定と小字名（２）（1/5,000）

百間川原尾島遺跡

昭和55年度

岡山県教育委員会

文化課長	近藤信司	文化財保護主事	高畑知功（調査担当）
課長補佐	吉光一修	同	二宮治夫（　同　）
文化財主幹	難波　進	同	岡本寛久（　同　）
文化財二係長	河本　清	主　事	金尾一志（事務担当）
主　任	田中建治	文化財保護主事	中野雅美（調査担当）
文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）	同	内藤善史（　同　）
同	井上　弘（　同　）	主　事	平井泰男（　同　）
文化財保護主事	渡辺　光（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	山磨康平（　同　）	同	光永真一（　同　）
同	岡田　博（　同　）	調査補助員	平井典子

昭和56年度

岡山県教育委員会

文化課長	早田憲治	文化財保護主事	浅倉秀昭（調査担当）
課長代理	吉光一修	同	岡本寛久（　同　）
文化財主幹	高原健郎	主　事	金尾一志（事務担当）
埋蔵文化財係長	河本　清	文化財保護主事	中野雅美（調査担当）
主　任	田中建治	同	内藤善史（　同　）
文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）	主　事	平井泰男（　同　）
文化財保護主事	渡辺　光（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	山磨康平（　同　）	同	光永真一（　同　）
同	岡田　博（　同　）	調査補助員	平井典子
同	二宮治夫（　同　）		

昭和57年度

岡山県教育委員会

文化課長	早田憲治	文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）
課長代理	橋本泰夫	同	井上　弘（　同　）
文化財主幹	高原健郎	同	柳瀬昭彦（　同　）
埋蔵文化財係長	河本　清	同	山磨康平（　同　）
主　任	田中建治	文化財保護主事	古谷野寿郎（　同　）
同	遠藤勇次	同	高畑知功（　同　）

文化財保護主事	二宮治夫（調査担当）	主　事	石井　茂（事務担当）
同	浅倉秀昭（　同　）	文化財保護主事	平井泰男（調査担当）
同	平井　勝（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	岡本寛久（　同　）	同	光永真一（　同　）

最後に4年間の発掘調査にあたって，厳寒，猛暑の中で調査員と労苦を共にしていただいた現場作業員の皆様に心より感謝いたします。

時期区分について

近年，岡山県南部においては，考古資料が急増するなかで，弥生時代～古墳時代前期にかけての編年試案（註19）がいくつか提示されており，その時期区分も年々細かくなり，かつ修正されつつある。一方，百間川河川敷内においては縄文時代中期～近世に至る遺物が出土しており，特に弥生時代～古墳時代前期にかけての遺物は莫大な量にのぼる。このため当遺跡群においてもこれら各地区出土の遺物を検討した上で，時期区分し，前記したものとの比較検討する必要がある。しかしながら調査は現在も進行中であり，また遺物の微細な点においてこれまで出されている各遺跡の編年案はそれぞれ若干の相違がみられることから，現段階では弥生時代～古墳時代前期にかけては百間川の遺跡に最も近接する雄町遺跡における編年案および，備中（岡山県西部）ではあるが上東遺跡の編年案，さらに雄町遺跡との並行関係を参考にしながら大きく区分しておいた。なお，現段階でもより細分し得る遺構・遺物があり，これは文中では古相・新相として標記しておく。以下，表について若干の説明を加える。

弥生時代前期をⅠ～Ⅲ，同中期をⅠ～Ⅲ，同後期をⅠ～Ⅳ，古墳時代前期をⅠ～Ⅲに大別し，その頭に百間川を付した。なお文中では百間川弥生時代前期Ⅰは百・前・Ⅰ，百間川古墳時代前期Ⅱは百・古・Ⅱのように表記する。

百・前・Ⅰは無軸木葉文を，百・前・Ⅱは壺形土器における削り出し凸帯および，甕形土器の篦描き沈線を，百・前・Ⅲは甕形土器の篦描き沈線の多条化を目安とする。百・中・Ⅰは甕形土器の櫛描き沈線を，百・中・Ⅱは従来菰池式と呼ばれていたものを，百・中・Ⅲは凹線文の盛行を目安とする。百・後・Ⅰは雄町7・8類および上東・鬼川市Ⅰを，百・後・Ⅱは雄町9・10類および上東・鬼川市Ⅱを目安とする。百・後・Ⅲは長頸壺の最終段階と考え，百・後・Ⅳは甕形土器の擬凹線の出現を目安とする。百・古・Ⅰは甕形土器の櫛描き平行沈線文の出現を目安とし，百・古・Ⅱは甕形土器の櫛描き平行沈線文の退化および壺形・甕形土器の丸底化を目安とし，百・古・Ⅲは川入遺跡大溝上層出土の土器を目安にし，また当地方における須恵器出現以前の時期を呼ぶ。

なお，この時期区分は当遺跡群調査終了の時点で，弥生時代以外の時代も含め，改めて組み直し，それぞれの時代区分および細分を行う予定である。　（江見）

表－1　編年対比表

時代＼遺跡			百間川	雄町	上東・川入
弥生時代	前期	津島	百間川前期 Ⅰ		
		門田	百間川前期 Ⅱ	雄町 1	
			百間川前期 Ⅲ	雄町 2	
				船山 2	
	中期	南方	百間川中期 Ⅰ	高田	
				雄町 3	
		弧池	百間川中期 Ⅱ	船山 5	
				弧池	
				雄町 4	
		前山 Ⅱ	百間川中期 Ⅲ	前山東	
				雄町 5	
		仁伍		雄町 6	上東・鬼川市 0
	後期	上東	百間川後期 Ⅰ	雄町 7	上東・鬼川市 Ⅰ
				雄町 8	
			百間川後期 Ⅱ	雄町 9	上東・鬼川市 Ⅱ
				雄町 10	
		グランド上層	百間川後期 Ⅲ	＋	上東・鬼川市 Ⅲ
		酒津	百間川後期 Ⅳ	雄町 11	才の町 Ⅰ
					才の町 Ⅱ
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代 Ⅰ	雄町 12	下田所
				雄町 13	亀川上層
			百間川古墳時代 Ⅱ	雄町 14	＋
			百間川古墳時代 Ⅲ	雄町 15	川入・大溝上層

註

註19　正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

伊藤　晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　岡山県教育委員会　1974

間壁忠彦他「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』第10号　倉敷考古館　1974

出宮徳尚他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1975

柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977

藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第４号　1979

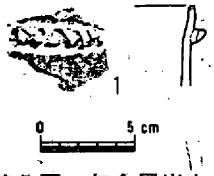
高橋　護「弥生土器」『月刊考古学ジャーナル』1980. 3

第3章　各調査区の概要

第1節　中須賀調査区

1.　中須賀調査区の概要

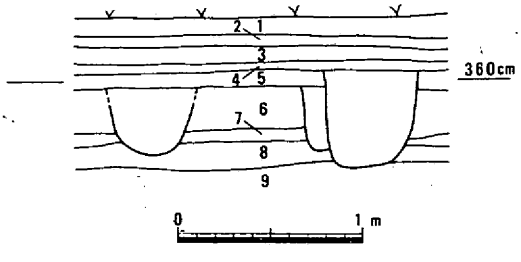
百間川原尾島遺跡の北西部に位置している。調査対象である低水路部分は，弥生時代以前の微高地が中心になっている。上面には，弥生時代前期以降の遺構が集中する。上面は水田のために削平され，中世の遺構と古墳時代の遺構が同一面で検出される。弥生時代についても，一部分に包含層がみられるだけで，検出面の差はほとんどない。検出される遺構面は，ほぼ海抜360cm前後からである。



第5図、包含層出土遺物

縄文時代の遺構は検出されていないが，晩期の土器片が少量出土した。弥生時代前期の遺構には，舟形土壙2，土壙1を検出したにすぎないが，後の遺構中に前期の土器片が含まれている。弥生時代中期の遺構は，溝1を検出したにすぎない。後の遺構に含まれる土器片も少なく，この時期の集落の中心から少し離れているのであろう。弥生時代後期には，莫大な遺構と遺物が検出される。竪穴式住居16，井戸8，土壙87，溝16が検出され，土器の量は特に多い。

古墳時代では，初期の遺構・遺物は少ないが須恵器出現以後の遺構・遺物は多い。竪穴式住居11，井戸1，土壙3，溝6が検出された。中世の遺構・遺物が多い。建物としてまとまったものは少ないが，多数の柱穴がある。建物2，土壙14，溝7がある。　　（正岡）



1. 耕土(青灰色細砂)
2. 灰色細砂
3. 淡黄色細砂
4. 淡灰色粗砂
5. 暗灰色細砂
6. 灰褐色粘土(包含層)
7. 淡黄色粘土
8. 暗灰褐色粘土
9. 黄褐色粘土

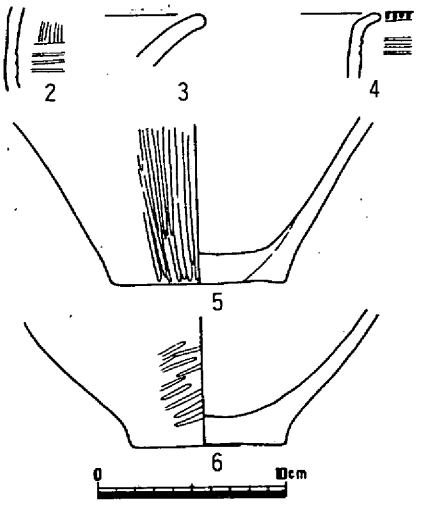
第6図　D-11北東壁土層断面（1/40）

2. 弥生時代前期の遺構・遺物

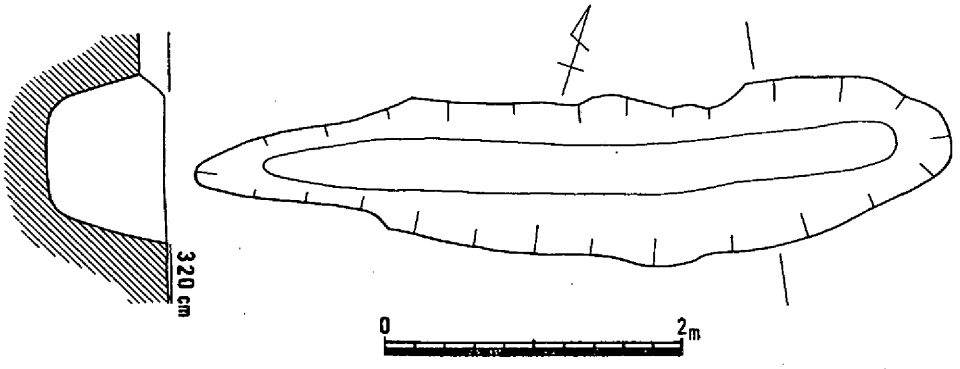
中須賀調査区は，弥生時代前期から中世までの遺構が重複しているため，古い時期の遺構は一部を削られたものもあり，完全に消失したものもあろう。後の遺構の埋土中に，弥生時代前期の土器片が含まれていることも多い。確認された遺構は，舟形土壙2基と楕円形の土壙1基だけである。検出される弥生時代前期の土器片は，あまり多くないことからすれば，遺構が密集していたとは考えがたい。

土　壙－1（第7図）

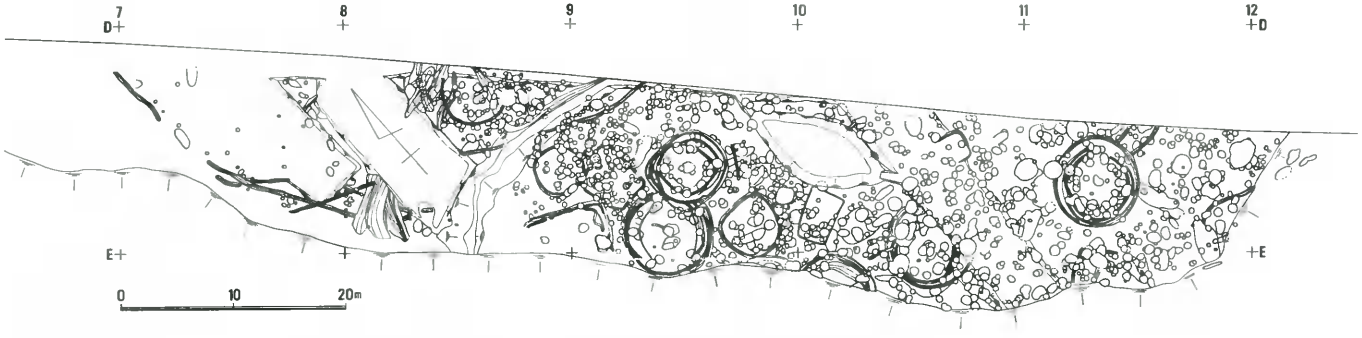
D-9の調査区北端部近くに位置する。上層には，溝－9・10・11が重なっているため，かなり削平されている。上層の溝を掘りあげたところ，一段深くなった溝状の遺構が検出された。東西方向を示し，両端部は浅くなって終る。後の溝で削られたため，全容は判明しないが，現状の規模は，長さ502 cm，幅106 cm，深さ40 cmである。いわゆる舟形土壙で，埋土は暗灰色粘土である。



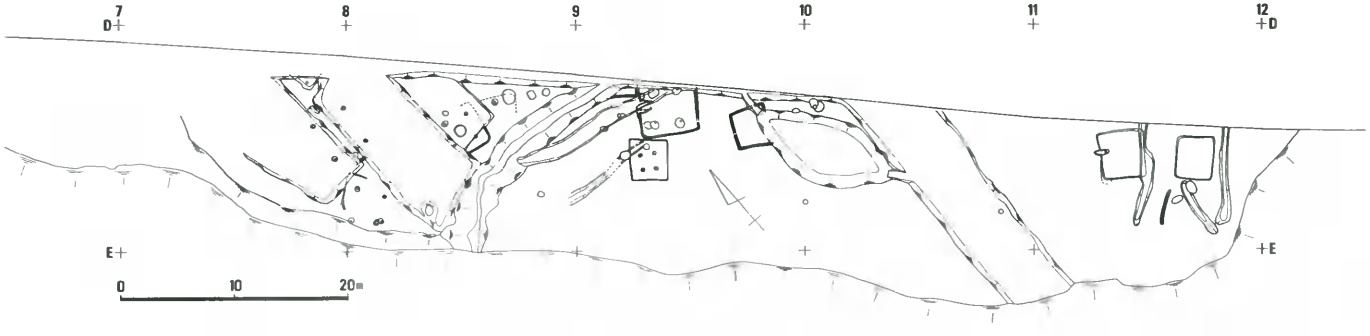
埋土中からは，弥生時代前期の壺片2・3，甕4，底部5・6，サヌカイト片を検出した。壺の頸部には，削り出しの凸帯部があり，3条の凸線部がある。口縁部は朝顔形にひらく。甕の口縁部は「く」の字状に折り曲げられ，端部にキザミメを施す。頸部にヘラガキ沈線をめぐらす。底部は2点とも壺の底部と思われる。外面はヘラミガキである。色調は黄橙色ないし，にぶい橙色を呈



第7図　土　壙-1（1/50）・出土遺物



第8図　弥生時代遺構配置図（1/500）

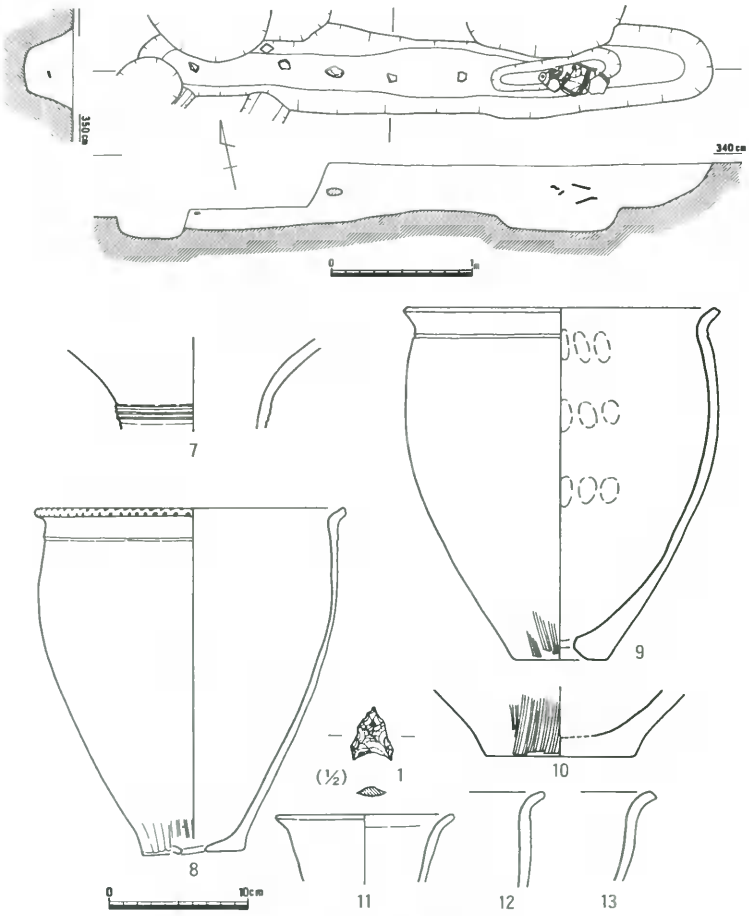


第9図　古墳時代遺構配置図（1/500）

する。時期は，百・前・Ⅱに属する。

土　壙—2（第10図，図版5-1）

D-9に位置し，405×70㎝の大きさで，深さ48㎝を測る。後の土壙によって切られているため，全形は残っていない。長軸は，ほぼ東西方向を示し，東寄りのところに一段深く掘り込



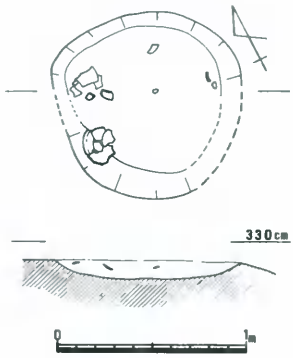
第10図　土　壙-2（1/40）・出土遺物

んだところがある。91×22㎝，深さ16㎝の細長いものである。埋土は灰褐色粘土である。一段深くなったところの直上において，甕2個が潰れた状況で検出された。甕8・9には，それぞれ底部に穿孔がある。他には，自然の礫，壺7，甕12，鉢11・13，底部10，サヌカイト片を出土した。

壺は頸部に削り出しの凸帯部があり，3条の凸線部がある。甕は口縁部を「く」の字状に折り曲げ，端部にキザミメを施すものもある。頸部には段を有するものと1本の沈線をめぐらすものがある。鉢は，口縁部がゆるやかにひろがり，端部を屈曲させる。色調は黄橙色を呈する。時期は，百・前・Ⅱに属する。（正岡）

土　壙－3（第11図）

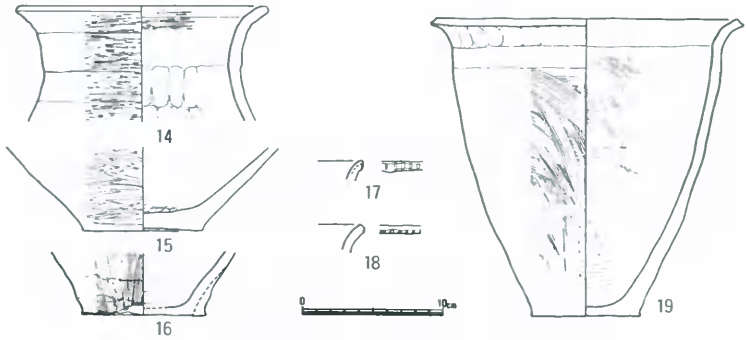
E-9の北東隅において検出された土壙で，土壙－21および竪穴式住居－6によって切られている。



平面形は直径約100㎝のほぼ円形を呈し，深さは検出面より約10㎝を測るにすぎない。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は，炭・焼土粒を含む暗灰色粘質土が一層のみである。

出土遺物としては土器がある。土器は壺14・15，甕16～19のみである。19は推定復元図，17・18は小片である。14・15は同一個体ではない。

時期は，ほぼ百・前・Ⅱであろう。（平井）



第11図　土　壙-3（1/30）・出土遺物

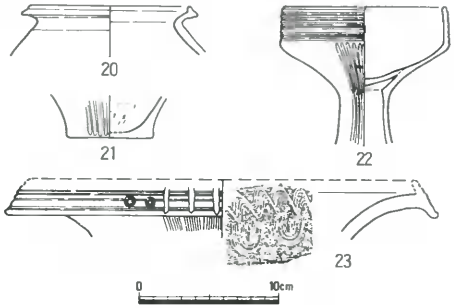
3.　弥生時代中期の遺構・遺物

中須賀調査区は，ほぼ中世まで継続して遺構がつくられているため，古い時期の遺構は，一部が切られたものもあり，まったく消失してしまったものもあるかもしれない。弥生時代中期の遺構と確認されるのは，溝が1本あるだけである。後の時期の遺構中や包含層中に小破片が含まれている。

（1）　溝

溝－1（第12図）

D-8に位置し，弥生時代後期の溝－7に一部切られている。南西側は中世河道によって削られ，北側は近代の土取りのため消失している。土取りのあとをこえた北東部では，弥生時代後期の溝と重複しているものと推定される。溝は，ほぼ東西方向を示している。幅150㎝，深さ21㎝の大きさである。溝の底には，幅30㎝，深さ7㎝くらいの一段深くなったところがある。溝の底さらえをしたことがわかる。埋土は灰色粘土である。埋土中からは，土器片が出土している。土器には，甕20，高杯22，器台23がある。



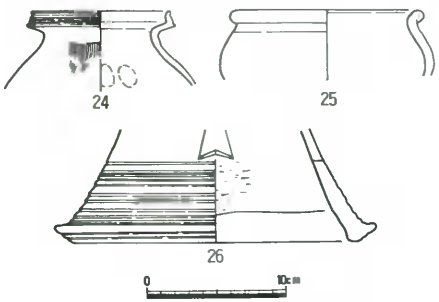
第12図　溝-1 出土遺物

時期は，百・中・Ⅲに属する。

（2）　包含層出土の遺物

（第13図）

後の遺構埋土中や包含層中から少量の弥生時代中期の土器片が出土している。実測できたものは，甕24，鉢25，器台26がある。鉢の口縁部は折り曲げて玉縁になっている。器台は脚端部が肥厚し，裾部に凹線文がある。透しは下端が2つに分かれ，「矢の羽」形を呈する。



第13図　包含層出土遺物

時期は，いずれも百・中・Ⅲに属する。　　（正岡）

4. 弥生時代後期の遺構・遺物

（1） 竪 穴 式 住 居

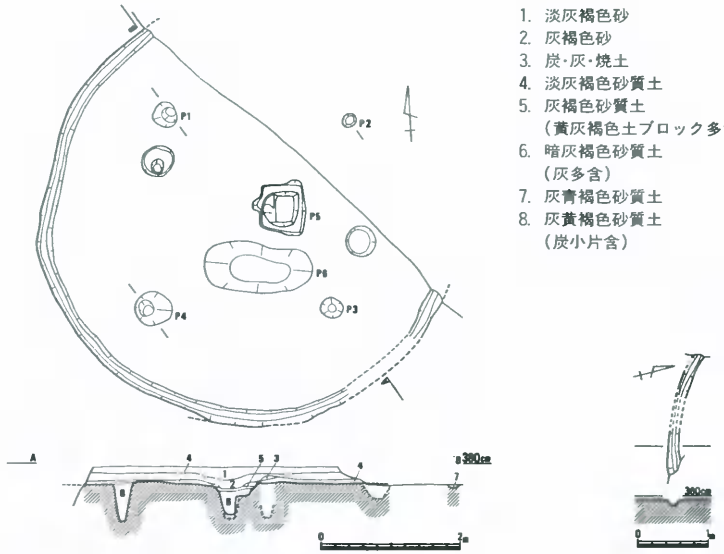
竪穴式住居－1（第14・15図）

D-8の中央部北方に位置する。北東部の3分の1は現代用水によって削られている。竪穴式住居－2，溝－10・12・13，土壙－9・10等の遺構を切り，井戸－8に切られている。

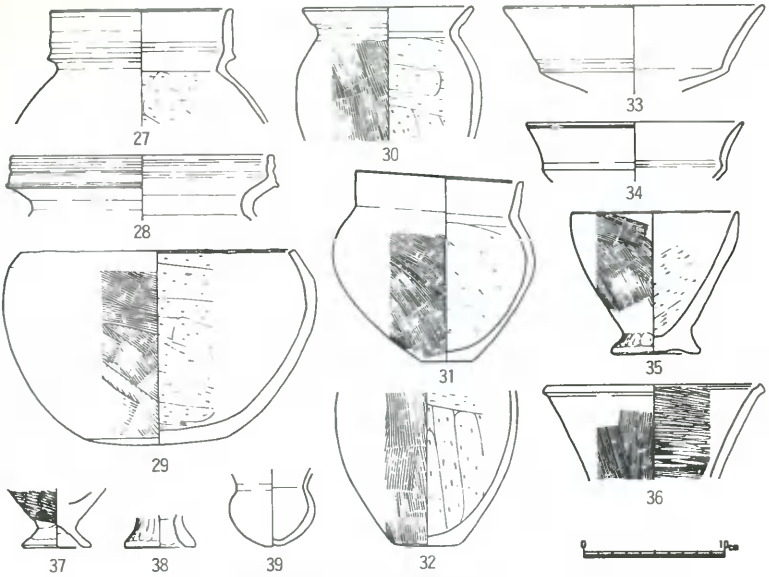
平面形は円形を呈し，径約580cm，壁高現存最大33cmを測る。主柱穴はP-1～4の4本で構成され，P-5・6の中央穴を伴う。P-6は浅く，深さ8cm前後である。P-5は二段になっており，平面形長方形を呈する上段は深さ5～8cmで，各辺および隅は板をはめ込んだかの如き状態を示している。下段の深さは43cmを測る。埋積土のうち1・2層の砂層は，弥生時代後期の水田遺構上に堆積する洪水砂に比定しうるものと考えられる。

遺物は，甕27～32，鉢35・36，高杯33・34，製塩土器37・38，小型壺39等が出土している。このうち，28・34・38以外は床面からの出土である。

時期は，百・後・Ⅳに比定しうる。



第14図　竪穴式住居-1（左）・2（右）（1/80）



第15図　竪穴式住居-1出土遺物

竪穴式住居－2（第14図）

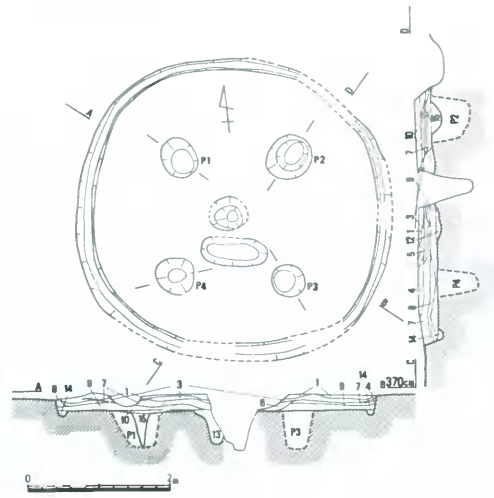
D-8の北東部にあり，大半を現代用水に削られ，北西部は竪穴式住居－1に切られている。壁体溝の一部が残るのみであり，柱構成等は不明である。時期を決定するに足る遺物は出土していないが，土壙－11に切られることからも，百・後・Ⅲを下らないものと考えられる。

竪穴式住居－3（第16図）

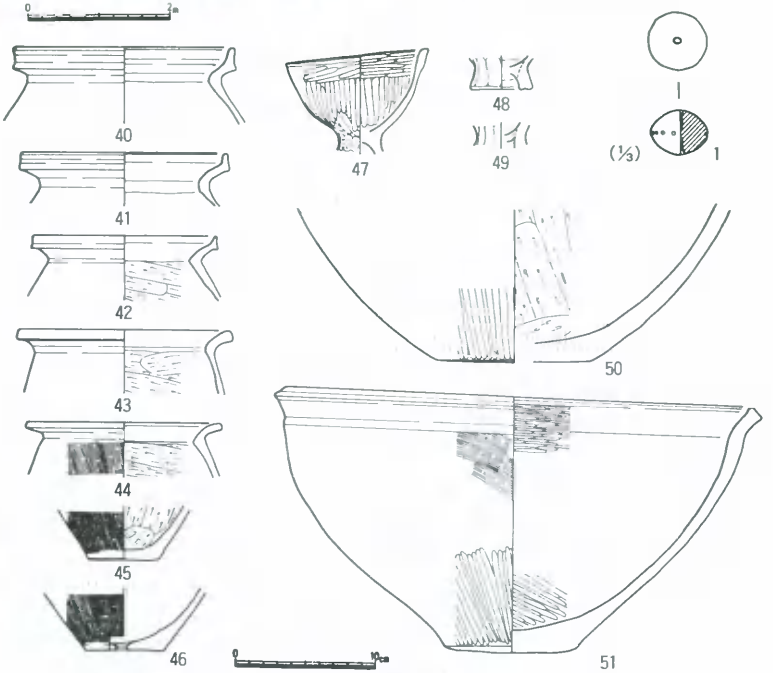
D-8とD-9の境界中央部に位置し，北半は溝－19に削られており，南辺は土壙－15に切られている。竪穴式住居－5とは南東部において接するが，これよりは新しい。

平面形はよく胴の張った隅丸方形を呈し，南北長425㎝・東西長440㎝を測り，深さは現存最大30㎝である。主柱穴はP-1～4の4本で構成され，二つの中央穴をもつ。南寄りの中央穴は深さ約10㎝と浅く，他の一つは深さ50㎝を測る。埋土中には炭片・焼土塊等が多く含まれ，火災に遇ったことを想わせるが，床面での炭化材の検出はなかった。

遺物としては，甕40～46，鉢47・50・51，製塩土器48・49，土玉1等がある。このうち，40～42・45・46・50・51は西寄りの床面での一括出土である。これらにより，時期は百・後・Ⅲに求められる。（光永）



1. 淡灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土
（炭片少量含）
3. 明赤黄色焼土
4. 淡灰褐色砂質土
5. 暗赤褐色焼土
（暗灰色灰）
6. 灰褐色砂質土
（黄褐色土ブロック含）
7. 灰褐色砂質土
（炭化材集中）
8. 灰褐色砂質土
9. 灰褐色弱粘質砂質土
10. 灰褐色砂質土
（炭片・焼土粒含）
12. 暗灰褐色砂質土
13. 暗褐灰色砂質土
（炭・灰多含）
14. 暗灰褐色砂質土
15. 暗灰褐色砂質土
（炭・焼土粒含）

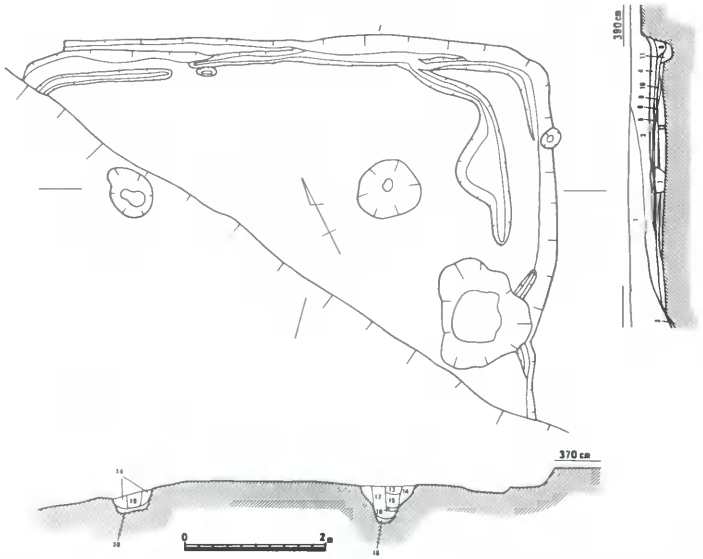


第16図　竪穴式住居-3（1/80）・出土遺物

竪穴式住居―4（第17～19図）

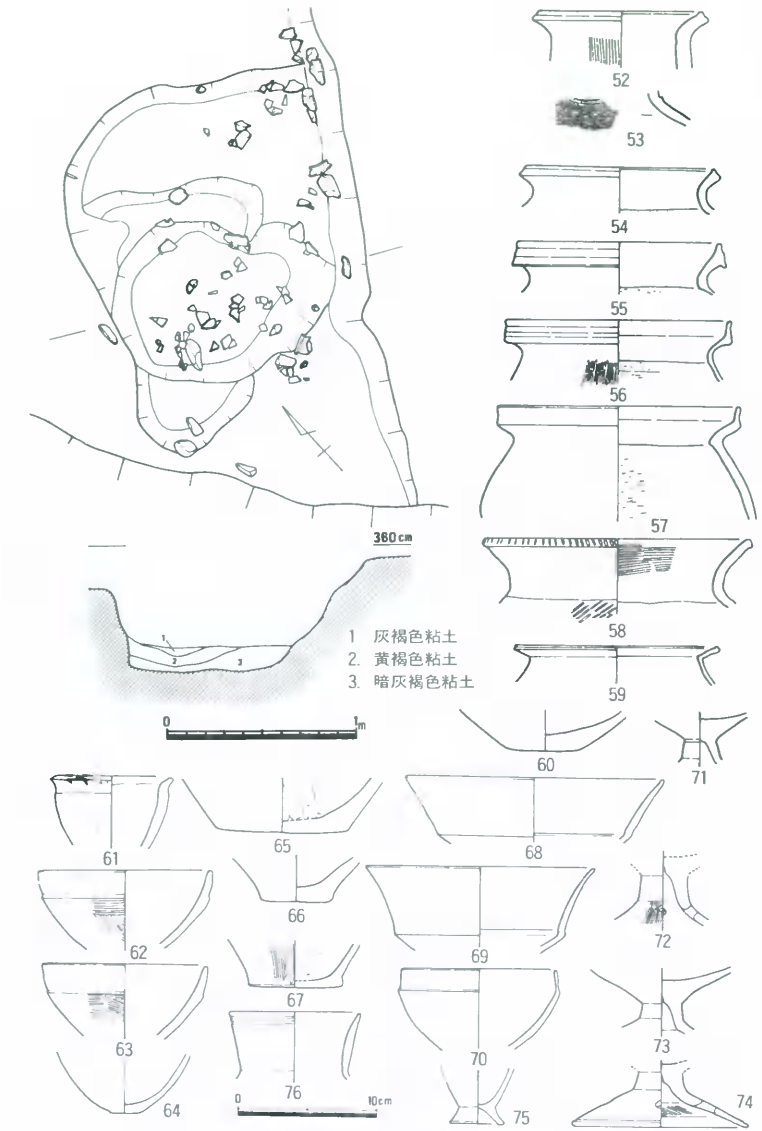
D-9からD-10にまたがっている。北から南東にかけての側は，竪穴式住居―3・5・7と接している。中世河道へ向う傾斜面になっているため，西半分は消失している。平面形は方形を呈し，北東隅が完全に残っているほか，北西隅は一部が判明するだけで，全体の規模はわからない。あえて復元すれば，東西は約760cmである。柱穴は北側で2本検出された。南側は消失しているが，4本柱に復元される。2本の柱間は360cmである。北東隅の柱穴は，柱を抜き取られたあとと推定されるが，最も下の床面では，直径80cm，深さ54cmを測る。床面の標高は335cmである。

東側の側壁付近には，土壙が1基ある。大きさは，200×150cmで，深さ42cmを測る。埋土中からは，土器片・石錘・円礫とともに銅鏃3が検出された。床面は断面図でみるように3面

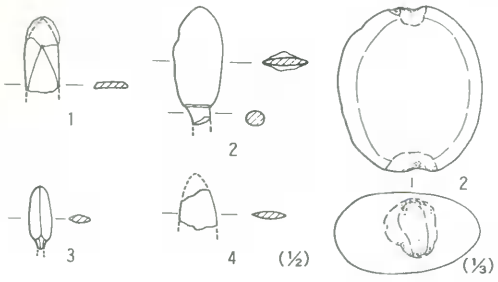


1. 灰色微砂
2. 灰色粘土
3. 灰褐色粘土
4. 灰色粘土
5. 黄灰褐色粘土
6. 灰色粘土
7. 黄褐色土まじり灰色粘土
8. 灰色粘土
9. 黄灰褐色粘土
10. 灰褐色粘土
11. 黄褐色土まじり灰色粘土
12. 灰色粘土
13. 灰褐色砂質土
14. 黄褐色土まじり灰褐色砂質土
15. 黄灰色土まじり灰褐色砂質土
16. 灰褐色砂質土
17. 黄褐色粘土
18. 灰色粘土
19. 灰褐色砂質土
20. 黄褐色粘土

第17図　竪穴式住居-4（1/80）



第18図　竪穴式住居-4内土壙（1/30）・出土遺物（1）



第19図　竪穴式住居−4出土遺物（2）

あり，2回の貼床が確認される。貼床をするたびに，5〜10㎝の埋土をしているため，床はだんだん高くなっている。北辺の壁体溝はほぼ同じところであるが，東辺の壁体溝は初めのものがやや内側にある。中央部分は削られているため，炉跡などは検出されていない。

埋土中からは，土器・鉇・鉄鏃・銅鏃などを出土している。土器は，ほとんどのものが小破片である。土器には，壺52・53，甕54〜59，鉢61〜63，高杯68〜74，台付鉢75，直口壺76がある。

壺では，頸部がほぼ直立し，口縁部が少し外反するものと頸部に小さな凸帯をめぐらし，肩部にクシガキの波状文を施したものがある。甕では口縁端部を折り曲げて外反し，端部を肥厚するものがある。口縁端部外面には，擬凹線文を施したものもある。肩部にタタキメを施すものでは，口唇部にキザミメを配している。59の甕は端部が角張り特異な形態を示している。色調はにぶい橙色を示し，細砂・雲母を含んでいる。鉢では口縁部にくびれをもつものがある。高杯の杯部は深い。脚の柱状部はきわめて短い。胎土には精製粘土が使用されている。75はいわゆる製塩土器とは異り，胎土は精製粘土である。

鉇は先端の一部だけである。鉄鏃は埋土の上層から出土したもので，柳葉形を呈している。銅鏃は2本出土し，竪穴式住居内の土壙から出土したのは3で，茎を欠失しており，錆のため端部がかなり破損している。本来は柳葉形を呈していたものであろう。もう1本は埋土中から出土したもので，小さな破片である。石錘は自然の円礫の両端を打ち欠いたものである。竪穴式住居内の土壙から出土した土器は，57・60・62・65・69・70である。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。　（正岡）

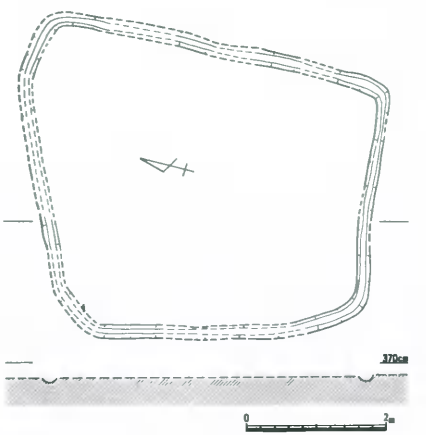
竪穴式住居−5（第20図）

D−9の南西部に位置し，竪穴式住居−4・土壙−19に切られ，土壙−16をその範囲に含む。竪穴式住居−3との関係は不明である。

平面形は不整台形を呈する。壁体溝は，長さ530㎝・幅455㎝を測る床面を囲う。深さは，検出面から5〜7㎝を測るのみである。この範囲内で検出された柱穴と考えられる遺構は40

本を越えるが，この竪穴式住居に伴う柱穴およびその構成は不明である。

壁体溝からは，弥生時代前期の土器も出土しているが，弥生時代中期以後と考えられる土器小片も出土している。また，本遺構を切っている土壙－19は，百・後・Ⅲに比定されている。これらのことから，時期については，弥生時代中期を上限とし，百・後・Ⅲを下限とする大きな枠でとらえたい。



第20図　竪穴式住居-5（1/80）

竪穴式住居－6（第21～23図）

D-9の中央部に位置し，竪穴式住居－7・土壙－3を切っている。

3回の建替えによって順次拡張していき，最終段階では，平面形は隅丸長方形を呈している。長径約675cm・短径605cmを測り，深さは25cm迄が残っていた。これに伴う柱穴はP-4・10～12の4本であり，P-13が中央穴である。壁体溝は，北・東・南の各辺では壁裾に沿うが，西辺では20～70cm離れている。床面は，9層上面がこれに相当する。

この前の段階は，P-5～9の5本柱であり，中央穴はP-14とP-15のうちどちらが伴うかは不明である。床面は12層上面である。壁体溝は，最終段階と同位置である。

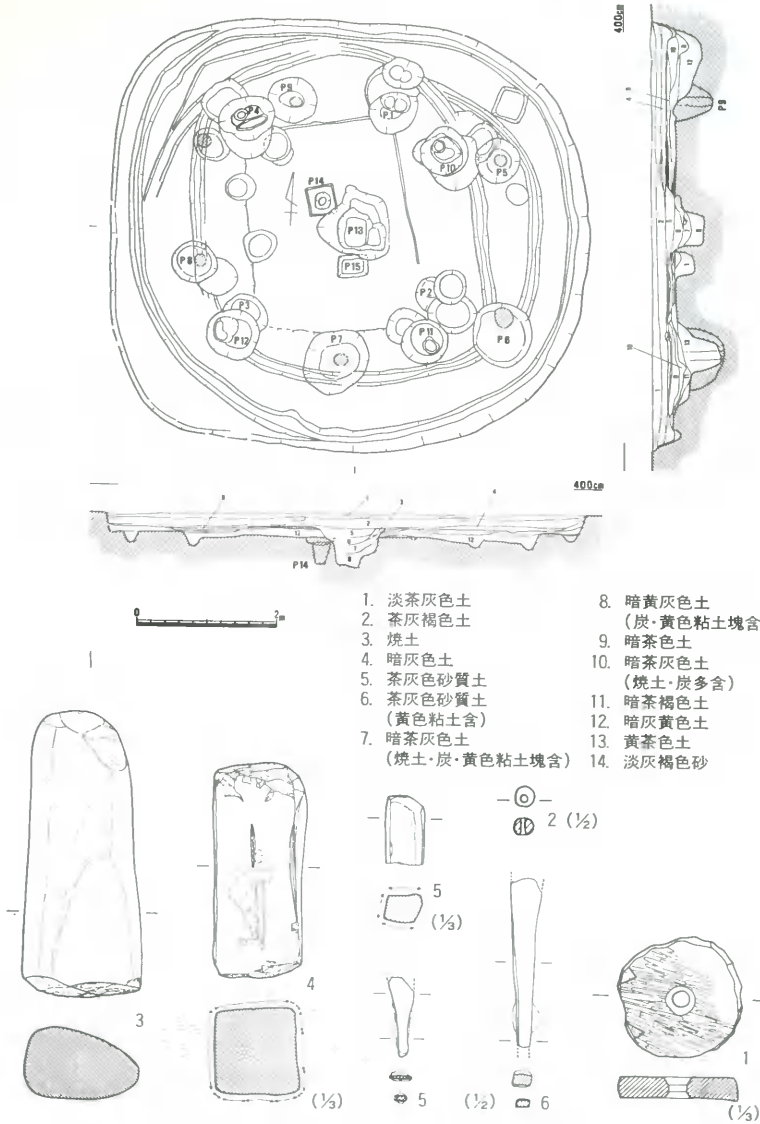
これらに先行して壁体溝が2本ある。いずれかの時期にP-1～4の4本柱で，P-14あるいはP－15を中央穴とする段階があり，これには間仕切り状の遺構が伴う。

遺物は，直口壺77，壺78・79，甕80～90・138，鉢92・113～124，高杯125～137，小型土器109～111，製塩土器91・93～97，敲石3，砥石4・5，石鏃，鉄鏃5，鉄器6，ガラス小玉2，土製紡錘車1，ガラス滓等がある。このうち，80・90・92・94・104・106・110・114・117・120・122・124・125・127・132・135・136および石鏃・鉄鏃・土製紡錘車・ガラス滓が最終床面に伴うものである。また，79・83・87・102・107・111・126・133・134・138および鉄器はこれより下層からの出土である。

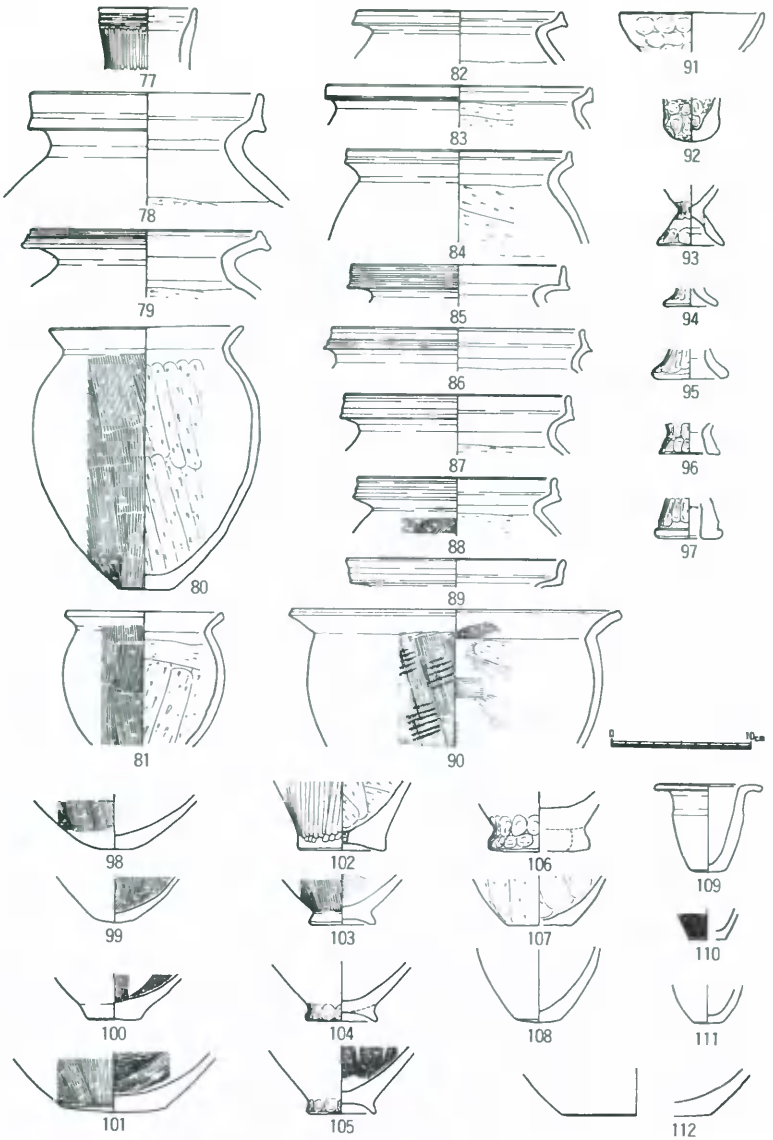
これらの遺構・遺物の観察によれば，時期は百・後・Ⅲに比定しうる。

竪穴式住居－7（第24～26図，図版2-1）

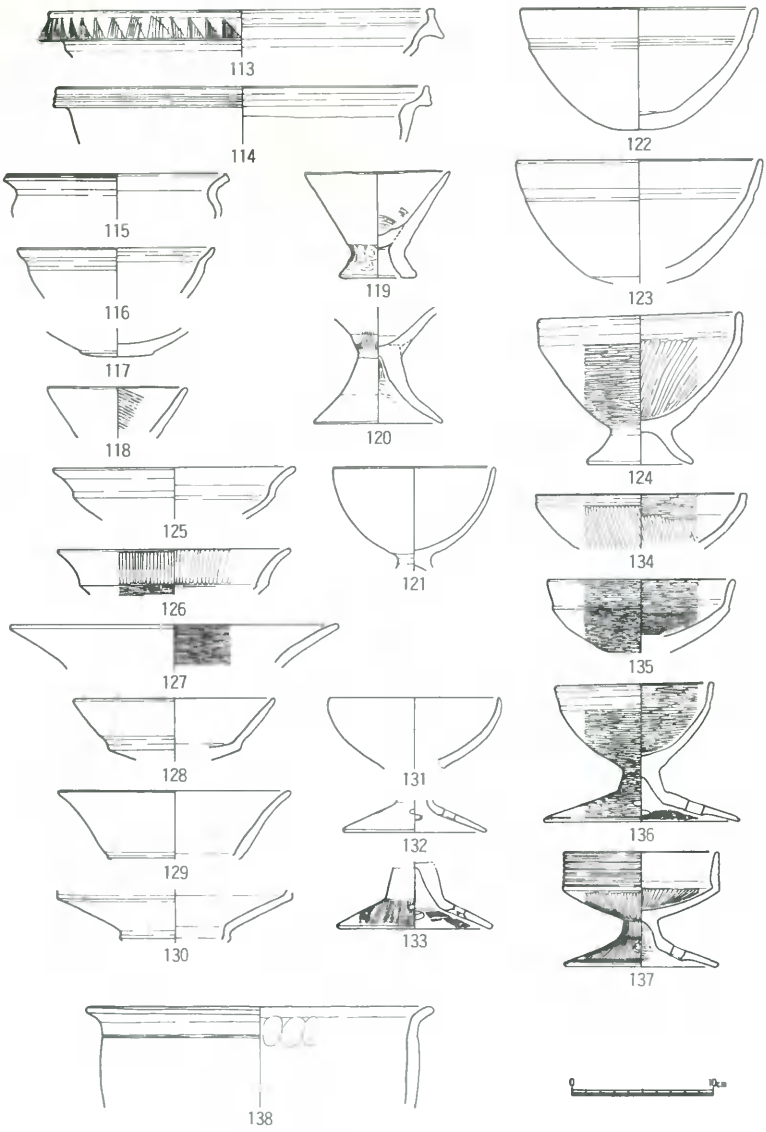
D-9の南半中央部にあり，一部E-9にかかる。北東部を竪穴式住居－6に切られ，土壙－21にも切られている。2回の建て替えによって拡張されるが，平面形は円形であり，最終段階



第21図　竪穴式住居6（1/80）・出土遺物（1）



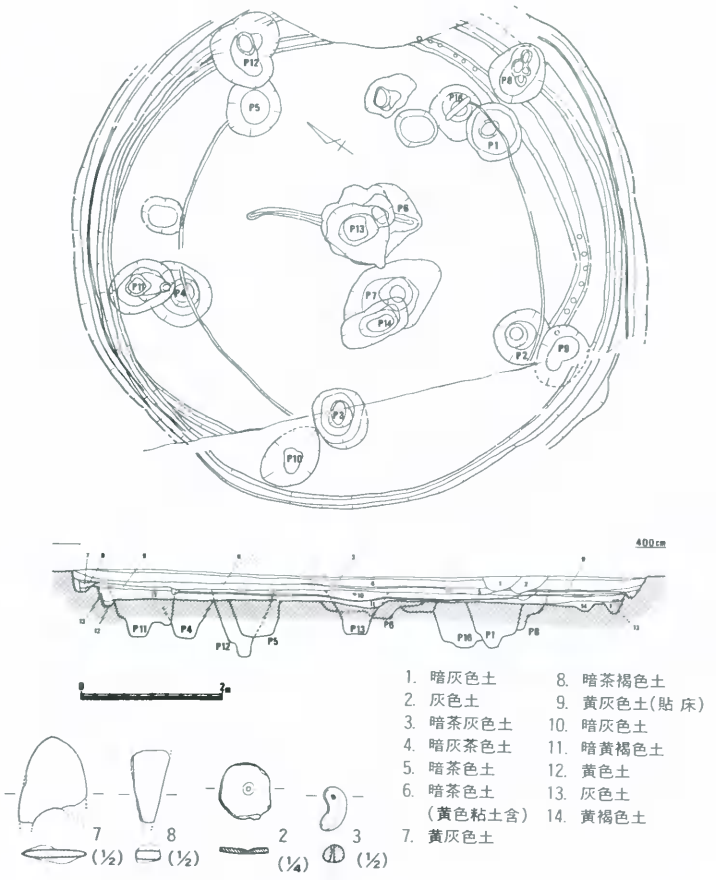
第22図　竪穴式住居6出土遺物（2）



第23図　竪穴式住居-6出土遺物（3）

の最大径約800cmを測る。この段階の柱は，P−8〜12の5本柱であり，P−13・14のセットとなった中央穴が伴う。壁裾から65〜75cmの間はベッド状の段になっている。

この前の段階は，P−1〜5の5本柱で，P−6・7の中央穴を伴う。最大径は約725cmである。これらに先行する壁体溝が検出されているが，それに伴う柱構成は不明である。この壁体溝底には部分的に杭の痕跡が認められる。最大径は約690cmを測る。また，P−16においては，柱



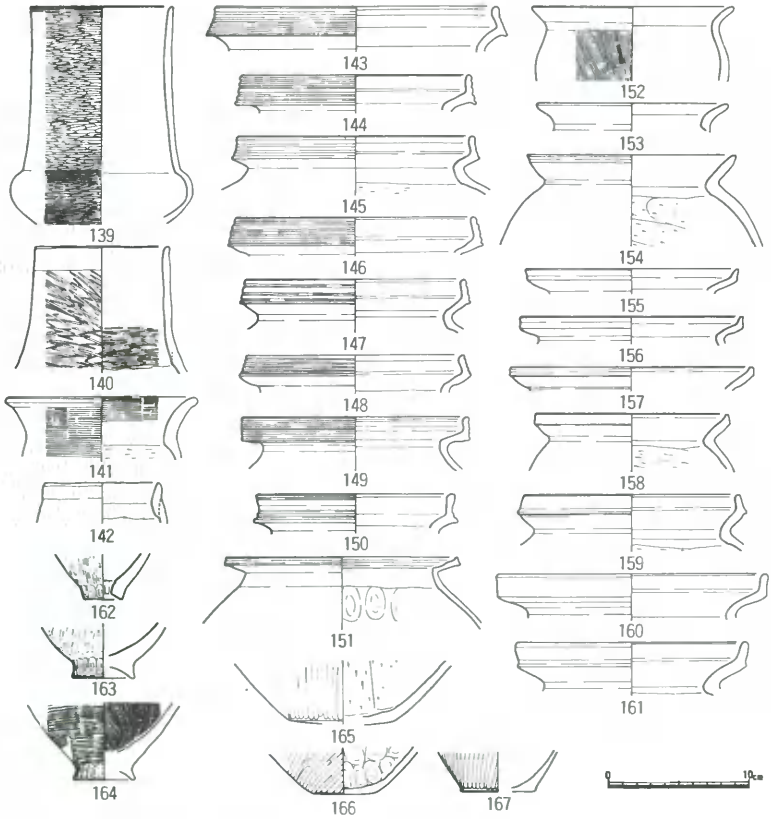
第24図　竪穴式住居−7 (1/80)・出土遺物（1）

を支えるための板材の痕跡が認められた。

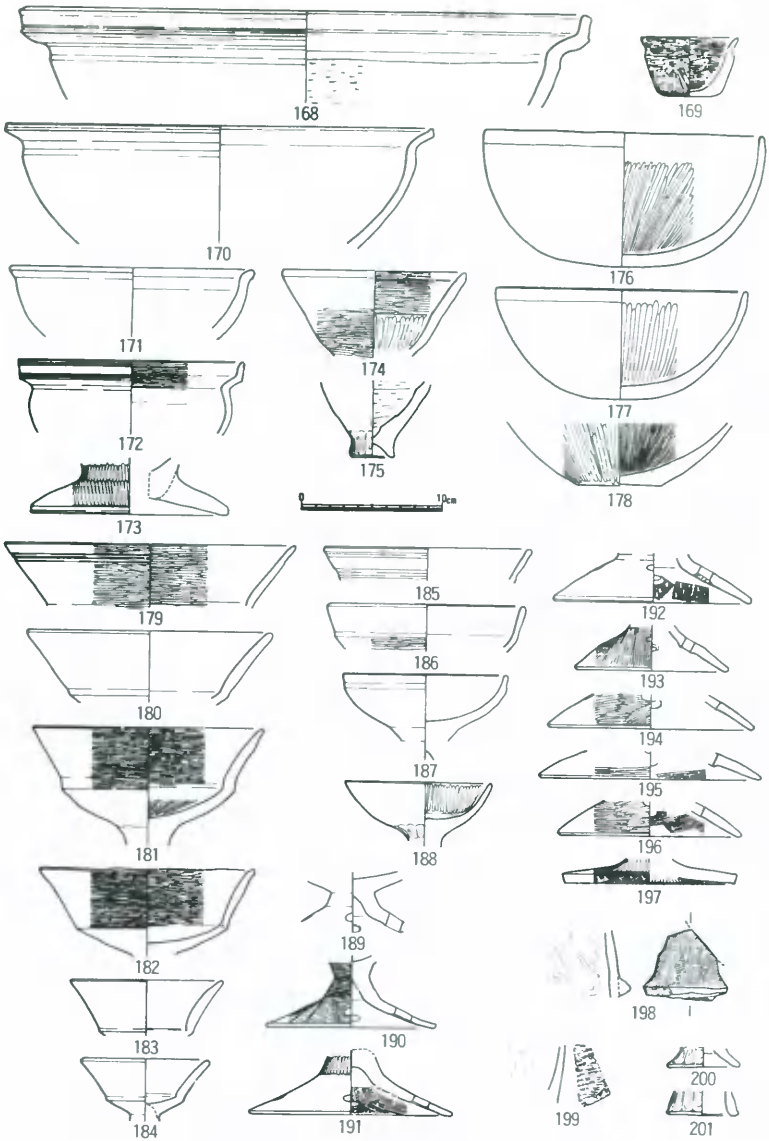
遺物は，直口壺 139・140，甕 141～161，鉢 168～178，高杯 179～197，手焙形土器 198，製塩土器 199～201，鉄鏃７，鉄器８，土製勾玉３，土製紡錘車２，ガラス滓等が出土している。これらにより，時期は百・後・Ⅳに求められる。

竪穴式住居－８（第27～30図）

D-9 の南東隅に位置し，若干 E-9 にかかる。南西隅を竪穴式住居－９に，東辺を土壙－27 にそれぞれ切られ，中央部で土壙－26 に切られている。



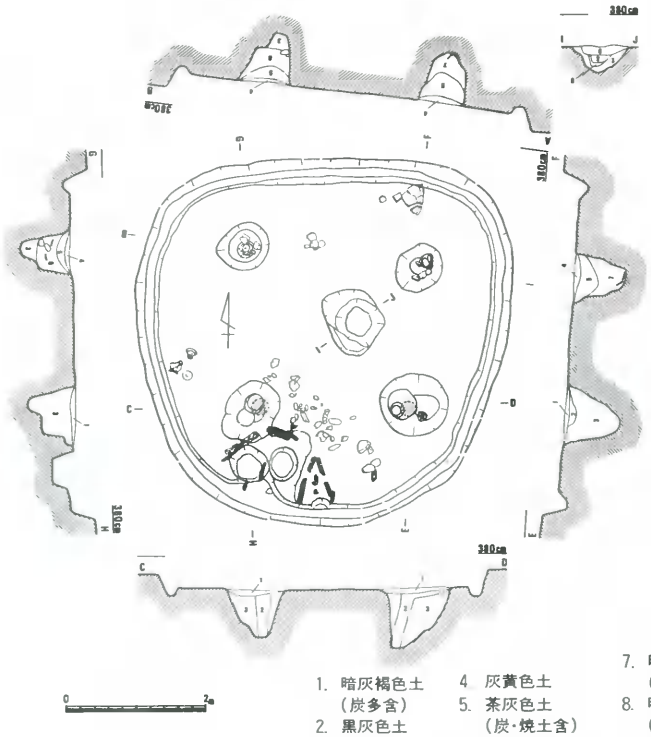
第25図　竪穴式住居-7 出土遺物（２）



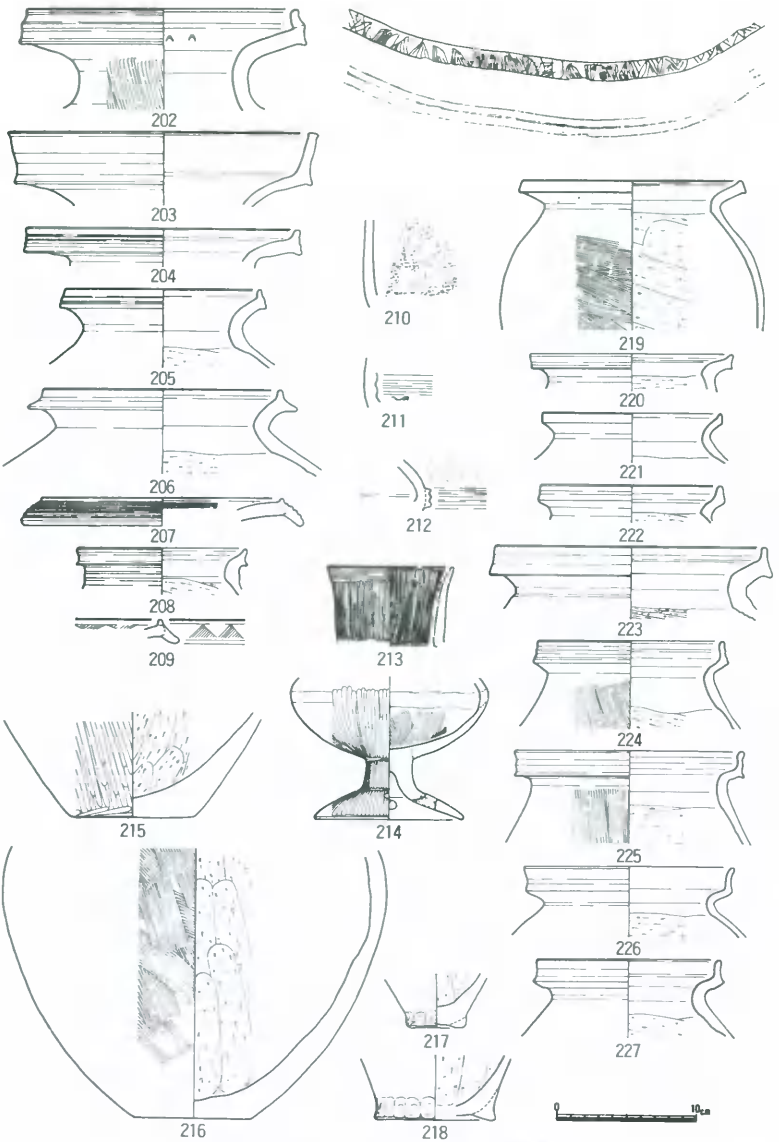
第26図　竪穴式住居-7 出土遺物（3）

平面形は隅丸台形を呈し，最大長540cm・最大幅510cmを測り，壁高は30cmまでが残っていた。柱は4本柱で，中央穴を伴い，南側の2本では柱痕跡が認められた。埋土の最上層には淡灰黄色微砂が最大厚10cmのレンズ状堆積を示している。下層の暗茶灰色土中には炭・焼土等を多く含み，床面にも炭化材が遺存している。また，南壁は火を受けて焼土化しており，これらのことからこの住居は火災に遇って焼失したものと考えられる。

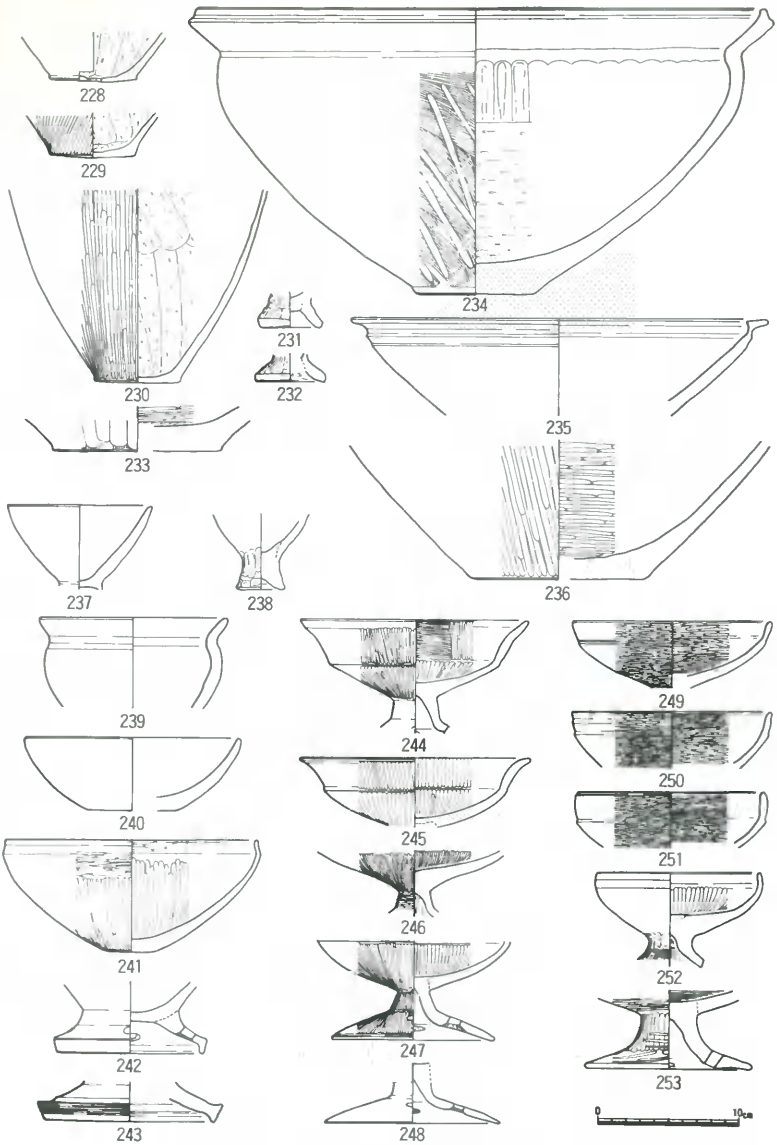
遺物は，壺202～211・215・216，直口壺212～214，甕219～230，鉢233～243，高杯244～253，製塩土器231・232，砥石6，敲石，鉄器9・10，土製紡錘車3，土錘4等が出土している。このうち，202・203・205・213～215・224・227～229・236～240・245～248・251・252お



第27図　竪穴式住居-8（1/80）



第28図　竪穴式住居-8 出土遺物（1）



第29図　竪穴式住居-8 出土遺物（2）

よび砥石・鉄器10・土製紡錘車は床面からの出土である。

これらの遺構・遺物の観察により，本遺構の所属年代は，百・後・Ⅲの枠内に求められる。

（光永）

竪穴式住居－9（第31図）

E-9の北東部に位置し，北東側の一部分を残すだけで，大部分は中世の河道で削られている。最大で35cm幅しか残っていない。平面形は円形とならず，緩やかな湾曲を示していることから楕円形ないし隅丸方形と推定される。わずかに残存した壁面は火を受けている。埋土は灰褐色粘土であり，床面付近から少量の土器片を検出した。

土器には，甕254，鉢255，高杯257の破片がある。

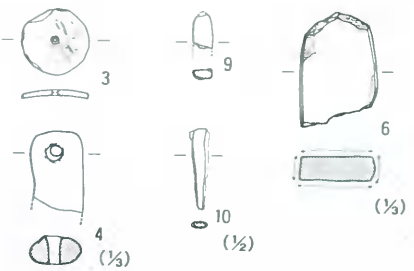
時期は，百・後・Ⅲに属する。

（正岡）

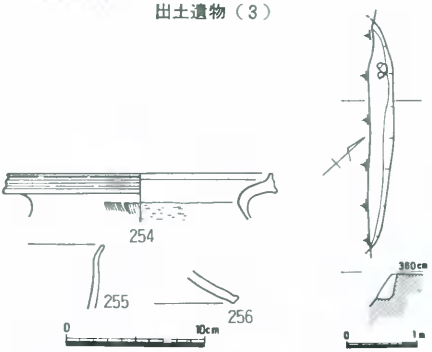
竪穴式住居－10（第32・33図）

D-10の南西隅に位置し，土壙－31・35～37を切っている。

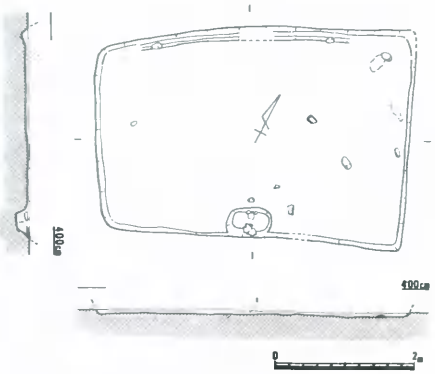
平面形は台形を呈し，長さ450cm・最大幅310cmを測り，壁高は5cm程度を残すのみである。埋土は暗灰茶色土である。南東壁際には，長さ70cm・幅40cm・深さ15cmを測る隅丸長方形の遺構を伴い，北西辺においては，幅15cm・深さ



第30図　竪穴式住居-8 出土遺物（3）



第31図　竪穴式住居-9（1/80）・出土遺物



第32図　竪穴式住居-10（1/80）

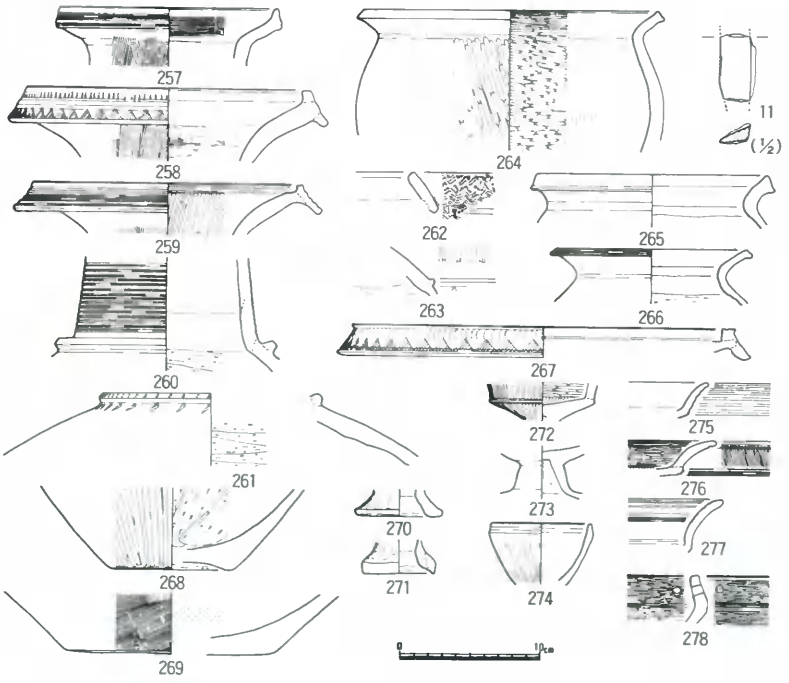
5cmの壁体溝を確認している。柱・中央穴は確認できず，床面下に残る柱穴状遺構にもこれに相当する位置を占めるものは無い。

遺物は，壺257～263・268，甕264～266，鉢274・278，高杯272・273・275～277，器台267，製塩土器270・271，鉄器11等が出土している。

この遺構は，竪穴式住居として扱っているが，その性格を一般の住居と同様には考え難い。あるいは，壺・高杯・器台にみられる装飾性の中にその一端を窺うことができるのかも知れない。時期は，遺物および他遺構との関係から，百・後・Ⅲに比定される。　（光永）

竪穴式住居―11（第34図）

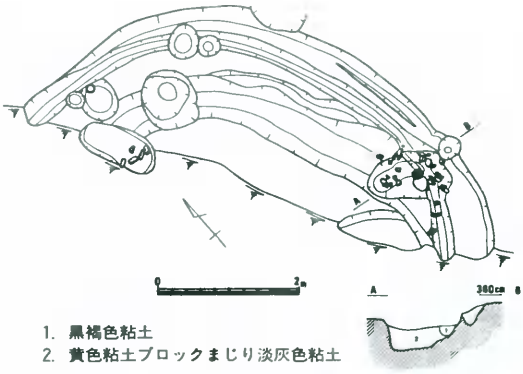
E-10に位置し，西側の3分の2は中世の河道によって削られたため，全容は判明しない。壁体溝は明瞭な2本と他にも一部分確認されることから2回の建て替えが行われたものであろう。柱穴は数個検出されるが，この竪穴式住居に伴うものとしては内側のやや大きい柱穴2本

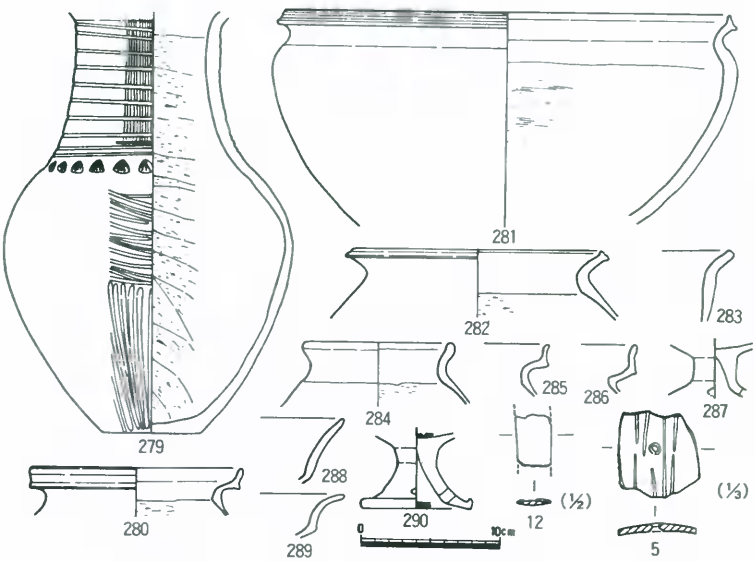


第33図　竪穴式住居-10出土遺物

がそれであると推定される。柱は抜き取られたようで，掘方が変形している。南側の抜き取り穴と推定されるところには，土器がまとまって検出された。そのなかには，口縁部を欠失した長頸壺279，鉢281がある。他に埋土中からは，甕280・282・284～286，鉢283，高杯287～290のほか，土器片転用の紡錘車5，鉄器片12が検出された。竪穴式住居の平面形は円形で，掘方から復元すると直径8mとなる。

時期は，百・後・Ⅲに属する。





第34図　竪穴式住居-11（1/80）・出土遺物

竪穴式住居－12（第35図）

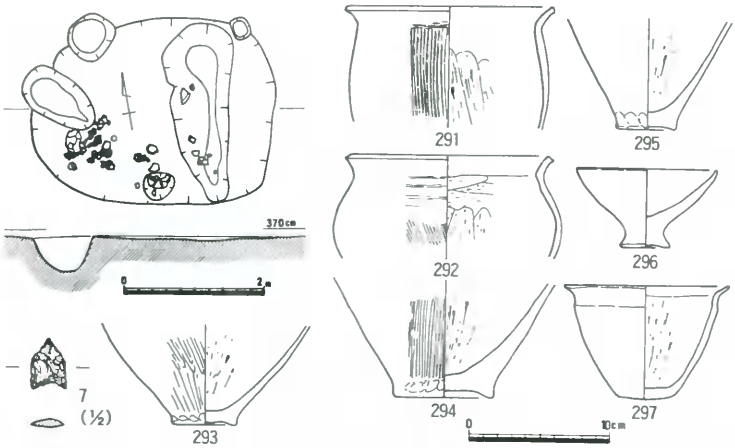
D-10の南西寄りに位置し，竪穴式住居－10・11に近接している。平面形の検出はなかなか困難で，床面付近において，やっと確認できた。床面付近には焼土塊が散布し，中央部付近は焼土面も確認されたことから，火災にあったことがわかる。後に掘られた柱穴もあるが，東寄りの部分には浅いくぼみがある。柱穴は検出されなかった。平面形はやや不明瞭なところもあるが，ほぼ長方形と考えられる。東西方向に長く，長径342cm，幅261cmを測る。床面から検出された土器には，甕291，鉢292・296・297がある。

甕は口縁部を「く」の字状に曲げただけのものがある。外面は粗いハケメである。鉢の高さを低くしたものと植木鉢状のもの，高台状の台が付く小型のものがある。底部には端部をつまみだして，少しあげ底になるものがある。小型の鉢以外は内面をヘラケズリしている。

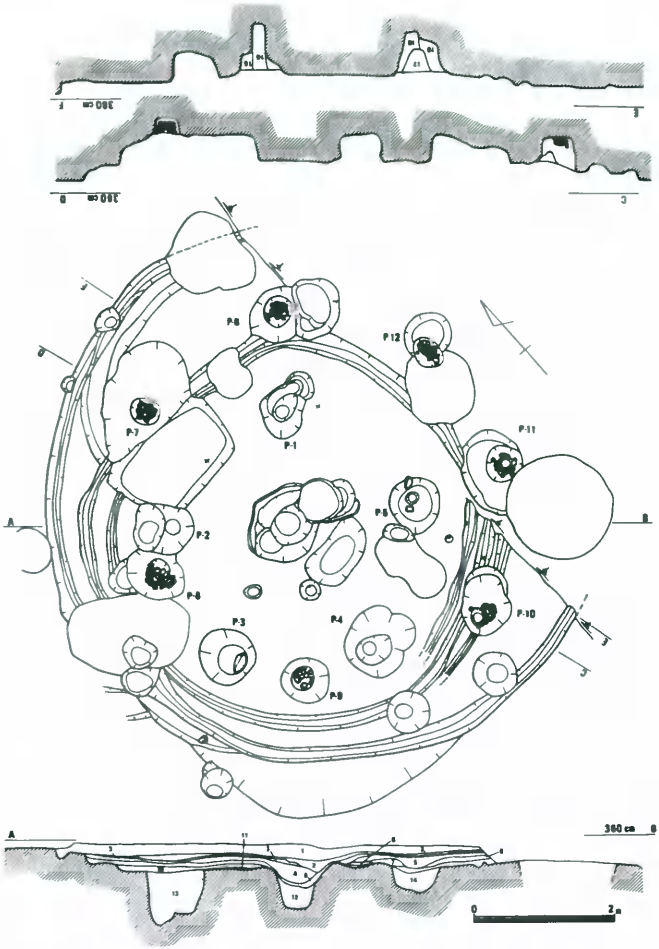
時期は，百・後・Ⅱに属する。

竪穴式住居－13（第36～38図）

D-10からE-10にかけて検出されたもので，東側は現代まで使用されていた用水路によって削平されている。北東部は1979年度に，南西部は1980年度に調査した。溝の他にも，後の井戸や柱穴などによって掘りとられたところもあるが，柱穴の配置などはほぼ復元できる。壁体溝をみると内よりに3本並んでいるところがあり，さらに外側に大きな壁体溝がある。内側の壁体溝に対応する柱穴は，P-1～P-5まであり，5本の柱を配置し，中央に深い土壙がある。



第35図　竪穴式住居-12（1/80）・出土遺物



1. 灰褐色粘土
2. 灰色粘土
3. 黄色粘土
4. 淡灰色粘土
5. 淡灰色粘土
6. 灰色粘土
7. 黄色粘土
8. 灰色粘土
9. 炭・灰まじり暗灰色粘土
10. 淡灰色粘土
11. 灰
12. 炭まじり灰色粘土
13. 黄色粘土ブロックまじり灰色粘土
14. 〃
15. 灰色粘土
16. 炭・灰まじり暗灰色粘土
17. 灰色粘土
18. 〃
19. 黄色粘土ブロックまじり灰色粘土

第36図　竪穴式住居-13（1/80）

5本の柱穴は建て替えのあとがみられ，平面形や断面にその痕跡が残っている。中央の土壙の周囲には少し高くなった土手状のものがあり，灰がいくつかの層になって堆積している。

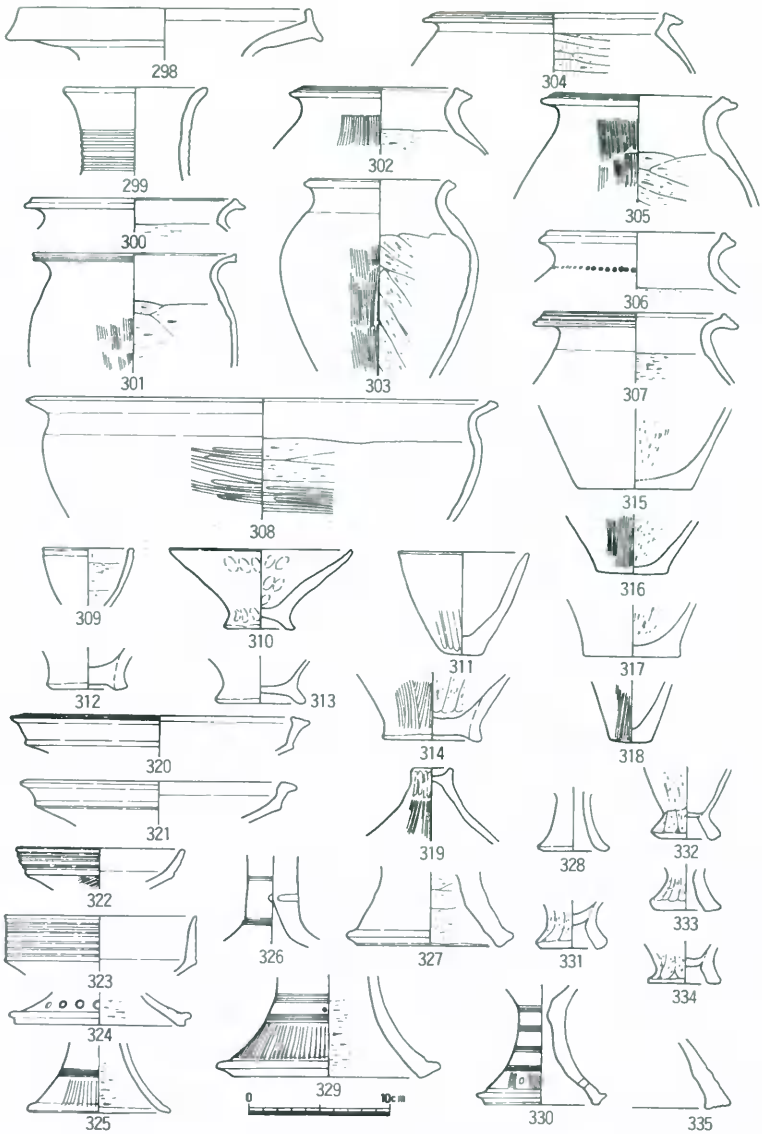
最終的に拡大された時の柱穴は，P-6～P-12に対応している。これら7本の柱穴には，いずれも下部に小さな円礫が詰っている。P-10，P-11でもわかるように，柱の周囲を固めるために詰め込んだものであろう。中央の土壙は少し東寄りに掘りなおされている。内部には灰や炭化物が多い。中央の土壙の南側には浅い土壙がある。北寄りのところには，長方形の土壙がある。長さ172cm，幅114cm，深さ40cmを測る。床はほぼ水平になっている。最終床面の時期より前の時期の住居内貯蔵穴と推定される。5本の柱穴に対応する壁体溝のうち，大きいものは直径約6m，最終期のものは約8mを測る。

床面は断面からも判明するように，拡大するごとに黄色粘土で貼床をしている。したがって最も拡大した時の床面が最上層となり，当初の床面より約20cm高くなる。各床の上面には，灰がうすくひろがっている。一部には砂の混っているところがある。最終床面の標高は340cmである。

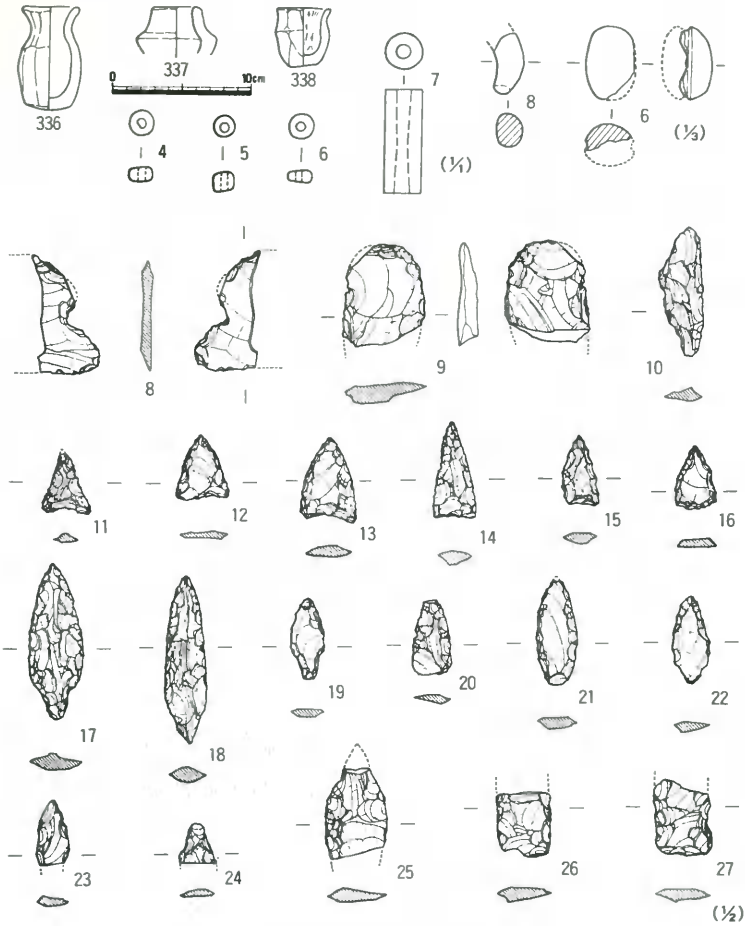
出土遺物には，土器片・土製品・ガラス小玉・石器などがある。中央の土壙や柱穴内から出土したものもある。298・301・304・330・333は中央の土壙，300・316はP-10，303はP-2，310・311はP-5，312はP-6から出土したものである。

土器には壺298・299，甕300～307，鉢308～311，蓋319，高杯320～326・328～330，台付鉢331～334，器台335，手捏ね土器336～338がある。壺では，口縁部が大きく外反し，端部を拡張するものとわずかに外反するだけのものがある。甕は口縁部が外反し，端部を肥厚して凹線文を施すものもある。頸部に竹管文を配するものがある。壺と甕の場合は，頸部直下まで内面ヘラケズリを施している。鉢には，大型のものと小型のものがある。大型のものは，口縁部が外反し，外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリのあとヘラミガキを施している。小型のものでは，底部が平底のものと高台状を呈するものがある。器面については，指頭圧痕が残るものとヘラミガキやナデによって調整されたものもある。高杯は，杯部の先端部を屈曲させ，外面が無文で，端部が肥厚するものと外面に凹線文を施し，端部が薄くなるものがある。柱状部には数条のクシガキ文を数段配する。裾部は緩やかにひろがり，クシガキやヘラガキ沈線を放射状に配している。端部は肥厚し，立ちあがりのみられるものもある。台付鉢はいわゆる製塩土器で，外面をヘラケズリしている。器台は小破片しかないが，裾部には凹線文がある。手捏ね土器は，小型壺と鉢状を呈するものである。

土製品には，勾玉の一部と推定されるもの8と周溝を有する土錘の2分の1破片がある。ガラス製小玉は3点あり，4は中間の床面上，5は上層の床面から出土した。6は埋土中で検出したものである。いずれも水色を呈し，直径4mmくらいのものである。石器には，打製石庖丁



第37図　竪穴式住居-13 出土遺物（1）



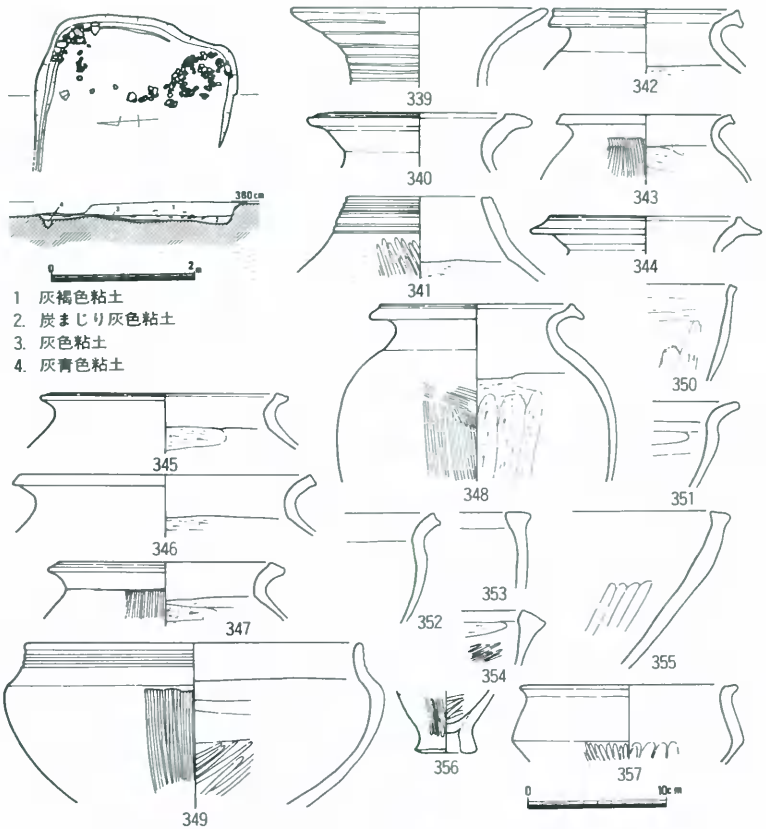
第38図　竪穴式住居-13 出土遺物（2）

8，石鏃 10～25，石槍？ 26・27，スクレイパー 9がある。8・9・13は上の床面上，12・22は中間の床面上，10・11・14～21・23～27は下の床面上で検出されたものである。石材はすべてサヌカイトである。各床面にはサヌカイトの小片が多数検出された。

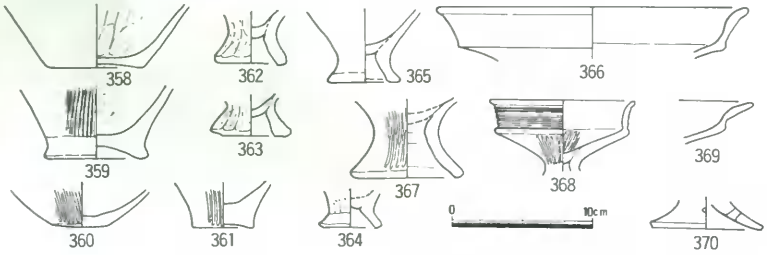
時期は，百・後・Ⅰの新相に属する。

竪穴式住居－14（第39・40図）

D-10の東寄りに位置し，西側は現代まで使用されていた用水路によって切られている。全体が焼けていて，焼土・灰が堆積している。南側の肩部から外側にも焼土面が認められることから，当時の肩部が残存しているものと考えられる。これによると，南側の掘り込みは30cmである。平面形は方形を呈し，壁体溝がめぐっている。床面の精査をしたが，柱穴は検出されなかった。東側の壁は少し変形しているが，ほぼ南北方向を示している。規模は，南北253cm，東西240cmで，小型のものである。通常の竪穴式住居とは考えがたく，倉庫などの用途も推定



第39図　竪穴式住居-14（1/80）・出土遺物（1）



第40図　竪穴式住居-14 出土遺物（2）

される。床面の標高は335cmである。

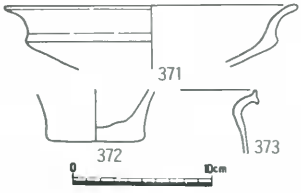
床面付近からは，多数の土器が検出された。土器には，壺339・340，無頸壺341，甕342～348，鉢349～355・357，台付鉢356・362～365，高杯366～370などがある。壺は口縁部が朝顔形にひらき，口縁端部近くまで沈線をめぐらすものがある。口縁部が小さくなって拡張せず，無頸壺となるものがある。甕はいずれも口縁部を折り曲げて外反し，端部を少し肥厚させている。鉢には，大型のものとやや小型のものがある。内面は，ヘラケズリした場合は上からヘラミガキを施している。台付鉢では，通常のものと外面をヘラケズリしたいわゆる製塩土器がある。高杯の口縁部は肥厚していない。他にサヌカイト片もある。

時期は，百・後・Ⅱの古相に属する。

竪穴式住居―15（第41図）

E-11の北寄りに位置し，南西側は中世河道によって半分以上が削られている。現代まで使用されていた用水路の土手部分にあたり，東側は1979年度，西側は1980年度に調査を実施した。土壙―52や井戸―5・6，柱穴などが掘られ，遺構の状況はきわめて悪い。一部確認された壁体溝によると，平面形は円形であり，直径は約6mを測る。遺物には，わずかに残存している床面付近で検出された土器片がある。土器には，高杯371，甕373の小破片がある。他にサヌカイト片なども含まれていた。

時期は，百・後・Ⅲに属する。　（正岡）



第41図　竪穴式住居-15 出土遺物

竪穴式住居―16（第42～44図，図版2-2）

D-11の北部分において検出された竪穴式住居で，土壙―53，土壙―68，井戸―4を切り，土壙―54，土壙―55，土壙―56，井戸―3などによって切られている。

この竪穴式住居は，壁体溝および貼床の状況か

ら2度改築されており，順に拡張していったことがうかがえる。最初の段階は，直径560～580cmのほぼ円形を呈し，最終段階では，直径760～820cmのやや不整形な円形を呈する。最初の段階での床面積が27㎡前後，最終段階の床面積は50㎡前後となる。各段階での柱穴については必ずしも明確ではないが，最初の段階がP－1～5の5本柱，その次の段階がP－6～10の5本柱，そして最終の段階ではP－11～16の6本柱であったのではないかと考えられる。中央穴はやや深いすり鉢状を呈し，その上面および南東部分には薄い炭の層が二・三層認められるとともに，底部には3か所のくぼみがあり，各段階の住居に対応するのではないかと思われる。

出土遺物としては，土器，土製品，石器，鉄器，銅鏃，管玉，小玉がある。

土器はおもに覆土中から多量に出土しているが，図示した土器（第43図）のうち，374・381・386・391・400・409は最終の床面上に密着して出土しており，375・390・398・418は最終床面と2回目の床面との間から出土し，414・415は2回目の床面と最初の床面の間から，また388・402・419は柱穴内から出土し，その他は覆土中から出土したものである。覆土中から出土した土器は小片のものがほとんどである。

図示した石器（第44図28～33）のうち28～30は敲石で，28は安山岩，29は花崗岩，30は安山岩である。31は流紋岩製，32は安山岩製の砥石である。33は軽石で円孔がみられる。30がP－5から出土しており，その他は覆土中からの出土である。

土製品（第44図7～9）のうち7は紡錘車で覆土中から出土した。8・9は用途不明の土製品で，どちらも色調は明褐灰色で，胎土は微砂を含むが良好で，焼成はあまい。8は最終段階の壁体溝中から，9は2回目の床面と最初の床面との間から出土した。これらは，岡山県下では未だ類例をみない特異な土製品である。

ガラス製の小玉9～11の色調はいずれも淡いブルーである。10は最初の床面から，9・11は覆土中から出土した。

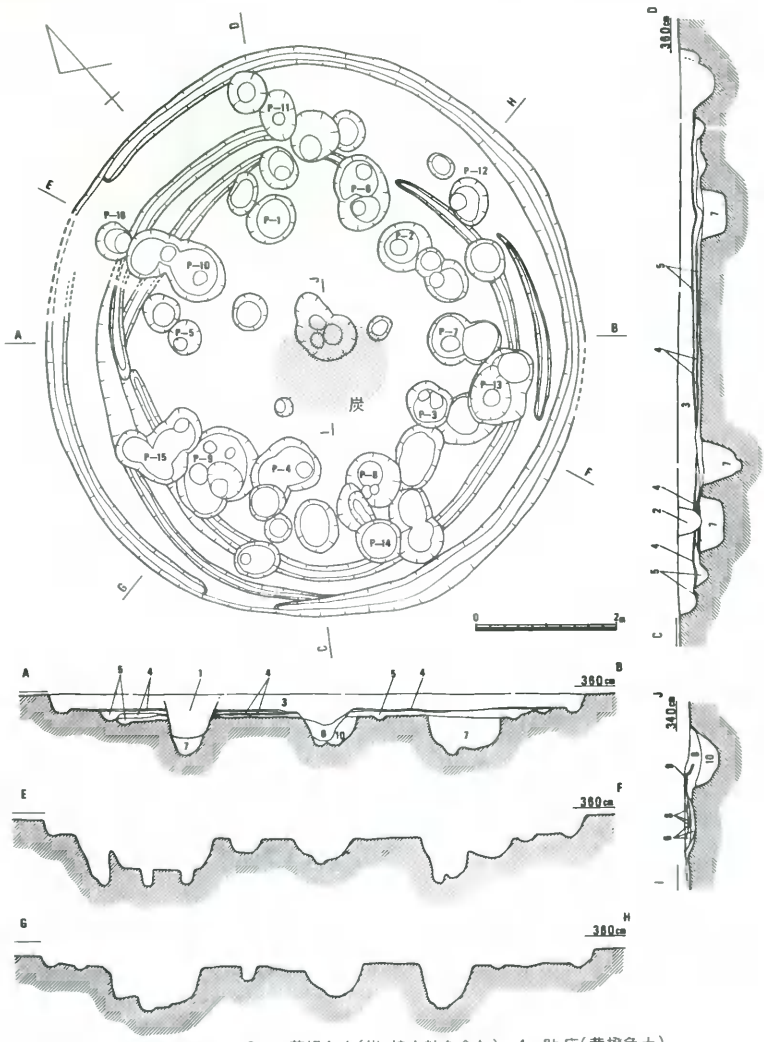
管玉12～14はいずれも覆土中から出土した。12・14は碧玉，13は蛇紋岩あるいは石木である。12・13は完存品で，14は一部欠損している。

銅鏃13～15はいずれも覆土中から出土している。

鉄器（第44図16～34）のうち16～19は鉄鏃，22は鉇であろう。20はP－2から，21・22・26はP－3から，34は最初の段階の床面上から，その他は覆土中から出土している。

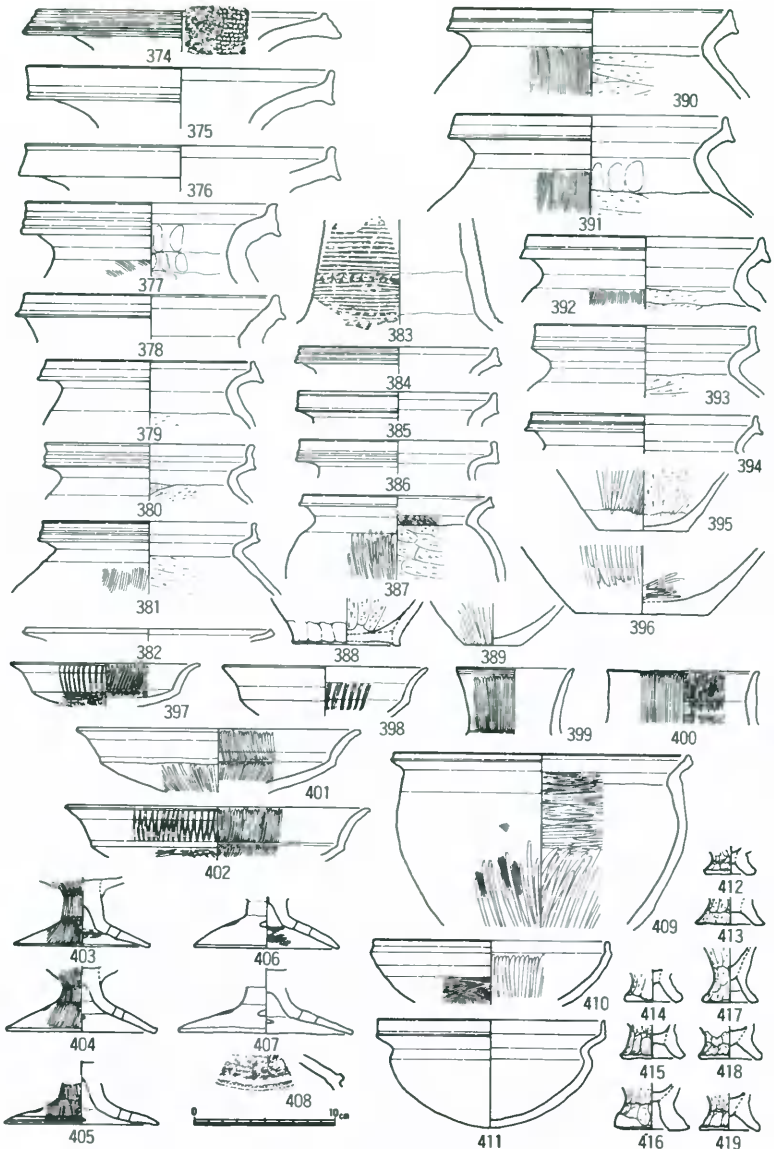
時期は，最初および2回目が明確ではないが，最終段階の住居は百・後・Ⅲであろう。

（平井）

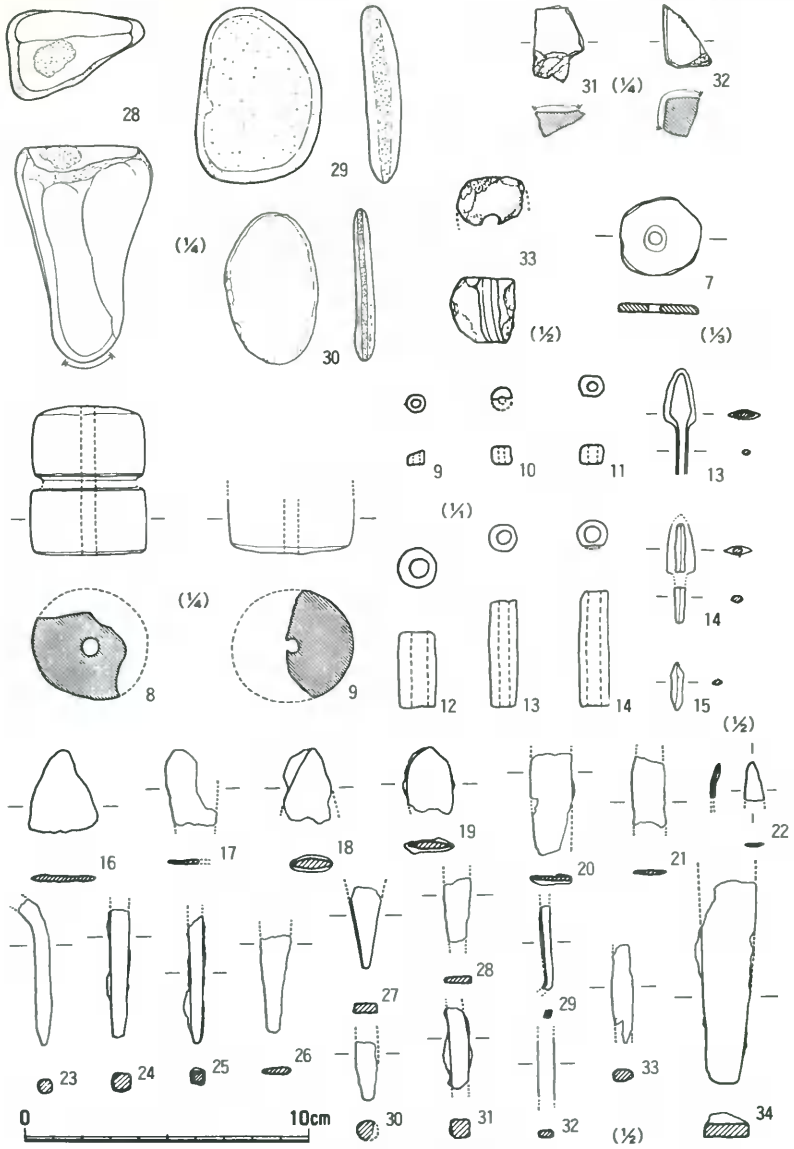


1. 土壙-27　2. 中世の柱穴　3. 暗茶褐色土(炭・焼土粒を含む)　4. 貼床(黄橙色土)
5. 暗灰褐色土(炭・焼土粒を含む)　6. 暗灰色粘質土　7. 暗灰色粘土と黄褐色ブロック土の混在
8. 炭　9. 灰色粘土　10. 暗灰色粘土(炭・焼土・黄褐色ブロック土を含む)

第42図　竪穴式住居-16 (1/80)



第43図　竪穴式住居-16 出土遺物（1）

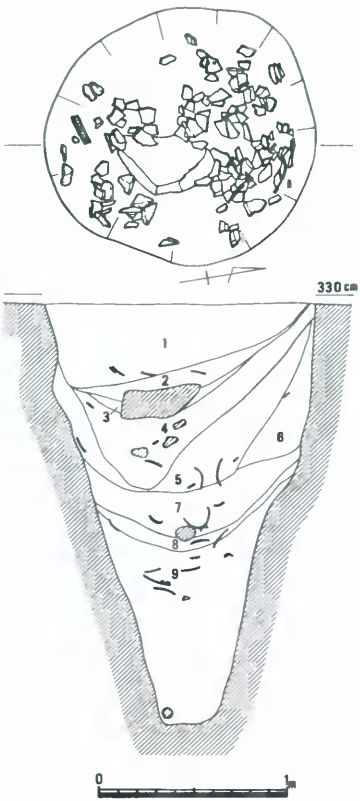


第44図　竪穴式住居-16 出土遺物（２）

（2） 井　　戸

井　戸－1（第45～52図）

D-10からE-10にまたがる位置にある。竪穴式住居－13とは重複し，上面は，現代まで使用されていた用水路によって削平されている。平面形は，ほぼ円形を呈している。検出面での大きさは，142×136cm，深さ222cmである。上層部には，52×32×16cmの石があり，この付近には，炭・灰が多く，土器がまとまっている。中層部にも多数の土器が集中していた。下層部には，比較的土器片は少なかったが，最下部において，完形の壺420 1個が検出された。



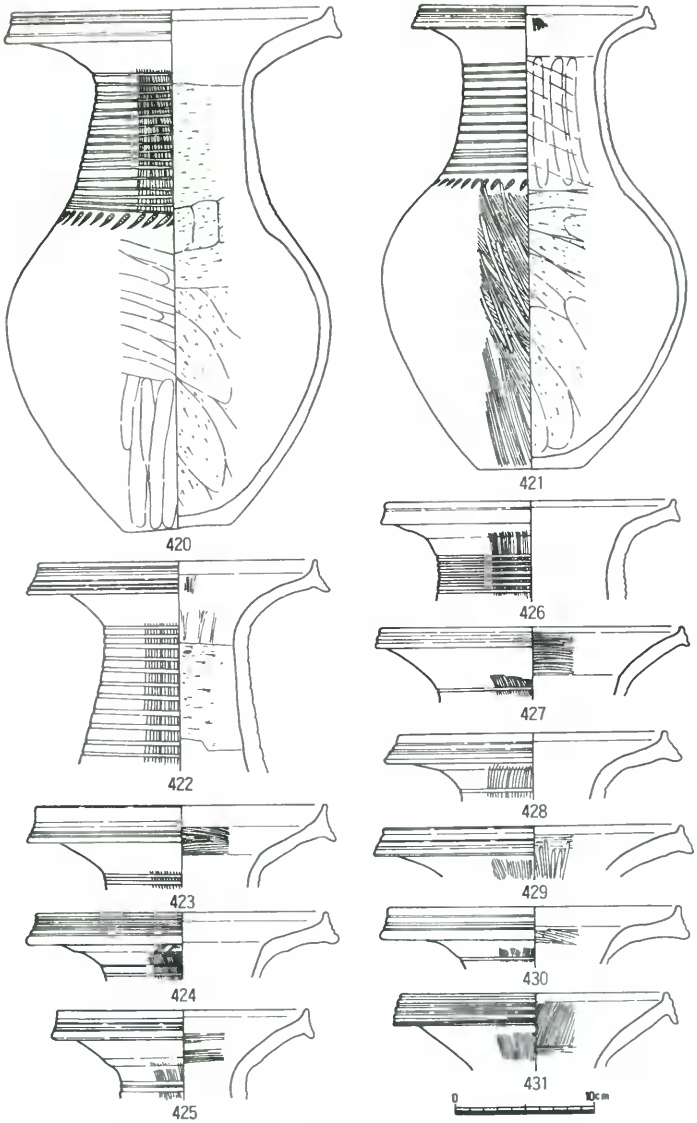
1. 茶褐色粘土
2. 炭・灰
3. 青灰色粘土
4. 茶灰色粘土
5. 灰褐色粘土
6. 黄褐色粘土
7. 灰褐色粘土
8. 黄褐色粘土
9. 暗灰褐色粘土

第45図　井　戸-1（1/30）

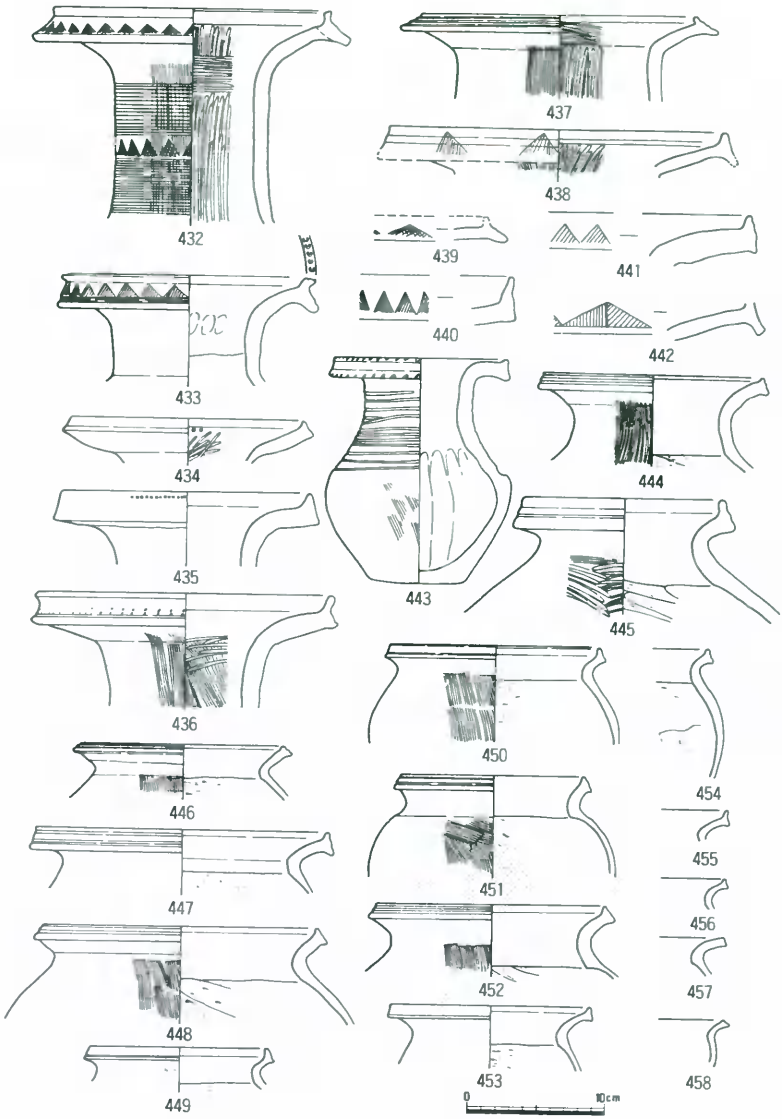
遺物には多量の土器のほか，紡錘車101点，砥石34　1点がある。土器には，壺420～444・511・574・577，甕445～477・510，鉢478～509，高杯527～570，直口壺571～573・575，器台576・579，コップ形土器578などがある。

壺は，長頸壺がほとんどで，一部に頸部の短いものもある。鉢には大型のものと小型のものがある。484には，片口がつくられている。小型のものでは，端部をつまみ出したものと平底のものがある。高杯は，杯部が深くならないで，比較的浅い皿状を呈するものが多い。脚の柱状部は短く，くびれ部にクシガキまたは沈線をめぐらすものがある。端部は，やや薄くなる傾向を示している。紡錘車は土器片転用のものである。

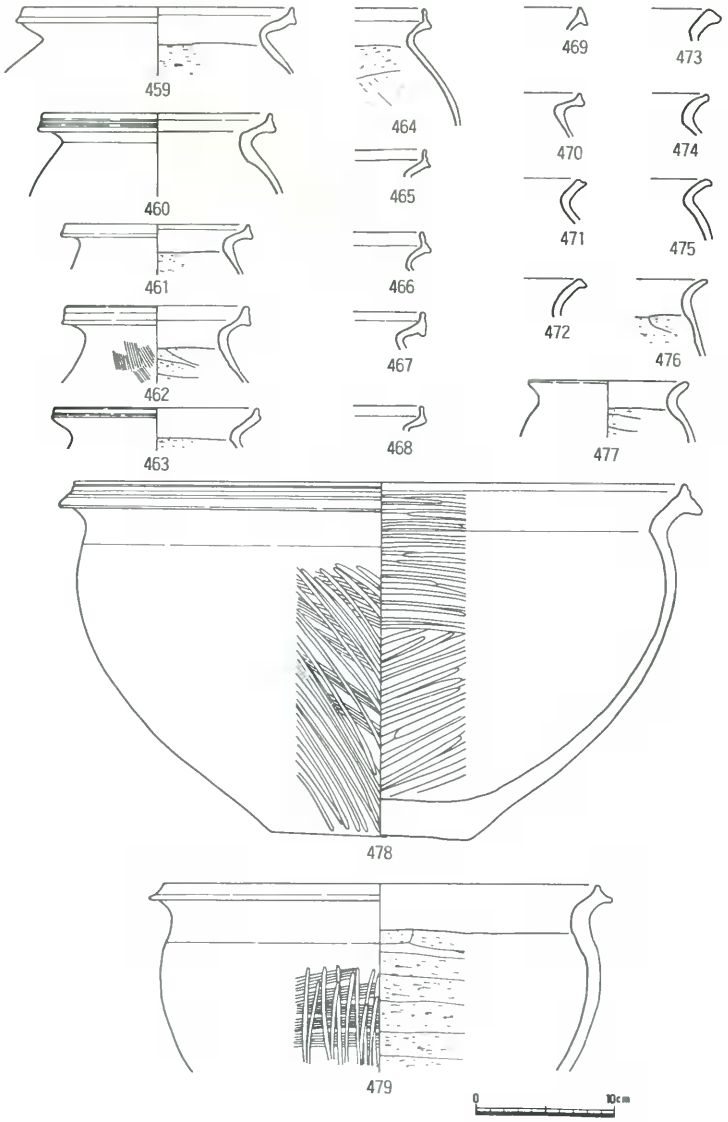
時期は，百・後・Ⅲの新相である。



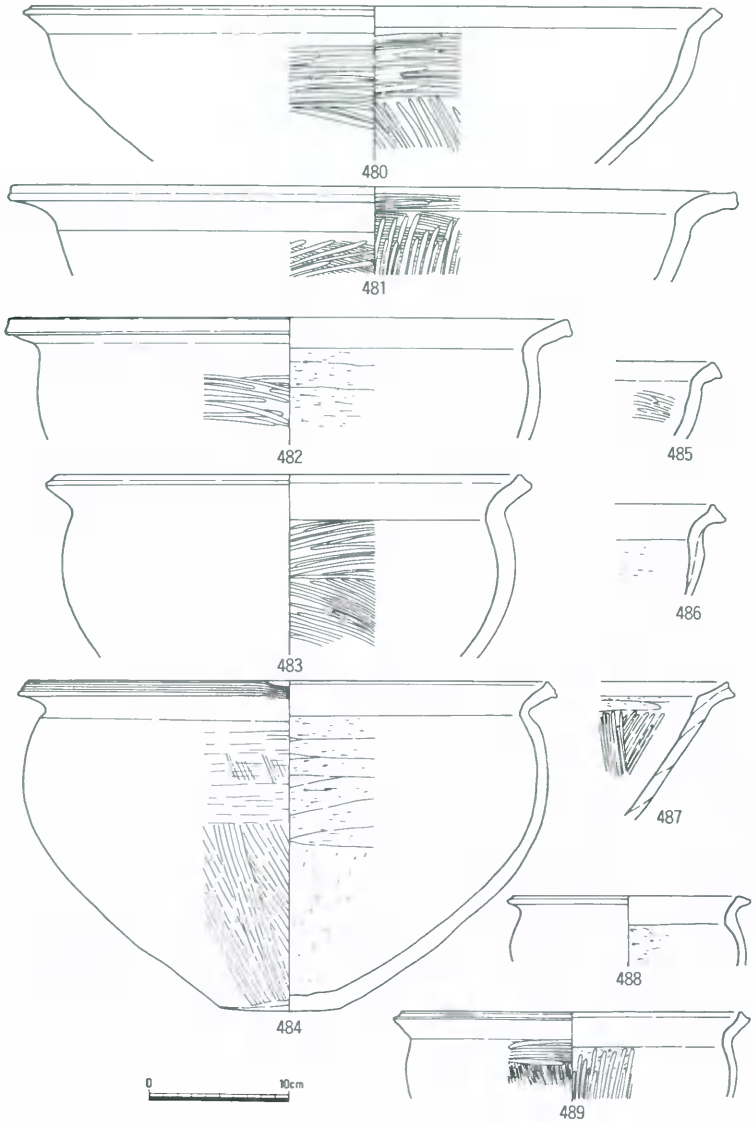
第46図　井　戸-1 出土遺物（1）



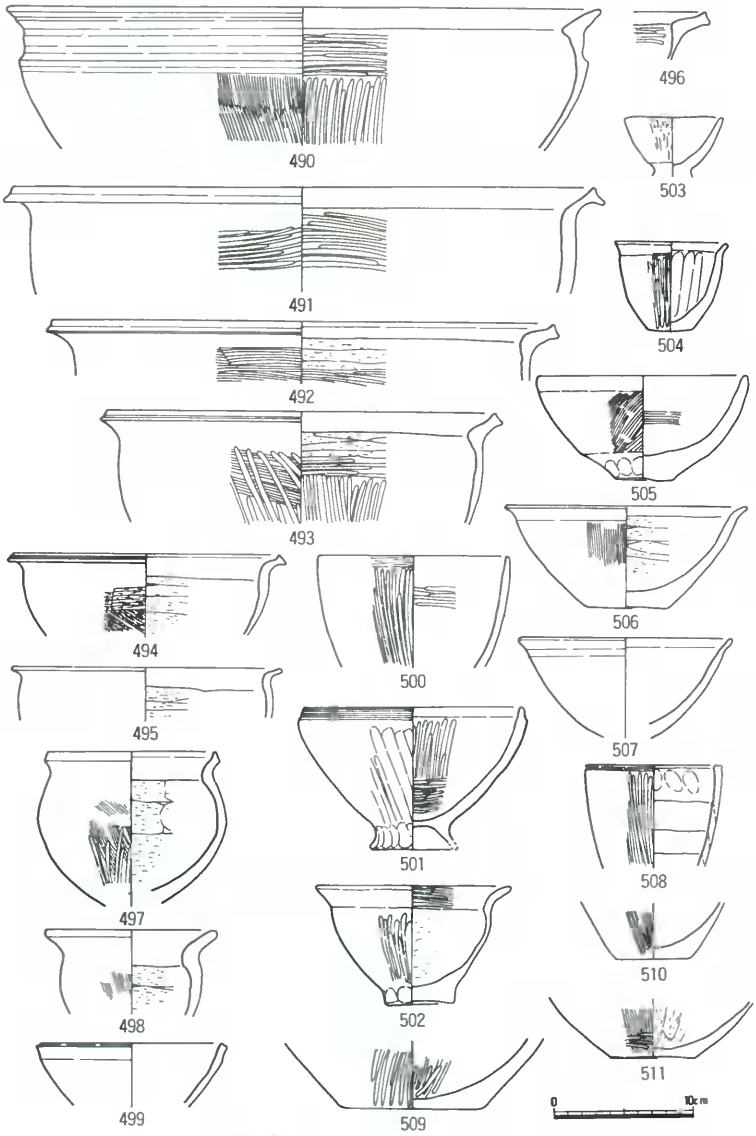
第47図　井　戸-1 出土遺物（２）



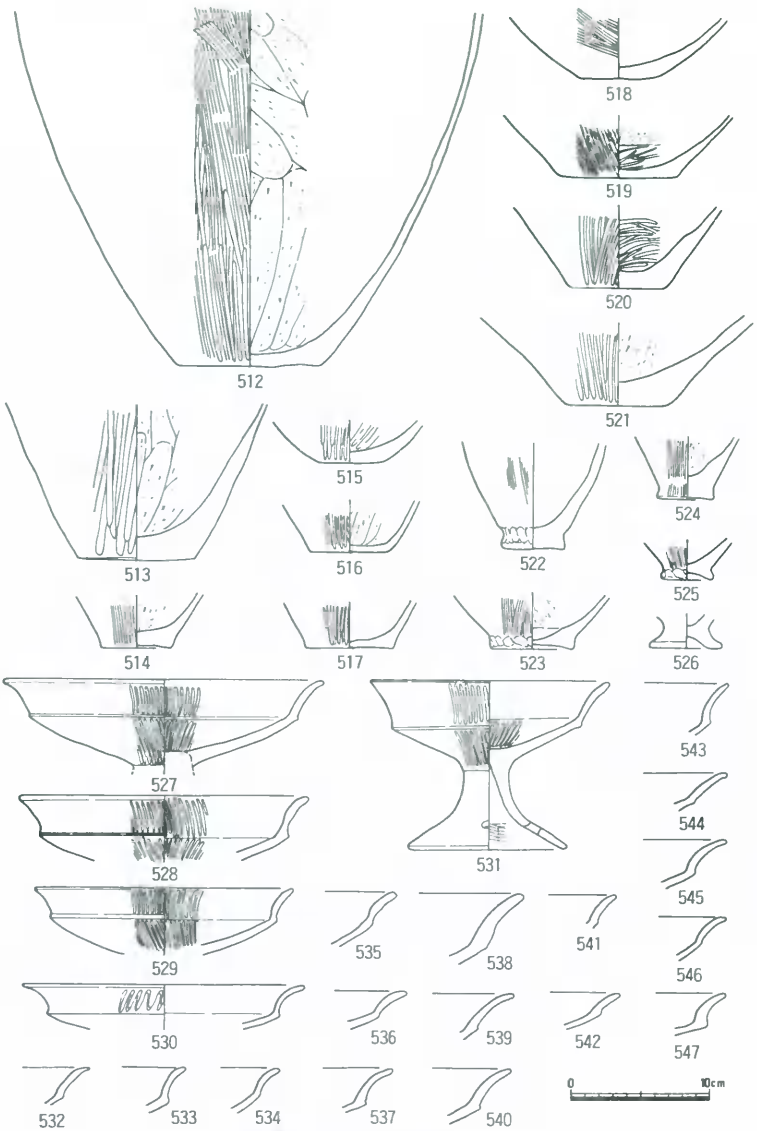
第48図　井　戸-1 出土遺物（３）



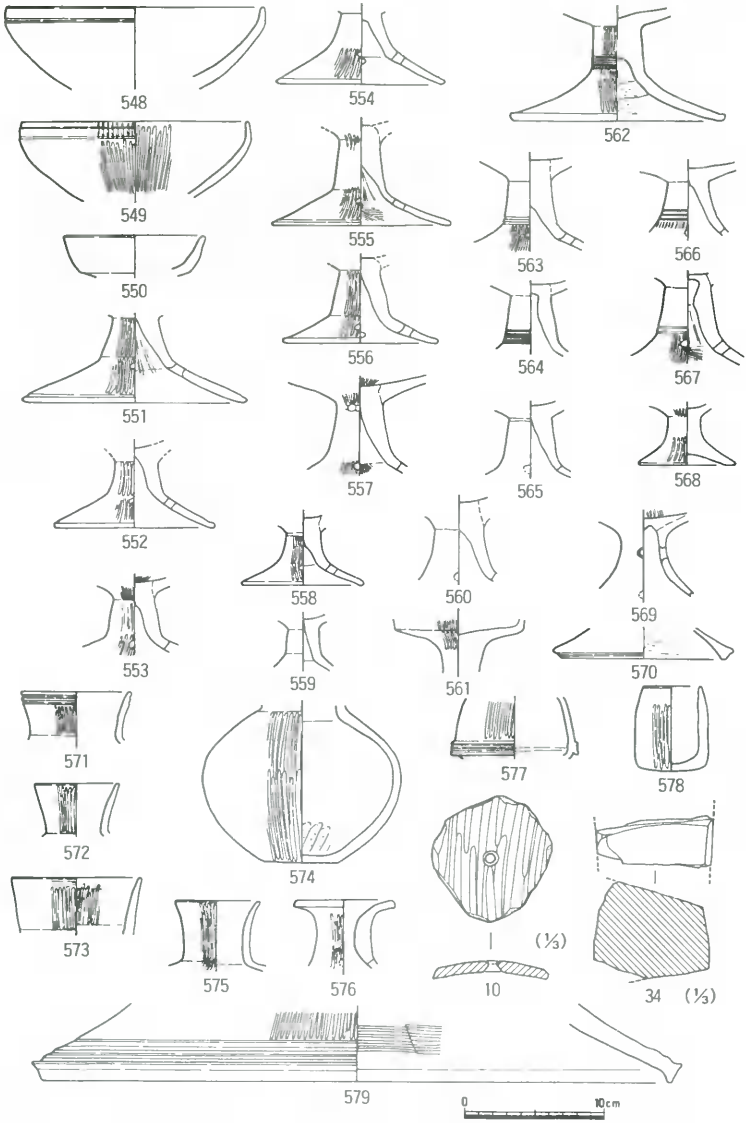
第49図　井　戸-1 出土遺物（4）



第50図　井　戸-1 出土遺物（5）



第51図　井　戸-1 出土遺物（6）



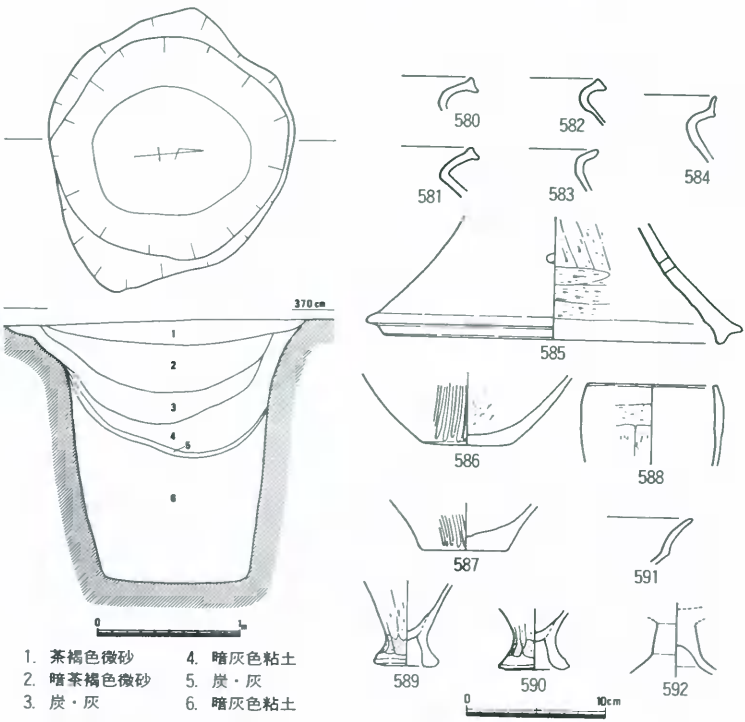
第52図　井　戸-1 出土遺物（7）

井　戸－2（第53図）

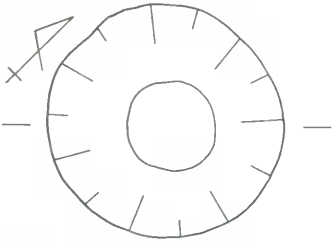
D-10とD-11にまたがる位置にある。現代まで使用されていた用水路の土手にかかっていたため，1979年度と1980年度に半分ずつ調査した。南東へ少し離れたところに井戸－3が位置し，竪穴式住居－16にも近い。肩部は少し崩れているので，崩壊していない肩部で測ると180×165cmで，深さは180cmである。上部には，炭化物などを含む層があり，3・5層は炭化物・灰の層である。底部はほぼ水平で，直径約100cmの大きさである。埋土中の遺物は少なく，土器の小破片が検出されただけである。

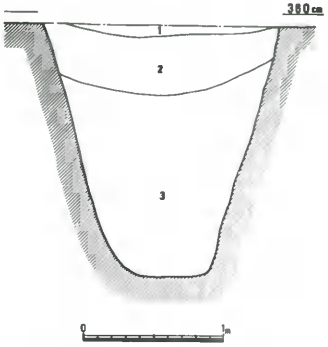
土器片には，甕580～584，器台585，台付鉢（製塩土器）588～590，高杯591・592がある。台付鉢は外面をヘラケズリしている。口縁部の一部も残存している。高杯の脚部は短く，胎土は精製粘土である。

時期は，百・後・Ⅲに属する。　（正岡）



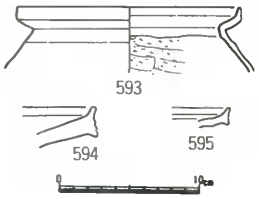
第53図　井　戸-2（1/40）・出土遺物





1. 茶灰褐色微砂（炭・焼土を含む）
2. 暗灰色粘土（炭・焼土・黄色砂ブロックを含む）
3. 暗灰色粘土と黄色砂ブロックが混在（炭・焼土を含む）

第54図　井　戸-3（1/40）・出土遺物



井　戸－3（第54図）

D-11の北部分において検出された井戸である。竪穴式住居－16の一部を切って掘られている。

平面形は，直径約120cmの円形を呈し，深さは，検出面より約175cmを測る。底のレベルは海抜約175cmである。

埋土は，三層認められ，いずれも炭・焼土粒を含んでいる。

出土遺物としては，土器およびサヌカイト片がある。土器は，ほとんどが小片であり，出土した量も多くはない。

時期は，土器が小片であるためはっきりしないが，竪穴式住居－16との切り合い関係などから，ほぼ百・後・Ⅲと考えられる。

井　戸－4（第55図）

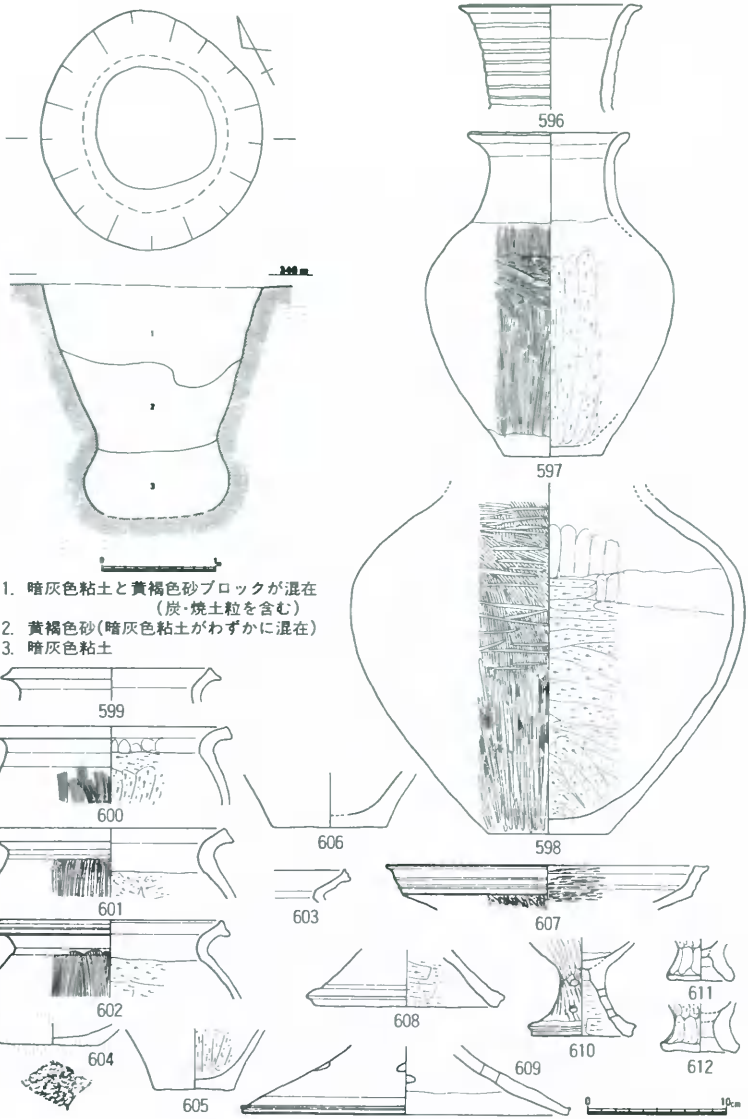
D-11の北東の端部において検出された井戸である。竪穴式住居－16によって一部が切られている。

平面形は，直径200cm前後のほぼ円形を呈する。深さは，湧水によって底がはっきりと確認できなかったため，推定ではあるが，検出面からほぼ200cm前後であろうと思われる。底のレベルは推定で海抜約125cmとなる。

埋土は三層認められ，2層と3層とで大きく区分できる。

図示した土器のうち，596・600・603・604・607～609・612は1層から，597・598・601・605・611は3層から出土している。597は完形品である。

時期は，百・後・Ⅰ～Ⅱであると考えられる。　（平井）



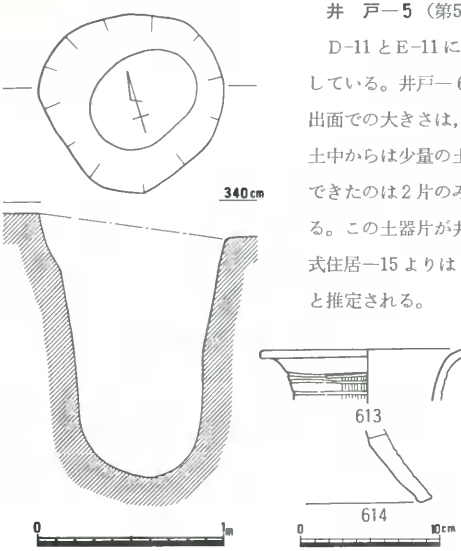
第55図　井　戸-4（1/50）・出土遺物

井　戸－5（第56図）

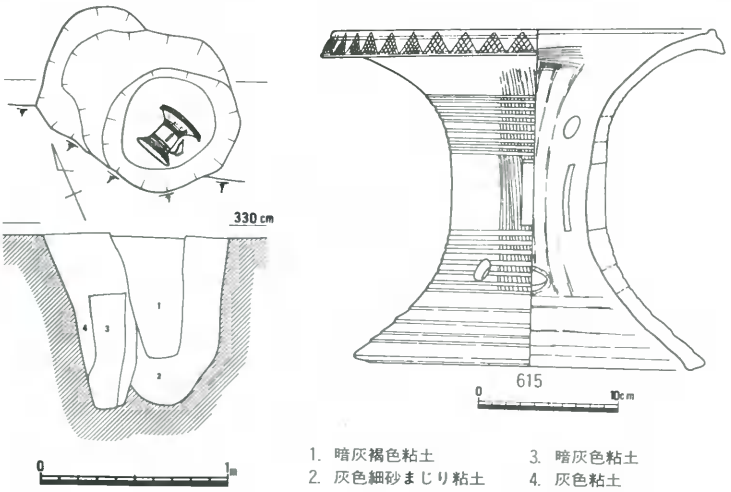
D-11とE-11にまたがり，竪穴式住居－15と重複している。井戸－6とは120cmしか離れていない。検出面での大きさは，98×94cm，深さ140cmを測る。埋土中からは少量の土器片を検出したにすぎない。図化できたのは2片のみで，壺613と器台の脚部614がある。この土器片が井戸の年代を示すとした場合，竪穴式住居－15よりは古く，時期は，百・後・Ⅱの古相と推定される。

井　戸－6（第57図）

E-11に位置し，竪穴式住居－15と重複している。西側は中世河道で削られている。底面では，器台615の完形品の他，少量の土器片が出土した。時期は，百・後・Ⅲに属する。（正岡）

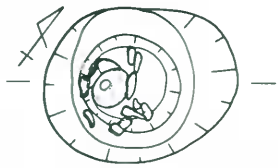


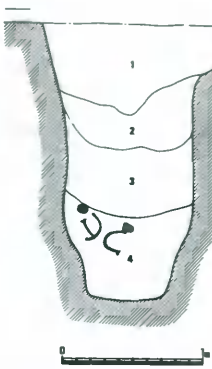
第56図　井　戸-5（1/30）・出土遺物



1. 暗灰褐色粘土
2. 灰色細砂まじり粘土
3. 暗灰色粘土
4. 灰色粘土

第57図　井　戸-6（1/30）・出土遺物





1. 土壙－66
2. 暗灰色粘土と黄褐色砂のブロックが混在（炭・焼土粒を含む）
3. 黄褐色砂（炭・焼土粒を含む）
4. 暗灰色粘土（炭・焼土粒・礫を含む）

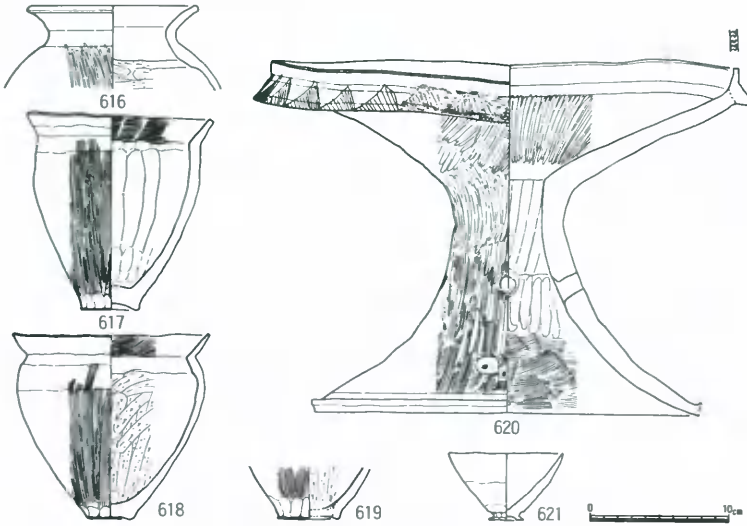
井　戸－7（第58図）

D-11の東南部，土壙－67の北側に接して検出された井戸である。この井戸の埋没後，重複するかたちで土壙－66が掘られているため平面形は不明瞭ではあるが，直径110cm前後の円形を呈するものと思われる。深さは，土壙－66の検出面から約200cmを測り，底のレベルは海抜約135cmである。

埋土は三層以上あるものと思われ，最下層にはほぼ完形の土器とともに10～20cm大の河原石が検出された。

図示した土器のうち616～618・620は4層から，619・621は2・3層から出土したものである。617・618・620はほぼ完形に近い形で出土した。

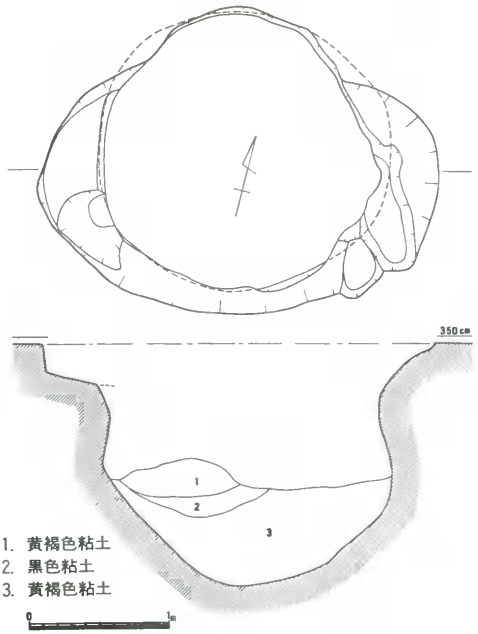
時期は百・後・Ⅱであろう。　（平井）

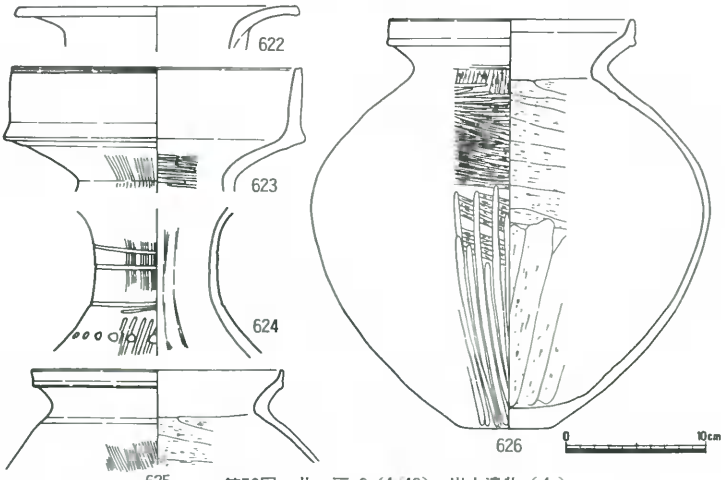


第58図　井　戸-7（1/40）・出土遺物

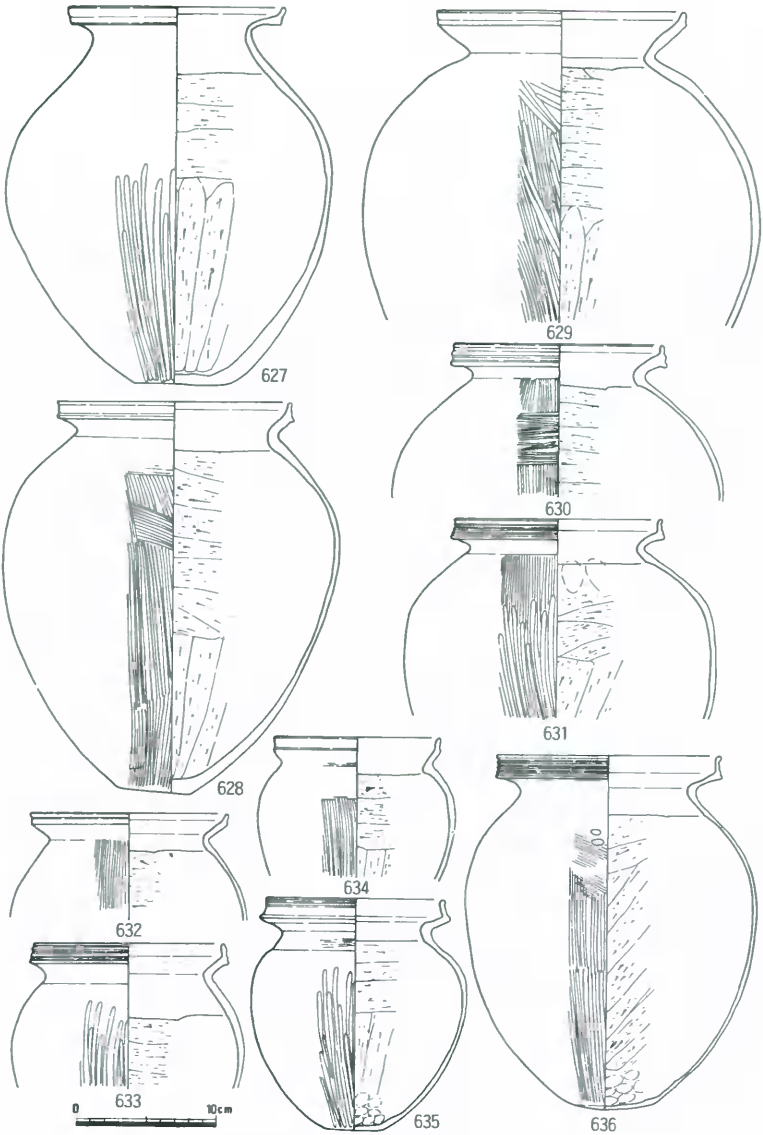
井　戸－8（第59～61図）

D-11の北東寄りに位置し，西方150cmに井戸－7がある。上部は近代ののつぼなどで攪乱されている。全体的に，壁が崩れたため大きくなっている。ことに中間部分は砂質のため，えぐり込むようにくずれ，袋状を呈する。平面形は円形である。狭くなった部分の大きさは，193×190cmで，深さは170cmを測る。埋土中から出土した遺物は土器だけである。土器には，壺622～624，甕625～639，鉢641～648，高杯649～651がある。

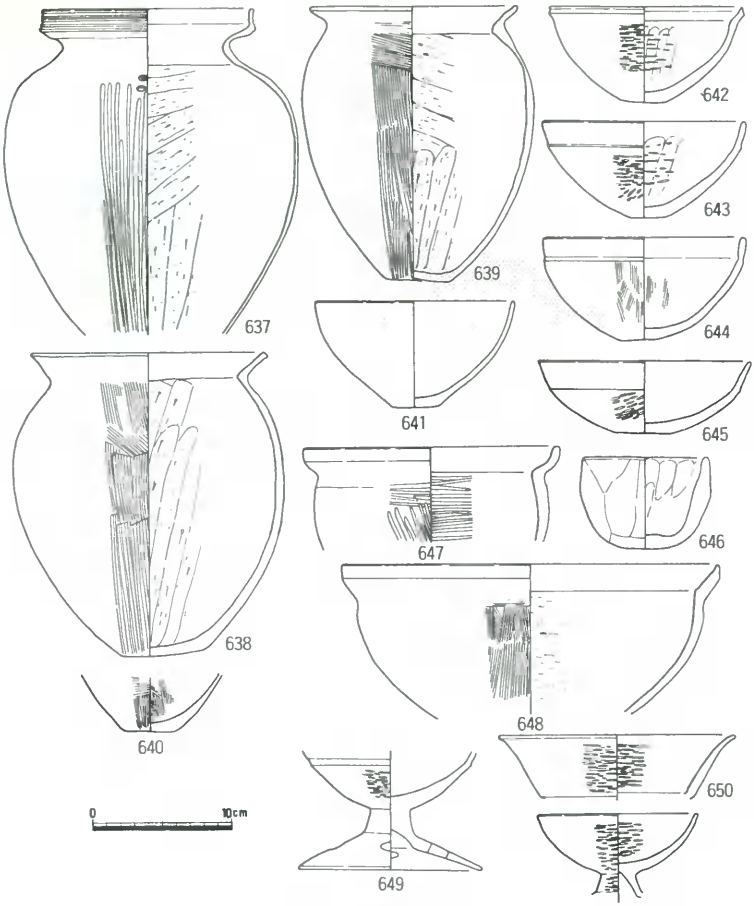




第59図　井　戸-8（1/40）・出土遺物（1）



第60図　井　戸-8 出土遺物（2）



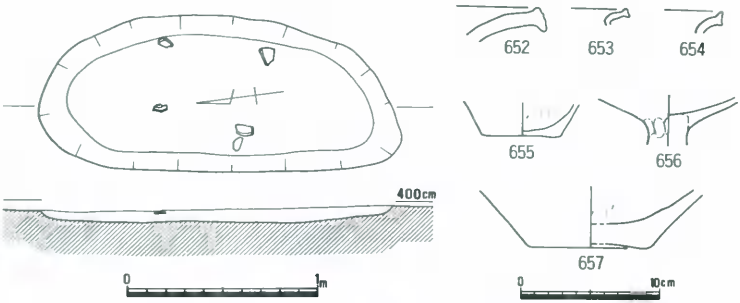
第61図　井　戸-8 出土遺物（3）

長頸壺の頸部には，無雑作にかかれた沈線をめぐらすものがある。625と627は頸部が著しくしぼってあり，他の甕とはやや異なっている。甕には器壁が薄く，口縁部を上方へ拡張し，外面に擬凹線文を施すものがある。この種のものは小さな平底で，底部付近の内面は指頭圧痕が残る。口縁部を「く」の字状に曲ただけのものもある。ほとんどの甕には，外面に煤が付着している。鉢には大型のものと小型のものがある。高杯は短脚で，杯部は深い。時期は百・後・Ⅲの新相に属する。　（正岡）

（3） 土　　壙

土　壙－4（第62図）

D-7に位置し，平面形は長楕円形を呈する。大きさは，190×83cm，深さ8cmである。埋土は灰色粘土で，少量の土器片が含まれている。土器には，壺652，甕653・654，高杯656・台付鉢（製塩土器）がある。時期は，百・後・Ⅲに属する。



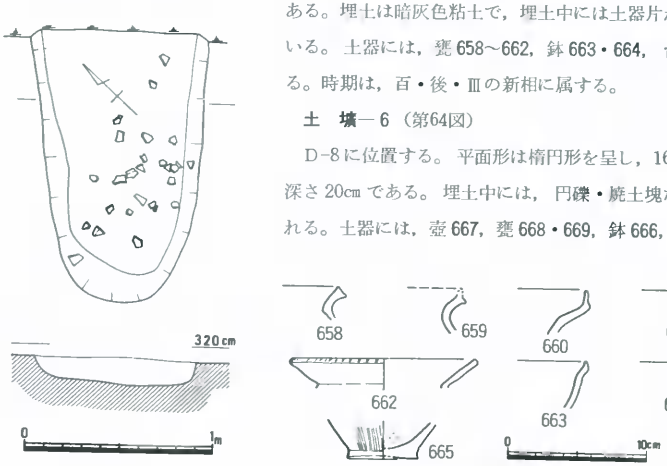
第62図　土　壙-4（1/30）・出土遺物

土　壙－5（第63図）

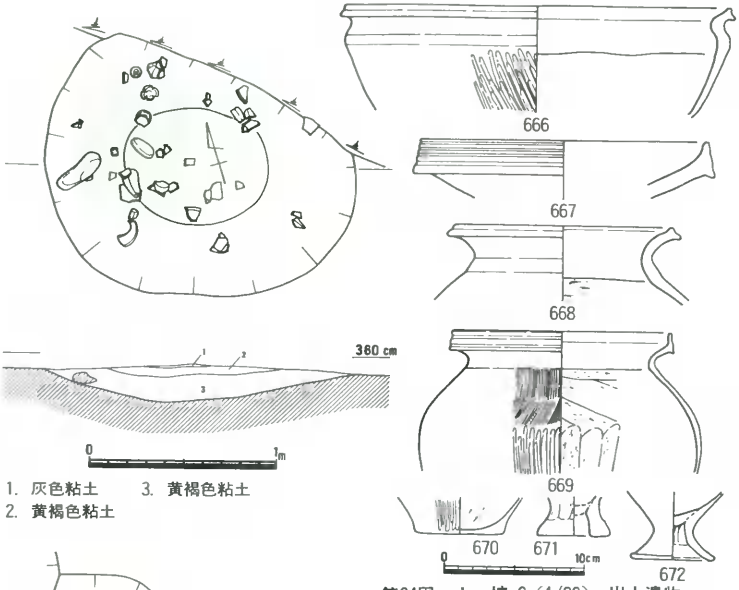
D-7に位置し，平面形は長楕円形を呈する。大きさは現存長144cm，幅90cm，深さ14cmである。埋土は暗灰色粘土で，埋土中には土器片が含まれている。土器には，甕658～662，鉢663・664，台付鉢がある。時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙－6（第64図）

D-8に位置する。平面形は楕円形を呈し，165×150cm，深さ20cmである。埋土中には，円礫・廃土塊なども含まれる。土器には，壺667，甕668・669，鉢666，高杯672，



第63図　土　壙-5（1/30）・出土遺物

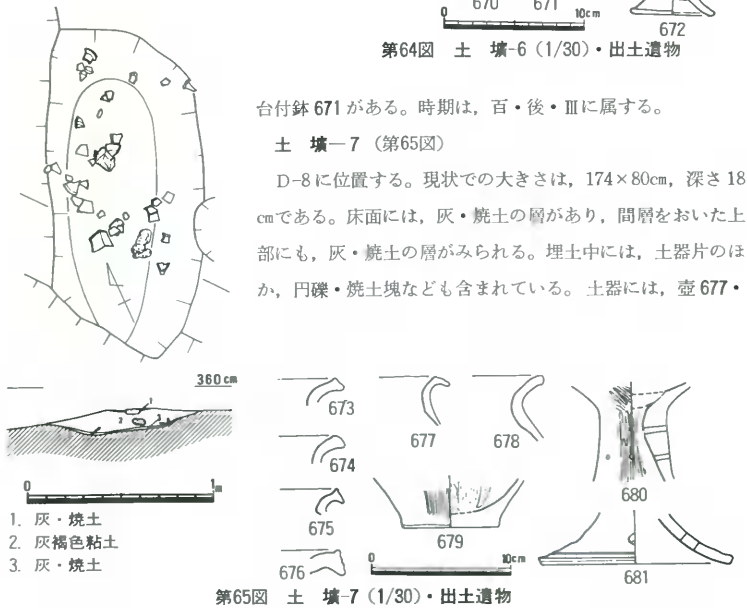


第64図　土　壙-6（1/30）・出土遺物

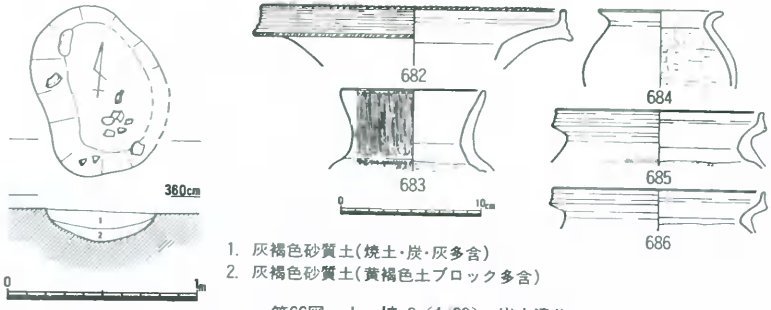
台付鉢 671 がある。時期は，百・後・Ⅲに属する。

土　壙－7（第65図）

D-8に位置する。現状での大きさは，174×80cm，深さ18cmである。床面には，灰・廃土の層があり，間層をおいた上部にも，灰・廃土の層がみられる。埋土中には，土器片のほか，円礫・焼土塊なども含まれている。土器には，壺 677・



第65図　土　壙-7（1/30）・出土遺物



1. 灰褐色砂質土(焼土・炭・灰多含)
2. 灰褐色砂質土(黄褐色土ブロック多含)

第66図　土　壙-8（1/30）・出土遺物

678，甕673～676，高杯680・681がある。時期は，百・後・Ⅲに属する。　（正岡）

土　壙－8（第66図）

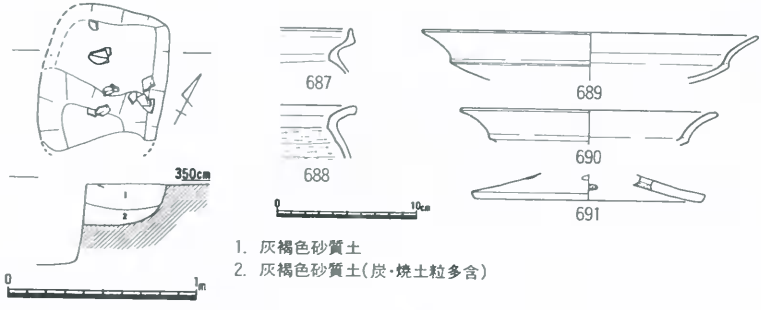
D-8の中央部に位置し，長径90cm・短径65cmを測る不整楕円形を呈している。断面形は舟底形で，深さ18cmを測る。

遺物は主として1層から出土しており，壺682・683，甕684～686，製塩土器がある。これらにより，時期は百・後・Ⅲに比定できる。

土　壙－9（第67図）

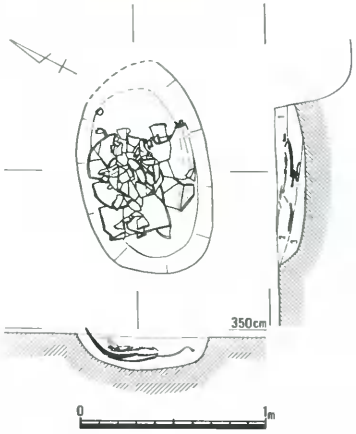
D-8の中央部にあり，竪穴式住居－1の床面下で検出された。平面長方形で，現存長80cm・幅65cmを測り，底面は二段になっているが下段で深さ30cmを測る。

遺物は，甕687・688，高杯689～691があり，いずれも1層からの出土である。時期は，百・後・Ⅲに比定できる。

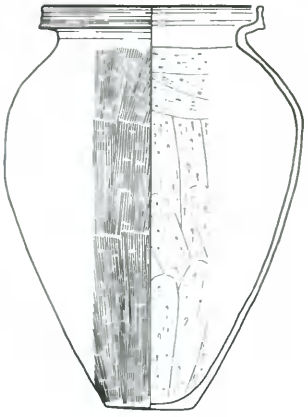


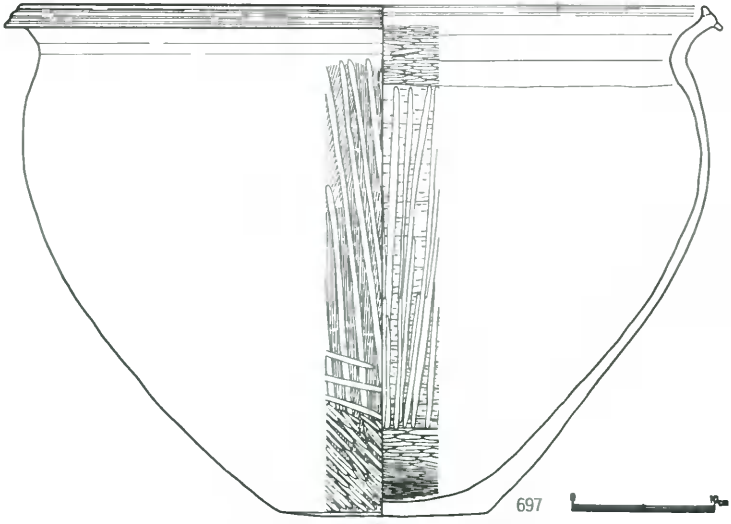
1. 灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土(炭・焼土粒多含)

第67図　土　壙-9（1/30）・出土遺物



1. 灰褐色砂質土
2. 灰褐色土(炭・焼土多含)
3. 灰褐色土(焼土・黄褐灰色土粒含)





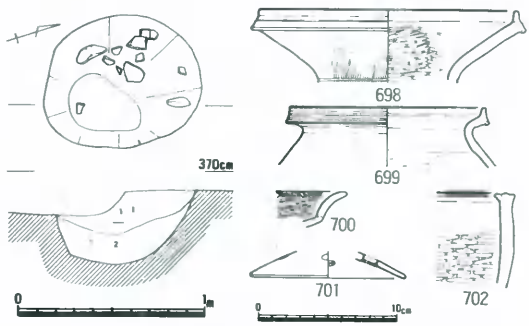
第68図　土　壙-10 (1/30)・出土遺物

土　壙—10（第68図）

D-8の中央部に位置し，竪穴式住居—1の床面下で検出された。平面形は長楕円形を呈し，現存長径110cm，短径70cmを測る。断面形は舟底形で深さ15cmが残る。

遺物は，壺693，甕692，鉢694・697，高杯695・696がある。このうち，鉢697は2層から，甕692は1層下面からそれぞれ一括出土しており，間層を挟んでいるが，現位置で壊れたものと考えられる。両者とも，使用による煤の付着が顕著であり，壙底に埋置されたとするよりも，2・3層中の炭・灰・焼土等とともに一括して廃棄されたものとみなされる。

時期は百・後・Ⅲに比定できるが，土壙—9との先後関係については，両者の重複する部分が竪穴式住居—1のP-3により掘削を受けているため，不明である。



1. 黄灰褐色砂質土(炭・焼土粒含)　2. 黄灰褐色土ブロック

第69図　土　壙-11（1/30）・出土遺物

土　壙—11（第69図）

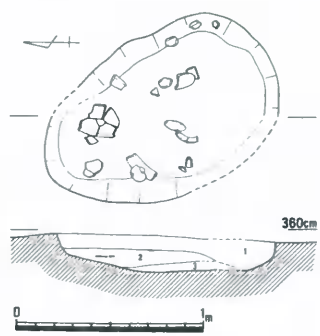
D-8の北東部に位置し，竪穴式住居—2の壁体溝を切っている。平面形は不整楕円形を呈し，長径85cm・短径70cm・深さ40cmを測る。

遺物は，壺698，甕699，高杯700・701，鉢702があり，これらの遺物の示す時期は，百・後・Ⅲの枠内にとらえられる。

土　壙—12（第70・71図）

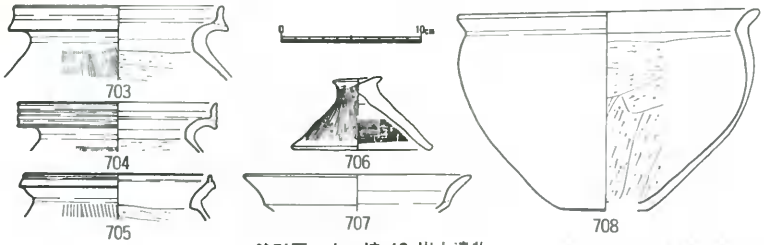
D-8の北東部にあり，溝—15を切っている。平面形は不整楕円形を呈し，長径130cm・短径85cmを測る。深さは20cmであるが，埋土中に炭・焼土を多く含み，2層の下面および底面には炭化物が薄く堆積している。

遺物は2・3層から出土しており，甕703～705・蓋706・高杯707・鉢708がある。これらにより，時期は百・後・Ⅲに求められる。



1. 淡灰褐色砂質土(炭・焼土粒多含)
2. 灰褐色土(炭・焼土各細片含)
3. 灰褐色土(炭・焼土粒含)

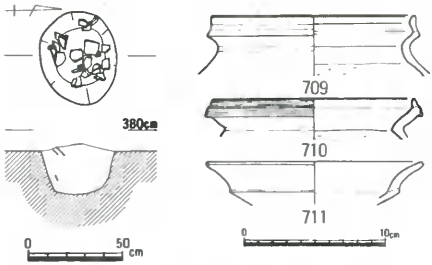
第70図　土　壙-12（1/30）



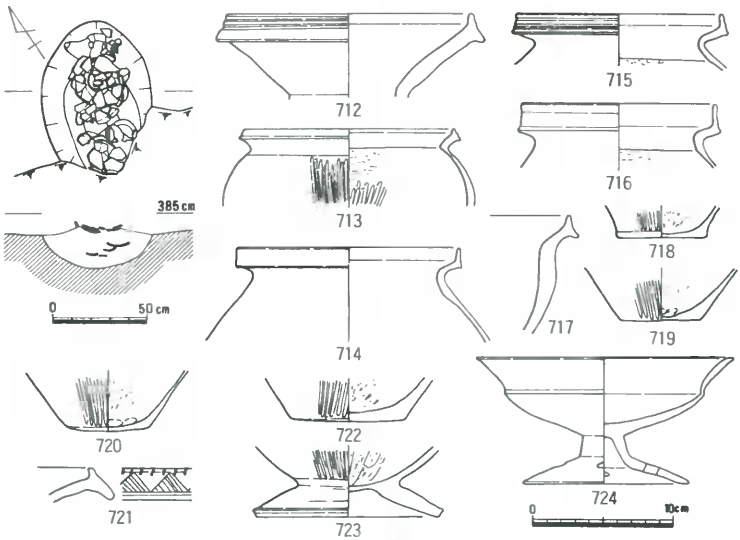
第71図　土　壙−12 出土遺物

土　壙−13（第72図）

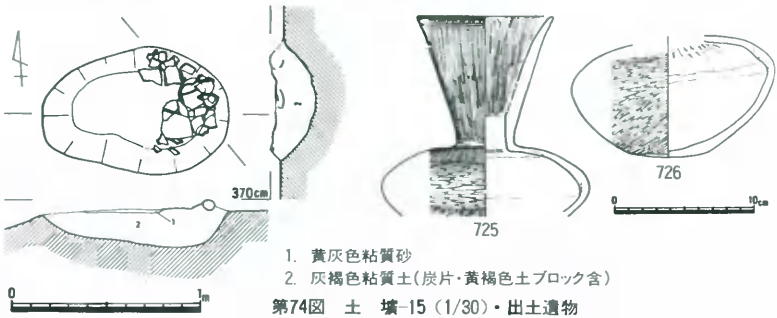
D−8 の北東部にあり，平面形は楕円形で，長径50cm・短径40cm・深さ25cm を測る。甕 709・710，高杯 711 の遺物から，時期は百・後・Ⅲに求められる。　（光永）



第72図　土　壙−13（1/30）・出土遺物



第73図　土　壙−14（1/30）・出土遺物



1. 黄灰色粘質砂
2. 灰褐色粘質土(炭片・黄褐色土ブロック含)

第74図　土　壙−15（1/30）・出土遺物

土　壙−14（第73図）

D−8に位置する。南側は溝−25に切られている。平面形は楕円形を呈する。大きさは，現存長80cm・幅58cm・深さ20cmである。埋土は茶褐色粘土で，炭を含んでいる。埋土中からは，土器片・円礫を出土した。土器には，壺712，甕714〜716，鉢713・717，高杯724，器台721がある。

全体に土器の色調は黄橙色を呈し，一部に赤橙色のものがある。胎土には，細砂を含んでいるが，高杯は微砂を含むだけである。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。　（正岡）

土　壙−15（第74図）

D−8とD−9の境界線上の南半にあり，竪穴式住居−3を切っている。

遺物としては，直口壺725・726，甕があり，時期は百・後・Ⅲに比定しうる。

土　壙−16（第75図）

D−9の南西部にあり，竪穴式住居−5内に位置するが，これには伴わない。平面形は不整楕円形を呈し，長径70cm・短径60cm・深さ15cmを測る。

遺物は壙底からは浮いた状態の出土であるが，甕727・728，高杯730等がある。これらから時期は百・後・Ⅲに求められる。　（光永）

第75図　土壙−16（1/30）・出土遺物

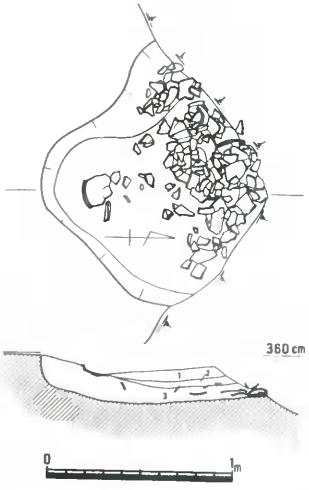
土　壙－17（第76図）

D-9に位置する。北側は溝－27によって切られている。平面形は不整形で，現状の大きさは，140×120cm，深さ25cmである。床面は緩やかに湾曲している。埋土には，炭・焼土を含んでいる。埋土中からは土器を出土した。

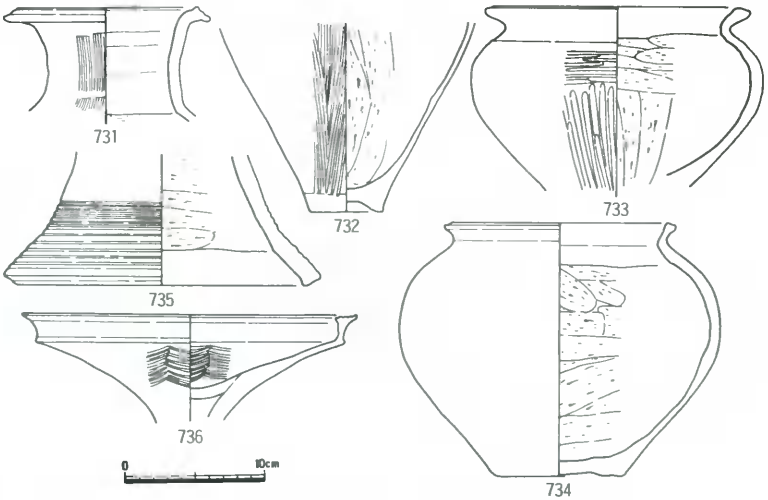
土器には，壺731，鉢733・734，高杯736，器台735がある。壺は頸部がほぼ筒状を呈し，口縁部は短く外反する。頸部直下から内面を削っている。鉢は口縁部を「く」の字状に折り曲げ，端部は肥厚する。肩が少し張っている。内面は頸部直下までヘラケズリを施している。高杯は杯部のみであるが，皿部から口縁部が直立し，端部は肥厚する。端部上面には凹線文を配している。

時期は，百・後・Ⅰの新相に属する。

（正岡）



1. 淡黄灰褐色砂質土
2. 炭・焼土
3. 灰褐色砂質土



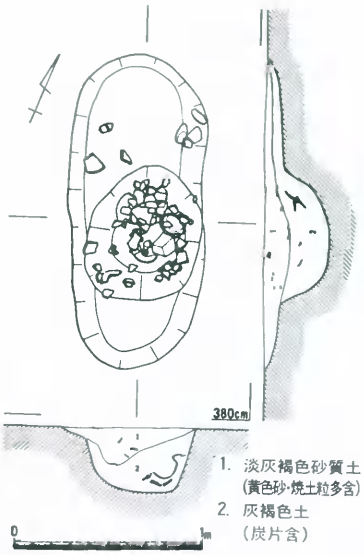
第76図　土　壙-17（1/30）・出土遺物

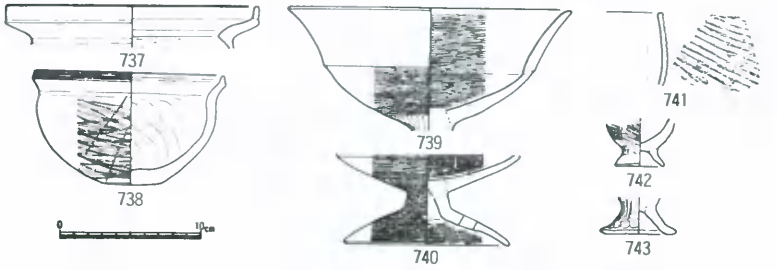
土　壙－18（第77図）

D-9の中央部西方に位置し，南西部分および北西部分で，それぞれ弥生時代後期の遺物を出土する柱穴状遺構を切っている。平面形は長楕円形を呈し，長径170cm・短径70cmを測る。断面についてみれば，底面は二段になっており，中央部分で大きく落ち込んでいる。深さは，上段で10cm，下段で35cmを測る。堆積土は大きく二層に分層でき，遺物のうちの大型片は2層からの出土である。

出土遺物としては，甕737，鉢738，高杯739・740，製塩土器741～743の他にサヌカイトフレイク等がある。このうち，鉢738，高杯739・740はいずれも精製粘土を用い，ヘラミガキによる仕上げ調整を施した丁寧なつくりであるが，鉢の体部内面，高杯の杯部内面等には成形段階の調整を残したままの部分もみられる。製塩土器のうち，741と742は同一個体の可能性が大きく，復元推定器高は，10cm前後になるものと考えられる。体部外面の斜方向の平行タタキは注目されるものである。

これらの遺物によって示される時期は，百・後・Ⅳに求められる。





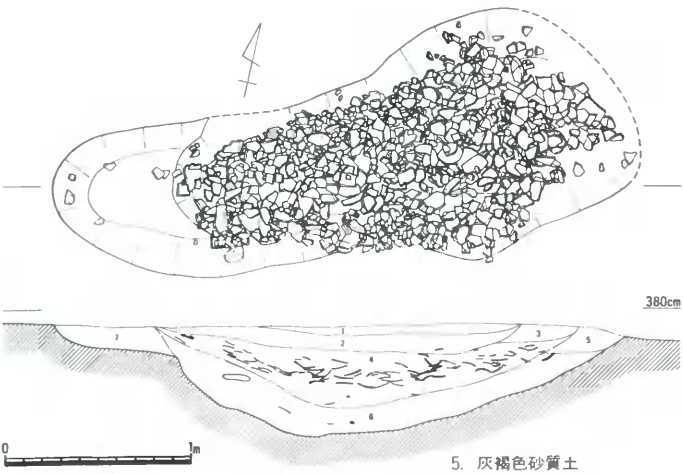
第77図　土　壙-18（1/30）・出土遺物

土　壙－19（第78～80図）

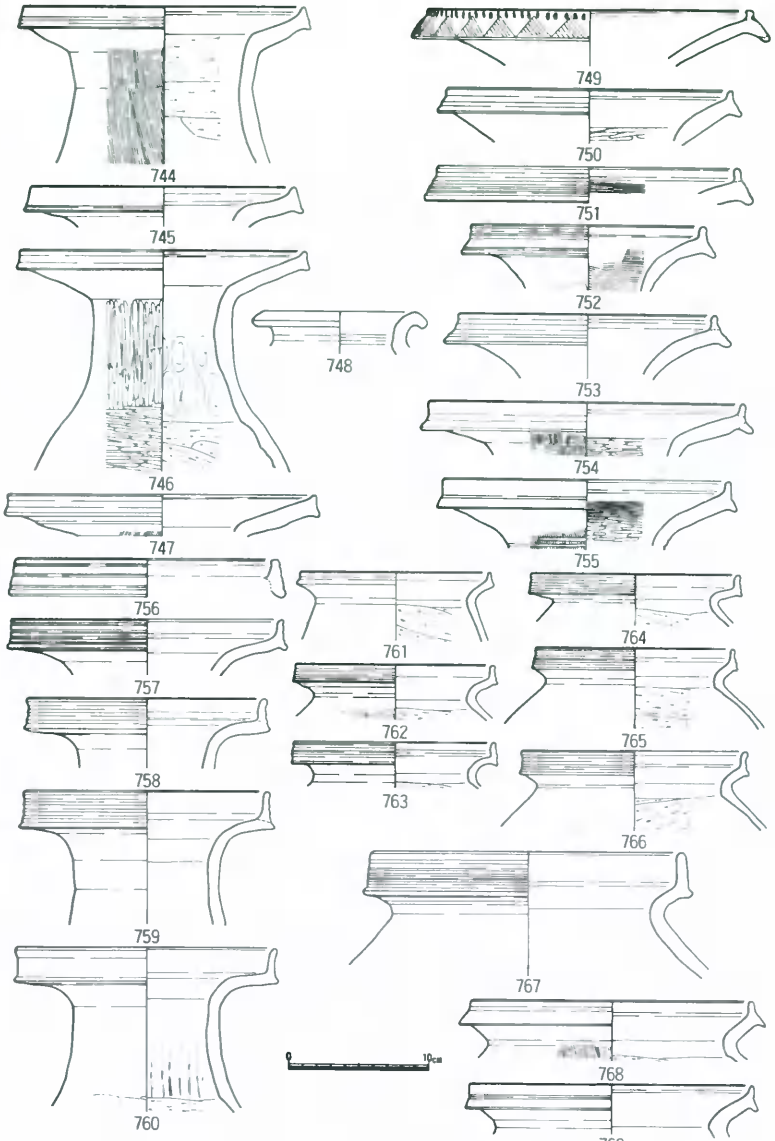
D-9の中央部西方に位置する。東端部は竪穴式住居－24に切られ，西端部は竪穴式住居－4を切っている。その他にも弥生時代後期の遺物を出土する土壙・柱穴を切っている。

平面形は不整楕円形を呈しており，現存最大長310cm・幅125cmを測る。断面をみれば西端部は一段浅く，堆積状況からみると，別遺構との重複の可能性も残している。深さは最大55cmを測る。堆積土のうち2・4層に炭片・焼土等の混入が多くみられる。また，出土遺物の大半は4層からの出土であるが，いずれも小破片となって一括廃棄された状態を示している。3層以下の堆積状況もこれを指示している。

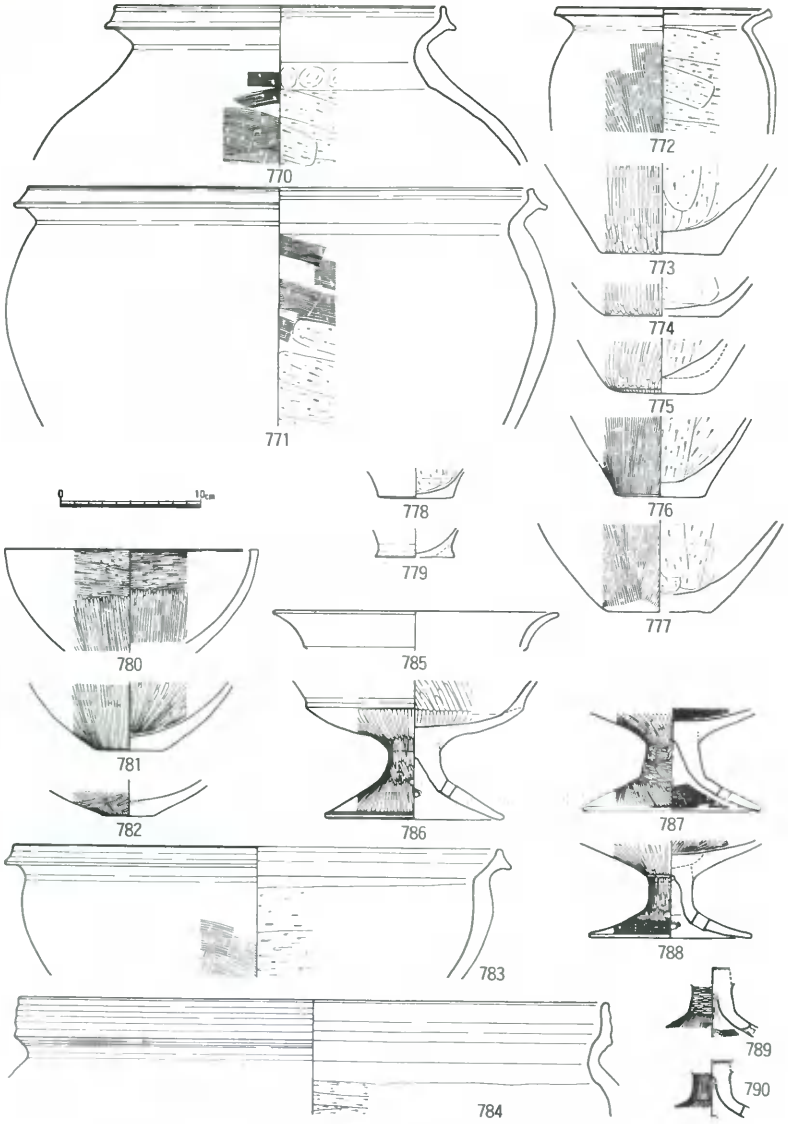
遺物としては，壺744～760・770，甕761～769・772～779，鉢771・780～784，高杯785～790の他にサヌカイトフレイクがある。長頸壺のうち，頸部に凹線の認められるものは755のみであり，744では頸部内面上端までヘラ削りを施している。口縁端部では，757～760においてほぼ直立し，外面に凹線を施すものがみられる。また，高杯はいずれも短脚である。これらの遺物の示す特徴は，年代的には多少の幅をもっているが，百・後・Ⅲに比定しうるものである。（光永）



第78図　土　壙－19（1/30）



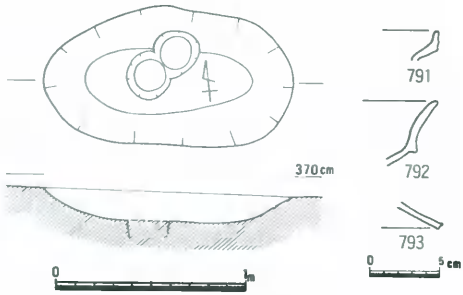
第79図　土　壙-19 出土遺物（1）



第80図　土　壙-19 出土遺物（2）

土　壙—20（第81図）

D-9に位置し，竪穴式住居—6の上にある。平面形は楕円形を呈し，170×75cm，深さ17cmの大きさである。中央部分には，中世の柱穴が2個掘り込まれている。埋土は灰褐色粘土で，焼土・炭・灰を含んでいる。土器片は少量含まれているにすぎない。



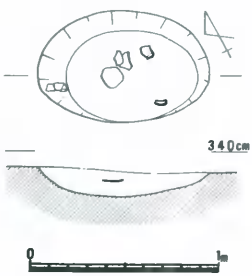
第81図　土　壙—20（1/30）・出土遺物

土器には，壺792，甕791，高杯793がある。壺は大きく外反するもので，接合部は下方に張り出しがみられる。甕は口縁部を上方に拡張する。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。（正岡）

土　壙—21（第82図）

E-9の北西部において検出された土壙で，竪穴式住居—7を切っている。



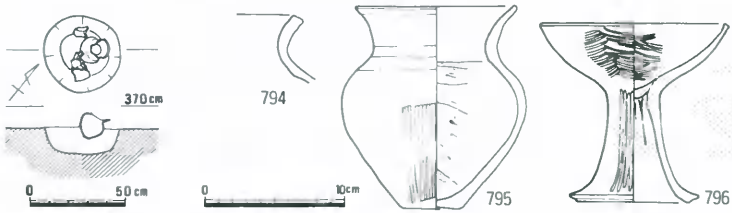
第82図　土　壙—21（1/30）

平面形は約60×90cmの楕円形を呈し，深さは検出面より最大で約15cmを測る。断面形は皿状を呈し，埋土は炭粒・焼土粒・砂粒を含む茶灰褐色微砂が一層のみである。

埋土中からは土器片が少量出土しているが，図示できるものはなかった。これらの土器片および竪穴式住居—7を切っていることから，時期はほぼ百・後・Ⅳ～百・古・Ⅰであると考えておきたい。（平井）

土　壙—22（第83図）

D-9に位置し，竪穴式住居—7の東側にある。平面形は



第83図　土　壙—22（1/30）・出土遺物

円形を呈し，直径40cm，深さ10cmの大きさである。埋土中からは，ほぼ完形の壺795と高杯片796が出土した。埋土は灰褐色粘土である。土壙の形状，大きさからして，柱穴と推定されるもので，柱の抜き取り穴に棄てられた土器と推定される。

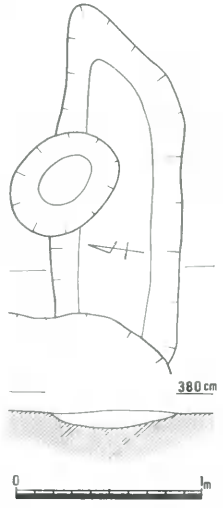
壺は，口縁部が緩やかに外反し，端部は肥厚しない。色調は浅黄橙色を呈し，胎土には細砂を含んでいる。時期は，百・後・Ⅱに属する。

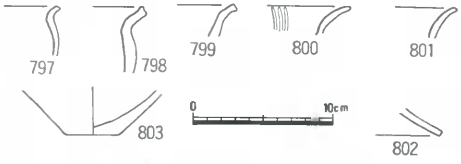
土　壙—23（第84図）

D-9に位置し，土壙—24の上にある。竪穴式住居—8の東側に接している。平面形は，先端が横にずれた舟形を呈している。現状の大きさは，190×70cm，深さ10cmである。北側は柱穴と重なっている。埋土は灰褐色粘土で，炭・焼土を含んでいる。土器は少量含まれているにすぎない。

土器には，甕797，鉢798・799，高杯800～802，台付鉢（製塩土器）がある。

時期は，百・後・Ⅲに属する。　（正岡）





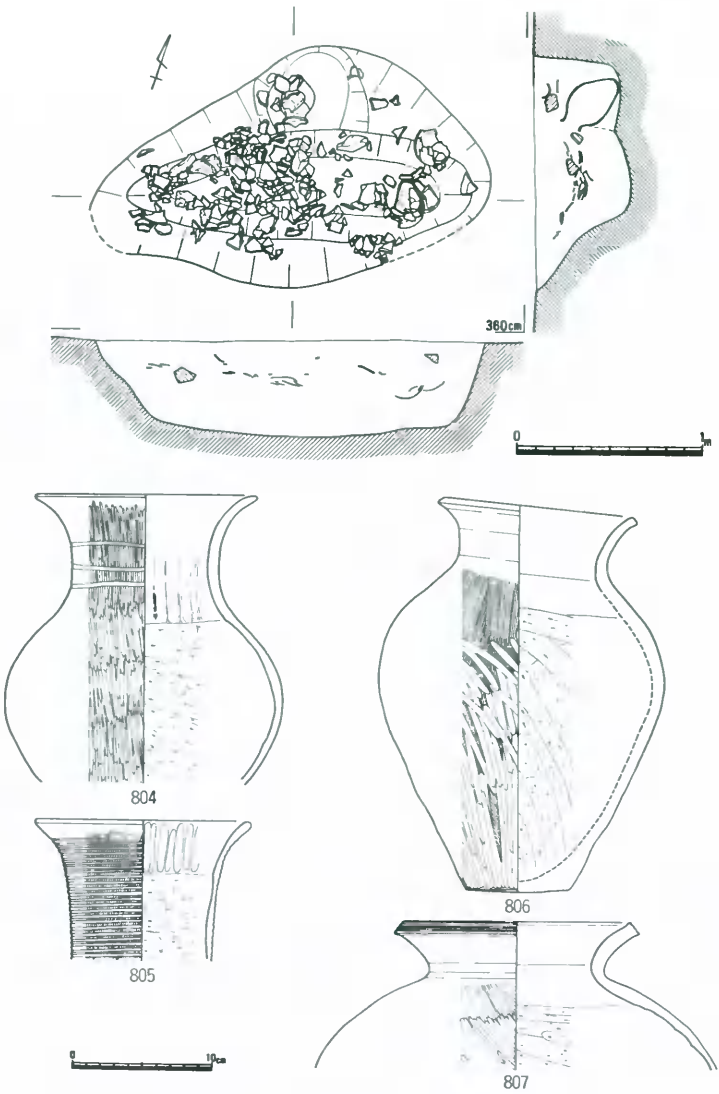
第84図　土　壙—23（1/30）・出土遺物

土　壙—24（第85・86図）

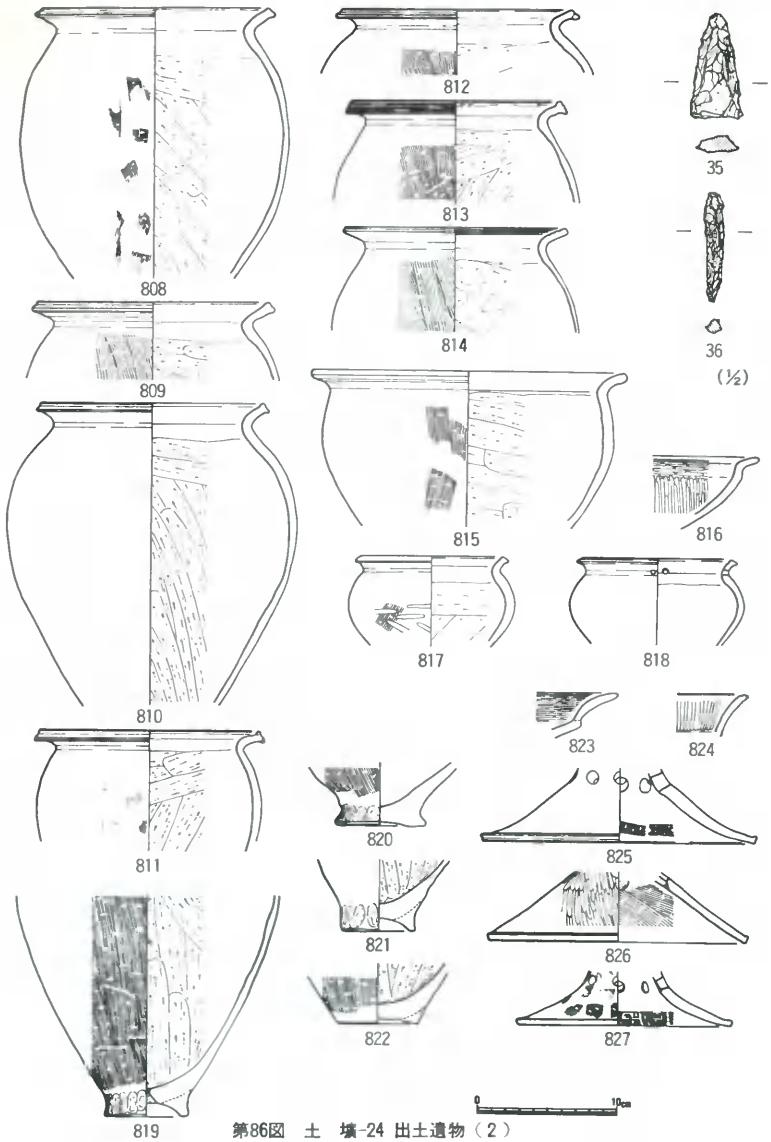
D-9の南東部やや北寄りに位置する。平面形は不整楕円形を呈しており，長径210cm・短径125cm・深さ50cmを測る。平面形態および南北断面によれば，二つの遺構が重複している可能性を残すが，完形遺物の出土状態は一つの遺構であると考えさせている。

埋土は暗灰褐色砂質土が主体であり，炭・焼土等を含み，下層には黄褐色土ブロックを多く含む。北のくぼんだ部分を除いて，遺物は上層に集中している。

出土遺物には，壺804～807，甕808～814・819・821・822，鉢815～818・820，高杯823～827，石錘35，石錐36等がある。これらによれば，時期は百・後・Ⅱ～Ⅲの枠でとらえられる。



第85図　土　壙-24（1/30）・出土遺物（1）



第86図　土　壙-24 出土遺物（２）

土　壙－25（第87図）

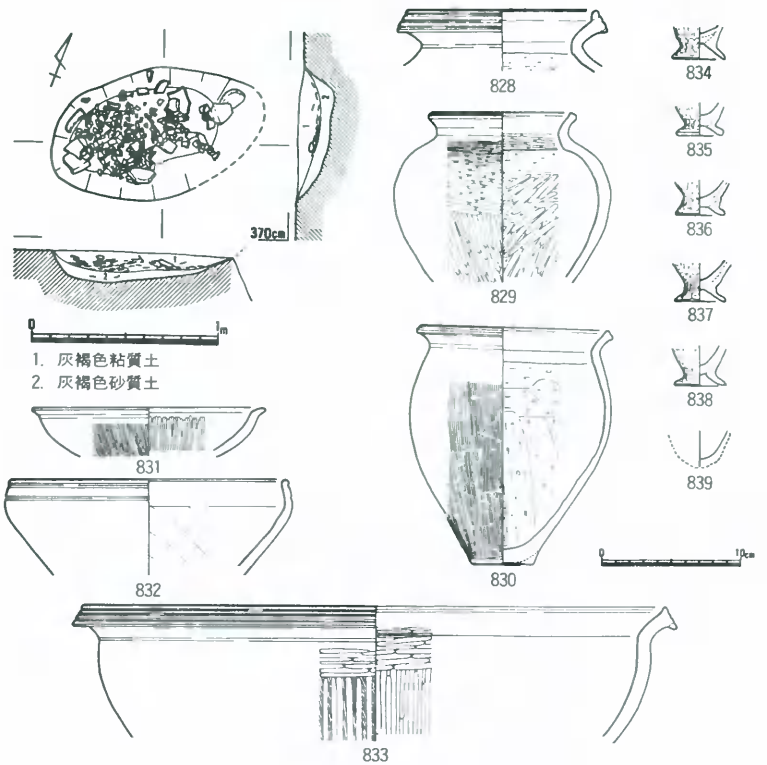
D-9の南東部やや北寄りに位置し，東端は近世以降の溜池状遺構に削られている。平面形は楕円形を呈し，最大長125cm・短径70cm・深さ18cmを測る。

遺物は，壺828・829，甕830，鉢831～833，製塩土器834～839等が出土している。製塩土器は図示したのは6点のみであるが，口縁部・体部の破片を含めて多量に出土しており，注目される。

時期は，百・後・Ⅲに比定される。　（光永）

土　壙－26（第88図）

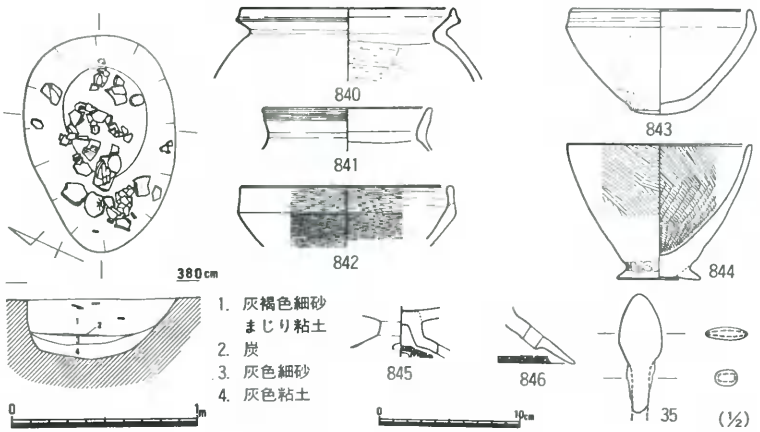
D-9に位置し，竪穴式住居－8の上にある。平面形は楕円形を呈している。大きさは，115



第87図　土壙－25（1/30）・出土遺物

×80cm，深さ31cmである。埋土の中間には，炭の層があり，これより上層から土器片がまとまって出土した。土器片の他に，円礫・角礫・鉄鏃などがある。土器には，甕840・841，鉢842～844，高杯845・846がある。鉄鏃35は柳葉形を呈し，現存長4.3cmを測る。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。　（正岡）

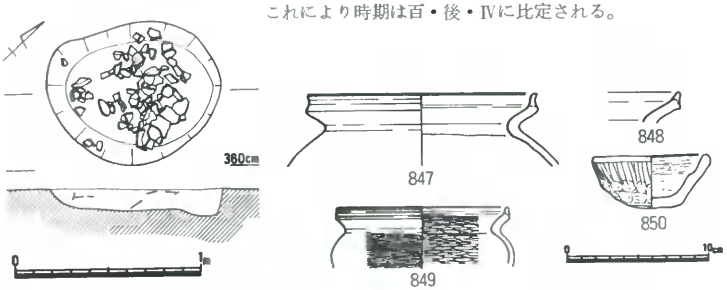


第88図　土　壙-26（1/30）・出土遺物

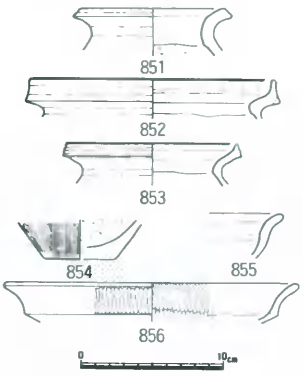
土　壙－27（第89図）

D-9の南東部にあり，竪穴式住居－8を切る。平面形は不整楕円形を呈し，長径95cm・短径70cm・深さ15cmを測り，埋土は灰褐色砂質土である。

遺物は，甕847・848，鉢849・850，製塩土器等があり，これにより時期は百・後・Ⅳに比定される。



第89図　土　壙-27（1/30）・出土遺物



第90図　土 壙-28 出土遺物

土　壙-28（第90図）

D-9の南東部やや東寄りにあり，二つの土壙に切られている。

平面形は楕円形を呈し，長径80cm・最大幅60cm・深さ32cmを測る。埋土は暗茶灰色土であり，上層には炭・焼土を多く含む。

出土遺物には，甕851～853，鉢855，高杯856等がある。

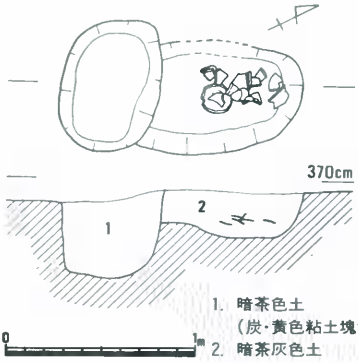
出土遺物および本土壙を切る土壙との関係から，時期は百・後・Ⅲに比定される。

土　壙-29（第91・92図）

D-9とD-10の境界上やや南寄りに位置し，土壙-30を切り，土壙-28に接する。

平面形は楕円形を呈し，長径70cm・短径50cm・深さ45cmを測る。

遺物はおもに下層からの出土であり，壺857，甕858，鉢859，高杯860・861，石鏃37等がある。これらにより，時期は百・後・Ⅲに求められる。

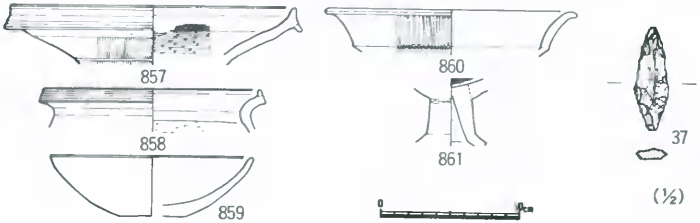


第91図　土　壙 29（左）・30（右）（1/30）

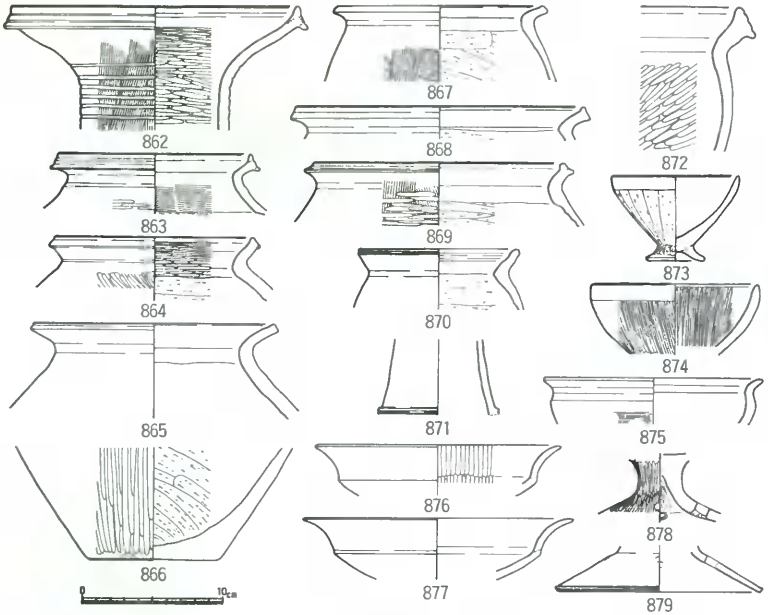
土　壙-30（第91・93図）

D-9とD-10の境界上にあり，土壙-29に切られている。平面形は楕円形を呈し，最大長90cm・短径60cm・深さ25cmを測る。

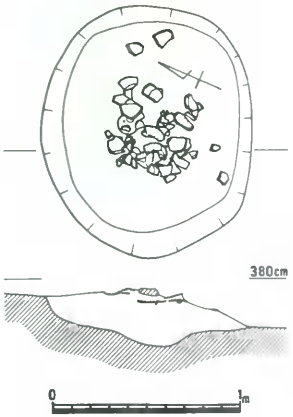
遺物は，壺862～866，直口壺871，甕867



第92図　土　壙-29 出土遺物



第93図　土　壙-30 出土遺物



第94図　土　壙-31（1/30）

～870，鉢 872～875，高杯 876～879，製塩土器，サヌカイト剝片等が出土しており，これにより，時期は百・後・Ⅲに求められる。　（光永）

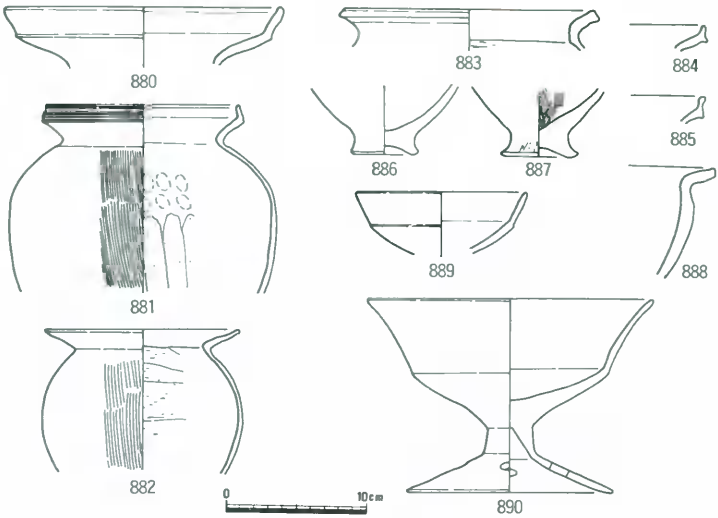
土　壙—31（第94・95図）

D-9 と D-10 にまたがり，竪穴式住居—10と一部重なっている。平面形は楕円形を呈している。大きさは，135×110cm，深さ30cmである。埋土は，灰褐色粘土で，上層部分に，土器・円礫を含んでいる。時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。　（正岡）

土　壙—32（第96～101図）

D-10 の北西部に位置し，二つの土壙を切る。

平面形は不整円形を呈し，最大径 125cm・深さ 60cmを測る。埋土は大きく二層に分層できる。上層は



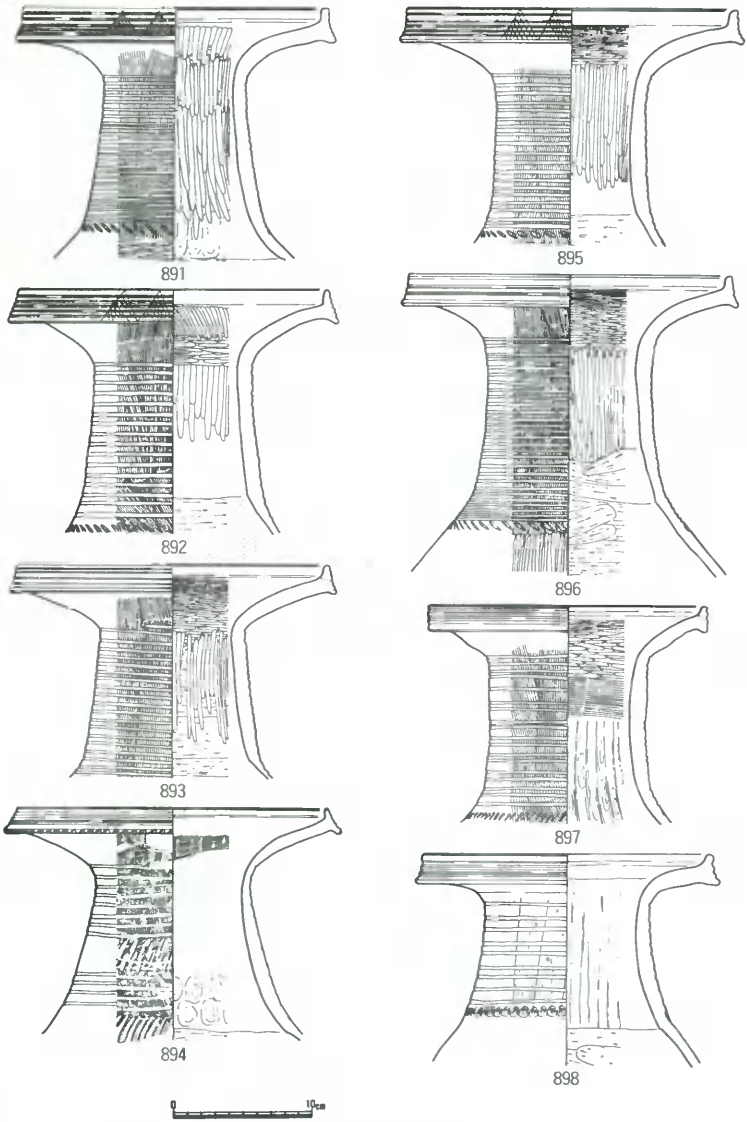
第95図　土　壙-31 出土遺物

第96図　土　壙-32（1/30）

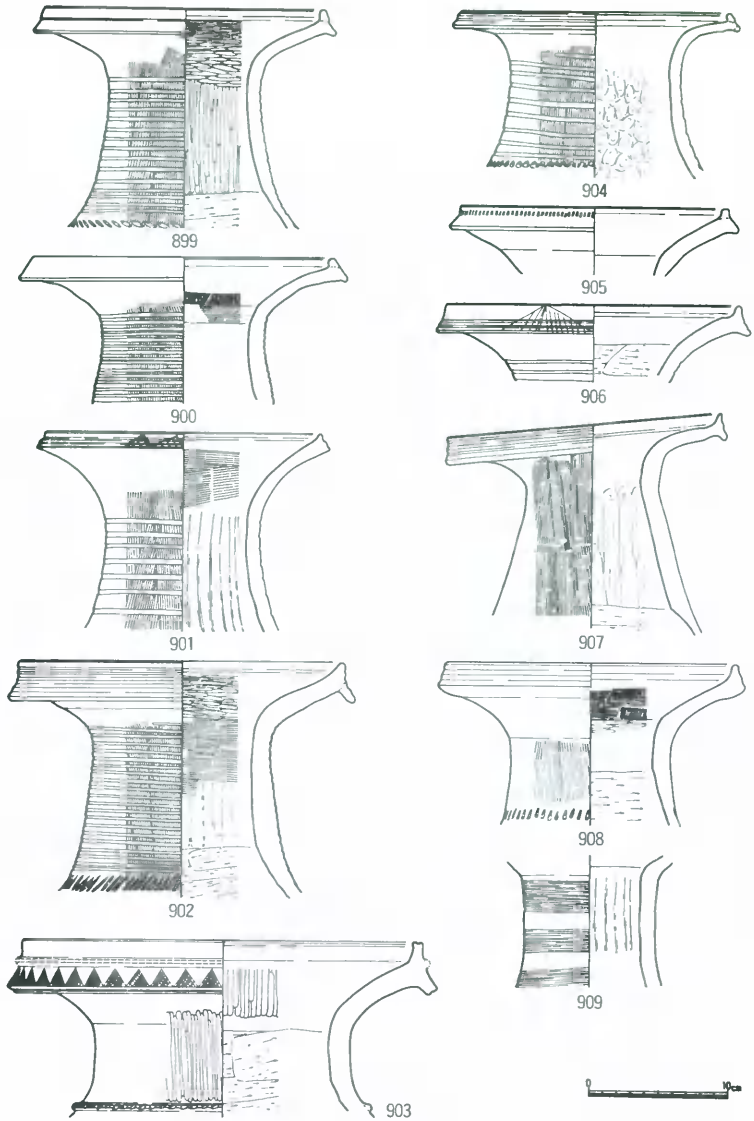
暗灰褐色砂質土で炭片を含み，遺物のほとんどはここに集中する。下層はグライ化した青灰色粘質土で，灰色土ブロック・炭片を多く含んでいる。

遺物は，壺891～910・912～915，甕911・916～946・949～952，鉢953・956～966，高杯967～980・982～984，直口壺981，製塩土器954・955等が出土している。

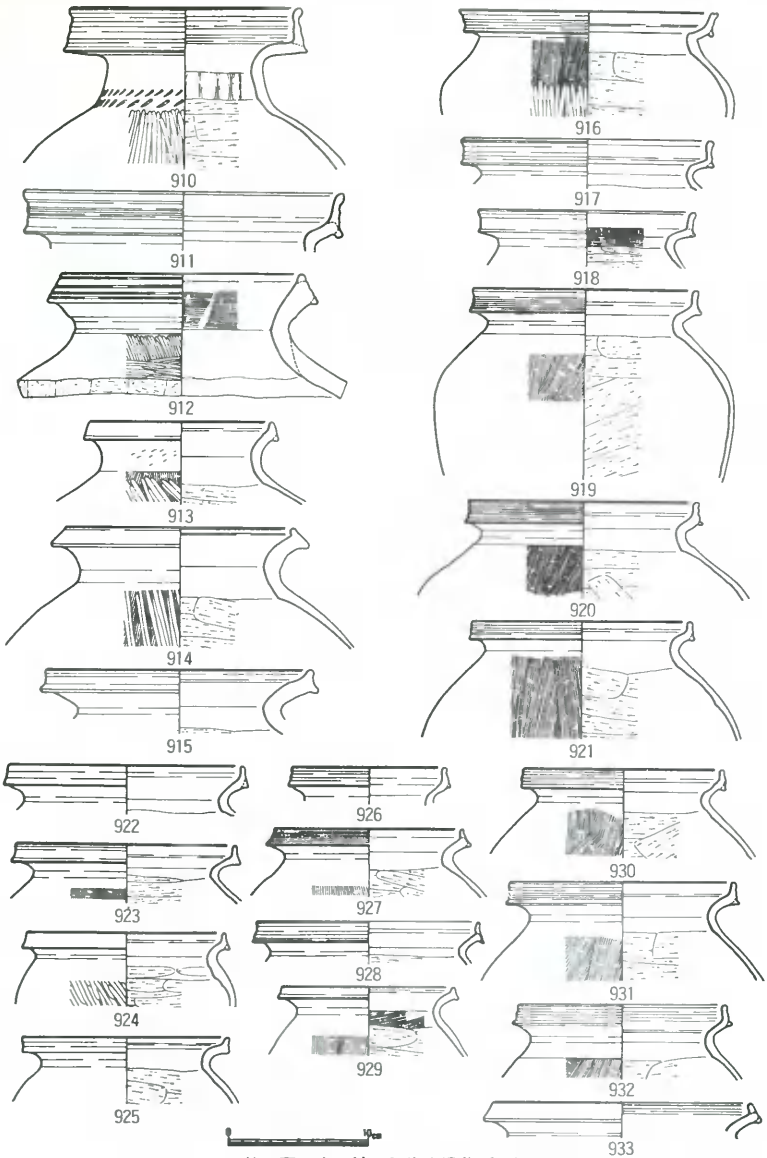
これらの遺物から時期は百・後・Ⅲに比定できる。　（光永）



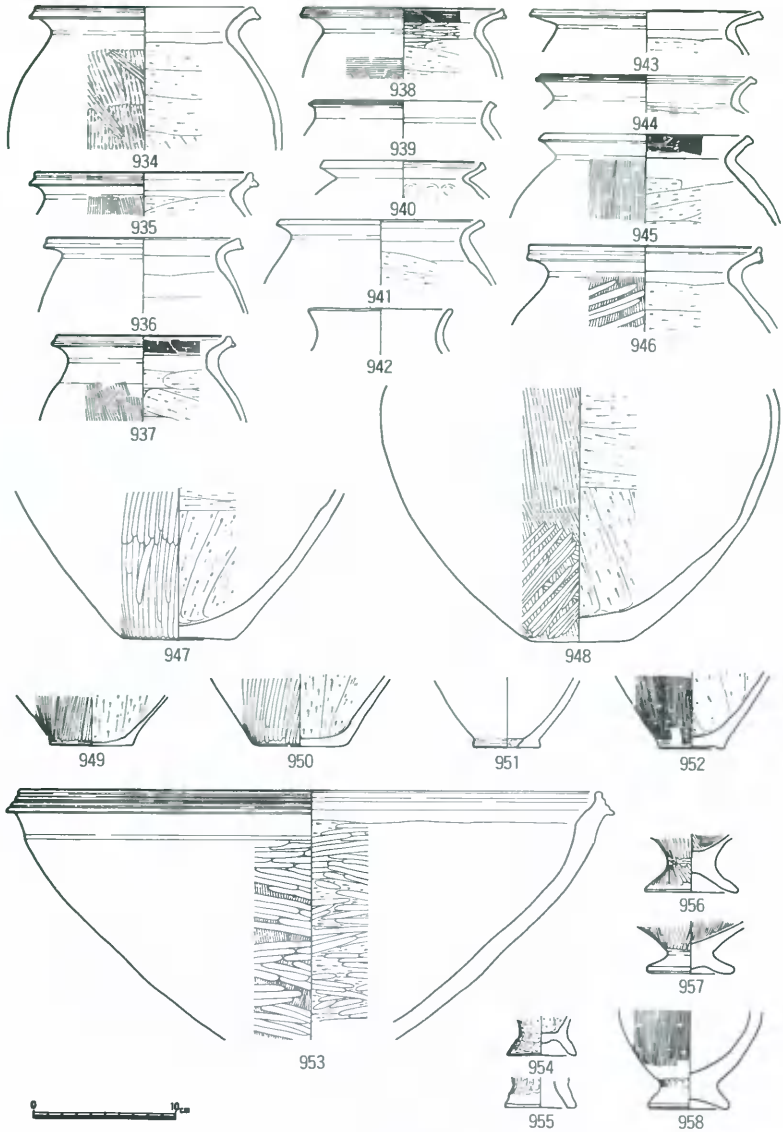
第97図　土　壙-32 出土遺物（1）



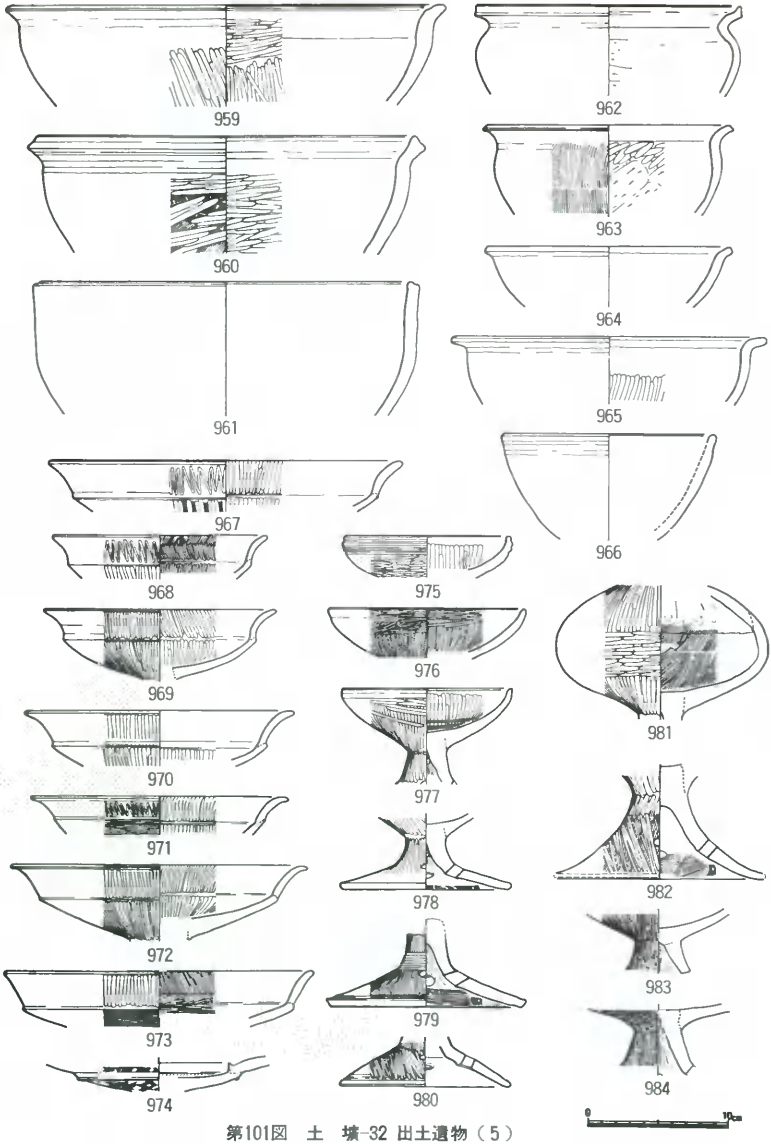
第98図　土　壙-32 出土遺物（２）



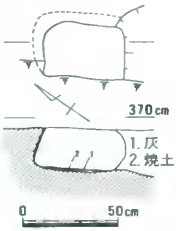
第99図　土　壙-32 出土遺物（3）



第100図　土　壙-32 出土遺物（4）



第101図　土　壙-32 出土遺物（5）



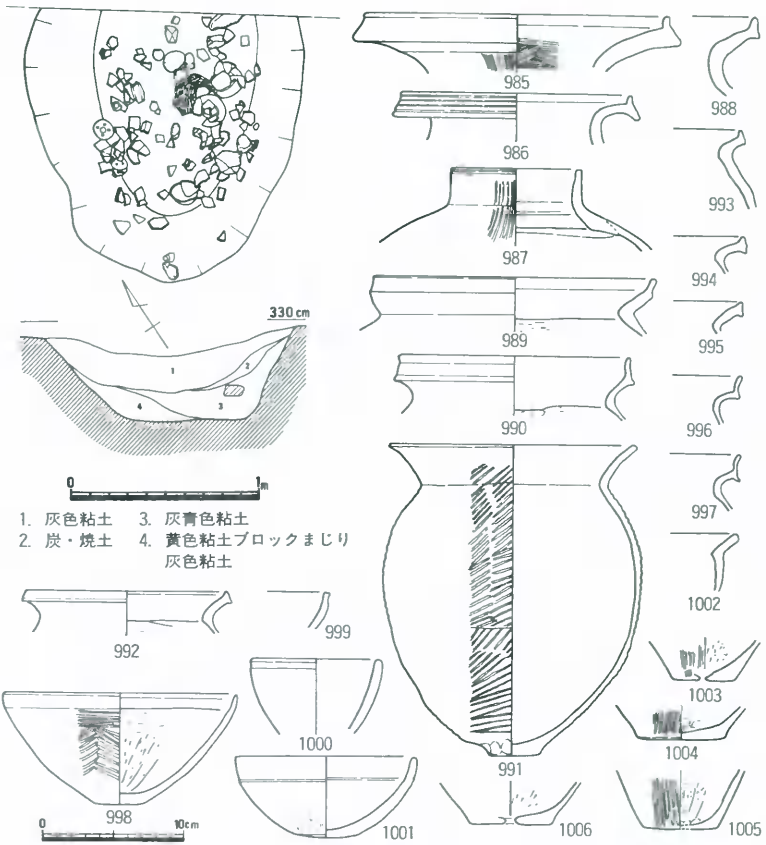
第102図　土壙-33（1/30）

土　壙-33（第102図）

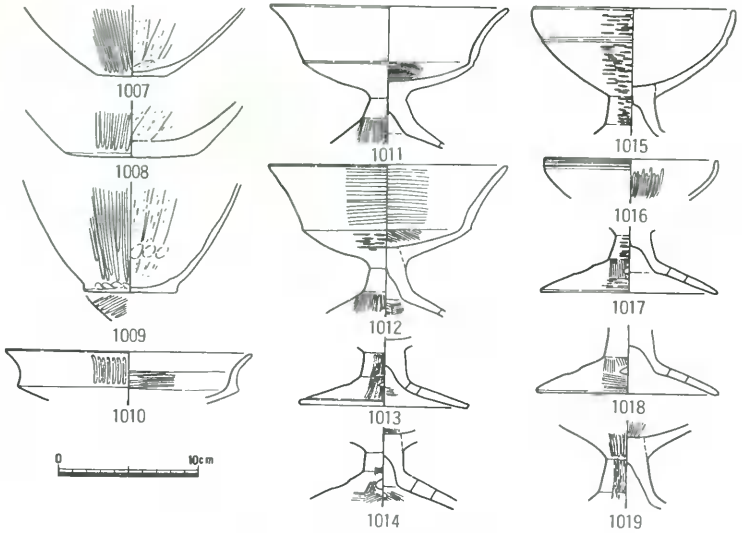
D-10の北端部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，袋状になっている。内面は焼けている。時期は，百・後・Ⅲに属する。

土　壙-34（第103・104図）

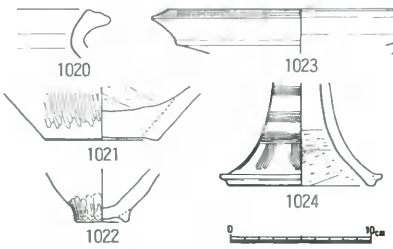
D-10に位置する。平面形は楕円形を呈し，一部は調査区外におよぶ。埋土中から多数の土器片の他，礫・サヌカイト片などが出土した。時期は，百・後・Ⅲに属する。　（正岡）



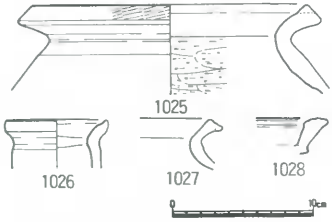
第103図　土　壙-34（1/30）・出土遺物（1）



第104図　土　壙-34 出土遺物（2）



第105図　土　壙-35 出土遺物



第106図　土　壙-36 出土遺物

土　壙―35（第105図）

D-10の南西部にあり，竪穴式住居―10と土壙に切られている。平面形は不整円形を呈し，最大径55cm・深さ30cmを測る。埋土は暗灰色土である。

遺物は，甕1020，高杯1023・1024，製塩土器等が出土しており，これにより時期は百・後・Ⅰに比定される。

土　壙―36（第106図）

D-10の南西部にあり，竪穴式住居―10に切られ，土壙―37を切っている。平面形は不整円形を呈し，最大径82cm・深さ45cmを測る。

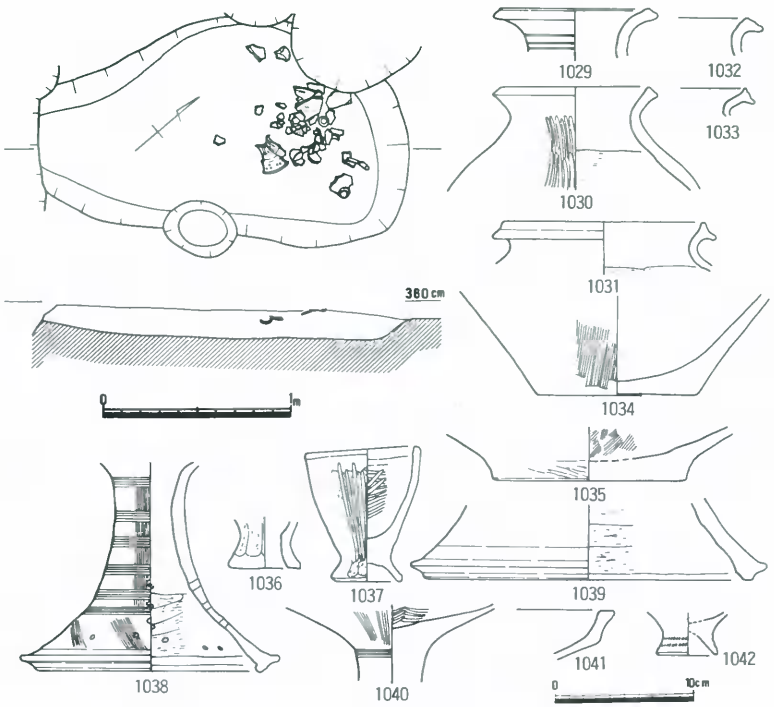
遺物は，甕1025～1027，高杯1028，製塩土器が出土しており，時期は百・後・Ⅰに比定される。（光永）

土　壙－37（第107図）

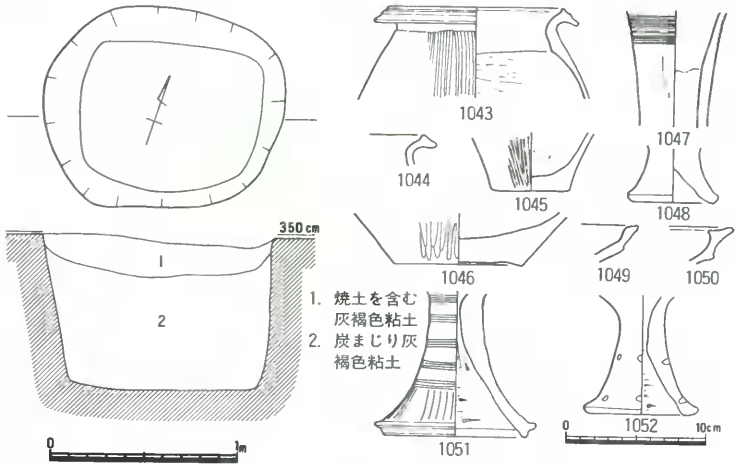
D-10の南西隅近くに位置し，南西部分を竪穴式住居－11によって切られている。平面形は不整楕円形を呈している。現状での大きさは，195×120cm，深さ18cmである。埋土は灰褐色粘土で，焼土・炭を多く含んでいる。埋土中からは，東側にまとまって土器が出土した。他にサヌカイト片も含まれている。時期は，百・後・Ⅰに属する。

土　壙－38（第108図）

D-10に位置し，竪穴式住居－12と重なっている。南側は土壙－39と接している。平面形は，ほぼ楕円形を呈している。大きさは，130×115cm，深さ80cmである。埋土には，炭・焼土を含んでいる。埋土中からは，土器片のほか，サヌカイト片も出土した。土器には，壺・甕・高杯・細頸壺・台付鉢がある。時期は，百・後・Ⅰに属する。



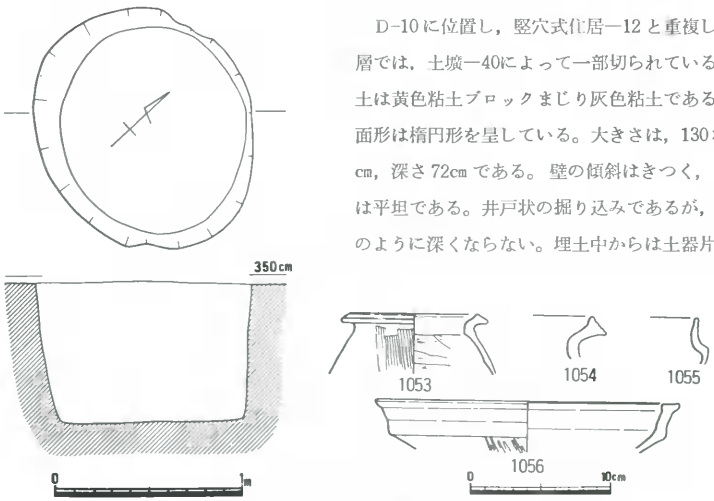
第107図　土　壙-37（1/30）・出土遺物



第108図　土　壙-38（1/30）・出土遺物

土　壙－39（第109図）

D-10に位置し，竪穴式住居－12と重複し，上層では，土壙－40によって一部切られている。埋土は黄色粘土ブロックまじり灰色粘土である。平面形は楕円形を呈している。大きさは，130×110cm，深さ72cmである。壁の傾斜はきつく，底面は平坦である。井戸状の掘り込みであるが，井戸のように深くならない。埋土中からは土器片を出

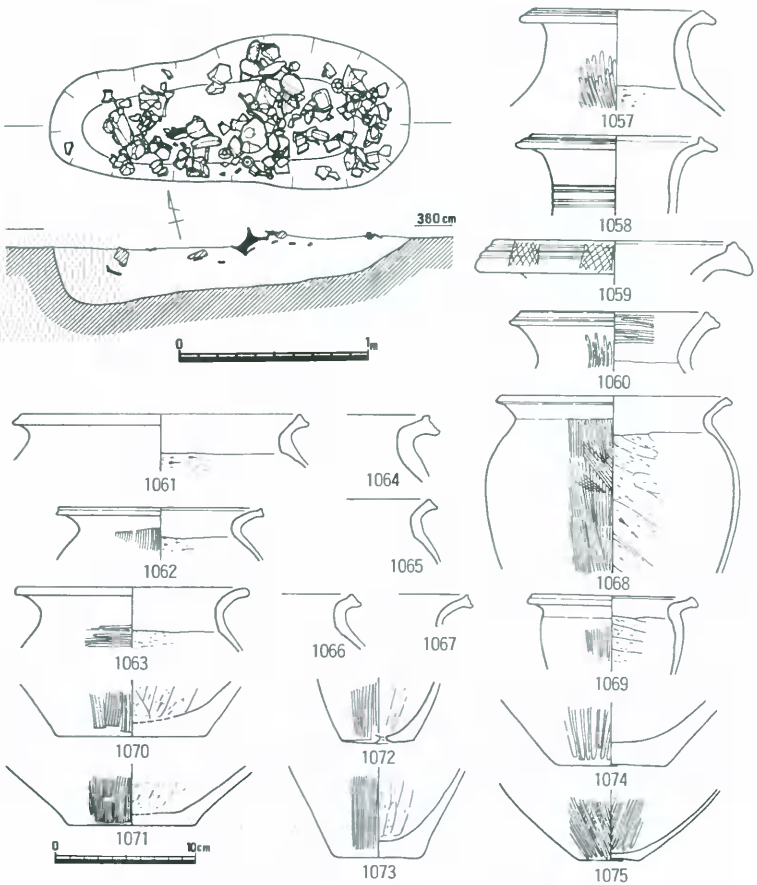


第109図　土　壙-39（1/30）・出土遺物

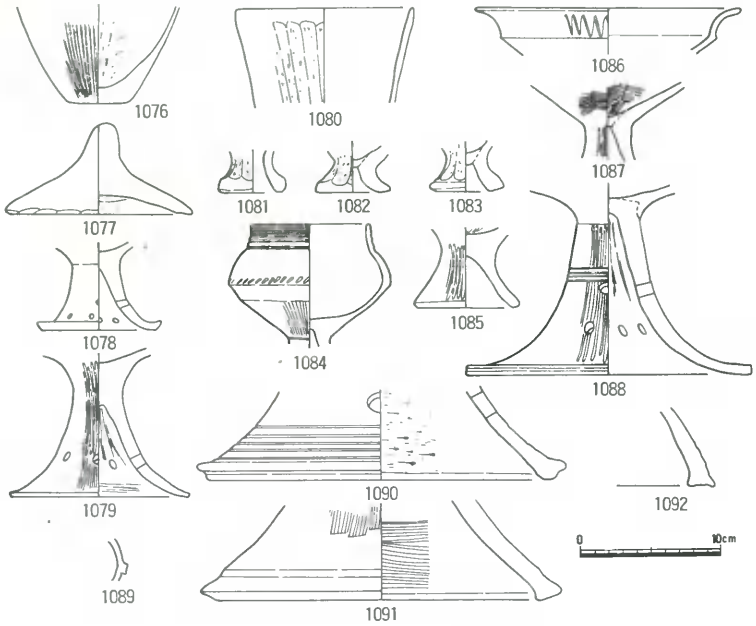
土している。土器には，壺1055，甕1053・1054，高杯1056，台付鉢がある。時期は，百・後・Ⅰに属する。

土　壙—40（第110～112図）

D-10の南西寄りに位置し，竪穴式住居—12と一部重複し，竪穴式住居—13に接している。平面形は長楕円形を呈し，190×81cm，深さ29cmを測る。埋土中からは，多量の土器と銅鐸形土製品・石庖丁片・礫が出土した。

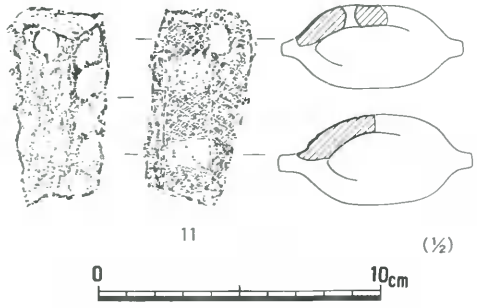


第110図　土　壙-40（1/30）・出土遺物（1）



第111図　土　壙-40 出土遺物（2）

土器には，壺 1057～1060・1089，甕 1061～1068，鉢 1069，蓋 1077，高杯1078・1079・1085～1088，台付鉢 1080～1084，器台 1090～1092 がある。



第112図　土　壙-40 出土遺物（3）

1089は壺の胴部片で，断面方形の凸帯をめぐらし，外面は丹塗りされている。銅鐸形土製品11は，6.9×3.3㎝の大きさで，約4分の1の破片である。片面の約半分が残存し，裏面には接合前に指でおさえたあとが残っている。鈕の部分と下端部は不明であるが，縁が残り，鋸歯文がある。本体の文様は袈裟襷文を

ヘラで描いている。型持孔が1個ある。

時期は，百・後・Ⅱの古相に属する。

土　壙－41（第113図）

D-10に位置し，竪穴式住居－13に接している。このあたりには，土壙が集中している。平面形は円形で，袋状を呈する。上面は直径120cm，最も大きい部分は直径130cm，深さ66cmである。床面は少し湾曲するが，ほぼ平坦である。埋土中からは，土器片・円礫・サヌカイト片が出土した。

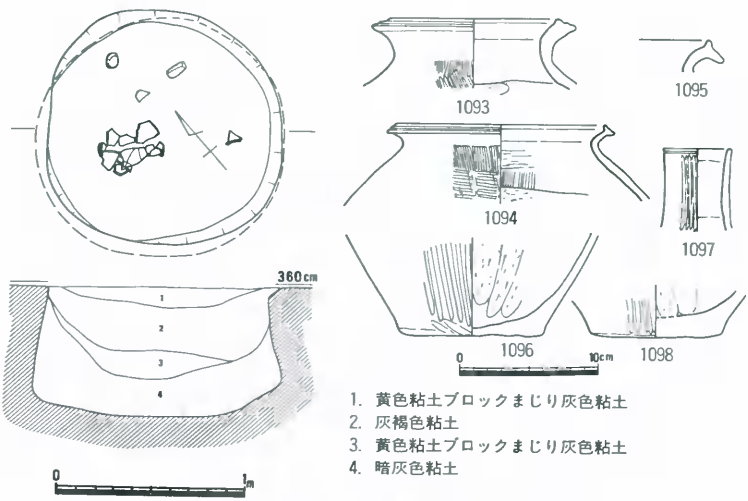
土器には，壺1093，甕1094・1095，細頸壺1097がある。甕の肩部には右下がりのタタキメを施すものがある。

時期は，百・後・Ⅱに属する。

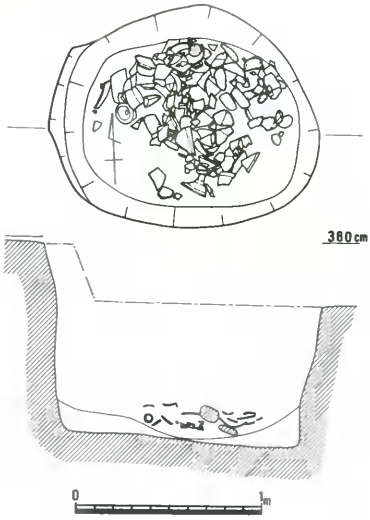
土　壙－42（第114～116図）

D-10の中央部付近に位置し，竪穴式住居－13の北側に近接している。一部は現代まで使用されていた用水路によって削られている。平面形は，やや楕円形を呈し，136×119cm，深さ100cmを測る。壁の傾斜はきつく，底面は平坦である。井戸状の掘り込みであるが，井戸のように深くならない。埋土中からは，多量の土器の他，礫・サヌカイト片が出土した。

土器には，壺1099～1104・1106・1107・1111・1112，甕1105・1108・1109・1113～1116，鉢

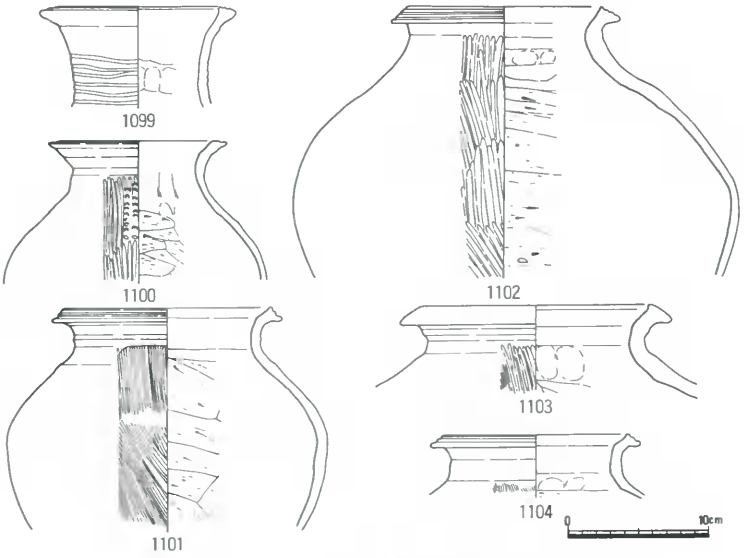


第113図　土　壙－41（1/30）・出土遺物

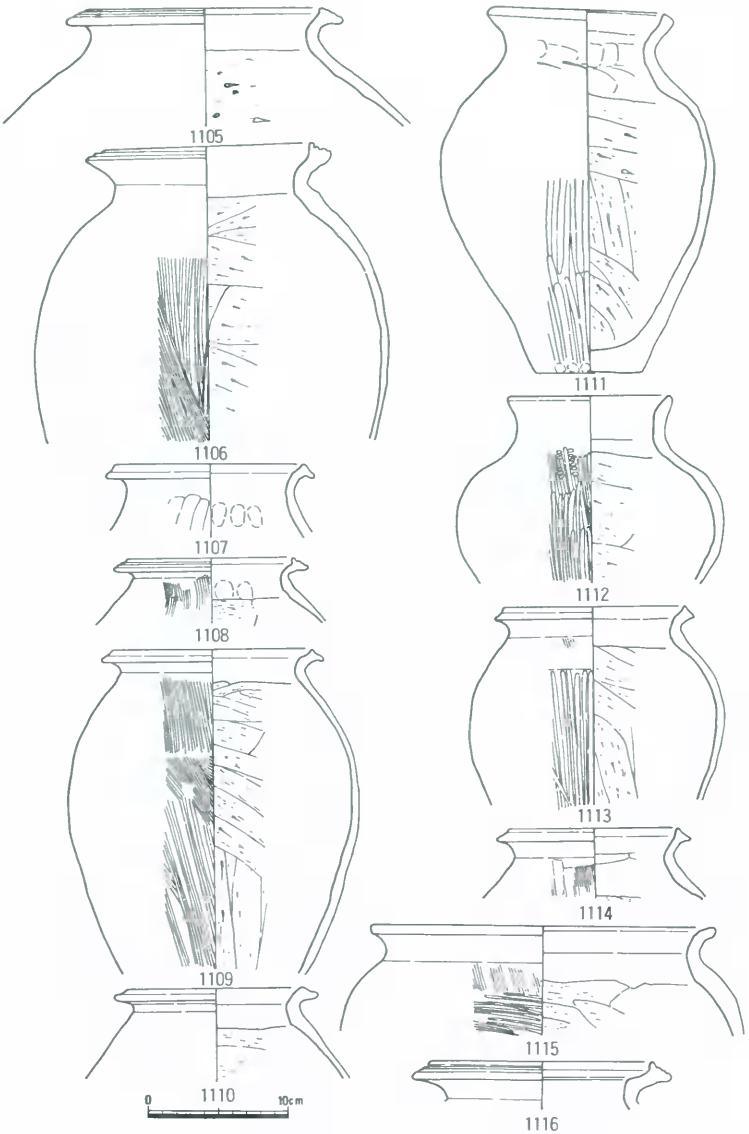


1117～1121，台付鉢1129，高杯1130～1138がある。

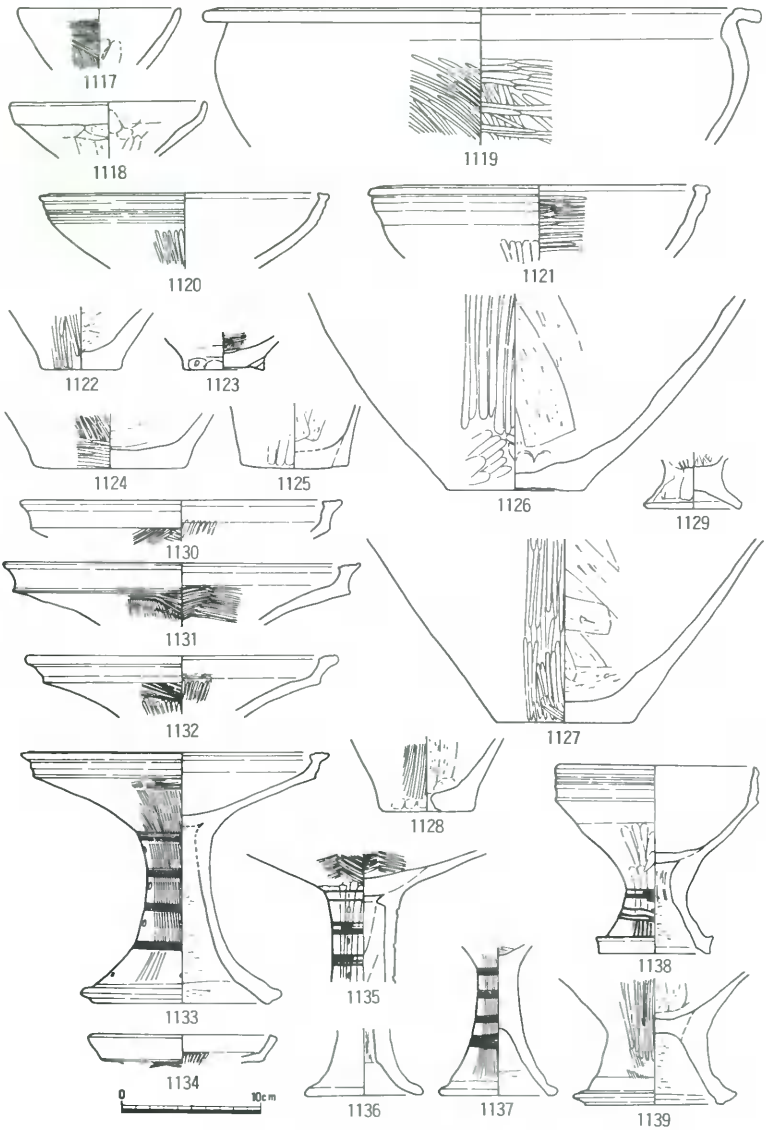
壺には頸部が長く，ヘラ描き沈線をめぐらすものと，頸部が短く，口縁部を緩やかに外反するものがある。端部はいずれも肥厚し，凹線文を配するものもある。また，肩部に刺突文を配したものもある。内面は頸部直下までヘラ削りを施している。甕は胴部の長いもので，口縁端部は肥厚し，凹線文を施すものもある。鉢は口縁部を外方へ折り曲げるものと端部を少し肥厚させるだけのものがある。高杯は杯部が皿状のものと椀状のものがある。脚部には小さな円孔とクシ描き文を配する。時期は，百・後・Ⅰに属する。



第114図　土　壙-42（1/30）・出土遺物（1）



第115図　土　壙-42 出土遺物（２）



第116図　土　壙-42 出土遺物（3）

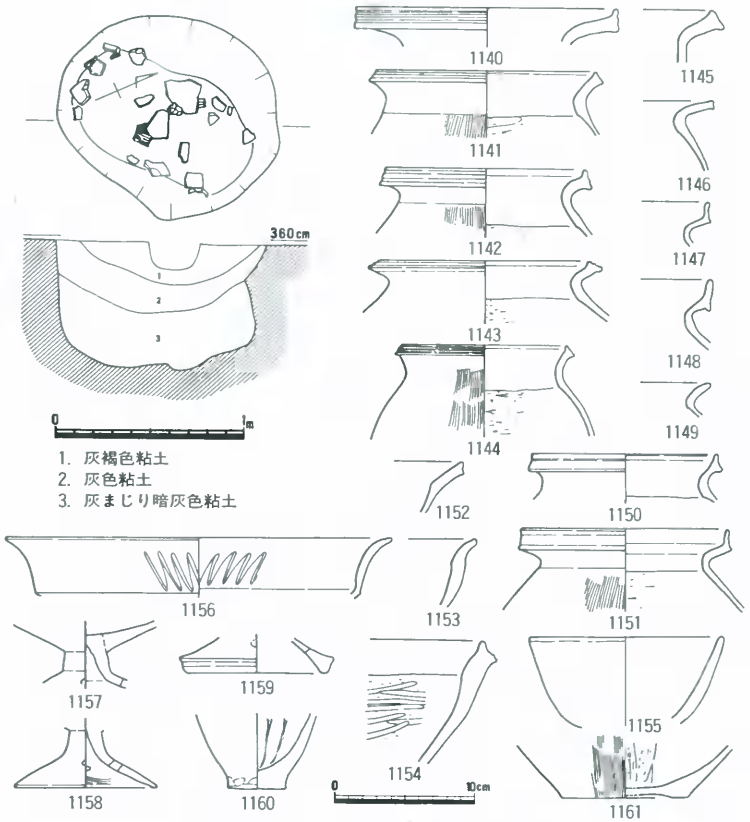
土　壙－43（第117図）

D-10に位置し，竪穴式住居－13の北端部と重複している。平面形は不整楕円形を呈する。大きさは，115×110cm，深さ68cmである。埋土には灰を含んでいる。埋土中からは土器を出土した。

土器には，壺1140・1145，甕1141～1144・1146～1151，鉢1152～1155，高杯1156～1159がある。他に，台付鉢（製塩土器）の破片がある。時期は，百・後・Ⅲの新相である。

土　壙－44（第118図）

D-10の南西部に位置し，竪穴式住居－13と重複している。平面形は楕円形を呈し，大きさ

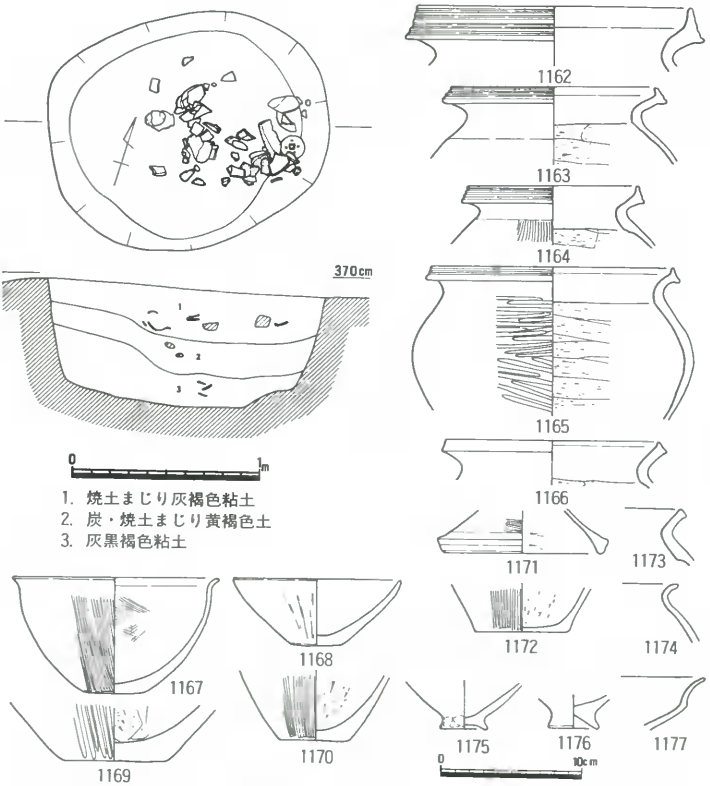


第117図　土　壙-43（1/30）・出土遺物

は，150×120cm，深さ65cmである。埋土中には，土器片・円礫・サヌカイト片が含まれていた。土器には，甕1162～1164・1166・1173・1174，鉢1165・1167・1168，高杯1171・1177がある。時期は，百・後・Ⅲに属する。

土　壙—45（第119図）

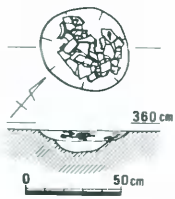
D-10に位置し，竪穴式住居—13の北西部と重なっている。平面形は，ほぼ円形を呈し，直径48cm，深さ10cmである。埋土は，上層が灰褐色粘土，下層は灰色粘土である。上層には，壺1個体分の破片が重なっている。北東よりの上層部からは，銅鏃1本が検出された。

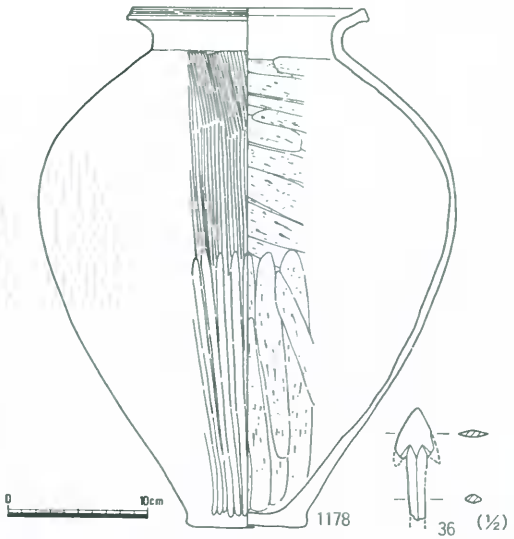


第118図　土　壙-44（1/30）**・出土遺物**

銅鏃36はかえりのつくもので，現存長4㎝，最大幅1.4㎝，茎部の断面は菱形である。かえりの一部と茎の端部を欠失している。

時期は，百・後・Ⅲに属する。

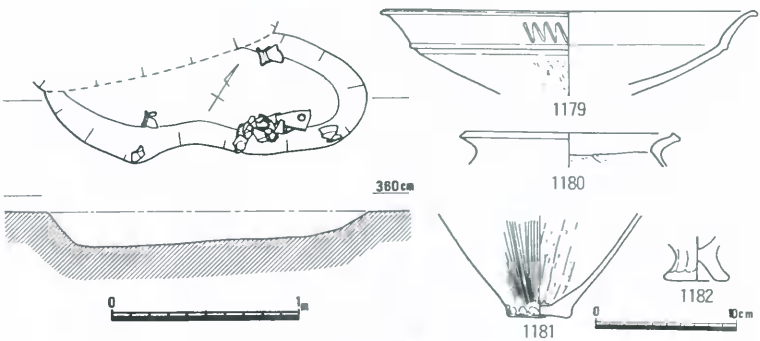




第119図　土　壙-45（1/30）・出土遺物

土　壙—46（第120図）

D-10に位置し，竪穴式住居—13の北部で重複し，土壙—44によって北側を切られている。平面形は不整楕円形を呈する。大きさは，170×65㎝，深さ18㎝である。埋土は灰褐色粘土で，土器・サヌカイト片を含んでいる。



第120図　土　壙-46（1/30）・出土遺物

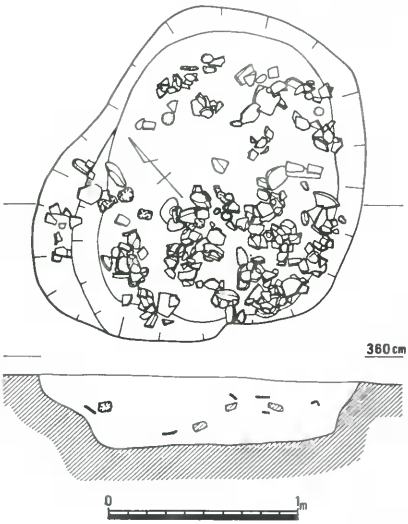
土器には，甕1180，高杯1179，台付鉢（製塩土器）1182がある。

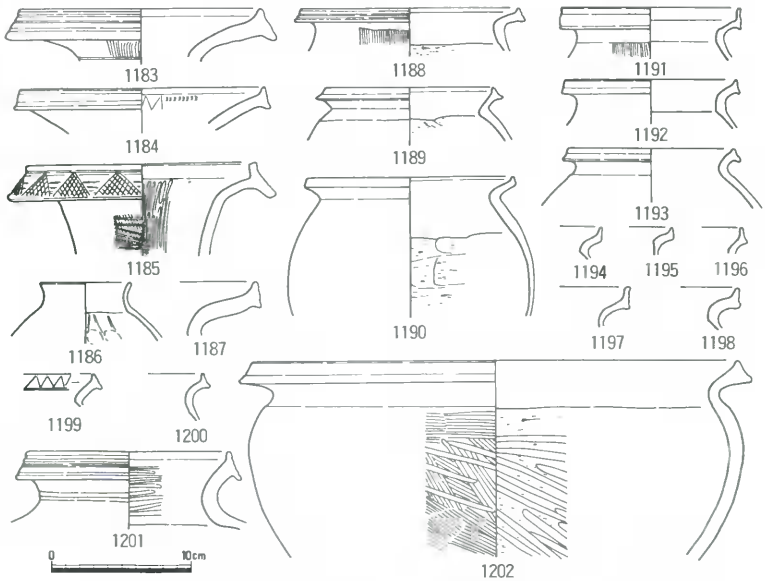
時期は，百・後・Ⅱに属する。

土　壙—47（第121・122図）

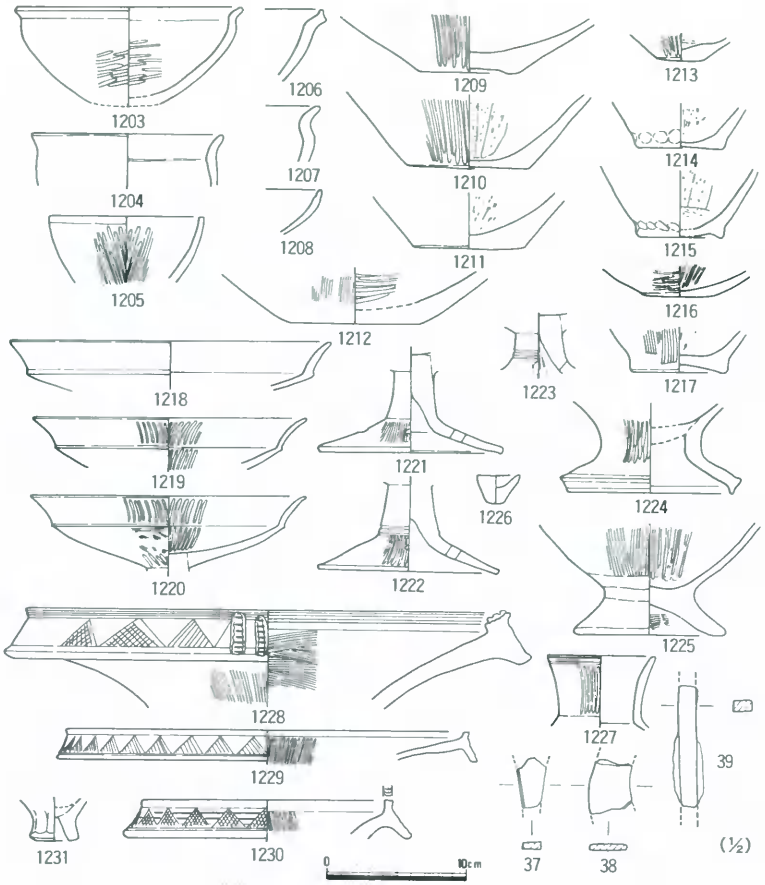
E-10に位置し，竪穴式住居—13の西端部と重複している。南西側を1979年度に，北東側を1980年度に調査した。平面形は，西側が張り出しているが，不整楕円形を呈する。埋土は黒褐色粘土である。埋土中には，土器・鉄器・ガラス滓・円礫・サヌカイト片がある。

土器には，壺1183・1184・1186





第121図　土　壙-47（1/30）・出土遺物（1）



第122図　土　壙-47 出土遺物（２）

・1187・1201，甕1188～1200，鉢1202～1207・1226，高杯1208・1218～1223，器台1185・1228～1230，直口壺1227，台付鉢1231がある。

鉄器は３点あるが，いずれも破片のため種類は明瞭でないが，37は鉄鏃と推定される。39は鉋の一部であろう。

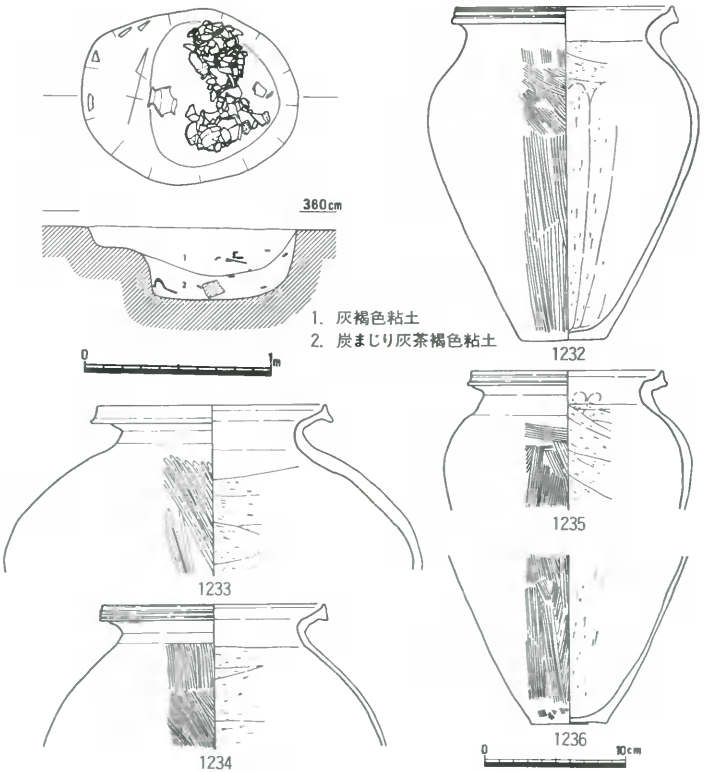
時期は，百・後・Ⅲに属する。

土　壙－48（第123・124図）

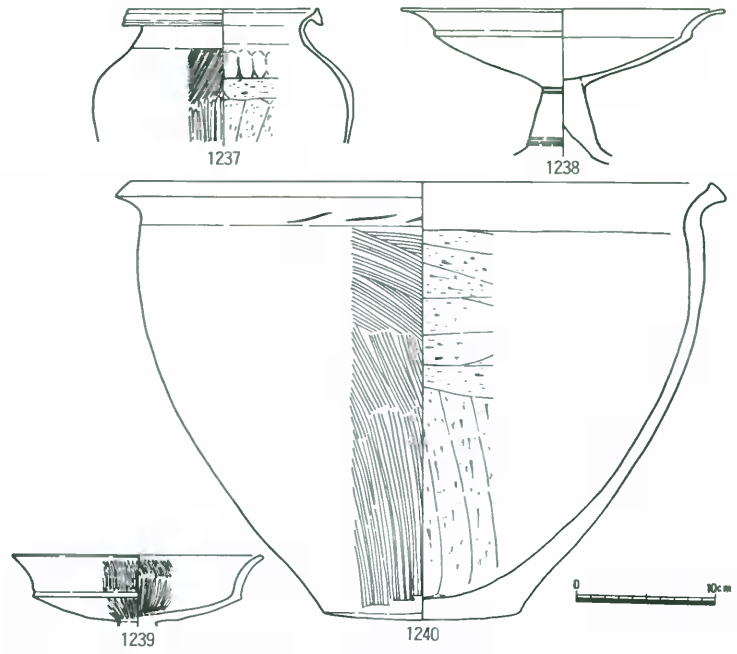
E-10に位置し，竪穴式住居－13に接している。平面形は楕円形を呈し，112×90㎝，深さ36㎝を測る。西側部分には一段高くなったところがある。埋土中からは，土器・サヌカイト片・礫が出土した。

土器には，甕1232～1237，鉢1240，高杯1238・1239がある。1235と1236は同一個体である。甕は口縁部を「く」の字状に折り曲げ，端部を肥厚し，上下に拡張する。内面は頸部直下までヘラケズリを施している。鉢は口縁部を緩やかに外反させ，端部が肥厚する。外面にはハケメ，内面にはヘラケズリを施している。高杯は浅い杯部から口縁部が外反する。

時期は，百・後・Ⅲに属する。



第123図　土　壙-48（1/30）・出土遺物（1）



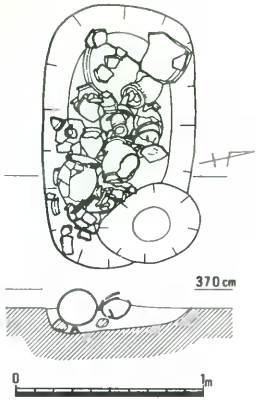
第124図　土　壙 48 出土遺物（2）

土　壙―49（第125・126図，図版5-2）

D-10の南西部に位置し，竪穴式住居―14の南東部にあたる。平面形は，隅丸の長方形に近い形を呈している。大きさは，140×71cm，深さ12cmである。深さについては包含層のためわかりにくかったもので，さらに上部からの掘り込みがあったことがわかる。埋土中には土器がぎっしり詰っていた。

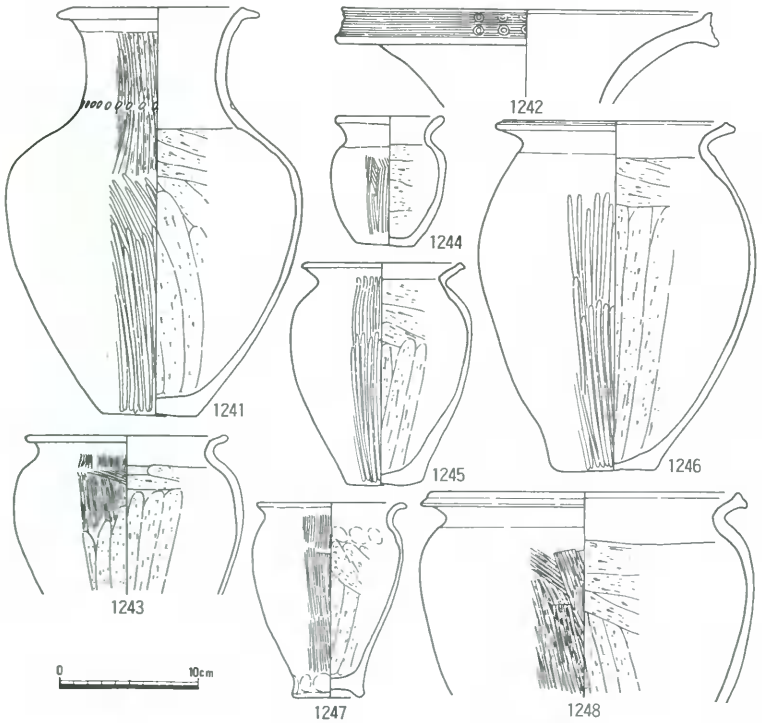
土器には，壺1241・1242，甕1243～1256，鉢1257・1258，高杯1259・1260，台付壺1261がある。土器は，大きな破片のものが多く，ほぼ復元できるものもある。

壺1241は，口縁部が緩やかに外反し，端部は外方へ張り出す。頸部には列点文を配している。肩部までは縦位のハケメ，胴部下半はヘラミガキを施している。内面は頸部直下までヘラケズリを施している。色調は橙色を呈する。壺1142は，口縁部が大きく開く。端部は肥厚して，外面には凹線文を施したあと竹管文を配している。器台の口縁部とも考えられるものである。甕は口縁部を「く」の字状に外反させているが，端部が肥厚するものと丸くなったもの

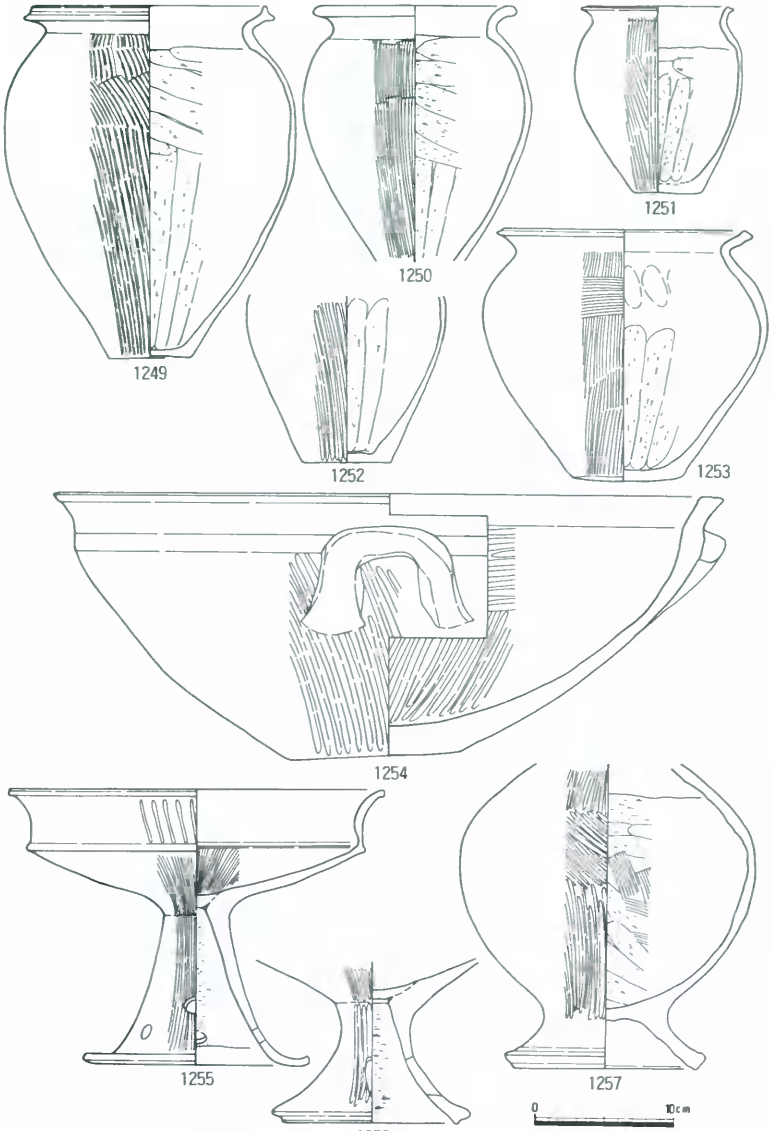


がある。肥厚しないものは上方へ湾曲している。外面はハケメのものとヘラミガキのものがある。1243では肩部より上にハケメを施し，胴部下半にヘラケズリを施している。底部は平底になるものと一部あげ底になるものがある。鉢1257は把手の付いたもので，口縁部は少し屈曲する。内外面ともヘラミガキを施している。高杯の脚部は裾が緩やかにひろがり，屈曲部をもたない。

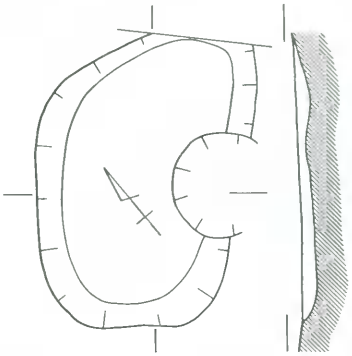
時期は，百・後・Ⅱの古相に属する。



第125図　土　壙-49（1/30）・出土遺物（1）



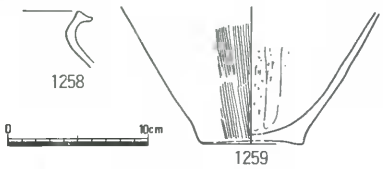
第126図　土　壙 49 出 土 遺 物（2）



土　壙—50（第127図）

D-11の北東部に位置し，調査区域の端部にあたる。土壙—51や柱穴と重複している。平面形は，南側が隅丸の方形を呈しているが，北側では一方だけ張り出す。現状での大きさは，113×116cm，深さ8cmである。埋土中からは，甕1258の小破片を出土している。他にサヌカイトの小片もある。

時期は，百・後・Ⅱに属する。（正岡）

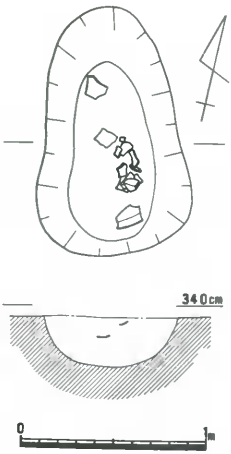


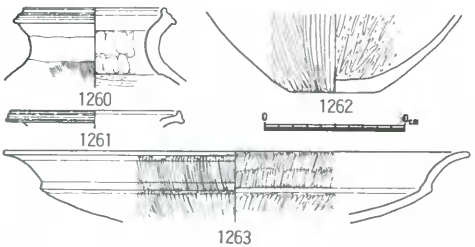
第127図　土　壙-50（1/30）・出土遺物

土　壙—51（第128図）

D-11の北隅で土壙—50と重複して検出された土壙である。平面形は不整長楕円形を呈し，深さは検出面より約27cmを測る。埋土は，炭・焼土粒を含む暗灰褐色微砂が一層のみである。出土遺物としては，土器が少量出土しているにすぎない。

時期は，百・後・Ⅱと考えられる。





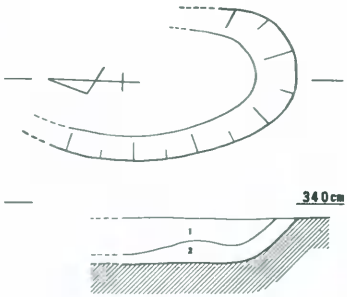
第128図　土　壙-51（1/30）・出土遺物

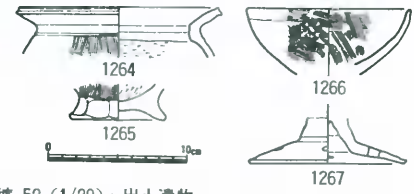
土　壙—52（第129図）

D-11の北隅，土壙—51の東側，井戸—4の西側において検出された土壙である。北端部は側溝のため未確認である。平面形は不整長楕円形を呈すると思われ，深さは検出面より約25cmを測る。埋土は二層あり，いずれも炭・焼土粒を含んでいる。

出土遺物としては，土器が少量出土しているのみである。

時期は，ほぼ百・後・Ⅲ～Ⅳであろう。





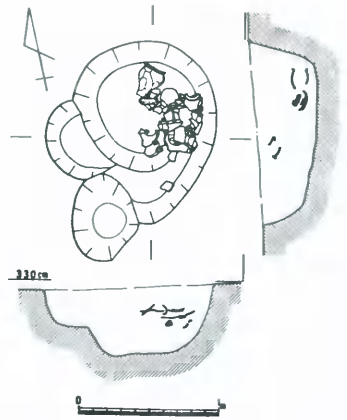
第129図　土　壙-52（1/30）・出土遺物

土　壙—53（第130・131図）

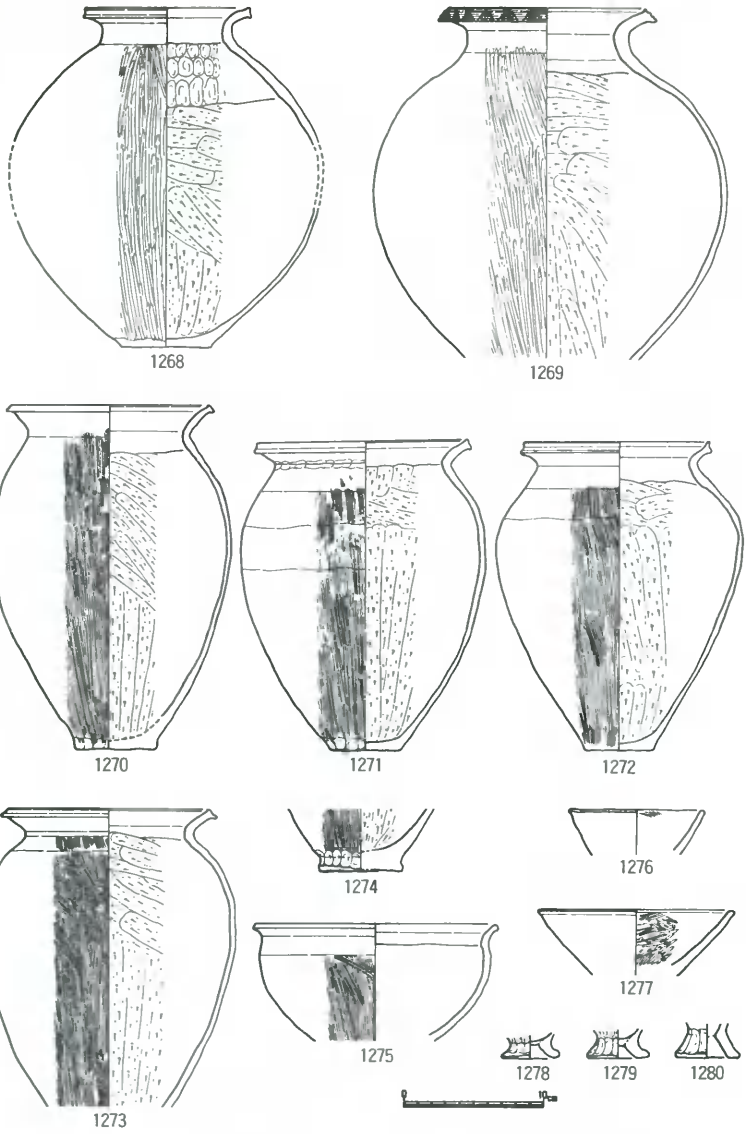
D-11の北部分において検出された土壙である。井戸—4および竪穴式住居—16によって切られている。

平面形は，約130×105cmの楕円形を呈すると思われ，深さは，最も深い部分で検出面より約45cmを測る。埋土は，炭・焼土粒および黄褐色砂のブロックを含む灰褐色粘質微砂が一層のみであった。

出土遺物としては土器および少量の礫がある。土器は壺・甕・鉢および製塩土器などで，おもにこの土壙内の東半分より底面から浮いた状態でまとまって出土している。第131図1270～1272は甕でほぼ完形に復元できる。1268・1269・1273も完形に近く復元できるものである。それ以外は小片である。時期は，出土した土器から百・後・Ⅱであると考えられる。



第130図　土　壙-53（1/40）



第131図　土　壙-53 出土遺物

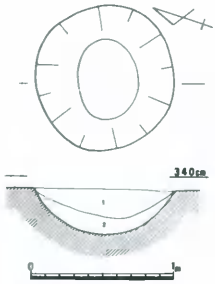
土　壙—54（第132図）

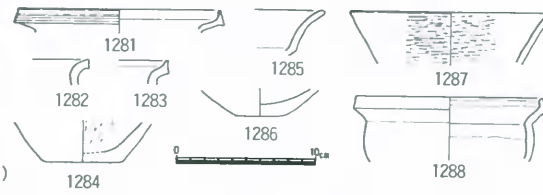
D-11の西部分において検出された土壙で，竪穴式住居—16を切っている。

平面形は，直径約100cmのほぼ円形を呈し，深さは，検出面より約33cmを測る。埋土は二層認められた。

出土遺物としては，おもに1層中より土器が出土している。土器は小片のものがほとんどである。

時期は，百・後・Ⅳであると考えられる。





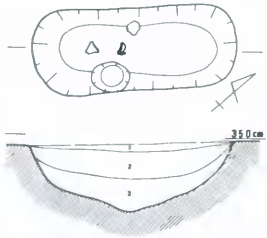
第132図　土　壙-54（1/40）・出土遺物

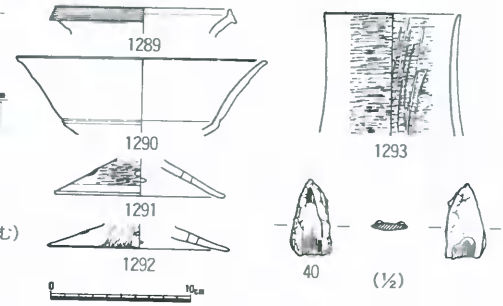
土　壙—55（第133図）

D-11の西部分，土壙—54の南側において検出された土壙で竪穴式住居—16を切っている。

平面形は，約145×60cmの不整長方形を呈し，深さは，検出面より約50cmを測る。埋土は三層認められ，特に最下層は炭と灰と焼土が最高約25cmの厚さで堆積していた。

出土遺物としては，土器および鉄鏃がある。鉄鏃はほぼ完存しており，着装状態をうかがわせる木質も一部残存している。時期は，ほぼ百・後・Ⅳと考えられる。





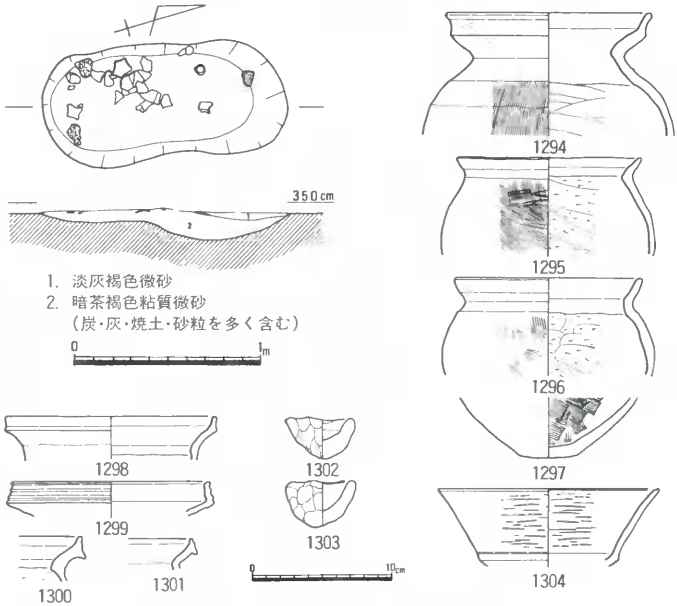
第133図　土　壙-55（1/40）・出土遺物

土　壙―56（第134図）

D-11の北部分，土壙―55の南側において検出された土壙で，竪穴式住居―16を切っている。平面形は不整隅丸長方形を呈し，深さは，最も深い部分でも検出面より約15cmを測るにすぎない。埋土は二層認められた。

出土遺物としては，土器および10cm前後の焼土塊がある。土器には壺・甕・高杯などとともに手捏ね土器1302・1303がある。

時期は，出土した土器の特徴からほぼ百・後・Ⅳであると考えられる。



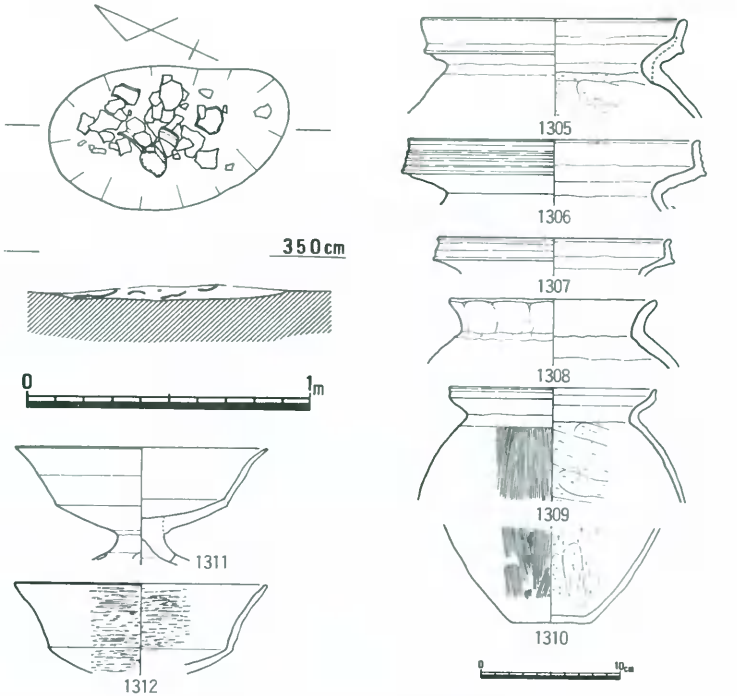
第134図　土　壙―56（1/30）・出土遺物

土　壙―57（第135図）

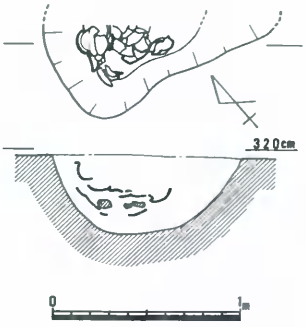
E-11の北部分，土壙―56の南東部において検出された土壙で，竪穴式住居―16を切っている。この土壙は，底の部分がわずかに残存しているのみで全体の形状ははっきりしない。埋土は暗茶褐色粘質微砂が一層のみである。

この土壙内からは，底面に接する状態で土器片および10cm前後の礫が出土している。土器には壺・甕・高杯などがある。

時期は，出土した土器からほぼ百・後・Ⅳであると考えられる。



第135図　土　壙-57（1/20）・出土遺物

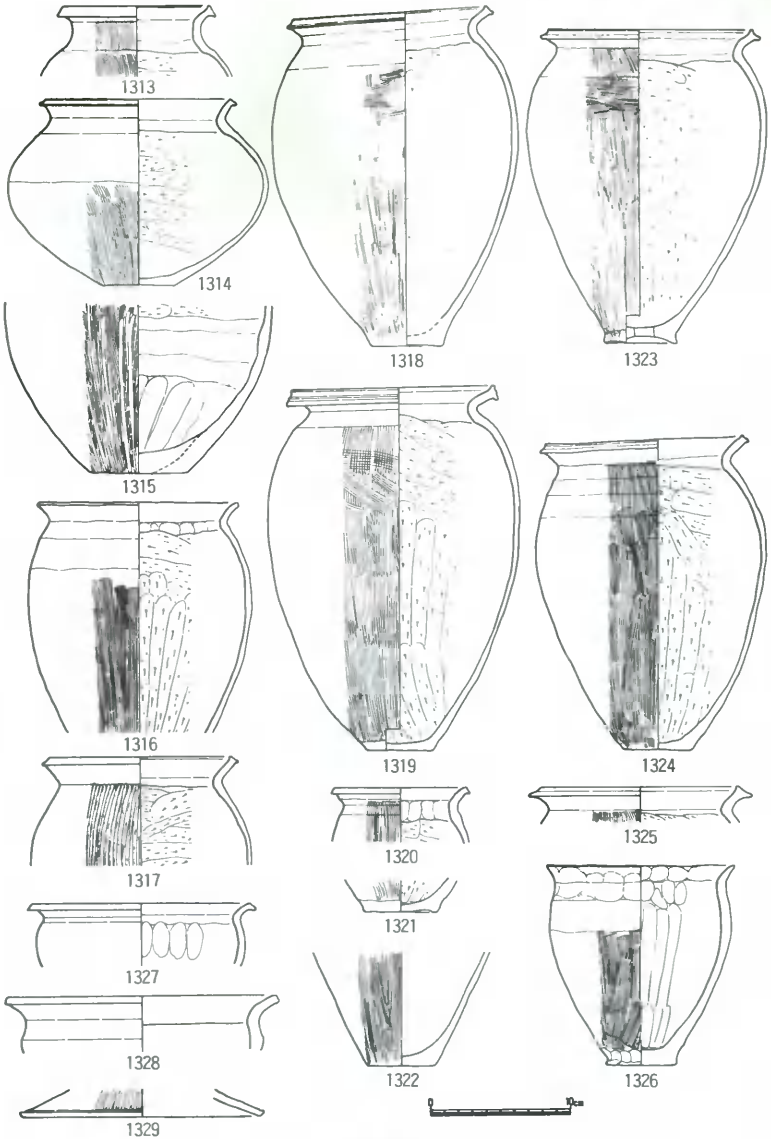


第136図　土　壙-58（1/30）

土　壙—58（第136・137図）

D-11の北部分，溝—15と溝—16との間において検出された土壙である。調査区域の関係から全体の一部のみを調査した。平面形は不明であるが，深さは検出した範囲内では約40cmを測る。埋土は灰褐色粘質微砂が一層のみである。

この土壙内からは，全体の一部のみを調査したにもかかわらず，第137図に示したように甕を中心に壺・鉢・高杯などがかなり出土した。これらの土器の特徴から時期は，ほぼ百・後・Ⅱであると考えられる。（平井）



第137図　土　壙 58 出土遺物

土　壙－59（第138図）

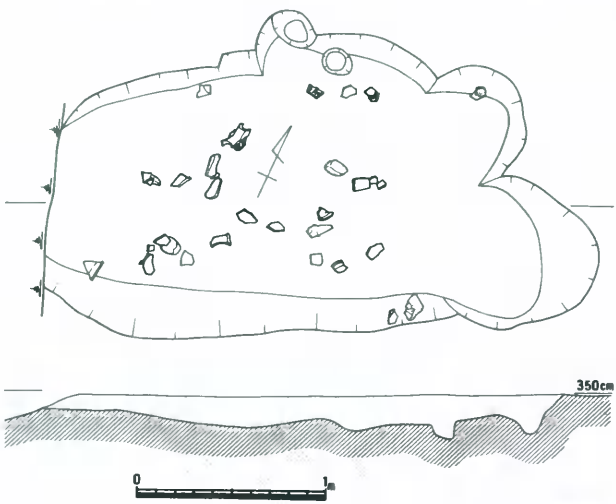
D-10とD-11にまたがっている。西側は用水路によって一部削られている。ほぼ東西方向に長く，東端部は不整形で，いくつかの土壙と重複している可能性もある。現状での大きさは，292×157cm，深さ16cmである。埋土中からは土器を出土している。土器には，壺1330，甕1331，鉢1332・1338・1340，高杯1335～1337，台付鉢1339がある。他にサヌカイト片もある。

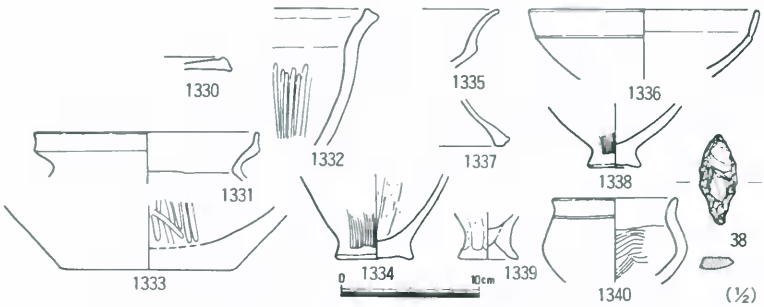
時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙－60（第139図）

D-11に位置し，竪穴式住居－16の西側にある。平面形は，少し歪んだ長楕円形を呈する。大きさは，121×60cm，深さ35cmである。埋土の上層部には，炭化物がまじっていて，土器片もおもにこの土層から出土した。他にサヌカイト片もある。

土器には，壺1341・1349



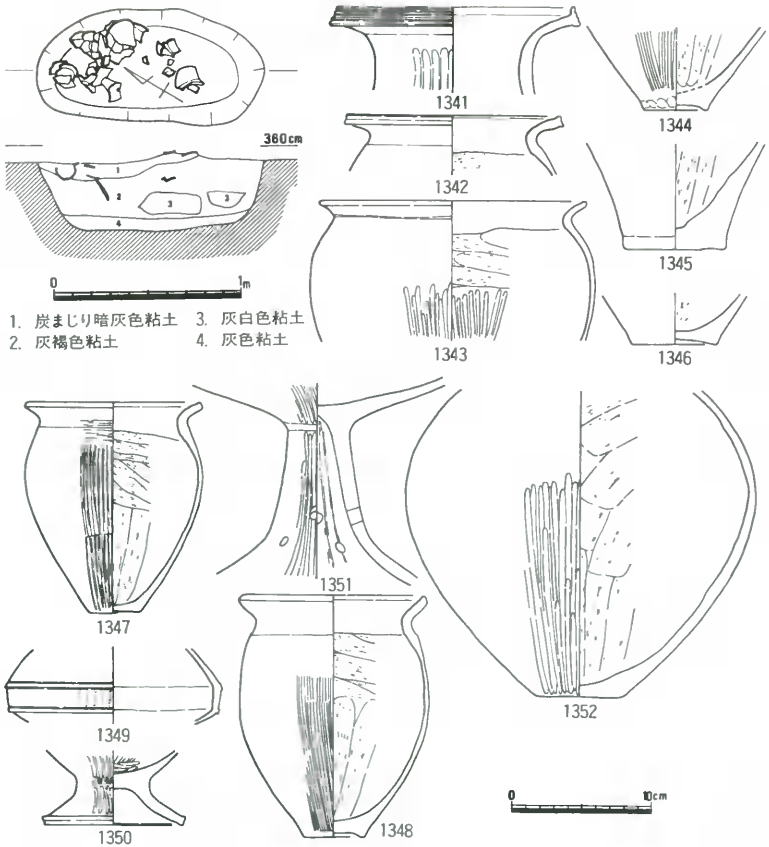


第138図　土　壙－59（1/30）・出土遺物

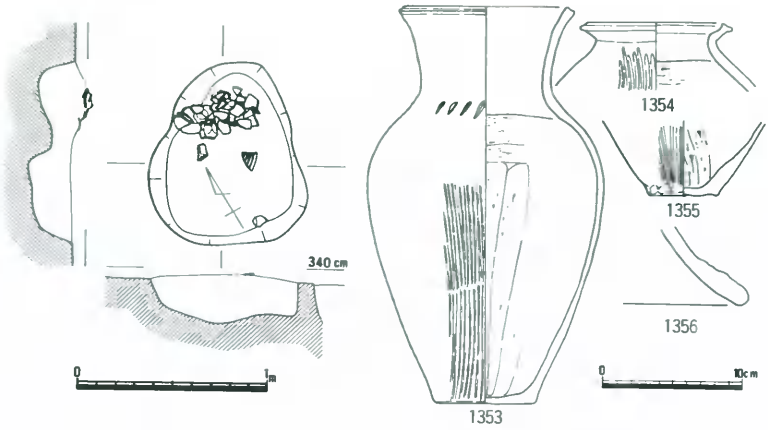
・1352，甕1342・1343・1347・1348，台付鉢1350，高杯1351がある。1349の壺は，胴部が著しく膨らみ，2条の凸帯の間には刺突文を配している。時期は，百・後・Ⅱに属する。

土　壙－61（第140図）

D-11の北東部に位置し，土壙－62に近接している。平面形は，隅が丸くなった三角形状を呈している。96×84cm，深さ22cmの大きさで，床面は平坦でない。埋土は炭まじりの暗灰褐色粘土である。埋土の上層部から土器が出土した。土器には，壺1353，甕1354・1355，器台



第139図　土　壙-60（1/30）・出土遺物



第140図　土　壙-61（1/30）・出土遺物

1356がある。

時期は，百・後・Ⅲに属する。

土　壙—62（第141図）

D-11の南東部に位置し，土壙—61に近接している。平面形は楕円形を呈する。大きさは，180×170cm，深さ32cmである。床面は平坦ではない。埋土の下層には，灰が多く含まれる。埋土中には，土器片のほか，円礫などが含まれている。

土器には，甕1357，鉢1358・1359，台付鉢1363，高杯1364～1367がある。本土壙の時期以前の高杯なども含まれていた。

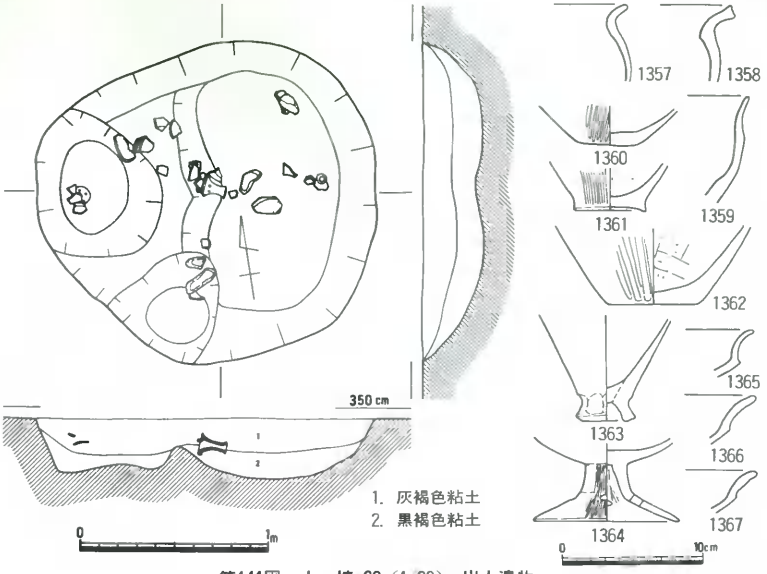
時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙—63（第142図）

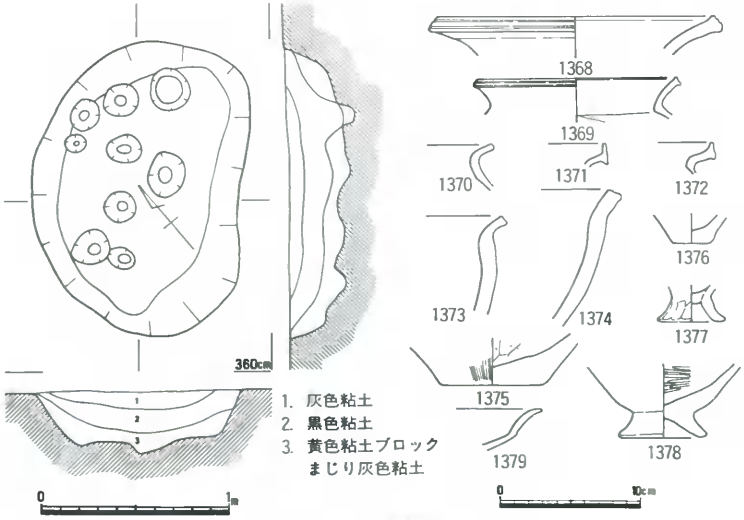
D-11の中央部付近にあり，竪穴式住居—16の南東側に位置する。平面形は歪んだ楕円形を呈している。大きさは，155×115cm，深さ32cmである。床面には小さな穴が多数あり，平坦ではない。

埋土中からは，土器の小破片が出土した。土器には，壺1368，甕1369～1372，鉢1373・1374，台付鉢1377・1378，高杯1379がある。壺の口縁部は朝顔形にひらく。甕の口縁部は折り曲げて外反し，端部が上下に拡張するものとしないものがある。鉢には大型鉢の破片がある。台付鉢には小さな脚部のものとやや大きく，内面をヘラミガキするものがある。

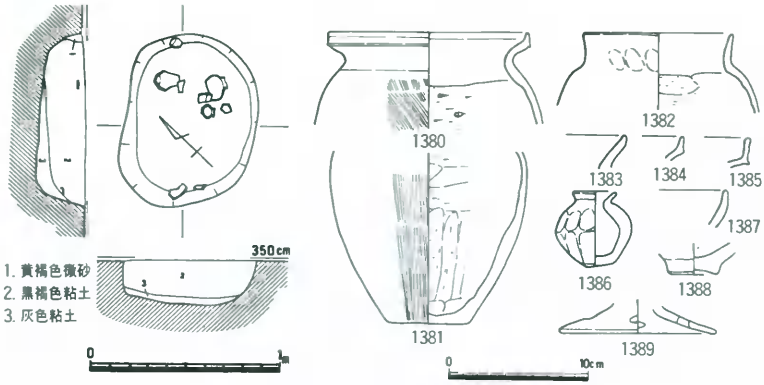
時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。



第141図　土　壙 62（1/30）・出土遺物



第142図　土　壙-63（1/30）・出土遺物



第143図　土　壙 64（1/30）・出土遺物

土　壙—64（第143図）

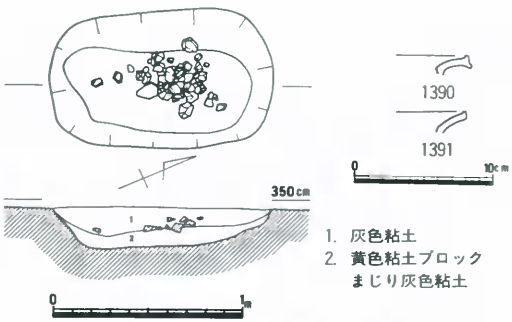
D-11の南東部に位置し，土壙—65・68に近接している。平面形は歪んだ楕円形を呈する。埋土中には，土器片・ガラス滓を含んでいる。土器には，甕1380・1382～1385，手捏ね土器1386，高杯1387・1389がある。手捏ね土器は小型の壺である。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙—65（第144図）

D-11に位置し，土壙—67に一部切られている。平面形は隅の丸いやや長方形を呈する。床面はほぼ水平である。大きさは，117×73cm，深さ22cmである。埋土中には，角礫が集中している。土器はほとんど含まれていない。甕の小破片がわずかに検出されたにすぎない。

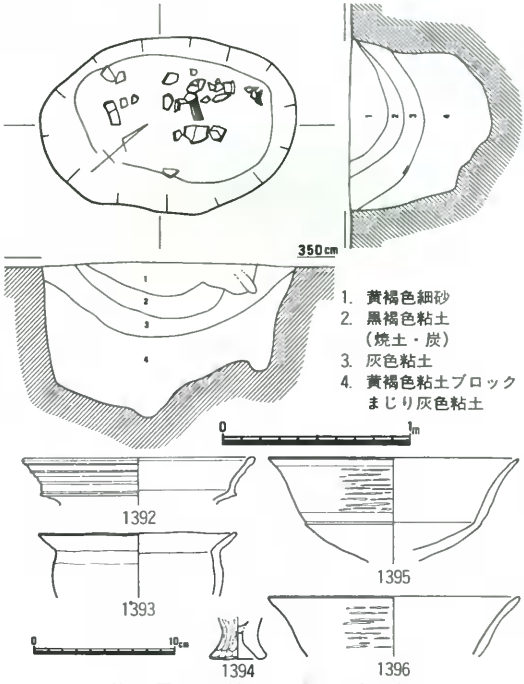
時期は，百・後・Ⅲに属する。



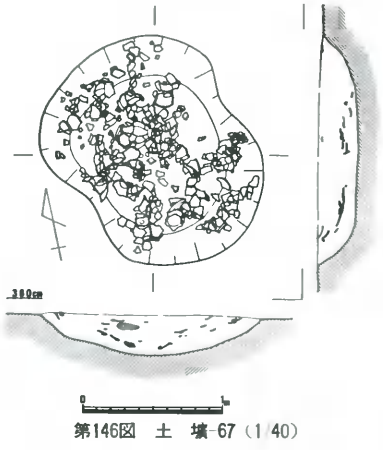
第144図　土　壙 65（1/30）・出土遺物

土　壙—66（第145図）

D-11の南寄りに位置し，井戸—7の上につくられている。土壙—65・67とは近接している。平面形は，ほぼ楕円形を呈している。大きさは，135×94cm，深さ80cmを測



第145図　土　壙-66（1/30）・出土遺物



第146図　土　壙-67（1/40）

る。埋土には炭・焼土を含んでいる。埋土中からは，土器片が出土している。土器には，壺1392，甕1393，台付鉢1394，高杯1395・1396がある。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。（正岡）

土　壙－67

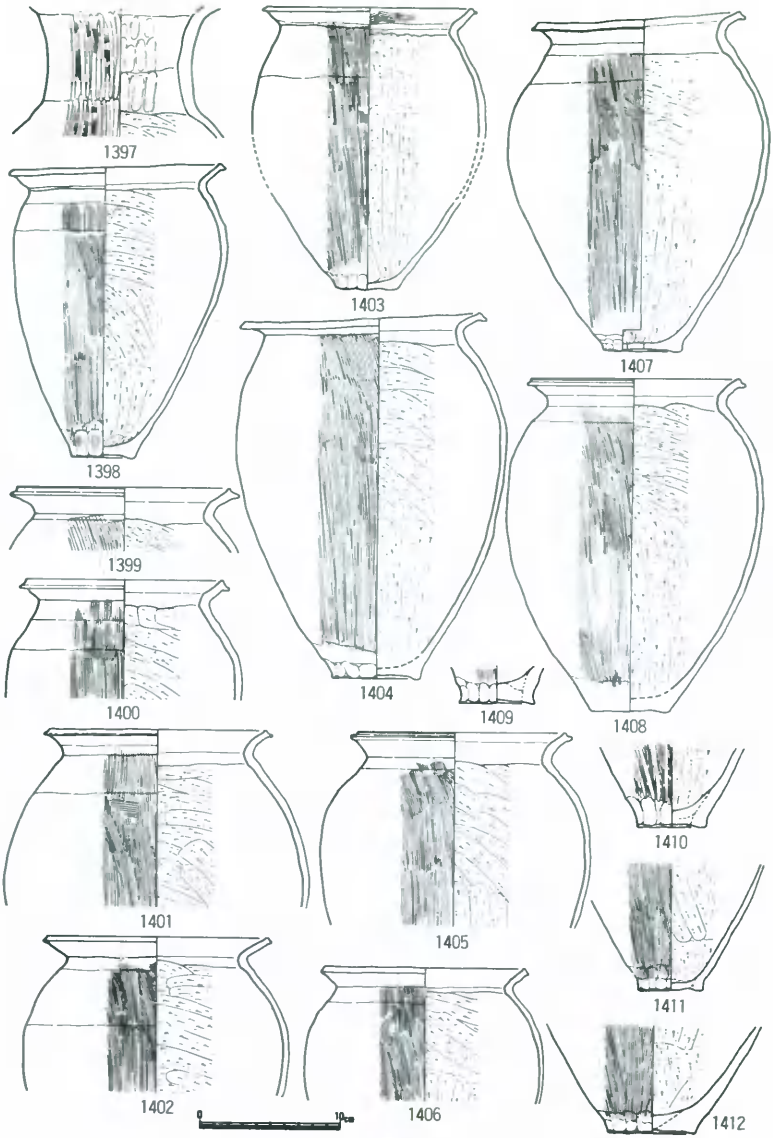
（第146～148図）

D-11の南東部，溝－17の北側において検出された土壙で，その一部は土壙－66によって切られている。

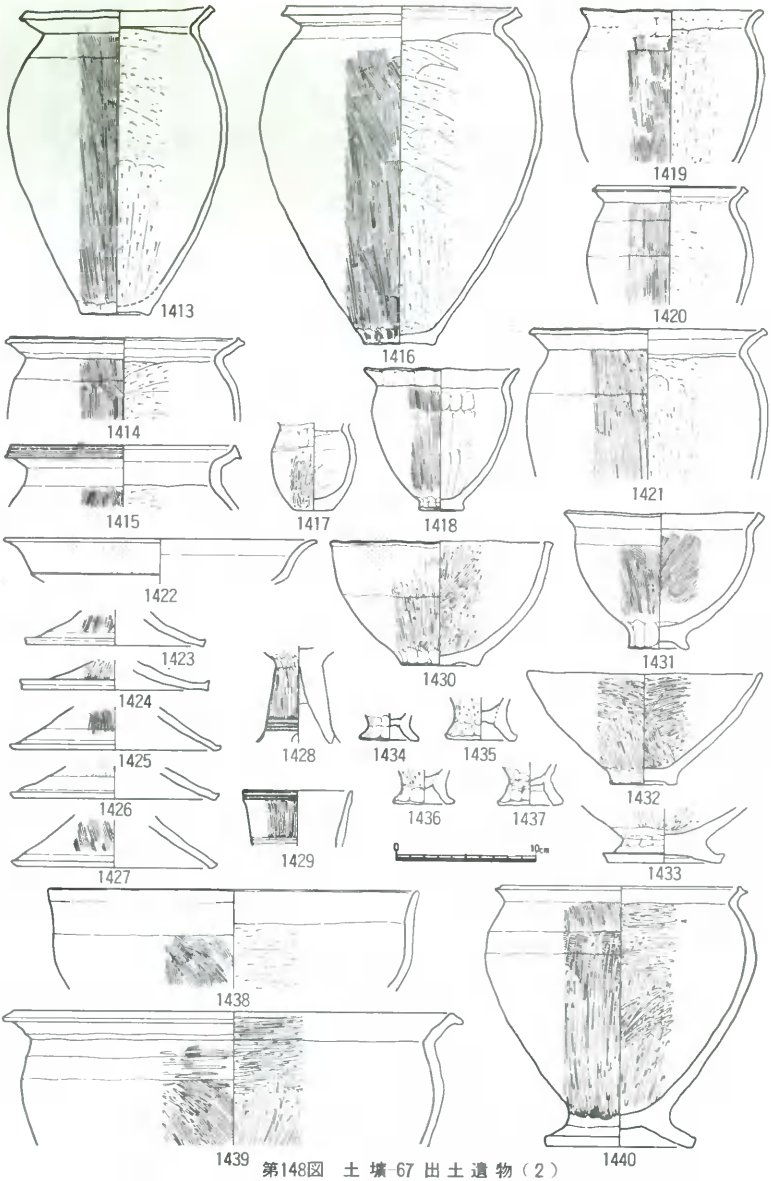
平面形は不整形で，深さは検出面より約27cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は，細かい砂粒・焼土・炭・灰を含む茶褐色微砂が一層のみである。

出土遺物としては，土器および少量の礫がある。土器は小片のものも多いが，埋土中よりかなり多量に，しかも同時に一括廃棄したかのような状況で出土している。出土した土器の器種としては甕が多く，しかもその中で完形および完形に近く復元できるものも多いのが特徴的である。その他には壺・高杯・鉢および製塩土器がある。

時期は，出土した土器から百・後・Ⅱの新相であると考えられる。



第147図　土　壙-67 出土遺物（1）



第148図　土壙67出土遺物（2）

土　壙—68（第149・150図）

D-11のほぼ中央部，土壙—63・64の西側において検出された土壙である。竪穴式住居—16によってその一部が切られ，また土壙—70の一部を切っている。

平面形は不整長楕円形を呈し，深さは検出面より約30cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は三層認められた。

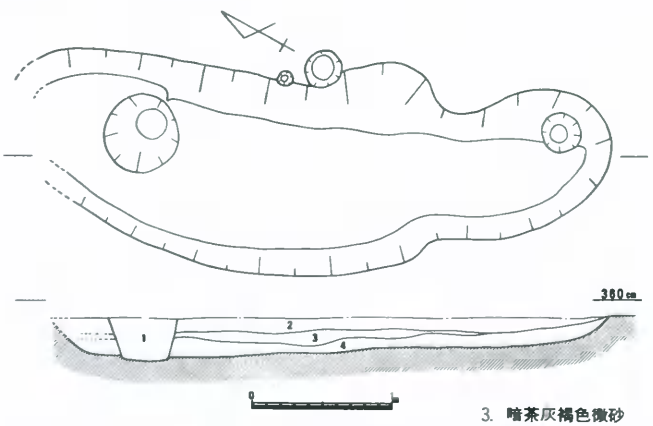
出土遺物としては，土器および土製品などがある。土器は，壺・甕・高杯・鉢・製塩土器などがあり，いずれも小片のものばかりである。製塩土器は台脚部の破片が多く，計測可能なものでは，底径4.0～5.2cm，平均では約4.5cmとなる。第150図12は土錘である。41は軽石であるが用途などについては不明である。

時期は，出土した土器などからほぼ百・後・Ⅱであると考えられる。　（平井）

土　壙—69（第151図）

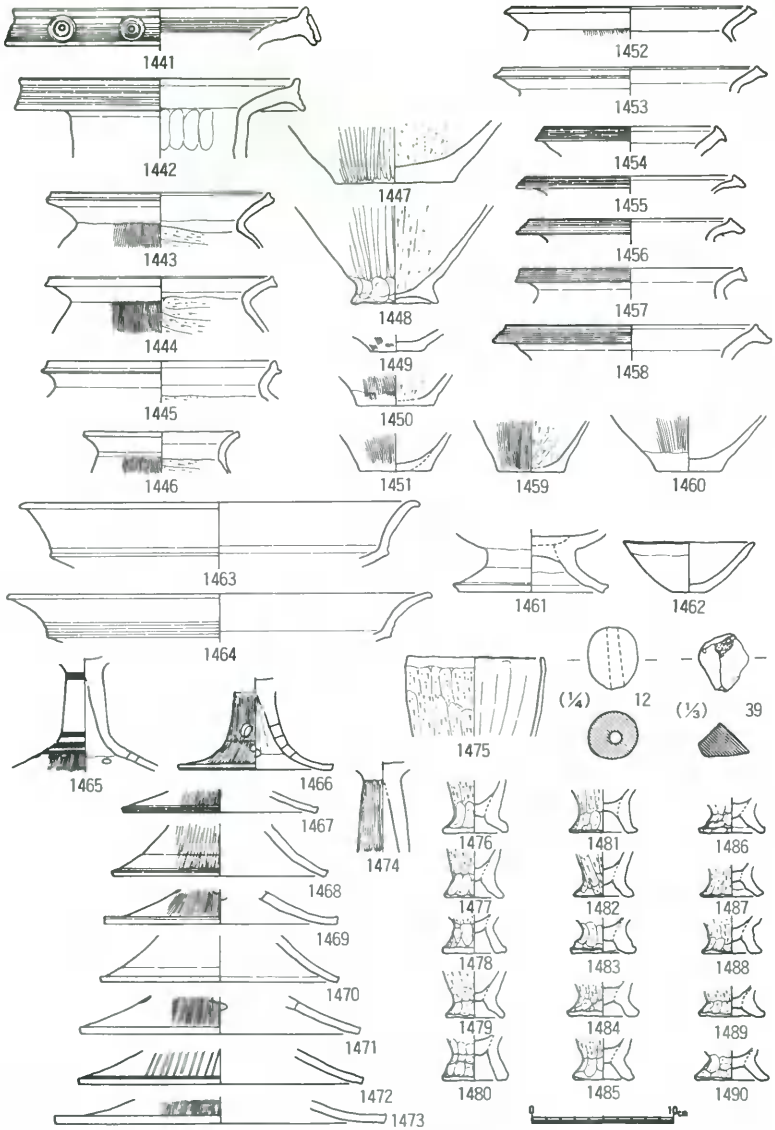
D-11の中央より少し南に位置し，土壙—70と重なっている。包含層中から切り込んでいるため，平面形の検出が困難で，基盤層に近くなってやっと確認された。平面形は楕円形を呈し，大きさは，67×50cm，深さ16cmを測る。埋土中には土器片が多く，上部に大きな石が入っていた。一部に磨滅したところがあり，砥石として使用されたことがわかる。その他にも，小さな円礫やガラス滓が含まれていた。土器には，甕1491～1493，鉢1494～1497，器台1500，高杯1501・1502がある。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

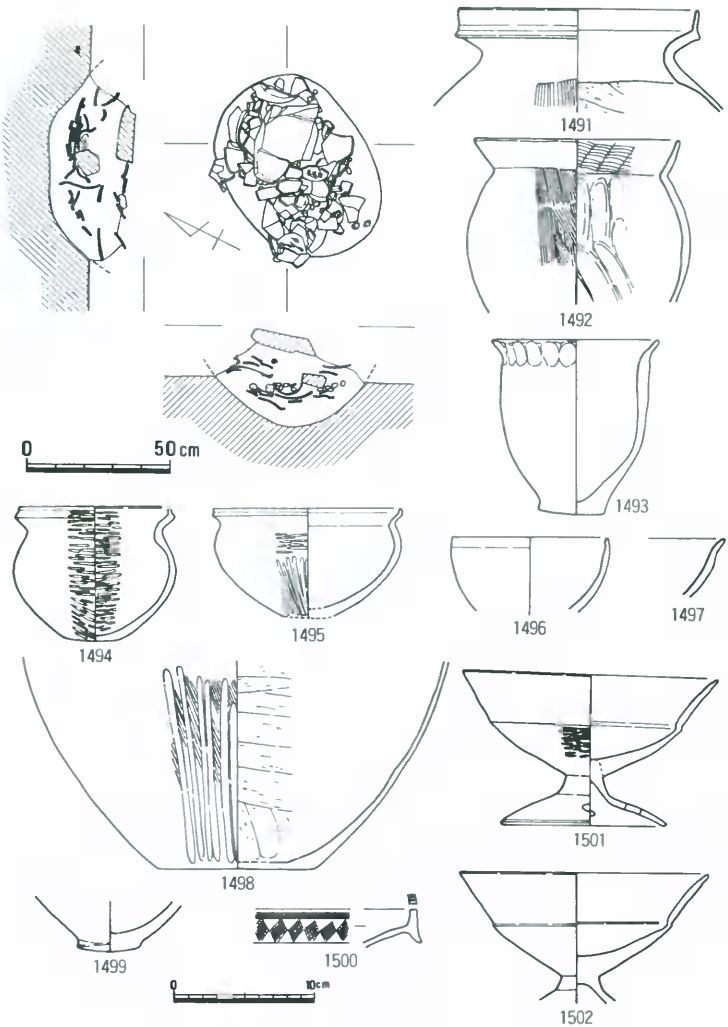


1. 暗茶灰褐色粘質微砂（黄褐色砂のブロックを含む）
2. 暗茶灰褐色微砂（炭・焼土をわずかに含む）
3. 暗茶灰褐色微砂（炭・焼土を多く含む）
4. 灰褐色微砂

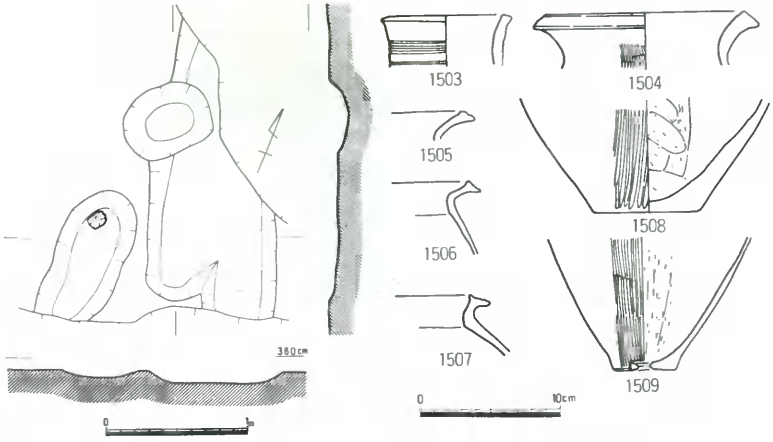
第149図　土　壙-68（1/40）



第150図　土　壙-68 出土遺物



第151図　土　壙-69（1/20）・出土遺物

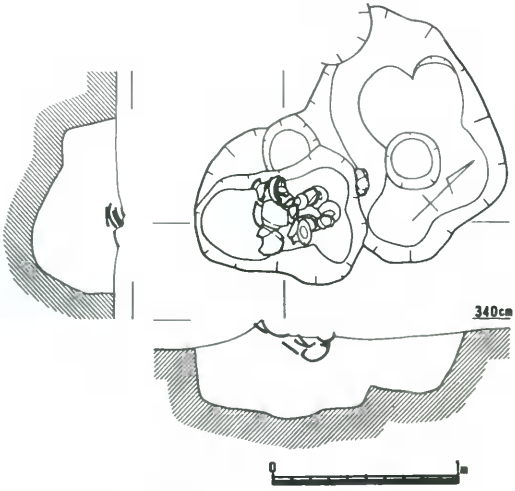


第152図　土　壙-70（右）・71（左）（1/40）・出土遺物

土　壙-70（第152図）

D-11の南東部に位置する。変形した土壙で，現存長204cm，幅90cm，深さ10cmを測る。埋土中からは土器片が出土した。土器には，壺1503，甕1504～1509がある。

時期は，百・後・Ⅱに属する。



第153図　土　壙-72（1/30）

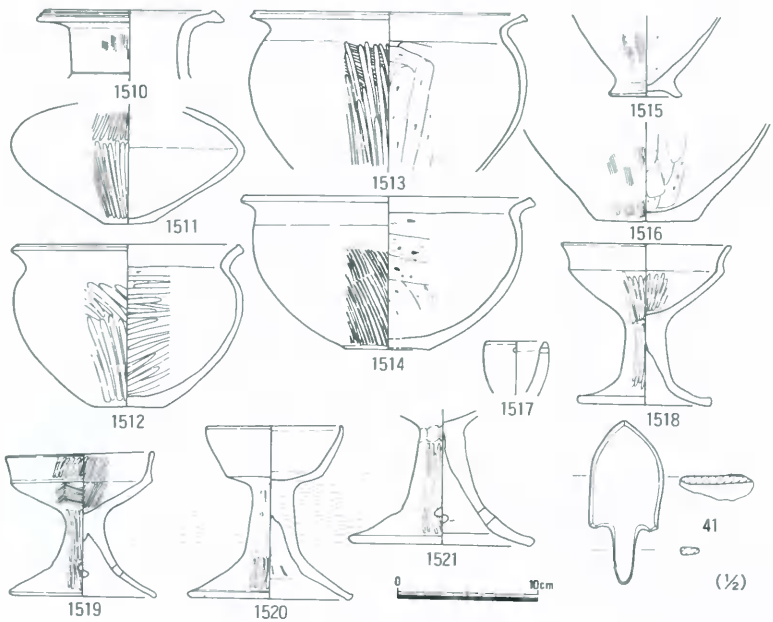
土　壙-71（第152図）

D-11の南東部に位置する。平面形は長楕円形を呈し，100×50cm，深さ8cmを測る。埋土中からは土器片が出土した。詳細な時期はわからないが，弥生時代後期のものである。

土　壙—72（第153・154図）

D-11 と E-11 にまたがった位置にある。竪穴式住居—16 の南西に近接している。付近には柱穴が集中している。土器がまとまって出土した土壙の大きさは，90×75cm，深さ 45cm を測る。柱の抜き取り穴の可能性もある。土器は床面より30cmくらい上にまとまっている。他に鉄鏃1個がある。土器には，壺1510・1511，鉢 1512～1514，小型鉢 1517，高杯 1518～1521 がある。鉄鏃41は平根式で，有茎のものである。全長5.8cm，幅2.5cm，茎部の長さ 2.0cm を測る。

時期は，百・後・Ⅲに属する。



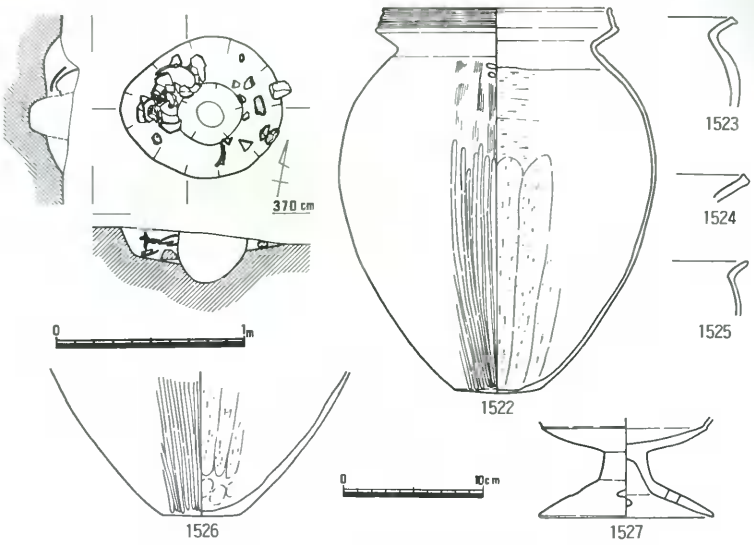
第154図　土　壙-72 出土遺物

土　壙—73（第155図）

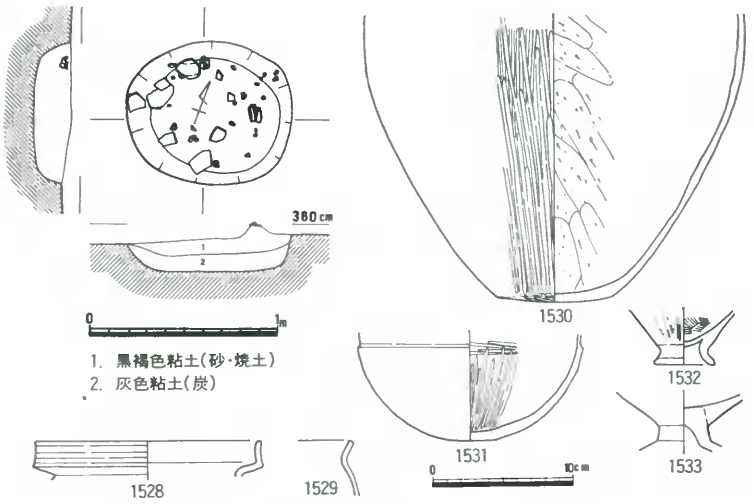
D-11 の中央部南寄りに位置する。土壙の中央部には，後の柱穴が掘られている。平面形は楕円形を呈し，大きさは，86×74cm，深さ16cmを測る。埋土中には，土器と礫を含んでいる。土器には，甕 1522～1525，高杯 1527 がある。時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙—74（第156図）

D-11 と E-11 にまたがっている。竪穴式住居—16 の南に位置し，土壙—75 と接している。



第155図　土　壙-73（1/30）・出土遺物



第156図　土　壙-74（1/30）・出土遺物

平面形は楕円形を呈し，88×75cm，深さ18cmの大きさである。埋土中には，土器片・ガラス滓を含んでいる。土器には，甕1528・1529，鉢1531，台付鉢1532，高杯1533がある。ガラス滓は小さな塊である。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。（正岡）

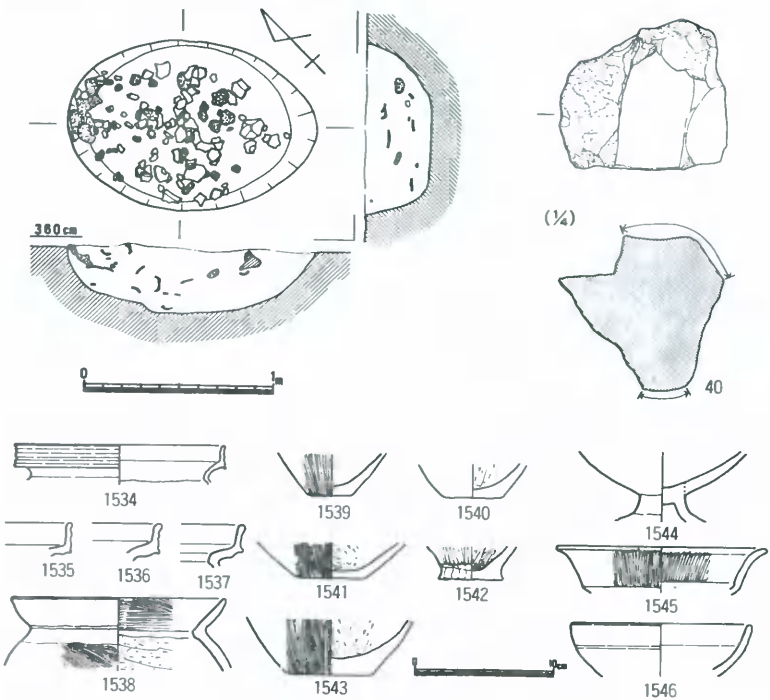
土　壙—75（第157図）

D-11の南東部，土壙—74と土壙—76の間において検出された土壙である。

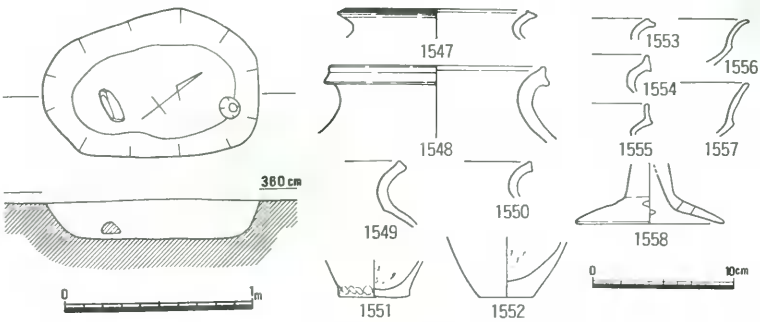
平面形は，約132×90cmの楕円形を呈し，深さは検出面より約35cmを測る。埋土は，炭・焼土および1～5㎜前後の砂粒を含む暗灰褐色微砂が一層のみであった。

この土壙内からは，土器・石器とともにおもに10cm前後の焼土塊，およびガラス滓が出土している。土器は小片のものがほとんどである。第157図40は礫岩製の砥石である。ガラス滓は合計2.96g出土している。

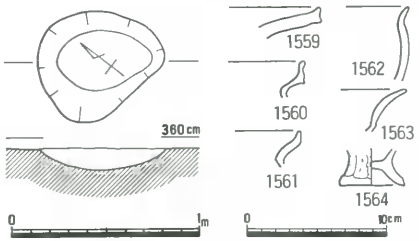
時期は，百・後・Ⅲであると考えられる。（平井）



第157図　土　壙—75（1/30）・出土遺物



第158図　土　壙-76（1/30）・出土遺物



第159図　土　壙-77（1/30）・出土遺物

土　壙―76（第158図）

D-11に位置し，土壙―75の東側に位置する。平面形は歪な楕円形を呈し，大きさは，113×73cm，深さ20cmである。埋土は炭化物を含んだ暗灰褐色粘土である。南側の床面付近には，20×8cmの石が1個ある。埋土中からは土器が出土している。土器はいずれも小破片ばかりである。土器には，甕1547～1555，高杯1556～1558がある。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙―77（第159図）

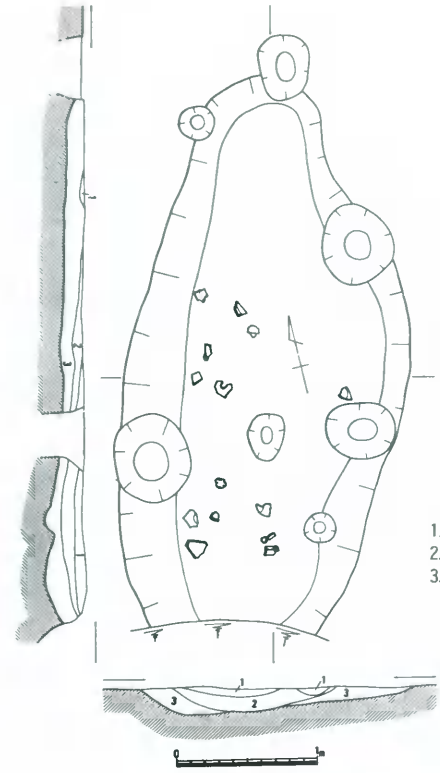
D-11とE-11にまたがっている。土壙―90の南東に接している。平面形は不整楕円形を呈している。大きさは，67×60cm，深さ12cmである。床面は緩やかに湾曲している。埋土は灰褐色粘土である。周辺には柱穴が多く，柱の抜き取り穴の可能性もある。埋土中からは，土器片・ガラス滓を出土した。土器は小破片ばかりで，壺1559，甕1560・1561，鉢1562，高杯1563，台付鉢1564がある。1559は長頸壺の口縁部である。甕は，「く」の字に折り曲げた端部を上方へ拡張し，外面に擬凹線文を施すものもある。鉢はわずかに折り曲げただけの口縁部で，端部は肥厚しない。高杯の口縁部は短い。台付鉢はいわゆる製塩土器で，脚部の外面をヘラケズリしている。ガラス滓は小さな塊である。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙—78（第160図）

D-11の南東部に位置し，一部はE-11にかかっている。南北に長い土壙で，南端部は中世の河道で削られている。現状での大きさは，390×200cm，深さ20cmである。後の柱穴などの掘り込みがある。埋土には，炭・灰を多く含んでいる。埋土中からは，土器を出土している。土器には，壺1565，甕1566・1567，高杯1568・1570，器台1569・1571，台付鉢1576がある。

時期は，百・後・Ⅱに属する。

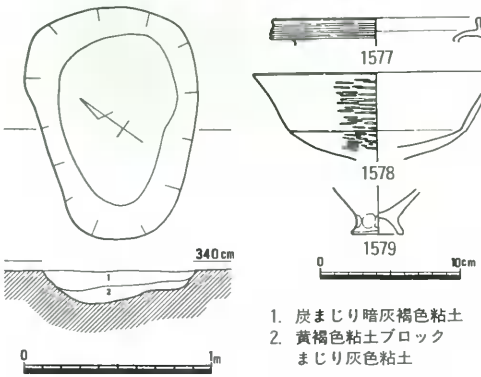


第160図　土　壙-78（1/40）・出土遺物

土　壙—79（第161図）

D-11の南東部に位置し，土壙—78に近接している。平面形は，一方が大きくなった楕円形を呈する。大きさは，123×90cm，深さ18cmである。埋土中からは，土器片が出土している。土器には，甕1577，高杯1578，台付鉢1579がある。甕は口縁部を上方へ折り曲げ，外面に擬凹線文を配する。高杯は杯部が深く，外面には細かいヘラミガキが施されている。台付鉢は外面に指頭圧痕を残している。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。　（正岡）



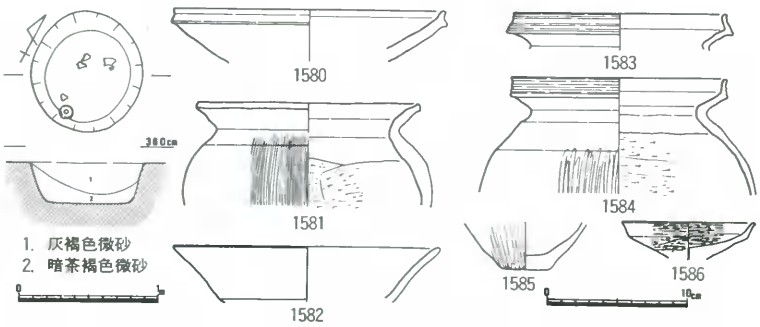
第161図　土　壙-79（1/30）・出土遺物

土　壙—80（第162図）

D-11の南端部，土壙—79の東側において検出された土壙である。

平面形は直径約80～85cmの円形を呈し，深さは検出面より約30cmを測る。埋土は二層認められた。出土遺物としては，少量の土器があるのみである。

時期は，百・後・Ⅳであると考えられる。

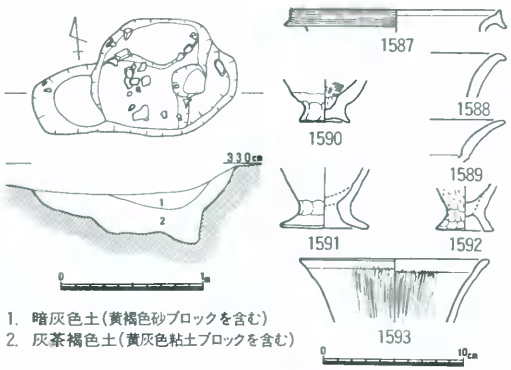


第162図　土　壙-80（1/30）・出土遺物

土　壙—81（第163図）

E-11の北部分において検出された土壙で，一部現代溝によって切られている。

平面形は不整形で，深さは検出面より約30～50cmを測る。底面は平坦ではなく，柱穴状のくぼみも認められる。埋土は二層認められた。



1. 暗灰色土（黄褐色砂ブロックを含む）
2. 灰茶褐色土（黄灰色粘土ブロックを含む）

第163図　土　壙-81（1/40）・出土遺物

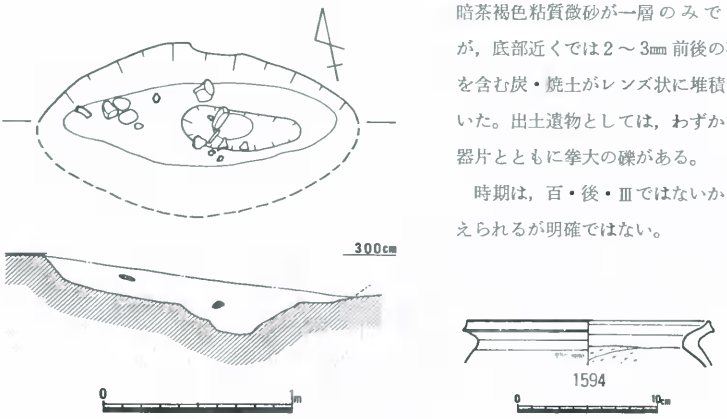
出土遺物としては，土器およびおもに拳大の礫がある。土器は量的には多くなく，また，小片のものがほとんどであり，1層および2層からともに出土している。製塩土器も少量ではあるが出土している。

時期は，明確ではないがほぼ百・後・Ⅱであると考えられる。

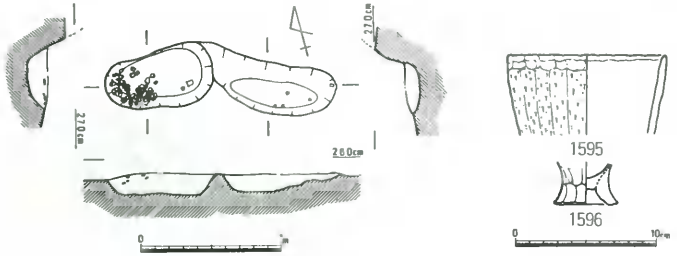
土　壙—82（第164図）

E-11の北部分，土壙—81の西南部において検出された土壙である。この土壙の南半分は微高地の斜面となり，上面は検出できなかった。平面形は長楕円形を呈し，深さは検出面より約15～30cmを測る。埋土は，暗茶褐色粘質微砂が一層のみであるが，底部近くでは2～3mm前後の砂粒を含む炭・焼土がレンズ状に堆積していた。出土遺物としては，わずかな土器片とともに拳大の礫がある。

時期は，百・後・Ⅲではないかと考えられるが明確ではない。



第164図　土　壙-82（1/30）・出土遺物



第165図　土　壙-83（1/40）・出土遺物

土　壙－83（第165図）

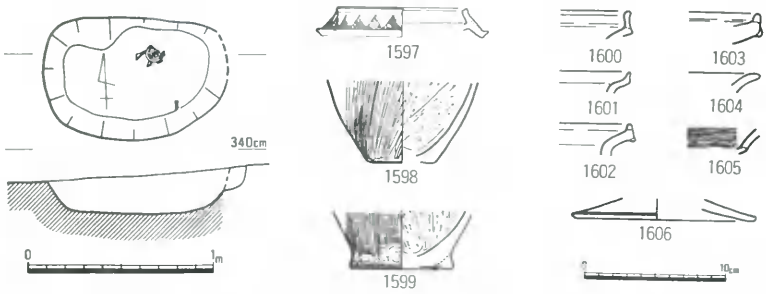
E-11の北部分，土壙－81・82の南側において検出された土壙である。微高地の斜面上に位置しており削平が著しい。二つの土壙が重複しているのか，一つの土壙なのか明確ではない。埋土は，いずれも炭・灰・焼土を含む暗茶褐色土であるが，炭・灰・焼土は東側が特に多く認められた。

この土壙内より出土した土器は量的には少ないが，製塩土器が圧倒的に多いのが特徴である。製塩土器は台脚部分以外に口縁部や体部の破片も認められる。

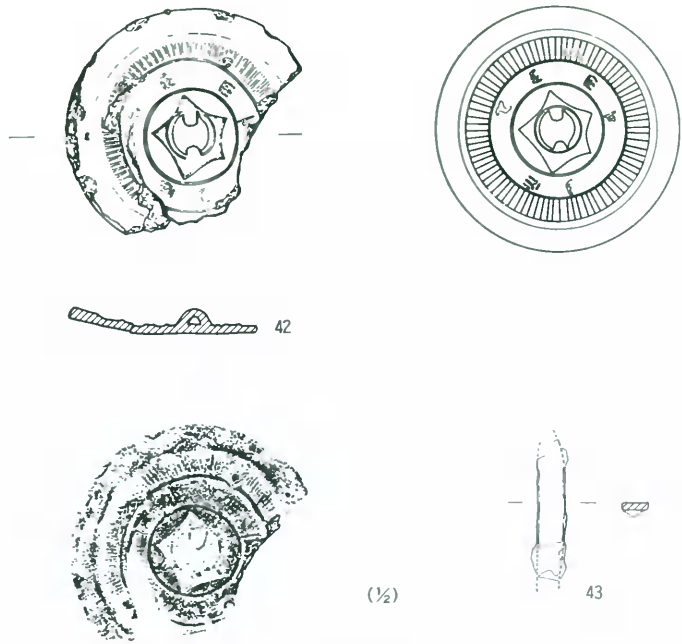
時期は，明確ではないがほぼ百・後・Ⅱ～Ⅲであると考えられる。　（平井）

土　壙－84（第166・167図）

E-11の北西部に位置し，上部は現在まで続いて利用されている用水路によって削平されている。平面形は楕円形を呈し，東端は柱穴状遺構に切られて欠いているが，長径98cm・短径64cm・深さ17cmを測る。他の同時期の遺構検出面から考えて，深さは50cmを越えていたものと考えられる。埋積土はグライ化しており，暗青灰褐色砂質土に炭片を若干含んでいる。



第166図　土　壙-84（1/30）・出土遺物（1）



第167図　土　壙-84 出土遺物（2）

遺物は壺 1598・1603，甕 1600～1602，高杯 1604～1606，器台 1597，小型仿製鏡 42，鉄器 43 等が出土している。いずれも底面から 5 ㎝ 前後浮いた状態である。

小型仿製鏡は約 1/3 を欠損しており，残存部分にも割れが入り，大きくひずんでいる。復元径は 8.7㎝ を測り，縁の部分で 厚さ 4 ㎜ である。鏡背の構成は，平縁―櫛歯文帯―擬銘帯―内行花文帯―鈕の順になっている。平縁は幅 10.5㎜・厚さ 4 ㎜ で 稜は鈍い。櫛歯文帯は幅 8 ㎜で，斜行しているが，その度合は少ない。約 1.6㎝ に 12 本で 一つの単位を構成していると考えられる。擬銘帯は両側を 2 本の圏線によって画され，幅 1 ㎝ を測る。図文は 6 個を確認しえたのみであるが，配置からみて 8 個あったと考えられ，そのうち 3 個は「而」を文様化したものと思われる。内行花文帯は径 3.2㎝ を測り，五花文を鋳出している。花文の大きさは不揃いであり，最小で長さ 1.5 ㎝，最大で 2.1㎝ を測る。径 1.7㎝ の圏線の内側に鈕が位置する。鈕は径 1.3㎝，高さ 6 ㎜ を測り，高さ 2.5㎜ の孔が貫通している。遺存状態は悪く，銹化が著しい。圏線・櫛歯文に比べ図文は鋳出が低く，磨耗も著しい。背文構成の 類似する例として

は，岡山県山陽町便木山8号土壙墓付近出土のものがある（註）。

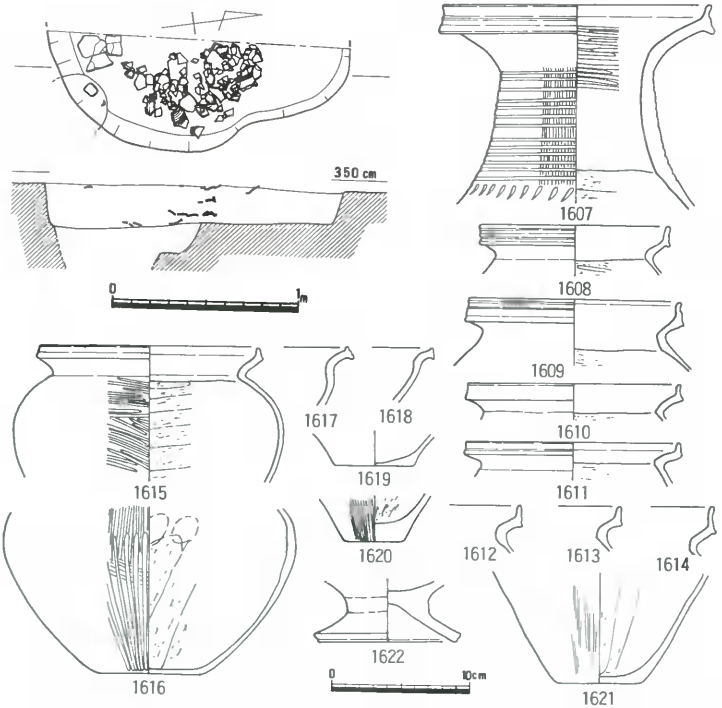
時期は，出土遺物から百・後・Ⅲに比定される。　（光永）

註　神原英朗「便木山遺跡発掘調査報告」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』（2）山陽町教育委員会　1971

土　壙—85（第168図）

E-11に位置し，竪穴式住居—15と重複している。現代まで使用されていた用水路の土手にかかっていたため，1979年度に東側を調査した。西側は，1980年度に調査したが，排水用の溝を掘っていたことなどから西端の一部分を確認したにすぎない。平面形は，ほぼ楕円形を呈し，現状から推定される大きさは，160×130cm，深さ23cmである。埋土中からは，土器片・サヌカイト片を出土した。土器には，壺1607，甕1608～1614，鉢1615～1618などを出土した。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

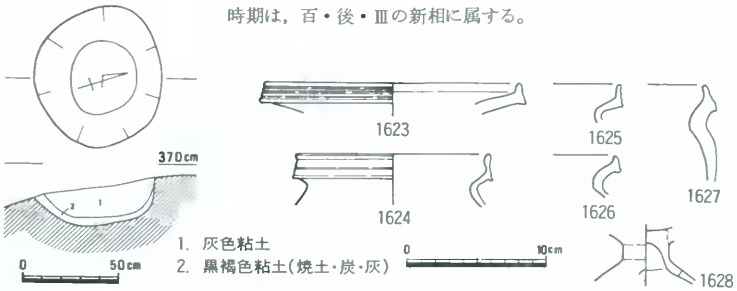


第168図　土　壙-85（1/30）・出土遺物

土　壙－86（第169図）

E-11に位置し，土壙－89と重複している。平面形は楕円形を呈し，大きさは，75×67cm，深さ25cmである。周辺の柱穴などと大きさが類似していることから，柱穴の可能性もある。埋土中からは，土器片が検出された。土器には，壺1623，甕1624～1626，鉢1627，高杯1628がある。いずれも小破片である。

時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。



第169図　土　壙-86（1/30）・出土遺物

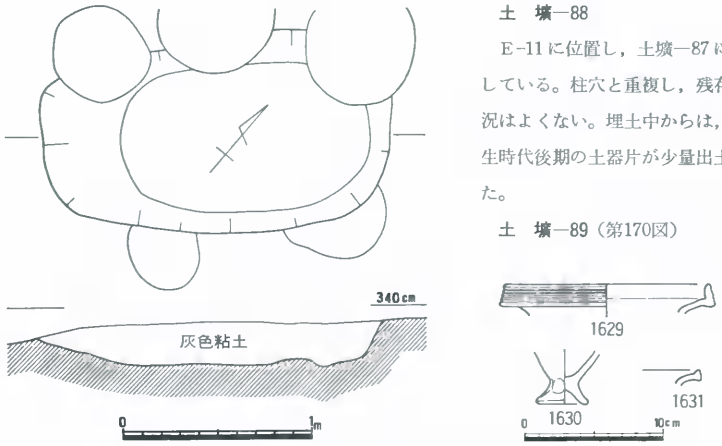
土　壙－87

E-11に位置する。平面形は溝状を呈する。土壙のあたりは中世の傾斜面にかかっているため，残存状況はよくない。大きさは，220×70cmである。埋土中からは，弥生時代後期の土器片が少量出土した。

土　壙－88

E-11に位置し，土壙－87に接している。柱穴と重複し，残存状況はよくない。埋土中からは，弥生時代後期の土器片が少量出土した。

土　壙－89（第170図）



第170図　土　壙-89（1/30）・出土遺物

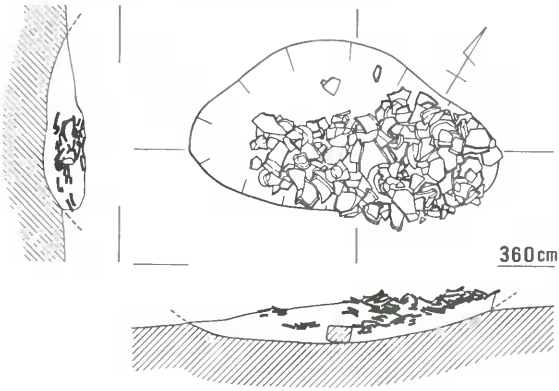
E-11の中央部北端に位置し，一部はD-11にかかる。土壙—28と重複している。平面形は隅が丸くなった長方形を呈する。大きさは，182×107cm，深さ22cmを測る。埋土中からは，土器片が出土しただけである。土器には，甕1629・1631，台付鉢1630がある。

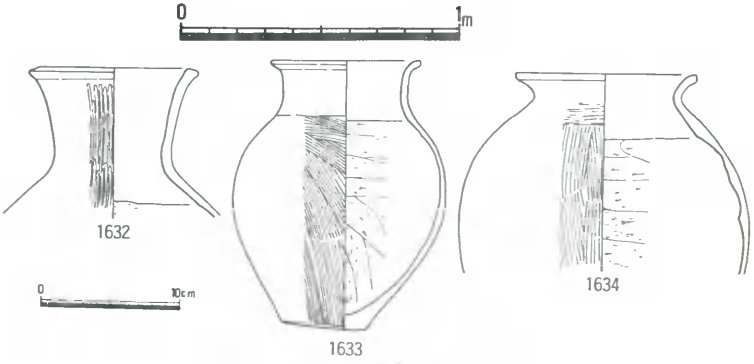
時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

土　壙—90（第171・172図）

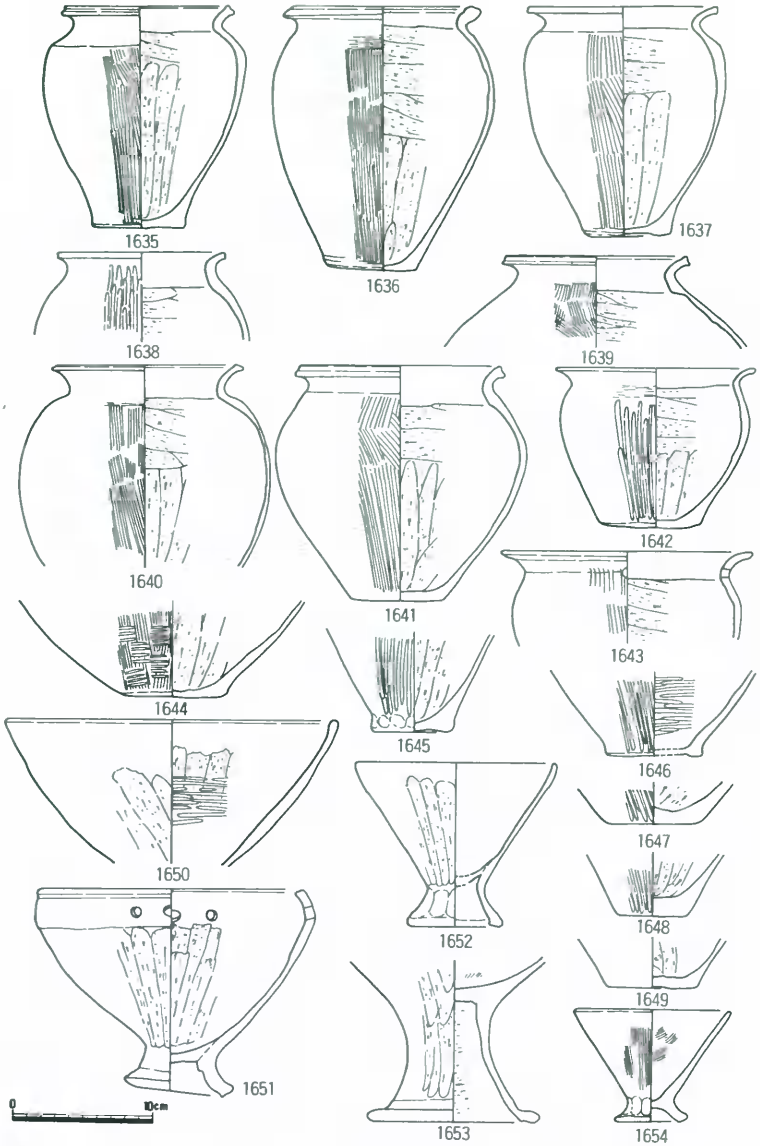
D-11とE-11にまたがっていて，土壙—89と土壙—77の間に位置する。平面形は長楕円形を呈し，110×60cm，深さ18cmを測る。土器がまとまっているが，掘方の確認が困難で，平面形を確認したのは下部になってからである。土器は破片がぎっしりと詰るという状況である。土器には，壺1632・1633，甕1634～1640，鉢1641～1643・1650，台付鉢1651・1652・1654，高杯1653がある。1650も脚が付くものと推定される。1650～1652は杯部が大きくひらき，外面をヘラケズリしている。通常の製塩土器と言われるものとは異っている。

時期は，百・後・Ⅲに属する。（正岡）





第171図　土　壙—90（1/20）・出土遺物



第172図　土　壙-90 出土遺物（２）

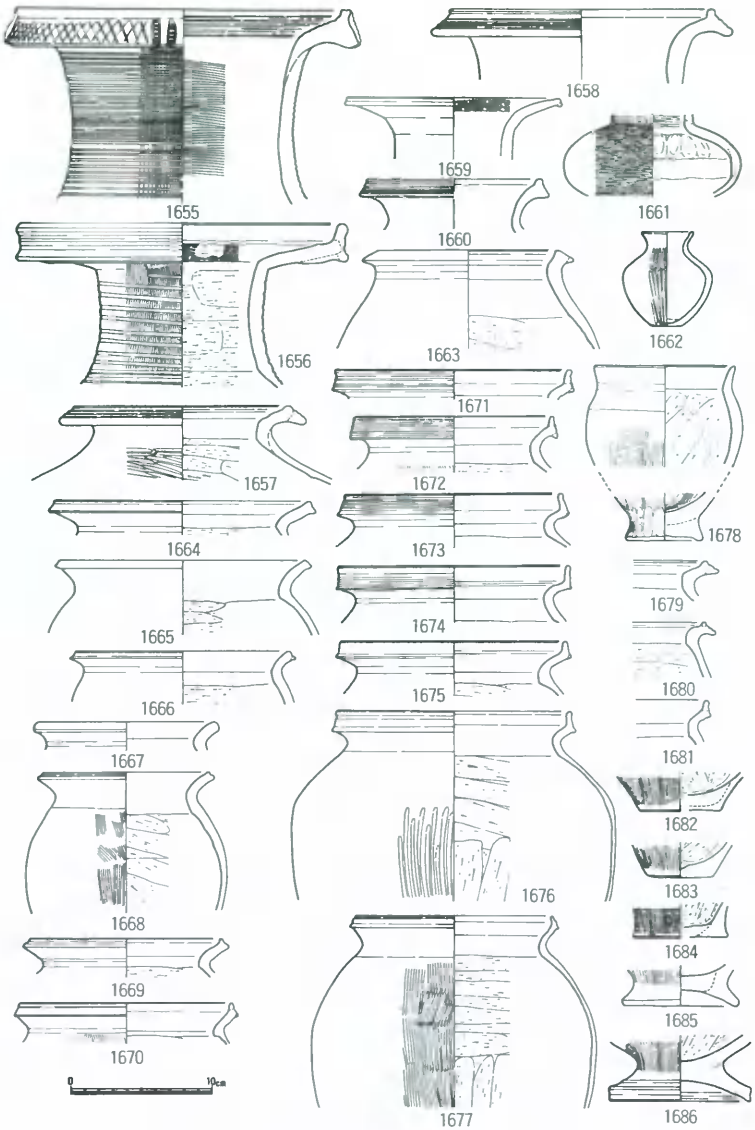
（4）　柱穴出土の遺物（第173・174図）

中須賀調査区は微高地を中心としている。南西側は中世河道によって削られているため，竪穴式住居などの遺構が切断されている。北西部は自然の斜面が残存しており，弥生時代の包含層も残っている。したがって，南西側は，さらに遺構がひろがっていたことがわかる。南側についても丸田調査区の旧河道までは微高地が連続していたものと推定される。旧河道の北西側には，水田がひろがっており，住居区域は途中で終っている。残存する微高地上面についても，近代の土取りのため3分の1くらいが削平されて，まったく遺構を消失している。他に，池や水路で削られたものもある。竪穴式住居や土壙なども多数検出されたが，これらの遺構に伴わない弥生時代の柱穴は約1,000個検出された。平面形はすべて円形を呈する。大きさには大小あり，大きなものでは，直径約80cm，小さなものでは直径約20cmのものである。柱穴のまとまりを確認することができなかったが，竪穴式住居の掘り込みが30～40cm残存しているものがある点からすれば，高床式の建物ないし平地式の建物が存在した可能性を考慮する必要があるかもしれない。柱穴の最も集中しているのは，D-8・D-9・D-10・D-11である。

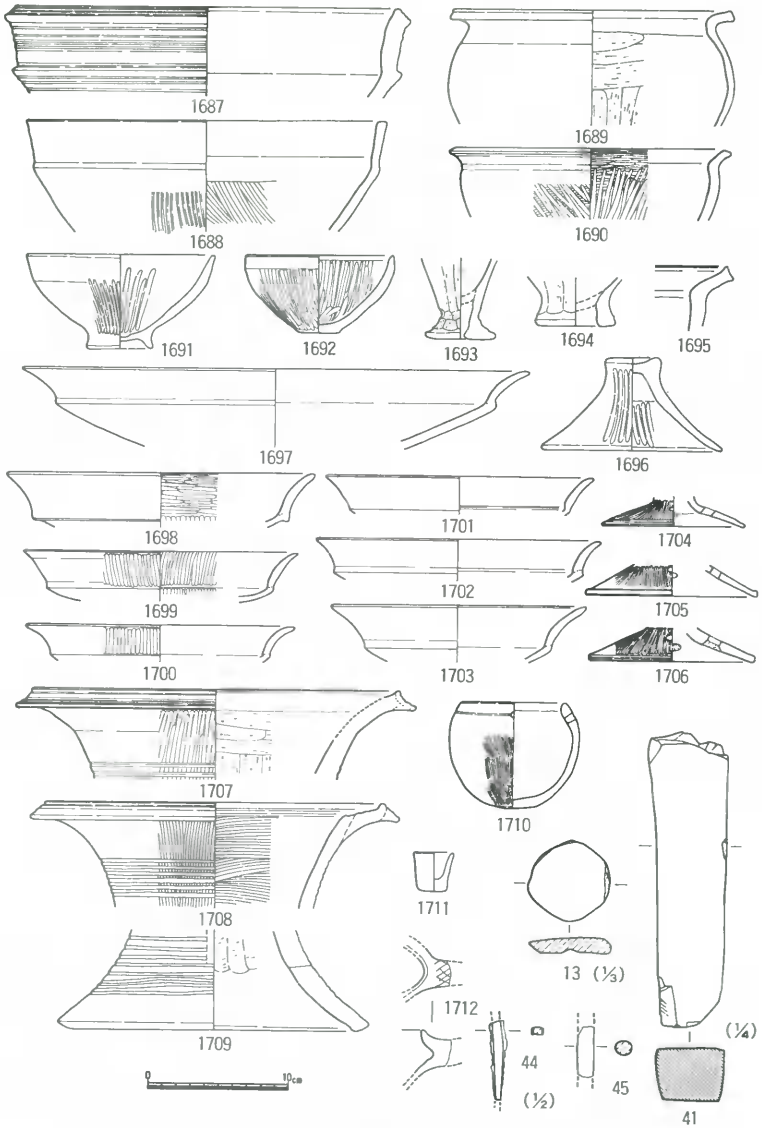
柱穴からは，土器片・土製品・石器・鉄器などが出土している。

土器には，壺・甕・鉢・蓋・高杯・ひさごなどがある。壺には，長頸壺と小型壺がある。長頸壺は筒状の頸部から口縁部が外反し，端部は上下に拡張する。口縁端部外面には，格子文と棒状浮文を配するものと凹線文をめぐらすものがある。頸部内面は横位のハケメのものと横位のヘラケズリを施すものがある。小型壺1662は小さく絞った頸部から短く外反する。外面は縦位のヘラミガキを施している。胴部片だけのもの1661では大きく張った胴部の外面に細かい横位のヘラミガキを施している。甕では口縁部を「く」の字状に折り曲げて外反させる。口縁端部は肥厚しないもの，わずかに肥厚するもの，上下に拡張するものがある。拡張した口縁端部外面には凹線文をめぐらすものがある。鉢は口径20cm前後のものと口径10cm前後のものがある。内面はヘラケズリのままのものとヘラミガキを施すものがある。小型の鉢にはあげ底になるものがある。台付鉢には外面をヘラケズリしたいわゆる製塩土器もある。高杯の口縁部は浅い皿部から上方は湾曲しながら外反する。器台は口径25cm前後のものがある。外面には横位の沈線をめぐらす。手捏ねの小型鉢がある。胎土は精製粘土である。ひさごは小破片で，把手の部分には格子文を施す。

土製品には，土器片転用の紡錘車13が1点ある。内面はヘラケズリが残っており，内面から穿孔をはじめているが，途中でやめている未製品である。鉄器は小破片のため詳細がわからないが，断面が円形のもの45と方形のもの44があり，いずれも棒状を呈している。砥石41は断面方形で細長い形状を示す。両端を除き4面を使用している。



第173図　柱穴内出土遺物（1）



第174図　柱穴内出土遺物（2）

（5） 溝

溝－2

D-7の北隅付近からD-8の南隅方向へ続く。微高地の縁辺に沿っていて，一部途切れるところがある。比較的良く残存しているところでは，幅30cm，深さ12cmを測る。

溝－3

D-7の中央部付近に位置し，溝－2の西側に接している。2m余りを確認しただけで，遺物は出土していない。幅30cm，深さ17cmである。

溝－4（第175・176図）

D-7に位置し，溝－2と溝－5の交点付近にあたる。長さ120cmを確認しただけで，幅20cm，深さ5cmである。埋土中からは高杯の脚部1713を出土した。

溝－5（第176図）

D-7からD-9に連続するが，近代の土取りや中世の溝によって切断されたところもある。幅30cm，深さ25cmくらいで，埋土中には土器・礫などを含んでいる。埋土は灰褐色粘土である。土器には壺1714・1715・1720，甕1716～1719・1722，鉢1721・1726，高杯1727～1729がある。

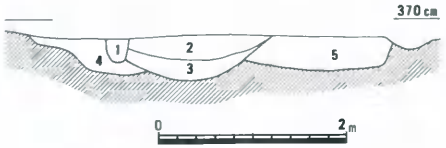
時期は，百・後・Ⅲの新相に属する。

溝－6

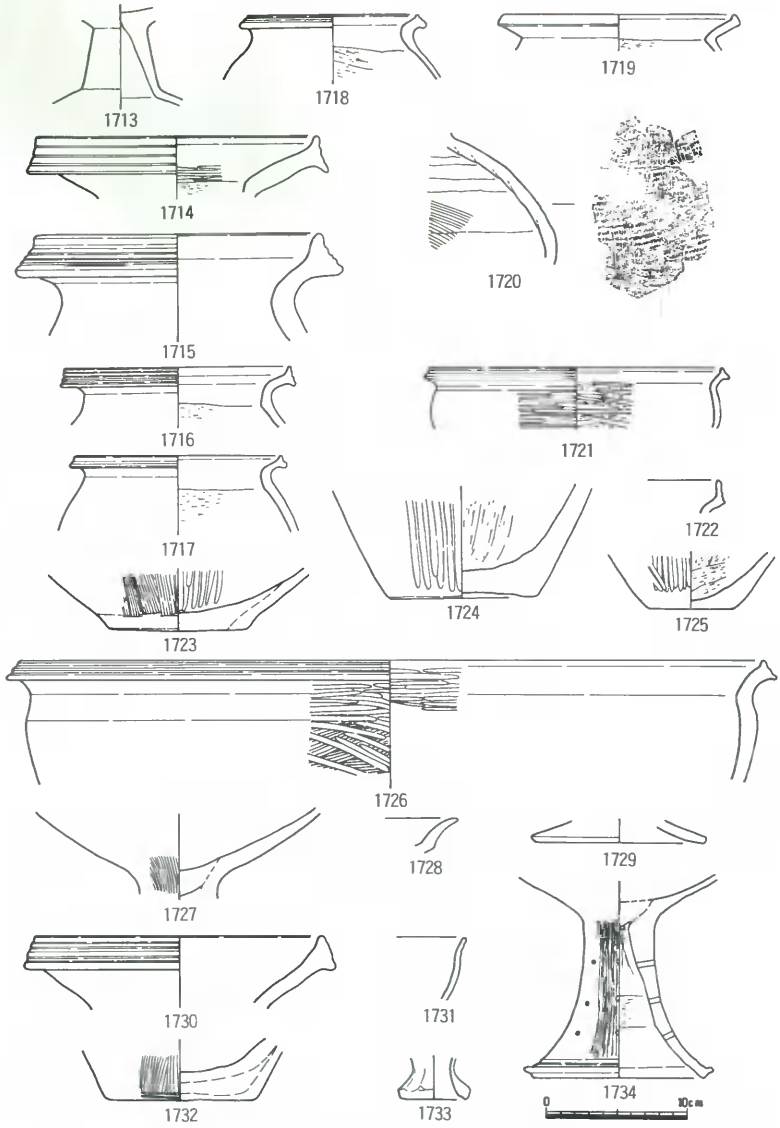
D-7からD-8に連続するが，古墳時代の竪穴式住居や近代の土取りで削平されている。幅30cm，深さ5cmくらいである。溝－5を切っているが，遺物がなく，詳しい年代は判明しない。

溝－7（第175図）

D-8に位置し，東側は近代の土取りで，西側は中世の河道で削られている。上層には古墳時代の竪穴式住居がある。幅150cm，深さ50cmである。埋土は上部が茶褐色粘土で，下部が灰青色粘土まじり細砂である。埋土中からは良好な遺物を出土していないが，溝－8を切っており，溝－6に切られている。



第175図 溝-1・4・7・8（1/60）



第176図　溝-4・5・9 出土遺物

溝－8（第175図）

D-8に位置し，溝－7に切られている。残存部分で測ると，幅130cm，深さ40cmである。埋土はやや濃い茶褐色粘土で，埋土中には，弥生時代後期に比定される土器片がある。他には，縄文時代晩期，弥生時代前期，同中期の土器片も含まれている。

溝－9（第176図）

D-8に位置し，ほぼ南北方向を示している。北側は現代まで利用されていた溝によって切られ，上層には，土壙－6・7がある。幅60～100cm，深さ12cmで，埋土中には，土器片・焼土塊・円礫を含んでいる。土器には，壺1730，鉢1731，高杯1734，台付鉢1733などがある。

時期は，百・後・Ⅱに属する。

溝－10・11

D-8に位置し，溝－9によって切られている。溝－10と溝－11は，ほぼ同一の溝のもので，北西側の一部深くなった部分を溝－11とする。全体の大きさは，幅230cm，深さ30cmである。溝－11はさらに7cm深い。埋土中からは良好な遺物を出土していないが，溝－7・8に続くものであろう。

溝－12

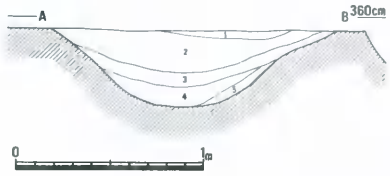
D-8に位置し，溝－9・10・11の南側にあたる。両端を切られている。少し蛇行し，幅70cm，深さ20cmである。南側は途中に段がある。埋土は灰褐色粘土で，埋土中には，弥生時代後期後半の土器片がある。他に弥生時代前期の土器片・丹塗りの土器片も含まれている。

（正岡）

溝－13（第177図）

D-8の北東部からD-9の北西隅にかけて位置する。竪穴式住居－1，土壙－9・10・12～14，井戸－9等の遺構に切られ，両端部は近世以降の用水路に削平されている。幅は断面図を示した屈曲部付近で約190cmを測る他は平均130cm程度であり，深さは約40cmである。

溝底のレベルを追うと，北から南へ流れ，屈曲して東へ続くものと考えられる。この場合，上流には溝－1等が弥生時代中期から後期にかけて流路を保っており，これからの分流も考えられる。



1. 淡灰褐色砂質土
2. 淡灰褐色土
3. 灰褐色砂質土（黄灰色土ブロック含）
4. 灰褐色砂質土
5. 灰褐色砂質土（黄灰褐色土ブロック多含）

第177図　溝-13（1/30）

時期については，弥生式土器の細片が出土しているのみであり，他遺構との関係から弥生時代後期を下らないものと考えるにとどめたい。　（光永）

溝－14（第178図）

D-10とE-10にまたがっている。長さ3mくらいを検出したにすぎないが，竪穴式住居－13を切っている。東西方向を示し，幅20cm，深さ8cmくらいである。埋土は灰褐色粘土で，少量の土器片を出土している。土器には，甕1735があり，弥生時代後期のものである。

溝－15

D-11に位置し，竪穴式住居－16の東側にあたる。東側は調査区外に連続し，西側は竪穴式住居－16の壁まで確認される。幅25cm，深さ13cmである。埋土中の遺物は少なく，小破片が少量検出されたにすぎない。

時期は，百・後・Ⅲに属する。

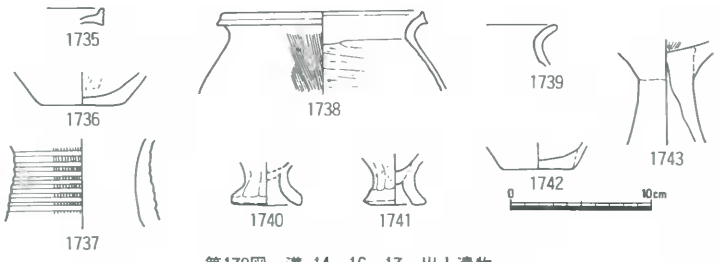
溝－16（第178図）

竪穴式住居－16の東側に位置し，南に弧状をえがいている。東側は調査区外に及び，西側は竪穴式住居－16の壁まで確認される。埋土中には弥生式土器片が含まれている。土器には，甕1738，1739があり，他にも小破片がある。

溝－17（第178図）

D-11に位置し，残存する微高地の端部近くにある。少し蛇行し，東側は微高地の肩部まで続き，西側は，土壙－90の掘方まで確認される。幅28cm，深さ15cmを測る。埋土中からは，少量の弥生式土器片を出土している。土器には，壺1737，高杯1743，台付鉢1740・1741がある。壺は長頸壺の頸部で，縦位のハケメのあと沈線をめぐらす。色調は灰白色を呈する。高杯は杯部と脚部を別々につくって接合したものである。色調はにぶい黄橙色を呈する。台付鉢はいわゆる製塩土器である。

時期は，百・後・Ⅱの新相に属する。

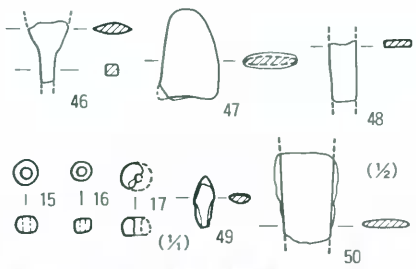


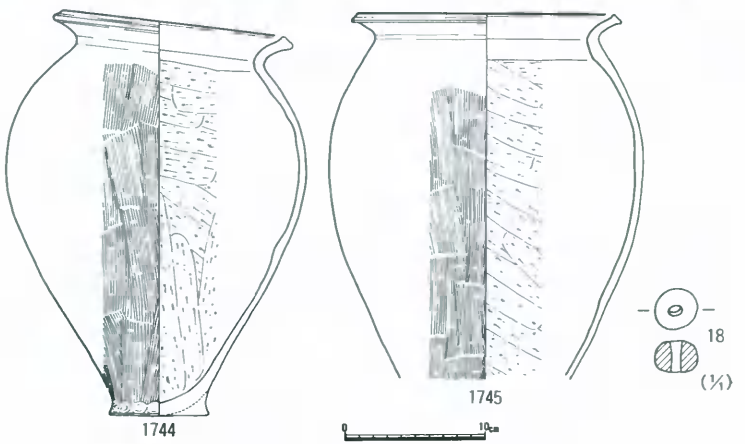
第178図　溝-14・16・17　出土遺物

（6） 包 含 層（第179～181図）

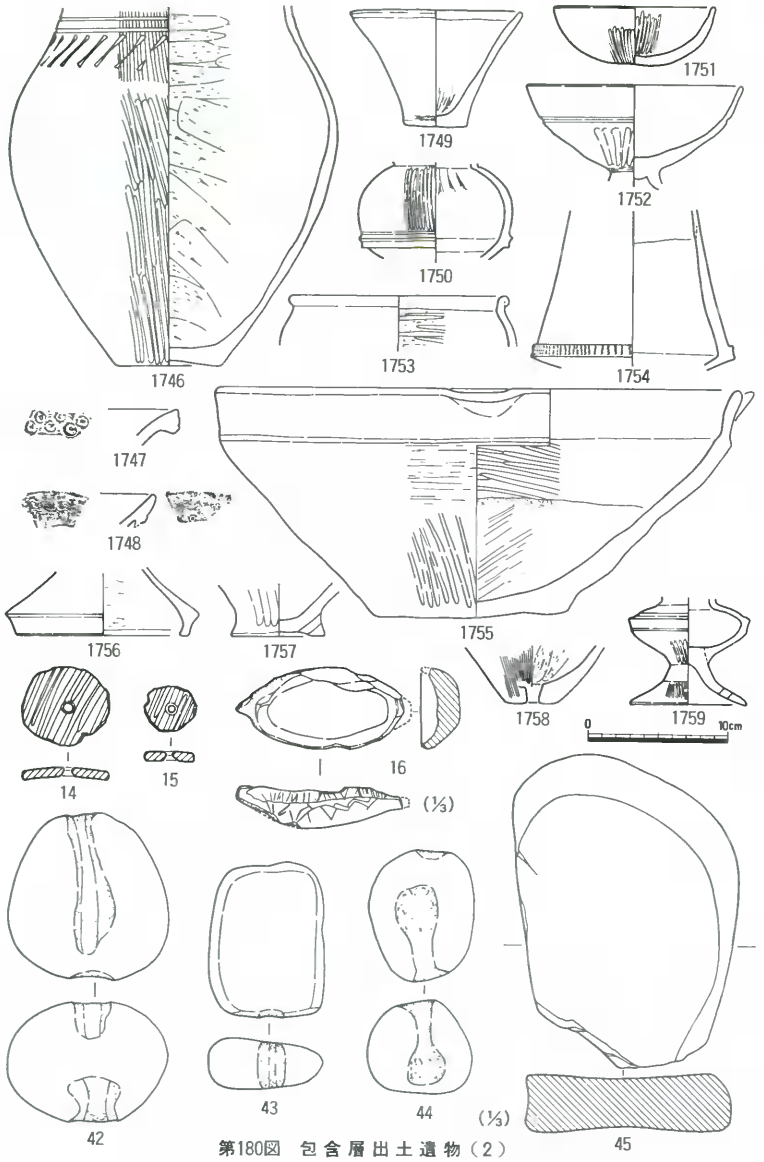
微高地の上面には，多数の遺構があり，全面に包含層がひろがっている。南西部は中世河道で削られているため斜面堆積は確認されていないが，北西部には斜面堆積層も残存している。包含層の途中から切り込んだ遺構もあるが，平面の確認ができず，少しずつ水平に掘り下げたことから土壙などの上部埋土の遺物を包含層として取りあげたものもある。また，弥生時代後期後半の遺構出土のサヌカイト製石器についてもここにまとめた。包含層出土の遺物には多量の土器片の他に，鉄器・銅鏃・ガラス玉・土製品・石器がある。

土器は多量に出土しているが特色のあるものをとりあげた。大型鉢 1755 は，片口があり，内面に炭化物が付着している。小型の鉢には，口縁端部を玉縁状にしたもの 1753 もある。土製品には，土器片転用の紡錘車２点と舟形土製品がある。舟形土製品は一部を欠失するが，楕円形の胴部の両端をつまみ出し，一方を舳，一方を艫としている。側面には，波形の線刻がある。石製品には，敲石・石錘・砥石・打製石庖丁・磨製石庖丁・石鏃がある。銅鏃は１点あり，鉄器には鏃のほか，鉇と推定されるものもある。ガラス玉は４点ある。

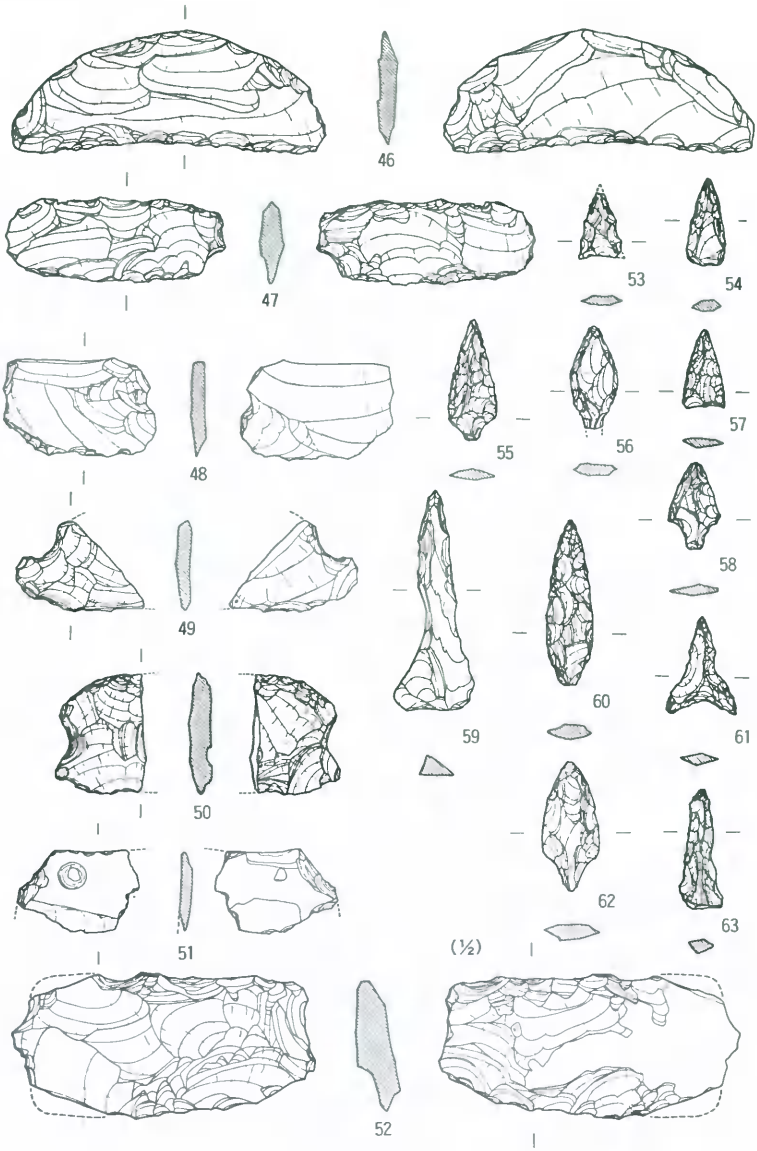




第179図 包含層出土遺物（１）



第180図　包含層出土遺物（２）



第181図　包含層出土遺物（3）

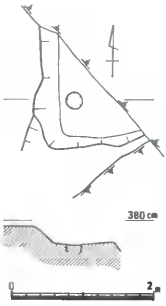
5. 古墳時代の遺構・遺物

中須賀調査区のほぼ全域に遺構が分布している。西側は中世の河道で削られたため消失し，微高地上面は中世の遺構と重複するため，柱穴や溝が掘り込まれている。北西部は近代の土取り工事によって，遺構を削りとられたところが多い。確認された遺構には，竪穴式住居11軒，井戸1基，土壙3基，溝6本などがある。

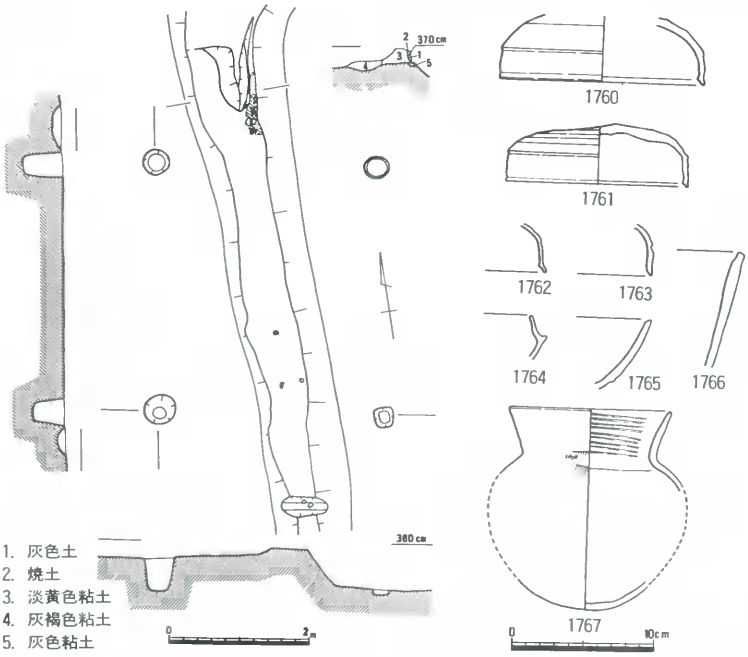
（1）竪穴式住居

竪穴式住居―17（第182図）

D-7の北東部に位置し，大部分は現代まで使用されていた用水路で削られている。わずかに残った南西隅から竪穴式住居



第182図　竪穴式住居-17(1/80)



第183図　竪穴式住居-18（1/80）・出土遺物

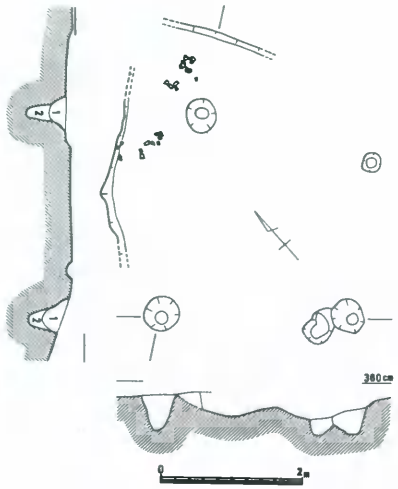
と確認したものである。一辺はほぼ南北方向を示している。掘り込みの深さは約25cmを確認できる。床面は水平となり，この住居に伴う柱穴は，すでに削平された部分に位置し，検出されなかった。遺物も出土していない。

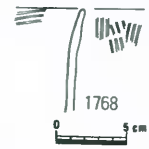
時期はその形態から周辺にある古墳時代の竪穴式住居と同様と推定される。

竪穴式住居－18（第183図）

D-7からD-8にかけて位置する。大部分が土取りのため削平されている。しかし，土取りの間に残されたわずかな部分に炉跡の一部や床面が残存していた。かろうじて残った北と南の端部で測ると南北664cmである。東西方向については測定できない。炉跡は北側に位置し，東側半分が削平されている。残された部分でみると壁の内側へ粘土でかまどを築き，外へ向って煙道がのびる。天井部分は残っていないが，焚口付近の床面は，よく焼けており，焼土面・炭層がひろがっている。壁面の焼土面は，少し湾曲した状況が残っている。東側は床面から50cmも掘り下げられていたが，かろうじて柱穴が残り，4本柱であったことがわかる。柱穴はほぼ東西，南北に並び，北側の柱間は308cm，西側の柱間は345cmである。南側には壁体溝の一部が残っている。

遺物は，かまどの焚口付近と床面上から少量出土した。遺物には，須恵器・土師器がある。須恵器には，杯蓋1760～1763，杯身1764，高杯1765，土師器には，甑1766，壺1767がある。時期は5世紀末～6世紀初頭と考えられる。





第184図　竪穴式住居－19（1/80）・出土遺物

竪穴式住居－19（第184図）

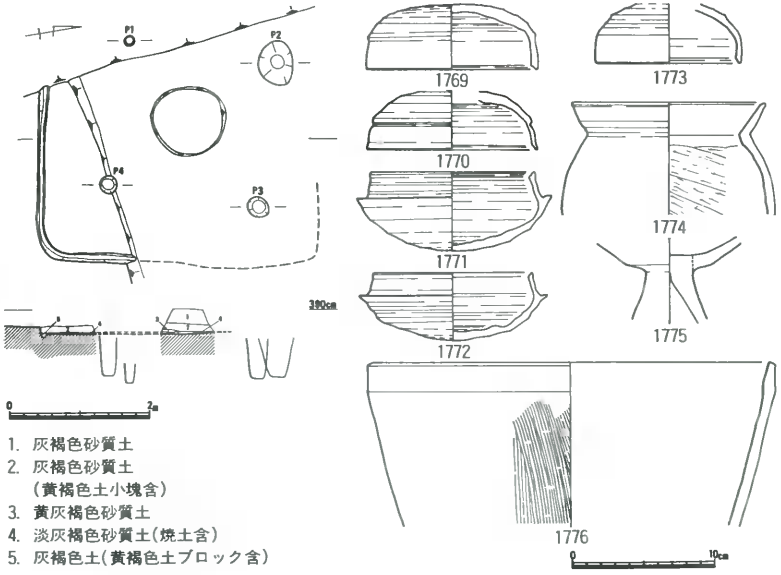
D-8からE-8にまたがっており，一部は西側へもかかっている。東側は土取り工事のため削平され，北側も一部が削平されている。西側は中世の河道のため消失していて，全容を確認することはできない。中央部付近も溝などの遺構と重複していて，床面が検出しがたくて，北隅においてわずかな掘り込みを確認したことから，竪穴式住居と判断したものであ

る。壁体の全形は判明しないが，北西と北東側の一部が直線的に検出されたことから方形であることがわかる。壁体溝は確認されなかった。柱穴は4本柱であり，少し台形を呈する。北西側の柱間は298cm，北東側の柱間は245cmである。柱穴はいずれも抜き取られた痕が断面から観察される。

床面からは，須恵器と土師器の小破片が検出されたにすぎない。須恵器は図化できるものはないが，周辺の竪穴式住居のものと同様である。土師器には甕1768の小破片がある。時期は5世紀末～6世紀初頭である。（正岡）

竪穴式住居—20（第185図）

D-8の中央部に位置し，近世以降の土取りによって大半を失っており，南東部において壁まで残っている他は中央部分の床面と4本の柱穴を確認できるのみである。ただ，北東隅の部分については，壁体溝の痕跡と考えられる土色の差が見られる。これにより，平面形は方形ないし長方形を呈するものと考えられ，最大長約400cmを測る。壁高は10cmを残すのみである。柱はP-1～4の4本で構成され，柱間距離は南北方向で約220cm，東西方向で約200cmを測る。かまどないしは火処と考えられる焼土遺構は認められず，可能性を残すのは西側の柱穴以西である。



第185図　竪穴式住居-20（1/80）・出土遺物

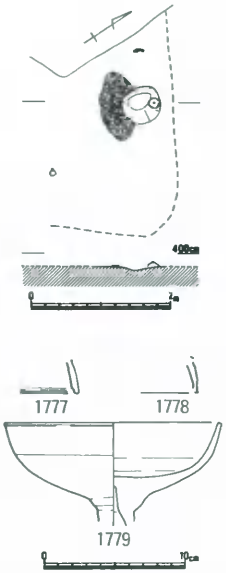
遺物は，須恵器の杯蓋1769・1770・1773，杯身1771・1772，土師器の甕1774・高杯1775・甑1776が出土している。時期は，5世紀末～6世紀初頭に位置づけられる。

竪穴式住居—21（第186図）

D-8の北東部に位置し，井戸—9を切る。遺構として確認しえたのは火処とこれに伴う灰の掻き出しだけである。ただ，床面と考えられる範囲の一部が北辺と東辺の一部で検出できた。これにより，平面形は方形ないし長方形を呈するものと考えられるが，規模は不明である。火処から東辺までの距離は160cmを測る。

火処は，最大径55cmの不整円形を呈し，深さ5cmを測る皿状のくぼみで，強い熱影響を受けた形跡は認められなかった。北東寄りの部分には土師器高杯が伏せた状態であり，支脚に用いられたと考えられる。壁体溝および柱穴は検出されなかった。

遺物は，須恵器杯蓋1777・1778，土師器高杯1779があり，これらによって，時期は5世紀末～6世紀初頭に比定される。



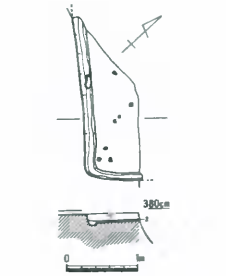
第186図　竪穴式住居-21（1/80）・出土遺物

竪穴式住居—22（第187図）

D-9の北西部に位置し，南東隅の部分を残すのみで，大半は溝—25および現代まで使用されていた用水路によって削られている。南東部では竪穴式住居—24と接しているが，これには切られている。

遺存する壁高は12cmを測るのみであるが，南東隅が残っており，これによって平面形は方形ないし長方形を呈するものと考えられる。柱穴・火処等は検出されなかった。埋積土は，1層が灰褐色砂質土であり，2層が黄灰褐色砂質土である。2層は貼床と考えられ，遺物はこの床面からの出土したものがほとんどである。

遺物は須恵器，土師器の小破片のみであり，これによる時期の決定は困難であるが，竪穴式住居—24に切られることから，6世紀初頭を下限とみなしうる。

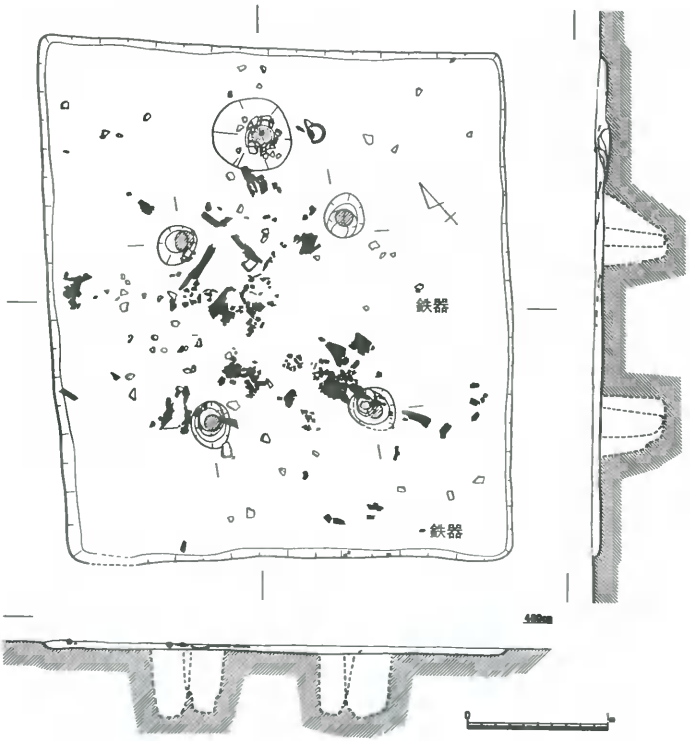


第187図　竪穴式住居-22（1/80）

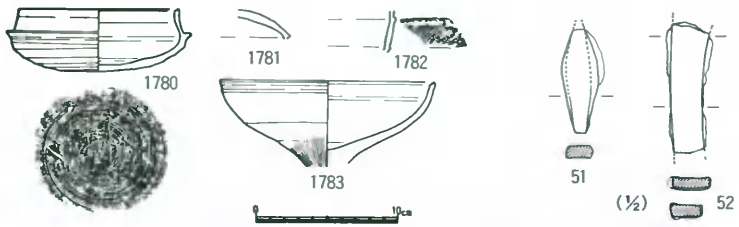
竪穴式住居—23（第188・189図）

D-9の中央部西寄りに位置し，溝—19に切られている。

平面形は台形にちかい長方形を呈し，最大長370cm・幅330cmを測り，長軸を北東に向けている。削平により床面まで7cmを残すのみである。柱は4本であり，それぞれ柱痕跡が確認できた。柱間距離は，長軸方向で130cmと135cmを測り，短軸方向では115cmである。北東部には火処がある。壁と柱のほぼ中間にあり，径55cmを測り不整円形を呈する深さ4cm余りの皿状のくぼみである。表面は熱影響によって焼土化しており，中央には高杯が伏せた状態であり，支脚として用いられたものと考えられる。埋積土は灰褐色砂質土であるが，炭化材・焼土・灰を多く含んでいる。炭化材は，住居中央部で多く残っており，柱材としての位置の比定はできないが，この住居が火災に遇って焼失したことを示している。



第188図　竪穴式住居-23（1/40）



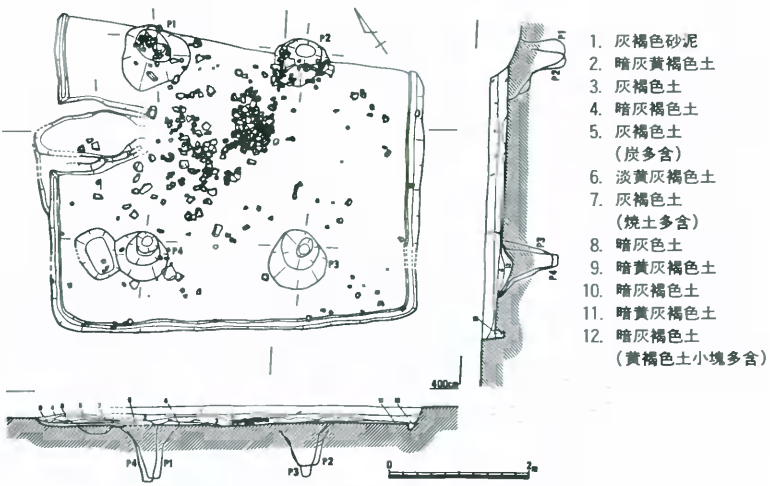
第189図　竪穴式住居-23 出土遺物

遺物は，須恵器の直口壺 1782・杯蓋 1781・杯身 1780，土師器の高杯 1783，鉄器 51・52 等が出土しており，これらから時期は，5 世紀末～6 世紀初頭にもとめられる。

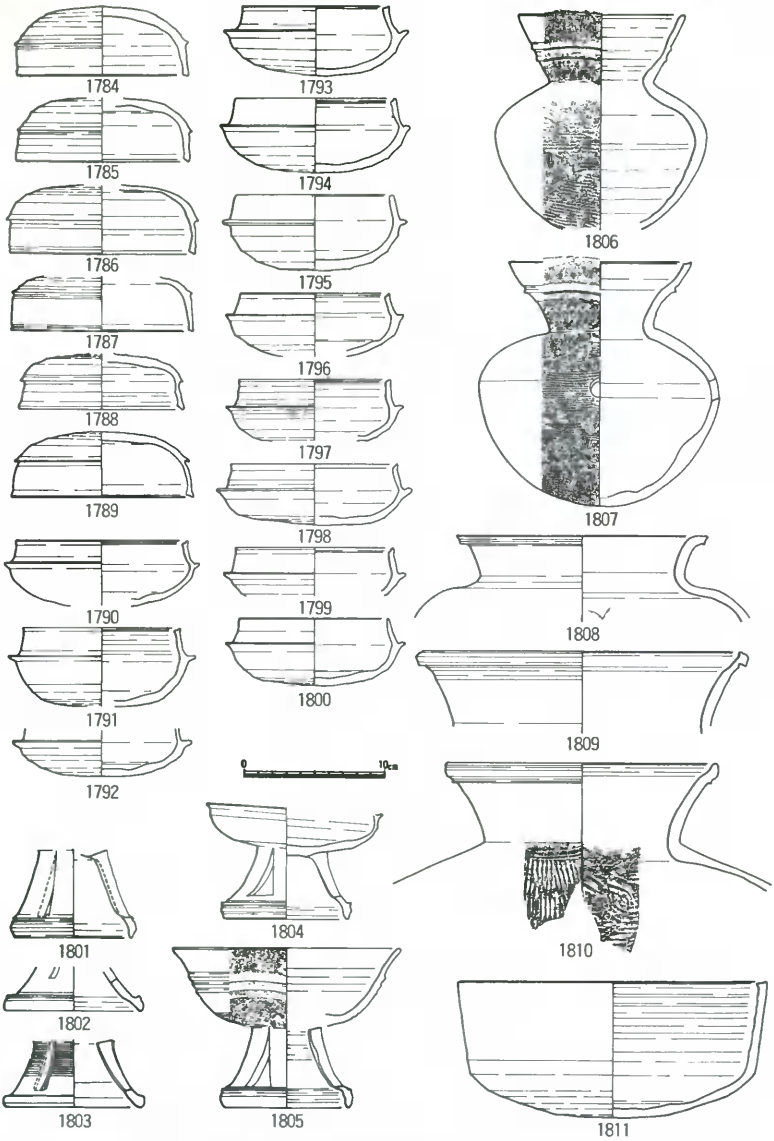
竪穴式住居—24（第190～193図，図版 4－1）

D-9 の中央部北西寄りに位置し，溝—18 に切られ，竪穴式住居—22 を切っている。北東部分は現代まで続いた用水路によって削られており，平面形は確定しないが，北西辺が長い台形を呈するものと考えられる。東西長は 520cm を測り，柱と壁との距離から推定すれば南北長は北西辺で 560cm 前後の数値が得られる。壁は高さ 25cm 迄残っていた。

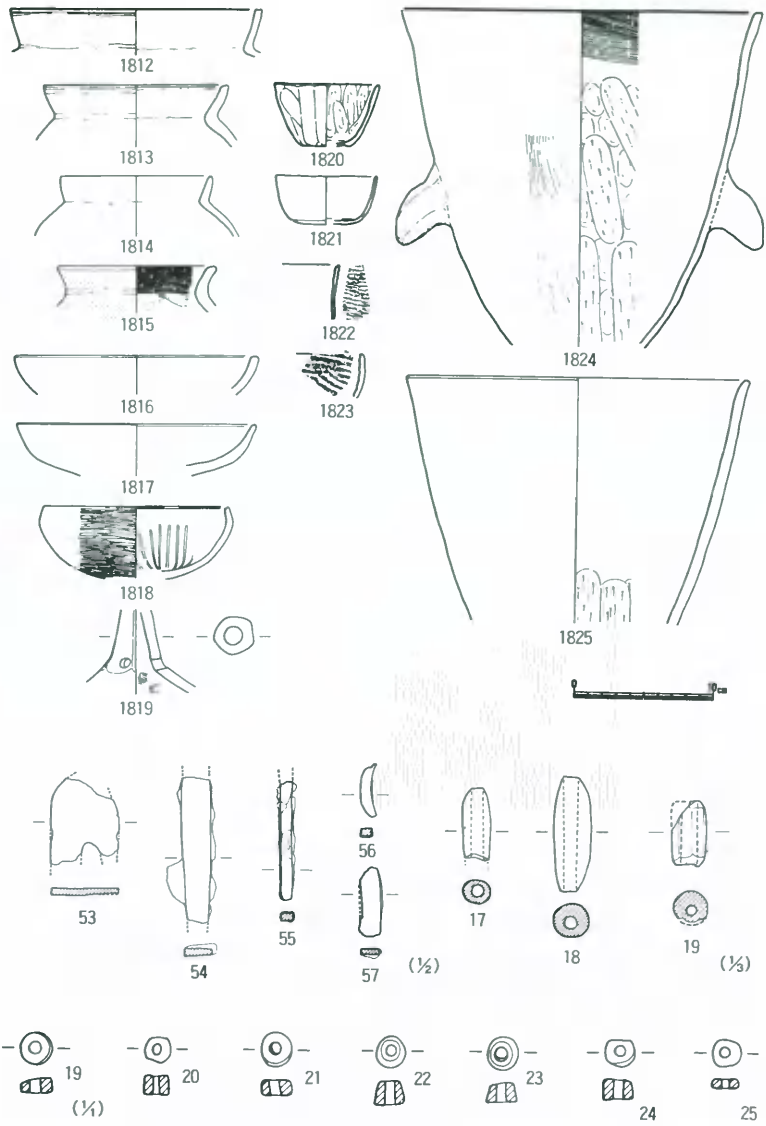
柱は P-1～4 の 4 本で構成され，柱間距離は，長軸方向で 300cm と 280cm を測り，短軸方向



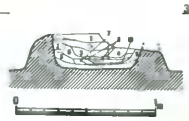
第190図　竪穴式住居-24（1/80）



第191図　竪穴式住居-24 出土遺物（1）



第192図　竪穴式住居-24 出土遺物（2）



1. 灰褐色泥砂
2. 暗灰黄褐色土
3. 淡灰褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 灰褐色土（灰・焼土塊含）
6. 淡灰褐色土
7. 灰褐色土
8. 褐色土（灰多含）
9. 淡茶灰褐色土
10. 暗黄灰色土

第193図　竪穴式住居-24 かまど断面（1/40）

で220cmである。壁までの距離は南西部で狭く，南東部で広い。また，P-4は西方に長径72cm・短径52cm・深さ16cmのくぼみを伴っている。

かまどは，北西壁のほぼ中央と考えられる位置にあり，調査時に焚き口部の端部を欠いたが，内法で，長さ140cm以上・最大幅60cm・高さ25cmを測る。大半を住居内に置くが煙道部は住居外に達している。内面は熱影響により，赤灰色の焼土となっている。埋積土は，最下層に10層を置き，3～9層中には炭・灰・焼土塊を多量に含み，5・7・8層において特に顕著である。住居内の埋土は，廃棄後順次堆積したものと考えられるが，3層に多量の弥生時代後期の土器片がほうり込まれている。

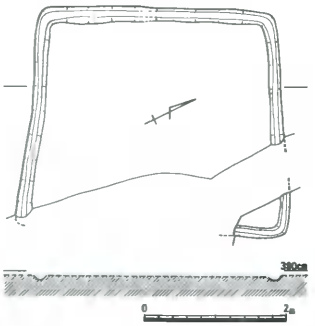
遺物は，須恵器の直口壺1806・甕1808～1810・杯身1790～1800・杯蓋1784～1789・高杯1801～1805・腿1807・鉢1811，土師器の甕1812～1815・高杯1816～1819・鉢1820・1821・甑1824・1825，製塩土器1822・1823，鉄器53～57，土錘17～19，滑石製小玉19～25，蔽石，鉄滓，ガラス滓等が出土している。これらにより，時期は5世紀末～6世紀初頭に比定される。

竪穴式住居-25（第194図）

D-9の北東部南寄りに位置し，近世以降の溜池状遺構とこれに伴う溝によって東半を改変され，床面および壁は削平を受けている。

遺構として検出されたのは，壁体溝のみであり，深さ9cmまで残っていた。これにより，平面形は東辺の長い台形を呈し，最大長385cm・幅320cmの規模を有することが知られる。柱穴・火処等は確認されず，下層で検出された柱穴状遺構の中にもこれに比定しうるものはない。

遺物は出土していないが，検出面とその平面形態から，古墳時代の遺構と考える。　（光永）

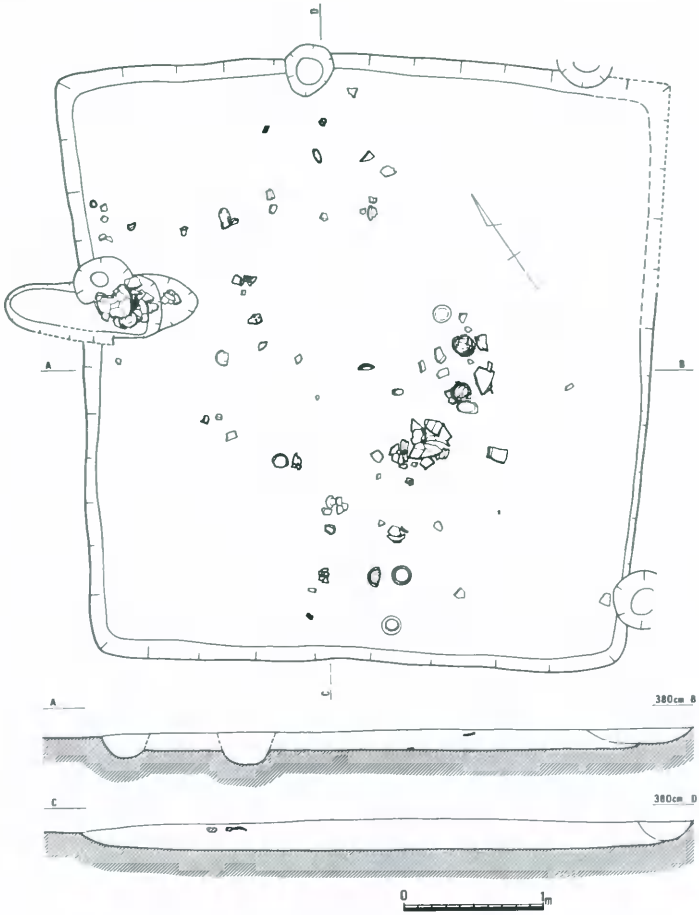


第194図　竪穴式住居-25（1/80）

竪穴式住居-26（第195～198図，図版4－2）

D-11に位置し，ほぼ全容が判る。北東隅は古

墳時代後期の溝で切られている。竪穴式住居―27とは北西に280cm離れて，同じ方向である。平面形はほぼ方形を呈する。北東辺が少し広く430cm，南西辺はやや狭く370cm，北東辺から南西辺までは428cmを測る。北西壁の中央よりやや北寄りにかまどがある。中世の柱穴が掘り込まれた部分もあるが，ほぼ全容がわかる。かまどの中央部は床面より少しくぼんでおり，この

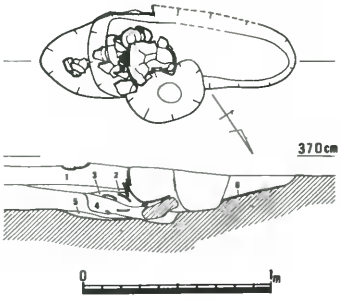


第195図　竪穴式住居-26（1/80）

位置に柱状の石が1個倒れている。石は長さ16.5cm，幅7cmの大きさである。この上に土師器の甕1845がのっており，周囲に須恵器杯身1830が落ち込んでいる。煙道部分には，焼土面が残っている。焚口付近の焼土面は2面あり，かまどがつくりなおされていることがわかる。床面を精査したが，柱穴は検出されなかった。壁体溝は存在しない。

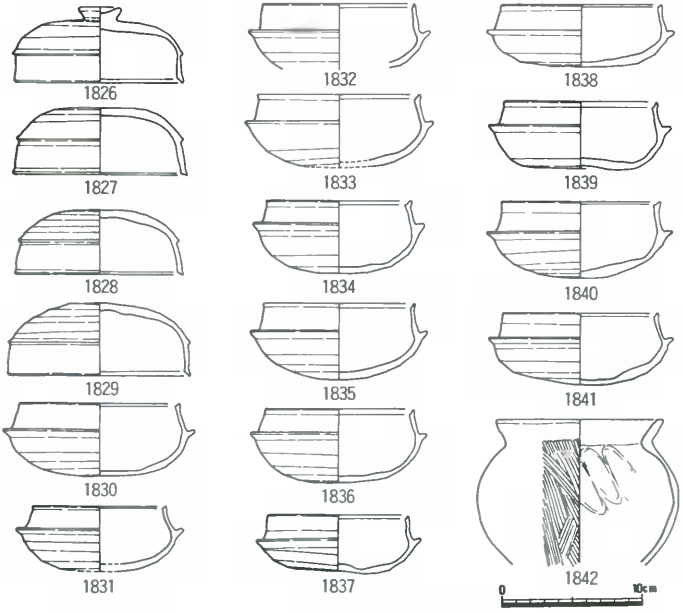
遺物は床面より20cm余り上からも検出されることから，壁体についてもかなり上まで存在したはずであるが，包含層中であり，明瞭には確認できなかった。

床面および埋土中からは，須恵器・土師

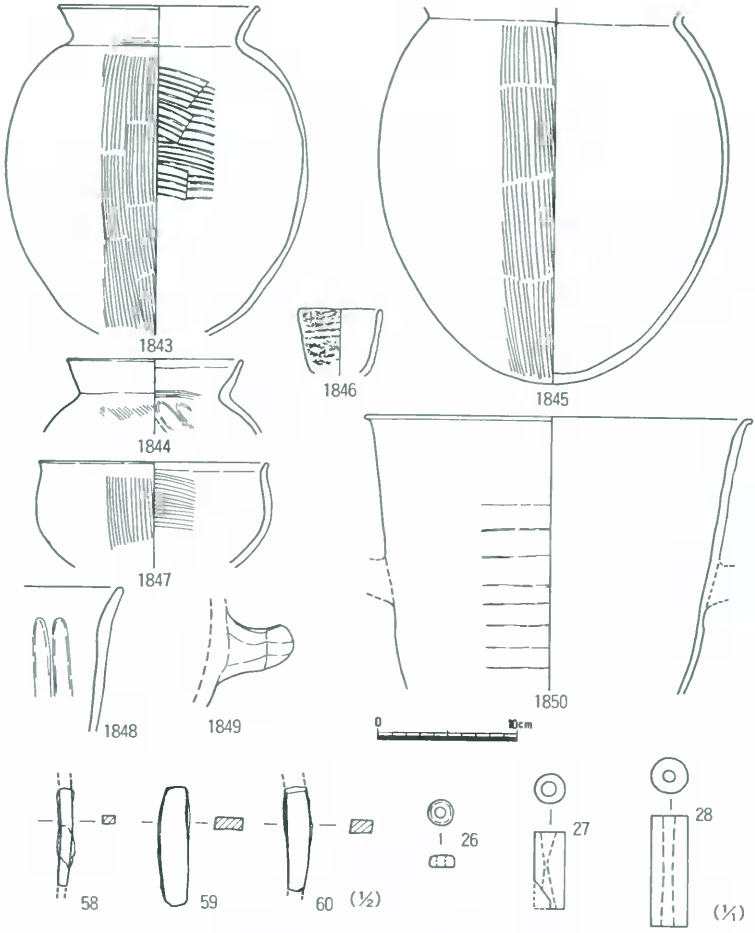


1. 灰色粘土
2. 暗灰色粘土
3. 焼土
4. 灰
5. 灰褐色粘土
6. 焼土

第196図　竪穴式住居 26 かまど（1/30）



第197図　竪穴式住居-26 出土遺物（1）



第198図　竪穴式住居-26 出土遺物（2）

器・鉄器・玉類が出土した。須恵器には，杯蓋 1826～1829，杯身 1830～1841 と甕の胴部片がある。1838～1840 は完形品である。土師器には，甕 1842～1845，鉢 1846・1847，甑 1848～1850 がある。1846 はいわゆる製塩土器である。鉄器は 3 点あるが，全体のわかるものはなく，断面が長方形を呈するものである。玉類には，蛇文岩製の臼玉 1 個，碧玉製の管玉 1 個，蛇文

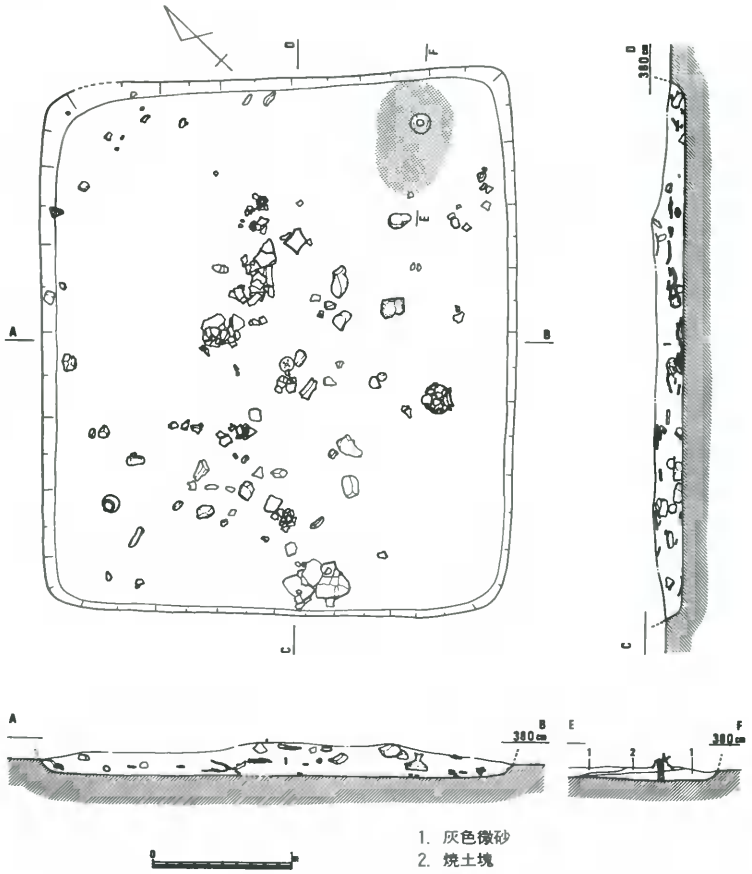
岩か滑石製の管玉1個がある。27は一部を欠損しているが，割れ目も磨滅していて，破損後も使用されたことがわかる。

時期は5世紀末～6世紀初頭である。（正岡）

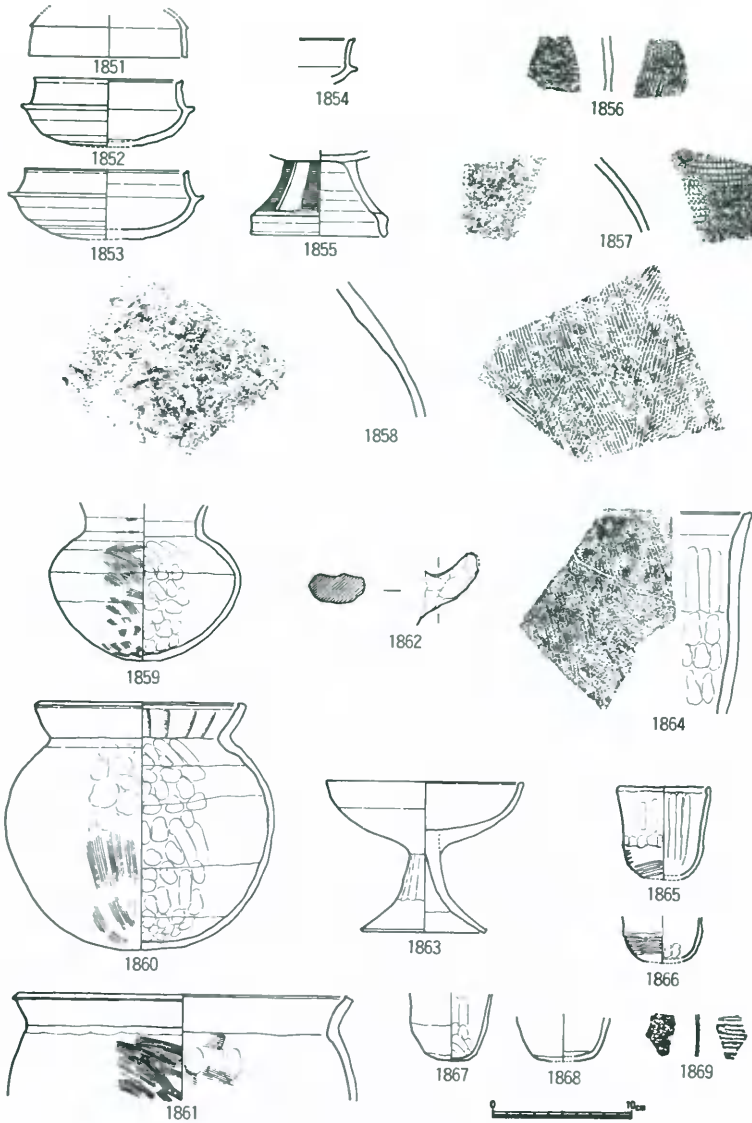
竪穴式住居—27（第199～201図）

D-11の北部分，竪穴式住居—26の東側において検出された。

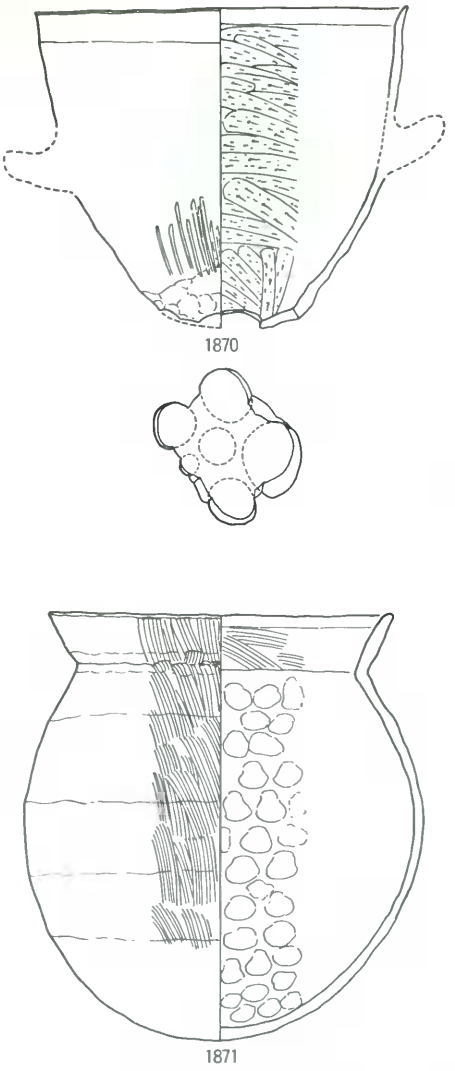
平面形も床面も明確には検出できなかったが，平面形は340×380cmのほぼ長方形を呈し，



第199図　竪穴式住居27（1/40）



第200図　竪穴式住居27出土遺物（1）



第201図　竪穴式住居-27 出土遺物（2）

床面までの深さは約10cmを測る。壁体溝および柱穴については検出することができなかった。この竪穴式住居の北東隅には，約55×80cmの楕円形の範囲に焼土塊がみられ，その中に約5×5×10cmの方柱状の河原石をたて，その上に高杯1863を逆さに伏せていた。この遺構の性格についてははっきりしないが，一応かまどと考えておきたい。

この住居の覆土中からは，弥生式土器や土師器・須恵器および礫が出土している。第200図の1851～1858は須恵器，1859～1869および第201図1870・1871は土師器である。1865～1869は製塩土器と考えられる。図示した以外にも製塩土器片は数個体分出土している。1862・1864・1870は甑と考えられる。これらのうち1870は，住居の西南隅において，床面上にほぼまとまって1個体分が出土している。1870・1871はその大きさからみて一対になる可能性がある。

時期は，出土した須恵器などから竪穴式住居—26と同じ5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

（平井）

（2） 井　　戸

井　戸－9（第202・203図）

D-8の北東部に位置し，竪穴式住居－1・溝－13等の弥生時代の遺構を切っている。古墳時代の遺構では，竪穴式住居－21の北東隅にあたり，これに切られている。

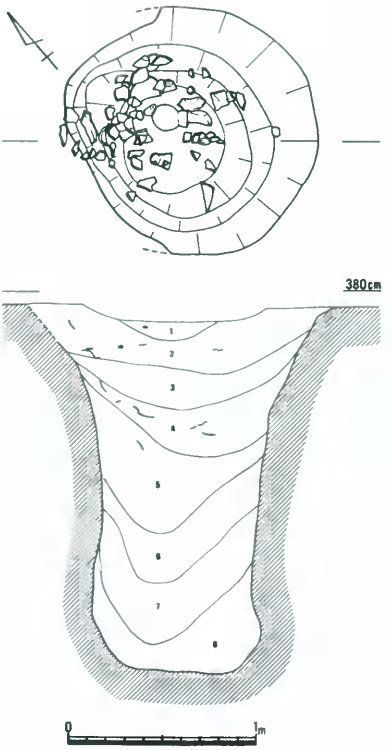
平面形は不整円形を呈し，最大径135cmを測る。断面形態についてみると，深さ40～50cmまでは傾斜をもって下がり，そこから80～100cm程は筒状を呈する。底から40～70cmの高さまでの部分は，崩壊によるためか，抉れた状況を示している。

埋積土は八層に分層でき，いずれも中央部がくぼんだ状態である。4層以下はグライ化している。5～8層については，それぞれの境界となる面に炭化物の堆積が認められ，上二者がより厚く約1cmの厚みを測る。

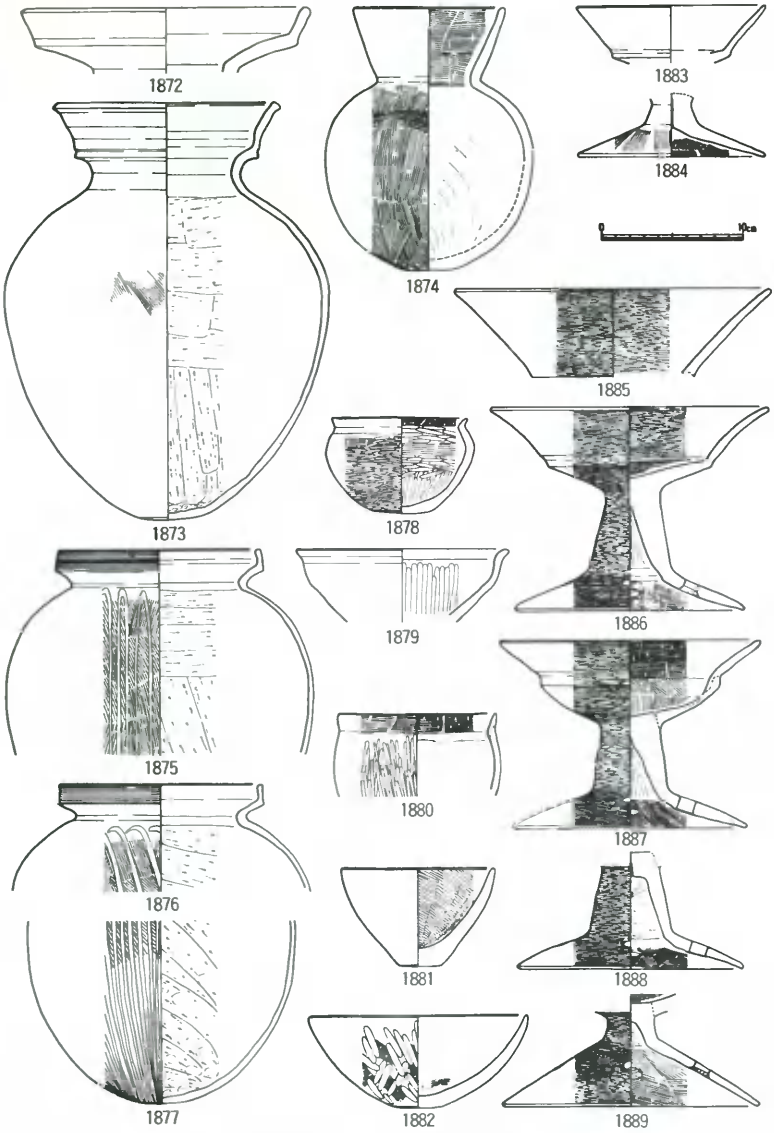
井桁・井戸枠等の構造物はなく，それと想定される木質の遺存も認められなかった。素掘りの井戸と考えられる。

遺物は，壺1872～1874・甕1875～1877・鉢1878～1882・高杯1883～1889等がある。このうち1875・1878～1880・1883・1884・1886は6層以下からの出土である。

これらの遺物により，時期は百・古・Ⅰに比定できる。



第202図　井　戸-9（1/30）

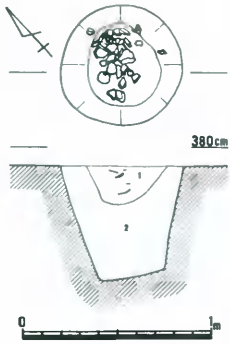


第203図　井　戸-9 出土遺物

（3） 土　　壙

土　壙－91（第204図）

D-8の北東部に位置する。最大径65cm・深さ55cmを測り，柱穴状を呈する。埋積土は，1層が暗灰褐色砂質土，2層が灰褐色砂質土であり，遺物は1層に集中する。時期は，高杯1890により，5世紀末～6世紀初頭に求められる。　（光永）



第204図　土　壙 91（1/30）・出土遺物

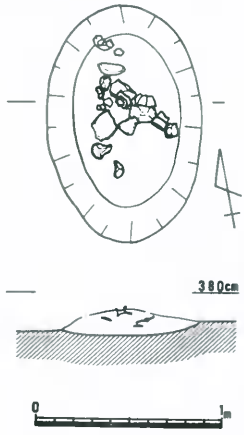
土　壙－92

D-11に位置し，溝－9と溝－15の間にある。平面形は一方が尖り，舟の形に似ている。104×55cm，深さ8cmの大きさである。埋土は灰色粘土で，弥生時代後期の土器片を少量含んでいるが，土層の状況などから，周囲のものと同じ年代と推定される。　（正岡）

土　壙－93（第205図）

D-11の南部分，竪穴式住居－27の南側において検出された土壙で，溝－15を切っている。底部をわずかに検出したにすぎないが，平面形は約130×80cmの長楕円形を呈し，深さは検出面より約8cmを測るにすぎない。埋土は炭・灰・焼土を含む淡茶灰色砂質土が一層のみである。出土遺物としては，須恵器1891～1893・土師器1894および拳大の礫がある。

時期は，ほぼ7世紀前半であると考えられる。　（平井）

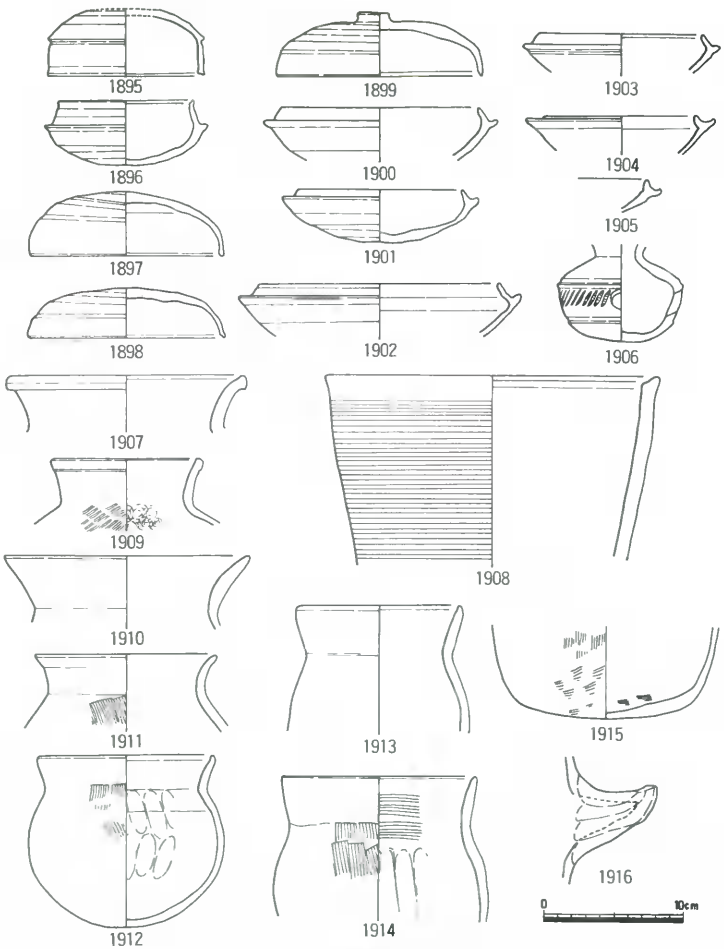


第205図　土　壙-93（1/30）・出土遺物

（4）　溝

溝—18（第206図）

D-8からD-9に続いている。西端は中世の溝—25によって切られ，東端は現代まで使用されていた用水路によって切られている。東側では古墳時代の竪穴式住居—24の上に位置する。



第206図　溝—18　出土遺物

溝は少し蛇行していて，全長15mを確認できる。幅125cm，深さ15cmである。埋土中には，須恵器・土師器・鉄片・鉄滓がある。

須恵器には，杯蓋1895・1897～1899，杯身1896・1900～1905，甑1906，壺1907，鉢1908がある。土師器には，甕1910・1911・1913～1915，鉢1912，甑の把手1916がある。須恵器には，古いものから新しいものがあるが，最も新しいものは，杯身の立ちあがりが小さい。

時期は，7世紀前半に比定される。（正岡）

溝－19

D-9の南西部に位置し，竪穴式住居－23を切っている。竪穴式住居－24との関係は確認しえなかった。流路をほぼ東西方向に置き，東から西へ流れたものと考えられ，高低差は約5cmを測る。規模は，幅約65cm・深さ最大13cmを測る。

遺物はいずれも小片であるが，須恵器直口壺・杯蓋・杯身・高杯が出土しており，これによって，時期は6世紀末～7世紀初頭に比定される。（光永）

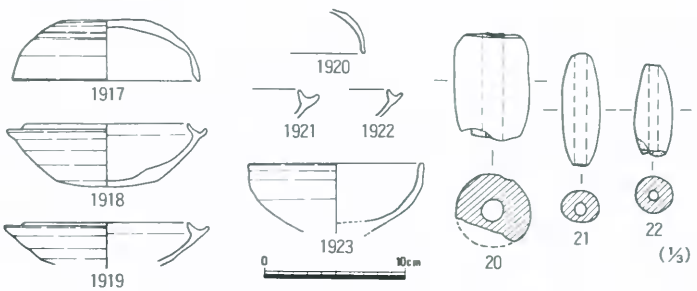
溝－20（第207図）

D-11に位置し，竪穴式住居－26の東側と重複している。北東から南西の方向である。溝の幅は一定せず，広いところは120cm，深さ11cmを測る。埋土中には，須恵器のほか弥生式土器片が多く含まれている。須恵器には，杯蓋1917・1920，杯身1918・1919・1921・1922，高杯1923がある。

時期は7世紀前半に属する。

溝－21

D-11に位置し，溝－20の南東側に平行する細い溝である。幅20cm，深さ6cmのものである。埋土中には，少量の弥生式土器片が含まれていたにすぎないが，遺構の検出面から周辺の溝と同時期のものと推定される。



第207図　溝－20・22・23 出土遺物

溝—22（第207図）

D-11に位置し，竪穴式住居—27に近接している。また，土壙—93と重複している。方向はほぼ南北である。埋土中からは，須恵器片，土錘20・21のほか，弥生式土器片，サヌカイト片が出土した。

時期は他のものと同様で，7世紀前半と推定される。

溝—23（第207図）

D-11に位置し，竪穴式住居—27の南東側に近接している。北東から南西方向を示し，幅70cm，深さ12cmである。埋土中には，須恵器片・土師器片・土錘22のほか，弥生式土器片・サヌカイト片が出土している。

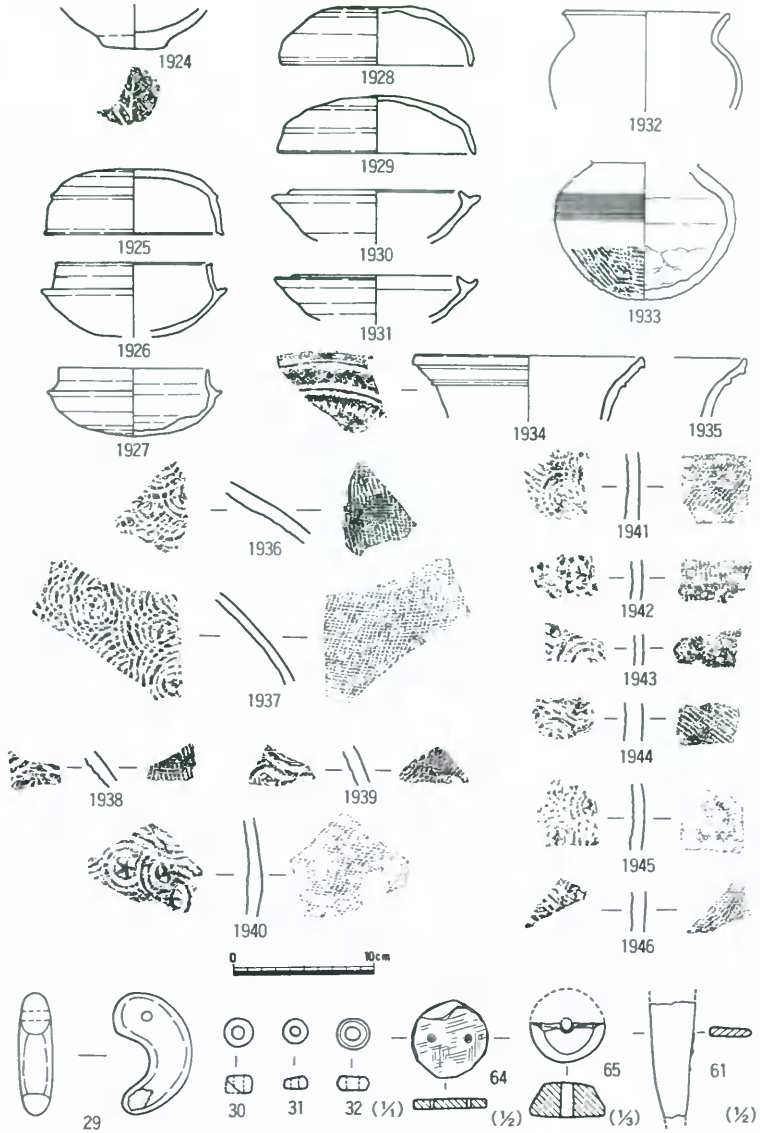
時期は7世紀前半と推定される。　（正岡）

（5）包含層出土の遺物

中須賀調査区は，水田造成のため上面を削平されていて，古墳時代の包含層が明瞭に残っているところはない。現代まで使用されていた用水路内には，弥生式土器・須恵器・陶器など多量の遺物が含まれていた。壺の底部1924には木葉の圧痕がある。須恵器には，杯蓋1925・1928・1929，杯身1926・1927・1930・1931，壺1932・1933，広口壺1934・1935がある。1936～1946はいわゆる「車輪文叩き目」をもつ須恵器片である。器種はいずれも甕と考えられる。1936と1938は同一個体である可能性が強い。「車輪文叩き目」は大きく2種類認められる。1940・1944・1946は星形である。1936～1939，1941～1943・1945は直線を組み合わせた放射状文である。これらのうち，1936～1939・1941・1943・1945は放射状文が同心円文の中央圏内に収まっているもので，1942は放射線の先端が同心円文の第2圏まで及んでいるものである。これらはいずれも「十」字形の放射線文であるが，1937・1949・1941には中心に円形の隆起が認められる（註）。

須恵器の時期は，5世紀末～7世紀前半のものである。他に，滑石製と推定される勾玉29，臼玉30・31，蛇文岩製の臼玉32，滑石製の双孔円板64，紡錘車65，鉄器片61がある。30は中世の溝—25の埋土中，31は現代溝，32・65・61は包含層，64は新田サイフォン調査区から出土したものである。　（正岡・平井）

註　「車輪文叩き目」は，丸田調査区出土の横瓶5291にも認められる。また，岡山県内で「車輪文叩き目」の報告されている遺跡としては，寒風窯址（『吉備考古』20号 1934.2），寒風笹場池北遺跡（『岡山県埋蔵文化財報告』12　1982.3），土橋窯址（『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983.3），岩田9号墳・14号墳（『岩田古墳群』1976.3）などがある。さらに，寒田窯址，平遺跡，美作国府，門前池遺跡，百間川当麻遺跡，川入遺跡，御堂奥遺跡などでも確認されている。

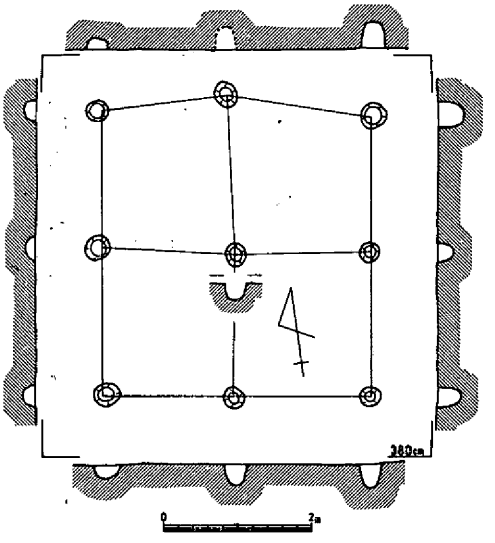


第208図　包含層出土遺物

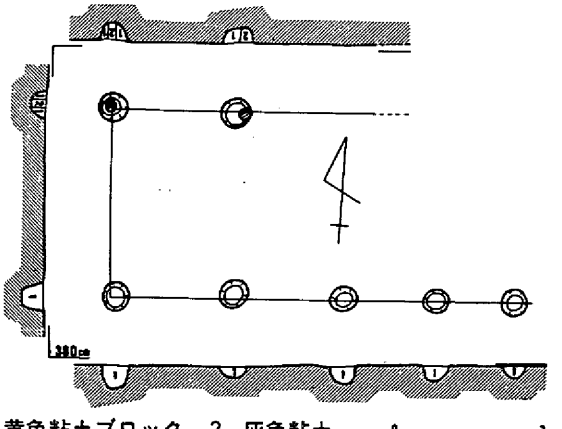
5. 中世の遺構・遺物

中世の遺構は，D-6～12にかけて存在する弥生時代以降の微高地部分とそれを切って走る河道，およびその河道が埋没して形成された微高地上に建物2棟，柱穴約500個，土壙15基，溝7本が検出された。D-6～12の微高地部分は現代用水路や近代の土取り，溜池状遺構によって切られている部分が多く，本来のあり方を示しているとはいえない。遺物は溝—25および微高地の斜面堆積土層中などから多量に出土している。これらの遺物は，12世紀～13世紀代のものが主体を占め，その前後の時期のものが少量混るという特徴を示しているようである。

（1）建　　物



第209図　建　物-1（1/100）



1. 黄色粘土ブロック　2. 灰色粘土
まじり灰色粘土

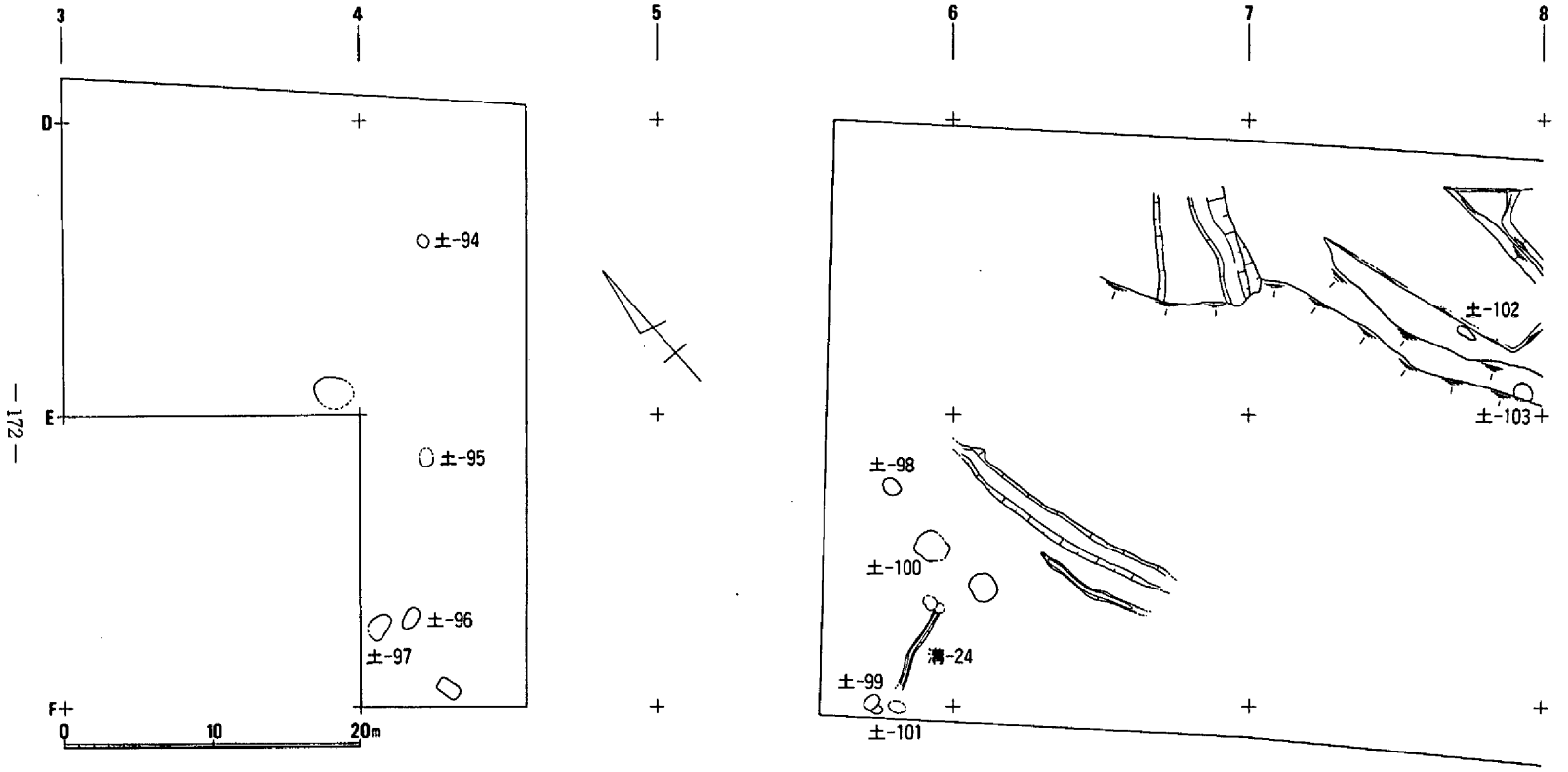
第210図　建　物-2（1/100）

建　物—1（第209図）

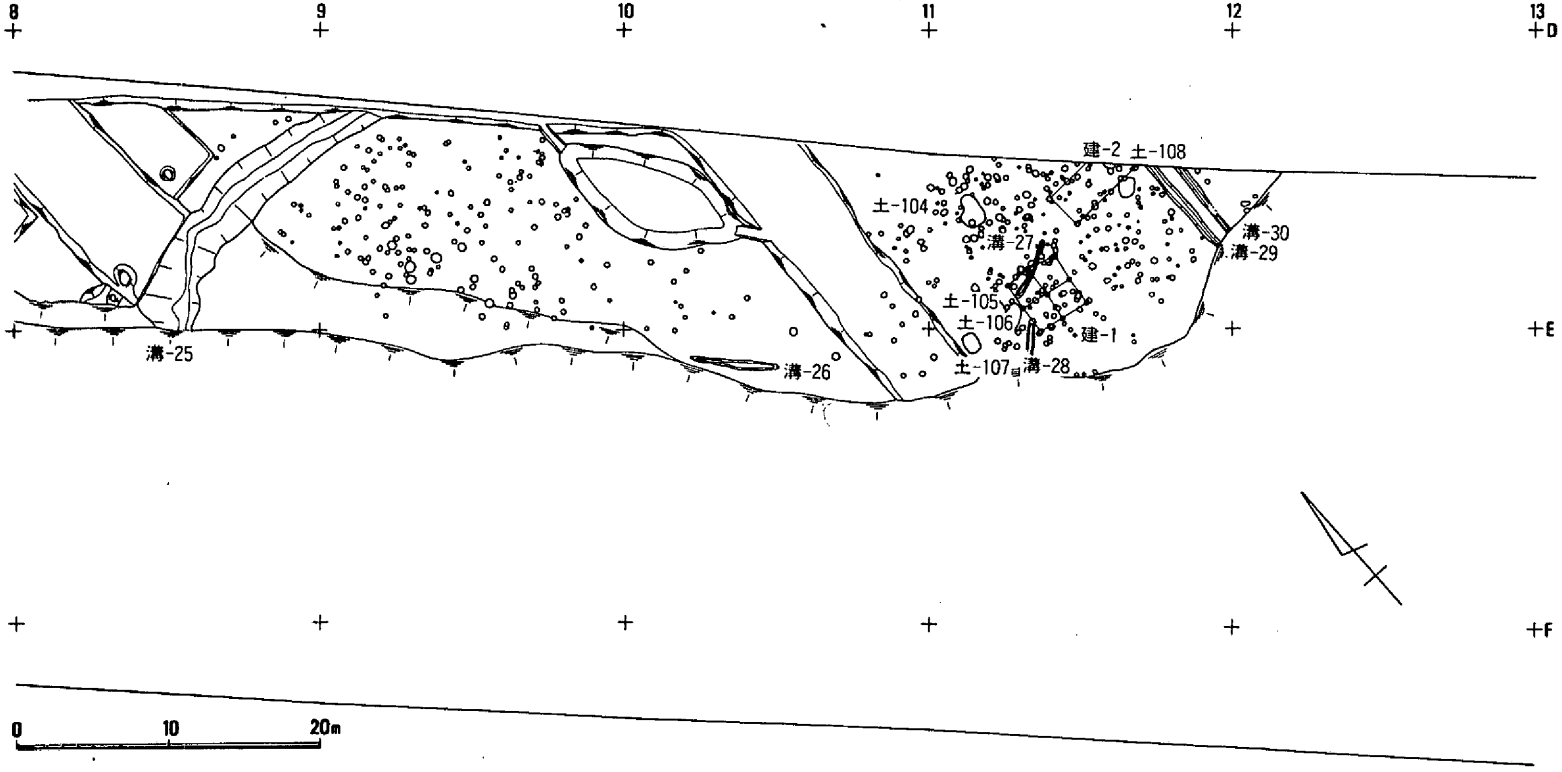
D-11の西部分に位置する。2×2間の総柱の建物で，桁行・梁間とも約370cmを測る。柱間はほぼ180～190cmで，北側中央の柱穴のみ位置がずれる。各柱穴は直径25～35cmの円形を呈し，深さは約15～35cmを測る。埋土は黄色粘土ブロックおよび炭粒を含む灰白色粘土が一層のみである。時期については遺物がほとんどないため，明確ではないが，埋土の状況や土層などから中世のものであると考えられる。

建　物—2（第210図）

D-11の東端部に位置する。梁間は1間で桁行は調査区外にのびるため不明である。しかしながら桁行の柱間は一定ではなく，柱穴もすべて揃っていないため建物として把え得ないかも知れない。柱穴は直径約30～40cmの円形を呈し，深さは約15～25cmを測る。柱痕の確認できる柱穴もある。時期は明確ではないが，ほぼ建物—1と同じ中世のものであろう。　　（平井）



第211図　中須賀調査区中世以降遺構配置図(1/500)（1）



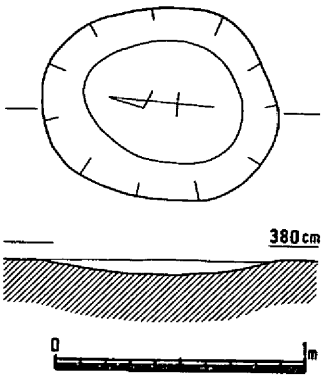
第212図　中須賀調査区中世以降遺構配置図(1/500)（2）

（2） 土　　壙

土　壙—94（第213図）

D-4に位置する。平面形は南北方向に少し長い楕円形を呈する。大きさは94×76cm，深さ6cmである。床面は緩やかに湾曲している。埋土は黄灰褐色細砂で，周囲の土に比べると少し砂が多いことと，若干灰色が強いだけで，区分しにくいものである。

埋土中からは土師器の細片が少量出土したにすぎない。土壙を掘り込んだ基盤は下部になるにしたがって砂が多くなり，砂利層となっている。全体的にみると北に寄ると砂利層が上面に露出する。（正岡）

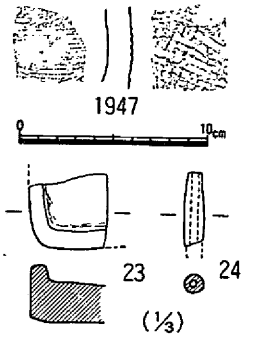


第213図　土　壙-94（1/30）

土　壙—95（第214図）

E-4の南西部に位置する。サブトレンチの掘り下げ中に検出したため，北半を欠いているが，平面形は楕円形を呈するものと考えられる。埋土は上層が淡茶褐色微砂，下層が茶褐色微砂・泥砂混合層である。

遺物は勝間田焼甕胴部片1947・陶硯23・土錘24が出土している。時期は，河道埋没後の遺構であることから，土壙—96・97と同様に考えられる。

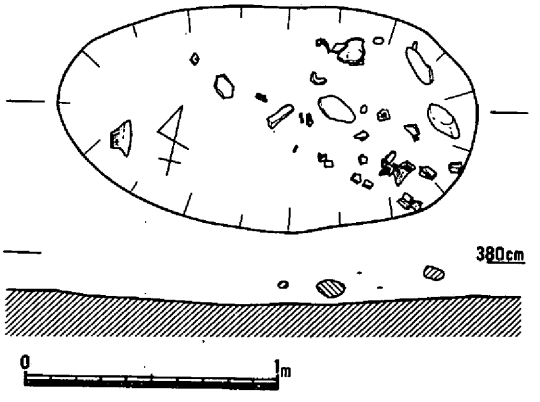


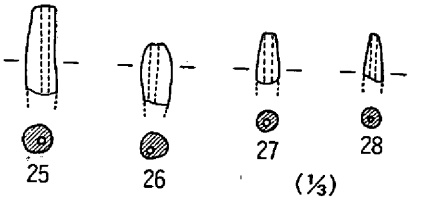
第214図　土　壙-95 出土遺物

土　壙—96（第215・216図）

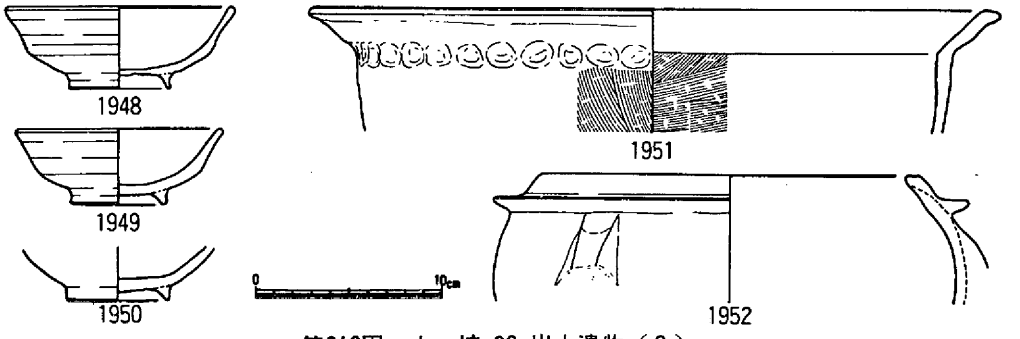
E-4の北西部にあり，土壙—97の東に位置する。遺構として検出されたのは，長径165cm・短径90cm・深さ5cmの浅いくぼみであり，遺物はいずれも浮いた状態での出土である。

遺物は，土師質椀1948～1950・土師質鍋1951・瓦質釜1952・土錘25～28等が出土しており，河道埋没後の遺構であり，13世紀以後の年代が想定される。





第215図　土　壙-96（1/30）・出土遺物（1）



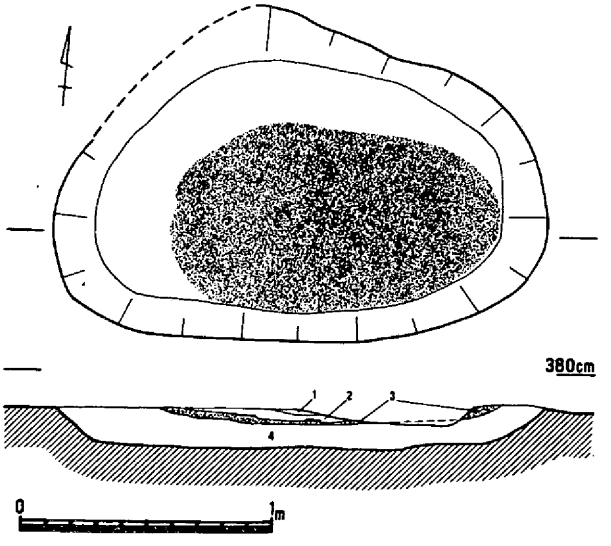
第216図　土　壙-96 出土遺物（２）

土　壙－97（第217図）

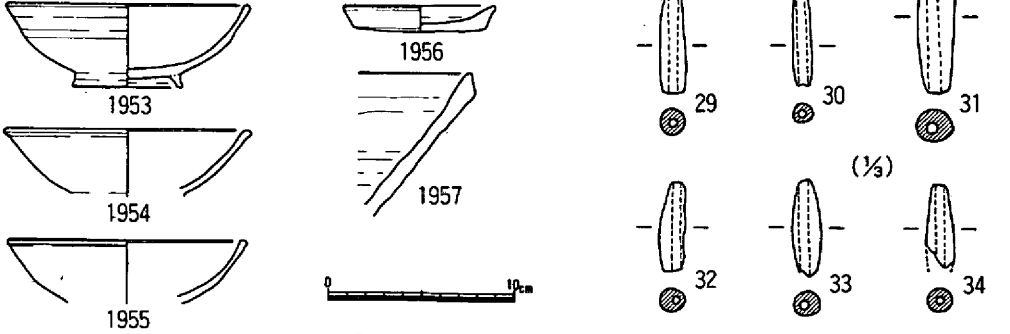
Ｅ-4 の南西部にあり，土壙－96 の西に位置する。北西部は一部側壁にかかって未調査であるが，平面形は不整楕円形を呈し，長径 195cm・短径 180cm・深さ 17cm を測る。

埋土のうち３層の炭は，壙内の南東部分にやや片寄って堆積し，遺物はほとんどこの３層からの出土である。また，この３層上面には，骨の細片が多く見られたが，獣・魚の区別も不可能であった。

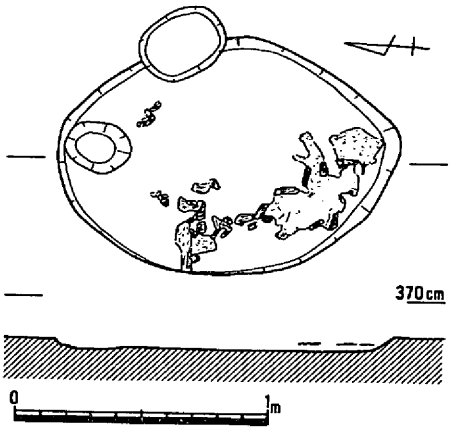
遺物は，土師質椀1953～1955・土師質皿1956・魚住焼鉢1957・土錘29～34等が出土している。河道埋没後の時期に属する。



1. 灰黄色微砂
2. 暗灰色泥砂
3. 炭
4. 灰色泥砂(炭含)



第217図　土　壙-97（1/30）・出土遺物



第218図　土　壙-98（1/30）

土　壙—98（第218図）

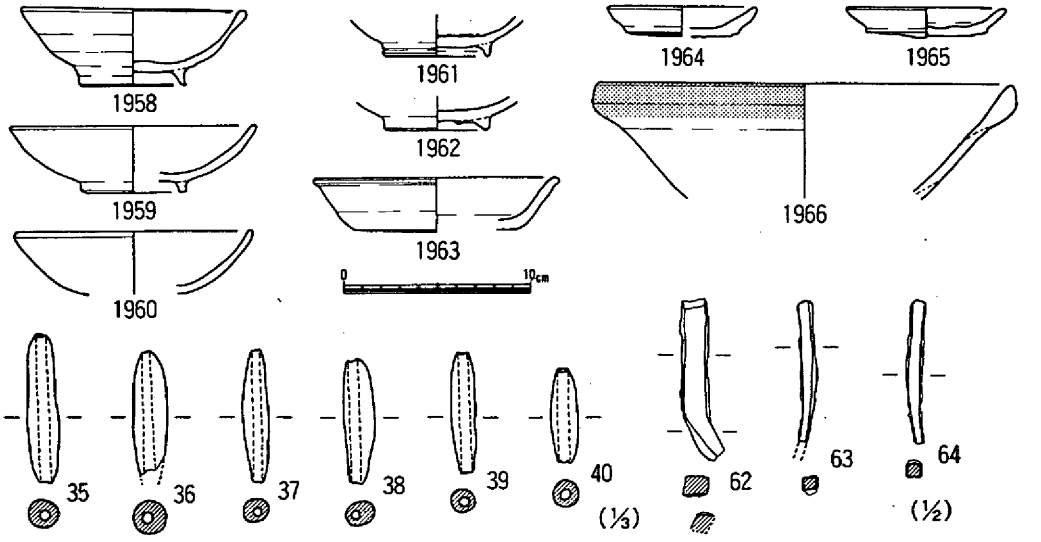
E-5の北東部に位置し，長軸をほぼ南北に置く不整楕円形を呈している。北東部は柱穴に切られている。遺存していたのは深さ5cmまでであるが，壙底から約3cm浮いた状態で骨片の堆積が認められた。図示したのは南西部分のみであるが，壙内のほぼ全面に広がっていた。骨片は軟質になっており，原形を留めているものは少ないが，小型動物のものと考えられる。

遺物の出土は無いが，河道埋没後の遺構である。

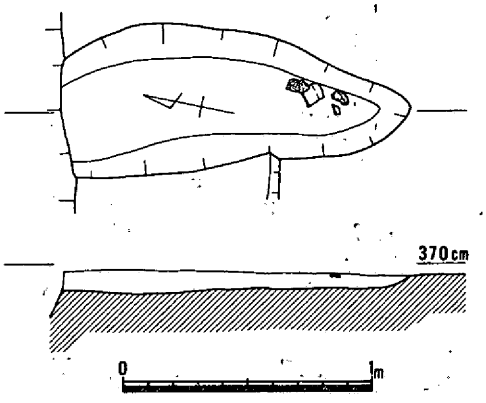
土　壙—99・100・101（第219図）

E-5内の土壙であり，土壙—99は東辺中央部，土壙—100・101は南東部にそれぞれ位置する。いずれも河道埋没後の遺構であり，埋土は灰褐色泥砂が基調となっており，炭・灰を若干含んでいる。遺物は，土壙—99から土師質椀1959，土師質皿1963，土師質小皿1965，魚住焼鉢1906，土錘36・37・39，鉄器62～64が出土しており，土壙—100からは土師質椀1958・1960・1962が出土している。また，土壙—101からは，土師質椀1961・土師質小皿1964・土錘35・38・40が出土している。時期は，いずれも他の河道埋没後の遺構と同様に考えられる。

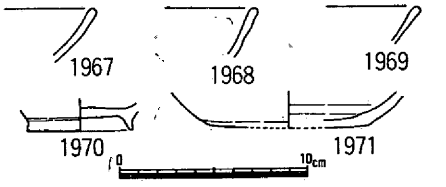
（光永）



第219図　土　壙-99・100・101 出土遺物



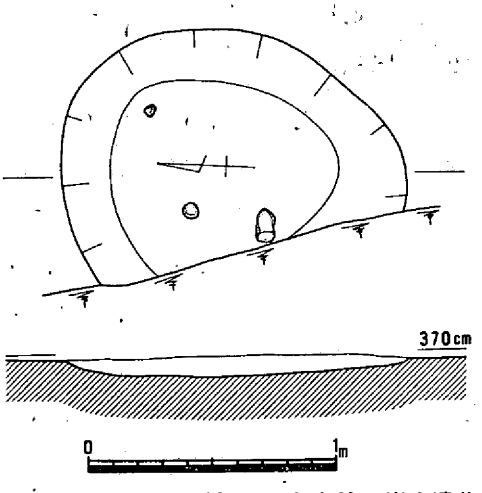
第220図　土　壙−102（1/30）・出土遺物



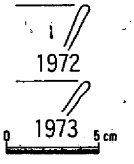
土　壙−102（第220図）

D-7に位置し，一部は土取りのため削平されている。平面形は長楕円形を呈する。現状の大きさは，140×60cm，深さ10cmを測る。埋土は灰色細砂で，炭・焼土・灰を多く含んでいる。

出土遺物には，土師質椀1967〜1971の小破片がある。1970は高台部分の破片で，1971は高台の付かないものである。



第221図　土　壙−103（1/30）・出土遺物



土　壙−103（第221図）

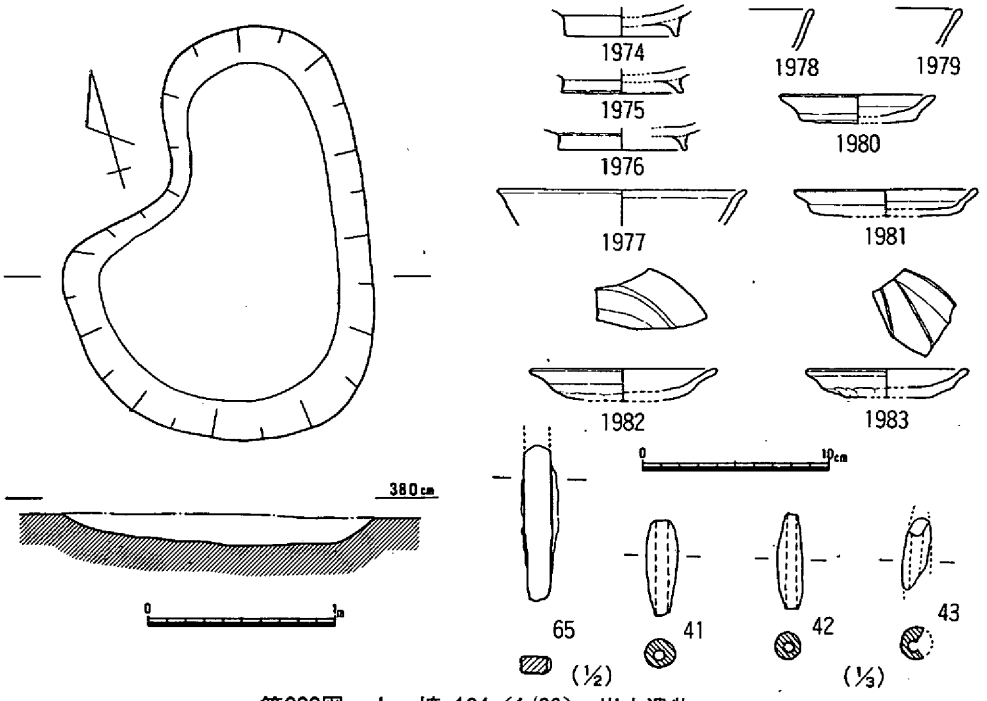
D-7に位置し，南側は後に削られている。平面形は南北方向に少し長い楕円形を呈する。現状の大きさは，140×102cm，深さ8cmを測る。床面は緩やかに湾曲している。埋土は淡灰色細砂で，少量の灰・円礫を含んでいる。

出土遺物には，土師質椀1972・1973の小破片が少量あるだけである。口縁端部は少し肥厚し，丸みをもっている。色調は灰白色を呈し，胎土には細砂を含んでいる。（正岡）

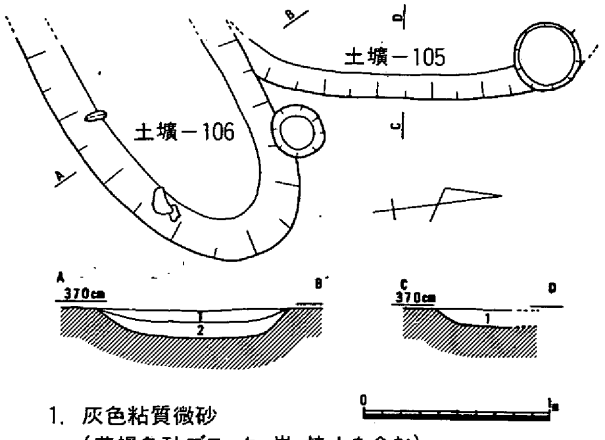
土　壙−104（第222図）

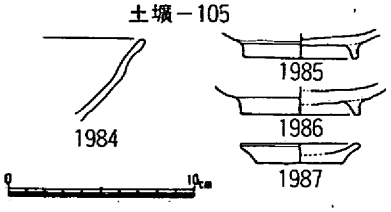
D-11の北部分において検出された土壙である。平面形は不整形で，深さも検出面より約15cmを測るにすぎない。断面形は皿状を呈し，底面には凹凸がみられる。埋土は，黄褐色砂のブロックを含む灰色粘質微砂が一層のみである。埋土中には，炭や1〜3mmの砂粒が多く含まれていた。

出土遺物としては，土師質土器1974〜1976・1978・1979・瓦器1981〜1983・土錘41〜43，鉄釘65がある。時期は12世紀末〜13世紀代と考えられる。



第222図　土　壙-104（1/30）・出土遺物

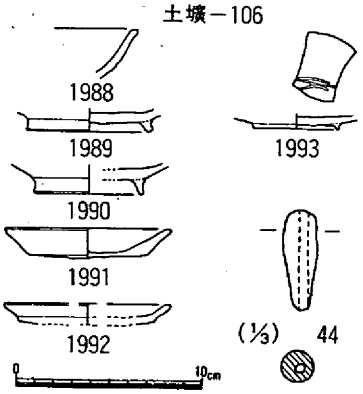




土　壙－105（第223図）

D-11の西端部において検出された土壙で，土壙－106によって切られている。一部を調査したにすぎないため，平面形・深さなどはっきりしない。

出土遺物としては，土師質の



第223図　土　壙-105・106（1/40）・出土遺物

椀や小皿の小片がある。

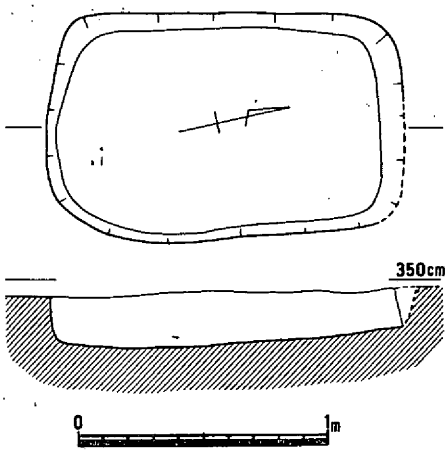
時期は，ほぼ12世紀末～13世紀代ではないかと考えられる。

土　壙－106（第223図）

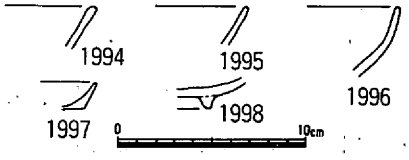
D-11の西端部において検出された土壙で，土壙－105を切っている。土壙全体を調査することはできなかったが，平面形は長楕円形を呈するものと思われ，深さは検出面より約15cmを測るにすぎない。埋土は二層認められ，いずれも炭や焼土を含んでいる。

出土遺物としては，土師質土器1988～1991・瓦器1992・1993・土錘43がある。

時期は，ほぼ12世紀末～13世紀代であると考えられる。　（平井）



第224図　土 壙-107（1/30）・出土遺物



土　壙－107（第224図）

E-11に位置し，現代まで使用されていた南北方向の用水路に近接している。平面形は長方形を呈し，大きさは142×90cm，深さ22cmである。埋土は灰色細砂まじり粘土である。出土遺物には，土師質の椀1994～1996・1998，小皿1997がある。

土　壙－108

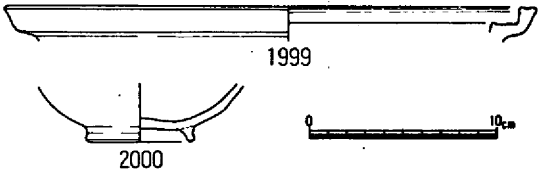
D-11に位置し，中世の柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈する。大きさは150×106cm，深さ9cmである。埋土中には少量の土師質土器片のほかに，弥生式土器，古墳時代の須恵器・土師器が多い。　（正岡）

（3）　溝

溝－24（第225図）

E-5の南東部において検出された。流路は蛇行しているが，基本的に東西方向からやや北へ振っている。両端を近世以降の溝に切られており，長さ約6mにわたって確認し得たのみであるが，幅約80cm，深さ約20cmを測る。堆積土は暗灰褐色泥砂である。

遺物は，須恵質鍋1999・土師質椀



第225図　溝-24 出土遺物

2000が出土しており，他の河道埋没後の遺構と同様の時期に属するものと考えられる。

溝－25（第226～232図）

D-8の中央部からD-9の北西部にかけて検出された。流路はほぼ東西方向に東から西へ向い，やや南へ振って河道に注いでいる。東はD-9において現代まで使用されていた用水路に切られており，流路自体も近世以降の溝に踏襲されているため上層に改変を受けている。幅は約300cm前後を保ち，底は二段になっていて深さ約65cmを測る。また，河道に注ぐ部分では南東方向へ大きく幅を広げている。

遺物は，土師質椀2001～2009・皿・小皿2010～2022，羽釜2024・2025，鍋2026～2033，瓦器椀2034～2040・小皿2041～2043，備前焼椀2044～2047・壺2048・2049・甕2050～2057・2059～2061・鉢2058，亀山焼甕2062～2065・鉢2069，勝間田焼甕2066～2068，常滑焼甕2070～2073，魚住焼甕2074～2076・鉢2077～2079・2081，東播系鉢2080・2082，白磁椀2083～2120・皿2121，青磁碗2122～2125・皿2126・2127，褐釉陶器壺2128，竈，軒丸瓦2129，陶硯45，土錘46～48，羽口，鉄器66～68，鉄滓等が出土している。

土師質椀は，いずれも5㎜前後の貼り付け高台をもち，口径13.4～14.6cmの枠内に納まる。器高は，口縁部の整形方法とともに変化しており，口縁の内湾が弱く指頭オサエの少ないものは4.2cm程度であり，立ち上りが大きく，玉縁状の端部にヘラ切りの残るものは5.4cmを測る。

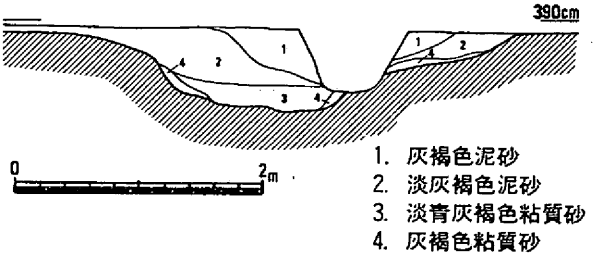
土師質小皿は，器壁が薄く焼成の堅緻なものと，底部において器壁が厚く軟質なものとがあり，前者も口縁部が外反するものと内湾するものとがある。

鍋には，須恵質のもの（2026・2027）と土師質のものがあり，前者はナデ調整が主であり，外傾する口縁部が屈曲して立ち上る。後者はハケメ調整で終っている。

瓦器の大半は外面に暗文を施していないが，これをもつもの（2036）も若干みられる。

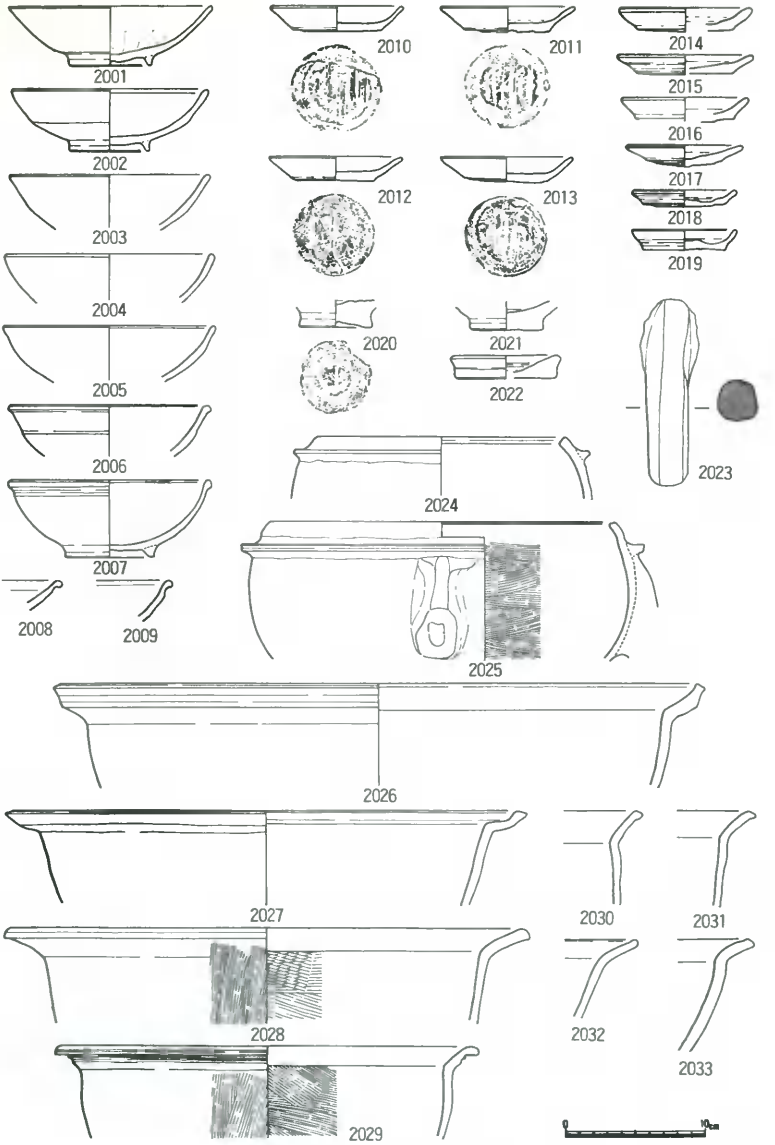
備前焼は椀・壺・甕・鉢が出土しているが，量的には甕が大半を占める。その体部調整については，内面においてヘラケズリ後にナデ（2061）あるいはハケメ（2059），外面において格子目風のタタキ（2060），ハケメ（2059）等の方法がある。いずれも灰色～暗灰色を呈し，口縁端部の特徴からもⅠ期からⅡ期前半に相当するものである（註）。

亀山焼・勝間田焼は，それぞれ岡山県南西部・北東部で生産されたと考えられる須恵質土器である。体部外面の格子目タタキ調整に特徴を示すが，ハケメ調整のものもみられる（2064）。

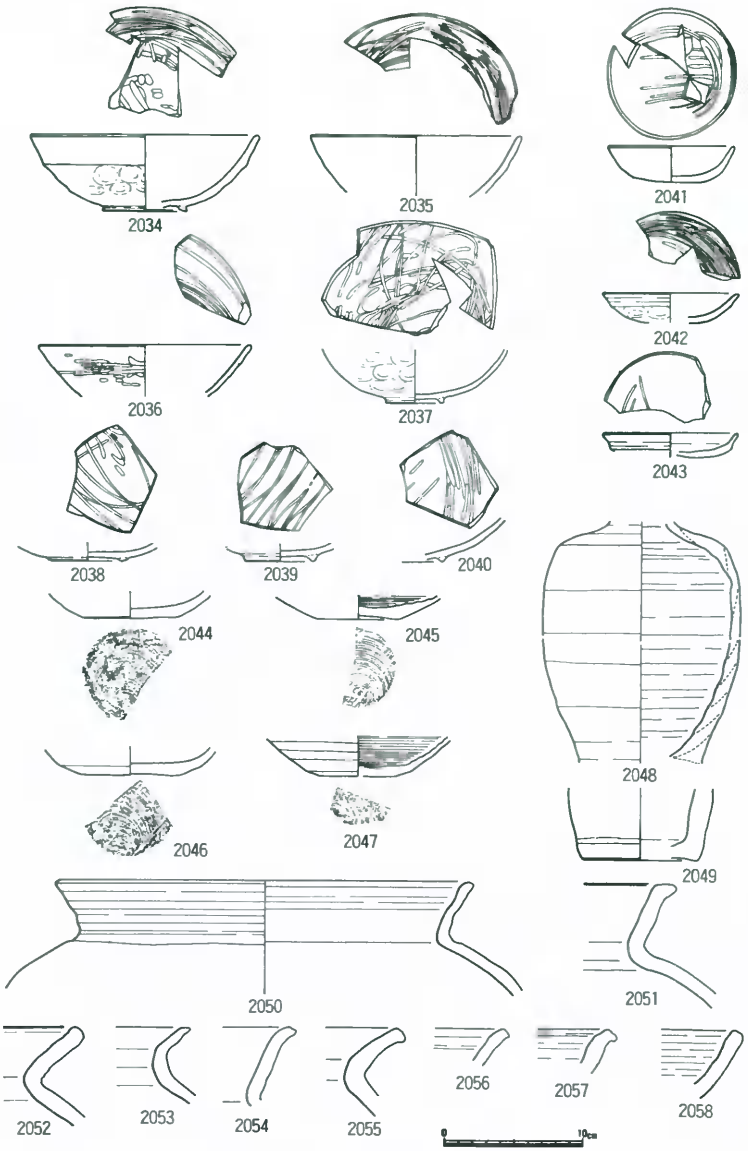


第226図　溝-25 土層断面（1/60）

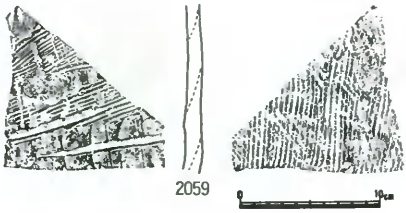
魚住焼および東播系の須恵質土

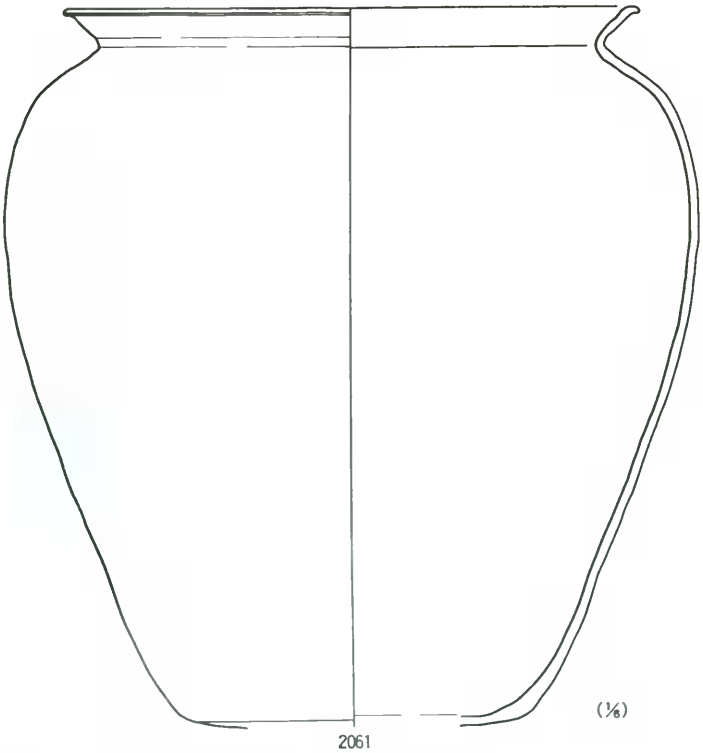


第227図　溝-25 出土遺物（１）

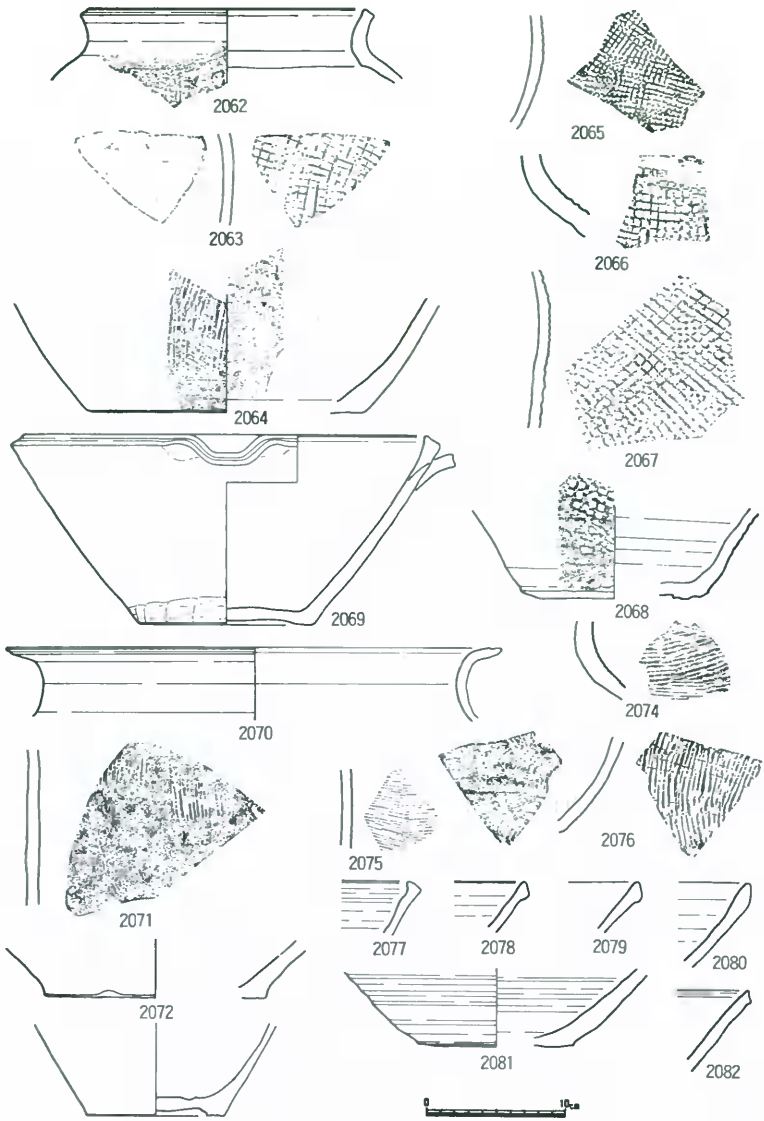


第228図　溝-25 出土遺物（２）

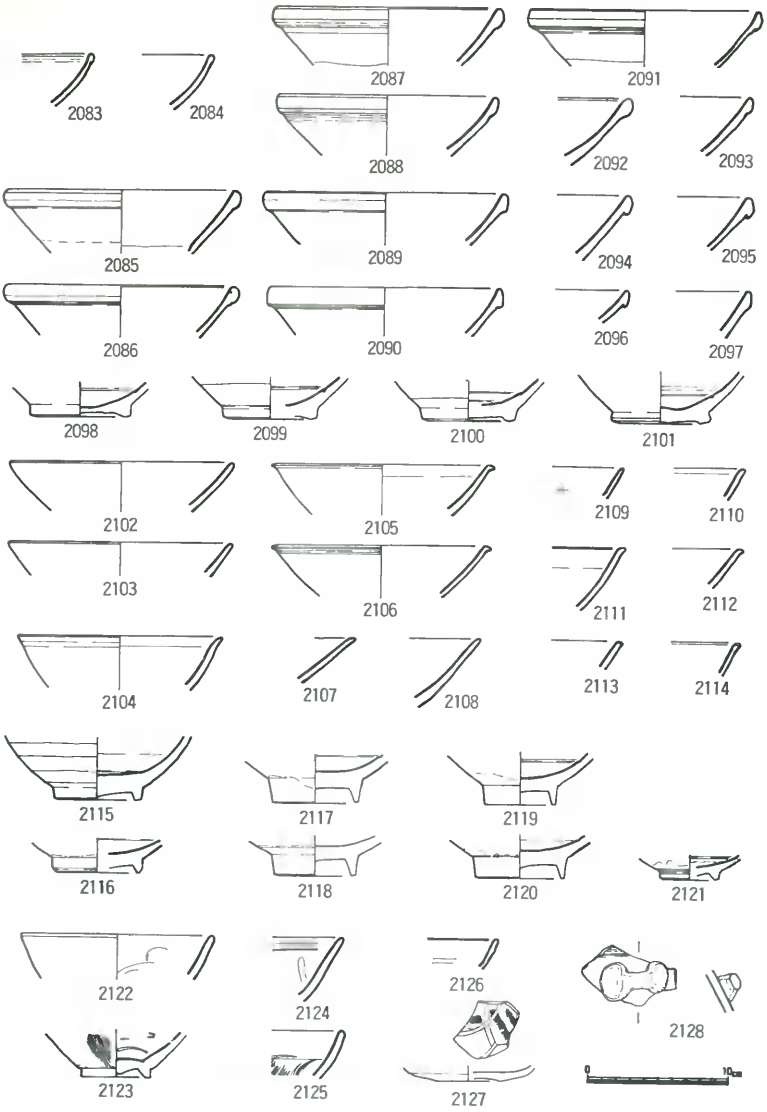




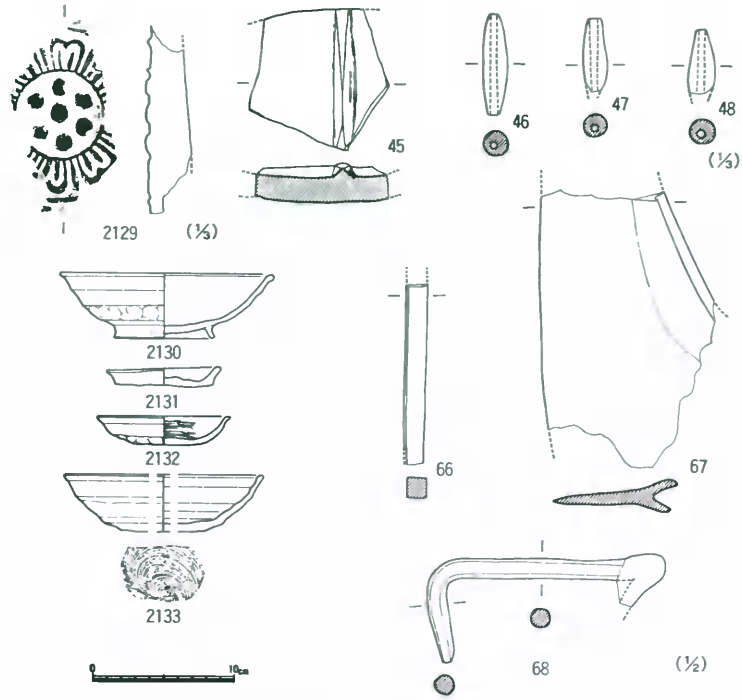
第229図　溝-25 出土遺物（３）



第230図　溝-25 出土遺物（4）



第231図　溝-25 出土遺物（５）



第232図　溝-25 出土遺物（6）

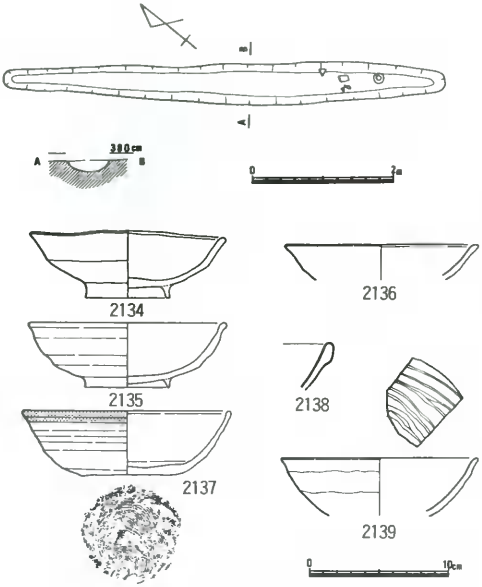
器のうち，鉢についてはいずれも口縁部に重ね焼き痕が認められ，成形・調整はロクロ利用のナデによっている。

白磁碗は，口縁部を玉縁として低い高台を削り出したもの2083～2101と，口縁端部を丸くおさめるあるいは外反させるもの2102～2114とがある。青磁は，龍泉窯系のもの2122～2124・2126と同安窯系のもの2125・2127がある。

E-8においてこの溝の河口堆積による土手状の高まりが確認されており，2130～2133をはじめとして，溝内出土遺物に器種・年代ともに匹敵する遺物が出土している。

溝の廃絶の時期は，13世紀の枠内に求めるにとどめたい。　（光永）

註　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1)—備前焼の成立—」『倉敷考古館研究集報』第1号　倉敷考古館　1966



第233図　溝-26（1/80）・出土遺物

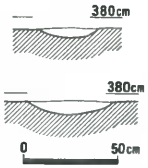
溝—26（第233図）

E-10の北端部中央において検出された北西—南東方向の溝である。全長で約640cmを検出したにすぎないが，最大幅は約60cm，深さは最も深いところで検出面より約20cmを測る。断面形は皿状を呈し，埋土は淡灰褐色微砂が一層のみである。

出土遺物としては，土師質の椀2134～2136・小皿・瓦器2139・備前焼の椀2137・白磁碗2138などがあり，これらはおもに検出した溝の東南部から出土している。これらの遺物の時期は，ほぼ12世紀後半～13世紀初頭であると考えられる。

溝—27・28（第234図）

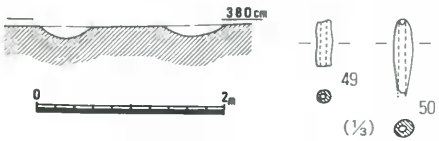
溝—27はD-11の西部分に位置し，全長は約450cmを検出したにすぎない。最大幅約35cm，深さは最大でも検出面より約5cmを測るにすぎない。溝—28はE-11の北端部に位置する。全体は明らかではなく，検出した溝の最大幅は約50cm，深さは最大で約10cmを測るにすぎない。断面形は溝—27・28とも皿形を呈し，埋土は淡灰色微砂が一層のみである。時期はいずれもほぼ中世であろう。



第234図　溝-27（上）・28（下）（1/30）

溝—29・30（第235図）

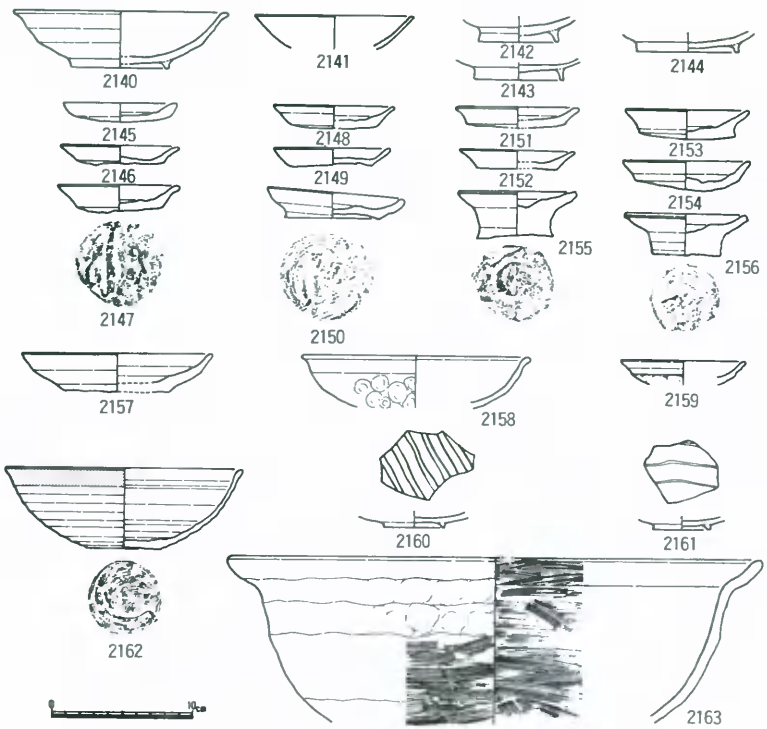
D-11の東端部において検出された溝で，いずれもほぼ南北方向に並行して走る。埋土はいずれも淡灰色微砂が一層のみで，埋土中より少量の土器片および土錘49・50が出土している。これらの遺物はほぼ中世のものであると考えられる。（平井）



第235図　溝-29（左）・30（右）（1/60）・出土遺物

（4） 柱　穴（第236図）

中世柱穴が検出されたのはおもにD-8～11およびE-10・11であり，この部分は中世の微高地部分に相当するものと考えられる。D-6・7については後世に攪乱をうけており中世柱穴は検出できなかったが，本来存在していたと考えられる。中世柱穴は他の中世遺構と同様に，現水田層を除去するとすぐに検出されるもので，総数約500個が検出された。埋土は淡灰色～灰色の粘質土が主で，炭粒・焼土粒を含むものもある。柱穴の規模は直径20～30cm前後の円形のものが多いが，直径50cm前後の円形のものもある。深さは検出面より20～30cmを測るものが多い。これらの柱穴のうち建物としてまとまったのは2棟のみである。柱穴内からは土器片が少量出土するものが多い。これらはおもに土師質椀・小皿・鍋の小片が多く，実測可能なものは少ない。第236図に示したもののうち，2143・2159，2146・2149・2151，2142・2157，2154・2160，2155・2156はそれぞれが同一の柱穴から出土したものである。



第236図　柱穴内出土遺物

（5）包　含　層（第237～255図）

ここに包含層として図示した遺物は，おもに建物-1・2や柱穴が検出されたD-6～12にかけての微高地から河道に移る斜面に堆積した土層中，および現代用水の底面に弥生式土器や須恵器とともに大量に廃棄されていたものである。

2164～2186は土師質の椀である。これらの椀の手法をみると体部外面下半部に指頭オサエ，内面に不定方向のナデ，口縁部に横ナデ，底部外面に指頭オサエ，ナデが施されているものが多い。また底部には貼り付け高台がつき，これには横ナデが施されている。ただし，2164の体部内面には横方向のヘラミガキが施されており，また2178・2180の貼り付け高台には横ナデは施されていない。形態をみると体部中位よりやや上位に稜をもつものが多いが，2164は内湾する体部をもつ。これらの大きさを比べると，2164～2168は大型のもので口径14.2～15.4cm，底径6.2～7.4cm，器高4.9～5.4cmを測り，2176・2179・2182など小型のもので口径10.8～11.2cm，底径3.8～4.6cm，器高3.3～3.5cmを測る。これらの土師質椀の色調は灰白色～乳白色のものがほとんどで，胎土中には1～2mm以下の砂粒を含んでいるものが多い。2187～2202は土師質の小皿である。手法は，口縁部から体部にかけては横ナデを施し，底部外面にはヘラ切り痕跡が観察できるものが多く，また板目痕跡の認められるものもある。2203はいわゆるヘソ皿と呼ばれているものである。2204・2205は底部・高台部分の破片で器種は不明である。2206・2207は「小型深皿」と呼ばれているものである。底部外面はヘラ切りである。2208～2213は一応，皿と呼んでおきたい。口縁部から体部にかけては横ナデ，底部外面にはヘラ切り痕および板目痕が観察できるものが多い。2209・2210の底部外面はユビナデである。色調は浅黄橙色～鈍い橙色のものが多く，胎土は水漉粘土に近い精製された粘土を使用している。2214～2216は羽釜である。いずれも瓦質のものである。2217～2226は鍋と考えられる。2217～2220は口縁部が逆L字状を呈し，口縁端部に面をもつ特徴を有する。瓦質のもの2218～2220と土師質のもの2217とがある。2221～2226は口縁部が「く」の字状にのびるものであるが，細部においてはそれぞれが異った形態をもっている。2217～2226の鍋の外面にはほとんど煤が付着している。2227・2228は鍋の足と考えられる。2227は須恵質，2228は土師質のものである。

2229～2299は瓦器である。2229～2273は椀である。小片のものが多いため全体の器形のわかるものはほとんどない。2229～2233は体部外面にも暗文が認められる。2242・2243は口縁端部内面に沈線を施すもので，いわゆる楠葉型瓦器椀と呼ばれているものであろう。2274～2299は小皿である。小片のものが多い。

2300～2356は備前焼の壺・甕と考えられるものである。小片のものが多い。2300～2327については一応備前焼と考えて報告しておくが，いわゆる初期の段階の備前焼については今までに報告された例も少なくその実態に関しては十分に明らかになっているとはいえない現状である

と考えており，これらのうちにも備前焼に含まない方がよいものもあるかもしれない（例えば2323）。2344～2356は胴部片である。外面調整には粗いハケメのもの 2344・2348・2351，平行タタキのもの2345～2347・2349・2350・2353・2355，長方形の格子目風のタタキのもの2352・2356および不定形な網目状のタタキを施すもの2354がある。内面調整にはハケメののち指頭オサエのもの2344・2346・2348・2350，ハケメのもの2345・2347・2351・2354，指頭オサエ・ナデのもの2349・2352・2353・2355・2356がある。2357～2361は椀である。底部は糸切りで，口縁部に重ね焼き痕をもつものである。2362は小型の杯であろうか。これら椀・杯については一応備前焼と考えておきたい。2363～2386は鉢・擂鉢である。これらは一応備前焼と考えているが，2363～2368については必ずしも明確ではない。

2387～2418は亀山焼の壺・甕と考えられる。2419～2426は亀山焼の鉢と考えられる。

2427～2434は勝間田焼の壺・甕であると考えられる。

2435はどこの製品かはっきりしないものであるが，東播系のものではないかと考えている。

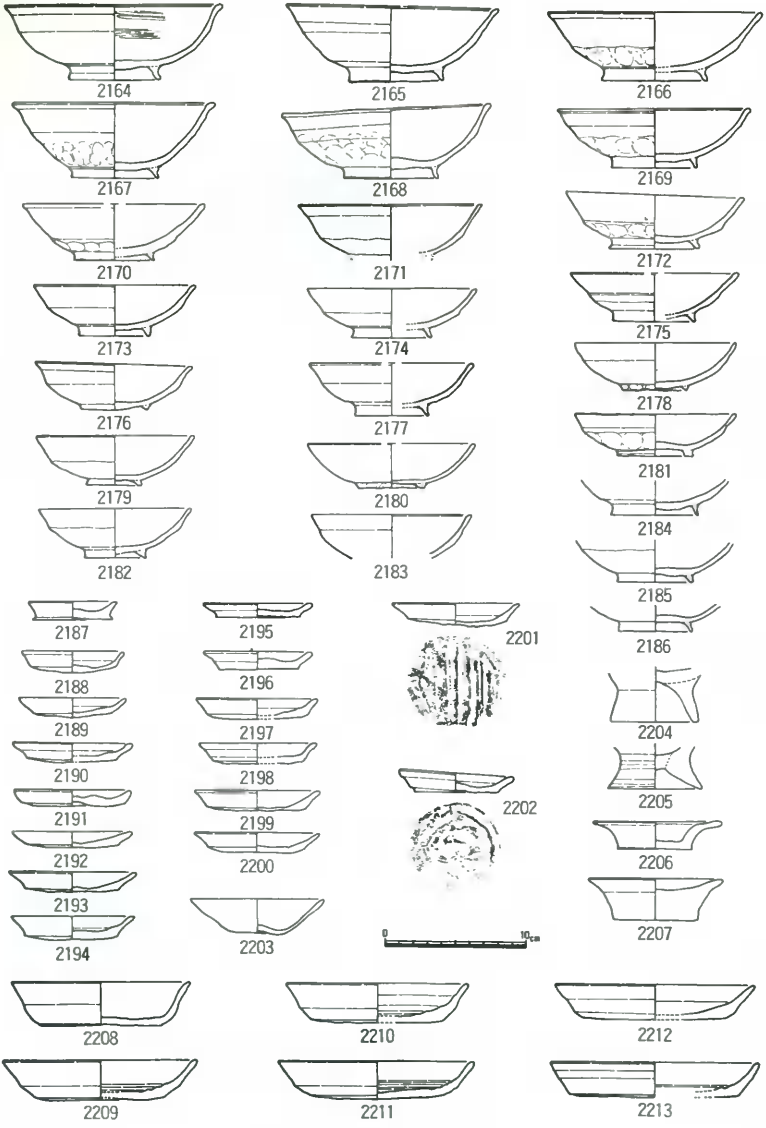
2436～2446は魚住焼の甕と考えられるものである。2444の外面には長方形のタタキメが認められる。2447～2453・2455～2461・2464～2473は魚住焼の鉢であると考えられる。2462・2463は魚住焼か或いは東播地方のどこかの製品であろうと考えられる鉢である。2454については産地が不明であるが，胎土の特徴から一応東播系のものと考えておきたい。

2474～2494は常滑焼であると考えられる。いずれも小片であり同一個体のものが図示されている可能性もあり，出土した個体数はさほど多くないものと考えている。

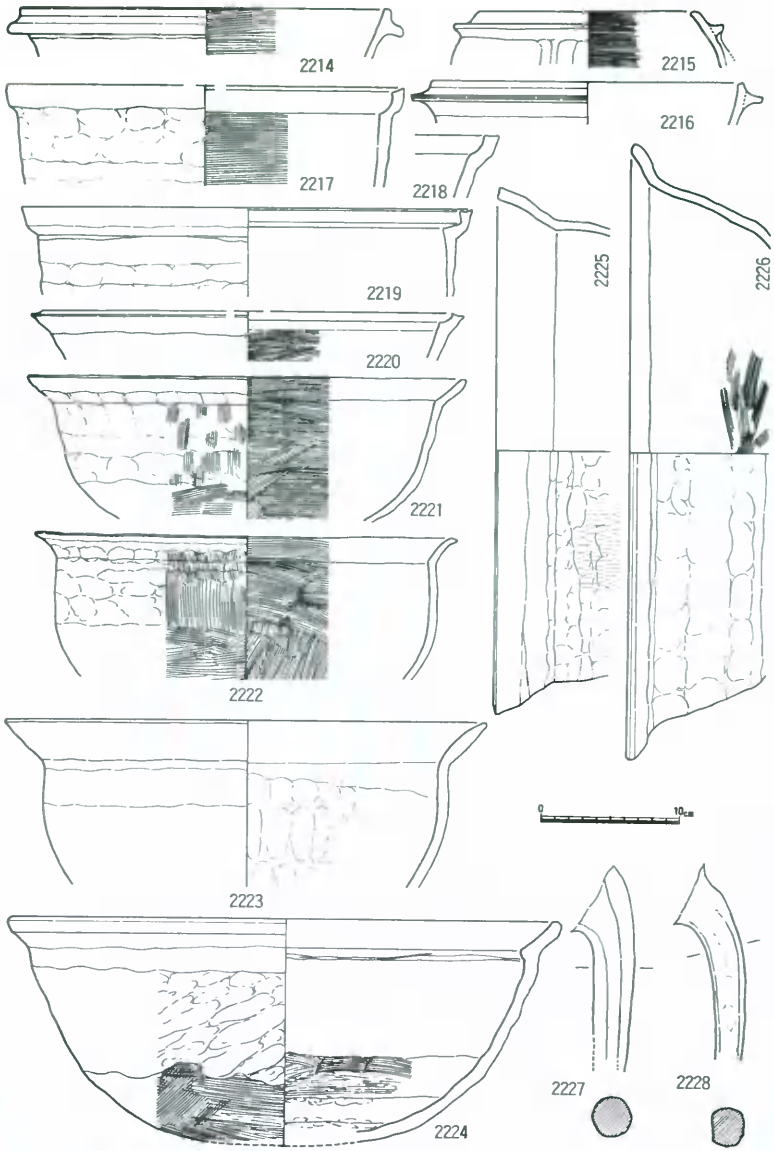
2495～2655は中国製の白磁であると考えられる。2495・2496は壺である。2497は小型の壺であろうか。2498～2501は碗であり，Ⅱ類に相当すると考えられる（以下，青磁，白磁の類別呼称については，横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」『九州歴史資料館研究論集』4　1978による）。2502～2506は皿であり，2503～2506はⅥ類に相当すると考えられる。2507・2516は碗で，Ⅲ類に相当すると考えられる。2508～2515・2517～2594は碗で，Ⅳ類に相当すると考えられる。これらのうち2515はⅣ－1・a類に相当するであろう。2595～2639は碗と考えられ，ほぼⅤ～Ⅶ類に相当するものと考えられる。これらのうち2595はⅤ－1類に，2596・2597はⅤ－2・b類に，2598・2604はⅧ－2類に，2613～2622はほぼⅤ類に，2626～2639はⅧ類に相当すると考えられる。2640～2643は皿であり，2640～2642はⅢ類に相当すると考えられる。2644はいわゆる口禿の碗であり，Ⅸ類に相当する。2645～2650は口禿の皿でありⅨ類に相当する。2651・2652は皿である。2653～2655については明代の白磁ではないかと考えておきたい。

2656～2660は青白磁の合子である。

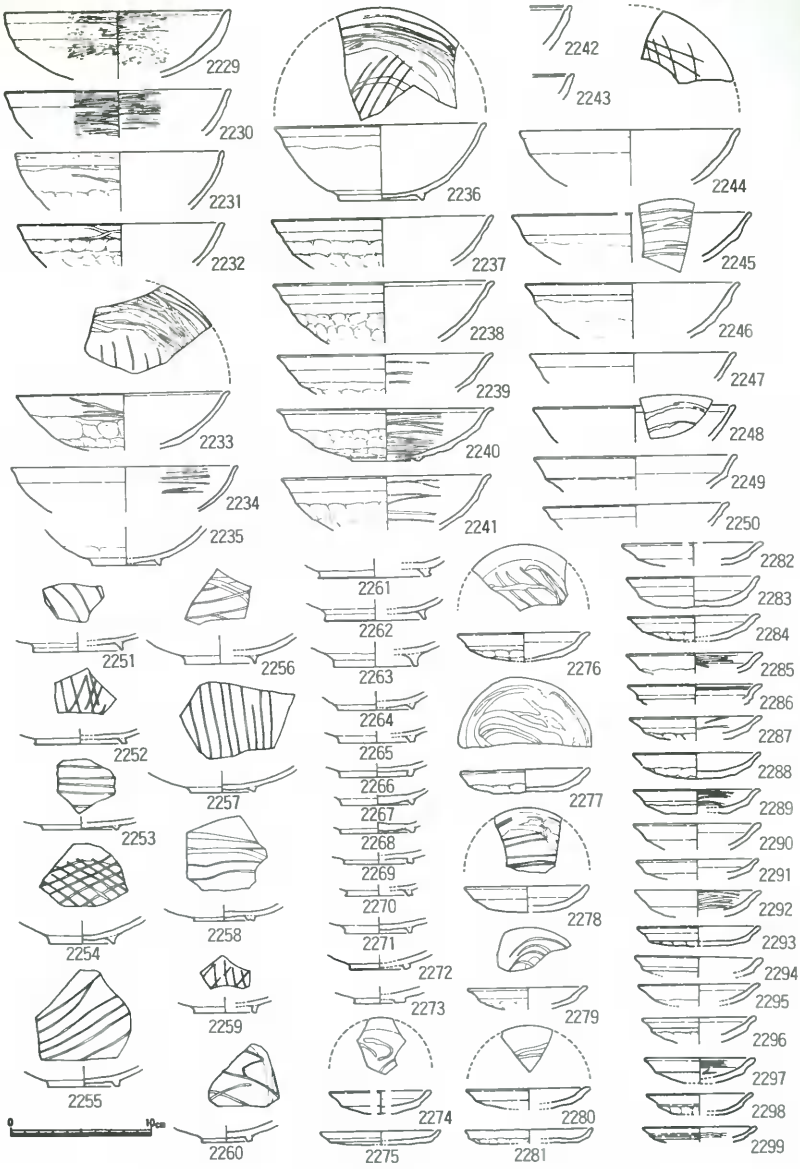
2661～2684は龍泉窯系の青磁であると考えられる。2661・2662は壺で同一個体である可能



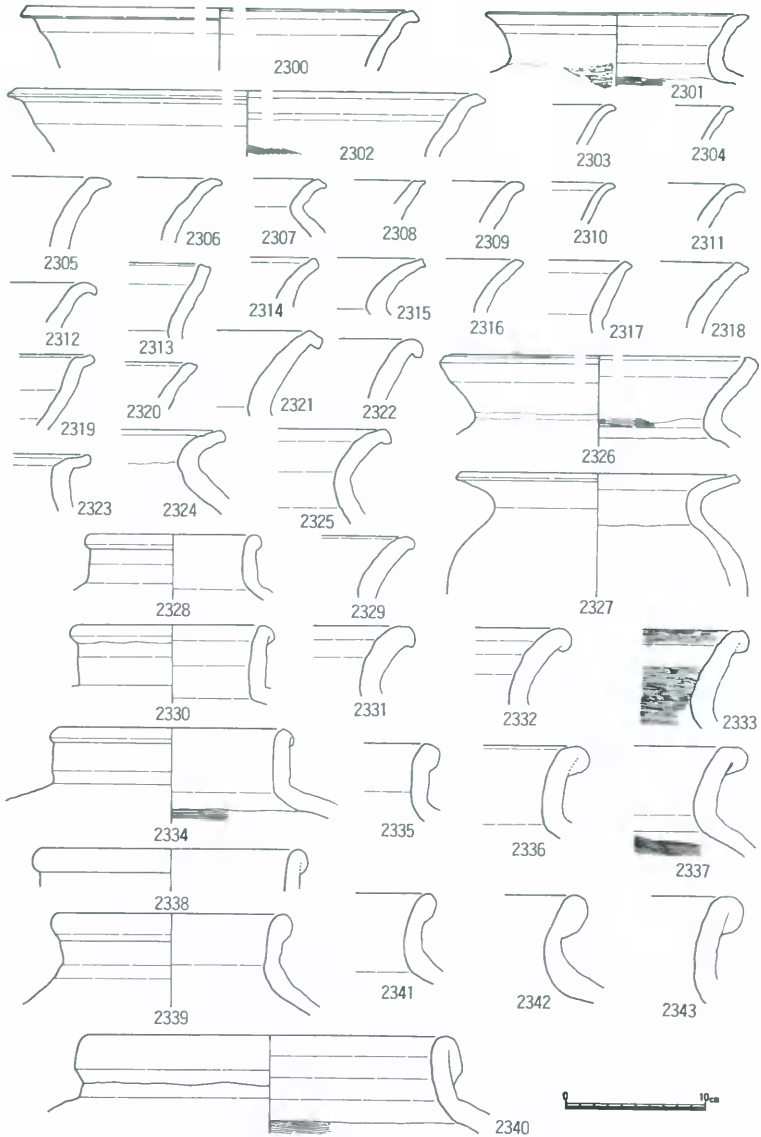
第237図　包含層出土遺物（1）



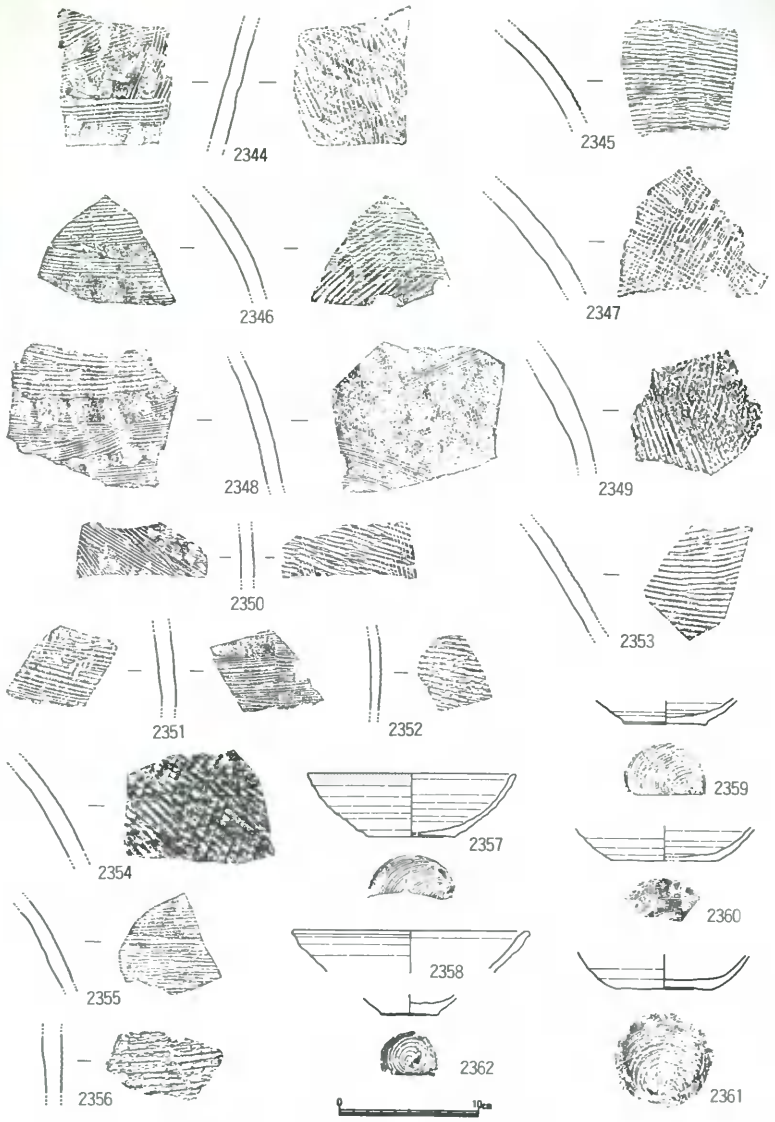
第238図　包含層出土遺物（2）



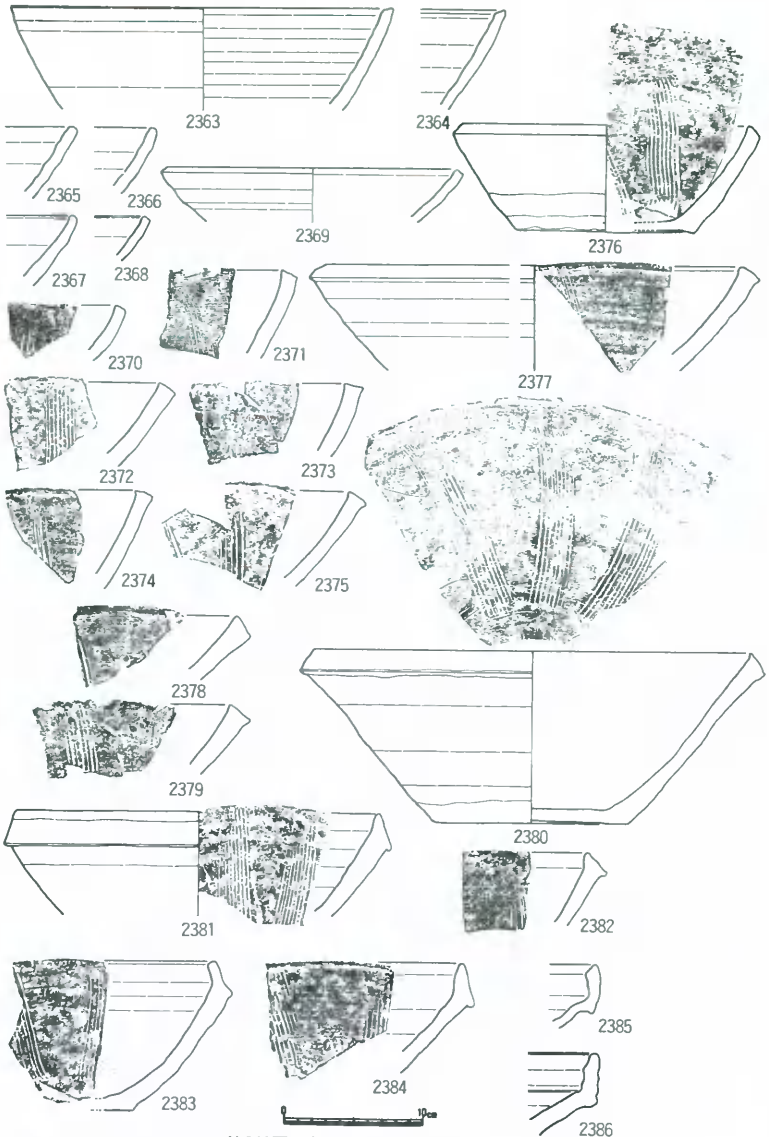
第239図　包含層出土遺物（3）



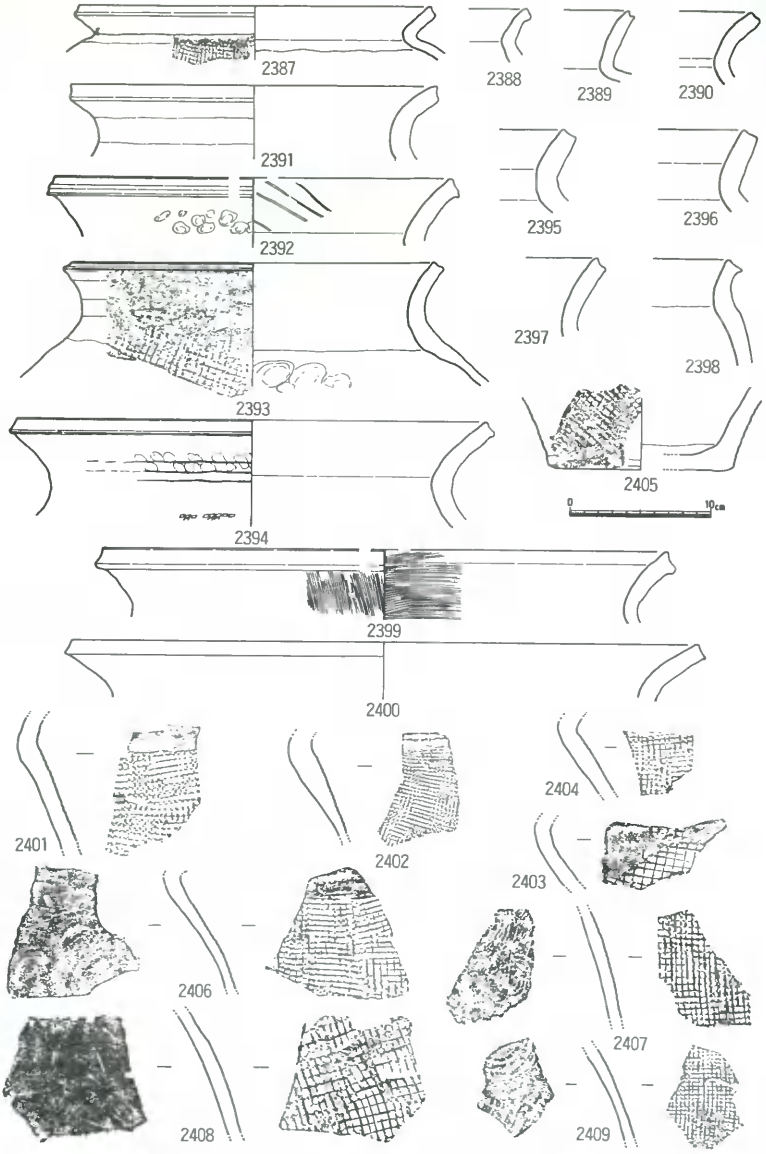
第240図　包含層出土遺物（4）



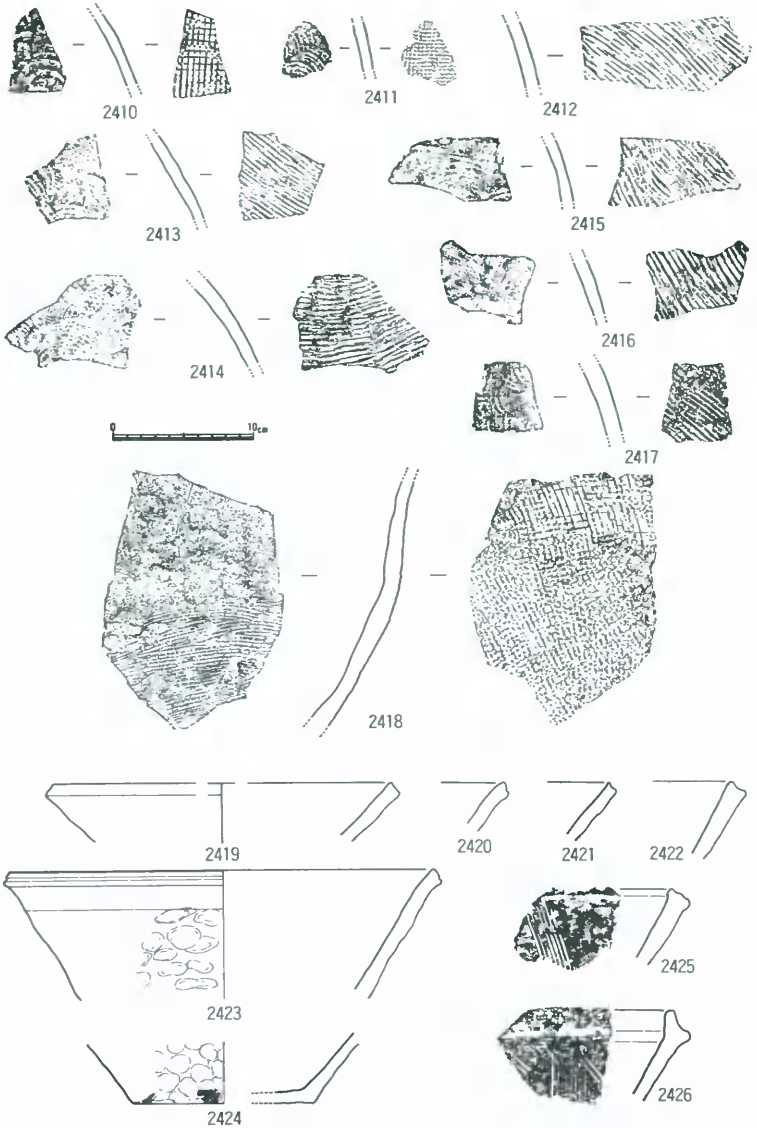
第241図　包含層出土遺物（5）



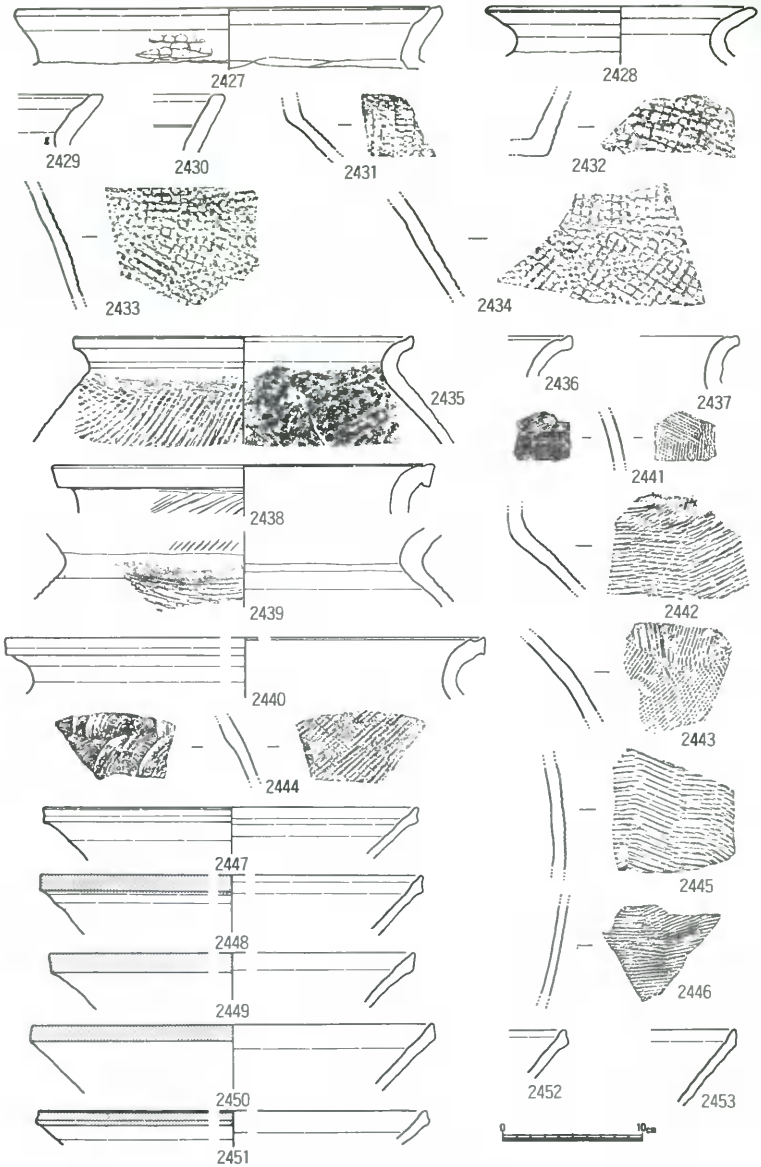
第242図　包含層出土遺物（6）



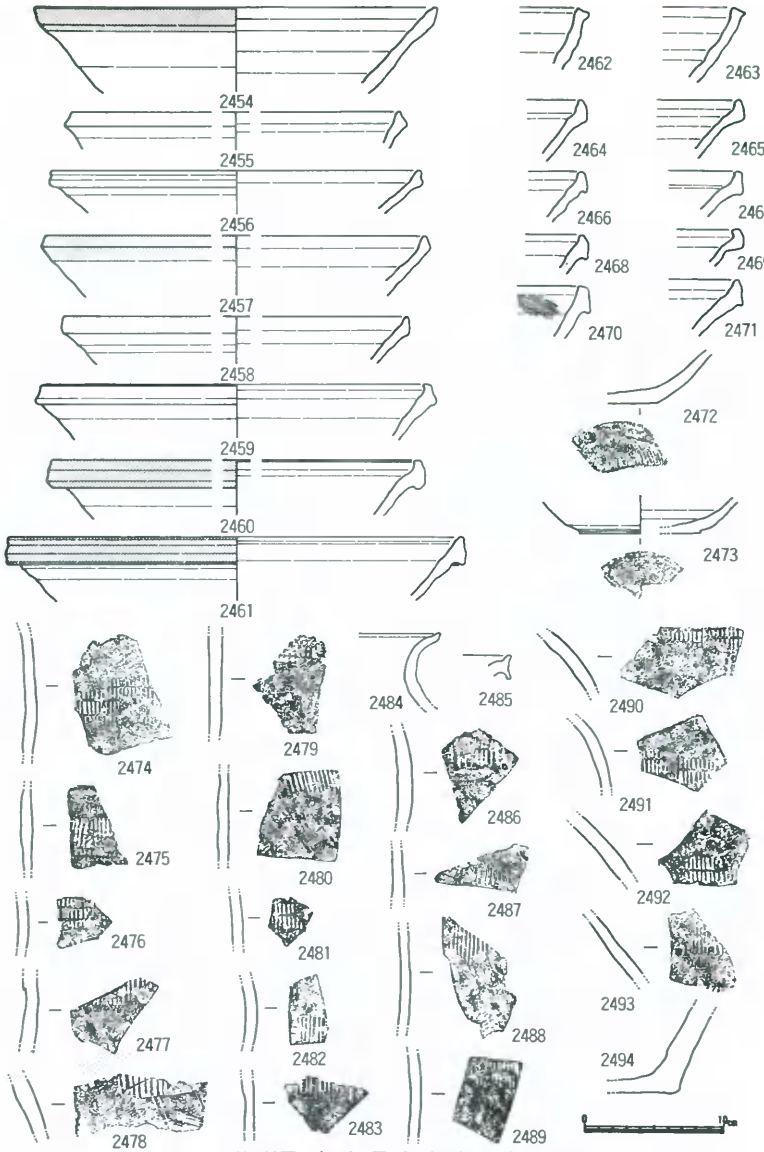
第243図　包含層出土遺物（7）



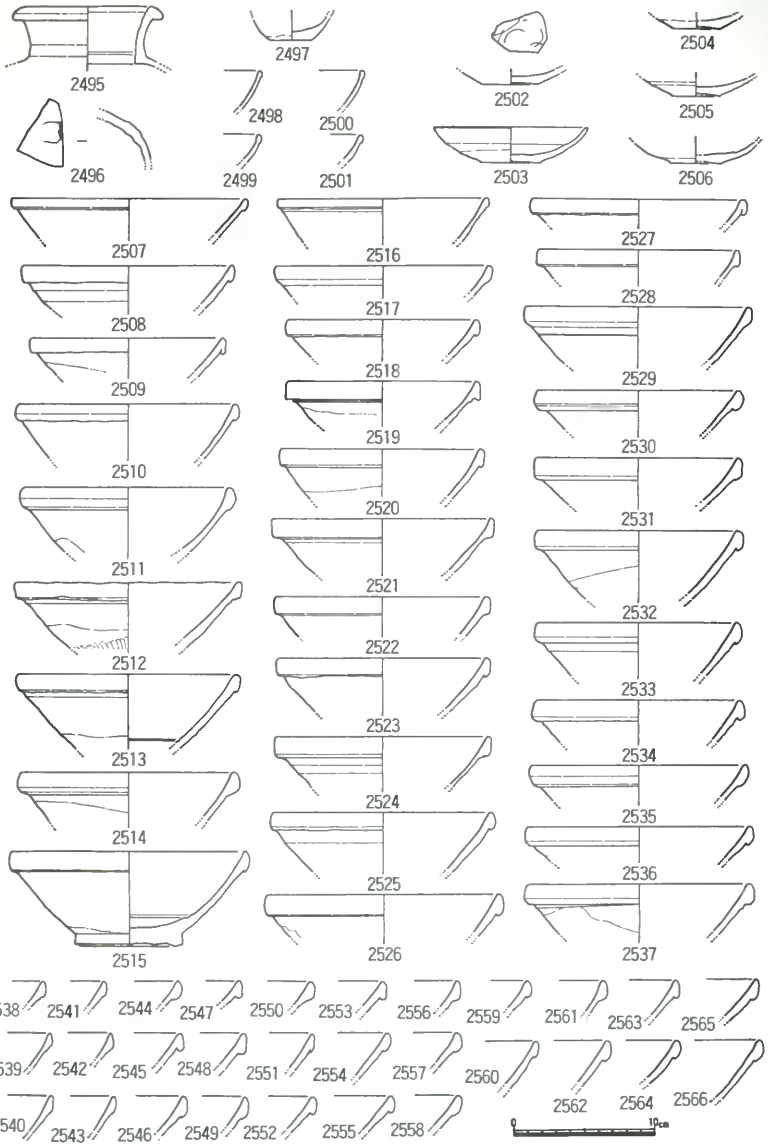
第244図　包含層出土遺物（8）



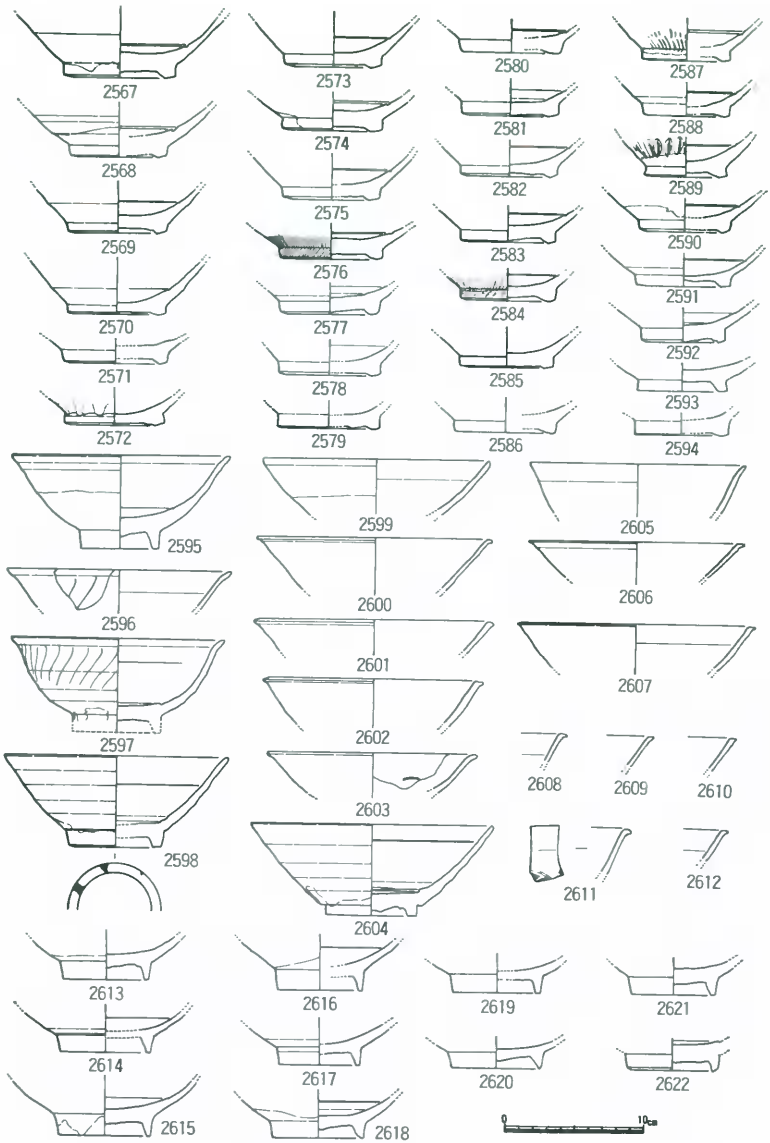
第245図　包含層出土遺物（9）



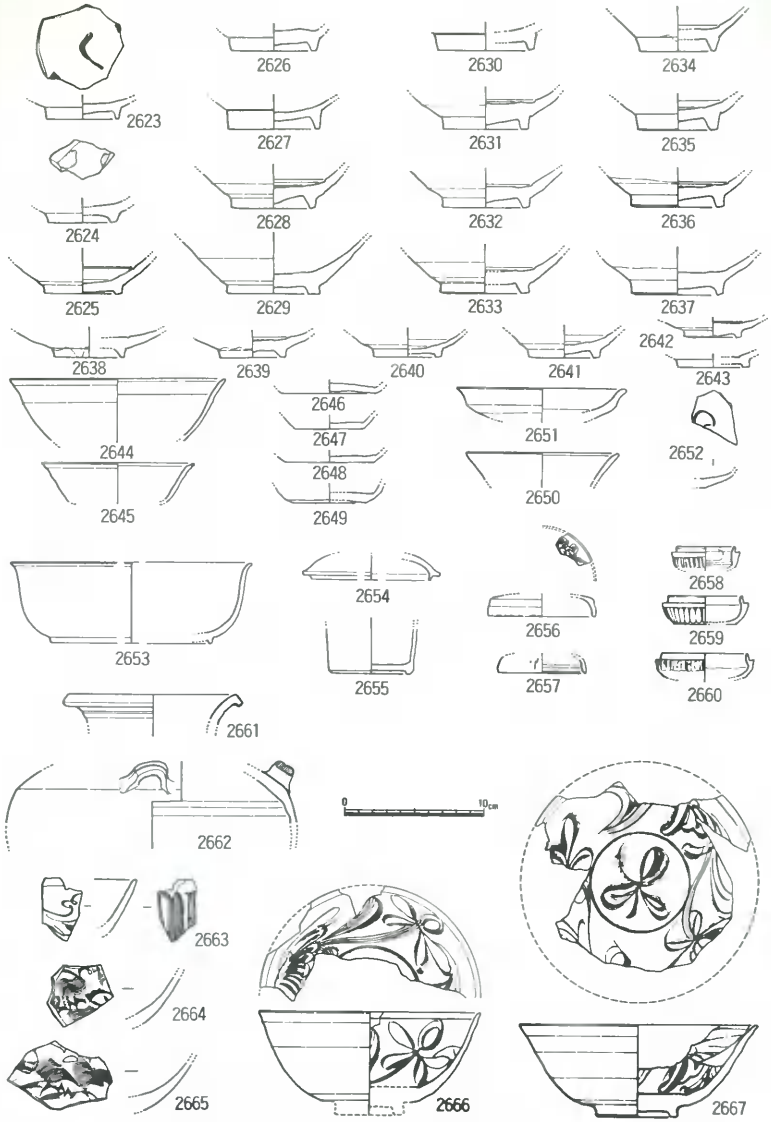
第246図　包含層出土遺物（10）



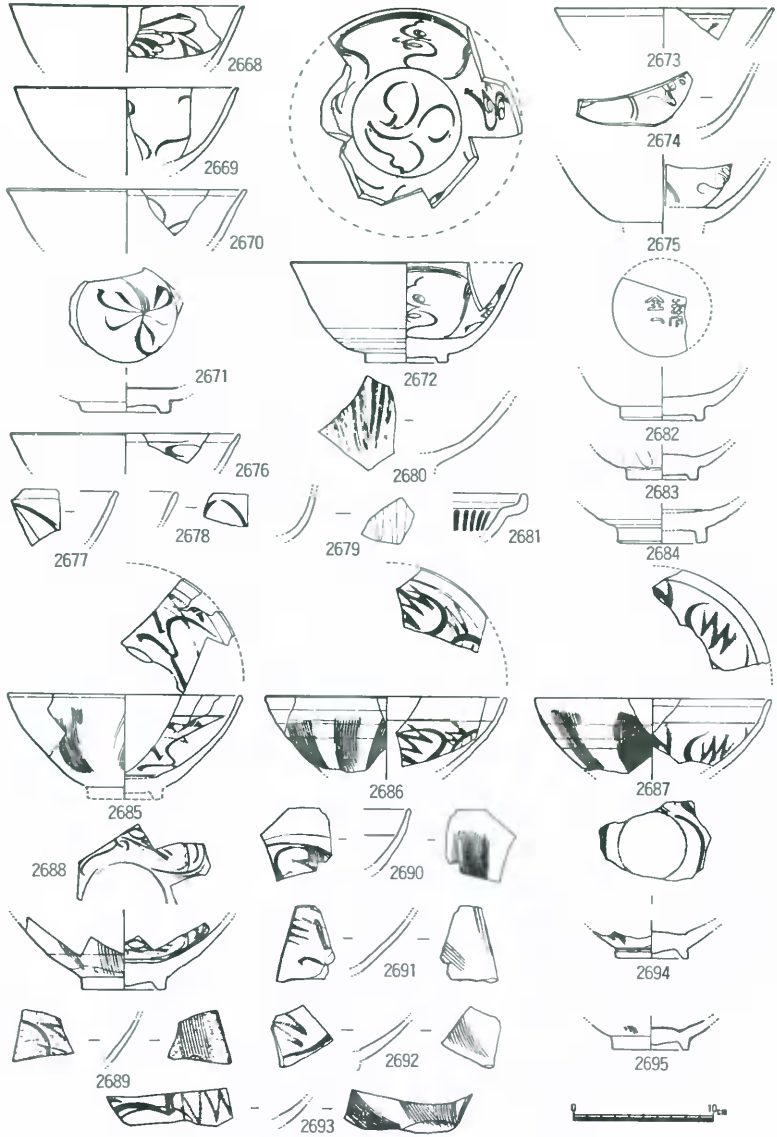
第247図　包含層出土遺物（11）



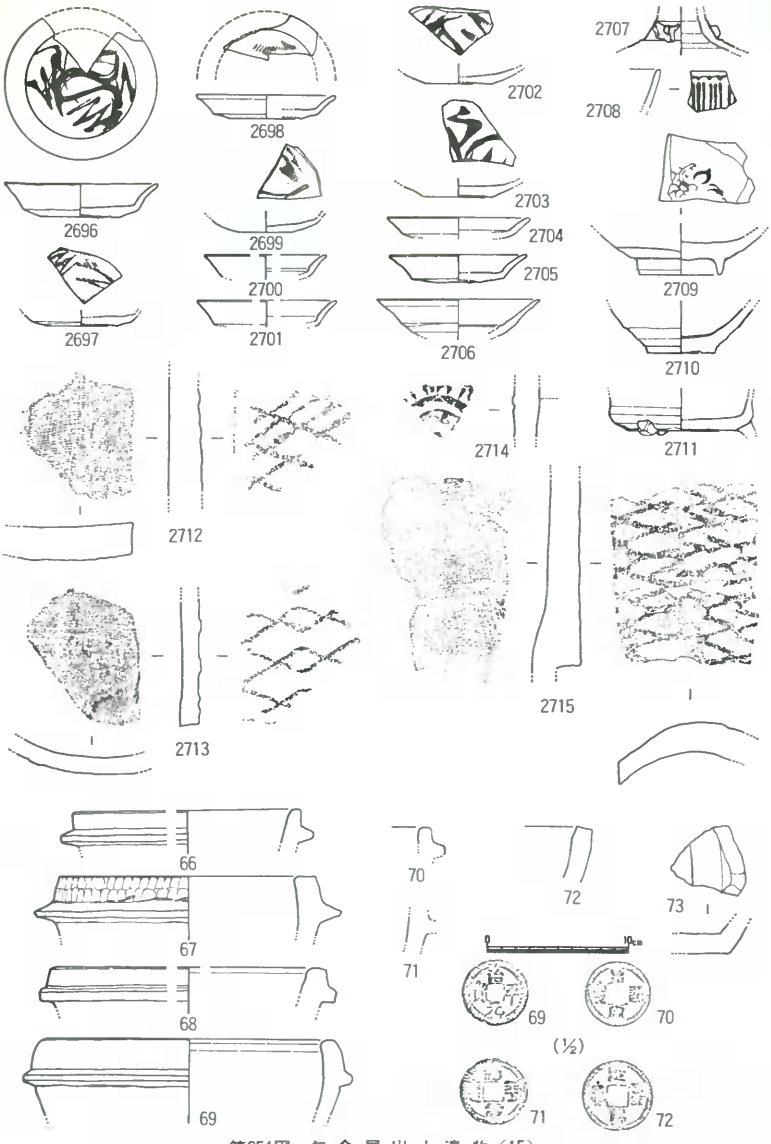
第248図　包含層出土遺物（12）



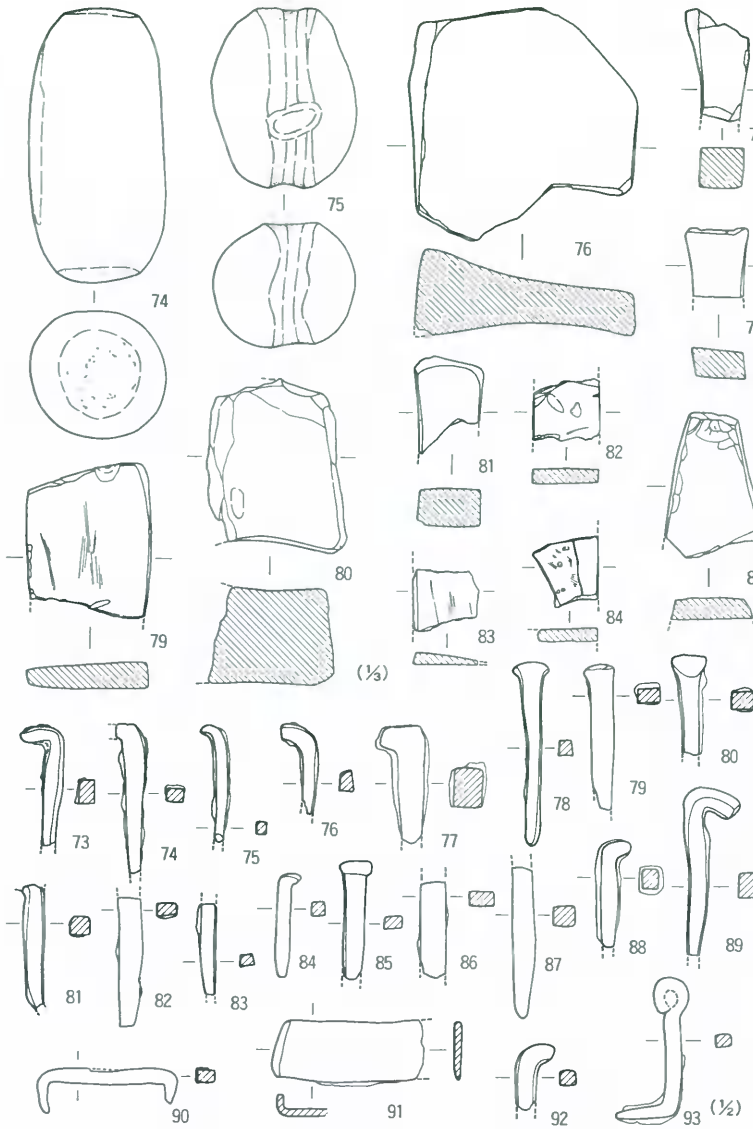
第249図　包含層出土遺物（13）



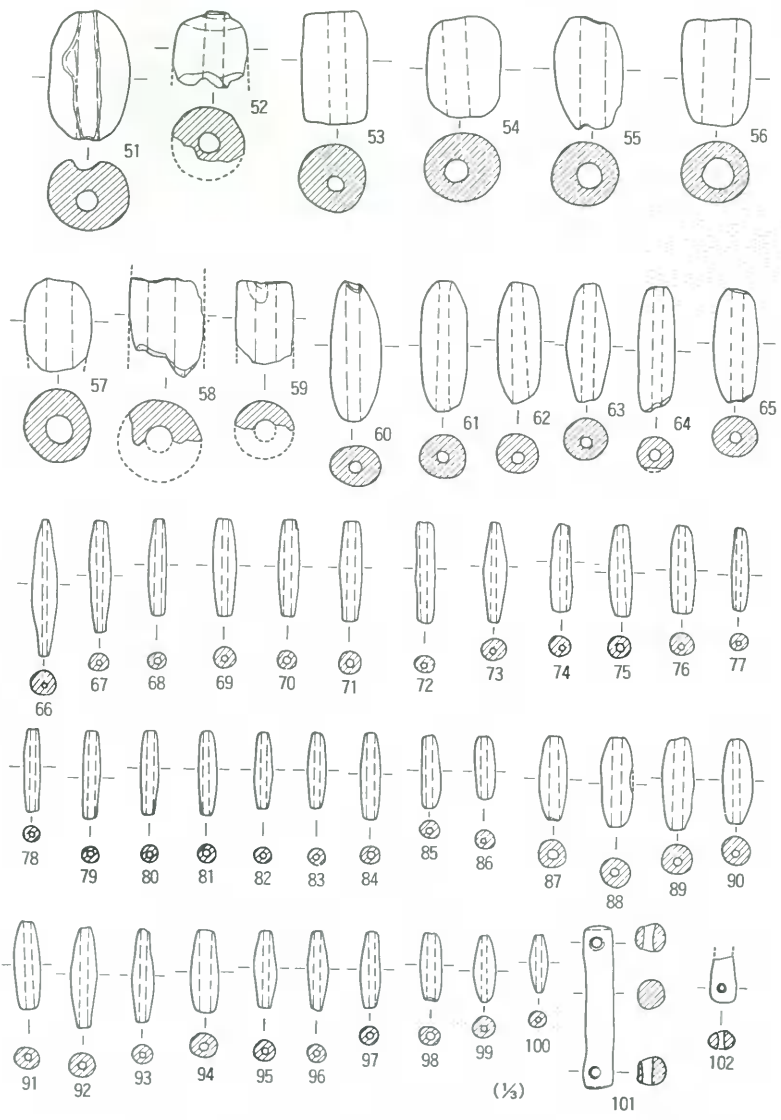
第250図　包含層出土遺物（14）



第251図　包含層出土遺物（15）



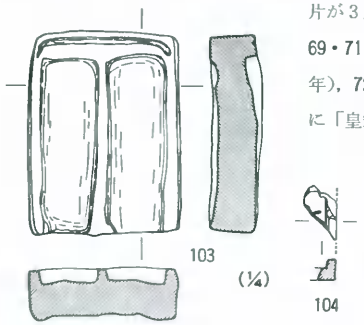
第252図　包含層出土遺物（16）



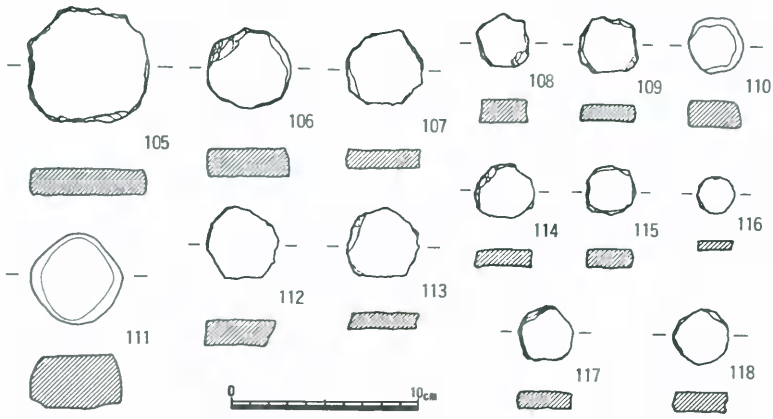
第253図　包含層出土遺物（17）

性が強い。2663～2679・2682～2684は碗で，2663～2665はⅠ－6・b類に，2666～2668はⅠ－2・b類に，2669～2671はⅠ－2類に，2672～2676はⅠ－4類に，2677～2679・2682～2684はⅠ－5類に相当すると考えられる。2680・2681は盤であると考えられる。2685～2705は同安窯系の青磁であると考えられる。2985～2695は碗で，Ⅰ－1・b類に相当すると考えられる。2696～2705は皿で，2696はⅠ－2類に，2697～2705はⅠ類に相当すると考えられる。2706は青磁の皿である。2707は青白磁の水瓶と考えられる。明代のものではなかろうか。2708は青磁細蓮弁文碗の破片である。2709は青磁碗で明代のものではなかろうか。2710は天目茶碗である。中国製のものと考えておきたい。2711は猿投窯の香炉と考えられる。

2712～2715は瓦である。第251図66～73は滑石製の石鍋である。図示できたもの以外にも小片が3片出土している。第251図69～72は古銭である。69・71は「治平元寶」(1064年)，70は「皇宋通寶」(1039年)，72は「元豊通寶」(1078年)であり，図示した以外に「皇宋通寶」，「熙寧元寶」(1084年)が各1片出土している。第252図の上段の74～85は石器（石錘・砥石），下段の73～93は鉄器（釘・鎌・鋏・掛金具）である。第253図51～102は土錘である。第254図103・104は陶硯である。第255図105～118は備前焼・瓦・中国製青磁片を利用した円板状の土製品である。（平井）



第254図　包含層出土遺物（18）



第255図　包含層出土遺物（19）

第2節　丸田調査区

1. 調査区の概要

本調査区は，中須賀調査区の下流に所在する。調査は，グリッドライン14から26にかけての全長240mを対象とした。これは，行政区画でいえば，岡山市原尾島字丸田に所属する。調査の結果得られた成果は，本文中でその都度詳述するとして，ここではそれら概要を簡単に述べて本文への導入とする。

先ず，本調査区の自然地形であるが，調査区の西限は，中世の河川氾濫により大規模な攪乱を受けていた。そのため，中世以前における地形の様相については，当該調査区においては確認することはできなかった。しかし，微高地地形の状況に関しては，中世以降の微高地上面の削平以下の層序に詳しく窺われる。

基本層序は，第262図から第263図にかけて抽出したとおりである。それは，（1）が微高地の西側，（2）～（3）が微高地上面，（4）～（5）がおもに微高地東側の水田化された地域，（6）が「島状高まり」遺構により水田化の及ばなかった所を示す。以下これを順を追って述べてみると，（1）は，1層から2層までが現代の耕作土，3層が中世，4層から6層までが古墳時代，7・8層は弥生時代後期末ごろの洪水による厚い堆積砂，9層は洪水で埋没する直前の水田層，10層以下16層までは弥生時代前期以降の堆積状況を示す。いずれもほぼ水平堆積を呈する。中には，花粉分析，プラントオパール等の結果，水田の存在を示唆する層10・11・15も存在する。（2）は，最も基盤の高い所である。ところが，耕土直下には中世の層序は認められず，1層の暗灰色砂を除去すれば，すぐに古墳時代の遺構が検出される。おそらくは，中世以降の段階に，大規模な上面削平が行われた結果の事象と推測される。以下3層が弥生時代後期，4層の灰褐色土層上面が弥生時代前期の遺構検出面に相当する。その4層上面には，マンガン結晶粒が多く凝集する。（3）は，（2）に続く微高地上面での層序の在り方を示す。5層が弥生時代前期の包含層である。（4）・（5）は，微高地を削平して営まれた水田と，その下層の状況である。

微高地本来の層序については，（6）の「島状高まり」遺構の中にかろうじて残存し，ここにその一部を窺うことができる。それによれば，層序はほぼ水平堆積がなされ，ほとんど大きい変化が認められない。ところが，直接この北壁土層に現われなかったものの，これより若干南の土層断面には，弥生時代中期の水田層の存在が認められた。しかし，それも「島状高まり」遺構－4の西辺付近の下層でとだえる。なお，その他に注目すべき事象に第264図－（2）

のE-23土層断面8層の淡青灰色粘質土中から，打製石鏃の出土があげられる。

以上の層序によれば，当該調査区の微高地地形とそれに伴う土地利用は，すでに縄文時代晩期にその萌芽があった様である。しかし，当該調査区において検出された遺構の在り方からすれば，その中心は，おもに弥生時代前期の河道と，その東に形成された堤防状の微高地，さらにその後背部に若干低くなだらかに傾斜する微高地等の地形に大きく起因しており，中世に至るまでその影響を受けていたようである。

縄文時代晩期は，おもに土器片等の出土遺物により，その存在が示唆されるが，遺構の確認はできなかった。

弥生時代前期は，前述したとおり河道とその東に形成された堤防状を呈する微高地を中心とした土地利用が窺える。河道の西には南北に河道と並行して伸びる幅20m程の帯状の平坦面が認められた。そこからは，微量ながらプラントオパールの検出もなされている。一方河道の東は，河道の斜面からほとんど直接微高地上面へと至り，その最も高い所には，合計5本の溝がほぼ河道に並行した流走をみせる。また，その他にも，土壙等の点在も認められた。さらに，その後背地とでもいうべき若干低くなった所には，竪穴式住居と土壙等の存在も認められる。

一方，弥生時代中期になると本調査区においては，人の定住の痕跡はほとんど見いだせず，わずかに「島状高まり」遺構－4下層において，水田の存在がその断面の中に認められ，さらに遺物においても，弥生時代前期の河道の埋没過程で若干の土器片が認められたにすぎない。

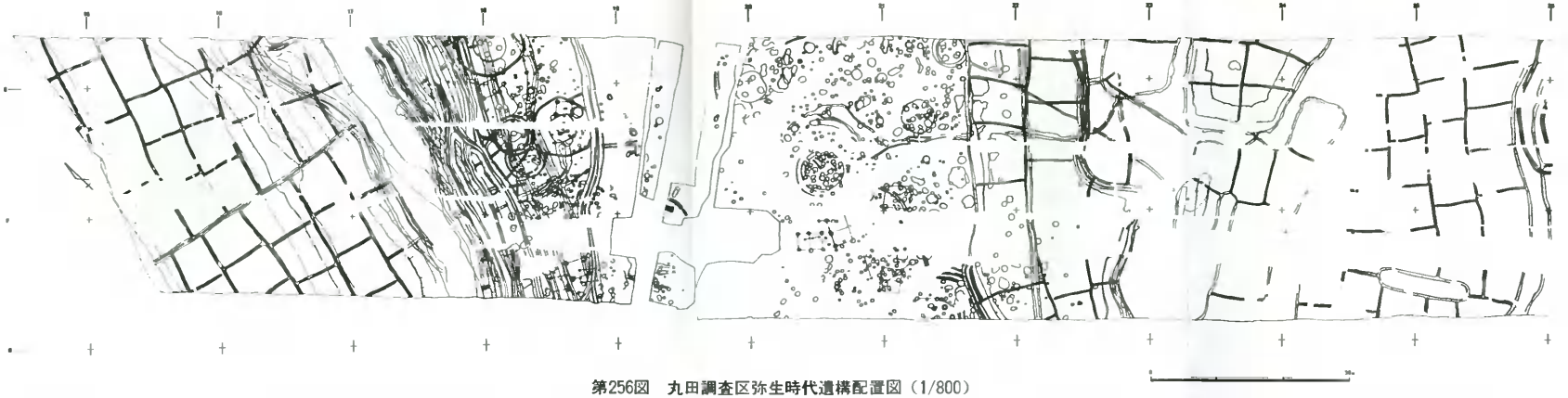
ところが弥生時代後期の段階では，爆発的と言っても過言でない程の遺構，遺物の増大が認められる。弥生時代前期の河道の埋没後，その地点は，水田耕地化が図られ，それに伴って微高地端部には，多くの溝が開鑿される。そしてその微高地上には，長期にわたる人の定住を窺わせる竪穴式住居・掘立柱建物・井戸・土壙等が数多く所在する。さらにその微高地以東においても，微高地上面を大規模に削平しての水田耕地の開発が認められた。これらの状況は，弥生時代後期末ごろの大洪水によりすべての水田が砂で埋没するまで変らなかったようで，ほとんど重複した地点への竪穴式住居・井戸・土壙等の遺構の集中が認められた。ここで検出できた遺構は，竪穴式住居11軒・建物13棟・柱列4本・井戸16基・土壙133基・溝33本等である。

これに続く古墳時代は，その全期間を通しても検出できたおもな遺構は竪穴式住居4軒・井戸4基・土壙2基・溝16本と，弥生時代後期のものと比較した場合，その希薄さは明瞭である。しかもその中でも竪穴式住居は，いずれも中世以降の上面削平によりその遺存は良くない。

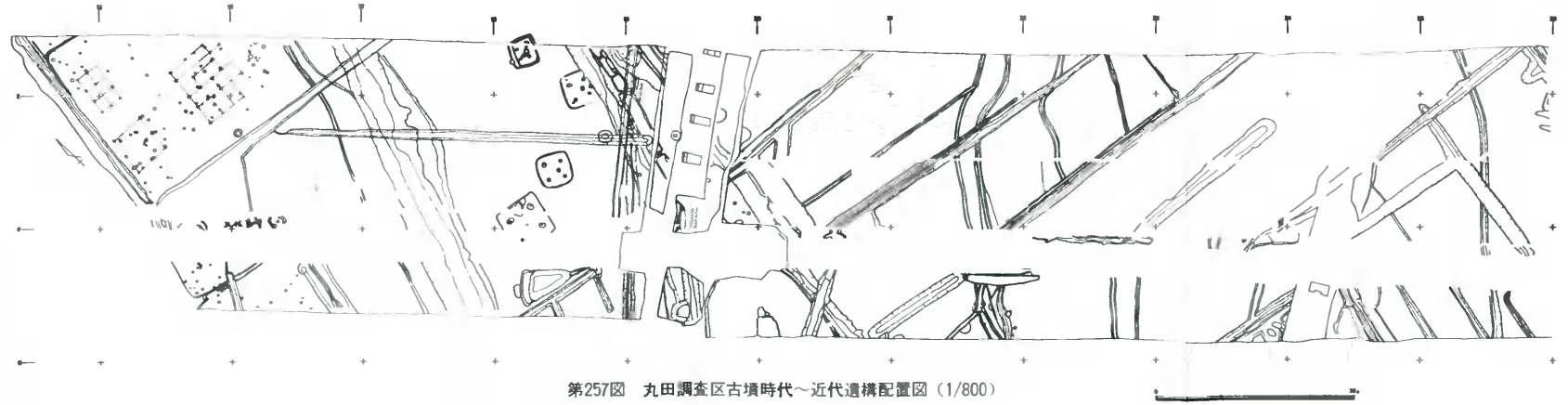
次に古代の遺構としては，溝－87がほとんど南北の条里に符合するかのようにその一部が遺存するのみで他には関連の遺構としての確認はできなかった。

中世は，D・E-14～19にほとんど集中し，それより東の地区には検出できなかった。検出できた遺構は，建物3棟・井戸1基・土壙墓1基・溝3本にすぎない。

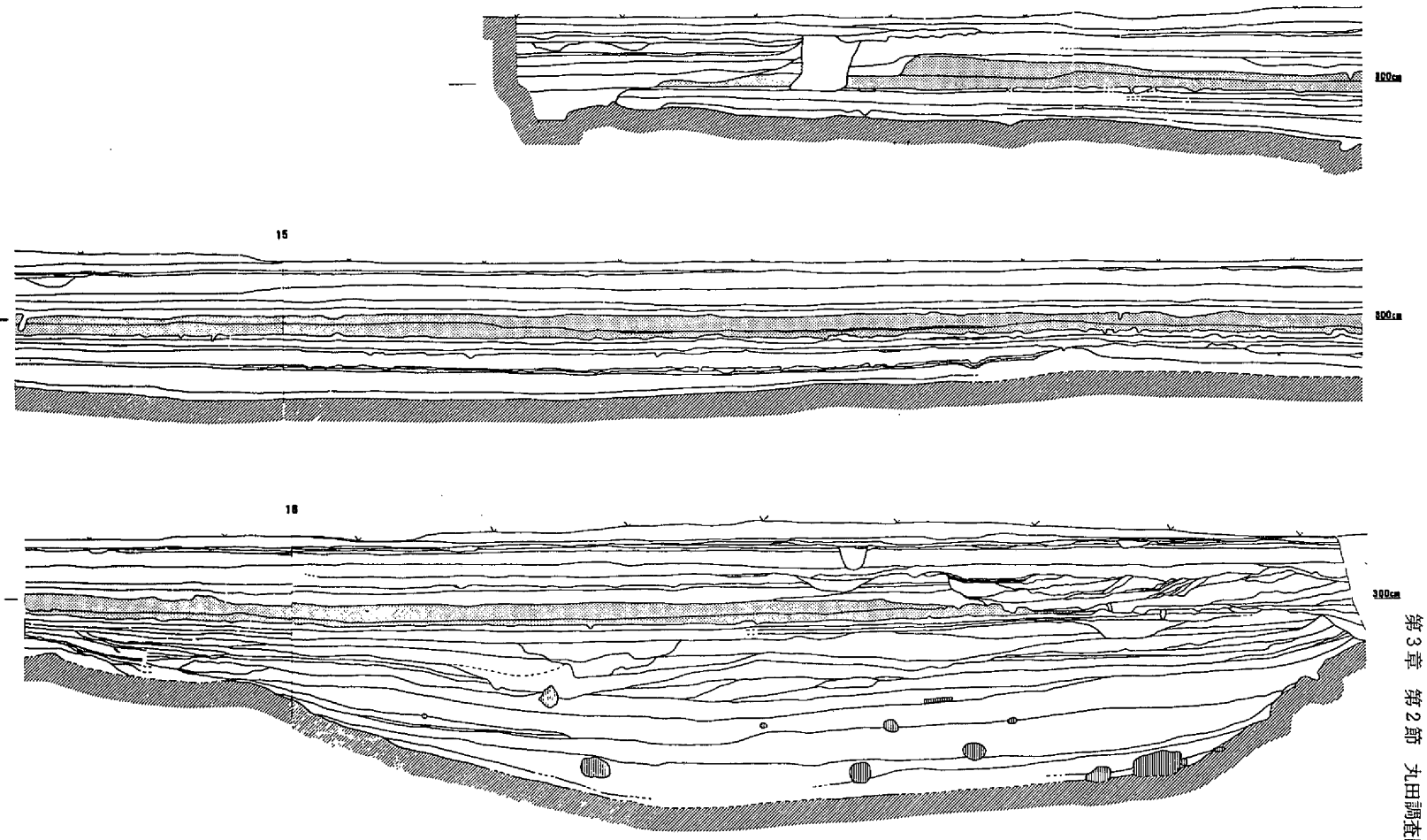
近世は，現代溝と重複した溝の存在が一部で知られる程度で判然としなかった。



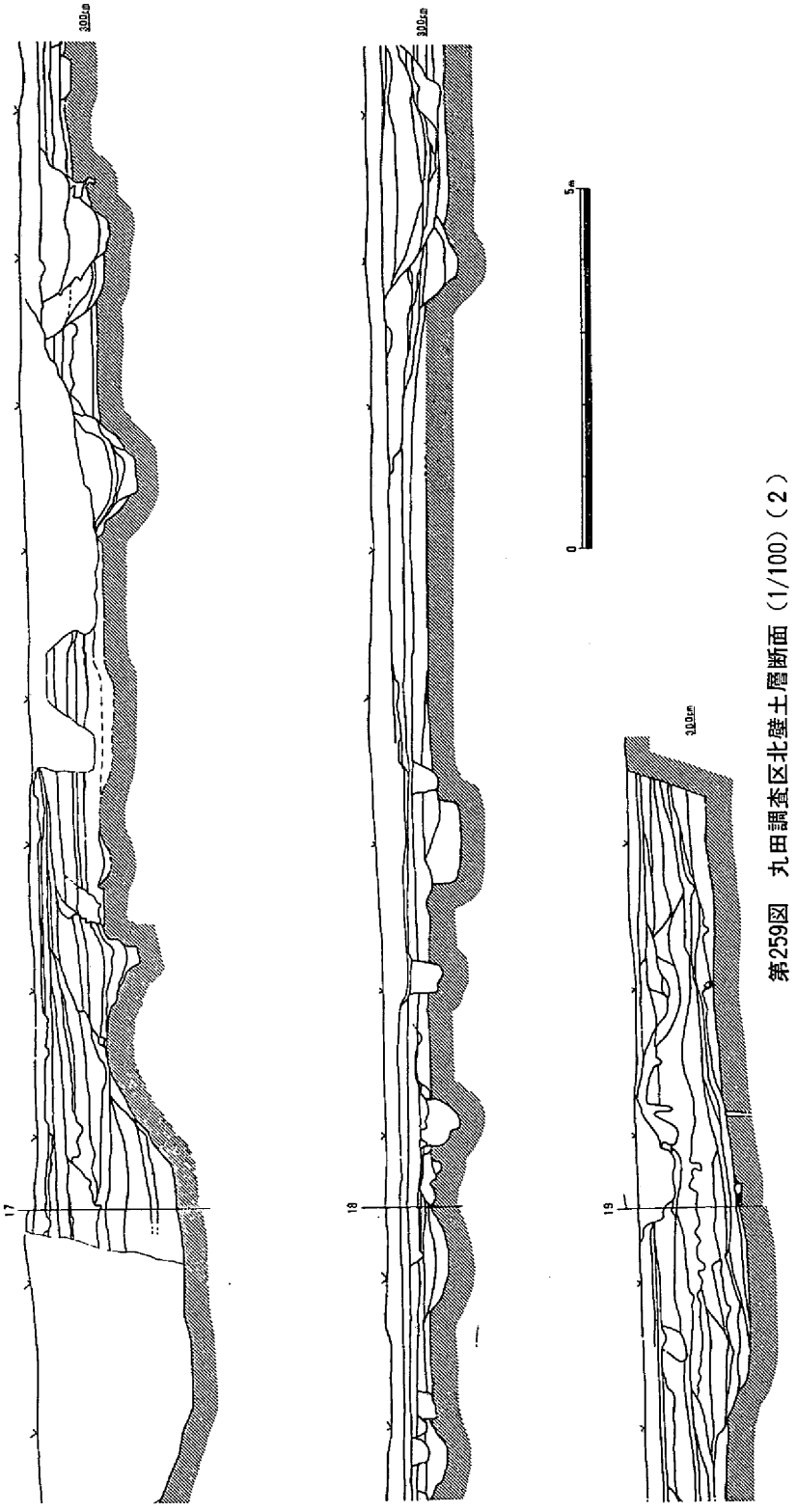
第256図　丸田調査区弥生時代遺構配置図（1/800）



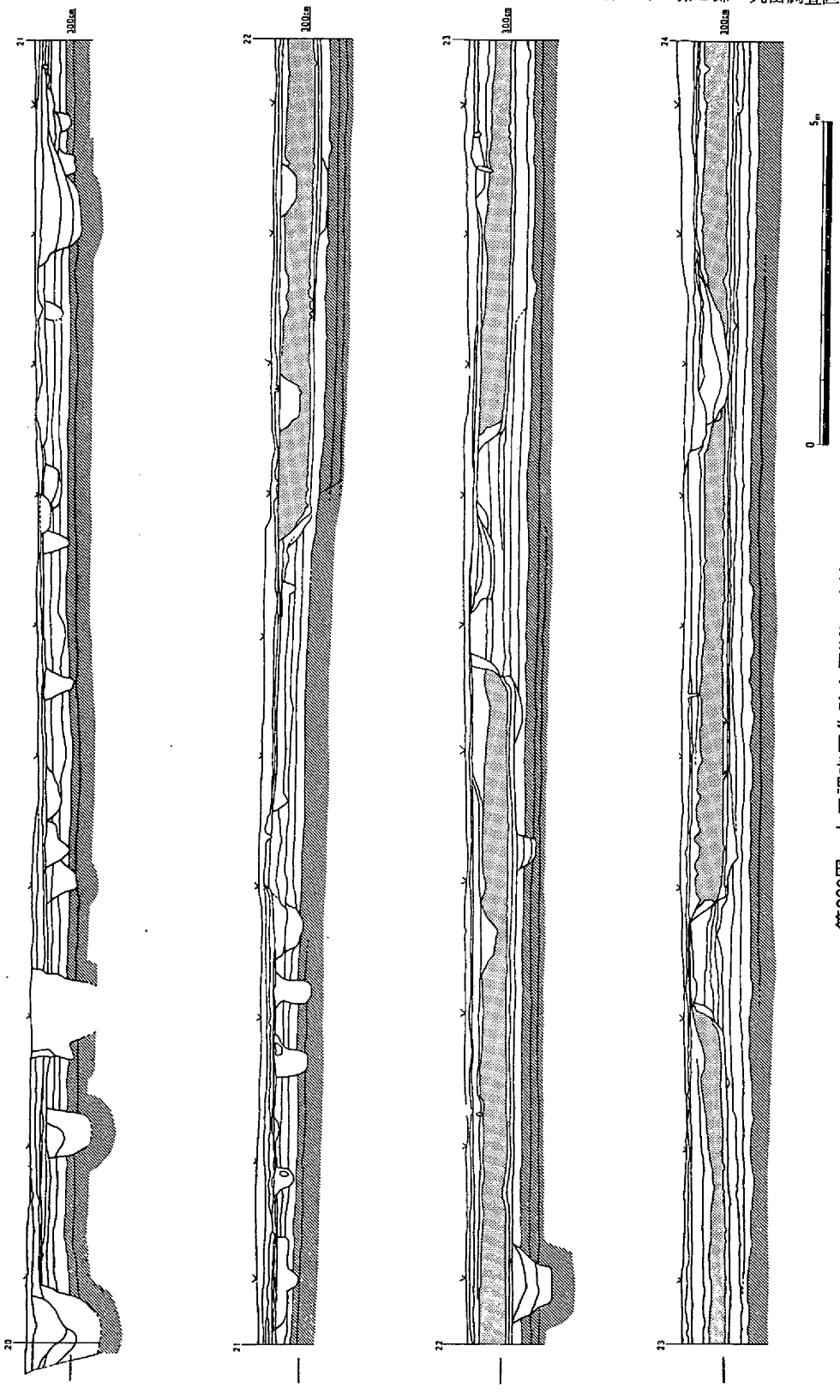
第257図　丸田調査区古墳時代～近代遺構配置図（1/800）



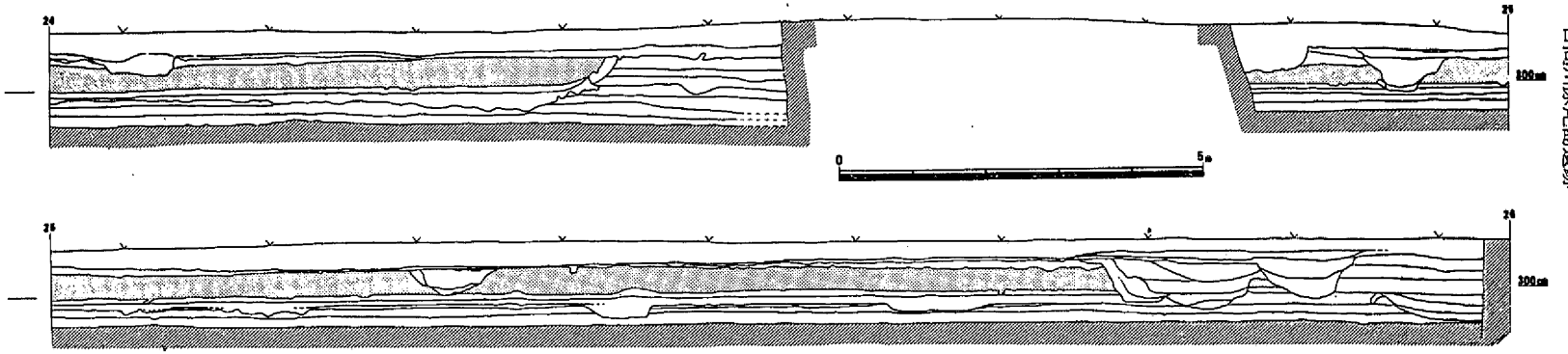
第258図　丸田調査区北壁土層断面（1/100）（１）



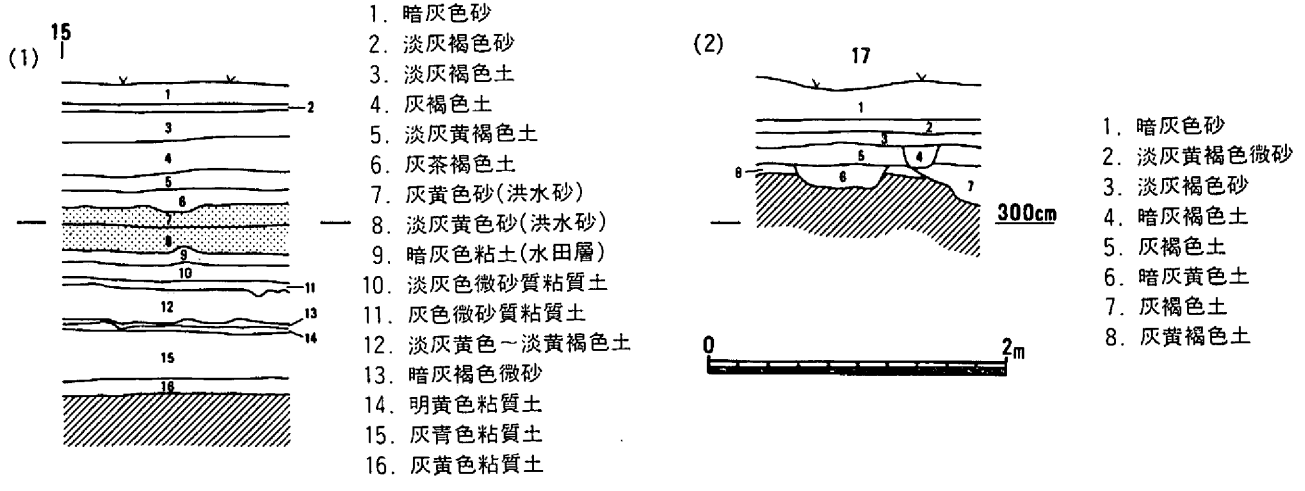
第259図　丸田調査区北壁土層断面（1/100）（2）



第260図　丸田調査区北壁土層断面（1/100）（3）

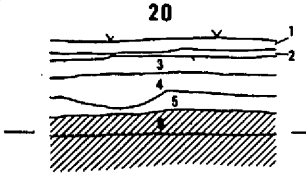


第261図　丸田調査区北壁土層断面（1/100）（4）



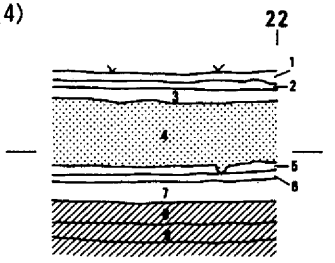
第262図　丸田調査区北壁抽出土層断面（1/50）（1）

(3)



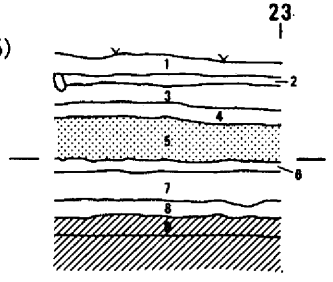
1. 黄灰色砂
2. 灰褐色土
3. 灰黄褐色土
4. 褐灰色土
5. 淡黄褐灰色土
6. 黄灰色土(基盤)

(4)



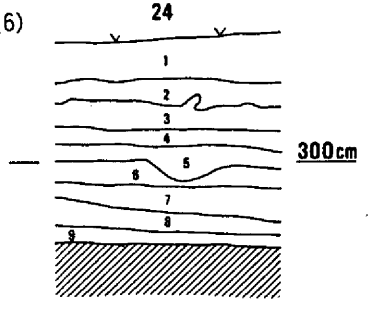
1. 暗灰色砂
2. 灰黄色砂質土
3. 暗灰褐色粘土
4. 淡灰黄色砂(洪水砂)
5. 暗灰色粘土(水田層)
6. 灰色粘土
7. 灰茶褐色粘土
8. (淡)黄灰色土(基盤)
9. 淡褐黄色粘土(基盤)

(5)

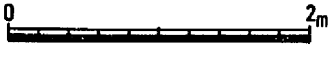


1. 灰青色砂
2. 灰黄色砂
3. 淡灰褐色微砂粘土
4. 暗灰褐色土
5. 淡灰黄色砂(洪水砂)
6. 暗灰色粘土(水田)
7. 明褐灰白色土
8. 灰茶褐色粘土
9. (淡)黄灰色土(基盤)

(6)



1. 現代盛土
2. 灰黄色砂
3. 淡黄褐色微砂粘土
4. 淡黄褐色土
5. 淡灰褐色土
6. (灰)黄橙色土
7. 暗褐色土
8. 黄橙色微砂粘土
9. 灰茶褐色粘土

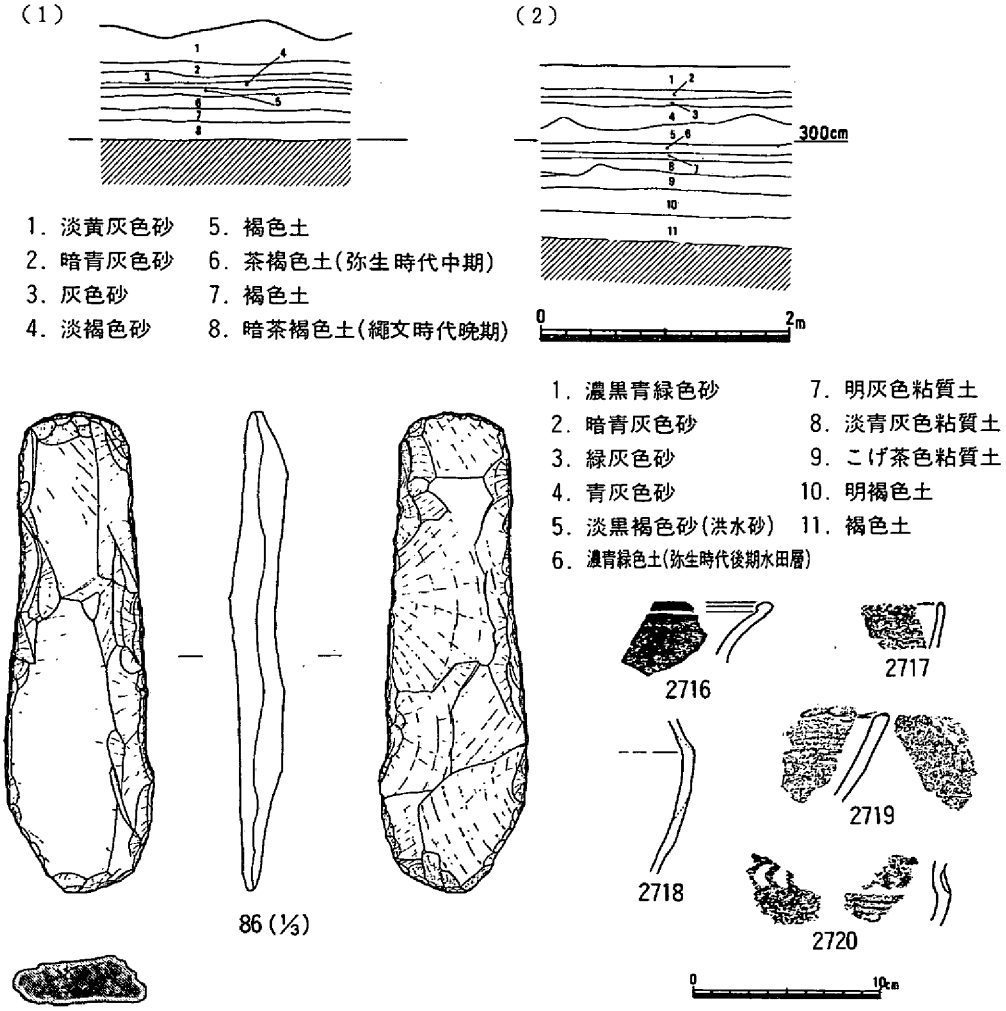


第263図　丸田調査区北壁抽出土層断面(1/50)(2)

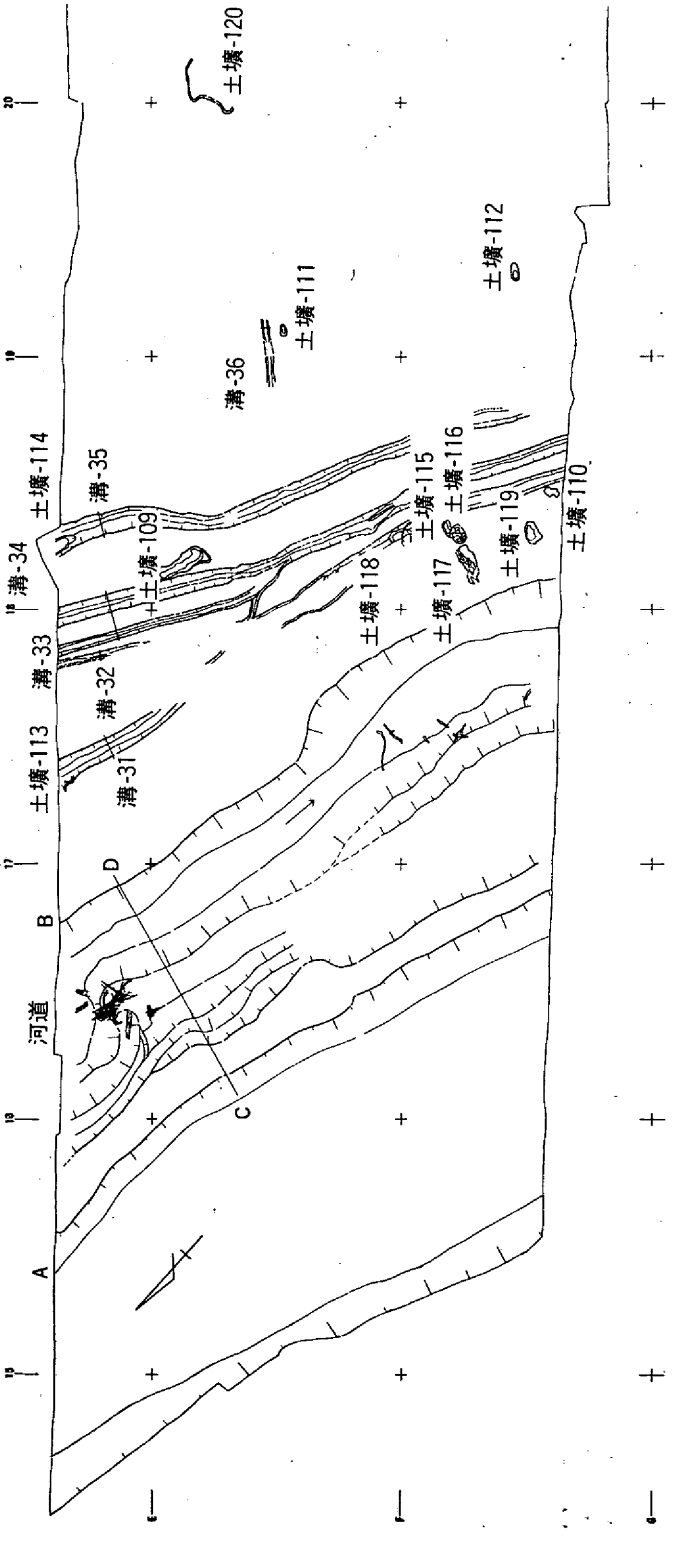
2. 縄文時代の遺構と遺物

調査の結果，本調査区においては縄文時代の遺構の検出は皆無であった。ただ，遺物に関しては，弥生時代前期の河道・土壙等に大小35点の縄文時代晩期の土器片が弥生時代前期の土器と混在しているのが認められた。その他にも土層断面中に若干の遺物の包含が認められた。

層序的には，E-20中央部やや南の土層断面中8層（暗茶褐色土）上層において縄文時代晩期の甕2718が，また，E-23とF-23グリッド杭中央付近の土層断面中8層（淡青灰色粘質土）には打製石鏃193が刃部を斜め上にむけた状態で1点検出されている。以上の事象から当該地区は，縄文時代晩期にはすでに生活基盤の形成があったものと推測される。（島崎）



第264図　抽出土層断面（1/60）・包含層出土遺物



第265図　丸田調査区弥生時代前期遺構配置図（1/600）

3. 弥生時代前期の遺構・遺物

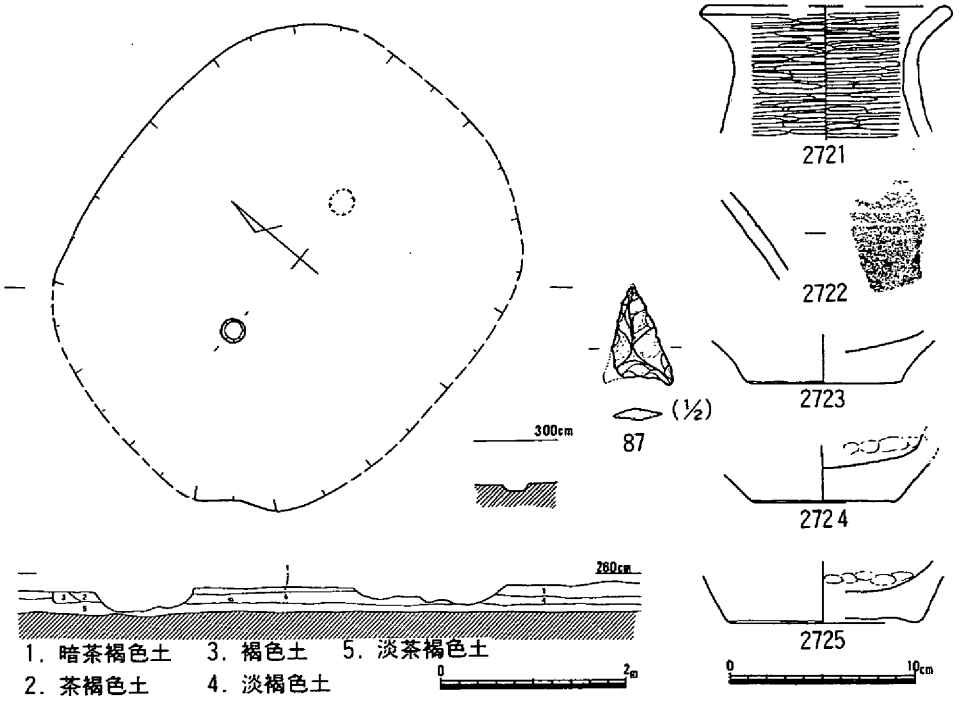
（1） 竪 穴 式 住 居

竪穴式住居—28（第266図）

E-23の南辺に位置する竪穴式住居状の遺構である。「島状高まり」遺構—1・2に挟まれて検出されており，その状況は弥生時代後期末の水田下にあり，さらに溝—94・95によって切断されている。溝—94・95内の淡灰白色粘土は水田土層に類似をしており，底面には粘土のつまった足跡状の凹凸が多数認められ，水田より若干古い時期が与えられる。

竪穴式住居状の遺構は約半分が破壊を受けており，北・西辺の一部と柱穴を残すのみである。その形状から推定して，楕円形を呈する竪穴式住居になる可能性が考慮される。長軸約500cm，短軸約420cmと推定され，深さは約30cmを測る。掘方周縁から緩やかに下がり床面にて平坦部を形成している。床面には壁体溝等の存在はなく，中央西側に直径25cm，深さ約6.5cmを測る柱穴が一本のみである。

遺物は床面に密着したものが中心を占めるが，2721・2724・2725等は住居プラン内におさまる溝—95内よりの出土である。時期は百・前・Ⅲに比定できる。（高畑）



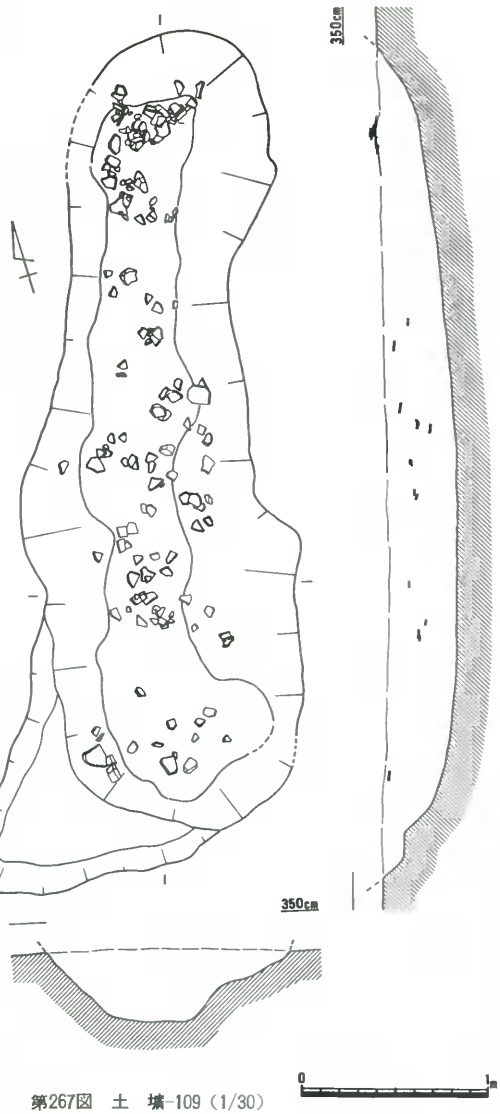
第266図　竪穴式住居-28（1/80）・出土遺物

（2）土　　壙

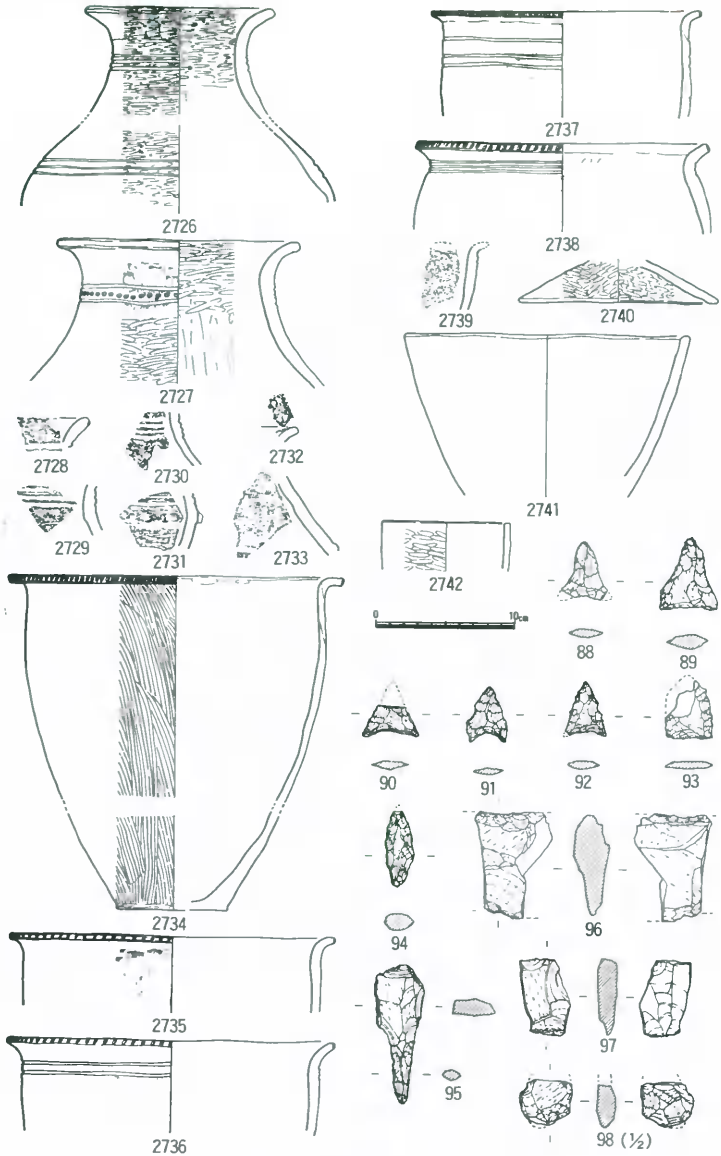
土　壙—109（第267・268図）

E-18杭の南東部に溝—34と溝—35に挟まれた状態で検出された土壙で，南北470cm・東西120cm・深さ40cmを測り，ほぼ舟底形を呈するものである。埋積土中には，壺・甕・鉢等の土器片と石鏃・石錐等を含めてサヌカイトの剝片・砕片が混在していた。とりわけ後者の量の多さには注目される。石鏃・石錐等の製品・未製品，さらには剝片・砕片等の石屑を含めるとその総重量は，1030gにも達する。このサヌカイトの包含は，土壙内くまなく認められた。このことからこの土壙の性格は，本来石器製作の際にでたサヌカイトの剝片・破片等の石屑を一括廃棄する必要から掘られた穴と推測される。時期は，伴出した土器により百・前・Ⅲ併行期ごろに比定される。溝—34との同時期共存は考え難い。

（島崎）



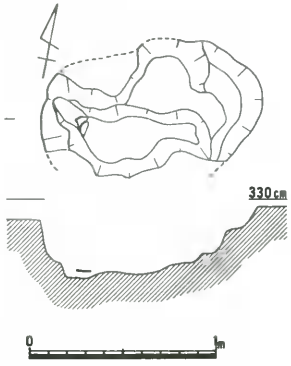
第267図　土　壙-109（1/30）

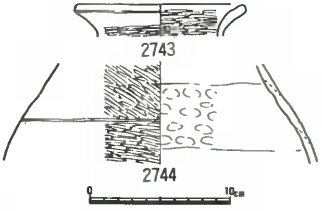


第268図　土　壙－109 出土遺物

土　壙－110（第269図）

F－18の中央で検出した不整長円形土壙で，長辺115cm・短辺約70cm・深さ20～30cmを測る。埋積土は，淡褐灰色砂質土で，溝－31～35の埋積土に似ている。壙底近くから土器片が出土しているが，いずれも百・前・Ⅱに比定される壺である。土壙は，土の採掘壙の可能性もある。

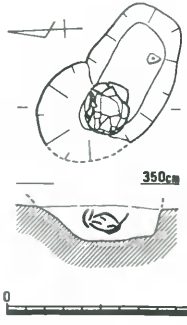


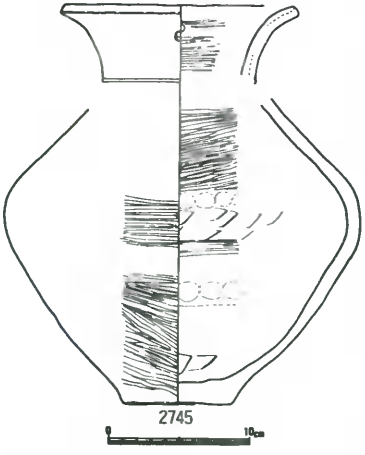


第269図　土　壙-110（1/30）・出土遺物

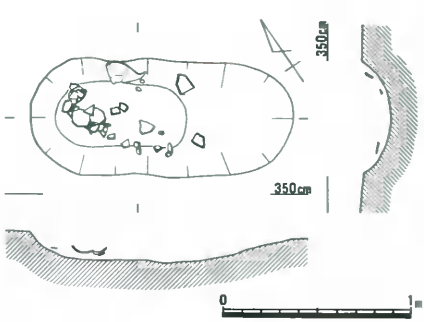
土　壙－111（第270図）

E－19の西辺で検出した土壙で，長辺約95cm・短辺 48cm・深さ 19cmを測る。埋積土は，わずかな炭を含む暗灰褐色土であるが，南東隅部分には黄白色を呈する砂混じり粘土が堆積していた。出土遺物は，壺が１点土壙のやや西よりで底を下にして出土している。生活に直接伴う土壙ではなく，壺棺の可能性も十分に考えられるが，骨等の遺存は確認できなかった。時期は百・前・Ⅱに比定される。（岡田）



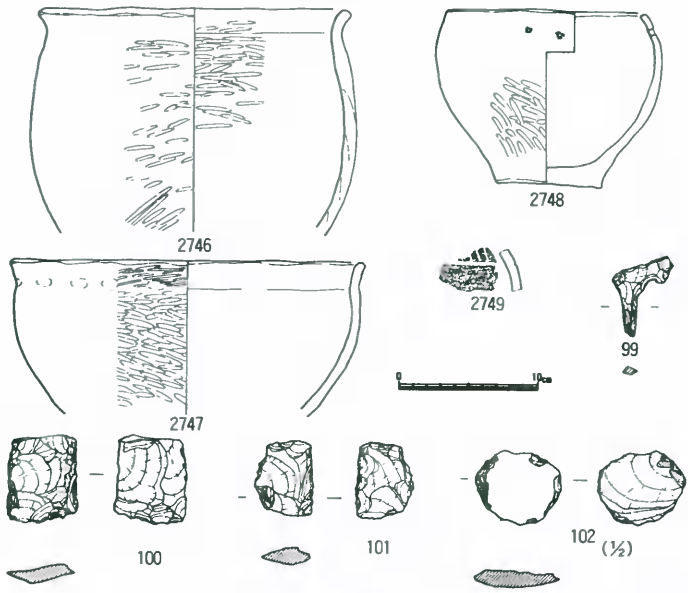


第270図　土　壙-111（1/30）・出土遺物



土　壙—112（第271図）

F-19の中央部やや西寄りで検出できた土壙である。土壙は，全長140cm・幅60cm・深さ15cmを測るものでほぼ長楕円形を呈する。遺物は，暗灰黄色土の埋土中に甕・鉢等が壙底から若干浮いた状態で，比較的まとまりをもって検出できた。土器以外にも石器が4点剥片を伴って検出できたが，剥片の密



第271図　土　壙-112（1/30）・出土遺物

度は前述の土壙—109にはとうてい及ばない。時期は，百・前・Ⅱ併行期に比定される。

土　壙—113～120

紙面の都合からやむなく割愛した。個々の概要は，表—26の一覧表に掲載した。（島崎）

（３）河　　道

河道の形成と変遷（第272図）

河道はその流路をほぼ南北方向に向け，幅15～21ｍ，検出全長約48ｍを測り，東岸は微高地部，西岸部はやや低い微高地で，肩部分は幅約３ｍの自然堤防状をなし，その落差は約120㎝を測る。この自然堤防から西の一帯は幅約20ｍの凹地がひろがり，Ｅ-15の部分で再び高くなり，微高地に近づいていく様相を示すが，南北方向の中世河道に切られている。この凹地のもっとも低い部分と，自然堤防とのレベル差は約60㎝を測る。この凹地にはほぼ全面に，幅約５～30㎝前後を測る淡灰褐色土の不整形な部分がみられ，最深部で数㎝から５・６㎝を測り，断面形は鋭角三角形を呈する。これらは凹地面を形成する白灰色粘土層を切った形状を示し，未熟ながらも水稲耕作に伴う湿地帯の初期開田作業の痕跡すなわち，木製農耕具（鍬など）の使用痕跡ではないかと考えている。この時期は，凹地が河道の存続期間の初期から存在したことから，縄文時代晩期ないしは弥生時代前期に比定されることは確実である。この凹地部分における遺物の出土は極めて少ないが，明灰黄色を呈する自然堤防状部分では，その表層から弥生時代前期の土器片が少量ながらも出土している。また，河道内への土器などの流入も西岸部からのものもかなり多く，その中には磨製石庖丁110や砥石112などが含まれており，この西岸部一帯も当時の生活と密接に関わっていたことを示しているといえよう。河道の検出部の北側では，西岸部から突出部がはりだし，そのすぐ北側からクスノキの巨木の根が検出されている。この樹齢は，根の規模から数百年を下らず，おそらく河道の盛衰を見つめ続けたであろうと想像される。ちょうど，この部分は河道の蛇行部すなわち方向変換点となっており，急に狭まり，流路はやや西よりの北から南に変わる。この部分の形状を観察してみると，南から北への流水方向はまず考えられないことがわかる。張り出し部分の先端近くでは第290図のように２本の杭が検出され，そのうちの北側の杭は，丸木をミカン割りにした用材（カシ？）を使用している。これらの杭の性格は明らかではないが小規模な護岸施設の一部とも考えられる。また中央部には，シイノキが株の部分を完全に残して検出され，往時の自然環境の面影をしのばせている。一方，東岸部（基盤層部分）から河道底までの深さは210㎝を測り，河道底は比較的平坦で，狭い所で幅約２ｍ，深い所で約５ｍの底面を形成している。この底面のレベルは，北側張り出し部分が海抜約０～15㎝，中央部以南では約30～40㎝前後を測るが，前者が深いのは蛇行部分にあたっているためと考えられる。河道底の当初の推定部位は，第272図のＣ－Ｄ断面に示す最下層の24層であるが，この層より約60㎝下では，白灰色の粗砂層を確認しており，先行する河道の中と考えられる。河道形成時の東岸微高地と西岸部のレベル差と土壌の差が示すように，検出河道の成立以前には，沖積地形成過程の起伏があり，そのレベルの高い部分がＥ-18～Ｅ-22にかけての基盤層が比較的堅硬な微高地部分となり，やや低位部となったところが，この河

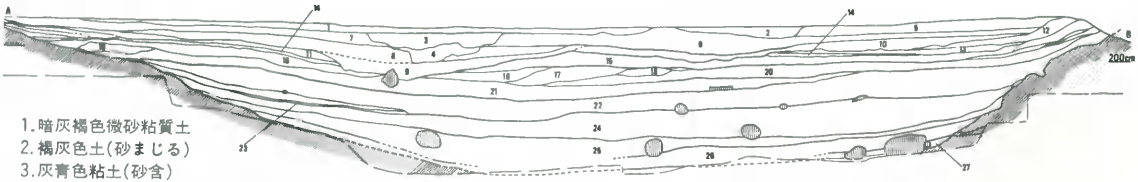
道から西側の一帯に比定されよう。土層断面図による河道の変遷は第272図A－B，C－D断面図に掲げるように，いくつかの画期があり，最終的にはA－B断面図の3層，C－D断面図の2層が示す，弥生時代後期の蛇行する小川(第294図出土遺物には甕2991がある。)となってその流水機能の終焉を示す。この小川の埋没も，その埋積土から流水もしくは洪水によるものに起因するが，その後水田が開田されるのも，さほど遠からぬ時期と考えられる。このA－B断面図では底は海抜30～40cm，C－D断面図では海抜約20～30cmを測り，先述の突出部のすぐ東側で測定される海抜0～15cmとは大きな差がある。河道東法面下部の北側ではこの最下層の淡灰色微砂層で縄文時代晩期に比定される土器やサヌカイト片が出土しており，河道の示す時期の上限を示すと共に，縄文時代晩期には当時の人々が沖積地に進出し，定住が始まりつつあったことを示唆しているといえよう。土層断面と各層からの出土土器はおおむね層位的に新旧を明瞭に示す。A－B断面図では20・21層の灰褐色の粘質ピート層を形成し，C－D断面図の22・24層や，C－D断面図の20層に至ると，流木・木片などの植物遺体が急増し，それらより下位には大き目の流木が埋積している。上層で，埋積層位が細かくなっていくA－B断面図の15層や，C－D断面図の7層や12層では，弥生時代中期（百・中・Ⅱ）の土器片が出土し始め，さらに上位では百・中・Ⅲの土器片がわずかに出土する。このように，先述の弥生時代後期（百・後・Ⅱ）の小川も，河道がほとんど埋積し，やや湿潤な低地となった部分に自然流路として形成されたことが理解されよう。

出土遺物（第273～294図，図版36・37）

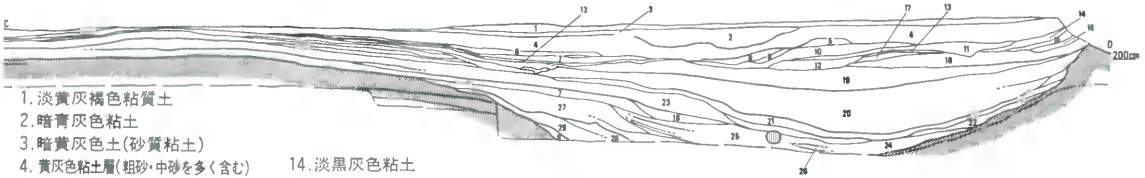
河道からは当時の集落との至近性を示す多量の遺物が出土している。特に土器がその大半を占め，縄文時代晩期から弥生時代後期にかけてのものが確認されている。とりわけ厖大な量を占めているのは弥生時代前期の土器で，当時の日常生活で使用された器種のすべてを包括しているといってよい。土器の他に第286図に示すサヌカイト製石器や，様々な素材を用いた磨製・打製石器や砥石116などが出土している。これらも，その大半は弥生時代前期に比定されるが，一部は縄文時代晩期のものも含まれている可能性もある。また，第289図に掲げる鯨骨のほかに，シカ・イノシシを中心とする獣骨が多量に出土しているが，今回の報告では鑑定報告については割愛し，次回の報告に他の調査区出土分とあわせまとめて掲載する予定であるので，その出土の事実のみ記しておく。いずれにせよ植物遺体では多量の自然木の流入埋積が確かめられたが，加工材は極めて少ない。1・2はいずれも河道検出部の北端部（D-16）で出土した数少ない木製品である。以下，出土遺物について観察表に対応する総括的・補足的な説明を加えておく。

縄文式土器（第273・274図，図版35）

前項で，若干触れたように縄文式土器の大半は河道最深部で出土したもので，すべて縄文時

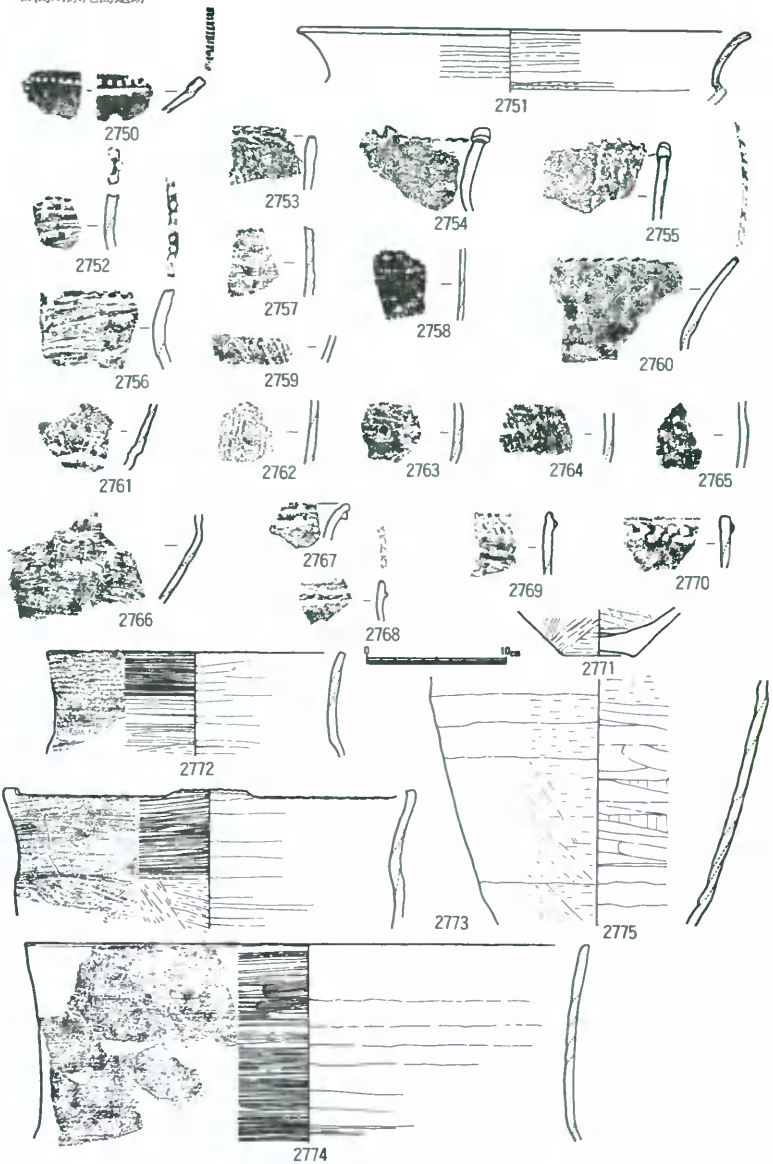


1. 暗灰褐色微砂粘質土
2. 褐灰色土(砂まじる)
3. 灰青色粘土(砂含)
4. 黒灰色微砂と淡灰色粘質土の互層
5. 淡灰褐色土
6. 淡灰青色微砂質土(弱粘)
7. 暗黄灰色粘質土(含粘砂)
8. 明青灰色砂(含粘土)
9. 白灰色粗砂
10. 淡灰色微砂と砂の混層(含炭)
11. 黄灰色粘土
12. 灰黄色微砂と灰黒色微砂の互層
13. 淡青灰色微砂質粘土(含灰黒色土)
14. 灰黒色粘土
15. 黒褐灰色弱粘土と青灰色微砂の混層
16. 淡青灰色粘土(砂と互層)
17. 青灰色砂を含む
18. 淡灰色粗砂混褐灰色粘土
19. 白灰色粗砂
20. 灰褐色粘土(ピート)
21. 褐灰色粘土(〃)
22. 灰褐色土(〃)
23. 灰黒褐色微砂質粘土
24. 暗灰褐色粘質土(ピート)流木・板木多い
25. 〃 (〃)
26. 淡灰色粗砂
27. 淡灰色砂とピートの互層

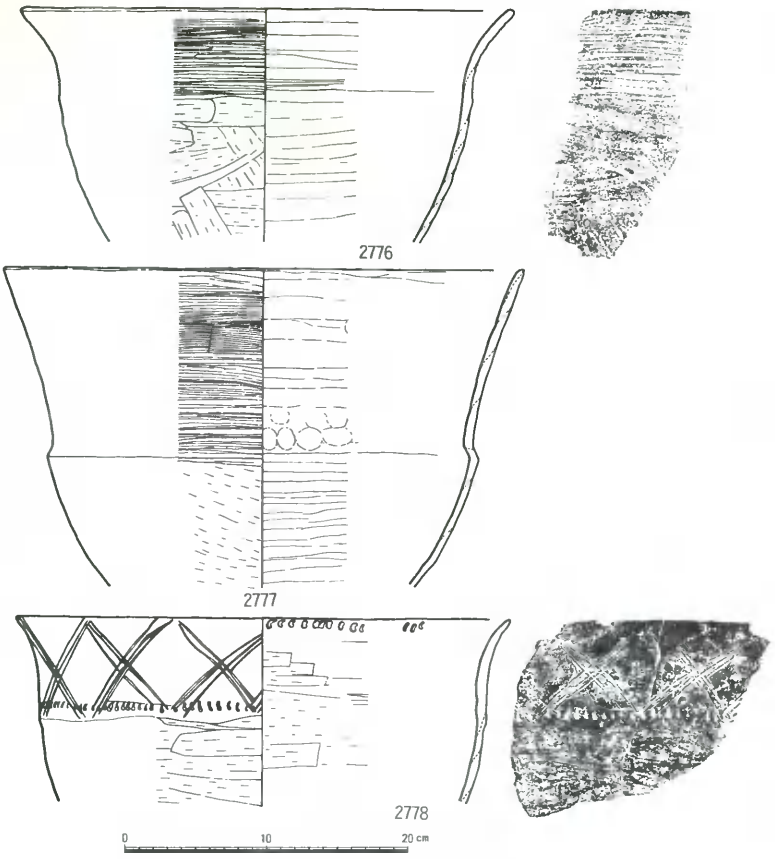


1. 淡黄灰褐色粘質土
2. 暗青灰色粘土
3. 暗黄灰色土(砂質粘土)
4. 黄灰色粘土層(粗砂・中砂を多く含む)
5. 淡灰色粘土(ブロック状)
6. 青灰色微砂質土(黒灰色小ブロックを含む)
7. 淡青灰色粘土
8. 白灰色砂
9. 淡青灰色微砂
10. 淡灰色粗砂
11. 黄灰色粗砂
12. 淡黄灰色砂
13. 黒灰色微砂質粘土
14. 淡黒灰色粘土
15. 淡青灰砂層
16. 灰黒色微砂質粘土
17. 淡灰色粘土
18. 青灰色微砂質粘土
19. 灰褐色ピート
20. 暗灰褐色粘質土(ピート)流木・板木等多い
21. 暗灰褐色粘質土(ピート)
22. 黒灰色微砂
23. 淡灰青色微砂粘質土
24. 淡黒灰色微砂質粘土と淡黄灰色微砂の互層
25. 淡灰色砂と黒灰色微砂の互層
26. 黒灰色微砂質ピート
27. 淡黒灰色微砂互層
28. 青黒灰色微砂(互層)
29. 青灰色微砂・淡黒灰色微砂(互層)

第272図　河　道　土　層　断　面（1/100）

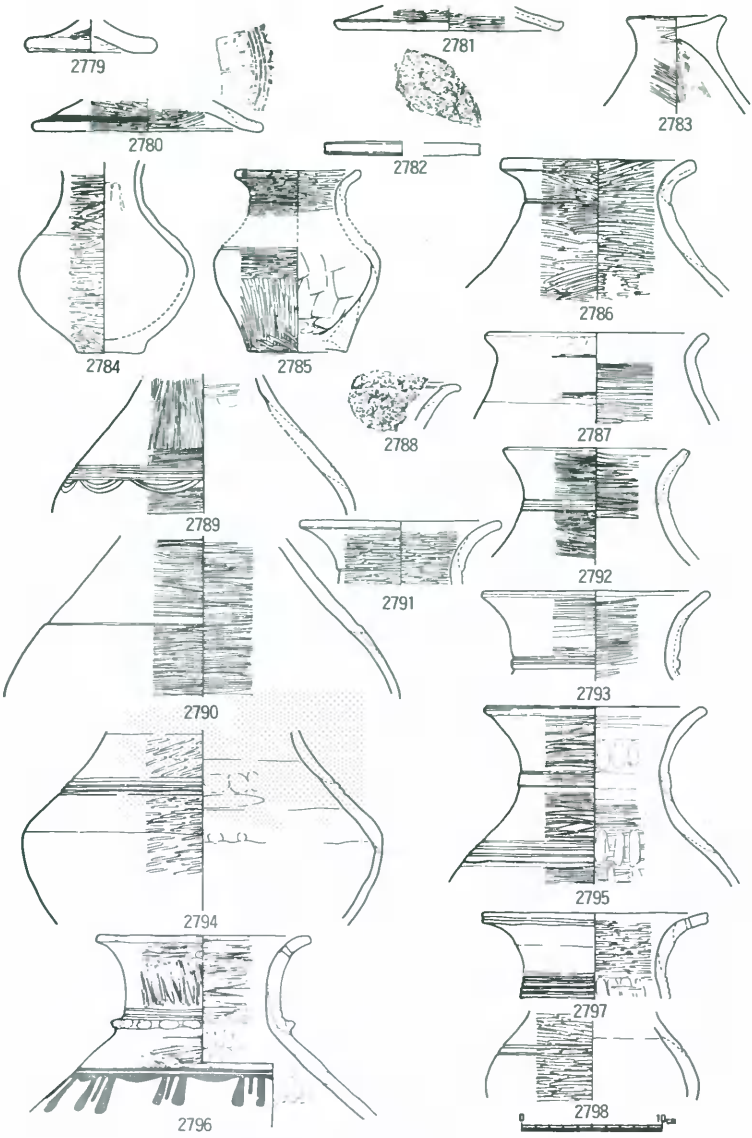


第273図　河道出土遺物（1）

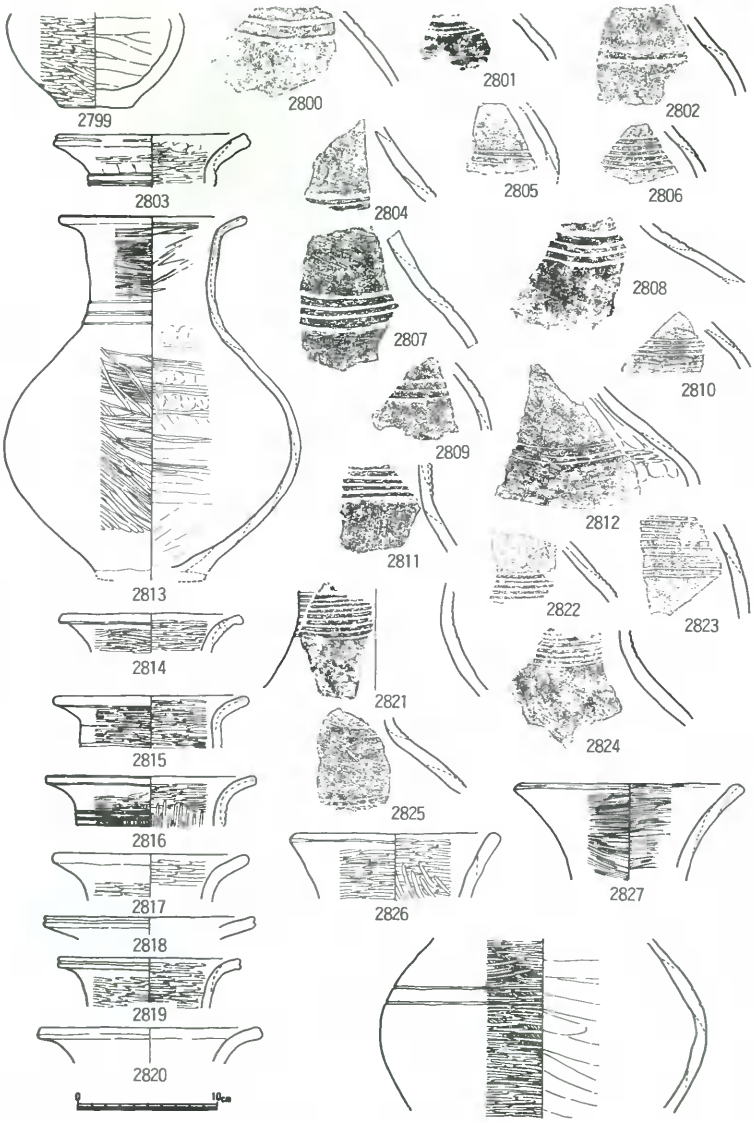


第274図　河道出土遺物（2）

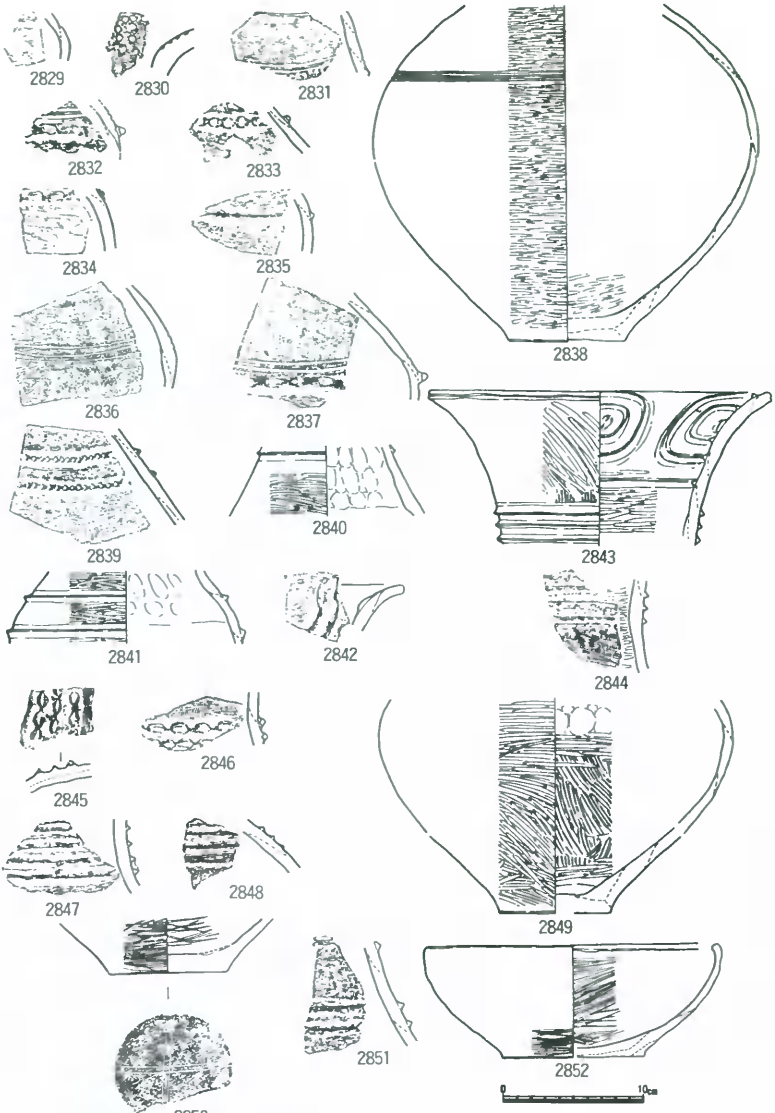
代晩期に比定される浅鉢・深鉢形土器である。浅鉢の中には精製土器2750・2751があるが，深鉢に比べると量的に少ない。いずれも胎土中には雲母が目立ち，石英・長石が含まれ，おおむね黒褐色～黄褐色を呈している。深鉢では体部上位片が圧倒的に多く，底部は2771のみであるが揚げ底（凹み底）を示している点が注目される。従来の研究成果が示す型式では黒土ＢⅠ式（註1）から原下層式（註2），黒土ＢⅡ式（註3）にかけてみられる技法上，形態上の諸特徴が観察される。深鉢形土器はいずれも粗製で2772～2774・2776～2778は河道の北端部東法面



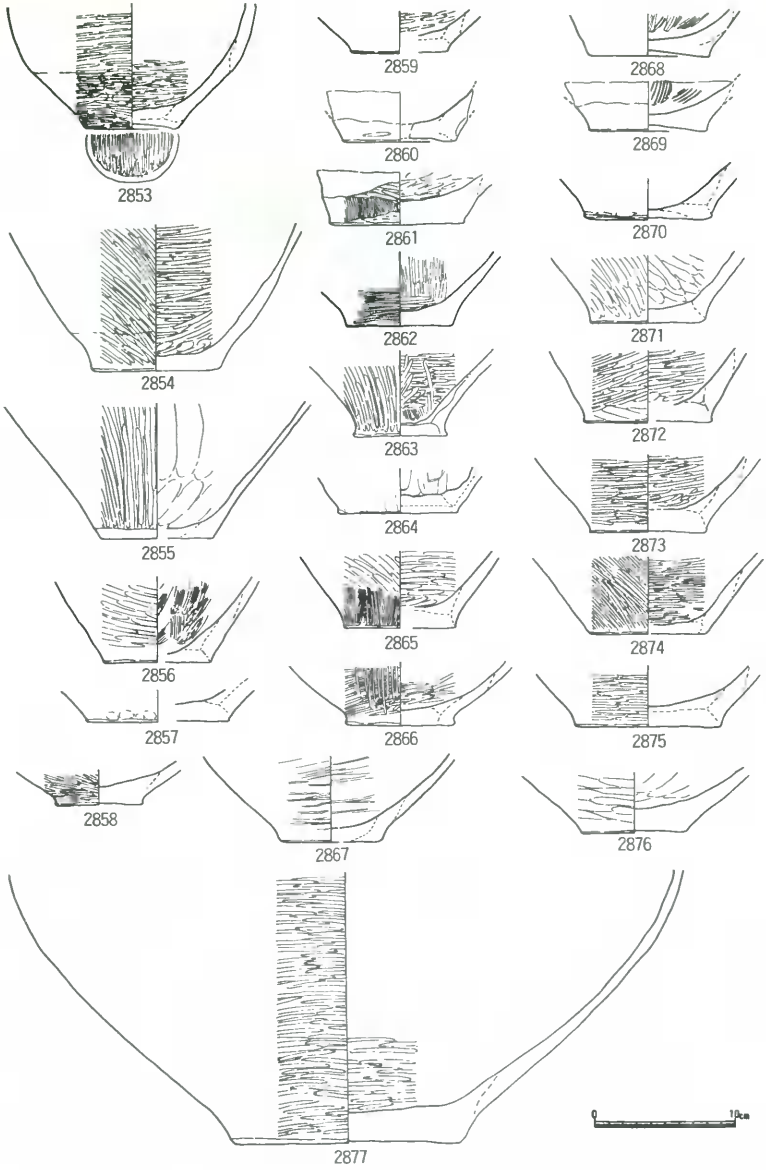
第275図　河道出土遺物（3）



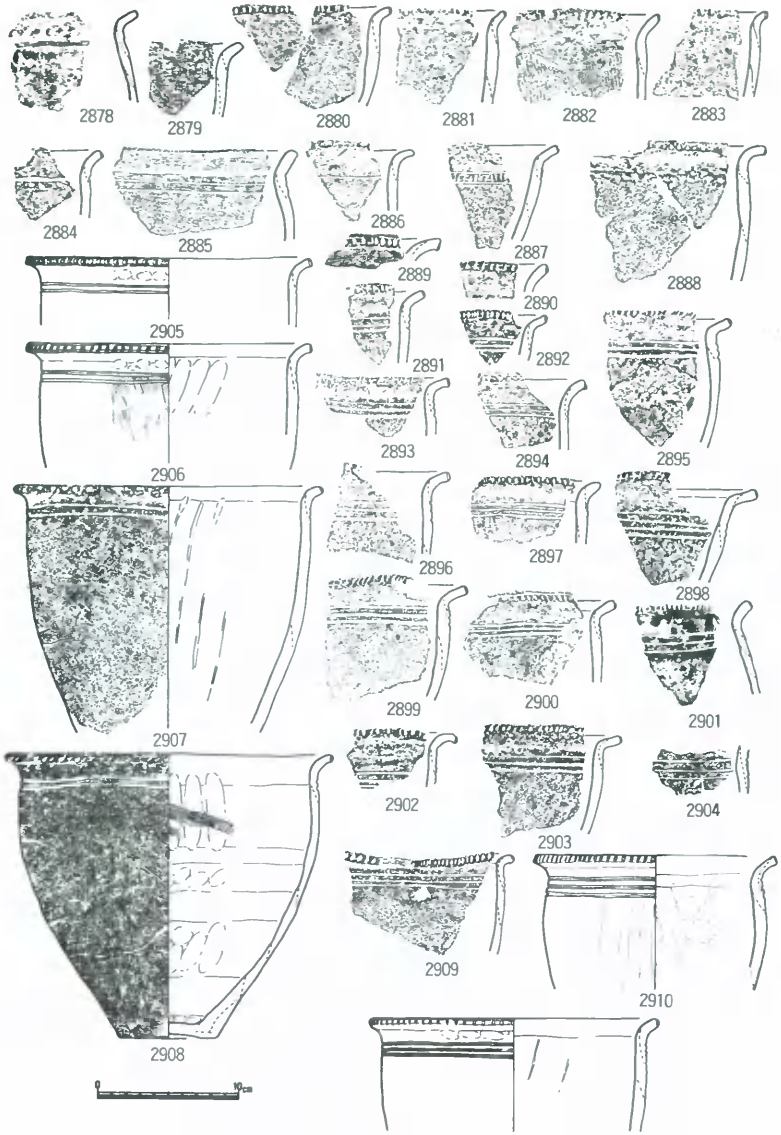
第276図　河道出土遺物（4）



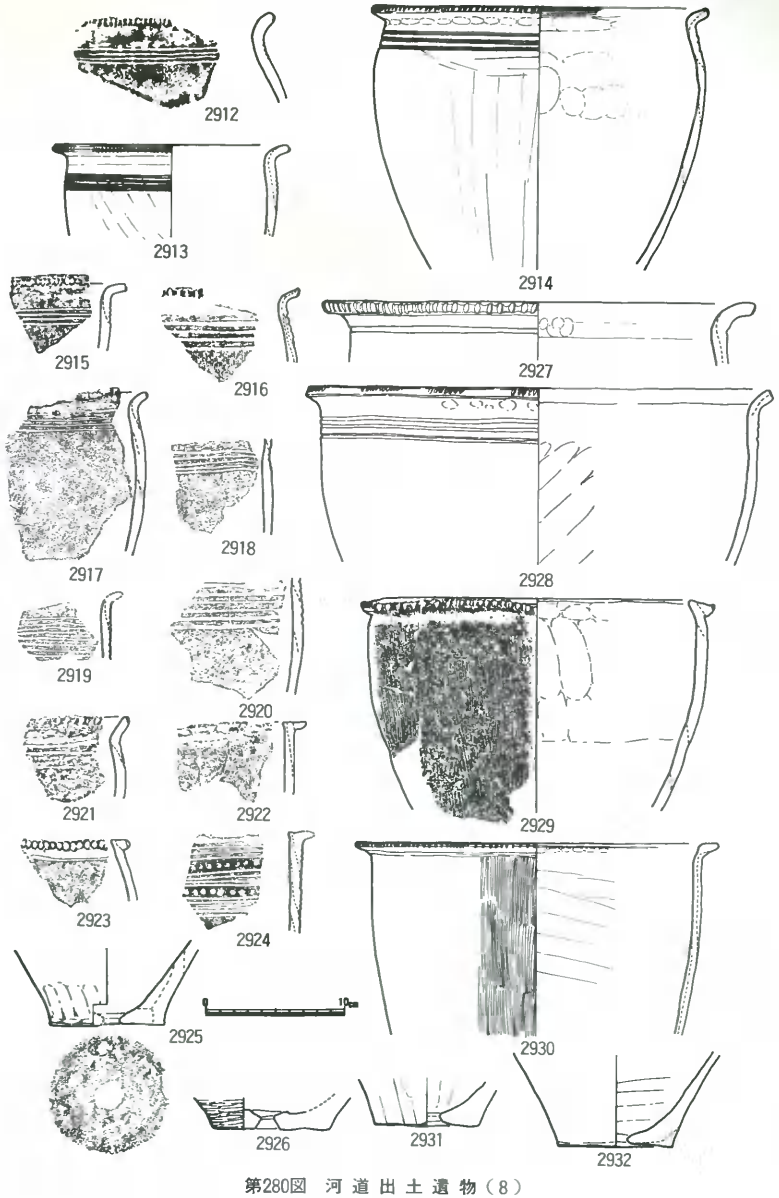
第277図　河道出土遺物（5）



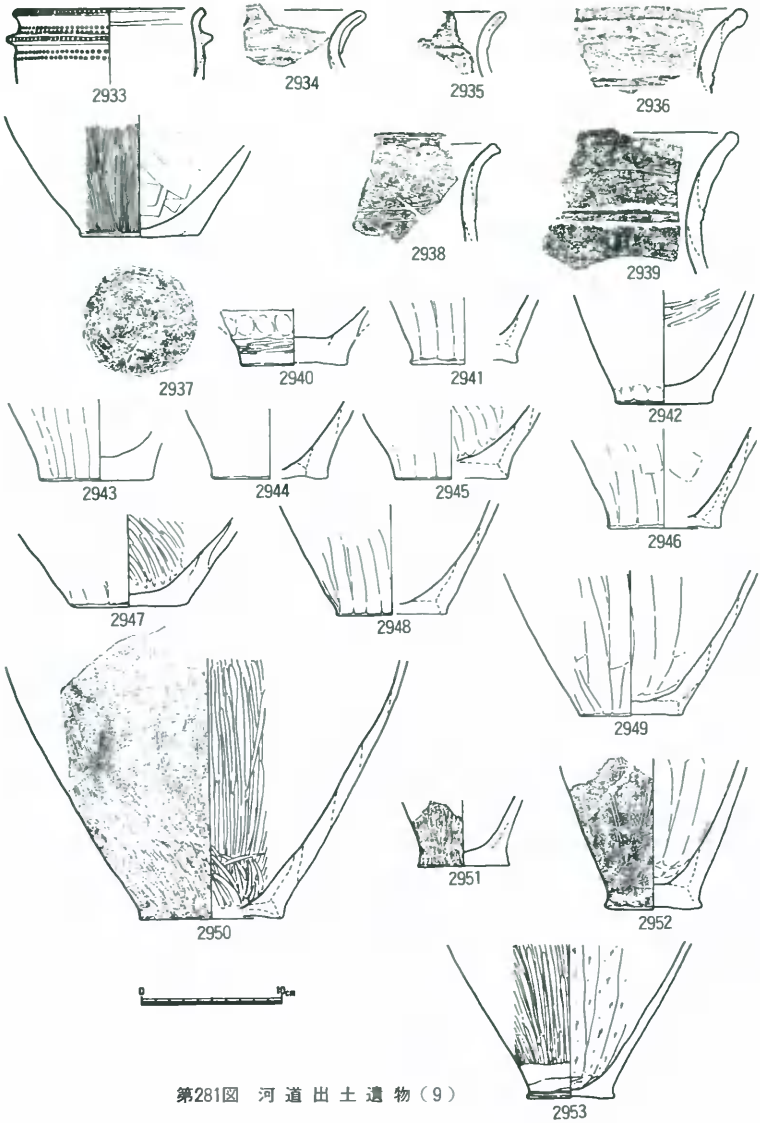
第278図　河道出土遺物（６）



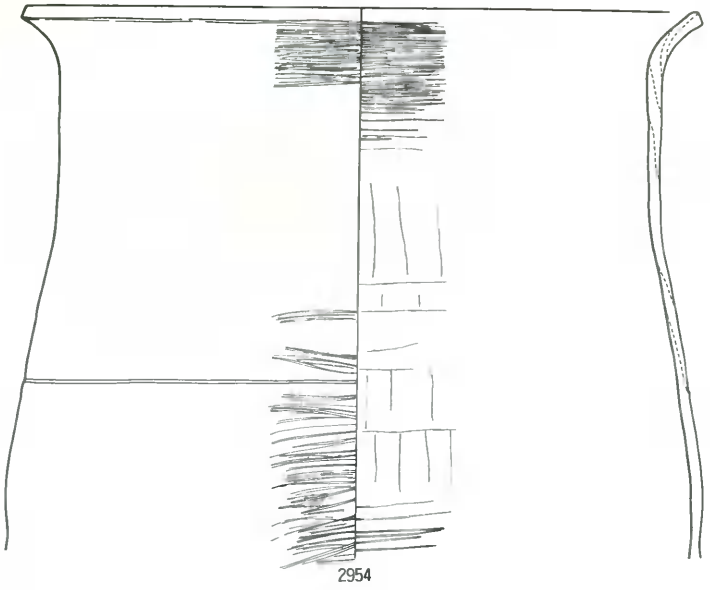
第279図　河道出土遺物（7）



第280図　河道出土遺物（８）



第281図　河道出土遺物（9）

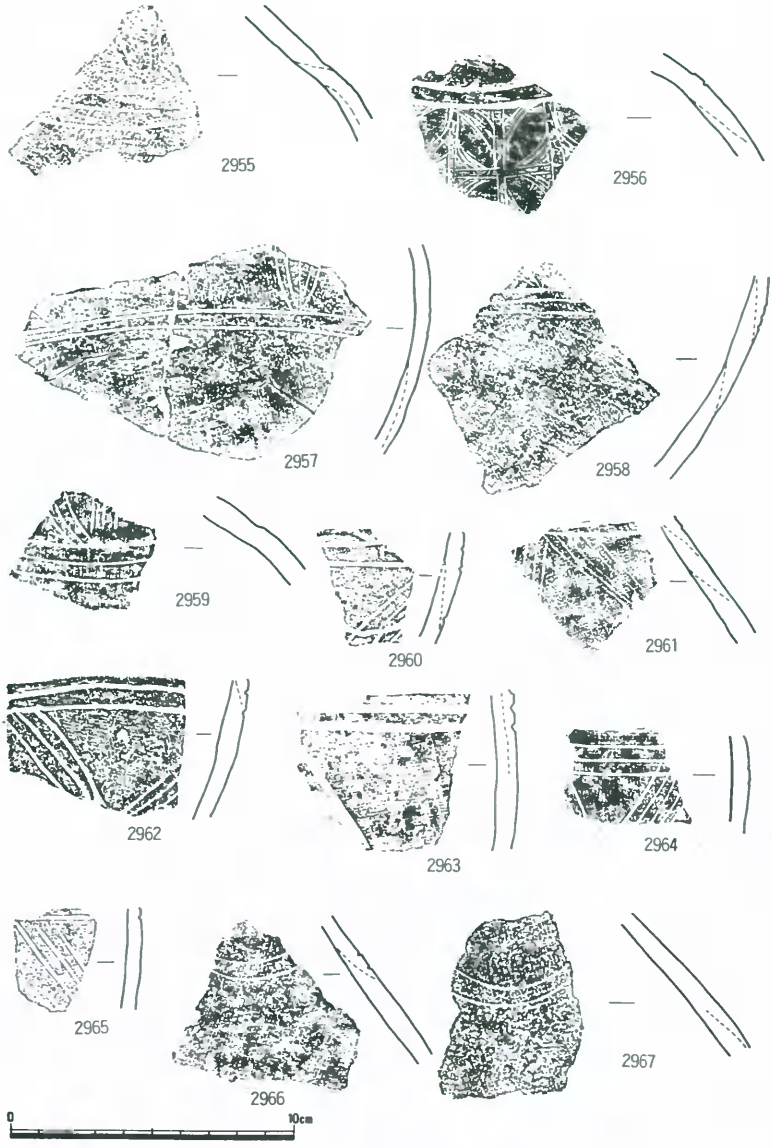


第282図　河道出土遺物（10）

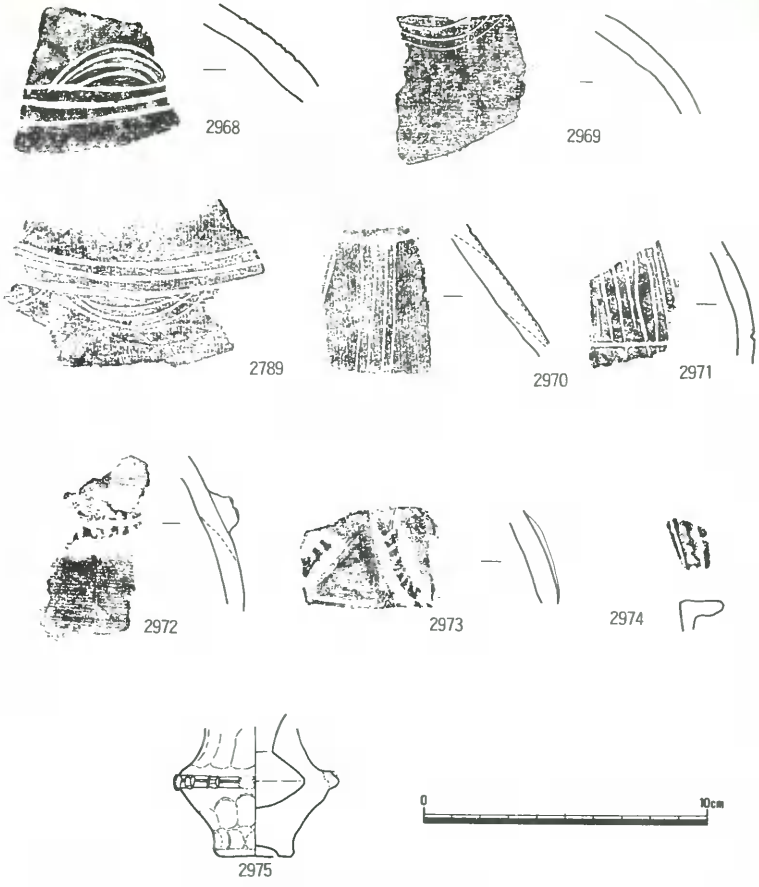
下部の淡灰色細砂層から出土しており，体部上位には横位の貝殻条痕文，下位は粗いヘラケズリ調整で仕上げられ，内面や断面では粘土紐の内傾接合痕が明瞭に観察される。2755や2773のように台形の隆起や小突起が飾られるものもみられ，しばしばその上端には押圧文が加えられる。またこれらの体部外面には煮沸容器であったことを示す，吹きこぼれによる炭化物が付着している。出土層位・地点がほぼ同じの2778は，体部上位はナデ調整，下位はヘラケズリで仕上げられ大胆なヘラ描き文と，爪形文を内外面にめぐらす深鉢で，原下層式で一般化するモチーフを持ち，時期的には原下層式に先行するものとみられる。2767～2770は，いずれも深鉢あるいは鉢の口縁部で口縁よりやや下がった位置に刻み目をもつ凸帯がめぐる。これらは前池式（註4）から黒土ＢⅡ式にかけての時期が比定されよう。以上の縄文式土器は数こそ少ないが，百間川遺跡群の示す歴史の中でも最古の時期を示し，沖積平野における先駆者の地歩を固める第一歩が踏みだされた時期を具体的に示しているといえよう。

弥生式土器（第275～285図，図版36・37）

弥生式土器の大半は弥生時代前期の土器で，縄文時代晩期と異り蓋・壺・甕・鉢と器種構

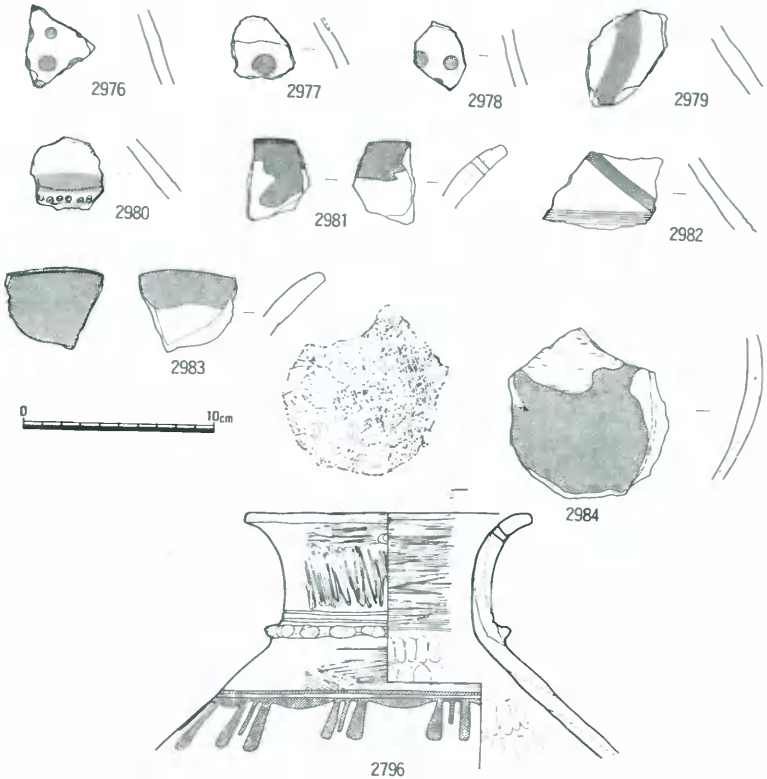


第283図　河道出土遺物（11）



第284図　河道出土遺物（12）

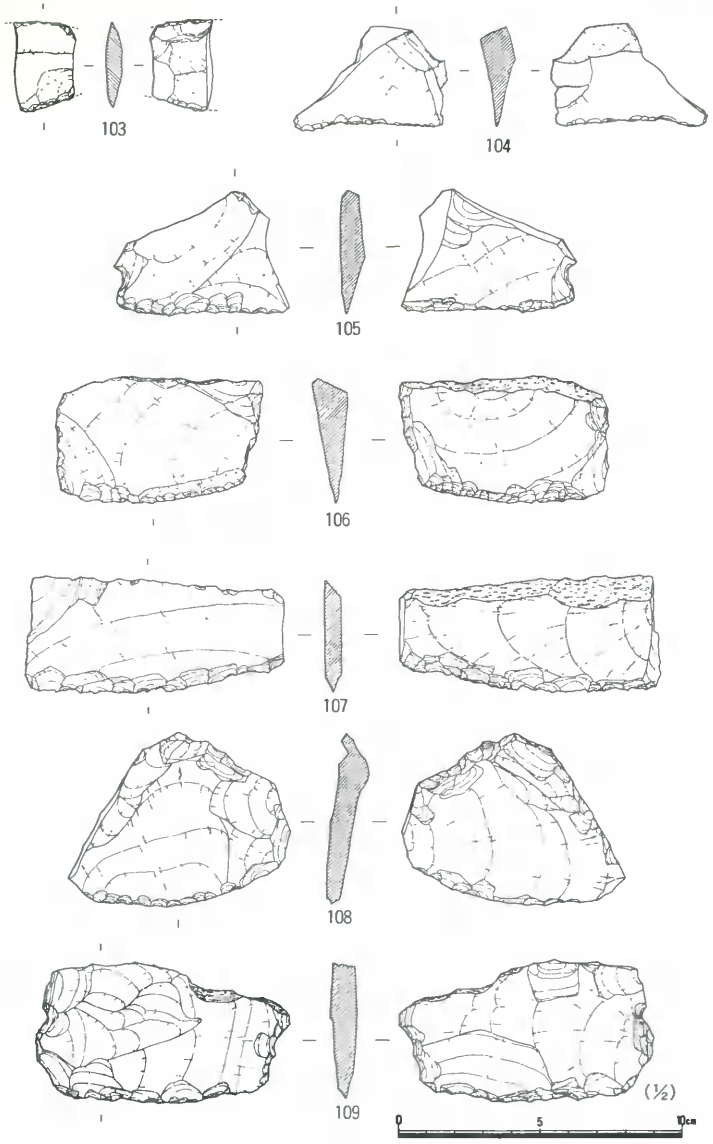
成も変化し，ヘラミガキ・ハケ調整で器面を平滑に仕上げ，体部の粘土紐接合は外傾接合となる点が大きな相違点である。ことに壺の中には赤色顔料（丹）による彩文が行われたり，ヘラ描きで木葉文や重弧文・直線文などを描く装飾的なものが出現する。出土層位は，第272図のA－B断面では，16～18層より下位，C－D断面図でも19層より下位で，最下層では縄文時代晩期の土器と混在して出土するものもある。いずれも，弱粘質のピート層や湿潤な微砂・粗砂層から出土しているため器表面の残りがよく，調整痕や文様・煤の付着や彩文土器の赤色塗彩



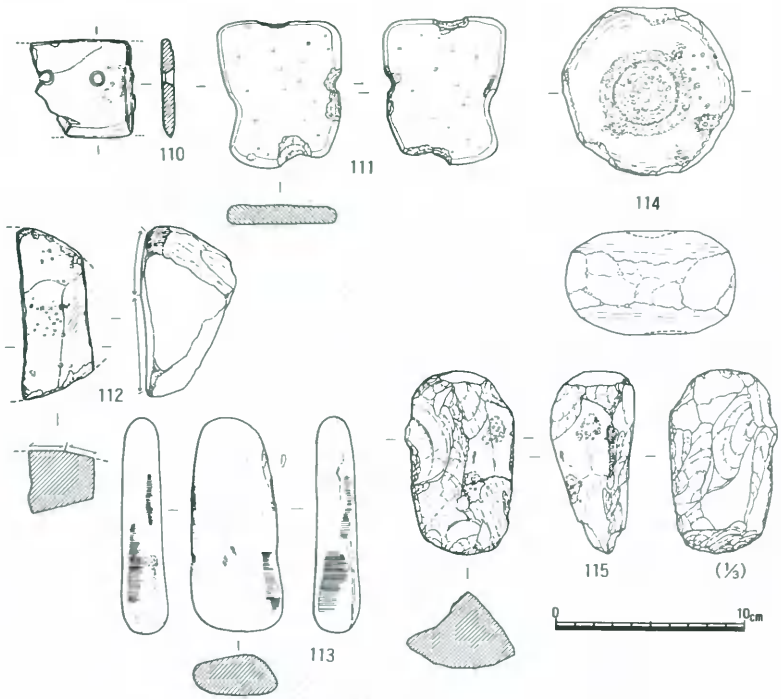
第285図　河道出土遺物（13）

まで比較的明瞭に観察することができる一括好資料である。時期的には，百・前・Ⅰ～Ⅱにかけての各時期の様相をほぼ明確に示し，各々の器種における技法や形態上の変化を観察することができる。以下それぞれの時期の土器について概述を加えておく。

百・前・Ⅰに比定される土器がもっとも多く出土しているのは，河道の北半部で東法面下部あるいは突出部の北側低部あるいは底部で，おおむね河道の下層に顕著である。壺では，2785・2786・2787などロ縁部の外方拡張がさほど顕著に認められないものがあり，2789のように肩部に重弧文を飾るものもみられる。2956の壺はケズリダシ凸帯の下位に無軸木葉文が描かれ2800・2802とともに古い様相を示している。2955や2961・2959なども同様の様相を示しているといえる。また甕では体部上位にヘラ描き沈線が出現せず，2878のようにケズリダシ凸帯が巡る

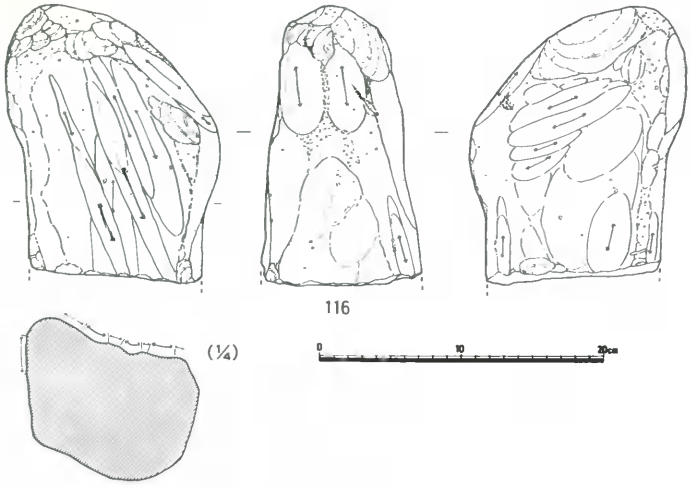


第286図　河道出土遺物（14）

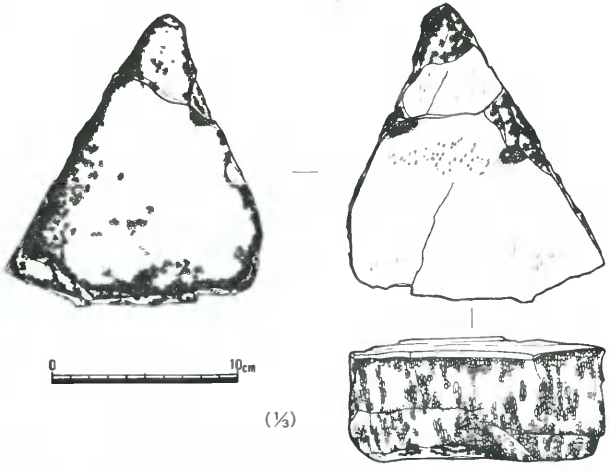


第287図　河道出土遺物（15）

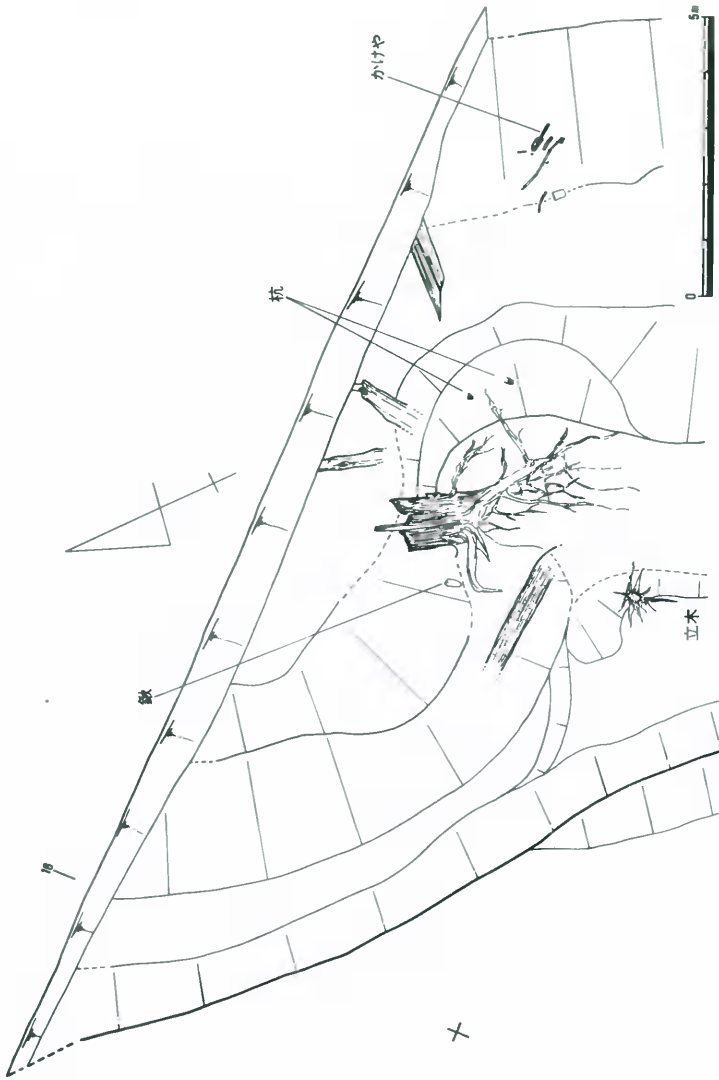
ものや2879～2881のいずれにもみられないものが，この時期に比定されよう。百・前・Ⅱの段階では，壺は口縁部の外方拡張が徐々に強まり，百・前・Ⅰでは頸部にわずかに段を残すだけであったものが頸部や体部にケズリダシ凸帯が飾られるようになる。このケズリダシ凸帯上には横位のヘラ描き沈線が加えられることもしばしばみられ，2792・2793・2797や2800など百・前・Ⅱの古い段階を示している。これらのケズリダシ凸帯はヘラ描き沈線に変化し，ケズリダシ凸帯を部分的に残しながらも盛行し始める。この段階が百・前・Ⅱの中心をなし，2795・2813・2815など形態的にも大きな変化が認められる。2796の彩文土器は唐古遺跡出土例(註５)に文様の似るもので成形技法からみると，頸部下位の横位のヘラ描き沈線文を飾り，さらに押圧文が加えられた貼り付け凸帯が加飾されている点が特徴的である。また2779～2782の蓋や2852の鉢もこの時期に比定される。一方，甕形土器では口縁部に刻み目を施し，口縁下部に２～４条の横位のヘラ描き沈線文を巡らすものが大半を占める。中には2887のように２条のヘラ描き沈線



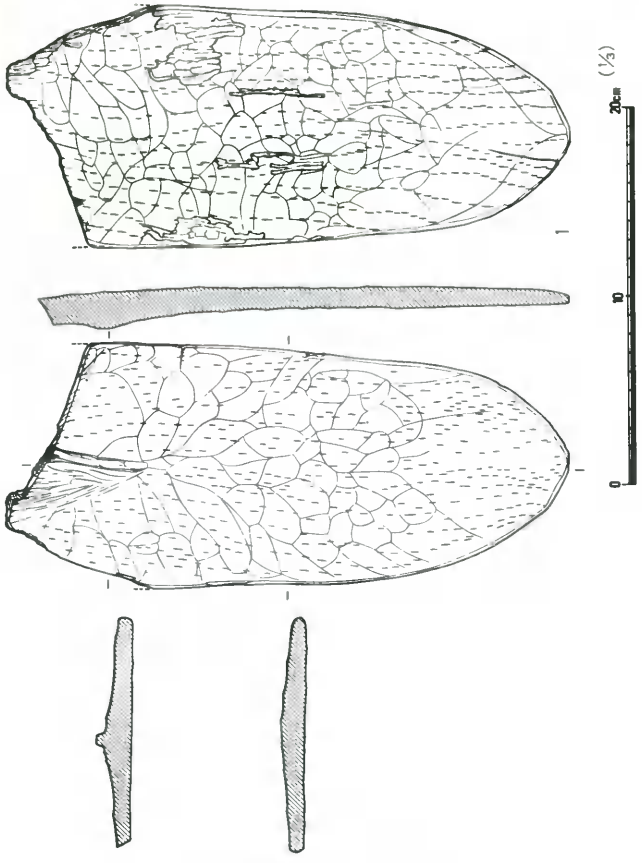
第288図　河道出土遺物（16）



第289図　河道出土鯨骨

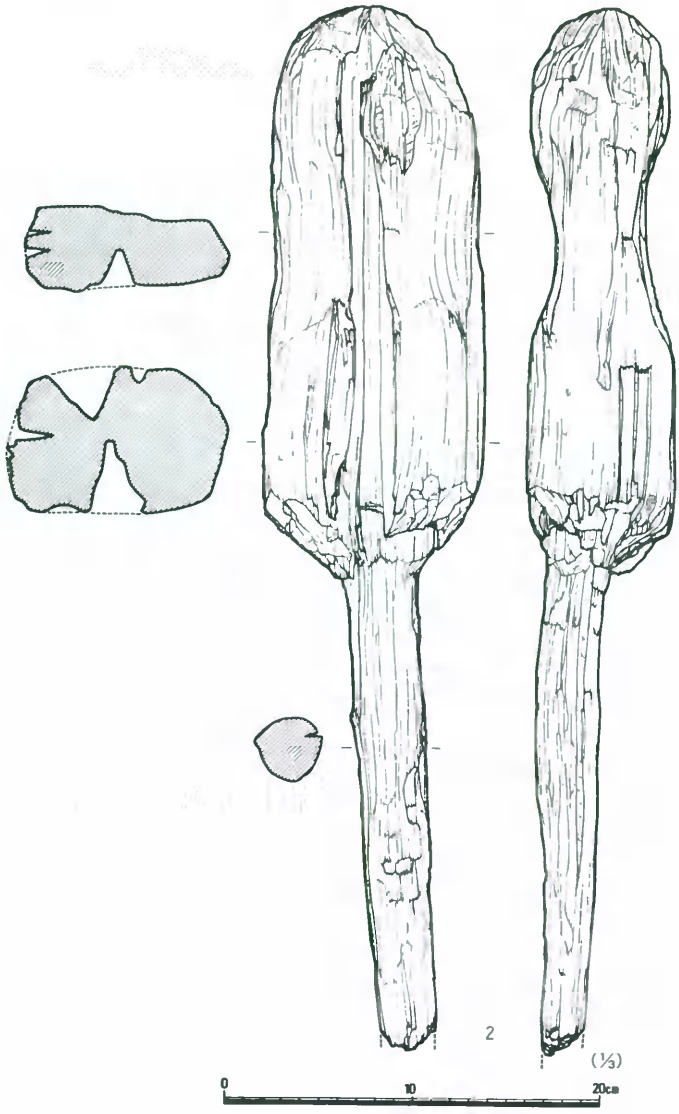


第290図　木器出土位置図（1/100）

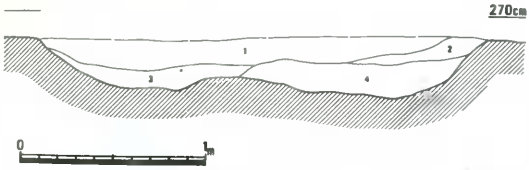


第291図　河道出土遺物（17）

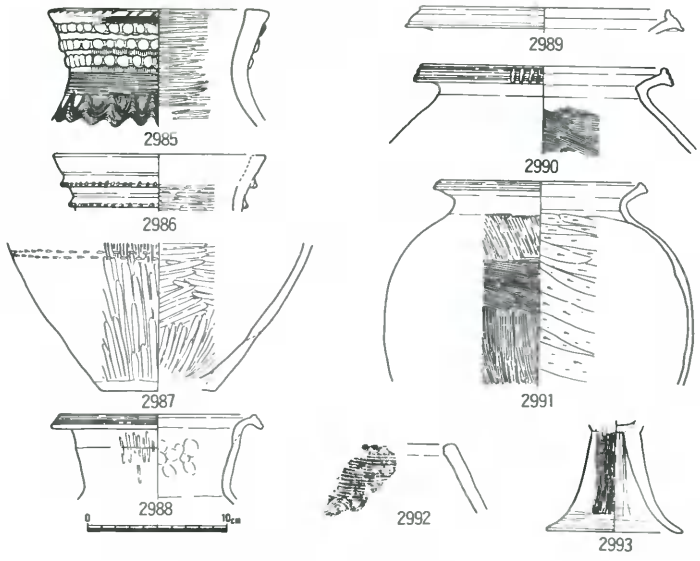
文の間に列点文を加えたり，2888のように刺突列点文を2段に巡らすものなど数は少ないが注目されよう。百・前・Ⅲの段階になると壺では頸部のヘラ描き沈線の多条化と，口縁部がさらに大きく外反する特徴が認められるが，前者はさらに2843のように貼り付け凸帯へと発展し内面に貼り付け文様が飾られるものも出現し始める。2839・2847・2848などがこの段階に比定される。甕では貼り付け逆L字口縁の出現と，口縁下部のヘラ描き沈線の多条化が進行する。中には2933のように小型の装飾的な甕も出土しており，注目される。以上，形態・技法の変化について略述したが，特殊な土器として第283図に掲げる，ヘラ描き文が施された壺・甕もいず



第292図　河道出土遺物（18）



第293図　河道最終流路（1/30）



第294図　河道最終流路出土遺物

れも破片ではあるが亘・前・Ⅰ～Ⅱにかけての時期に比定される。木葉文は無軸・有軸のいずれもが出土しているが，前者が古い段階の技法を残している。直線文では複線鋸歯文風の施文が目立ち，2961のように弧文と組みあわされる例もある。弧文は重弧文で壺の肩に描かれ，横位のヘラ描き沈線にとりつくものが多い。彩文土器では，2976～2978の水玉状の塗彩が注目される。これらには，他の彩文土器と異り器表の素地をあらかじめ，黒褐色に塗彩していない。2979・2930・2982は直線・曲線が帯状に描かれ，2980では，細い竹管文の刺突文も巡らされる。2981・2983は壺口縁部で，内面は上端部のみの塗彩にとどまっている。2984は丹の容器とも考えられ，外面には塗布は認められない。2796は，河道中央部よりやや南よりの東岸法面下位で出土した壺で，器形，彩文の遺存状態も良好である。体部上位に1条の帯状彩文を施し，

その下位に弧文風の丹彩を行い，その切れ目から垂下する2本の弧文と直線文を描く。これらの彩文土器の多くは，成形技法などから百・前・Ⅱに比定される。

その他の遺物としては，第289図の骨1の鯨骨片があり脊髄の横位切断片と考えられるが（註6）表裏ともに平滑で，骨器として使用された可能性が強い。他に獣骨が多く出土しているが骨角器等は確認していない。いずれにせよ，素材等極めて珍しく興味深いが，鯨の種類は不明である。

河道出土の植物遺体では，特にピート層から下位（第272図A－Bの21層，C－Dの19層から20層より下位）底面に至るまでヨシ，流木などが極めて多く出土しているが，クルミ・トチなどの堅果類の種子や，ハイガイなどの貝殻もわずかに出土している。木質遺体の中には，部分的に切削された加工材は極めて少なく，木理に沿って荒く割れた板材のような断片も散見する。第290図の鍬先1とかけや2の出土位置は，前者では突出部から転落したか，あるいは上流から出土地点に漂着した状況を示している。後者は上流からの漂着あるいは東岸微高地部分からの流入を示しているといえる。鍬先は柄と稜をなす接合部分が出土時に切断されたため原形を推定する手がかりを失っているが，鋤先の可能性もある。時期的には層位的に百・前・Ⅱに比定される。かけやは，杭などを打ちこむ際に用いられたもので，使用された太い部分は両面ともにくぼんでいる。稲作に伴う灌漑用水路の整備・確保あるいは堰や護岸杭の構築などの土木作業に欠かせぬ道具として使用されたことが推察される。いずれの用材もカシが選ばれており，当時の木製品製作にあたって用途に応じた用材の選別がすでに確立されていたことを示し，それらを製作する技術と，伐採・切削に必要な鋭利な磨製石器の存在を示唆する。

以上，出土遺物の概略を述べた。中には，さらに整理・研究を深めねばならない出土遺物もあるが，報告した出土遺物の大半は，河道の盛衰と当時の生活環境等を具体的に物語る貴重な資料であり，微高地部分の溝・土壙等とともに当時の生活遺構を復元推定する重要な素材と考えられる。

（岡田）

註

註1　坪井清足他『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会　1956

註2　鎌木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡」『瀬戸内考古学』第2号　瀬戸内考古学会　1958

註3　註1に同じ。

註4　南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡 一縄文式末期の貯蔵庫発見一」『私たちの考古学』第7号　考古学研究会　1956
春成秀爾は「原式」と「黒土BⅡ式」の間に「前池式」を設定する。
春成秀爾「縄文晩期文化一中国・四国一」『新版考古学講座3－先史文化一』雄山閣　1969

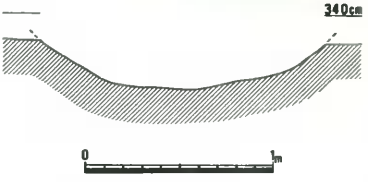
註5　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究室報告』第16冊　1943

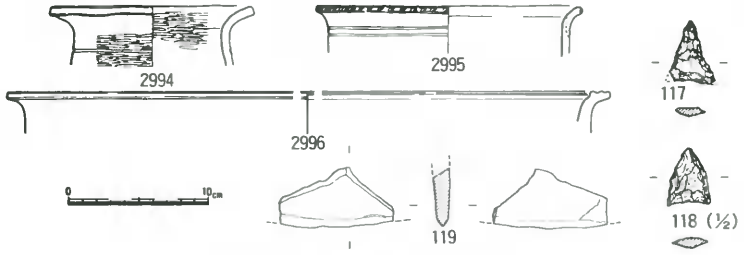
註6　早稲田大学考古学研究室金子浩昌氏の鑑定による。現在，同氏に依頼して他の獣骨とともに，詳細な鑑定を実施している。

（4）　溝

溝—31（第295図）

河道の東側に位置する溝である。河道とは5～6mの間隔を保って南北に並行する。流路は，幅120～160cm・深さ20cm位のもので断面レンズ状を呈する。溝底の海抜高は，部分により異る。傾向としては，中央部のF—18杭付近で310cmと最も浅く，南と北に深くなり約300cmを測る。ところが，溝自体は，弥生時代後期以降の水田用水路等の開鑿により分断され，全体の詳細は不明である。ただ一部において，溝—32と2基の土壙状のくぼみを切っているのが確認された。時期は，百・前・Ⅱ併行期である。

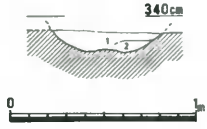




第295図　溝31（1/30）・出土遺物

溝—32（第296図）

溝—31北半部の東に位置する比較的小規模な溝である。ところが溝は，弥生時代後期以降の溝の開鑿により切られ，全体の詳細は判然としない。ただ流れとしては，溝—31に切られた小枝状の流路に続くものと考える。溝—33とは50～100cmの距離を保って並行する。規模は，幅50～60cm・深さ10cm位である。溝底の海抜高は，北端で323cm，南で315cmを測る。時期は，溝—31に先行するとしても，百・前・Ⅱをさらに大きく遡るとは考え難い。

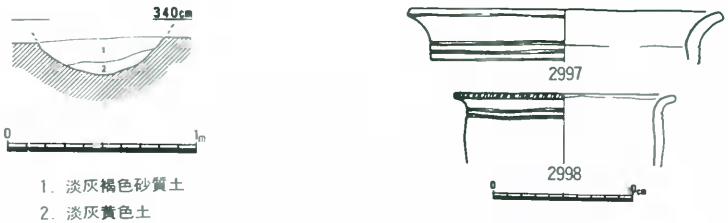


第296図　溝32（1/30）

溝—33（第297図）

溝—32と北半部において並行するが，南半に至ると流路をゆるやかに東に曲げ，溝—34に合

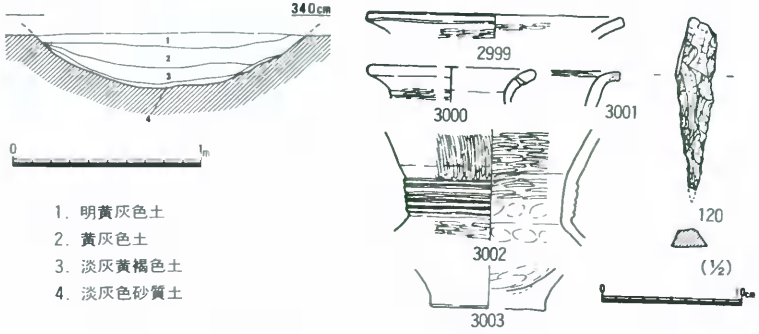
流する。このあり方は，溝—32と溝—33の在り方に酷似する。ところが，溝底の海抜は，溝—32より約13cm程低く，約310cmを測る。時期は，百・前・Ⅱ併行期に比定される。



第297図　溝-33（1/30）・出土遺物

溝—34（第298図）

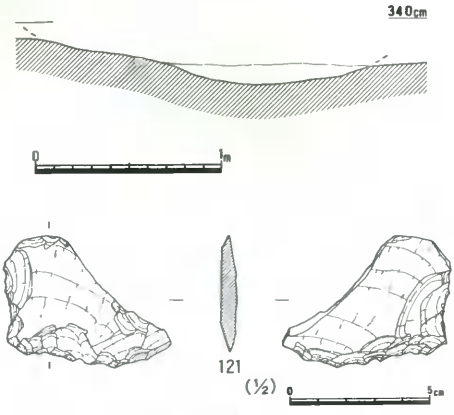
互いに関連し合った状況を示す溝—32・33・34の場合，東にいくにしたがい規模を拡大し，さらに溝底の海抜も深くなる傾向が認められた。溝—34は，幅120～150cm，溝底の海抜高約300cmで，検出面からの深さは約20cmを測る。溝—33の溝底との比高は，約10cmを測る。溝の時期は，出土遺物より百・前・Ⅱ併行期に比定され，溝—32・33との同時共存が推測された。



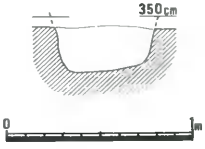
第298図　溝-34（1/30）・出土遺物

溝—35（第299図）

北半上流部においてゆるやかに蛇行するが，やがて直線的となり，溝—34に並行する。溝—34の東肩口との距離は，約300cmを保つ。溝の規模は，幅140～180cm，深さ15～20cmを測る。溝底の海抜は，約305cmと前述の溝—34に比較して若干高位にある。出土遺物は，石器が1点



第299図　溝 35（1/30）・出土遺物

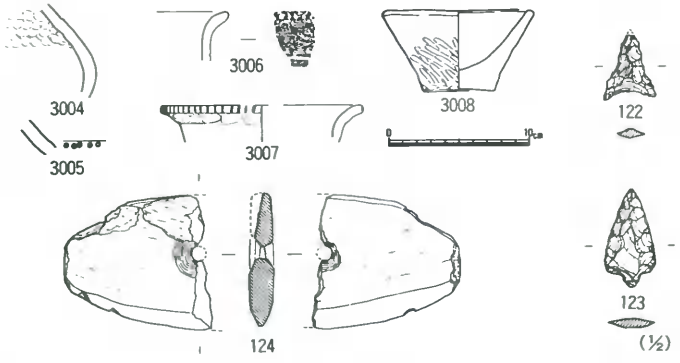


第300図　溝-36（1/30）

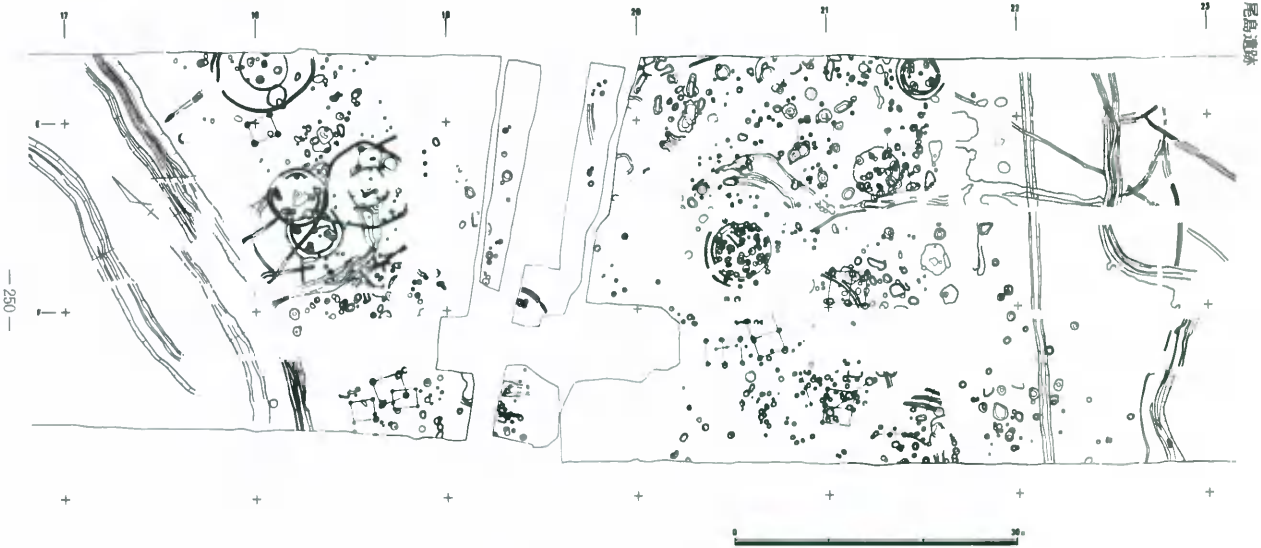
と細片化した土器が散見されたにすぎない。このことから溝の時期は，判然としないものの，おそらくは他の溝同様に百・前・Ⅱ併行期頃と考えられる。

溝—36（第300図）

前述の溝がいずれも南北方向に流路を形成していたのに対して溝—36は，それらの溝にほぼ直交気味の流路をみせる。ところが溝は，両端ともに検出されず，性格は判然としない。さらに遺物がまったく出土していないことから溝の時期についても判然としない。しかし，他の溝との関連から百・前・Ⅱごろと考えて差し支えない。規模は，幅50cm・深さ25cmで，検出長500cmを測る。溝底の海抜は，320cmを測る。　（島崎）



第301図　包含層出土遺物



第302図　丸田調査区　弥生時代後期遺構配置図（1/600）

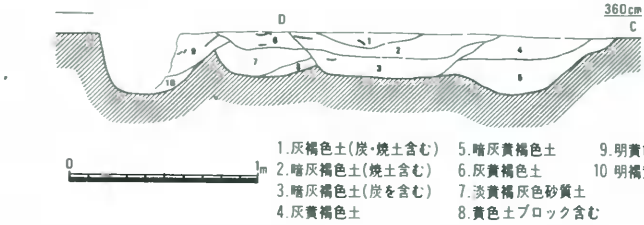
4. 弥生時代後期の遺構・遺物

（1） 竪 穴 式 住 居

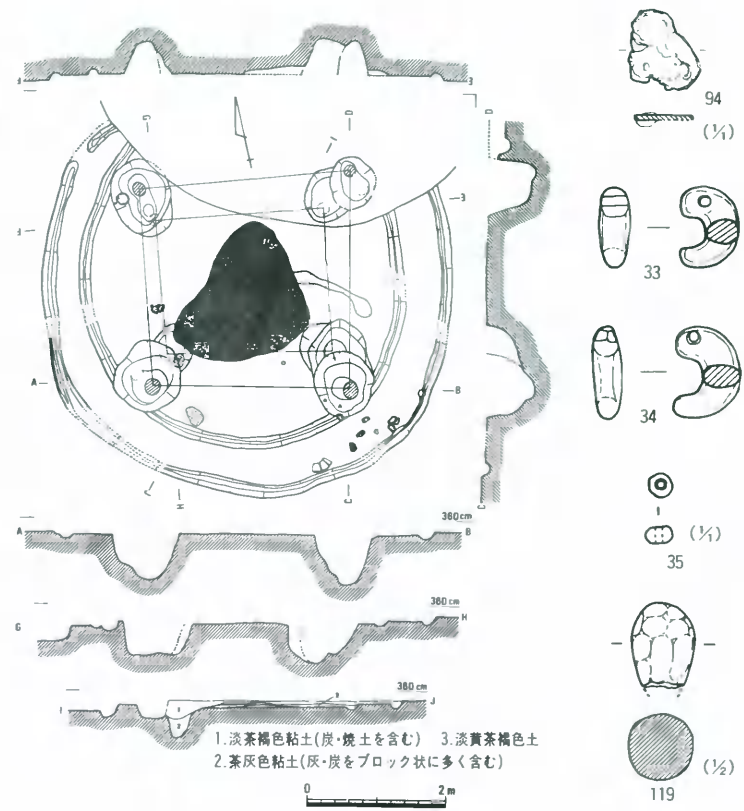
竪穴式住居—29（第303～314図，図版7）

E-18の中央部より，やや西に位置する住居の北部分を竪穴式住居—34，南端を土壙—207により切られ，一部欠損した状態で検出した。上位住居は，やや胴張りをもつ隅丸方形の平面形

第303図　竪 穴 式 住 居-29（1/100）



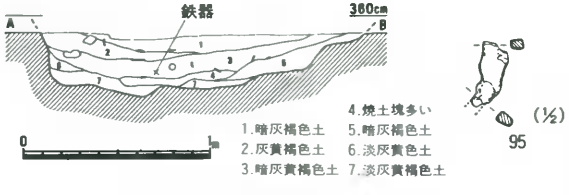
第304図　竪穴式住居-29住居外周溝・土壙-124（1/30）



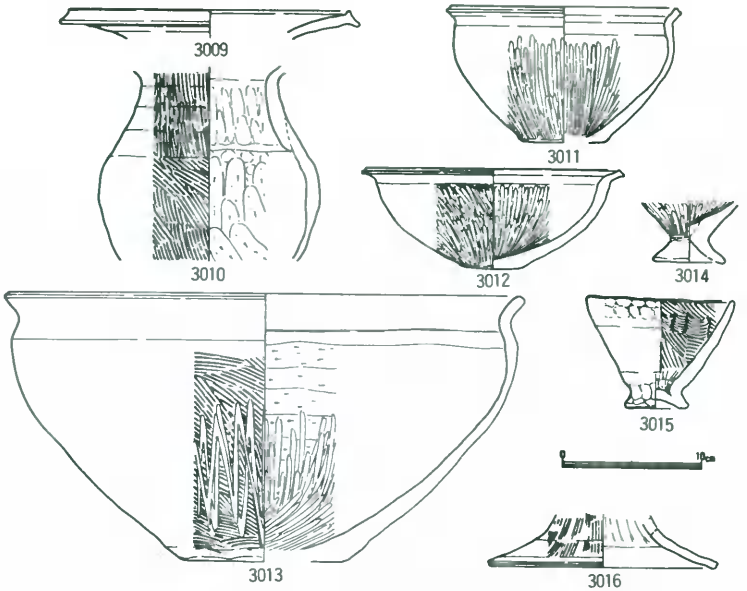
第305図　竪穴式住居-29（1/80）・出土遺物

を呈し，四本柱を主柱穴とする。第305図のように，住居がほぼ同心円上に拡張，建築された形跡をよく物語り，柱痕跡の位置もその事実を踏襲している。上位住居は長径約580cm，短径約540cm，下位の住居はほぼ円形プランを呈し，径約460cmを測る。柱穴は径60～100cm，深さ60～68cmを測り，構造的にかなり安定感のあるもので，柱痕跡より用いられた柱の太さは約20cmと推定される。なお上位住居は，柱穴の観察から，拡張後，二回の建て替えが推定される。住居の中央部分では炭化物の集中的な散布面を確認した。この炭化物の集積面を除去したのち，住居のほぼ中央に，中央穴を検出し，長径72cm，短径60cm，深さ52cmを測る規模を確認した。前述の炭化物は当然この中央穴からのかき出しと考えられる。また中央穴より東方向に浅い溝状のくぼみを検出したが性格は不明である。この竪穴式住居の外周には住居外の周溝が存在しており，北辺の残存はみられないものの，東辺では建て替え後の壁体溝から約200cm，南辺からは約180cm，北西辺では約250cmを測り，内周で径約10mを測るややいびつな円形を呈している。南辺の一部では，130cmにわたって幅約70cmに狭まり，北東辺では周溝をなさずに途切れる。さらに南西辺では周溝から幅40～50cmの細溝が派生し，西方への排水機能を具備する。このような例は，ほぼ同時期の竪穴式住居—30や，やや時期の下る竪穴式住居—35にみられ，この地区の一つの特徴である。しかし，住居外周溝の外周を含む居住区域は径14m以上，約154㎡を測り他地区の同時期の竪穴式住居に比べ，際だった優位性を誇示しているといえる。出土遺物は住居外周溝，床面および覆土中から出土したものがほとんどで，土器が大半を占める。共伴遺物としては，ガラス製小玉1，勾玉2，鉄製品1，土製品1点があげられ，中央穴からは，石錘1点が出土している。時期は，おおむね百・後・Ⅱに比定できる。　（渡辺・岡田）

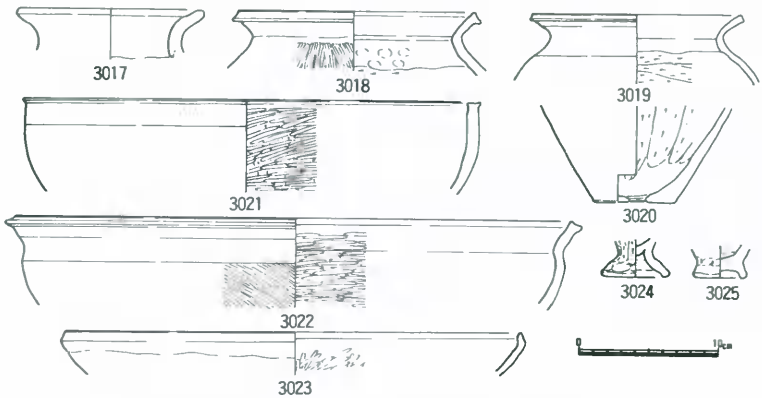
第307図　竪穴式住居29（1/80）



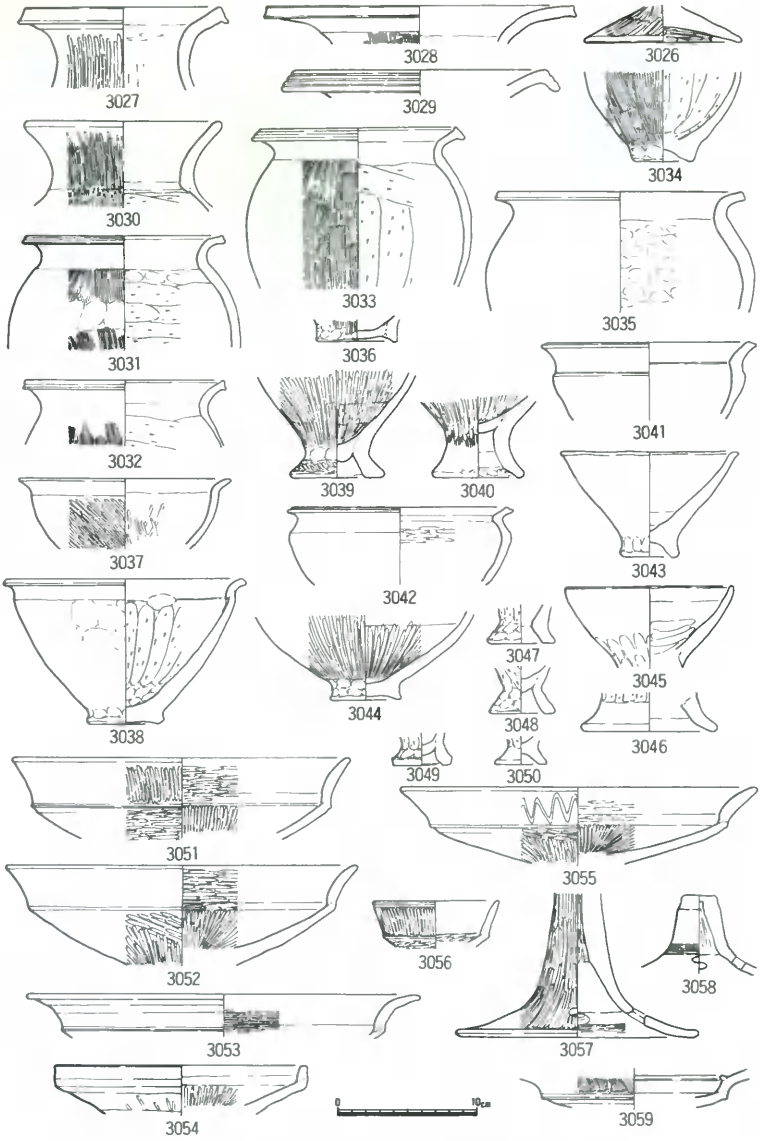
第306図　竪穴式住居—29住居外周溝（1/30）・出土遺物



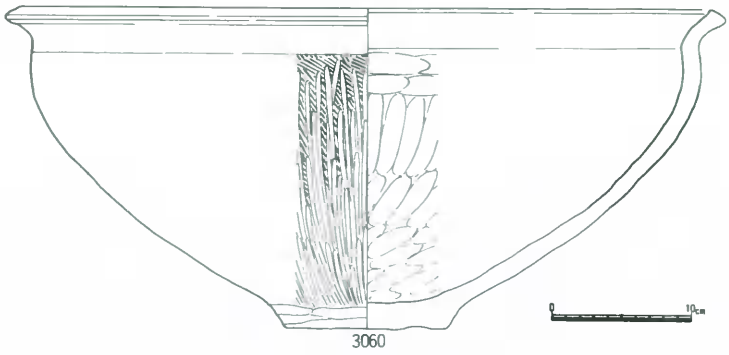
第308図　竪穴式住居-29床面出土遺物



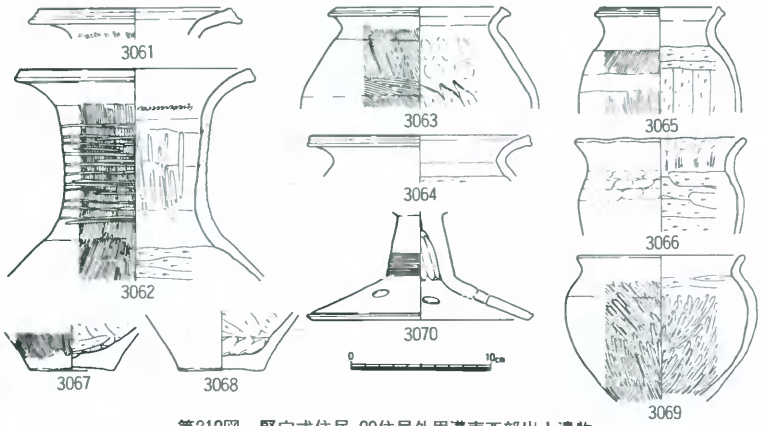
第309図　竪穴式住居-29住居外周溝北東部出土遺物



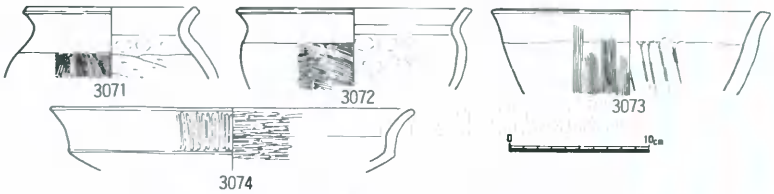
第310図　竪穴式住居―29住居外周溝南半部出土遺物（１）



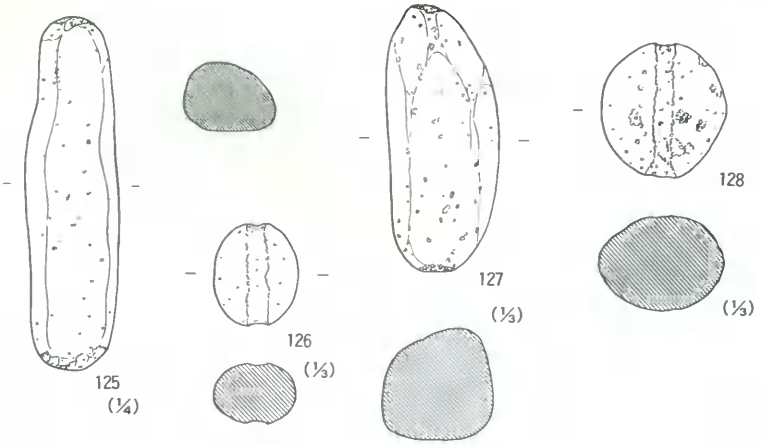
第311図　竪穴式住居-29住居外周溝南半部出土遺物（２）



第312図　竪穴式住居-29住居外周溝南西部出土遺物



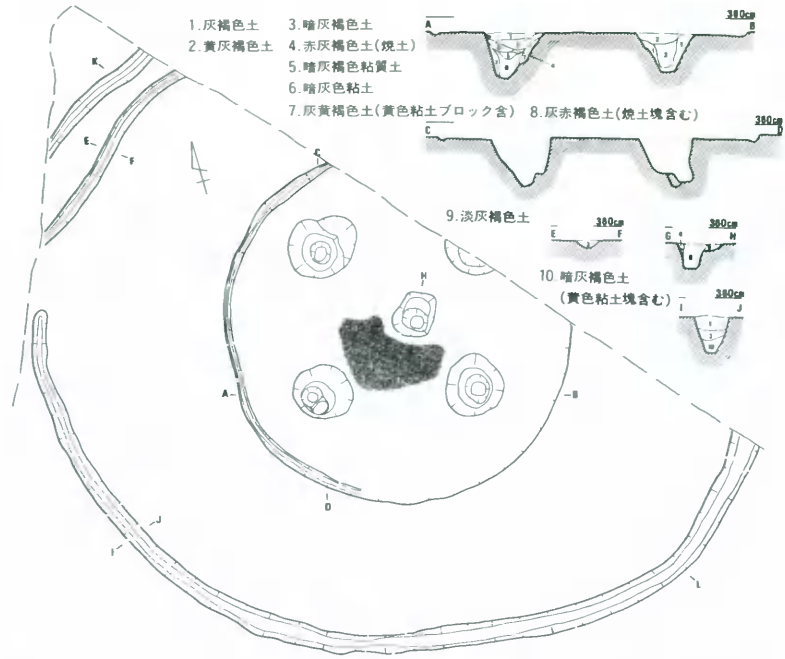
第313図　竪穴式住居-29住居外周溝北西部出土遺物



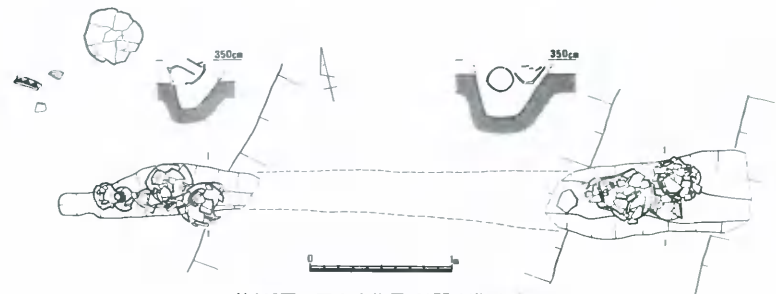
第314図　竪穴式住居-29出土遺物

竪穴式住居—30（第315～321図，図版7－2）

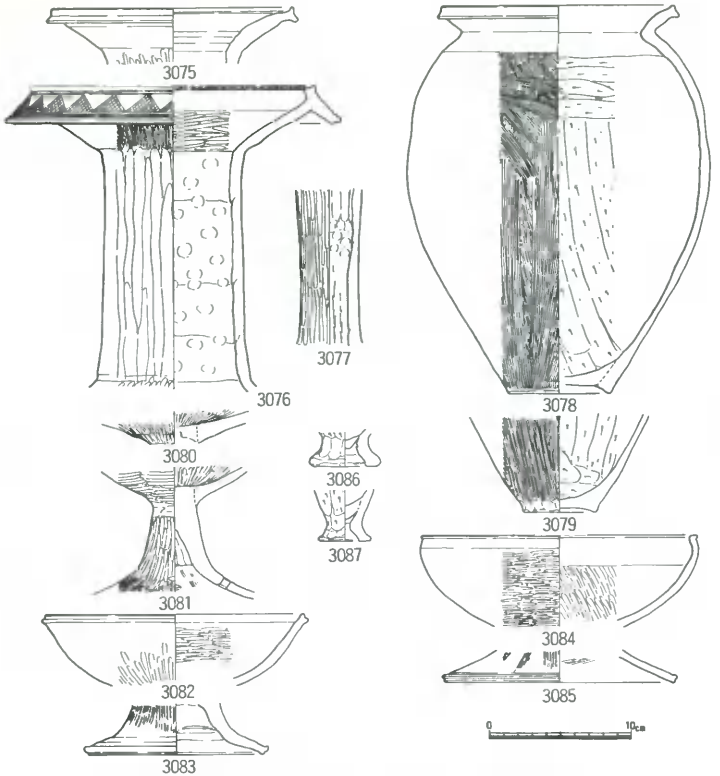
E-18杭の北に位置する竪穴式住居である。既に住居の上面のほとんどは，後世の開墾等による削平を受け，住居自体の遺構遺存度はかなり低い。さらに，この住居は，その約3分の1が調査区域外におよんでいることから住居の全体像についての詳細を欠く。検出された住居は，住居とそれを巡る住居外周溝とで構成されていた。前者は，径約500cmを測るもので平面形態は円形を呈する。柱は，4本で，柱間はそれぞれ220～230cmを測る。住居中央部には，方形に近い中央穴が位置する。さらに，中央穴の南床面には，灰の堆積が厚く認められた。なお，東側壁体溝は，前述したとおり後世の削平によりほとんど遺存していない。一方，後者の住居外周溝は，壁体溝肩口からの距離180～200cmを保って住居を同心円状に巡る。後世の削平のためか一部に溝の断絶が認められるが，本来は住居を一巡していたものと考える。この住居外周溝は，溝の機能を暗示するかのように溝の深度という点において各部分に差異が認められる。住居の北西に検出されたものは，いずれも海抜約335cmである。これに対して，住居の南側を巡るものは，西端部で海抜約323cm，東端の北壁下で海抜約306cmと東にいくにしたがい深度を増す傾向が認められた。これは，おそらく住居外周溝からの排水が住居の東側に集中することを如実に示す事象と推考される。さらに，この住居に直接関連すると考えられる溝が住居の西側に位置する。溝は，後の水田用水路の開鑿により分断されてはいるものの，溝の延長線上に住居が位置することと，時期にまったく差がないこと等から，おそらく住居とは有機的な関連を



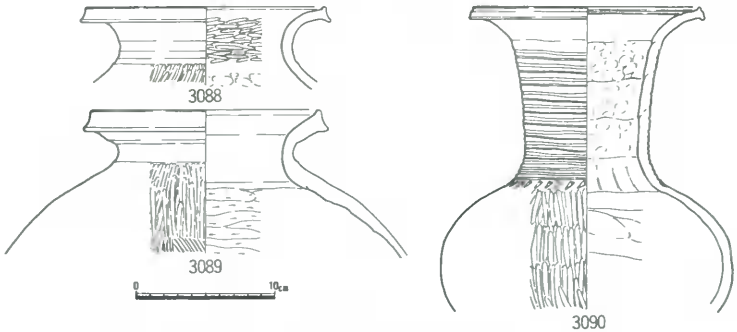
第315図　竪穴式住居-30（1/80）



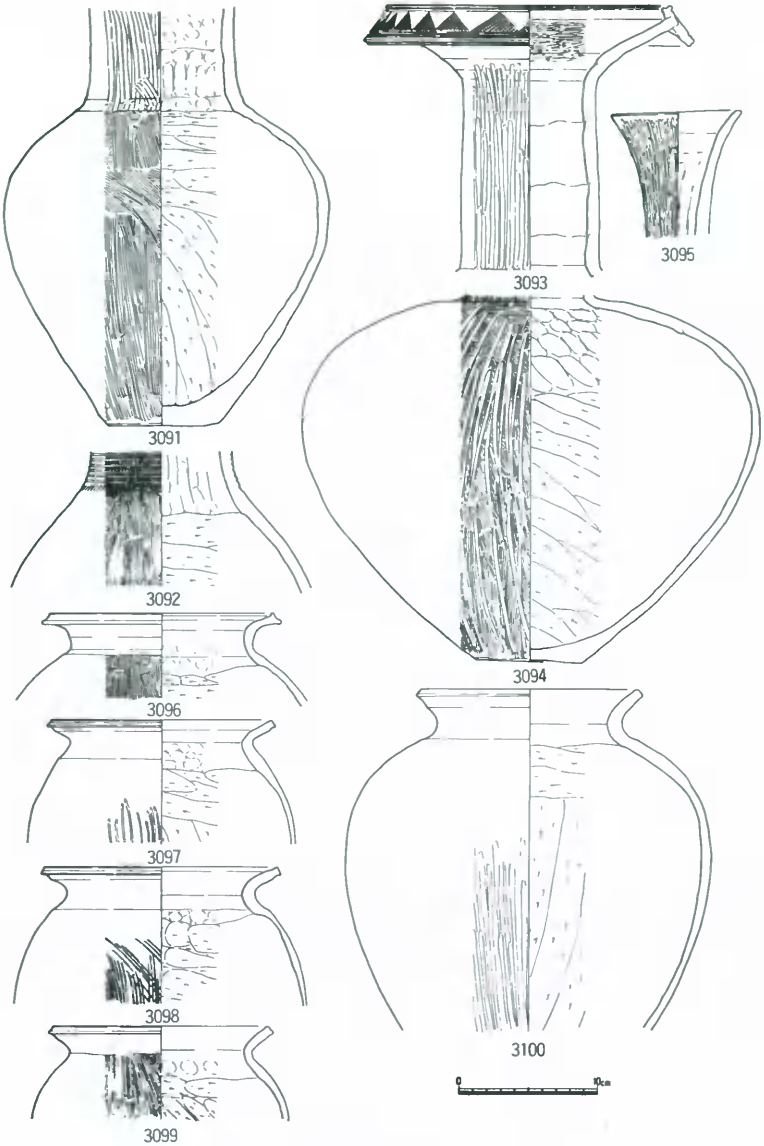
第316図　竪穴式住居-30関連溝（1/30）



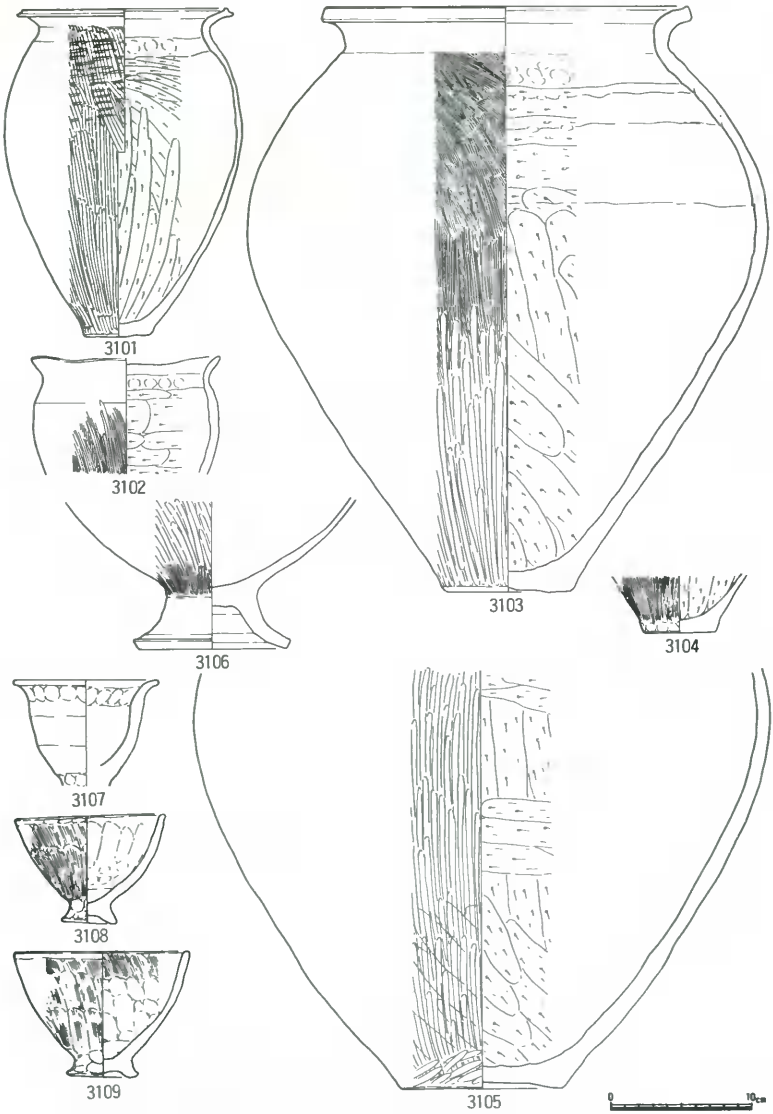
第317図　竪穴式住居-30 床面・柱穴・住居外周溝出土遺物



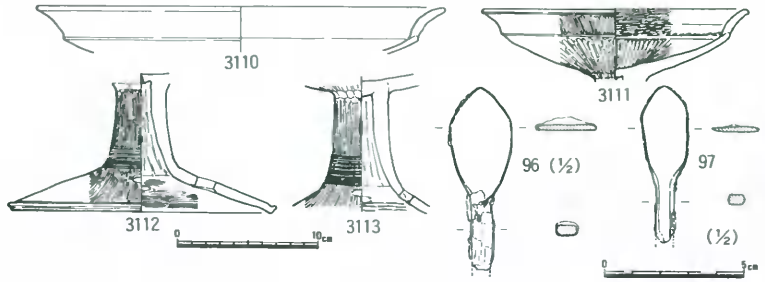
第318図　竪穴式住居-30関連溝出土遺物（1）



第319図　竪穴式住居-30 関連溝出土遺物（２）



第320図　竪穴式住居-30 関連溝出土遺物（3）

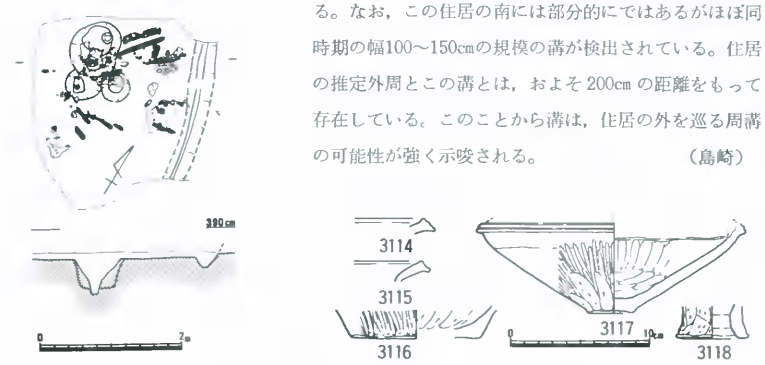


第321図　竪穴式住居-30 関連溝出土遺物（４）

持った溝といえよう。なお，この溝の底も東にいくにしたがって深くなる傾向にある。以上の諸遺構により構成されたこの住居の時期は，百・後・Ⅱ併行期に比定できる。

竪穴式住居―31（第322図）

F-19杭の東に位置する。住居のほとんどは，中・近世遺構と，水道管，電話線ケーブルの埋設箇所等の攪乱箇所の存在により調査不可能であった。そのため検出できたのは，全体の6分の1にも及ばない。さらに，住居自体も後世の開墾等による上面削平によりその大部分はとばされている。わずかに壁体溝の存在により，径800cm前後の規模のものが予想されるにすぎない。なお，住居内には，火災による廃絶を物語る炭化建築材と床面に集積された小石が遺存していた。柱穴は，１か所に３個が切り合って存在する。時期は，百・後・Ⅱ併行期と考える。なお，この住居の南には部分的にではあるがほぼ同時期の幅100～150cmの規模の溝が検出されている。住居の推定外周とこの溝とは，およそ200cmの距離をもって存在している。このことから溝は，住居の外を巡る周溝の可能性が強く示唆される。（島崎）



第322図　竪穴式住居-31（1/80）・出土遺物

竪穴式住居—32（第323～325図）

E-20の南西部に位置する円形の竪穴式住居である。周溝が部分的ではあるが，同心円状に残存しており，3～4軒の竪穴式住居が存在していたことが理解できる。2～3回の拡張が実施されており，徐々に大型化し主柱穴6本から8本に変化をしている。

最も新しい住居を竪穴式住居—32A，そして，古くなる順序にB・Cと呼称して説明を加える。

竪穴式住居—32Aは長軸約835cm，短軸約765cmを測り，東西に若干長い楕円形を呈する。壁体溝が北西部において2本の重複が認められ，一回の建て替えが考えられる。主柱穴は8本からなり，P-35・63・17・26・31・48・78，そしてP-39の西隣りの柱穴がそれにあたる。柱穴配置の平面形は八角形となり柱間距離は200～226cmを測る。その他に柱は中央穴を囲む4本（柱間距離139～185cm）の棟持ち柱が配されており，合計12本の柱穴で構成されていたことが理解できる。八角形の東西南北辺に並行する格好で棟持ちの4本の柱穴も存在する。

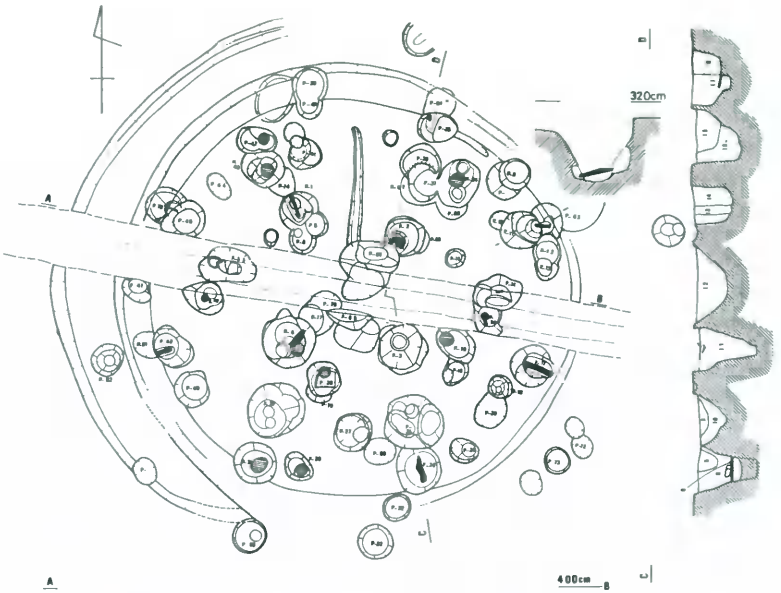
主柱穴は直径45～60cm，深さ55～65cmを測り，8本中の柱穴2本を除いて他の6本に割り板材が入っている。その柱穴底の割り板材は，中央穴を中心にする対角線に沿う格好で配されており，長さ45cm，幅7cm，厚さ9cmを測る。柱穴内において，割り板材は住居中央に向い若干傾斜をして配されており，その上に凹部を持つ柱が跨がる状態で据えられたと考えられる。

P-63のように割り板材の木口部を挿入するために柱穴掘方の下位を拡張した場合が存在する。棟持ちの柱穴4本も同様の割り板材を対角線状に配置している。

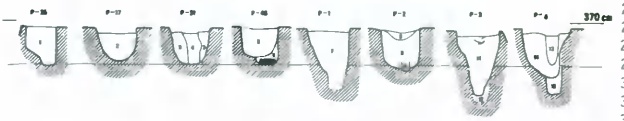
中央穴は近・現代の溝により削平を受けており，上位より40cm位が消失し，深さ30，12cmの2穴が残存している。

出土遺物は3119・3123・3125・3128・3129・3137・3138・3139・3149等が図化できるものであり，P-1より3129・3130，P-2より3121・3123，P-3より3139・3149，P-4より3122・3125・3128等がある。主柱穴ではP-17より3131，P-35より3138が出土している。他の主柱穴内よりも数多くの遺物が出土しているが，大半が小片であり，その中に製塩土器，サヌカイト等が認められる。P-26等では土器片が46点出土した場合もあり，石器129をも含む。130はP-2より出土している。すなわち，本住居が存在した時期は柱穴内より出土した遺物より新しく，百・後・Ⅱの古相に比定できる。

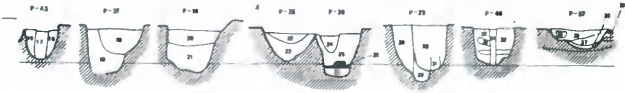
竪穴式住居—32Bは竪穴式住居—32A・C間に位置し，長軸約655cm，短軸653cmを測りほぼ正円形を呈する。主柱穴はP-43・37・14・25・29・46からなり，柱間距離は北辺より224・190・211cm，南辺は198・206・201cmを測る。主柱穴を結ぶ平面形は六角形を呈し，その中央に65×(30)×(10)cmの中央穴が存在する。断面は椀形を呈し，内部は炭および焼土により形成されており火を使用した場所が想定できる。



1 黄褐色土(貼床)　5 淡茶色土　9.淡黒色土(炭)
2 暗茶褐色土　6 灰褐色土　10 淡茶色土
3 褐色土　7 石　11 淡灰黒色土
4 暗黄褐色土　8 礎 板　12 淡青灰色土(鼻-102)



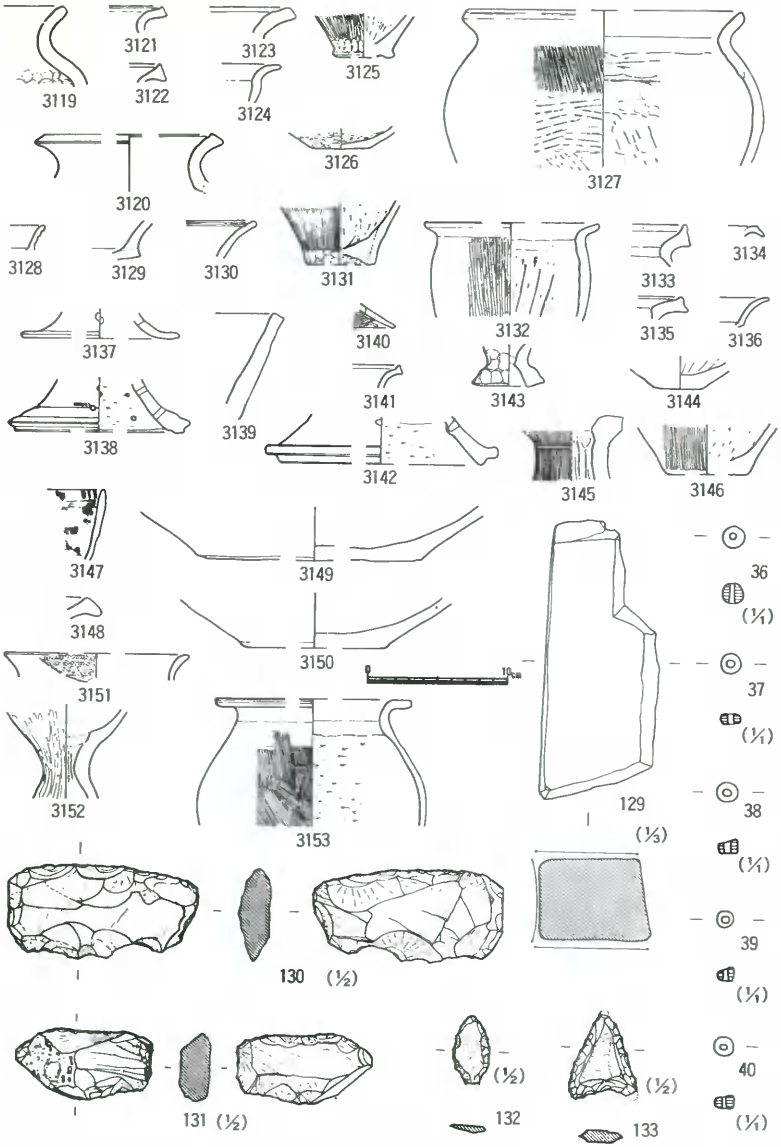
26.礎板
27.暗灰色粘土
28.褐色土
29.灰色粘土
30.灰褐色土
31.灰色粘土
32.暗茶褐色土



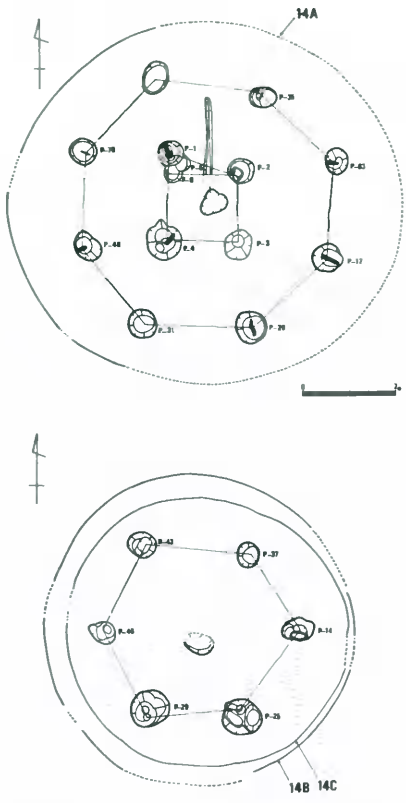
33.黄褐色土
34.暗茶色土
35.黄褐色土
36.淡黒色土(炭)
37.淡黒色土(炭)
38.焼土
39.焼土・炭

1 暗茶灰色土　6 灰色粘土　11 暗茶灰色土　16 暗茶灰色土　21 暗茶褐色土
2 茶灰色土　7 茶灰色土　12 灰色粘土　17 暗茶灰色粘土　22.淡黒色土(炭)
3 茶褐色土　8 灰褐色土　13 暗褐色土　18 茶灰色土　23 淡茶色土
4 暗褐色土　9 褐色土　14 暗茶褐色土　19 暗茶灰色土　24 淡茶色土
5 茶褐色土　10 灰色粘土　15 灰色粘土　20 暗灰色土　25.灰褐色土

第323図　竪穴式住居－32(1/80)



第324図　竪穴式住居－32出土遺物



第325図　竪穴式住居-32　変遷図（1/120）

本住居は主柱穴の重複が顕著に認められ，ほとんど同一場所を3～4回利用している。P-25・29等は4穴の重複があり，柱穴直径が約80cmにまでおよび，深さは平均約70cmを測る。柱穴内は暗褐色を呈する土壌化した柱痕が認められ，埋土には黄褐色土ブロックを含むものが使用されている。主柱穴内には竪穴式住居—32Aと比較して出土遺物は少なく，図化できるものはP-43より出土の高杯3142のみである。P-37等からは10点以上出土しているが小片である。製塩土器，サヌカイト等が認められる。

時期は百・後・Iの古相より新しく，百・後・IIの新相より古い竪穴式住居とすることができる。

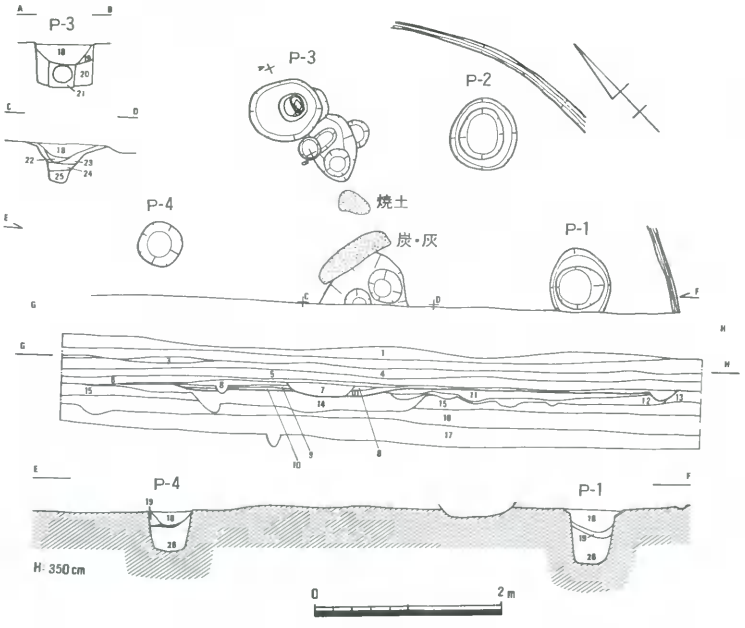
竪穴式住居—32Cは最も古く，小型の竪穴式住居である。壁体溝は認められず，貼床のみを残しており，長軸596cm，短軸565cmを測る。貼床の厚さは約10cmを測り，暗黄褐色土が使用されており，それを竪穴式住居—32Aの主柱穴が切った状況が認められる。8本中7本が貼床面を切っており，本住居を中心に同心円状に各住居が拡幅されたことが理解できる。主柱穴は竪穴式住居—32Bと共有する関係を持ち，その重複関係からみて同じ場所の柱穴を利用したことが理解できる。

しかし，3軒の竪穴式住居に使用された主柱穴18本を除いても，住居内には48穴以上の柱穴が存在する。土色，柱穴底レベル，規模等を考慮して復元を試みたが，明確にしえたものは少なく，若干不安定であるが，P-41・34・16・28・55等を五角形に結ぶ平面形が認められた。中央穴についても同様のことが考えられ，各住居との関連は明確にしえなかった。P-87より石鏃132が出土している。

出土遺物は前述したもの以外にガラス小玉８個が出土しており，床面より完形品２，半壊したもの１，P－９より完形品が３，P－３・25より半壊したもの各１である。　（高畑）

竪穴式住居―33（第326・327図）

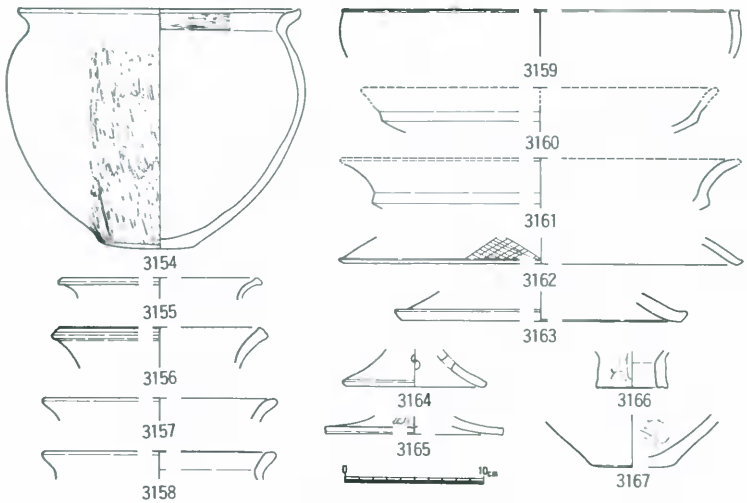
調査区の端に検出したために，全体の調査はできなかった。さらに，住居の中央より西に向けて削平されているため，壁体溝も，その一部しか検出されなかった。調査した住居は，壁体部分は削平されているため，周溝と，その内側に４本の柱穴，および，中央穴を検出したのみである。住居は，検出した壁体溝からすれば円形と考えられ，推定される直径は，約650cmを測る。柱穴は，４本を検出したが，本来は，６本柱の住居と考えられる。床面において検出し



1.灰青色砂
2.青灰色微砂
3.暗灰褐色細砂
4.橙色斑淡灰茶色細砂
5.暗灰色粘土斑灰色砂
6.灰色砂
7.灰色粘土(底に炭層)
8.黒褐色粘土
9.暗灰褐色粘土
10.含炭暗褐色粘土
11.暗茶褐色粘土
12.暗灰褐色粘土
13.暗灰褐色粘土
14.暗灰褐色粘土
15.黒褐色粘土
16.褐色粘土
17.黒褐色粘質土
18.(黄)褐色土(炭・焼土を含む)
19.灰褐色土(炭・焼土を含む)
20.暗黄褐色土
21.暗灰褐色粘質土
22.淡灰褐色土(炭・焼土を含む)
23.灰褐色土(焼土を多量に含む)
24.灰褐色土
25.褐色土
26.暗褐色土

第326図　竪穴式住居－33（1/60）

た柱穴の直径は，60×80cm，深さ40～60cmを測る。各柱穴の中心の間隔は約2mを測る。P－4の柱痕からは，鉢3154が出土した。住居のほぼ中心には，中央穴を検出した。中央穴は，検出面においては，幅100cm，底部の幅20cm，深さ45cmを測るように大きなものであるが，底に向けてその幅を減じ，逆台形を呈する。中央穴の北側には，それに接して，25×85cmの範囲に，炭・灰の堆積するものが見られた。また，中央穴とP－4の間において，25×35cmの範囲で焼土面を検出した。住居は，床面に貼床が見られ，2枚の貼床を確認した。（井上）



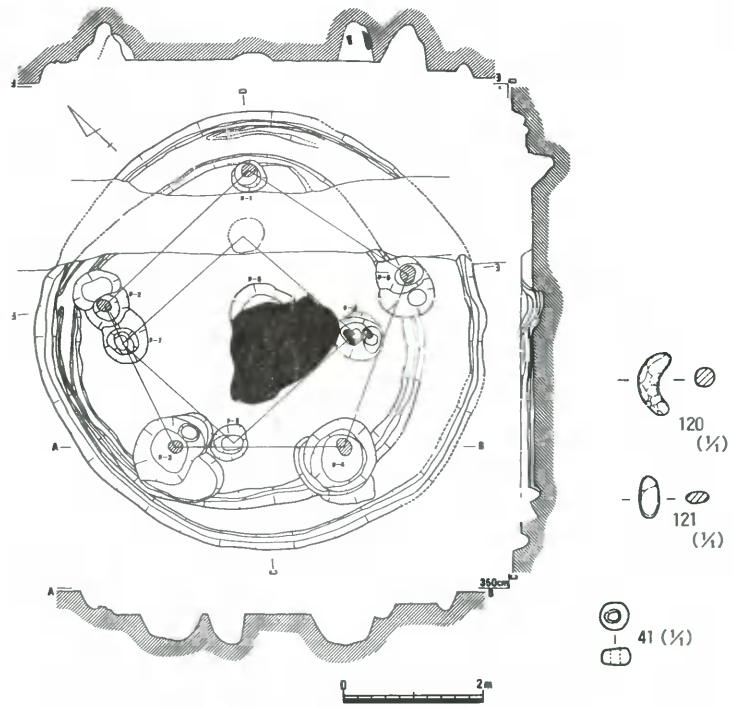
第327図　竪穴式住居－33 出土遺物

竪穴式住居－34（第328～330図，図版7-1・8-1）

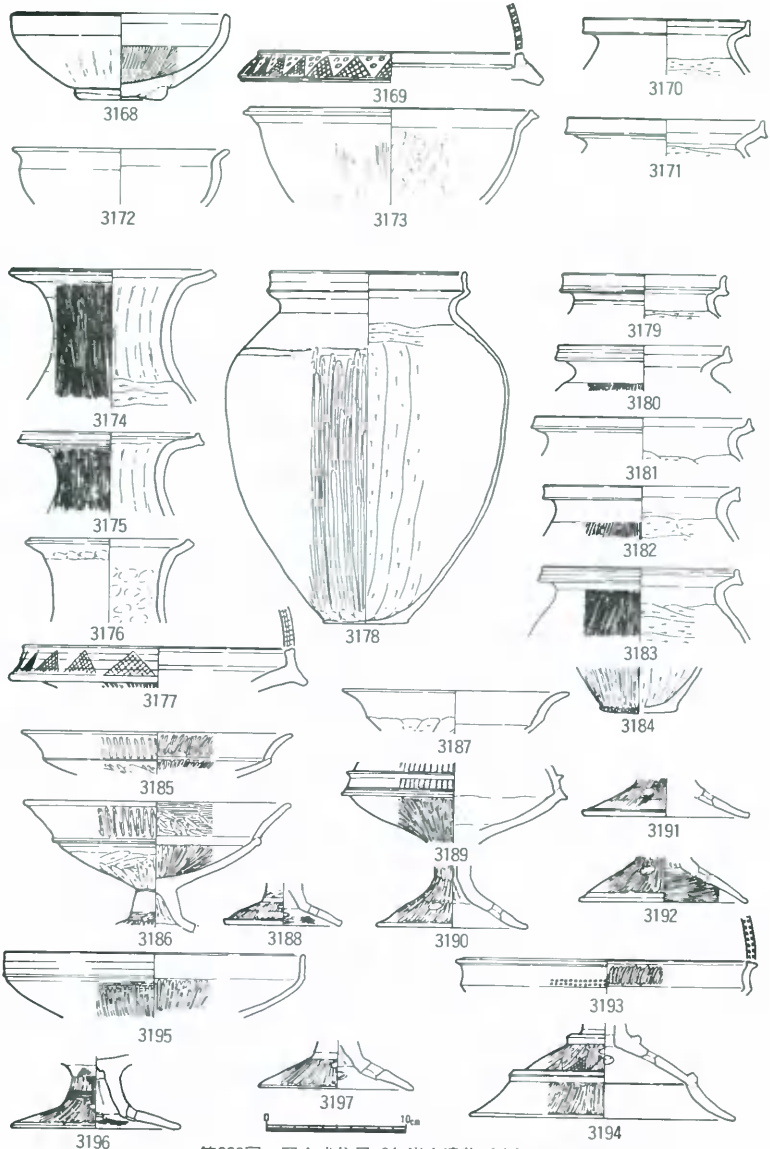
E-18の中央よりやや西側に位置する。後世の溝により北辺部の一部を失っており，竪穴式住居－29の北辺を切った状態で検出された。平面形は，ほぼ円形を呈し，やや東よりの全体が拡張された形跡をよく残している。この上位住居は主柱が5本柱で，各々柱痕跡をよく残している。平面形では径620～640cm，深さ約20cmを測り，床面積は約31.2㎡を測る。床面の周縁には幅約20～28cm，深さ8cmを測る壁体溝がめぐり，残存壁高は20cmを測る。柱間の心々距離はP－1を起点に，東へ280cm，260cm，250cm，230cm，280cmを測り，柱の太さは柱痕跡の観察によって約20cm前後を測る。住居規模に比較すれば柱数も多く，堅固な構造で，しかも柱穴の掘方規模からもそのことが裏付けられる。しかし5本柱建物の上屋構造についての明確な形態については更に類例の増加を待ちたい。なお，この上位住居は柱痕跡が重複するものがあり，少なくとも1回の建て替えの形跡が看取される。一方，下位住居は，上位住居より小規模で，直

径約520cm，深さ約38cmを測る円形を呈し，面積は約21.2㎡を測る。主柱穴は4本で，周縁の床面には幅8～38cm，深さ10cm前後の壁体溝がめぐり，柱穴の規模は，上位住居のそれに比べると小さく，掘方径約60cm，深さ約44cmを測る。P－9には，柱を支えるために2個の裏込め石が検出されており特筆される。なお，下位住居でもやはり，建て替えが行われており，やや東よりに拡張されている。床面のやや東より中央部には，不整円形を呈する中央穴があり，長径98cm，短径80cm，深さ38cmを測る。検出層位から観察すると，上位，下位いずれの住居の存続中にも継続使用されており，他の住居と同様南辺には藁状炭化物の散布が顕著に認められる。

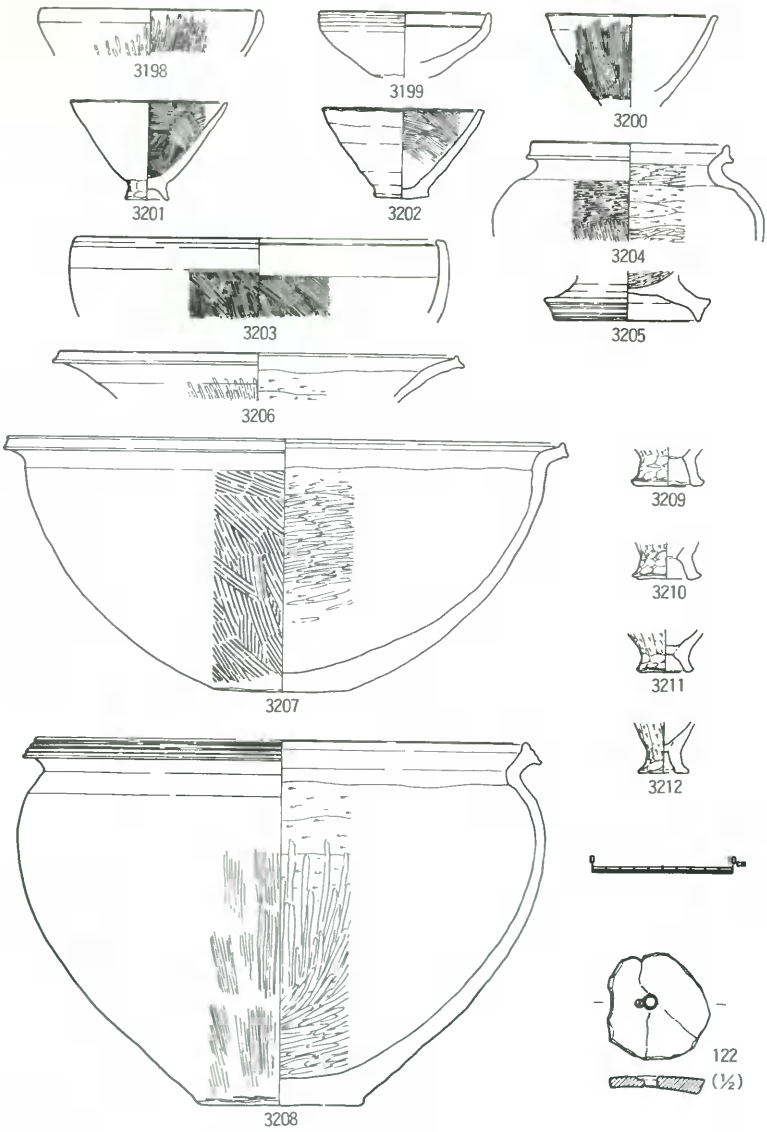
出土遺物の大半は，土器で，鉢・壺・甕・高杯・製塩土器などがある。時期は，おおむね百・後・Ⅳに比定される。　（岡田・渡辺）



第328図　竪穴式住居-34（1/80）・出土遺物



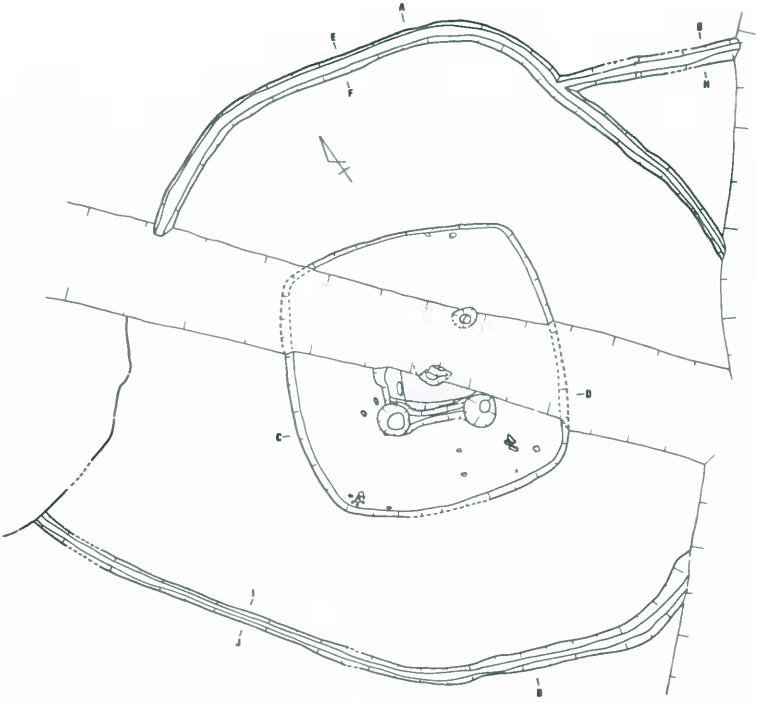
第329図　竪穴式住居-34 出土遺物（1）

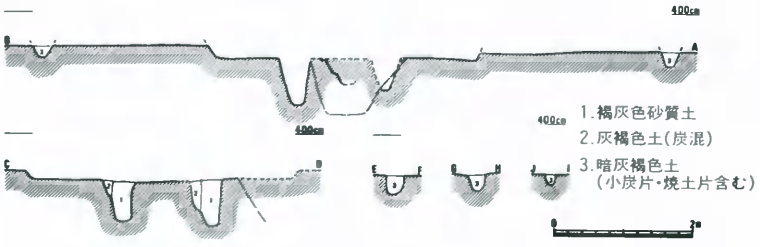


第330図　竪穴式住居－34 出土遺物（2）

竪穴式住居－35（第331～335図，図版 8-2）

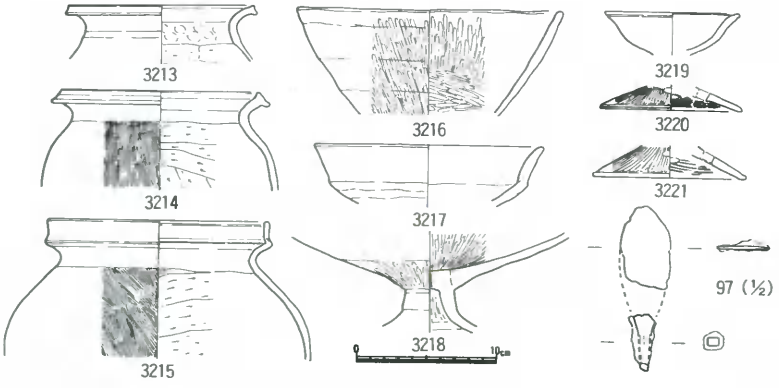
E-18 の東で検出された隅丸方形で やや胴張りがみられる竪穴式住居で，中央部分を後世の



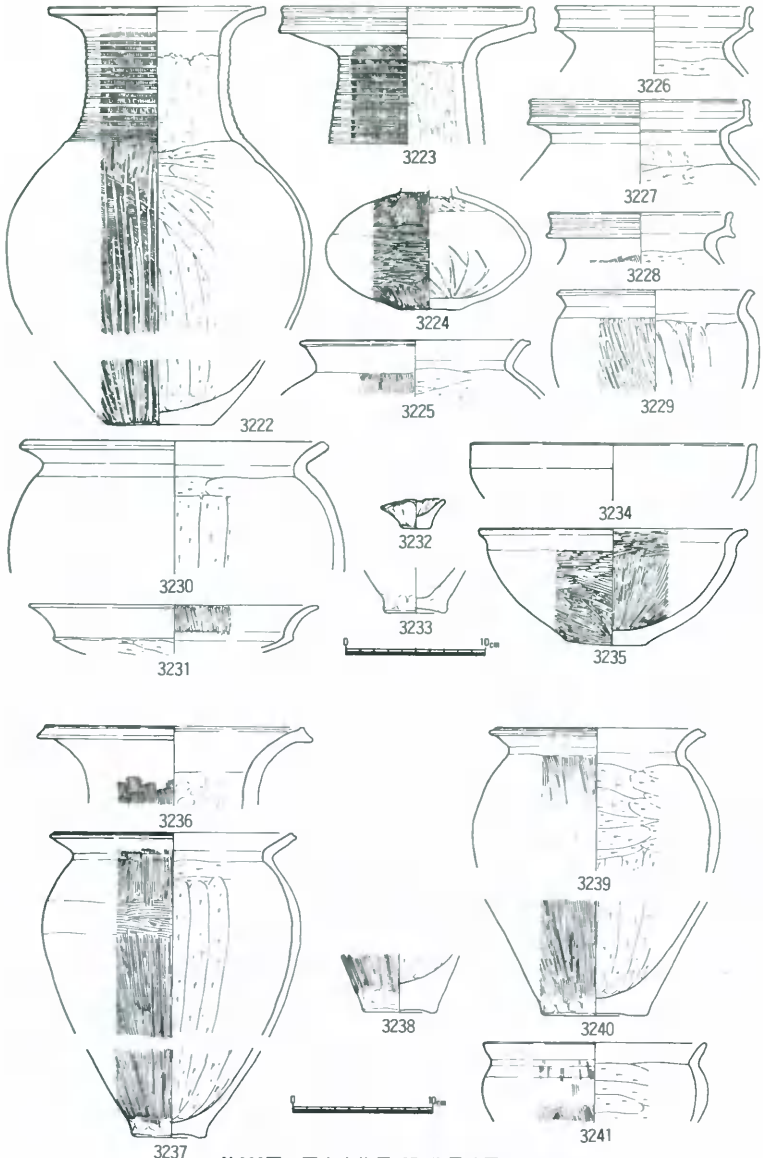


第331図　竪 穴 式 住 居 － 35（1/80）

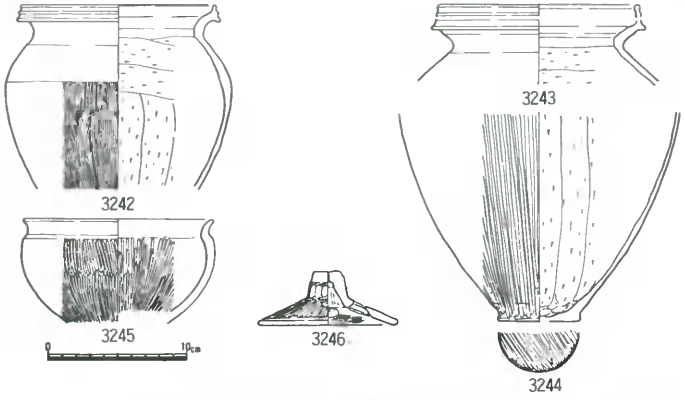
溝によって切られているが，一辺約375cmを測る規模が確かめられた。柱は基本的には４本柱で比較的住居の中心に近い位置に心々約130cmの柱間で存在するが，現存するものは３本である。この柱に囲まれた方形部分は周囲より約６cm低く，ほぼ中央には不整形の中央穴が存在する。またこの区画内の南半残存部では炭化した藁状繊維や炭片が埋積し床面との間には暗灰色の砂が敷かれており，この区画は後世の囲炉裏を想起させる。また，中央穴はその全容を残さないが，おそらく不整円形を呈し，深さは約30cm以上を測るものと推定される。住居の覆土は暗灰褐色土で，検出面より床面までの深さは約10cmである。この住居の特徴に図に掲げるような断面U字形を呈する住居外周溝の存在をあげることができる。整った円形もしくは多角形を描かないが，明らかにこの住居を囲むことを意図した平面形が看取される。北東部分ではさらに枝溝が東方に派生しており，住居への水の直接的流入を防ぐための重要な排水施設であった可能性が強い。西方は，竪穴式住居―29に切られ，その行方は不明である。住居内には壁体溝は検出されず，屋内における水に対する配慮はみられない。出土遺物の大半は土器であるが，床面からは第332図に掲げるように甕・壺・高杯などとともに柳葉形の鉄鏃や第335図の敲石等が出土している。また，暗灰褐色土が埋積する住居外周溝内からも多数土器が出土しており，それらは第333・334図に掲げる鉢・甕を主体にした土器で，住居内の出土土器と時期的には同時期を示している。一方，住居と周溝との間でも，たとえば住居の東辺と周溝の間では3223・3226などの土器が土器溜り状に集中的に出土し，この部分もまた居住空間の一部であったことを物語っている。3222の壺は，他の土器と比べやや古相を示し，百・後・Ⅱに比定されるが，大半の出土土器からみるとこの住居の時期は百・後・Ⅲに比定される。



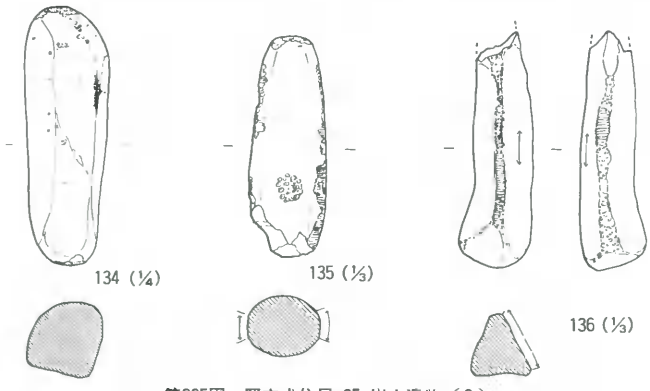
第332図　竪穴式住居－35出土遺物（１）



第333図　竪穴式住居-35 住居外周溝出土遺物（1）



第334図　竪穴式住居-35　住居外周溝出土遺物（２）

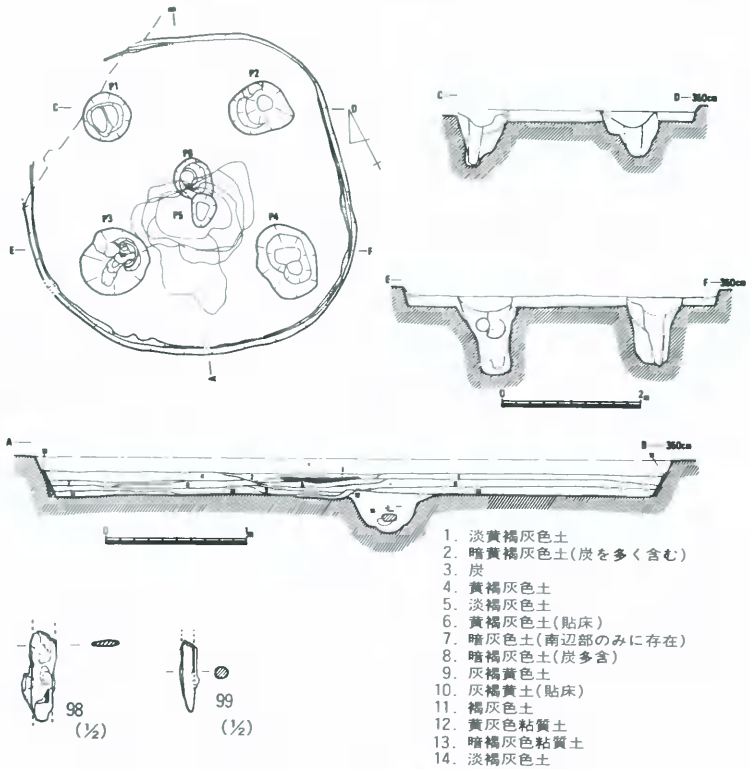


第335図　竪穴式住居 35 出土遺物（２）

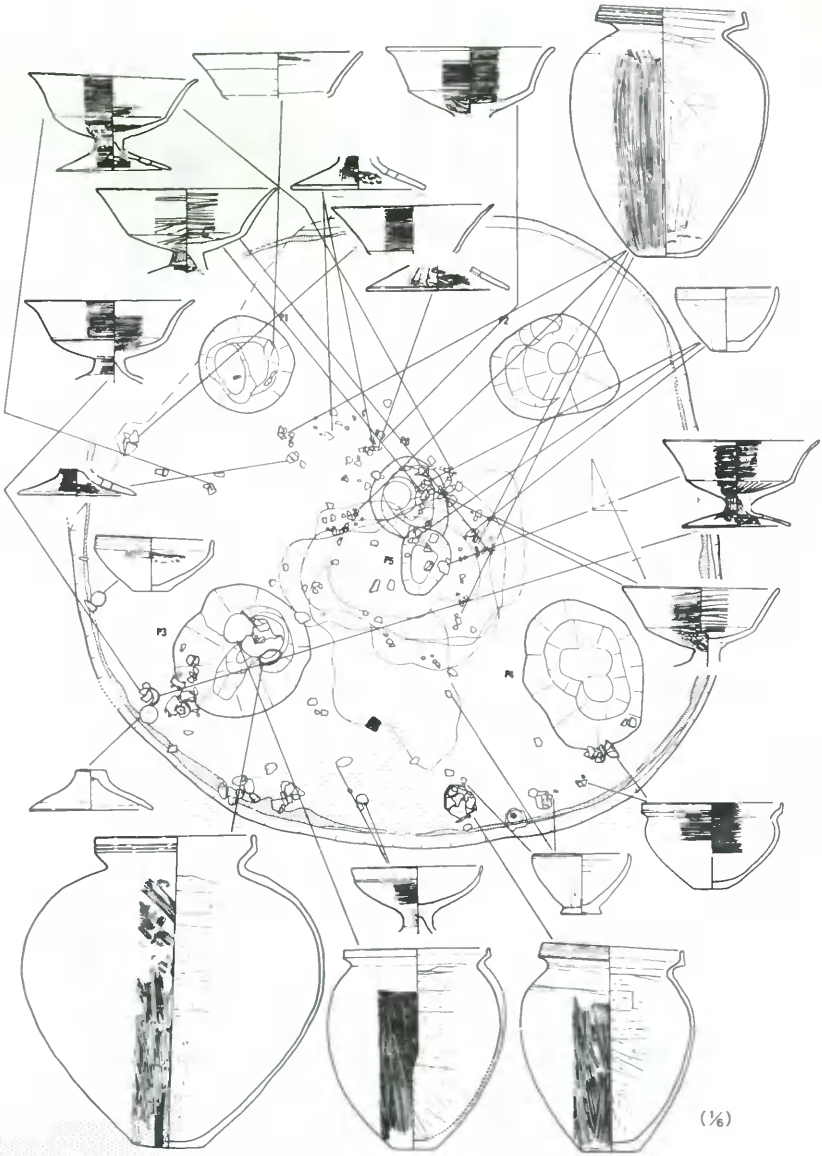
竪穴式住居―36（第336～339図，図版９）

Ｅ-19とＥ-20の北辺の交点で検出された竪穴式住居で，やや四辺を意識した隅丸方形あるいは円形ともいえる平面形を示す。南北の最大幅450㎝，東西の最大幅460㎝を測る。住居の北西隅は発掘区の側溝によって旧状を失っているが全体の規模を復元推定する妨げにはならない。柱は４本で，住居の比較的外縁に位置している。いずれも大きく２回は建て替えがあったことを示しているが，Ｐ-３では最終の柱を抜き取った後，甕3269・壺3270の２点の完形土器を埋めていた。ことに後者は埋没の直後に体部の上位を叩いて割った状況が観察され，この行為が住居の廃絶にどのような関わりがあったのか興味深い。中央穴はこの柱穴を結ぶ対角線のほぼ

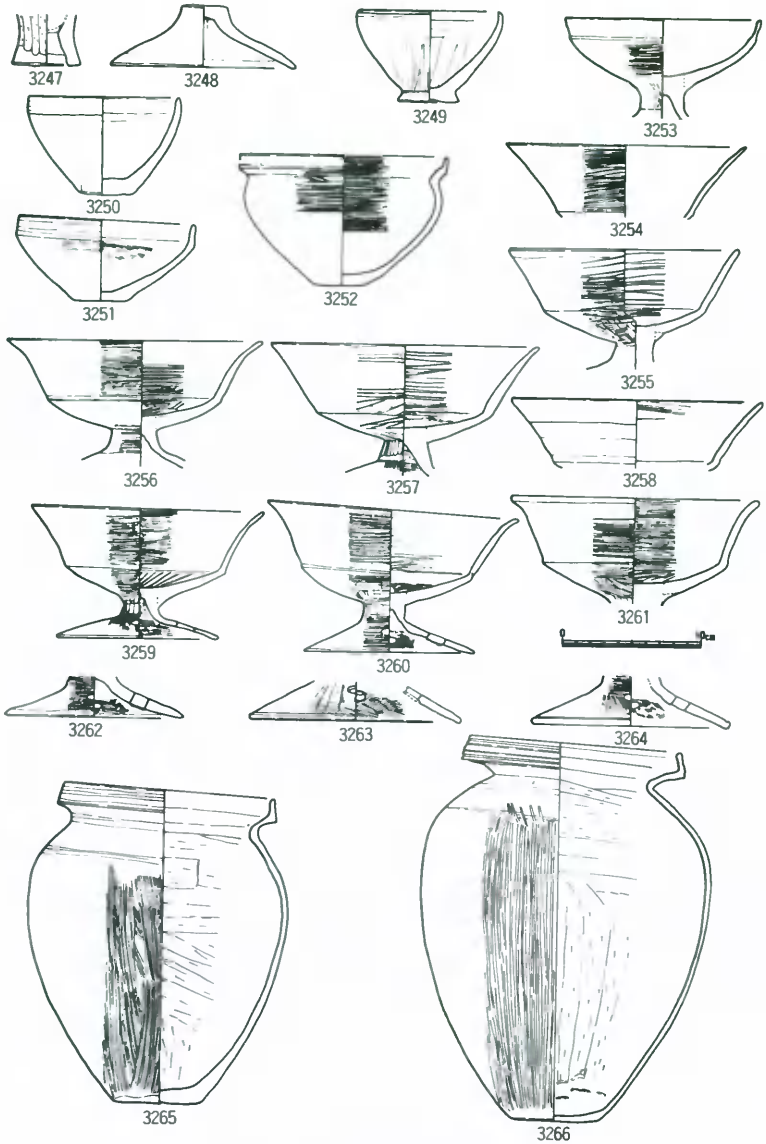
中心にP－6が位置するが，廃絶後は浅いP－5が使用されている。各々，その「火所」としての機能が考えられ，その周囲にはおよそ5面にわたる薬状炭化物面が形成され，これらの中央穴からのかき出しを示している。このかき出しによる炭化物面は南部分に集中しP－3・P－4に近接している。住居の床面は，当初は灰黄色を呈する基盤層面であるがP－6の廃絶と同時に灰褐黄色土と灰黄色土のブロック土を用いて厚さ4～6cmの貼床面を造成している。さらに第2面・第3面・第4面と貼床面が形成され，中央部の炭化物面も各々の貼床面に対応してその拡がりと中心を変えている。壁体溝は明瞭に検出できなかったが，周壁部分や，特に北西隅の部分では数cmから最大幅4.5cmを測る暗灰褐色粘質土があり，板状用材のうちこみ痕跡と推定している。出土遺物は，第2面の貼床面から上位でおもに出土し，第337図に掲げる平面図には



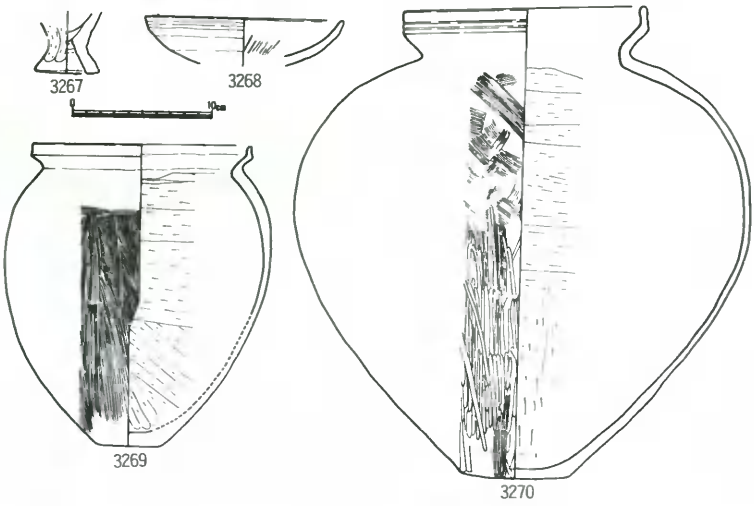
第336図　竪穴式住居-36（1/30）・出土遺物（1）



第337図　竪穴式住居 36 出土遺物位置図



第338図　竪穴式住居-36 出土遺物（2）

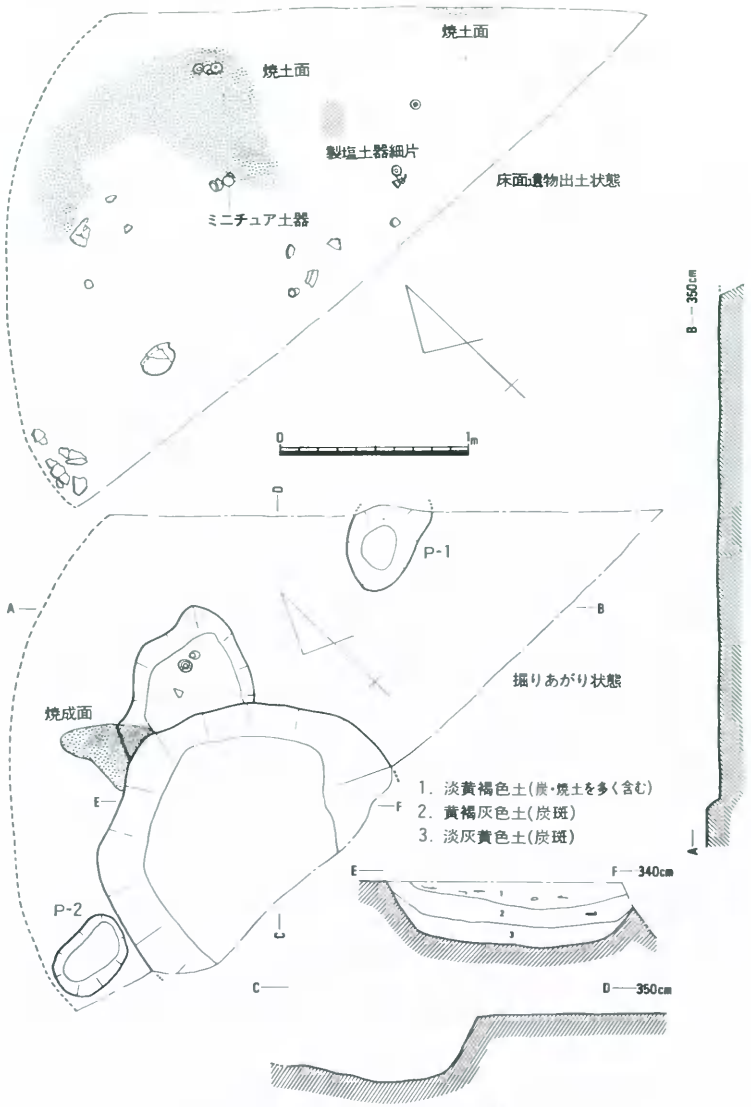


第339図　竪穴式住居－36 出土遺物（3）

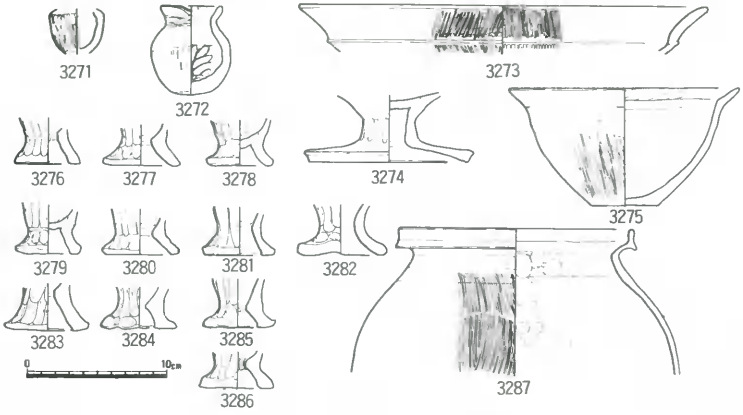
大きく，第2面と第3面の出土遺物を掲示している。出土遺物のほとんどは土器で約60%を占める器種は精製土器の大半を占める高杯で，20%強が鉢，残りは蓋・壺片・甕・製塩土器片が占める。これらの土器の大半は，第337図に示すように中央穴の周辺からほぼ西半に集中的に出土している。高杯3259や甕3266などのようにかなり離れた位置，あるいは多数の小破片から接合関係が確認されるものもあり，特に後者は，貼床土に混じって拡散した可能性が強い。これらの土器群の一括存在は，この時期，すなわち百・後・Ⅳの時期の器種構成や供膳形態を知る有力な手がかりとなると思われる。他に99や100の鉄鏃と推定される鉄器や，砥石片などが出土しているが装身具類の遺物は全く出土していない。

竪穴式住居－37（第340～342図）

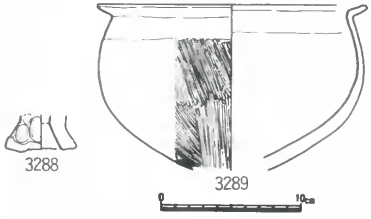
D-20の東辺南よりで検出された竪穴式住居状の遺構で約4分の1を残すのみであるが，復元推定径約420cmを測り，円形を呈すると推定される。床面は，南西方に若干下がり，全体的に周囲よりは7～10数cm掘りこまれている。しかし，残存西辺壁体は明瞭でなく，掘方の形状からは明確な壁体溝を形成しない。したがって，住居というよりはむしろ，竪穴式住居状の遺構とするのが妥当と考えている。床面ではP－1～P－3の不整円形のピットが検出されたが特にP－2の周辺では製塩土器細片を含む焼土層と廃土面が形成されており，特に北半を中心とする床面でも製塩土器脚部片・体部片が数個ずつまとまって出土している。P－1は深さ38.4cmで灰黄褐色土，P－2は深さ約5cmで焼土・炭・製塩土器細片や砂粒を含む黄色土が埋積し



第340図　竪穴式住居－37（1/30）



第341図　竪穴式住居 37 出土遺物（1）



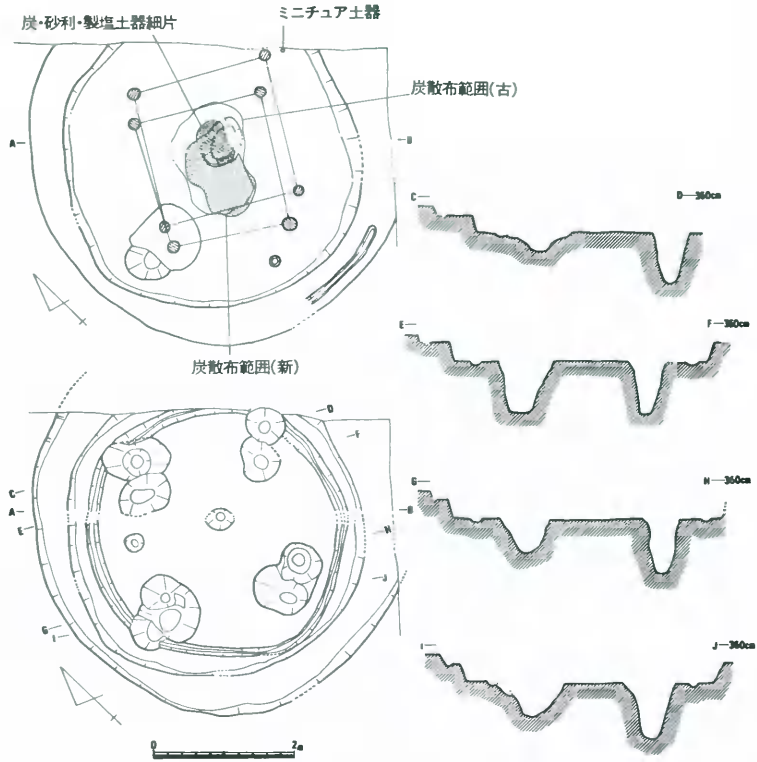
第342図　竪穴式住居 37 出土遺物（2）

ている。P−3は深さ30cmを測り埋積土はP−1と同様である。また西隅に集中している土器片は甕3287でその破片はP−3の中からも出土している。P−2を切ったピットはこの住居に伴う可能性が強いもので，屋内土壙というべき性格を示している。住居の性格は，製塩土器の多量の出土や焼土面の存在からも示唆されるように，製塩に関わる屋内作業場のような性格が見出される。しかし，先にも述べたように明確な平面形と掘方が判然とせず住居状遺構と推察されるが，どちらかといえば簡便な構造の覆屋風の建築物であった可能性もある。やはり，火に直接関わる施設であり火災の発生の危険性を考慮すれば，当然そのような構造にならざるを得ないのではなかろうか。

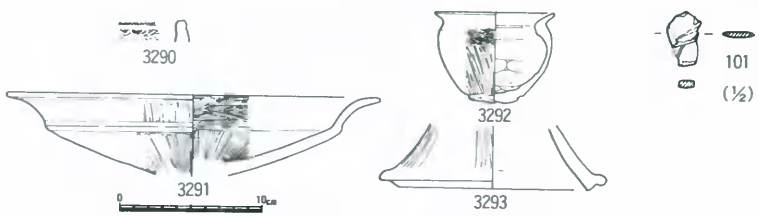
出土遺物は第341・342図に掲げるとおりミニチュア土器・高杯・台付鉢・鉢・甕などの他，製塩土器脚部が多数出土している。これは図に掲げる他，細片は極めて多い。これらの出土土器は百・後・Ⅲに比定され，製塩土器も一時期の特色を示している。

竪穴式住居−38（第343〜345図）

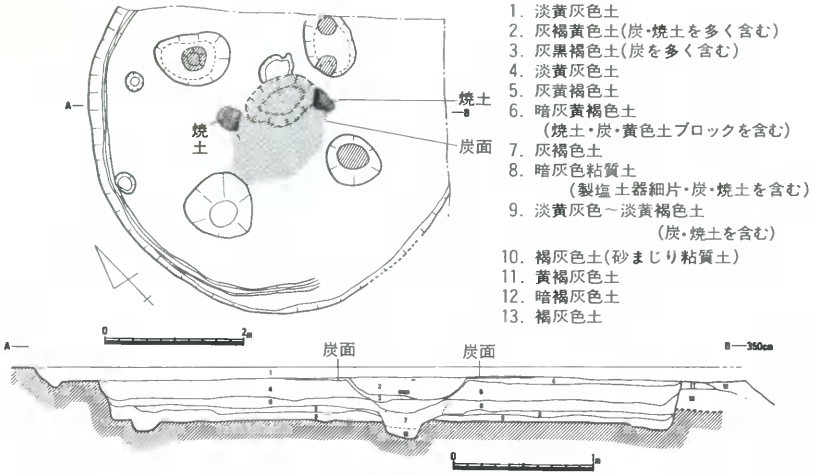
E−21の南辺，竪穴式住居−37の東方6mで検出された円形を呈する住居で数次にわたる建て替えと拡張が行われている。第343図に掲げるように中央穴の位置は継続してほぼ踏襲されており，連綿と使用された住居であることを示している。初期の段階の住居規模は推定径430



第343図　竪穴式住居-38（1/80）



第344図　竪穴式住居-38出土遺物



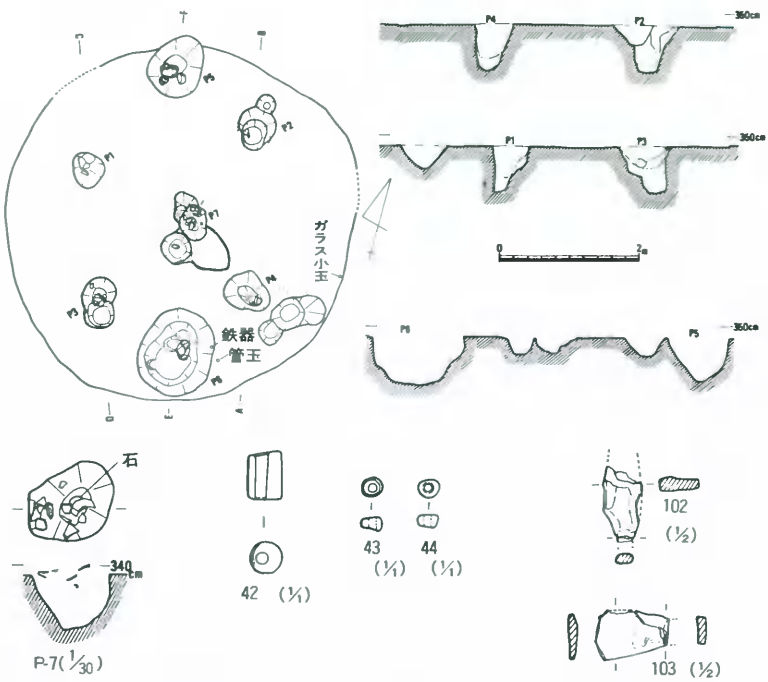
第345図　竪穴式住居-38（1/80・1/40）

cmを測り，浅い中央穴と4本の柱を認める。南側にややずれて検出された径約15cmを測る柱痕跡4か所がそれに該当し，北側の4か所は住居が最大に拡張された時期に存続し，掘り上がり平面図によく観察される。中央穴の南・西部分には炭・砂・焼土・製塩土器細片が長円形にひろがり，中央穴の埋積土も炭片の混入が目立つ。6層は暗灰黄褐色土層で，焼土・炭・黄色土からなるブロック土層で，貼床面を形成している。さらに4・5層も次の段階の貼床面を形成していることが観察される。この段階までは平面形の踏襲が行われているが，最終段階には推定径530cmに拡張されている。土層断面の観察によると，床面までの深さは，当初約38cmを測るが，最終的には約10cmを測り，徐々に床面のレベルが高められたことがわかる。

出土遺物は，高杯・鉢・壺・製塩土器細片など土器片が多いが，最下層すなわち住居の古い時期に比定されるのは高杯3293，小型甕3292の2点である。いずれも百・後・Ⅱに比定され，住居の上限を示しているとともに，極めて近い位置に存在する水田遺構は，その近接さゆえ，この住居との共存性に乏しいのではないかと推察される。上層出土遺物は高杯3291や鉄器101があるが，いずれも最終時期に近い時期に属し，百・後・Ⅱの新相あるいは百・後・Ⅲの古相に比定されるが，いずれの居住時期にも中央穴の周辺で，脚部を含む製塩土器細片が出土しており，興味深い。

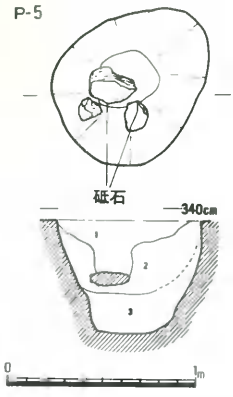
竪穴式住居―39（第346～350図）

E-21の北隅で検出された竪穴式住居であるが，残存状態は極めて悪く床面まで3～5cmを

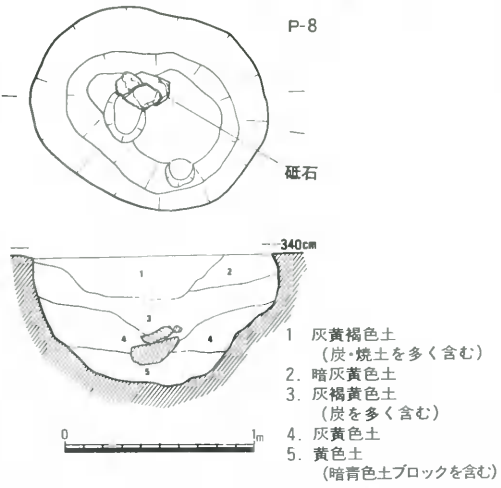


第346図　竪穴式住居-39（1/80）・出土遺物（1）

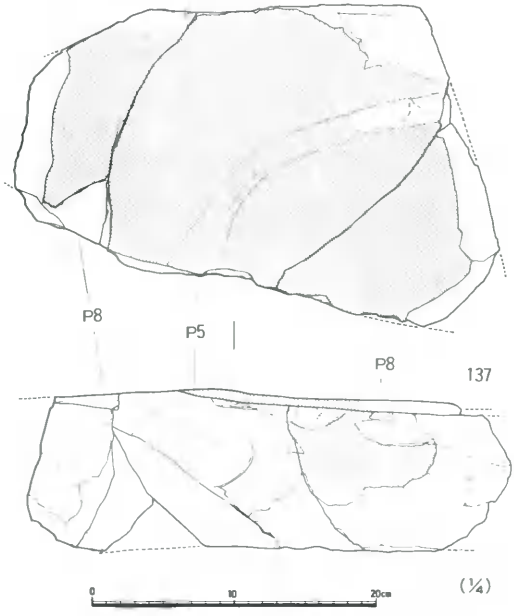
測る覆土がわずかに遺存していた。長径（南北）512cm，短径（東西）496cmを測るややいびつな円形を呈しており，壁体溝はみられない。柱はP-1～P-4まで径40～50cm前後，深さ65cmのやや小規模な4本の柱とP-5・8の大きな掘方をもつ2本の柱とあわせ，計6本柱を構成する。中央穴（P-7）は，P-1～P-4を結ぶ対角線の中心よりやや北側に偏っており，近接して浅いピットもみられ，中央穴の掘り替えに相前後して使用されたと考えられ，いずれも炭を多く含んでいる。P-1～P-4までの柱を結ぶ線は正確な四辺形を描かないが埋積土や，埋積土中に含まれる高杯3295などの接合関係から，同時に存在したことは明らかである。P-5・P-8はこれらの4本の柱穴に比べるとひとまわり大きく，P-5はやや小さいながらも掘り下げの深さはほぼ同じである。第347図に示すように柱の礎板としては，割られた砥石137が，P-5に2個，P-8に1個使用されている。また，P-5にはさらにもう1個の極部使用の扁平な石138も出土している。この2本の柱は棟持柱と考えられ，後世の掘立柱建物，とりわけ神社



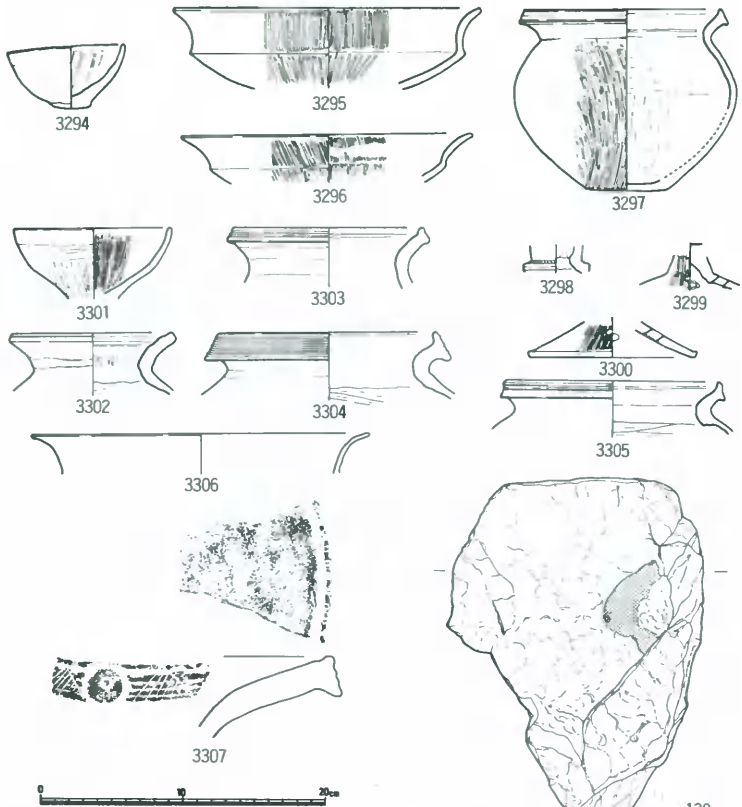
第347図　竪穴式住居 39 P 5（1/30）



第348図　竪穴式住居-39 P-8（1/30）



第349図　竪穴式住居-39 P-5・8 出土遺物（1）



(¼)

第350図　竪穴式住居 39出土遺物（2）

建築や家形埴輪などとの関連に注意を払っておきたい。おそらく，屋根には立派な大棟をもっていたことが推考され，通常の4本柱あるいは6本柱上屋構造とは趣を異にした建築構造が考えられる。管見に及ぶところ，類例はない。出土遺物には碧玉製の短い管玉42やガラス小玉43・44や鉄器102・103のほかに，鉢，高杯・甕などの土器が出土している。極めて浅い覆土しか残存していなかったために，大半は，柱穴内から出土したもので，百・後・Ⅲに比定される一群の土器である。（岡田）

（2）建　　物

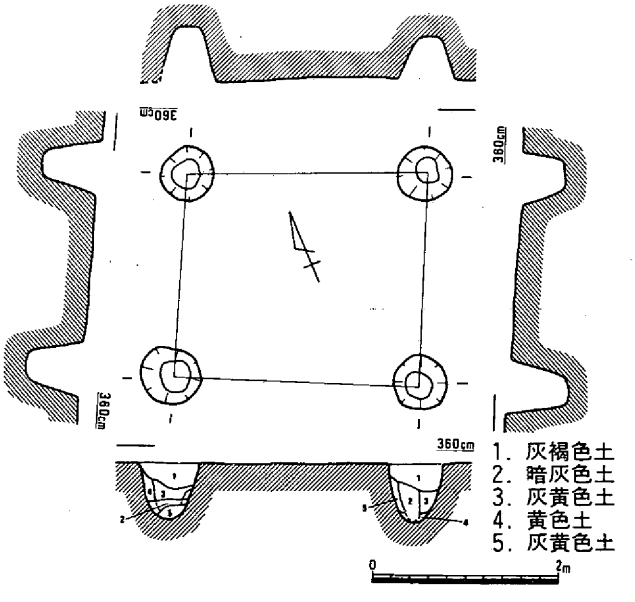
建　物－3（第351図）

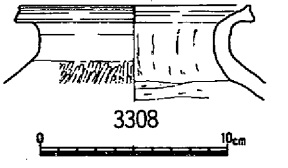
E-18杭の地点に竪穴式住居―30の住居外周溝に接して検出された建物である。検出された柱穴は，4本より成り，そのいずれもが径60cmを前後するものである。その柱列延長線上にさらに別の柱穴の確認はなされなかった。そのことにより当初これは，竪穴式住居を構成する柱かと思われたが，柱穴底の海抜高が同じ検出面で検出した竪穴式住居―30のものに類似するにもかかわらず，また，他にも中央穴・壁体溝等の竪穴式住居関連遺構の検出もまったくみられなかったこと等から桁行1間，梁間1間の掘立柱建物と断定した。建物の規模は，桁行260cm，梁間230cmを測る。建物の長軸方向は，N 65°W である。時期は，柱穴埋土内出土の壺の存在により百・後・Ⅱ併行期に比定され，竪穴式住居―30に近接するものと考えられる。しかし，両者には，直接切り合い関係は認められなかったものの，本来の生活面の高さと住居の上部構造等を考え合わせれば，当然上部構造において切り合い関係が予想され，共存しないものと推考される。

建　物－4（第352図，図版6-1）

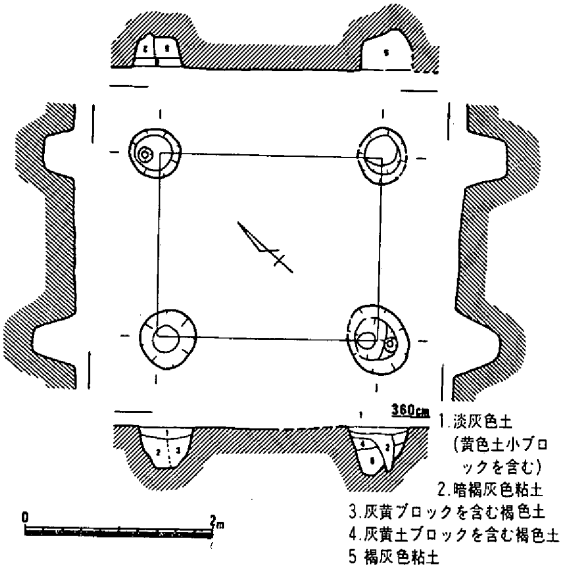
竪穴式住居―35の住居外周構と一部切り合って検出された建物である。ところが，この建物は，他の遺構同様に上部がかなり削平されていたため，本来掘立柱建物であったものか，あるいは竪穴式住居であったものかの判断に困難を極めた。しかし，一応ここでは，壁体溝・中央穴等の竪穴式住居関連遺構の存在を認めえなかったことにより掘立柱建物とした。

建物は，4本の柱穴により成り，検出面での柱穴の口径は最大で70×80cmを測り，他の3本はいずれも50～60cmの口径を測った。柱間は，桁行1間，梁間1間で，桁行240cm，梁間200cmを測った。建物の主軸は，N50°Wである。時期は遺物を伴っていないことから判然としないが





第351図　建 物 - 3 (1/80)・出 土 遺 物



第352図　建　物－4（1/80）

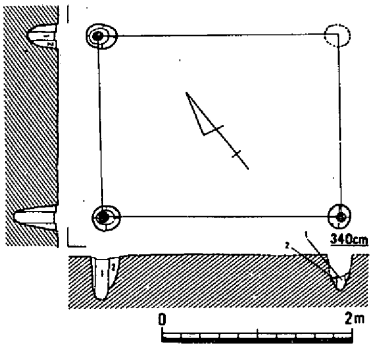
他の遺構との関連から百・後・Ⅱと考える。

建　物－5（第353図，図版6-1）

E-18東部分で検出された建物である。東半分を弥生時代後期末の溝の開鑿により切られているものの桁行1間，梁間1間の掘立柱建物が想定できた。その規模は，桁行250cm，梁間190cmである。前二者の建物と比較した場合梁間が狭い。さらに柱穴の規模も口径30cm前後を測るものでかなり小さい。柱穴底の海抜は，290cmで柱穴検出面からの深さは30～50cmを測る。建物の主軸方向は，N40°Wである。時期は，出土遺物がないことから詳細は不明であるが，建物自体百・後・Ⅳの溝に切られ，さらに建物の検出面が百・後・Ⅲ掘り下げ後にあったことからすれば，百・後・Ⅱの可能性が大きい。

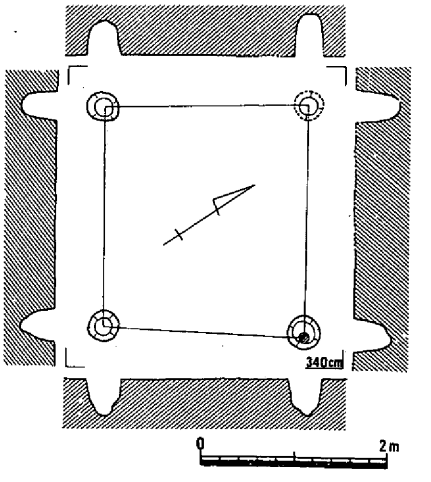
建　物－6（第354図，図版6-1）

建物－3の西辺に接するかのように検出された桁行1間，梁間1間の掘立柱建物である。規模は，桁行250cm，梁間220cmを測る。建物の主軸は，N55°Wである。柱穴は，口径35cmで，底の海抜は290cmを測る。時期は，土器の出土をみなかったことにより判然としない。しかし



1．淡灰色土
2．淡黄灰色土

第353図　建　物-5（1/80）



第354図　建　物-6（1/80）

建物の検出面からすれば，百・後・Ⅱ併行期と考えるのが妥当なところであろう。（島崎）

建　物－7（第355図）

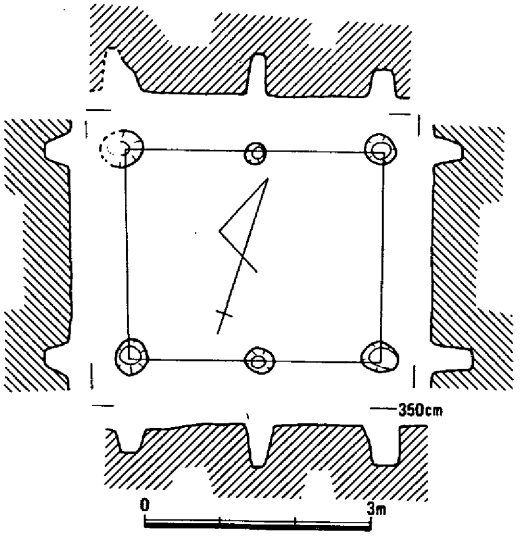
E-20の北よりで検出された掘立柱建物で，棟方向はN73°Eを示し，桁行2間×梁間1間の柱構成をもつ。梁間の柱間は心々で約275cm，桁行は160～170cmを測る。柱掘方はほぼ円形を呈し，隅柱は径40～50cmを測る大きなもので，桁行の束柱は径25・40cmと小さい。他の掘立柱建物に比べると柱どおりも揃っており，小規模ながらも整った平面形を示している。柱掘方埋土内からの出土遺物は土器細片のみで，明瞭に時期を示す良好な破片はみられないが，溝－46・井戸－15に各々東・西隅柱を切られており，おおむね百・後・Ⅰから百・後・Ⅱにかけて存続した建物であることが推察される。

建　物－8（第356図）

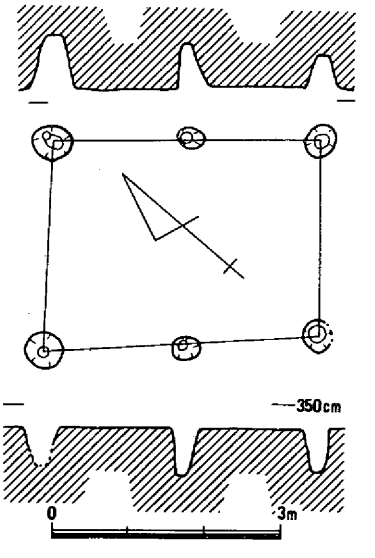
E-20・E-21にまたがる北辺で検出された掘立柱建物で，棟方向はN 52°Wを示し，桁行2間×梁間1間の柱構成をもつ。梁間の柱間心々距離は東側が260cm，西側が約235cmを測り，桁行心々距離は180～185cmを測る。柱掘方はほぼ円形を呈し，建物－7と同様，隅柱が各々大きく，桁行束柱が小規模となっており，前者は径40～50cm，後者は径約35cmを測る。平面形はややいびつであるが桁行の柱どおりはよく揃っており，掘立柱建物の可能性は極めて高いといえる。柱穴からの出土遺物は土器細片のみであるが，井戸－18などの関係から時期的には，おおむね百・後・Ⅰないしは百・後・Ⅱの古相に比定される。

建　物－9（第357図）

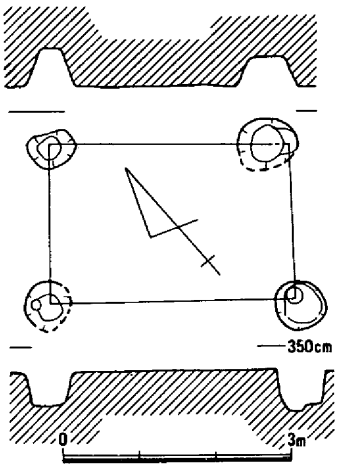
E-21の北辺ライン上で検出された掘立柱建物で，桁行1間×梁間1間の4本柱の構成であ



第355図　建　物-7（1/100）



第356図　建　物-8（1/100）

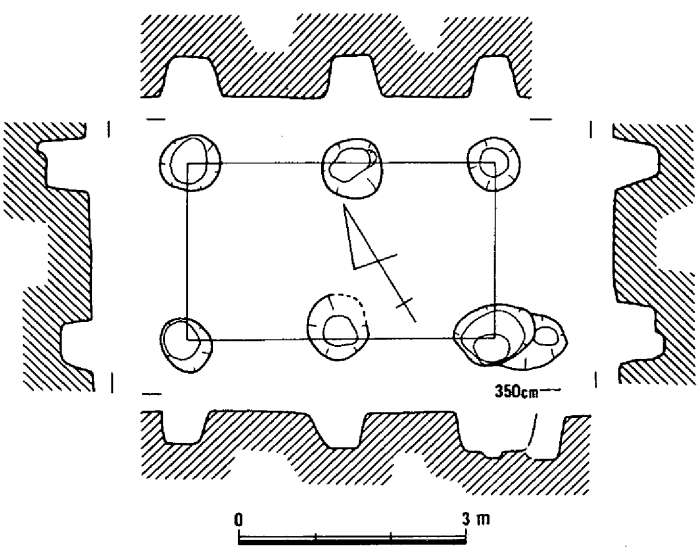


第357図　建　物-9（1/100）

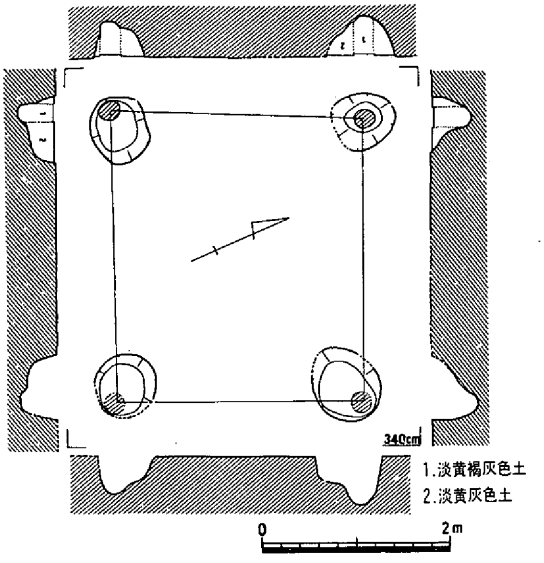
るが，通常の竪穴式住居の柱配置とは異り，棟が長目である。棟方向はN50°Wを示し，梁間心々距離は約210cm，桁行心々距離は300～330cmを測り，平面形はややいびつである。柱掘方はほぼ円形を呈し，径約60～80cmを測る大きなもので，残存する柱痕跡から，柱は径10～15cmの用材を用いられたことが推定される。時期的には，竪穴式住居—39との関係等から，百・後・Ⅰから百・後・Ⅱに比定される。

建　物—10（第358図）

E-21の西辺より，竪穴式住居—39の下位で重複して検出された桁行2間×梁間1間の柱構成をもつ掘立柱建物で，棟方向はN58°Wを示す。梁行の柱間は心々で260～280cm，桁行柱間心々距離は200～210cmを基本としている。柱掘方はほぼ円形を呈し，径約75～80cmを測るが，南東隅柱のように75×110cmを測る長円形を呈する掘方もみられる。柱どおりは，比較的整っており，百間川今谷遺跡で検出された百・中・Ⅱに比定される掘立柱建物に計測値が近似しており，伝統的規模・構造をもつことが推考される。やはり，柱掘方埋積土からはわずかな土器細片しか出土していないが，竪穴式住居—39等の層位関係等から，おおむね百・後・Ⅰないしは百・後・Ⅱの古い段階に比定されよう。なお柱痕跡は径約20cm前後を測るが，数回の建て替えを示す，数か所の柱痕跡が確認されている。　（岡田）



第358図　建　物－10（1/100）



第359図　建　物－11（1/80）

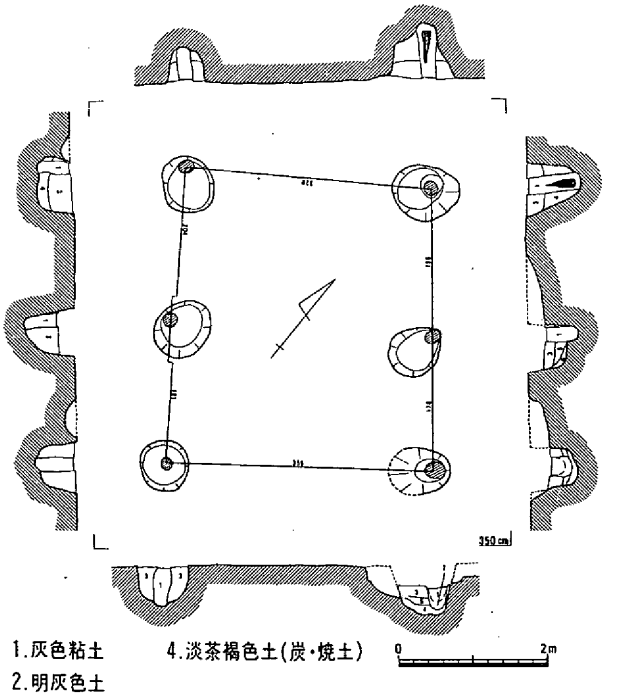
建　物－11（第359図）

建物－5と切り合って検出できた建物である。規模は，桁行1間，梁間1間で，桁行300cm，梁間260cmを測る。建物の主軸は，N66°Wである。柱穴は，口径約70cmで，底の海抜は275cmを測る。時期は，柱穴内から散在的にではあるが百・後・Ⅱの土器の出土が認められることから百・後・Ⅱ併行期と考える。　（島崎）

建　物－12（第360図）

F-21杭の北に土壙－187と切り合い関係をもって位置する建物である。これは，桁行2間，梁間1間の掘立柱建物で，主軸はN37°Wを示す。規模は，桁行374～395cm，梁間329～355cmを測り，面積は約14.0㎡である。柱穴は，いずれも60cm×80cm位でほぼ楕円形を呈する。底の海抜は，250～280cmを測る。柱穴検出面からの深さは，50～70cmである。建物北隅の柱穴内には，柱根の遺存が認められた。その最大径は，約20cmを測る。建物の平面形は，南西部に位置する建物－14に酷似する。時期は，柱穴内に土器をまったく包含していなかったことから詳細は不明である。しかし，土壙－187に切られていることと，周辺に所存する建物－14等との関連から百・後・Ⅱの範疇に属するものと考える。

（渡辺）



第360図　建　物－12（1/100）

建　物－13（第361図）

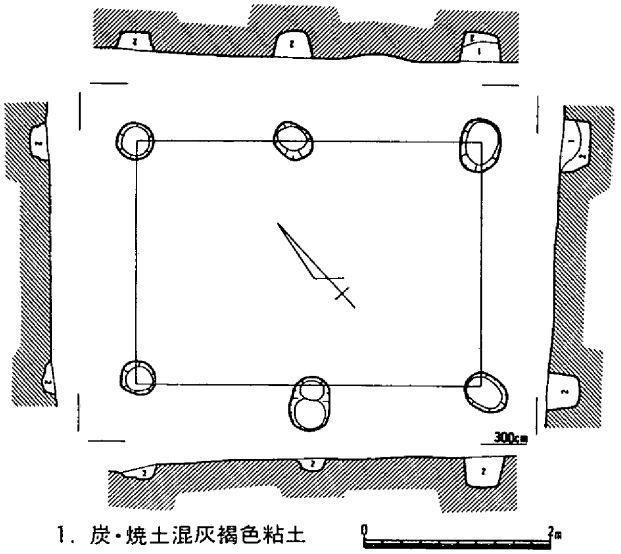
F-20の北半中央付近に位置し，建物－14の西に隣接する。東西棟で，2×1間の掘立柱建物である。梁間255cm，桁行全長364cmを測る。南辺の中央柱穴はほぼ中央に位置するのに対し，北辺では東側の柱間200cmと，西へずれて中央柱穴が掘られている。柱穴は円形か楕円形を呈し，長径は40～55cm，深さ15～35cmの規模であるが，現用水路によって削平されているため，削平前には65cm前後の深さがあったと推定される。柱穴埋土は一層であり，北東隅柱穴では上半に炭と焼土が含まれていた。柱痕跡はなかった。

建物の方位はMN47°Wを測り，建物－14とは平行しない。この2棟の建物は接近しすぎ，同時に存在したとは考えられない。

建物の時期は弥生時代後期と考えられる。

建　物－14（第362図）

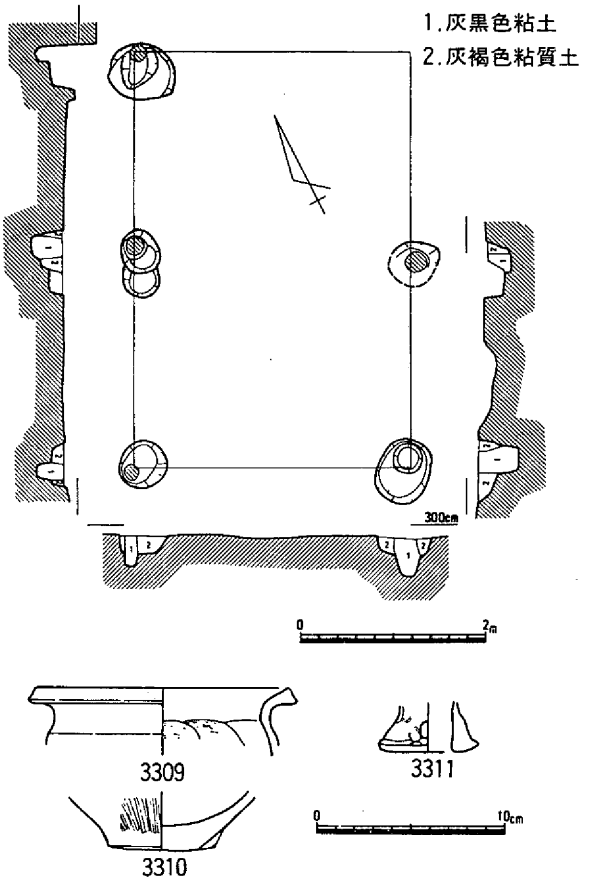
F-20の北東区に位置し，南北棟の掘立柱建物である。2×1間で，梁間295cm，桁行全長437cmを測る。桁行の東辺と西辺では中央柱穴の位置が異り，東辺では柱間217cmとほぼ中央にあるのに対し，西辺では南の柱間で235cmと北へずれて建てられていた。北西隅以外の柱穴は現用水路によって削平されていたので検出規模に差がある。北西隅の柱穴は長径73cm，深さ65cmを測り，他の柱穴は長径47～68cm，深さ30～45cmの規模である。柱穴の平面形はいずれも長円形を呈し，すべて径15～20cm程度の柱痕跡をもっていた。柱穴埋土は一層である。建物の正確な方位はMN27°Eである。建物の時期は層位関係から弥生時代後期と判断される。図示した土器の時期は百・後・Ⅱである。



第361図　建　物－13（1/80）

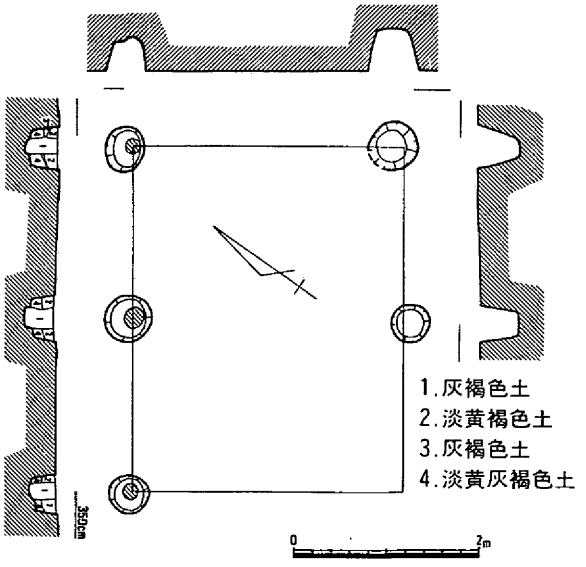
建　物－15（第363図）

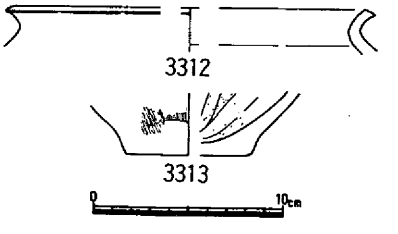
F-21の西端に位置する。2×1間の掘立柱建物と考えているが，西側柱列と東側柱列でやや様相が異るため，柱列－2の存在などからみて，西側柱列のみを柵とする考えも否定できない。一応，ここでは建物として叙述する。梁間柱間290cm，桁行柱間は180cm等間で，全長



第362図　建　物-14（1/80）・出土遺物

360cmを測る。西側柱列は長径45～50cm，深さ30cm程度のほぼ円形を呈する柱穴からなり，3個ともに柱痕が確認された。柱痕の太さは，中央柱穴が径23cm，南北両柱穴は径13cmと15cmである。東側柱列では柱穴中心を結ぶ線が西側柱列と平行せず柱穴規模も北が長径55cmを測るのに対して南は42cmと一定せず，深さは北45cm，南42cmと西側列の柱穴より深い。柱痕も検出されていない。柱穴埋土は西側列柱穴では二・三層，東側列柱穴は一層であった。建物の方位は西側柱列で測るとMN34°Eとなる。時期については，土層関係から弥生時代後期のものであることは確実だが，出土遺物が僅少のため断定しえない。図示した土器は百・後・Ⅱである。　（岡本）



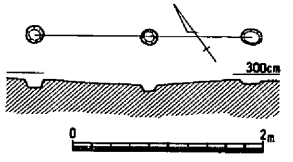


第363図　建　物－15（1/80）・出　土　遺　物

（3） 柱　　列

柱　列－1（第364図）

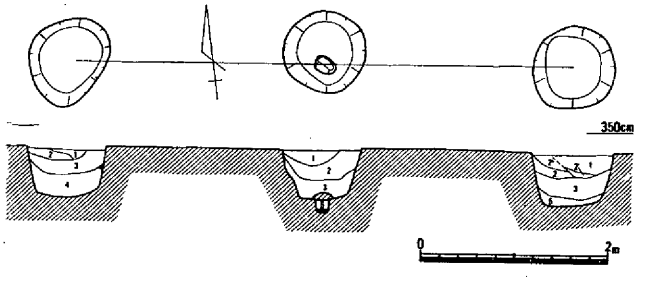
F-20の北半，建物－13と重複して存在する3個からなる柱列である。列の方向はMN54°Wで建物の方位とは異り，建物に伴うものではないと考えている。柱列の位置も建物の中軸線より北へずれている。円形か楕円形の柱穴で長径18～22cm，深さは現用水路による削平前で40cm前後と推定される。柱間は108cm等間である。この柱列の時期は弥生時代後期である。

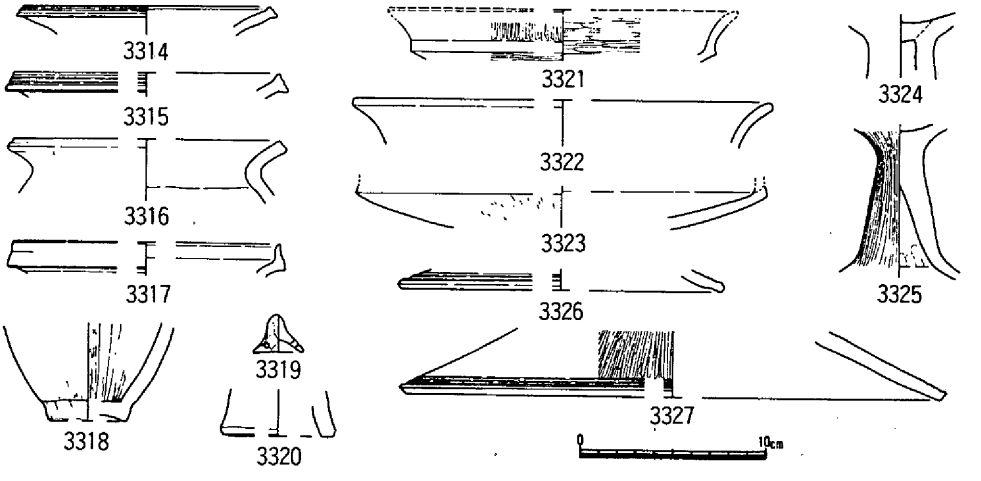


第364図　柱　列-1（1/80）

柱　列－2（第365図）

F-21の西端に所在し，3個の柱穴からなる。柱間は265cm等間を測る。柱列の方向はMN82°Wとほぼ東西位をとる。中央の柱穴で柱根の残存を確認しているが，東西両柱穴では柱痕の確認はできなかった。柱穴の規模は，東柱穴が長径94cm，深さ57cm，中央柱穴は長径89cm，深さ55cm，西柱穴で長径99cm，深さ55cmとほぼ等しい。柱穴の平面形は不整円形を呈し，穴の壁は急傾して，明瞭な底面をもつ。柱穴内埋土をそ



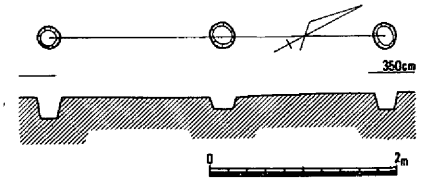


第365図　柱　列－2（1/80）・出土遺物

れぞれ三・四層に分けているが，最下層の粘性土は自然変化によるとみられ，２～５層は本来同一層であったと考えられる。中央柱穴で底面から礫を検出しているが，柱根は底面にめり込んでいることから，礎石ではない。この柱列の南側は平行して走る近代以降の用水路で破壊されているため，柱列が建物の北側柱列であった可能性もある。土層状況や出土遺物から判断して，この柱列の時期は百・後・Ⅲと考えられる。

柱　列－３（第366図）

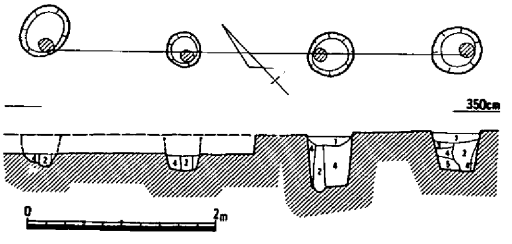
F-20の東半中央付近に位置する。３個の柱穴からなる。柱穴はほぼ円形で，径25～30cm，深さ13～23cmと小規模である。柱間は南が183cm，北が173cmを測り，中央柱穴がわずかに北へずれる。柱列の方向はＭＮ27°Ｅで，建物－14と平行している。この柱列と建物－14の東辺との距離は70cmである。柱列を北へ延長すると建物－14の南西隅柱穴に近接した径25cm柱穴に達するが，北柱穴との柱間が250cmと長くなり，柱穴底の高度差も30cm程度を測るため，この柱穴を柱列に含めるかどうかは微妙である。この柱列の時期は弥生時代後期である。



第366図　柱　列-3（1/80）

柱　列－４（第367図）

F-21の南西，竪穴式住居－33の北に接して位置する。４個の柱穴からなるが，この柱列に対応する柱列は検出されず，柵と考えられる。柱間は東から155cm・140cm・150cmを測り，全長は445cm，平均148cm等間となる。柱穴の規模は径50～60cm，深さ45～55cmである。いずれも柱痕を検出していて，径15cmを測る。柱列の方向はＭＮ46°Ｗで建物－13の棟方向とほぼ平行する。この建物の時期は弥生時代後期である。　（岡本）

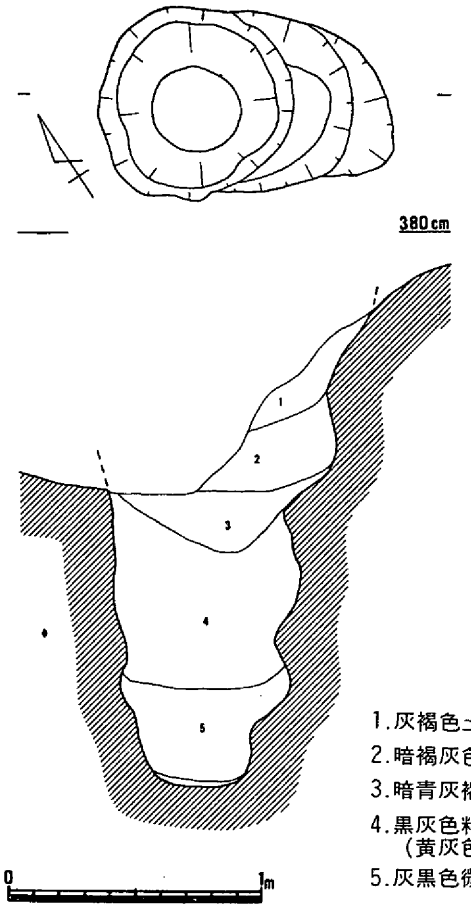


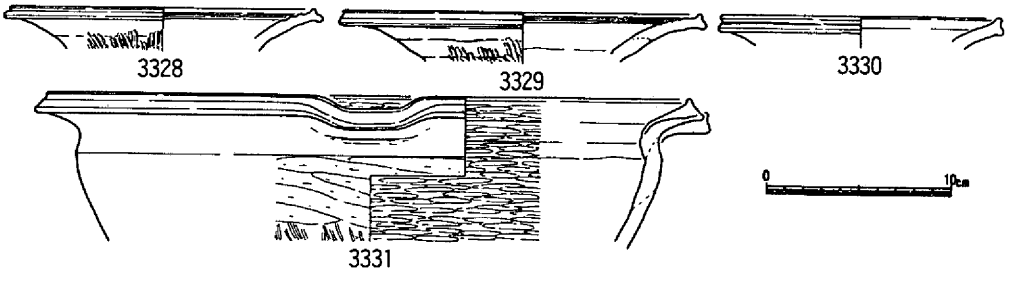
第367図　柱　列－４（1/80）

（４）井　　戸

井　戸－10（第368図）

D-17南東部に検出された井戸である。井戸の上半部の大部分は，既に弥生時代後期末の水田用水路（溝－42）の開鑿によりその３分の２以上がとばされていたが，下半部はよく遺存し





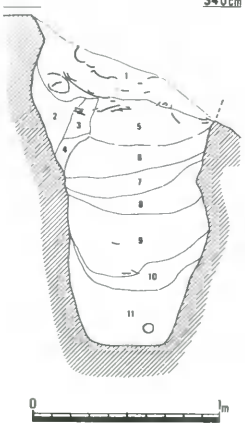
第368図　井　戸－10 (1/30)・出 土 遺 物

ていた。遺存部の規模は，深さ 200cm，胴部径 65cm，底径 30cm を測り，推定口径は約 150cmである。底の海抜は，160cm を測り，調査時においても湧水がみられた。埋積土は，およそ五層より成る。5 層の灰黒色微砂質粘土層を除く上層の埋積状況は，井戸の廃絶がすべて自然埋没によるものでなく，むしろ 5 層目まで自然埋没が進行した後に，何らかの意図で廃絶が実施されたことを示唆するものと思われる。この井戸の廃絶は，出土遺物から百・後・Ⅱ併行期ごろと推測できる。さらに，周辺に存在する他の同時共存遺構との関連からこの井戸は，竪穴式住居―30に併設されていた可能性が高い。

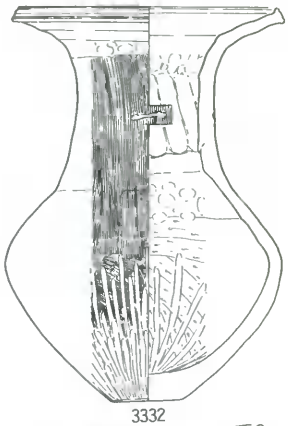
井　戸―11 (第 369～372 図，図版13)

F-18 杭の東約 4 m に位置する。これは，前述の井戸―10 と同様にすでに弥生時代後期末の水田用水路の開鑿により上半部の約 3 分の 2 がとばされていた。しかし，最上層部には，まだ夥しい量の土器が一括投棄された状態で遺存しており，下半部の残りも良好であった。井戸

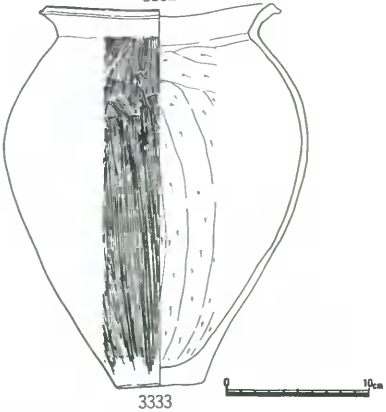
の規模は，残存する掘方からの推定口径 130cm，底径 40cmを測る。底の海抜は，井戸―10 同様に 160cmにある。井戸の埋没は，５層の明褐黄色土までは自然によるものと思われた。しかし，それより上部の埋没には，日常生活で破棄された夥しい量の土器が充てられていた。ただし，底に完形の状態で遺存していたミニチュアの甕3361については，井戸の機能時，もしくは井戸



1. 淡灰褐色土～褐灰色土(土器包含層)
2. 暗灰色粘土
3. 黄灰色粘土
4. 灰色粘土
5. 明褐黄色土
6. 上層のグライ化した層
7. 灰黄色土
8. 黒灰色粘土
9. 黒灰色粘土(炭含)
10. やや明るい黒灰色粘土
11. 暗黒褐灰色微砂質粘土(植物遺体多い)

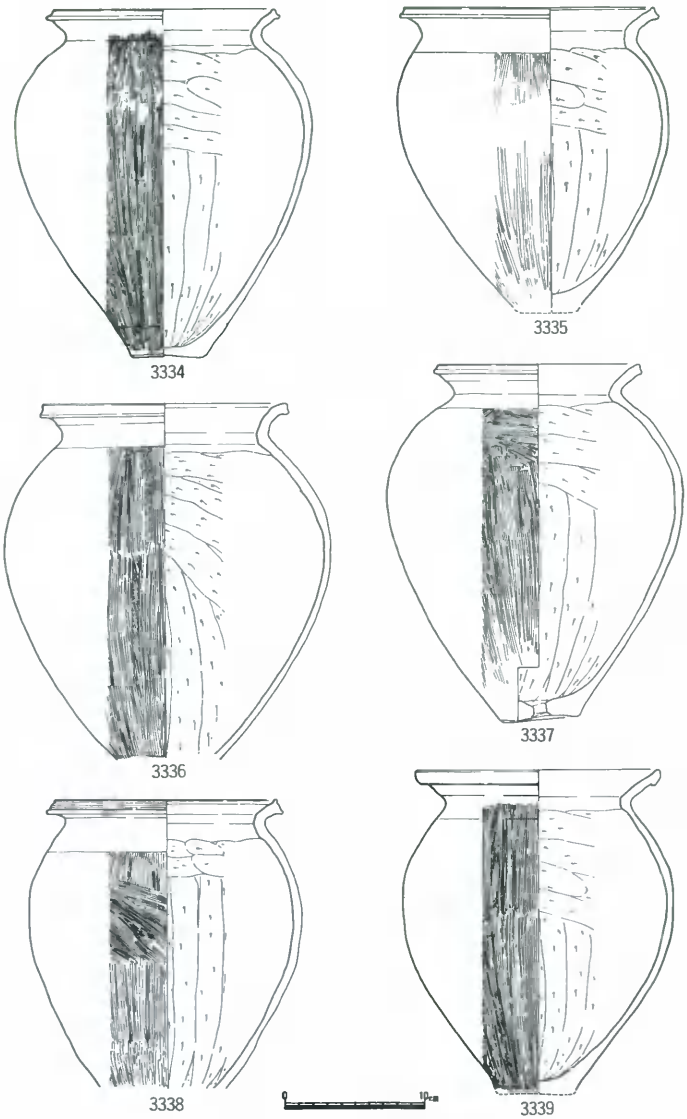


3332

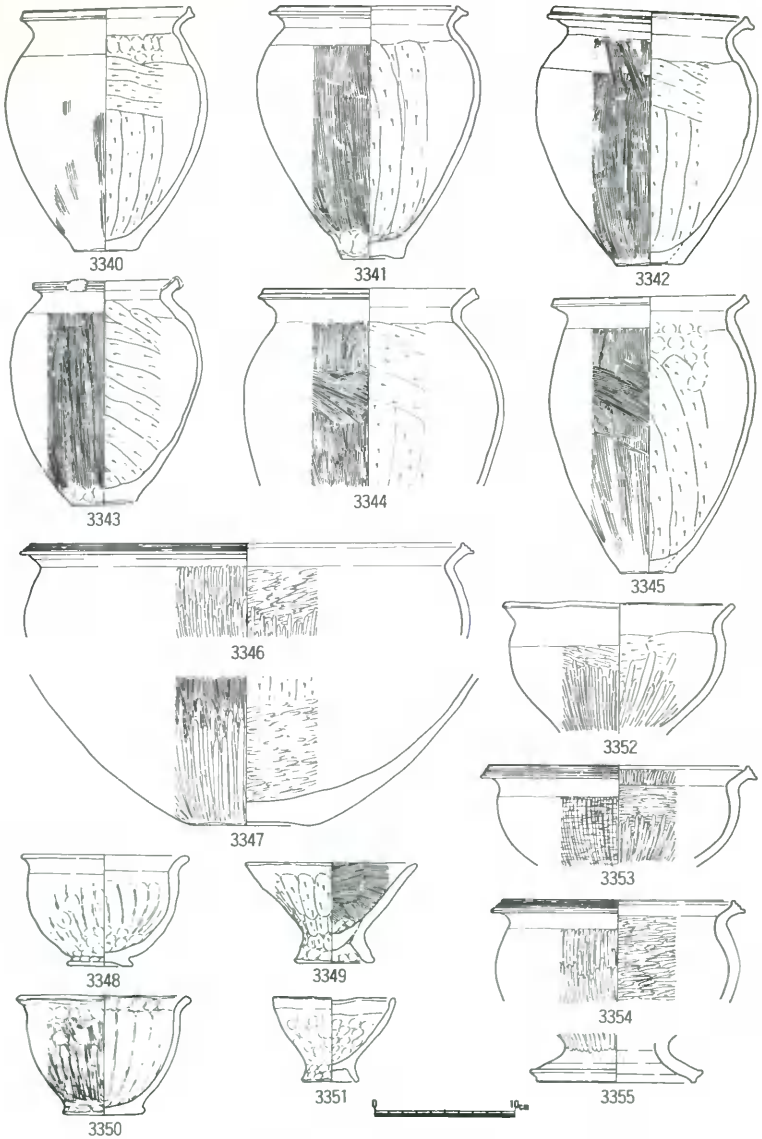


3333

第369図　井　戸-11（1/30）・出土遺物（１）



第370図　井　戸－11出土遺物（2）



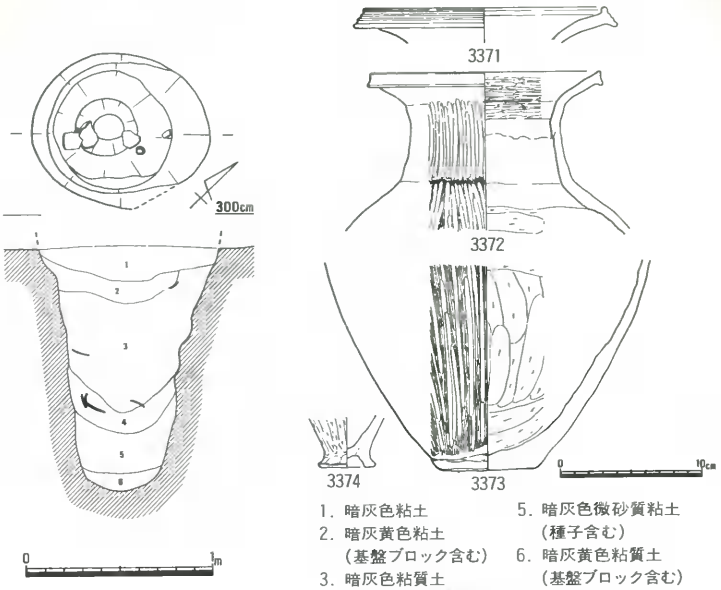
第371図　井戸－11出土遺物（3）

第372図　井戸－11出土遺物（4）

の廃棄に際しての祭祀に供せられていた可能性が強く示唆される。井戸の廃絶の時期は，百・後・Ⅱ併行期と考える。

井　戸—12（第373図）

井戸-11の南約150cmの地点に位置する。井戸の上半部のほとんどは既に現代溝により削平を受け原状を留めない。残存する形状は，平面長楕円形で，ほぼ垂直気味に底へと至る。底の海抜は，155cmを測る。埋土は，2層と6層中に基盤層のブロックを含むのみで，他は自然埋没を物語るかのような状況を示す。つまり，3層の暗灰色粘質土の直下には，炭化物の堆積が，また，4層の黒灰色微砂質粘土直下には木葉等の堆積が認められた。さらに，5層の暗灰色微砂質粘土中には多くの種子が含まれていたことがあげられる。ただここで気になることに，それら下層の堆積層がいずれも堆積の状況がレンズ状を呈していたのに対して2層の基盤層ブロックを含むところから比較的水平堆積を呈する点があげられる。これは，おそらく3層目までの自然埋没にその後人為的な井戸の廃棄が図られた痕跡を示すものと考える。井戸の意図的な

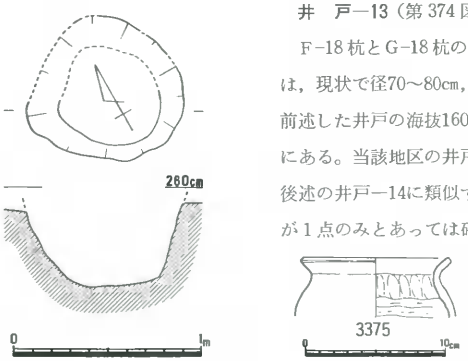


第373図　井　戸－12（1/30）・出土遺物

廃絶の時期は，遺物を伴っていないことから断定はできない。しかし，自然埋没時の土器から百・後・Ⅱを大きく降ることはなかろうと考える。近接する遺構には，竪穴式住居―29が存在する。

井　戸―13（第374図）

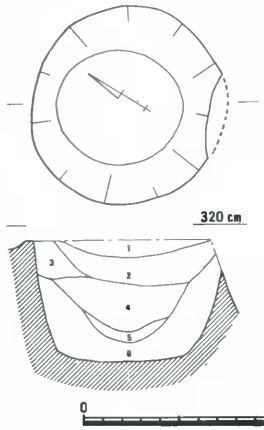
F-18杭とG-18杭の中央やや東に位置する。この遺構は，現状で径70～80cm，深さ40cmを測る。井底の海抜は，前述した井戸の海抜160cmよりはるかに高く，210cmの位置にある。当該地区の井戸の中では最も小さい部類に入り，後述の井戸―14に類似する。この井戸の時期は，出土遺物が1点のみとあっては確定できない。しかし，この井戸の検出層序等の諸事情から推察すれば，百・後・Ⅱ頃に比定して差し支えないものと思われる。　（島崎）



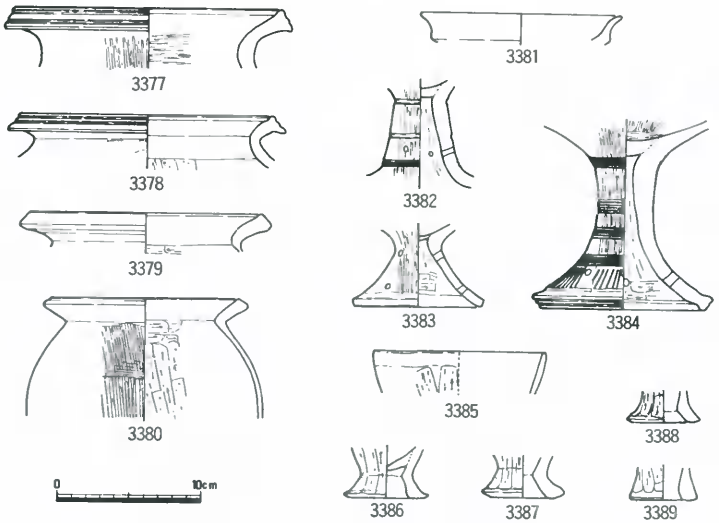
第374図　井　戸-13（1/30）・出土遺物

井　戸−14（第375図）

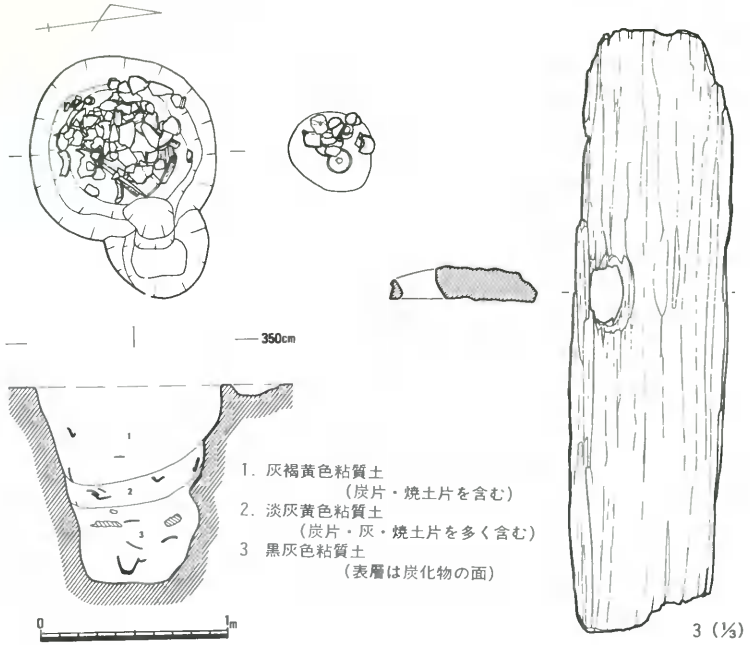
この遺構は，上位および南端部が中世に削平を受けていた。平面形は，直径約100cmの円形を呈し，深さは約65cmを測る。形態・堆積状況からみて井戸として使用されたと考えられる。出土遺物は，量的には多くなかった。図示した「線刻画土器」は，4層から出土した。また，5層には，製塩土器がまとまって検出された。出土状況からみて，製塩土器として使用されたのち一括して破棄された状態であった。出土した土器は，上位と下位でも時期差は認められない。この井戸は，出土した土器の特徴からみて百・後・Ⅱ期に埋没したものであろう。（中野）



1．暗青灰色粘土　4．黒灰色砂土
2．暗灰色粘土　5．暗青灰色粘土
3．青灰色粘土　6．暗灰色粘土



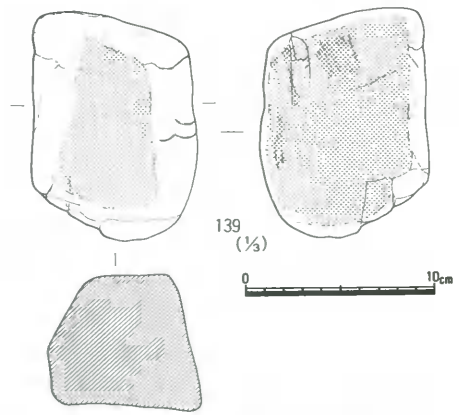
第375図　井　戸−14（1/30）・出土遺物



井　戸—15

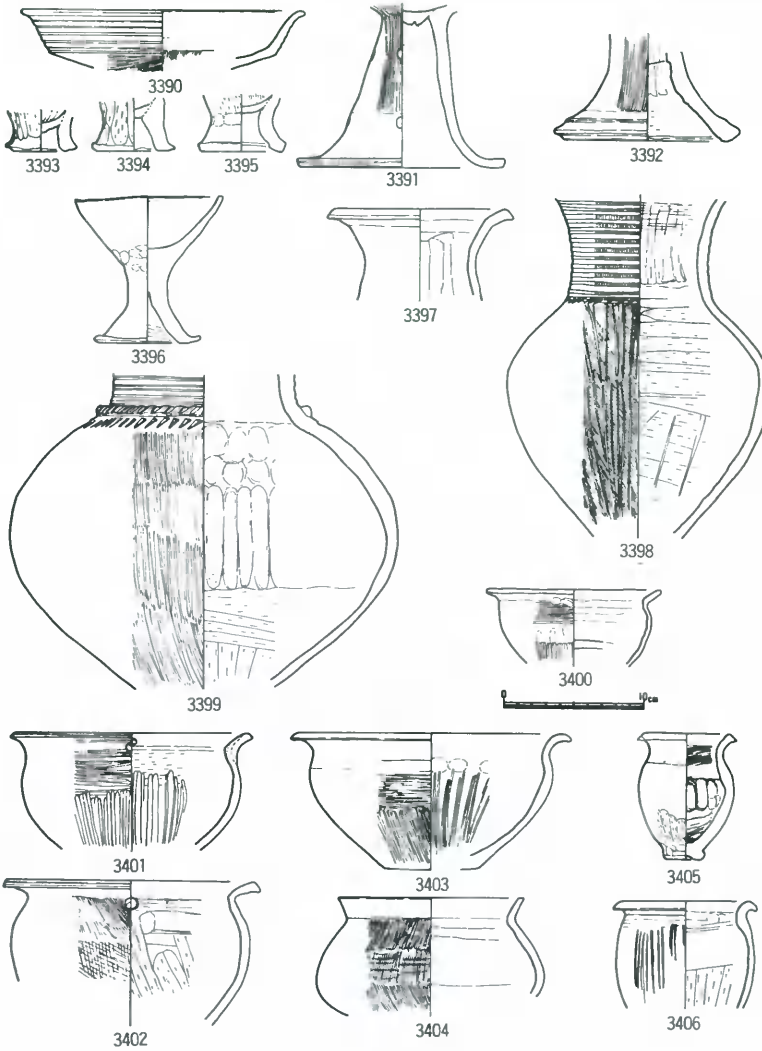
（第376～378図，図版14）

E-20の西よりで検出された径約98cm，深さ104cmを測り，平面が円形を呈する素掘りの井戸で，井底はグライ化した黄灰色粘土層に達している。井戸の周壁から中層にかけては甕片を主体とする土器片が埋没し，中層上位には，3などの木質遺体が遺存していた。2層は炭・灰・焼土細片の堆積層で，3層との境は炭化物が面をなしてい

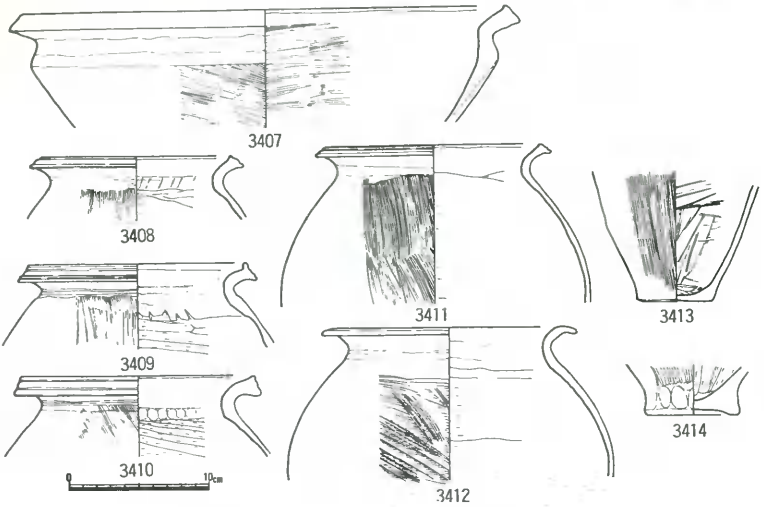


第376図　井　戸-15（1/30）・出土遺物（1）

る。この炭化物は，他の井戸でもしばしばその堆積が認められるが，藁灰のような植物繊維で，塊として棄てられたものではなく，井戸の埋没過程の一時期に飛来して埋没したような状



第377図　井　戸－15出土遺物（2）



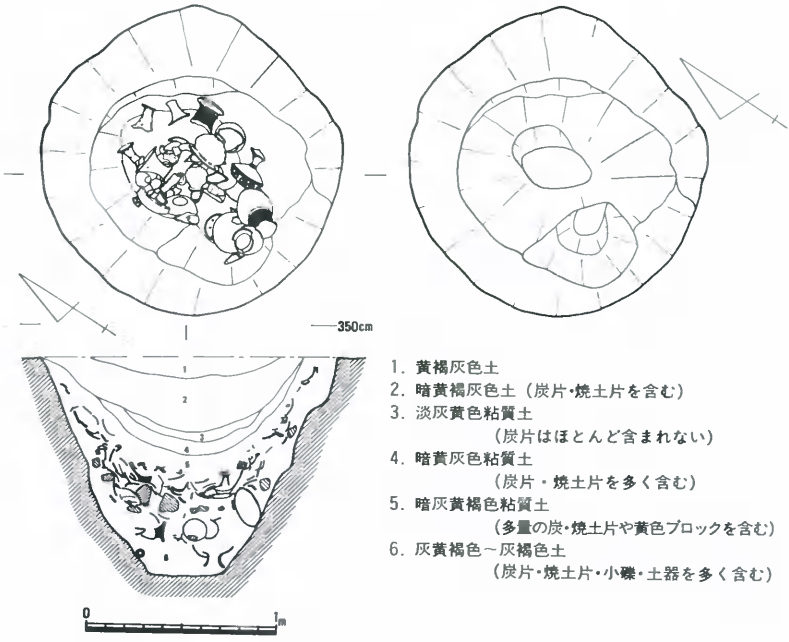
第378図　井　戸－15出土遺物（3）

況を示している。下層ではやはり，木質遺体をはじめ3397・3401・3409や拳大の角礫や円礫が出土し，139の砥石も，この層から出土している。東接する柱穴は，井戸より新しく，周壁に柱痕跡を残していた。出土遺物，特に土器の示す時期は，百・後・Ⅱの古い段階に比定され3399の壺は「島状高まり」遺構－1の土器溜りで出土している長頸壺の一群に類例がみられ，3411の甕も，後述の井戸－17出土の3632などと共通の特徴が認められる。

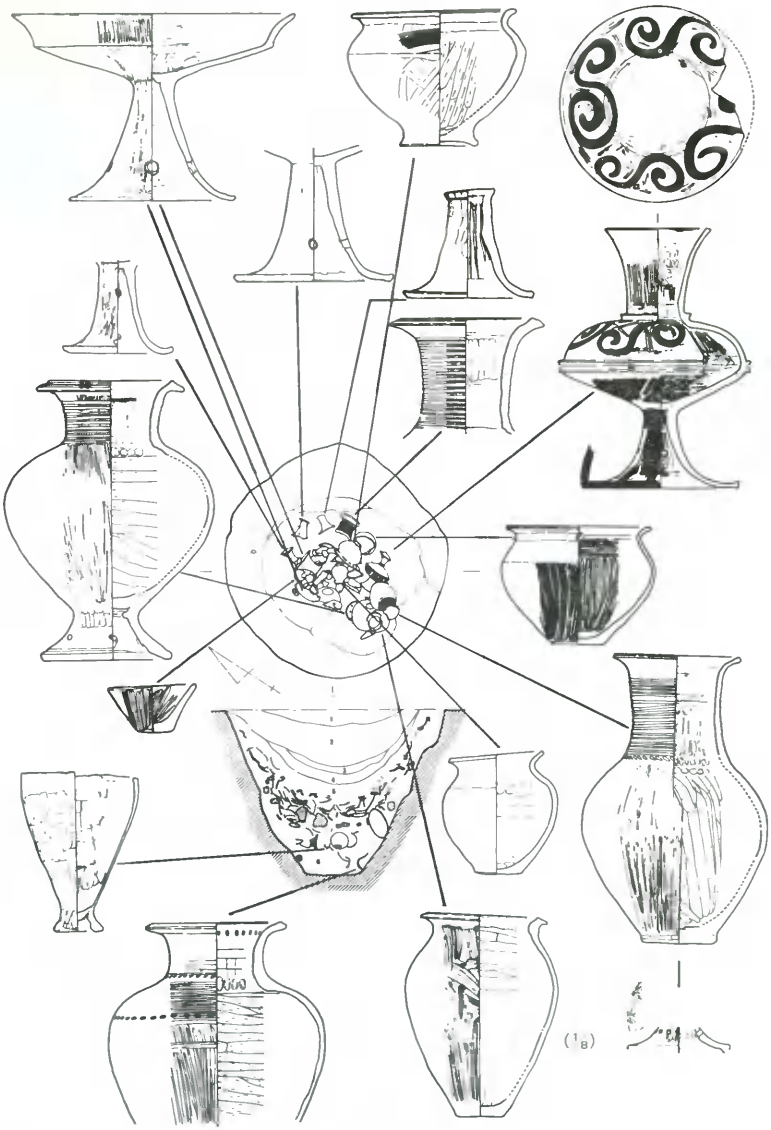
井　戸－16（第379～392図，図版15）

D-20南東隅近くで検出された，井戸と考えられる遺構で平面形はほぼ円形を示すが，北東辺は直線的でやや四辺を意識しているかのような平面形を呈する。上面径は150～160cm，深さは116cmを測り径約30数cmの平坦な底面がほぼ中央に存在している。この周辺で検出した急峻に掘りこまれた井戸と異り，擂鉢状を呈することや，浅いことなどを考えあわせると，井戸と断定する明確な根拠に乏しいが，掘りこみ下端が白灰色粘土層に達し，それが湧水層であることも考えあわせ井戸状遺構と推定している。上面から約60cm下位の5層までは，完形品を含む大きな土器片はみられないが，6層上位の周壁部分から下層にかけて，極めて多量の土器が埋積している。1～4層は自然埋積土，5・6層は多量の土器の廃棄が行われた直後あるいは，それらと共に埋められたと考えられる土層で，炭・焼土・礫を多量に含む黒灰色土層である。この土層中からは長軸2.03cmを測る炭化した桃核が出土している。この6層から

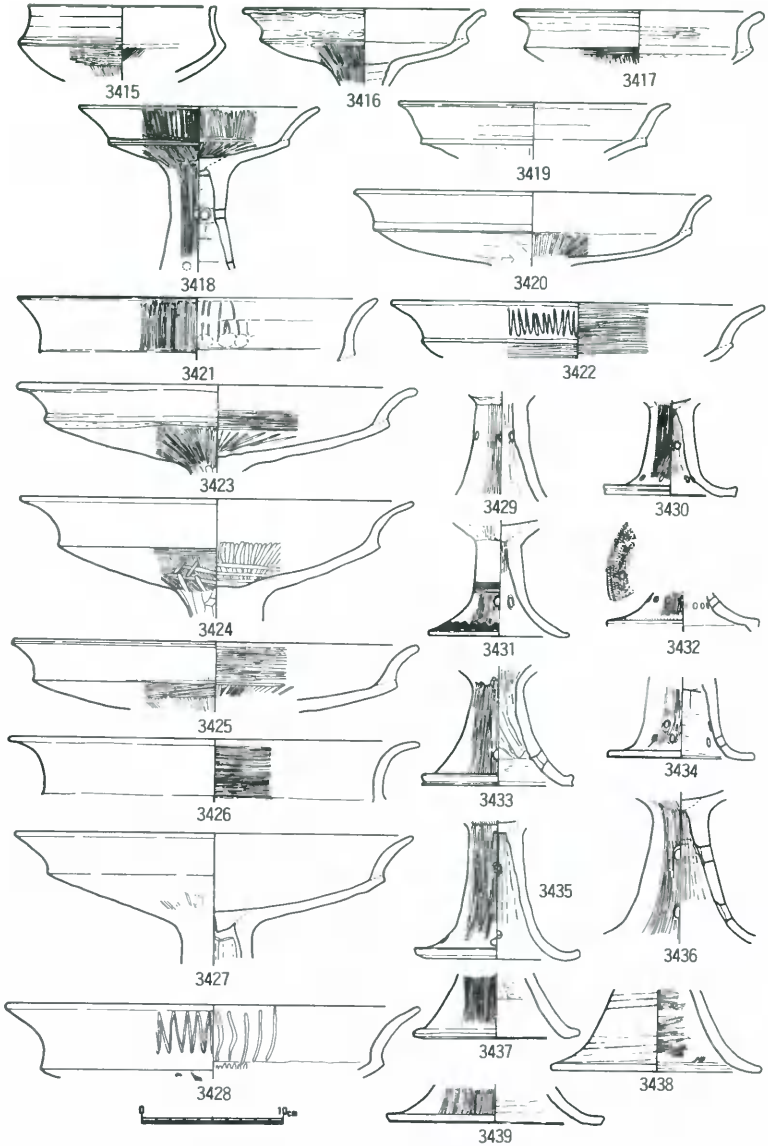
の厖大な量の土器の出土状態は第380図に掲げるとおりであるが，あたかもまとめて投げこまれたかのようにびっしりと出土し，下位では土圧による土器片の圧縮によってわずかな隙間もないほどであった。ことに，下層の一括土器は，第379・380図に示すように，高杯・蓋・鉢・壺・長頸壺・製塩土器・台付長頸壺（彩文土器）からなる完形土器の一群が出土し，器種構成と，これらの土器の祭祀的な特殊な用途を示唆している。ことに彩文土器は，極めて精緻な土器で，丹精な手法と，円熟した技術によって達成された優美な形態と焼成を示している。ことに，体部の上位に描かれた4単位のS字文は，従来，連続文として銅鐸にしばしば用いられたり，器台の口縁部を棒状浮文で飾る際の一文様でもあり，極めて，呪的かつ祭祀的な性格が表象され，土器の多くを占める煮沸用の甕の出土は，当然飲食を伴う祭祀に用いられたものと考えられ，宴の後まとめて廃棄された土器群である可能性が強い(註)。このような状況は，本来井戸として掘りこまれた深い土壙がこのような一群の多量の土器の廃棄壙として利用された可能性をも指摘できる。出土土器の復元作業過程では数多くの接合片の細部が観察され，明ら



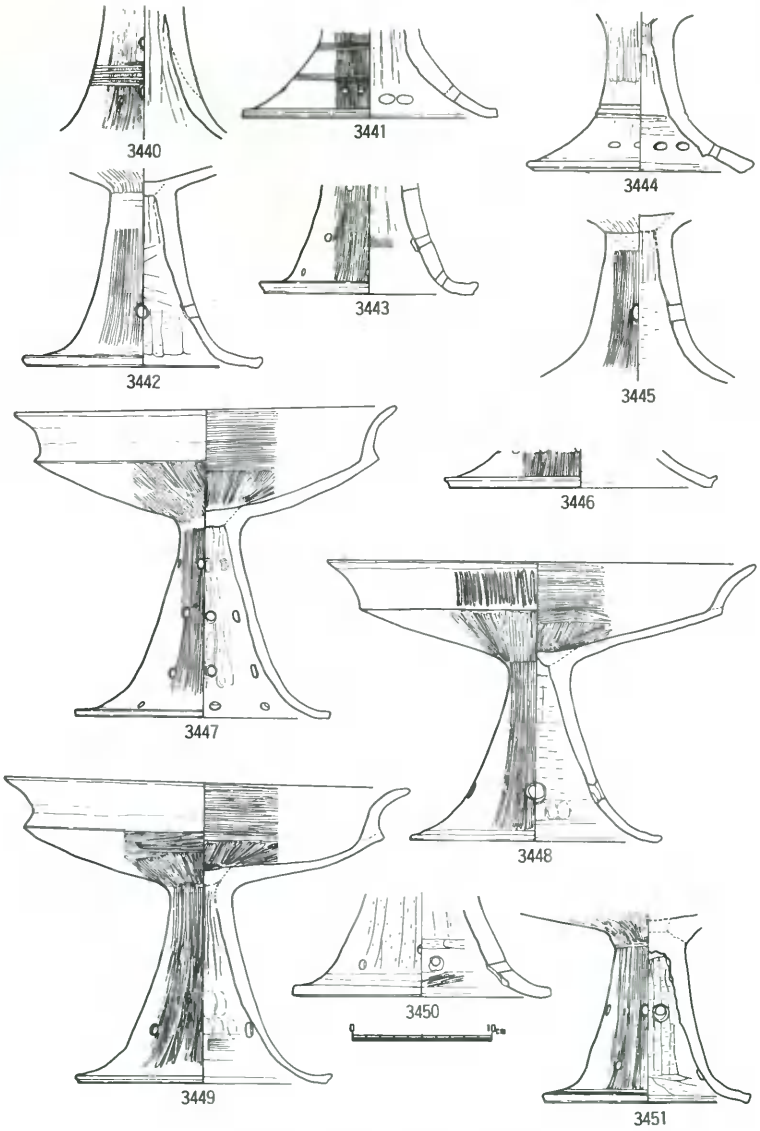
第379図　井　戸　－　16（1/30）



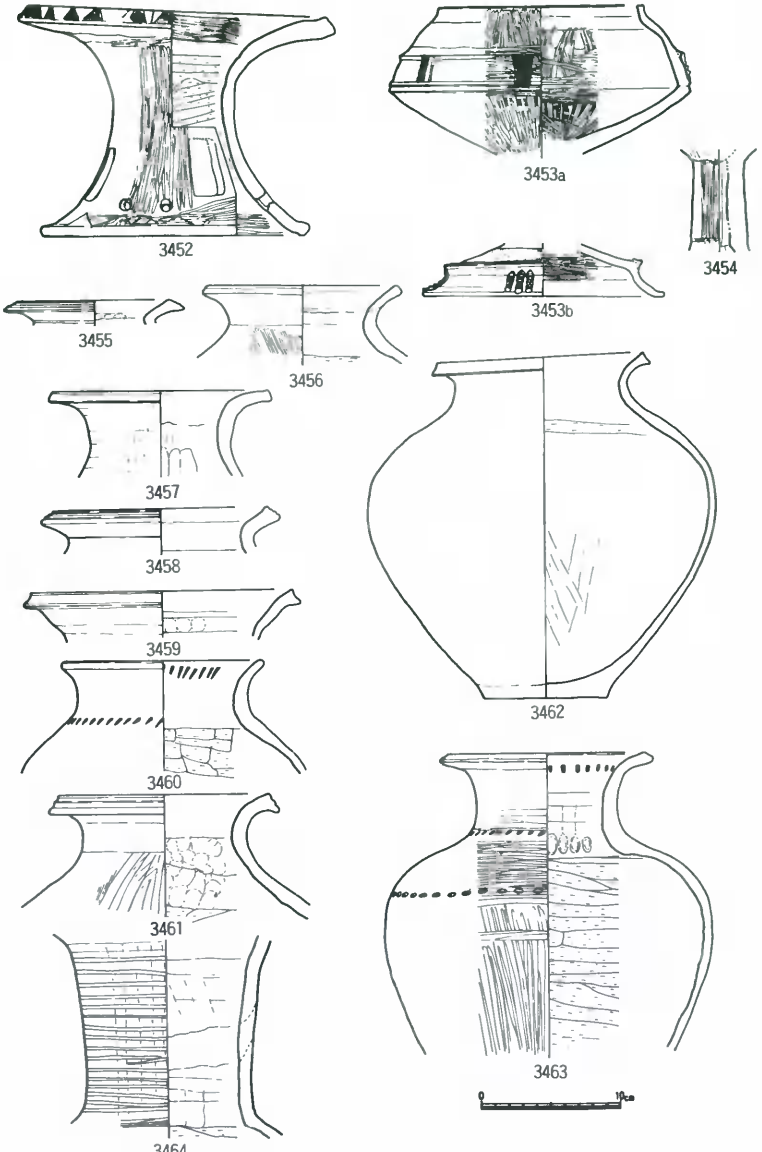
第380図　井　戸-16 出 土 遺 物 位 置 図



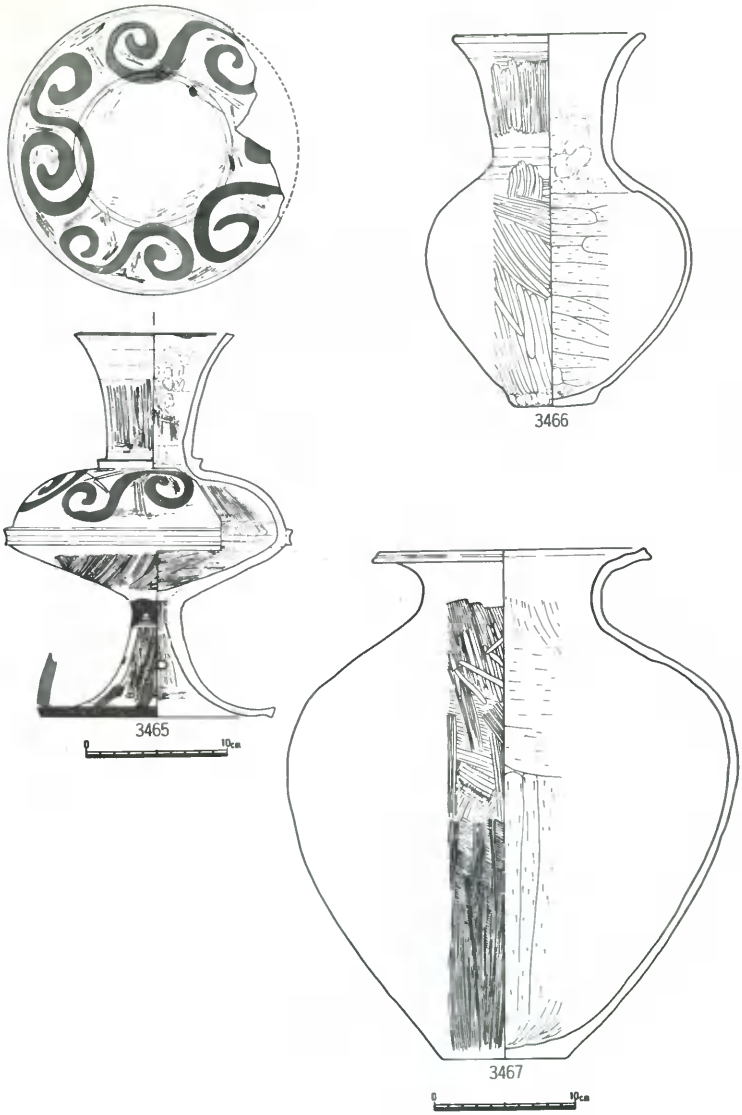
第381図　井　戸－16 出 土 遺 物（1）



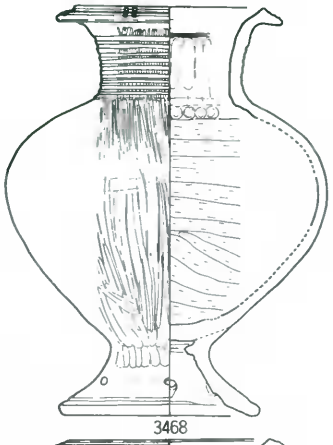
第382図　井　戸－16出土遺物（2）

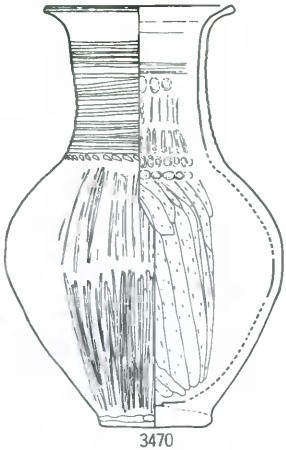


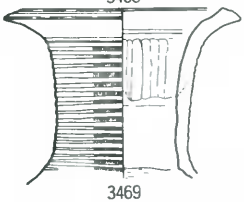
第383図　井　戸－16 出 土 遺 物（3）

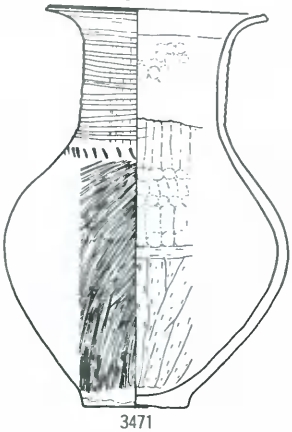


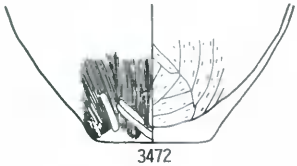
第384図　井　戸－16出土遺物（4）

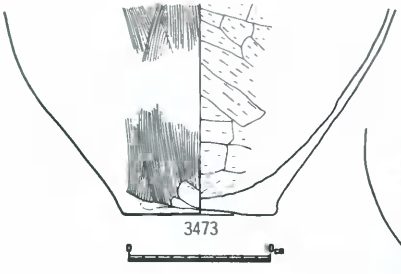

3468


3470


3469


3471

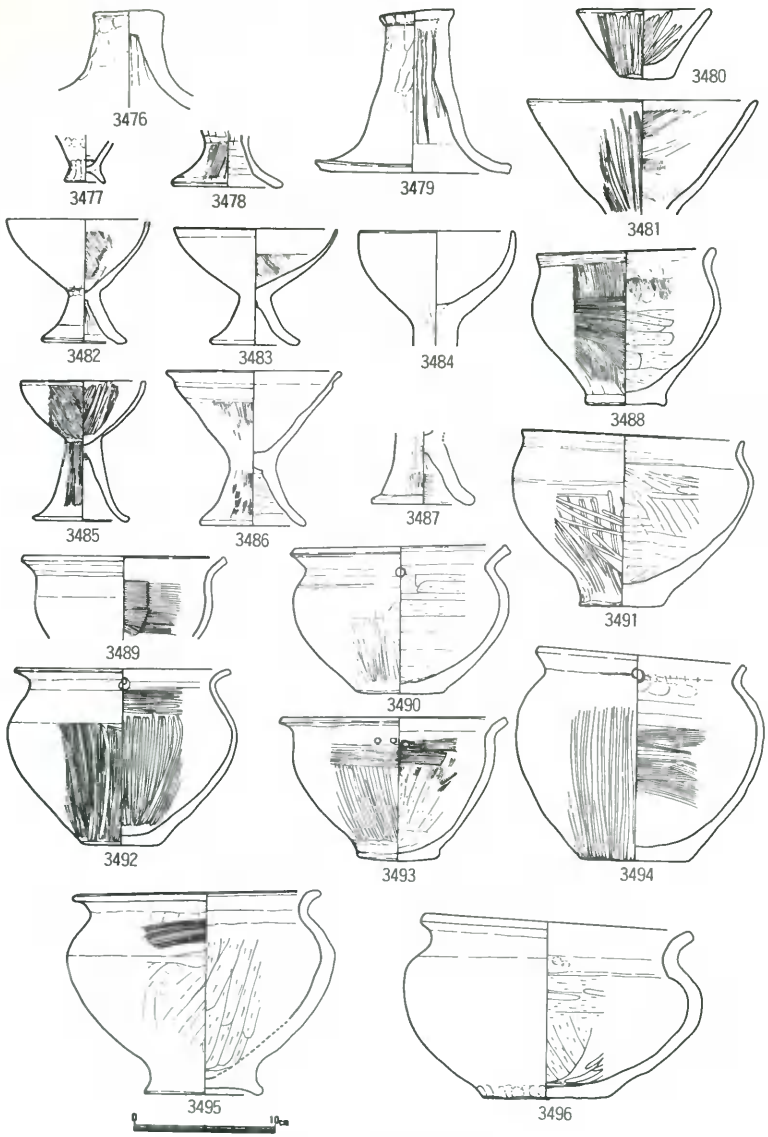

3472


3473

3474

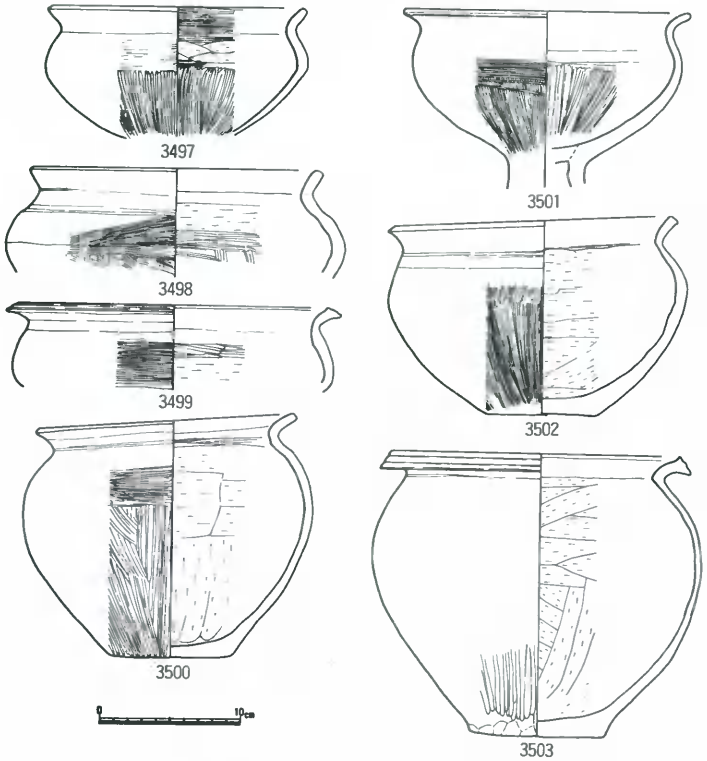
3475

第385図　井　戸－16出土遺物（5）



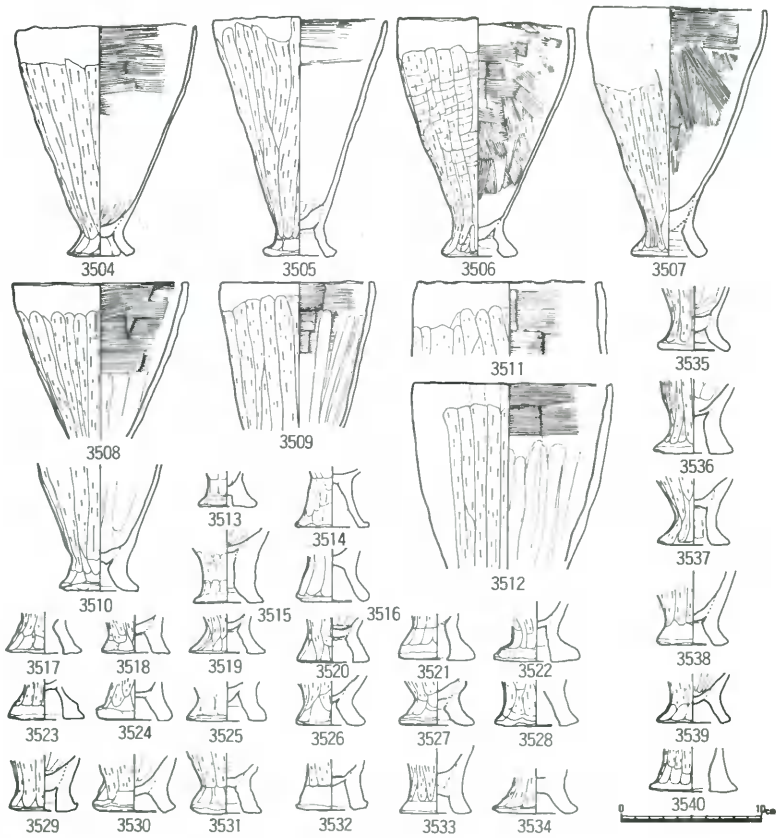
第386図　井戸－16出土遺物（６）

かに火を受けて変色したとみられる破片が火を全く受けていない鉢の一部と接合できた例もあり，土器の破砕が行われた後火を受け，それらもまた，一緒に片付けられたことを示しているものとみてよいだろう。製塩土器の一群は第388図のようにほとんど完形品に復元されたものも含むが，大半は体部，脚部片でこれらを含めると全体の土器の20数%を占める。その中でも，二次焼成を受けて，赤褐色もしくは灰赤色に変色したものの他，完形品3504～3507や3508～3512のように灰褐色を呈して，まったく一次焼成段階と思われる状態のものもある。高杯は，全体のおよそ23%を占め，形状もバラエティに富むが，井戸—17にみられた新旧の共存といえるような現象は観察されず，ほぼ単一時期の指標を示しているといえよう。ただ，脚部と杯部の破片としての明瞭な分離は，やはり人為的な破砕を想像させると共に，杯部と脚部の接合技法の欠陥を示しているともいえる。また，3447～3449などの完形の大型高杯にみられる，緩

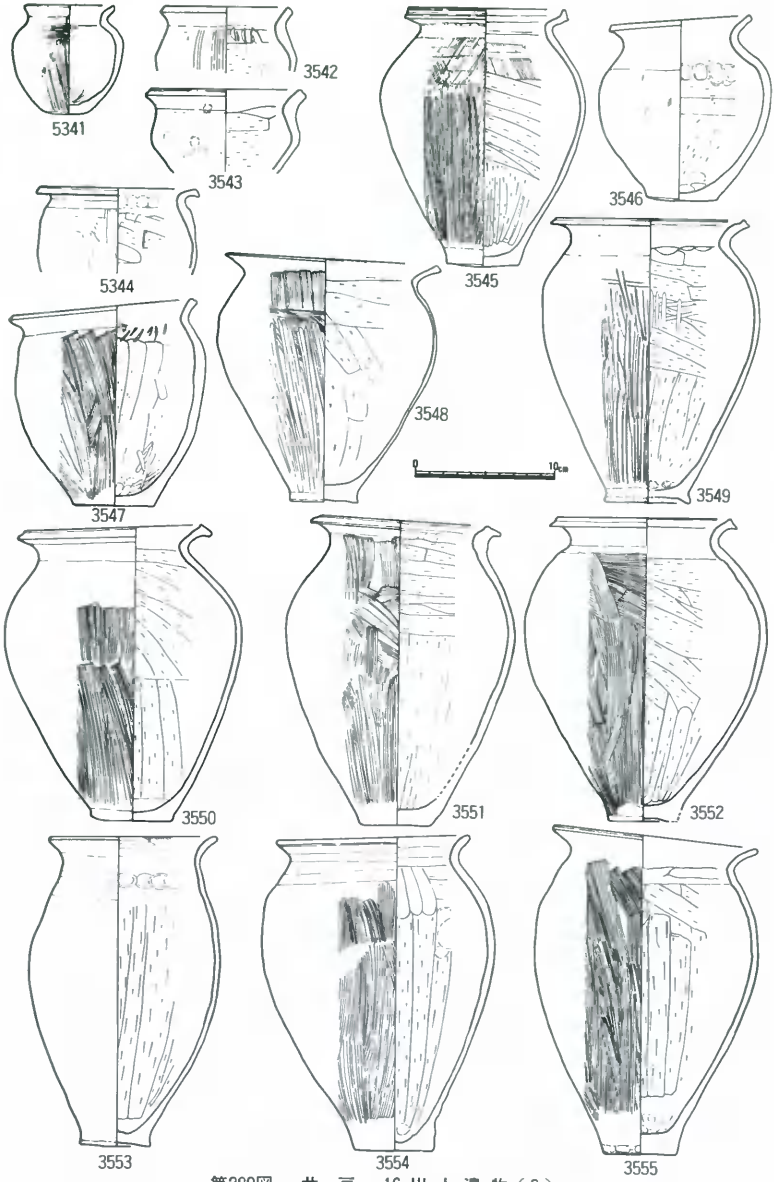


第387図　井　戸－16出土遺物（7）

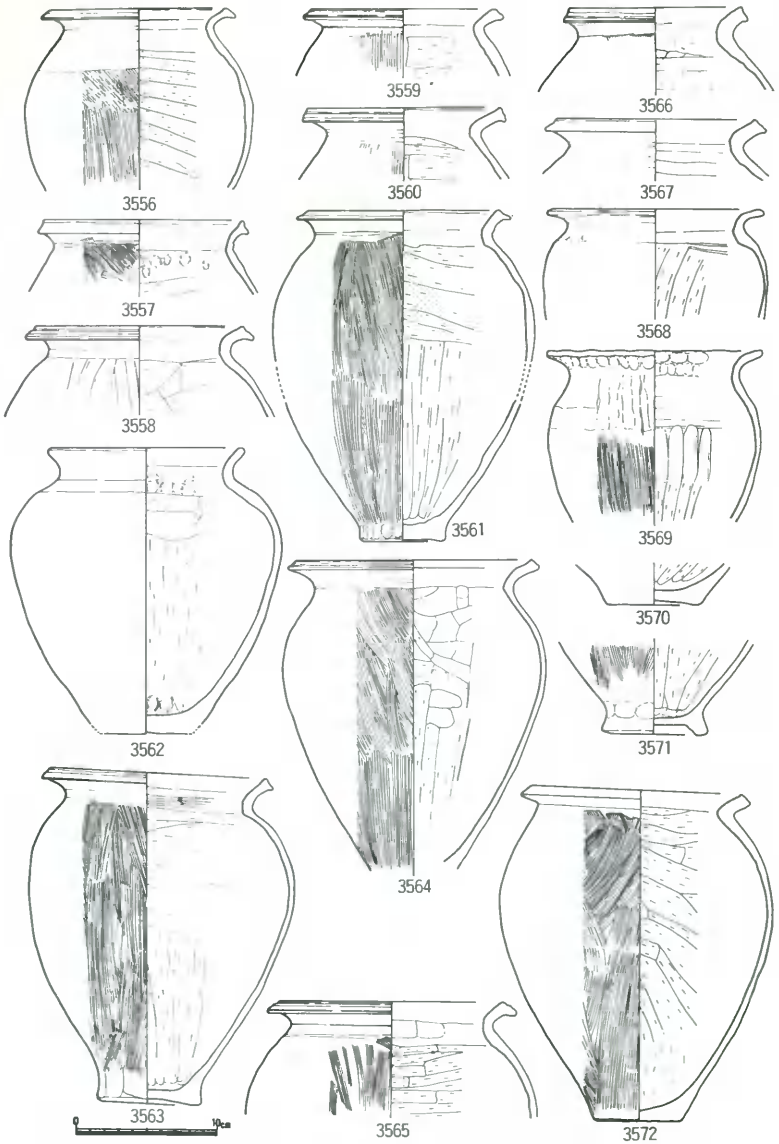
やかな弧を描いて外反する長い脚部と，円板充塡技法と丁寧なヘラミガキ調整が施された急激に外反する杯部は，この一時期の型式を，端的かつ象徴的に示しているといえよう。特殊な器種として，器台3452があるが，これは，凹線文を施されない壺3466と同一の胎土・焼成・色調を示している。また台付無頸壺3453は体部の装飾的な凸帯と3条の刻み目をもつ棒状浮文の加飾が認められる精製土器で，原形はおそらく3454のような短い筒部によって接続されていたとみてよいだろう。壺は比較的短頸のもの，甕のような口縁部をもち大きく胴が張るもの，長頸壺の3種類に分類されるが，長頸壺の中には，凹線をもつものと前述の3466のように全く見られないものもあるが，それは，むしろ特異といえよう。蓋には，高杯脚転用の3444もあるが，



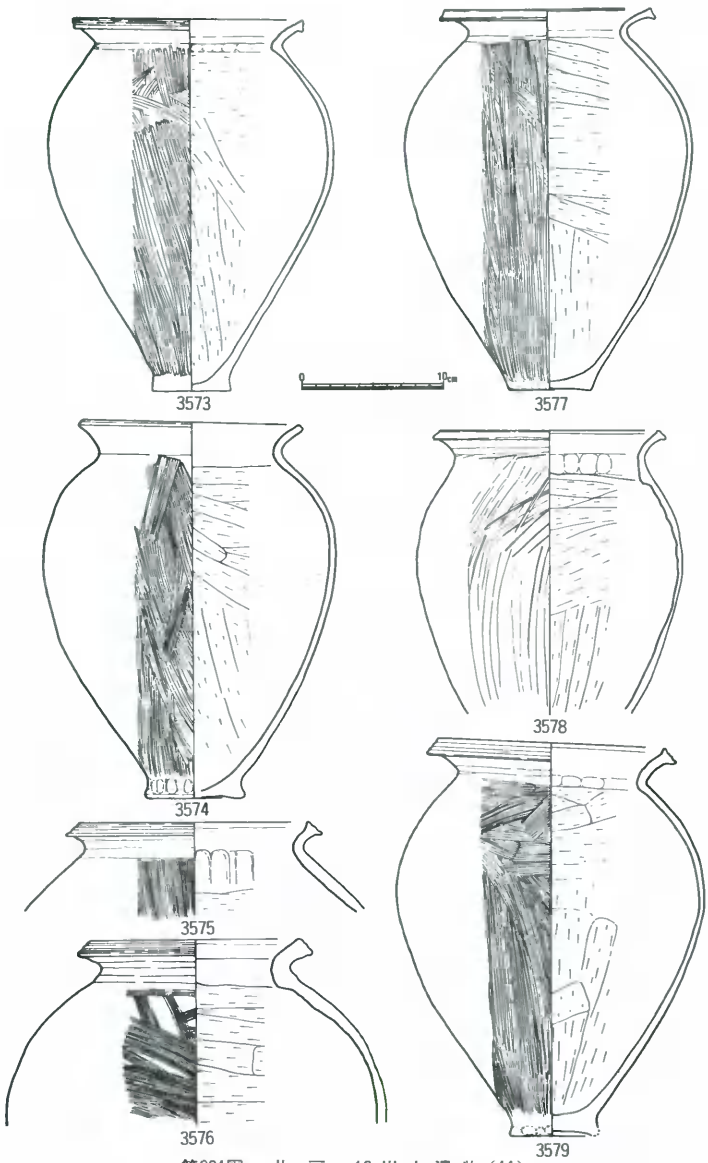
第388図　井戸－16出土遺物（8）



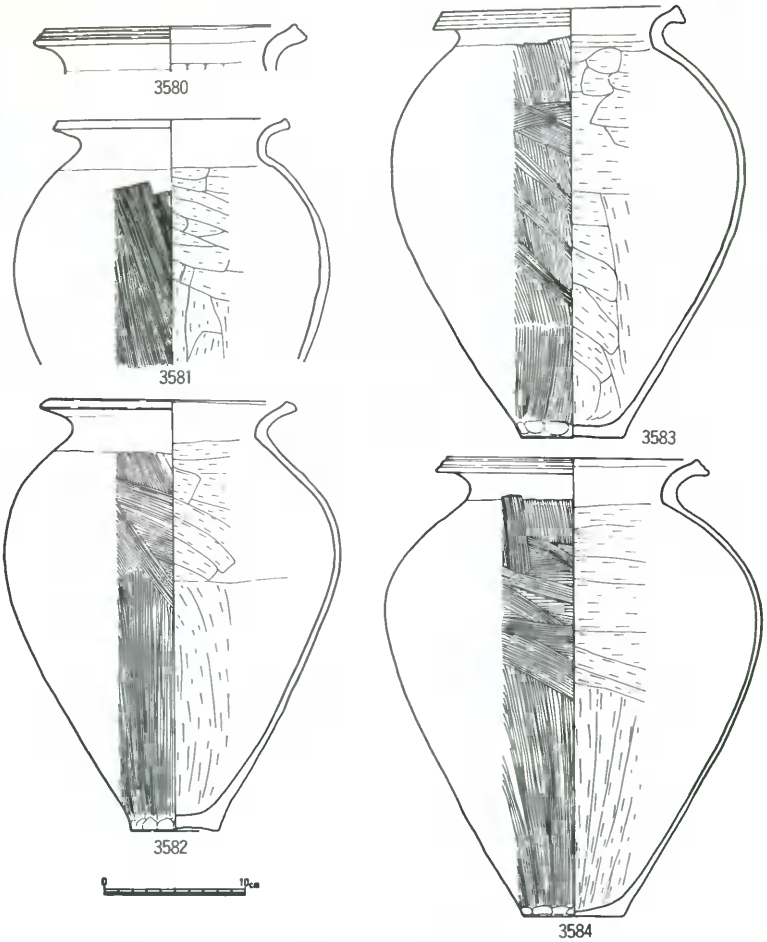
第389図　井　戸－16出土遺物（9）



第390図　井戸－16出土遺物（10）



第391図　井　戸－16出土遺物（11）



第392図　井　戸－16出土遺物（12）

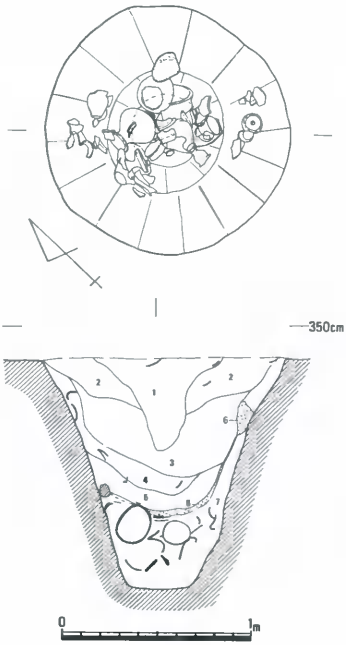
はじめから意図的につくられたとみられる3476・3479があり甕の一群と口径が近い数値を示すものもある。鉢は，3480のような小型のものから，3503のように大型のものまで幅広く，3501のような台付のものもみられる。甕は，むしろミニチュア土器といえる3541・3542・3543があるが，大半は煮沸などの実用に供されると断定されるもので，口径7.2cm～13cm，器高10～24cmにおさまり，容量も斉一性がみられる。第389～3584図に掲げたほとんどは，完形に復元が可

能となったもので，形態・手法等の点で，やはり一時期の特徴を極めてよく示している。時期的には，百・後・Ⅱの古相段階に比定されよう。以上の多種多量の土器を出土した6層下位の最下層すなわち，井底から約15cmの部分では土器の出土は極めて希薄となり，わずかな細片や数点ヒョウタンの種子がみられるにすぎない。長期間利用されて徐々に埋没したというよりは，ごく短期間で廃絶された井戸と理解され，その契機は，祭祀に関わる可能性が極めて強いことを指摘しておきたい。

註

佐原真・町田章両氏による。和歌山市有本出土流水文銅鐸の文様分類では，渦紋Zとされるもの1個，渦文Sとされるもの3個の計4個のS字文からなる。『和歌山県文化財調査報告』第2集　和歌山県教育委員会　1965

また，平城宮の西南隅で検出された井戸出土の隼人楯に，逆S字形の渦文が描かれており，伝統的な魔除けあるいは呪的な意味が強く表現されている。『平城宮発掘調査報告』Ⅸ　奈良国立文化財研究所　1978

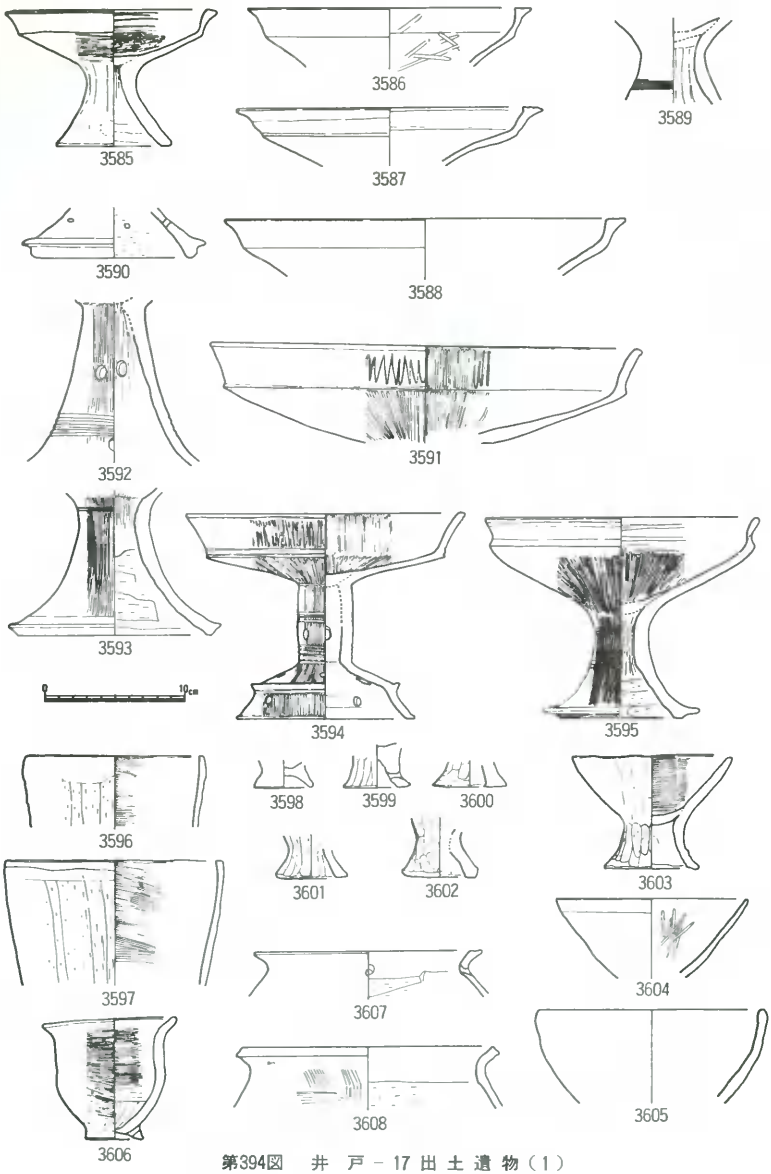


井　戸－17（第393～398図）

D-20南隅東辺よりで検出された，径128cm，深さ122cm，井底径30cm前後を測る素掘りの井戸で比較的小規模で浅いがほぼ正円形を呈する。上層から下層に至る周壁には，甕片を主体とする土器片が数多く出土し，7層の上位では，完形品を主体にする土器が集中的にまとまって出土している。1層は，平面形は径約70cmを測る円形を呈し，断面形では柱穴状の掘りこみを思わせるがこの平面形が井戸のほぼ中央に位置していることから，やはり井戸の最終

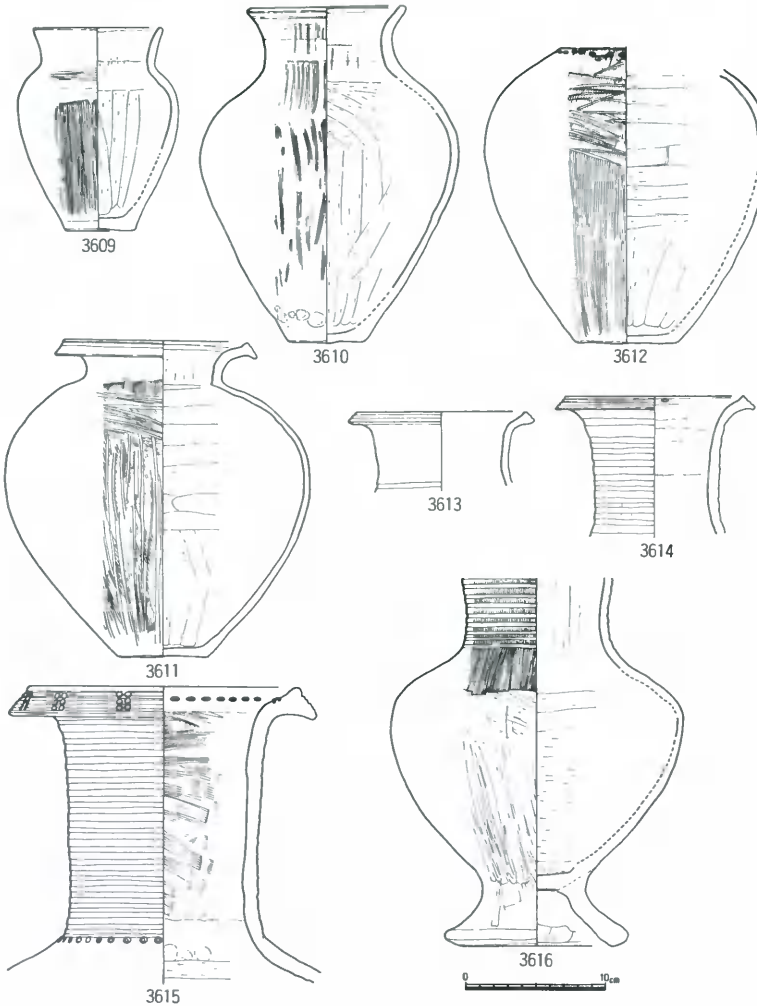
1. 暗黄褐灰色土
2. 淡灰褐黄色土(炭焼土片を含む)
3. 淡灰黄色土(炭焼土片を含む)
4. 淡灰褐黄色土(上面炭化物面)
5. 褐灰色粘質土（炭・焼土・製塩土器片を多く含む）
6. 炭化物（繊状繊維）
7. 青灰色粘土（炭片木質遺体を含む）

第393図　井　戸　－　17　(1/30)

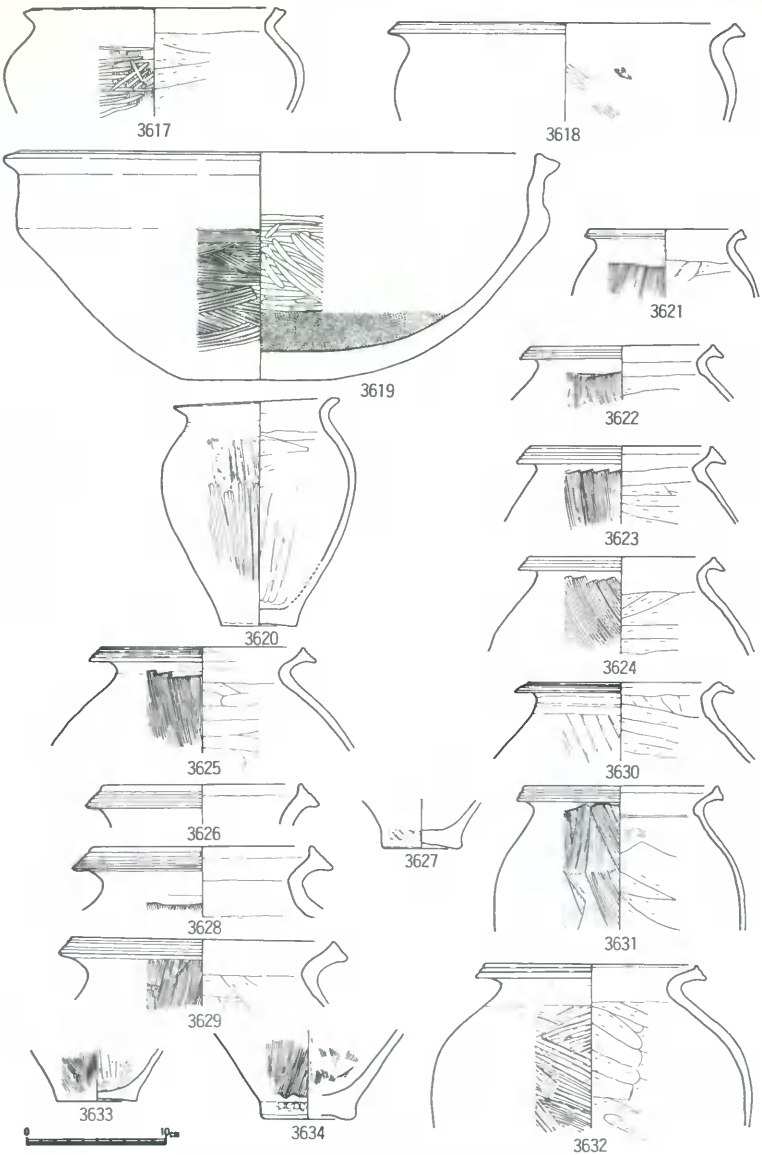


第394図　井戸－17出土遺物（1）

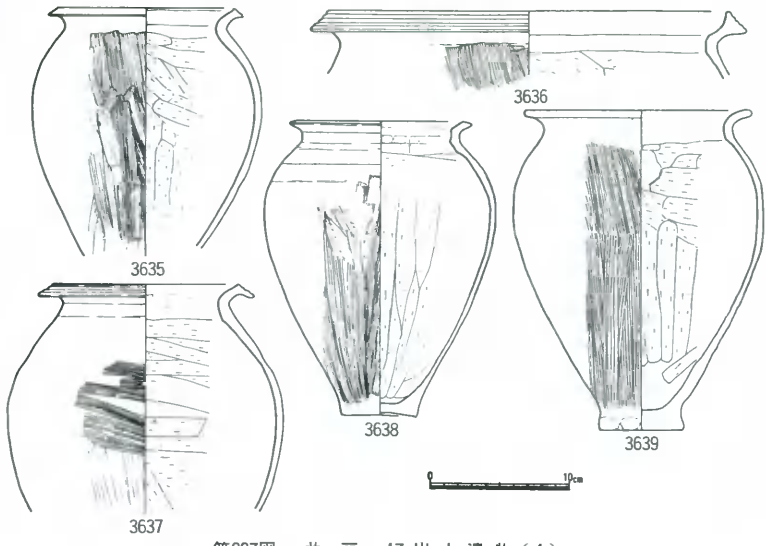
埋没層の可能性が強いものと考えられる。この井戸でもやはり炭化物（植物繊維）・灰が顕著に認められ，3層と4層の境界や6層・7層上位などが特に目立っている。前者では鹿角片や比較的大きな炭の塊（炭化木材）も出土している。また，下層すなわち7層中にはわずかなが



第395図　井戸－17出土遺物（2）

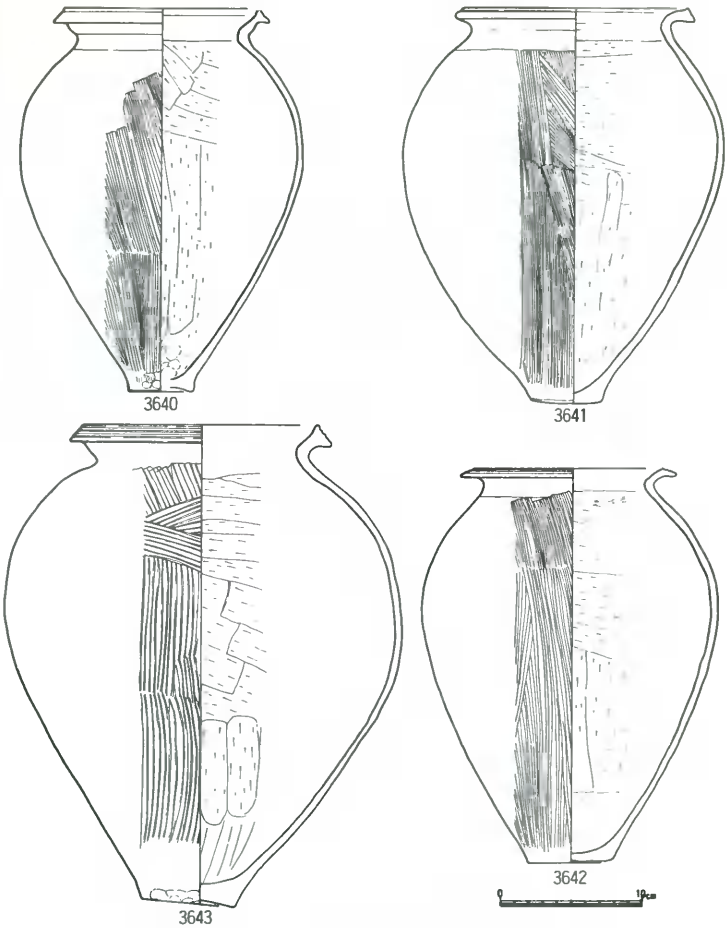


第396図　井戸－17出土遺物（3）



第397図　井　戸－17出土遺物（4）

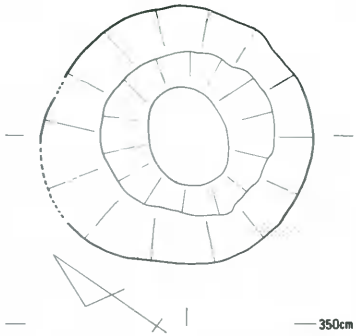
ら木片が出土しており，地下水位の変動が少なかったことをも示している。完形品および完形片となる土器群は第393図に示すように中央部に折り重なって出土しているが，高杯3585や壺3609・3610・3616，甕3620・3638のように完形品に近いものが多くみられることから，埋没直後の大きな衝撃や，急激な土圧の加重はなかったようである。出土土器の中では高杯の多さが目立ち（約20%）3586や3587・3588のように口縁上端部が平坦面をなし，凹線をめぐらすものや，3594のように精製土器である飾り高杯や，3595のように杯部が鉢のように屈曲するものもみられる。いずれも脚部と杯部の接合後は円板を充填することによって中央孔をふさいでいる。さらに3590のような脚端部の肥厚や，3592・3594・3595のような脚部をめぐらす浅い凹線文の加飾は，口縁部端面の特徴とともに弥生時代中期後半の特徴が残存していることを示している。しかし，3591のような後期的な高杯も共伴しており，新旧交代期の混在を端的に示しているといえよう。製塩土器は，その大半が細片であるが3601・3602のような脚部の破片が目立つ。また体部・口縁部片3596・3597なども出土しているが図化できるものは少ない。鉢では3603のような小型台付鉢がみられ，百・後・Ⅱの遺構からの出土がみられるものより，台部が高く類例を多くみない。大型の3619の鉢の内底部には煤状炭化物がこびりついており，煮沸に用いたことは疑う余地がない。外底部は長期の使用によって磨滅し，丸味を帯びている。壺は3609・3610のような直口壺を思わせるものと甕風の口縁をもち，体部が大きく張り出す3611のような

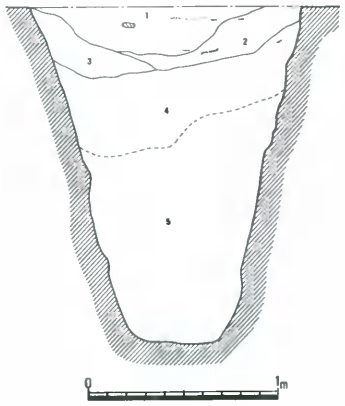


第398図　井　戸－17 出 土 遺 物（５）

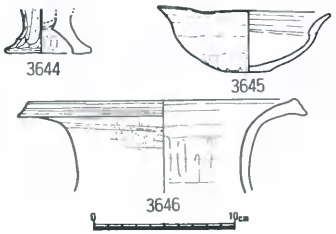
形態を示すものや長頸壺3614・3615や3616のような台付長頸壺がみられる。3615の長頸壺には凹線がめぐらされた口縁部の外面には６個を１単位とする竹管文を加飾し，さらにに内面と頸部下位には同一の施文具によって列点風の刺突文を配している。3612の壺の頸部下位や，3614の長頸壺の口縁部内面にも同様の竹管文の加飾が認められる。3610の壺は体部外面はタテハケ調整の後，粗いナデ仕上げが施され 甕の調整方法と 極めて似ており。 さらに器体の変色や煤

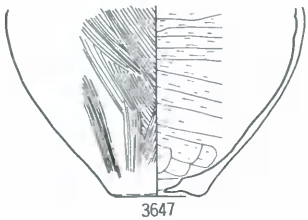
の付着によって，煮沸に用いられたことを示唆している。甕はその破片の数も多く，全体のおよそ40%を占めている。中には3606のようにほとんど煮沸の用を果たしていないミニチュア土器の他，実用に供される3620のような小型のものもみられる。口縁部の形状は肥厚して上下方に屈曲して拡張するものが多く，浅い凹線文がめぐるものが圧倒的に多い。この中でも上下方に拡張するものが多いが中には3622・3631・3643のように上下へ開き気味に拡張する口縁部をもつものも観察される。また，3635・3638・3641のように口縁端部がさほど発達せずわずかな肥厚で終わるものや，丸くおさまってしまう器種もある。わずかに認められる底部や完形に復した甕の底部の観察によると，揚げ底のものが多く（3627・3633・3634・3638・3640・3643）外面に押圧痕を残すものが大半である。一方，3643の大型甕は器壁の成形を横方向のタタキにより，後に外面は粗いハケ調整，内面はヘラケズリ調整によって仕





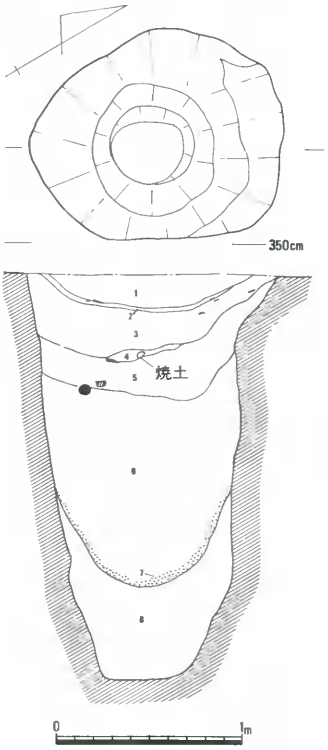
1. 淡黄褐灰土(炭片・焼土片・砂を含む)
2. 灰黄色土・黄灰色土・黒灰色土の互層
3. 淡黄灰色土(炭斑)
4. 灰黄色土
5. 淡灰青色粘質土(グライ化)





第399図　井　戸－18（1/30）・出 土 遺 物

上げられている。そのタタキの成形痕は体部外面下半でわずかに認めるが，体部の形状から3641も同様の成形が行われたとみてよいだろう。この技法は，おそらく大型甕の成形には多用され，後にヘラケズリによって器壁の厚さを減ずる際に粘土がよく締まっているため器形の変形に及ぼす影響が少なかったのではないかと推察される。



1. 淡黄褐灰色土(炭片・焼土片を含む)
2. 暗褐灰色土
3. 黄褐灰色土
4. 炭・焼土
5. 黄褐灰色土(濃炭斑)
6. 黒灰色粘土(炭片を多く含む)
7. 植物・木質遺体
8. 暗青灰色粘土

第400図　井　戸-19（1/30）

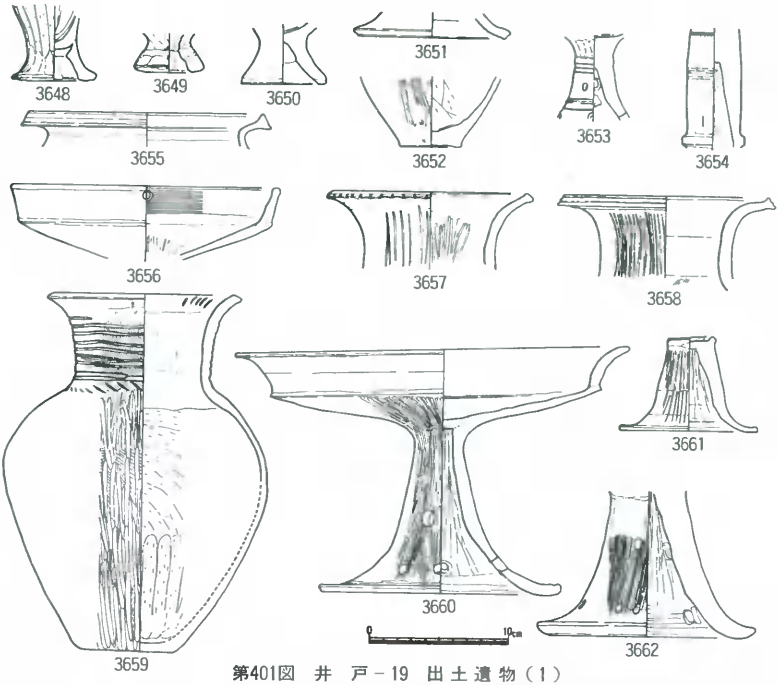
以上の出土土器は，近くに散在する他の井戸6・7・9～11などの出土土器に比べると，もっとも古い様相を示し，百・後・Ⅰの新相を示す時期に比定されよう。

井　戸—18（第399図）

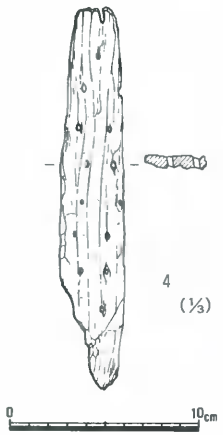
E-21基準杭直下で検出された，径140cm，深さ180cm，井底径約40cmを測り，平面形はややいびつな円形を呈する素掘りの井戸である。4・5層はほとんど同質の土であるが，後者はグライ化して淡灰青色を呈している。この4・5層は，いずれも自然堆積層ではなく人為的な埋土であった可能性が強く，一度に埋められた土と考えられ，おそらく本来は淡灰黄色を呈する基盤層の土であったと推察される。したがって，1層から3層は，人為的な埋積の後のたわみ部分に堆積した土層といってもよい。1層には灰白色を呈する灰層がみられ，2層には微細な焼土片に混じって藻状炭化物が縞状に埋積している。出土遺物には，製塩土器・鉢・壺・甕片などがある。3644の製塩土器脚部は脚下端部が平坦面をなす特徴が看取される。また3647は壺の体部と推定されるが底部に，しばしば甕の底部にみられる穿孔が観察され，その特殊な用途が注目されよう。概して，百・後・Ⅱの古相段階に比定される。

井　戸—19（第400～402図）

F-20の東辺ラインのやや北よりに接して検出された。長径135cm，短径110cm，深さ214cm，

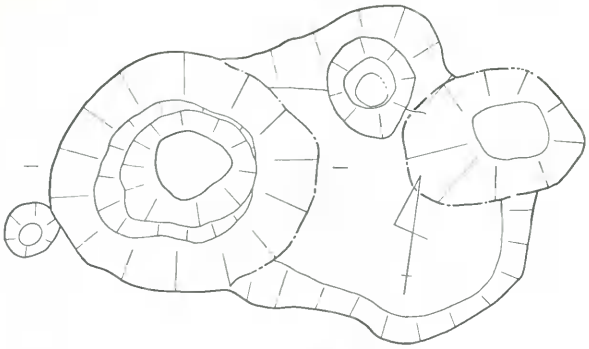


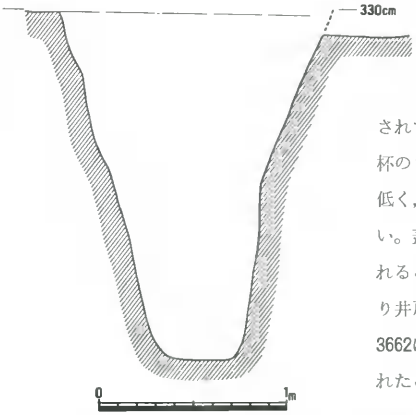
第401図　井　戸－19　出土遺物（1）



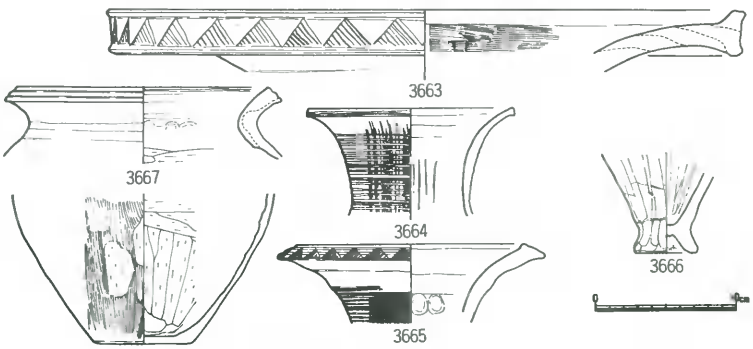
第402図　井戸-19 出土遺物（2）

井底径約40cmを測る素掘りの井戸である。井底は海抜約120cmの白っぽい黄灰色粘土層に達しており，F-20・E-20ではもっとも深く掘りこまれた井戸である。上層部を形成する1～5層はおもに砂質の黄褐色土層を主体としており，5層の下端は炭化物の堆積面をなしている。7層は植物遺体や，木質遺体の集積層で4の装飾的な丹塗りの飾り板（モミ）や，木片が出土している。出土遺物の大半は，図に掲げるように，製塩土器・甕・高杯・壺・蓋など豊富な器種が確認される。3659の壺は最下層から出土した完形の壺で底径・口径が体部に比べやや大きく，口縁部内面に5本のヘラ描き列点文を残す。稚拙な記号的な数字を示している可能性もあり，井戸—16出土の3460や，土壙—135出土の3843などのようにしばしば壺の口縁部内面





にみられる。3657も，口縁部外面に刻み目がめぐらされ特異な装飾が施されている。高杯3660は井戸—16出土の高杯のプロポーションに比べるとやや器高が低く，脚も短くみえるが手法的な差異はない。蓋3661は，はじめから蓋として使用されることを前提に製作されたもので，やはり井戸—16出土の3479に類似する。また3662は高杯脚部を転用して蓋として用いられたことを示す，煤の付着や変色が認められ

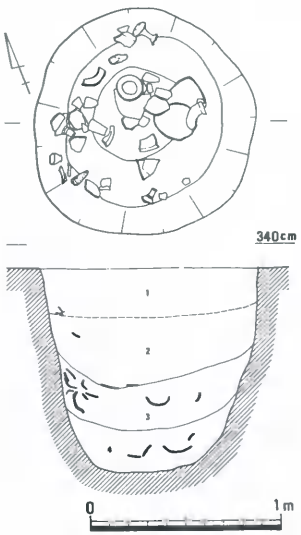


第403図　井　戸－20（1/30）・出土遺物

れ，甕に用いて煮沸に用いたとすると，透孔が吹きこぼれを防ぐ機能を偶々果たしたようにも想像される。土器以外では，淡緑灰色を呈する多孔質のガラス滓が出土しており，注目される。出土土器から時期的には百・後・Ⅱの古相を示す段階に比定される。

井　戸—20（第403図）

F-20の北東よりで検出された径144cm，深さ183cm，井底径約35cmを測るややいびつな円形を呈する井戸で，この周辺では井戸—18についで深く掘りこまれている。井底は急激に狭まって，灰白色粘土層に達し，当時はこの層が湧水層であったことを示している。上面東半は，不整形な土壙に切られ，東辺のプランはこの土壙を掘り上げた後に確認できた。埋積状況は，井戸—18に酷似し，灰黄色土が堆積層の大半を占め，周壁と接する部分は，グライ化して青灰色を呈している。出土遺物の大半は土器で，おもに上層から中層上位にかけて出土しており，器台・甕・壺・製塩土器などがあげられる。器台3663は下層上位から断片となったものが散布埋積した状態で出土したものである。壺3664・3665は頸部に凹線文をめぐらす長頸壺で，後者には口縁部に鋸歯文が加飾される。植物遺体としては，2個の桃核が出土しており各々長さ1.98cm，2.23cmを測るコダイヤマモモである。井戸の存続時期は百・後・Ⅱに比定される。（岡田）

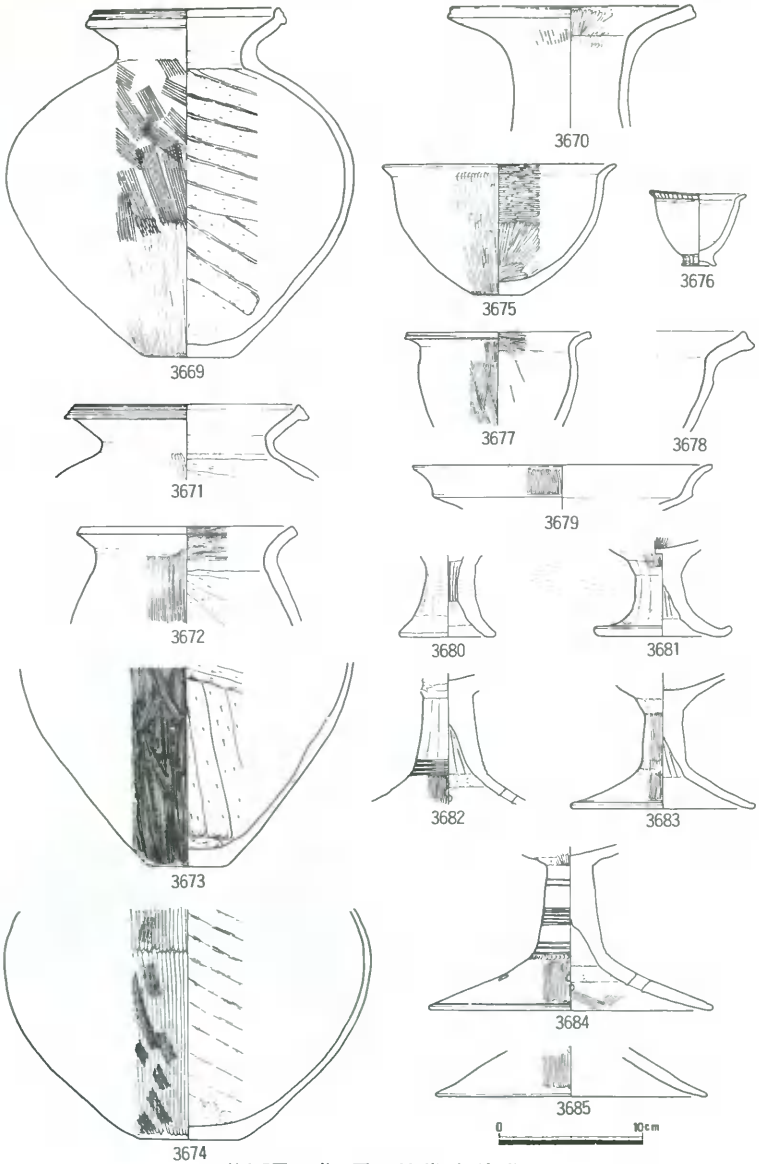


第404図　井　戸-21（1/30）

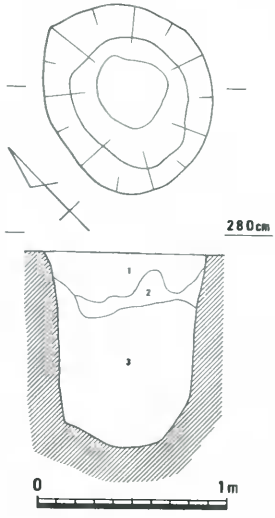
井　戸—21（第404・405図）

E-21の北西部に位置する井戸である。検出面での規模は，口径115～120cm，深さ108cmを測る。井底の海抜は，220cmに位置する。平面形は，ほぼ円形を呈し，上面からは約80度の角度での掘方が検出された。井戸の埋没状況は，そのほとんどがレンズ状の埋積を示しており，特に2・3・4層には炭の堆積が多く認められた。遺物は，上層の茶灰色土中から鉢形の手捏ね土器が出土し，さらに間層をおいて3層の灰色粘土中からは高杯を中心とする遺物があたかも流れ込んだかのような状況で出土した。また，下層の炭を多く含む青灰色粘土中からは，壺3669の出土が認められた。

この井戸の時期は，出土した遺物の特徴から百・後・Ⅱ併行期に比定できる。（渡辺）



第405図　井　戸－21 出 土 遺 物

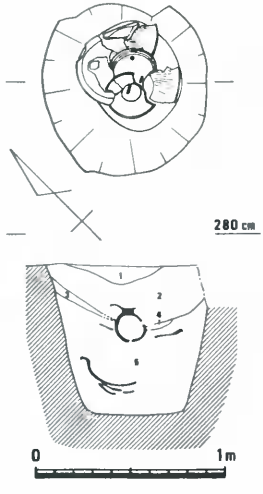


井　戸―22（第406図）

F-21東端で井戸―24の北西に位置し，弥生時代後期末の水田層の除去後に検出した。平面形態は，86×100cmの楕円形を呈し，最深部では103cmを測ることができるもので，北東側が近世溝に一部かかった状態の井戸状遺構である。遺構の断面形態は，検出面からほぼ垂直に近い角度で掘り込みが行われており，底部で擂鉢状を呈するものである。埋土中からは，若干であるが土器片を検出した。時期は，百・後・Ⅱである。

1.暗灰色土と茶褐色土の混層　3.黒灰色土と白灰色土の互層
2.1と同じで若干炭化物を含む

第406図　井　戸－22（1/30）・出土遺物

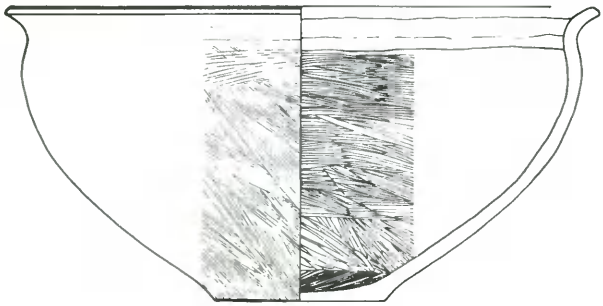


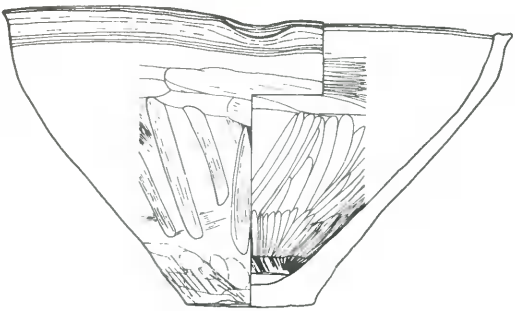
井　戸―23（第407・408図）

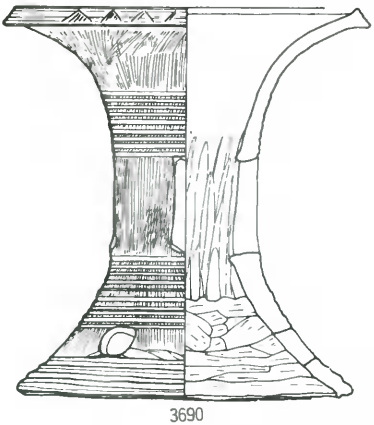
F-21北東隅で水路の左岸堤下において検出された遺構である。土層がグライ化し，砂を含んだ粘土層のため遺構の検出が困難であった。遺構の平面形態は，推定95×110cmの楕円形と思われ，確認し得た深さは78cmを測るものであった。井底の海抜は，175cmに位置する。断面形は，検出面から約70°の傾斜で掘り込まれ，底面は平坦に掘り上げられていた。炭化物・焼土・灰等を数多く含んだ埋積土中からは，ほぼ完形に近い鉢・器台，さらに細片ながら製塩土器の底部等が出土している。時期は，それら遺物から，百・後・Ⅱに比定できよう。

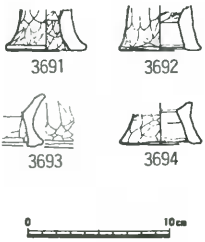
1. 黒灰色土と灰白色土と暗黄褐色土の混層
2. 黒灰色土・灰白色土
3. 黒灰色土(少量)と青灰白色土の混層
4. 暗灰色土(炭化物の層)　5. 黒灰色土

第407図　井　戸－23（1/30）

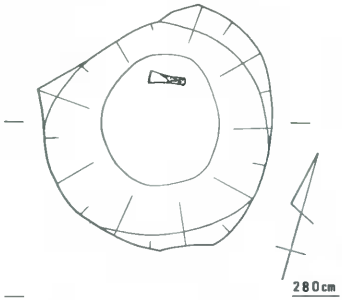




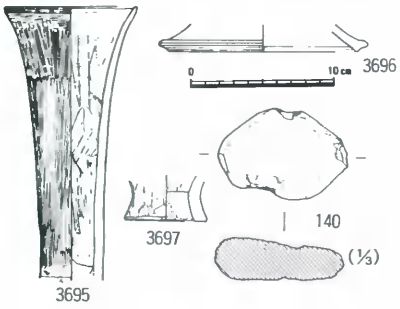




第408図　井　戸－23 出 土 遺 物



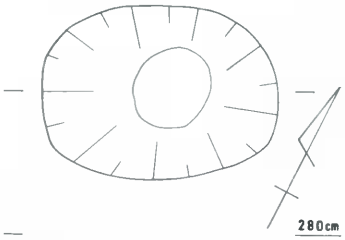
1.2.6.黒灰色土
3.(暗)黒灰色土と茶褐色土の混層
4.暗灰色土と黄茶褐色土の混層
5.黒灰色土と暗灰白色土の互層
7.灰白土と黄茶褐色土の混層
8.(暗)黒灰色土

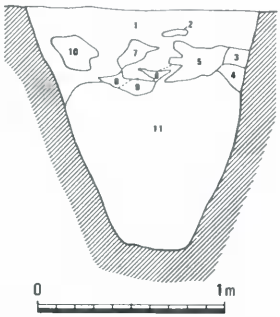


第409図　井　戸-24（1/30）・出土遺物

井　戸—24（第409図）

弥生時代後期末の水田層除去後に検出され，南東部が溝—55に接した状況で井戸—25の南西に位置する。平面形態は，推定で120×130cmの楕円形を示すものと思われ，最深部では155cmを測る。断面形から見れば，検出面から約75°の角度で掘り込みが行われ，底部は東に傾斜して深くなっている。断面図に示したように壁の上半部が一段と広くなっているが，これは意図的なものではなく，自然に脱落したものであろう。底部から約10cm位浮いた位置には，長頸壺の頸部から上の部分が，また，埋土中からは若干の土器片ならびに石器が出土している。これらから百・後・Ⅱの時期と言えよう。





1．黒灰色土と茶褐色土の混層
2～10．暗灰黄白色土を基調とするブロック
11．黒灰色土

第410図　井　戸-25（1/30）

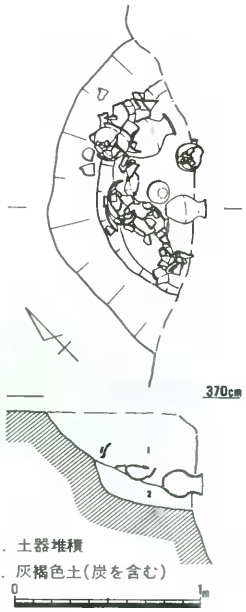
井　戸－25（第410図）

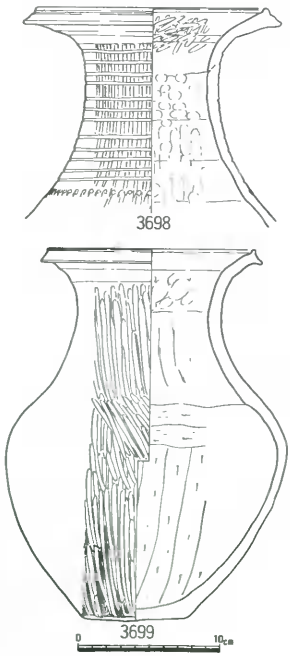
F-22中央部で溝－55の東側に接する位置で，弥生時代後期末の水田層除去後に検出された遺構である。平面形態は，91×125cmを測るものである。深さは125cmで，井底の海抜は140cmを測る。掘り込みの形態は，楕円形から徐々に丸味を帯びて，底部に至ってはほぼ円形を呈する。断面形態は，西側がゆるやかで，東側がかなり急傾斜となって掘り上げられている。埋積土中からは製塩土器等の遺物が若干認められた。時期は，百・後・Ⅱである。　（二宮）

（5）土　　壙

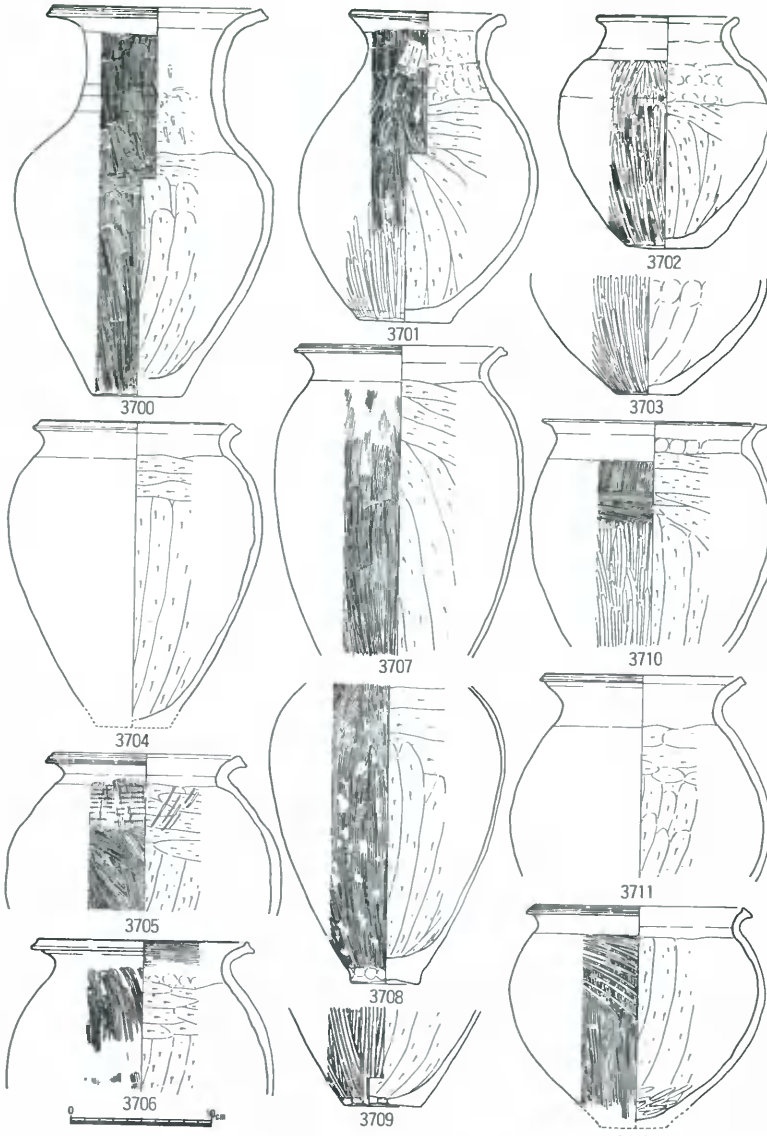
土　壙－121（第411～413図）

E-17とE-18の中間やや南に位置する土壙である。すでに弥生時代後期末の水田用水路の開鑿により東半分が完全に消滅していた。残存形態よりこれを復元すれば，径150～200cm，深さ50cmくらいの土壙が推測される。底の海抜は310cmを測る。埋土は，土器が密に堆積した層と炭を若干含んだ灰褐色土層より成る。土器層はかなり厚く，底部には完形品の土器があたかも置かれたかのような状況で確認できた。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。





第411図　土　壙-121（1/30）・出土遺物（1）

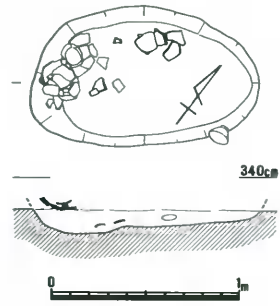


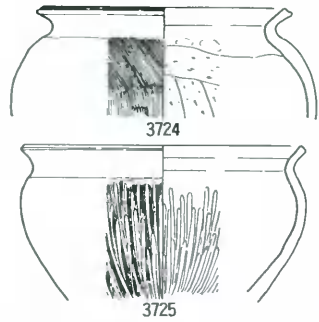
第412図　土　壙－121 出 土 遺 物（2）

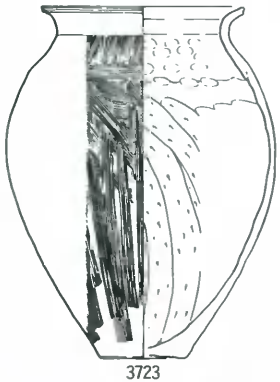
第413図　土　壙－121 出 土 遺 物（3）

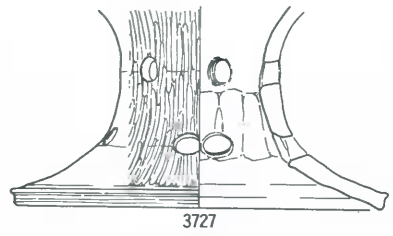
土　壙－122（第414図）

E-18杭の北東約3mの地点に位置する土壙で，竪穴式住居－30の住居外周溝を一部切った状態で検出された。規模は，長軸120cm，短軸70cm，検出面からの深さ7～12cmと小さい。平面形態は，ほぼ東西に長い楕円形を呈する。土壙内は，黄色粘土塊と木炭を含んだ暗灰褐色土により埋積され，底より若干浮いた状況で遺物等の包含が認められた。出土遺物には，甕・鉢・器台等があり，時期的には百・後・Ⅱに比定される。



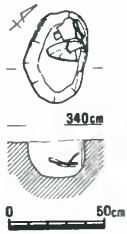


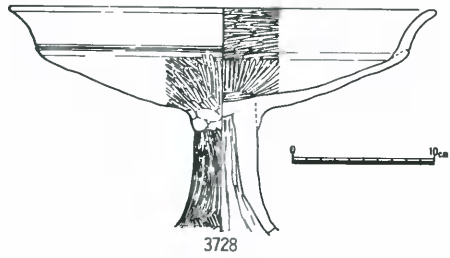




第414図　土　壙-122（1/30）・出土遺物

土　壙―123（第413図）



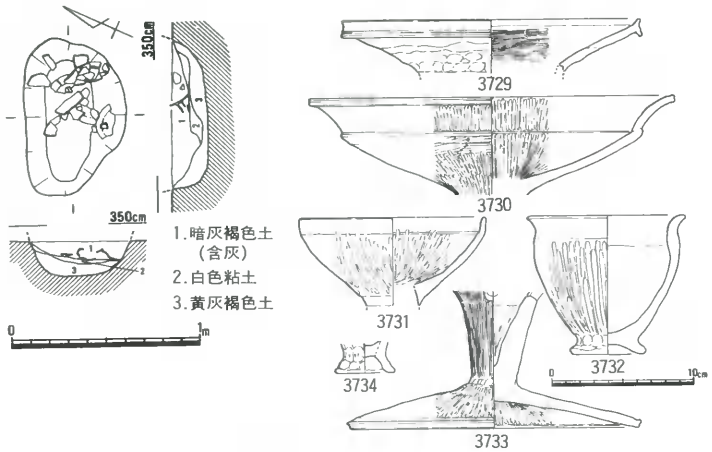


第415図　土　壙-123（1/30）・出土遺物

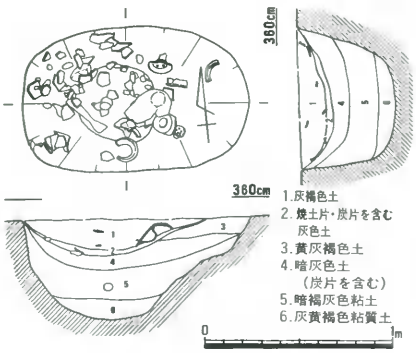
E-17東辺中央部にあり，竪穴式住居—29の住居外周溝を一部切って掘られた土壙である。規模は，長軸50cm，短軸30cm，深さ20cmと小さい。壙内には，焼土塊が多く含まれ，壁の3分の2程は直接火を受けた状況を示していた。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。

土　壙—124（第416図）

D-18南西部に竪穴式住居—30とその住居外周溝の間に位置する土壙である。規模は，長軸83cm，短軸53cm，深さ19cmを測る。埋積土は，大きく二層に分層され，間層に白色粘土の堆積



第416図　土　壙—124（1/30）・出土遺物

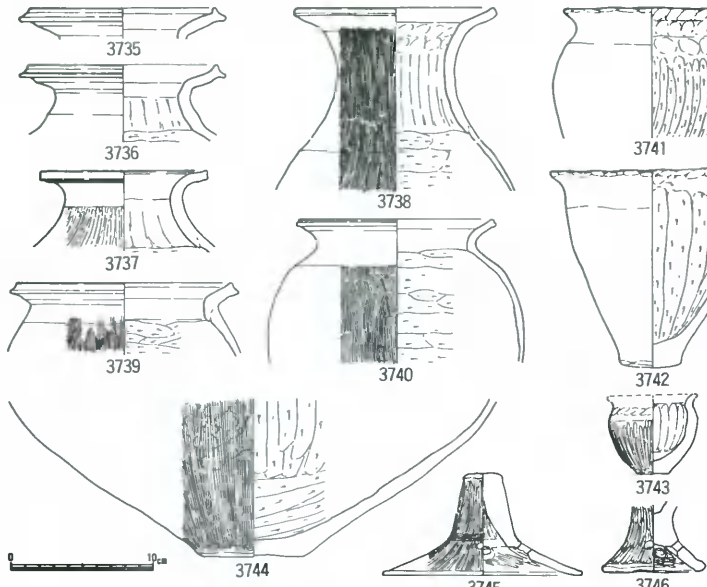


第417図　土　壙—125（1/30）

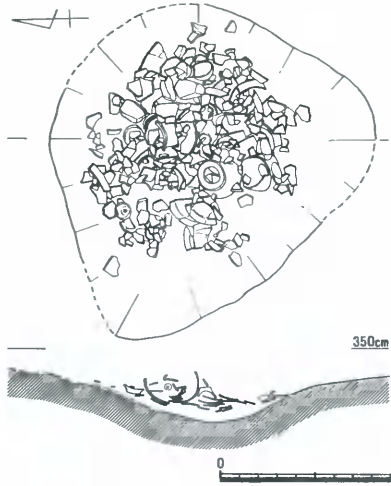
が認められた。さらにこの間層の上には，小木炭片の薄い層が形成されていた。出土した土器は，百・後・Ⅱで，竪穴式住居—30に類似する。

土　壙—125（第417・418図）

D-18南半部に古墳時代の竪穴式住居—42の掘り下げ後検出できた土壙である。土壙の規模は，長軸120cm，短軸76cm，深さ52cmを測る。平面形態は，東西に長い楕円形を呈する。埋土中には，多くの焼土・炭・灰を含む。



第418図　土　壙−125 出土遺物



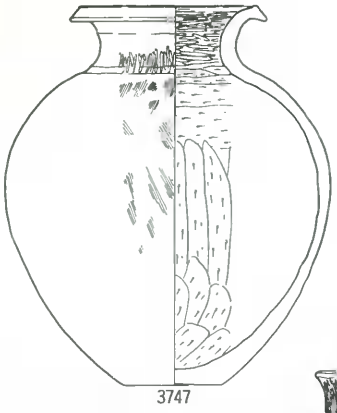
第419図　土　壙－126（1/30）

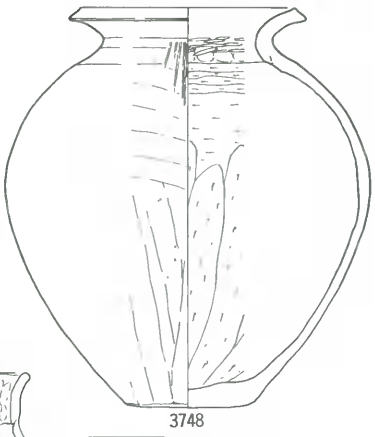
特に２層の灰色土中には夥しい焼土・炭・灰が含まれていた。さらに５層からは，ミニチュアの甕が１点出土している。それら出土遺物から，土壙の時期は百・後・Ⅱに併行するくらいに位置づけられる。

土　壙−126

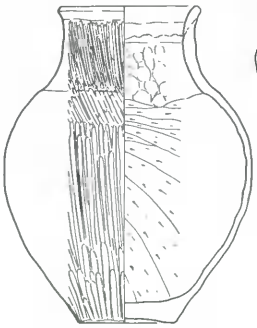
（第419〜422図，図版17−１）

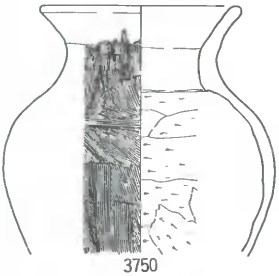
Ｅ−18杭とＥ−19杭のほぼ中央部に複数の土壙と切り合って所在する。この土壙は，後述の土壙−127に切られる。規模は，口径150〜180cmを測る。土壙検出面からの深さは，最深部で約25cmとかなり浅い。平面形は，不定円形を呈する。土

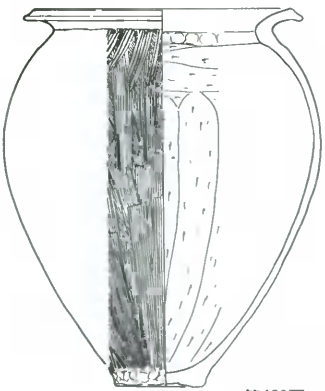

3747

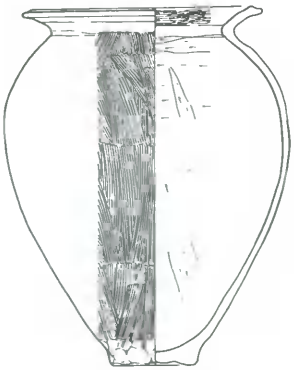

3748

3751


3749

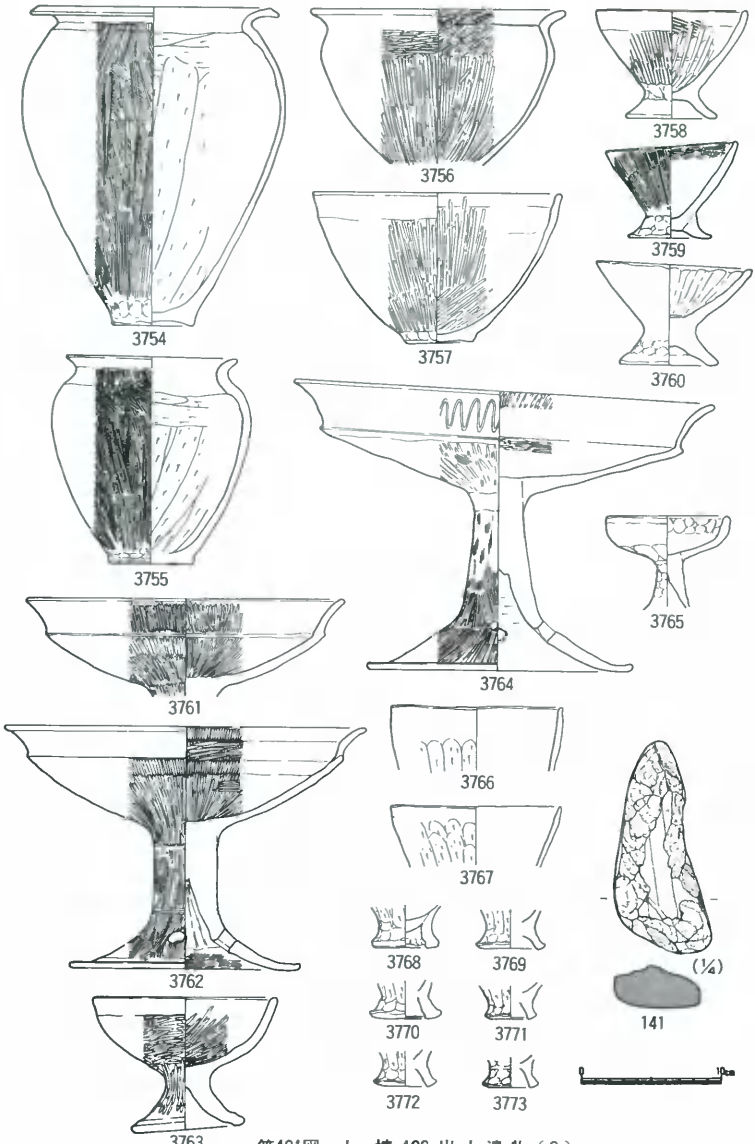

3750


3752

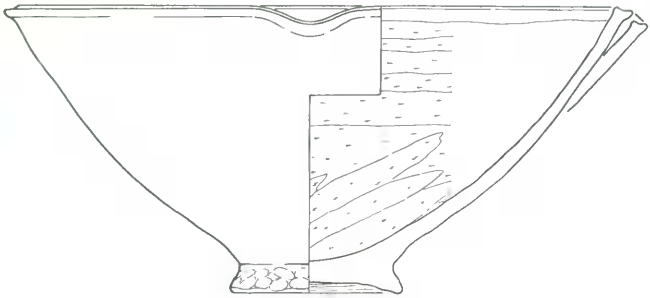

3753

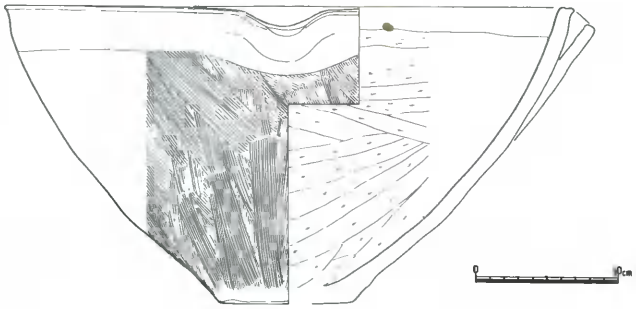
0　10cm

第420図　土　壙-126 出土遺物（1）



第421図　土　壙-126 出土遺物（2）





第422図　土　壙-126 出土遺物（3）

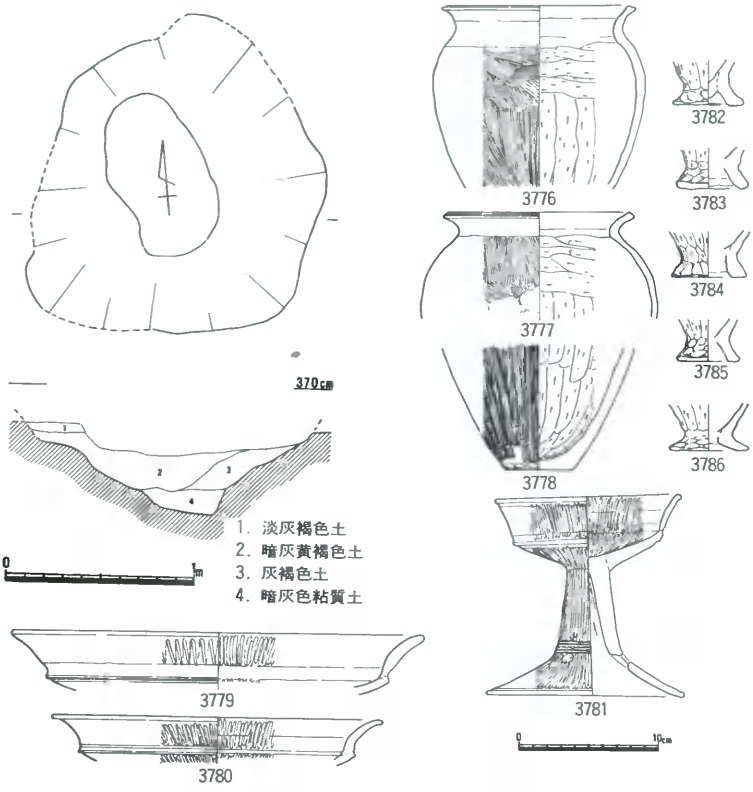
壙内には，夥しい量の土器がつまっており，中にはかなり完形に近いものも含まれていたが，そのほとんどは各器種が大小に破砕されていた。あたかも捨てられてあったかのような状況を呈していた。そのことからこの土壙は，土器の廃棄のための穴として掘られたものと推測された。その時期は，百・後・Ⅱ併行期に比定できる。

土　壙―127（第423図）

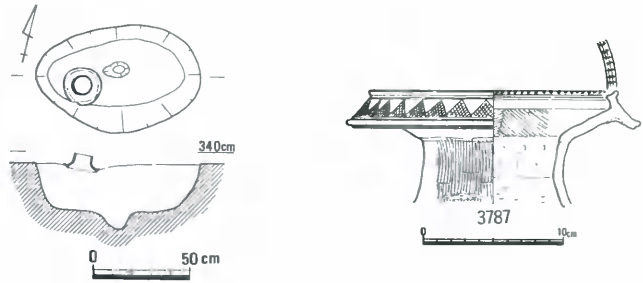
土壙―126を一部切って掘られた土壙である。規模は，径150～180cmの不定形で，深さも60～70cmと比較的浅い。この埋土中には，2層に特に夥しい炭・焼土・製塩土器の包含が顕著に認められた。この他に3層にも同様の包含が認められるが2層にはとうてい及ばない。伴出遺物から時期は，百・後・Ⅱ併行期に位置づけられる。　（島崎）

土　壙―128（第424図）

E-18南端に位置し，長軸86cm，短軸56cm，最大の深さ32cmを測る。平面形は，楕円形を呈す。壙底の中央部は，くぼみを呈する。壙内は，灰褐色土で充填され，炭・焼土を含む。遺物は，検出面上で壺の頸部のみが出土した。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。　（渡辺）



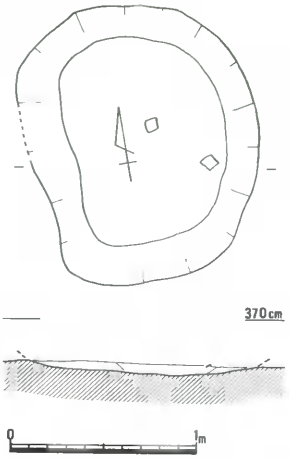
第423図　土　壙-127（1/30）・出土遺物

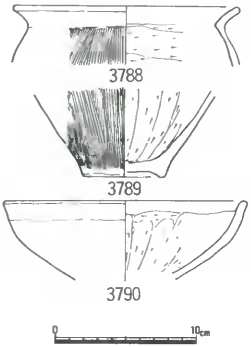


第424図　土　壙-128（1/30）・出土遺物

土　壙－129（第425図）

E-18 北東部に 竪穴式住居－35と建物－ 4 と切り合って位置する。遺構の残存は，極めて悪く，最深部での深さ 6 cmを測るにすぎない。規模は，長軸150cm，短軸120cmを測る。平面形態は，楕円形を呈する。残存埋土中には，その中央部に



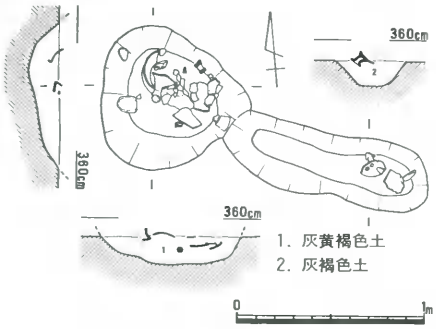


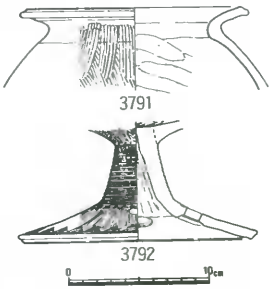
第425図　土　壙-129（1/30）・出土遺物

おいて炭・焼土片の多く混入した部分が15×25cmの範囲に確認できた。出土遺物は，極めて少なく，甕・鉢の小片が散見できたにすぎない。時期は，百・後・Ⅱに比定される。

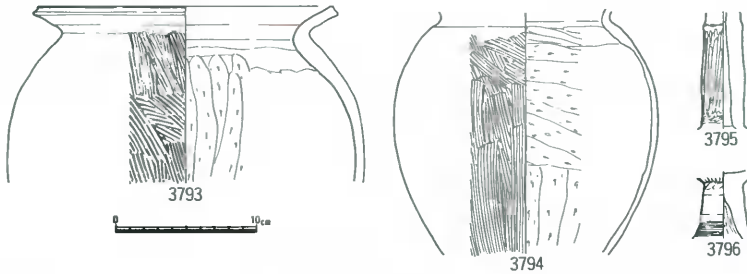
土　壙－130（第426図）

E-18 南半部に竪穴式住居－29 の住居外周溝に近接して位置する土壙である。規模は，長軸約 110cm，短軸 35cmを測り，ほぼ





第426図　土　壙-130・131（1/30）・土　壙-130 出土遺物



第427図　土　壙−131 出土遺物

東西に長く，一見溝状を呈する。埋積土中には，焼土・炭小片が多く含まれていた。遺物は，土壙東部分に甕と高杯が若干浮いた状態で検出できた。時期は，百・後・Ⅱに比定される。土器でみる限りではこの土壙は，後述の土壙−131に切られた可能性が高い。

土　壙−131（第426・427図）

前述の土壙−130を切って掘られた土壙である。土壙−130と比較した場合，規模は大きく，東西約80cm，南北約75cm，深さ15cmを測る。やや不定形を呈する。埋積土は，焼土小塊を含み，底から若干浮いた状況で土器の出土がみられた。時期は，百・後・Ⅱに位置づけられるが，土壙−130より後出の様相を示す。（島崎）

土　壙−132（第428・429・431図）

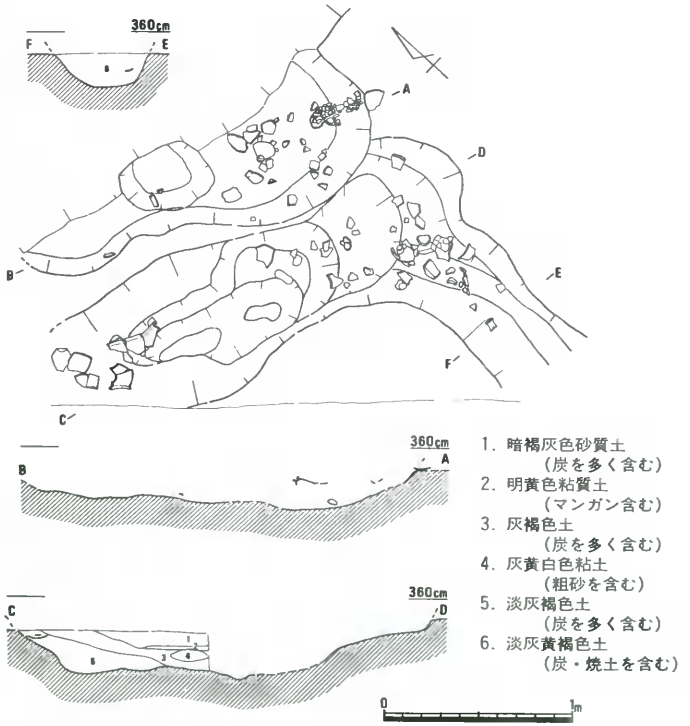
E−18の南辺よりで検出された不整形土壙で，長径190cm，深さ20cmを測り，土壙−133を切り，竪穴式住居−29の住居外周溝に切られる。埋積土は炭，焼土片を多く含む灰褐色土で，図に示すように起伏の目立つ壙底が観察される。出土遺物はおもに東側に集中し，土器片や小礫が出土している。出土土器には，甕，高杯，鉢，台付鉢などがあり，おおむね百・後・Ⅱに比定される形態を示している。3802の台付鉢は，この時期の遺構からしばしば出土しており，日常生活に欠かせぬ什器的な用途が推定される。このような普遍的な小型容器の出現は，土器の「共用器から銘々器」への変化を物語っているのかもしれない。

土　壙−133（第428・430図）

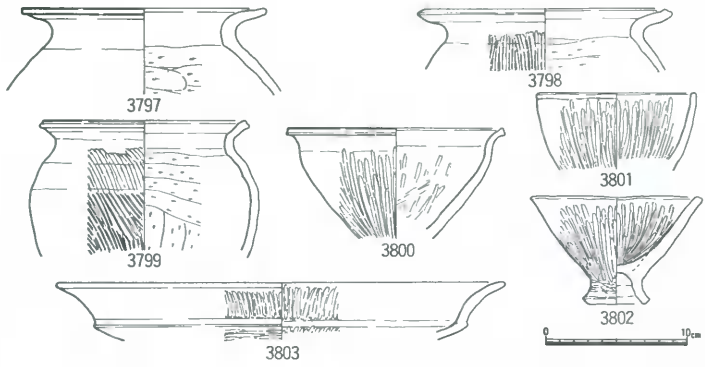
土壙−132に切られた溝状土壙が連続しているような形状を示す土壙で，残存長約400cm，幅は狭い部分で約50cm，広い部分で約80cmを測る。凹凸に富む壙底は深い部分で約25cm，浅い部分で約20cmを測り，数か所に段差が生じている。埋積土はいずれも炭，焼土を多く含み，最終的には，暗褐灰色砂質土が埋積している。南部分はまさに溝状をなし，北辺部とほぼ直角に屈曲する。4層は粗砂を含む黄白色粘土のブロック層で，この土は他に土壙−134などでもみかける。粘土は良質であるが，中に石英・長石を主体とする砂粒を含んでいることが特筆され

る。壙底の形状からすると，北辺部は舟形土壙状を示すといってよい。

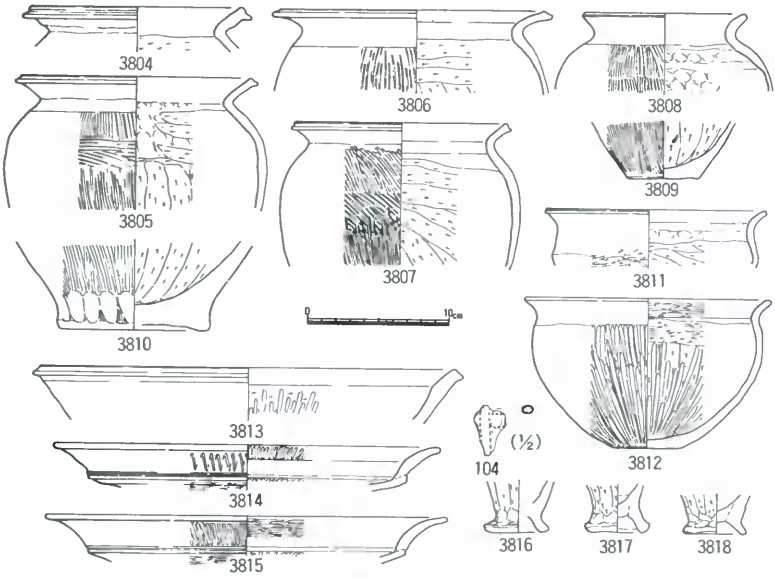
出土遺物の大半は土器で，第430図に示すとおり，比較的全形を知り得るものが多い。甕が最も多く，ついで高杯，鉢，製塩土器などが出土しており，いずれも百・後・Ⅱの時期に比定されるが，特に製塩土器の脚端が細く丸味を持つ点に注意される。また高杯も杯部の開きが極めて大きく，平たく，口径は小ぶりな印象を与える。また，104のような鉄器片が出土しており，小鉄器の普及の一端が示され，鉄鏃などの茎部分の可能性が強いと考えられる。土壙―132に切られるという状況を示してはいるものの，時期的にはそれ程隔たりのあるものではなく，出土遺物からも甕3799と甕3807の類似性などをみるとその事実を裏付けているといえよう。（岡田）



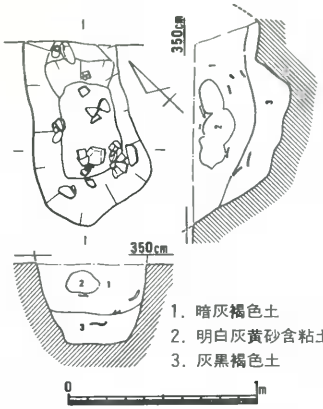
第428図　土　壙－132・133（1/30）



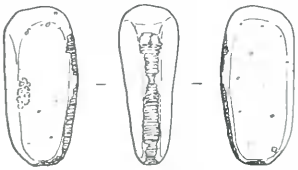
第429図　土　壙-132 出土遺物(1)

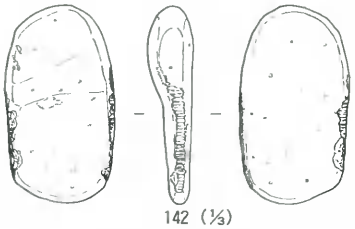


第430図　土　壙－133 出土遺物



第432図　土　壙-134（1/30）

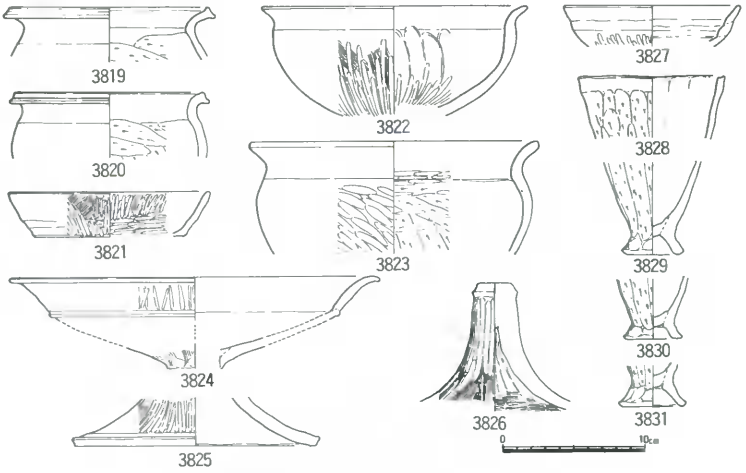




第431図　土　壙-132 出土遺物（2）

土　壙—134（第432・433図）

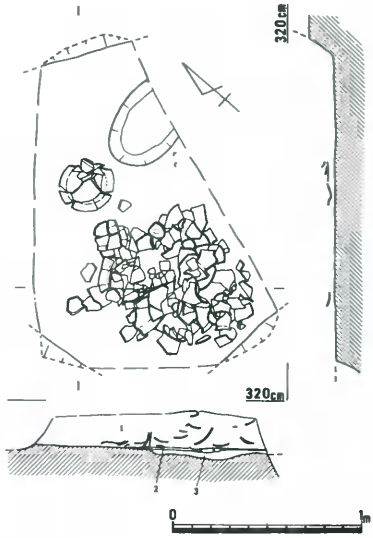
E-18南辺近くに位置する。北の一部が，調査時の側溝により消失しているものの本来の形状は容易に復元できる。規模は，長軸が推定130cm，短軸60cm，深さ50cmを測る。埋積土中には，1層中の灰褐色土に明白灰黄色粘土の大きな塊の包含が認められた。他にも全体にわたって，炭・焼土塊等が認められた。出土遺物は，いずれも小破片で完形品を含まない。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。

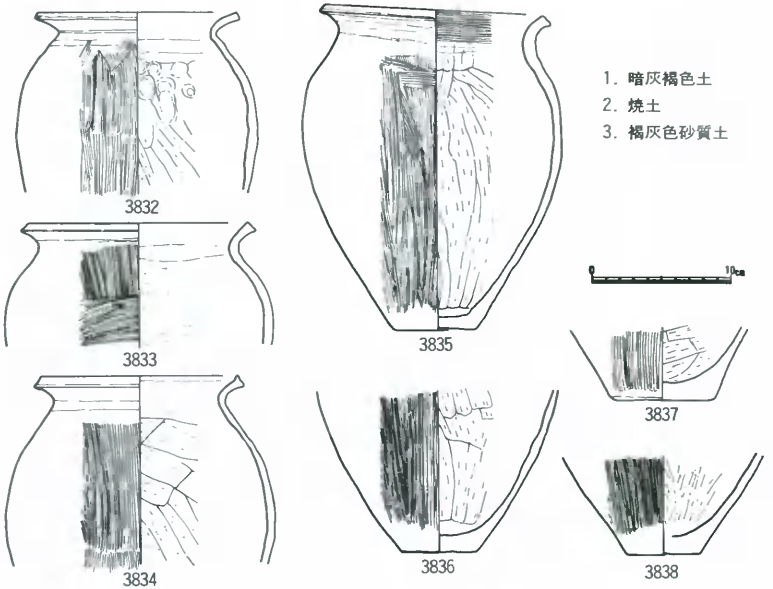


第433図　土　壙－134 出 土 遺 物

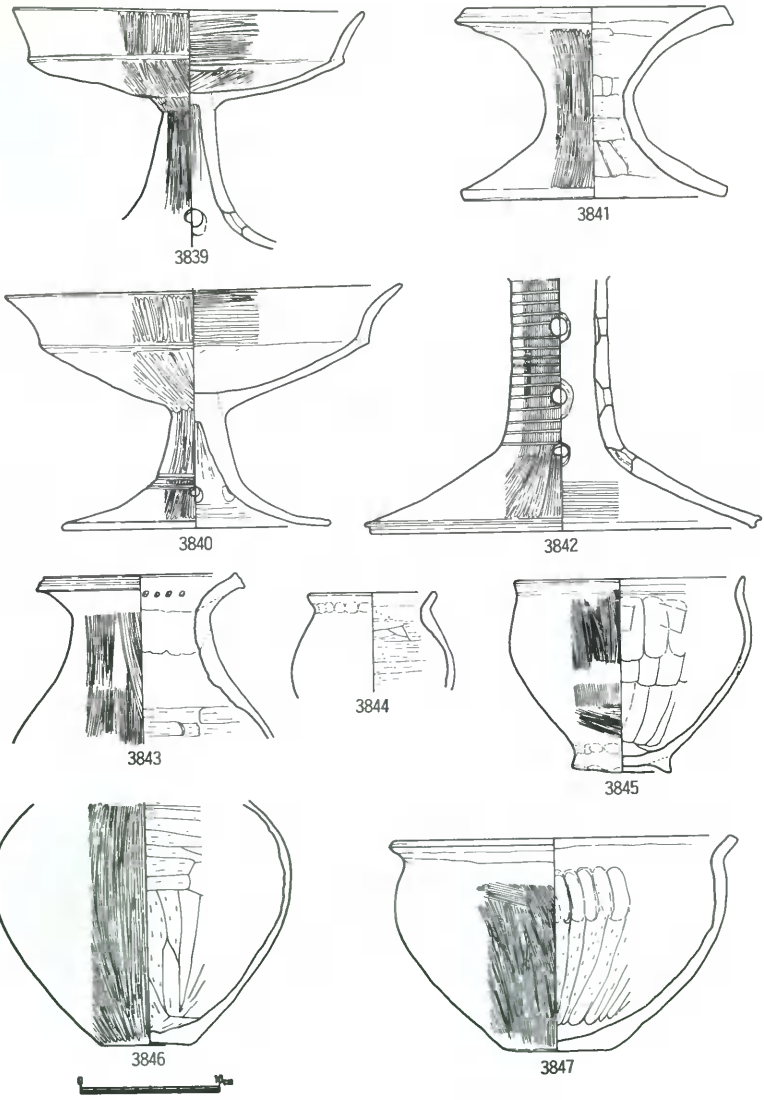
土　壙—135（第434・435図）

E−19の西辺よりで検出した土壙の壙底部分と思われる残存遺構である。古墳時代の溝—74～76や中世以降の溝によって，著しく原状を失ってはいるが，120×150㎝の範囲に，土壙の埋積土である暗灰褐色土が約20㎝堆積し，その中に比較的多数の土器も埋積遺存していた。壙底部分は薄い焼土層が残っており，その上面に炭片に混じって土器群が廃棄されたかのような状況を呈している。壙底下端線の観察によると，1辺200～300㎝前後を測り，主軸を東西か南北にとる長方形の土壙であった可能性が推考される。土器は百・後・Ⅱを示す。(岡田)

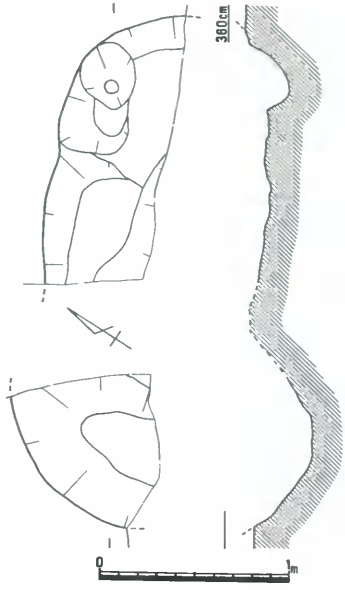




第434図　土　壙-135（1/30）・出土遺物（1）



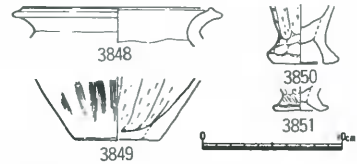
第435図　土　壙－135 出 土 遺 物（2）



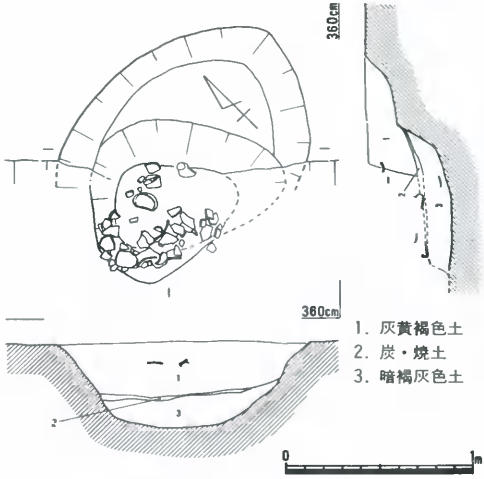
土　壙—136（第436図）

E-18 南東隅に 位置する土壙である。ところが土壙自体は，溝—44と現代溝により，その東側と 中央部が 切られ 寸断されていた。そのため，土壙の全容に関しては，判然としない。しかし，溝—44の東に同じく溝—44に切られて所在する 後述の土壙—141 との関連が強く示唆される。

時期は，甕・製塩土器等の小片のみからではっきりしないが，おそらく百・後・Ⅱに比定して差し支えないものと考える。



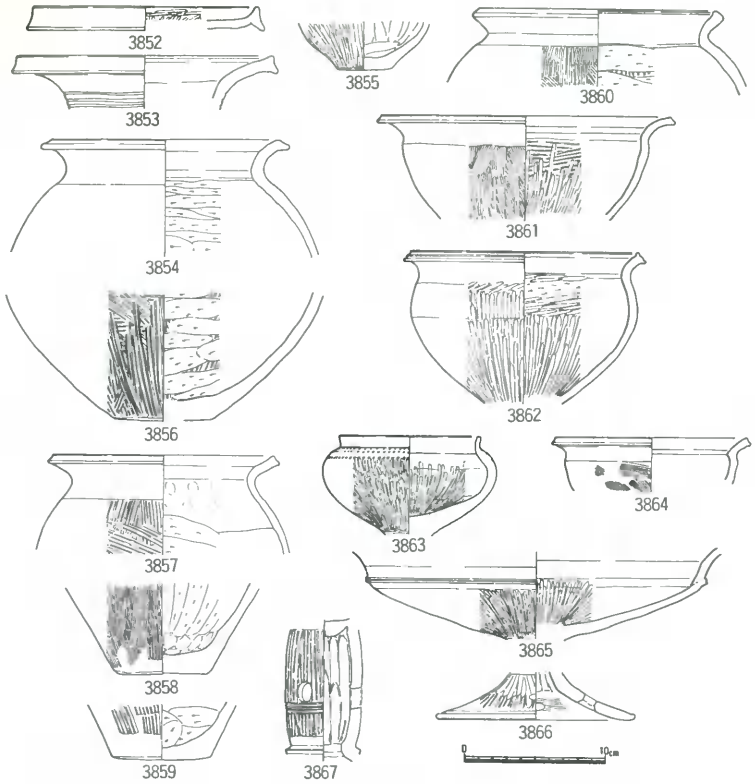
第436図　土　壙-136（1/30）・出土遺物



第437図　土　壙－137（1/30）

土　壙—137（第437・438図）

F-19 杭の西 7 mに 位置する土壙である。ところが 南半分は，現代の用水路によりとばされ，わずかに底部の状況を遺存するにすぎない。遺存部分の規模は，短軸 130cm，深さ 45cmを測る。この形状から，本来のこの土壙の平面形態は，ほぼ東西に長い楕円形と推察される。埋土は，二分層され，その間層には炭と焼土塊の堆積が認められた。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。



第438図　土　壙－137 出 土 遺 物

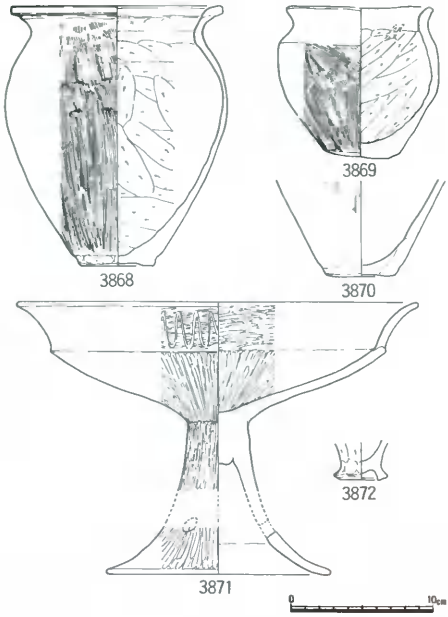
土　壙―138（第439図）

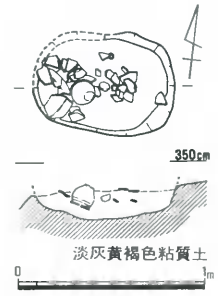
E－19 西辺中央付近で検出された土壙である。土壙は，東西75cm，南北55cm，検出面からの深さ15cmを測るものである。形態は，長楕円形を呈する。この土壙には，淡灰黄褐色粘質土が埋積し，その中からは完形品の甕が1点口縁部を下にした状態で検出された。時期は，出土した土器により百・後・Ⅱ併行期に比定される。

土　壙―139（第440図）

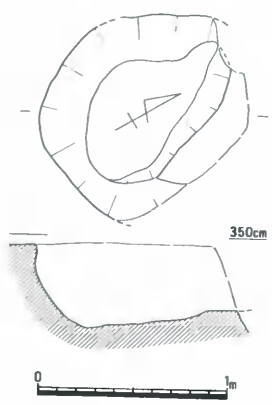
E－19北西隅において検出された土壙である。土壙は，前述した土壙―135の南に隣接する。ところがこの土壙は，その東側を中世の溝―89によって切られ，規模を減じていた。検出面での規模は，南北 105cm，東西 95cmを測る。平面形態は，不定形を呈する。検出面から底面まで

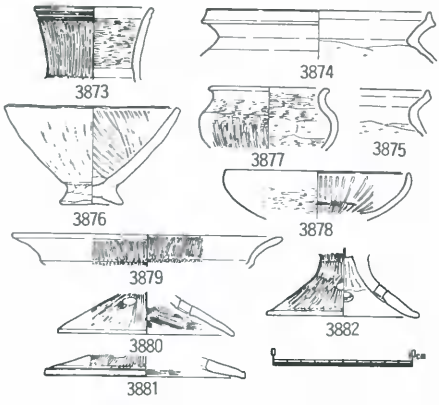
の深さは，約45cmを測る。出土遺物は，台付鉢3876が1点のみ完存していたにすぎず，他の土器はいずれも小片になっていた。それら遺物によれば土壙の時期は，百・後・Ⅲ併行期への位置づけがなされる。竪穴式住居―34・35と共存していた可能性が高い。



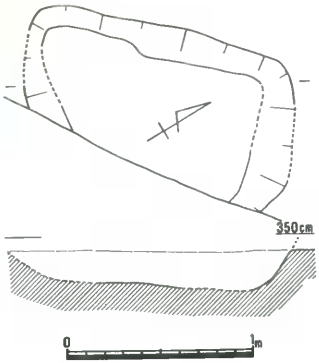


第439図　土　壙―138（1/30）・出土遺物





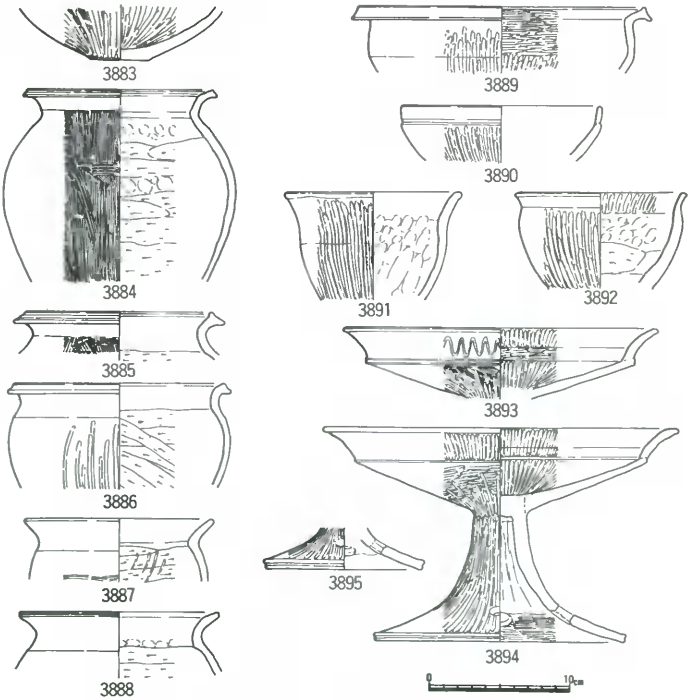
第440図　土　壙―139（1/30）・出土遺物



第441図　土　壙-140（1/30）

土　壙—140（第441・442図）

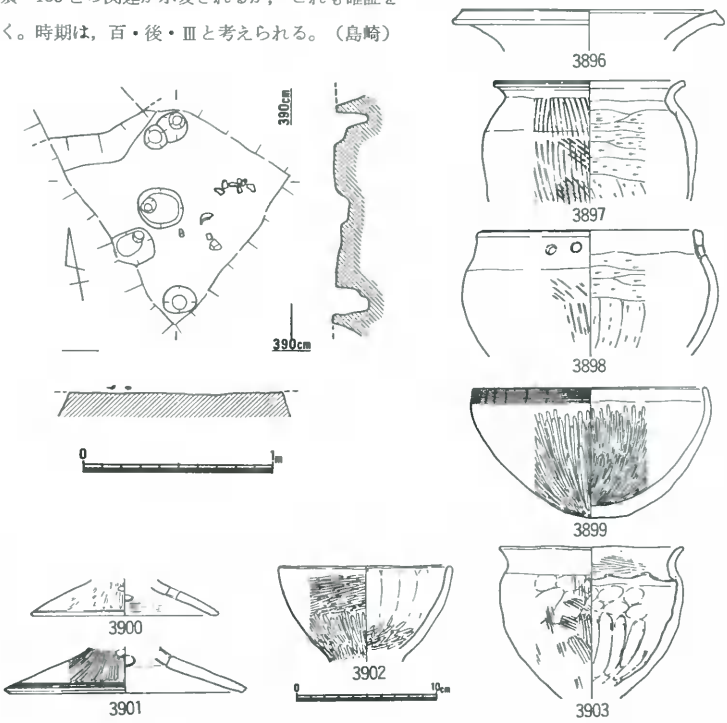
E-19西辺ほぼ中央付近に土壙—138・139と隣接して検出された土壙である。ところが残念なことに調査の際の側溝によりその中央部を抜いてしまい，土層観察の機会を失ってしまった。しかし，残存部分の状況から埋土中には，全体に多くの炭片と焼土塊が含まれていたのが確認された。規模は，長軸で約150cm，深さ約20cmを測った。時期は，出土遺物から百・後・Ⅱに比定できる。



第442図　土　壙-140 出土遺物

土　壙—141（第443図）

F-19杭から北西約4mの地点に検出された土壙である。残念ながらその土壙の北の一部を除いてはすべて後の溝により切られ，全体像が判明しない。床面状に平坦面が検出できたものの住居とするには他方向への定形した広がりが認められない。また溝—44をへだてて所在する土壙—135との関連が示唆されるが，これも確証を欠く。時期は，百・後・Ⅲと考えられる。（島崎）



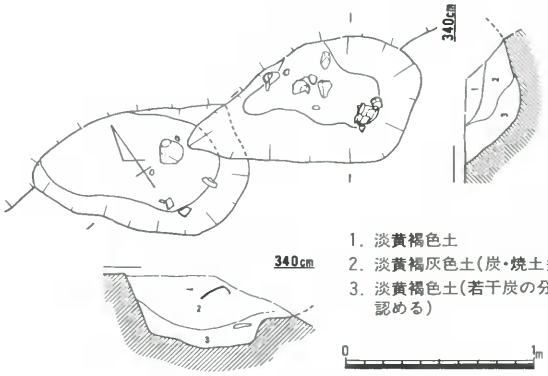
第443図　土　壙-141（1/30）・出土遺物

土　壙—142（第444・445図）

F-18中央部に土壙—143と切り合い関係で検出した土壙である。一部後世の遺構により欠損している。長径113cm，短径66cm，深さ39cmを測り，平面形はほぼ楕円形を呈すると考えられる。壙壁は，比較的急峻で，皿状の器底に移行する。壙内の堆積は，レンズ状の堆積を呈し，2層より炭・焼土を比較的多く検出した。時期は，百・後・Ⅱと考えられる。

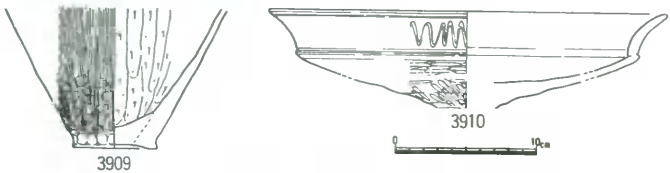
土　壙−143（第446図）

F−18中央部に位置し，土壙−142の西に隣接する。土壙−142とは，切り合い関係を示し，さらに土壙−142同様に後世の遺構に切られ欠損していた。しかし，残存形態によりその全容は推察される。平面形は，不整楕円形を呈し，検出部分の計測値は長軸127cm，短軸68cm，深さ28cmを測る。壙壁は，ゆるやかな傾斜を有し，椀状の壙底に移行する。堆積土は，レンズ状堆積の様相を呈している。2層には，炭・焼土が多く含まれていた。遺物は，各層に含まれていたが図示できるものは少ない。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。



第444図　土　壙−142（右）・143（左）（1/30）

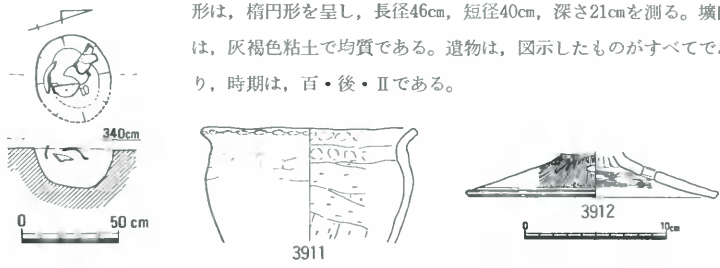
第445図　土　壙−142 出土遺物



第446図　土　壙−143 出土遺物

土　壙－144（第447図）

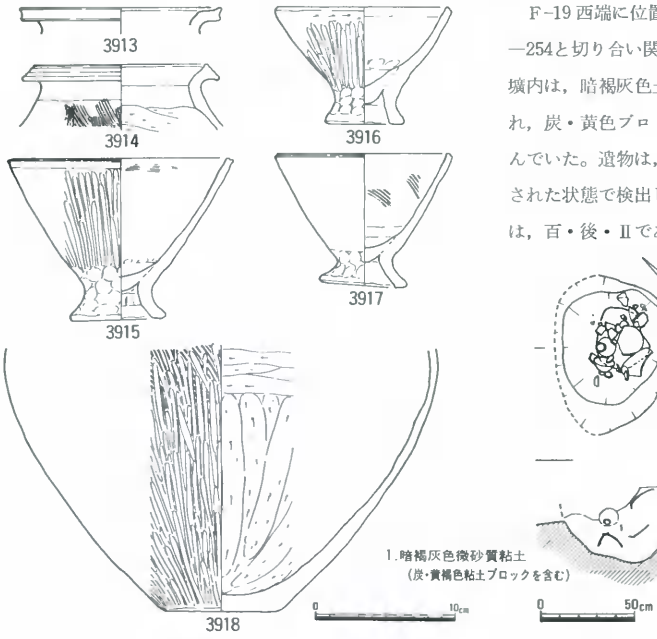
F－18東部分に位置し，土壙－149に隣接し，百・後・Ⅱの柱穴と切り合い関係で検出した。東半分は，古墳時代の溝によって切られ，一部欠損している。平面形は，楕円形を呈し，長径46cm，短径40cm，深さ21cmを測る。壙内は，灰褐色粘土で均質である。遺物は，図示したものがすべてであり，時期は，百・後・Ⅱである。



第447図　土　壙－144（1/30）・出土遺物

土　壙－145（第448図）

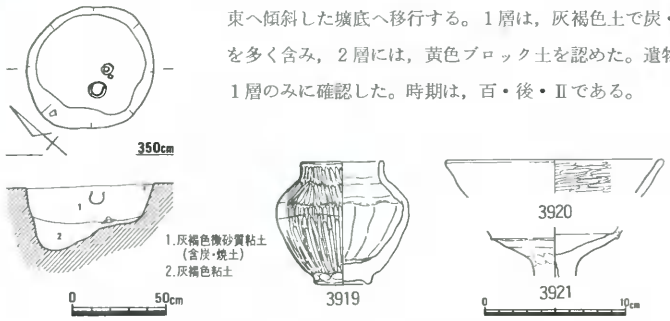
F－19西端に位置し，土壙－254と切り合い関係にある。壙内は，暗褐灰色土で充填され，炭・黄色ブロック土を含んでいた。遺物は，一括投棄された状態で検出した。時期は，百・後・Ⅱである。



第448図　土　壙－145（1/30）・出土遺物

土　壙－146（第449図）

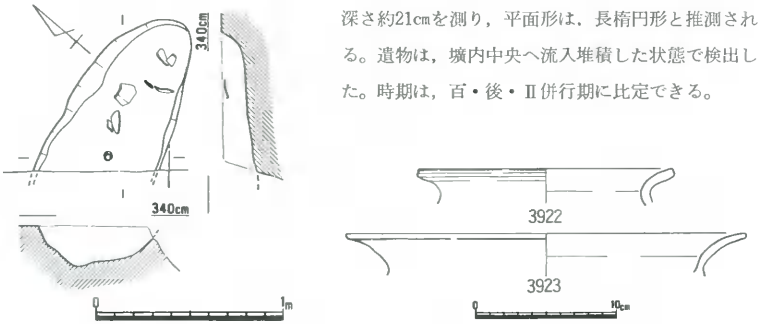
F-18東部分に位置し，土壙－147に隣接する。ほぼ円形のプランを呈する土壙である。長径67cm，短径64cm，最大深35cmを測る。壙壁は急峻で，西から東へ傾斜した壙底へ移行する。1層は，灰褐色土で炭・焼土を多く含み，2層には，黄色ブロック土を認めた。遺物は，1層のみに確認した。時期は，百・後・Ⅱである。



第449図　土　壙-146（1/30）・出土遺物

土　壙－147（第450図）

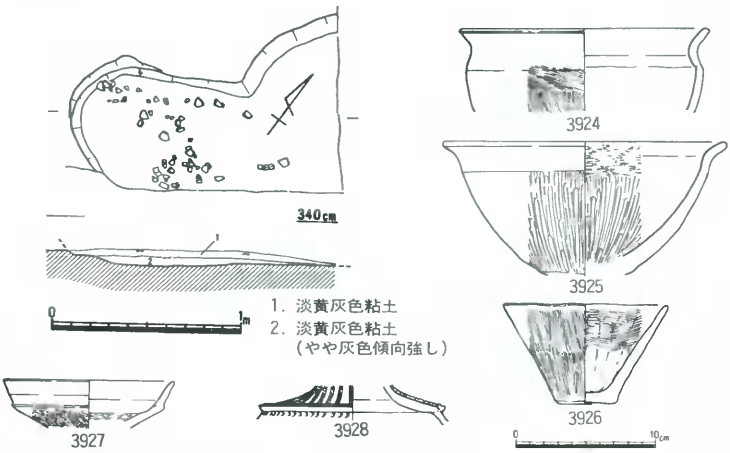
F-18の南端部に位置し，土壙－146に隣接する。側溝により欠損した状態で検出したものである。検出部分の計測値は，長軸79cm，短軸55cm，深さ約21cmを測り，平面形は，長楕円形と推測される。遺物は，壙内中央へ流入堆積した状態で検出した。時期は，百・後・Ⅱ併行期に比定できる。



第450図　土　壙-147（1/30）・出土遺物

土　壙－148（第451図）

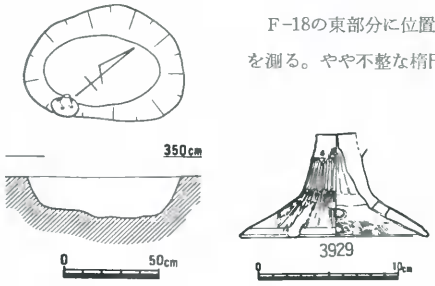
F-19の北東部分に検出した不整形の浅い皿状の土壙である。長径141cm，短径64～95cm，深さ10～20cmを測る。壙内は，全体に炭・焼土を多量に含んでおり，淡灰黄色土の均一な堆積土で充塡されている。時期は，百・後・Ⅲ併行期と考えられる。



第451図　土　壙-148（1/30）・出土遺物

土　壙－149（第452図）

F-18の東部分に位置し，長軸82cm，短軸61cm，深さ22cmを測る。やや不整な楕円形を呈する。壙内は，淡灰褐色土で充填され，一部に灰黄褐色土の土塊を認めた。遺物は，検出面上で高杯の脚部1点検出したのみで他には認められなかった。そのため時期についての詳細は，判然としない。しかし，およそ百・後・Ⅲを大きく遡ってはありえない。



第452図　土　壙-149（1/30）・出土遺物

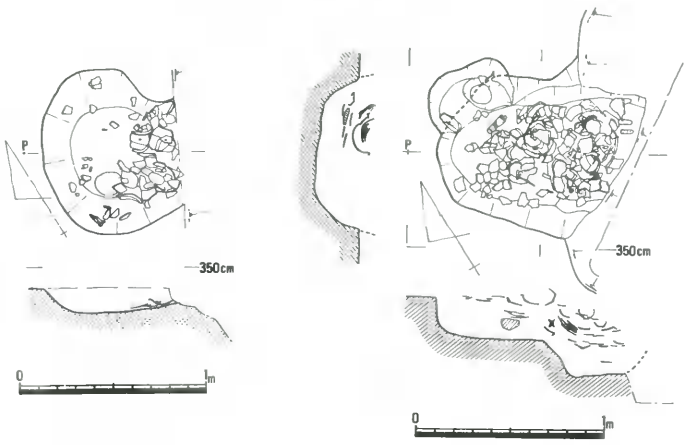
土　壙－150（第453・454図）

E-20杭の北部分に位置する土壙である。しかしその東側の一部は，電話線埋め込み穴の掘鑿により削られており，その約10分の1がとばされていた。したがって全体像の復元は容易である。平面形態は，ほぼ楕円形を呈する。検出部分の計測値は，長軸86cm，短軸72cm，最深13cmを測る。壙内は，褐灰色土により均質に充填され，中には炭・焼土等を多く包含していた。遺物は，おもに遺構の東部分に多く集中し，流れ込みの状況を呈していた。その土器によれば

この土壙の時期は，百・後・Ⅱ併行期に位置づけられる。

土　壙―151（第453・455・456図）

E-20杭の北側部分に前述の土壙―150と一部重複した状態で位置する土壙である。遺構の東側は，土壙―150と同様に電話線埋設のための掘鑿により削られ，欠損した状態で検出された。これは，当初他の遺構の検出作業中に，電話線埋設の穴に完形品の鉢を数点確認したことに端を発する。土壙―150とは時期差がほとんど認められないが，遺構検出面のレベル差により，



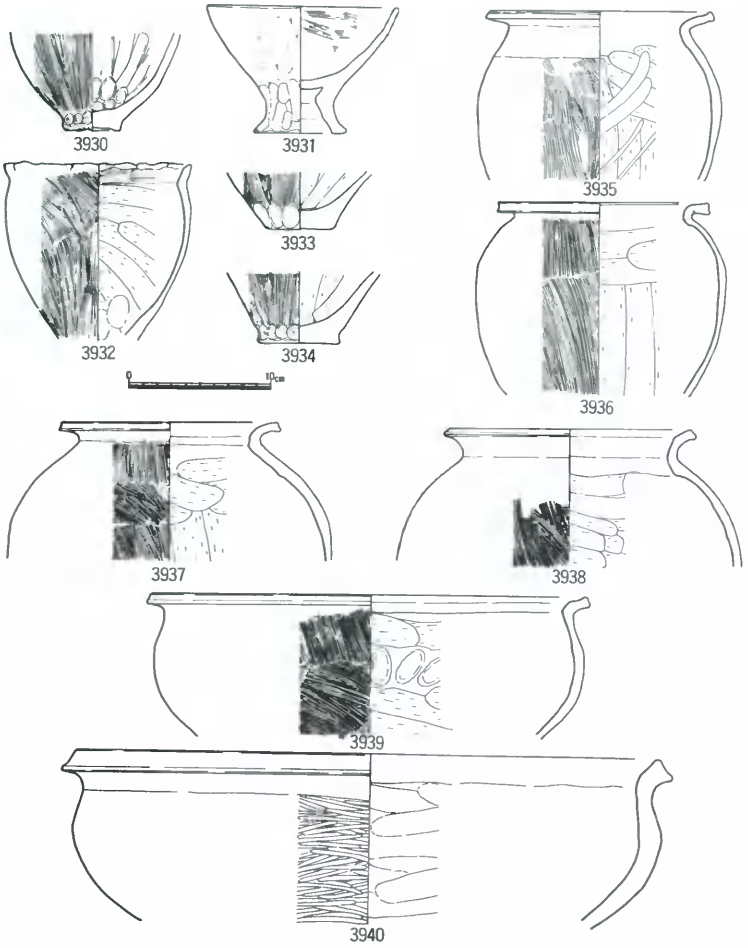
第453図　土　壙-150（左）・151（右）（1/30）

土壙―151の方が古いものと想定できる。平面形は，土壙―152と現代の電話線埋設穴等の攪乱により判然としないものの，ほぼ東西に長い不整楕円形が推測される。検出部分の計測値は，長軸101cm，短軸80cm，最深42cmを測る。壙壁は，急峻で，西から東へ段差をもって壙底部へと移行する。段の比高は，15cmを測る。壙内の埋積状況は，基本的にレンズ状を呈し，炭・焼土を多量に含んでいた。埋積土は，大きく二分層でき，その間層には炭の厚い堆積が認められた。壙内から一括出土した土器は，壙底から若干浮いたレベルにあり，土壙の埋没過程に投棄されたものと推察された。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。

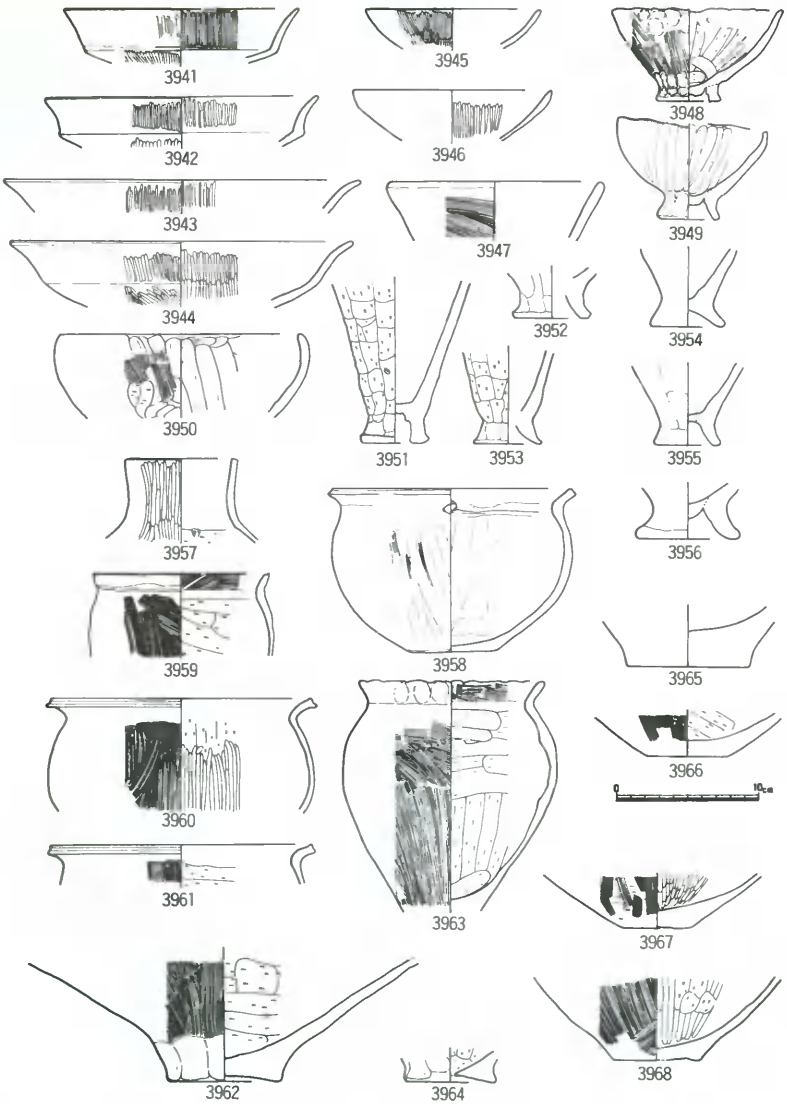
土　壙―152（第457図）

D-20の南西隅近くで検出された不整長円形を呈する土壙である。規模は，長径190cm，短径75～92cm，深さ10～24cmを測る。平面形は，２基の土壙が重なって瓢形を呈し，くびれ部分がみられるものの底面埋積状況等の在り方から１基の土壙と理解される。壙底は，西側が東側よ

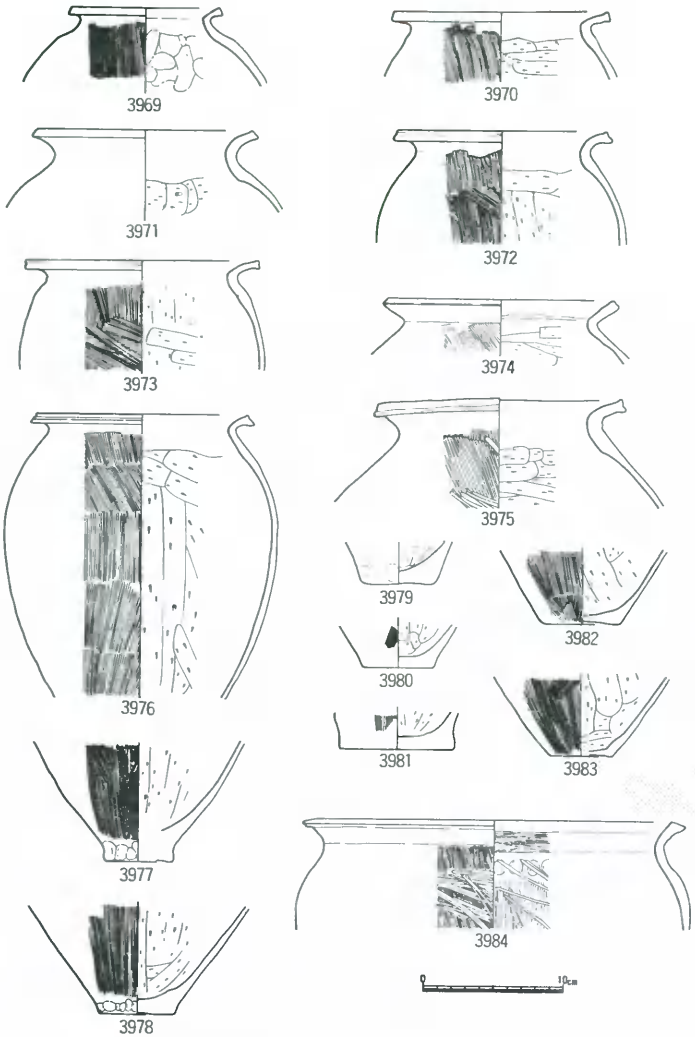
り約15㎝も低く段差があり，層位も東側が先に埋積したことを示している。１層では焼土片や炭が濃密に含まれているが，３層には桃白色の砂がブロック状に固まって出土している。出土遺物には，石錘と微細ながらも土器細片が認められた。時期的には後者の土器の観察によると百・後・Ⅱの範疇に属するとみてよい。



第454図　土　壙-150 出土遺物



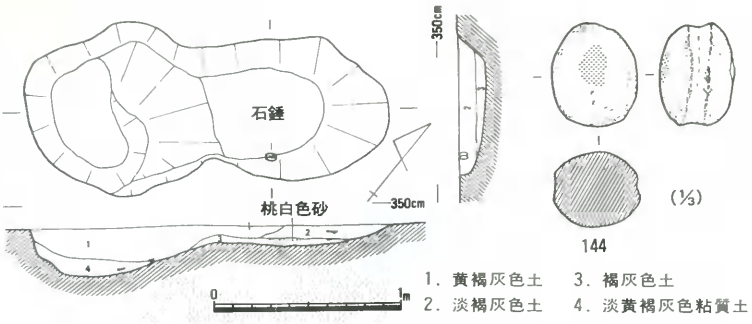
第455図　土　壙-151 出土遺物（1）



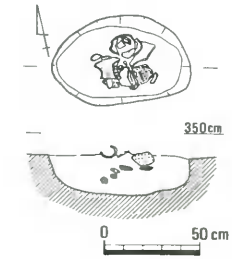
第456図　土　壙-151 出土遺物（2）

土　壙—153（第458図）

D-20の南西隅近く，竪穴式住居—36の東方約4mに位置し，土壙—163の西に接する不整円



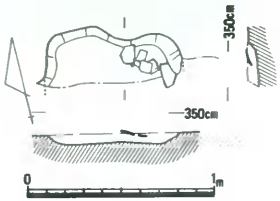
第457図　土　壙-152（1/30）・出土遺物



形の土壙である。規模は，長軸74cm，短軸46cm，深さ22cmを測る。埋積土は，炭・焼土を含む暗褐灰色土で，土層中からは壙底から若干浮いた状態で1辺10cm以上を測る大きな焼土塊や，小礫，土器片等が出土している。

出土した土器には，壺・鉢・甕などが認められるが，おおむね百・後・Ⅱの範疇に比定されるものと推察される。（渡辺）

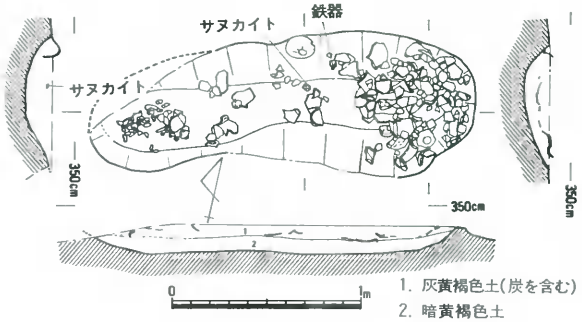
第458図　土　壙-153（1/30）・出土遺物

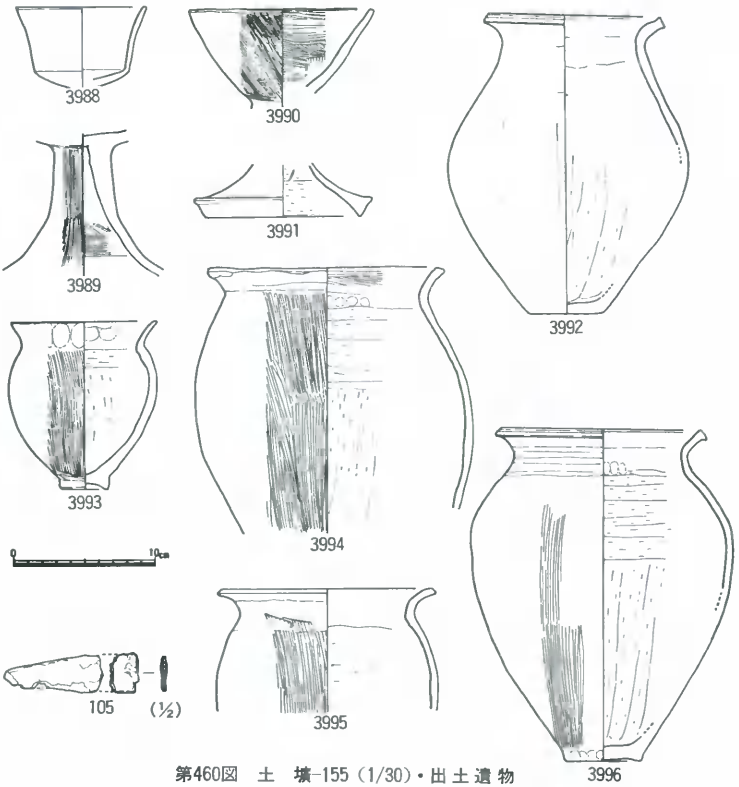


第459図　土　壙-154（1/30）

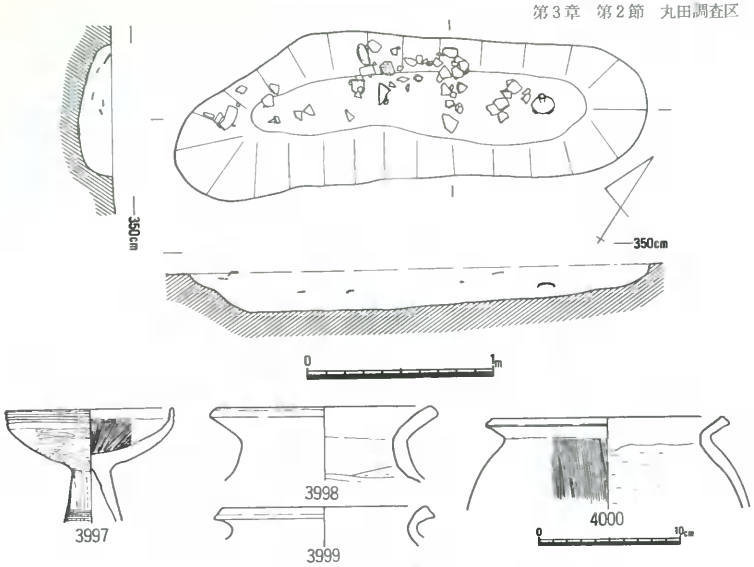
土　壙—154（第459図）

E-20の西辺部で検出された長径72cm，短径30cm以上，深さ約5cmを測る浅い不整形土壙である。埋積土は，炭を含む暗灰黄褐色土で，わずかに細片ながら高杯・甕等が出土している。それによれば，土壙の時期は，百・後・Ⅱに比定される。





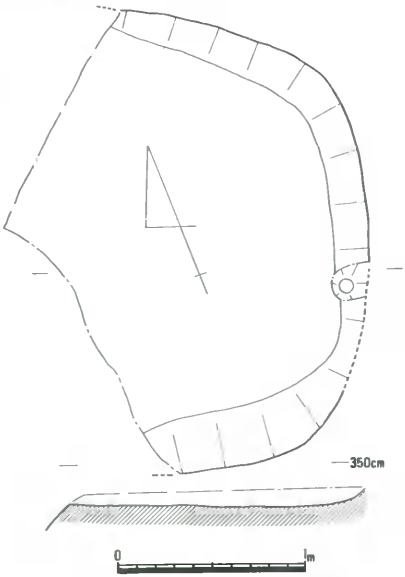
第460図　土　壙-155 (1/30)・出土遺物



第461図　土　壙-156（1/30）・出土遺物

土　壙-155（第460図，図版17-2）

E-20 ラインの南で検出された，長径210cm，短径70cm，深さ14cmを測る浅い長円形を呈する土壙で，西隅部分を新しい時期の掘り込みによって原状を失っている。埋積土は二層であるが，上層の炭を含む暗灰黄褐色土層からの遺物の出土が極めて多い。東隅の集中土器片の大半は甕と壺で，復元可能な個体であった。また西隅の細片土器は灰赤褐色に焼けた製塩土器片である。また刀子と推定される鉄器105は北辺法面下層から出土したものである。これらの土器の他，サヌカイト細片がわずかに出土している。出土土器から，この土壙の時期は百・後・Ⅱに比定されるが，高杯3989や3991などはや



第462図　土　壙-157（1/30）

や趣を異にするものであり，前者は新しい様相，後者はむしろ古い様相がうかがえる。

土　壙—156（第461図）

E-20の南辺西よりで検出された長径252cm，短径70～80cm，深さ約20cmを測る土壙で，ほぼ単一の暗灰黄褐色土が埋積する。この土層には，炭・焼土片及び，土器・小礫・サヌカイト片を含んでいる。壙底は，舟底形を呈し，壙底に密着する土器は少ないが，いずれも出土土器は百・後・Ⅱに属するもので，甕・高杯・鉢などが多い。

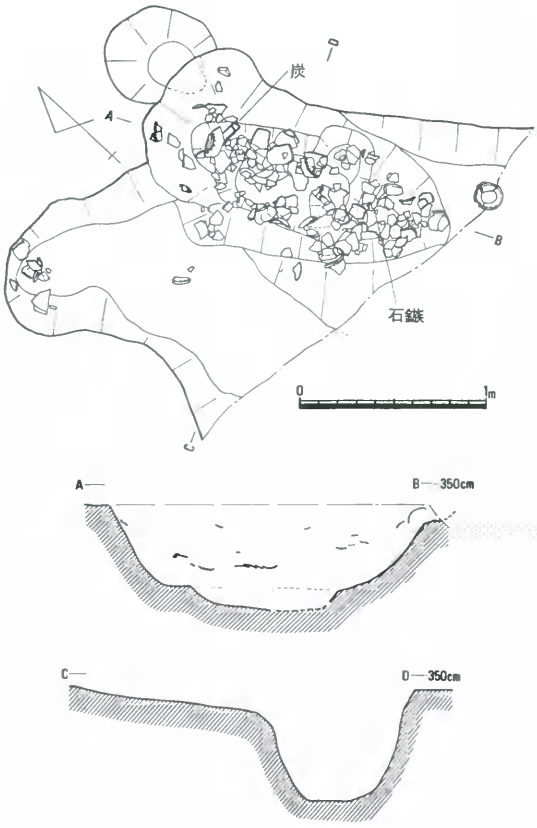
土　壙—157（第462図）

F-20の東隅，ライン近くで検出された長辺約240cm，深さ約8cmを測る浅い土壙で，埋積土は炭・焼土を含む暗灰褐色土であるが，時期を示す土器はわずかな細片の他，ほとんどみられない。層序・埋積土から推定すると，百・後・Ⅱから百・後・Ⅲにかけての土壙と考えられる。

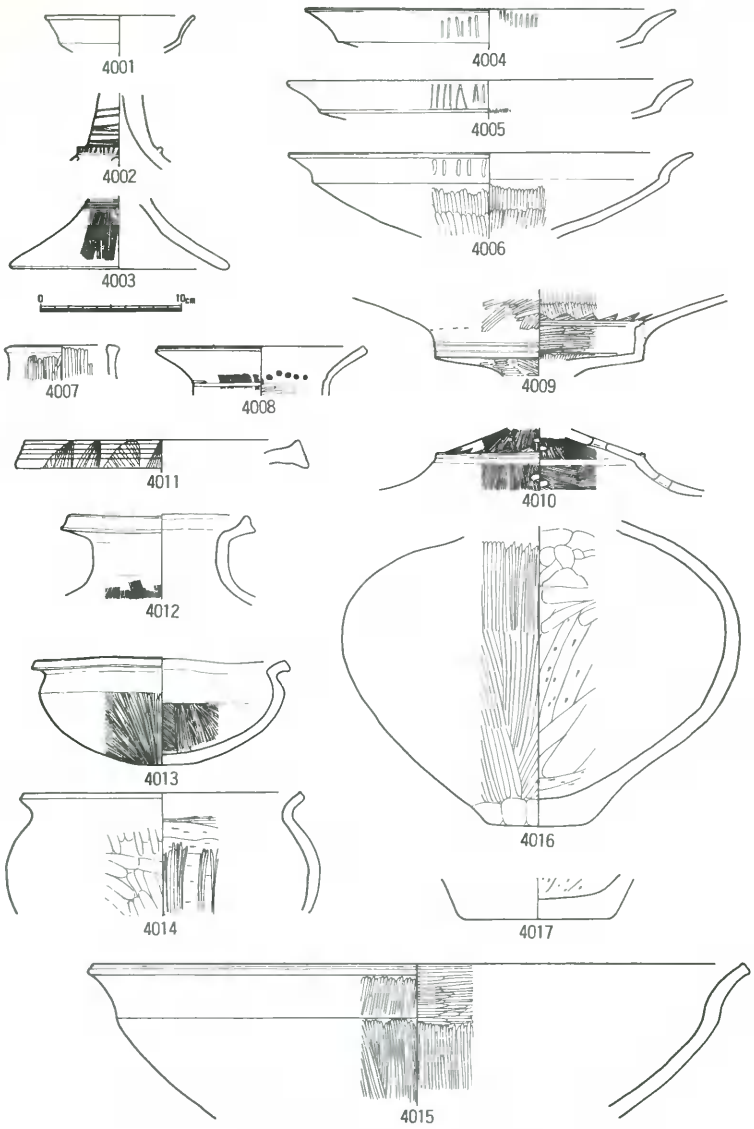
土　壙—158

（第463～465図）

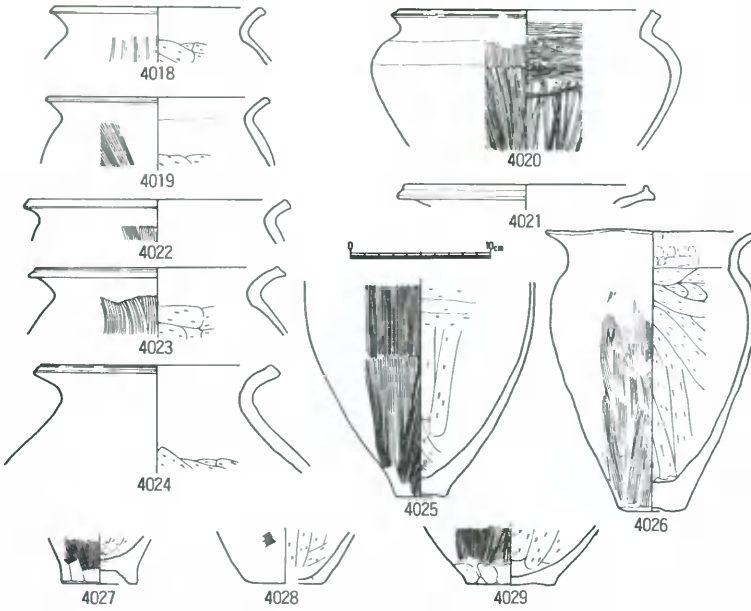
E-20の北隅で検出された不整形の土壙で，おそらく2基の土壙が重複しているものと推定される。中央よりやや北よりの土器集中部分が古い時期の舟形状の土壙と推定され，幅約84cm，残存推定長約180cm，深さ約



第463図　土　壙-158（1/30）



第464図　土　壙-158 出土遺物（1）



第465図　土　壙－158 出土遺物（２）

55cmを測る。また，外周をとりまく浅い土壙は最大幅240cm，検出長240cm，深さ12～16cmを測る。いずれも上層の埋積土はほとんど変わらず，炭や焼土片を含む暗灰褐色土が主体である。舟形状土壙の最下層は，基盤層を形成する黄色土ブロックを極めて多く含み，土器片はほとんど含まず，わずかな炭片・焼土片がみられる程度である。

出土遺物は第464・465図に掲げる土器が主体で，高杯・壺・鉢・甕がみられ，サヌカイト製石鏃も一点出土している。高杯の中には4002や4009・4010のように飾り高杯の出土が注目される。いずれも日常生活用具としての土器が大半で，おおむね百・後・Ⅱに比定される。

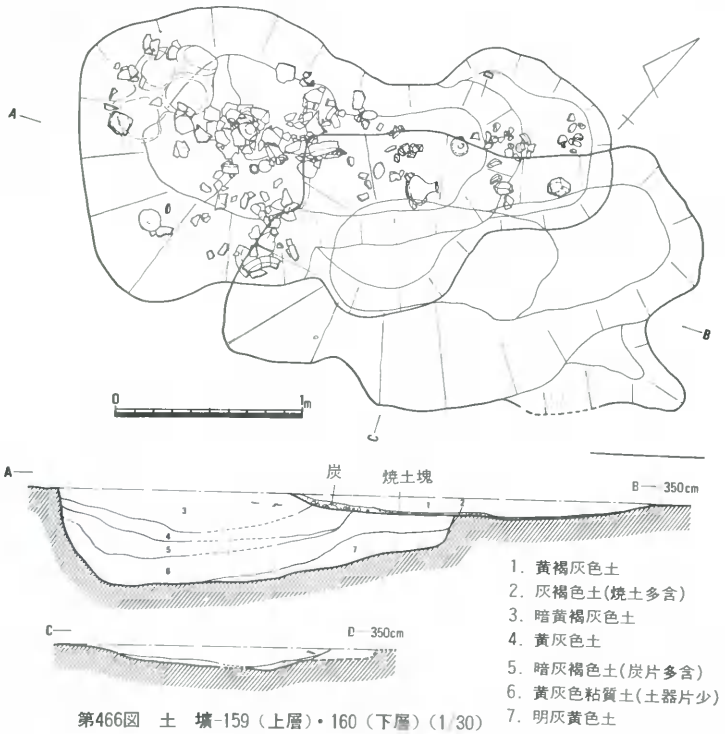
土　壙－159・160（第466～468図）

E-20の北辺ライン上のやや北西よりで検出された土壙である。いずれも不整形な平面形を描き２基の土壙は重複して検出されている。東よりの土壙－159は土壙－160に比べると極めて浅く，炭を含む黄褐灰色土が約10cm堆積し，壙底面は厚さ１～４cmを測る灰褐色土があるがその大半は焼土の塊と炭である。出土遺物は土器片が少量であるが，いずれも百・後・Ⅱの範疇に属するものである。土壙－160は長径290cm，短径95～140cm，深さ28～50cmを測るややいびつな形状を示している。南西側の掘方は急で，壙底ももっとも深いが北東側では一段の浅い

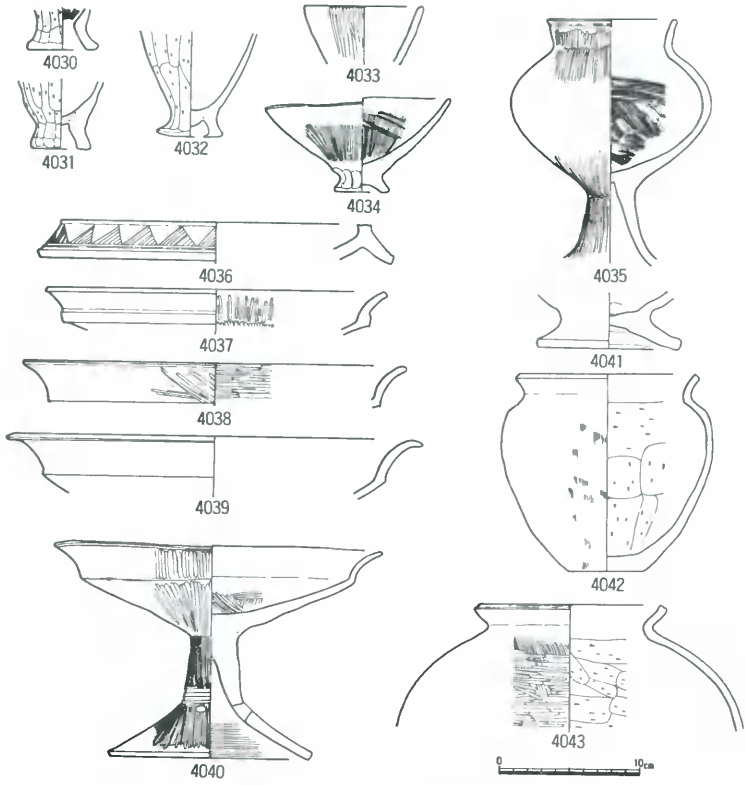
掘方がみられ，さらに先行する土壙の存在も推察される。土壙内には多数の土器片が埋積していたがその多くは，焼土や炭片を極めて多く含む3～5層にかけての層位で出土したものである。6・7層はこの土壙のもっとも古い堆積で，土器細片をわずかに含むほかは，炭・焼土片をわずかに認めるにすぎない。出土遺物は第467図に掲げる製塩土器・鉢・高杯・台付壺・甕などの土器が集中的に出土している。出土土器の器種の中では，甕がもっとも多く中央部から北側にかけて集中的にみられ，4051など完形に復するものもある。時期的にはいずれも百・後・Ⅱに比定される土器である。また，北西隅では，径約25cm，厚さ約20cmを測る灰白黄色の粘土塊4個が近接して出土しており，砂粒を含んでいることから焼成前の土器などの素材と考えられる。このような例は，土壙－134や，土壙－153などにもみられる。

土　壙－161（第469図）

D-20の南辺やや西よりで土壙－159を切った状態で検出された。長径132cm，短径73cm，深



第466図　土　壙-159（上層）・160（下層）（1/30）

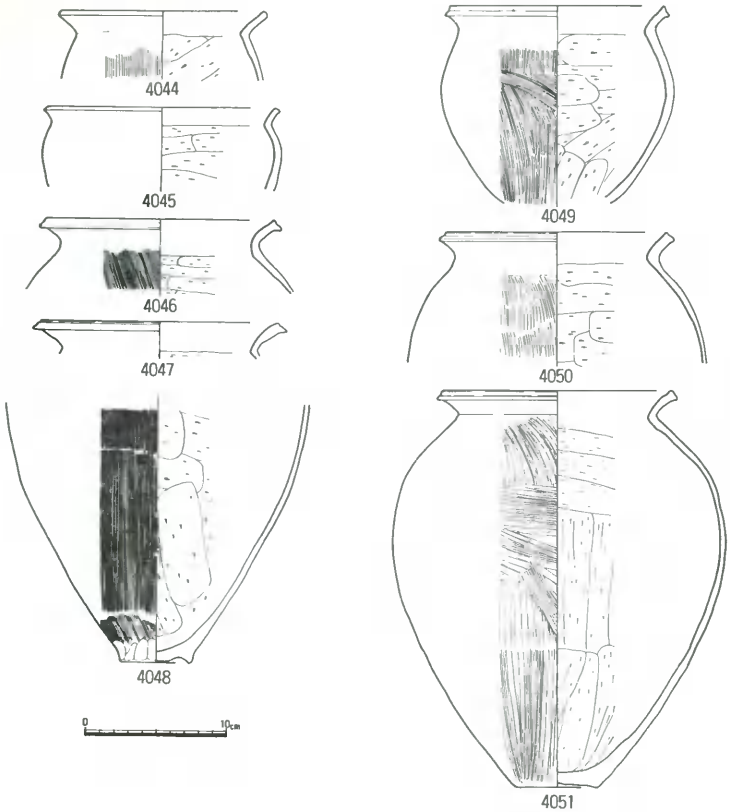


第467図　土　壙-160 出土遺物（1）

さ18～20cmを測る不整な長円形を呈する土壙である。多数の小礫の堆積を特色とし，単一の堆積土である黄褐灰色土中には甕片を主体とする土器片と炭・焼土片が多く含まれている。壙底近くでは炭・焼土片も比較的大きいものがみられるが，平坦な壙底や周壁部分では火を受けた形跡はみられない。小礫はおもに1.2cm～5.6cm前後の円礫で，特に西隅で極めて多く観察される。これらの小礫の下位から砥石 **145** が出土しているが，鉄器に使用された以外に考えられない平滑さと光沢をもった砂岩製の板状砥石である。また土器片の出土も比較的多いが図化が可能なものは少ない。甕・高杯・壺がみられ，いずれも百・後・Ⅱに比定される。

土　壙—162（第470図）

D-20 のやや南より，竪穴式住居—37の北西約 3 mで検出されたややいびつな土壙で，径約



第468図　土　壙−160 出土遺物（2）

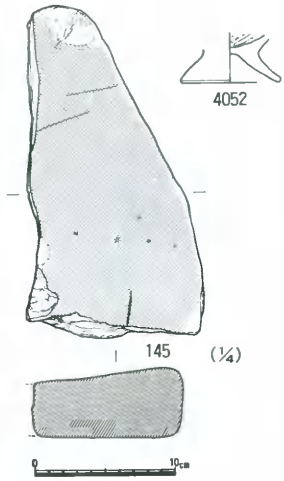
160cm，深さ10cmを測る。埋積土はわずかな炭と焼土片を含む黄褐灰色土で土器細片がわずかに含まれている。層序的には百・後・Ⅰの新相段階から百・後・Ⅱの古相に比定される。

土　壙−163（第471図）

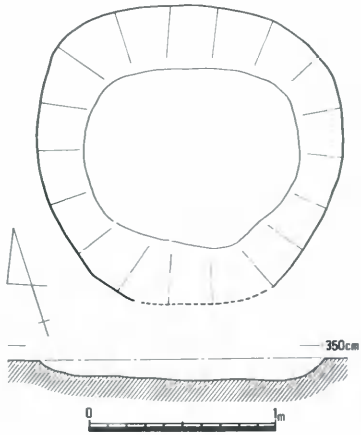
D−20の南西部で検出されたややいびつな円形を呈し，東辺にテラス状の平坦面をもつ土壙である。この上面には土壙−156を先に検出している。テラス部分は約150cmを測り，深さは約9cmである。また中心部は径122〜128cm，深さ約30cmを測る。壙底の一部及び1層と2層の間には濃密な炭が埋積している。出土遺物はわずかな土器細片のみであるが，層位と土壙−156との関係から，時期的には百・後・Ⅰ〜百・後・Ⅱの古相段階に比定される。

土　壙—164（第472図）

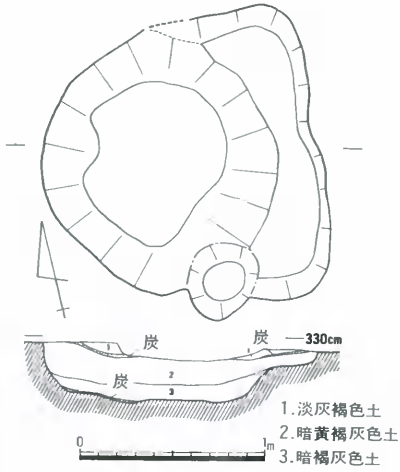
D-20 南辺で検出された不整円形を示す土壙で，長径 100cm，深さ約 40cmを測る。南半分は後世の溝に切られて原状を失っている。埋積土は暗灰黄褐色土で，多量の炭・焼土片を含んでいる。埋積土や層位から，時期的には百・後・Ⅱに比定される。



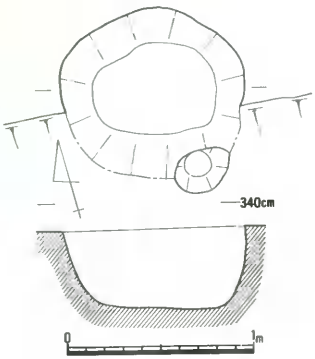
第469図　土　壙-161（1/30）・出土遺物



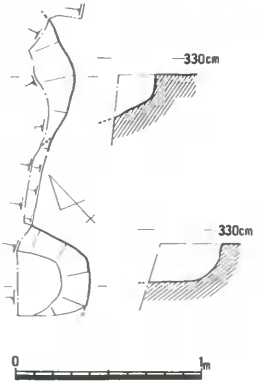
第470図　土　壙-162（1/30）



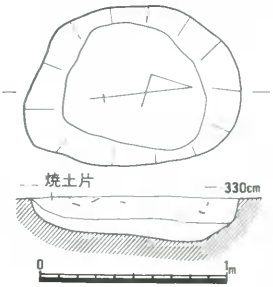
第471図　土　壙-163（1/30）

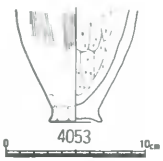


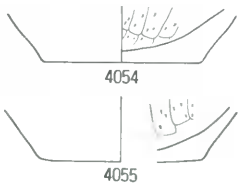
第472図　土　壙−164（1/30）



第473図　土　壙−165（1/30）







第474図　土　壙−166（1/30）・出土遺物

土　壙−165（第473図）

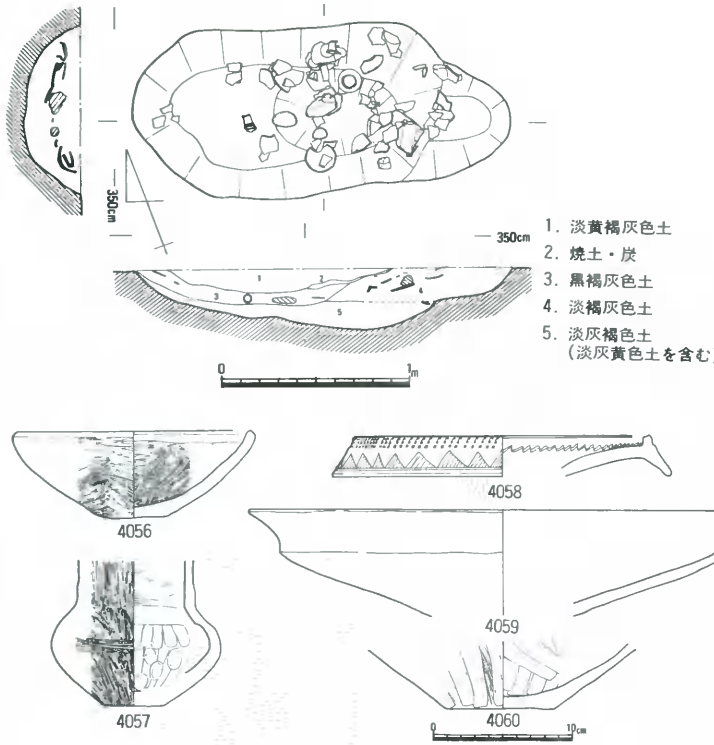
E-20の西辺の，井戸−15の西約2mで検出された土壙で，径50cm以上，深さ約20cmを測る。埋積土は炭を含む褐灰色土であるが，土器は百・後・Ⅱに比定される細片のみである。この土壙の北側約50cmに他の土壙の一部とみられる掘方を検出しているが，やはり炭を含む暗褐灰色土が埋積しており，製塩土器細片がわずかに出土している。時期は百・後・Ⅱの範疇に比定される。

土　壙−166（第474図）

E-20の西辺より，土壙−165の東約50cm，井戸−15の西約100cmで検出されたいびつな長円形を呈する土壙である。長径115cm，短径85cm，深さ20〜25cmを測る。下層には淡灰黄色土と灰色粘質土がブロック層をなし，上層は土器片や焼土，炭を含む暗黄褐灰色土である。出土土器は細片が大半であるが，甕・壺片などが認められ，おおむね百・後・Ⅱに比定されるものである。

土　壙−167（第475図）

E-20の北東，井戸−17の南東方約50cmで検出された土壙で，不整長円形を呈する。長軸199cm，幅約90cm，深さ約32cmを測る。最終埋積土層である1層と3層の境はうすい炭化物・灰層となっているが，1層では，土器の出土は顕著でなく3

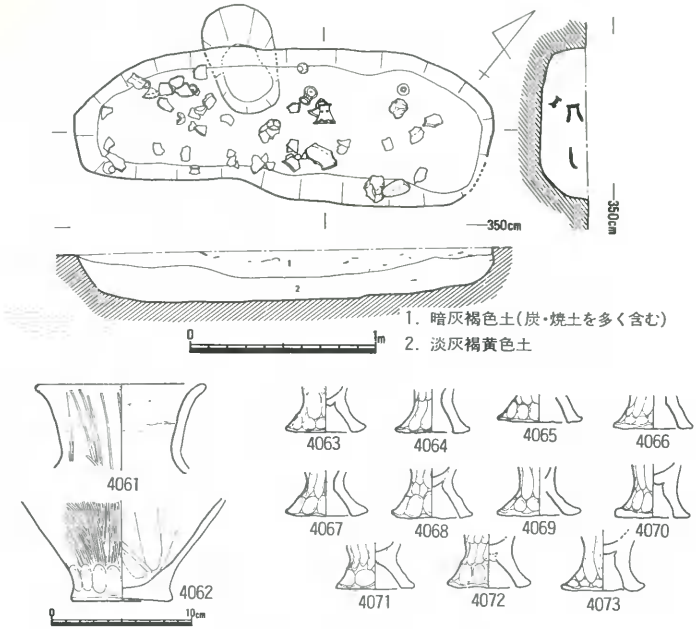


第475図　土　壙-167（1/30）・出土遺物

層・4層にまたがって高杯4059や4058が出土している。最下層である5層は，淡灰黄色土のブロック土や炭斑を含む土層で，製塩土器の細片のみ含んでいる。出土遺物には第475図に掲げる他，砂岩の円礫や比較的大きな角礫がある。出土土器の大片は破片であるが甕片がもっとも多い。鉢4056や壺4057は精製土器で，胎土・形態ともに注目される。時期的には，百・後・Ⅱの範疇に比定されよう。

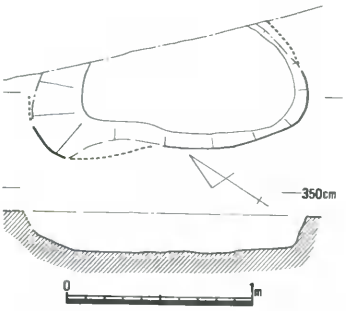
土　壙－168（第476図）

E-21の西辺線に接して検出された，長径222cm，短径約70～80cm，深さ25cmを測る長円形プランを呈する土壙である。E-20からE-21・F-21にかけてはこのような長円形プランを呈する土壙がいくつか検出されているが，いずれも壺・鉢・甕・高杯などの土器の出土に加えて，製塩土器片の出土が目立つことが注目される。この土壙でも図に掲げるように炭・焼土を多く



第476図　土　壙-168（1/30）・出土遺物

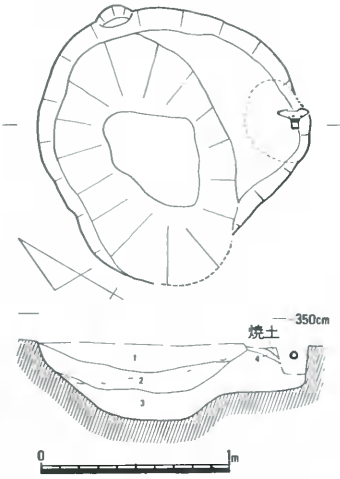
含む暗灰褐色土から製塩土器脚部が多量出土している。また円礫や角礫なども出土しているが，時期を示す高杯脚部片などから推定すると，この土壙の時期は，百・後・Ⅱの古相に比定される。なお，この土壙の北辺の柱穴は，時期的にはこの土壙に先行するものである。

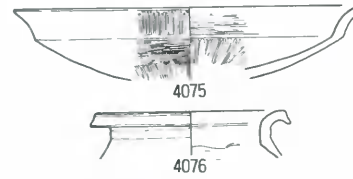


第477図　土　壙-169（1/30）

土　壙—169（第477図）

D-20の西辺ラインに近接し，土壙—168に切られて検出されたいびつな長円形を呈する浅い土壙である。長径145cm，短径60～70cm，深さ約20cmを測り，壙底は比較的平滑である。埋積土は淡灰褐黄色土が埋積しているが，出土遺物はわずかな土器細片がみられるのみである。時期は土壙—168との関係や，層位から百・後・Ⅰないしは百・後・Ⅱの範疇に比定される。





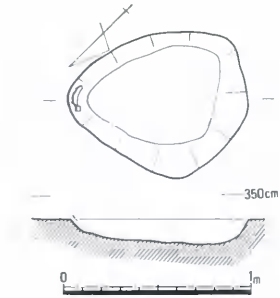
第478図　土　壙-170（1/30）・出土遺物

土　壙－170（第478図）

D-21のやや西より，竪穴式住居－38の北西方約3mで検出された，ややいびつな円形を呈する土壙で，長径145cm，短形140cm，深さ40cmを測る。東辺部は壙底より約15cm高く，平坦なテラス状をなしている。中心部の壙底は幅約40～50cm前後の平坦面をなしている。出土土器は少量であるが2層に集中している。1～3層まで炭・焼土が埋積土中に含まれているが，最下層では炭，土器片は少ない。南東隅にはこの土壙を切る柱穴があり，その抜取穴から百・後・Ⅱの新相を示す高杯

1．淡黄灰色土　3．淡黄褐灰色土
2．灰黄褐色土　4．淡灰黄色土(焼土多含)

が出土している。出土遺物には第478図に掲げるように甕・高杯片などの土器がみられ，おおむね百・後・Ⅱの時期に比定される。

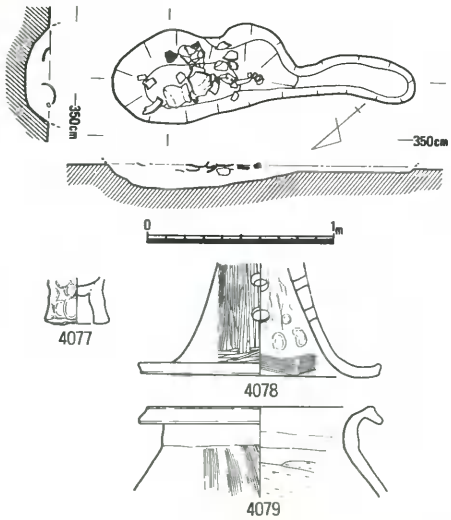


第479図　土　壙-171（1/30）

土　壙－171（第479図）

D-20の西辺より，竪穴式住居－38の西約140cm，土壙－170の東約80cmで検出されたやや角張った不整円形を示す浅い土壙である。長径95cm，短径約75cm，深さ10～13cmを測る。上面には角礫が比較的多くみられ，それらを除去したところ平面形が判明したものである。埋積土は灰褐黄色土で，わずかに土器片が含まれている。

時期的には，層位・埋積土から，百・後・Ⅱの範疇

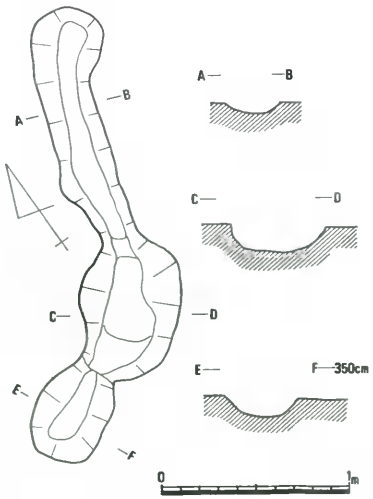


第480図　土　壙-172（1/30）・出土遺物

に比定される。

土　壙—172（第480図）

E-21の西辺で検出された，細長い溝状の土壙である。竪穴式住居—38の北西約120cmにあたる。全長160cm，南端部の幅23cm，深さ2cm，北側の長円形部分の幅約50cm，深さ12cmを測り，長円形の土壙に溝が付設されているような形状を呈している。埋積土は，このいずれの部分も黄褐灰色土であるが北部分では炭や礫が多く含まれ，赤褐色土や褐黄色土がブロックでみられる。また，溝状部分は廃土，製塩土器片，炭などもみられ，灰赤色を呈している。出土遺物の大半は，北側の土壙の本体部分で製塩土器・高杯・甕・壺などの土器がみられるが，図に掲げる他，長頸壺・器台などの細片が出土している。いずれも百・後・Ⅱの古相をよく示している。

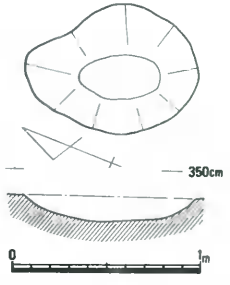


第481図　土　壙-173（1/30）

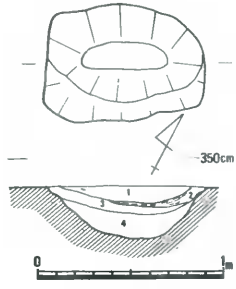
土　壙—173（第481図）

E-21の西辺のやや南よりで検出された土壙—172と類似する溝状土壙で，核となる小土壙2基が南部分で連接し，北側に溝

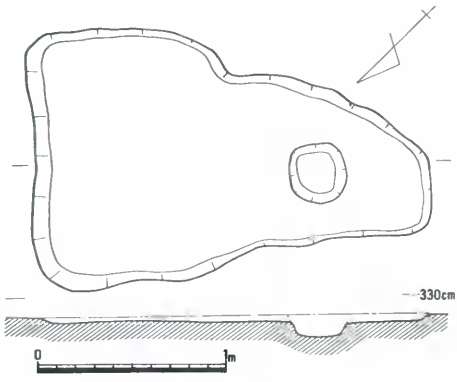
が付設されたかのようにみえる。南端部の小土壙部分は長径51cm，短径（幅）37cm，深さ11cmを測る。次の中心的な土壙の部分は，長径78cm，短径（幅）53cm，深さ16cmを測り，この部分から北へ幅20～37cm，深さ約7cmの溝状部分が続く。埋積土は炭・焼土を含む淡黄褐灰色土で，製塩土器細片を含んでいる。埋積土や層位などから時期は，百・後・Ⅱに比定される。

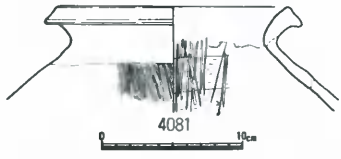


第482図　土　壙-174（1/30）



第483図　土　壙-175（1/30）





第484図　土　壙-176（1/3）・出土遺物

土　壙－174（第482図）

E-21の西辺より，竪穴式住居－38の南西部分を切って検出された不整な長円形を呈する浅い土壙である。長径90cm，短径70cm，深さ12cmを測り，焼土片をわずかに含む淡黄灰色土が埋積している。検出状態や，わずかな出土土器片から，百・後・Ⅳから百・古・Ⅰにかけての時期に比定される。

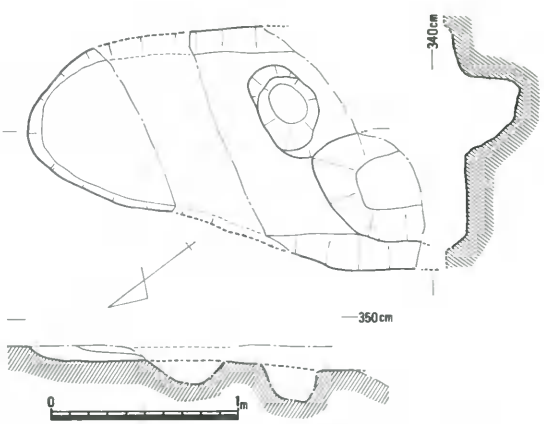
土　壙－175（第483図）

E-21の北辺よりのほぼ中央部分，竪穴式住居－39の東方約3mに位置する。平面形はいびつな隅丸方形を描き緩やかなカーブを描きながら幅狭い壙底に

至る。長径84cm，短径61cm，深さ27cmを測り，四層の埋積土が確認された。2層はうすい炭層が縞状に堆積しているが，埋積土中の全体に炭斑が認められる。出土遺物は最下層から壺の破片が出土しているのみである。時期は百・後・Ⅱから百・後・Ⅲの範疇に比定されよう。

土　壙—176（第484図）

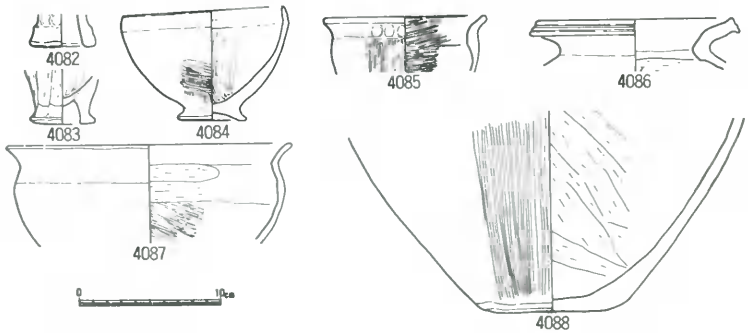
E-20の北辺よりのほぼ中央で検出された不整形な土壙で，全長217cm，幅50～135cm，深さ3～5cmを測る。埋積土は微砂質の灰黄色土で，一部に焼土，炭を含み，覆土としては極めて浅い。この形状から人為的に掘り下げられた土壙ではなく，自然地形のたわみの可能性もある。出土土器には4081の甕があり，おおむね百・後・Ⅱの時期を示している。



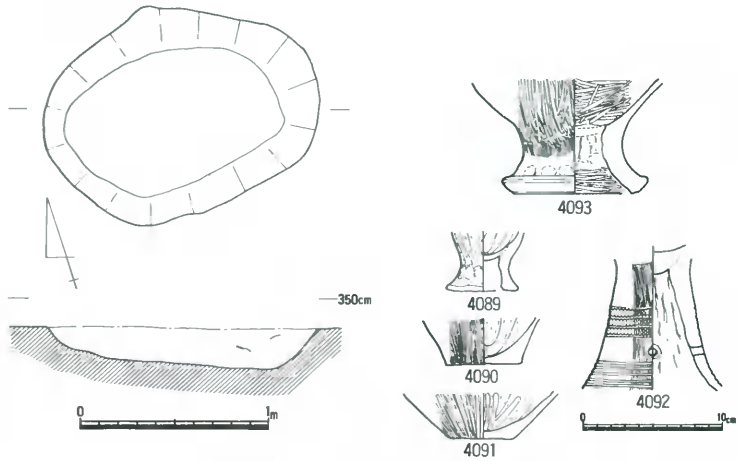
土　壙—177

（第485図）

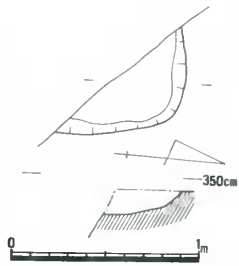
E-21のほぼ中央で検出された，長円形の平面形を一部残す土壙で，竪穴式住居—39の南東約300cmに位置する。残存長210cm，最大幅約120cm，深さ約8cmを測る。後世の溝によって切られ，残存



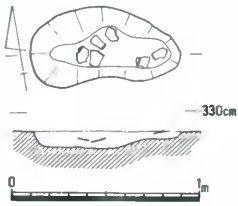
第485図　土　壙-177（1/30）・出土遺物



第486図　土　壙-178（1/30）・出土遺物



第487図 土　壙-179（1/30）



第488図 土　壙-180（1/30）

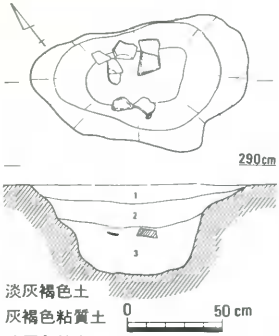
部は少ないが，埋積土である灰黄褐色土中からは土器を主体とする出土遺物がみられる。それらは，製塩土器・鉢・甕・壺などで，いずれも百・後・Ⅱの古相を示している。なお，壙底面で検出した柱穴は，この土壙に先行する。

土　壙—178（第486図）

E-21の西辺ラインの近く，竪穴式住居—39の西約100cmで検出された不整円形を呈する土壙で，長径146cm，短径115cm，深さ21cmを測る。埋積土は，焼土・炭を含む淡灰黄褐色土で単一土層である。壙底面は西から東に緩やかに傾斜しているが，ほぼ平坦である。出土遺物には図に掲げる台付鉢・製塩土器・甕・高杯などがみられるが，おおむね百・後・Ⅱの古相を示すものである。なお高杯4092は，上位の凹線文部分に丹彩が施されており，井戸—16出土の彩文土器や，溝—48出土の長頸壺4373などとともにこの地点に丹彩土器の出土が集中している点は，看過できない。

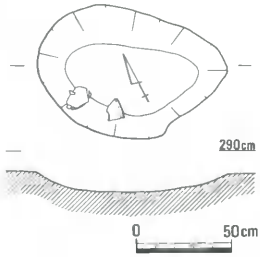
土壙—179（第487図）

E-20の西辺ラインのほぼ中央に接して検出された隅丸

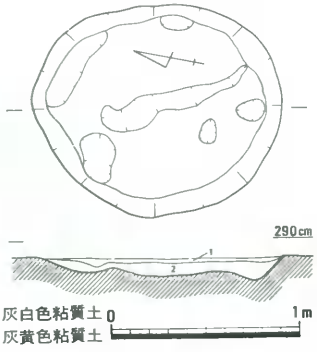


方形を示す土壙で，側溝部分に切られているが残存部の長辺は約70cm，短辺は約45cm，深さ約14cmを測る。埋土は炭・焼土を多く含む灰黄褐色土で，溝—47に時期的に先行すると推定され，おおむね百・後・Ⅱの範疇に比定されよう。

第489図　土　壙-181（1/30）・出土遺物



第490図　土　壙-182（1/30）



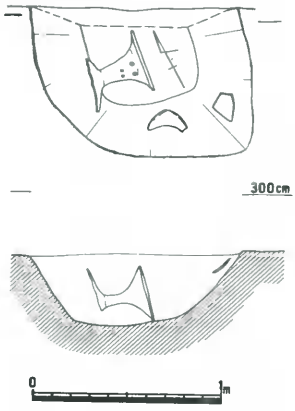
第491図　土　壙-183（1/30）

土　壙—180（第488図）

E-20の北辺よりの中央部，井戸-20の東方約450cmで検出された不整長円形の土壙で，溝—46の掘り上げ後に検出された。長径80cm，短径約37cm前後，深さ約8cmを測る。壙底は東側がやや浅く，西側と約5cmの落差がある。埋土は，淡灰黄褐色土で炭・焼土をわずかに含む。出土遺物は少量の土器片で，壺・甕・高杯・製塩土器脚部片があり，壺片の中には，頸部と体部上位の境に刻み目をもつ凸帯をめぐらす装飾的なものもみられる。おおむね，百・後・Ⅱの古相段階に比定されよう。　（岡田）

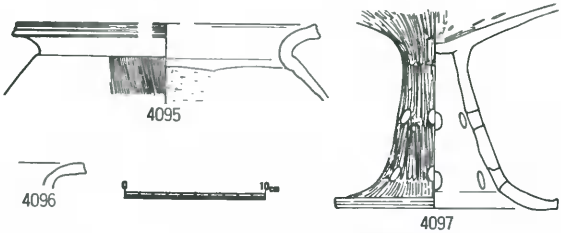
土　壙—181（第489図）

D-21の南西辺より，溝—55の北西方約350cmで検出された土壙で，長径114cm，短径50～70cm，深さ48cmを測り，比較的深い土壙である。埋土は三層からなり，下層からは甕や小礫が出土している。この形状と深さからすると，井戸であった可能性も考えられるが，微高地上で検出した井戸の形状からみると，むしろその可能性は少ないとみるべきであろう。



土　壙—182（第490図）

E-21の東隅部分，溝—55の西約230cmで検出された長円形を呈する土壙である。長径100cm，短径66cm，深さ約10cmを測り，炭を含む淡灰白色粘質土が埋積している。出土遺物には高杯・甕の小片があり，いずれも百・後・Ⅱの古相に比定される。検出位置は水田の下部であり，この部分の水田が開田される以前の微高地上に存在した土壙といえ，本来の規模は現状よりさらに大きかったことが推定される。



第492図　土　壙-184（1/30）・出土遺物

土　壙—183（第491図）

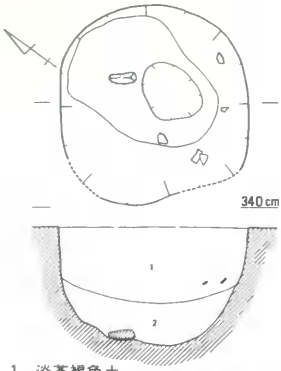
E-21の南東辺近く，土壙—182の南西約180cmで検出された土壙である。長径132cm，短径110cm，深さ9cm前後を測り，壙底にはやや凹凸がみられる。埋積土は上層が灰白色粘土，下層が灰黄色粘土であるがいずれも酸化鉄の凝集が目立つ。わずかな炭・焼土と共に土器数片が出土しているが，百・後・Ⅱの範疇に含まれるものと推察される。この土壙もやはり旧状はさらに大きく，深かったものと考えられるが，その性格・機能については不明である。（渡辺）

土　壙—184（第492図）

E-21の西辺中央部に位置する楕円形の土壙である。西側に約20cmの間隔をおいて土壙が所在する。

土壙は調査地区，時期が異り東西に試掘溝が走り，南北に分断された格好での検出となった。長軸110cm，短軸79cm，深さ43cmを測り断面形は椀形を呈する。掘方にそって炭・焼土粒を含む薄い層が認められ，その上面に高杯・甕等の破片が散布した状況で出土している。そのなかで高杯脚部が横転した状態で出土している。

時期は百・後・Ⅱの古相に比定できる。（高畑）

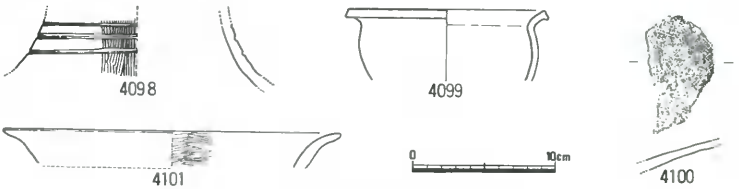


土　壙－185（第493図）

E-21の北に位置し一部を2基のピットに切られ欠損した状態で確認した。平面形態は，不整円形を呈し，長軸107cm，短軸98cm，深さ63cmを測る。壙壁は，かなり急峻で，屈曲して椀状の底面に移行する。土壙内は，炭・焼土の混在を確認した。遺物は，1・2層とも，小片のみ出土しており，図示できるものは少ない。時期は，百・後・Ⅱと考えられる。

土　壙－186（第494図）

E-21のほぼ中央部に位置し，土壙－187・218に

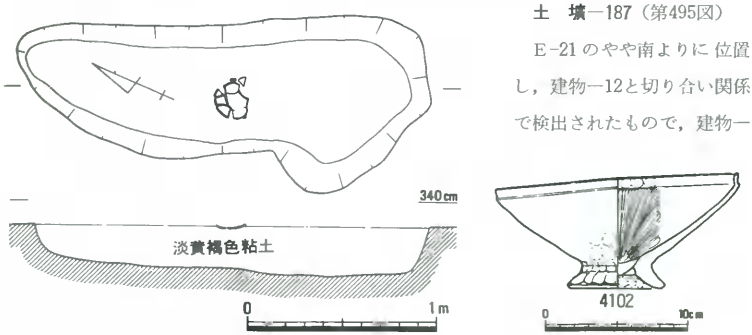


第493図　土　壙-185（1/30）・出土遺物

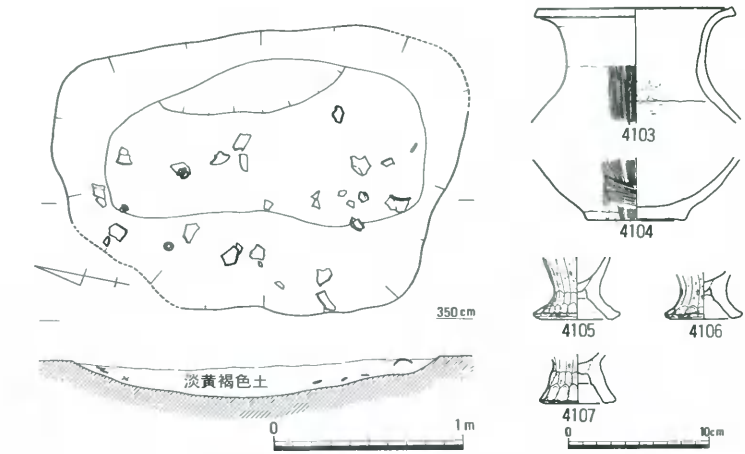
近接する。長軸220cm，短軸93cm，深さ27cmを測り，不整楕円形を呈す。底面は北より南に，やや傾斜している。壙内は，全体に炭・焼土が散在し，淡黄褐色土で充填されていた。遺物は，検出面上に，鉢1点のみ出土している。時期は，百・後・Ⅱと考えられる。

土　壙－187（第495図）

E-21のやや南よりに位置し，建物－12と切り合い関係で検出されたもので，建物－



第494図　土　壙-186（1/30）・出土遺物

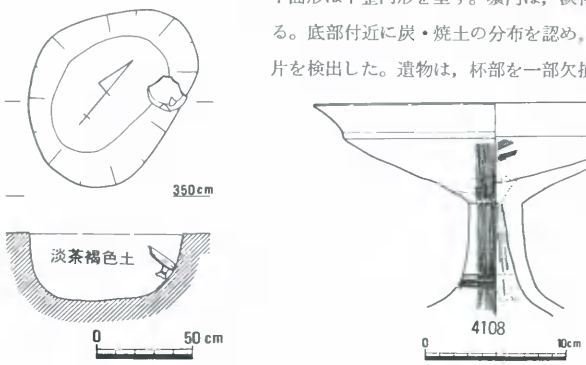


第495図　土　壙−187（1/30）・出土遺物

12より新しいと考えられる。不整楕円形のプランを呈し，長径220cm，短径152cm，最大深さ24cmを測る。壙内は，皿状を呈し，炭・焼土を含む。淡茶褐色土で充塡されていた。遺物は，全体的に散在していたが，中央へ流れ込んだ状況であった。また，遺物は小片化したものが多く，製塩土器が目立った。時期は，百・後・Ⅱに比定できる。

土　壙−188（第496図）

E−21ほぼ中央部に位置し，土壙−186に隣接する。長軸102cm，短軸78cm，深さ36cmを測り，平面形は不整円形を呈す。壙内は，淡褐色土で均質である。底部付近に炭・焼土の分布を認め，サヌカイトの剝片を検出した。遺物は，杯部を一部欠損した高杯1点の

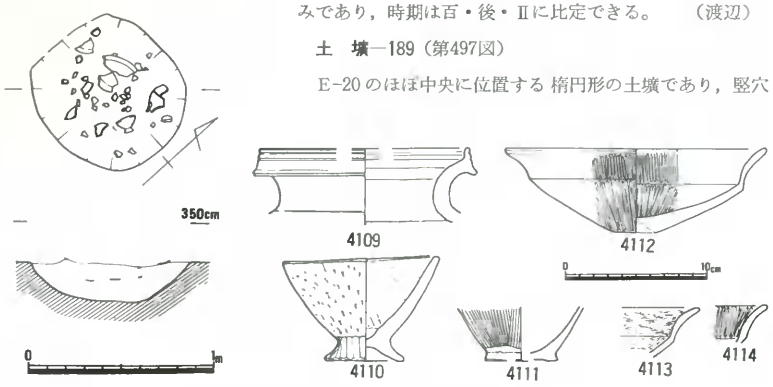


第496図　土　壙−188（1/30）・出土遺物

みであり，時期は百・後・Ⅱに比定できる。　（渡辺）

土　壙—189（第497図）

E-20のほぼ中央に位置する楕円形の土壙であり，竪穴



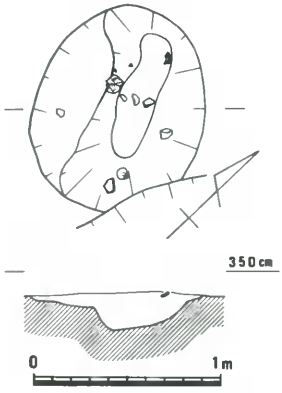
第497図　土　壙-189（1/30）・出土遺物

式住居—32の西側に所在する。西端を近・現代の溝により削除を受けている。長軸80cm，短軸73cm，深さ22.5cmを測り，断面形は椀形を呈する。

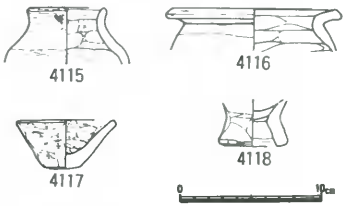
出土遺物は土壙の中層上位より50片以上の土器片が認められ，甕・壺・高杯・台付鉢等がある。時期は百・後・Ⅲの古相に比定できる。　（高畑）

土　壙—190（第498図）

F-21のほぼ中央部で検出された土壙である。その南と東側は，後述の土壙—191と弥生時代後期末頃の水田面の造成等により切られていた。



平面形態は，東西90cm，南北110cmを測り，ほぼ楕円形を呈する。断面は，二段掘りの形状を示し，底部の平面形もいびつな長楕円形を呈している。検出面からの深さは，最深部で18cmを測る。壙内は，炭を含んだ黄茶褐色土で埋積されていた。時期は，百・後・Ⅱ



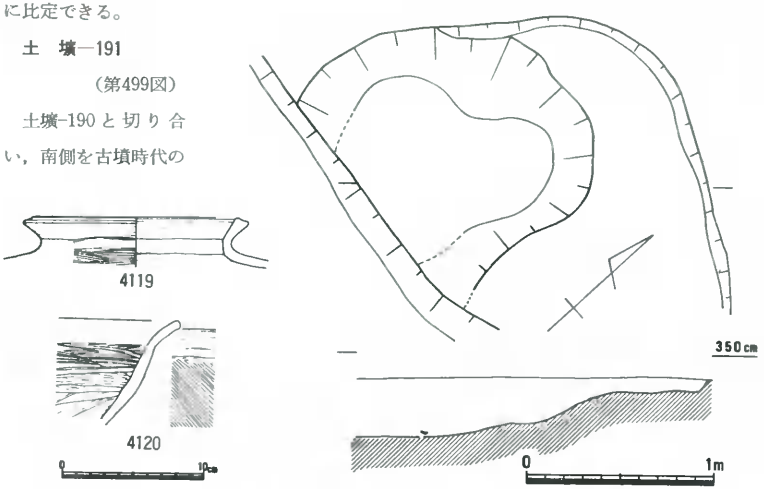
第498図　土　壙-190（1/30）・出土遺物

に比定できる。

土　壙—191

（第499図）

土壙-190と切り合い，南側を古墳時代の

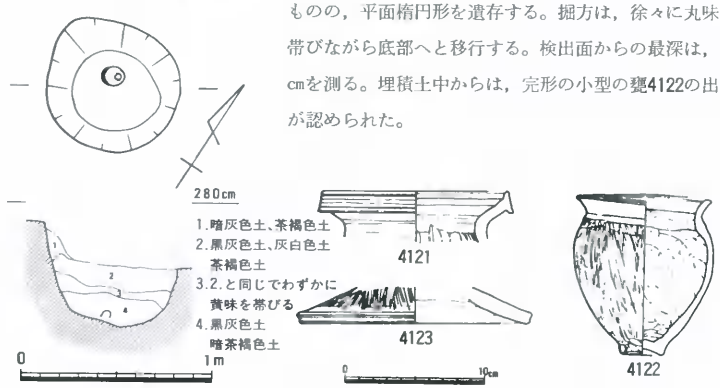


第499図　土　壙-191（1/30）・出土遺物

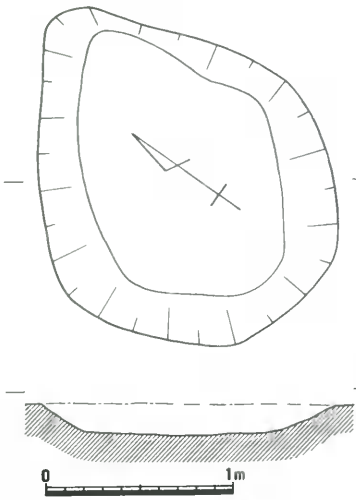
溝—78，東側を弥生時代後期末の水田により削平されていた。平面形態は，いびつな隅丸方形を呈していた。土壙の底は，北東側では一部平坦で，徐々に深くなり，最深約30cmを測る。埋積土中からは，少量の土器片の出土が認められた。時期は，百・後・Ⅱと考えられる。

土　壙—192（第500図）

F-21中央やや東に位置する土壙である。この土壙は，近世溝による上面削平を受けているものの，平面楕円形を遺存する。掘方は，徐々に丸味を帯びながら底部へと移行する。検出面からの最深は，55cmを測る。埋積土中からは，完形の小型の甕4122の出土が認められた。



第500図　土　壙-192（1/30）・出土遺物

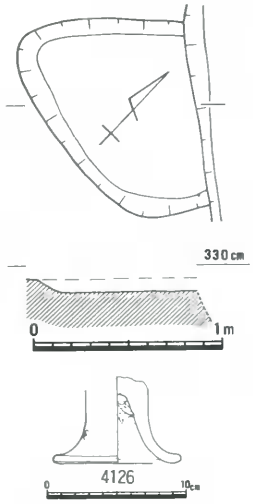


第501図　土　壙-193（1/30）・出土遺物

時期は，百・後・Ⅱに比定できる。

土　壙―193（第501図）

F-21東辺で土壙―194の南側に近接して位置する土壙である。平面形態は，南北200cm，東西170cmを測り，いびつな隅丸方形を示す。断面は，皿状を呈し，深さ17cmを測る。壙内は，黒灰淡茶褐色土で埋没しており，若干の土器の出土がみられた。土器は，細片のみであるが，百・後・Ⅱに位置づけられるものである。



第502図　土　壙-194（1/30）・出土遺物

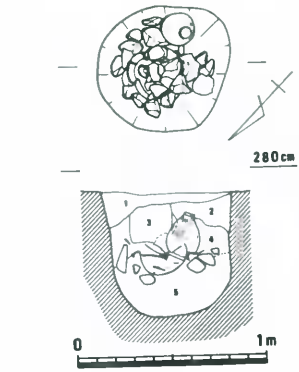
土　壙―194（第502図）

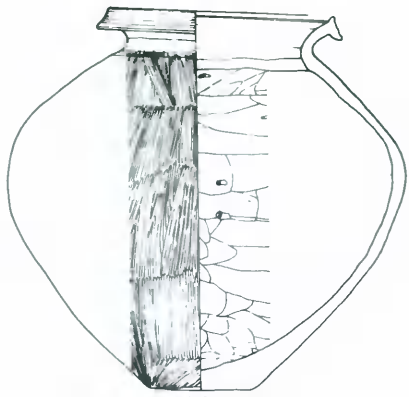
F-21東辺のほぼ中央部に位置する土壙である。井戸―22の西側に所在し，北東部を近世溝によって切り取られていた。平面形は，いびつな方形を呈する。深さは，約7cmと浅い。土壙内は，暗灰褐色土で埋没しており，遺物の出土はあまりみられなかった。図化できたのは，1点のみである。時期は百・後・Ⅱに比定できる。

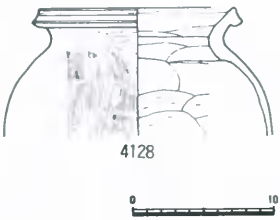
土　壙―195（第503図）

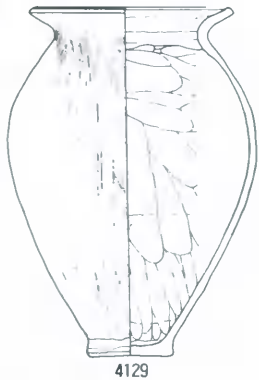
F-22西辺で溝―55に接して検出された土壙である。平面形態は，68×70cmとほぼ円形に近い形態を示し，検出面からの深さ67cmを測る。掘方は，底部へとほぼ垂直に下がり，若干丸味をもって終了する。土壙内の埋没状況は，中層やや下部において河原石の整然とした詰め込みが認められ，その上位には壺・甕・製塩土

器底部片等が包含されていた。この土壙埋没過程での河原石の詰め込みの性格については判然としない。時期は，百・後・Ⅱに比定される。（二宮）







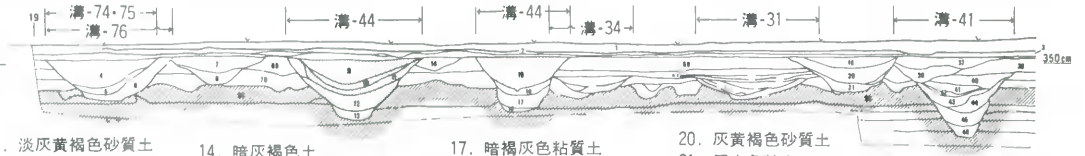


第503図　土　壙-195（1/30）・出土遺物

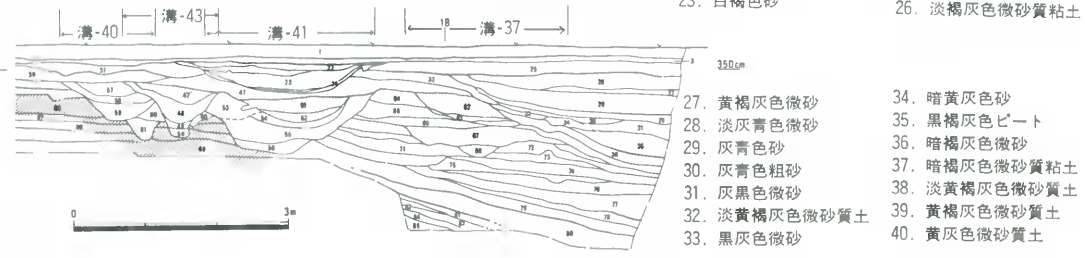
土　壙－196～253

これらの土壙については，遺物の出土がまったく認められなかったことから割愛した。個々の土壙の規模等については，表－26の土壙一覧表の中に掲載した。（島崎）

1．灰青色土
2．黄灰色砂質土
3．明黄灰色砂
4．淡灰褐色微砂粘土
5．暗灰褐色微砂粘土
6．淡灰黄褐色砂質土
7．褐灰色土
8．暗褐灰色土
9．黄褐色砂質土
10．淡灰黄褐色砂質土



11．淡灰黄褐色砂質土
12．淡灰黄色砂質土
13．暗灰褐色粘質土
14．暗灰褐色土
15．黄褐色砂質土
16．暗褐灰色粘質土
17．暗褐灰色粘質土
18．暗灰褐色粘質土
19．灰黄褐色砂質土
20．灰黄褐色砂質土
21．灰白色粘土
22．白褐色粗砂
23．白褐色砂
24．淡白褐灰色微砂
25．淡褐灰色粘質土
26．淡褐灰色微砂質粘土



27．黄褐灰色微砂
28．淡灰青色微砂
29．灰青色砂
30．灰青色粗砂
31．灰黒色微砂
32．淡黄褐灰色微砂質土
33．黒灰色微砂
34．暗黄灰色砂
35．黒褐灰色ピート
36．暗褐灰色微砂
37．暗褐灰色微砂質粘土
38．淡黄褐灰色微砂質土
39．黄褐灰色微砂質土
40．黄灰色微砂質土

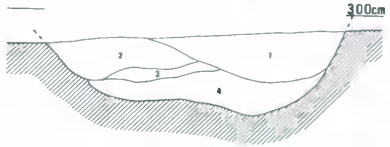
41．淡灰色微砂
42．灰黄色微砂
43．褐灰色粘土
44．黄灰色微砂
45．暗褐灰色粘土
46．暗灰青色粘土
47．淡灰黄色微砂
48．淡青灰色粘質土
49．暗灰青色粘土
50．青灰色粘土
51．淡灰黄色微砂
52．白灰黄色微砂
53．炭斑
54．黒青灰色粘土
55．灰青色粘土
56．暗灰青色粘土
57．淡黄褐灰色土
58．褐灰色粘質土
59．暗褐灰色粘質土
60．暗褐灰色粘質土
61．灰褐色土
62．淡灰黄色微砂
63．灰青色微砂質粘土
64．淡灰褐黄色土
65．淡灰黄色土
66．黄褐灰色土
67．黒青灰色粘質土
68．灰青色砂含粘質土
69．淡灰褐色土
70．褐灰色微砂粘土
71．黄青灰色粗砂
72．黄灰青色粗砂
73．黒灰色粘土
74．黒青灰色粘土
75．灰黒色粘質土
76．青灰色粘土
77．褐灰色微砂質粘土
78．黒灰色微砂粘質土
79．青灰色微砂粘質土
80．淡褐灰色微砂
81．淡青灰色微砂
82．淡青灰色砂
83．褐灰色微砂質粘土
84．黒灰色粘土
85．暗青灰色粘土
86．明黄色基盤
87．黄褐灰色土
88．淡灰黄褐色土
89．灰黄色粘質土

第504図　南壁土層断面（1/80）

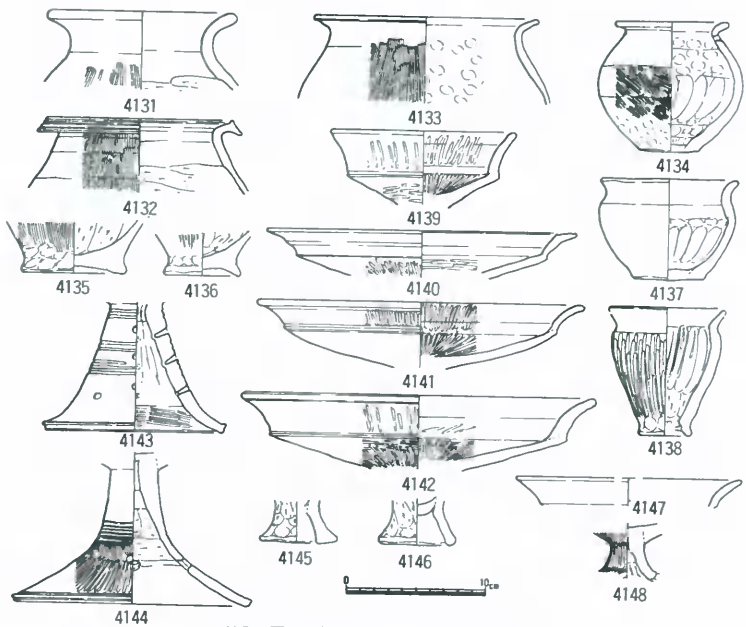
（6）　溝

溝－37（第505図）

E－17からF－18にかけて検出された溝である。ところがこの溝は，古墳時代の溝－73の開鑿によりその北半分が切られ，さらにその上面も弥生時代後期末頃の水田耕地の微高地部への拡大進出に伴う削平により，大部分はとばされ完存しなかった。ここで検出できたのは，わずかに全長約23m，幅80～180cm，深さ20～40cmを測るものであった。溝底の海抜は，263cmから240cmと北から南への下降が認められた。溝の時期は，出土した土器から百・後・Ⅱ併行期への位置づけができる。ただし，高杯4147・4148に関しては後の弥生時代後期末頃の水田に伴っていた遺物で，それが何らかの契機に混入した可能性が強い。



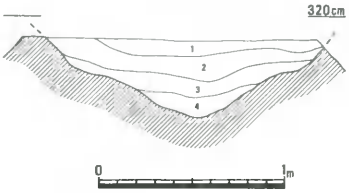
1. 暗褐灰色粘質土
2. 淡質褐灰色砂質土
3. 淡白褐灰色砂（ブロック）
4. 褐灰色砂質土



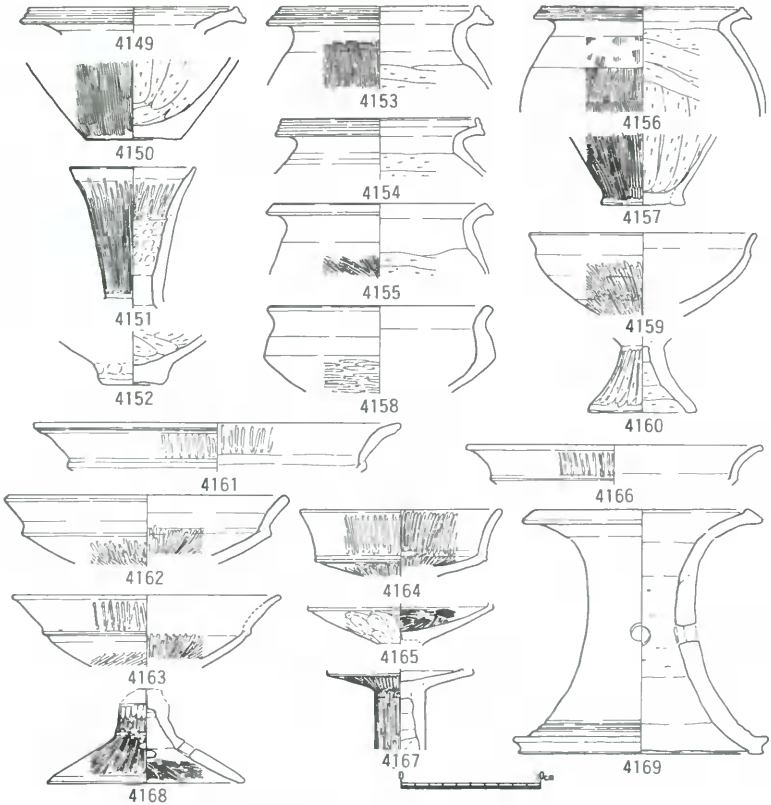
第505図　溝－37（1/30）・出土遺物

溝－38（第506図）

D－17からE－17にかけてほぼ南北に流走する溝である。ところが，この溝も前出の溝－37同様に南半部は弥生時代後期末の水田用水路の開鑿により，またその上面のほとんどは水田耕地の微高地部への拡大進出等により削平されていた。したがって遺存する溝の規模は，全長約16m，幅70～80cmを測るにすぎない。溝底の海抜は，約250cm



1．淡黄褐灰色砂質土　3．灰褐色砂質土
2．褐灰色砂質土　4．灰青色微砂質粘土



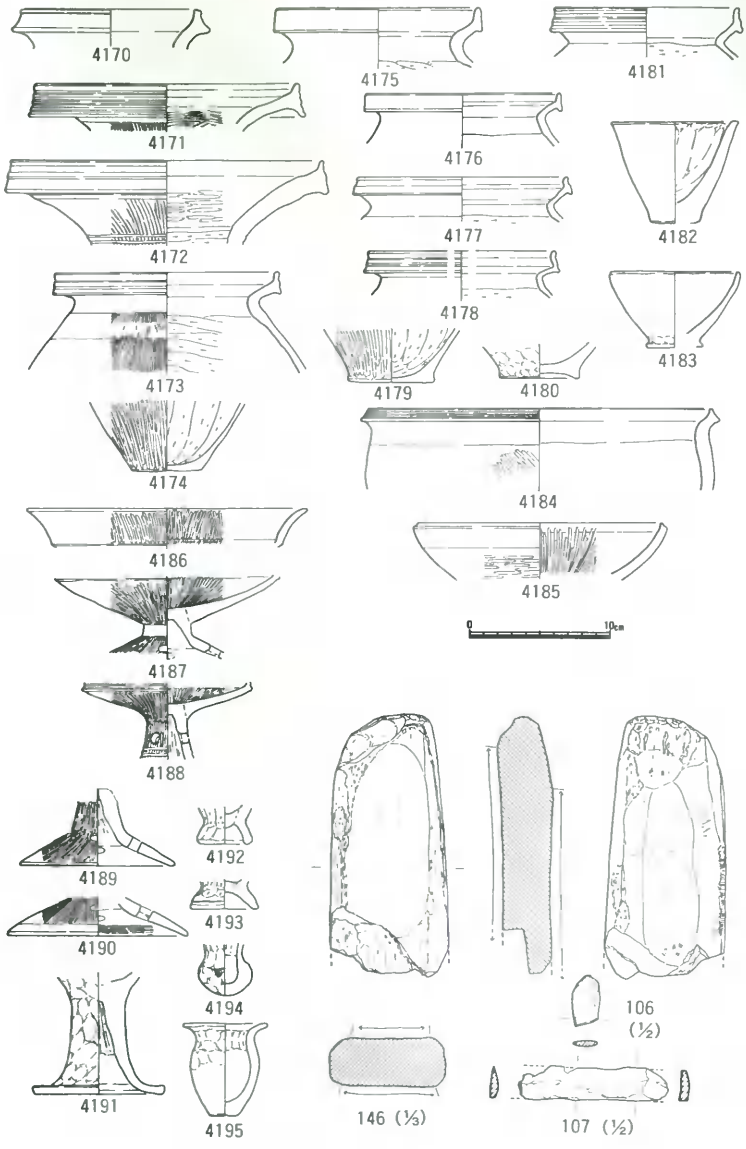
第506図　溝－38（1/30）・出土遺物

に位置する。埋積土は，ほぼ水平堆積を示し，小片ながら多くの土器が出土した。溝の時期は，出土した土器により百・後・Ⅱ併行期に位置付けられる。4163・4165・4166・4168は，混入の可能性が高い。

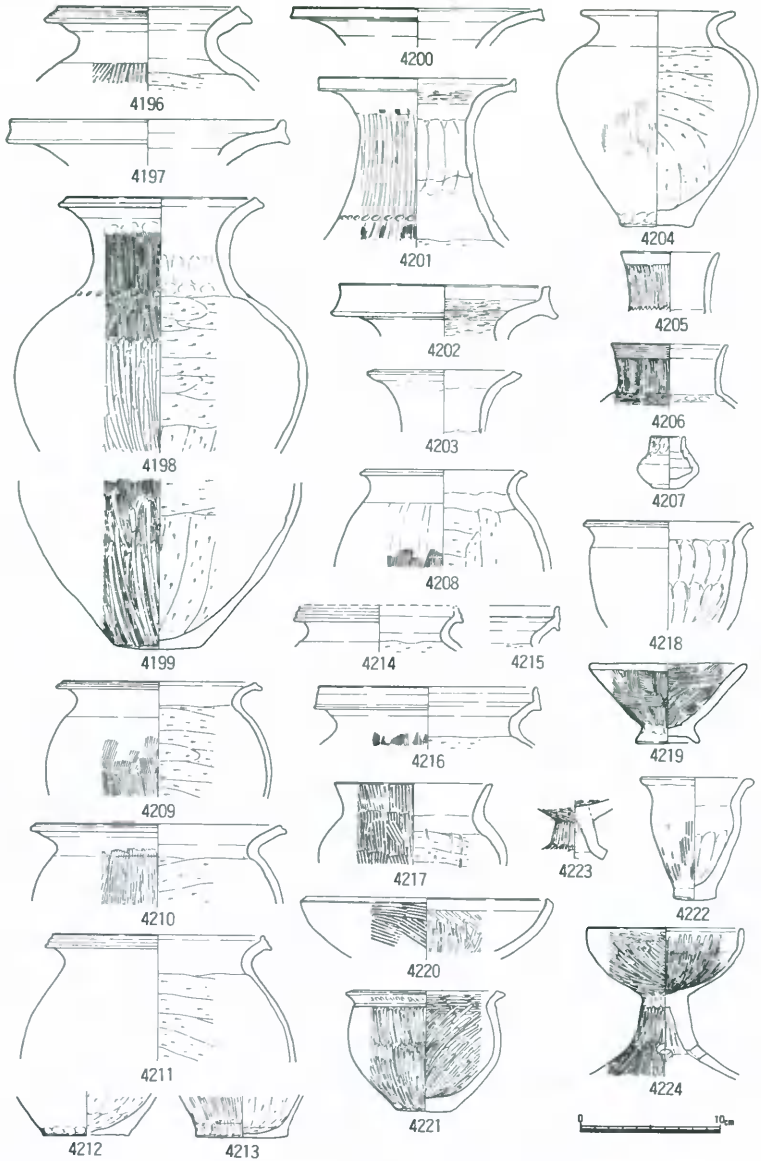
溝-39(第507・508・511図)

D-17からE-17にかけて検出された溝である。溝は，その流路途中で溝-41に切られ，その下流には検出できなかった。おそらく溝-41の南半と同じ流路にあったものと考える。したがって検出できたのは，全長約20mにすぎない。当初その北半においては弥生時代後期末の水田に伴うかのように，水田と微高地の接点に所在し，そのまま水田端部のラインに対応していた。しかし，調査が進行するにつれてやがて溝は微高地部へと入っていく様相を示したことにより，厚い洪水砂で埋没した弥生時代後期末の水田とは全く関連の無いことが判明した。埋土中からは，小片の土器と，細片ながら鉄器を2片検出した。

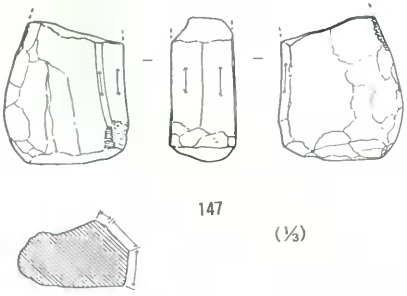
第507図　溝-39・40・41　土層断面(1/30)



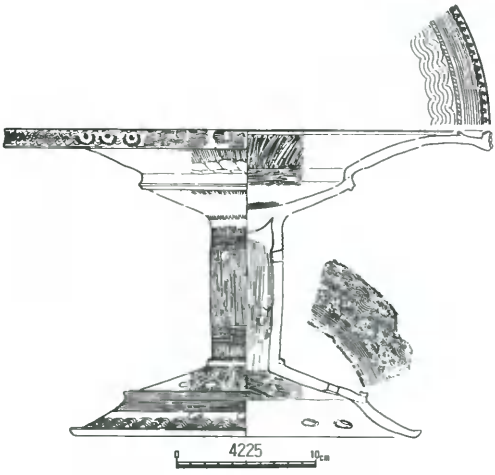
第508図　溝－39出土遺物



第509図　溝－40出土遺物（1）



第510図　溝-40 出土遺物（2）



第511図　溝-39・40 出土遺物

溝の時期は，その出土遺物により，百・後・Ⅳ併行期に比定できる。

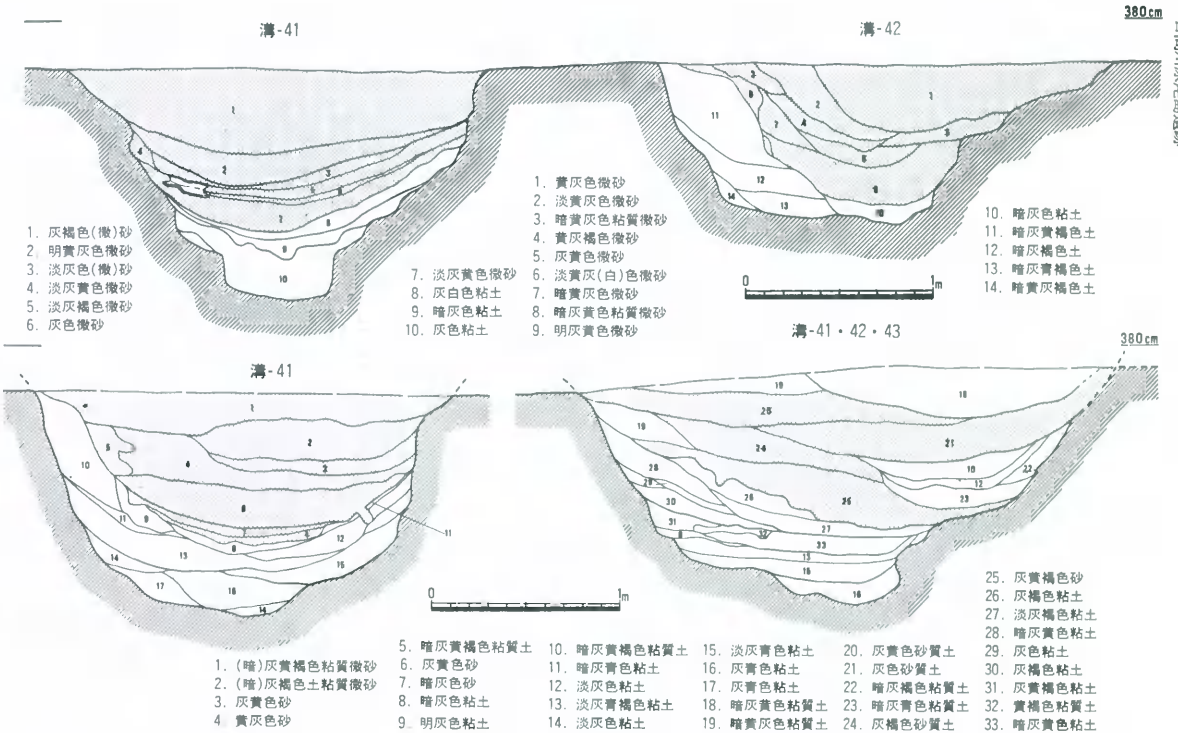
溝—40

（第507・509～511図）

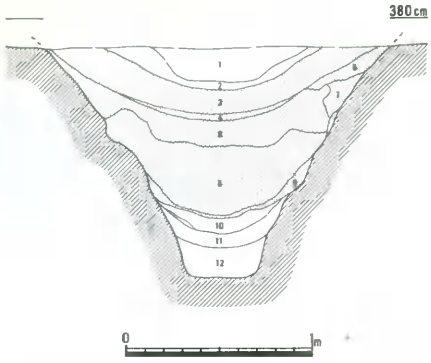
D-17からF-18にかけて検出された。しかし溝自体は，弥生時代後期末頃の溝—41と，現在の用水路等の開鑿により，ほとんど寸断され詳細は不明である。かろうじて全長約90mの流路が推測されるにすぎない。流路は南北方向にあり，溝—37・38・39に並行する。溝の埋没は，ほぼ水平堆積により進行し，埋土中には多くの土器片の包含がみられた。さらに，ここで注目すべき事項に下層の青灰色粘土中から，細片ながらガラス滓の出土が認められたことがあげられる。溝の時期は，出土した土器により，百・後・Ⅳ併行期に比定できる。

溝—41（第507・512～519図，図版18）

D-17からF-18にかけて検出された溝である。これは，微高地端部に沿ってほぼ南北に流走し，調査区中央部付近では東西にその流れを分岐する。おもに水田への水の供給機能を果していたものと考えられる。溝の掘り上げ後の規模は，上流から分岐点までの上流部で幅180～230cm，深さ115～132cm，分岐点から西下流部で幅220～270cm，深さ約120cm，さらに，分岐点から東下流部で幅約180cm，深さ124～126cmを測る。ところが溝の機能時期に関しては，すべて



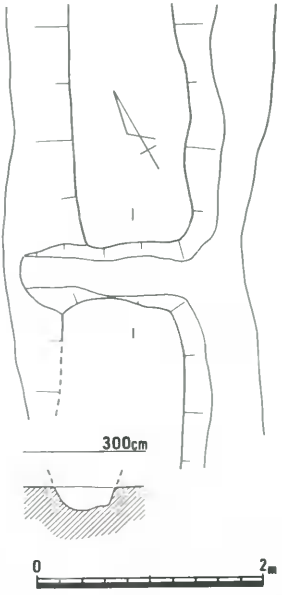
第512図　溝－41・42・43土層断面(1/30)



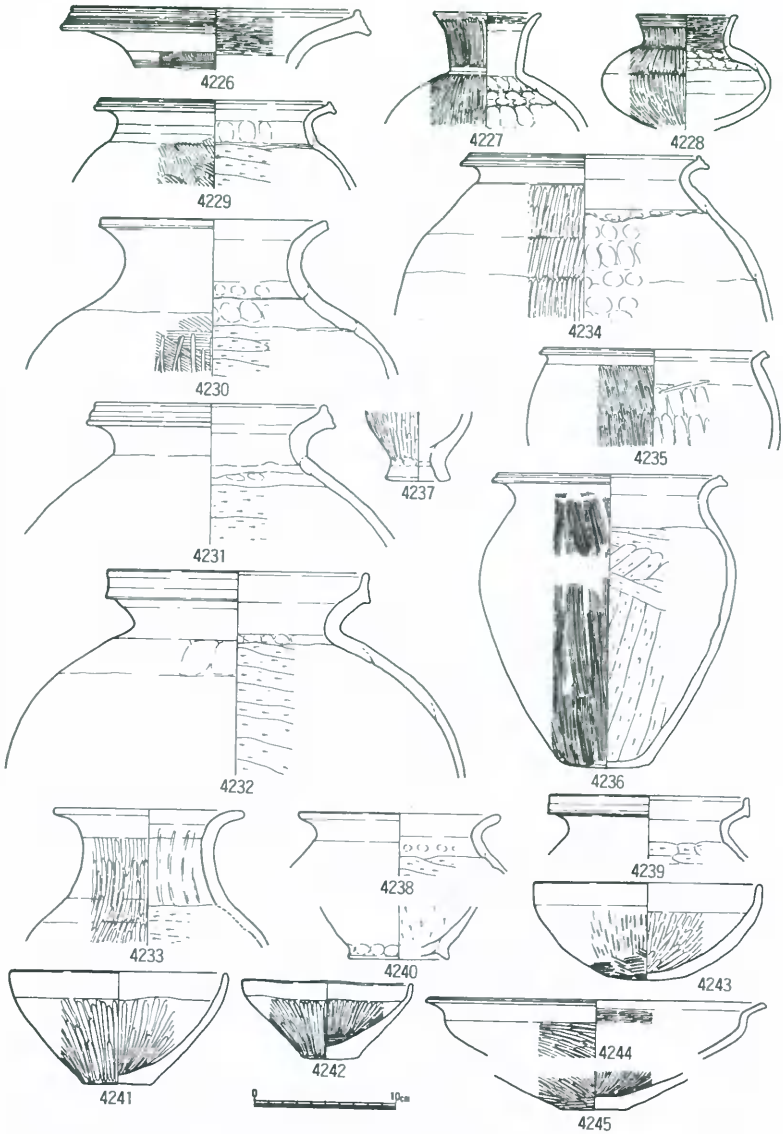
1．暗灰黄褐色粘質土　7．淡灰色砂(砂が互層に堆積)
2．暗灰色粘質土　8．淡灰白色砂
3．灰黄褐色砂　9．灰青色粘土
4．灰黄褐色砂質土　10．淡灰青色粘土(若干褐色を帯びる)
5．灰褐色砂質土　11．青灰色粘土
6．黄灰色砂　12．暗灰褐色砂質土

第513図　溝-41 南半東流路（1/30）

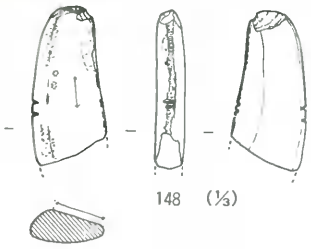
灰色粘土で約30cm程埋没した段階で，さらに，溝が東方向に開鑿される。それが，南半東流路である。その開鑿は，溝の幅を広げるのみならず，下にも「溝ざらえ」を連想させる掘り下げがなされる。しかし，新たに東方への流路を開いたことを契機に，それまで埋没が進行していた西の流路が廃棄されたのではなく，東の溝より約25cm上位に溝底を置きながら同時にその都度機能していたと考える。おそらく，水量の多少により，流れる溝と流れない溝，あるいは両方とも流れる溝といった具合いに水量調整の方法が図られていたものと考える。その後，溝の埋没は東西溝とも若干の差異をもちながら進行し，やがて溝底海抜290～274cmに位置していた時点で，洪水砂の多量の流入を被る。その直前，下流部西溝においては，溝と水田とを結ぶ水路が溝に直交気味に機能していたようで，これも洪水砂で埋没していた。しかし，それのものが同時に機能していたのではなく，相当の消長があったようである。特に，それは，第507図の土層断面に顕著に窺われる。それによれば，溝-41が最初に開鑿されたのは，上流部においては，ほぼ検出し得た流路に符合するものの，下流部においてはまだ東方向への分岐はなされない。若干の蛇行はするものの，ほぼ直線的に微高地縁辺を南流していたと推測される。その際の溝底の海抜は，掘り上げた溝底の海抜に等しく，234～243cmに位置する。その後，その溝が青灰色粘土と淡青



第514図　溝-41・43を結ぶ溝（1/50）



第515図　溝－41 出 土 遺 物（1）

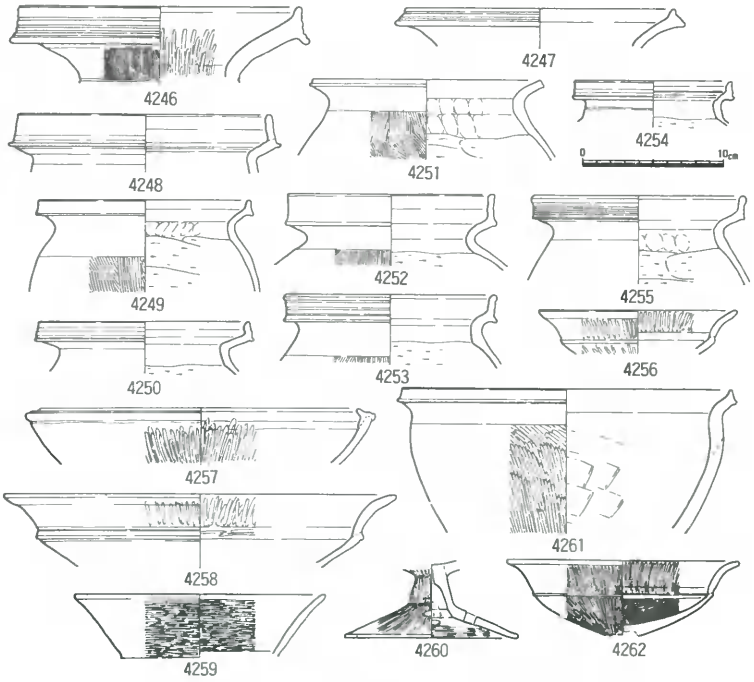


第516図　溝-41 出土遺物（2）

は，溝底と水田面との海抜にさほどの差を認めないことから，用水のみならず排水の機能も果していた可能性が考えられる。洪水砂中には，さほどの土器の包含を認めなかったものの，下層においては小片ながら多くの土器と，細片ながらガラス滓等の遺物の出土をみた。出土した土器は，百・後・Ⅳを下限とするものである。

溝—42（第512・520～522図，図版18-1）

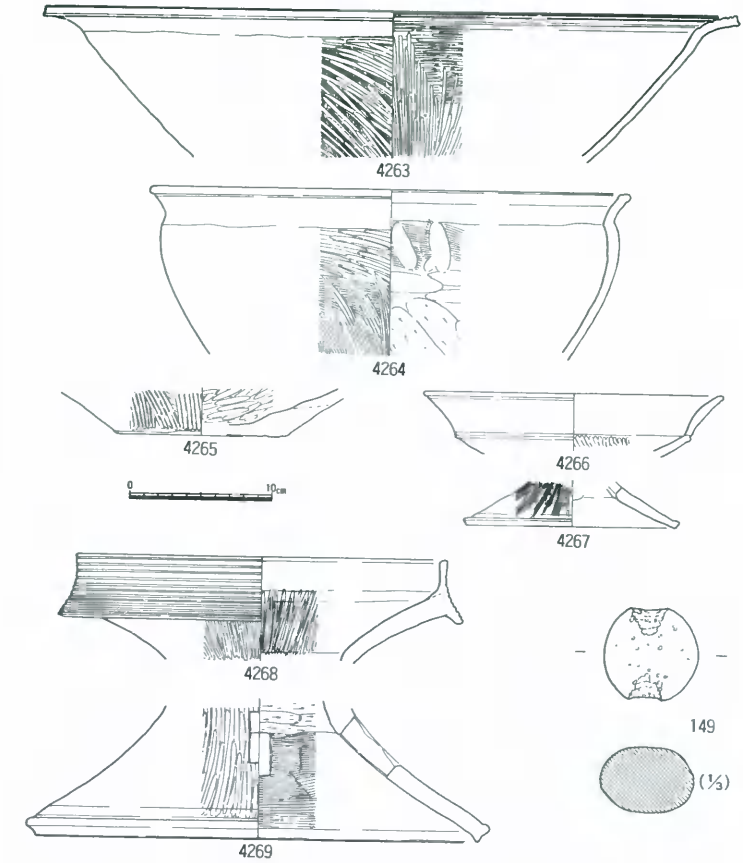
溝—41の上流部にほぼ並行する溝である。この溝は，当初平面形態の在り方から後述の溝—43に直接続くものと考えていた。ところが，溝—41の南半東流路との層序関係において溝—41



第517図　溝-41 南半西流路出土遺物（1）

に先行要素が多分に認められ，しかも溝－41が埋没していない段階とあってはそれを切っての新たな流路の開鑿自体ありえない事と判断された。以上の事象から，溝－42と溝－43は別々の溝と考えられた。

溝－42の掘り上げ後の規模は，幅220～250cm，深さ82～86cmを測る。第512図の断面によれば，ここで溝－42と呼称したものは，さらに二時期への分層が可能である。それは，洪水砂ですべて埋没した溝と，それに先行していた溝である。後者は，おもに粘質土での埋没が認められ，明らかに前者とは区別される。出土遺物は，前者にはさほどの出土量はなく，後者に多く



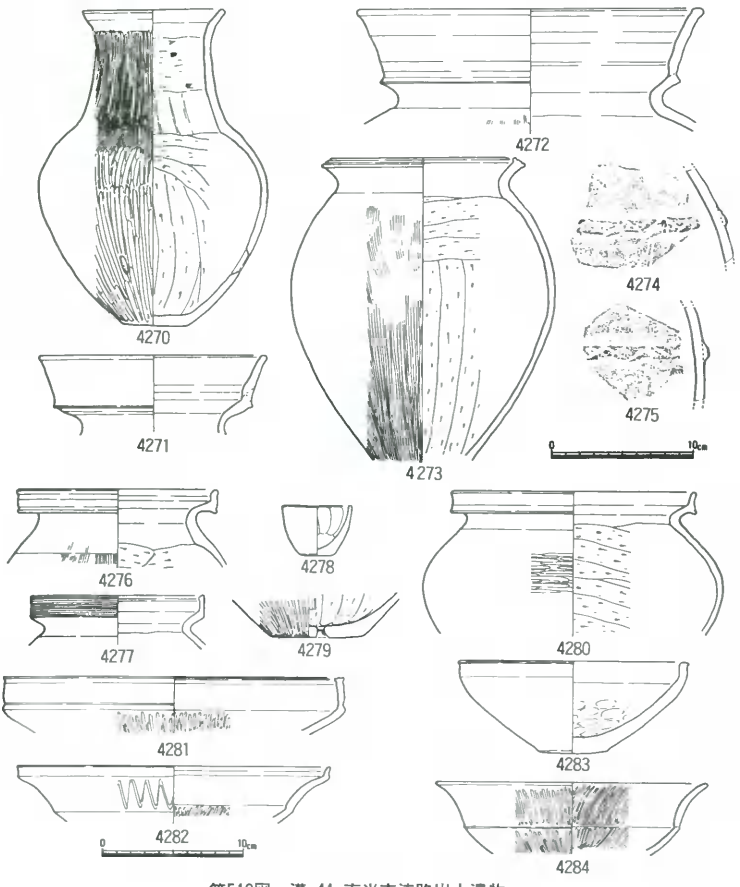
第518図　溝-41 南半西流路出土遺物（2）

の土器の包含が認められた。それによれば，後者の下限は，百・後・Ⅳ併行期に比定できる。

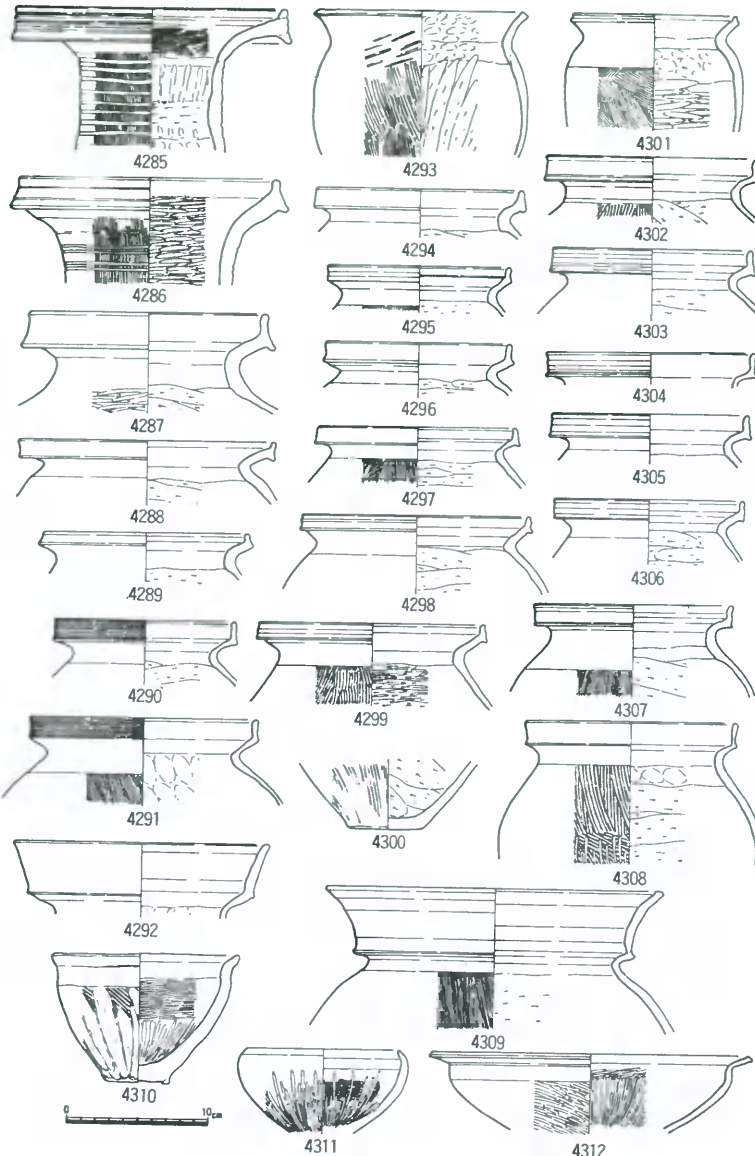
溝―43（第514・523・524図，図版18-1）

これは，当初前述の溝―42と同一流路にあると考えていた溝である。ところが，溝の幅と底部の海抜，埋積状況等の比較によれば，同一の溝とするには問題が多く，別の溝と判断した。

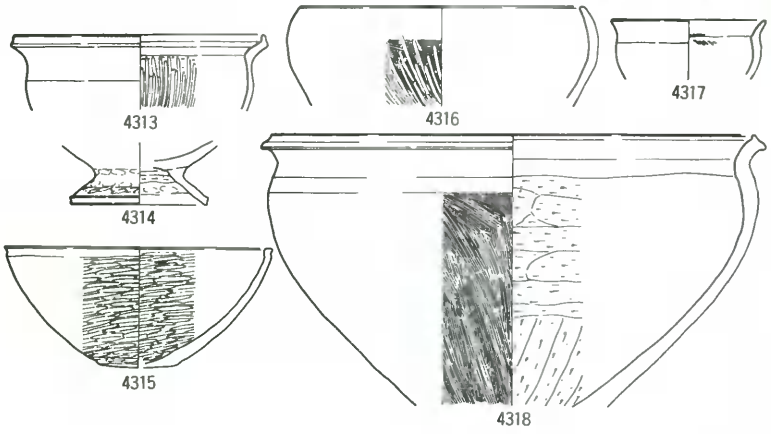
溝―43は，溝―41の南半西流路がほとんど埋没した段階で，それに代わる溝として新に開鑿された溝である。その位置は，溝―41の東・西流路の分岐点から南に約400㎝下った地点であ



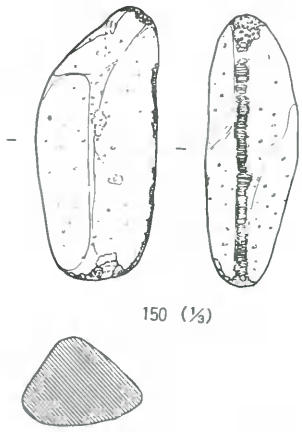
第519図　溝-41 南半東流路出土遺物



第520図　溝－42出土遺物（1）



第521図　溝－42出土遺物（2）

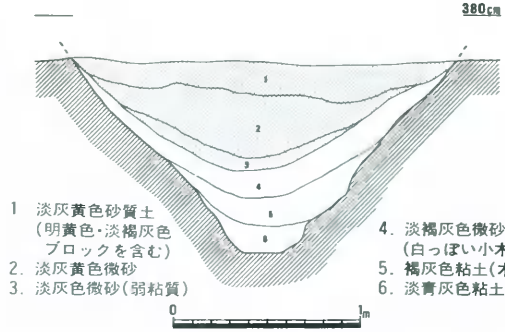


第522図　溝－42出土遺物（3）

る。ちょうど溝—41の南半東流路が東から南方向にその流れを変更する所である。ところが，その取り付きは，溝—41の南半東流路の溝底の深さに対してかなり段差をもって行われる。溝—41の南半東流路が海抜216cmであるのに対して，溝—43の取り付き部の海抜は254cmを測る。その比高は，実に38cmを測る。しかし，その比高も分岐点を約300cm離れるまでにしだいと縮まり，その後は約17～22cmで安定する。おそらくは，前述の溝—41との分岐にみられたのと同じ状況で機能していたものと考える。即ち，ここに限っていえば，本流は溝—41の南半東流路にあり，溝—41の水量が増せばその時点から溝—43にも通水されるという状況が予想される。この溝の掘り上げ後の規模は，幅140～180cm，深さ93～113cmを測る。

埋積土は，大きく洪水による砂と粘質土から成り，前者と後者の間の海抜は283～300cmに位置する。

遺物は，そのほとんどが下層の粘質土中からのものである。それによれば，時期は，百・後・Ⅳに比定できる。

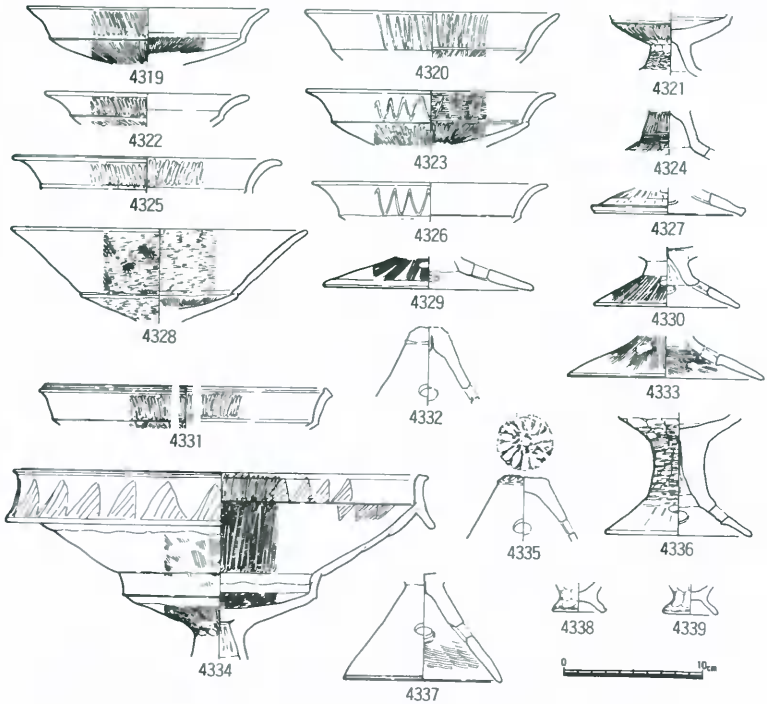


第523図　溝－43（1/30）

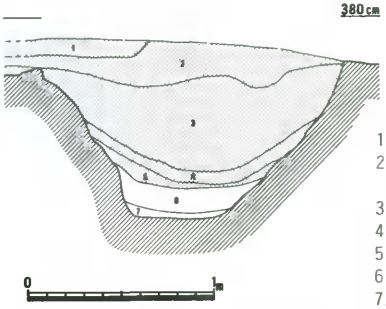
溝-44

（第525・526図）

前述した溝－41～43同様に水田洪水砂で厚く埋没した溝である。この溝は，D-18からF-18にかけての東端近くを若干蛇行気味に南流するもので，その流路過程において西方向への分岐がなされ

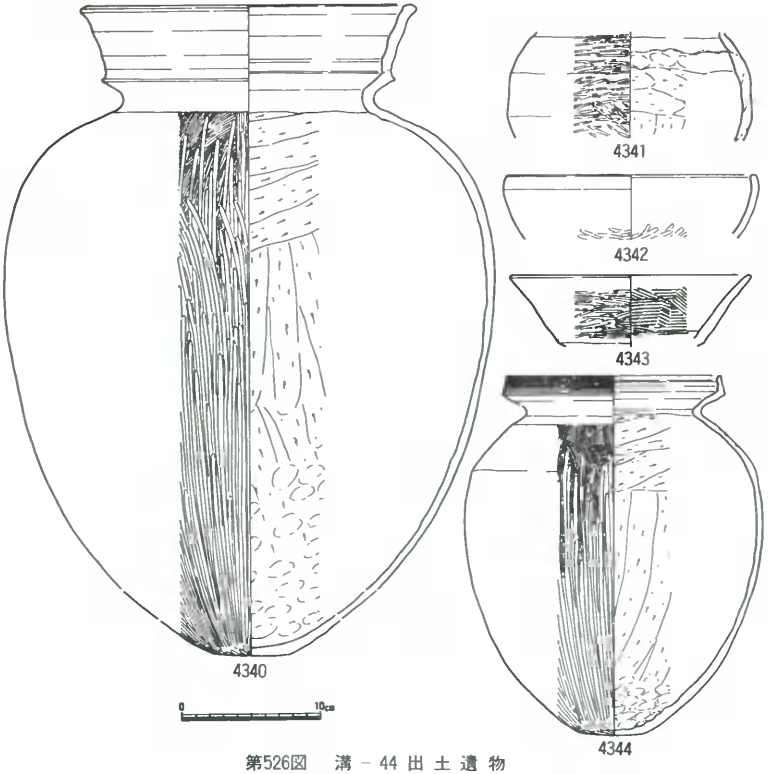


第524図　溝－43出土遺物



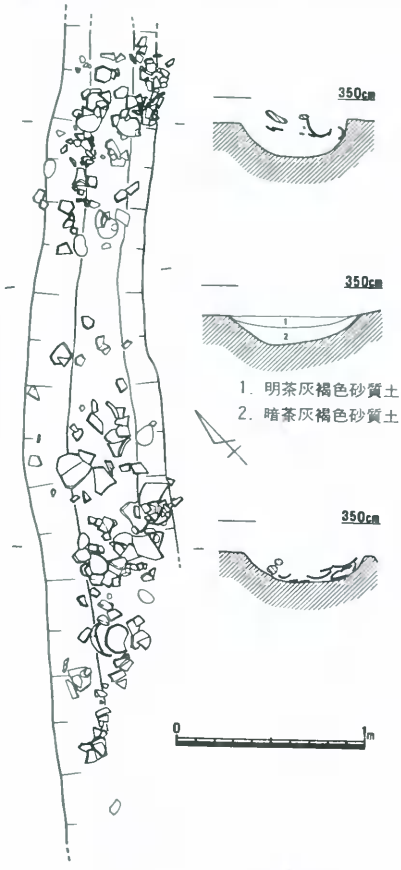
1. 褐灰色砂質土(竪穴式住居－42覆土か)
2. 褐灰色砂質土(灰黄色微砂ブロックを含む)
3. 淡灰黄色微砂
4. 淡褐黄灰色微砂
5. 明白黄色微砂
6. 暗青灰色粘質土
7. 明黄色粘質土に暗青灰色粘質土混じる

第525図　溝-44（1/30）



第526図　溝－44出土遺物

る。溝の分岐は，E-18南東隅にそれまで南流していた溝に対してほぼ鋭角的になされるものである。ただし，洪水砂除去後の溝底の海抜は同一でなく，西に分流するものは徐々に浅くなる傾向が認められた。その比高差は，約30cmを測る。この傾向は，溝掘り上げ後においても同様な状況にあり，その差は約12cmを測る。洪水砂最下層での海抜は，北端で285cm，南端で280cmを測る。溝の完掘後の規模は，全長42m，幅140～190cm，深さ80～100cmを測る。溝の形状は，上流部においては断面ほぼ逆台形を呈していたものが，中流から下流域にかけては溝底に「溝ざらえ」の痕跡を残すようになり，その結果溝底幅は若干広まり，一見二段掘りの状況を示す。前述の溝—41・42と比較した場合，この溝の埋積土中には，ほとんど遺物の包含が認められなかった。わずかに分岐点付近で図示した土器の出土がみられたにすぎない。しかし，そのいずれも洪水砂による埋没後の堆積層からの出土で，直接溝の時期を示すものではない。



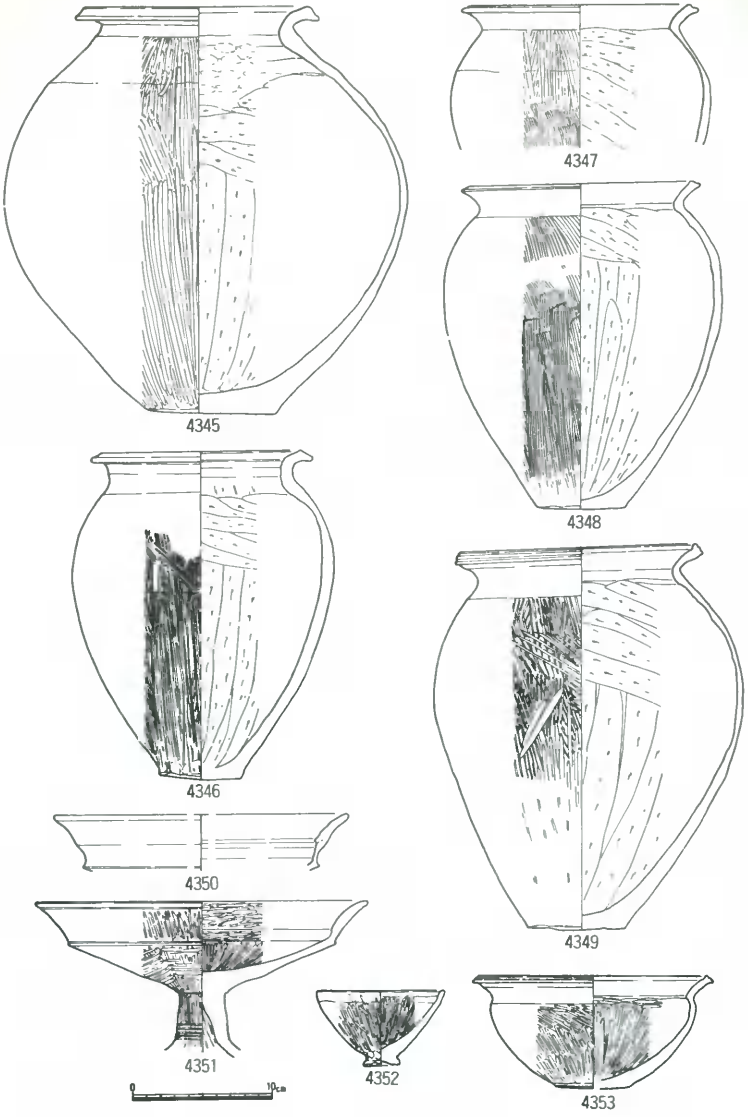
第527図　溝－45（1/30）

溝の時期は，水田洪水砂による同時埋没という点から推考すれば，百・後・Ⅳ併行期への位置付けが妥当と考える。

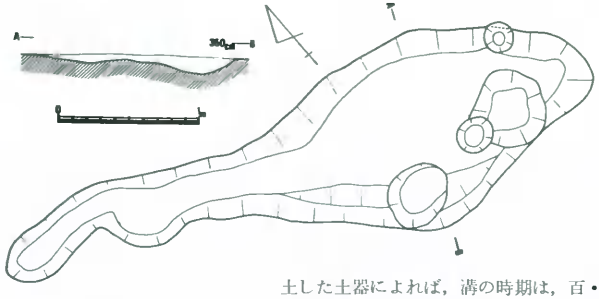
なお，竪穴式住居—42は，この溝の埋没後に溝の一部を切って建てられたものである。

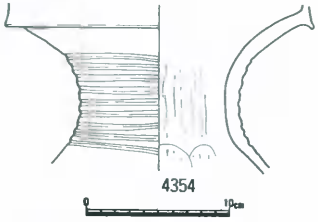
溝—45（第527・528図）

D-19南東隅に検出された溝状を呈する遺構である。調査において，実際に検出できた遺構は，土器が多量に包含されていた部分のみで，その全長は450cmにすぎない。その延長部分については，何か所かの試掘を実施し，溝の断面等の検出を試みたものの結局確認には至らなかった。検出できた規模は，幅50～70m，深さ15～20mを測る。埋積土中には，多量の土器が上・下に包含されており，溝の廃棄に際しての投棄が推測された。出



第528図　溝－45出土遺物



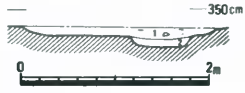


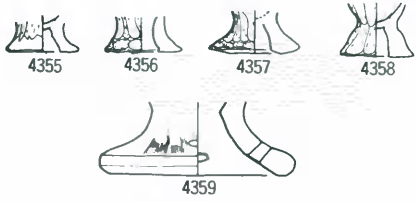
第529図　溝-46（1/40）・出土遺物

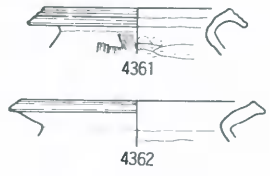
土した土器によれば，溝の時期は，百・後・Ⅱ併行期に比定できる。　（島崎）

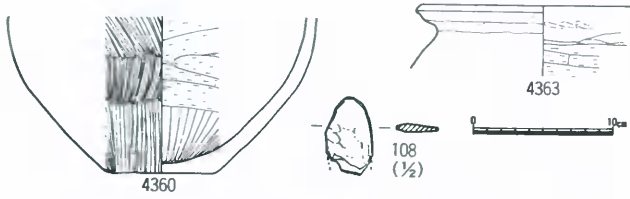
溝－46（第529図）

E-20の北辺よりの中央部で検出された溝状遺構で，残存長450cm，幅30～130cm，深さ10～25cmを測る。底面は断面形凸レンズ形を呈するが，不揃いで平滑ではない。埋積土は炭片や黄色土ブロックを多く含む暗黄褐灰色土でわずかな土器片が出土している。時期的には4354が示す百・後・Ⅲに比定されるが遺構としては，たわみの可能性が強い。









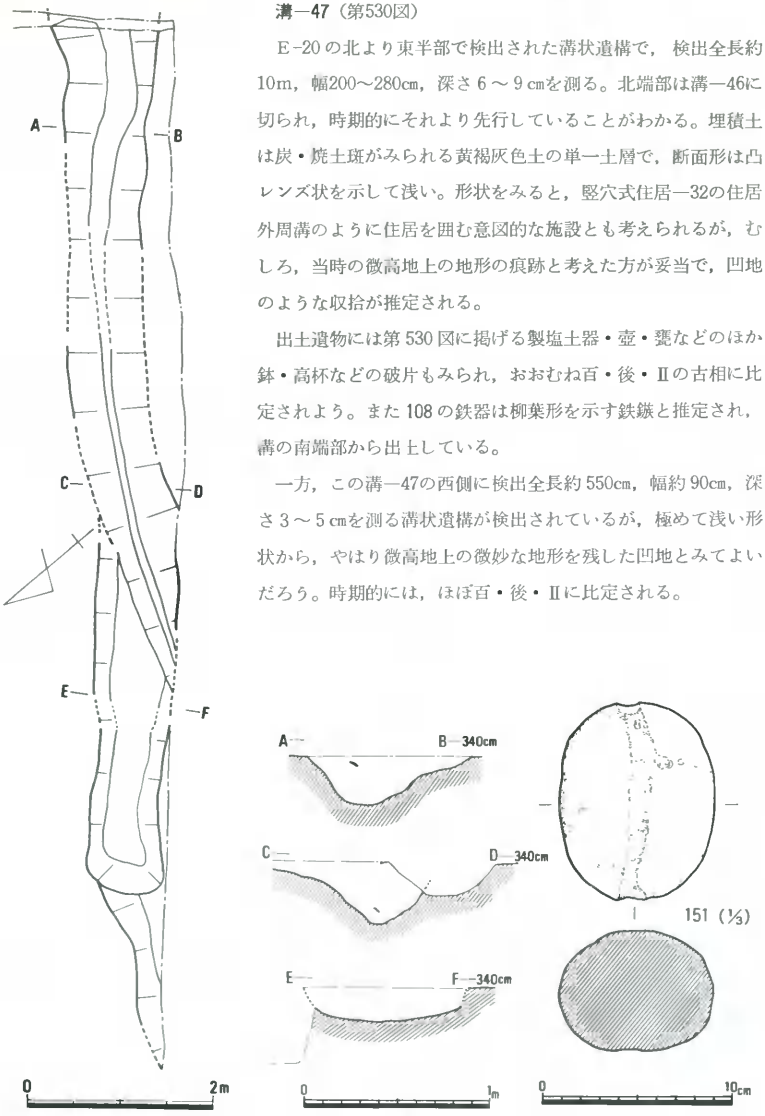
第530図　溝－47（1/60）・出土遺物

溝—47（第530図）

E-20の北より東半部で検出された溝状遺構で，検出全長約10m，幅200～280cm，深さ６～９cmを測る。北端部は溝—46に切られ，時期的にそれより先行していることがわかる。埋積土は炭・焼土斑がみられる黄褐灰色土の単一土層で，断面形は凸レンズ状を示して浅い。形状をみると，竪穴式住居—32の住居外周溝のように住居を囲む意図的な施設とも考えられるが，むしろ，当時の微高地上の地形の痕跡と考えた方が妥当で，凹地のような収拾が推定される。

出土遺物には第530図に掲げる製塩土器・壺・甕などのほか鉢・高杯などの破片もみられ，おおむね百・後・Ⅱの古相に比定されよう。また108の鉄器は柳葉形を示す鉄鏃と推定され，溝の南端部から出土している。

一方，この溝—47の西側に検出全長約550cm，幅約90cm，深さ３～５cmを測る溝状遺構が検出されているが，極めて浅い形状から，やはり微高地上の微妙な地形を残した凹地とみてよいだろう。時期的には，ほぼ百・後・Ⅱに比定される。

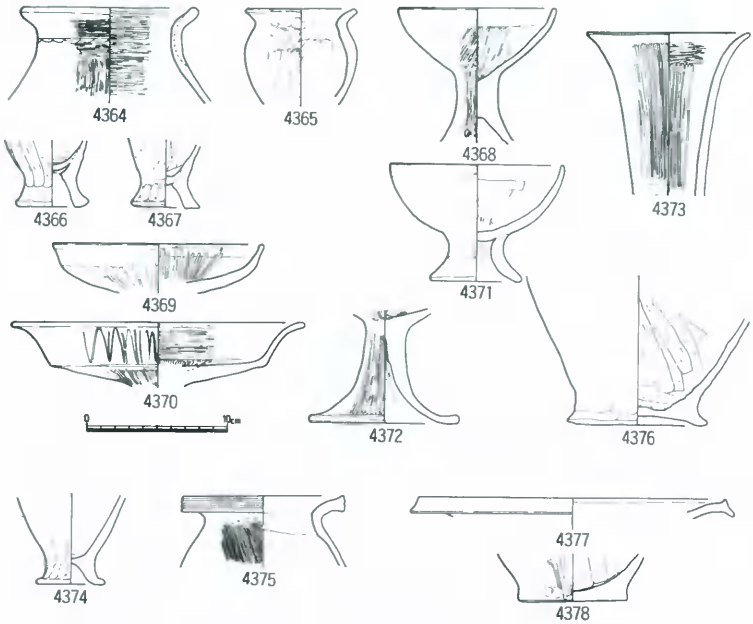


第531図　溝-48（1/60・1/30）・出土遺物（１）

溝－48（第531・532図）

E-21のほぼ中央部，竪穴式住居の南西部分で検出された溝状遺構で，検出全長11.2mを測り，埋積土・断面形によって3つのブロックにわかれる。E－F断面で示す部分が，南東部分より先に掘開されたやや浅い，断面凸レンズ形を示す部分で，さらに北西方に掘り足された状況を示している。C－D断面で示す位置では，深さは約33cmを測るV字溝となり掘方もややなだらかである。A－B断面ではやや丸味をもったU字溝となり，掘方南側はやや傾斜が緩やかである。埋積土はいずれも，炭・焼土斑が顕著にみられる淡黄褐灰色土が主体である。溝の収拾については，明らかに人為的に掘開された溝としては，他の溝のように用・排水に関わる溝である可能性は少なく，集落地内の境界・地割的な性格を示している可能性がある。

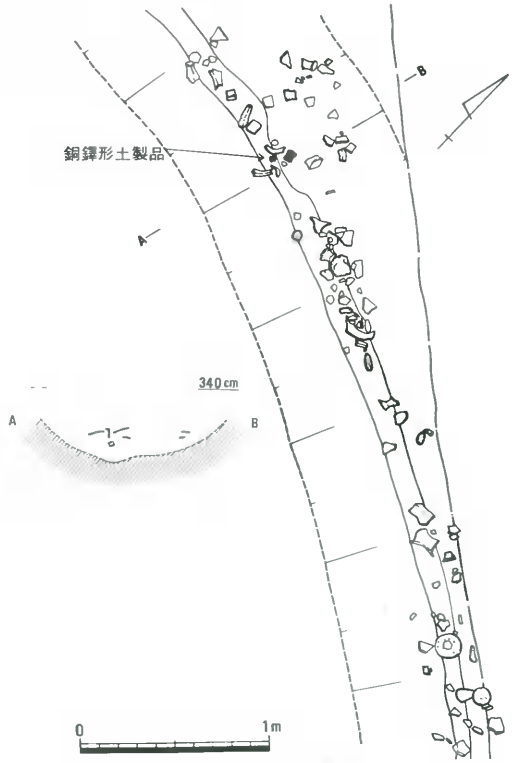
出土遺物には，図に示すように混入の弥生時代前期の壺4364の他，製塩土器・高杯・甕・壺など，その大半は百・後・Ⅱに比定される。中でも4373の長頸壺は精製土器で丹精な形状を示し，数少ない形態として特筆される。また石錘151は，C－D断面位置近くの上層から出土したもので，比較的大型品で，土壙－152出土例144などとともに注目される。（岡田）



第532図　溝－48出土遺物（2）

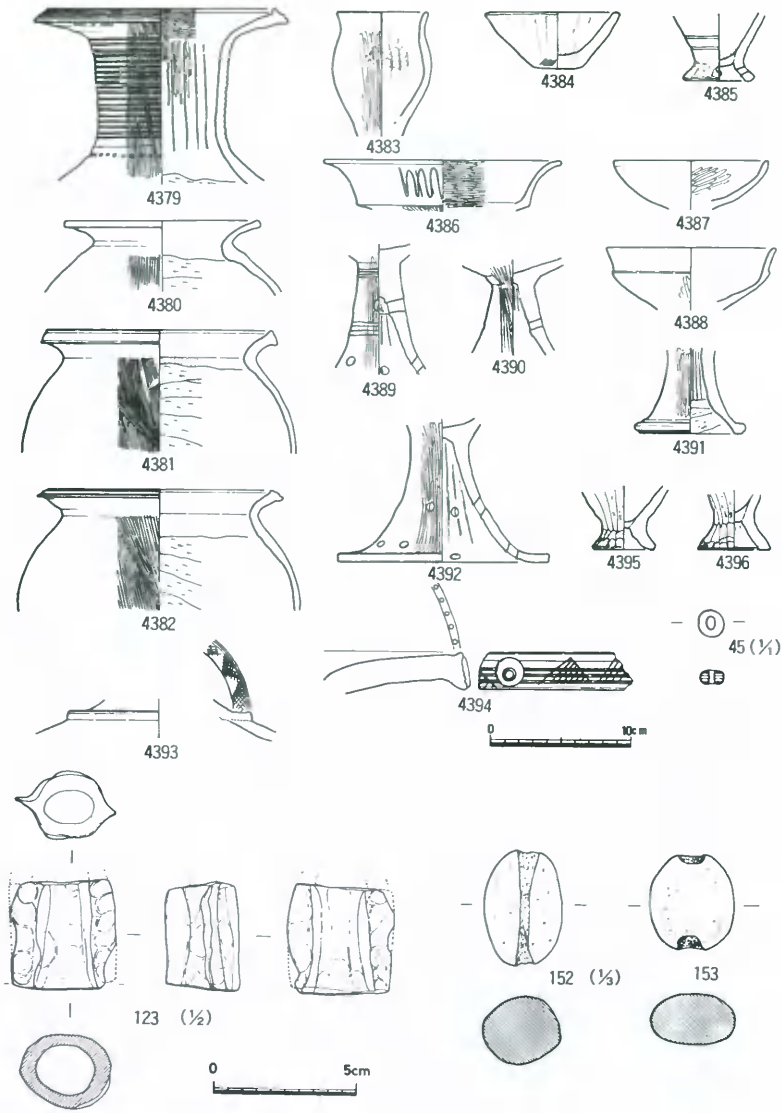
溝—49（第533・534図）

E-20，北側壁際に調査のための側溝を開削していた際に検出した遺構である。場所的に十分な把握ができない箇所であったため，当初，単純に土器溜りかと考えていたが，その後，幅10～16cm，深さ5～6cmで，炭・焼土を含む暗茶褐色土で充填された溝状遺構が検出され，最終的に溝状遺構と推定した。なお，次年度の調査で，当地区の北側が調査され，当遺構に連続する溝状遺構が確認され，ほぼ決定的となった。溝の上端部推定幅116cm，推定深さ26cmを測る。遺物は溝中央部に流れ込んだ状態で検出され，細片化していた。特筆すべきことは，西端部に銅鐸形土製品が出土したことである。県内では岡山市上伊福遺跡，山陽町門前池遺跡，哲西町清水谷遺跡に次ぎ4例目である。土製品は高さ3.87cm，厚さ0.67mmで全体に厚く重量27.4gを測る。断面は楕円形を呈し，粗雑なつくりである。色調は灰白色，胎土は1mm程度の砂粒を含み，焼成は土器と変わりない。鐸身部と考えられる表面は無文，鰭と考えられる部位は一部欠損しているが8mm前後，指頭によりつまみだされている。鈕の存在の可能性は上端に欠損した状態で一部窺われ，ほぼ銅鐸形土製品と断定できるが疑問の余地は残る。県内では集落遺跡に伴う出土例としては最初の事例であり意義深い。その他の共伴遺物としては石錘1，ガラス小玉1があげられる。時期は，百・後・Ⅱである。



第533図　溝－49（1/30）

（渡辺）



第534図　溝－49出土遺物

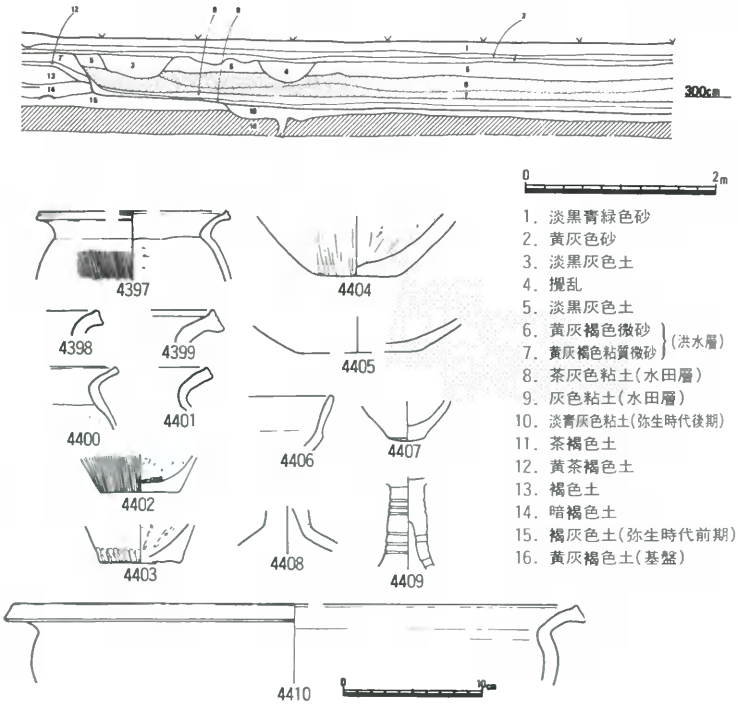
溝―50（第535図）

21～22線間に微高地と水田域の境が存在し，溝―50は微高地縁辺に沿う格好で水田下位より検出したものである。第535図の10層は溝―50より直角に東に延びている溝内堆積土であり，土質等より同時期の所産と考えられる。溝―50は「島状高まり」遺構―１等の周縁を巡る溝と同じ条件で形成されたと考えられ，水田の拡幅に伴い残存したものであろう。６・７層が弥生時代後期末の洪水砂であり，８・９層が水田土層にあたる。弥生時代後期末の水田下位より検出された溝―50は，さらに古い時期に比定できる。

遺物は水田層を除去した後の溝内より出土したものであり，ほとんどが小片にかぎられる。甕・壺・高杯・鉢等があり，微高地上の遺構において認められる同時期の所産である。

時期は高杯4408・4409等より，百・後・Ⅱの新相より百・後・Ⅲまでの範疇に比定できる。

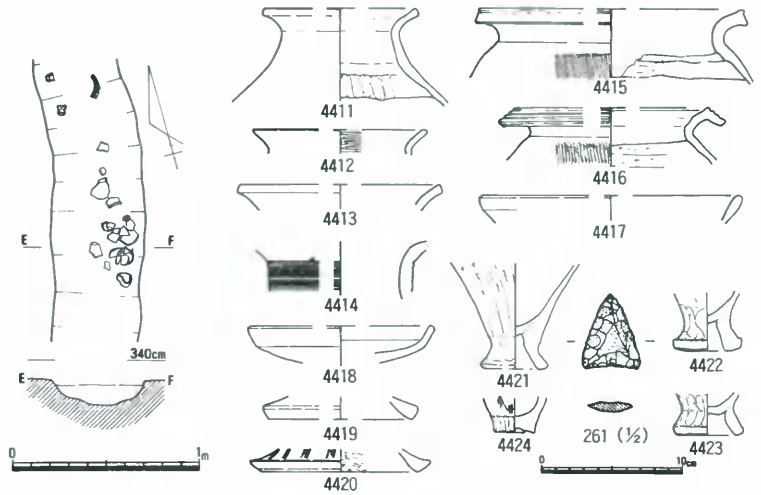
（高畑）



第535図　溝-50 土層断面（1/60）・出土遺物

溝—51（第536図）

E-21からF-21にかけて検出された弧状の溝である。幅50～60cm，深さ10～16cmを測る。溝壁は緩やかに傾斜し，丸味をもった底部に至る。埋土は淡灰褐色土の一層であった。溝底の標高はE-21で318～328cm，F-21で312～316cmのため，北から南へ流れていたとみられる。断片的な検出のため，その機能は不明である。土器を若干包含していて，部分的な集中がみられた。出土した遺物は弥生時代後期の土器片で，その示す時期は百・後・ⅠとⅡであった。

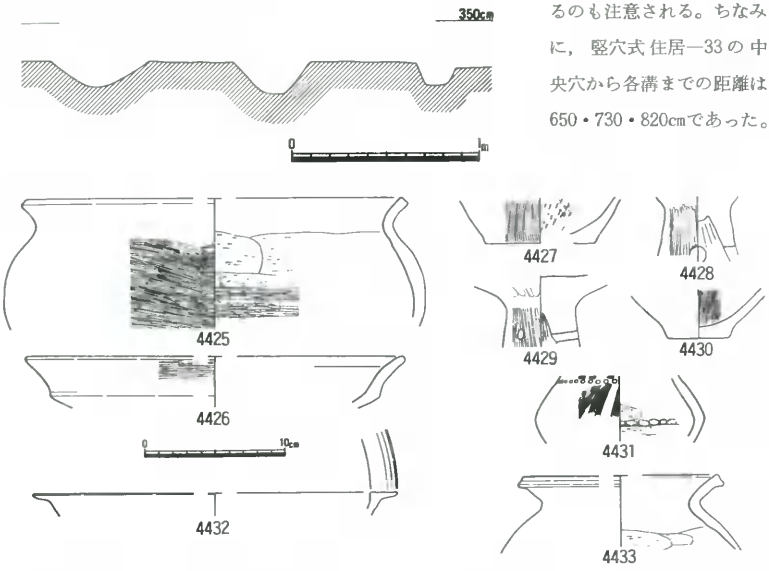


第536図　溝－51（1/30）・出土遺物

溝—52・53・54（第537図）

F-21で一部の残存を確認した。３本が平行して緩い弧を描くようである。それぞれの規模であるが，西の溝—52は幅50cm，深さ14cm，中の溝—53は幅35cm，深さ13cm，東の溝—54は幅25cm，深さ12cmを測り，東のものほど残りが悪い。溝底の標高は，溝—52が314cm，溝—53は312cm，溝—54で316cmと大差はなかった。埋土はいずれも淡灰褐色土であった。どの溝からも少量の弥生式土器を出土し，それらの示す時期は百・後・Ⅱである。この３本の溝の性格であるが，その位置から考えて竪穴式住居—33との関連が思われる。近隣の同期の住居には壁体溝の外にさらに周溝をもつものがかなりあり，これと同様の機能をもっていた可能性がある。竪穴式住居—33は２枚の貼床をもっていて，壁体溝の残存状況が３本の溝と一致するようにみえ

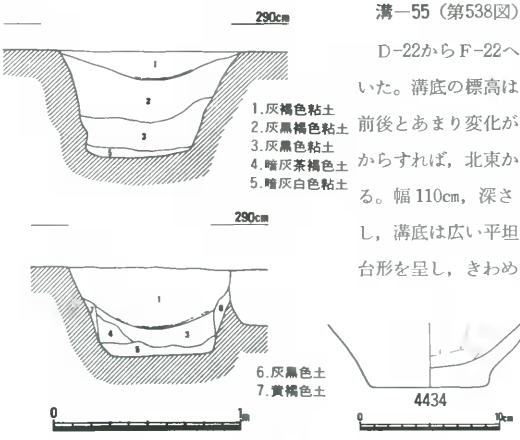
るのも注意される。ちなみに，竪穴式住居—33の中央穴から各溝までの距離は650・730・820cmであった。



第537図　溝-52・53・54（1/30）・出土遺物

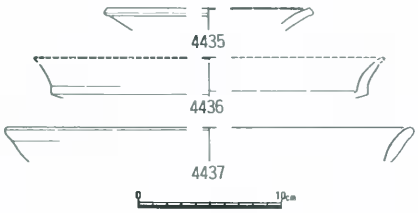
溝—55（第538図）

D-22からF-22へと調査区を直線的に貫通していた。溝底の標高はD-22で211cm，F-22で210cm前後とあまり変化がないが，地形や土層断面観察からすれば，北東から南西へ流れていたようである。幅110cm，深さ55～64cmを測る。溝壁は急傾し，溝底は広い平坦面をもつ。断面形は整った逆台形を呈し，きわめて人為的・計画的な溝であった。埋土は大きくみれば三・四層で，各層に薄層や互層それに炭層が含まれ，長期にわたり徐々に埋



第538図　溝-55（1/30）・出土遺物

まったと考えられる。最上層の底では炭の堆積が顕著に認められた。この溝はD-21・22からF-21・22へ細長く伸びる水田のほぼ中央に位置しているが，層位的には灰褐色粘土層と灰色粘土層の2枚の水田を形成する層を除去して検出されたものであり，水田の陥没も認められなかったことから機能上の関連はないと考える。出土遺物は僅少で，図示した弥生時代前期の底部片のみであった。これ一片でこの溝の年代を決定するのは困難であり，ここでは百・後・Ⅳよりは古いとしておく。



第539図　溝-56 出土遺物

溝—56（第539図）

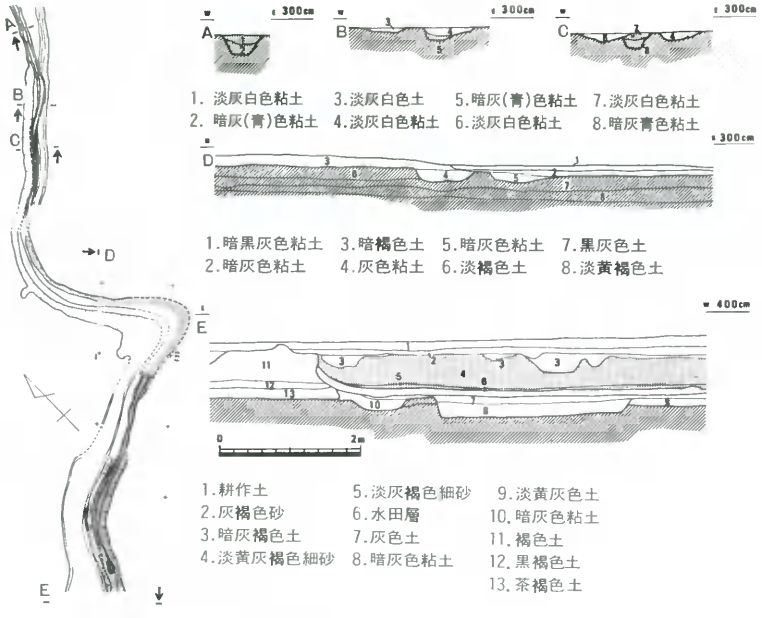
F-21にあり，水田を形成する土層を除去して検出されたものである。幅60～90cm，深さ3～10cm程度で，断面形はごく浅い皿状を呈する。形状から溝としているが，機能的には疑問であり，溝状遺構と表現すべきものである。溝底の標高は270cm前後，埋土は青灰色粘土であった。この溝状遺構の性格であるが，水田の開墾によって削り取られた微高地の端線と平行するという在り方をみれば，水田に関係した遺構とする解釈がまず浮かぶ。事実，百間川遺跡群ではこのような溝状遺構の存在はかなり普遍的であり，水田の拡張によって水田下に残された過去の開墾痕であるという考えが大勢のようである。しかし，微高地端のみを一段深くすることの機能上の役割については，それが水田下にあって，田面に影響を及ぼさないだけに明瞭でない。図示した土器は百・後・Ⅱである。　（岡本）

溝—57・58・59（第540～542図）

D-22の中央付近からF-22東南端にかけて検出された溝で延長約51mを測る溝である。いずれの溝も水田層除去後に検出されたものである。溝は北東より南西に向って流走するものであろうが，E-22下半で「L」字状に南東に屈曲し，さらにE-22の南東端に至っては南西にほぼ直角に曲がり，F-22で「く」の字状に蛇行して南下する溝である。D-22では溝—57と溝—59が重複し上下2本の溝として検出され，E-22の下半においても平面で1本，土層断面で2本が切り合い関係で確認され，総数3本の溝が認められた。以上の3本の溝の溝底値（海抜）は，溝—59の場合は北端で約265cm，中程で約261cm～270cm，南端部分で約248cm～264cm，溝—59は北端で溝—59の上層に流走しているもので，土層断面から約265cm，Eラインに南下した位置で分かれて約273cm～279cm，中央付近で261cm～271cm，南端で約255cm～267cm，最後に溝—58は北端で約268cm～275cm，中央付近で溝—59と交差し約218cm～224cm，南端で溝—59と重複する溝であり，以上の数値を計測することができた。数値からみて溝は3本ともに中央部分

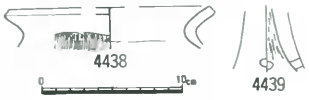
（E-22下半）が南・北端に比べて数cm高く，南も北に比べて同様に数cm高い数値が出ている。しかし本来的には北から南に流走する溝と思われる。

以上3本の溝は「島状高まり」遺構裾を流走しているものであるが，溝—59はE-22で微高地の下層に入り込んだ形となっている。これは微高地が拡張したためである。平面・土層断面



第540図　溝-57・58・59（1/400・1/80）

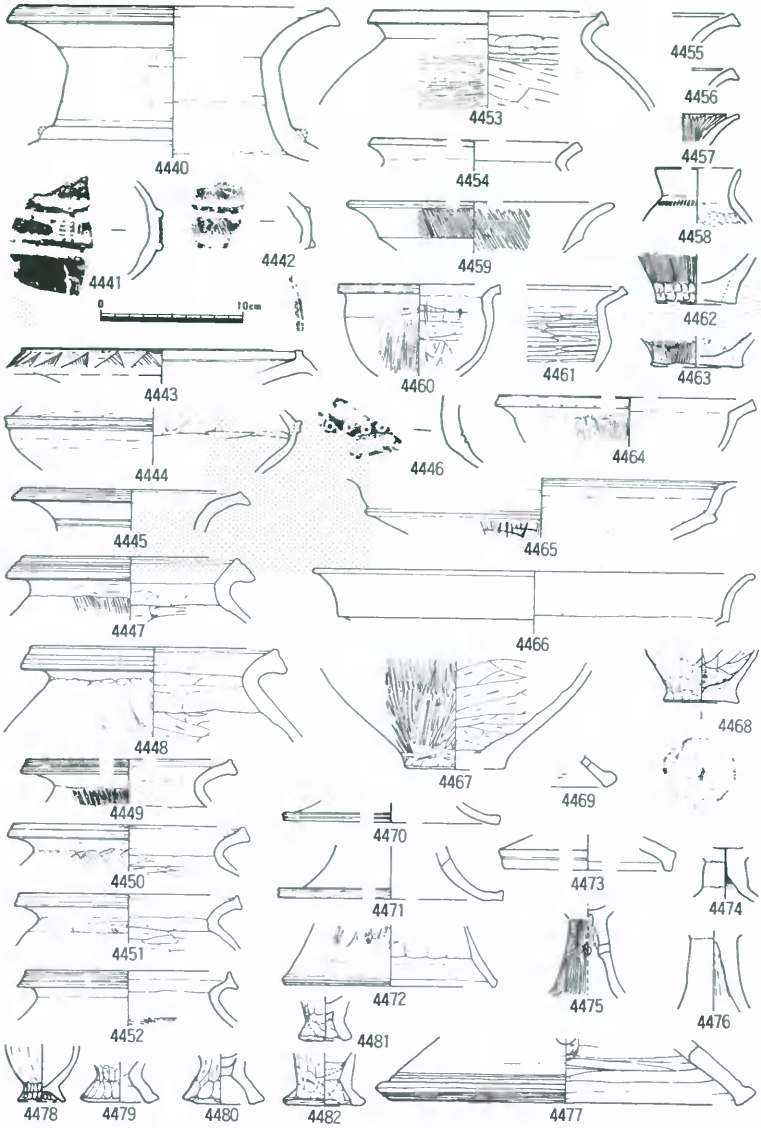
から溝は，溝—59・溝—57・溝—58の順で，それぞれが目的別に機能していたものと思われる。溝—59において第542図の遺物が出土した。以上の溝の切り合いと遺物の在り方等から溝—59は，百・後・Ⅱの時期には埋没していたものと考えられる。また，溝—57・58は溝—59の埋没後に活用していたもので，相前後して機能を果していたものと考えられる。（二宮）



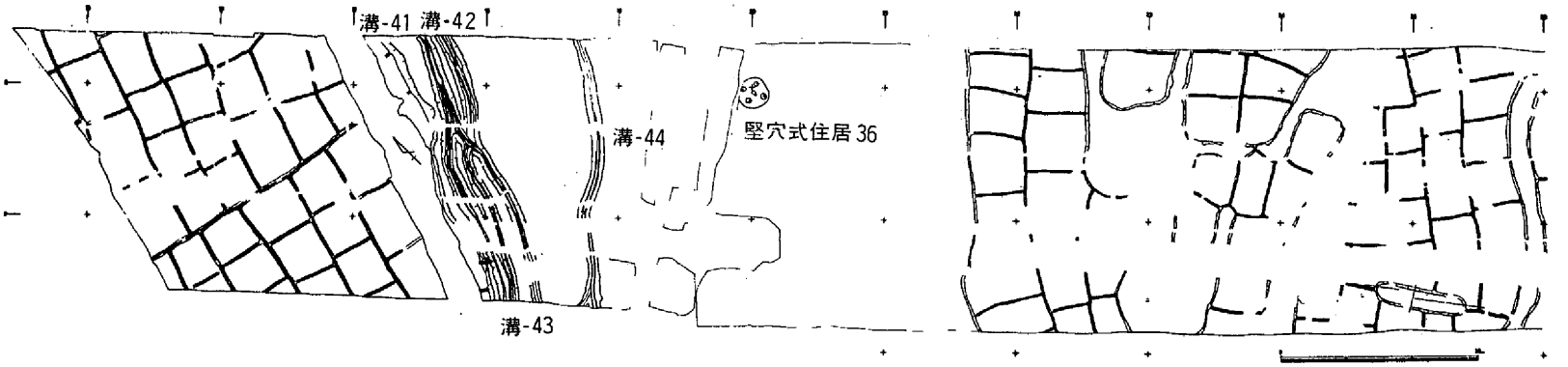
第541図　溝-57 出土遺物

溝—62～70

紙面の都合からやむなく割愛した。個々の概要は，表—28に掲載した。（島崎）



第542図　溝－59 出 土 遺 物



第543図　丸田調査区弥生時代後期水田遺構配置図(1/1100)

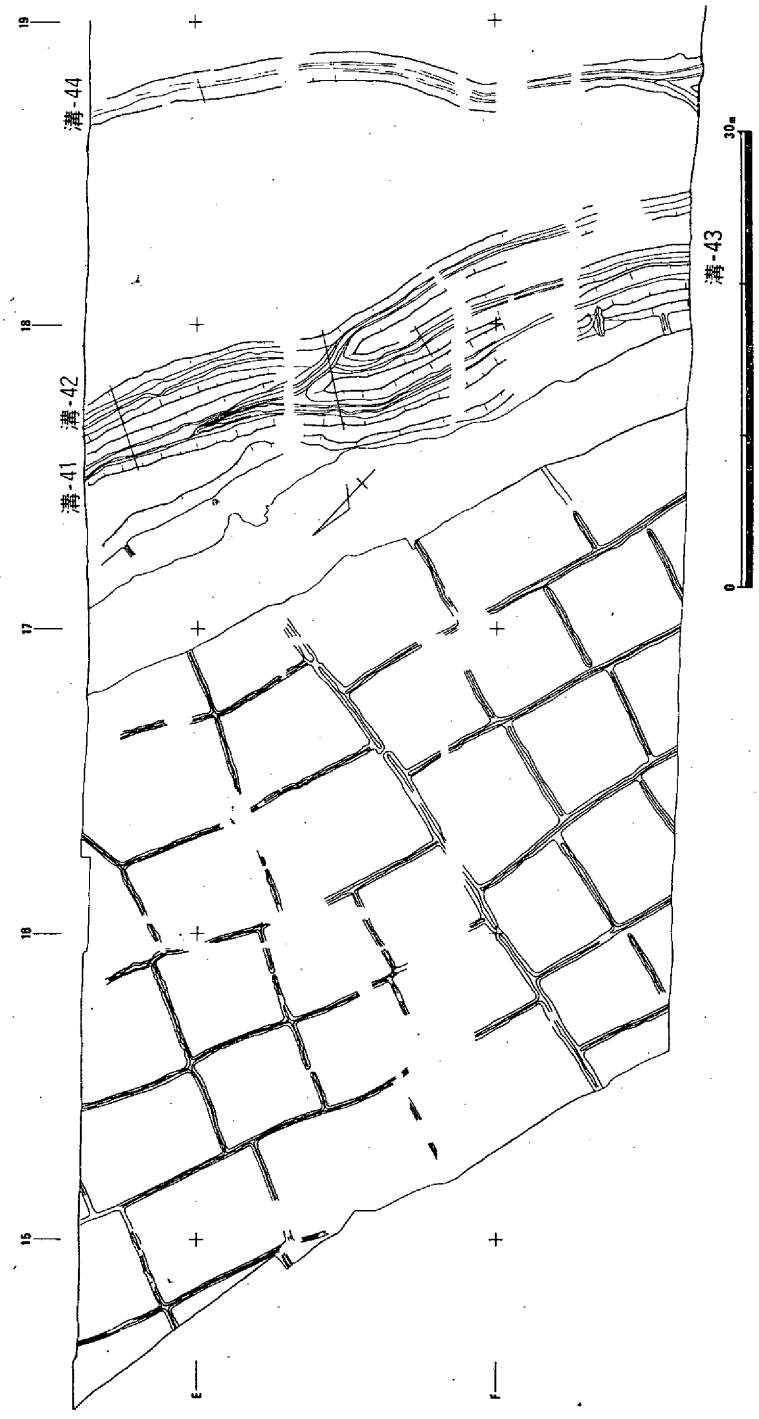
（7）水　田　遺　構（図版19-1）

E-14からE-16，F-15からF-17にかけて検出された水田遺構は，1本の直線的な大畦（下端幅65～75cm，高さ15～17cm）と多くの小畦（下端幅35～45cm，高さ4～6cm）からなる。いずれの水田もE・F-17からE・F-18にかけてやや東偏して南北に流れる溝—41～43や，やはり北東から南西方向に流れ，F-18南端で分岐する溝—44と同時期に存在したものとみられ，淡灰黄色を呈する厚さ約25～35cmの洪水砂によって完全に埋没している。これら微高地上の溝の検出レベルは平均海抜約370cmを測り，水田上面とは約90cmの落差が生じていることになる。一方，E-14からF-15にかけては，中世河道がほぼ南北方向に貫流し，水田遺構の西方への拡がりを追求することが不可能となっている。また，南東方は微高地であり，微高地より小畦が派生している状況については，E-17北隅でよく観察される。しかし，後の古墳時代にこの微高地縁辺には，やや東偏する南北方向に大溝が掘開され，その溝底付近より下位が水田の旧状を失っている。この部分から約5m西の水田20・21の西辺ラインは弥生時代前期の河道西岸ラインとほぼ重なり，このライン以東の水田面はややたわんでいる。西方の水田20・22などに比べると約30cmほど低いレベルを測る。

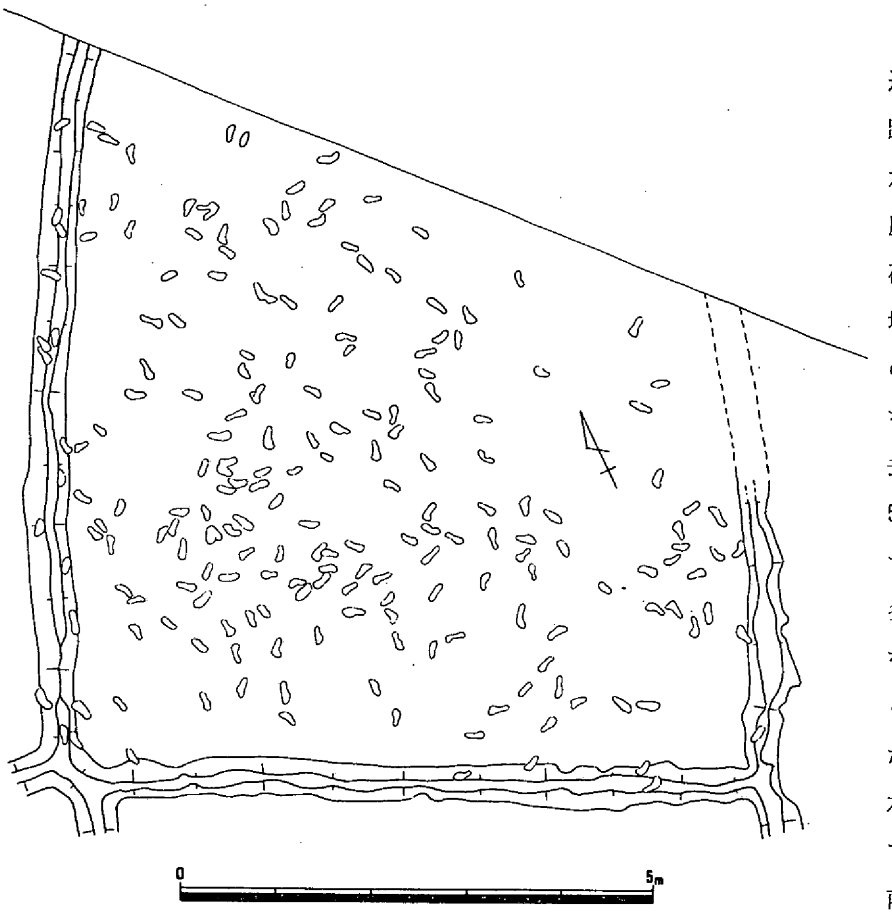
水田の基本形は四辺形であるが，小畦は，緩やかな弧を描くものもあり，かなり不整な四辺形を呈するものが多い。大畦から北側の水田では，水田9・10・13・14や，水田18・19・20・21などのようにその基本的な組み合わせが「田」形を呈するものがあり，注意すべき事実である。また，大畦の北側，南側ともにそれに直交するほぼ南北方向を示す小畦のラインを設定し，恣意的に東西方向の小畦で仕切るという極めて大まかなプランが描かれている。しかし水田の南東辺ラインはややいびつに屈曲しており，基本形をはずれているが，この部分は弥生時代前期河道の真上であることや，水田17の中に一時期古いとみられる小畦の痕跡があることから，たわみが生じて水まわりや，水もちが悪くなった際の畦の改変が行われたことが推察される。

水田の基本的な層序は，第262図（1）に掲げる9層が畦と水田を形成する厚さ約6cmの暗灰色粘土層であるが，その直下層である厚さ4～8cmを測る淡灰色微砂質粘質土層も水田層の畦直下では部分的に約3～5cmほどの高まりがみられ，検出水田に先行する水田層と推定される。さらにその下層の淡黄灰色粘土層も厚さ4～5cmを測り，水田検出部分の全面で確認されており，水田の基盤層ともいえる。いずれにせよ，この地点の水田では，この三層が水田を形成する土壌と考えてよいだろう（註）。水田面のレベルがもっとも高いのはE-15やE-17の微高地直下で，海抜約290cmを測るが，弥生時代前期河道部分では約30cmもたわんでいる。平均すると海抜375cm前後の水田面であり，しかもその形状から乾田と考えて妥当な形質を残している。

水田4・5・13・17には多数の足跡が検出され，その一部は第546図に示すとおりであるが，長さは約14～25cm，幅5～10cm，平均すると約20.8cm，深さは約2～4cmを測ることが確かめ

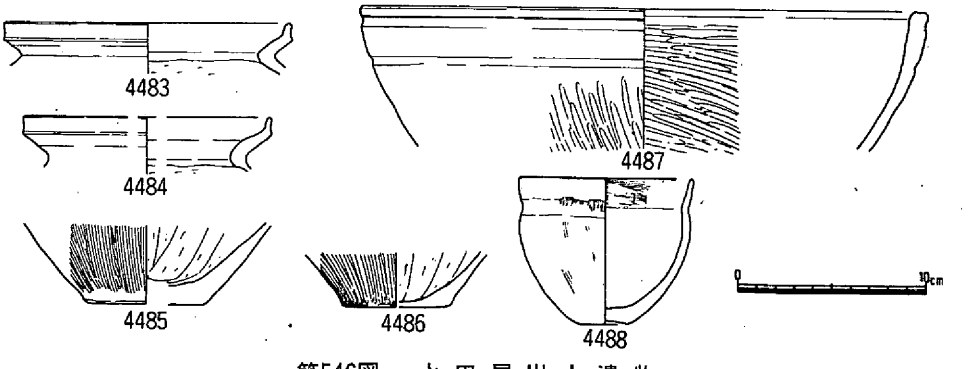


第544図　弥生時代後期水田・溝-41～44 配置図（1/500）



第545図　足　　跡（1/80）

られた。後述の稲株痕跡と同様，水田面に淡灰黄色洪水砂が流入埋積したもので，それを丁寧に除去すると第545図に示すように数多くの足跡を検出することができた。足跡は水田4・5では北から南方向に歩行を示すかのように点々と連らなっているのが確かめられた。また水田13・17は特に足跡の密度は極めて高く，収穫に伴う集団の集中的作業の中心となっているようにみえる。特に，水田13の東・南・西辺の畦では多くの足跡が残されており，まさに「畦道」となっている。F-17の東辺ラ

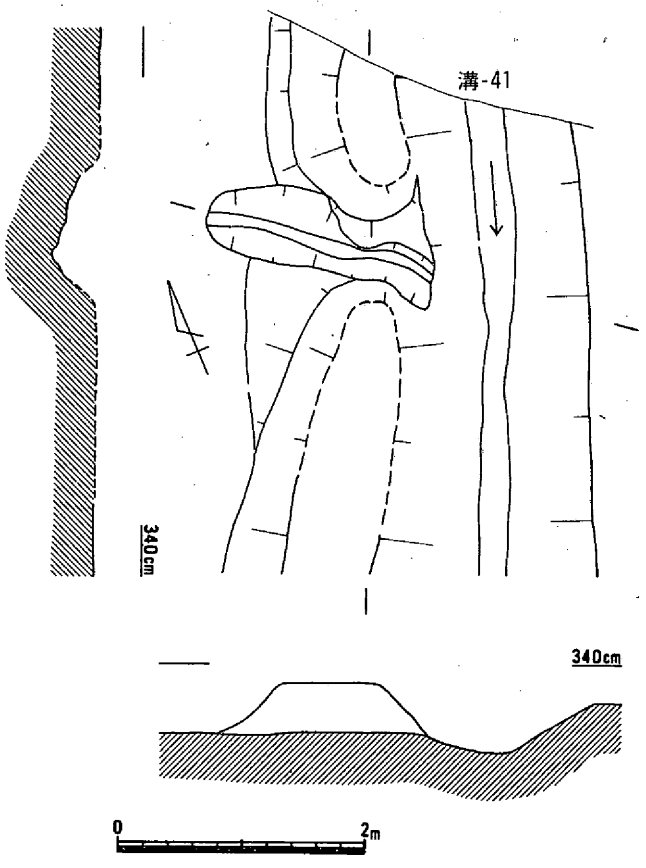


第546図　水田層出土遺物

イン近くの溝ー41からは第547図に示す水口状遺構が検出された。これは溝の西側土手部分を，溝の方向にほぼ直交して水田の方向に掘りこまれた溝状遺構で，下端長約95cm，幅約30cmを測る部分で，溝や水田と同様，淡灰黄色微砂層が堆積していた。第547図に示す断面図は溝の最終時期のもので，当初掘開された溝底よりは，使用中の自然堆積によって水田面とのレベル差はわずか10cm足らずとなっている。この水口状遺構の機能は，溝の方向に対してやや北側に鋭角となっているため，排水施設と考えるのが妥当と思えるが，南方すなわち溝の下流方向に水の閉塞施設を設けるならば，立派な取水口，つまり灌漑施設と認められるのである。しかし，南方の検出部分では，このような施設の痕跡は全く検出することができなかった。ことに板状の流水遮断施設の発見に努めたが果せなかったが，今後，単純ではあるが，このような溝状遺構の存在は，当時の水利灌漑技術の一端を示唆するものとして注意されよう。

水田面からの出土遺物は，微高地に近いことや，部分的には下位に遺構が存在していることもあって，特に土器を中心とした遺物が，比較的顕著に認められた。第546図に掲げる4483～4488はいずれも水田層から出土した土器で，おおむね百・後・Ⅳの時期を示している。特に4488はミニチュアともいうべき完形片の甕形土器でE-15の洪水砂中から出土した極めて数少ない土器である。外底部には木葉の圧痕を残し，調整・胎土などの観察から百・後・Ⅳの時期に比定され，この地点の水田遺構の下限時期，すなわち洪水によって埋没した時期を示唆する重要な手がかりとなっている。

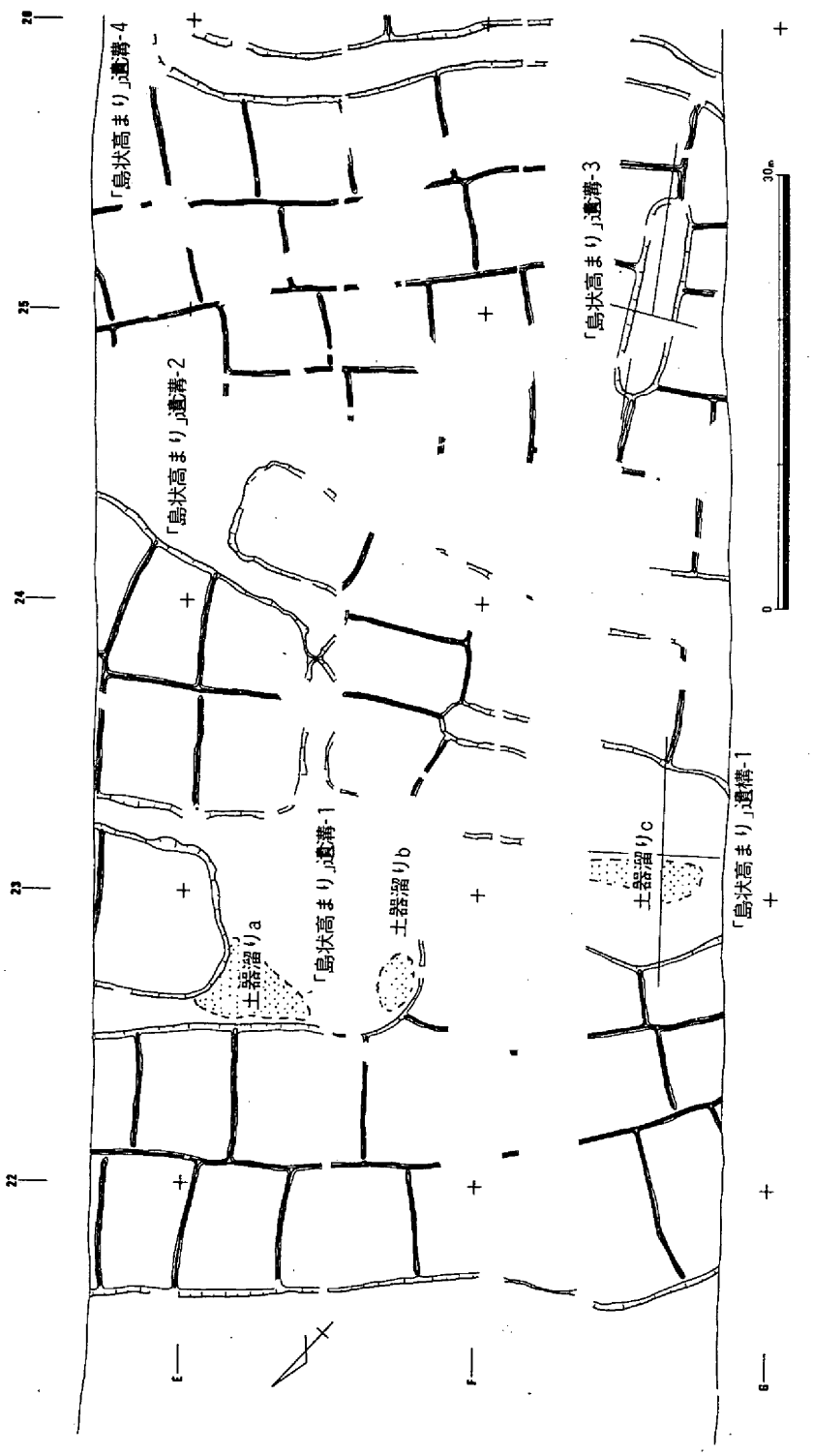
（岡田）



第547図　取　水　口（1/30）

註

宮崎大学農学部助教授，藤原宏志氏の分析によれば，プラントオパールは，この三層のいずれの層からも顕著に検出され，下層にピークが認められ，中層，上層がそれにつぐということであった（1979年11月調査）。百間川遺跡群の水田遺構は，その考古学的な形状の観察によって，認定されているが，科学的な関連科学からもその事実を裏付けられたといえる。



第548図　弥生時代後期水田遺構配置図（1/500）

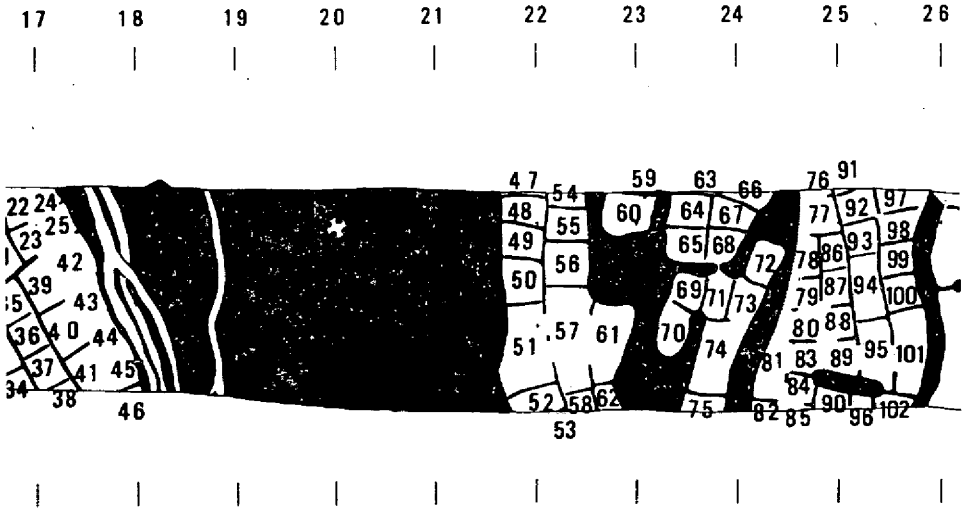
ここでとりあげる水田遺構は，21線中央から26線までの約88m間（約3,780㎡）に所在する「島状高まり」遺構—1・2・3・4と水田・水口等である。

17線から21線中央までの約98m間に南北に延びる微高地が存在し，前述されている水田はそこより西側に位置していたものであり，本地区の水田47～102の田面より約10～20cmくらい田面が低い関係にある。

すなわち・微高地の17・18線間を中心とする付近に南北に走る高所が認められ，西側が河道上の低地（本来の低地を含む）であり，東側が微高地上の低い部分（南北に走る皺状の凹地）を掘削利用した水田ということになる。

19線～26線までの水田は56枚（後世の破壊等を加えると約60～62枚）を数え，小畦畔が「島状高まり」遺構に取付く格好を示す。広い範囲で開田された形状は留めず，微高地上を南北に走る凹地を中心にして掘削したものと考えられ，不整形な馬蹄形状の高まりが取残された格好になる。そして，4つの「島状高まり」遺構と微高地に挟まれた縦に長い水田部が形成されている。このように「島状高まり」遺構が集中する地域には大畦畔の存在は無く，「島状高まり」遺構が造田区画の目安になっているものと考えられる。

水田の小畦畔は，まず流水の方向に直（曲）線的に付設されており，それに直交して取付く格好で「田」の字形に近い区画の形成がある。水口は合計17か所に設けられており，流水方向に並行している。すべての小畦畔に水口が設けられているのではなく，「かけ流し灌漑」の可能性が強い。なかでも水田68と71を結ぶ水口は「島状高まり」遺構を切断貫通させた特異なものである。　（高畑）

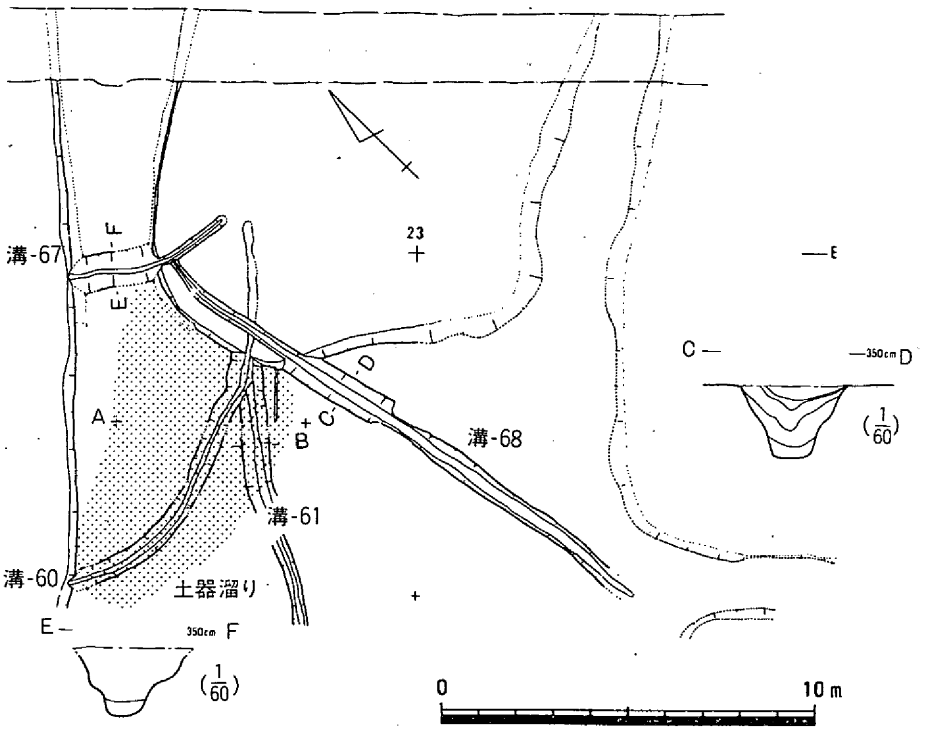


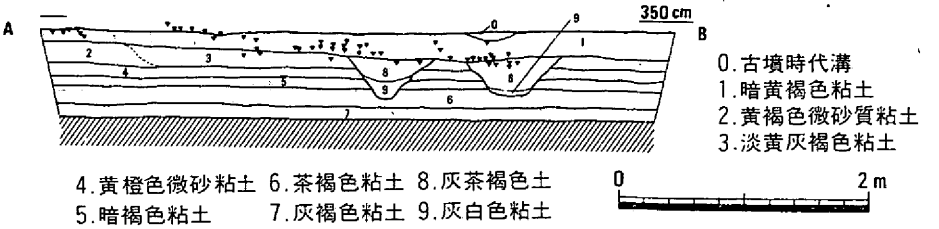
第549図　丸田調査区水田番号

「島状高まり」遺構－1a（第550図）

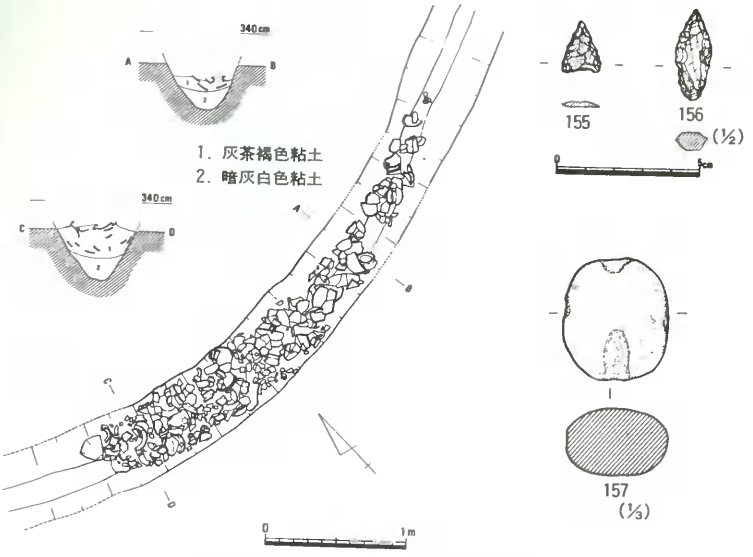
E-22～23に位置し，北方向に二手に伸びる，いわゆる馬蹄形状を為す地帯である。百間川遺跡群の水田遺構中にみられる「島状高まり」遺構の形状は通常，土手状または円形であるが，検出部分は特異な形状を残しており注目される。

その原因については，水田開鑿時に中央部分が馬蹄形状に開鑿され，同時に「島状高まり」遺構－1aの両端が開鑿されたためと考えられる。すなわち，かつては微高地として，西側に存在する，集落が占地する微高地と継続していたことを物語るものであり，弥生時代後期の水田がかなり大規模な開墾によって行われたことが容易に首肯されよう。また，馬蹄形状内の水





第550図　「島状高まり」遺構　1a・溝-60・61・67・68（1/200・1/60）溝



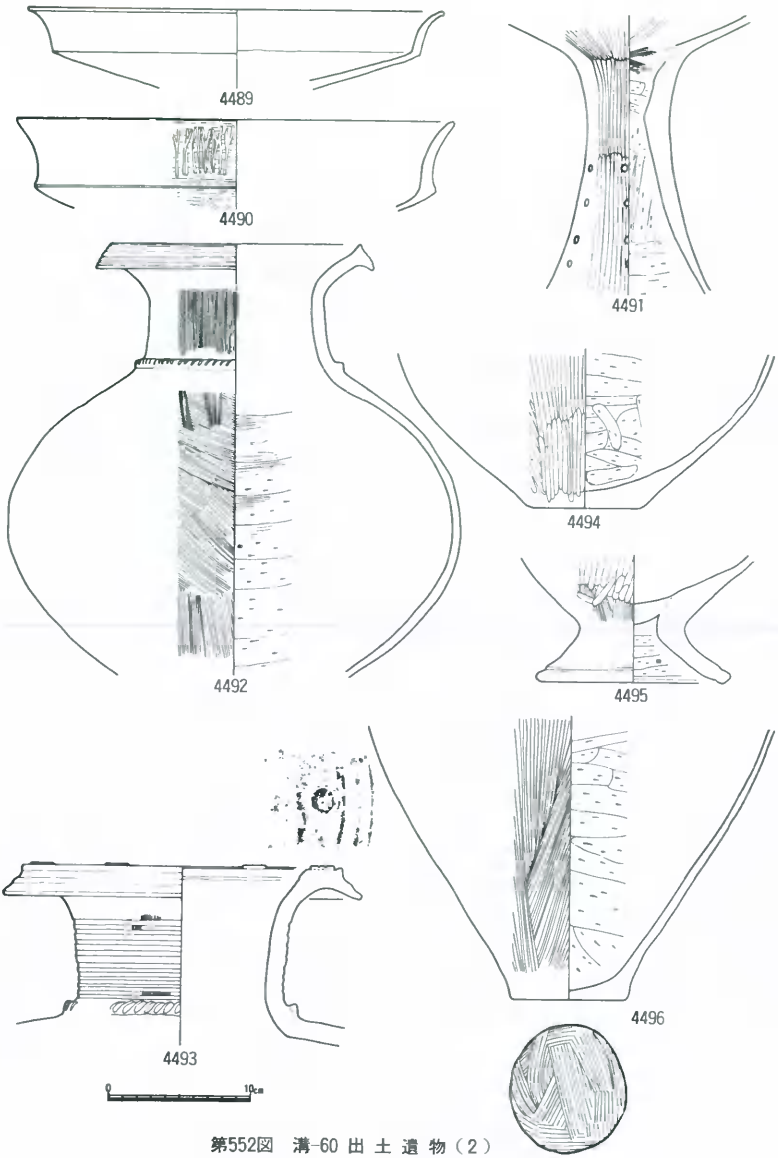
第551図　溝-60（1/40）・出土遺物（1）

田面と「島状高まり」遺構－1ａとの比高差は約35cmであるが，同遺構の両端に位置する水田面との比高差は，それより約5cm低いことを付記しておく。以下，当遺構部分で検出した土器溜り，溝について述べておく。

「島状高まり」遺構-1ａ土器溜り（第555～567図）

当遺構の南西部分に土器溜りを検出した。長辺800cm，短辺650cmの範囲内に遺物は分布しており，特に西隅部分の土器の集中度は高い。遺物は大半が破砕されており，幾重にも密着して出土する部分と散在的に出土する部分とがあった。後述する溝－60・61との時期的な関連が問題であるが，廃棄量等を考慮すると同時的な存在はあり得ない。要するに溝－60がその機能を失った段階で土器が一括投棄され，その後，「島状高まり」遺構－1ａの3層，淡黄灰褐色土の構成する下がり部分，もしくはたわみと考えられる部分に土器が多量に投棄され，堆積したものと考えるのが妥当であろう。この状況は，集落縁辺のやや低まった部分に，あたかも土器が埋めたてられたかのような行為を示しているようである。

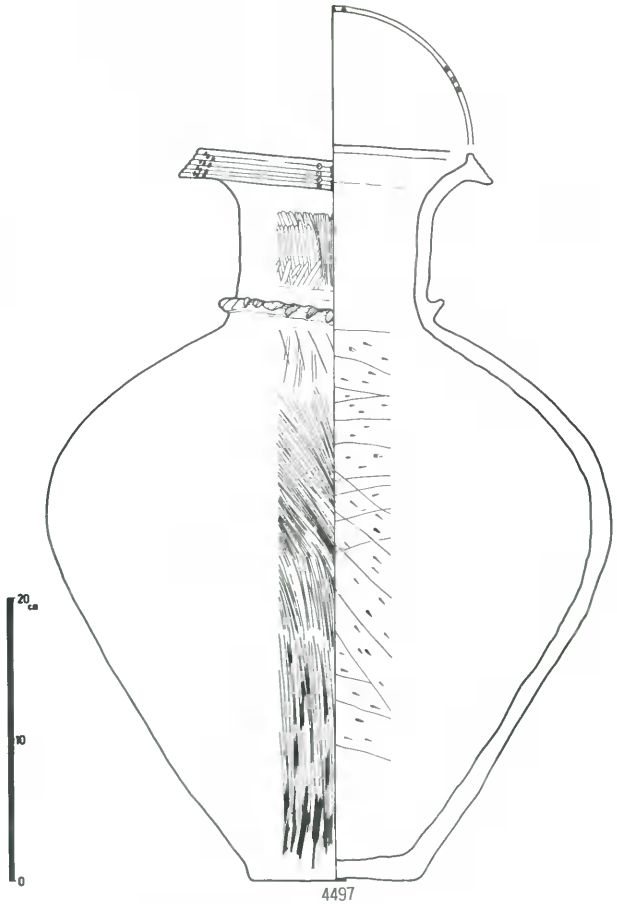
溝－60内に含まれている以外の遺物の高位レベルは345cm，低位レベルは315cmを測り，一部はレベル的に3層に含まれる遺物も若干認められるが，総じて，3層の西から東に向けて



第552図　溝-60 出 土 遺 物（2）

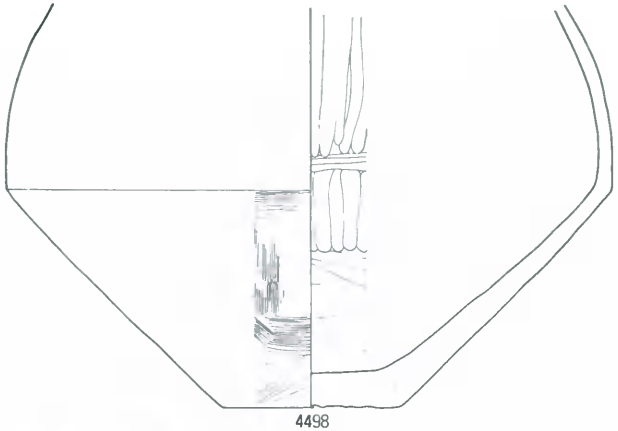
傾斜する下がり部分に遺物が集中している。

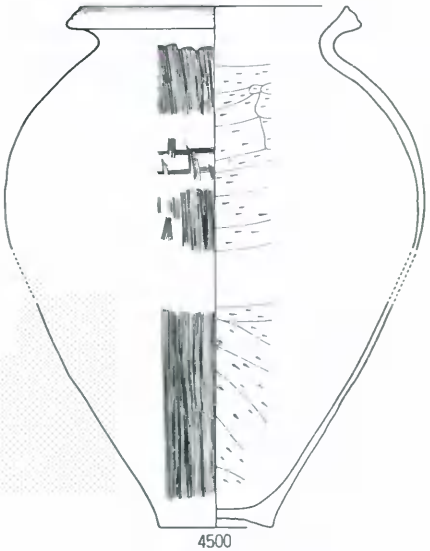
出土遺物は大型土器片を中心に実測図の作成が可能となったが，171個体中，壺50，甕74，高杯16，鉢14，製塩土器14，器台3がみられ，壺・甕が圧倒的に多いのが特徴的である。時期は百・後・Ⅰの新相段階を示すものと考えられる。とりわけ長頸壺にみられる頸部下位（体部との境界部）の刻み目をもつ凸帯の装飾は，一時期に限定される流行と思えるもので，この凸

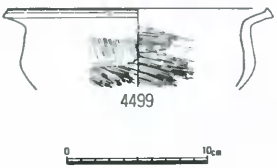


第553図　溝-60 出 土 遺 物（3）

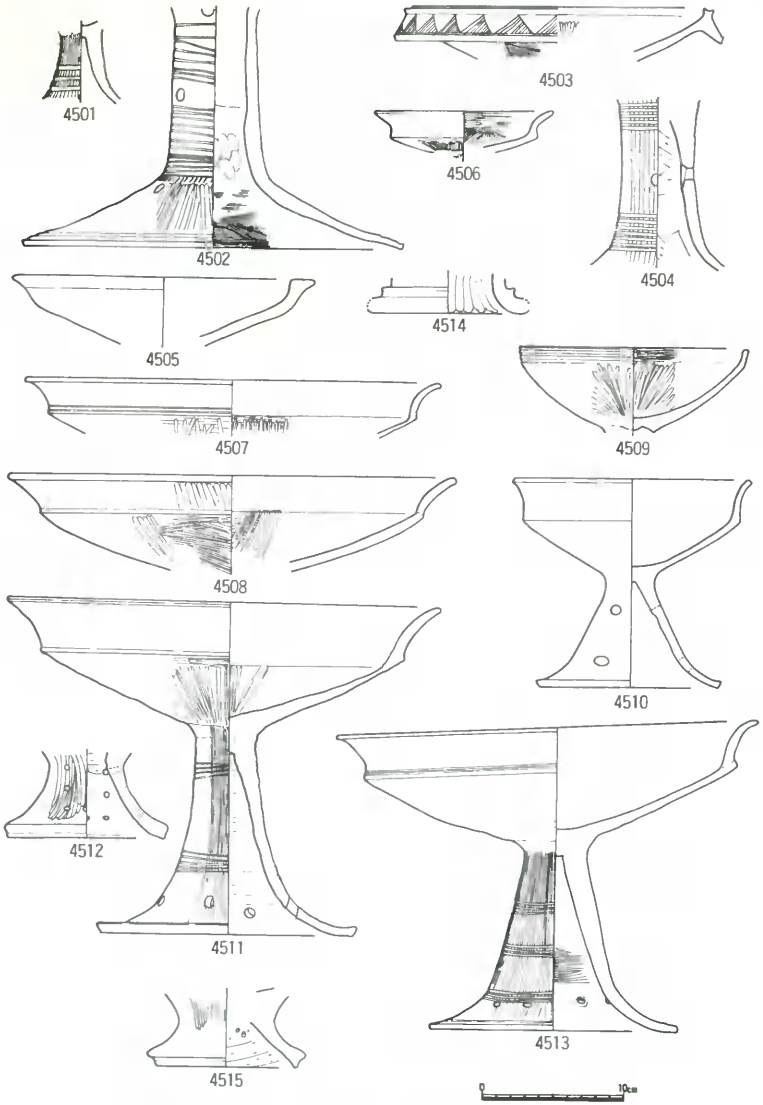
帯のかわりに刺突列点文をめぐらすものも多い。（4497・4540・4569）（4536・4555・4563・4564・4567）また，口縁部にみられるヘラ描き文の加飾や棒状浮文の加飾も目立ち，4568のように大きく張り出して，平たい口縁部をもつ特異な形態をもつ壺もみられる。高杯は，おもに脚



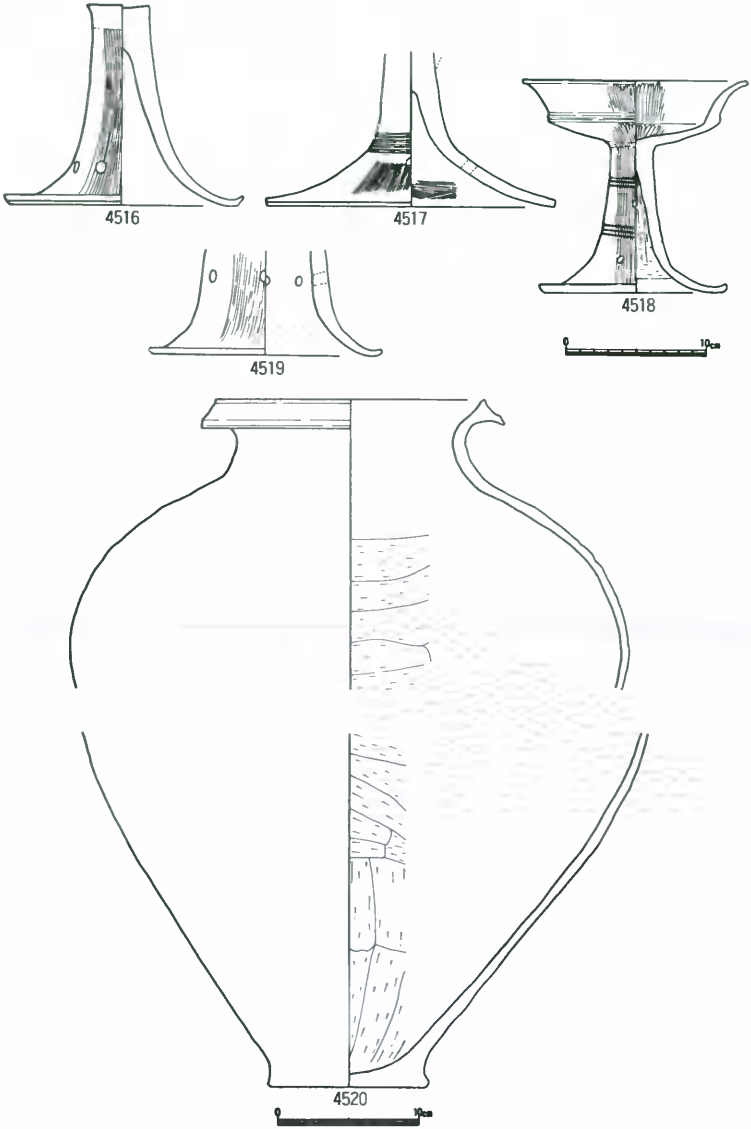




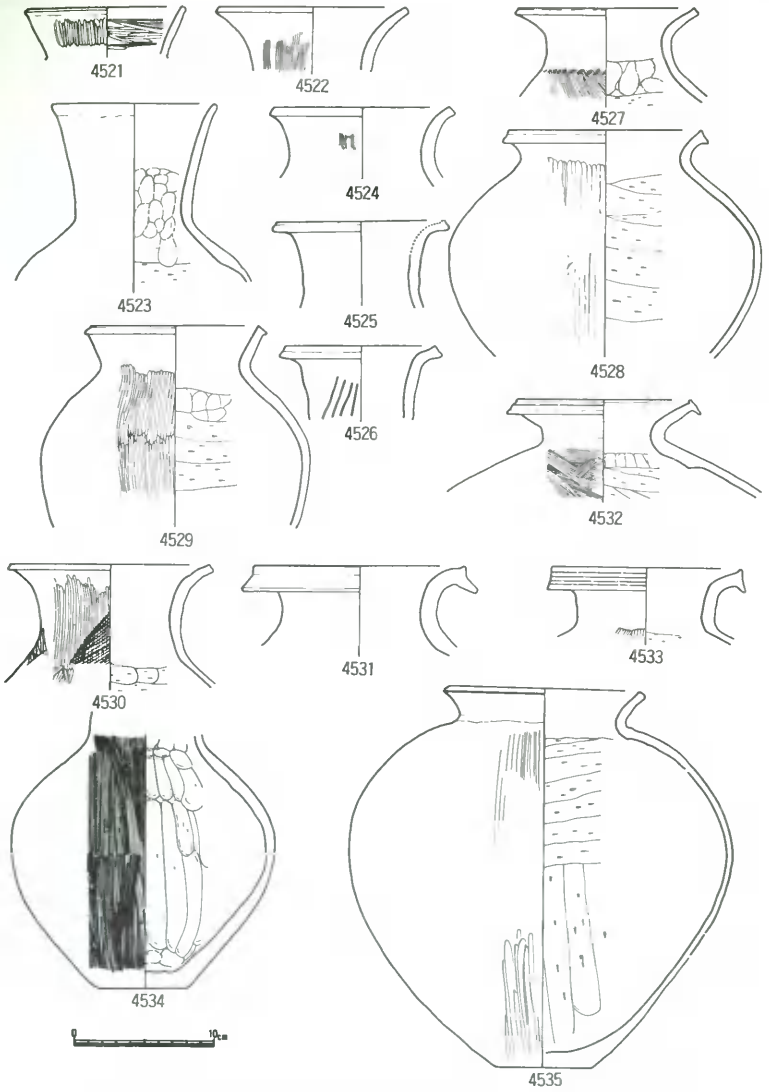
第554図　溝-61 出土遺物



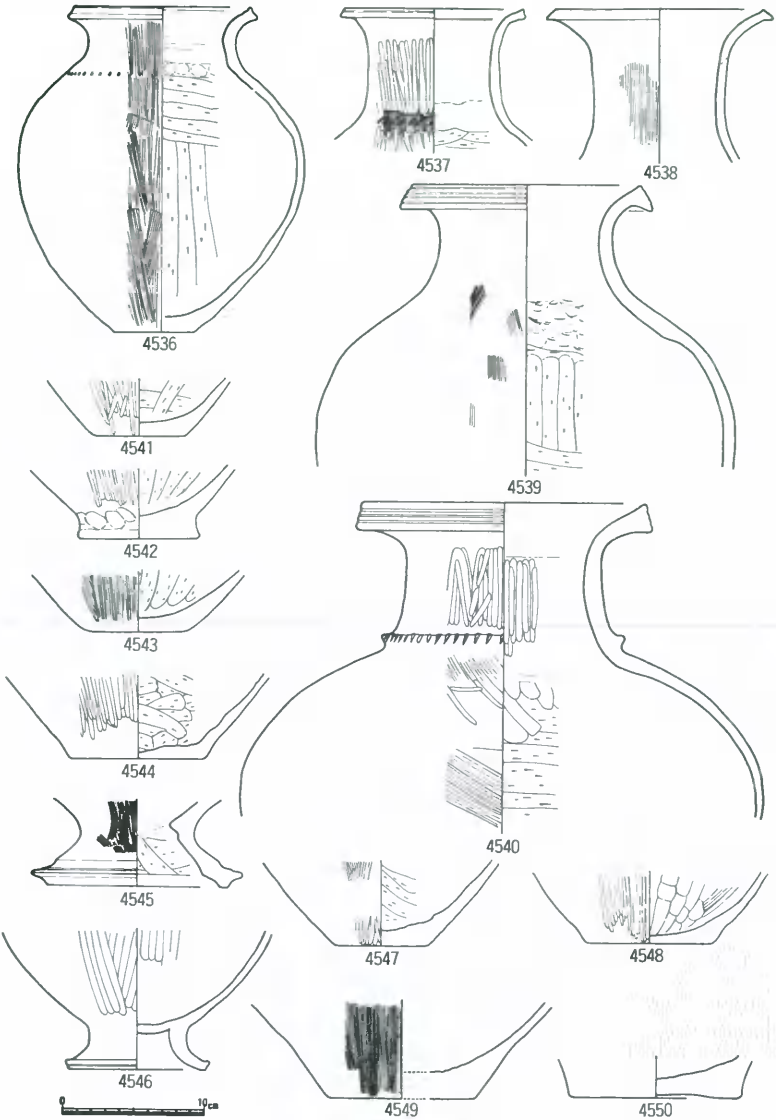
第555図　「島状高まり」遺構-1ａ土器溜り出土遺物（１）



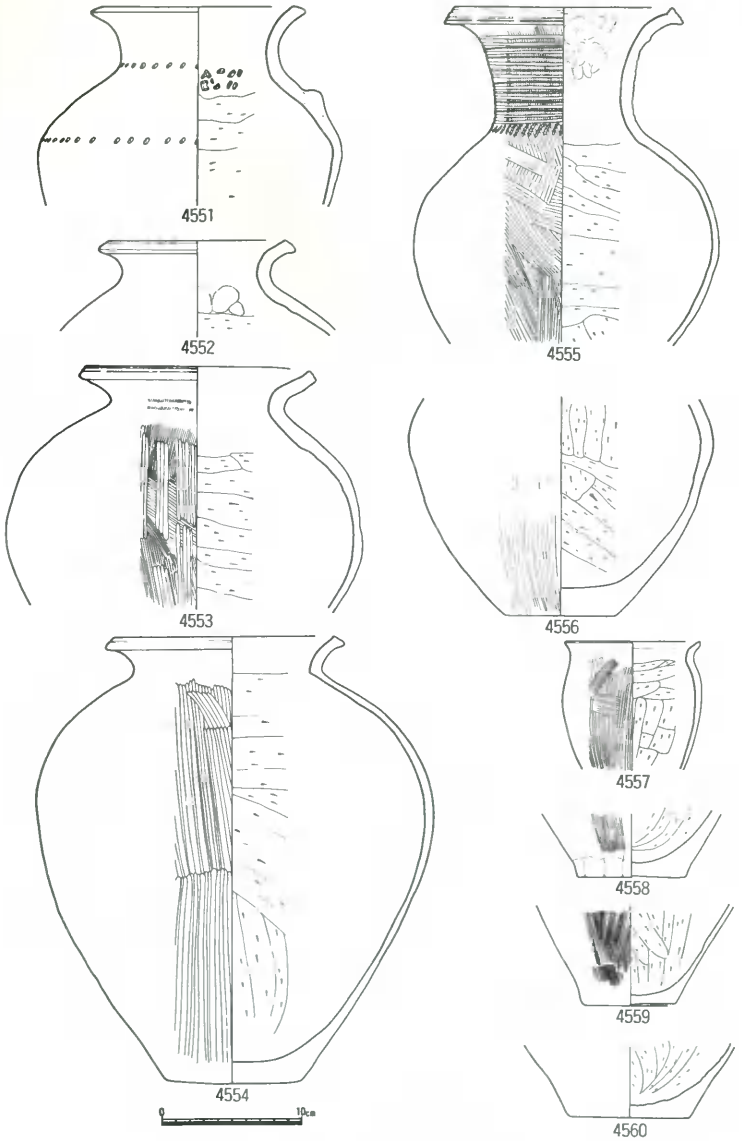
第556図　「島状高まり」遺構-1a土器溜り出土遺物（2）



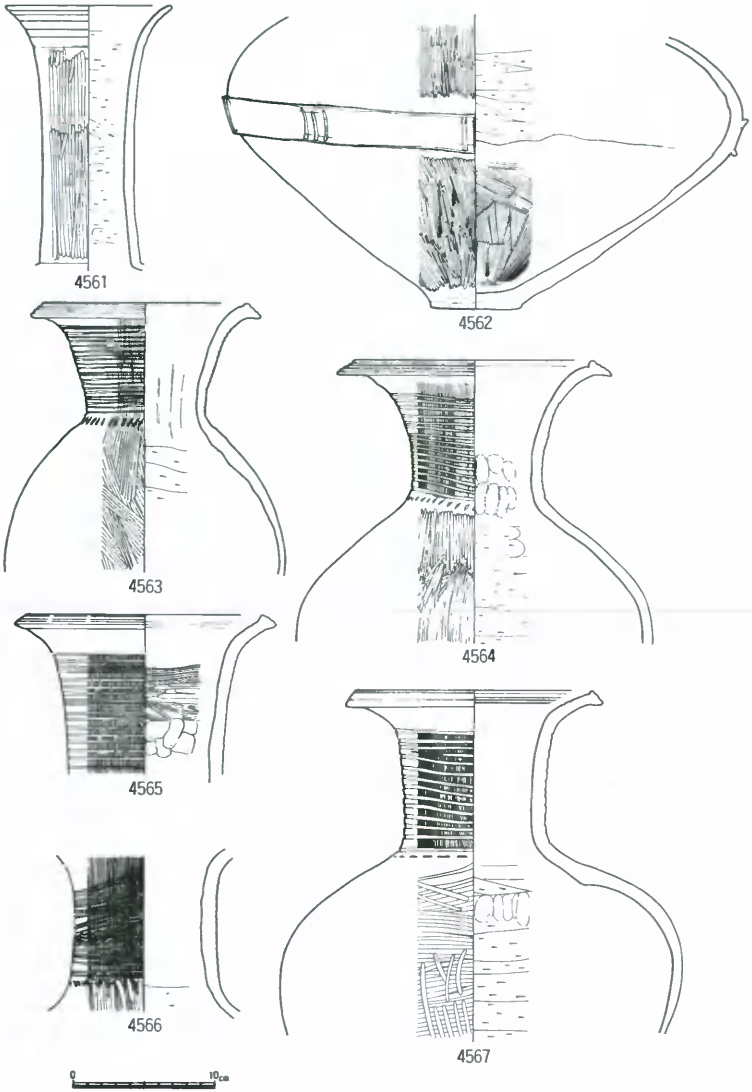
第557図　「島状高まり」遺構-1a土器溜り出土遺物（3）



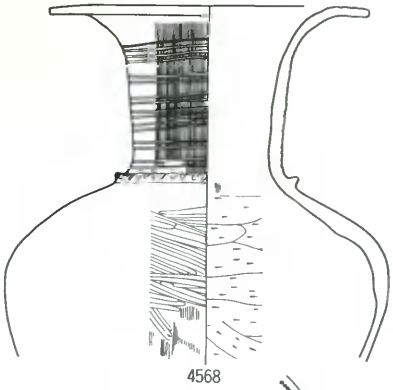
第558図 「島状高まり」遺構-1a 土器溜り出土遺物（4）

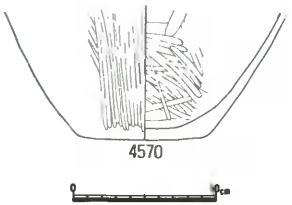


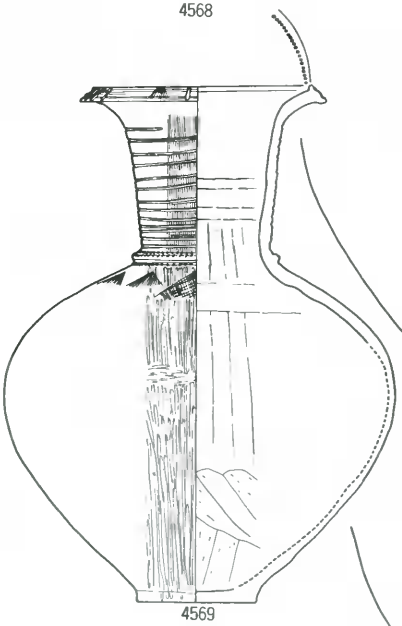
第559図　「島状高まり」遺構-1a土器溜り出土遺物（5）

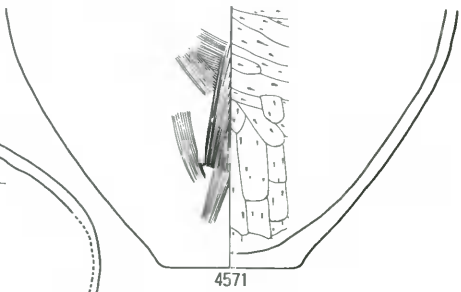


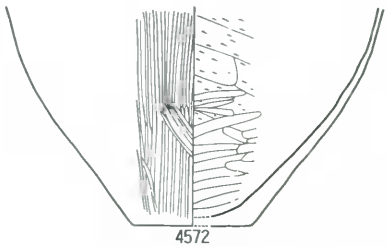
第560図 「島状高まり」遺構-1a土器溜り出土遺物（6）



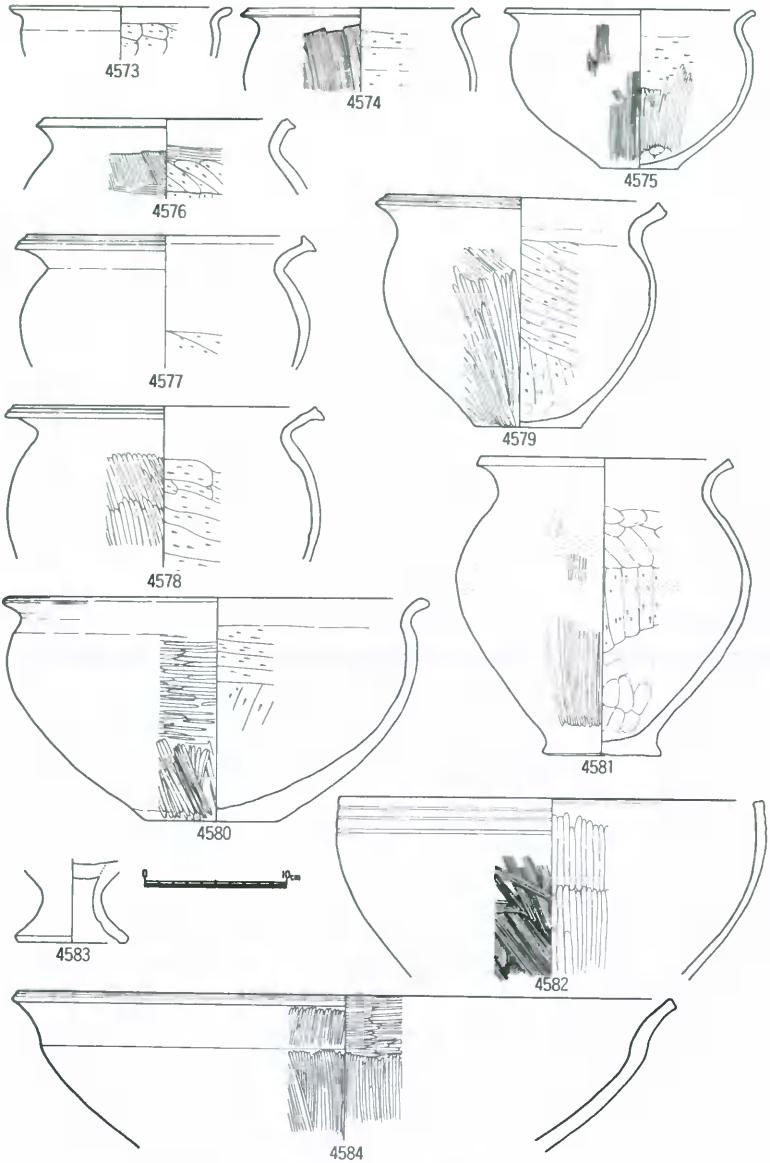




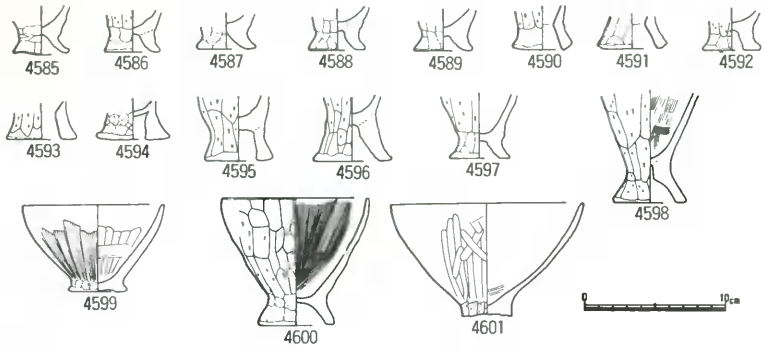




第561図　「島状高まり」遺構-1ａ土器溜り出土遺物（７）



第562図　「島状高まり」遺構-1a 土器溜り出土遺物（8）



第563図　「島状高まり」遺構−1ａ土器溜り出土遺物（９）

部がラッパ形に長くのびて開き，数条を一単位とする凹線文を加飾し，さらに装飾的な透孔をめぐらす。これら中期的な特色を色濃く残す高杯4511が4505のように平たい端面をもつ高杯と共伴することから，井戸−17に近い時期，さらに井戸−16よりわずかに先行する様相が看取される。

溝−60（第550〜553図）

土器溜り部分を除去したのち検出した溝である。「島状高まり」遺構−１の南部分に位置し，南流する溝である。途中，分流していると考えられ，北側部分の様子は，弥生時代後期の水田開田時にカットされ，一部，その痕跡を確認したが判然とはしない。溝上端部幅70〜75cm，下端部12〜28cm，深さ35〜40cmを測る。断面形は底に若干丸味をもつＶ字形を呈する。堆積土は，二層に分層が可能であり，上層の灰茶褐色土に遺物を多く包含している。廃絶時期は遺物の様相からして，土器溜りの時期よりやや古く，百・後・Ⅰの段階までさかのぼる可能性がある。

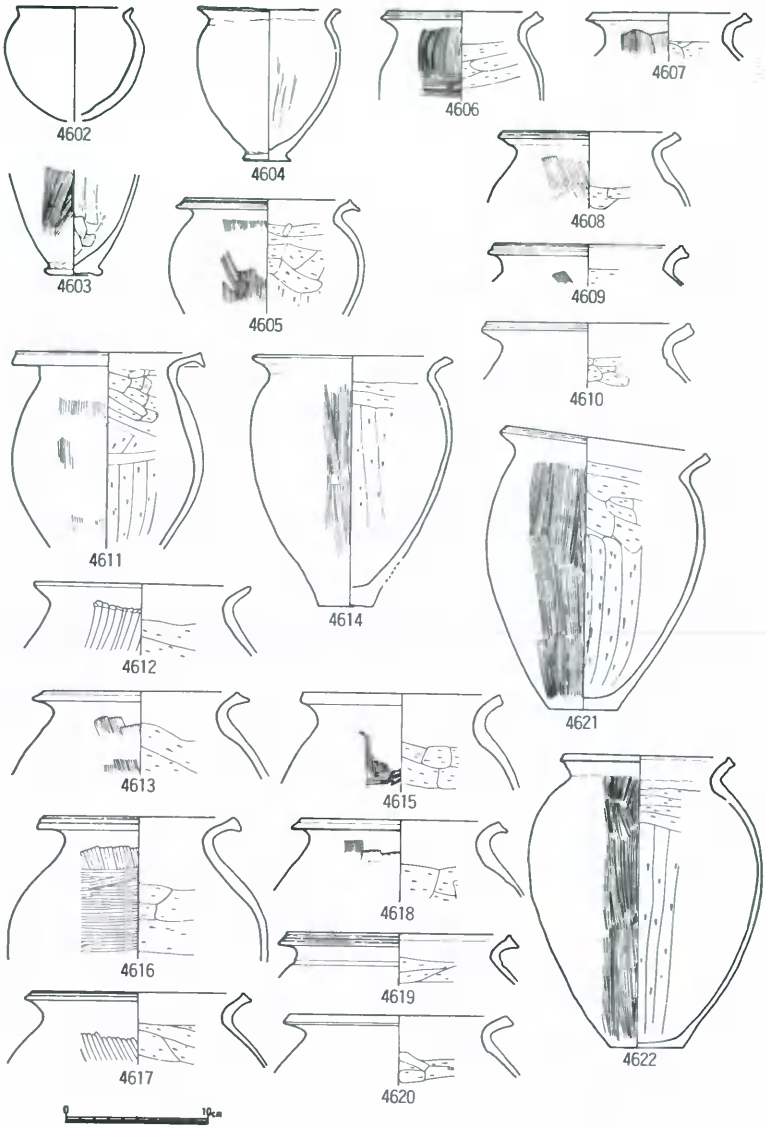
溝−61（第550・554図）

当遺構の中央部をほぼ南北に横断する溝である。溝上端部幅約80cm，下端部幅約30cm，深さ約28cm，断面形はＶ字形を呈する。前述の溝−60，土器溜りの時期より，層位的に新しいものであり，弥生時代後期の微高地掘削時の水田開墾直前まで，微高地上に存在する溝として，用・排水いずれかの機能を有していたと考えられる。（渡辺・岡田）

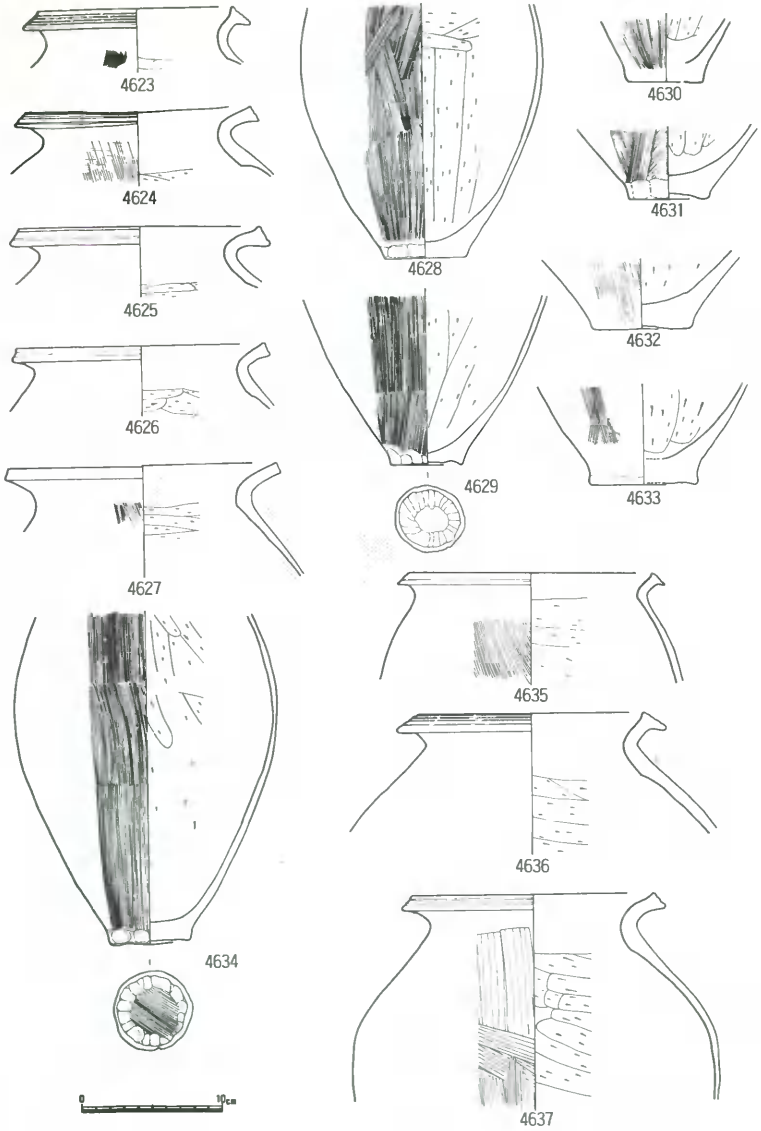
「島状高まり」遺構−１ｂ土器溜り（第568図）

Ｅ−22・23に位置し，「島状高まり」遺構−１の中央部分にあたる。22・23線間より南下した「島状高まり」遺構の縁辺がＦ線上位で東に向きを変え，約10m進み再び南下するその屈曲部に所在する。

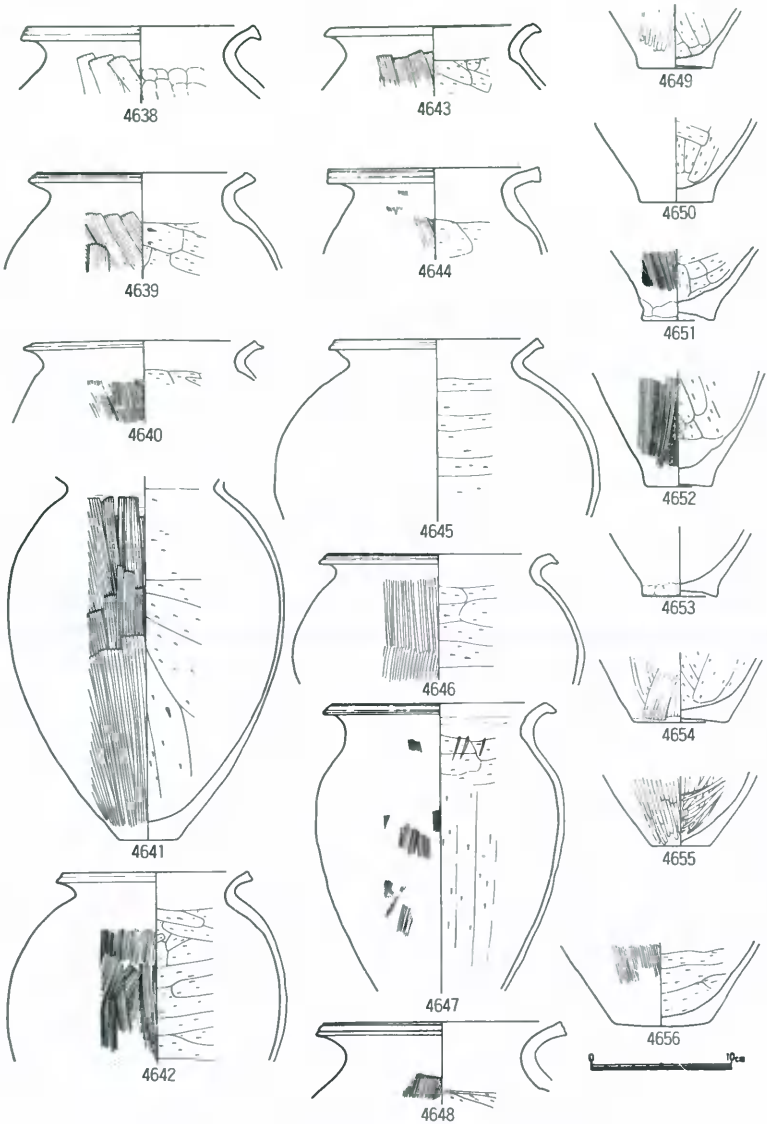
「島状高まり」遺構−１ａ・１ｃの土器溜りと比較すると非常に出土遺物が少なく，小片に限定できるものばかりである。出土状況は「島状高まり」遺構の上面に立ち込んだ格好であ



第564図　「島状高まり」遺構-1 a 土器溜り出土遺物（10）



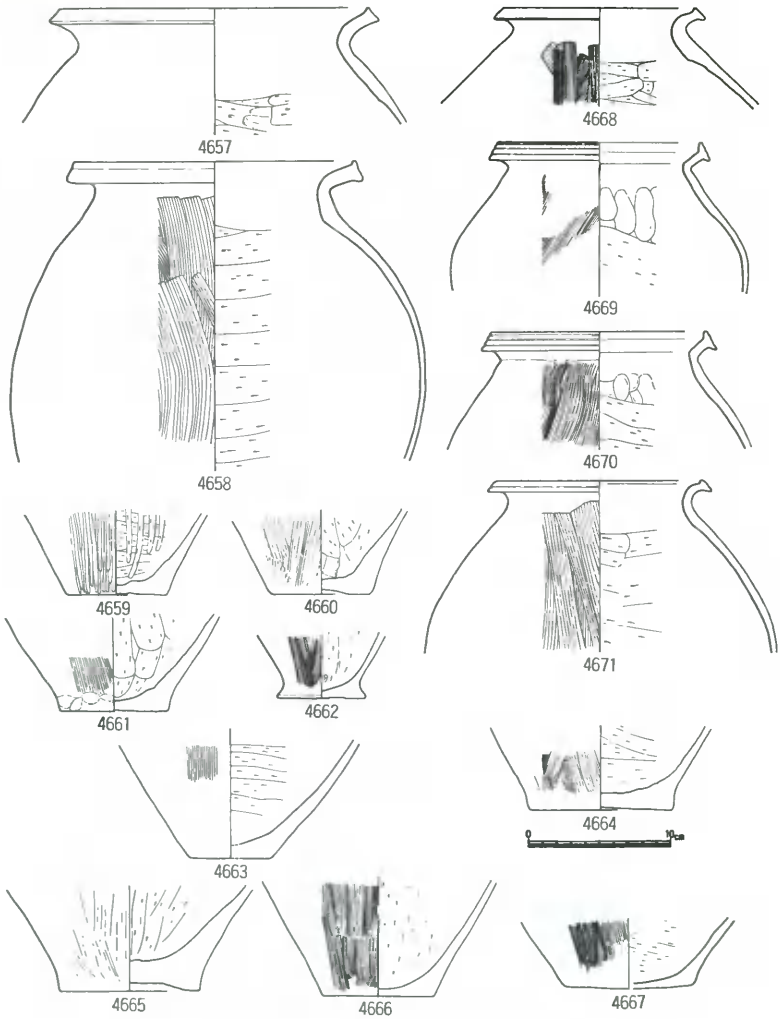
第565図　「島状高まり」遺構-1 a 土器溜り出土遺物（11）



第566図　「島状高まり」遺構-1 a 土器溜り出土遺物（12）

る。時期は百・後・Ⅱの古相に比定できる。

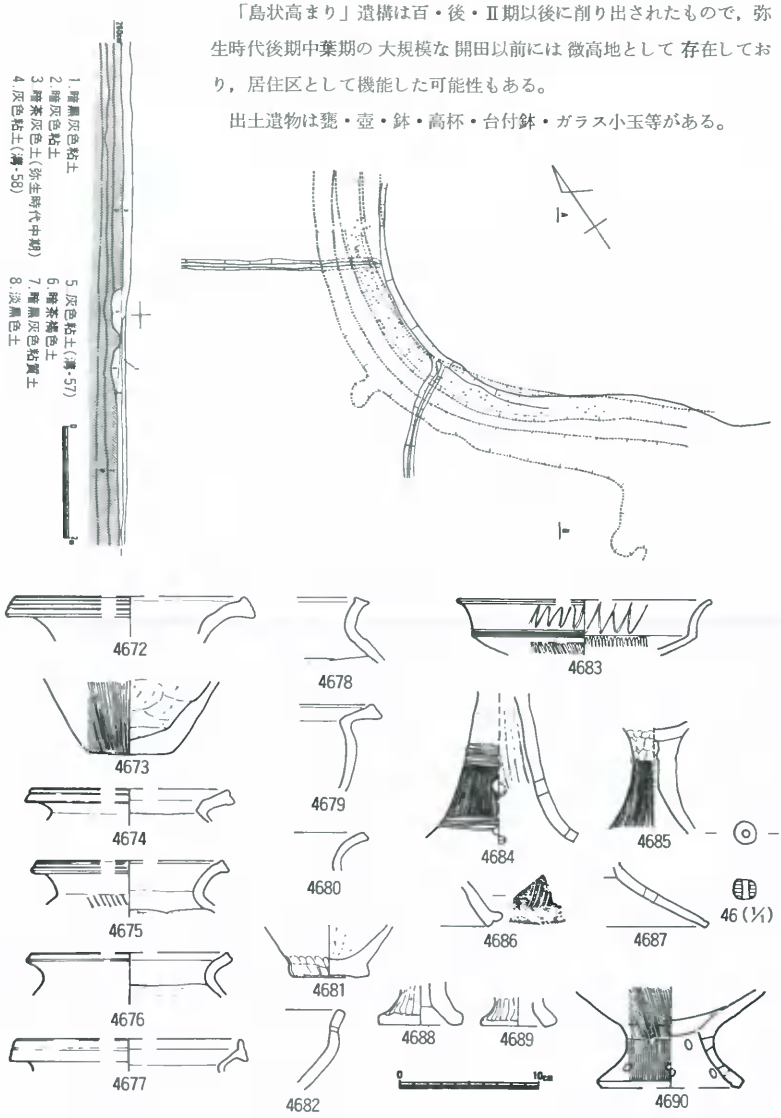
土器溜りと呼称するより包含層扱いが妥当であろうが，「島状高まり」遺構以前の微高地の状態を理解するために取上げたものである。



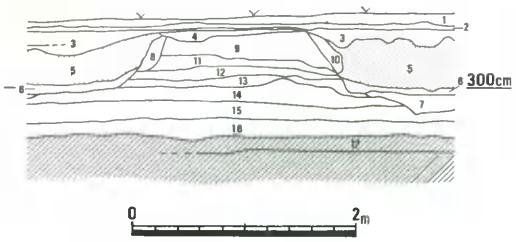
第567図　「島状高まり」遺構−1 a 土器溜り出土遺物（13）

「島状高まり」遺構は百・後・Ⅱ期以後に削り出されたもので，弥生時代後期中葉期の大規模な開田以前には微高地として存在しており，居住区として機能した可能性もある。

出土遺物は甕・壺・鉢・高杯・台付鉢・ガラス小玉等がある。



第568図 「島状高まり」遺構-1b土器溜り(1/100)・出土遺物



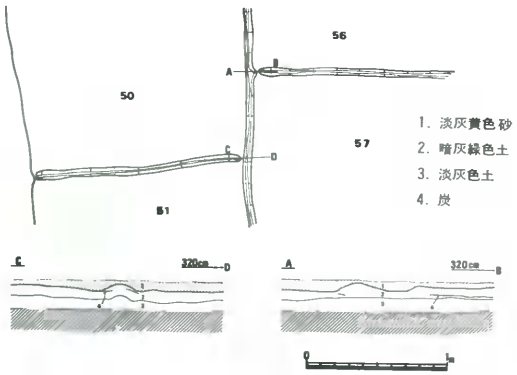
第569図　「島状高まり」遺構−1 土層断面（1/50）

上図断面図は「島状高まり」遺構−1 bの馬蹄形状になる東側（D−23）の断面である。

「島状高まり」遺構の上端海抜高は350cm，水田面は西側で海抜302cm，東側で300cmを測り，上端部との比高差約50cmが存在する。水田土層は約10〜15cmを測り，色調によって二層に分けることが可能であるが，鉄分およびマンガンの分離層は明確には認めがたい。

さて，「島状高まり」遺構−1自体は微高地を削り残して造られたものと考えられ，D−22の馬蹄形状なる東西の「島状高まり」遺構の層位に同一の土層が確認できる。

しかし，その層位はD−22中央にある「島状高まり」遺構の西側が高く，微高地の自然地形が西より東に傾斜していることが理解できる。このような事実は微高地が平坦面のみで形成されているのではなく，皺状の凹地が縦横に存在していたことを物語っている。



第570図　小　畦　畔（1/40）

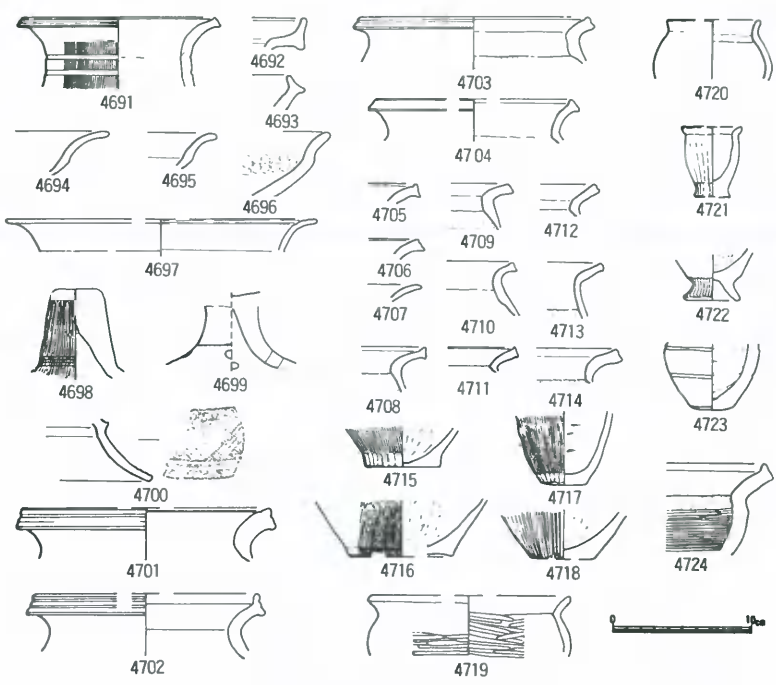
小畦畔（第570図）

E−21・22にまたがる水田50・51・56・57の小畦畔をとりあげ，若干の説明を加える。

畦畔の下端幅は20〜25cm，高さ3〜7cmを測り，「山」状の断面を呈する。A−B断面は斜線部が造田の際の掘開停止線であり，暗青緑灰色を呈し鉄分が多く認められる。その上位に厚さ約10cmの淡灰色粘土層が認め

られ，さらに上位に水田土壌である暗灰緑色粘土（厚さ５～７㎝）がある。畦畔も同一の土壌であるが，小畦畔下約５～７㎝に炭層が面的に存在する。畦畔を盛る時点において有機物が敷かれ，畦畔の崩れを防ぐための工夫が施された可能性がある。Ｃ－Ｄ断面においてもほぼ同様のことが言えるが，土層の厚さに若干の相異が認められる。

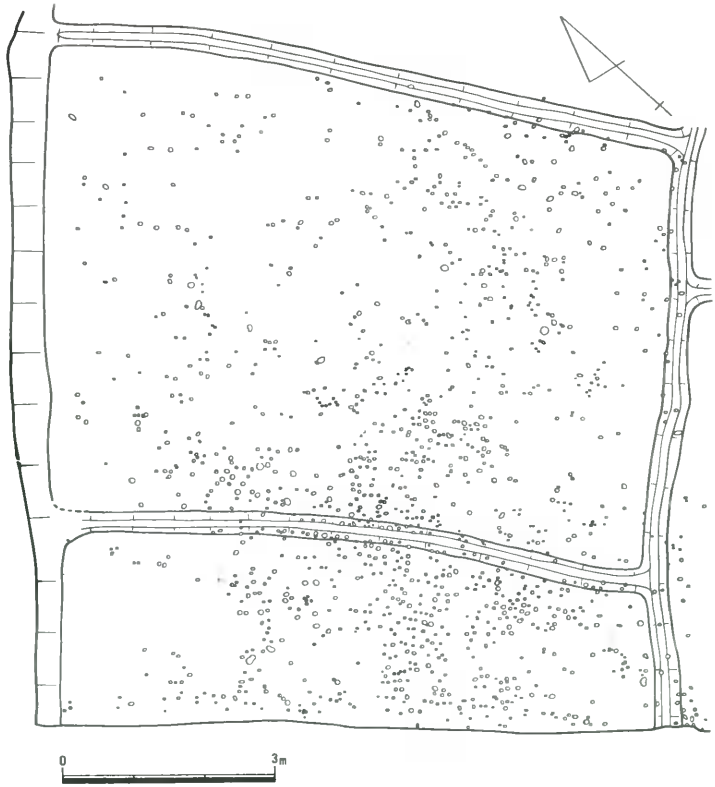
水田層下出土の土器は２，３層を中心に出土しており，壺・甕・高杯等の小片に限定されている。これら出土の土器は弥生時代後期末の水田より古く，弥生時代後期初頭より新しい時期のものである。大半が百・後・Ⅱの範囲内に比定できるが，4692・4693・4699・4702等が百・後・Ⅲの可能性がある。これらの遺物が弥生時代後期の造田より弥生時代後期末までの継続期間を表わしている。（高畑）



第571図　水田下層出土遺物

稲株痕（第572図）

E-21～22に位置し，微高地と「島状高まり」遺構－1の間に検出された水田49・50で確認した。顕著な稲株痕を検出し得たのは，南西部分の二枚の水田である。灰褐色粘土層の水田面に，洪水砂である灰黄色を呈する微砂が稲株の腐食部分のくぼみに落ちこんだ状態で検出されるわけであるが，稲の根の呼び水の影響からか鉄分の集積現象を呈している。わずかではあるが，稲株痕のなかに2～3㎜大の粘土が入っているものも数個検出した。稲株痕の大きさは，径約3～6㎝大であり，平均の深さは3～4㎝である。これら稲株痕の遺存状態は，けっして良好とはいえないが，東西方向に植えつけが施されており，とりわけ畦付近の植えつけは畦によって規制されていることが理解できる。（渡辺）

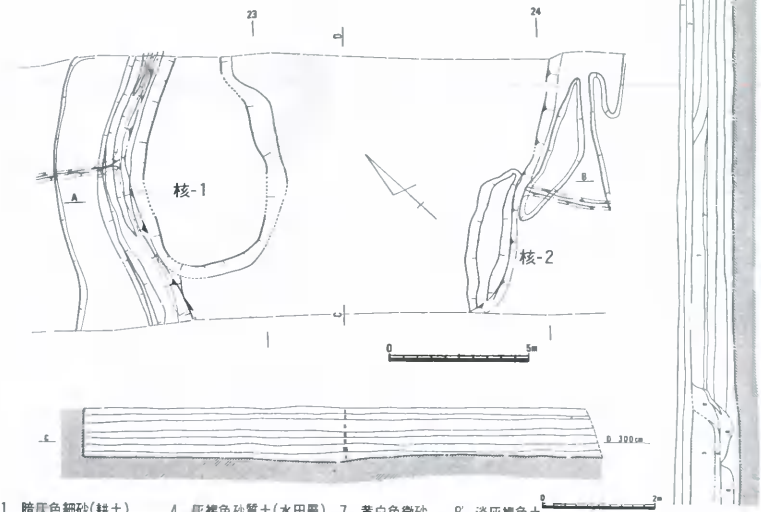


第572図　稲　株　痕（1/80）

「島状高まり」遺構－１ｃ土器溜り（第574～581図）

「島状高まり」遺構－１ｃは，F-22～23にかけて幅14mにわたり検出された遺構で，南西端は調査区外におよんでいる。遺構の中央部は現代の用水路により切断されているが，北東方向に二股に分かれて伸び，その北側の端部が「島状高まり」遺構－１ｂに接続している。つまり「島状高まり」遺構－１は，馬蹄形を呈する２つの「島状高まり」が微高地にほぼ平行して南北に連なる形状を呈している遺構である。

「島状高まり」遺構－１ｃは北西端と南東端に２つの核となる黄白色微砂の高まりが認められる。南東端のもの（核－２）は幅150cm，長さ500cm程の細長いもので，北西端のもの（核－１）は幅500cm，長さ800cm程が認められ，丸味を帯びた形状を呈している。この２つの核の間にはもともと撓み状に窪地が存在していたものと思われる。これら２つの核とくぼみを覆うように黄褐色微砂・褐色微砂が漸次堆積されて微高地状の高まりが形成されたものである。この「島状高まり」遺構－１ｃの北西端には，遺構に



1 暗灰色細砂(耕土)
2. 灰褐色粗砂
3 淡黄灰色細砂(洪水砂)
4. 灰褐色砂質土(水田層)
5. 褐色微砂(Mnが多い)
6 黄褐色微砂
7. 黄白色微砂
7. 黄灰色微砂
8. 灰褐色粘質土
8' 淡灰褐色土
9. 黒褐色土
10. 茶灰色粘質微砂
11. 灰褐色粘質微砂
12. 暗灰黄色粘質微砂

第573図 「島状高まり」遺構－１ｃ(1/200・1/100)

沿って２～３条の溝状遺構が認められる。この遺構は，一部に「溜り」状を呈するところがみられる等，通水機能としての溝と考えられるものではない。埋土はいずれも灰褐色粘質土が一層で，底は深いところで海抜260cmである。遺物等時期を示すものは認められないが，「島状高まり」遺構－１ａの状況も含め全体の検出状況からみて，これらは「島状高まり」遺構の形成に際し，土取りにより生じた跡のような「島状高まり」遺構に伴ったものとして考えられる。一方南東側にはこれら溝状を呈する遺構は認められず，わずかに淡灰褐色土により埋没した浅い「溜り」状遺構が水田層の下に散在しているのみである。断面の観察によると，北西端の黄褐色粘質微砂は盛り上げたようにみられるのに対し，南東端は切り取った様相を呈している。

この「島状高まり」遺構－１ｃ核－１の東側から南側に，幅約150cmで帯状に巡る土器溜りが，褐色微砂の堆積土中に認められた。この土器溜りには復元完形のものはもとより完形の土器も数点みられるなど，出土状況からみて比較的一時に投棄或いは埋没されたものと思われる（4725～4870）。これらの土器の中には若干古い様相を示しているものも認められるが，時期は，ほぼ百・後・Ⅱの古相に比定される。

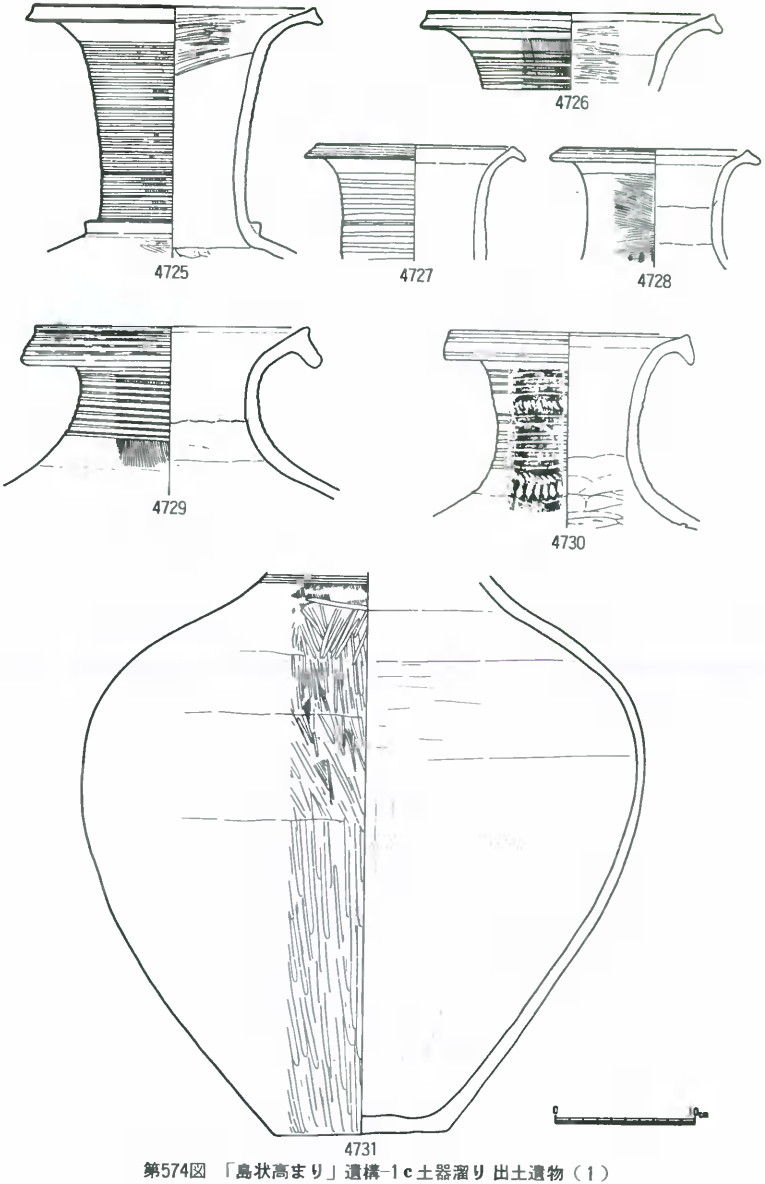
なお4845の高杯は核－１の北東部のくぼみの中に埋没していたものである。またこの土器溜りは確認調査における「『Ｂ-17ａ』溝内出土状況」（註１）の土器すべてが含まれている。

「島状高まり」遺構－３

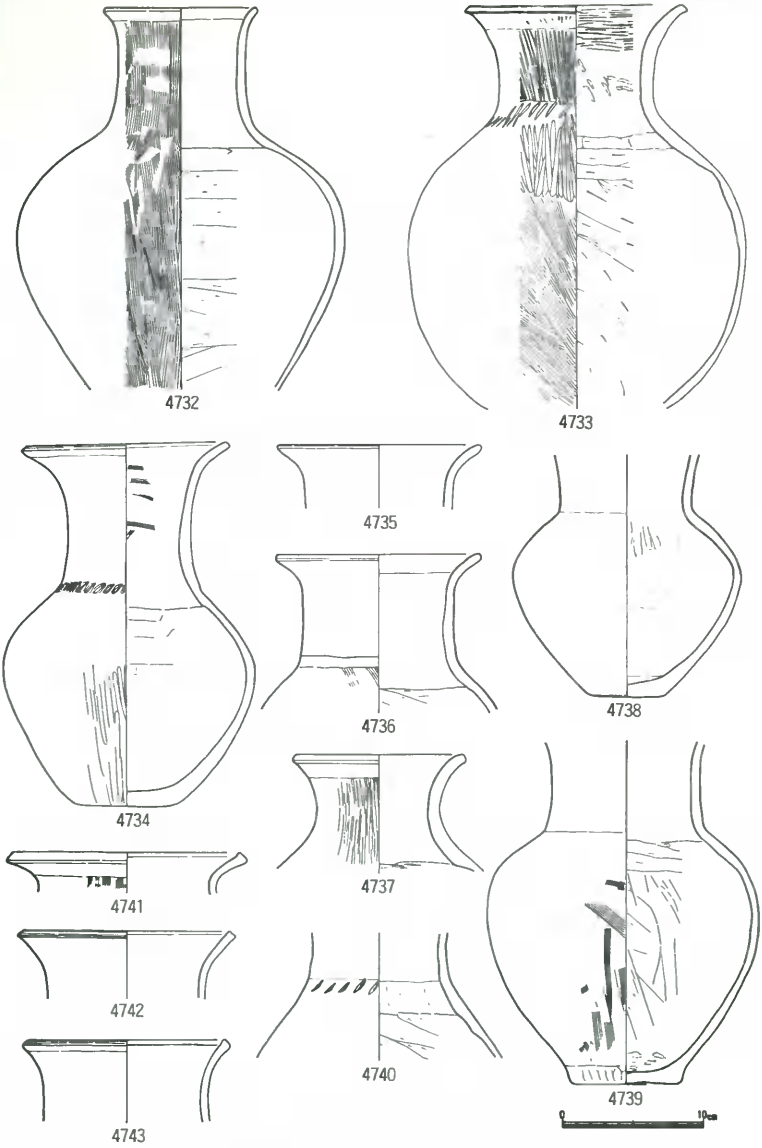
「島状高まり」遺構－３は，Ｆ-24～25にかけて検出された長さ140cm，幅350cmの東西方向に長い長楕円形を呈する遺構で，北端が現代構に接している。

「島状高まり」遺構－３は島の南西側に片寄って核状の淡灰黄色粘質土が認められ，その上を黄灰色粘質微砂が覆っている。この「島状高まり」遺構－３には６～７本の畦が取り付いているものの，他の「島状高まり」遺構に接続することなく単独で水田中に存在している。この「島状高まり」遺構－３の北東端に沿って幅50cm程の非常に浅い溝状遺構が確認された。この溝状遺構は，「島状高まり」遺構の南端部で終わり，通水機能としての溝とは考えられない。埋土は茶灰色粘質微砂が一層である。底のレベルは海抜290cmで水田層の下面とほとんど差がみられない。遺構に伴う出土遺物等は認められないが，遺構の検出状況からみて，この溝状遺構が「島状高まり」遺構－３に伴ったものとみて間違いなかろう。4873の壺は，この「島状高まり」遺構－３のほぼ中央部において黄灰色粘質微砂層の上面からほぼ完形の土器が土圧により押しつぶされた状況で出土したものである。

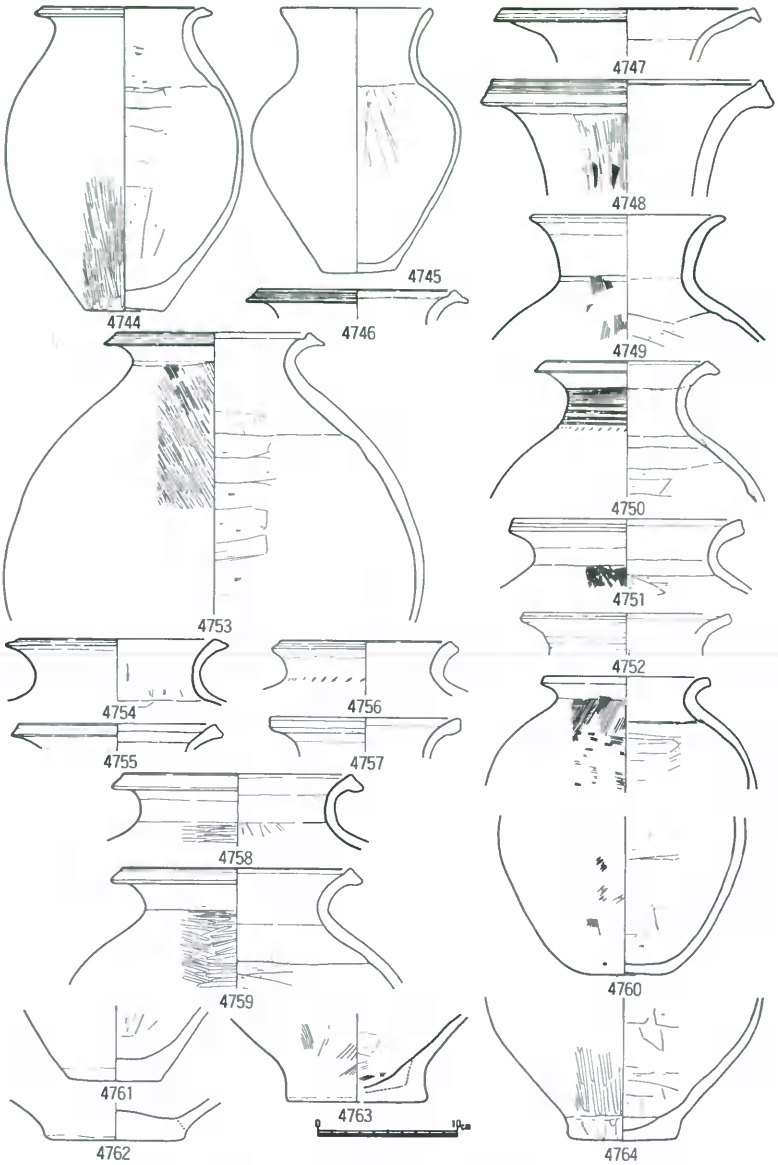
これらの状況からみて「島状高まり」遺構－３が形成された時期は，百・後・Ⅱの古相からそれ程遠くないと思われる。4871は「島状高まり」遺構－１ｃの北東方向に二股に分かれて伸びた，南側の埋土から出土したものである。また4872は「島状高まり」遺構－２の上層埋土中から出土したものである。（内藤）



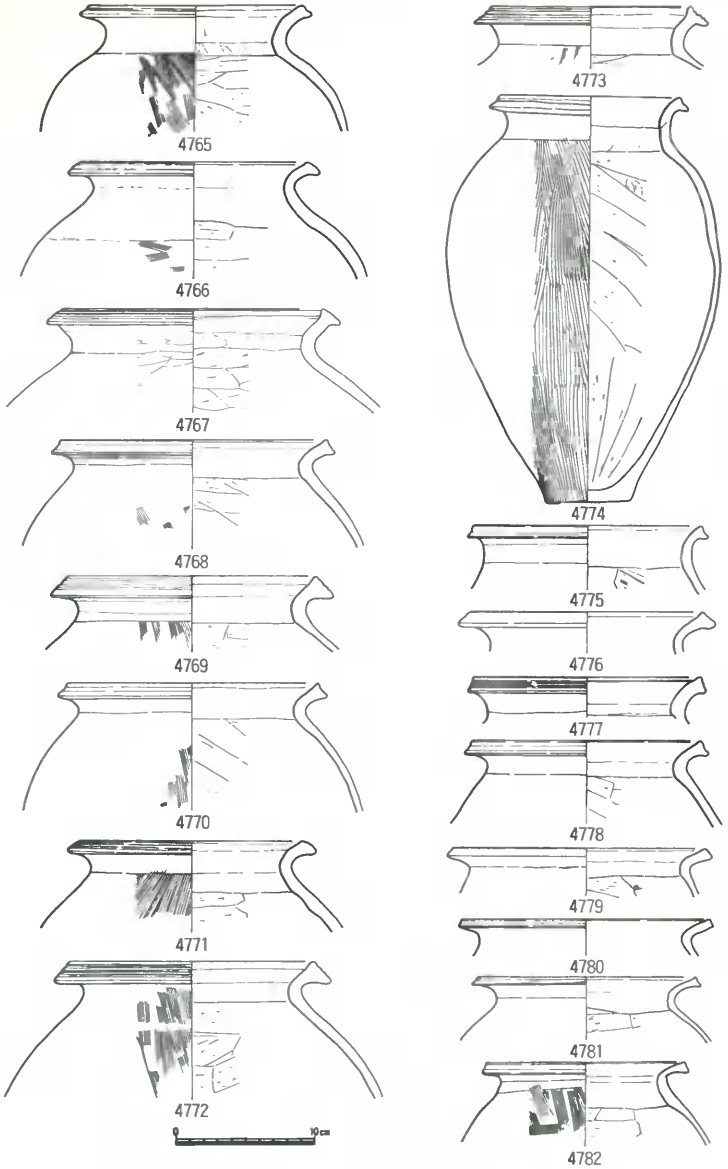
第574図　「島状高まり」遺構−1ｃ土器溜り出土遺物（１）



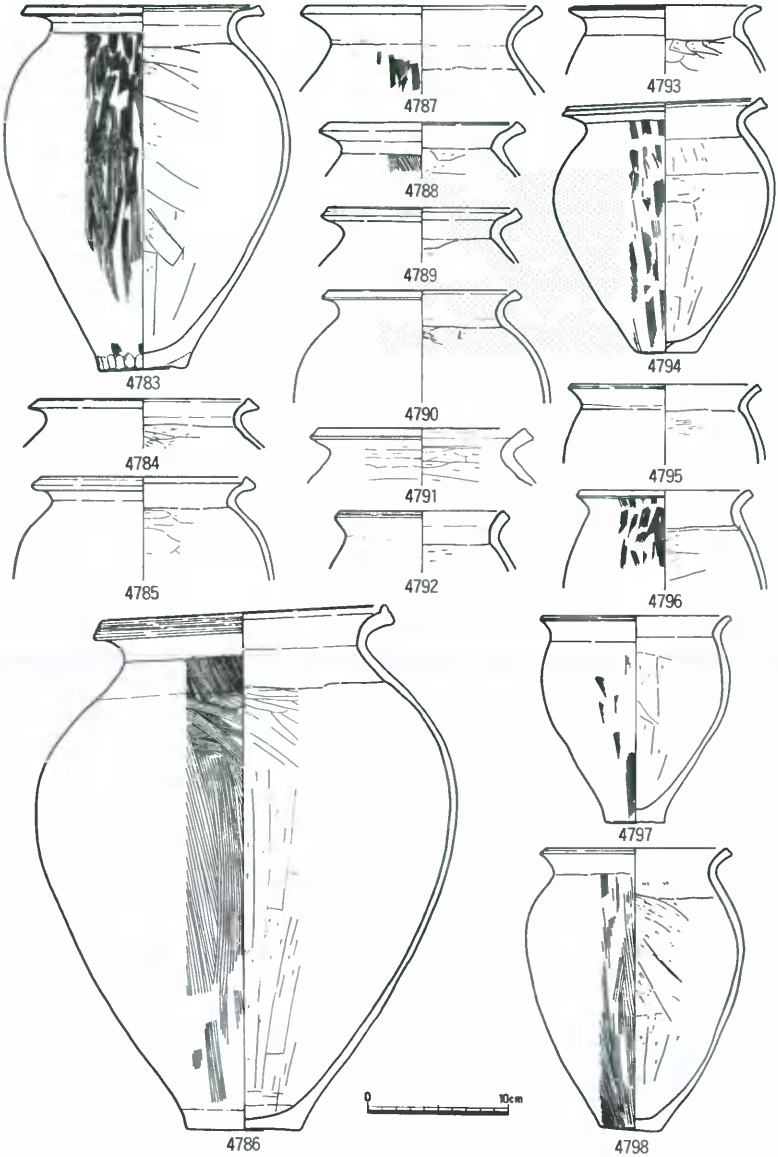
第575図　「島状高まり」遺構-1ｃ土器溜り 出土遺物（２）



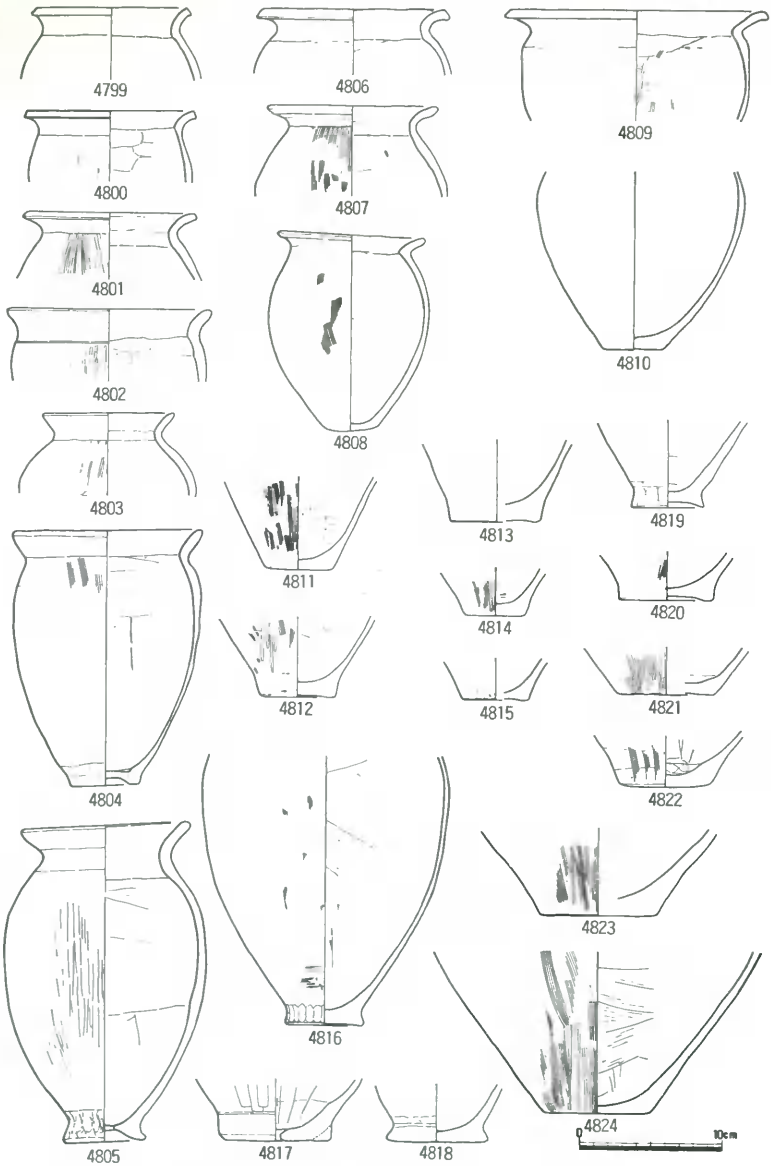
第576図　「島状高まり」遺構-1ｃ土器溜り 出土遺物（３）



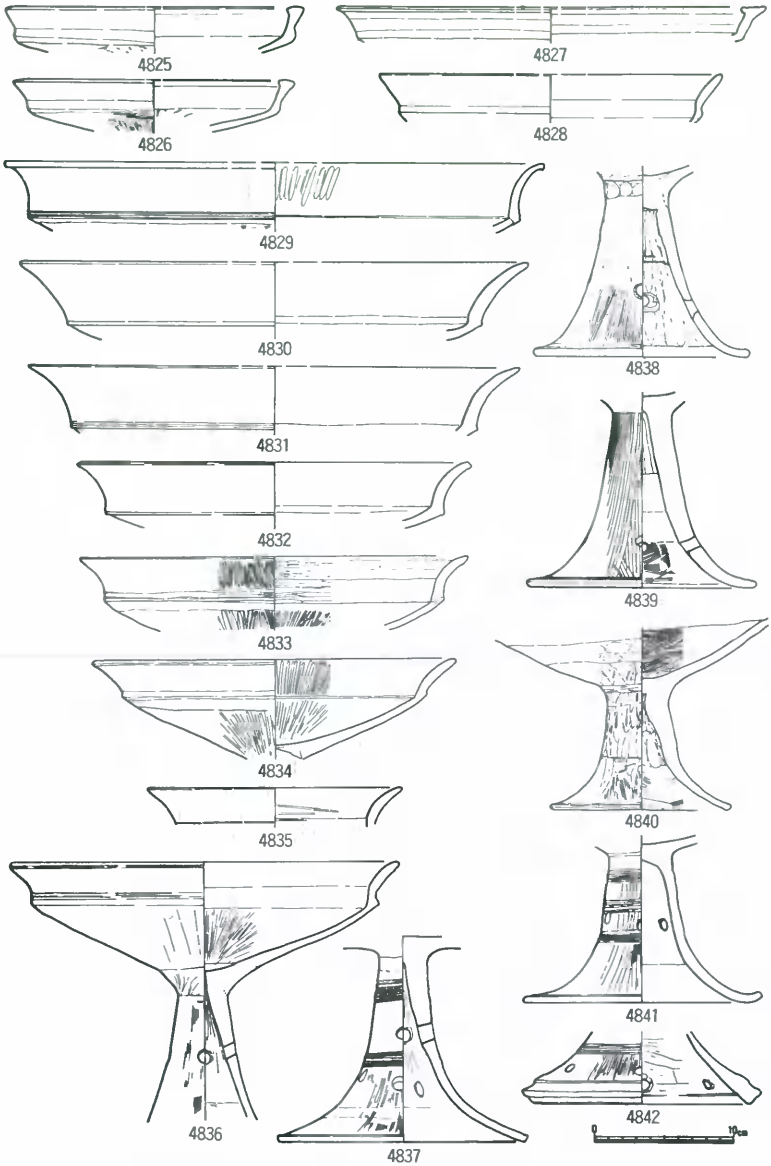
第577図　「島状高まり」遺構−1ｃ土器溜り 出土遺物（４）



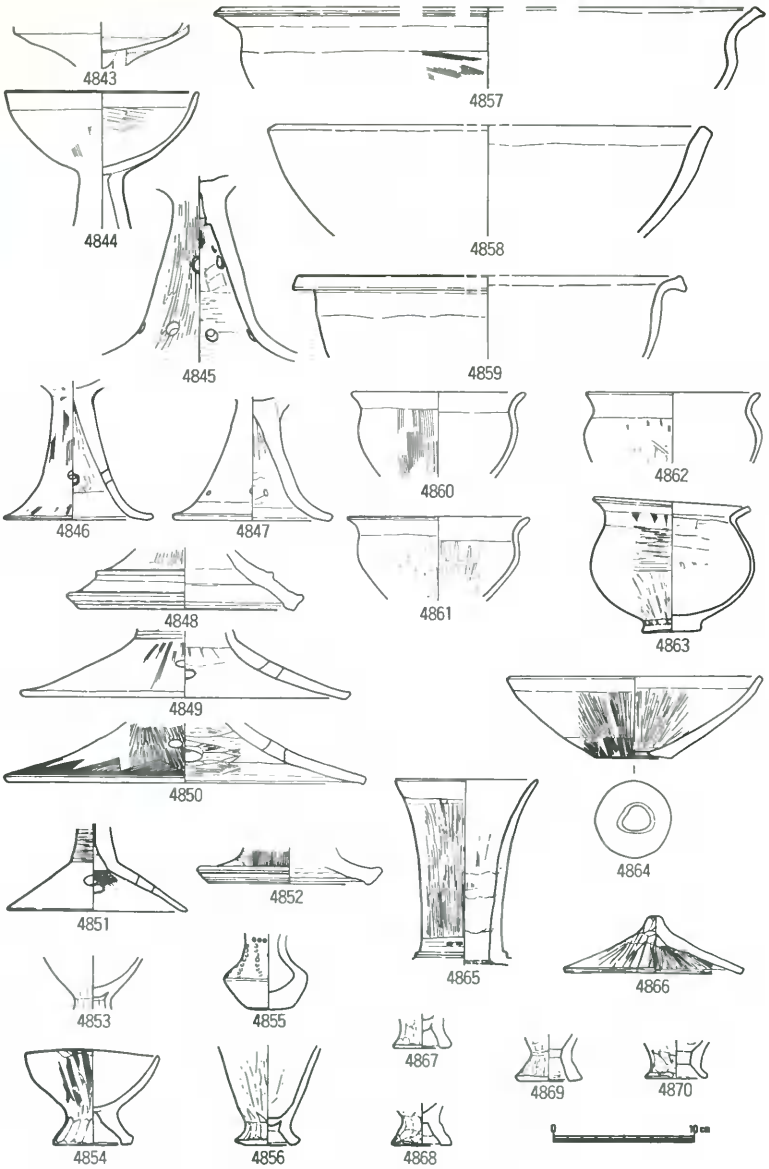
第578図　「島状高まり」遺構-1c土器溜り出土遺物（5）



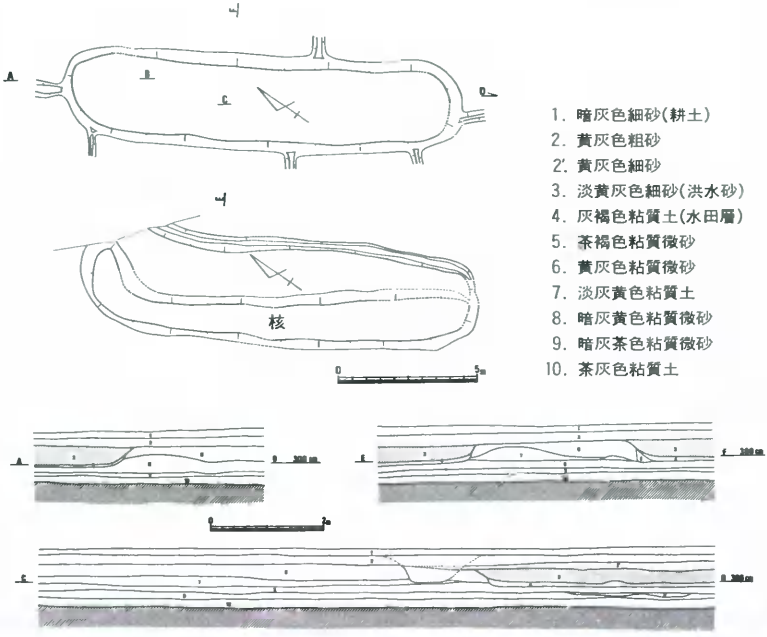
第579図　「島状高まり」遺構-１ｃ土器溜り 出土遺物（６）



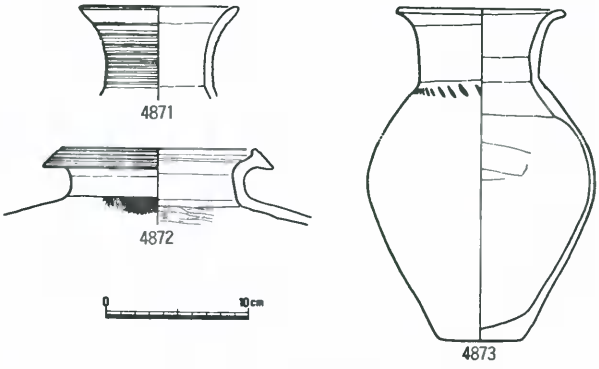
第580図 「島状高まり」遺構-1c土器溜り出土遺物（7）



第581図　「島状高まり」遺構-1ｃ土器溜り 出土遺物（８）



第582図 「島状高まり」遺構-3 (1/200・1/100)



第583図 「島状高まり」遺構-1・2・3 出土遺物

（８）柱穴出土遺物（第584～586図）

調査の結果，検出された弥生時代後期の遺構は数多く，そのほとんどについてはこれまでに遺構ごとにその詳細を報告した。しかし，ある程度の規模と遺物の一括出土のみられたそれら竪穴式住居・井戸・土壙・溝等に対して，複数のまとまりをもってはじめて性格づけのなされる柱穴については，紙面の都合からとくに報告できなかった。したがって，ここでは柱穴出土遺物ということで数多く検出された柱穴の中でもとくに柱穴内から一括出土した遺物についての説明を行うものである。

先ず，ここで図示した遺物は，第584図から第586図に列挙したとおりである。これは，大きくは調査区ごとの羅列で，第584～585図に示したのが調査区西端からＤ・Ｅ-20までの地点，第586図に示したのがＥ-20からＥ-22において検出された柱穴出土の遺物である。その中で，4875・4877・4883・4886・4890・4893・4912・4914，4876・4894，4881・4882・4892・4906，4879・4889・4903・4922・敲石，4898・4899等がそれぞれ一括出土遺物である。時期は，それぞれ百・後・Ⅲ，百・後・Ⅳ，百・後・Ⅱ，百・後・Ⅱ，百・後・Ⅱに比定できる。

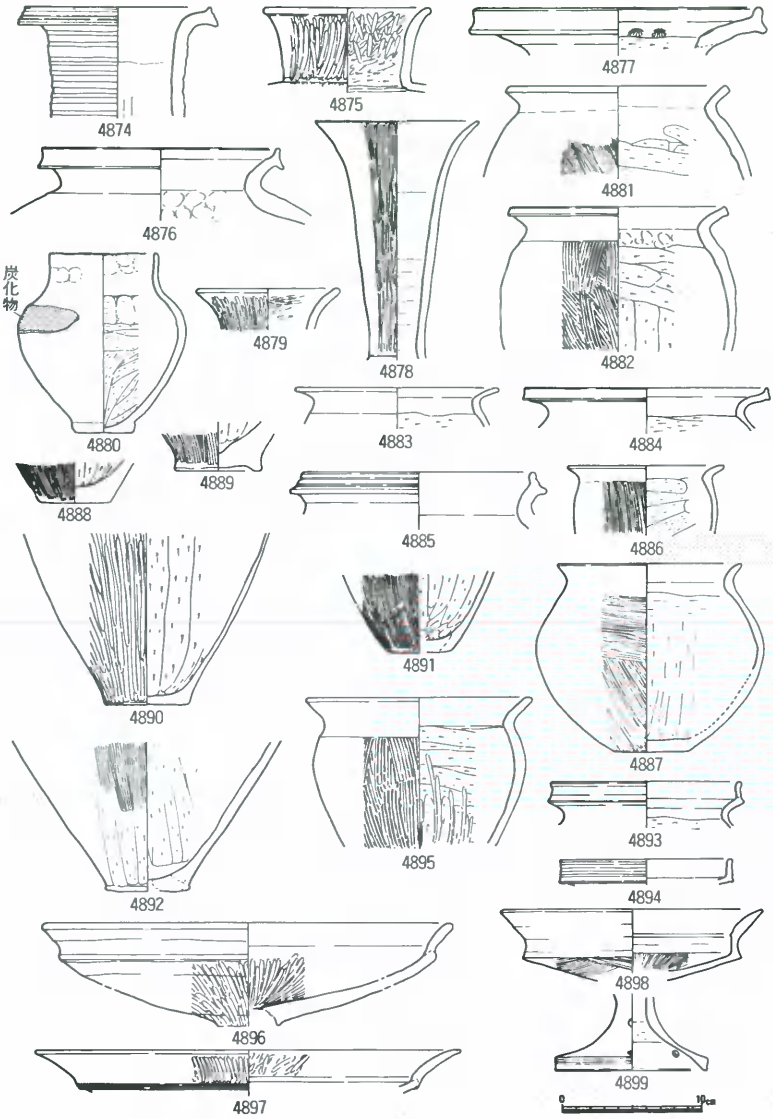
4877は，長頸壺であるが頸部内面はヘラケズリされ，その直上には貝殻押圧による加飾が認められる。4898と4899は，一括出土したもので同一個体の可能性が高い。備中（岡山県西部）に多くみられる器形である。4906は，本来高杯として使用されていたものが，甕の蓋としての転用されたものである。内面の端部には，煤の付着が認められる。類例としては，土壙―124出土3733に１例ある。4908と4909は，高杯で脚部内面はヨコヘラケズリが施されている。4953は，飾り高杯の脚部である。

（９）包含層出土遺物（第587・588図）

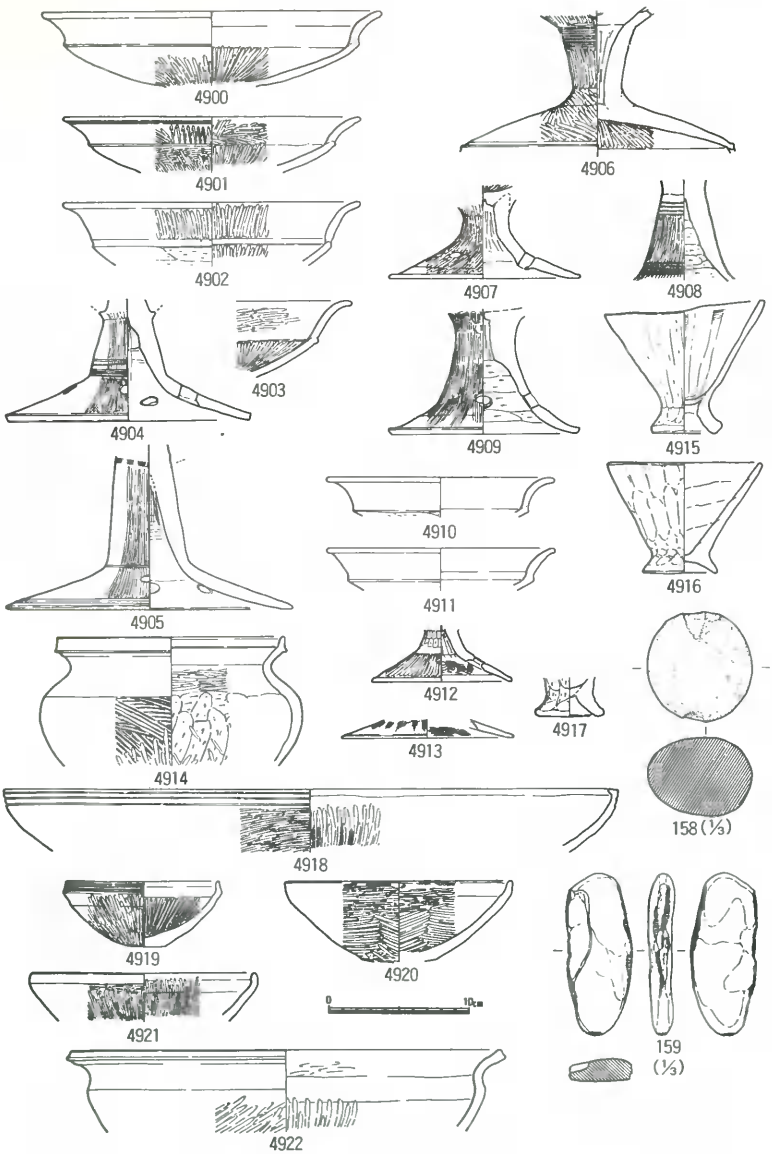
本調査区の微高地上面のほとんどは，居住生活面として長期にわたる生活が営まれ，それを傍証するかのように数多くの遺構の遺存が認められた。その結果，本調査区からは夥しい量の土器が出土した。その中で遺構に伴うものについてはその都度遺構毎に説明を行ってきた。しかし，その他の遺構に伴わない土器については，その量の多さからすべてをここに網羅することはできない。したがってここでは，その一部の地区について遺物を抽出し，その様相の一端を示す。

第587図に示したものは，Ｅ-20・21の微高地上面で出土した遺物である。いずれも遺構に伴わず，時期も百・後・Ⅰの新相から百・後・Ⅱの範疇に限定できる。百・後・Ⅲの土器については，周辺にその出土が認められるが，量は多くない。

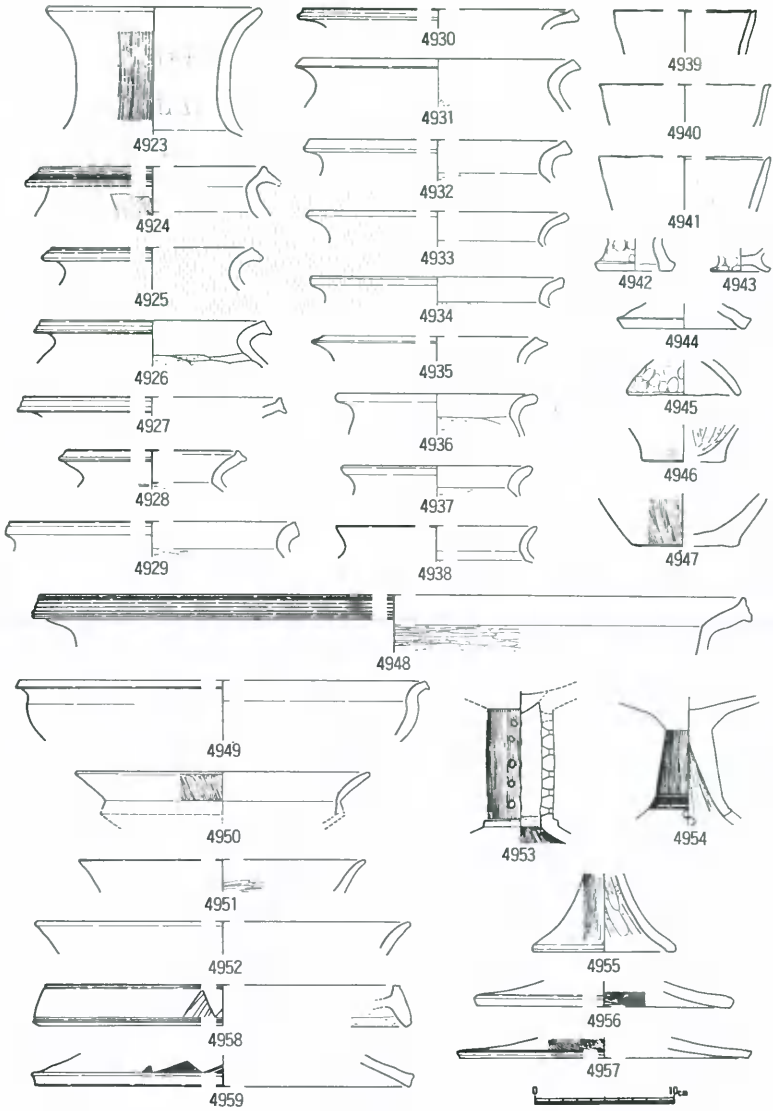
第588図に示したものは，一応ここでは包含層出土の石器としたものの，そのほとんどは，本来の帰属時期をはずれた時期の遺構に混入していたものである。その出土地点等の概要については表―29の石器一覧表に掲載した。（島崎）



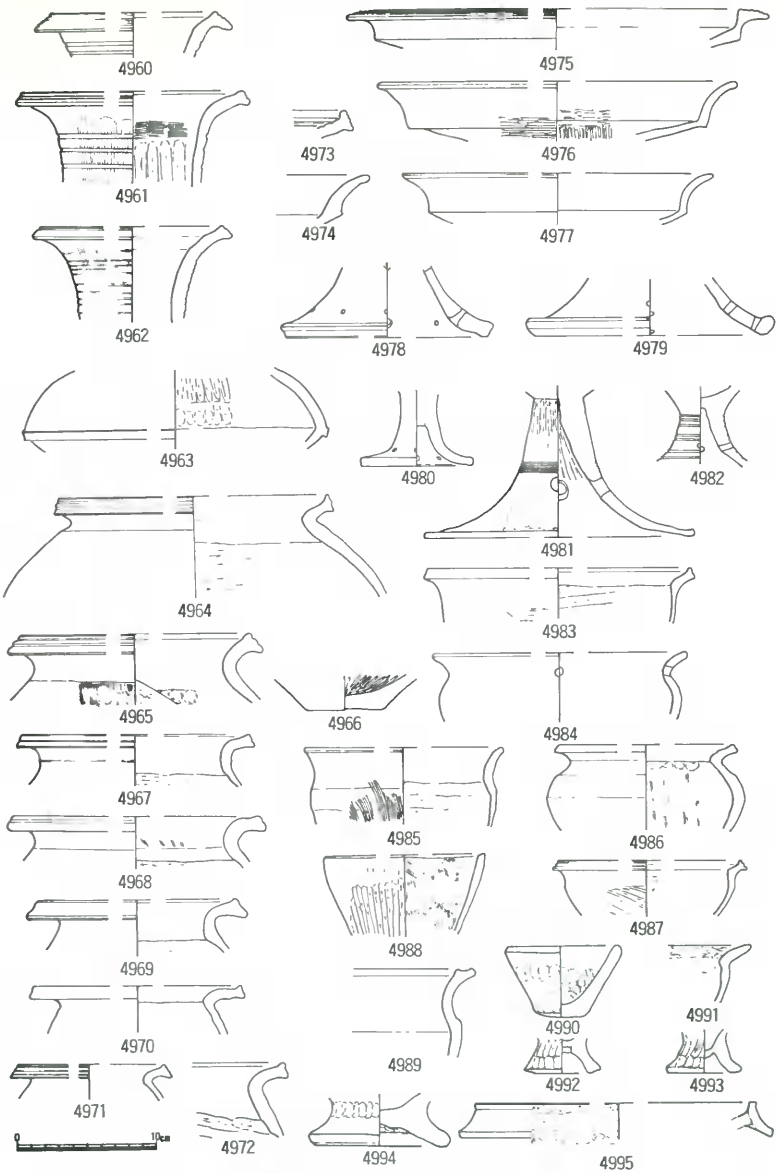
第584図　柱穴出土遺物（1）



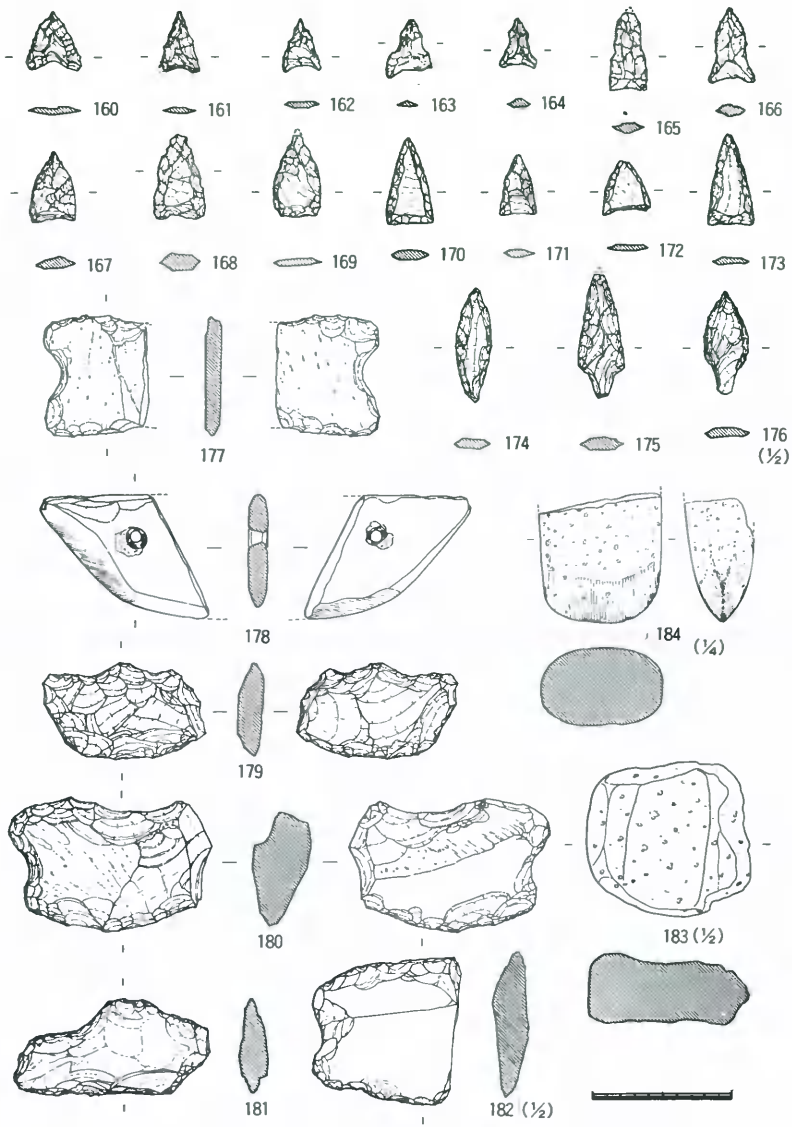
第585図　柱穴出土遺物（2）



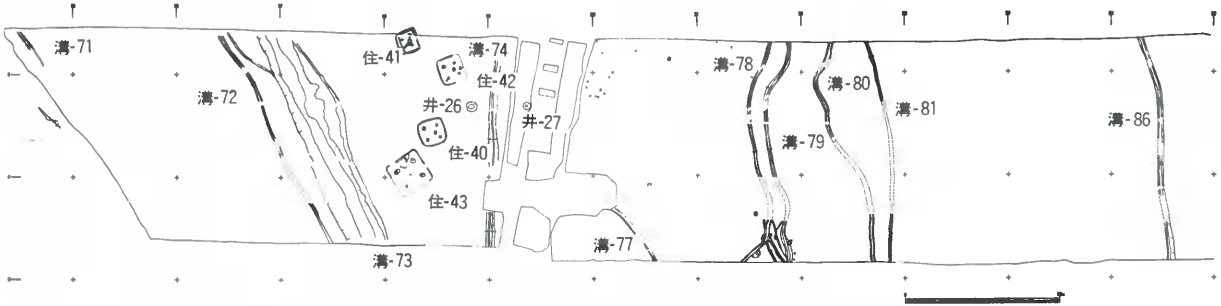
第586図　柱穴出土遺物（3）



第587図　包含層出土遺物（1）



第588図　包含層出土遺物（2）



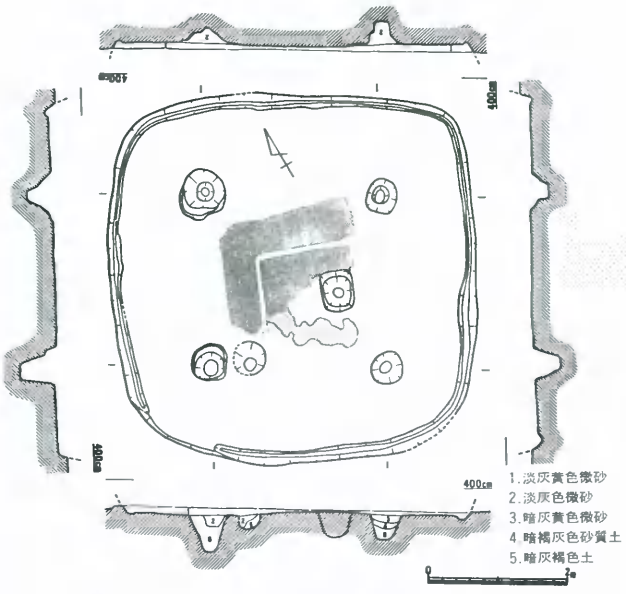
第589図　丸田調査区古墳時代遺構配置図（1/1100）

5. 古墳時代の遺構・遺物

（1） 竪穴式住居

竪穴式住居—40（第590～592図）

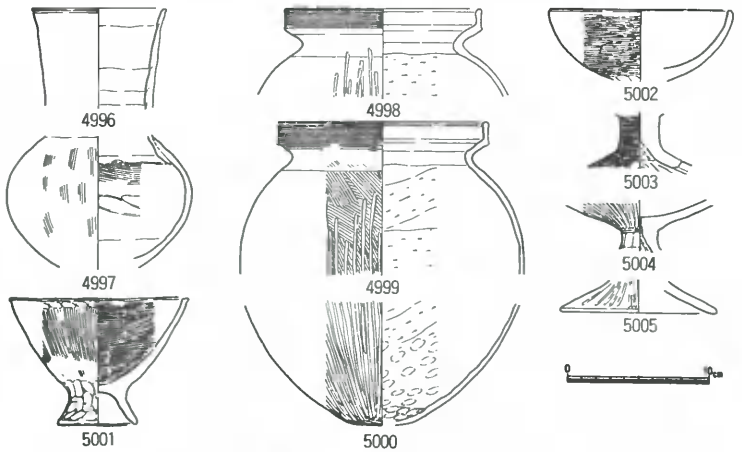
E-18の中央部で検出した隅丸方形を呈する竪穴式住居で，やや胴張りのある四辺は1辺515㎝，深さ約7㎝を測り，4本の柱穴とやや東に偏って位置する方形の中央穴（火所）が存在する。この住居の床面には，第591図に示すようにあたかもタイルが張られたかのような石敷がみられ，約150～200㎝の範囲を占めている。この石敷は平滑な床面にまず，比較的均質の黒灰色の砂を敷きその上面に小礫をたたきしめたかのようにみえる。小礫は小さいもので1・2㎝前後，大きいもので5㎝前後を測る流紋岩の円礫を主体にしている。この石敷の残存部分は柱を結ぶ線の内側で，中央穴の北西部分を占めている。石敷内には柱を結ぶ線に平行してL字形を示す，小礫の敷きつめられていない幅6～8㎝の部分があり，根太のような住居の床構造物の痕跡と推察される。石敷の性格は，中央の南西辺に炭・焼土が集中的に散布堆積した面がみられることから，火を使う屋内作業に伴って冷温な面が必要とされたのではないかと推定して



第590図　竪穴式住居-40（1/80）

第591図　竪穴式住居-40 中央部敷石（1/30）

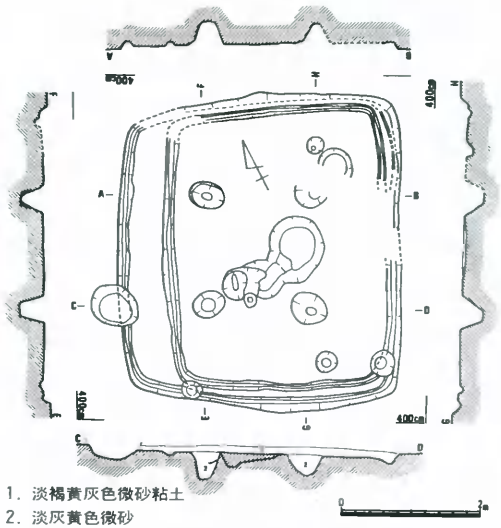
いる。たとえば「熱をさます」ために用いられた可能性も強い。図に掲げる出土土器は，覆土・壁体溝から出土したもので，百・古・Ⅰに比定される形状を示しており，日常的に使用される土器相の一端を示しているといえよう。なお，この住居の覆土は淡灰黄色微砂で，水田遺構でみられた洪水砂層にその質・色調が極めて似ているが，廃絶の時期を同じくするものではなく，溝―41～44などのやはり洪水砂で埋没，廃絶した遺構とも時期的には関連しない。しかし，幾度かにわたる洪水で壊滅的な打撃をうけた一時期を示しているといえよう。



第592図　竪穴式住居-40 出土遺物

竪穴式住居―41（第593図）

D-18の南辺西よりで検出したやや小型の隅丸方形を呈する住居で，竪穴式住居―42の北方約4mに位置する。柱は4本で，いくつかの小規模な柱穴と，中心からややずれた位置にある中央穴を伴う。壁体溝は幅5～10cm前後，深さ約5～8cmを測る比較的浅いもので住居を全周する。西辺部の壁体溝は住居の拡張に伴うもので，最終的には短辺は330cm・390cm，長辺410～450cmを測る。柱穴は拡張に伴って位置を変更したり，切り合ったりした状況がみられないので，おもに西辺のみの拡張が比較的簡略に行われた可能性も考えられる。出土遺物には土器細片が大半を占め，原形をよく残すものは極めて少ない。時期を知る手がかりとなる出土遺物は第593図に掲げる甕1点のみで，おおむね百・古・Ⅰの時期に比定されよう。この住居の埋積覆土は，淡褐黄灰色微砂質粘土であるが，竪穴式住居―42と同様マンガンの斑紋がやや濃く集積している以外は，ほぼ同質である。また，柱穴の埋積土は淡灰黄色微砂で均質である。



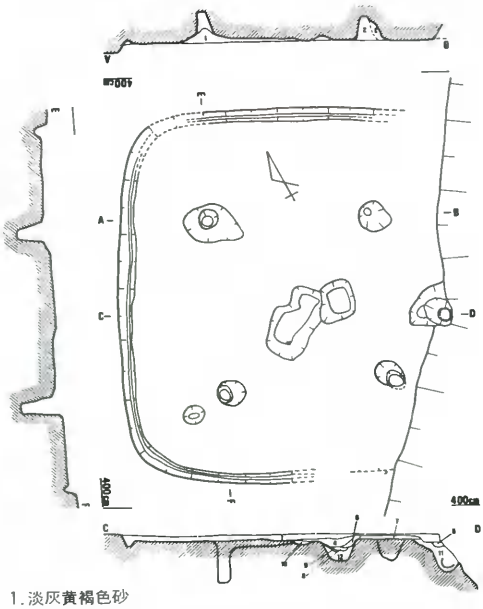
第593図　竪穴式住居-41（1/80）・出土遺物

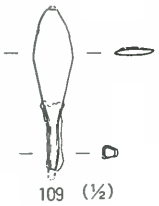
竪穴式住居―42（第594図）

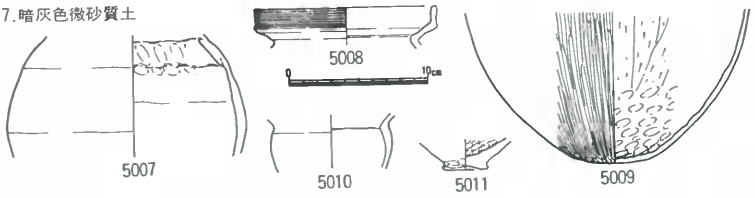
D-18の南辺で検出された隅丸方形を呈する住居で，一辺520cmを測る。竪穴式住居―40の北東方約8m，竪穴式住居―41の南東方約4mに位置しているが，東辺は溝―44によって切られて原状を失っている。住居上面は中世に比定される断続的な溝状遺構によって凹凸が目立ち，部分的に覆土が失われている。柱は4本で，柱間は230～240cmを測り，後世のほぼ「8尺」を1間とする心々距離を示している。やや隅丸方形を呈する中央穴は，深さ約30cmを測り，4本の対角線を結ぶ対角線よりやや東方に偏って位置している。さらに，その東約80cmには，炭

化した藻状繊維や灰・白灰色の砂や土器5009が埋積した深さ約40cmを測る掘り込みがあり，住居の東辺壁体部分に近接している点が注目される。住居全体を覆う埋積土は淡灰黄褐色微砂で前述の竪穴式住居―40・41とほぼ同質で，その位置する距離・配置から同時期に存在した住居群として理解される。出土遺物の大半は，おもに土器片がみられ5008・5009・5011などの甕をはじめ小型の鉢もみられる。甕の多くは5008のように直立する口縁部に櫛描き平行沈線をめぐらしたものが多く器壁はうすい。また，5009のように外底部は丸味をもちながらも平底で，おおむね百・古・Ⅰにほぼ比定される特色を示している。また，109のような柳葉形を呈する鉄鏃が1点出土しており注目される。なお，同時期に比定される井戸―26は，溝―44を切って南約4mに位置している。

（岡田）



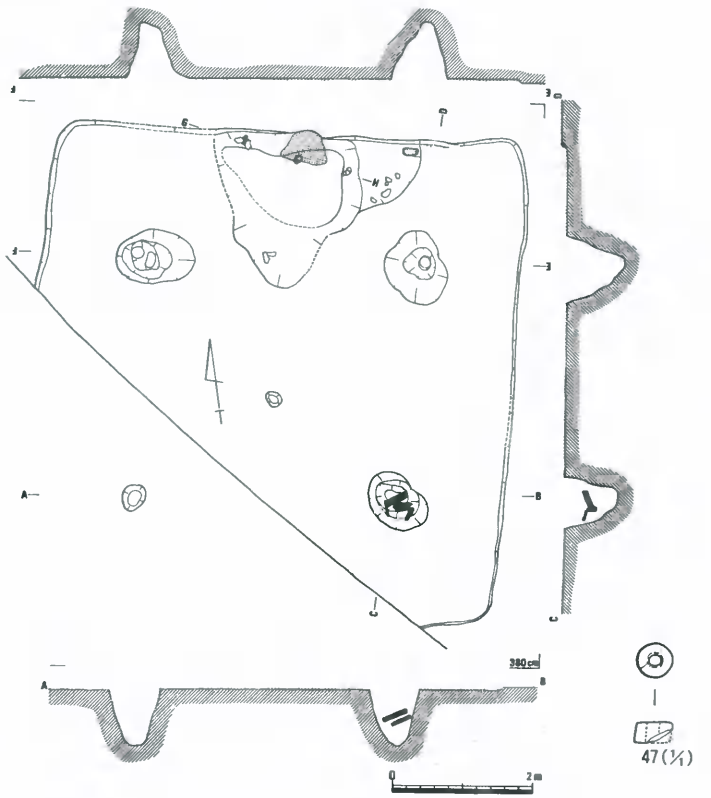




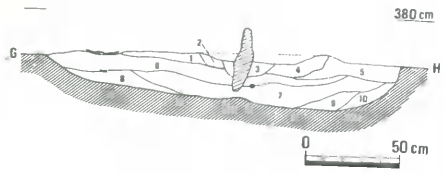
第594図　竪穴式住居―42（1/80）・出土遺物

竪穴式住居—43（第595・596図）

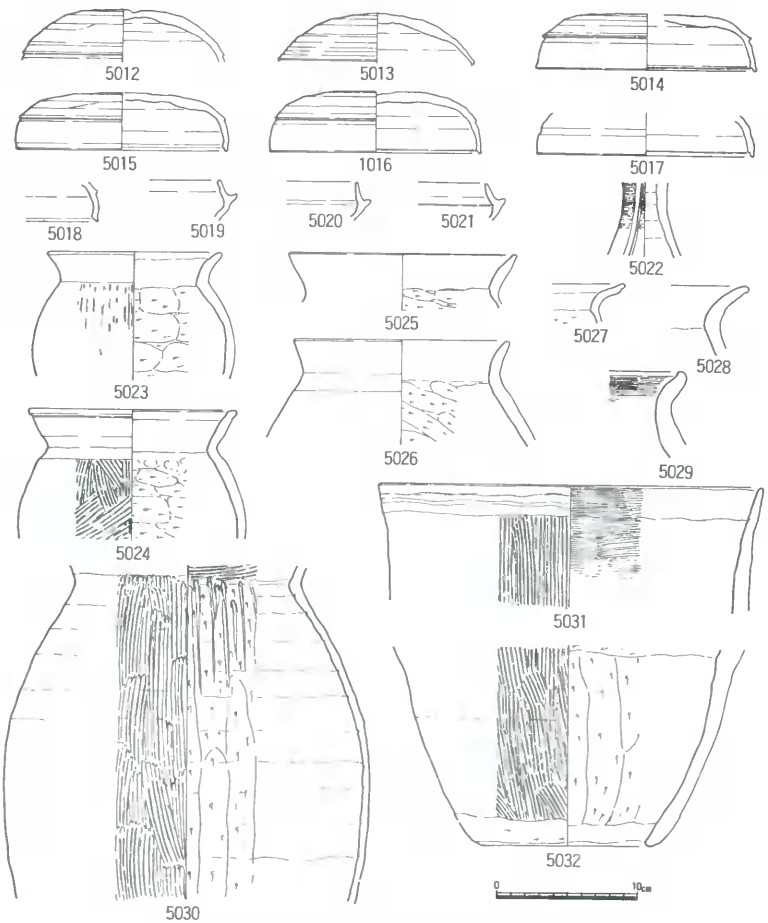
F-18杭の東に検出された住居である。この住居は，近代の用水路によりその南約３分の１が欠損されていた。しかし，柱穴の遺存等により全体の復元は可能である。平面形態は，東西670cm，南北690cmとほぼ正方形を呈し，床面積は46.2㎡を計測した。さらに，住居北辺の中央部内側には，造り付けの竈が確認された。竈は，本来煙道を外に出していたのであろうが，住居自体かなり上部を削平されていたため，その上部構造の確認には至らなかった。しかし，竈の下部構造とでもいうべき遺構の遺存は良く，除湿機能の一端が窺われた。竈付設部分には，住居内北壁沿いに不定形のくぼみが深さ約30cmに掘られ，そこに炭と焼土を多く含んだ土



第595図　竪穴式住居-43（1/80）・出土遺物



1. 淡黄灰色砂質土
2. 褐灰色土
3. 白っぽい淡褐灰色粘質土
4. 白っぽい褐灰色弱粘土
5. 褐灰色微砂質粘質土
6. 赤褐色焼土混り砂質土
7. 淡黄褐灰色砂質土(焼土片密)
8. 灰黄色微砂と淡灰色粘質土混り
9. 灰黄色微砂
10. 暗灰色粘質土



第596図　竪穴式住居-43 かまど土層断面（1/30）・床面出土遺物

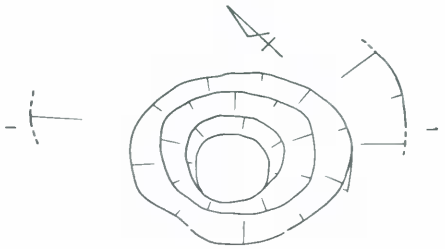
を互層に埋めていく方法が認められた。甕の底を支える支柱石は，その過程の中で埋められた状況を示していた。なお，支柱石の地点には土師器甕5030の大小破片の集中がみられた。

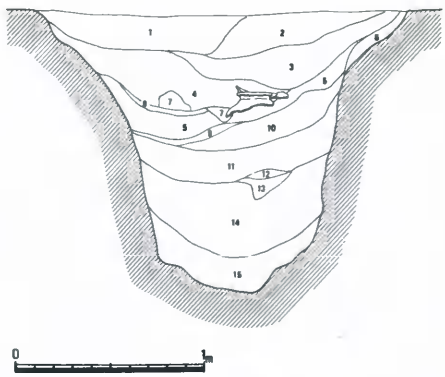
柱穴は，いずれも口径約40cmを測るもので，4本で住居を構成していた。柱間は，東西400cm，南北360cmを測る。おそらくは，東西方向に棟が上げられていたものと考える。方向は，周辺に共存していたと考える溝—72・73の流路に符合する。遺物は，細片ながら土師器・須恵器等多くの出土をみた。それによれば時期は，6世紀前半ごろと考えられる。　（島崎）

（2）井　　戸

井　戸—26（第597・598図）

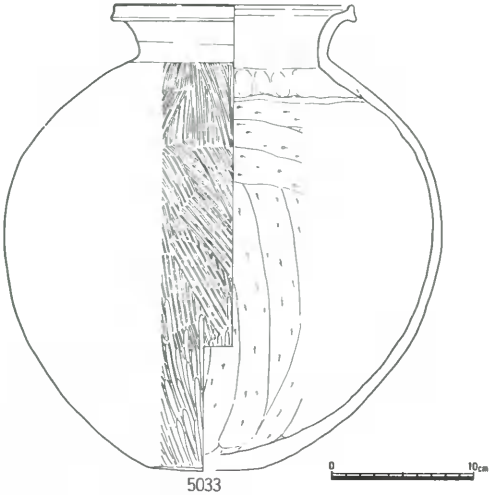
E-18東隅近くで検出された井戸で，南半を後世の溝に切られ，弥生時代後期に比定される溝—44を切る。平面形はやや長円形を呈し，長径115cm，短径85cm，深さ145cmを残存部で測ることができる。井底はほぼ円形を呈し，径35cmを測り，グライ化しており，しかも湧水がみられる。埋積土は黄灰色もしくは褐灰色系の砂層を主体とし，水田の洪水砂層に酷似する。出土遺物には，4層から出土した壺5033があるが，その形態は類例が少ない。時期は百・古・Ⅰに比定され，竪穴式住居—40～43と共存する可能性が強い。　（岡田）





1. 黄灰色微砂
2. 淡黄色微砂
3. 褐灰色粘土・灰色砂
4. 黄灰色砂・淡褐灰色砂
5. 灰黄色粘質土
6. 灰白黄色微砂
7. 明褐黄色土
8. 淡黄色粘土・暗灰色粘土
9. 黄灰色微砂(灰色粘土ブロックを含む)
10. 灰褐色粘質土
11. 淡黄色微砂(淡褐灰色粘質土含む)
12. 暗灰褐色粘質土(ブロック含む)
13. 暗灰褐色粘質土
14. 灰黄色微砂褐黄色土ブロック・青灰色粘土ブロック含む
15. 暗灰色微砂質粘土

第597図　井　戸－26（1/30）



第598図　井　戸-26 出土遺物

井　戸—27（第599図）

E-19北西部において検出した井戸である。ところが，この井戸の所在する地点は，後世の度重なる攪乱等により，上層においては遺構の新旧の区別が出来ない程荒らされていた。そのため，遺構の時期判断には困難を極めた。しかし，この井戸の場合，完形に近い須恵器と，それとほぼ同時期と考える土錘等の出土をみたことにより，およそ6世紀後半頃への位置づけが可能となった。

井戸の規模は，径150cm，検出面からの深さ70cmを測り，平面形は円形を示す。底の海抜は290cmであった。（島崎）

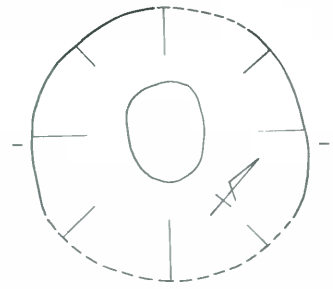
井　戸—28（第600図）

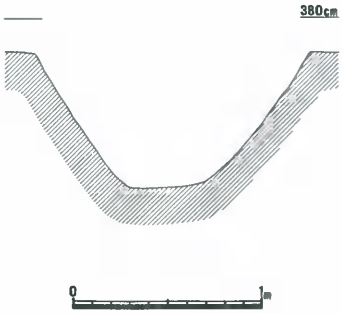
F-21のほぼ中央で水路の右岸に接する位置にあり，南側を東西の近世溝によって切られている遺構である。推定平面形態は75cm×90cmの楕円形を呈し，深さ58cmを測る擂鉢形の断面形態を示す井戸状遺構である。遺構内の埋土は二層で凹レンズ状に堆積している。埋土下層において完形の甕が1点出土している。百・古・Ⅰの時期を示す遺構と思われる。

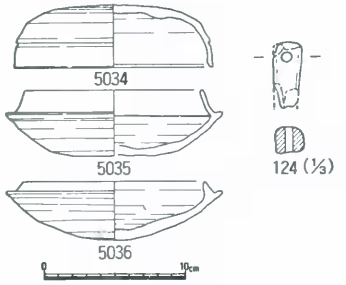
井　戸—29（第601図）

F-21の中央南端部において検出された井戸状遺構である。溝—78にその一部を切られ，平面形態は，長径170cm，短径157cmの楕円形を示す。最深部では，径75cmを測り，擂鉢状を呈

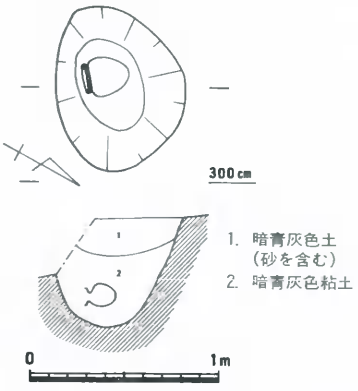
していた。底部は，北側に若干傾斜して掘り上げられている。掘方は，東部分において一部二段掘りの形状が認められた。埋積土は，かなり複雑な状況を示していた。そのことにより，この井戸は，自然に埋没したものではなく，人工的に埋められたものであろうことが推察された。埋積土中からは，少量であるが遺物が出土している。時期は，百・古・Ⅰに比定できる。（二宮）

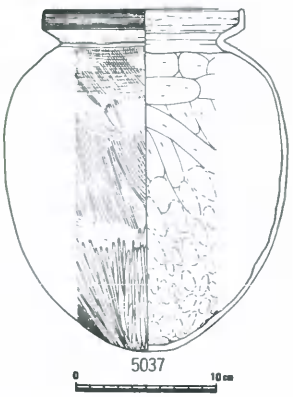




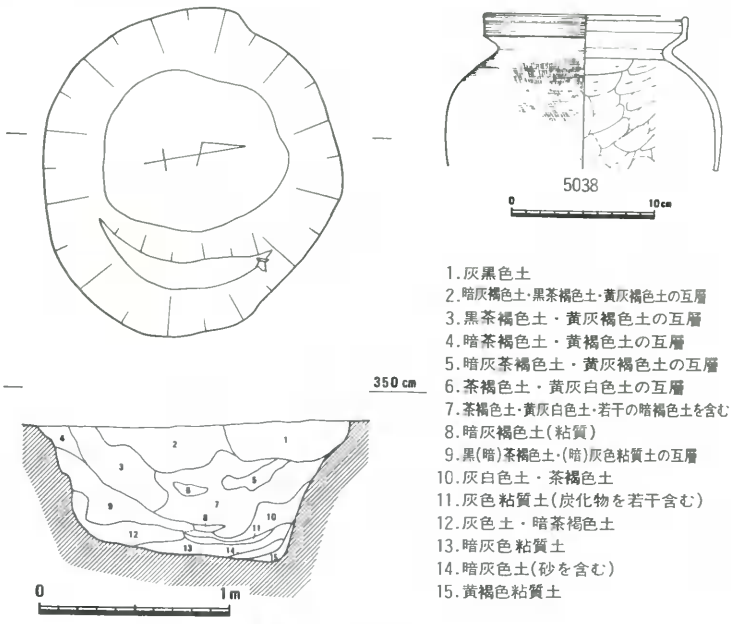


第599図　井　戸-27（1/30）・出土遺物





第600図　井　戸-28（1/30）・出土遺物



第601図　井　戸-29（1/30）・出土遺物

（3）土　　壙

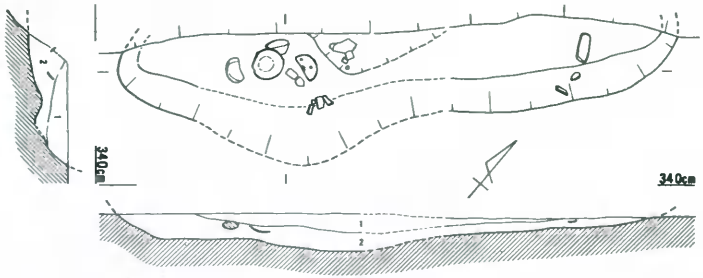
土　壙-254（第602図）

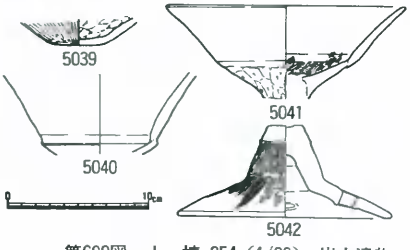
F-19西端中央部に位置し，土壙-145を切った状態で検出できた土壙である。しかし，マンガン粒の凝集等で遺構検出には困難をきたした。さらに，遺構の西側は，古墳時代後期の溝-74により一部削られ，本来の平面形をまったく留めていなかった。

遺構遺存部分の形状から判断して，平面形は長楕円形を呈していたものと考える。遺存部分の計測値は，長軸295cm・短軸70cm・深さ約20cmを測る。土壙断面は，ほぼ椀状を呈し，南北方向に長い。そして壙内の埋積もほぼ同様にレンズ状の堆積を示す。遺物は，壙底から若干浮いた位置に小片ながら高杯を中心とした出土が認められた。出土した高杯の型式によれば，土壙の時期は，百・古・Ⅰ併行期と考えられる。竪穴式住居-40～42と同時期である。（渡辺）

土　壙-255（第603図）

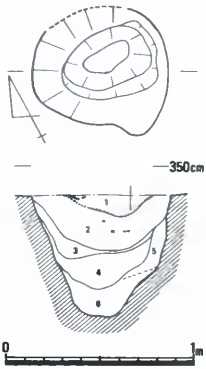
D-20南辺東よりで検出された小土壙で，ややいびつな円形を呈し，長径70cm，短径60cm，

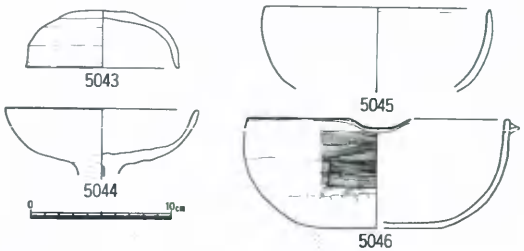




第602図　土　壙−254（1/30）・出土遺物

深さ63cmを測る。壙底は狭く断面の形状をみると柱穴の可能性も考えられる。埋積土は六層からなり，1層では2～3cmの炭片を多く含み，2層との境はとりわけ炭・焼土片の集積が目立つ。2層もやはり炭・焼土片を多く含むが堅果類の種子（桃核？）も4点出土している。3層は須恵器片が集中的に出土した層位で，この土壙の時期を推定する手がかりとなっている。出土遺物には他に5046の土師器などがあり，その時期は須恵器とともに6世紀後半に比定され，この時期の遺構としては数少なく，溝−73の存続期に該当し，注目してよいだろう。（岡田）



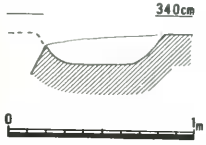


第603図　土　壙−255（1/30）・出土遺物

（4）　溝

溝—71（第604図）

D-14南東隅に検出された溝である。西側の近世溝によりとばされ，実際に検出できたのは，約10mにすぎない。推定幅70cm，検出面からの深さ約18cmを測る。流路は，南北方向である。時期は，出土した須恵器が細片のため図化し得なかったが，およそ6世紀前半に比定できる。



第604図　溝-71（1/30）

溝—72（第605図）

D-16からF-17にかけて南北方向に検出された。一部において若干の蛇行がみられるが基本的には直線を呈する。断面は，逆台形を呈する。検出面での幅は65cmで，深さ8cmを測る。淡灰白色粘質微砂で埋もれた溝の中からは，若干の須恵器片と臼玉が1点出土した。時期は，6世紀前半頃に比定される。

第605図　溝-72（1/30）・出土遺物

溝—73（第606～634図）

D-16からF-17にかけて検出された溝である。これは，南北に直線的で約5mの間隔を保って溝—72に並行する。完掘後の規模は，全長23m・幅800cm・深さ170cmを測り，今回検出した古墳時代の溝の中では最大を誇る。この溝は，大きく3つの時期にわたって機能していたことが出土遺物・遺構等の在り方に窺われた。

先ず最初に溝が開鑿されたのは，古墳時代前半期の百・古・Ⅱの時期と考える。それは溝の南半部西斜面において布留式土器を包含した流路の一部の遺存により確認された。残念ながら流路の規模は，判然としない。しかし方向は，ほぼ南北にあったと考える。

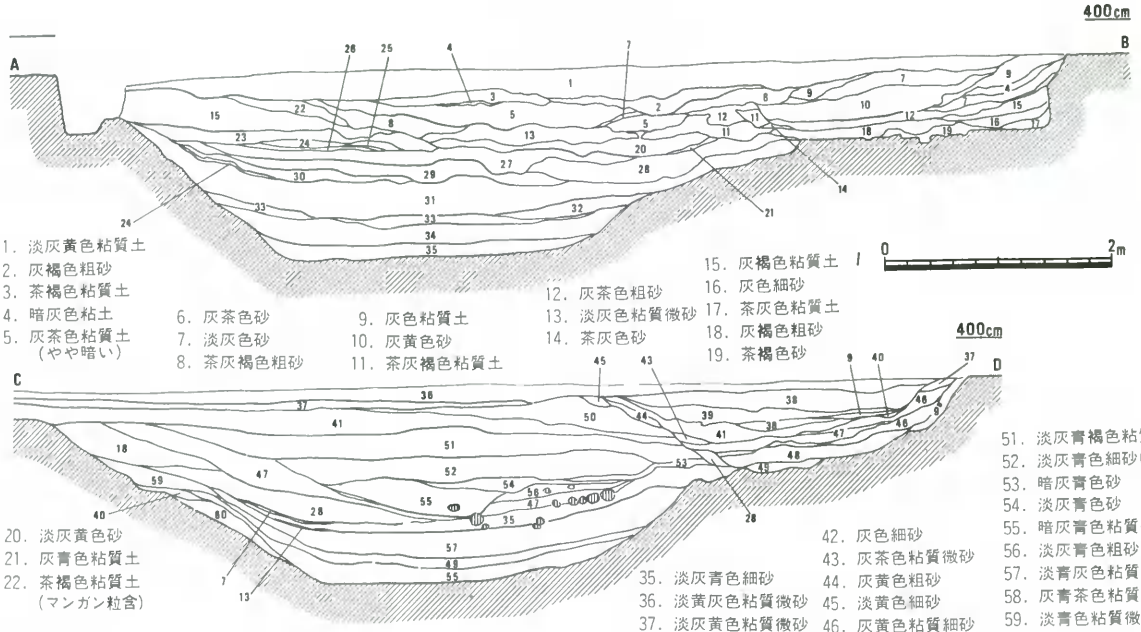
次にこの溝が埋没後，もしくは埋没過程で，これを踏襲してさらに規模を拡大した溝が開かれる。それは，出土した遺物の中でも須恵器の量的な増加傾向が6世紀前半頃にピークを迎えることと，周辺に展開する溝と造り付けの竈を持った竪穴住式居等の在り方からおよそ6世紀前半頃の開鑿と考えて差し支えなかろう。その規模は，一部において次の段階のものが認められるものの，そのほとんどは掘りあげ後の規模に該当すると考える。

第606図　溝-73（1/250）

なお，この時期の溝の下流東側斜面には，おもに自然木により構築された護岸が検出された。それは，斜面下に流路に並行して25～30cm間隔で約８本の自然木をほぼ垂直に打ち込み，その後方に長さ約130cmくらいの自然木と加工木を横に置き，これを中央に挟むように径10cmくらいの自然木の打ち込みにより固定させるものである。規模は，一辺が150cm，杭と杭の間約50cmを測る。ここに掲載した図は，ほとんど掘りあげ後の状況を示すものである。そのため護岸部分の空白箇所についての詳細は判然としない。しかし，護岸の機能面から考えれば，その後方には杭間に横方向に入れた木と同レベルに近い状況に本来の足場が想定される。おそらくは，近接する竪穴式住居と共存し，日常洗い場的な機能をはたしていたものと推察される。

この溝は，その後流れに早遅をくり返しながら徐々に埋没を進行させる。その過程で，日常使用していたと思われる土師器・須恵器・木器，さらには田舟・建築材・流木等にいたるまでの夥しい遺物が包含された。それは，特に溝底からその上層約50cmくらいまでに顕著に認められた。この溝の埋没後，さらに別の溝がこの流路を踏襲して開かれる。

最終段階の溝は，前段階の溝とは比較にならないくらいに規模を縮少す



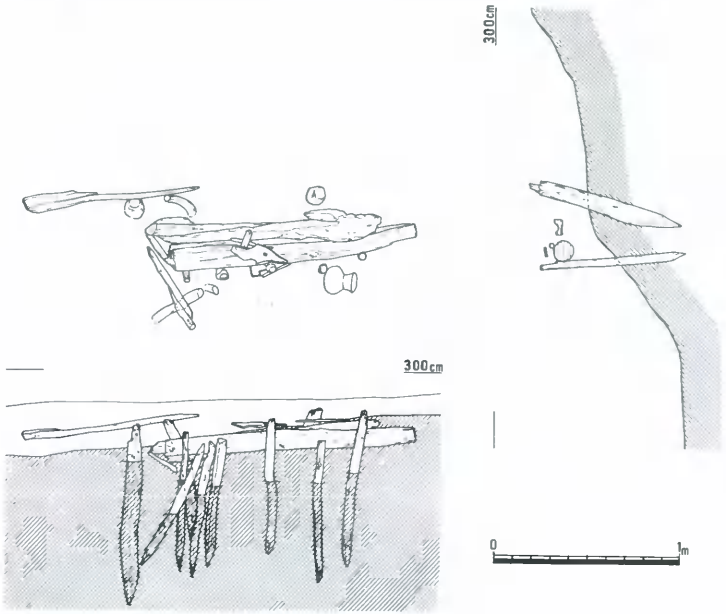
1. 淡灰黄色粘質土
2. 灰褐色粗砂
3. 茶褐色粘質土
4. 暗灰色粘土
5. 灰茶色粘質土（やや暗い）
6. 灰茶色砂
7. 淡灰色砂
8. 茶灰褐色粗砂
9. 灰色粘質土
10. 灰黄色砂
11. 茶灰褐色粘質土
12. 灰茶色粗砂
13. 淡灰色粘質微砂
14. 茶灰色砂
15. 灰褐色粘質土
16. 灰色細砂
17. 茶灰色粘質土
18. 灰褐色粗砂
19. 茶褐色砂
20. 淡灰黄色砂
21. 灰青色粘質土
22. 茶褐色粘質土（マンガン粒含）
23. 淡灰褐色粘質土
24. 暗青灰色粘土
25. 灰色砂
26. 暗灰色砂
27. 淡青灰色粘質土
28. 青灰色粘質微砂
29. 青灰色粘質土（やや暗い）
30. 淡灰黄色微砂
31. 暗青灰色粘質土
32. （暗）青灰色粗砂
33. 灰青色粗砂
34. 暗青灰色粘質微砂
35. 淡灰青色細砂
36. 淡黄灰色粘質微砂
37. 淡灰黄色粘質微砂
38. 灰褐色粘質微砂
39. 淡黄褐色粗砂
40. 淡灰色粗砂
41. 淡灰茶色砂（粘質）
42. 灰色細砂
43. 灰茶色粘質微砂
44. 灰黄色粗砂
45. 淡黄色細砂
46. 灰黄色粘質細砂
47. 灰青色粘質細砂
48. 灰黄茶色粗砂
49. 青灰色砂
50. 淡灰茶色粘質細砂
51. 淡灰青褐色粘質微砂
52. 淡灰青色細砂（粘質）
53. 暗灰青色砂
54. 淡灰青色砂
55. 暗灰青色粘質微砂
56. 淡灰青色粗砂
57. 淡青灰色粘質微砂
58. 灰青茶色粘質細砂
59. 淡青色粘質微砂
60. 淡灰色粘質砂

第607図　溝－73 土層断面（1/50）

る。それは，幅300～400cm，深さ70cmを測るものである。この溝の特徴の1つは，ほぼ前段階の流路を踏襲しているものの，ところによっては両岸を部分的に浸蝕し，蛇行した流路を形成していることである。埋土中には，遺物の包含がさほど認められず，わずかに須恵器・土師器等若干の出土がなされたにすぎない。この溝の時期は，それら出土遺物をもとにおよそ7世紀初頭頃に下限が置かれる。

出土した遺物は，前にも若干ふれたように夥しい量の土器と木器が主体である。さらにこれに伴って若干の玉類の検出もみられた。木器については後で詳述するとして，ここでは土器と玉類について若干ふれてみる。

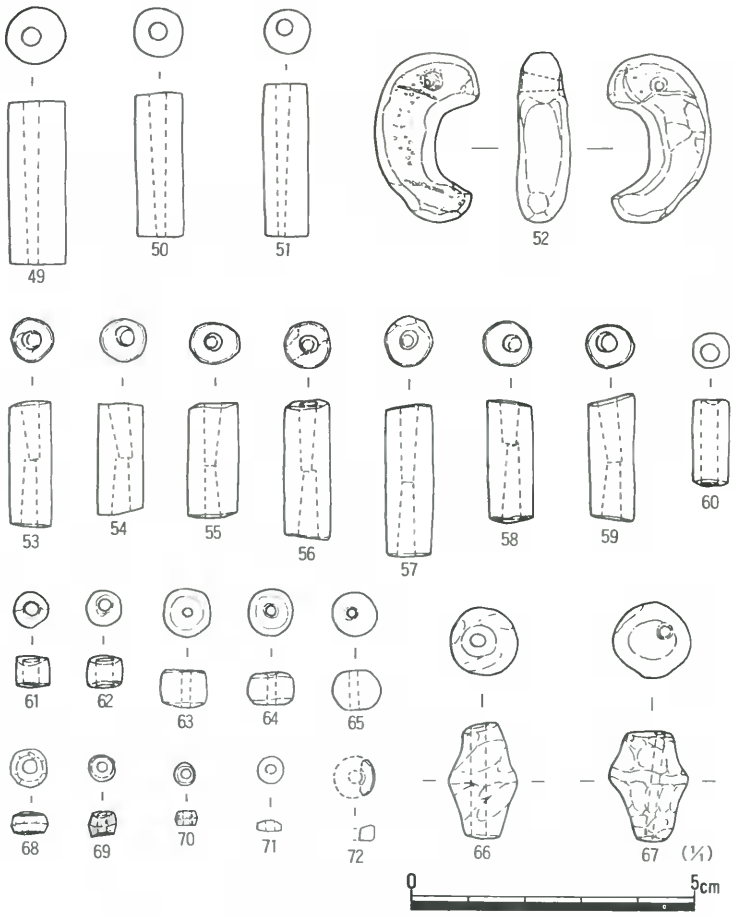
土器は，大きく土師器と須恵器に分類できる。前者には，布留式以降7世紀初頭頃まで型式変遷がたどれる。しかし，その中で最も多いのは，6世紀前半を中心とした大・小の甕である。いずれ型式分類をする予定であるが今回は紙面の都合から割愛する。一方，後者の須恵器については，陶邑における詳細な型式編年が手がかりとなって順次型式順に並べられた。一応，第I型式第1段階のものから存在することが確認された。しかし，この中で最も多いのは，土師器同様6世紀前半頃のものである。その割合は，全体の約40%にあたる。



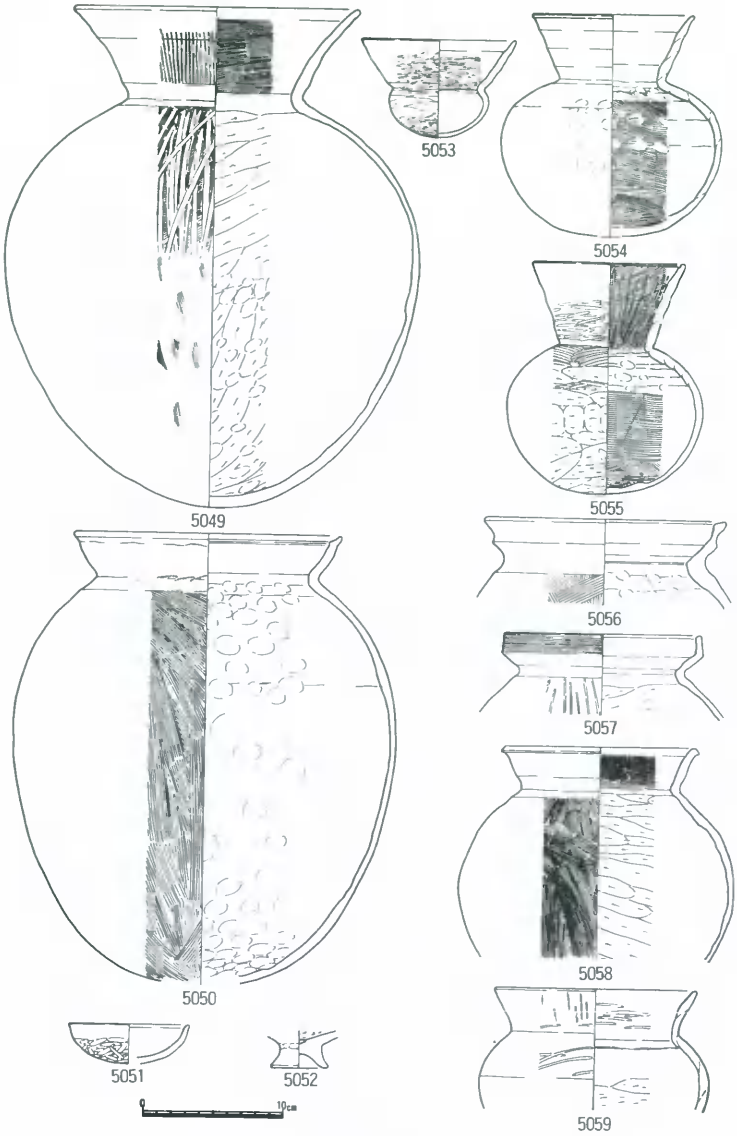
第608図　溝－73　護岸（1/30）

玉類は，瑪瑙製勾玉・碧玉製管玉・滑石製臼玉，さらには土製のものまで検出された。そのほとんどのものは，6世紀代のものと考える。

一方，図化できなかったもので特筆すべき遺物に，多量の窯壁と鉄滓片がある。後者には，炭の含有が認められる。さらにこれと関係するものとして，鞴の羽口が数片検出された。窯壁と鉄滓を含めた総重量は，約11kgにも及んだ。　（島崎）

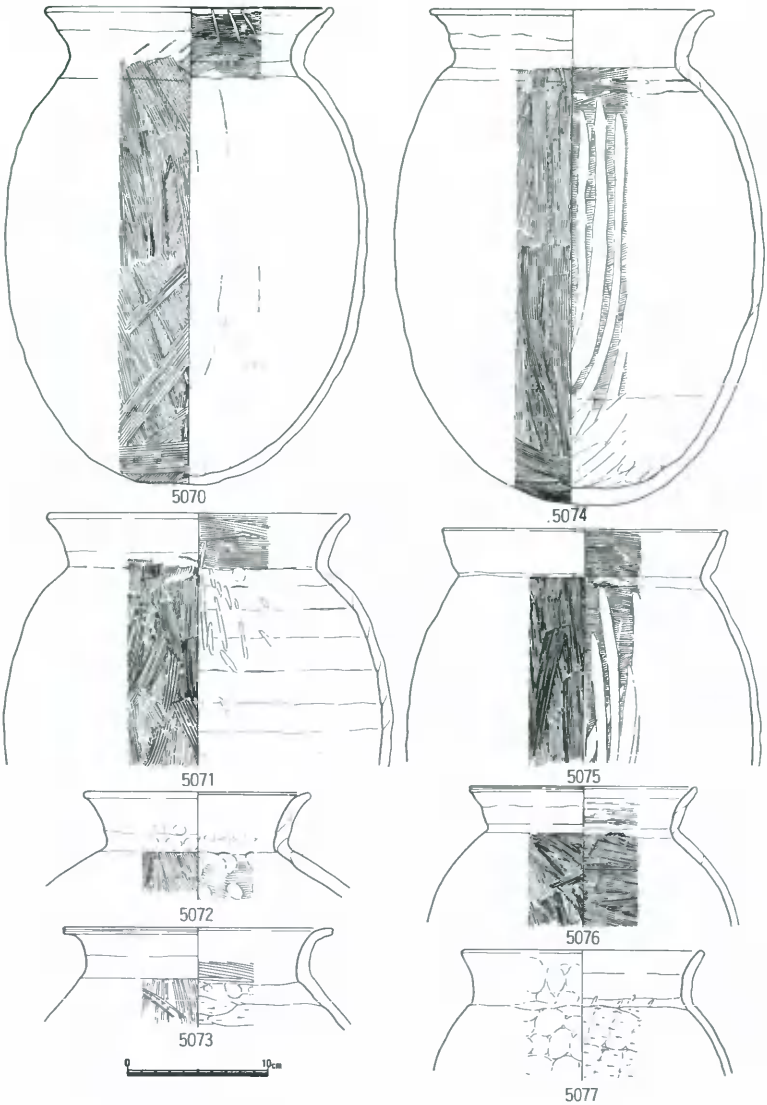


第609図　溝-73 出 土 遺 物（1）

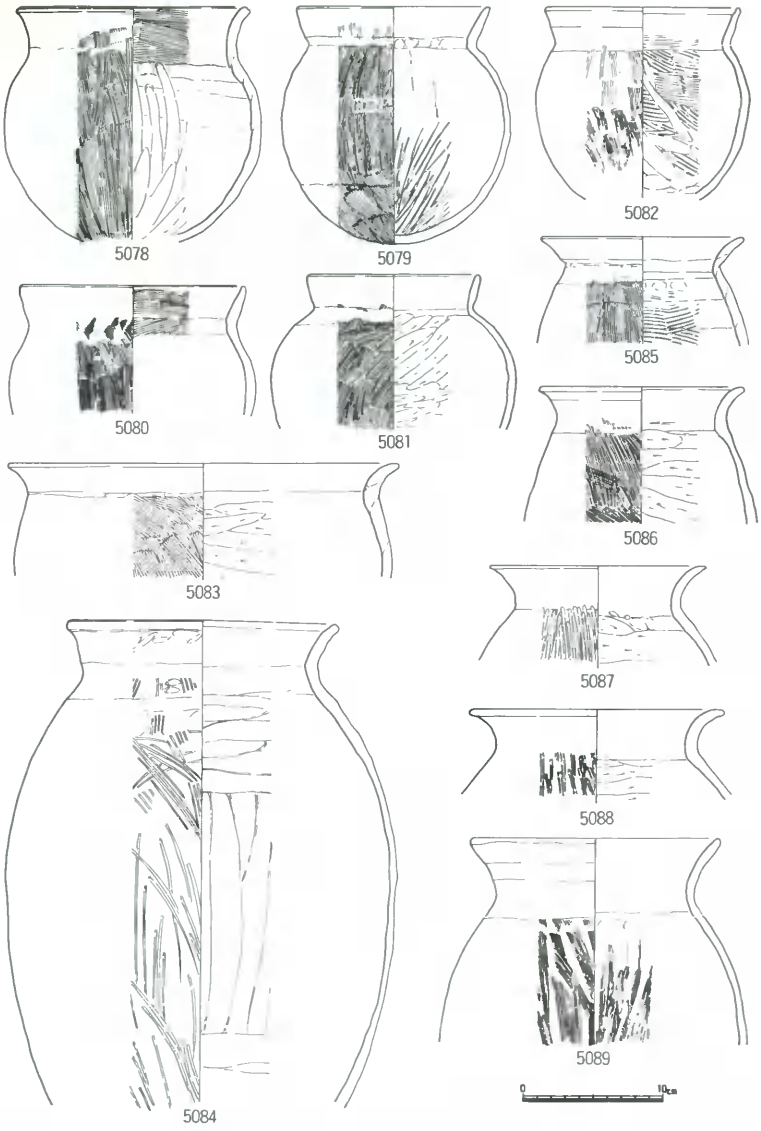


第610図　溝－73 出土遺物（2）

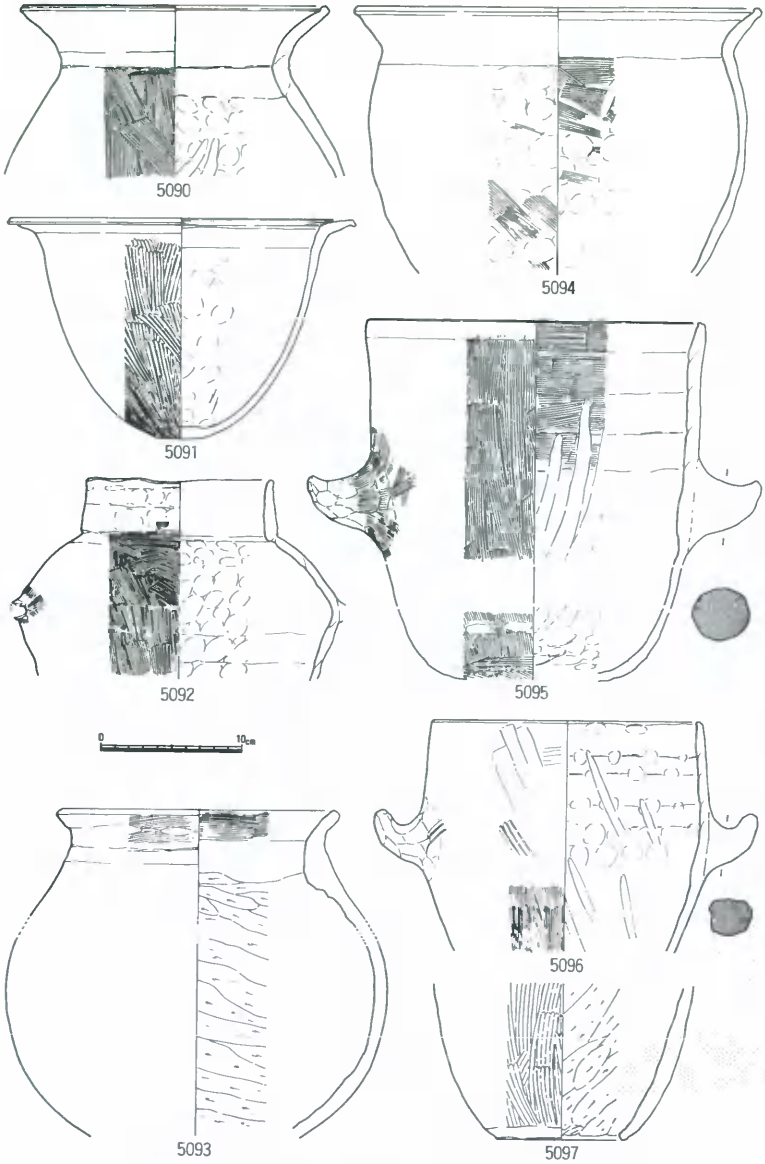
第611図　溝－73出土遺物（3）



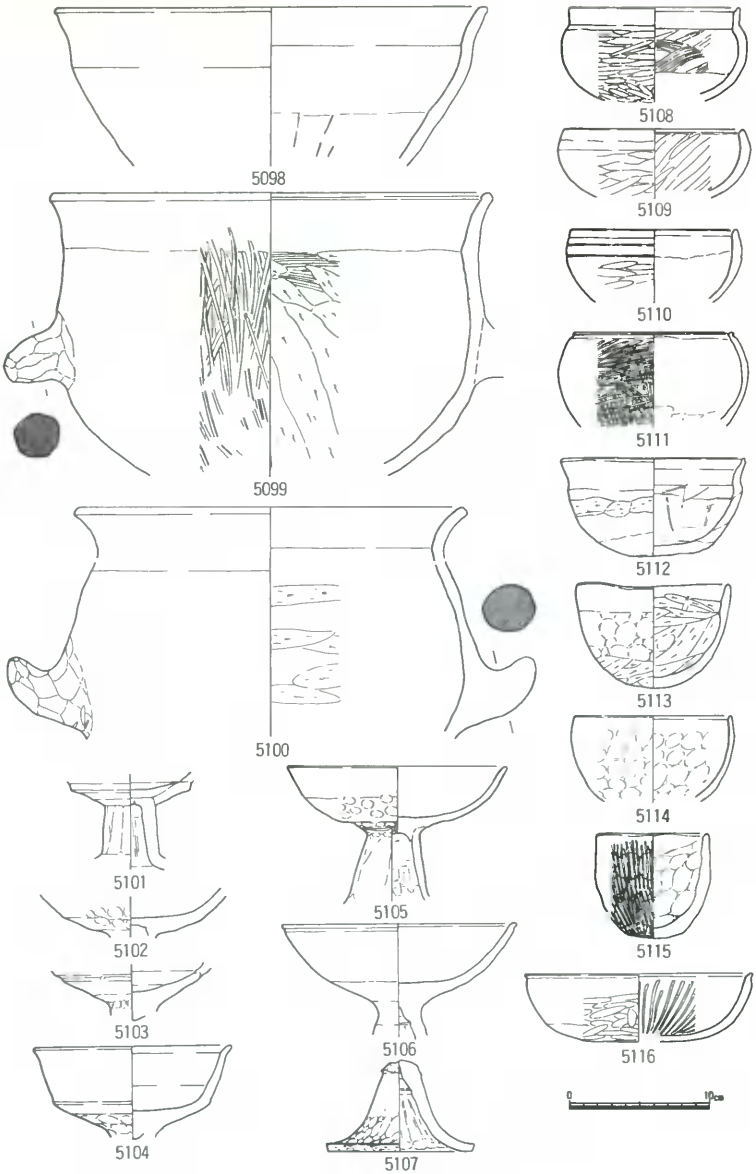
第612図　溝－73出土遺物（4）



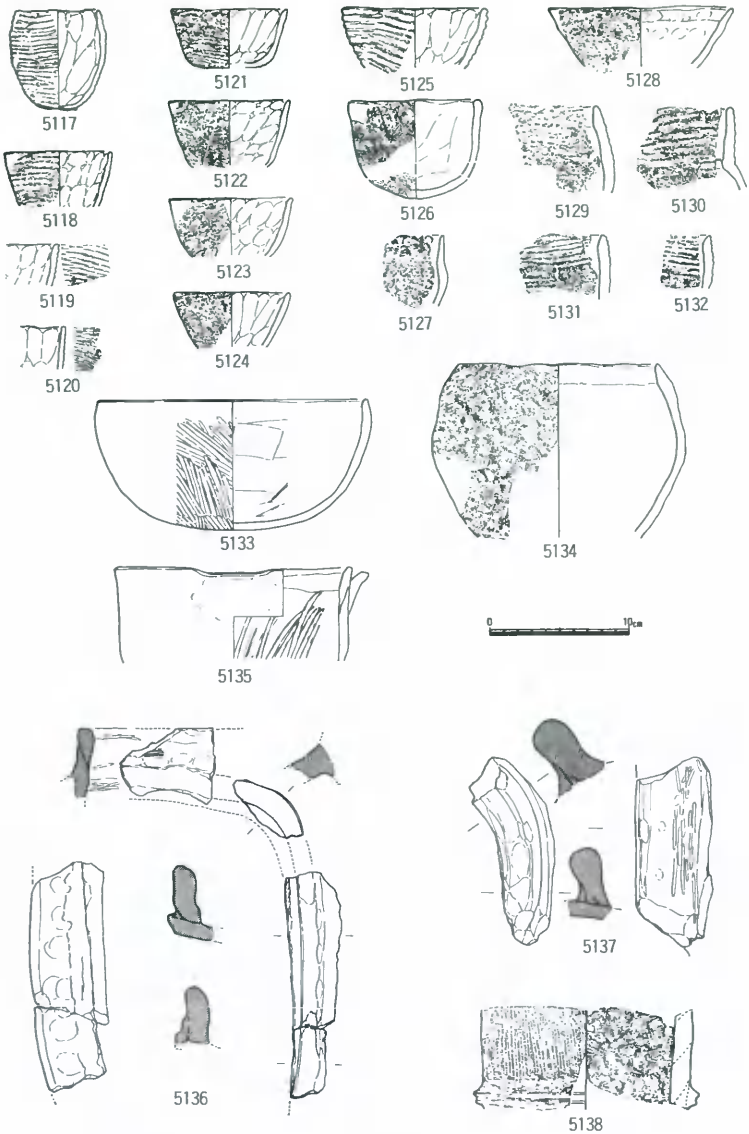
第613図　溝－73 出土遺物（5）



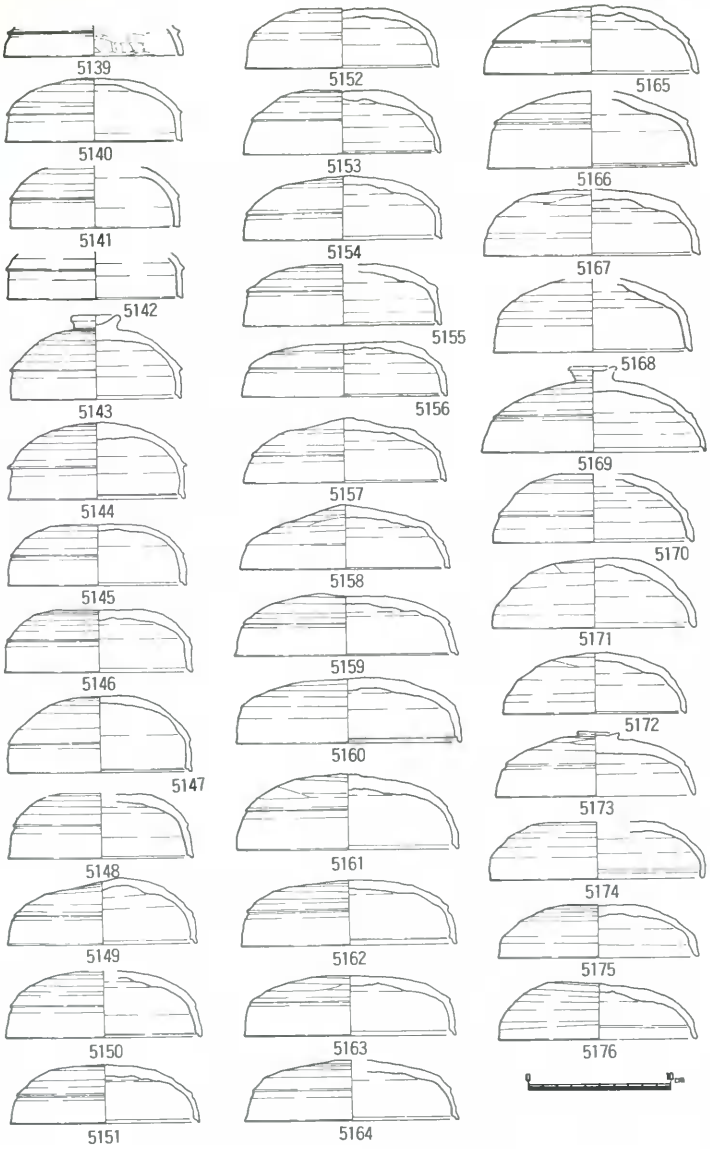
第614図　溝－73出土遺物（6）



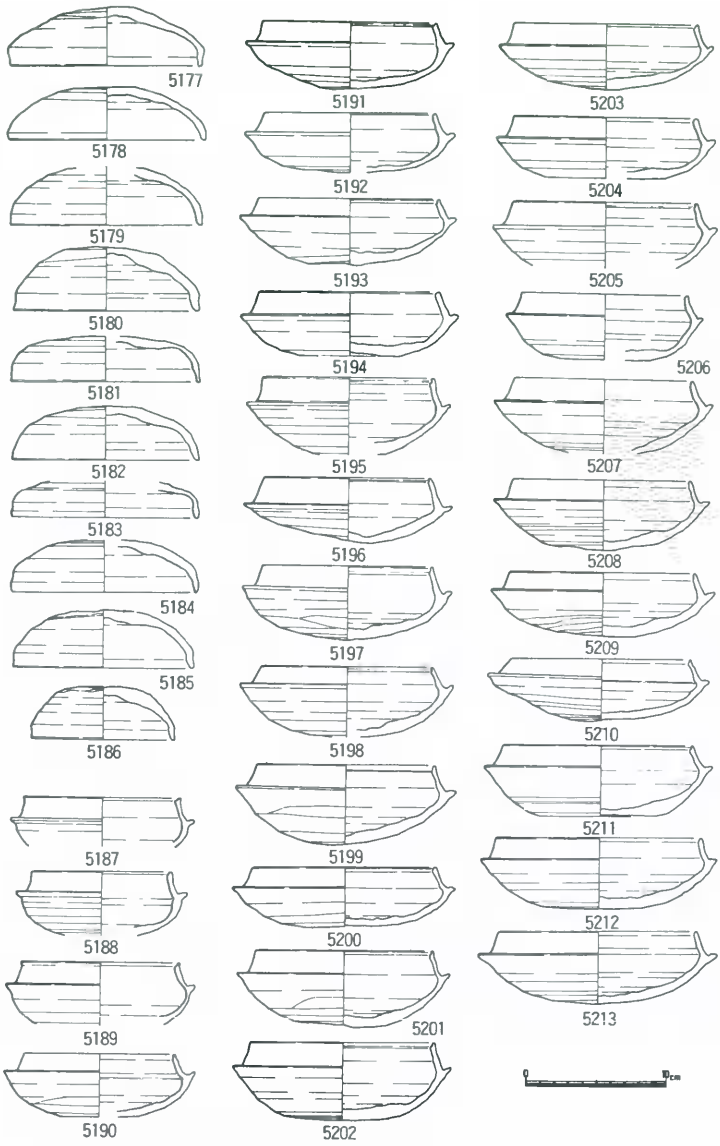
第615図　溝－73 出土遺物（7）



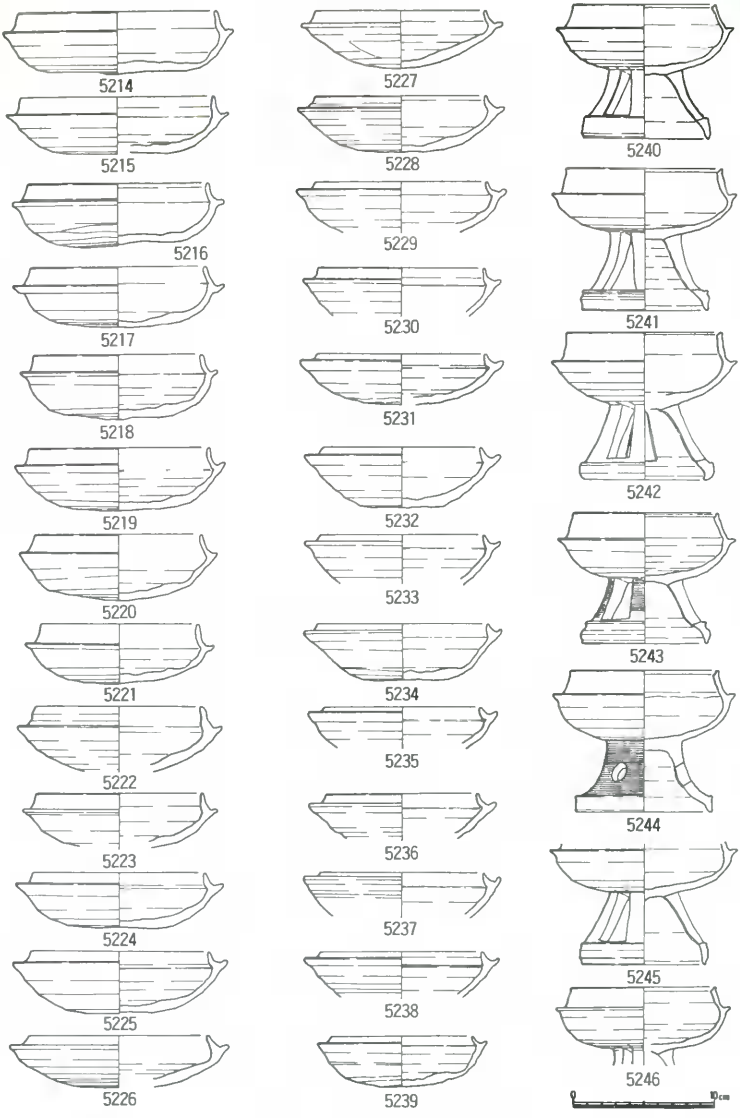
第616図　溝-73 出土遺物（8）



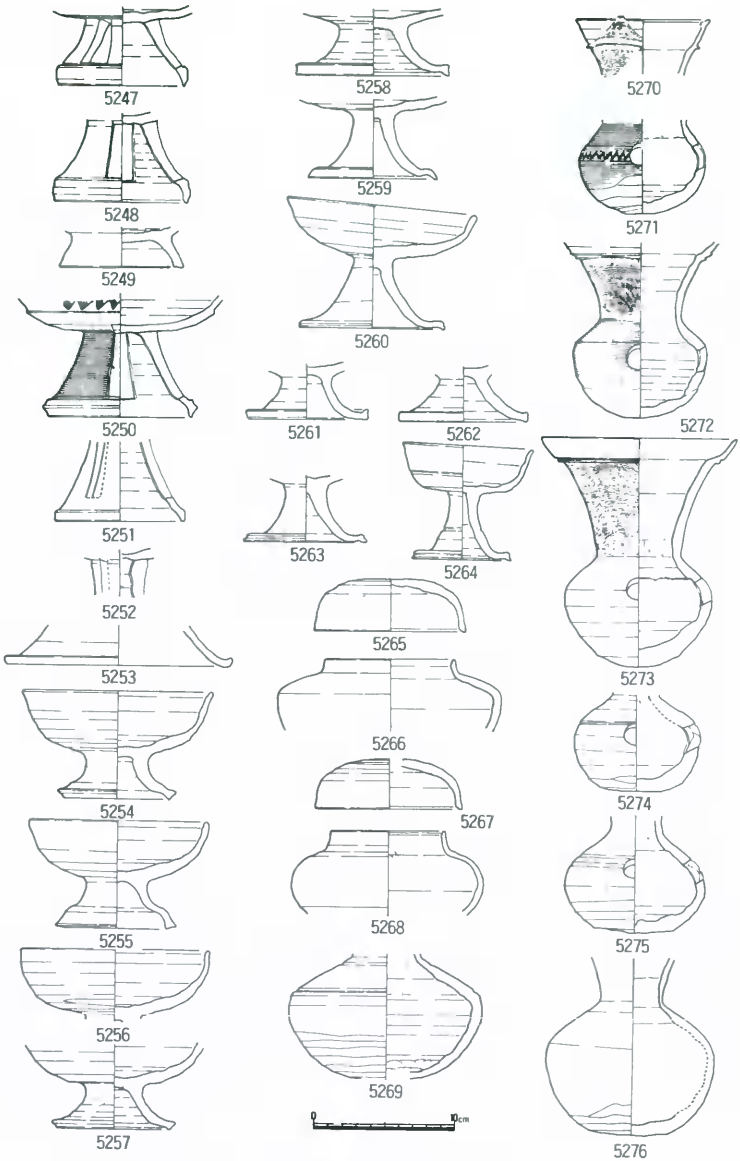
第617図　溝－73 出土遺物（9）



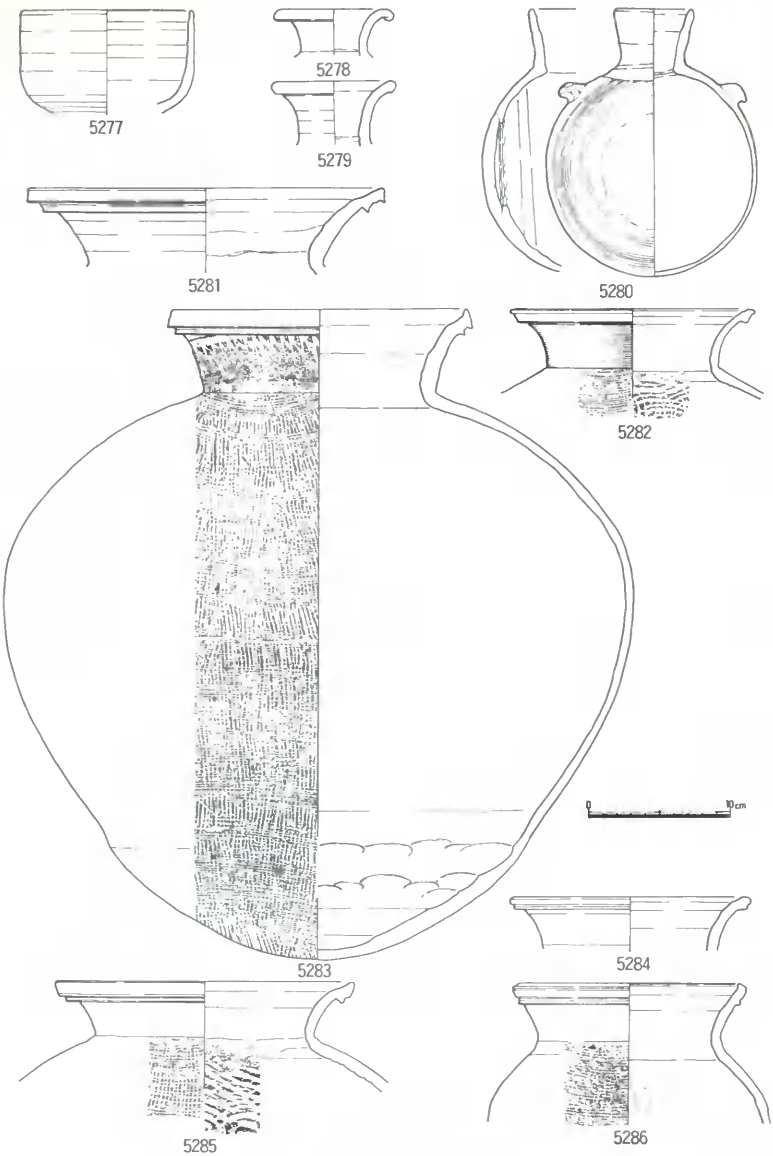
第618図　溝－73出土遺物（10）



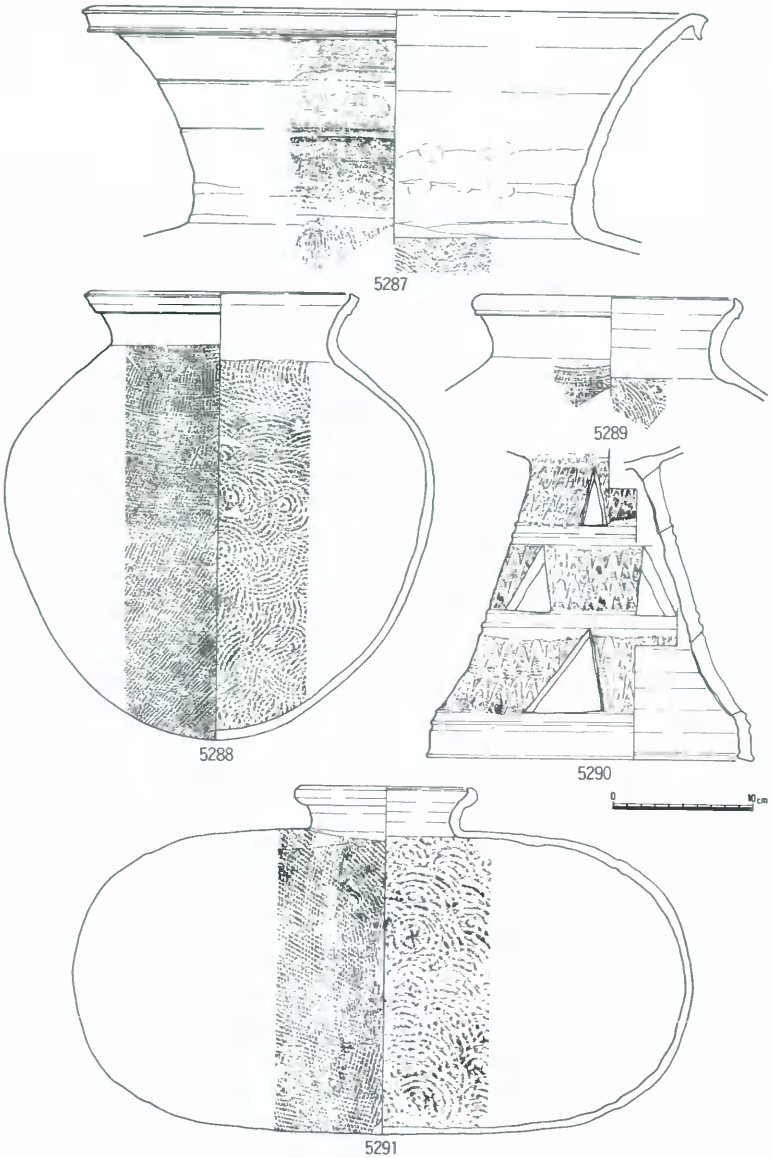
第619図　溝－73 出土遺物（11）



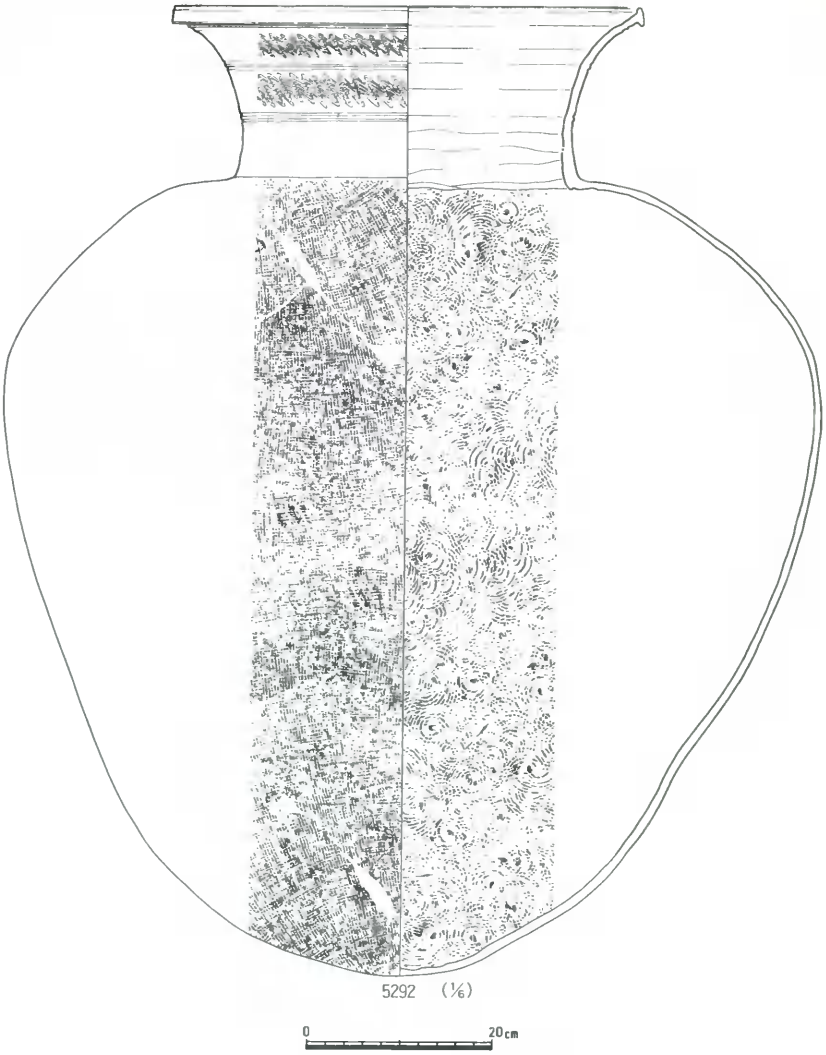
第620図　溝-73 出土遺物（12）



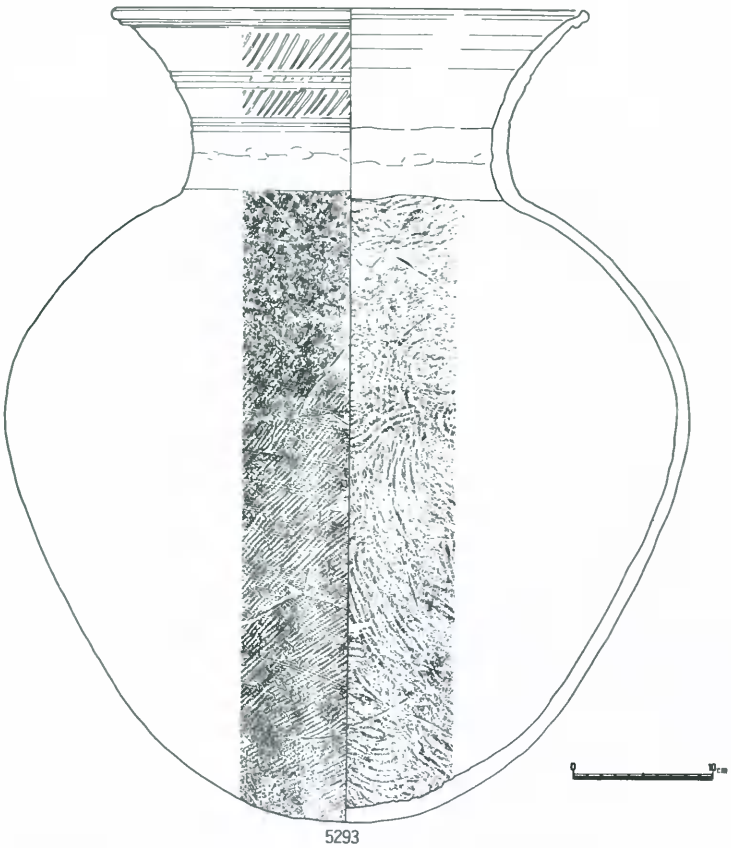
第621図　溝－73出土遺物（13）



第622図　溝-73 出土遺物（14）



第623図　溝-73 出土遺物(15)

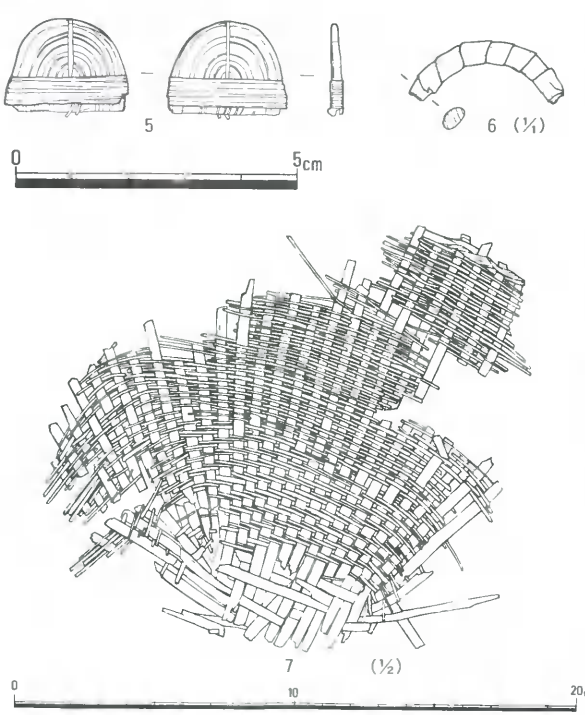


第624図　溝-73 出土遺物（16）

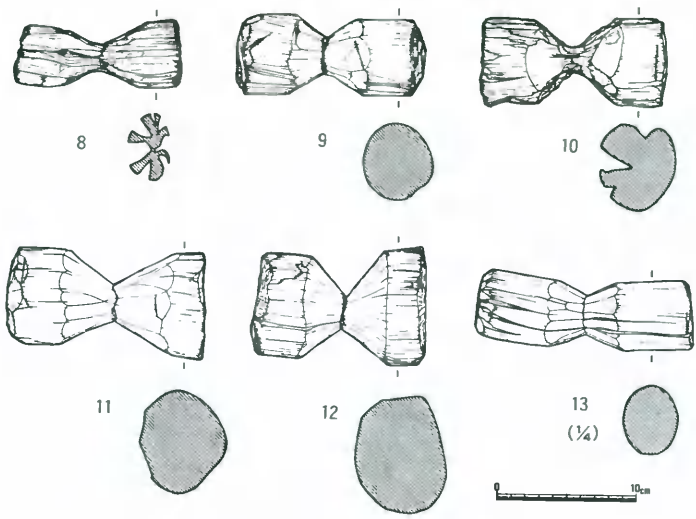
木製品（第625～634図，図版65～70）

溝―73からの出土遺物の中でも，須恵器・土師器・土製品・玉類などのほかに豊富な植物遺体の比重も大きい。とりわけ，多量の流木や加工材を中心とした多種多様な木質遺体は土器類とは異質の当時の生活や木工技術・植生などを如実に示すものである。本項では観察表の記載を補いつつ概述を加えておきたい。

大半の木質遺体の出土は，おもに下層から中層下位にかけての青灰色～淡灰青色細砂あるいは粗砂層から目立ち，これより上層では木質そのものの遺存はあっても樹皮を除いては髄部や木表はひび割れたり，やせている。このことは，中層下位（第607図―31・35・47層）から下層・溝底面にかけての地下水位の変動が少なかったことを示し，幸いにしてその湿潤な状態が，多くの木質遺体に対し極めて良好な環境を形成していたことがわかる。木質遺体の中には，樹皮や自然木（枝がついたままのもの）や未加工の流木も認められるが，46のように枝が取り除かれた白木の棒状の木製品も出土しており，加工材としてとりあげることにした。また建築材あるいは第608図のように護岸施設に用いられる杭材・しがらみ用材等については，本稿では紙数制約のため割愛を余儀なくされたが，いずれも丸物あるいは，部分的な面取りが施されたり先端を鋭く尖らすものや，伐採時に生じたと思われる切断痕を木口に残すものが多く，鋭利な鉄器の多用を示しているといえよ



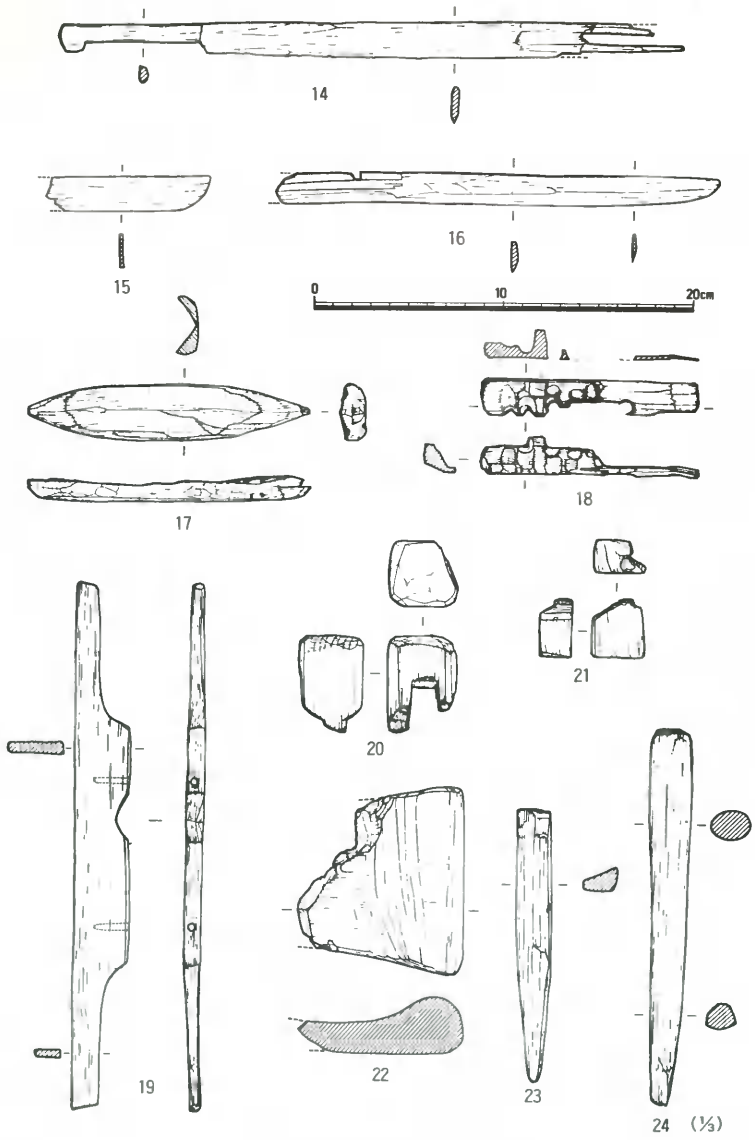
第625図　溝―73 出 土 遺 物（17）



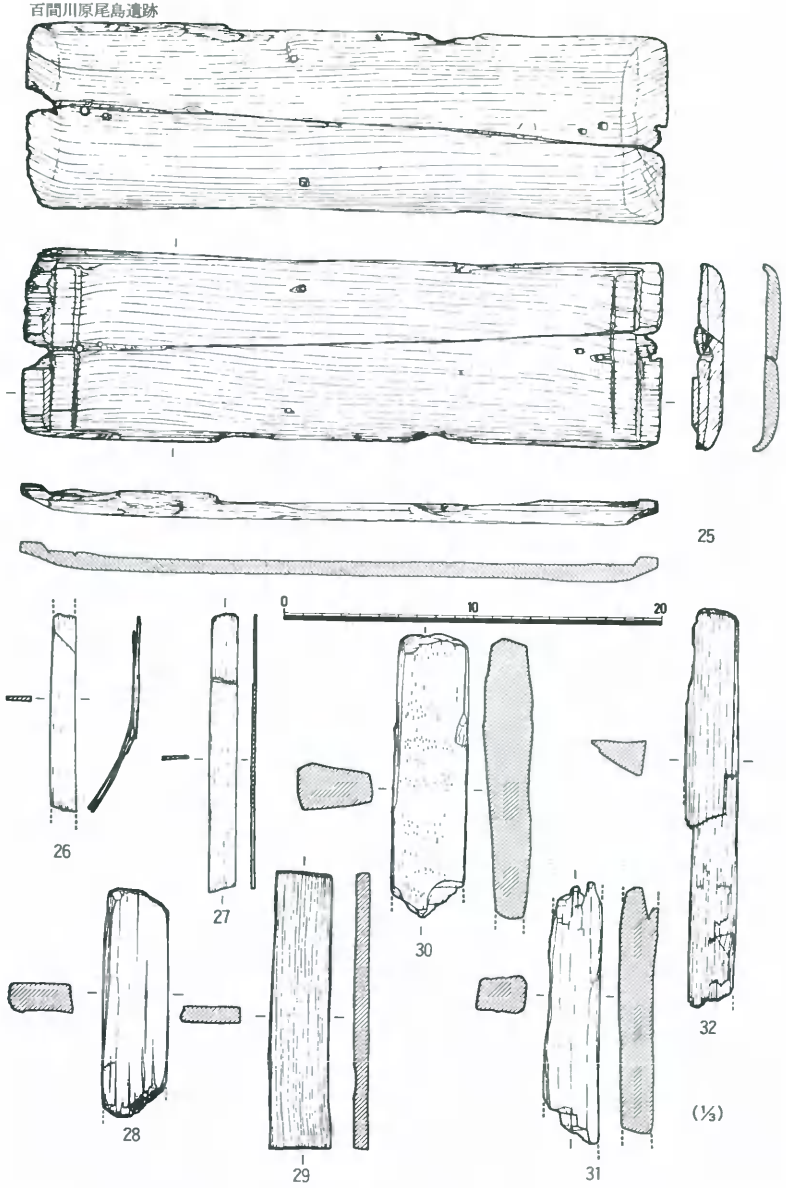
第626図　溝-73 出土遺物（18）

う。丸物の中には，梃木材と推察される加工材もあるが杭等については一部を除いて不明瞭なものが多い。これらは，特に第607図に掲げるC－D断面付近で集中的に出土しており，護岸施設と推定する遺構の橋梁的な構造物の付属用材の多くは，樹皮の一部が残存しているものもあり，クリ・カシ（杭材）・モミなどの樹種が用材として用いられている。いずれも，径5～10cm，長さ120～190cmを測り，部分的な面取り材の中には，火を受けて焼け焦げているものも，かなりの数にのぼる。他の木製品も含め，溝の増水・洪水等によって溝の流域周辺の居住地域から大量の木質遺体が流入・漂着し，埋没したことはまず疑う余地のない事実であろう。しかも，これらの木製品の大半は，遠隔地域の木製品ではなく，比較的近隣の集落からの流入品と推定される。たとえば，田舟49のように半截状態となって岸辺にうちあげられたかのような状態で出土した木製品や，折損した木材もかなりみられるが，木表の磨滅や角の欠失は目立たず，長距離の漂流は考えられないことからも裏付けられよう。

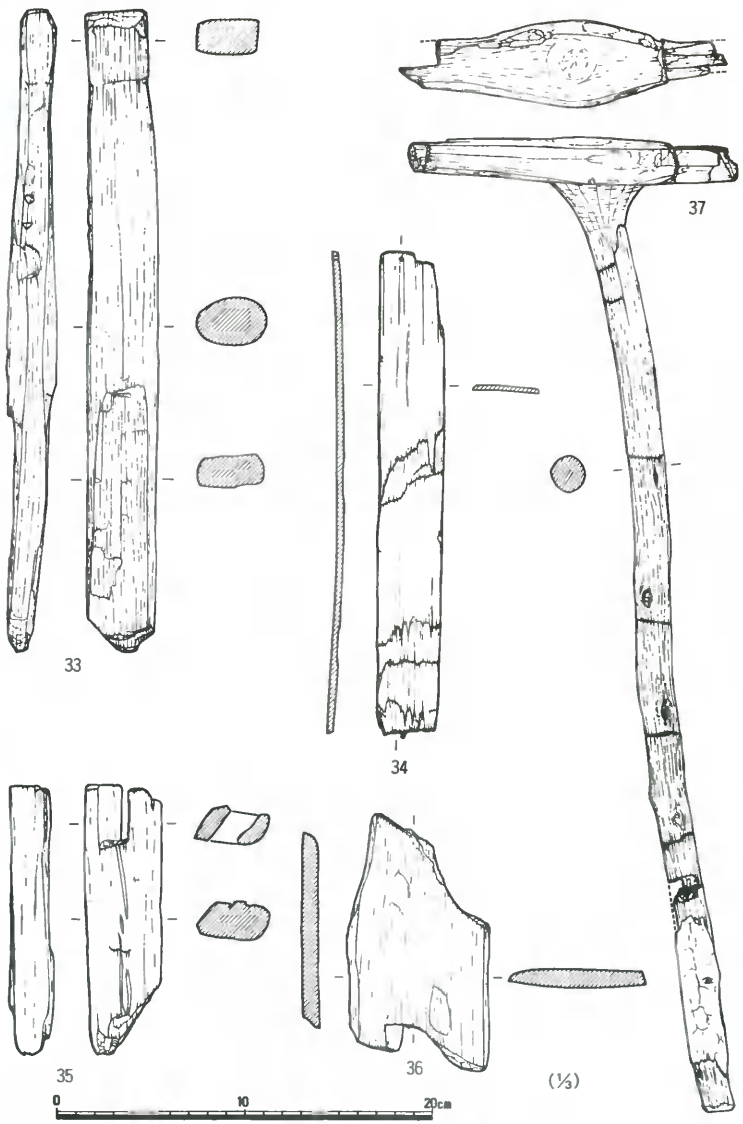
木製品の性格・用途等から分類してみると，装身具（髪飾）・容器（食膳具）・紡織具・祭祀具・工具・農耕具や，板状材・棒状材などの建築用材などに大きく分類される。いずれも斧・手斧・鉋・錐・のみ・小刀状工具などの鋭利な鉄器の使用が観察され，当時の武器とは別に工具としての鉄器の豊富な種類と保有を物語っているといえよう。一方，板材などの加工に観察される削平・枘穴穿孔や杭材の先端切り，25のように刳物の製作技術には，加工品に応じた



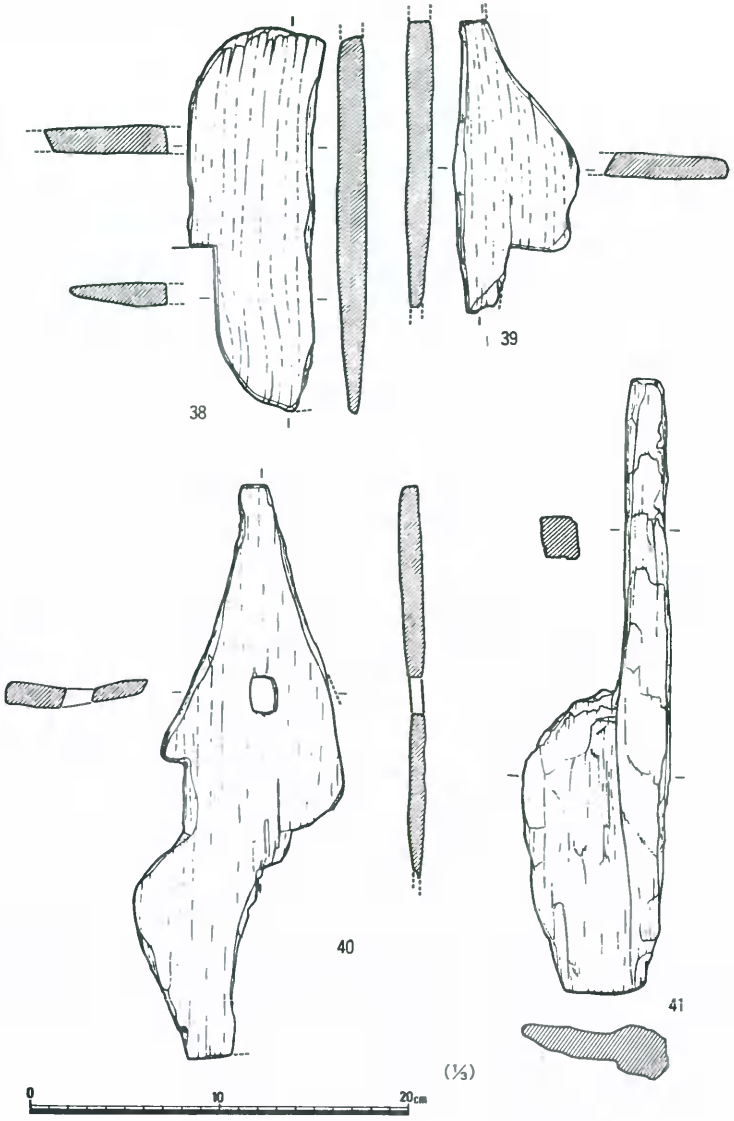
第627図　溝-73 出土遺物（19）



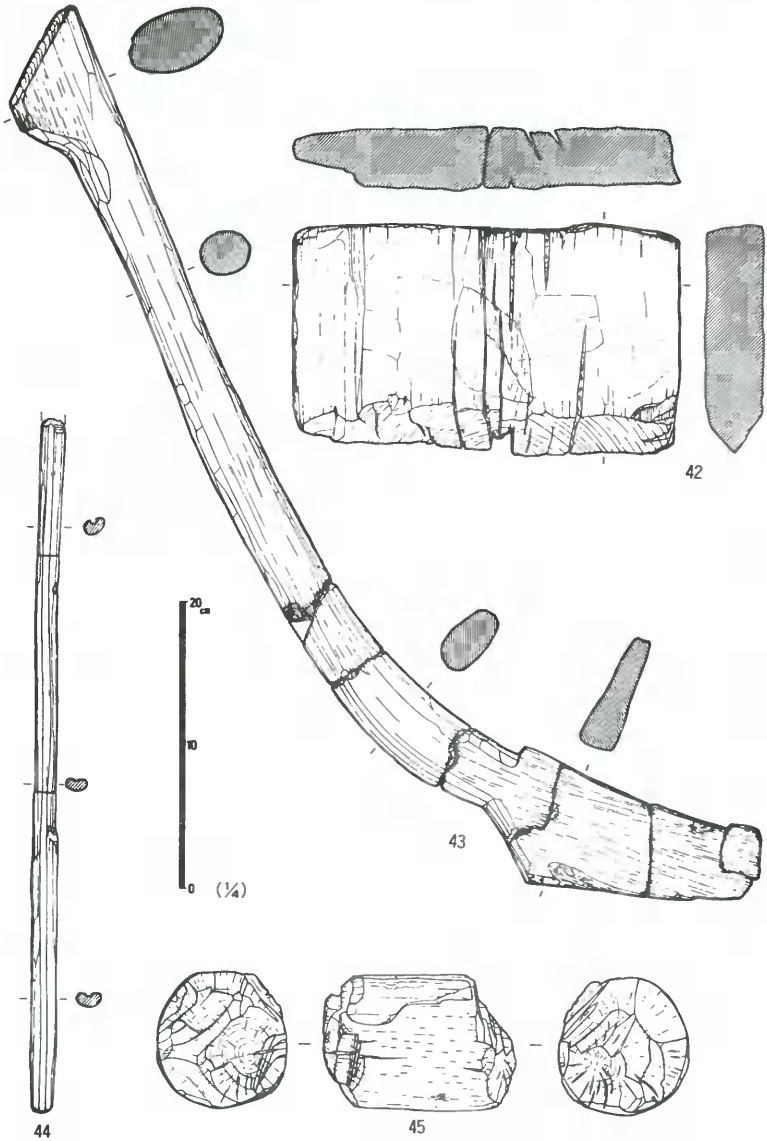
第628図　溝-73 出土遺物（20）



第629図　清-73 出土遺物（21）

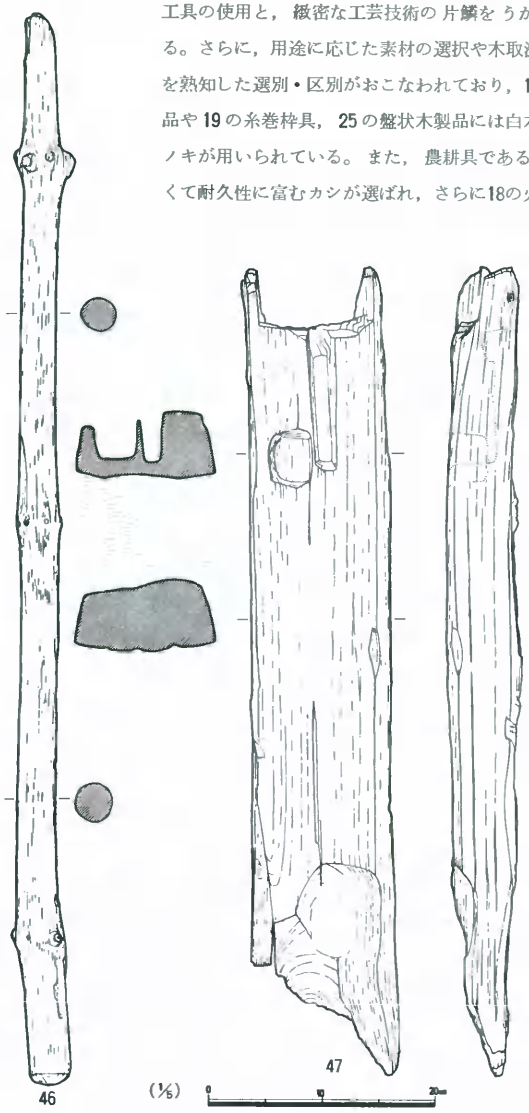


第630図　溝-73 出土遺物（22）



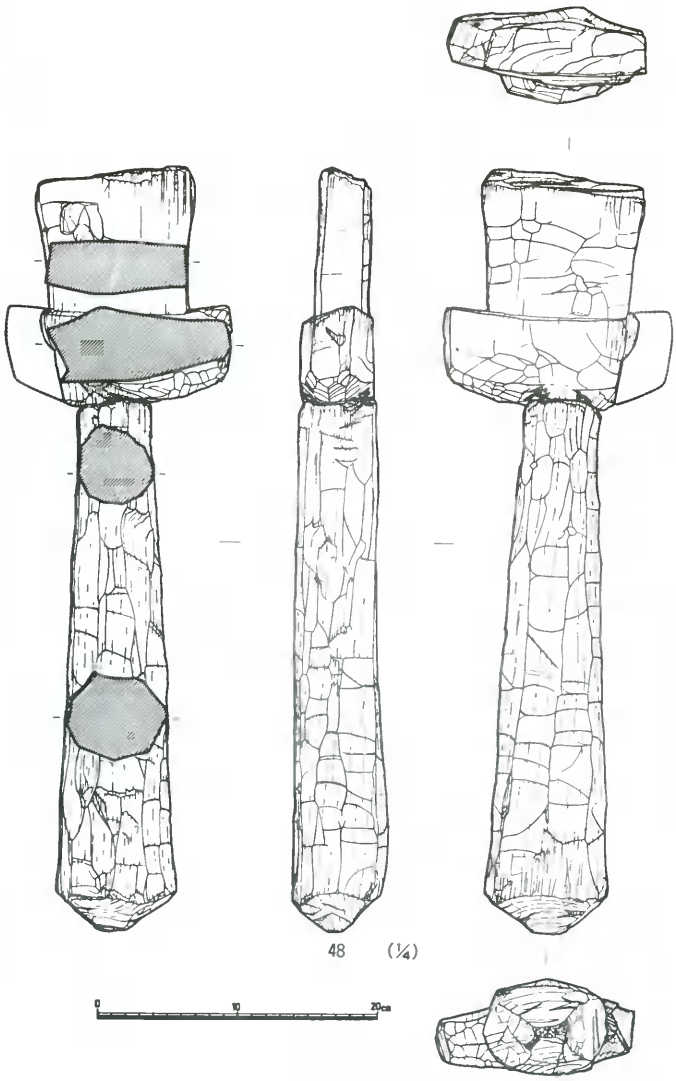
第631図　溝-73 出土遺物（23）

工具の使用と，緻密な工芸技術の片鱗をうかがわせるものもみられる。さらに，用途に応じた素材の選択や木取法には，すでにその特質を熟知した選別・区別がおこなわれており，14・16などの武器形木製品や19の糸巻枠具，25の盤状木製品には白木の美しい素材であるヒノキが用いられている。また，農耕具である38～40の鋤先には，硬くて耐久性に富むカシが選ばれ，さらに18の火鑽臼にはスギが用いられるという点などにも，後世に継承されていく伝統的な木工技術を生かす前提の選別としてすでに確立していたことが推察される。以下，おもな木製品について特徴等を略述しておこう。

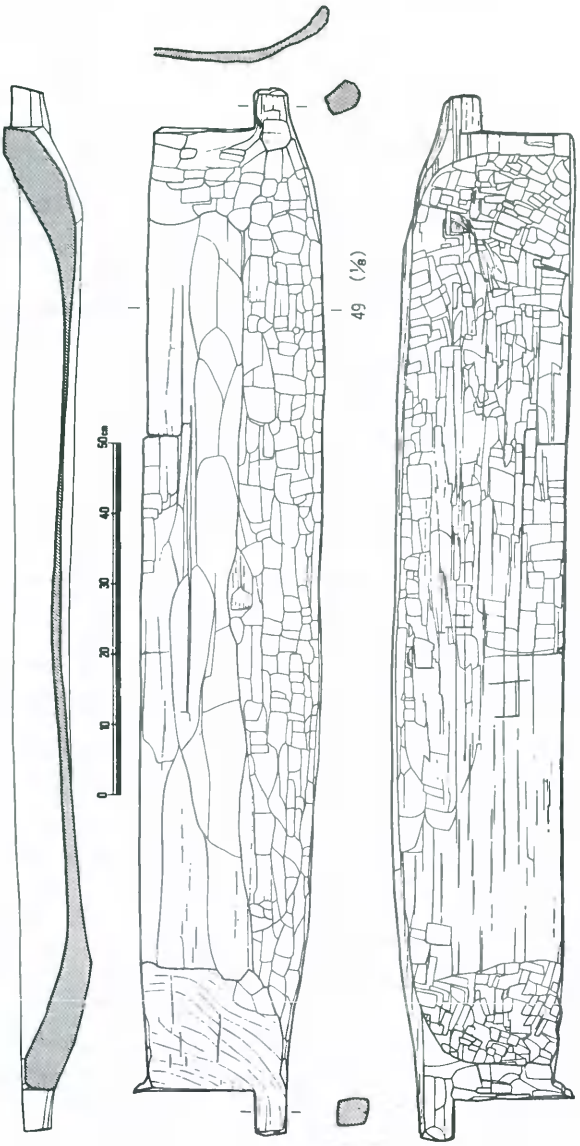


第632図　溝-73 出土遺物（24）

5の堅櫛は髪飾装身具で，頭部だけの残欠であるが漆塗もよく遺存する小型のものである。6は容器などの把手と考えられ，桜皮が丁寧に巻かれる。このような桜皮はいく分広目に剝ぎとられて丸めたものが1点出土している。7はザル目編の籠で，下位と上半で編み方を変える高度な技術が看取される。正倉院に伝え



第633図　溝-73 出土遺物（25）



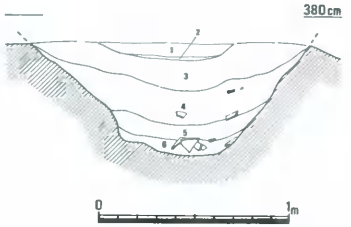
第634図 溝－73出土遺物(26)

られる「花籠」に比べても遜色のない技術の片鱗がうかがえる。8～13は網代や席を編む際に用いられたと推定される槌の子（紡錘）で素材はまちまちではあるが，いずれも丸棒の中央部を削り欠いて紐を結びつけるくびれ部をつくる。19の糸巻枠具とともに，当時の手仕事の一端を示している。14・16はいずれも武器形木製品で，刀形である。14は把頭の形態から頭椎大刀，16は通常の直刀を忠実に模したものである。15も大刀の切先片と推定されるが，特殊な祭祀具として注目すべき木製品である。17も一種の祭祀具と考えられる舟形木製品で，形態から川舟（和船）の系譜に連なるものと推定される。18は小型の火鑽臼で，先述のようにスギが用いられ，臼孔の径からウツノキを火鑽杵として対をなす可能性が強い。20・21は極めて小型ではあるが，鋭い刀子状の鉄器で丁寧に面取りが施された木製品の一部で，前者は把手，後者は器物の削りだされた突起と考えられる。23・24は土掘子（ふくし）状の棒状木製品であるが用途は明らかではない。25は盤状の木製品で，やや舟底状に反り，内面の両端には刻線や2孔一組の穿孔がみられ，細かな細工が観察される刳物である。26・27・34はいずれもヒノキの薄板材で曲物状の容器の側板材と推定される。34には，綴じ孔と思われる穿孔がみられる。37は手斧（横斧）を装着する台部と柄部から成る横斧膝柄で，枝をそのまま利用している。台部と柄部は一般的に鋭角をなすものが多いが，本例は鈍角となっている。38～40はいずれも鋤先で鉄製鋤先を装着して使用される。43は，踏み鋤形を示す木製品であるが，材質（シイノキ）や大きさからその可能性は少ない。柄下端近くに鉄製大鎌を挿入して使用された可能性も考えられる。46は枝・樹皮を取り除いた棒状木製品で頂部は使用によって丸く磨滅している。杖状木製品の石突部分が上端頂部となる可能性もある。47は建築材と考えられ，枘や軸受状の穿孔がみられる。下端部は火災によるものか，焼け焦げて炭化している。46は未製品で粗い調整を全面に残している。斧頭形を呈するが用途は明らかではない。カエデという用材が注目される。46は田舟で，木理に沿ってほぼ半割状態となっている。内外面共に手斧状の鉄製工具による丁寧な削平を行い，前後を持って移動・運搬するための突起をつくり出している。田舟の出土は，弥生時代後期の乾田とは異質の湿田・深田の存在を指摘することができ，当調査区の北方（溝の上流域）に湿田が存在する可能性が極めて強いといえよう。用材はモミで，既述の弥生時代後期の井戸—15・19出土の板材などと共通の用材で，ヒノキに次いで多い用材で，当時の近辺の植生を理解する上で注目される。

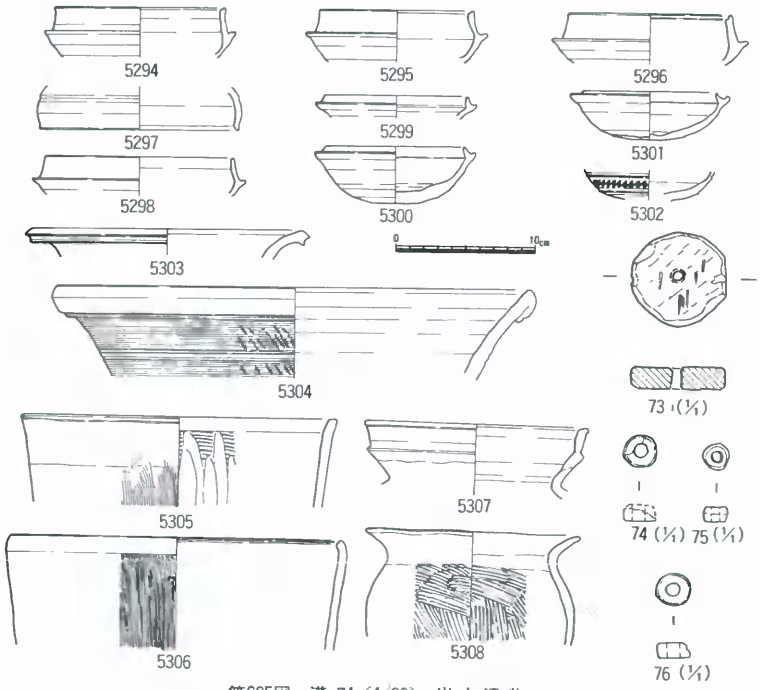
以上，木製品について概述したが他にヨシなどの湿地性植物遺体や，魚骨・小獣骨・昆虫の翅（甲虫）なども出土している。さらに淡水性のタニシなどの貝類の風化した殻が溝底では数多く確認されている。またクルミ・桃核・トチ・ヒョウタン・ウリなどの種子も出土している。これらの動植物遺体については，機会を得て，分析同定結果を報告したい。　（岡田）

溝—74（第635・636図）

E−19からF−19にかけてほぼ直線的に検出された溝である。ところがこの溝は，百・古・I頃の溝をほぼ踏襲した状態で機能していたようで，その東肩及び下層の掘り下げにおいてさらに別に2本の存在が確認された。この溝—74は，その中でも最も新しい。検出された溝は，中・近世の溝等によって寸断されているものの全長36mに及ぶ流路を呈示している。ただし北半部において幅200cmの規模を誇った溝も，下流においては幅130cmに規模を減じる。底の海抜は，310cmに位置する。出土した須恵器によれば，溝の時期は6世紀末頃に比定される。



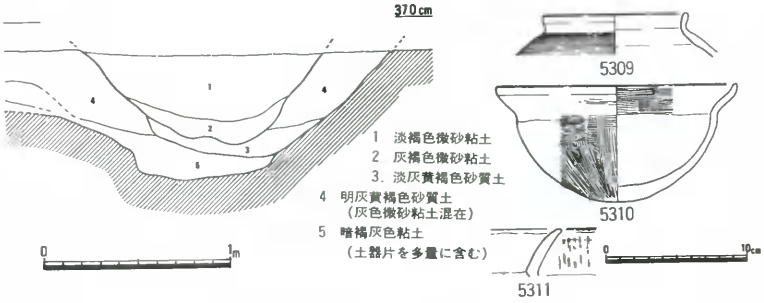
1．淡灰茶色粘質微砂　4．灰色微砂
2．灰茶色粘質微砂　5．暗灰色粘質微砂
3．淡灰色微砂　6．暗青灰色粘土



第635図　溝—74（1/30）・出土遺物

溝—75（第636図）

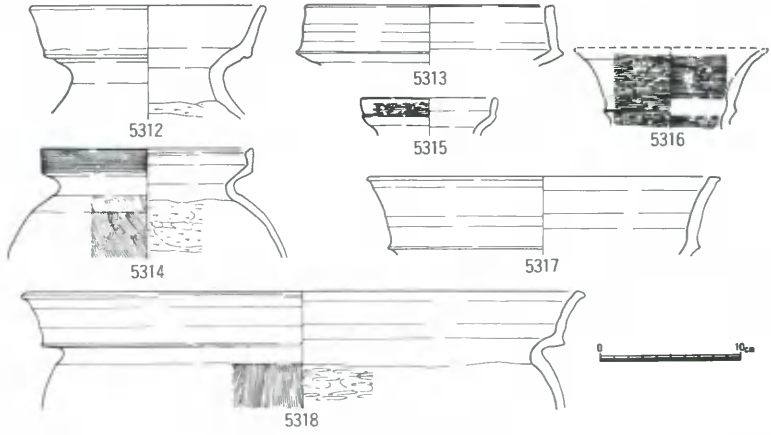
溝—74の下流部東岸において溝—74に切られながらも部分的に遺存していた溝である。そのため，検出できた溝の全長は，約6 mにすぎない。ところが幅は，溝—74によって西半分がとばされていることから判然としないが，およそ150㎝のものが想定できる。溝底の海抜は，300㎝である。時期は，須恵器を手がかりとすれば6世紀後半頃に位置づけられる。



第636図　溝-74～76（1/30）・溝-75 出土遺物

溝—76（第636・637図）

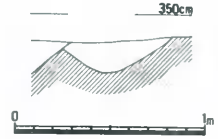
前述した2本の溝の初現流路に相当する溝である。ところが上流域においては，その遺存はまったく認められなかった。予想される溝の規模は，幅150㎝である。溝底の海抜は295㎝を測る。時期は，出土した土師器により百・古・Ⅰ併行期に位置づけられる。　（島崎）

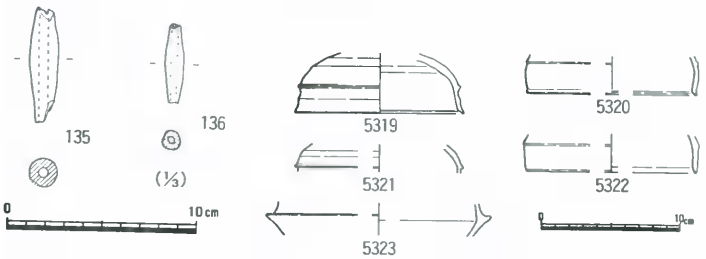


第637図　溝-76 出土遺物

溝—77（第638図）

F-20で検出した南北方向の溝である。西へ向かってわずかに内湾している。溝底の標高は312～316cmで，検出部分についてはほぼ平坦であるが，地形や近接する中世の溝の例からして，北から南へ流れていたものと考えられる。幅50～70cm，深さ16～23cmを測る。溝壁の傾斜は緩やかで，丸味をもった底に続く。溝底はかなり凹凸をもっていた。埋土は灰褐色粘土混じりの灰色砂で，弥生時代後期から6世紀前半までの土器片をかなり包含していた。図示した須恵器がもっとも新しい時代のもので，このことから溝—77の年代は6世紀前半と考えられる。この溝は隣接した地区では後世の削平によって消滅し，検出されていない。





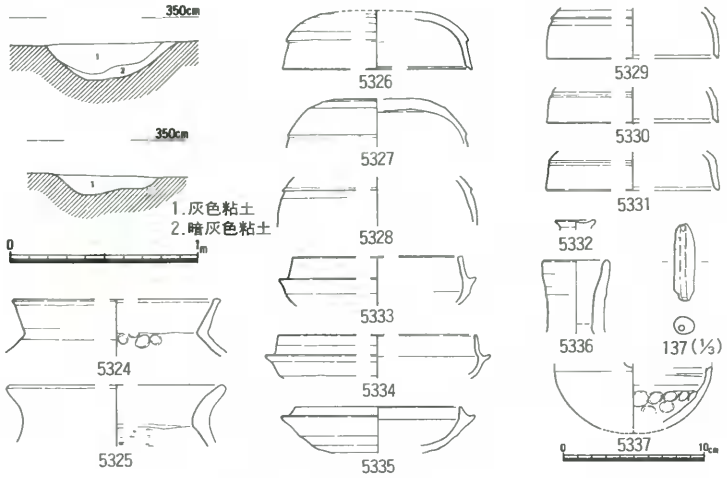
第638図　溝—77（1/30）・出土遺物

溝—78（第639図）

D-21からF-21へと調査区を横断していた。溝底の標高はD-21で318cm前後，F-21で314cm程度とわずかに落差があり，北東から南西へと緩やかに蛇行しつつ，ゆったりと流れていたようである。Gラインから7mの所でやや強く屈曲して西へ方向を変える。幅60～70cm，深さ10～20cmを測るが，強く屈曲する部分から上流4mの部分は一段低くなって25cm程度あり，幅も80～110cmと少し広くなっていた。溝壁は緩やかに下降し，屈曲して溝底に至る。溝底の形状は，この溝が微高地の粘土層と弥生時代後期の水田を埋めた砂層の両方にまたがって位置することもあって，一様に平坦ではなく，かなり凹凸があった。埋土はやや褐色がかった灰色粘土で，部分的に暗灰色粘土層を底に認めた。埋土には全体に炭粒が含まれ，土器片も散在していた。出土遺物には弥生時代後期から古墳時代後半までの土器と土錘があり，もっとも新しいもので6世紀後半の須恵器がある。

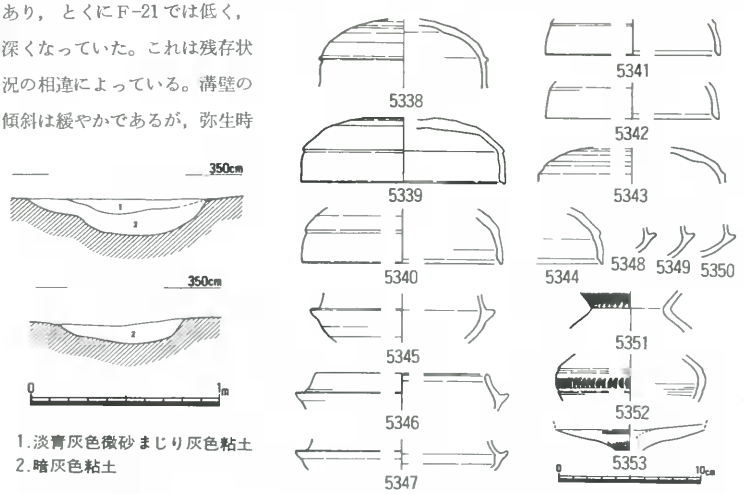
溝—79（第640図）

溝—78と3～4mの距離を保ち，ほぼ平行して走るが，Gラインから7mのところで溝—78



第639図　溝-78（1/30）・出土遺物

が大きく屈曲するために離れる。溝底の標高は，D-21で318～315cm，F-21で310～313cmを測り，やはり北東から南西へ流れていたようである。幅60～125cm，深さ12～26cmとかなり変化があり，とくにF-21では低く，深くなっていた。これは残存状況の相違によっている。溝壁の傾斜は緩やかであるが，弥生時



第640図　溝-79（1/30）・出土遺物

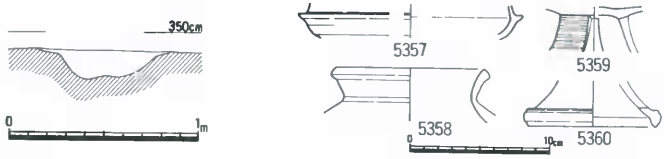
代後期の水田を埋めた砂層を掘削していたため，溝底は微妙な起伏を示した。溝内埋土は褐色がかった灰色粘土であるが，上流ではその上に炭の薄層を挟んで淡青灰色微砂を混入する灰色粘土層があり，下流では溝底に褐色土を含む暗灰色粘土層を認めた。

出土遺物としては6世紀前半の須恵器がもっとも新しいものである。

第641図　溝-80（1/30）・出土遺物

溝—80（第641図）

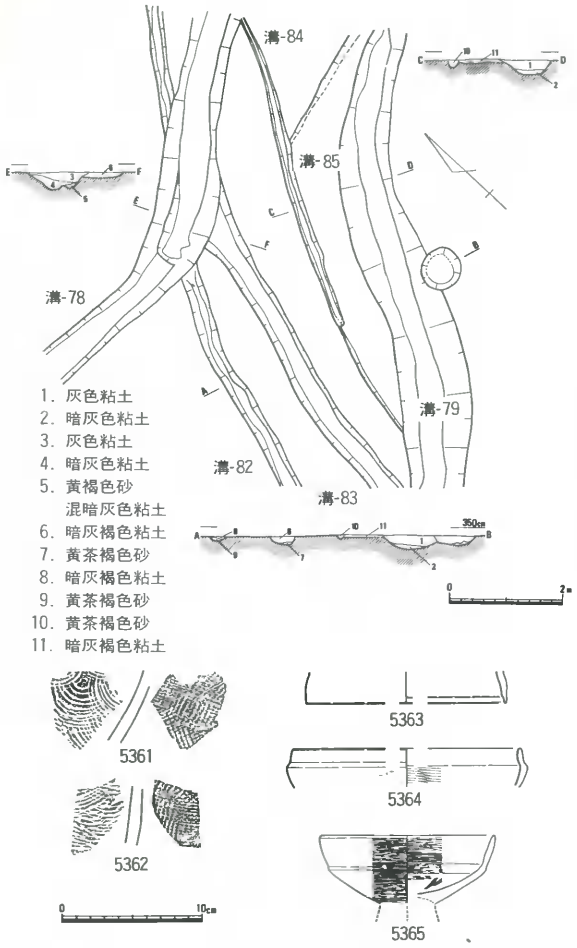
D-22からF-22へ蛇行しながら走る。溝底の標高はD-22で316cm，F-22で310cm程度を測り，北北東から南南西へわずかに傾斜していた。溝—79との距離は7～18mで，南へ行くほど離れていく。幅75～90cm，深さ17～41cmとかなり変化があったが，これは残存状況が南へ向かうほど良好となることによる。溝壁は緩やかな傾斜で，溝底はほぼ平坦となる。埋土は褐色がかった灰色粘土であった。出土遺物はわずかであるが，6世紀初頭の須恵器がもっとも新しいものであった。



第642図　溝-81（1/30）・出土遺物

溝—81（第642図）

溝—80の東隣りを流れるが，ほとんど蛇行しない。溝—80との距離は遠いところで12mあったが，F-22では4mの距離でほぼ平行していた。E-22では後世の削平にあったために消滅していた。溝底の標高はD-22で327cm，F-22で321cm前後と，溝—80よりは15cm程度高い。幅50～70cm，深さ10～13cmを測る。溝壁の傾斜は緩やかであるが，溝底は広い平坦面をもたずに起伏があり，各所での断面形は一定しない。埋土は溝—80と同様の褐色がかった灰色粘土であった。出土遺物は少なく，ほとんどは須恵器片で，その示す年代は6世紀前半である。



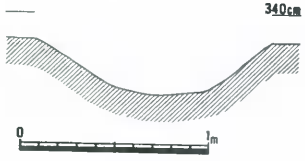
第643図　溝-82～85（1/100）・出土遺物

溝—82～85

（第643図）

F-21で検出されたものであるが，溝—85については幅の割には深さがなく，溝状遺構と表現すべきものである。いずれも溝—78か溝—79に切られていた。接続するE-21では検出されていないが，それぞれの溝底の標高は溝—82が323cm，溝—83は320cm，溝—84は327cm，溝—85で333cmと，溝—78・79より10～20cm高く，傾斜の具合も考えれば後世の削平によって消滅している可能性が強い。溝—82は幅25～35cm，深さ7～9cmで，わずかに湾曲しながら，北北東から南南西へ走る。溝底は起伏に富んでいた。埋土は二層で，下層は上層の粘土を混じえた砂層であった。溝—83は幅45cm前後，深さ12～14cmを測る。溝—78から北では検出されず，溝—78との接合部分で幅を増していた。埋土の状況は溝—82と同様であった。溝—82とほぼ平行し，その距離は120cm程度を測った。溝—84も溝—82と平行し，その距離は200cm

前後であった。幅10～20cm，深さは4～7cmと小規模で，Gラインから6mのところで消滅していた。埋土は一層で，溝－82・83の下層と同じ砂層であった。溝－85は溝－79の西側だけに検出され，深さ2cm程度と浅く，前述のごとく溝としての機能はかなり疑問視される。埋土は溝－79と同様の暗灰褐色粘土である。溝－82～85はいずれも弥生時代後期の水田を埋めた砂層の上面に位置している。出土遺物は僅少であるが，溝－83と溝－85からは6世紀前半の須恵器片の出土をみていることから，その位置や埋土の状況の類似も合わせ，溝－82と溝－84についても同時期の遺構と考えられる。（岡本）



第644図　溝-86（1/30）

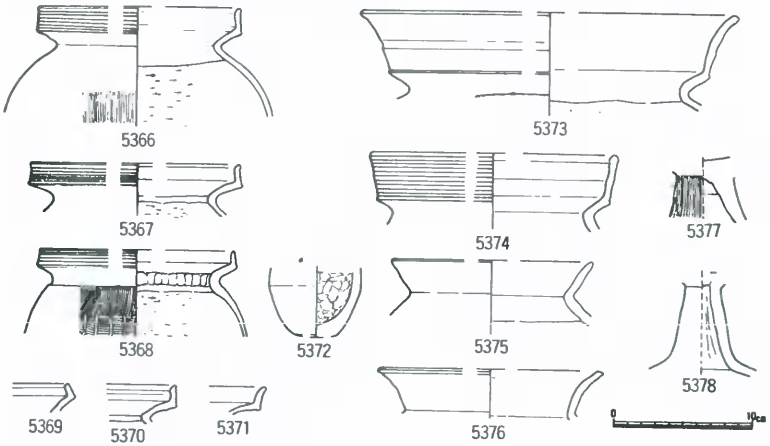
溝－86（第644図）

D～F-25の中央部を北東方向から南西方向へ貫流しており，高低差6cmを測る。幅100cm前後・深さ25～30cmの規模をほぼ保って，弥生時代後期末の水田を埋没させた洪水砂を削っている。埋積土は暗灰褐色粘質土であり，時期は同様の埋積土をもつ遺構に比定できる。

（光永）

（4）土器溜り　（第645図）

E-21・22にかけて幅約13m，深さ約18cmの浅い凹地が存在する。5世紀末～6世紀前半の須恵器を含む溝－79・80に挟まれた位置になり，凹地に堆積した黒灰色砂質土は溝－79によって切られている。5366～5378の土器は黒灰色砂質土中より出土したものであり，弥生時代後



第645図　土器溜り出土遺物

期末の水田埋没砂の上面に位置する。

時期は百・古・Ⅰに比定できる。　（高畑）

（5） 包含層出土遺物（第646・647図）

古墳時代の遺構とそれに伴う遺物については，すでに述べたとおりである。ところが，遺構に直接伴わない遺物の中にも注目すべきものが数多く存在する。とりわけ胴部外面に縄蓆文を残す土器については，朝鮮半島からの舶載品の可能性が放射化による胎土分析の結果（註1）等からも有力視されている。以下，この土器を中心に若干の説明を加えたい。

今回出土した縄蓆文を体部外面に残す土器は，そのほとんどが調査区西端（D-14・15～E-14・15）付近を中心に出土したものである。そして，その多くは，中・近世の溝等に混入していたが，中には堆積土中に包含されていたものも若干存在する。それらの出土層序は，第262図中（1）の3層から6層にかけてである。弥生時代後期末の洪水砂直上の6層には，5391・5395が包含されていた。これらの土器は，大きく硬質のものと軟質のものに分類できる。そして両者は，さらに胎土・焼成等の違いから細分が可能で，その結果複数個体の存在が予想される。

硬質のものは，5382～5393である。この中で5383～5391は，その胎土・焼成・色調からみておそらく同一個体で，5383がその口縁部である。口縁部と頸部を除いては，いずれの部分にも縄蓆文が遺存しているが，胴部下半と思われる5391については外面に大きな格子状の叩き痕が認められる。内面は，いずれも丁寧なナデにより調整される。胎土中には，微細な石英粒が多く含まれ，その他にも紫灰褐色を呈する粒と，微量ながら微細に破砕された貝殻粒の包含が散見される。5392と5393は，明らかに別個体である。5392には，外面に縄目叩文と横方向のナデにより施された2条の沈線文よりなる縄蓆文が認められる。内面は，不定方向の幅の狭いナデである。胎土は，細砂より成る。5393には，外面に比較的目の細かい縄目叩文と，目の大きい縄目叩文が共存する。

一方，軟質のものは，5396と5397の2点である。5396は，縄目叩文が大きく目で粗く，胎土も粗い。5397は，5396とは対照的で，縄目叩文自体細かく，緻密である。瓦質である。

胎土分析は，前述した硬質のもののうち5383と同一個体分について実施した。分析結果は，表35～46に掲載したとおりである。それによれば，同時に分析した寒風1・2号窯（註2）出土須恵器と比較した場合，その違いは歴然とし。反対に榊山古墳出土の陶質土器（註3）に酷似した結果を得ている。それは，特にV·Cr·Mn·Fe·Co等の在り方に顕著に窺える。

以上の事象から，分析した一群の土器は，朝鮮半島からの舶載品と推測される。

時期的には，他の供伴遺物が皆目存在しないこと等から断言はできないものの，5383の口縁部の在り方等からおよそ5世紀前半頃までの位置づけが推測される。

なお，この他にも舶載と考えられるものに5398の高杯脚部がある。それは，胎土中に紫灰

褐色粒を含み，さらにその類例が須恵器に認められず，朝鮮半島の東萊福泉洞古墳群(註４)のものに多く酷似すること等から，陶質土器と考える。時期は，５世紀前半頃と考える。(島崎)

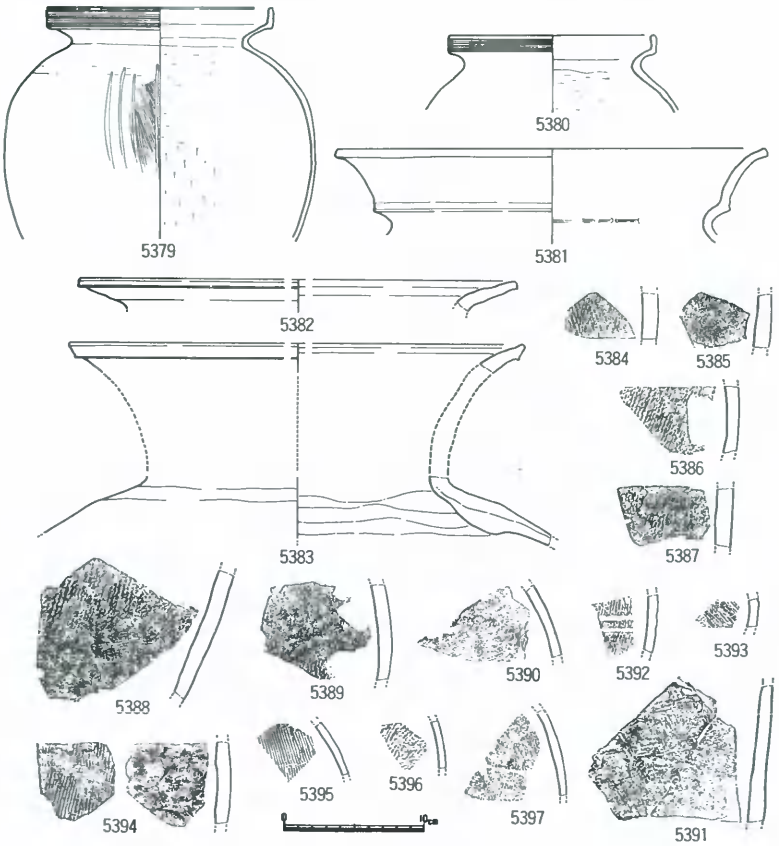
註

註１　(『古文化財に関する保存科学と人文自然科学』昭和57年度年次報告書) 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班1983. 3

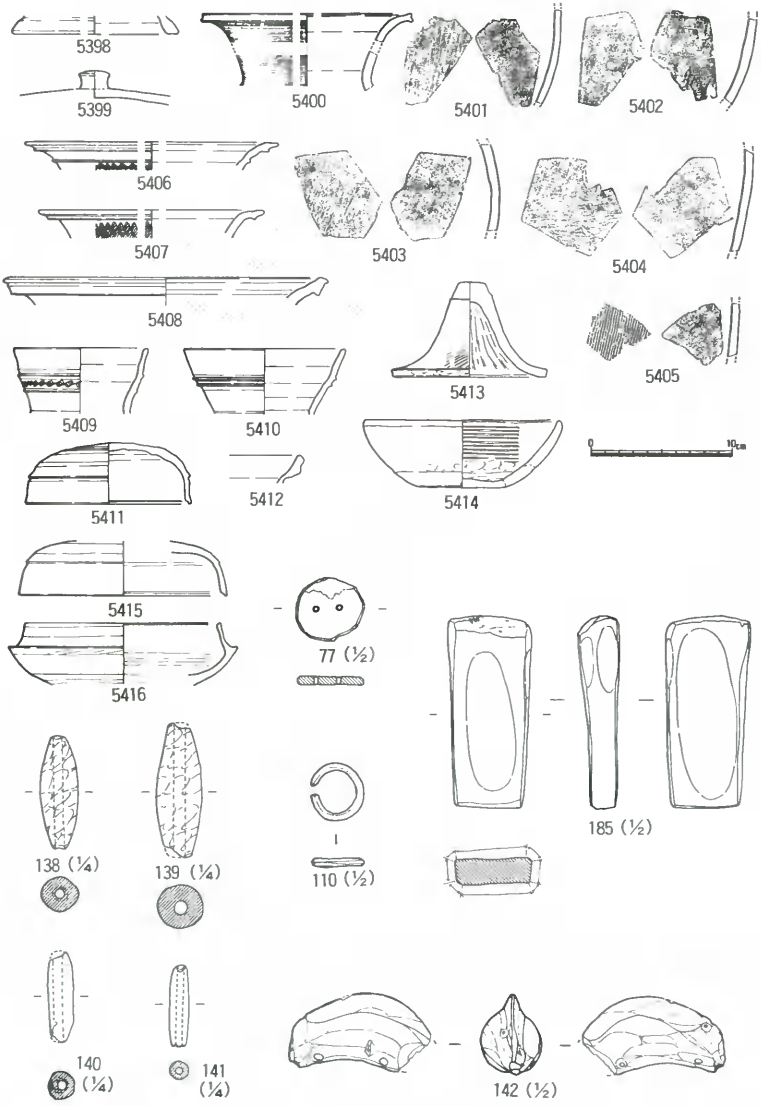
註２　吉備地方の６世紀後半から８世紀を代表する古窯で，邑久郡長船町から同牛窓町にかけて広範な分布を示す。

註３　島崎東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』第３号 岡山県史編纂室 1982. 3

註４　鄭澄元・申敬澈『東萊福泉洞古墳群・Ⅰ』釜山大学校博物館遺跡調査報告第５輯　釜山大学校博物館　1983。この中で高杯脚端部の分類がなされている。それによれば，**5398**はⅠB類に分類され５世紀中葉頃の位置づけがなされている。



第646図　包含層出土遺物（１）



第647図　包含層出土遺物（２）

6. 古代の遺構・遺物

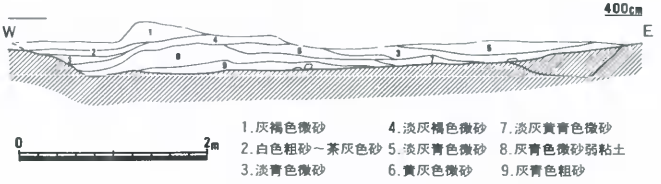
当調査区の主体は，古墳時代以前の遺構・遺物で，一部では中世に比定される集落の一画や河道も検出することができたが，古代すなわち奈良・平安時代に比定される遺構は極めて少なく，この時期に属する遺物の出土もまた，他の時代のそれに比べると微々たる量を数えるにすぎない。この理由については，後世の耕地拡大や灌漑のための地下げによるものと推定される。以下，この時代に比定される溝—87と包含層出土遺物について概略を述べておく。

（1） 溝

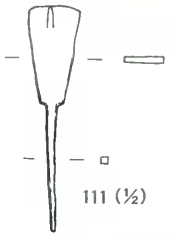
溝—87（第648・646図）

D-19の西隅からE-19の北辺西よりにかけて検出され，ほぼ南北方向を示す浅い溝状遺構で，竪穴式住居—42の東方約5mで，その一部の残存が確認された。第648図に示す東西（直交）土層断面図が，ほぼその位置の形状をよく示すもので，緩斜面の浅い凹部をなしている。上面は中世以降の開削によって，溝の肩部に至る形状を良好には残さないが，埋積土は粗砂・微砂が主体をなし，水に関わる溝様の施設として考えてよいと思われる。この地点には，後に近接する位置に溝—74や，竪穴式住居—42の東辺部を切る溝状遺構が掘開され，基本的な地割の方向と位置を踏襲されたということができる。一方，古墳時代においても溝—73が後の地割線の方向や水利施設の位置に少なからず影響を与えたとも考えられる。これらの遺構の南北線の方向は，ほぼN18°Eを示し，時期的に遡れば，弥生時代前期の河道やE-15を中心にひろがる水田遺構の基本的な方向に関連が認められる。これらの事実から，後の条里制の施行による地割の設定も歴史的な水利慣行を基本的に踏襲していることを示しているともいえよう。

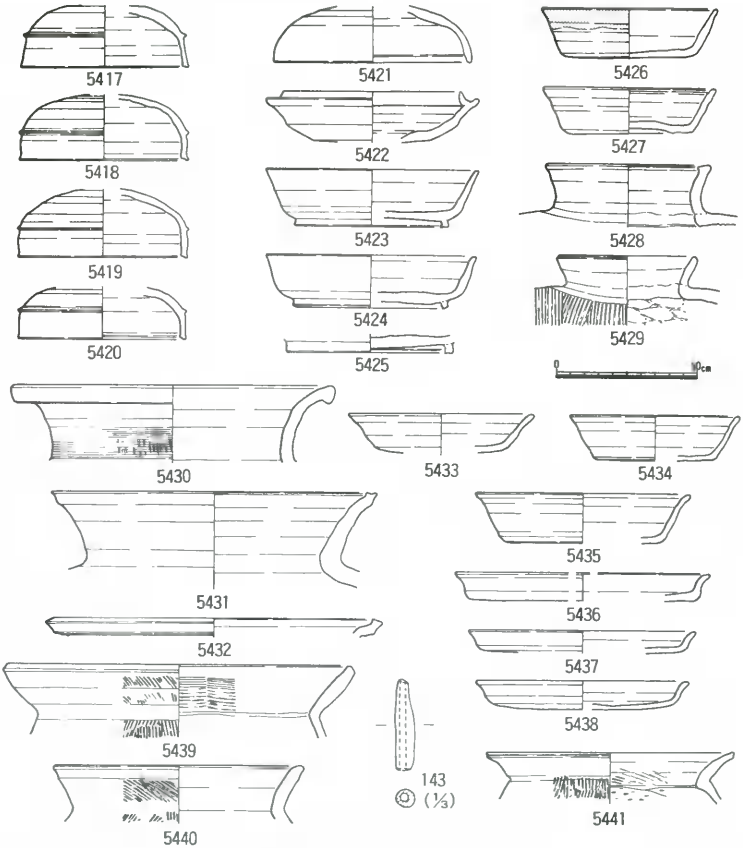
出土遺物には，第649図の111のように方頭斧箭式の鉄鏃や，土錘143の他，須恵器・土師器がみられるが，この溝状遺構の存続時期を示すものとしては，5423～5425の外底部に高台をもつ奈良時代の典型的な杯や，5436～5438の土師器皿などを上限とし，ヨコナデ調整痕を顕著に残し，ヘラオコシ後不調整の外底部を示す5426・5427などの須恵器杯の示す時期，すなわち平安時代前半期を下限として考えてよいだろう。共伴する出土遺物の中には，5417～



第648図　溝-87（1/60）



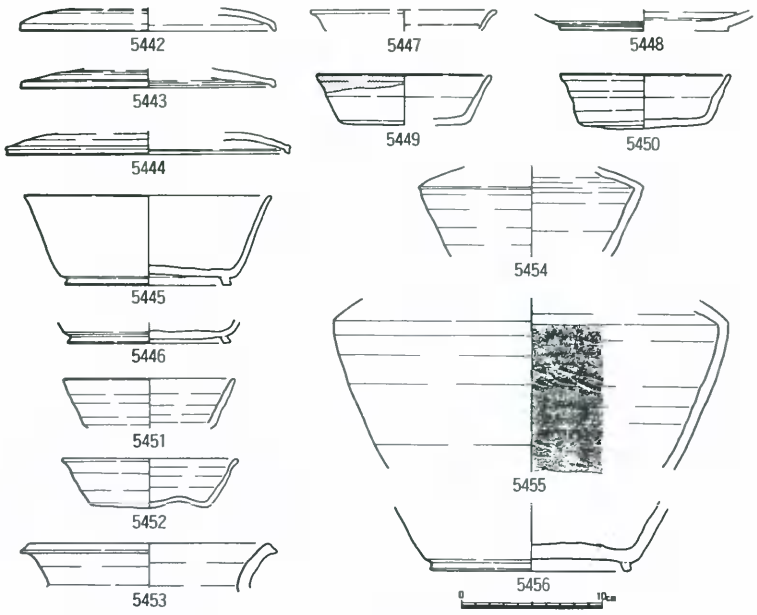
5420のように古墳時代の古式須恵器の蓋もみられ，いずれも天井部と体部の境界が凸帯状をなす点が特筆される。5421・5422は，ほぼ同一時期の蓋・杯のセットと考えられ，前述の古式須恵器と共に，大溝の存続時期に包括される時期を示している。そのほか，須恵器としては5428・5429の横瓶や5431・5432の甕，あるいは土師器の甕5439～5440など，日常生活用具としての土器が大半を占めているといえる。



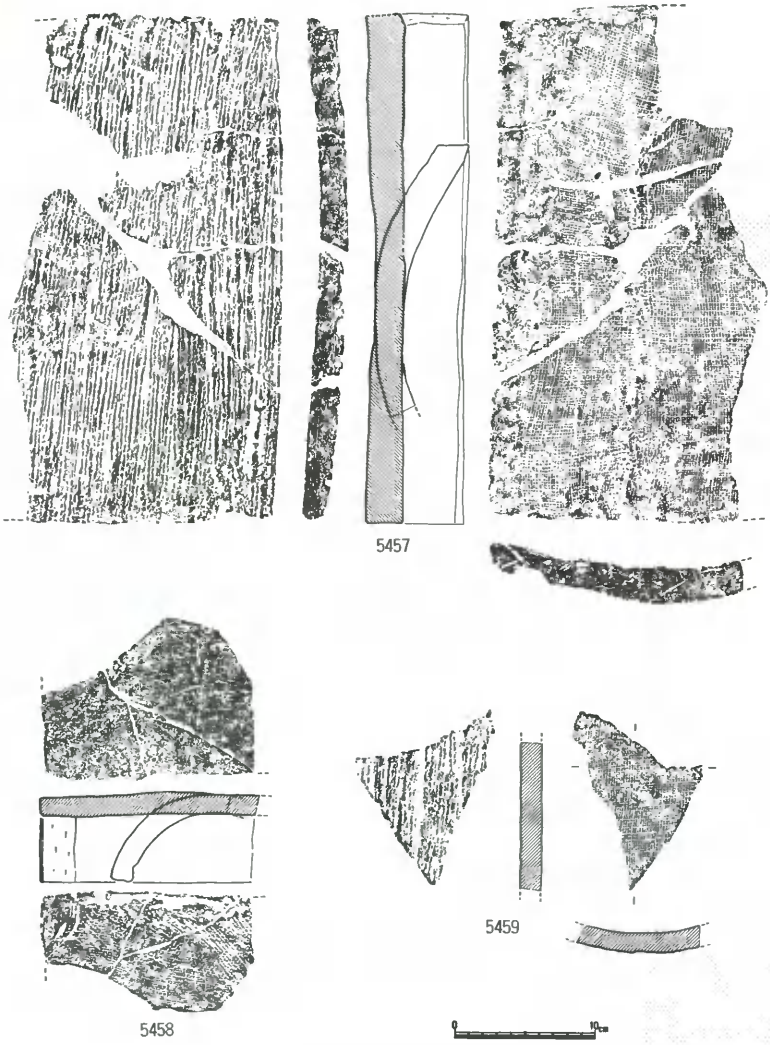
第649図　溝-87 出土遺物

（2） 包含層出土遺物（第650・651図）

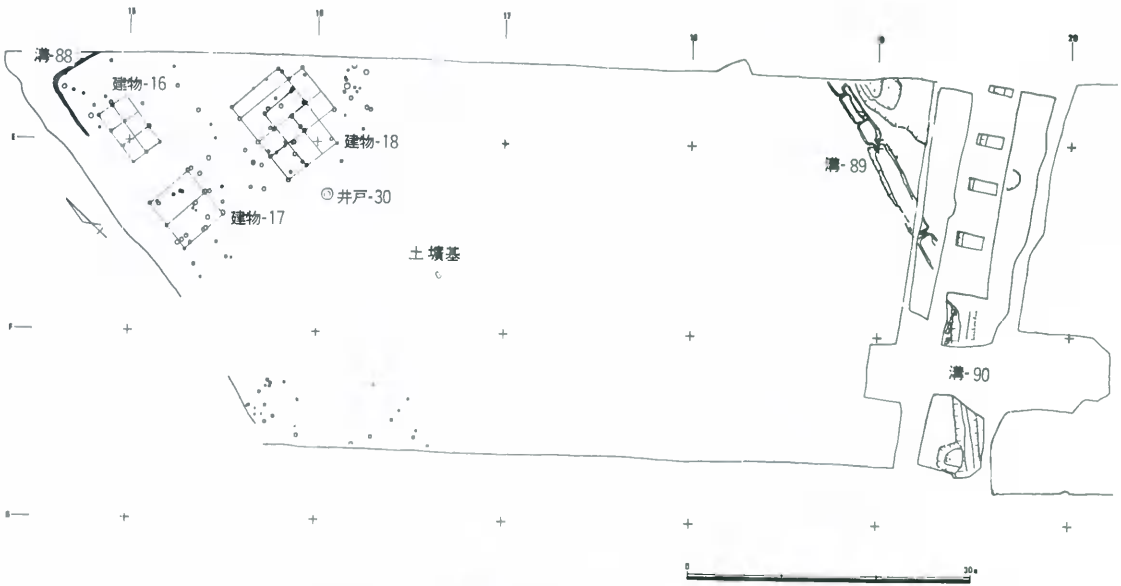
前項で述べたように，奈良～平安時代に比定される遺物の出土は極めて少ないが，溝―87の周辺や，E-18付近では比較的当該時期の遺物の出土をみた。いずれも微高地部分からの出土であるため，近代の水田耕土および包含層の表層部から出土し，破片も細片が多く第650図に示すものがその主なもので，須恵器が大半を占めている。5442～5444は蓋で退化した宝珠ツマミ部分は失われている。5445・5446はやや大型の杯で外底部に高台が貼り付けられる。5449・5450は外底部はヘラオコシ後不調整で，回転調整痕を体部に明瞭に残す杯で，溝―87からの出土例に類似する。5447・5448はいずれも緑釉陶器で，後者は釉がほとんど失われているが蛇の目高台をもつ椀と考えられるものである。5454～5456はいずれも長頸壺と考えられ体部上位は稜をなしている。これらの須恵器のほかに，細片ではあるが稜椀の破片もみられ，緑釉陶器と共に平安時代初期の時期的様相を顕著に示しているといえる。また，凸面に縄目叩きが施された平瓦5457・5459や丸瓦の破片も出土しており，D-8・9で検出された溝―25出土の軒丸瓦2129などとともに瓦の出土は特筆されよう。（岡田）



第650図　包含層出土遺物（1）



第651図　包含層出土遺物（2）



第652図　丸田調査区中世遺構配置図（1/600）

7. 中世の遺構・遺物

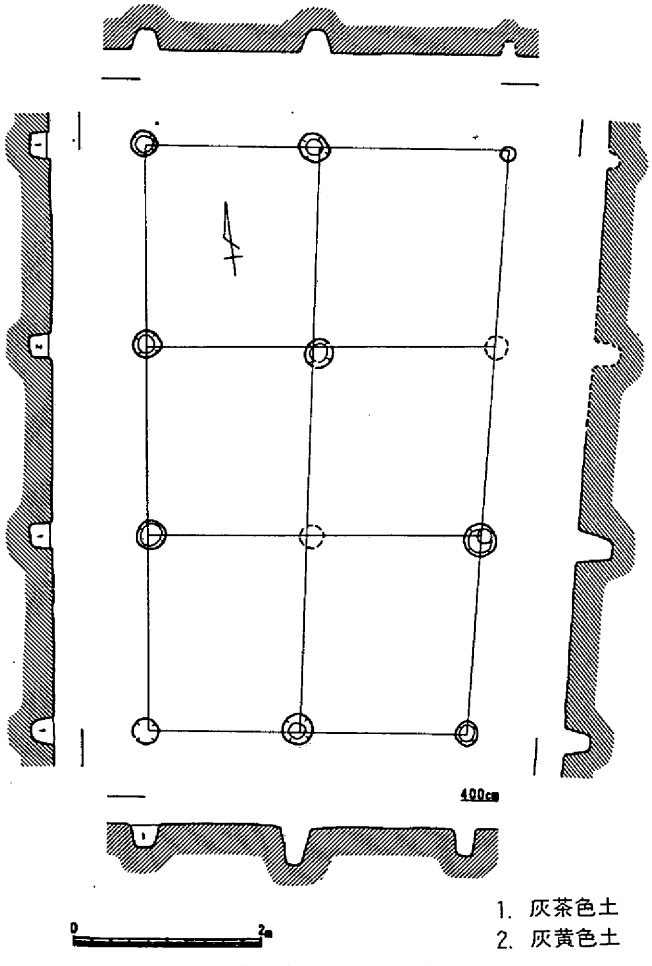
（1）建　　物

建　物—16（第653図）

中世河道の肩口から東5mの地点に検出できた建物である。その一部は，調査用の側溝によりとばされているが，桁行3間，梁間2間の総柱から成る掘立柱建物であることが判明した。

規模は，径20cm前後の柱穴を持ち，桁行620cm，梁間340～390cmを測り，若干北に広く，南に狭い梁の在り方を示している。建物の主軸は，N10°Eである。

時期は，遺物の出土をみなかったことから判然としない。しかし，周辺の諸遺構との有機的な関連から14世紀中頃から14世紀末頃までの中に位置付けが可能であろう。なお，この建物の北7mの所に，未調査域に伸びていく溝—88が存在する。これは，その方向と，ほぼ以下に述べる建物群を取り囲む様相が予想されることから，同時共存していたと考えられる。



第653図　建　物-16（1/80）

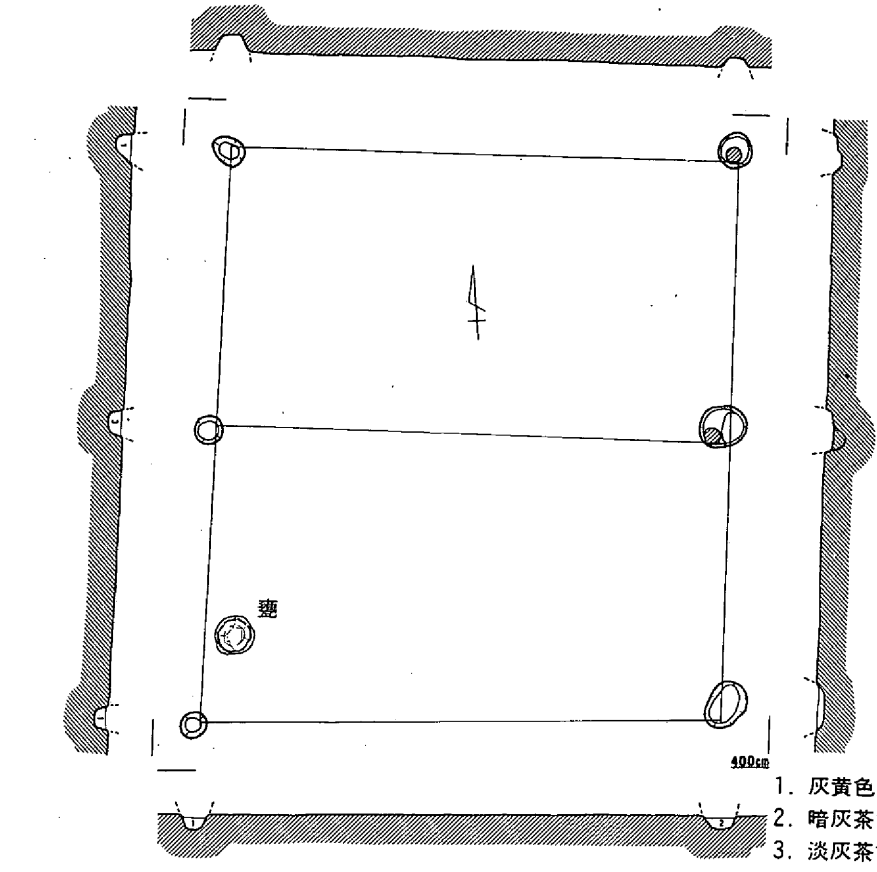
建　物—17（第654図）

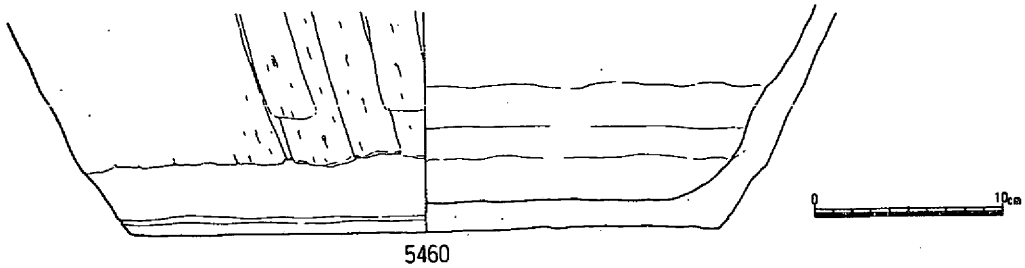
建物—16の南にほぼ直列して所在する。柱穴の規模と柱間に不均衡があるものの，西側柱穴列に接するかのように埋置されていた備前焼大甕の存在から，これを建物と断定した。規模は，桁行2間で約600cm，梁間1間で440～450cmを測る。建物の主軸は，N8°Eである。時期は，14世紀中頃から14世紀末までと考える。

建　物—18（第655図）

前述の建物—16・17にほぼ並列し，井戸—30の北に

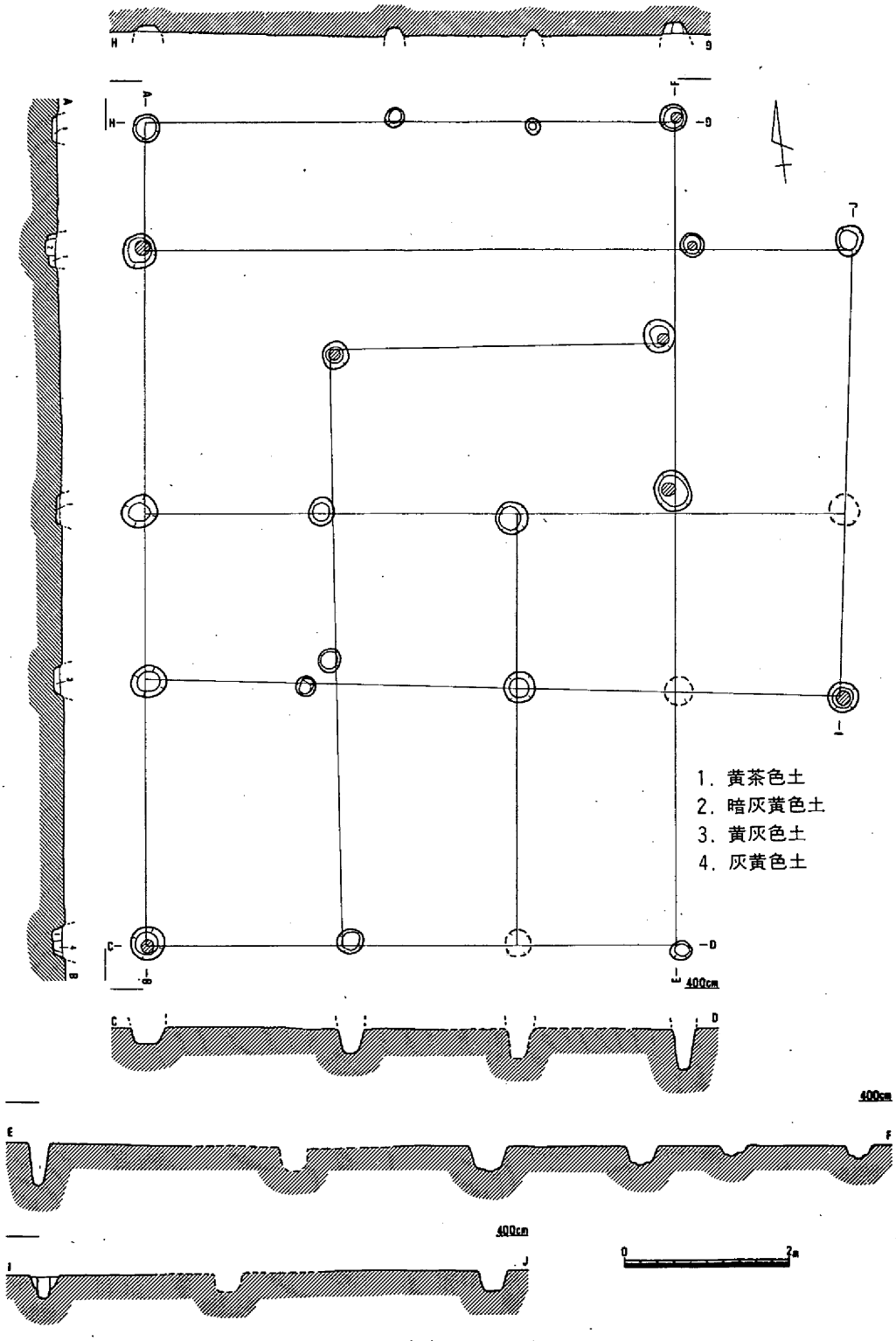
位置する建物である。柱穴の一部は，調査用の側溝により消滅し，判然としない。しかし，調査の結果から，建物に付属するものに関しては推測できた。建物としてまとまったものは，基本的には桁行４間，梁間３間のものである。建物の主軸は，N8°Eである。それに２間×１間の庇状の付属施設の存在がみられる。規模は，桁行1000cm，梁間640cmを測り，前二者を含めた中では最大規模を誇る。おそらくは，これら建物の配列状況から考えて，母屋に相当するものと推測する。時期は，14世紀中頃から14世紀末にかけてと考える。　　（島崎）





5460

第654図　建　物-17（1/80）・出土遺物



第655図　建　物-18（1/80）

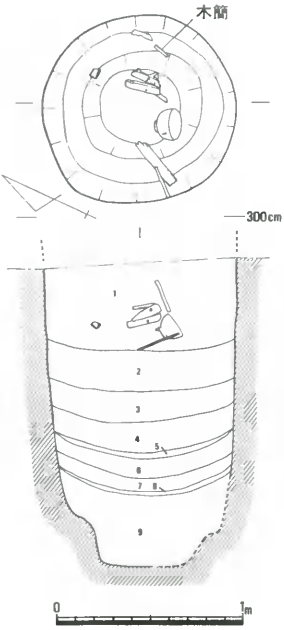
（2）井　　戸

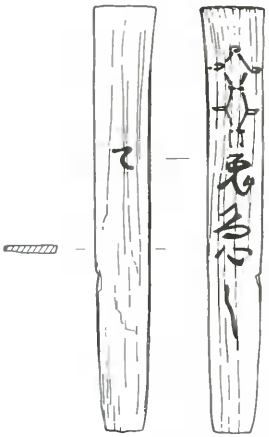
井　戸—30（第656・667図，図版16）

E-16の南で検出された径103cm，深さ160cm以上を測る円形素掘りの井戸である。検出レベルは海抜278cmで，弥生時代後期の水田検出作業時に本格的な掘り下げを行った。E-14～16の掘立柱建物や柱穴群と本来は同一遺構面を形成している井戸であるが，それらの調査時点ではグライ化した埋積土や，全く遺物の出土がみられなかったことから，近世から近代にかけて散見する「野ツボ」と誤認していた。よって，本来の深さはさらに約50cmほど深く，約200cmを測る極めて深い井戸であったことが推定される。この井戸の上部および井底にも井側・井筒・井桁等の構造物を全く残さない。井底は一段深く掘りこまれ，白灰色シルト層に達しており，それが当時の湧水層であったことを示しているものと思われる。1層は有機質の青色粘質土層で，第656図のように豊富な木質遺体が残存しており，木簡・漆塗椀・下駄・板材などの木製品や青磁碗，備前焼の擂鉢片あるいは食用に供したと思われるアカニナなどが出土している。6層と7層の境界面は，植物遺体集積面をなし，木葉などが堆積し，井戸の廃絶が始まった初期の段階といえる。また，足駄・鉄釘112・漆塗椀などが6層から集中的に出土している。最下層である9層は，井戸の使用時期の埋積層で火を受けて黒っぽい赤色を呈する一人持ち大の花崗岩の平石や備前焼大甕口縁部片や擂鉢片・土鍋片が出土している。これらの出土遺物からみると井戸の推定時期は青磁雷文帯蓮弁文碗や備前焼などから14世紀の中頃から後半にかけて存続したものと推定される。

出土遺物の中でも，とりわけ注目されるのは木簡である。第656図のように，井戸のやや東側によった部分から立位で出土したものである。出土時には墨書文字が比較的よく観察されたが，次第に木質が黒変し墨書文字の判読も困難となっている。ヒノキの柾目材を用いた短冊形の薄い板を用い，長さ15.1cm，厚さ0.3cm，上端幅2.2cm，下端幅1.25cmを測る形態を示し，表には菱形を2つ連ねその頂部，隅には「ロ」字状の加筆が認められる。そして以下，文字は「鬼急」の2字が判読され，呪句の全文を構成する「々如律令」は省略されているとみてよい。裏面には「乙」様の文字が一字みえる（註2）。墨書文字からこの木簡は，いわゆる呪符木簡と考えられ，中世の「物忌札」と推定されるものである。しかし，従来出土している物忌札の多くは，上端が圭頭で，下端が尖ったものが多いが，本例はその形状が異なっており，注目される（註3）。

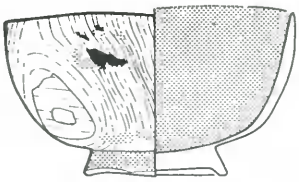
また，粘土層から良好な状態で出土した足駄・下駄はいずれも対をなしてはいないが，当時の生活の一端をうかがうことのできる貴重な資料である。前者の鼻緒孔には藁状の植物繊維の鼻緒が遺存していた。本来足駄には「いちょう歯」と呼ばれる高い歯がつき「高足駄」ともいわれ，水仕事に使ったりする場合や，「餓鬼草紙」には用（排）便に用いられている光景も描



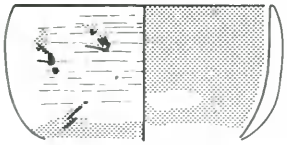


50　(½)

1. 暗青色粘質土（植物遺体含む）
2. 青灰色粘質土
3. 淡黄灰色粘質土
4. 黒灰色粘質土
5. 青色粘質土
6. 灰褐色粘質土（下端は植物遺体堆積）
7. 暗灰褐色粘質土
8. 黒灰色粘質土
9. 暗灰色粘質土



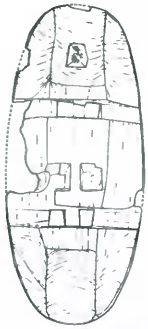
51　(⅓)



52　(⅓)

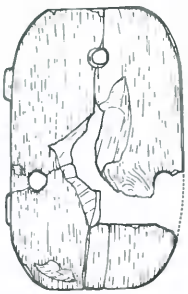
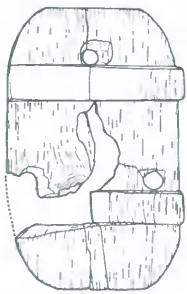
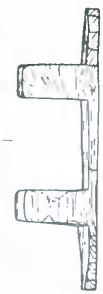
第656図　井　戸-30（1/30）・出土遺物（1）

112 (½)



53 (¼)

144 (½)




54 (¼)

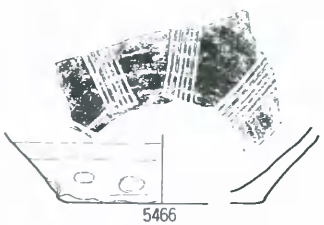
5461

5463

5464

5465

5462


5466

第657図　井　戸-30 出土遺物（２）

かれ，中世の日常生活に欠かせぬ履き物であったことがわかる。一方下駄は歯がかなり磨り減っており，長く使用されたことを物語っている。鼻緒孔の位置は，わずかに右によっており左足に使われたものと推察される。また，粘土が堆積しているために極めて良好に出土した漆塗椀は，挽物製作技術や漆塗技法の解明に重要な知見を提供したといえる。さらに板材（ヒノキ）や藁状植物繊維も出土している。この井戸は当時の生活の場の一画に掘られた井戸であるが，地下水脈の変動によって枯渇したため，急速にその機能を失ってゴミ棄て場のごとく忘れ去られていく過程で，周辺から日常生活用具の流入埋没が起こったことがわかる。しかし，前述の呪符木簡の出土については，井戸に対する祭祀ではなく，近接する集落内での流行病などが発生した際に使用されたものとみるべきであろう。

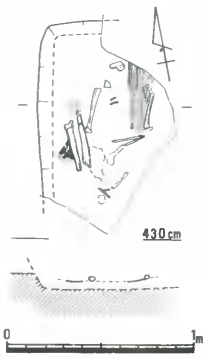
明代に中国から輸入された青磁として雷文帯蓮弁文碗 **5461** が出土しているが，百間川遺跡群の中では類例がなく，県内でも他に3例を数えるにすぎない（註4）。また，備前焼の出土は当然ではあるが，甕片の中には明らかに常滑焼の破片がみられ，当時の古窯生産品の流通の広さを示唆している。

（3）土　壙　墓（第658図）

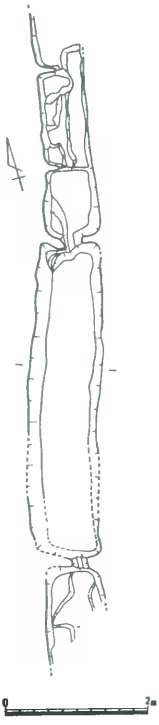
E-16の南東部で検出された土壙墓で上面では，平面形が良好に観察されず，歯牙片，人骨の出土によって図に掲げるような長辺110数cm，短辺70数cm以上を測る長方形を呈する埋葬遺構が確認された。埋積土は淡灰褐色粘質土で図に掲げる土師器皿が出土している。

人骨は歯牙片のほか，脛骨や上腕骨と思われる長目の骨が出土しているが風化が甚だしく詳細な部位や，性別等は不明である。埋葬壙底面は緩やかなくぼみをなし，板状の木質繊維が長軸方向の木目を示して遺存している。これは，木棺の痕跡というよりは底板を敷いた残痕と考えるのが妥当であろう。この例に極めて類似した中世土壙墓に上房郡北房町所在の備中平遺跡で検出したものがある（註5）が，やはり長辺106cm，短辺70cmを測り，壙底に棺材を残し，出土遺物には4枚の土師器小皿が出土している。

規模からするといずれも，成人が屈葬に近い葬法で埋葬されたと推定される。しかし，小児の埋葬が行われた可能性も十分に考えられる。（岡田）



第658図　土壙墓（1/30）・出土遺物



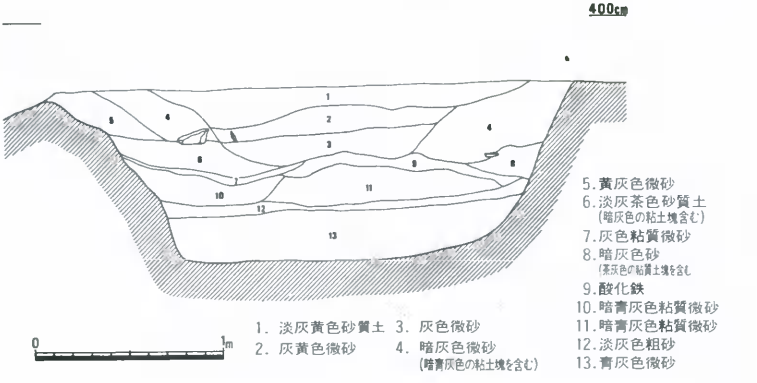
（4） 溝

溝－88（第652図）

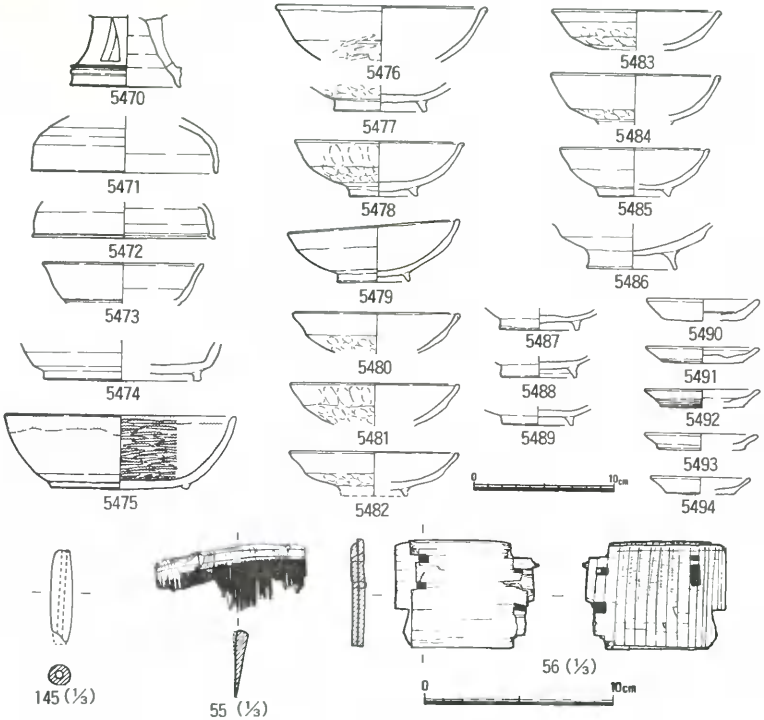
D-14東南隅に検出された溝で，建物－16・17・18等に並行した状況を示す。溝の埋土中からは，遺物の出土はみられなかった。しかし，建物群を区画する溝として差支えないものと考える。

溝－89（第659・660図）

D-18からE-19にかけてほぼ南北に検出された遺構である。遺構は，一応溝状を呈するものの，所々に合計5か所に及ぶ間仕切り状の土手が認められた。この間仕切り状の土手は，溝の両肩口から約50～70cm程の土手が伸び，中央に幅20～30cm規模の排水路をあけるものである。間仕切り間の距離は，北から140cm，110cm，450cmと，その距離に均等性は認められない。ところが，これを溝底の海抜でみた場合，次の事象が認められる。すなわち，間仕切りと間仕切りの間の底の海抜は，北から278cm，283cm，272cm，270cm，288cmを測る。次に，間仕切り部中央にあけられた溝の海抜は，279cm，280cm，283cm，300cmを測る。これは，北上流から南へと流れてきた溝が，その間仕切り単位で若干の保水を行いながら下流へと流路を続けることを示すものである。その際，最も深くて保水量の多いのが図中央部にみられるものであ



第659図　溝－89（1/80・1/30）

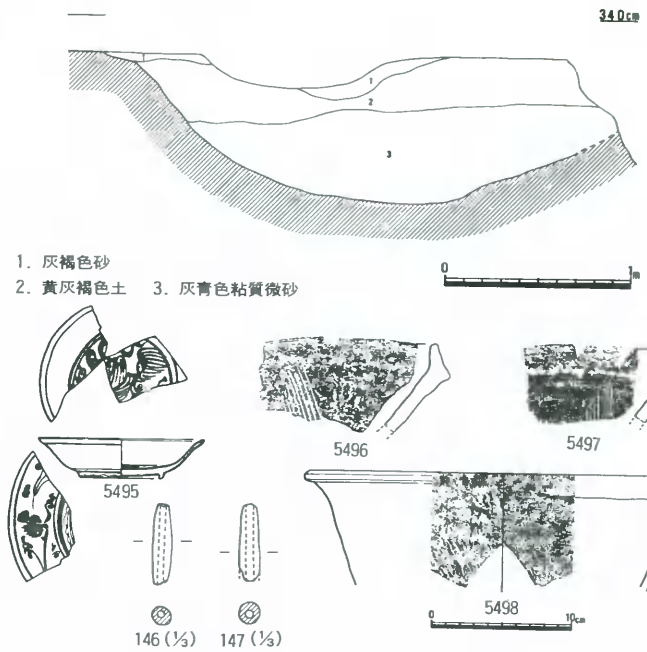


第660図　溝-89 出土遺物

る。残念ながらその下流域については，調査が十分でなかったため判然としない。おそらくは，溝—90に合流し，さらに南流を続けるものと考える。検出したこの溝の断面は，その部分により差はあるものの，中央部のそれは逆台形を呈する。時期は，若干古い須恵器等の混入があるものの，最も新しい土師質椀の型式から14世紀末頃にその下限が考えられる。

溝—90（第661図）

D-19からF-19にかけて部分的に確認された溝である。ところが，溝の流路のほとんどは，最近まで市道として機能していた道路に重複していた。そのため調査区域には，水道管・電話線ケーブル，さらには道路の路肩を強固にするコンクリート等の埋設箇所が数多く存在し，調査を困難なものにした。したがって当該地区調査は，トレンチ方式によるものに甘んじた。その結果道路東のコンクリート壁に並行して幅200cm以上の溝が1本検出できた。溝は，前述の溝—89が南北に伸びた流路を形成していたのに対して，ほぼ弧状の流路を形成していた。そし



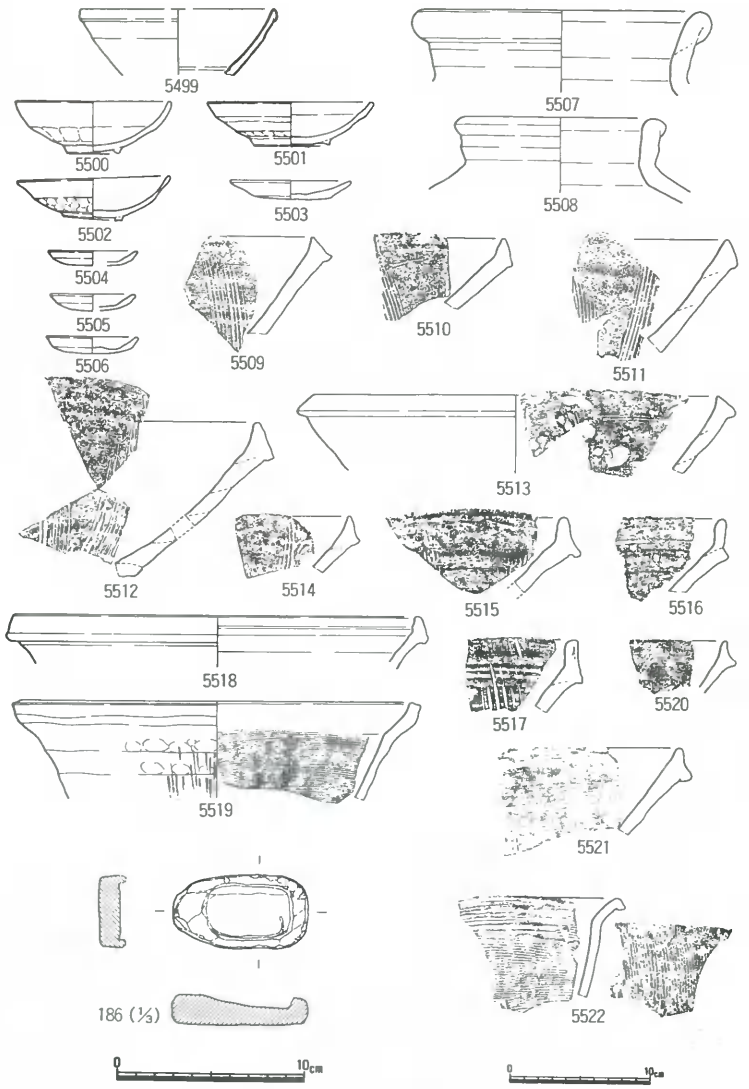
第661図　溝-90 (1/30)・出土遺物

てその下流部右岸には，小規模な入り江状のものがつくられ，そこには5～6本の割り杭の打ち込みが認められた。その性格については不明である。溝の時期は，出土した輸入染付小皿・備前焼擂鉢等から15世紀頃が考えられる。

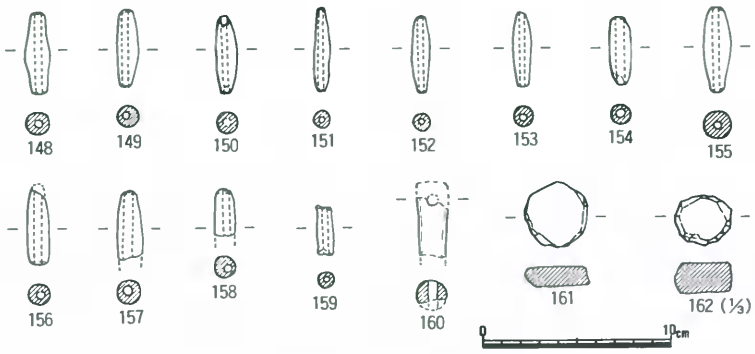
(5) 包含層出土遺物 (第662・663図)

中世の遺物包含層は，後世の微高地上面削平に伴いすでに面的には存在しない。わずかに建物・井戸・墓・溝等の遺存部分が認められたにすぎない。それは，調査区の西側によく残っていたが，いずれも中世の生活面より若干下ったレベルでの検出による。したがって，中世の土器が包含された層としては，わずかに調査区西端の中世旧河道に認められる程度である。その他の遺物は，近世以降の溝に混入したものである。

5499は白磁，5500～5502は土師質椀，5503～5506は土師質小皿，5507～5517は備前焼，5518は魚住焼，5519・5522は土師鍋，5521は亀山焼の擂鉢である。硯186は，石鍋の破片を利用してつくられたものである。　(島崎)



第662図　包含層出土遺物（１）



第663図　包含層出土遺物（２）

8. 近世，近・現代の遺構・遺物

丸田調査区には近世，近・現代の南北，東西溝が整然と走り，とりわけ東部に集中しており総数30本を数える。東西溝が多く，南北溝は条里の坪境付近に集中する傾向が認められる。南北溝はD-19を上流側としてF-20付近に向って南流する溝，D-26付近を上流として南流する溝の２か所が存在する。その間に挟まれた東西溝がほぼ等間隔をおいて西流する。

（１） 溝

溝－91（第665図）

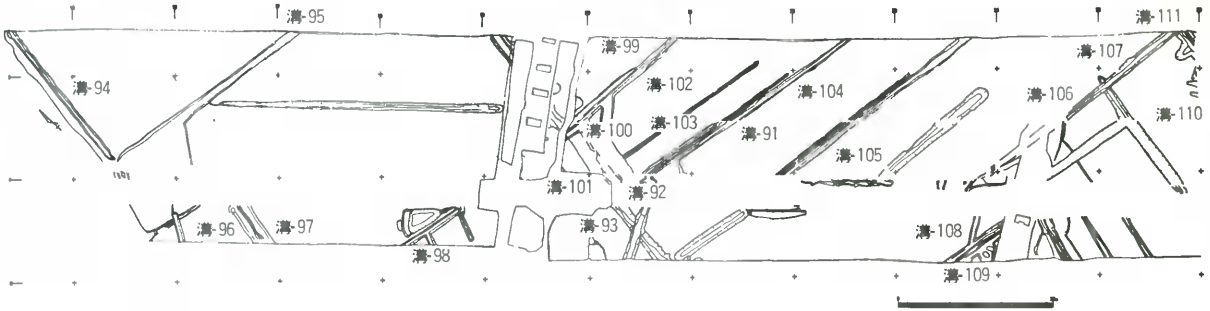
D-22・23間よりF-20・21間に向かい西流する東西溝である。溝－103と接近，並行して走り，溝幅約100cm，端部幅約30cm，深さ45cmを測る。断面形は階段状の台形にて，土層は自然堆積状況を呈している。８層の下位に鉄分の薄い層を持ち，灰色粘土５層中には遺物を含む。5523は淡赤褐色に発色した備前焼の擂鉢であり，時期は江戸時代初頭に比定できるものである。5524は白磁鉢であり，外面に唐草文，内面口縁部に雷文が一巡している。

溝－92（第665図）

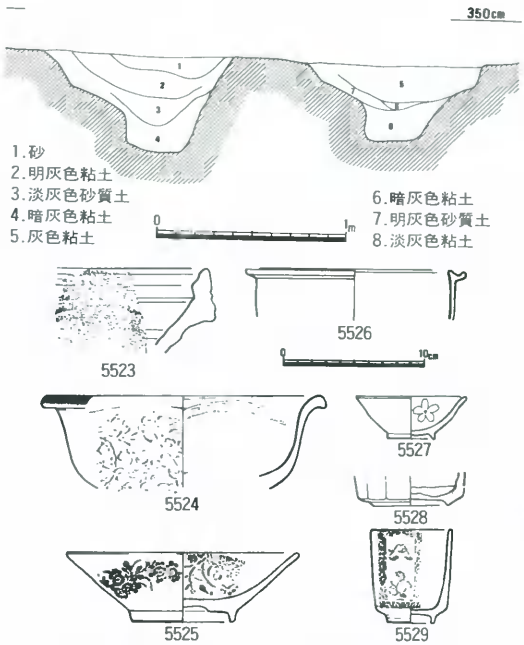
E-20の西南部に位置し，南流する溝である。他の溝を抜きんでる大型であり，上端部幅は320cm，下端部幅100cm，深さ110cmを測る。溝内の堆積土は砂質土と粘土の互層により形成されており，最終的に１層の溝が機能していたようである。ここより5525～5529の遺物が出土しており，5526は軟質の陶器であり，他は磁器である。

溝－93（第666図）

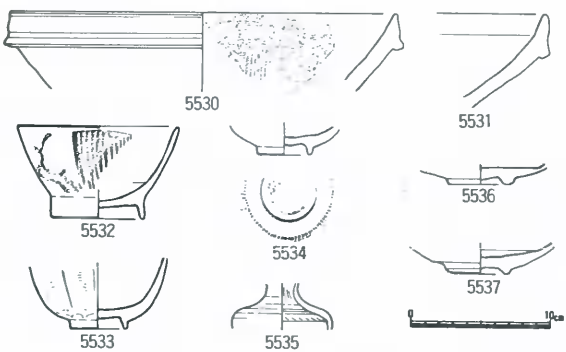
D-19北西部よりF-20南東端に延び，南流する溝である。溝－92の西側に並行して走り，



第664図　丸田調査区近世～現代遺構配置図（1/1100）



第665図　溝-91・92（1/30）・出土遺物



第666図　溝-93 出土遺物

溝の上端部幅230cm，下端部幅50cm，深さ50cmを測る。堆積土は砂質土と粘土の互層より形成されており，各層に遺物が含まれ，室町時代から近代までの幅が考えられる。

5530・5531・5535が備前焼であり，擂鉢には7～8本のカキ目が認められる。5532～5534は陶器であり，5534の見込み部分には「寿」が描かれている。5536・5537は「唐津」である。　（高畑）

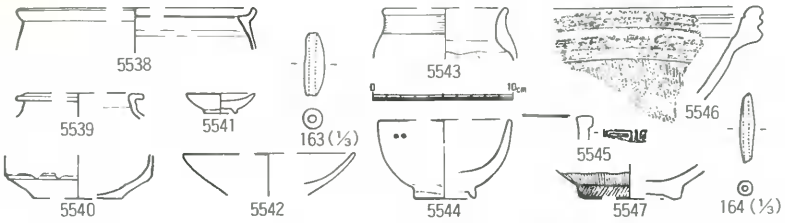
（2）　包含層出土遺物

（第667図）

本調査区は，その上面のほとんどが削平を受け，近世の包含層としての存在は認められなかった。出土した遺物のほとんどは，現代の用水路等に混入していたものである。

第667図に示した出土遺物には，備前焼擂鉢5546をはじめ，伊万里5541～5542，雷文の押印された瓦質土器5545，

中世の白磁 5547 等が認められた。しかし，いずれも小片で，完存しない。　　（島崎）



第667図　包含層出土遺物

註

註１　確認調査では試掘範囲が２ｍ四方と小範囲であるため，微高地と「島状高まり」遺構の判別が不可能であった。このため土器溜り遺構の一部が検出されたが，概報においては溝の斜面堆積の土器群として報告されたものである。報告された写真は「島状高まり」遺構－１の南端部分にあたる。葛原克人他『百間川遺跡第一次調査概報』岡山県教育委員会　1977

註２　墨書文字の釈読にあたっては，奈良大学教授水野正好氏のご教示を得た。また，赤外線写真撮影ならびに釈文の検討については，草戸千軒町遺跡調査研究所松下正司所長，志田原重人氏のご指導を得た。さらに，下駄・足駄の化学的処理については同篠原芳秀氏の懇切なご指導を得た。以上録して深謝の意を表する次第である。

本木簡は 1981年出土木簡として『木簡研究』第４号（木簡学会 1982．11）に紹介，収録したものである。

註３　和田萃「呪符木簡の系譜」『木簡研究』第４号　木簡学会　1982．11

註４　県南部では浅口郡鴨方町所在の和田遺跡，沖の店遺跡（伊藤晃他「和田遺跡の調査」・「沖の店遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　岡山県教育委員会　1981．３）県北部では上房郡北房町所在の植木遺跡（田仲満雄「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976．３）で各１点ずつ出土しているが，いずれも口縁部の小片である。

註５　井上弘他「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976，３

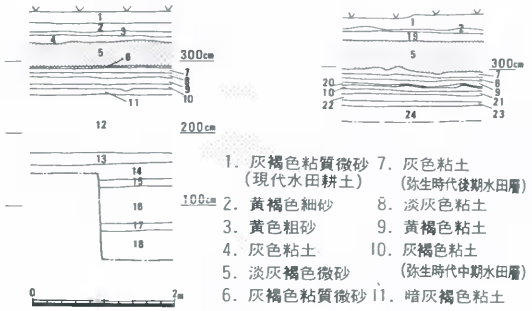
第3節　川内調査区

1．　川内調査区の概要

発掘調査区は土手樋門地区，土手樋門導入水路地区，中央低水路地区からなり総面積は約7200㎡である。

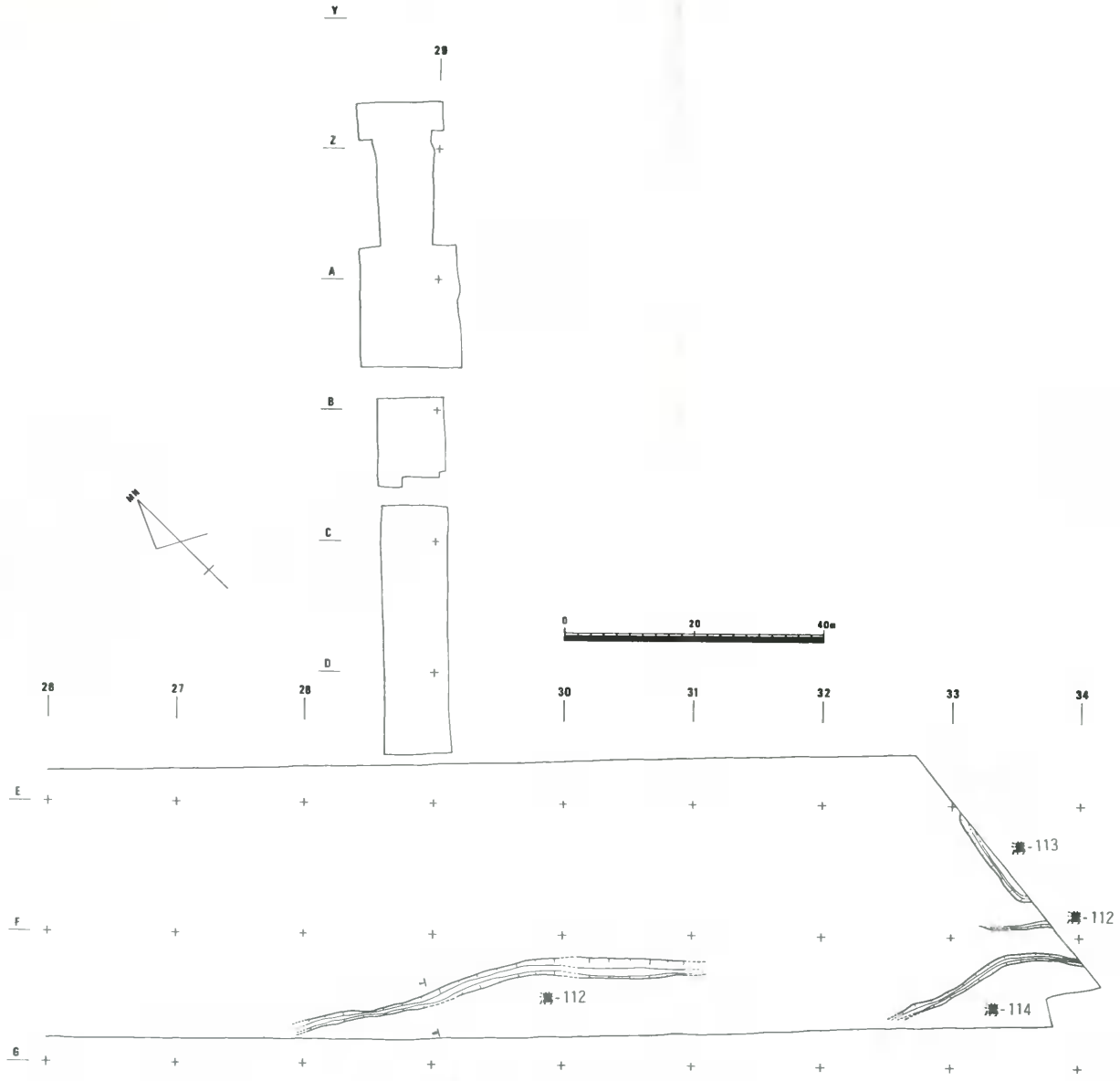
川内調査区の基本層序については第668図に示したとおりである。図の1～3層は現代水田の耕土・床土である。4・19層は古墳時代以降の遺物をおもに包含している。5・6層は弥生時代後期末の洪水によって堆積したものと考えられる砂層である。7層はこの洪水砂によって埋没した水田層である。この水田層の時期は弥生時代後期と考えられる。20層は調査区全域に認められるものではないが，この層が存在する部分は全体的にみれば低位部にあたるものと考えられる。10層は水田層と考えられる。この水田層の広がりについては必ずしも明確ではないが当調査区のほぼ全域に広がるものと考えられる。ただしこの水田層の畦畔と考えられるものは20層が存在する地区では検出できるもののそれ以外では検出することはできなかった。この水田層の時期は弥生時代中期であると考えられる。11・22層には弥生時代前期の遺物が包含されている。なお当調査区からは縄文時代晩期と考えられる土器片も数点出土している。

当調査区において検出された遺構としては弥生時代前期と考えられるものとして，溝3本，弥生時代中期と考えられるものとして，溝3本および水田，弥生時代後期と考えられるものとして土壙1基・溝27本・土壙状遺構・柱穴状遺構および水田がある。古墳時代～近代の遺構としては溝・落ち込みなどがある。当調査区において出土した土器などの遺物はコンテナ（54×34×15cm）で約25箱を数えるにすぎない。



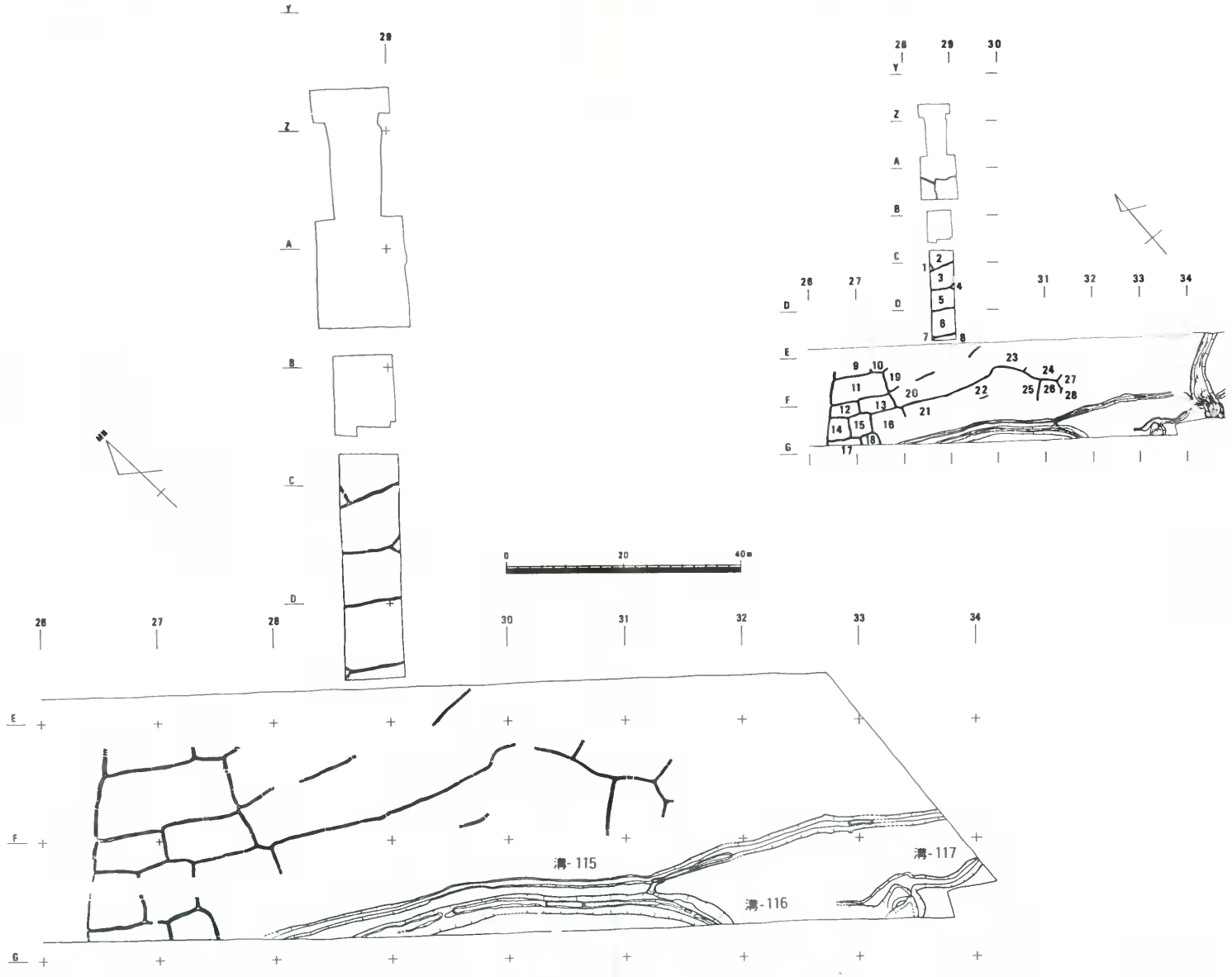
1．灰褐色粘質微砂（現代水田耕土）
2．黄褐色細砂
3．黄色粗砂
4．灰色粘土
5．淡灰褐色微砂
6．灰褐色粘質微砂
7．灰色粘土（弥生時代後期水田層）
8．淡灰色粘土
9．黄褐色粘土
10．灰褐色粘土（弥生時代中期水田層）
11．暗灰褐色粘土
12．青緑灰色粘土
13．暗灰色粘土
14．黄褐色粘土
15．灰色粘土
16．黄褐色粘土
17．灰色粘土
18．青灰色細砂
19．黒褐色粘質微砂
20．暗灰褐色土
21．灰黄褐色粘質土
22．黒褐色粘質土
23．灰褐色粘質土
24．褐色斑暗灰色粘質土

第668図　川内調査区　土層断面（1/80）



第669図　川内調査区　弥生時代前期遺構配置図（1/800）

折込3



折込 4

第670図　川内調査区　弥生時代中期遺構配置図（1/800）

2．　弥生時代前期の遺構・遺物

弥生時代前期と考えられる遺構としては溝が3本検出されているにすぎない。しかも，これらの溝からは遺物がほとんど出土しておらず，時期決定については土層関係および切り合い関係を参考にしており，必ずしも明確ではない。

溝—112・114がほぼ東西方向に走る溝であるのに対し，溝—113は南北方向である。ただしこの溝—113は検出範囲がわずかであり，また三ノ坪調査区において続きが検出されていないため溝とは考えられないかも知れない。

（1）　溝

溝—112（第669・672図）

F-28～30およびE-33において検出された北西—南東方面に走る溝である。この溝と一部重複して溝—115が走っており全体は明らかでない。検出できた溝の幅は180～260cm，深さは一定ではないが，検出面より30cm前後を測る。溝内には灰色～暗灰色粘土が堆積している。断面形は基本的には皿状を呈し，底面には凹凸がみられる。底面は海抜約195～230cmである。流走方向は必ずしも明確ではないが，ほぼ北西方向に流れていたものと考えられる。時期については明確にし得ないが，第672・673図に示したように溝—115に切られていることから弥生時代前期と考えておきたい。ただし，弥生時代中期まで下る可能性もある。

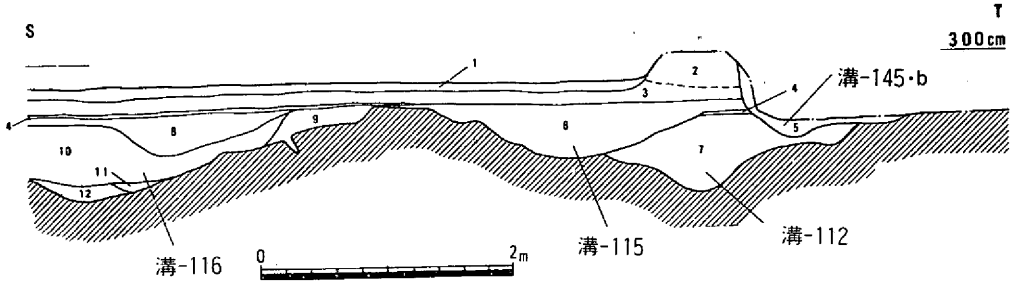
(½)

187

第671図 溝-112 出土遺物

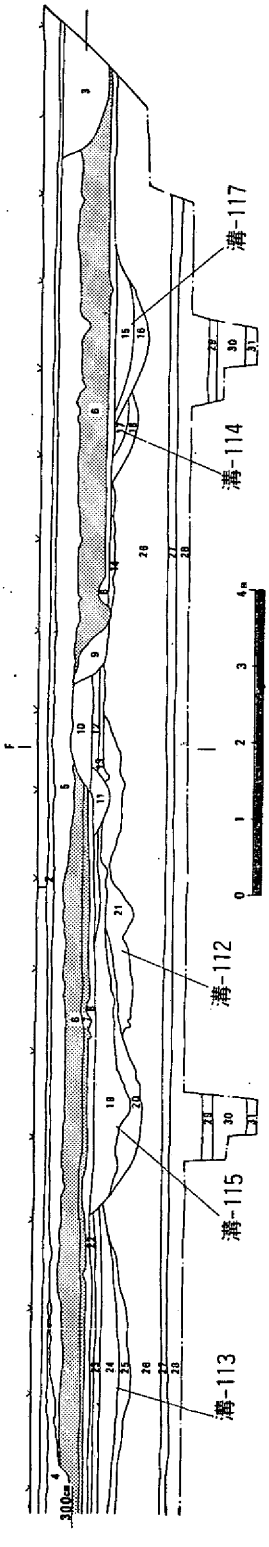
溝—113（第669・673図）

E-33の東端において検出された溝状遺構で，全体を検出できなかったため詳細は明らかで



1．灰色粘土（水田層）
2．黄褐色土
3．青灰色粘質土
4．灰色粘土
5．青灰色粘土
6．青灰色細砂
7．暗青灰色粘土
8．淡青灰色粘土
9．青灰色粘土
10．青灰色細砂まじり粘土
11．青灰色粗砂
12．暗灰色粘土

第672図　溝-112・116・117　断面（1/60）



1. 現代水田耕作土
2. 現代水田床土
3. 灰褐色粗砂
4. 灰白色粘土
5. 灰色粘土
6. 淡黄灰褐色微砂(洪水砂)
7. 黄灰褐色粘質微砂(〃)
8. 灰色粘土(弥生時代後期水田層)
9. 灰色微砂まじり粘土
10. 黄灰褐色微砂
11. 灰色粘質土
12. 淡灰褐色粘質微砂
13. 黄灰褐色微砂
14. 灰白色粘土
15. 淡青灰色細砂まじり粘土
16. 青灰色粗砂
17. 黄褐色細砂
18. 青灰色粘土まじり細砂
19. 黄褐色粘土
20. 青灰色粘土まじり粗砂
21. 青灰色粘土
22. 淡灰色粘土
23. 淡黄褐色粘土
24. 黄灰褐色粘土
25. 灰色細砂まじり粘土
26. 青灰褐色粘土
27. 暗灰色粘土
28. 淡黄褐色粘土
29. 暗灰色粘土
30. 黄灰色粘土
31. 灰色粘土

第673図　E・F—33～F-34　東壁断面（1/100）

はない。三ノ坪調査区においてはこれに続くと考えられる遺構が検出されていないため，溝とは考えられないかもしれない。

長さおよび幅については不明で，深さは検出面より50cm前後を測る。底面は海抜約225cm前後である。

時期については出土遺物がほとんどないため明らかではないが，第673図に示したように溝—115によって切られていることから弥生時代前期であると考えておきたい。

溝—114（第669・673図）

F-32・33において検出された溝である。検出した溝の幅は100～160cmで，深さは検出面より25～30cm前後を測る。断面形は皿状を呈する。底面は海抜約208～233cmで，北西方向に流れるものと考えられる。

時期については弥生時代前期の土器片が少量出土しており，また第673図に示したように溝—117によって切られていることから，溝—112・113と同じく弥生時代前期であると考えておきたい。また，この溝の続きが三ノ坪調査区において検出されており，ここでは百・前・Ⅲの古相の土器が出土している。

3．弥生時代中期の遺構・遺物

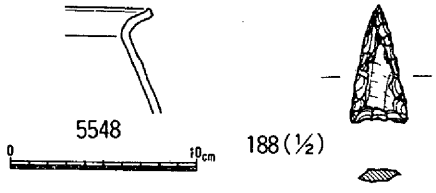
溝が3本と水田が検出された。溝は基本的には東西方向に走ると考えられ，溝—115・117は三ノ坪調査区に続いている。水田の畦畔は土手樋門導入水路地区および中央低水路地区において検出された。これらの溝と水田との関係についてはほぼ共存していたものと考えておきたい。

（1）溝

溝—115（第670・672～674図）

F-28～32およびE-32・33において検出されたほぼ北西—南東方向の溝である。検出した溝の幅は80～310cmで，深さも一定ではなく検出面より40～50cmのところが多い。断面形はほぼ皿状を呈するが途中に段をもつ部分も多い。底面は一定ではなく凹凸があり，31ラインより東側では底面に深さ30～60cmの長楕円形のくぼみがみられる部分がある。埋土はおもに二層認められ上層が黄褐色粘土，下層が青灰色粘土まじり細砂・粗砂である。底面は海抜約175～235cmで，流走方向は明らかではない。

出土遺物としては埋土中より弥生時代中期（百・中・Ⅱ）と考えられる土器片および石鏃188が出土している。これらの出土遺物よりこの溝は，始まりは明らかではないが，弥生時代中期中葉頃まで機能しており，弥生時代後期にはすでに埋没していたものと考えられる。また，この溝の続きは三ノ坪調査区においても一部検出されており，その結果によれば，この溝は井堰をともなう溝—171と同時期に機能していたものと考えられる。さらにこの溝は土層関係などから弥生時代中期の水田とも共存していたと考えられる。

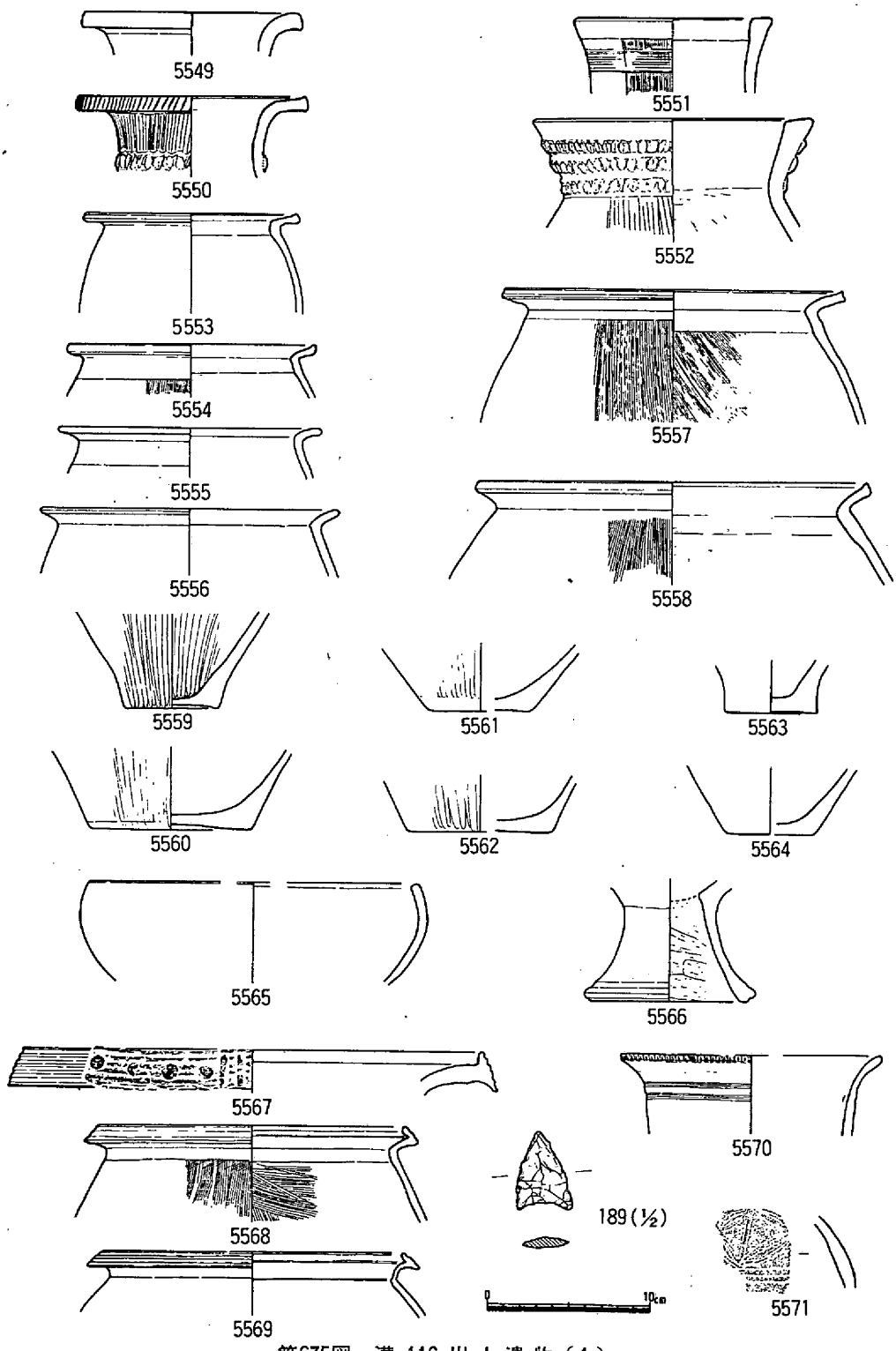


第674図　溝-115 出土遺物

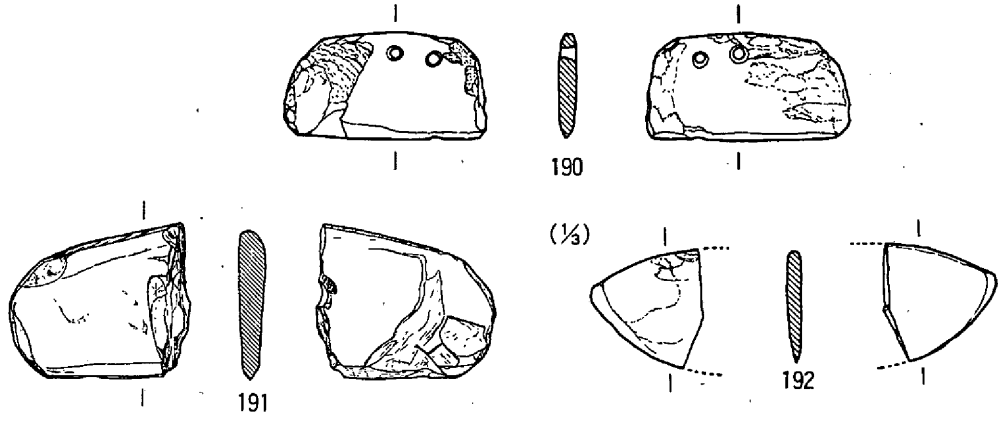
溝—116（第670・672・675・676図）

F-28～31において検出された溝である。検出した溝の幅は290～460cm，深さは検出面より40～110cmを測る。検出できた範囲ではこの溝はほとんど底部中央部が一段低くなっている。この一段低い部分の底面は一定ではなく凹凸がみられ，最も深い部分と浅い部分では50cm前後の差が認められる。埋土は基本的には青灰色粘土まじりの細砂・粗砂である。流走方向は明らかでない。また，F-31においてはこの溝の東肩部と溝—115の西肩部を結ぶように幅約100cm，深さ約20cmの溝が検出された。埋土は溝—115・116と同じ青灰色粘土まじりの細砂・粗砂である。このことから溝—115と116はある時点では同時に機能していたと考えられ，この場合両者の溝の底の高さの比較から溝—115から溝—116に流れ込んでいたものと考えられる。

一方，この溝からは弥生時代前期（百・前・Ⅱ）・中期（百・中・Ⅰ～Ⅲ）の土器および石



第675図　溝-116 出土遺物（1）



第676図　溝-116 出土遺物（2）

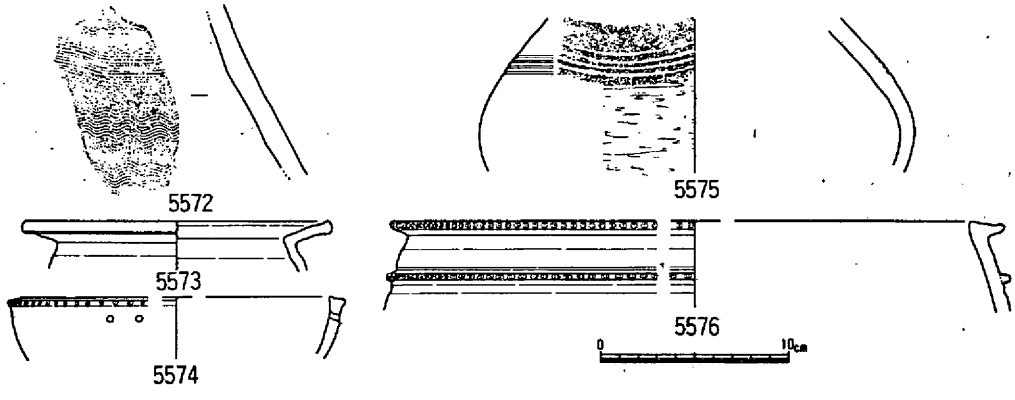
鏃189・磨製石庖丁片190～192が出土している。これらのことからこの溝は，弥生時代前期後半から弥生時代中期末まで機能していたものと考えられるが，各時期の規模については明確にし得なかった。またこの溝は，溝―115と同じく弥生時代中期と考えられる水田と同時に存在していた時期があったものと考えられる。

溝―117（第670・673・677図）

F-32・33において検出された。西側部分は時期の明確でない池状のくぼみと重複しておりはっきりしなくなる。検出した溝の幅は150～230cm，深さは検出面より40cm前後を測る。断面形は皿状を呈する。底面は海抜215cm前後で，流走方向は明確ではない。

出土遺物としては，弥生時代前期（百・前・Ⅲ）～弥生時代中期（百・中・Ⅰ・Ⅱ）の土器片がある。5576は器形・胎土などから九州東部の土器である可能性が強い。

この溝の続きは三ノ坪調査区において検出されており，その結果ともあわせて考えるならばこの溝は，弥生時代前期から中期にかけて機能していたもので溝―171と同時に機能していたものと考えられる。（平井）



第677図　溝-117 出土遺物

（2） 水　　田（図版23）

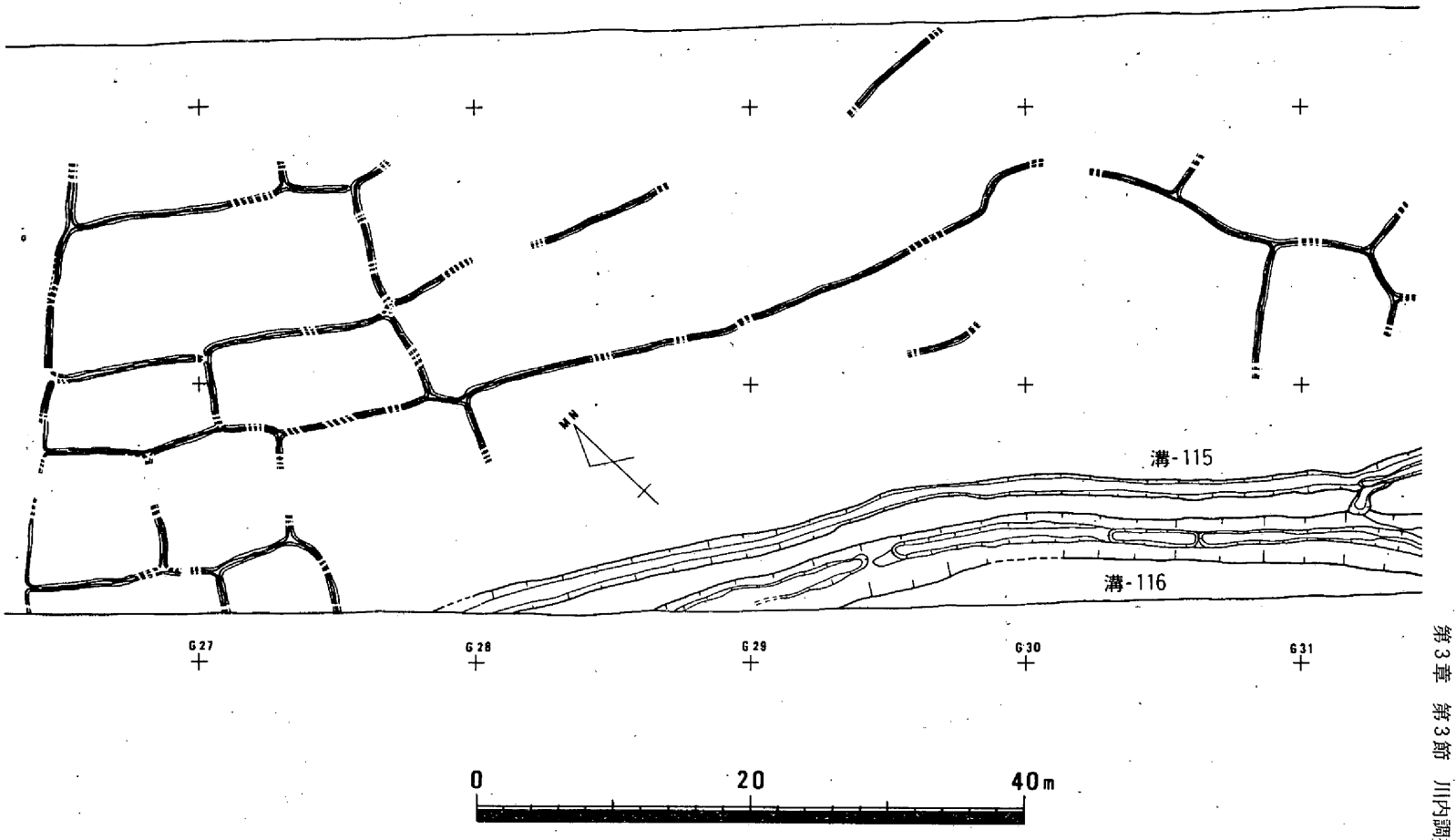
C-28・29，D-28・29，E・F-26から31にわたって検出されている。この水田の広がりは，畦畔が確認された範囲であり，土層断面の観察によれば26のラインよりもさらに北東に約6mまたCラインの北西よりに水田層と考えられるものが存在している。前記した範囲において畦畔が検出され得たのは，水田層の上に暗灰褐色砂質土が堆積している部分に限られているようである。したがってこの暗灰褐色砂質土を除去することによって畦畔が検出されたのであった。検出された畦畔は，北西から南東および北東から南西にそれぞれのびるものが認められる。特に，26から28までのラインにおいては遺存状態がよく，四角い区割りを明らかにすることができたが，これより南東側については一部を除いて北西から南東に走る畦畔が比較的よく遺存していたにすぎない。そして，北東から南西に走るものについては，調査中に細かく観察用の試掘を入れてその確認につとめたが検出するにいたらなかった。

畦畔の規模は，上端幅4～14cm，下端幅18～65cm，高さは4cm前後をそれぞれ測る。形状は「カマボコ」形を呈し，下端幅の広いものについてはより扁平なものが認められる。水口と推定されるものは，水田8の東隅と水田12の北隅に認められている。畦畔の交わる形状は，第670図のようになり，平面形態は亀甲形を呈するように観察することが可能なようである。畦畔がめぐって水田1枚単位として検出されたものは5枚だけであった。水田14の北西側の畦畔は，「カマボコ」状を呈するものではなく一段水田面が高くなった状態で水田が続いてゆくようである。

水田面と畦畔との高さについては，2～8cmの高低差があり畦畔が交わる部分についてもこれとほぼ同様の差を示している。水田層のレベルは，水田12から南方向にかけて270～265cmを測り，水田面がこの方向に下がってゆくことか認められる。そしてこのことは，他の部分においてもこの方向でのレベルを検討した結果，同じような傾向を示している。またEラインの方向のレベルについては，南東にゆくにしたがって高さを増し，E-32では284cmを測る。なお，土手樋門導入水路地区については268～274cmを測るが水田中ほどで高くなる傾向を示すが，調査の面からすれば一概に判断を下し得ないであろう。

水田の面積は，水田11が217.53㎡，水田12が60.76㎡，水田13が82.88㎡，水田14が74.16㎡，水田15が74.16㎡をそれぞれ測る。他の水田については図に示した如く，個々の単位として面積を計測することは不可能な状態であった。水田の平面形態は先に述べたが，全体的な在り方をみると水田11から17の北西側の畦畔が「T」字状に交わっており「Y」字状に交わる部分と異にしている。さらに北西から南東へのびる畦畔は水田の南西に存在する溝—115・116と平行していることが観察される。

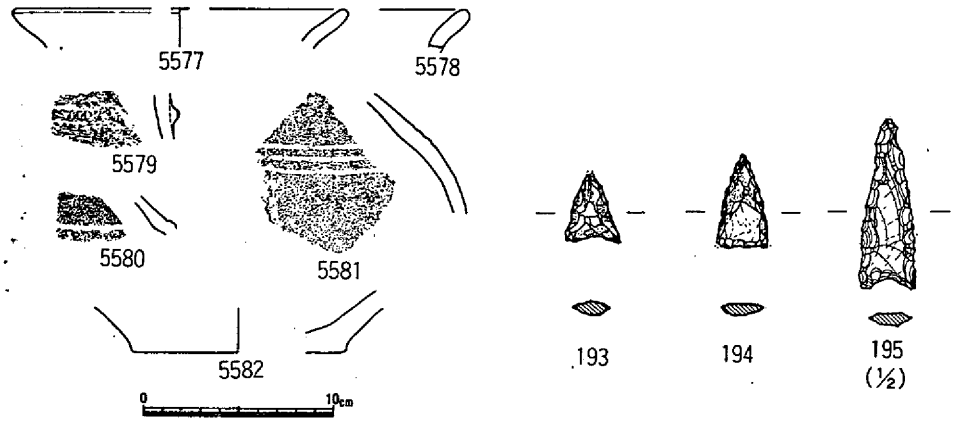
時期については，出土遺物がほとんどみられないことから層序関係および水田とほぼ同時期



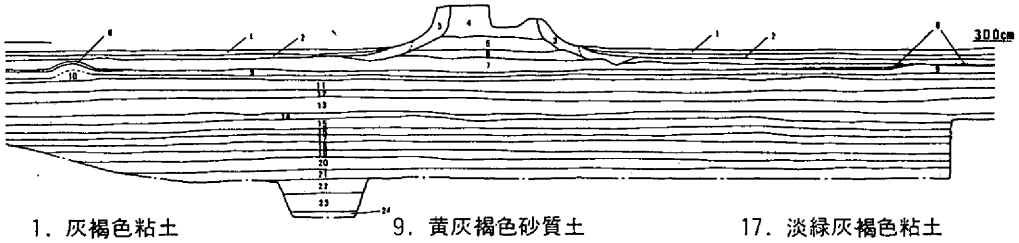
第678図　川内調査区　弥生時代中期水田遺構（1/500）

に機能していたと推定される溝などから判断をしなければならなかった。第679図に示した5577～5582および石鏃は水田層と床土と考えられる淡灰褐色粘質土から出土したものである。そしてこれらの層より下層に弥生時代前期の包含層である暗茶灰褐色粘質土が存在する。また，第707図の「島状高まり」遺構一8の上層において，水田層と考えられる層から百・中・Ⅲの遺物が出土している。さらに溝一115・116・171からは弥生時代前期から同中期にいたる遺物が出土し，溝一116からはそのうち弥生時代中期中葉の遺物が多いことが認められている。

このことから，水田の時期は弥生時代中期に位置づけられることが可能であり，そのうちでも中葉を中心とした前後の時期に営まれていたことを推測することが妥当であろう。（下澤）

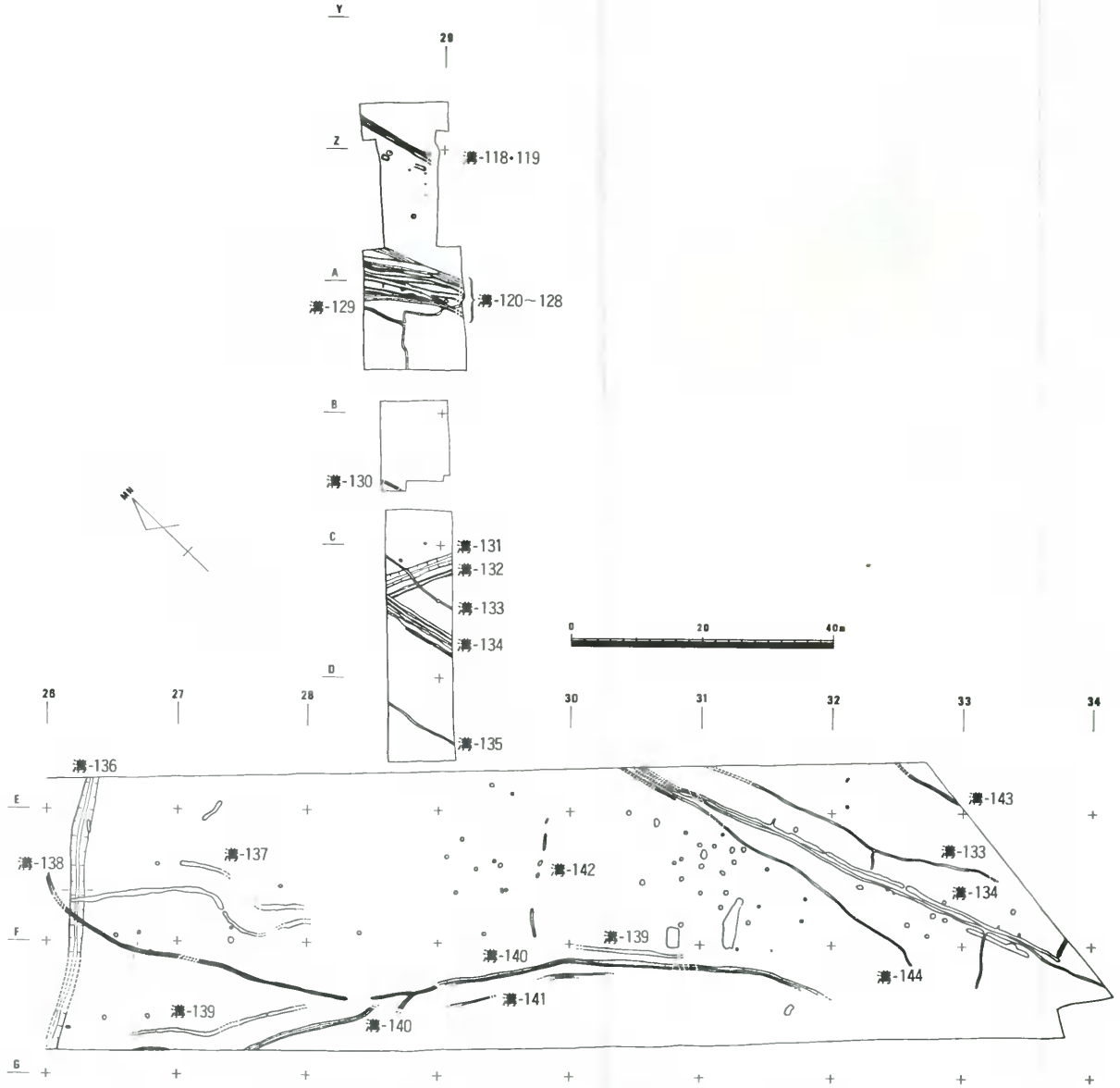


第679図　川内調査区　弥生時代中期水田層除去中出土遺物



1．灰褐色粘土
（弥生時代後期水田層）
2．淡灰褐色粘土（ 〃 ）
3．淡灰褐色粘質土
4．淡黄灰褐色粘質土
5．暗灰褐色泥砂
6．淡灰褐色砂質土
7．淡灰褐色粘土
8．暗灰褐色砂質土
9．黄灰褐色砂質土
（弥生時代中期水田層）
10．淡灰褐色粘質土
11．暗茶灰褐色粘質土
（弥生時代前期包含層）
12．緑灰褐色粘質土
13．灰緑褐色粘質土
14．淡緑灰褐色粘土
15．緑灰褐色粘土
16．緑褐色粘土
17．淡緑灰褐色粘土
18．緑灰褐色粘土
19．淡緑灰褐色粘土
20．緑灰褐色粘土
21．淡緑灰褐色粘土
22．緑灰褐色粘土
23．淡緑灰褐色粘土
24．暗青灰色粘土

第680図　E－28 北 西 壁 断 面（1/60）



第681図　川内調査区　弥生時代後期遺構配置図(1/800)

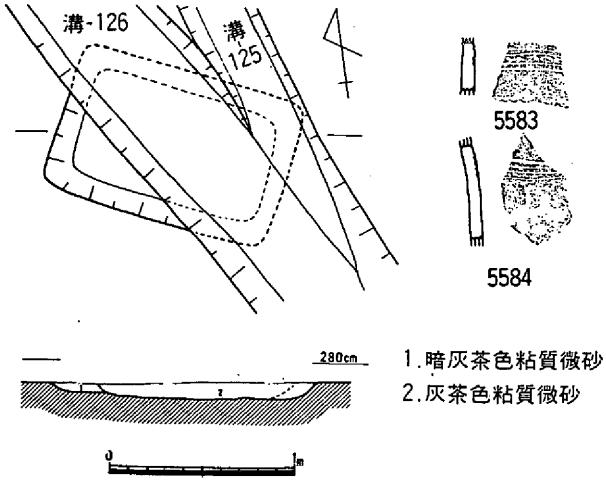
4. 弥生時代後期の遺構・遺物

弥生時代後期と考えられる遺構としては，溝・溝状遺構27，土壙1，土壙状遺構，柱穴状遺構および水田遺構がある。

溝・溝状遺構のうち溝—118～128・140・141は，「島状高まり」遺構内において検出されたもので重複するものが多い。また，溝—134・142は大畦畔にともなう溝状遺構であると考えられる。溝—133・135・144はその形状や検出状況が溝—134・142に類似している。溝—137・139は「島状高まり」遺構にともなう溝状遺構であると考えたい。土壙状遺構，柱穴状遺構については，いずれも検出面から浅いものが多く建物などにはまとまらなかった。

水田遺構についてはのちに詳しく述べるが，土手樋門地区において人の足跡に似たものが数個発見された。しかし，それらは散在的にみつかっており，歩行の痕跡と見なすことはできない。そのため，一つ一つは人の足跡に似ているものの，足跡と断定するには今一つ慎重を期する必要があるものと考える。（平井）

（1）土　　壙



第682図　土　壙-261（1/40）・出土遺物

土　壙—261（第682図）

溝—126に切られるため，検出したのは，土壙の一部である。検出した形状からすれば，方形もしくは，長方形を呈するものと考えられる。検出面での土壙の規模は，30×40cm，深さ8cmを測る。遺物としては，第682図に示すように，縄文時代晩期の土器と，弥生時代前期の土器片が埋土から出土しているが，時期を決定する要素とはならない。

（2）溝

溝—118・119（第683・687図）

「島状高まり」遺構—9の中において検出したもので，溝の方向は，ほぼ磁北に一致するもので，北から南へ流れるものと考えられる。検出した溝の全長は12mで，幅20～30cm，深さ40～50cmを測る。溝の断面を見ると「U」字形を呈している。溝—118が上層に位置しており新しく，溝—119が古い。

溝－120～122（第683・688図）

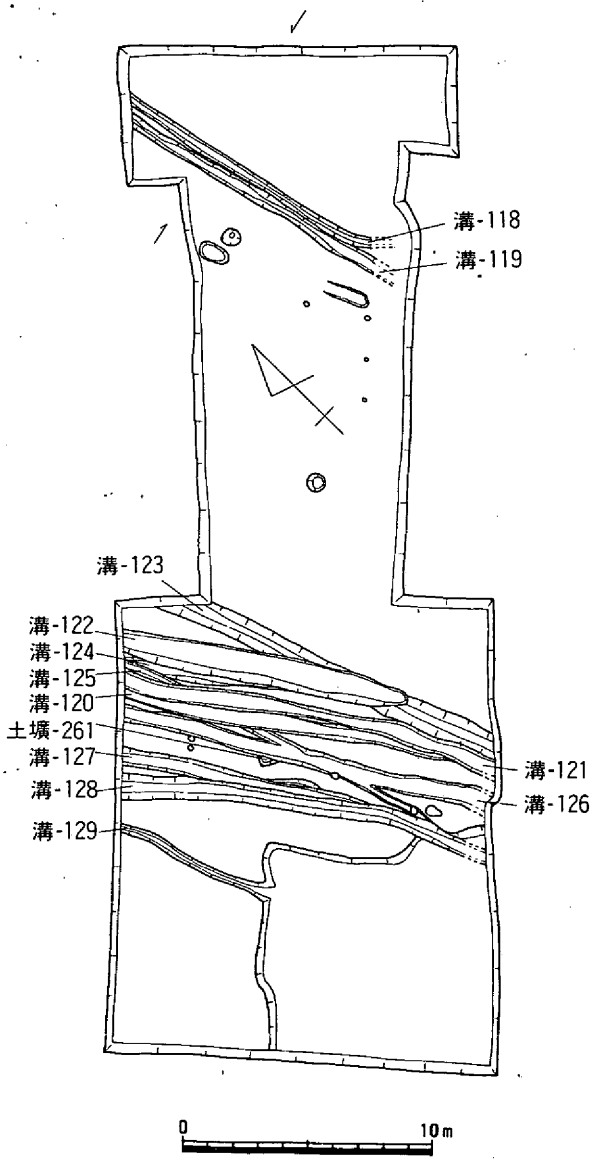
「島状高まり」遺構－10の中において検出したもので，全長15mを調査した。検出した溝の幅は，30～40cm，深さ18～20cmを測る。溝の断面を見ると，「U」字形を呈している。溝は，北西から南東方向に流れる。溝－121が新しく，溝－120が古い。

溝－123～126（第683・684・688図）

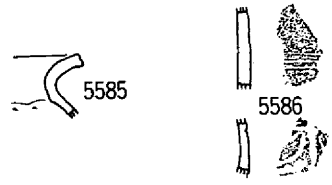
「島状高まり」遺構－10の中において検出したもので，全長約15mを調査した。検出した溝の幅は，溝－123が最も広く，50～60cmを測る。溝－125が最も細く幅約20cmを測る。深さは，溝－123が40cm，溝－126が，8～10cmを測る。溝の断面を見ると，溝－123は，逆台形に近い形状を呈しているが，溝－126は，浅くくぼむものである。

溝の新旧関係を見ると，溝－125と溝－126の新旧は，明確にできなかったが，溝－124は，溝－123・125のいずれよりも古い。

溝の方向は，おおむね北西より南東に流れる。



第683図　川内調査区土手樋門地区　弥生時代後期遺構配置図(1/300)



第684図　溝-124（左）・125（右）出土遺物

溝－127・128（第683・688図）

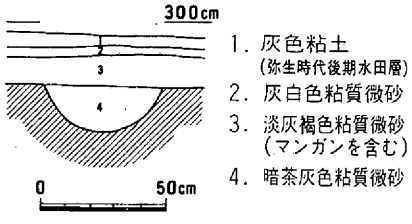
弥生時代後期の水田層の下層において検出したもので，全長約14mを調査した。検出した溝の幅は，40～50cmで，深さは23cmを測る。溝の断面を見ると，逆台形に近い形状を

呈している。溝の流れる方向は，北西より南東方向を示す。溝は，一部切り合いが見られるが，西壁断面より，溝—127が新しく，溝—128が古い。

溝—129（第683・685図）

検出した全長は6.7mを測り，その下流には，水田と推測される遺構が展開しており，その水田の北端部において接続するものである。検出した溝の幅は約20cm，深さ約20cmを測る。溝の断面は，「U」字形を呈するもので，北西より南東に流れるものである。

水田と考えられる遺溝は，弥生時代後期の水田の下層において検出した溝—129の下流において，方形の区画の二辺を検出した。検出した辺は，北側と東側であり，北辺の東端付近に溝—129が接続するものである。検出した一辺は約9mであり，検出面より約10cm下った面で水平面を呈する。他の二辺は，調査区の関係から明らかにすることはできないため，区画の大きさを知ることはできないが，層位の水平性，溝との関連等からして，水田の可能性が高いものと考えられる。（井上）

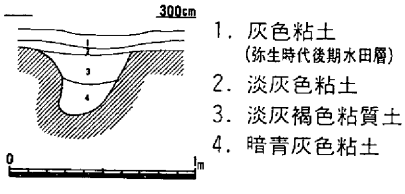


第865図　溝-129　断面(北西壁)(1/30)

溝—130（第681・686図）

B-28に位置する。弥生時代後期の水田層を除去した後に検出された溝で，ほぼ南北方向に走る。検出できた長さは約4mにすぎない。幅は35～40cm，深さは検出面より30cm前後を測り，底のレベルは250cm前後である。埋土は大きく二層に分離することができる。

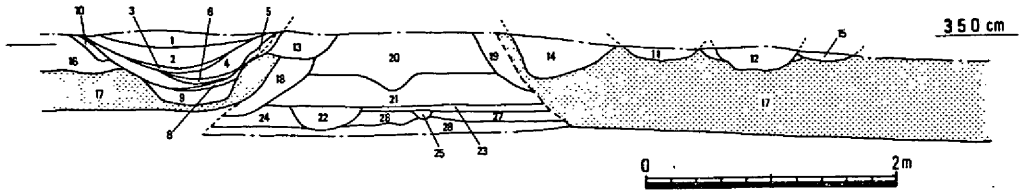
出土遺物がほとんどないため時期を明確に決定し難いが，土層関係および他の溝との比較などから，ほぼ弥生時代後期のものであろう。また，この溝は形状・方向などから溝—143と同一のものである可能性が考えられる。（平井）



第686図　溝-130　断面(北西壁)
(1/40)

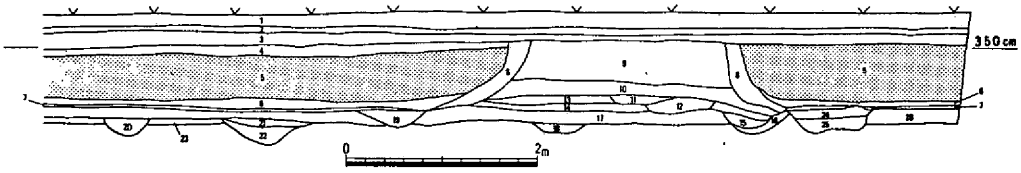
溝—131（第681・689図）

C-28で検出された。東南東から西北西へ直線的にのびる。幅220cm，深さ50cmを測る中規模の溝であった。溝壁の傾斜は緩やかで，断面は皿状を呈し，底には平坦面をもたない。埋土は大きく二層に分けられ，上層は土がブロック状に混合し，人為的に埋められた可能性がある。溝底の標高は225cmで，調査区内では西が東よりわずかに1cm低いだけであった。土層観察の結果によれば，この溝は弥生時代中期の水田層を切っているが，この水田層の上面に堆積した土が溝の埋土上面にも堆積しているため，この2点から判断すれば，溝と水田はきわめて近接した時期の所産と考えられ，同時期に併存した可能性がきわめて強い。この溝の両側に水田の畦が平行して存在することも傍証となるように思われる。ちなみに，溝の両縁と畦との距



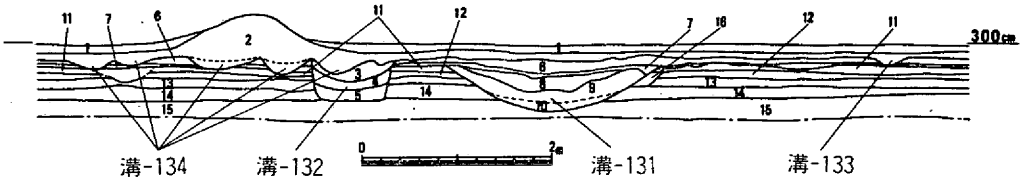
1. 淡灰褐色粘質微砂
2. 淡灰色粘質微砂
3. 灰色粘質微砂
4. 茶灰色粘質微砂
5. 暗茶灰色粘質微砂
6. 淡茶灰色砂
7. 暗灰茶色粘質微砂
8. 灰茶色粘質微砂
9. 暗灰色粘質微砂
10. 淡灰茶色粘質微砂
11. 暗灰茶色粘質微砂 (溝-149)
12. 暗茶灰色粘質微砂 (溝-148)
13. 暗灰茶色粘質微砂 (溝-151)
14. 暗茶灰色粘質土 (溝-150)
15. 灰色砂質土 (溝-152)
16. 暗茶灰色粘質微砂
17. 茶灰色砂
18. 暗灰茶褐色粘質土
19. 灰褐色粘質微砂
20. 淡灰黄褐色粘質微砂
21. 灰黄褐色粘質微砂
22. 暗灰褐色粘質微砂 (溝-119)
23. 淡灰色粘質微砂
24. 灰茶色粘質微砂
25. 灰黄色粘質微砂
26. 淡灰褐色粘質微砂
27. 黄灰褐色粘質微砂
28. 暗灰茶褐色粘質微砂

第687図　溝-119・148～152 断面 (1/60)



1. 現代水田耕土
2. 現代水田床土
3. 淡黄灰色粘質細砂
4. 暗灰褐色微砂
5. 灰黄色微砂
6. 灰色粘土(弥生時代後期水田層)
7. 淡灰色粘土(〃)
8. 淡灰褐色粘質微砂
9. 淡灰茶色粘質微砂
10. 灰褐色粘質微砂
11. 淡灰茶色粘質微砂 (溝-121)
12. 茶灰色粘質微砂 (溝-120)
13. 暗褐灰色粘質微砂
14. 暗灰黄色粘質微砂
15. 暗灰茶色粘質微砂 (溝-125)
16. 茶灰褐色粘質微砂 (溝-124)
17・26. 暗茶灰色粘質微砂(マンガンを含む)
18. 暗灰茶色粘質微砂(溝-126)
19. 淡茶色粘質微砂(溝-127)
20. 暗茶灰色粘質微砂(溝-129)
21. 暗灰褐色粘質微砂
22. 暗灰青色粘質微砂(溝-128)
23. 暗灰褐色粘質微砂(マンガンを含む)
24. 淡灰茶色粘質微砂(溝-122)
25. 灰褐色粘質土(溝-122)

第688図　溝-120～122・124～129 断面 (北西壁) (1/60)



1. 灰色粘性土
2. 淡灰色粘性土
3. 暗灰褐色粘性土
4. 褐色土斑青灰色粘土
5. 青灰色粘土
6. 灰黄褐色土
7. 暗灰褐色土
8. 暗褐色土斑茶褐色土
9. 褐色土斑青灰色粘性土
10. 青灰色粘土

第689図　溝-131～134 断面 (北西壁) (1/80)

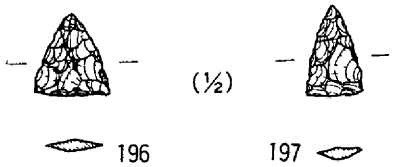
離は北で1m内外，南は6m程度を測った。溝内から出土した遺物はごく僅少で，明確な年代を押えることは困難である。

溝—132（第681・689図）

溝—131の南を2mの距離で並行して走る。幅80～85cm，深さ45cmを測る断面方形の溝であった。溝底の標高は240cm前後で検出部分はほぼ水平だった。埋土は3枚の粘土層からなり，自然堆積とみられる。遺物はまったくと言ってよいほどなく，この方面からの年代決定はできないが，土層観察によれば，弥生時代後期の水田を形成する層の直下から掘り込まれ，弥生時代中期の水田とその上に堆積した2枚の層を切っていたことから，弥生時代後期の可能性が強い。（岡本）

溝—133（第681・689・690図）

C-28・29，D-31，E-31～33に位置する。弥生時代後期の水田層を除去した後に検出された溝状遺構で，ほぼ南北方向に走るが直線的ではない。検出した溝の幅は25～40cm，深さは一定ではないが，検出面より，ほぼ10cm前後を測るにすぎない。埋土は淡灰色～灰色粘土である。時期は，溝—131・132を切っていること，および土層関係などから弥生時代後期と考えられる。この溝は水が流れるようなものとは考えられない。また，弥生時代後期の水田の畦畔とも直接関係は認められないようである。

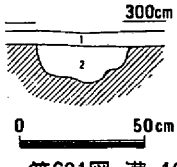


第690図　溝-133 出土遺物

溝—134（第681・689図）

C-28・29，D-30，E-31～33，F-33に位置する。弥生時代後期の水田層を除去した後に検出された溝状遺構である。検出した幅は，20～80cm，深さも一定ではなく10～20cm前後である。この溝状遺構は，おもに弥生時代後期の水田の大畦畔—2・4・7に沿って走っており，大畦畔—2・4・7との密接な関連をうかがわせる。すなわち，この溝状遺構は，水を流すためのものとは考えられず，その形状や埋土が大畦畔—2・4・7の土に非常に類似していることなどから，大畦畔—2・4・7をつくる際に生じた遺構であると考えておきたい。時期については必ずしも明確ではないが，埋土中からは弥生時代後期の土器片が出土している。（平井）

溝—135（第681・691図）



1.灰色粘土
（弥生時代後期水田層）
2.淡灰色粘質土

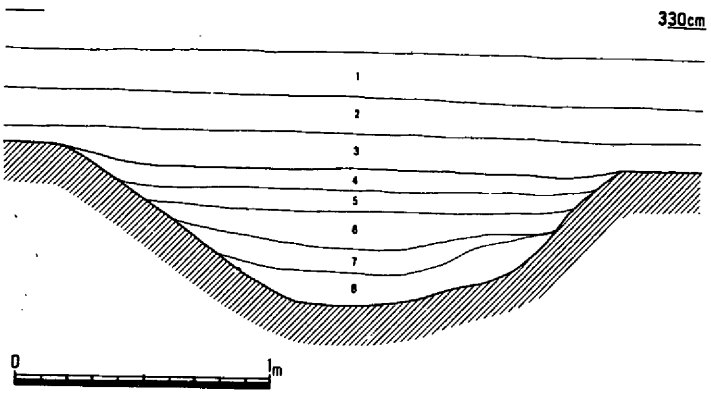
第691図 溝-135 断面（北西壁）（1/30）

D-28で弥生時代後期の水田層を除去した面で検出されたものである。溝内にはこの水田層の土が落ち込んでいた。幅30～40cm，深さ10cm前後と小規模であり，溝底には小凹凸があった。その在り様や他の類例から考えて，溝としての機能は疑問視され，形態から溝状遺構として

いる。走行は水田畦畔と並行し，土層の上からも水田との関係が考えられる。一水田区画の中軸線下にある。（岡本）

溝－136（第681・692図）

D・E-26の西寄りに位置し，溝－137・138に切られ，弥生時代中期の水田を切っている。流路を北東方向から南西方向へ置き，底は北東方向に低く，両端の比高は10cmを測るが，地形的にみて，水は南西方向へ流れたものと考えられる。堆積土は上層が砂質で，下層が粘質である。時期決定に足る遺物の出土はないが，他の遺構との関係から，上限を弥生時代中期に，下限を百・後・Ⅰに置くことができる。（光永）

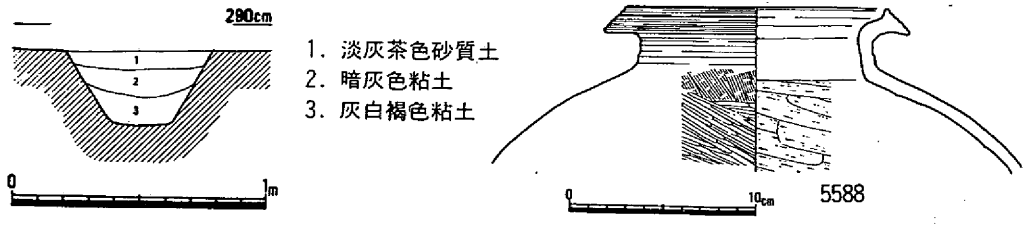


第692図　溝-136 断面（1/30）

溝－137（第681図）

E-26・27に位置する溝状遺構である。この溝状遺構は，弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出されたものである。「島状高まり」遺構－5の縁辺に沿って，平面的には溝状を呈するが，第704図の「島状高まり」遺構－5の断面図にみられるように，「島状高まり」遺構の肩部の堆積層の一部とも考えられる。時期は，土層関係などから弥生時代後期と考えられる。この遺構の性格については明らかではないが，「島状高まり」遺構の成り立ちに関連するものと考えられる。（平井）

溝－138（第681・693図）



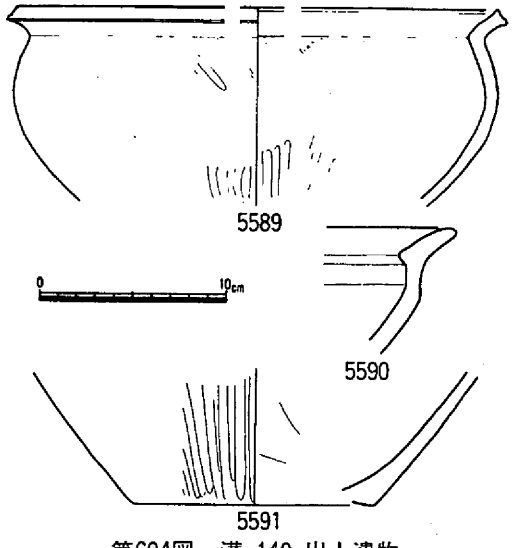
第693図　溝-138 断面（1/30）・出土遺物

E-25からF-28にかけて検出された。E-25内では「島状高まり」遺構－4に沿う形で大きく湾曲し，E-26以東では南東方向にほぼ直進する。F-28東半では，現代まで使われた用水路によって削平されており，それ以東で検出された溝との直接の関係は不明であるが，流路はこれらと同様の位置が想定される。

時期は壺5538により百・後・Ⅰに比定される。（光永）

溝－139（第681図）

F-26・27・30において検出された溝状遺構である。弥生時代後期の水田層を除去した後に，「島状高まり」遺構－8の縁辺に沿って検出されたものである。この溝状遺構については，土層断面によって明確に検討することはできなかったが，基本的には溝－137と同じ性格の遺構であると考えられる。時期は弥生時代後期であろう。

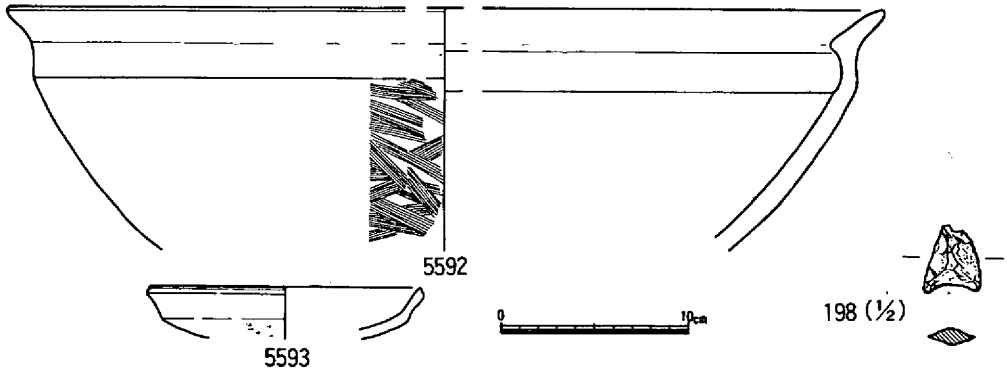


第694図　溝-140 出土遺物

溝－140（第681・694・711図）

F-27～31において検出された溝である。第711図に示したように「島状高まり」遺構－8の内部に位置し，一部溝－145・aによって切られている。検出した溝の幅は60～100cm，深さは検出面より50cm前後を測る。底面は海抜約240～250cmで，流走方向は明らかではない。断面形はほぼ「U」字形を呈し，埋土は淡灰色粘土である。出土遺物としては土器があり，時期はほぼ百・後・Ⅱと考えられる。

5590は溝－141出土の5592と同一個体であると考えられる。



第695図　溝-141 出土遺物

溝—141（第681・695・711図）

F-29・30において検出された溝である。第711図に示したように「島状高まり」遺構—8の内部に位置する。溝—145・bによって切られており，検出できた部分は少ないため，幅・深さ・断面形などは明確ではないが，ほぼ溝—140に類似した溝であると考えられる。出土遺物としては土器および石鏃198がある。5592は5590と同一個体であると考えられる。時期はほぼ百・後・Ⅱと考えられる。

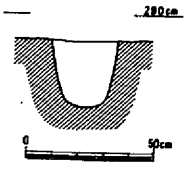
溝—140と141は，その形状・遺物などから同一時期に機能していた可能性が強いものと考えられよう。

溝—142（第681図）

E-29に位置する。弥生時代後期の水田層を除去した後に検出された溝状遺構である。検出した溝の幅は30～40cm，検出面からの深さは5cm前後である。この溝状遺構は，弥生時代後期の水田の大畦畔—3に沿うように検出されるという特徴を持っており，大畦畔—3をつくる際に生じた遺構であると考えておきたい。時期は土層関係などから，弥生時代後期であると考えられる。

溝—143（第681・696図）

D-32に位置する。弥生時代後期の水田層を除去した後に検出された溝で，ほぼ南北方向に走る。検出した溝の幅は40～50cm，深さは検出面より25cm前後を測る。断面形は「U」字形を呈し，底のレベルは海抜255cm前後である。



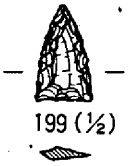
第696図
溝-143 断面（1/30）

出土遺物がほとんどないため時期は明らかでないが，土層関係などから弥生時代後期のものと考えられる。

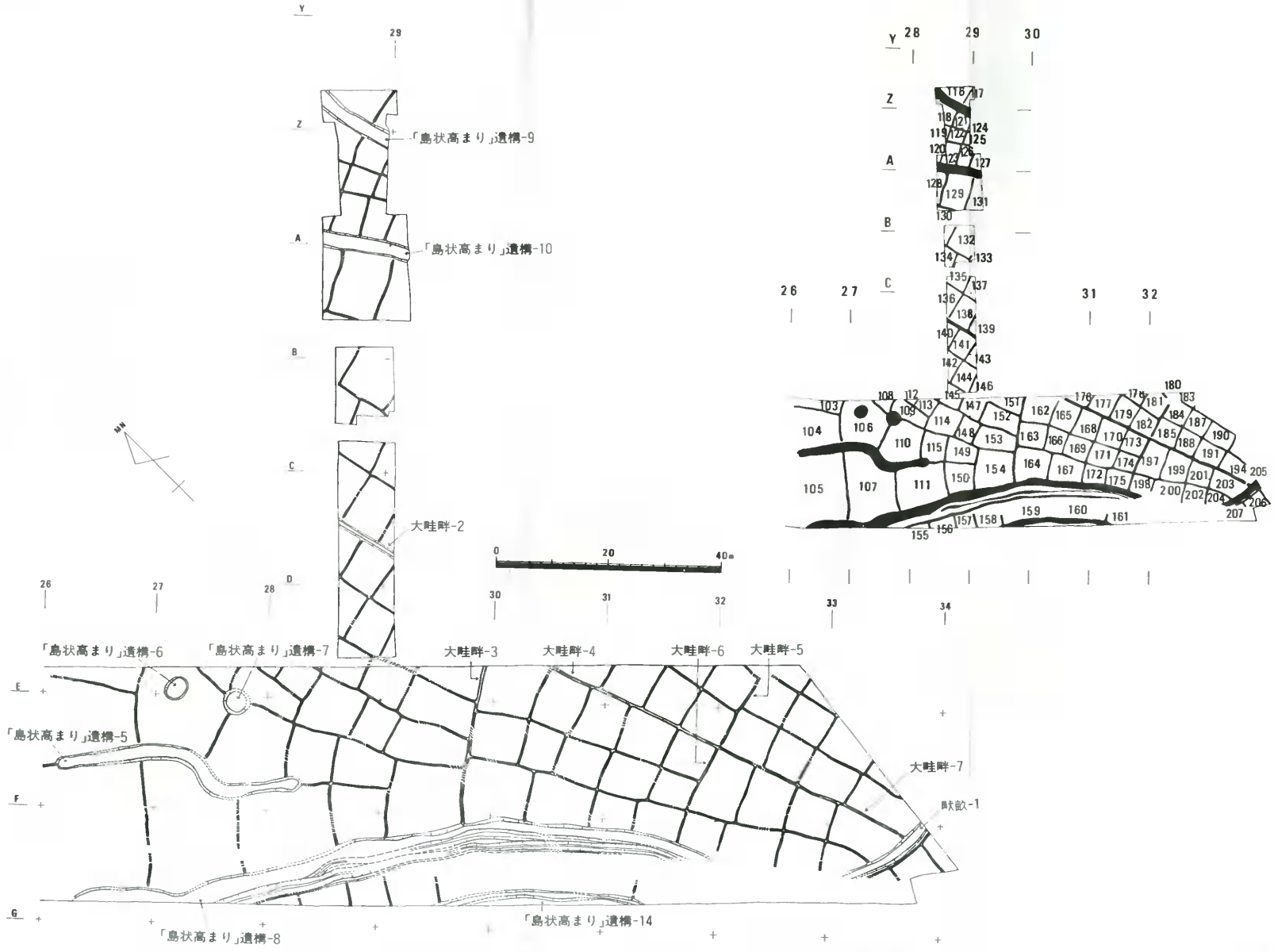
また，この溝はその形状・方向などから，溝—130と同一のものである可能性が強い。

溝—144（第681・697図）

D-30，E-30～32，F-32に位置する。弥生時代後期の水田層を除去した後に検出された溝状遺構で，ほぼ南北方向に走る。検出した溝の幅は20～30cm，深さは15cm前後を測る。底のレベルは海抜260～270cm前後である。埋土は灰色粘土で弥生時代後期の水田層と類似している。この溝状遺構は溝—134と一部並行しているが，大畦畔—4との密接な関連は認められない。


199（½）
第697図
溝-144 出土遺物

出土遺物としては石鏃199があるが，この溝状遺構に伴うものかどうかは明らかではない。時期は土層関係などから弥生時代後期と考えられる。



第698図　川内調査区 弥生時代後期水田遺構（1/800・1/1500）

折込6

（3）水田遺構（図版21～24）

川内調査区においては全面に弥生時代後期の水田が検出された。その内容は101枚の水田と「島状高まり」遺構7，畎畝1および水路（溝―145・a・b）である。これらの遺構はすべて弥生時代後期（百・後・Ⅳ）と考えられる洪水砂によって，一度に埋没している。洪水砂はおもに黄灰褐色～淡茶褐色の微砂で，水田層に近くなるほど粘質をおびている。洪水砂の堆積の厚さは，現状では土手樋門地区で約40～60cm，土手樋門導入水路地区で約40～50cm，中央低水路地区で約30～50cmである。

水田層（第699・700・703図）

水田層と考えられる土壌の厚さは約5～10cmで，7～8cmのところが多い。色調・土質は灰色～暗灰色粘土で，当調査区においては各地点とも同一である。これらの水田層の下部には鉄・マンガンの沈着は認められなかった。

この水田層は，一枚ごとの水田ではほぼ水平に堆積しているが，大きくみるといくつかの単位で高低差が認められる。最も低いのが205～207の水田で，上面が海抜約262～269cm，次に116・117の水田で海抜約265～285cm，次に155～161の水田で海抜約276～286cm，最も高いのが103～115，118～154，162～188，190・191・194・197～207の水田で海抜約279～300cmである。この部分は，さらに大畦畔によって囲まれる単位ごとに差があるのかも知れないが明確ではない。しかしながら，北から南に向かって全体として徐々に低くなっており，194・203・204の水田は103・104や128・129と比べて約10cm低くなっている。

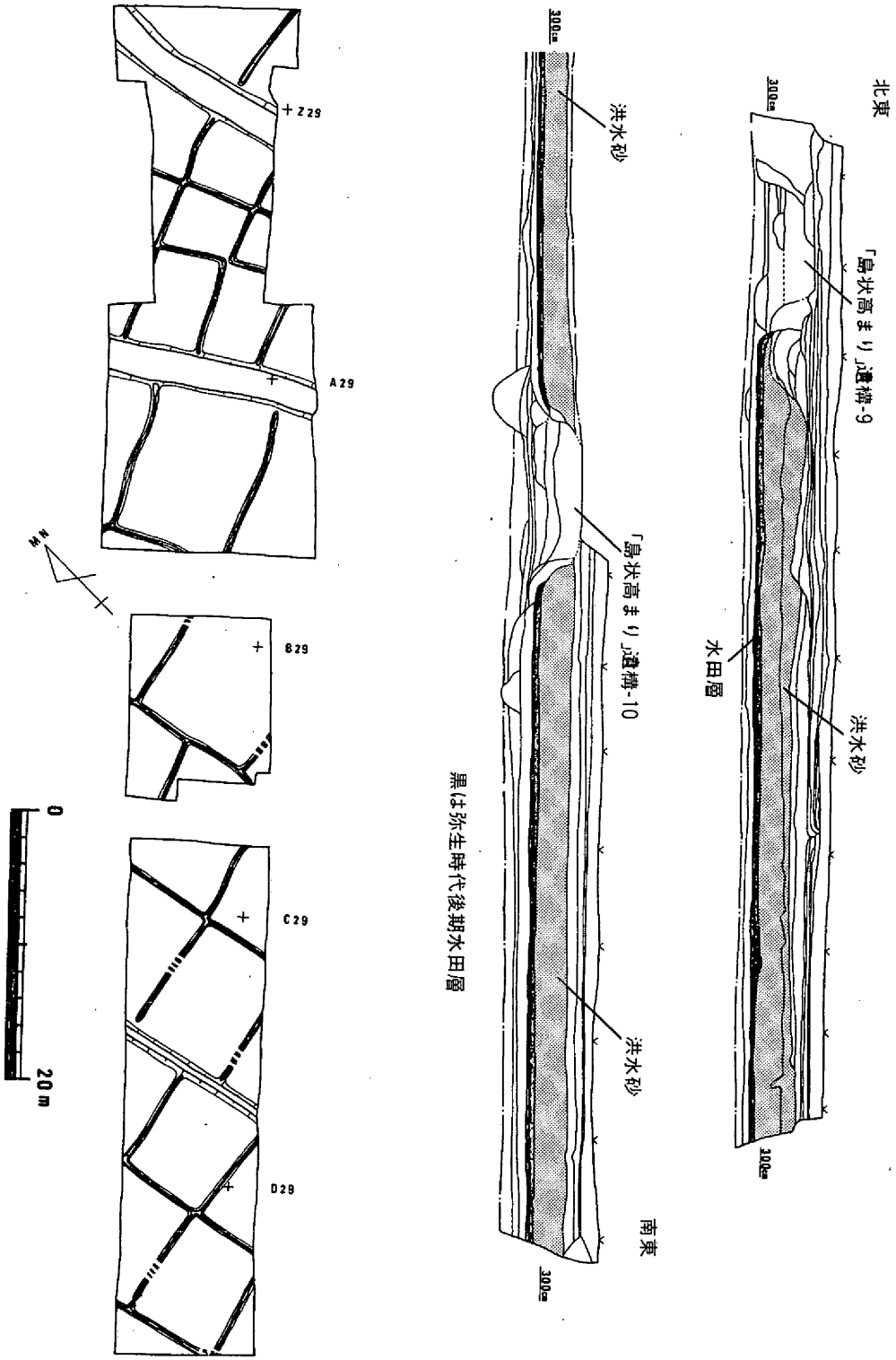
水田区画・水田の規模（第698・699・701・702図）

当調査区の水田は，大畦畔・小畦畔および「島状高まり」遺構によって区画されている。畦畔によって区画された水田の形状は基本的には正方形あるいは長方形を呈しているが，「島状高まり」遺構の存在する地域では不定形になっている。

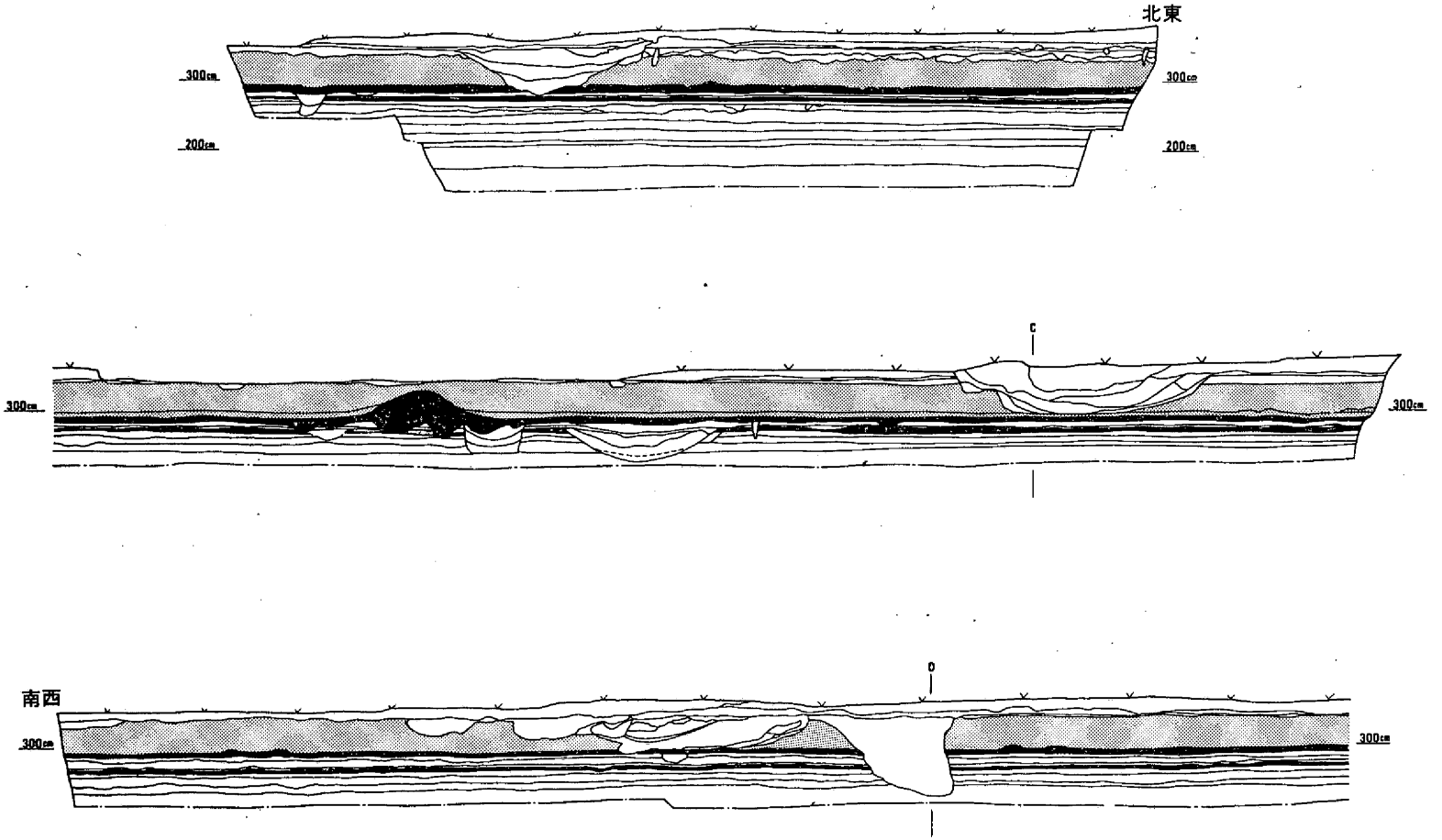
大畦畔と考えているものは，幅が50～60cm，高さが水田層の上面より10cm前後を測るものである。ただし，大畦畔―2は幅100～110cm，高さ約30cmと他の大畦畔に比べて大規模である。小畦畔と考えているものは，幅20～30cm，高さが水田層上面より5cm前後を測るものである。大畦畔・小畦畔とも断面形は基本的には「カマボコ」形を呈し，水田層と同じ土壌によって形成されている。

大畦畔と小畦畔との設定のされ方を比べると，大畦畔がほぼ直線的に作られており，何らかの規格性が看取されるのに対し，小畦畔は「島状高まり」遺構や大畦畔に規制されており，一律ではない。

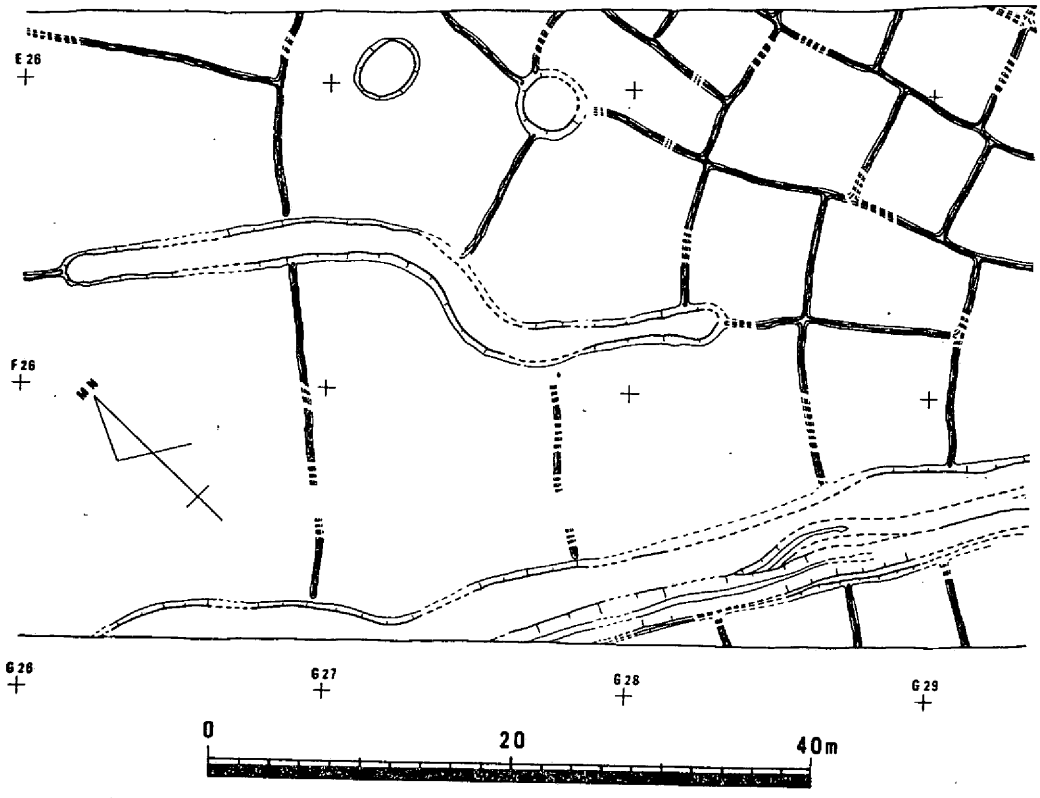
小畦畔によって区画された各水田の面積は表-6に示したとおりであるが，当調査区においては，計測可能なもののうち最小のものが21.44㎡，最大のものが291.36㎡である。また，大



第699図　川内調査区土手樋門地区・土手樋門導入水路地区弥生時代後期水田遺構（1/500）・土手樋門地区南東壁断面（1/100）



第700図　川内調査区土手樋門導入水路地区北西壁断面（1/100）　黒は弥生時代中期・後期水田層



第701図　D・E・F—26～29弥生時代後期水田遺構（1/500）

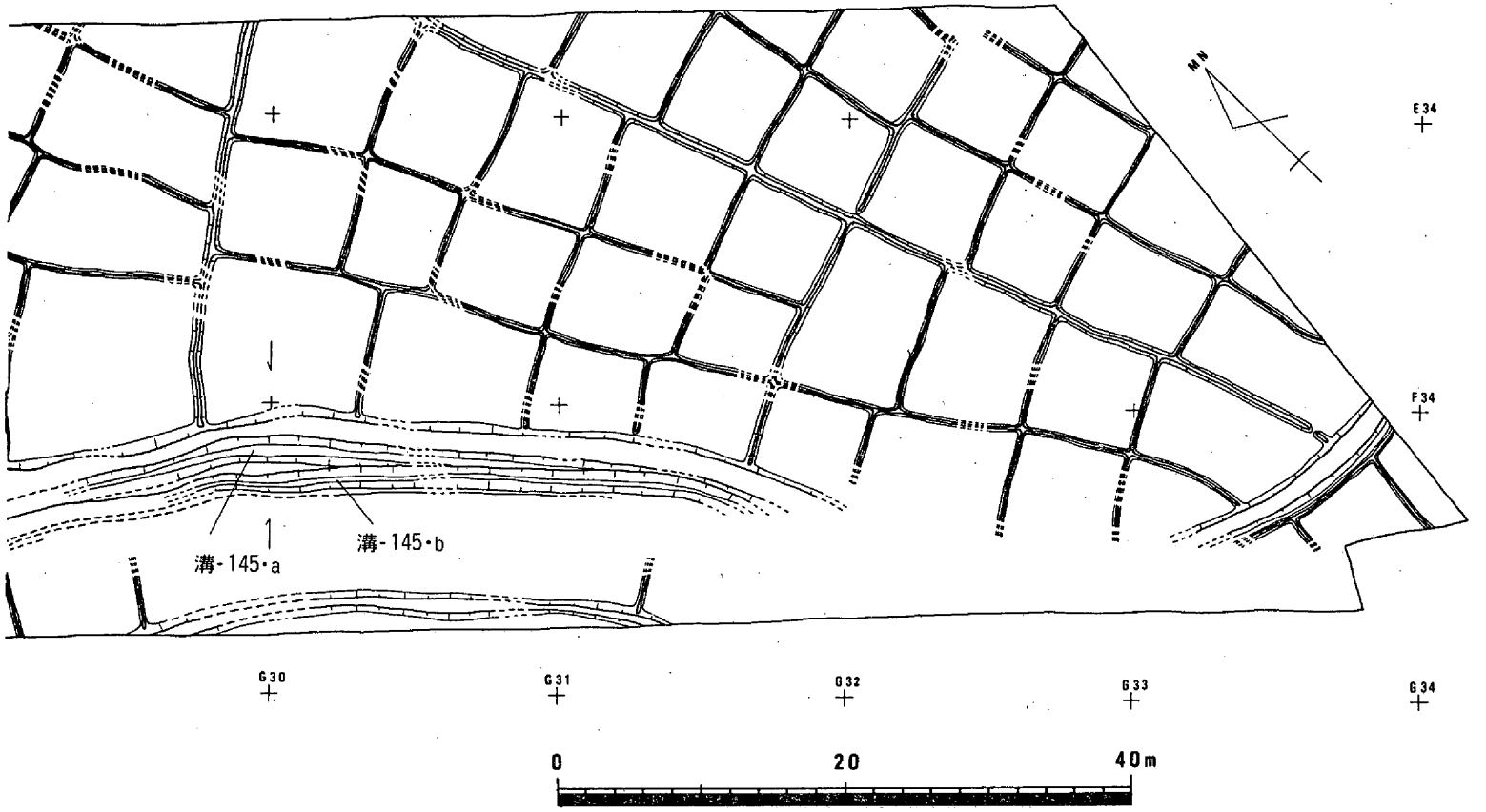
畦畔—3・4・6によって囲まれた水田は推定約1000㎡で，その中を小畦畔によって14枚に区分しており，これらの面積は33.97㎡～108.08㎡で，平均約60㎡である。

また，「島状高まり」遺構—9と10によって区画された部分の水田は，その両側の水田に比べて面積が小さいという特徴を持っている。

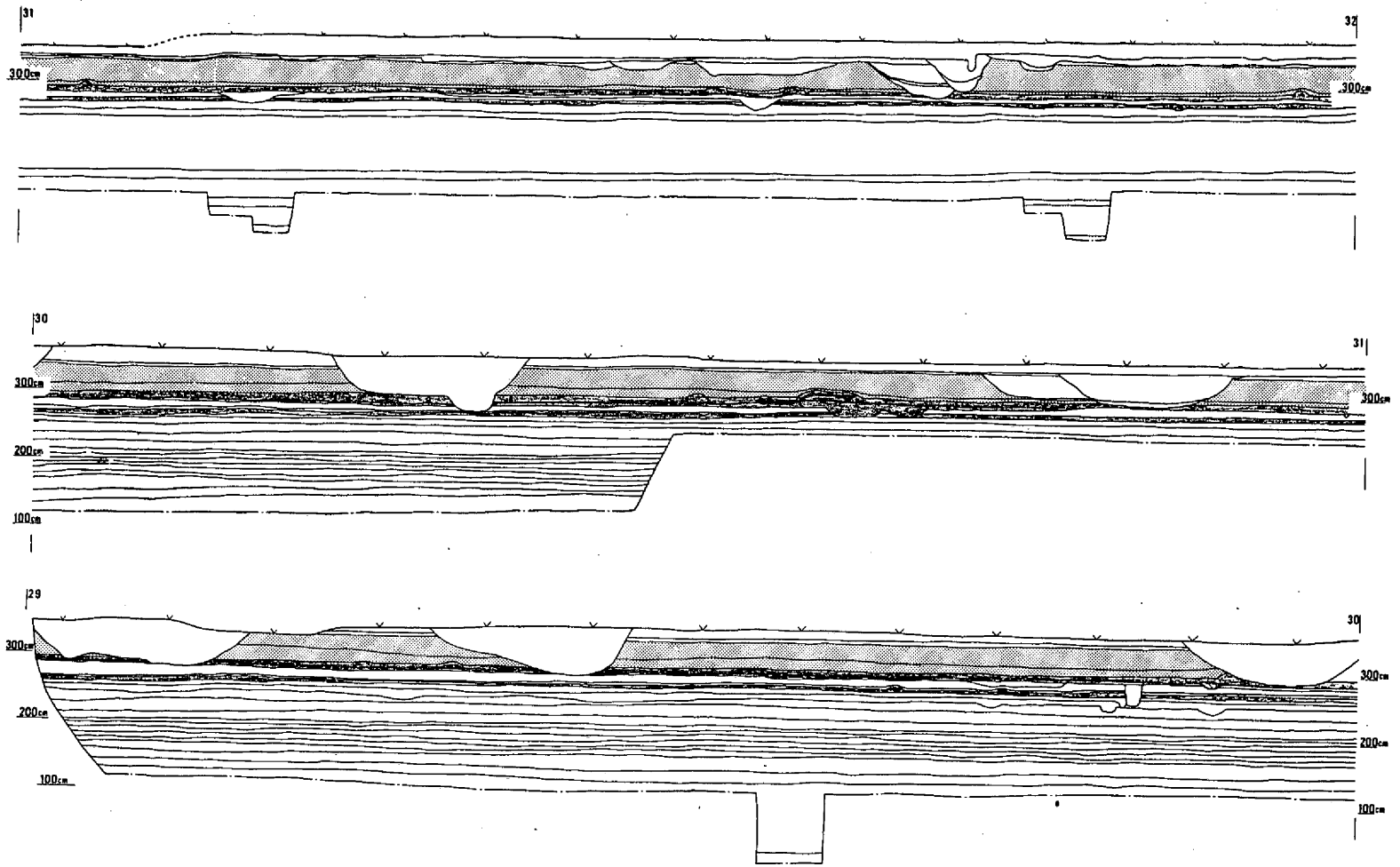
さらに，これらの畦畔の方向についてみれば，東西方向が基本となっているものと考えられ，このことは全体の地形が北から南に向かって低くなっていること，および水利と関連するものと考えられよう。

水　口

畦畔には一部凸部が途切れる部分があり，これを水口と考える。当調査区における水田において，水口は11か所確認できた。これらには，「島状高まり」遺構と小畦畔，大畦畔と大畦畔，大畦畔と小畦畔，小畦畔と小畦畔という4種類がある。確認された水口は水田全体からみればわずかであり，これらが各水田面に水を引く役割を果たしていたかどうかは疑問である。これらは洪水砂によって埋没した時点でのあり方であり，本来のあり方を示してはいない可能性も考えられる。いずれにせよ，水口の機能などについては明らかではない。



第702図　D・E・F—29～34・D—29～31弥生時代後期水田遺構（1/500）



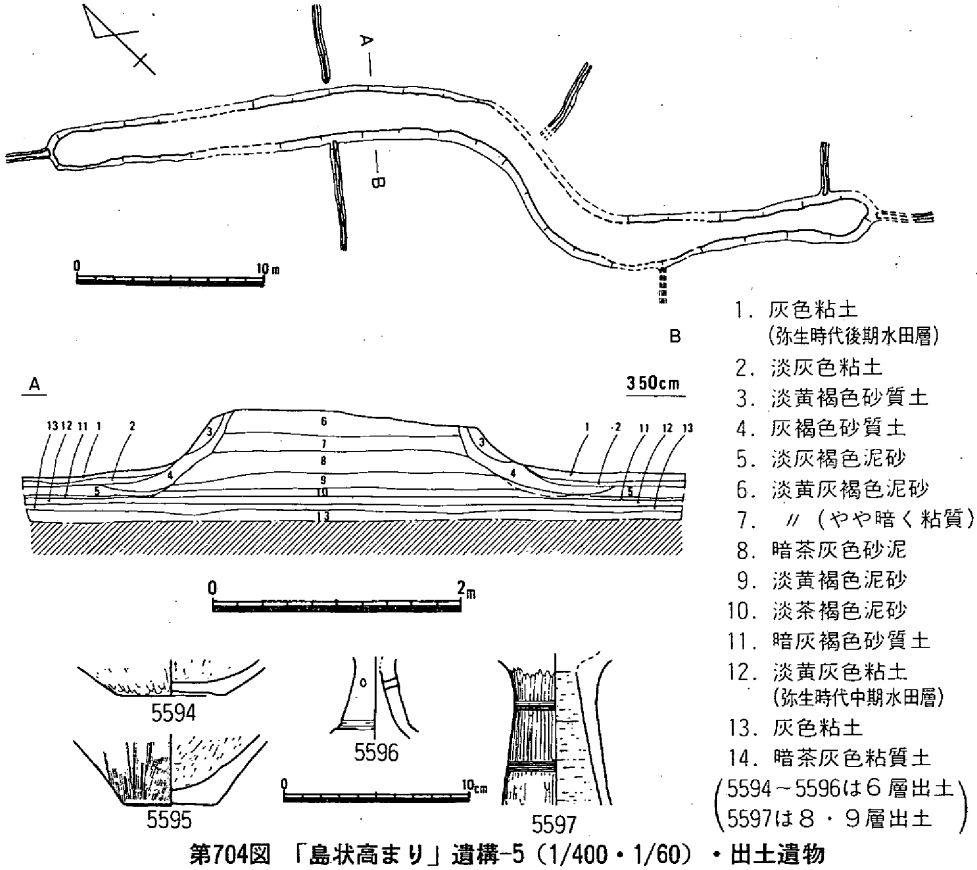
第703図　D－29～31北東壁断面（1/100）　黒は弥生時代中期・後期水田層

「島状高まり」遺構（第704～709図）

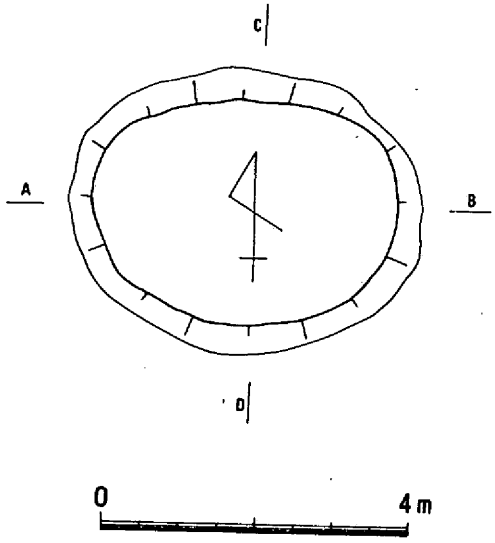
「島状高まり」遺構は7検出された。これらの平面形をみると，円形あるいは楕円形のもの（6・7）と細長い土手状のもの（5・8～10・14）とがある。これらの「島状高まり」遺構が水田と同時期のものであることは，「島状高まり」遺構―14の上面に一部洪水砂が堆積していることや，「島状高まり」遺構に畦畔が接続していること，および水田層が「島状高まり」遺構からのびていることなどから明らかである。

これらの「島状高まり」遺構と水田面との比高は，上面が後世に削平されているものが多いが，約35～80cmを測る。

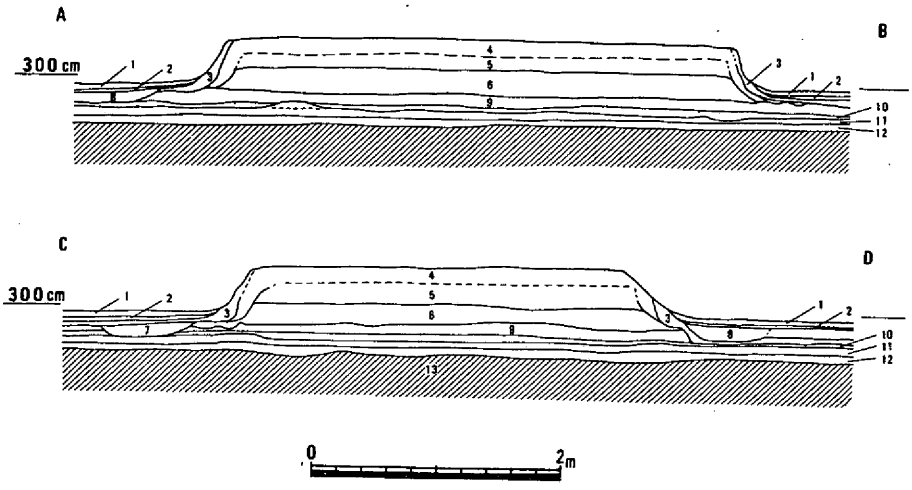
各「島状高まり」遺構の規模・形状などについて記すと，5は上面幅約90～210cm，下端幅約170～300cm，高さ約45cmの細長い土手状を呈する（第704図）。6は上面で約290×400cm，下端で約370×470cmの楕円形を呈する。これには，他のものと異なり畦畔は接続していない（第705図）。7は上面で推定径約350cm，下端で推定径約480cmのほぼ円形を呈する（第706図）。8は近・現代用水によって切られている部分が多く明確ではないが，推定幅500cm前後の細長い土手状を呈するもので，長さ約120mを検出した。9は上面幅約180～220cm，下端幅約260～

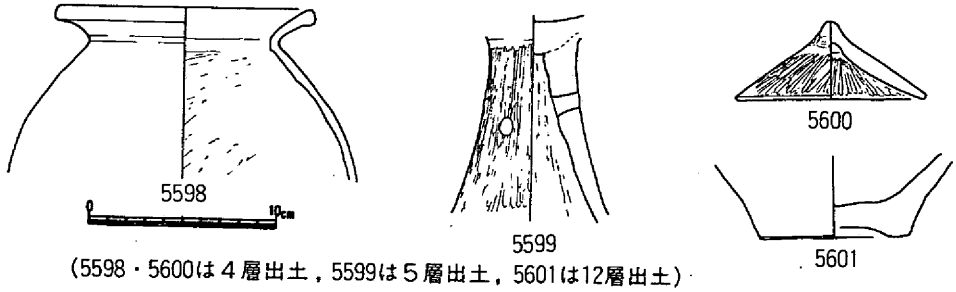


第704図　「島状高まり」遺構-5（1/400・1/60）・出土遺物



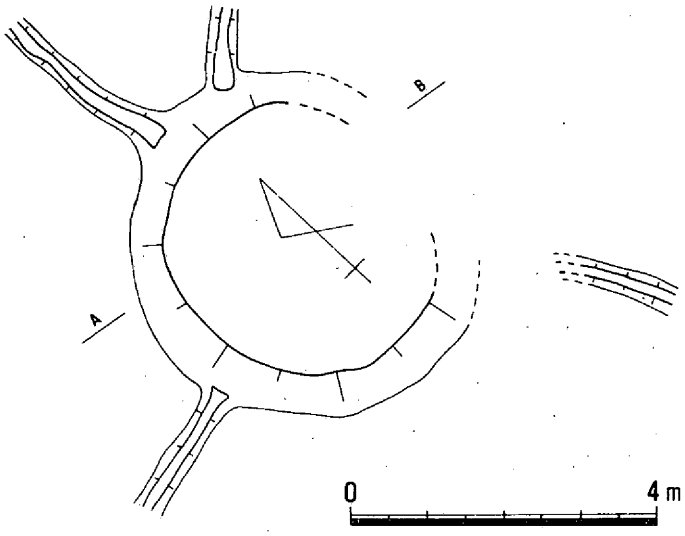
1. 灰褐色粘土(弥生時代後期水田層)
2. 淡灰褐色粘土
3. 淡黄灰褐色砂質土
4. 〃
5. 〃　(上層より灰色強い)
6. 灰褐色泥砂
7. 灰褐色泥砂に淡黄灰褐色土ブロック混入
8. 淡灰褐色泥砂
9. 黄灰褐色砂質土
10. (暗)灰褐色砂質土
11. 黄灰褐色砂質土(弥生時代中期水田層)
12. 淡灰褐色粘質土
13. 暗茶灰褐色粘質土



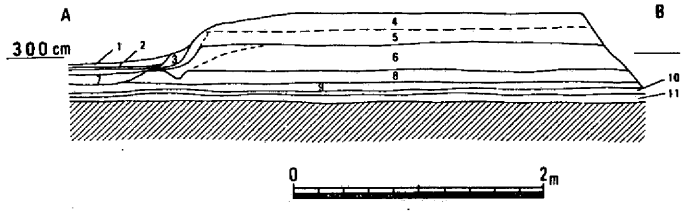


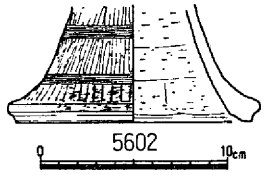
(5598・5600は4層出土，5599は5層出土，5601は12層出土)

第705図　「島状高まり」遺構-6 (1/100・1/60)　・出土遺物



1．灰色粘土(弥生時代後期水田層)
2．淡灰褐色粘質土
3．淡灰褐色砂質土
4．淡黄灰褐色砂質土
5．　〃（上層より灰色強い）
6．灰褐色泥砂
7．淡灰褐色泥砂
8．黄灰褐色砂質土
9．灰褐色砂質土
10．黄灰褐色砂質土
11．淡灰褐色粘質土
12．暗茶灰色粘質土

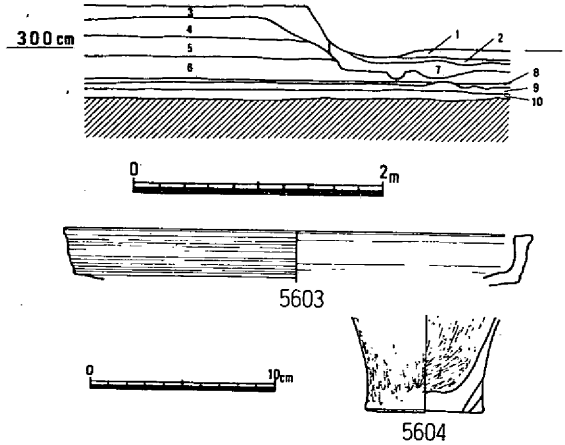




(5602は4層出土)

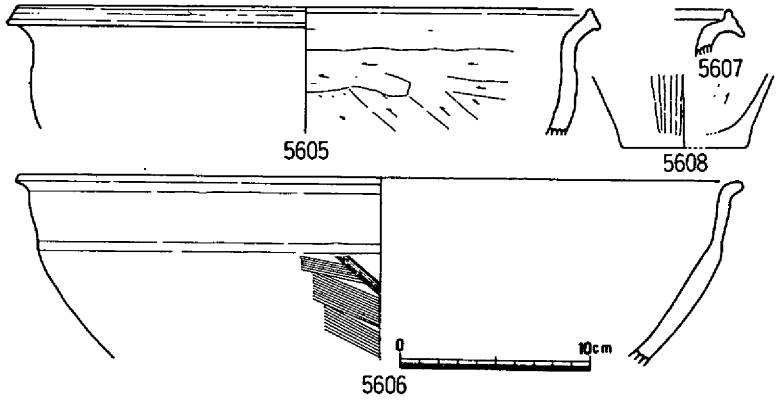
第706図　「島状高まり」遺構-7（1/100・1/60）・出土遺物

300cmの細長い土手状を呈する。この「島状高まり」遺構を挟んで，西側と東側の水田面には約10～30cmの差が認められ，東側の水田が低くなっている。10は上面幅約180～240cm，下端幅約260～300cmで9とほぼ同規模の細長い土手状を呈する。14は一部上面に洪水砂が堆積しており，本来の姿をうかがうことができる。上面幅約30～110cm，下端幅約90～180cmで他の



1．灰色粘土(弥生時代後期水田層)
2．　〃
3．淡黄灰褐色砂質土
4．淡灰黄褐色泥砂
5．暗灰褐色泥砂
6．灰黄褐色砂質土
7．灰褐色粘質土
8．暗灰褐色砂質土
9．淡黄灰色粘土(弥生時代中期水田層)
10．灰色粘土
11．暗茶灰色粘質土
(5603・5604は5層出土)

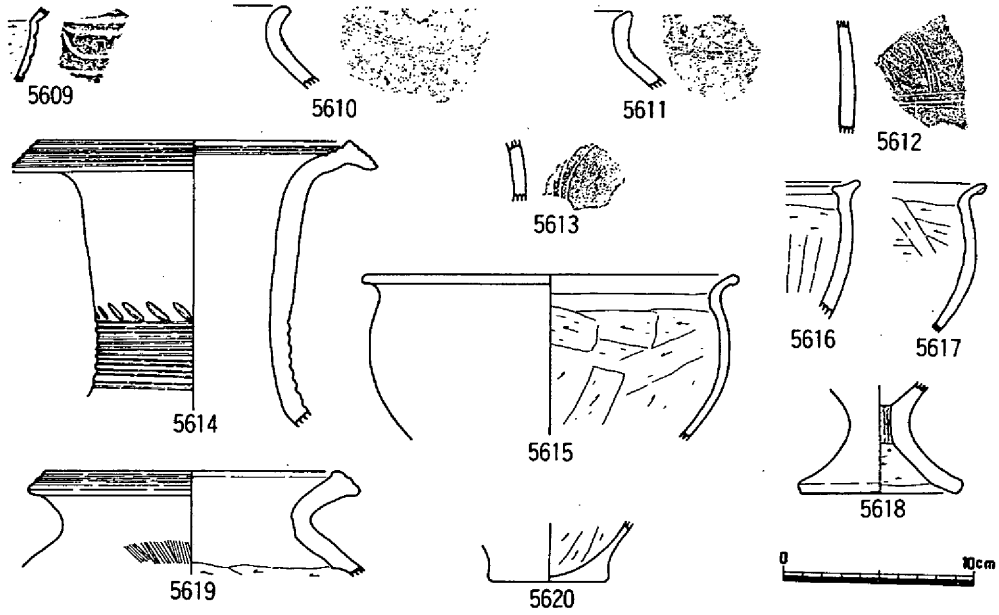
第707図　「島状高まり」遺構-8 断面（27ライン東から）（1/60）・出土遺物



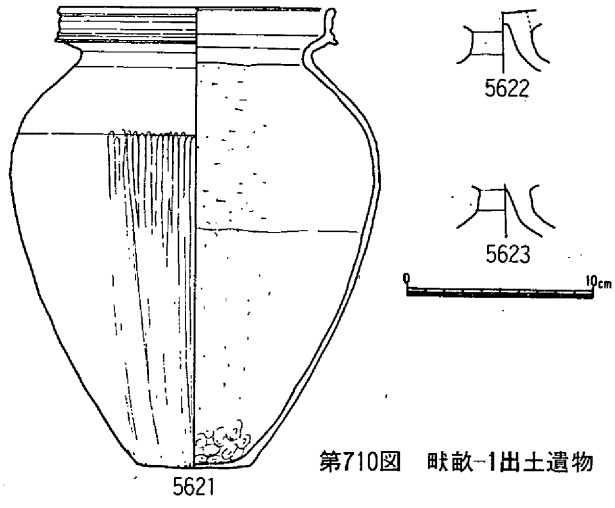
第708図 「島状高まり」遺構-9 出土遺物

ものに比べて小規模である。また水田面からの比高は約20～40cmで検出した範囲のうち中央部分が最も高く，両側にむかって徐々に低くなっている。このようにこの「島状高まり」遺構は大畦畔より一回り大きい畦畔といった形状ではあるが，大畦畔が水田層とほぼ同じ土壌によって形成されているのと異なり，明確に水田層と区別できる土壌をしていることから「島状高まり」遺構と考えておきたい。

一方，これらの「島状高まり」遺構の断面をみると，ほぼ共通した土層関係を示している。すなわち，中央部に水平堆積層が数層認められ，それらが削られたのちに両側部に一・二層の堆積がみられる。また「島状高まり」遺構－8～10においては弥生時代前期～後期の溝が重複して存在しており，さらに5・6・7などでは内部に弥生時代中期の水田層が認められる。こうした事実から，これらの「島状高まり」遺構は削り出しによって形成されたものと考えられる。



第709図 「島状高まり」遺構-10 出土遺物



第710図　畎畝-1出土遺物

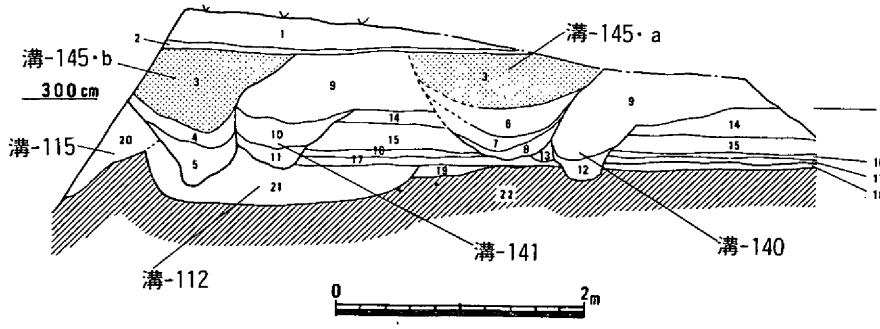
畎　畝－1（第698・710図）

三ノ坪調査区からのびてくる畎畝である。当調査区において検出された部分は，上面幅約90～150cm，下端幅約190～270cmを測る。この畎畝の北側と南側の水田面の高さを比べると，南側の水田面が約20cm低い。また，この畎畝の南端部には，小畦畔を畎畝に並行して設定することによって幅約40cm，深さ約15cmの溝をつくっている。

水路（溝－145・a・b）（第698・711図）

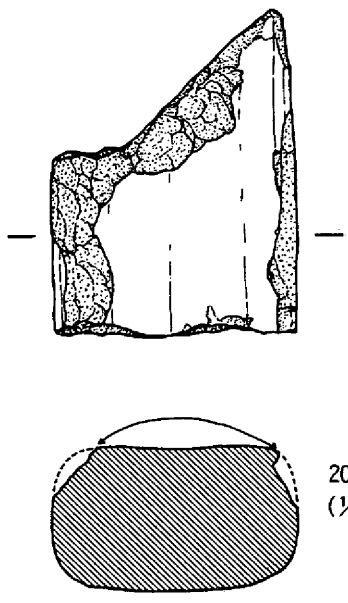
当調査区においては洪水砂によって埋没したと考えられる溝が検出されている。溝－145・a・bがそれである。この溝は「島状高まり」遺溝－8上につくられている。近・現代用水によって切られている部分が多いが，溝－145・aは検出幅約150～190cm，深さは検出面より最大で約80cm，底の高さは海抜約250～260cmである。溝－145・bは検出幅約140～240cm，深さは検出面より最大で約100cm，底の高さは海抜約200～240cmである。流走方向は，全体の一部を検出したにすぎないため明らかではないが，溝－145・bについては底面の高さをみると検出した溝の中央部分が最も高く両側に向かって低くなっている。

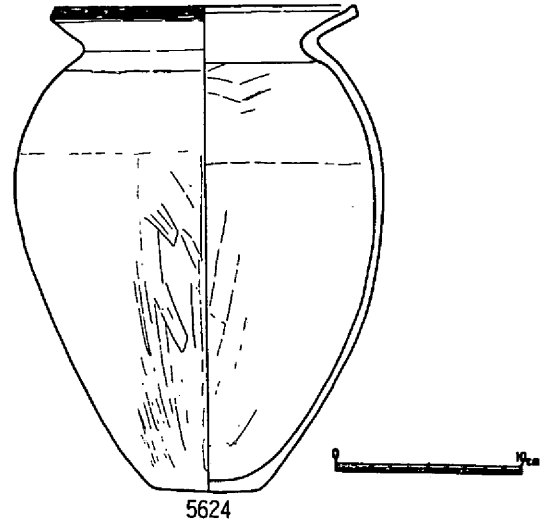
aとbとの関連については必ずしも明確ではないが，溝が掘削された時期にはずれがある可

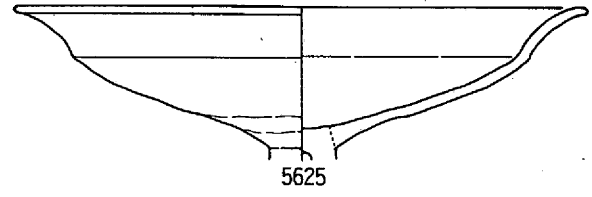


1．現代水田耕作土
2．現代水田床土
3．淡茶褐色微砂
4．灰褐色粘質微砂
5．淡灰色粘土(炭粒を含む)
6．茶褐色砂質土
7．暗灰色粘土（炭粒を多く含む）
8．灰色粘土(炭粒を含む)
9．淡茶灰色砂質土
10．淡灰褐色粘質微砂
11．淡灰色粘土（炭粒を多く含む）
12．淡灰色粘土
13．灰色粘土
14．暗黄褐色砂質土
15．黄褐色砂質土
16．暗褐色粘質微砂
17．灰黄褐色粘質土
18．灰色粘土
19．茶灰色粘土
20．暗灰色粘土
21．灰色粘土
22．暗茶灰色粘質土

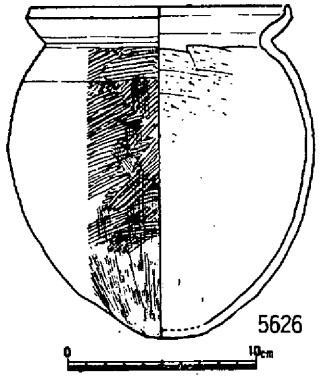
第711図　溝-112・115・140・141・145-a・b 断面（1/60）







第712図　溝-145・a 出土遺物



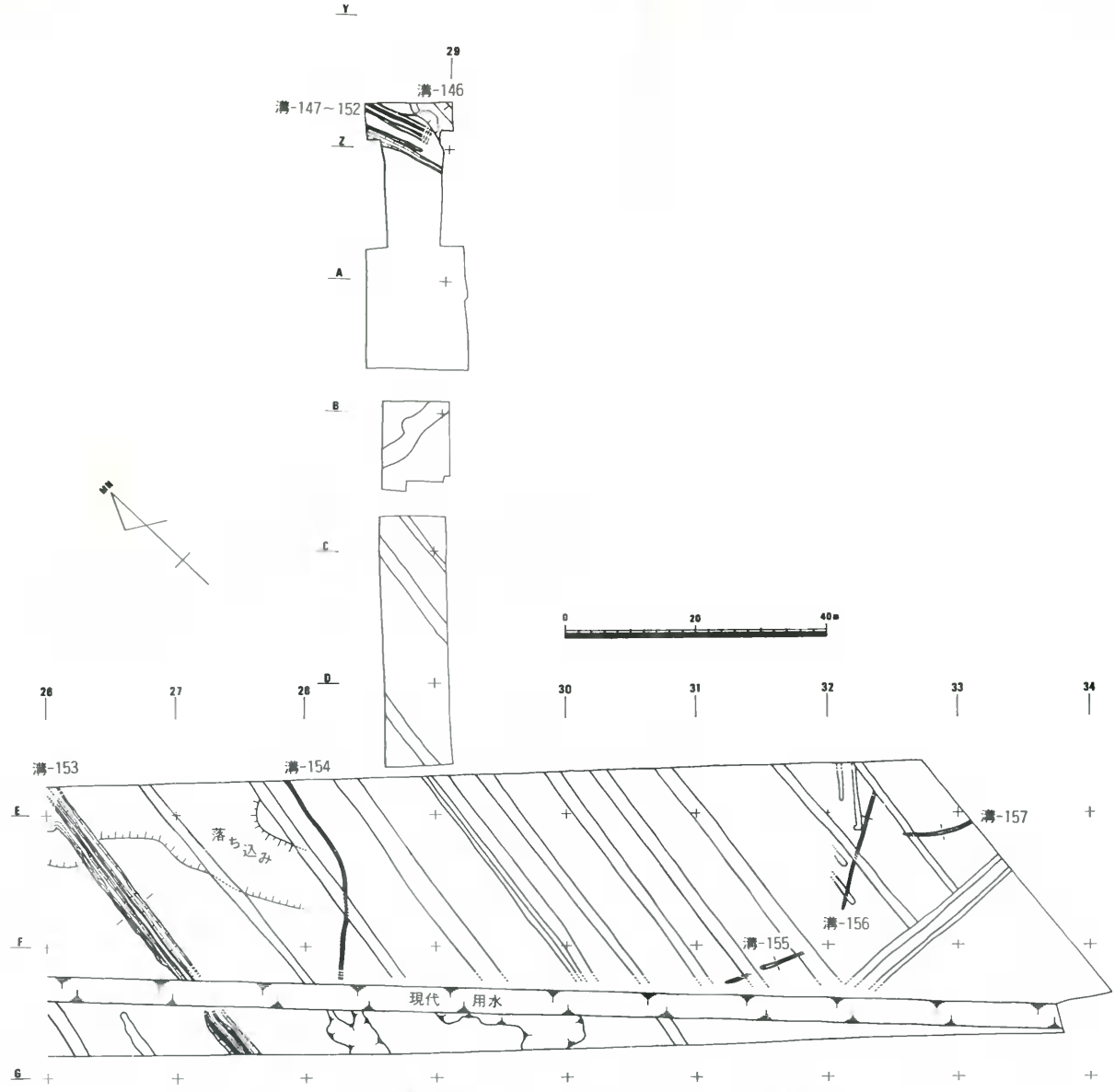
第713図　溝-145・b 出土遺物

能性があるものの，埋没する時点では両者とも機能していたことは洪水砂の堆積により明らかである。

これらの溝内からは図示したような遺物の他に土器の小片が出土している。5626についてはのちの時期の重複する遺構にともなう可能性もあるが，調査時には明確にすることができなかったため，ここではこの溝にともなうものと考えておきたい。しかしながらこれらの遺物がこの溝のいつの時期にともなうものであるのかは明確にすることができなかった。

水田の時期

すでに述べてきたようにこの水田は洪水砂によって一度に埋没している。この洪水の時期が問題となるが，当調査区においては確実にこの洪水砂に伴うと考えられる遺物はほとんどない。一方，この洪水砂の上面に堆積している暗褐色土中からは百・古・Ⅰと考えられる土器が出土している。また，開田以前と考えられる「島状高まり」遺構内出土の土器をみると，「島状高まり」遺構－5の6・7層，および「島状高まり」遺構－6の4・5層から百・後・Ⅱと考えられる土器が出土している。さらに注目したいのは，畎畝－1の最上層中から出土している土器5621である。この土器はほぼ完形のもので，その出土状況から水田の埋没時期に最も近



第714図　川内調査区 古墳時代以降遺構配置図（1/800）

折込 7

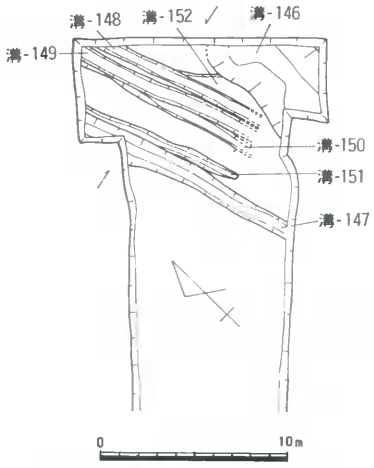
いものと考えられる。以上，当調査区における知見では，この水田は百・後・Ⅱから百・後・Ⅳにかけて営まれていたものと考えられる。（平井）

5. 古墳時代以降の遺構・遺物

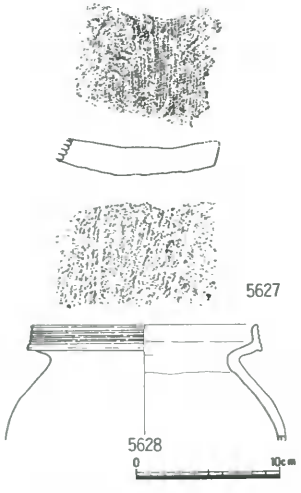
検出された遺構としては溝・溝状遺構および落ち込みがある。これらのうち溝―146・153はほぼ真北方向に走る溝であり，また，両溝の東西方向での間隔をみると，推定ではあるが約110m前後の数値を示している。これらの溝からは古墳時代から近世あるいは近代に至る遺物が出土しているが，旭東平野において復元されている条里制地割にも一致しており注目される。これら以外の溝については検出規模が小さく，また出土遺物もほとんどないため時期・性格とも明らかではない。（平井）

溝―146（第714・715・717図）

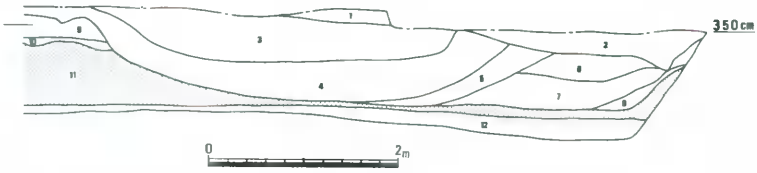
調査区の東端において検出したもので，全長約5mを調査した。最大幅は，約420cmを測る。検出面からの深さは最大で約80cmを測り，溝の断面は，「U」字形を呈する。溝の方向は，ほぼ南北を向くもので，北から南へ流れるものである。出土した遺物は，古墳時代の須恵器から近世初頭の備前焼まである。この溝の北側の流路の延長線上には，現在も使用されている溝がある。それは，かつては，一本の溝であったものが，百間川の築堤時にその使用が中止された



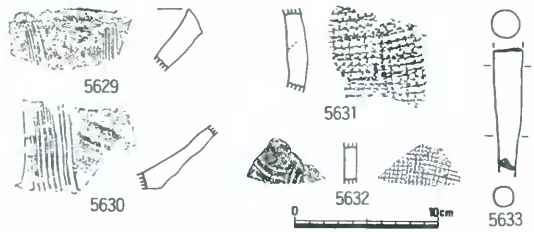
第715図　川内調査区土手樋門地区古墳時代以降遺構配置図（1/300）



第716図　溝-151 出土遺物



1. 淡青灰色砂
2. 淡青灰褐色微砂
3. 青灰色粘質微砂
4. 淡青灰色粘質微砂
5. 青灰色粘質微砂
6. 青灰色微砂
7. 青灰色粘質微砂
8. 暗青灰色粘質微砂
9. 淡黄灰褐色微砂
10. 暗茶灰色粘質土
11. 淡灰褐色砂
12. 灰色粘土（水田層・弥生時代後期）



第717図　溝−146 断面（北東壁）（1/60）・出土遺物

ものと考えられ，使用の下限を，そこに求めることができる。上限については，明確にすることはできないが，溝−147〜152よりは新しいものである。

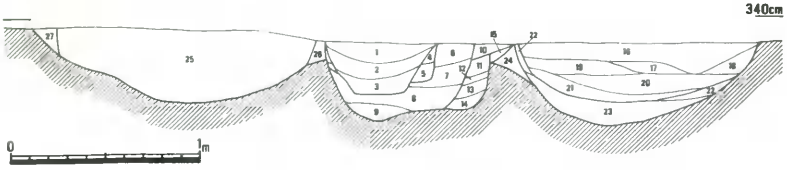
溝−147（第715図）

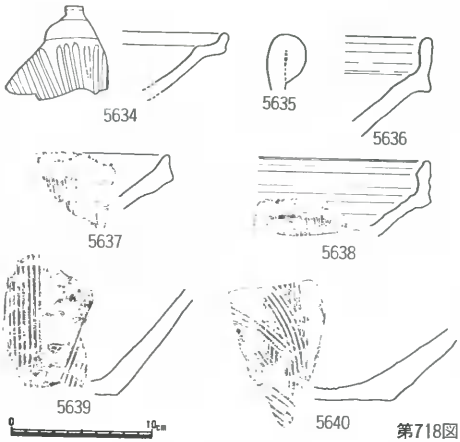
溝−146の西約4mの位置に検出したもので，北北西から南南東に流れるものである。溝は，弥生時代後期末の洪水砂に掘り込まれたもので，検出面での最大幅は約90cm，深さ約60cmを測る。溝の断面を見ると，逆台形に近い形状を呈しており，埋積土は十種に分けられる。調査した全長は，12.4mを測る。

溝−148〜151（第687・715図）

溝−147の流路とほぼ並行するもので，溝−147よりは古い一群と考えられる。溝は，いずれも弥生時代後期末の洪水砂に掘り込まれるものであるが，検出した深さは浅く，10〜30cmを測る。溝の断面は，いずれも「U」字状に浅くくぼむものである。一部に切り合いが見られるが，溝に埋まる土は，明確には層位は成さず，ほぼ一種であり，その埋積する土からすれば，時期的には，近接するものと考えられる。溝−151からは第716図に示す布目瓦片が出土しており，下限をおおむね奈良時代の末頃に求めることができるものと考えられる。

溝−152（第687・715図）





1. 暗青灰褐色砂泥
2. 暗青灰褐色泥砂
3. 暗青灰褐色砂泥
4. 暗灰褐色砂泥
5. 淡黄灰褐色砂
6. 灰褐色砂泥
7. 灰褐色泥砂
8. 灰褐色砂質土
9. 暗灰褐色砂
10. 淡黄灰褐色泥砂
11. 淡灰褐色泥砂
12. 淡黄灰褐色泥砂
13. 灰褐色泥砂
14. 黄灰褐色砂泥
15. 淡灰黄褐色粘質土
16. 灰褐色砂泥
17. 淡灰褐色砂
18. 灰褐色砂泥
19. 淡灰褐色細砂
20. 灰褐色粘質土
21. 淡青灰褐色土
22. 灰褐色粘質土
23. 淡青灰色粘土
24. 淡黄灰褐色砂質土
25. 淡青灰褐色粘質土
26. 黄灰褐色泥砂
27. 淡黄灰褐色粘質土

第718図　溝-153 断面（1/30）・出土遺物

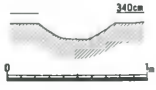
一群の溝が見られる中では最も古いものであるが，残存状態は悪い。流路方向は，北西から南東であり，検出した最大幅で約1.1mを測る。検出した深さは，約10cmである。（井上）

溝－153（第714・718図）

D-25南東隅からF-27にかけて検出された。大別すれば3本の溝に分けられ，12以上の時期に細分できる。流路は真北にのっており，同様の状況を示す溝との距離からも，条里制を留める溝と考えられる。北端部では，西寄りの溝に2か所の拡幅部分が認められた。

遺物は，龍泉窯系青磁盤5634，備前焼甕5635・擂鉢5636～5640が出土しており，これらの示す年代の上限は14世紀代に求められる。溝の廃絶は近代以降に下る。

溝－154（第714・719図）

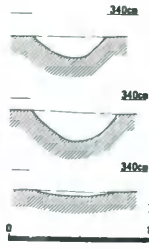


第719図 溝-154 断面(1/40)

D-27南東隅からF-28にかけて検出された。流路は，D-27からほぼ南へ向かい，E-28中央部で南西方向へ振ってほぼ直進する。弥生時代後期末の水田を埋没させた洪水砂を切っており，幅50～65cm，深さ10～15cmを測る。南北両端での高低差はほとんどない。堆積土は暗灰褐色粘質土であり，時期は他の暗灰褐色粘質

土の堆積する遺構と同様に考えられるが，それらとの直接の関係は不明である。　（光永）

溝—155～157（第714・720図）



溝—155はF-31において検出された。検出した溝の幅は40～60cm，深さは検出面より15cm前後を測る。溝—156はD-32・E-32において検出された。検出した溝の幅は30～50cm，深さは検出面より20cm前後である。溝—157はE-32・33において検出された。検出した溝の幅は40～55cm，深さは検出面より5cm前後である。これらの溝はいずれも検出した規模が小さく，詳細は不明であるが，埋土はいずれも灰色粘土であり，土層関係から，時期は古墳時代以降であると考えられる。

第720図　溝—155～157断面（1/40）

（平井）

落ち込み（第714図）

E-26・27の北半部からD-26・27にかけて検出された。弥生時代後期末の水田を埋没させた洪水砂の上面に暗灰褐色粘質土が，最大20cmの厚さで堆積したものであり，人為的なものとは考え難い。時期は，暗灰褐色粘質土が堆積する他の遺構と同様に考えられる。　（光永）

近世～近代溝

第714図に示したほぼ南北—東西方向に直線的に走る溝は，現在の水田層を除去した後に検出できた溝である。おもに細砂・粗砂で埋没しており，埋土中からは備前焼・唐津焼・伊万里焼など近世～近代の遺物が出土している。これらは現在の水田以前の水田にともなう用水路であると考えられる。

6. 遺構にともなわない遺物

第721図の201はサヌカイト製の打製石庖丁，202・203はサヌカイト製の石鏃である。201・202はF-31の弥生時代後期の水田層中より出土している。203は表採である。　（平井）

第721図　遺構にともなわない遺物

第4節　三ノ坪調査区

1.　三ノ坪調査区の概要

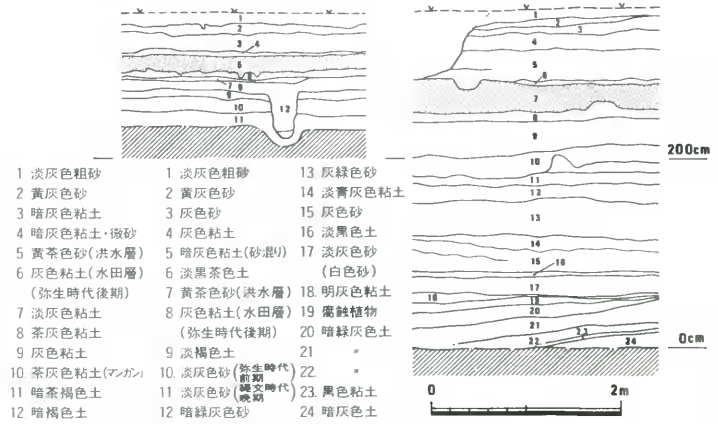
調査地区は岡山市原尾島三ノ坪に所在し，一部が東側の横田に含まれている。

国道2号線にかかる百間川橋の橋脚が三ノ坪のほぼ中央に構築されており，かつて橋脚工事中に遺物が発見され，百間川遺跡B地点（註1）と呼称された場所である。

調査地区は長さ約180m，幅約40mの中央低水路にあたり，南東に流走する水路が流路を東に変えるゆるい屈曲部分に位置する。調査面積は約7140㎡を測る。調査は昭和54年度に1班，昭和55年度に2班が分担して実施しており，両地区にまたがる関連遺構の有無が不明の状態で終了した部分が少なからず認められた。出土遺物はコンテナ58箱である。

さて，現場は工事前には水田として利用されており，北西で海抜370cm，南東で海抜340cmを測る。南東に向かって緩やかに傾斜する形状を呈し，現代の百間川用水もその形状に即して東に流走している。

層序の説明を加えると，北壁断面（第724図）をみて理解できるように全体に一様ではなく，微高地・低地が樹枝状に存在するわけである。第722図に掲載した土層断面は，その微高地部分と低地部分の柱状図である。前者4層が後者の6層に匹敵し，出土遺物より6世紀中葉以前と考えられる暗灰色粘土・微砂層である。

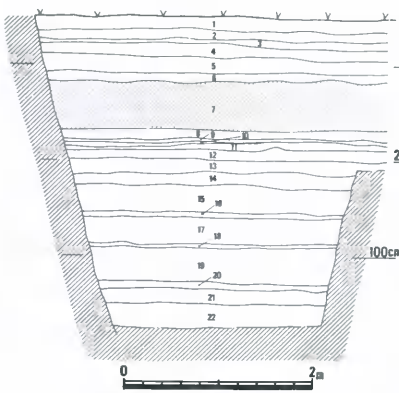


第722図　三ノ坪調査区土層断面（1/60）

前者5・6層が後者7・8層に対応できる黄茶色の洪水砂層と灰色粘土の水田層である。ここまでの層序は両者がほぼ対応する関係にあるが，水田層より下位は異りを見せる。とくに低地部は地表下355cmまで掘り下げを行ったが，微高地下位に認められる基盤層は確認不可能であり，流出した可能性も考えられる。低地部の土層断面は西に傾斜する下位の斜面堆積より，地表下約300cmにて水平堆積に変化し，地表まで同様の堆積を示す。弥生時代前期，縄文時代晩期の土器片は10層から21層間に散布した状態で出土している。弥生時代前期土器片は10層，縄文時代晩期の凸帯文土器片が11～13層中から出土している。13層より下位の各層には白色砂粒の混在が認められる。21層中には原下層式の第二類（註2）と呼称される縄文時代晩期の土器片が確認できた。第723図は調査区東端部の土層断面であり，第722図に比べて水田層が東に下降してゆくことが理解できる。8層が弥生時代後期水田であり，畦畔の見える12層が弥生時代中期の水田である。下位はほぼ水平堆積が認められ，第722図に対応する黒色粘土の細い帯が存在する。

遺構は弥生時代前期の溝・土壙，弥生時代中期の溝・井堰・水田・土壙，弥生時代後期の溝・水田・用水路・「島状高まり」遺構，古墳時代の溝・柱穴列・土壙，中世の土壙，近世・近代の溝が確認されている。周辺の調査区と比較すると溝の集中度が著しい傾向をみせる。とくに弥生時代前・中期の溝の数が多く，後期になると一か所にまとめられているようである。そして，再び古墳時代に溝の数が増加するが，規模は小型化しており，それに伴う施設と考えられる柱穴列が並行して多く認められる。

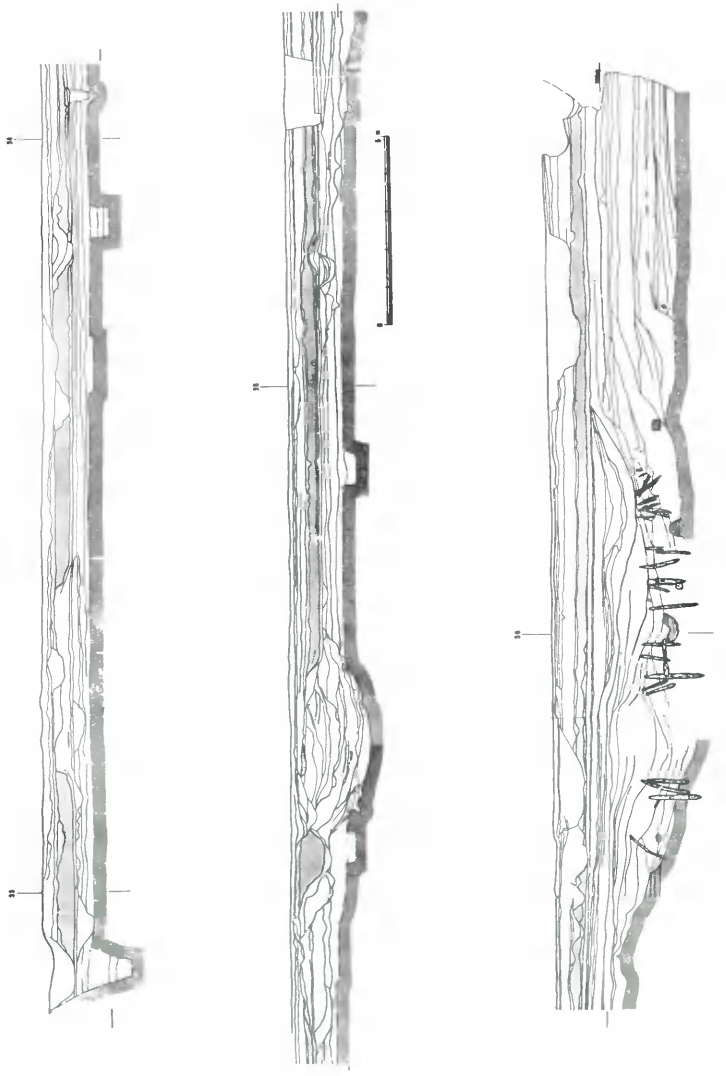
中世の溝は確認していないが，坪名と考えられる「二ノ坪」，「三ノ坪」を南北にわける現代の溝が調査区西端を流走している。



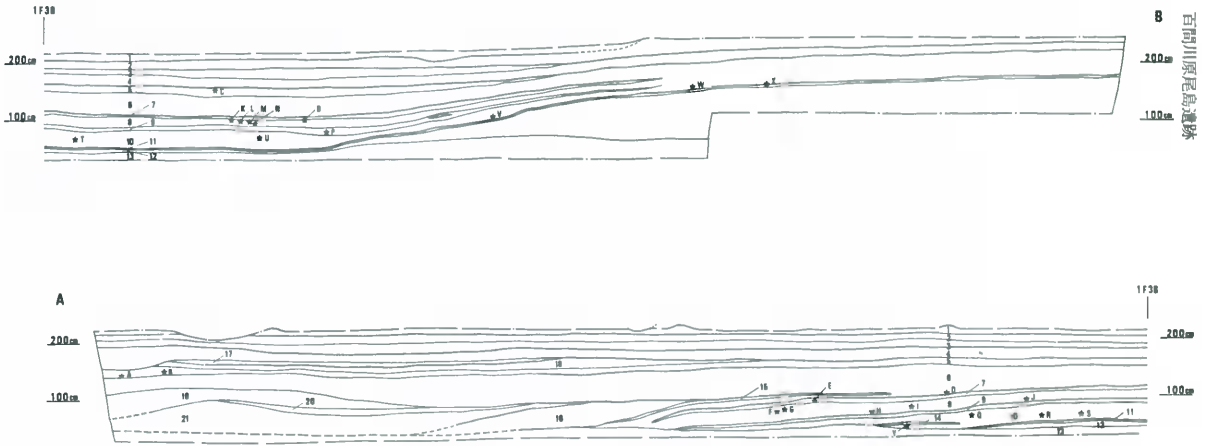
第723図　三ノ坪調査区土層断面（1/60）

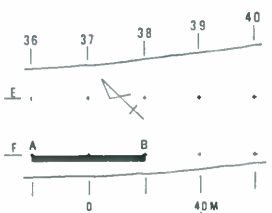
近世・近代とくに近代と考えられる直線的に整備された小溝が調査区全域を走っている。弥生時代前期より近世・近代までの総遺構数は，155を数える。（高畑）

1. 暗灰色微砂
2. 黄灰色粗砂
3. 灰白色粘土
4. 灰色粘土(鉄分)
5. 暗灰色粘土
6. 暗褐色微砂
7. 黄茶色砂(洪水層)
8. 淡灰色粘土(水田層)(弥生時代後期)
9. 黒灰色粘土
10. 暗灰褐色粘質土
11. 黒灰色粘質土
12. 灰白色粘質土(水田層)(弥生時代中期)
13. 青灰色微砂
14. 暗灰色粘土
15. 淡緑灰色粘土
16. 黒灰色粘土
17. 緑灰色粘土
18. 黒灰色粘土
19. 青緑灰色粘土
20. 黒灰色粘土
21. 暗青緑灰色粘土
22. 茶褐色ピート



第724図　32～37北壁土層断面（1/100）



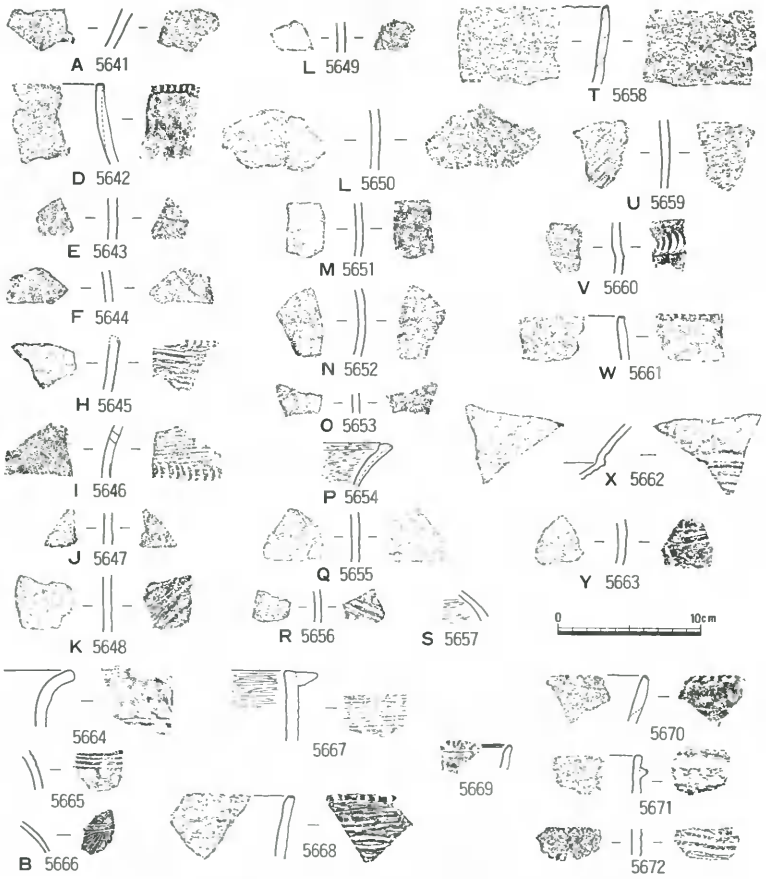


1. 青緑灰色粘土
2. 青緑灰色粘質土
3. 暗青緑灰色粘質土
4. 暗灰色粘土
5. 暗青灰色粘土
6. 青緑灰色粘土
7. 黒灰色粘土
8. 青緑灰色粘土
9. 黒灰色粘土
10. 青緑灰色粘土
11. 茶黒灰色粘土
12. 青緑灰色粘土
13. 茶褐色ピート
14. 茶黒灰色粘土
15. 黒灰色粘土
16. 暗灰色粘質微砂
17. 青灰色粘土
18. 青緑灰色粘土
19. 青灰色粘質微砂
20. 暗青灰色微砂
21. 青灰色細砂

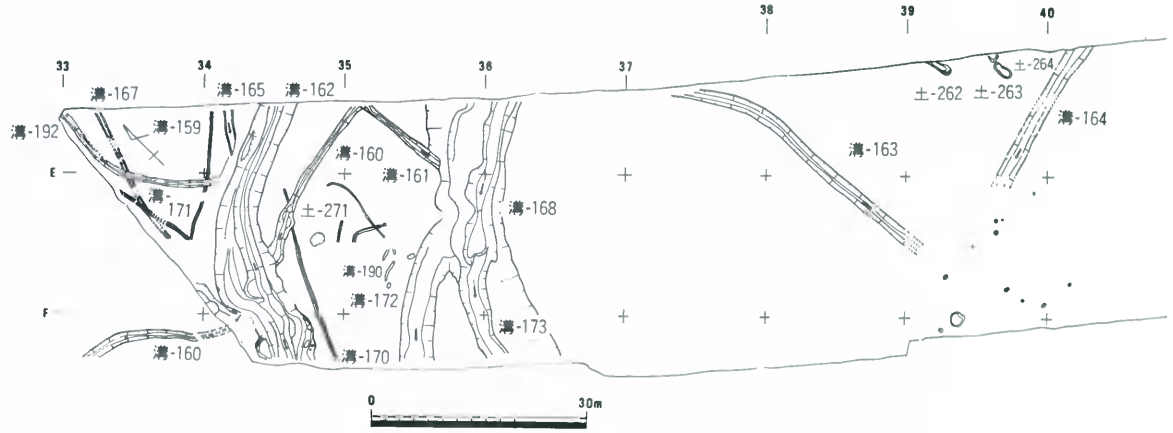
第725図　トレンチ北壁土層断面（1/100）

2. 縄文時代の遺物

F−37・38のトレンチ中より縄文時代晩期の土器が出土している（第725・726図）。図示した土器は5641・5664〜5667は弥生時代前期，5643〜5663・5668〜5672は縄文時代晩期のものである。5666はヘラ描きの木葉文を施している。出土した層位については図示したとおりであるが，Cは弥生時代前期，Gは縄文時代晩期の土器であった。また5664・5665・5667は4・5・17・18層から，5668〜5672はそれより下位の層から出土したものである。　（平井）



第726図　トレンチ出土遺物



第727図　三ノ坪調査区　弥生時代前期遺構配置図（1/800）

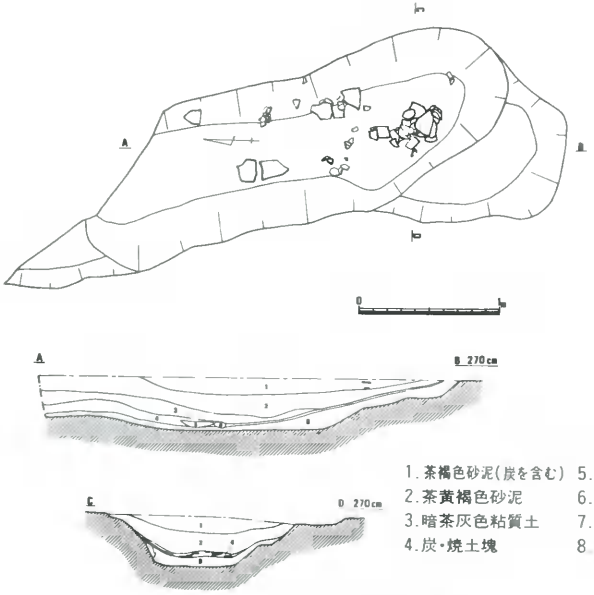
3.　弥生時代前期の遺構・遺物

（1）　土　　壙

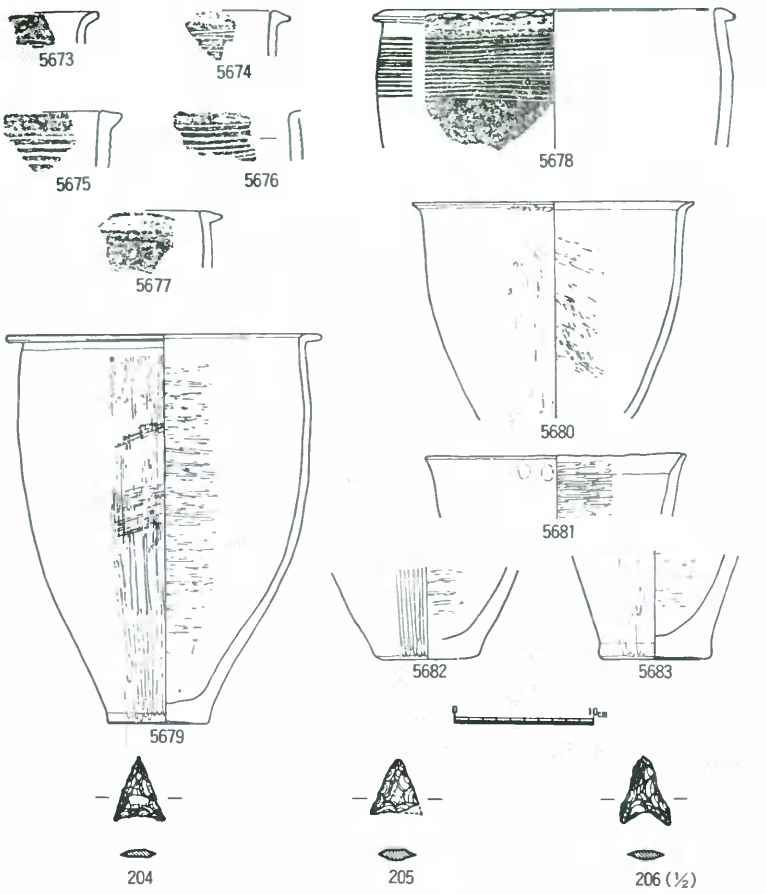
土　壙−262（第728・729図，図版25）

この土壙は，調査区北側の微高地残存部上に検出されたものである。土壙は，北側が調査区外のため長さは400cm以上のもので，幅は約100cmの細長い平面形を呈する。深さは約35cm残存していた。堆積層下部の4層には，炭および焼土・灰が多量に認められた。また，7層は，小石及び砂粒の堆積層で土壙南側に検出されたものである。

出土遺物は，4層に甕を中心として土器が多く出土した。図示した土器は，4層からのものであり，石鏃も3点出土している。さらに，注目すべきこととして2〜4層からガラス滓が出土した。このように，焼土・炭・灰，さらには小石及び砂粒とともにガラス滓が検出された状況は，百間川今谷遺跡と酷似している。この土壙の時期は，出土した土器からみて百・前・Ⅲと考えられる。　　（中野）



第728図　土　壙−262（1/40）



第729図　土　壙-262　出土遺物

表-2　ガラス成分表（苅谷道郎氏((日本光学工業株式会社))による成分分析）

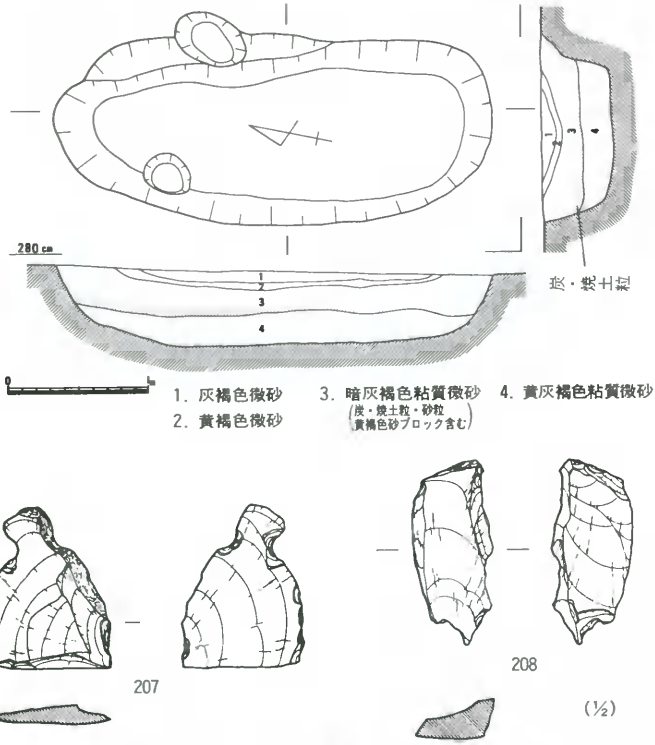
成分	SiO_2	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	SrO	ZnO	MnO	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	P_2O_5	cl	S	乾燥減	灼熱減
%	47.86	3.82	1.43	3.69	2.43	0.12	<0.01	0.25	11.83	2.44	0.70	1.81	0.21	<0.01	2.26	8.26

土　壙—263（第730・731図）

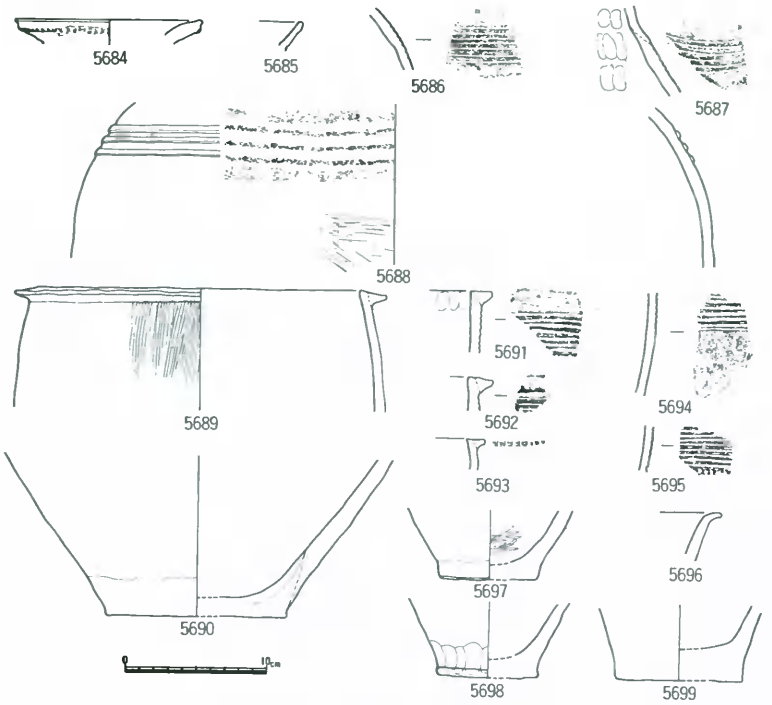
D-39の北端ほぼ中央部，土壙—264の南側において検出された土壙である。平面形は約310×130cmのほぼ隅丸長方形を呈し，深さは最大で検出面より約50cmを測る。北東部の肩口は段状を呈し，主軸はほぼ南北方向である。埋土は四層確認できる。3層の最下部には炭粒・焼土粒が集中しており，大きく3層と4層とで分離できるものと考えられる。また，この土層断面から考えて，この土壙は意識的に埋められたものと思われる。

出土遺物としては，石器207・208，土器5684～5699がある，207は石匙で3層の最下部より出土している。石器は図示した以外にも完形品でないものが数点出土している。出土した土器は弥生時代前期のものがほとんどであるが，縄文時代晩期の土器片も数点出土している。

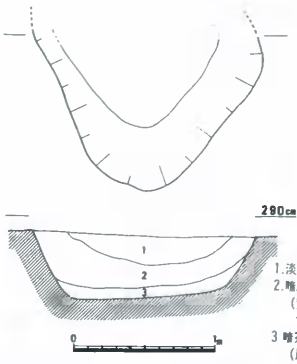
これらの土器の時期は，ほぼ百・前・Ⅲであると考えられる。



第730図　土　壙-263（1/40）・出土遺物（1）



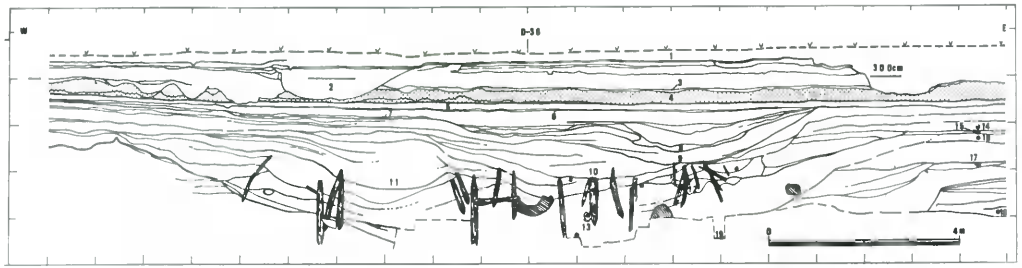
第731図　土　壙-263 出土遺物（２）



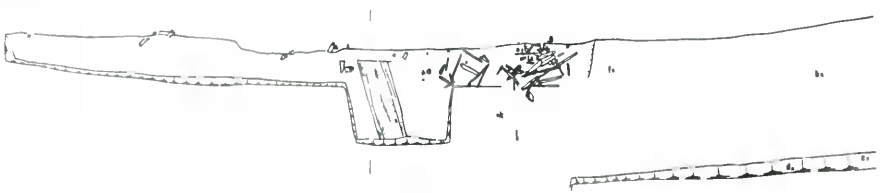
第732図　土　壙-264（1/40）

土　壙―264（第732図）

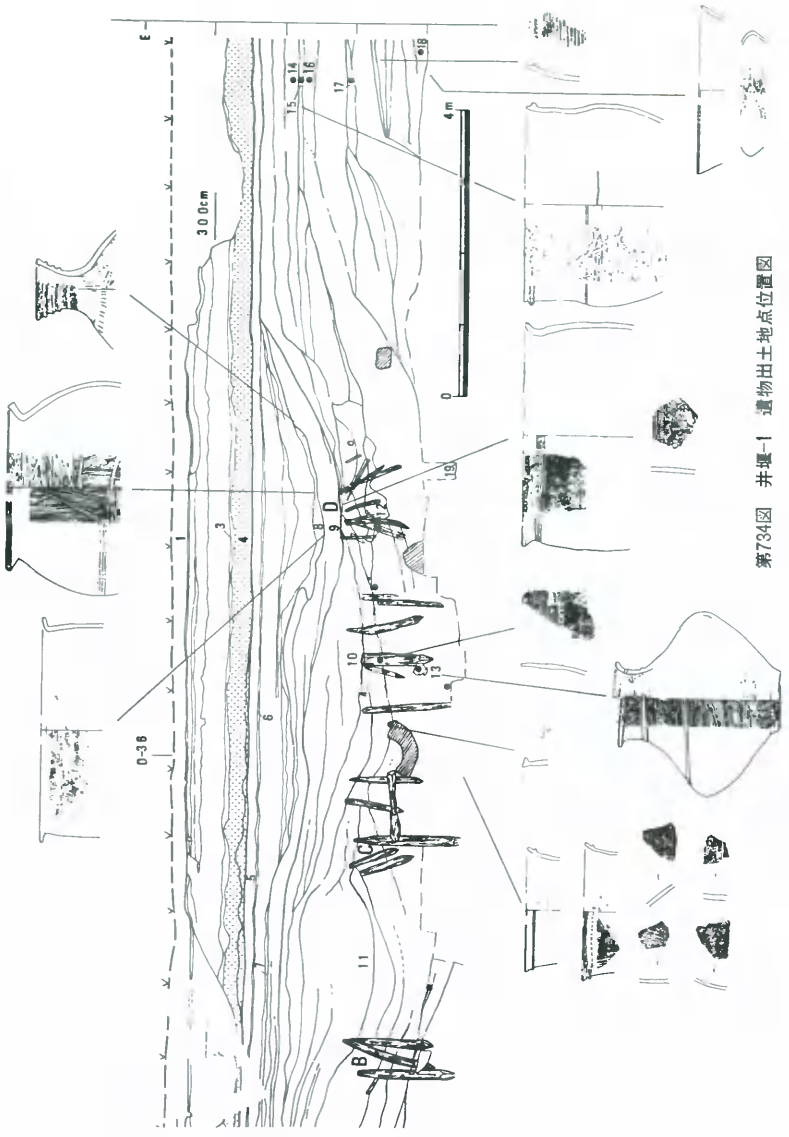
D-39 の北端部中央において検出された土壙で，一部調査区域外にのびるため全体を明らかにすることはできなかった。検出できた部分の平面形は不整形で，深さは最大で検出面より約 46cm を測る。断面形は逆台形を呈し，埋土は三層認められた。時期は，土器などの出土遺物がほとんどないため明らかではないが，土層関係から弥生時代前期で，ほぼ土壙―262・263と同じ時期であると考えられる。　（平井）



1．淡灰色粗砂
2．黄灰色砂(近世溝)
3．淡黒茶色土(古墳時代包含層)
4．黄茶色砂(洪水砂層)
5．灰色粘土(水田土層，弥生時代後期)
6．淡黒色土
7．淡灰色砂質土(百・後・Ⅱを含む)
8．暗灰色粘土
9．淡灰色砂
10．暗灰色砂(腐蝕植物混入)
11．灰青色粘土(粗砂ブロック)
12．灰色粘土
13．腐蝕植物
14．淡灰色砂(弥生時代前期)
15．淡灰色砂(縄文時代晩期凸帯文を含む)
16．暗緑灰色砂
17．淡青灰色粘土(縄文時代晩期凸帯文を含む)
18．暗緑灰色土(縄文時代晩期爪形文を含む)



第733図　溝-158・井堰-1 (1/120)



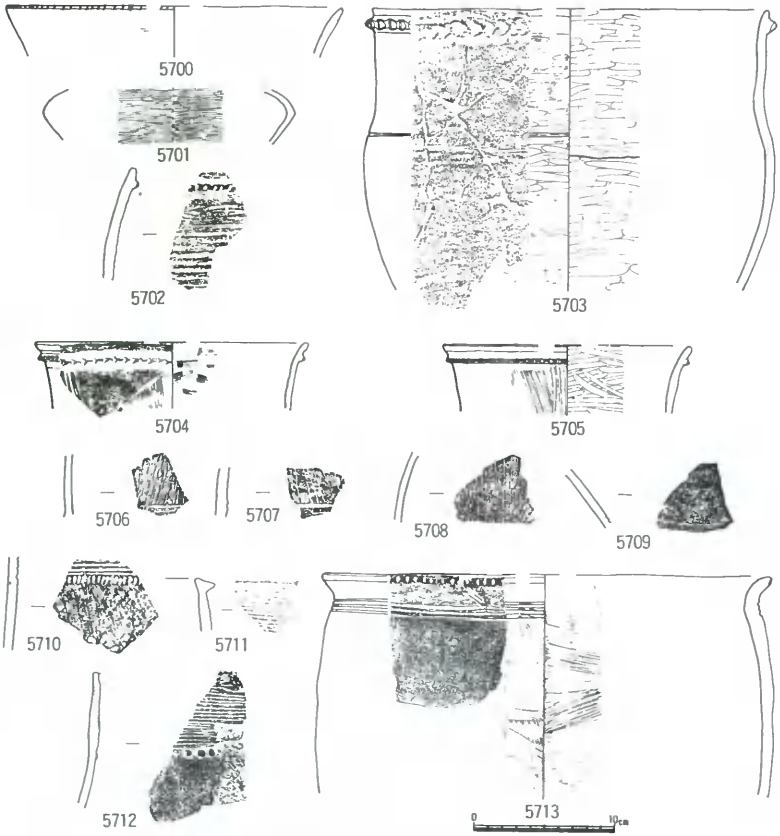
第734図　井堰－1　遺物出土地点位置図

（2）　溝

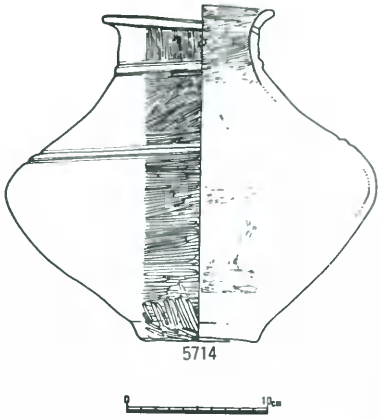
まず，個々の溝の説明に入る前に溝の切り合い，および形状が複雑な様相を呈していることに鑑み，溝—168・172・173，井堰—1等の重複，形状を簡単に整理しておきたい。

これらの溝の存在する地区は36線を中心にしており，縄文時代晩期の溝（河道），弥生時代前期の井堰・溝，弥生時代中期の溝が重なり合って検出され，同一場所を継続して利用している。

本来は35・36線中間地点より38線付近までの幅約60m以上を測り，南東に開口する凹地地形を呈していたと考えられる。そして，凹地に土砂が徐々に埋没（堆積土下位には縄文時代晩



第735図　溝-158 周辺出土遺物



第736図　溝−158 出土遺物

期土器片を包含）してゆく過程で河川が西岸におしやられた状況を示している。すなわち，微高地硬土が河川の右岸となり以後川岸としての機能の継続が認められる。とくに，海抜0m以下の微砂中からは縄文時代晩期凸帯文土器片，石器類がユンボのバケツにより採取され，溝の機能はおおよそ縄文時代晩期まで遡りうる可能性を示している。そして，溝の埋没後に幅約15m，深さ1mの新しい溝が掘られ，その内側に流路と直交する格好で幅約10mを測る大規模な井堰−1が設けられている。その井堰の杭が打ち込まれた時点で破砕されていた土器が13層の**5714**であり，井堰が機能していたと考えられる時点の土器が**5711**・**5712**等の百・前・Ⅲの古相に比定できるものである。

さらに上層に幅約8m，深さ1.1mを測る弥生時代前期の溝−168が存在しており，東側が深く，西側が浅い形状を呈する。この溝に切られた溝−169から**5710**の土器が出土しており，溝の年代を百・前・Ⅲの古相より若干新しく考えることが可能である。

さらに上層に溝−169を踏襲し，**5966**の土器を出す百・中・Ⅰの新相の溝−172が存在する。

ここでは，時代が新しくなるにつれて溝底が高くなり，溝幅が狭く，川筋が東側に移動する状況が認められた。縄文時代晩期の溝（河道），弥生時代前期の溝−158，井堰−1，溝−168，溝−172・173の順序に変化していったと考えられる。

溝−158（第733・735・736・752図，図版−35・36）

36線上にあり，南に流走する大型の溝である。最大幅約15m，深さ約1mを測り，溝底は二筋の流路の存在が考えられる。溝底ほぼ中央にあたる部分が西側溝底より約70cm突出し，流れを二本に分けている。西側溝底の海抜0m，東側溝底は海抜30cmを測り，両者にまたがる格好で流路に直交して全長約10mの井堰が付設されている。

井堰は西側端のA，東側端のD部分の杭頭が川の中央に向かい斜位に打ち込まれており，護

岸の役目を果していたものと考えられ，他の杭はすべてほぼ垂直に打ちこまれている。その状況は二つの流路を意識した杭の打ち込み構造を呈しており，B・C，C・D(第734図）の両者の関係がそれぞれの流路に対応し，さらに両者が一体化して機能していたと考えられる。

使用されている杭は丸太の先端を鋭く尖らせたものが主流をしめ，護岸施設にあたるD部分に約70°の角度で打ち込まれているものに3～4㎝角の割材が利用されている。丸太は直径9～17㎝を測り，10㎝前後のものが多く，杭の長さは150㎝が最も長く100㎝を前後するものが多い。

調査区の関係で検出状況が井堰の一部のみに限定されていたため，約20本ほどの杭を確認するにとどまり，水利調整構造の具体性を把握することは不可能であった。

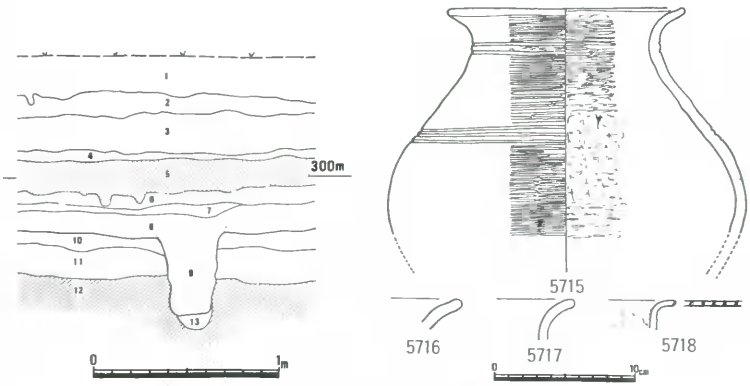
井堰の機能していた時期を百・前・Ⅲの範疇と捕えておきたい。

溝－159（第737図，図版36）

34線に沿って南西に流走し，上端幅約35㎝，深さ約40㎝，溝底海抜高228㎝を測る細い溝である。その流路は弥生時代前・中・後期の溝と並行し，流走方向を同一にしている。

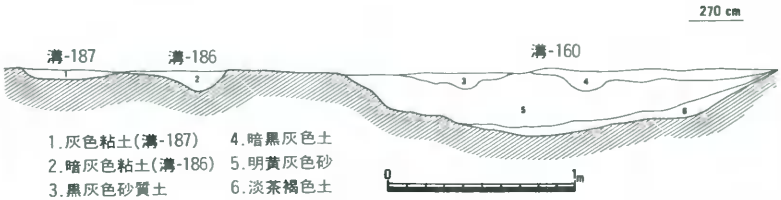
弥生時代後期の溝－192に切られており，その交点に近い東側部分より壺のほぼ一個体分が破砕された状態で出土している。若干，器種の異る小片も含んで，9層上面の40×50㎝の範囲内に限定されている。溝内において他には遺物は皆無であった。

溝－159の廃絶期は百・前・Ⅱに比定できる。

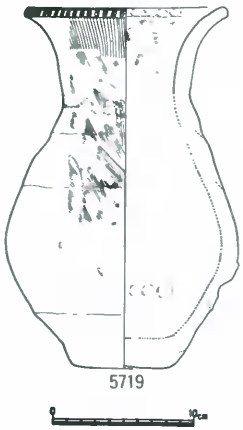


1．淡灰色粗砂　4．暗灰色粘土・微砂　7．淡灰色粘土　10．灰色粘土
2．黄灰色砂　5．黄茶色砂(洪水層)　8．茶灰色粘土　11．茶灰色粘土
3．暗灰色粘土　6．灰色粘土(水田層)　9．暗褐色土　12．暗茶褐色土
13．青灰色粘土

第737図　溝-159（1/30）・出土遺物



第738図　溝-187・186・160（1/30）



第739図　溝-160 出土遺物

溝—160（第738・739図）

D・E・F-34にかかり西に流走する溝である。検出長は約25mを測り，溝—171を越えて二ノ坪（川内調査区）に延びている。北壁付近で溝—161により切られており，近似する時期の切り合い関係をもっている。

溝幅は若干広狭があり，広い部分で約240cm，深さ28cm，狭い部分で約80cm，深さ30cmを測る。溝底は傾斜する地形に並行して掘開されているにもかかわらず，ほぼ平均した高さを示し，海抜高約220cm前後を測る。

溝内の遺物は一点のみであり，壺の完形品が倒立した状態で出土している。

時期は百・前・Ⅲに比定できる。

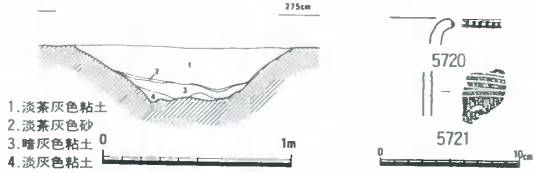
溝—161（第740図）

D-35南東に位置し，北側で溝—160を切って造られている。そこより南に流走して溝—168に注ぎ込むと考えられる溝である。

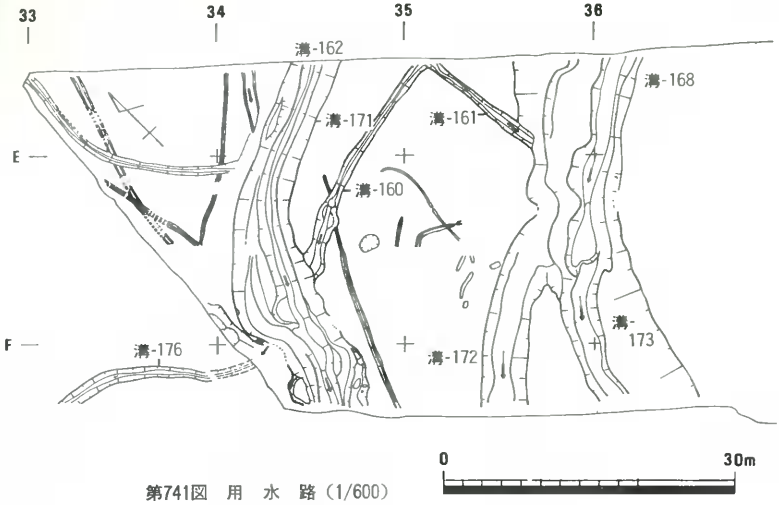
溝幅は東に行くにしたがい広くなり，35～55cm，深さも16～25cmと変化し，溝底東端の海抜高は215cmを測る。断面形は逆台形を呈し，1層中より土器小片3点が出土している。5720・5721と，他1点が縄文時代晩期の深鉢の小片である。

時期は百・前・Ⅲに比定できる。

溝—160・161ともに弥生時代前期大溝に流



第740図　溝-161（1/30）・出土遺物



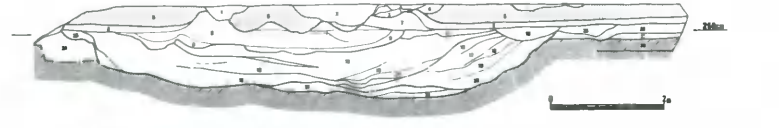
第741図　用　水　路（1/600）

れ込む共通点を有し，弥生時代中期に認められる溝—171・190，溝—168・176の関係に似る。

溝—162（第742～744・756図，図版37）

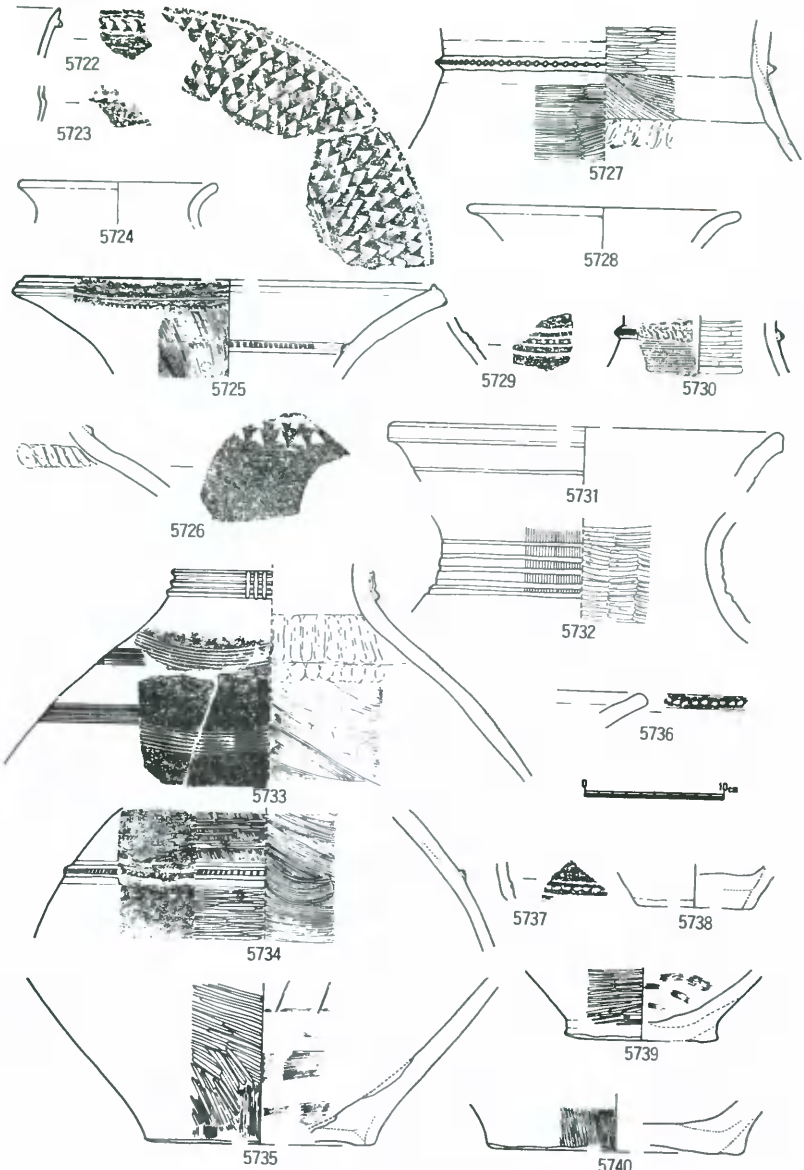
34・35線間に位置し，南西に流走する大溝である。井堰—2を伴う溝—171が同一流路を拡幅利用しており，本来の溝幅については確認することが不可能である。しかし，流路内全般を通して左岸よりに弥生時代前期の遺物を含む21・22層の凹部が存在する。それより，左岸部はあまり拡張されておらず，弥生時代中期の拡幅は右岸部を中心に実施された可能性が強い。

推定復元では溝幅約460cm～710cm，深さ約120cmを測り，溝底の海抜高は120～130cmとほ



1. 淡黒色砂(古墳時代)
2. 灰黒色微砂(溝-198)
3. 黒色微砂(溝-212)
4. 淡黒色微砂(柱穴)
5. 茶灰色砂(洪水砂層)
6. 灰色粘土(水田土層)(弥生時代後期)
7. 黄茶灰色粘土
8. 淡緑灰色粘土
9. 暗灰色粘土(溝178~184)
10. 暗灰色微砂(溝-187)
11. こげ茶色土
12. 灰色粘土・砂
13. 灰色砂(炭を含む)
14. 暗灰色砂
15. 灰色砂(弥生時代中期)
16. 暗茶褐色土
17. 淡茶色土
18. 暗茶色土
19. 灰色粘土
20. 暗灰色砂質土
21. 黒色土(木質を含む)
22. 黒灰色粘土
23. 暗灰色粘土
24. 茶褐色砂質土
25. 暗灰色土(溝-182)
26. 暗茶灰褐色粘質土
27. 淡茶灰褐色土
28. 暗茶褐色粘質土

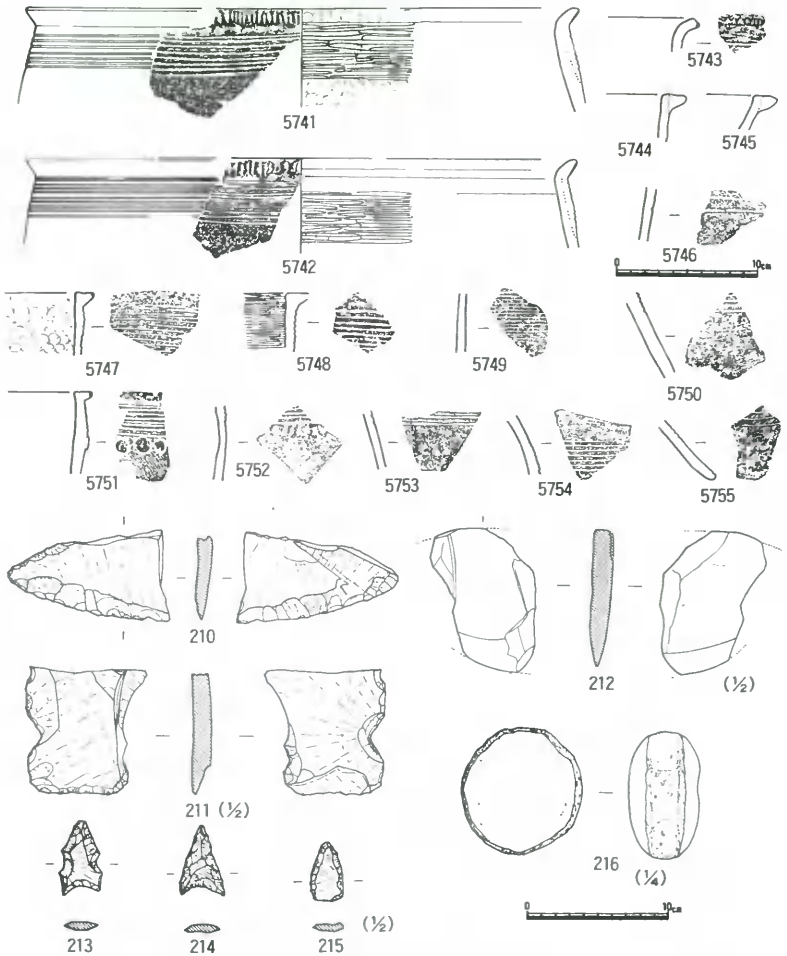
第742図　溝—162（1/100）



第743図　溝-162 出 土 遺 物（1）

ぼ均一した状況を呈する。

遺物は土器，石器があり，大型の土器片は少なく，小片が目立ち5722・5723等の縄文時代晩期土器片をも含む。大半が弥生時代前期の土器であり，壺・甕が主流をしめる。壺の頸・胴部は刻み目貼り付け凸帯文および篦描き沈線文が施され，沈線は5～7条が普通である。甕の口縁部は倒L字形が認められ，8～15条の篦描き沈線が施されている。

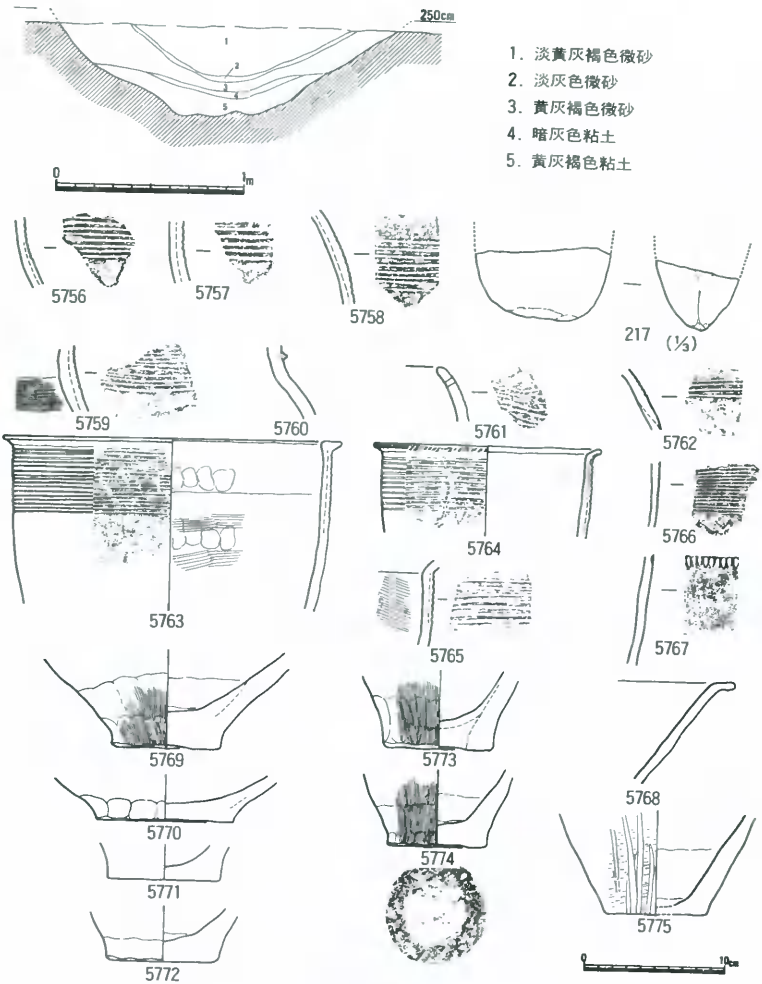


第744図　溝-162 出 土 遺 物（2）

時期は百・前・Ⅲの古相に比定できる。（高畑）

溝−163（第745図）

D−37・38，E−38において検出された溝で，E−39にも続くと考えられるが検出できなかった。ほぼ南北方向に走り，北端部では徐々に西に曲がりつつある。検出面での幅は約170〜200

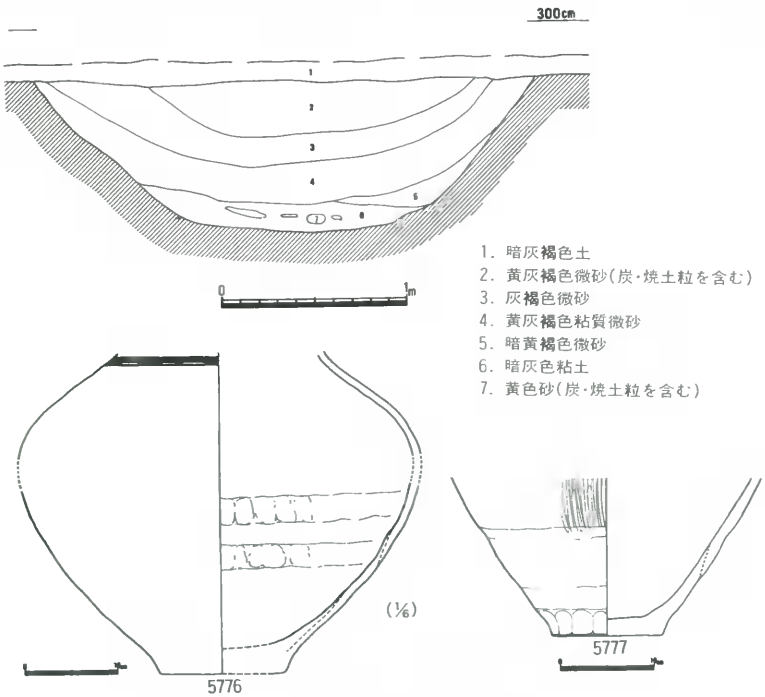


第745図　溝−163（1/30）・出土遺物

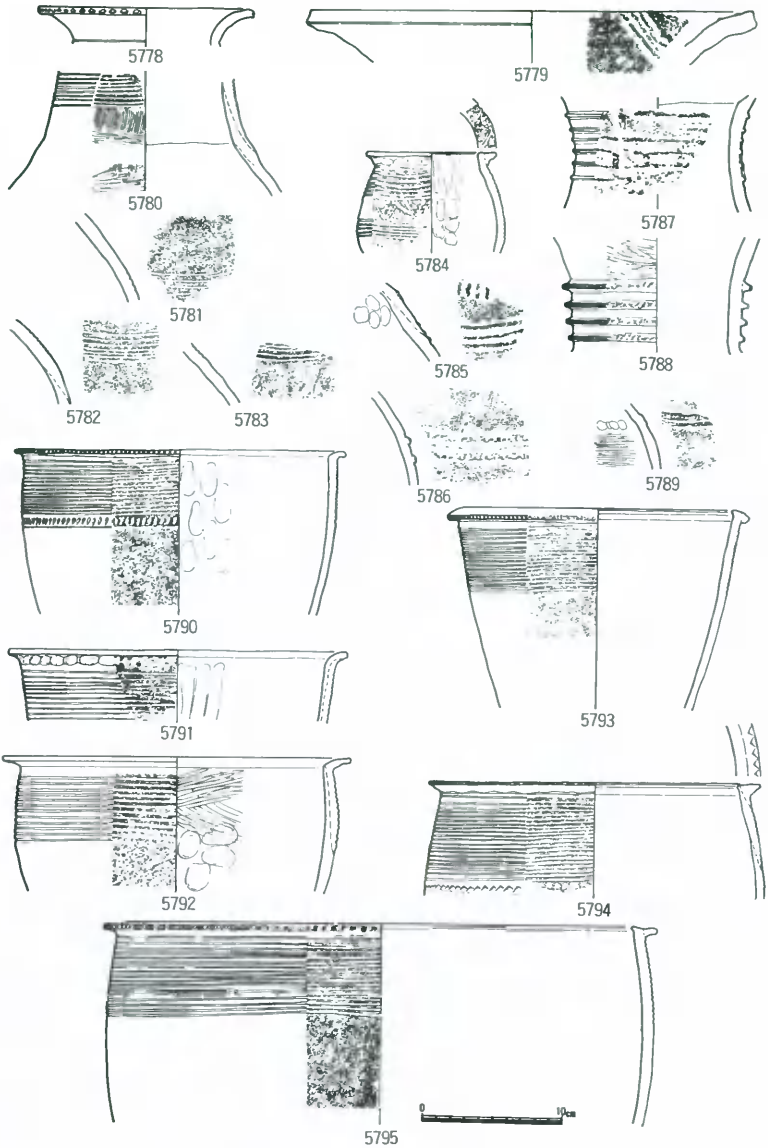
cmで，深さは検出面より45cm前後を測る。埋土の状況は必ずしも一定ではなく，図示した断面図では五層認められるが，他の部分では四層あるいは三層にのみ分離可能であった。基本的には第745図の2層を境にして上層と下層とに分離できるものと考えられる。底のレベルは海抜200cm前後で南に向かって数cm低くなっている。出土遺物の多くは下層中より出土している。324は玢岩製の太型蛤刃石斧片である。時期は，百・前・Ⅲであると考えられる。

溝－164（第746～749図）

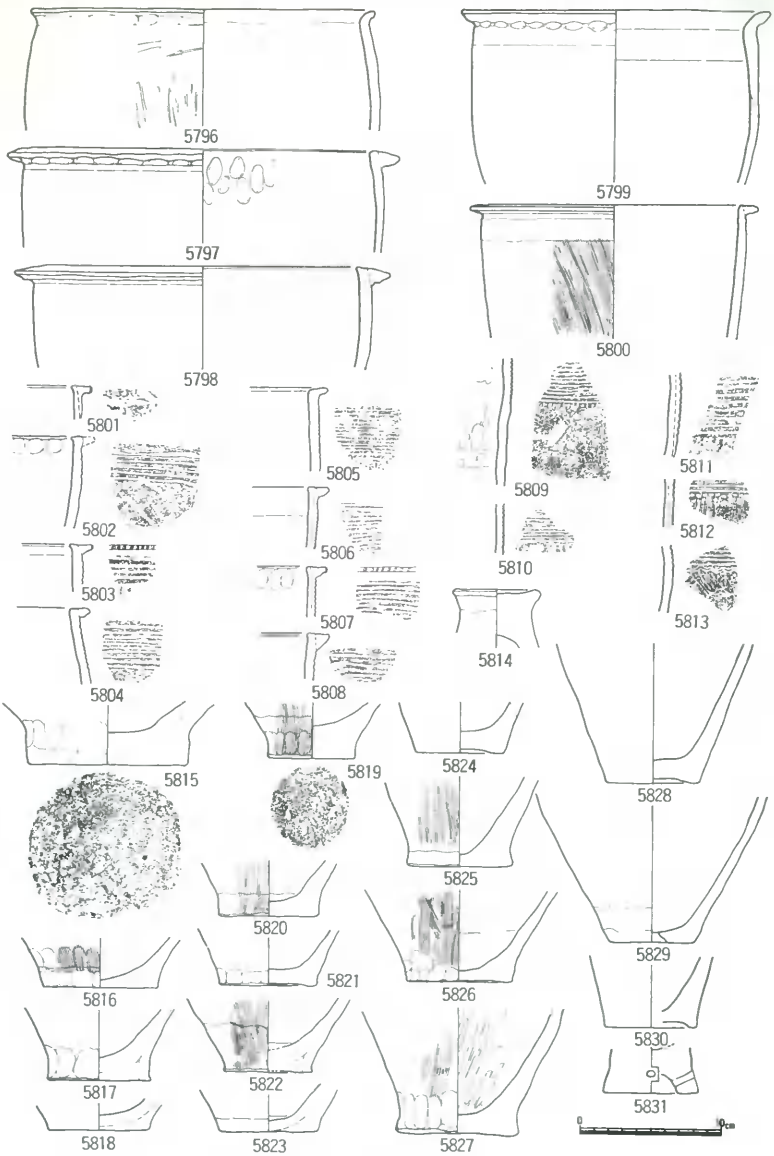
D-39・40において検出されたほぼ東西方向に走る溝で，E-39にも続くと考えられるが検出できなかった。検出面での幅は約200～250cmで，深さは検出面より60～80cmを測る。底のレベルは海抜185cm前後で，検出した範囲ではほぼ同じである。埋土は大きく四層に分離できる。出土遺物としては，土器5776～5831・石器218～222などがある。220は石鏃，221は花崗岩製の凹み石，222は半花崗岩製の敲石，218はスクレーパーか。219の側縁は刃つぶしが行われている。これらの出土遺物より時期は百・前・Ⅲであると考えられる。　（平井）



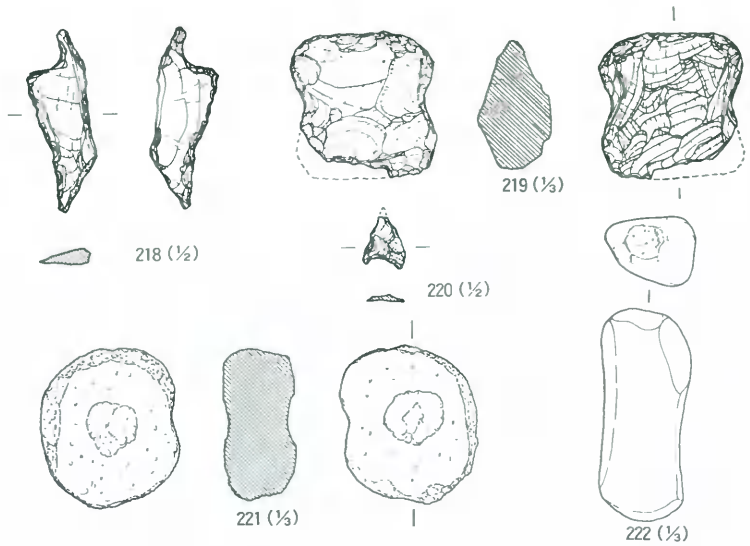
第746図　溝-164（1/30）・出土遺物（1）



第747図　溝-164 出 土 遺 物（2）



第748図　溝-164 出土遺物（3）



第749図　溝−164 出 土 遺 物（4）

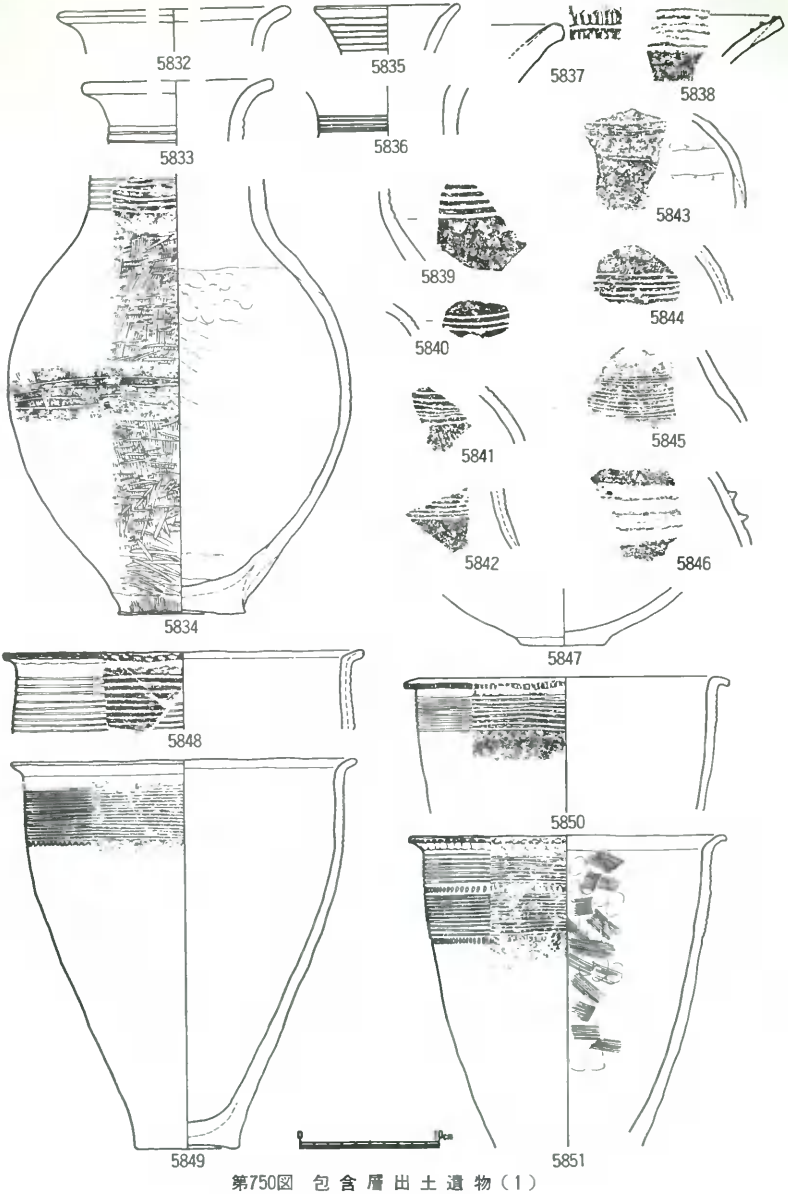
（3）　包含層出土の遺物（第750～752図）

大半の遺物は38～41線間に最も多く分布している。壺15点，甕28点，その他5点の計48点の実測を行った。

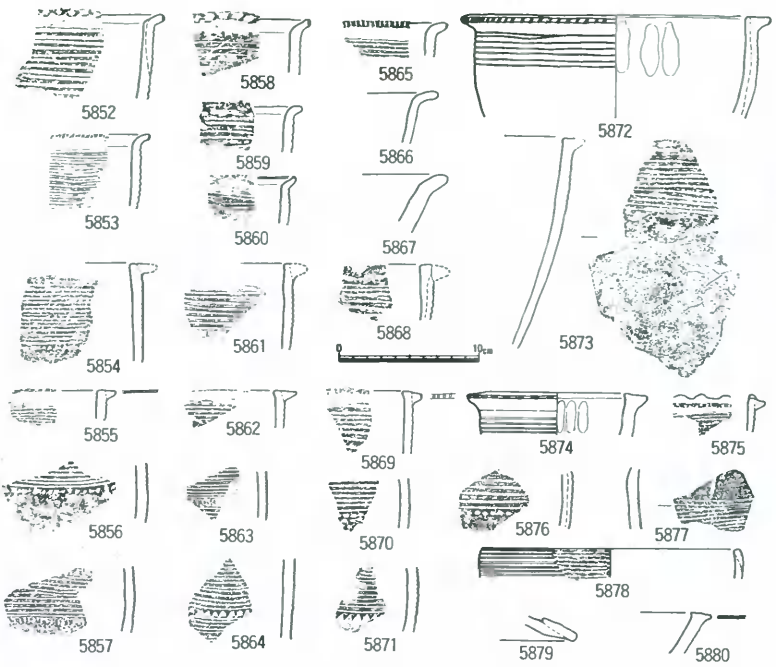
なかでも「島状高まり」遺構−13の掘り下げ時点において5852・5853・5856～5861・5864・5865・5867・5870・5871・5879等が出土しており，5865等はガラス滓と共伴関係を有する。他は弥生時代後期の水田土壌を除去する段階において出土したものが中心となり，5832・5833・5836～5838・5841～5844・5846・5847・5854・5855・5862・5869・5874・5878がそれにあたる。それらは「L」字状口縁を呈するものが多く，概して多条の篦描き沈線文が目立つ。

5835・5839・5845・5849・5850等は畦畔−2を除去して検出した小溝内および周辺より比較的大型品がまとまって出土している。

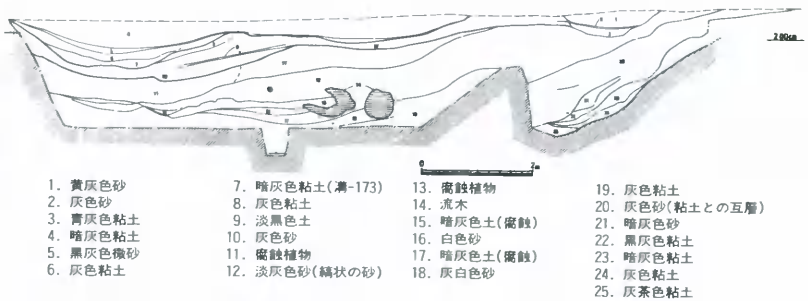
遺物全体では多条の沈線文，「L」字の口縁が中心をしめ，百・前・Ⅱ～Ⅲにかけての時期に比定される。なかでも百・前・Ⅲの古相が主体をしめている。これは，遺物の出土地区が微高地であり，弥生時代後期の開田に際して削平された百・前・Ⅲの溝−163・164が存在したことで理解できる。



第750図　包含層出土遺物（1）



第751図　包含層出土遺物（2）



第752図　溝-158（1/1000）

第753図　三ノ坪調査区　弥生時代中期遺構配置図（1/800）

4. 弥生時代中期の遺構・遺物

弥生時代前期と同様に溝の分布が中心を占めており，溝—171が溝—162を，溝—168を溝—172・173が踏襲した格好で調査区西側に集中している。さらに，溝—171・172・173を有機的に結びつける溝—174・175・176が存在する。また，井堰—2・3がこれらの溝と関連して水量調整を行っており，溝—175はほぼ同時期と考えられる水田が併設されている。調査区東端部にも同時期の水田が検出されており，両水田間は微高地地形を呈していたと考えられる。この微高地部分には遺構は存在しない。

（1） 土　　壙

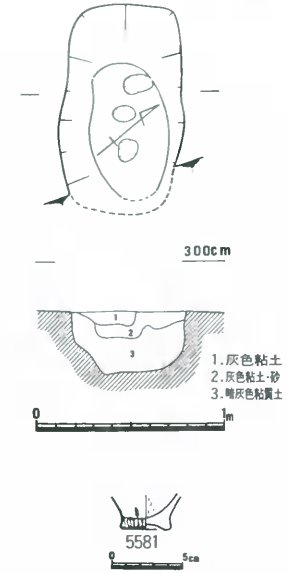
土　壙—265（第754図）

E-34西隅に位置し，弥生時代後期の溝—178によって東南端を削り取られている。長軸上端（160）cm，短軸上端66cm，深さ35cmを測り，底部に向かい緩かに傾斜をもち，若干平面を残す。

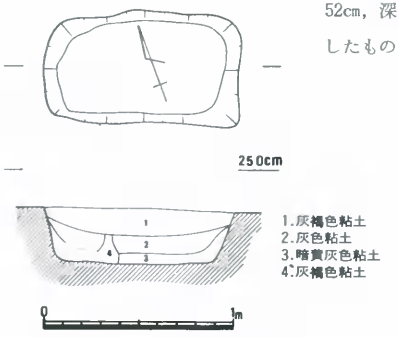
遺物は甕の底部が1点出土しており，時期は百・中・Ⅱの新相に比定できる。

土　壙—266・267（第755図）

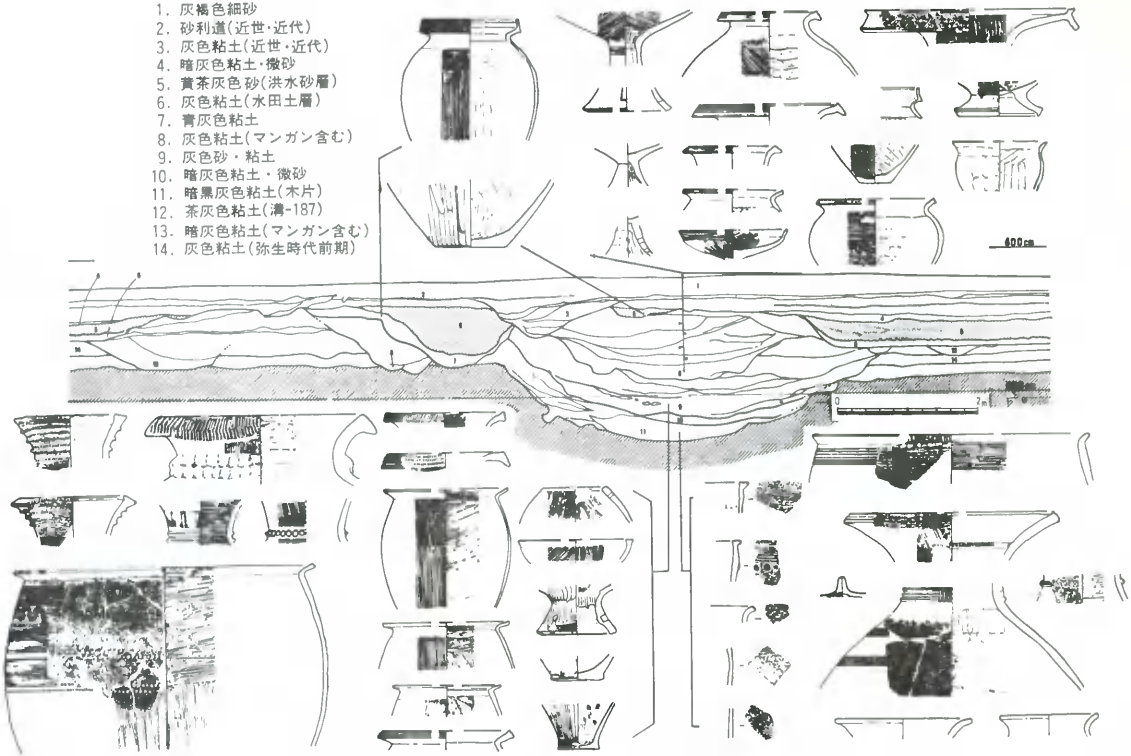
E-35の中央南側に位置する長方形の小型土壙である。土壙—266は長軸上端106cm，短軸上端60cm，深さ30cmを測る。土壙—267は長軸上端68cm，短軸上端52cm，深さ23cmを測る。両者とも水田層除去後に検出したものであり，時期については明確にしえなかった。



第754図　土　壙-265（1/30）・出土遺物



第755図　土　壙-266・267（1/30）



第756図　溝-162・171 関 連 断 面 (1/80)

（2） 溝

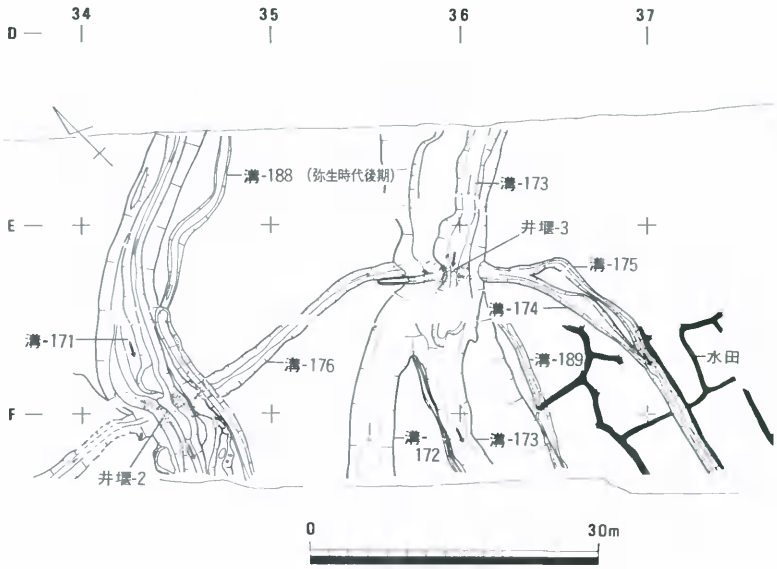
溝—171（第756・758～761，図版27・37）

34・35線間に位置し，南に流走する大溝である。流路は中央部で「く」の字状に屈曲し，その下流に井堰—2が設けられている。

溝幅約5～7m，深さ100～120cmを測り，溝底は海抜150～170cmとほぼ均一した状況を呈する。前述した弥生時代前期溝—162の流路を踏襲し，溝内前期包含層を切って造られている。

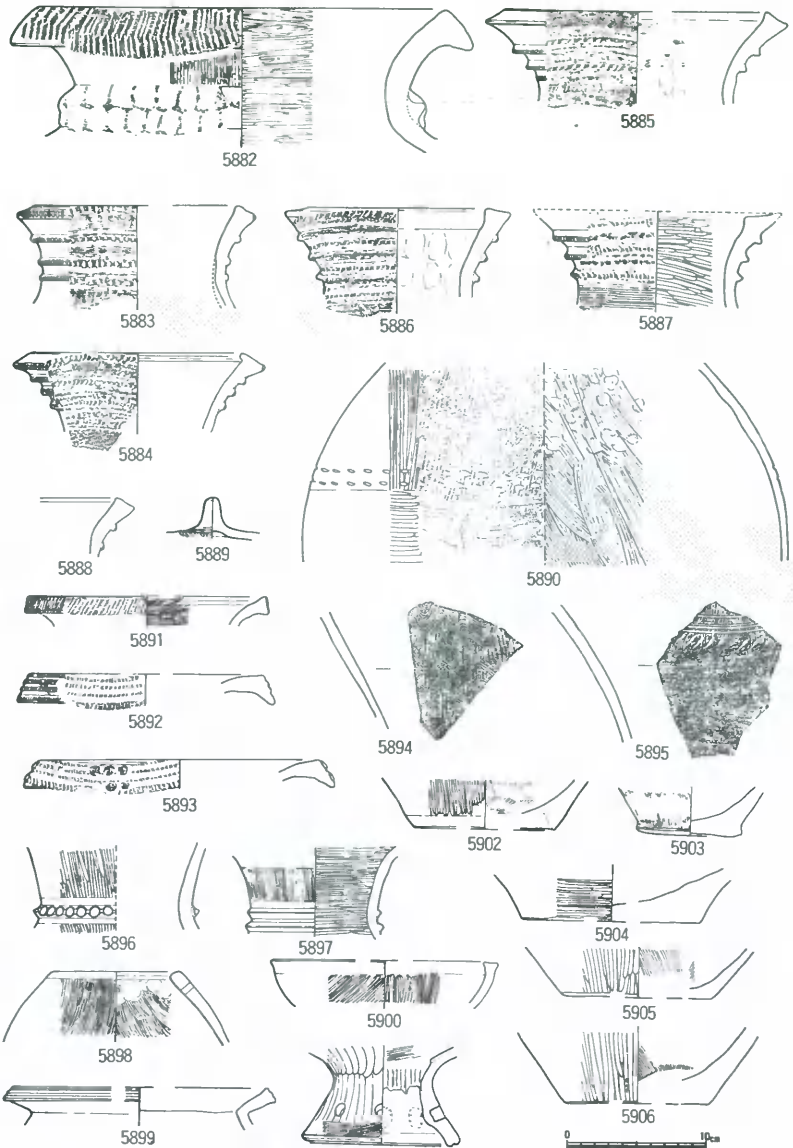
井堰—2は溝—171内に設けられ，おおよそ500本以上の杭を使用して構築されており，樋門（通水溝），護岸施設と一体化し，水量調整を行ったものと考えられる。

その形状は平面的に砂時計状のプランを呈し，上流両岸より川底に向って徐々に狭まり中央通水溝でその幅約90cmを測り，再び下流両岸に向かって徐々に開き始める。そして川岸上端まで延び縦全長約800cm，横幅約550～600cmを測る。約90cmを測る通水溝中央部分には太目の自然木3本が縦列に深く打ち込まれており，草等の有機物を絡ませて利用する水門部にあたる個所がみられる。井堰上流では若干広くなり屈曲する水路内に護岸用と考えられる杭が南北に並べて打ちこまれており，上流からの水圧を緩和する構造が取り入れられている。

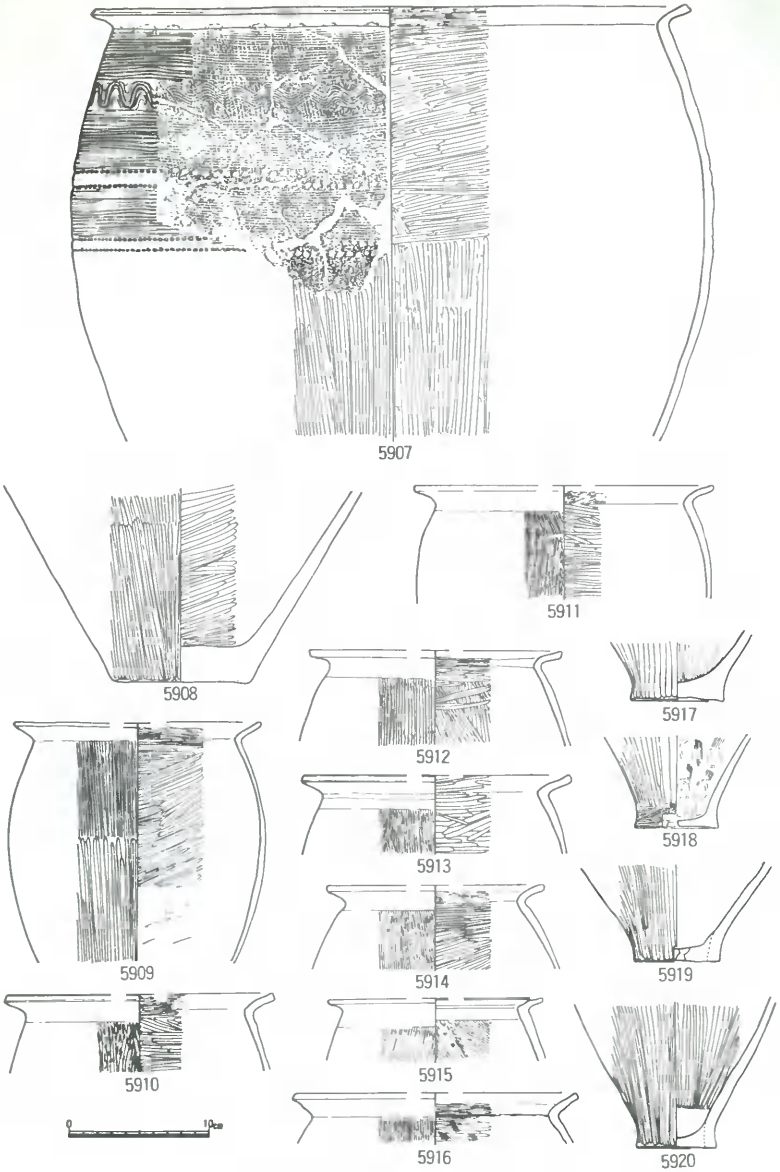


第757図 用 水 路（1/600）

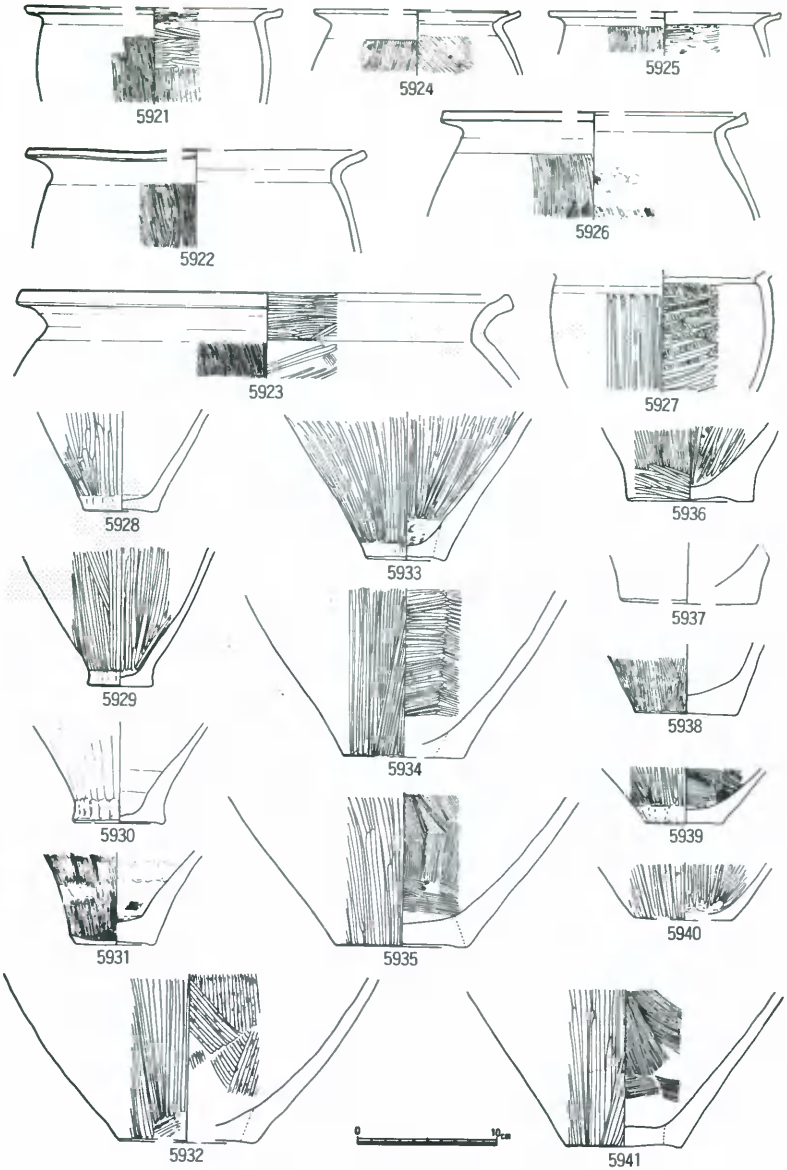
第758図　溝-171・井 堰-2（1/80）



第759図　溝-171 出 土 遺 物（1）



第760図　溝-171 出 土 遺 物（2）



第761図　溝-171 出 土 遺 物（3）

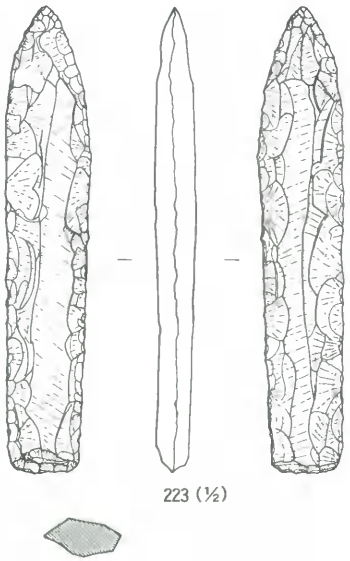
井堰を構築している杭には各要所を押さえる角材（100×10cm），一列に並ぶ板材（68×13×3.5cm），目つぶしに打ち込まれている自然木（110×7cm）が使用され，なかでも自然木が中心を占め，用材の先端が非常に鋭く削られた樫，槇の類が利用されている。

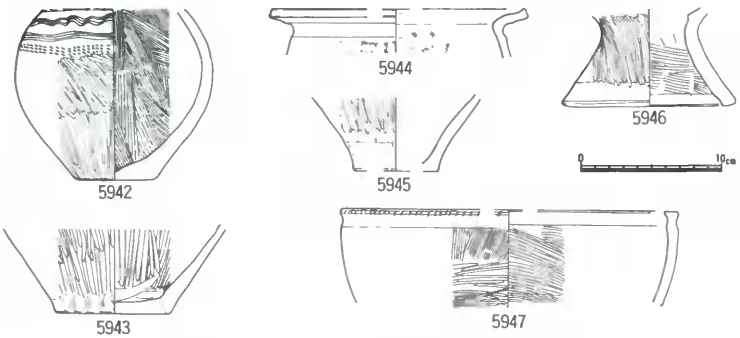
また，井堰は数回踏襲された可能性が考えられ，木質自体を残す杭，完全に土壌化している杭跡，荒砂の流入している杭跡等の3種類の杭が確認できる。この事実は弥生時代中期を中心にして，その前後に井堰が機能していたことを裏づけるものと考えられる。

遺物は壺・甕が中心を占め，コンテナ3箱分を有する。5907は大型で溝床に接着した格好で出土している。他は9層を中心に小片で出土したものである。時期は百・中・Ⅰ～百・中・Ⅱまでの遺物を包含している。井堰の廃絶時期は百・中・Ⅰの範疇におさまる。

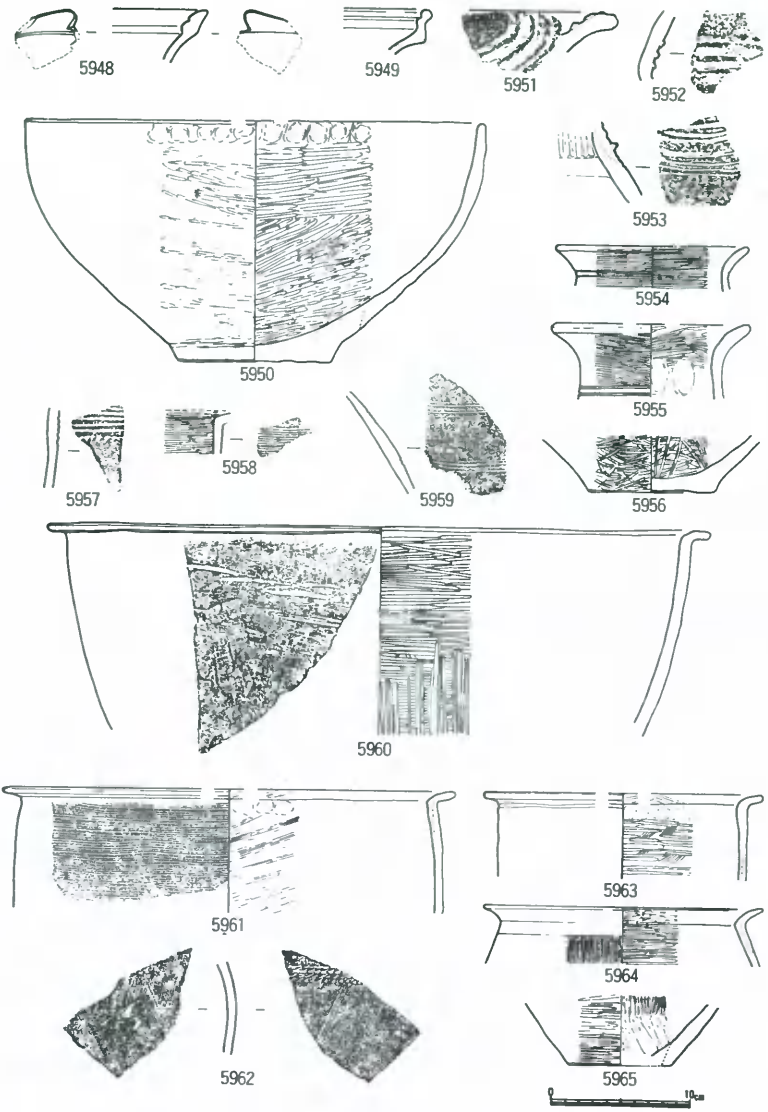
溝－172・173（第762～765図，図版28-1）

36線を中心に南流し，E-35東南部にて東西に分岐する大溝である。上流部幅約800cm，深さ約95cm，井堰－3付近で幅約980cm，深さ約150cmを測る。分岐点より西側を流走する溝－172は幅約170～190cm，深さ約60cmを測り，溝底は南に徐々に下降する。溝底海抜高は平均188.5cmを測り，溝－173より溝底は





第762図　溝-172・173 出土遺物（1）



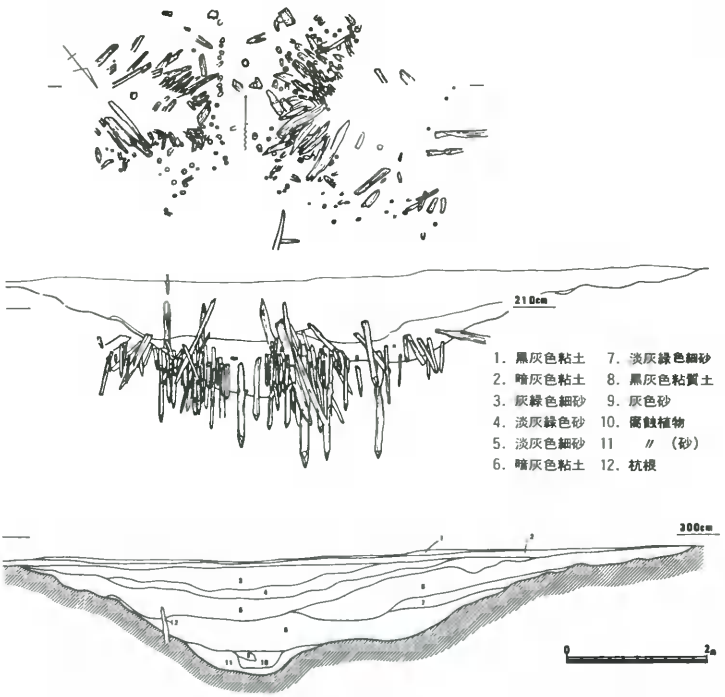
第763図　溝-172・173 出 土 遺 物（2）

約10cm前後高いようである。

溝ー173は上流より直進して東側を流走する溝である。溝幅約110～150cm，深さ約25cmを測り，左岸に幅250cmの緩やかに傾斜する平坦面を付する。溝底海抜高は160～175cmを測り，水門下流の河床洗掘部より上流側の井堰ー3に向かって緩やかに下降する。

井堰ー3は溝ー173内に設けられ，おおよそ300本以上の杭を使用して構築されており，本調査区の灌漑用水路の中心的役割を果していたものと考えられる。井堰の形状は基本的に井堰ー2に共通しており，縦全長（320）cm，横幅約600cmを測り，外観は若干井堰ー2より小型である。通水筒部は横幅約80cm，縦の長さ220cmを測り，筒部のほぼ中間に直径約10cmの杭が3～4本打ち込まれている。その配置は三角形を呈し，深いもので河床より約80cmが地中に埋まっている。

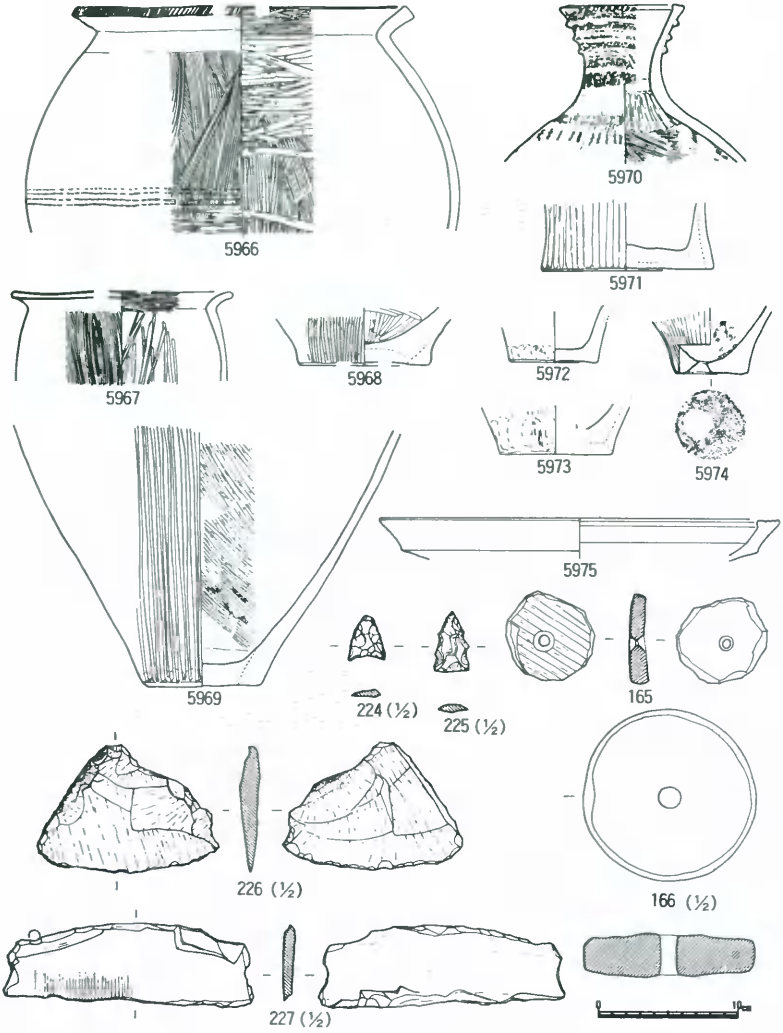
井堰ー2にみられる直線的な配列とは異なるが，同一機能を有する水量調整の役割を果たす



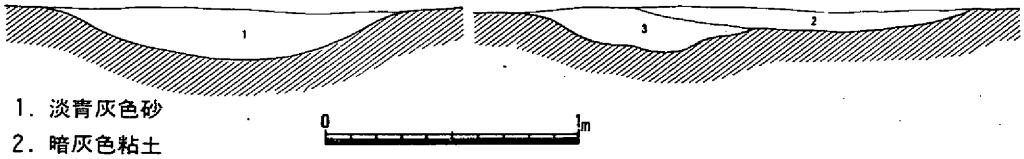
第764図　井　堰-3（1/80）

杭と考えられる。

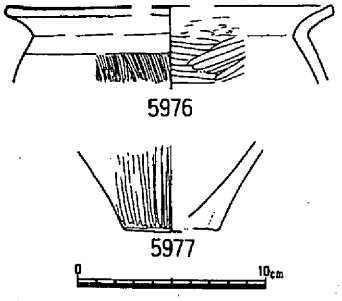
杭材には自然木，角材，板材等が使用されており，現存長180cm，直径13cmを測るものが最



第765図　溝-172・173 出 土 遺 物（3）



第766図　溝-174・175（1/30）・出土遺物



大であり，それらに匹敵する自然木は垂直に深く打ち込まれる傾向が目立つ。杭の材質は樫，槇の類が使用されており，先端部は鋭利に尖っている。

井堰平面からの観察では両側より通水溝に向かい内傾する杭が比較的多く，通水溝に直交する両岸中央部分の杭の量が希薄なことに気付く。

また，それらの杭は希薄な部分を中心に通水溝に向かい放射状に配列されている（あるいは上下に方向が異る）。この現象は井堰－2においても同形態が確認できており，上部に何らかの遺構の存在を推定することが可能である。溝－175と井堰－3が構造物として併設されていた考古学的痕跡は留めないが，ここでは井堰杭の配置状況および溝－175の溝底の海抜高，井堰杭の海抜高等より溝－176も含め，井堰－3と溝－175・176は井堰上部で「十字」に交わり，併設されていた可能性が大である。

遺物は溝－172・173，井堰関係を含めコンテナ3箱が出土している。

溝内包含層ではとくに8層，および左・右岸の側壁の浸蝕等による混入遺物を含み，縄文時代晩期より弥生時代中期土器までの幅が認められる。溝－173では縄文時代晩期の土器片2点，弥生時代前期土器片5950～5960の11点・紡錘車1点，中期土器片5961～5974の14点・紡錘車1点（165）が認められ，5959・5966等が井堰に接して検出されている。石器はサヌカイト製の石鏃2点，スクレイパー1点，片岩製の磨製石庖丁片から打製石庖丁に再加工された334がある。

溝－172では弥生時代中期土器片5942～5947の6点とサヌカイト製の石剣223が出土している。全長16.45cm，最大幅3.05cm，厚さ1.48cmを測り，重量86.0gである。刃部稜線には使用痕を明瞭に留めておらず，未使用の可能性が考えられる。

溝－174・175・176（第753・766・767図）

この三本の溝は井堰－2・3の上端を横断する格好のほぼ一本の流路である。

36線中央の井堰－3を中心に左岸より溝－174・176が南に延び，右岸より溝－176が西に延びて井堰－2に接続し，さらに西に流走する分水形態を取っている。ここでは井堰－2・3，

溝—174・175・176が灌漑用水路として連結し，水量調整を果たしていた可能性が考えられる。すなわち，井堰—3に蓄えられた水は左岸の溝—175により水田へ，右岸の溝—176により井堰—2に分水され，さらに下流に送られる構造が理解できる。

溝—174は溝—175に切られており，若干の時期差は存在するが，同一機能を果たしていたと思われる。幅約120cm，深さ約10cmを測り，溝内には灰褐色微砂がみられ，土器片少量が混在していた。

時期は百・中・Ⅰの範中におさまる。

溝—175は幅約120cm，深さ10～15cmを測り，少数のサヌカイト片を含む。

溝—176（第753図）

E-34・35に位置し，井堰—2と井堰—3を連結しており，全長約23mを測る。溝幅約150cm，深さ約20cmを測り，浅い「V字形」を呈する。溝内は上層にマンガン粒を含む砂，下層に鉄分の集積が認められる。

井堰—2との溝底の連結部分は海抜231cm，井堰—3との溝底の連結部分は海抜193cmを測り，一見西に下降気味と考えがちであるが，溝中間点が最高所となり，海抜261cmを測り，東西に分水する状況となる。これは，両井堰が満水時に若干の余裕を持たす流路とも考えられるが，基本的には井堰—2から3への排水（通水溝）と考えるのが妥当と思われる。（高畑）

（3） 水田遺構（第767・768図，図版28-2・29）

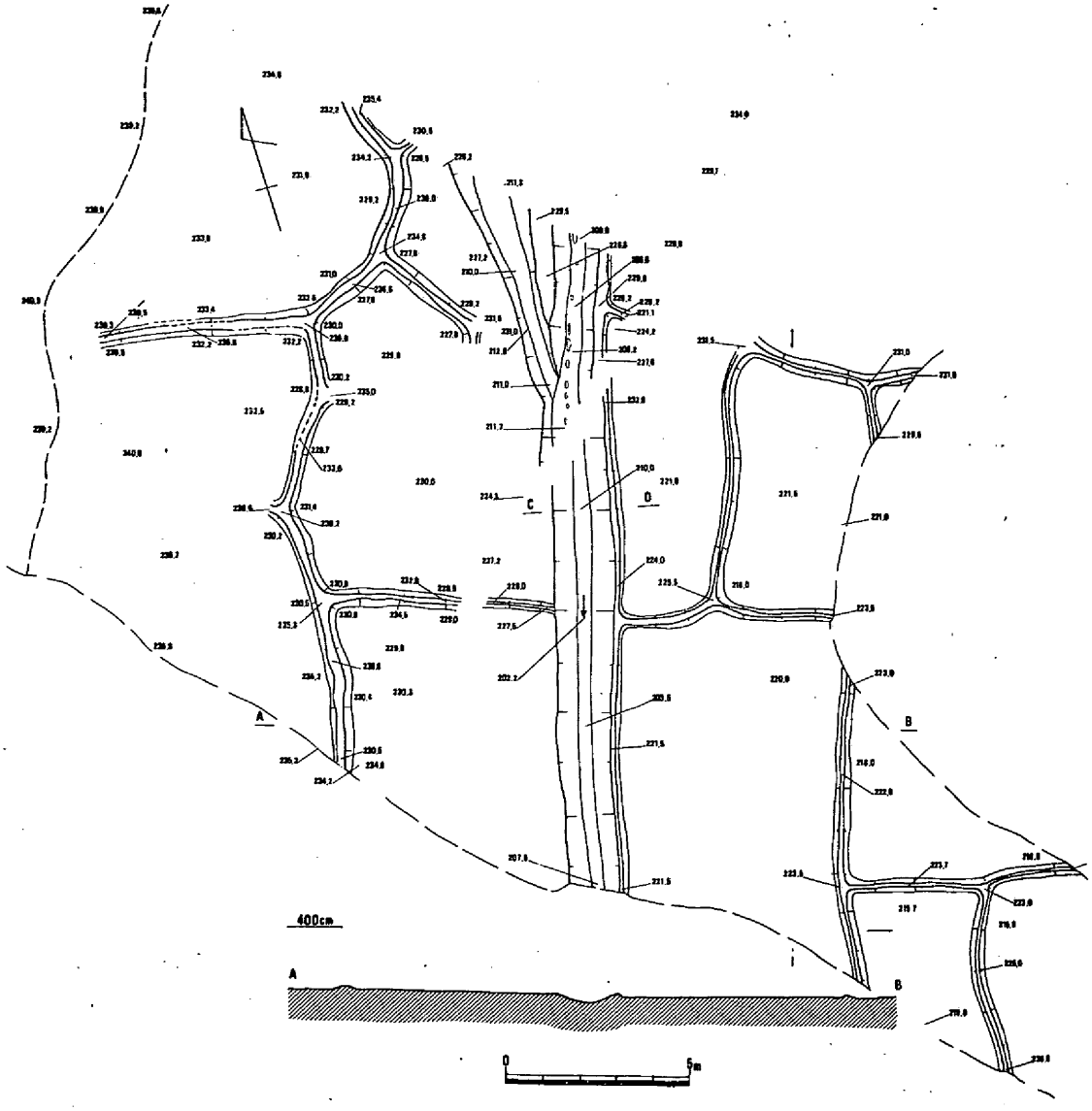
この水田は，上層の弥生時代後期末の水田に対して「下層水田」と仮称しているものである。下層水田は，前述した26～32線（川内調査区），及び36～39線（三ノ坪調査区西端），41～42線（三ノ坪調査区東端）の3か所に畦畔を伴なって検出された。

この下層水田（川内～三ノ坪調査区）の存在する立地は，大きくは微高地と微高地の間の低位部に位置する。低位部の中にあっては，多少の凹凸部が認められ，その凹部に下層水田が検出された。

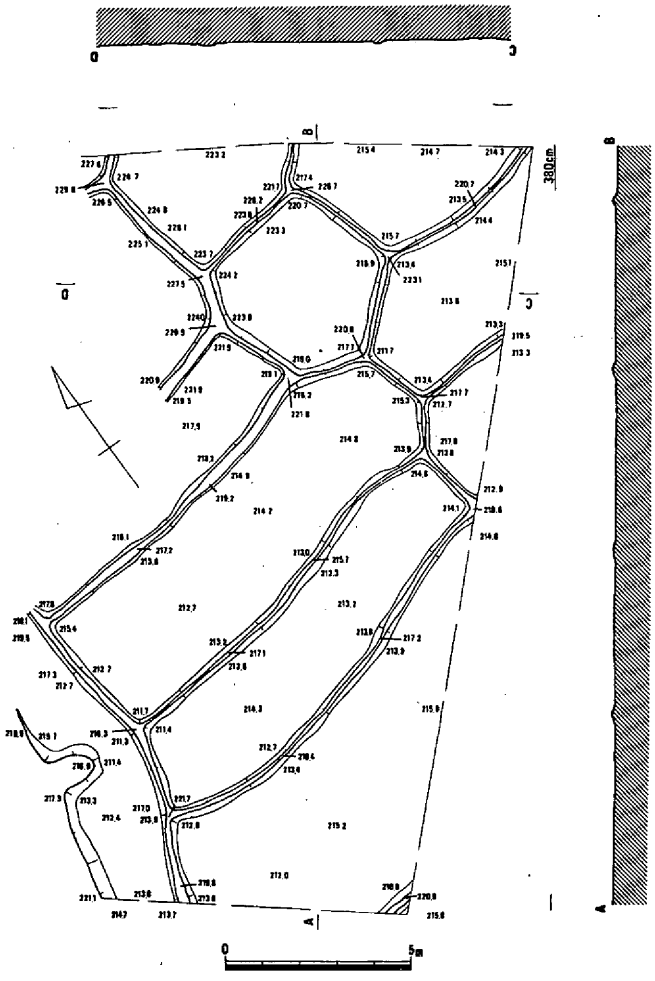
下層水田は，その上部に弥生時代後期の遺構面が存在し，さらに上層に水田が位置する層位関係を示す。この下層水田耕土は，脱色された淡灰白色粘土層で，その土層には数cmの厚さで有機質土の暗灰色土が特徴的に存在する。この堆積状況は，川内・三ノ坪調査区の水田に共通するものである。このことは，川内・三ノ坪調査区の下層水田の同時性を示唆するものである。この水田層の広がりは，図示した地点にその範囲が限定されて認められたが，下層水田が微高地間の低位部凹部に限定的に経営がなされていたのか，それともより広範囲に水田経営が行われていて，後の掘削や水田の再整備の際に削平を受け，低い地点にのみその水田が残存しているのかについての問題点は今後に残すことになった。

下層水田に検出された畦畔は，上層水田と類似しており，幅約40cm，高さ約5～8cmのも

のであった。いずれも小型の畦畔で，上層の水田で認められた様な大畦畔は検出できなかった。この畦畔は，水田耕土と同じ土層のもので恒常的なものではなく，その都度作られたものと考えられる。三ノ坪調査区では，畦畔は「T」，字「Y」字に派生し一区画を構成している。この区画は三ノ坪調査区の西端と東端で若干の差異が認められる。三ノ坪西端では，溝をはさ



第767図　水田（1/200）・溝-175（1/30）



第768図　水　田（1/200）

んで両側の水田区画（35・37・38・40・42）は，流路に沿って細長く作られており，三ノ坪東端では古地形の流路に対して横方向に細長く作られている。川内調査区では，三ノ坪東端と類似した区画性が認められた。また，三ノ坪西端の30・31・32区画などは，東西方向に細長くなる傾向が指摘できる。このことは，川内，三ノ坪東端及び三ノ坪西端の一部に，認められたように下層水田は，古地形の流路に対して横方向に細長く造田することを基本としているように思われる。また，その区画にあって，特徴的なのは，三ノ坪西端(34)，三ノ坪東端(52)のような亀甲状の区画である。さらに三ノ坪東端での区画をみてみると，東西方向の畦畔は下流方向に弧を描いており，古地形に規制されつつ造田が行われたことが考えられる。

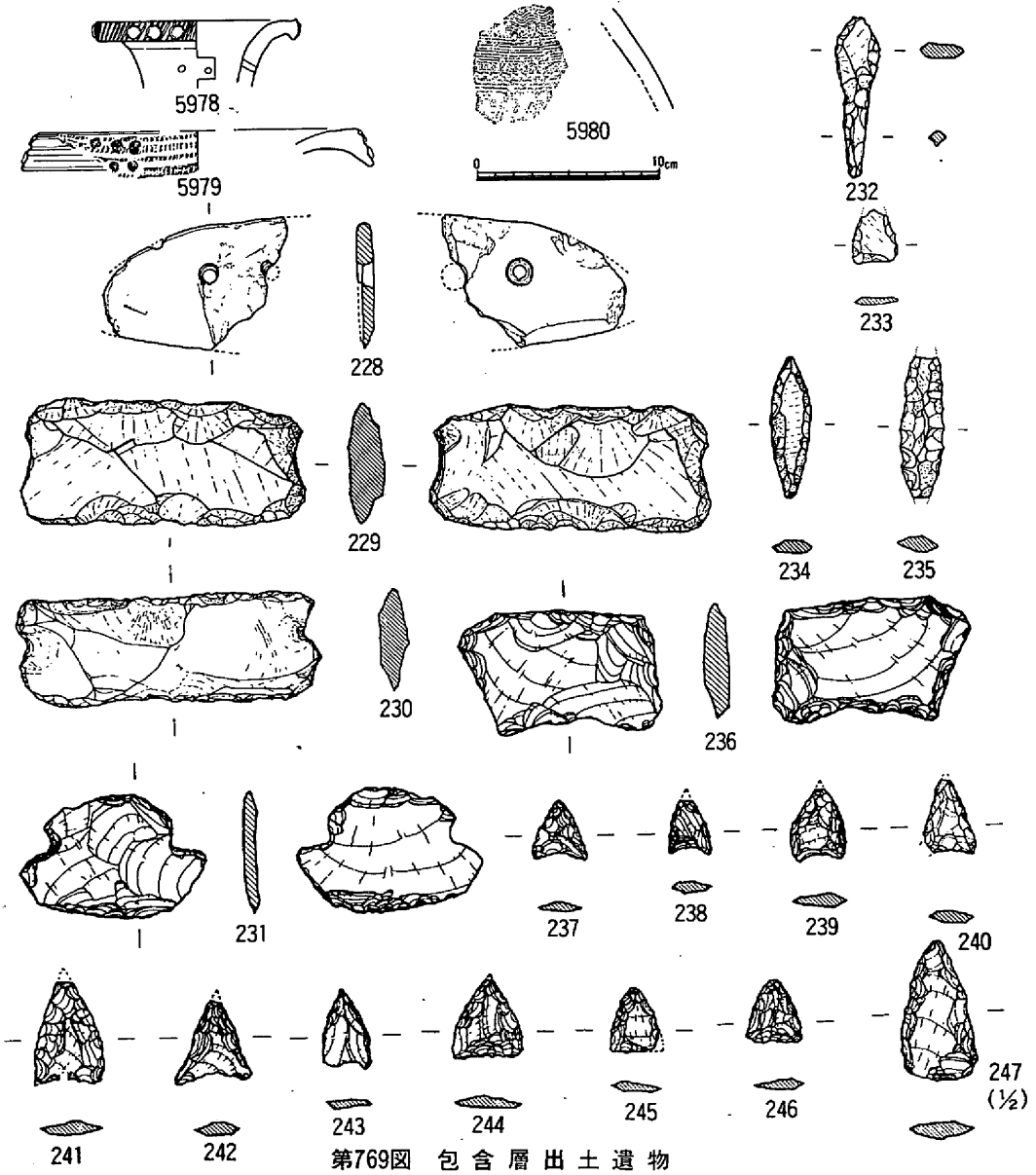
これらの区画された一区画の規模は，三ノ坪西端37—21.6㎡，38—23.6㎡，三ノ坪東端52—13.95㎡，47—33.5㎡，48—23.5㎡と復元できる。また，三ノ坪西端35，36，三ノ坪東端49の区画は，約50㎡前後の面積を求めることができる。この三ノ坪調査区でみるかぎり，より均等的な区画性は認められない。しかし，この区画は，古地形などに規制されつつも，規則性，均等性を指向しているように思われる。この下層水田の時期は，前述したように層位的には弥生時代後期中頃の遺構面より下層に位置しており，さらに下層水田下層には弥生時代前期～中期中頃の遺構面が存在している。したがって，弥生時代中期中頃～後期中頃に水田の使用時期を求めることができる。さらに言及すると，三ノ坪西端の中央を流走する溝が水田に伴うもの

と容認するならば弥生時代中期中頃を中心とする時期であろうか。

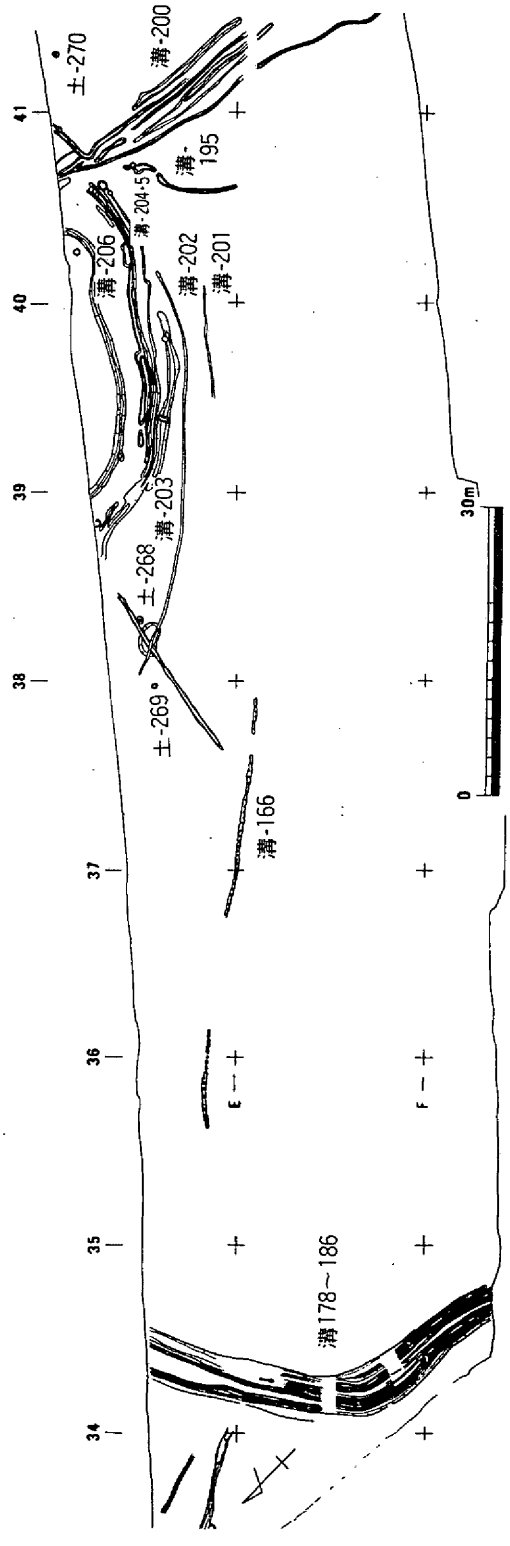
以上，下層水田について記したが，水田の検出が限定されているため，水田の広がり，規模，区画，水路との関連，さらに，時期などについても問題点は多く残されている。（中野）

（4）　包含層出土の遺物（第769図）

大半が弥生時代後期水田層中，およびその下位より出土したものであり，241・245・247が水田より上位の新しい溝中，237・243が柱穴内に混入して出土している。すべて，サヌカイト製品であり，打製石庖丁3点，スクレイパー1点，石錐1点，石鏃14点総数19点を数える。



第769図　包含層出土遺物



第770図　三ノ坪調査区 弥生時代後期遺構配置図（1/800）

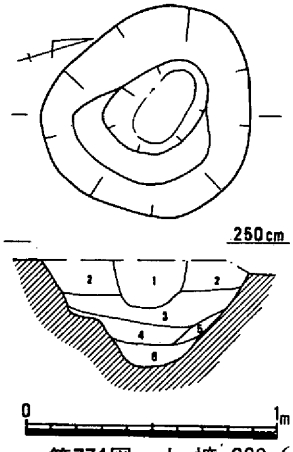
これらについては所属時期が断定しがたい。　（高畑）

5.　弥生時代後期の遺構・遺物

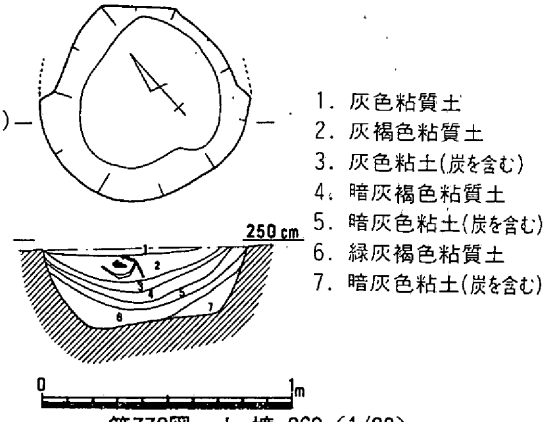
遺構として機能を明確にしえたものは34・35線間に位置し，南流する9本の溝群，D-36～E-37のほぼE線に沿う格好で約45m延びる溝と3基の土壙である。他に見られる浅く狭長な溝は「島状高まり」遺構および畦畔に伴い，両者の規模の伸縮，補修等に際して生じた溝状の遺構である。

大半の遺構は後期末の大規模な造田に際して削平されており，原形を留めていない。（高畑）

（1）　土　　壙



第771図　土壙-268（1/30）



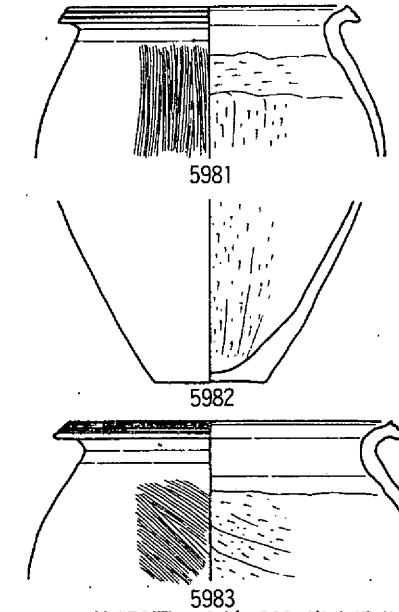
第772図　土壙-269（1/30）

土　壙—268（第771図）

D-38北部分において検出された土壙で，溝との切り合いは不明である。平面形は不整形な円形を呈し，深さは最大で検出面より約42cmを測る。この土壙の性格についてははっきりしないが，埋土の状態をみると柱穴と考えられるかも知れない。時期は，土器などの出土遺物がほとんどないため明らかではないが，土層関係などからほぼ弥生時代後期であると考えられる。

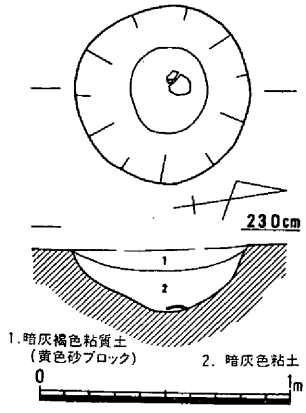
土　壙—269（第772・773図）

D-38の北東端部において検出された土壙である。平面形は直径約85cmの円形を呈するものと思われ，深さは最大で検出面より約30cmを測る。



第773図　土壙-269 出土遺物

断面形はほぼ逆台形を呈し，埋土は七層認められた。図示した土器は2層から出土したものである。時期は，ほぼ百・後・Ⅱであると考えられる。



第774図　土壙-270（1/30）

土　壙—270（第774図）

D-41の北東端部において弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出した土壙である。平面形は直径約70cmのほぼ円形を呈し，深さは最も深いところで検出面より約25cmを測る。断面形はすり鉢状を呈し，埋土は二層認められた。

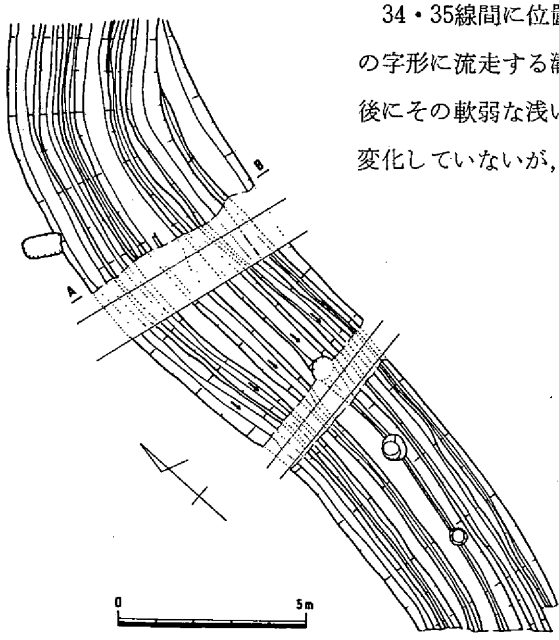
出土遺物としては，2層の最下部から土器片が数点認められるのみである。これらの土器片および土層関係より，この土壙の時期はほぼ弥生時代後期であると考えられる。（平井）

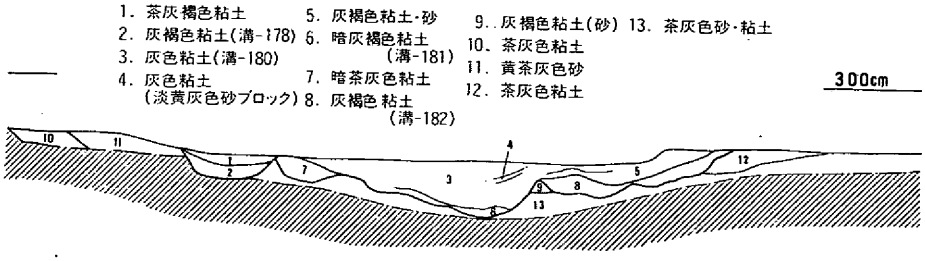
（2）　溝

溝—178～184（第775～777図）

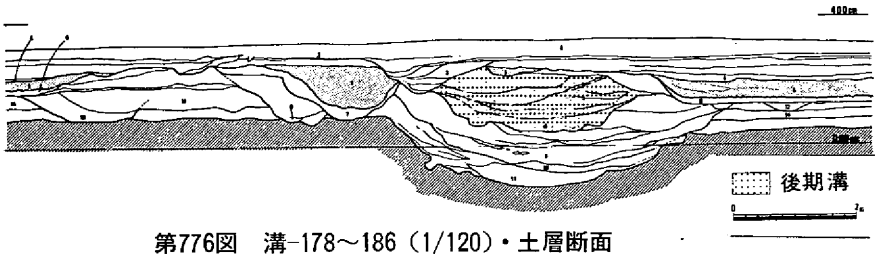
34・35線間に位置し，流路を南西より南に変換して「く」の字形に流走する溝である。弥生時代中期の溝—171の埋没後にその軟弱な浅い凹部を踏襲したものと考えられ，流路は変化していないが，非常に小型化しており9本の小溝が整然と集中している。

調査区内に延長約40mを検出しており，各溝とも幅約60～120cm，深さ20～30cmを測る。北壁上流溝底は海抜220～230cm，中間地点で212～230cm，南壁下流で216～232cmを測り，南に向かい緩やかに傾斜している。この傾向は下位の弥生時代前・中期の溝にも共通する点である。これらの溝上位に





第775図　溝-178～186（1/200・1/60）

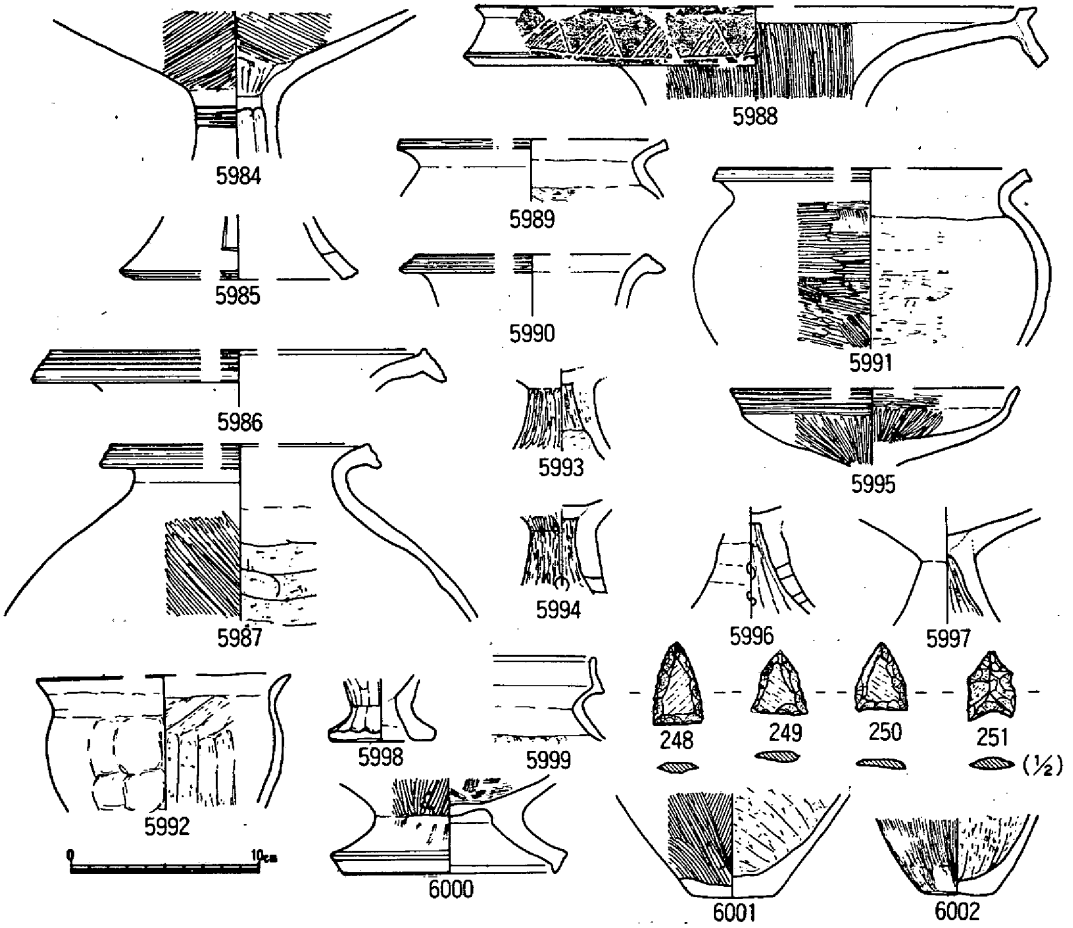


第776図　溝-178～186（1/120）・土層断面

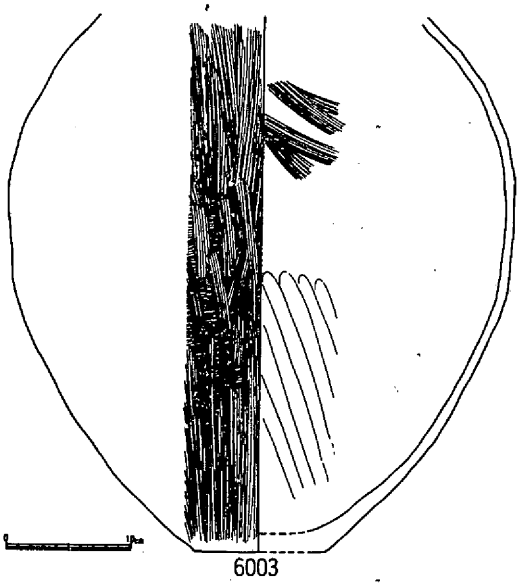
は20～30cmの間層をおいて弥生時代後期末の溝が走っている。

遺物はその間層および溝に伴って出土しており，すべて小片に限られている。高杯・甕・壺・台付鉢・石鏃等が出土している。5991が溝—178，5985が溝—179より検出され，溝—178は畝畝—1に切られており，第793図にみられる6040の甕が入っている溝にも切られている。

遺物は百・中・Ⅲの新相より百・後・Ⅲまで出土しており，百・後・Ⅱの新相より百・後・Ⅲの時期が多く認められる。（高畑）



第777図　溝-178～186 出 土 遺 物



第778図　土 器 棺-1

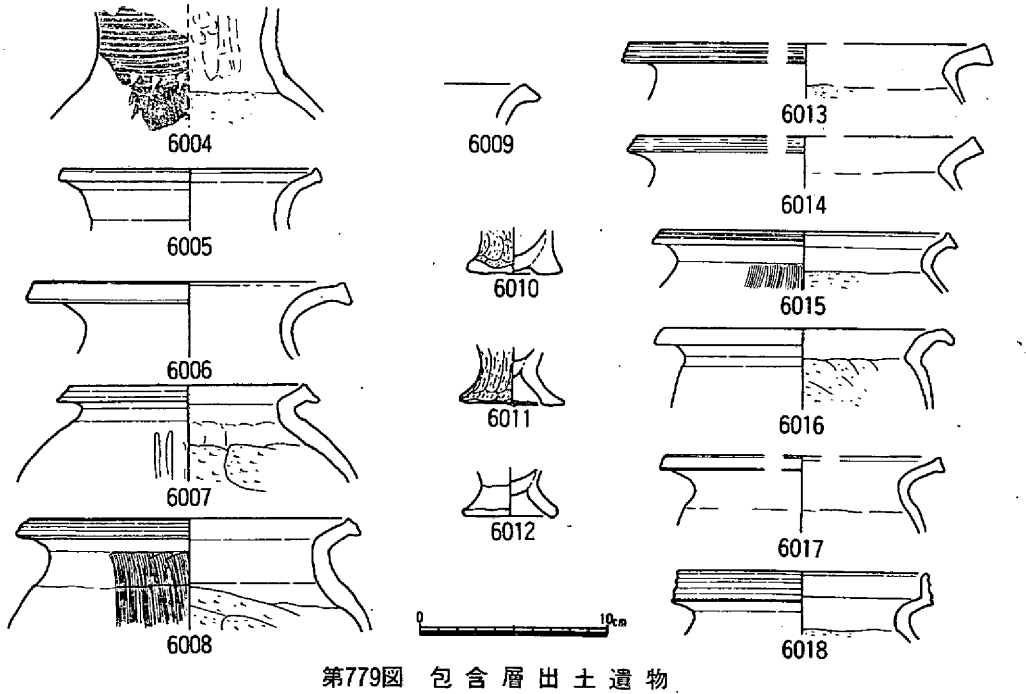
（3）　墓

土器棺－1（第778図）

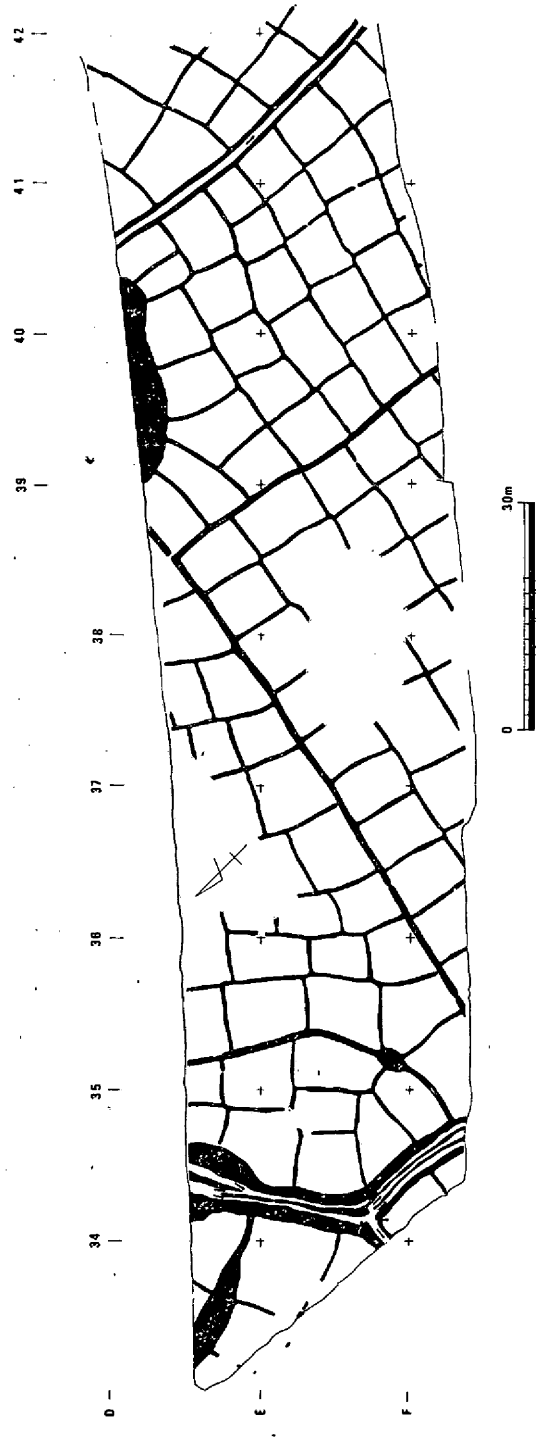
D-40の北西部，「島状高まり」遺構－13上において検出された。上面は後世に削平されており，土器全体の約3分の1が残存していたにすぎなかった。土壙等の遺構も検出できず単独に出土し，また土器も大型品であることなどから土器棺と考えておきたい。なお，図示したものの他に高杯の小片も出土している。時期は明確ではないが，弥生時代後期のものと考えられる。　（平井）

（4）　包含層出土の遺物（第779図）

壺・甕等の土器小片が検出されておりなかでも甕の個体数が多い。出土地点は「島状高まり」遺構の周縁に分布が認められ，6010・6014・6016，6007・6008・6011等がまとまって出土している。6004・6006・6009・6013・6014・6017・6018等は水田土壌内および下位より出土している。この時期の遺構は非常に少ない。



第779図　包 含 層 出 土 遺 物



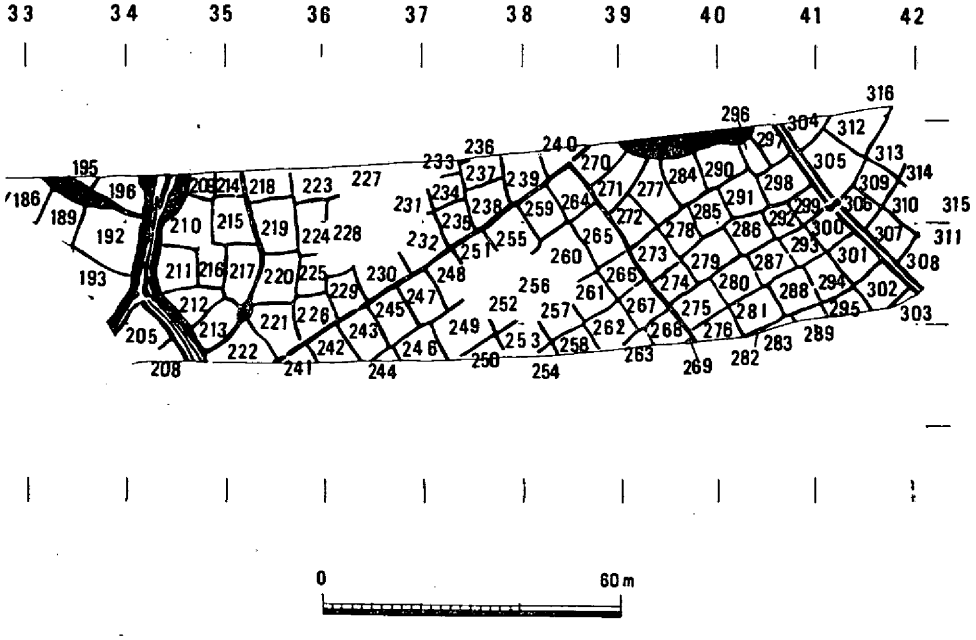
第780図　三ノ坪調査区弥生時代後期水田遺構配置図（1/800）

（3） 水 田 遺 構

水田関連遺構は横約180m，縦約40mの調査区内に大型の用水路（大畦畔），小型の用水路（畦畔），畔路，「島状高まり」遺構，大畦畔，小畦畔，水口，約116枚の水田により構成されている。それらの構造物により，A～Hの8区画（第782図）に区分できる。

第1微高地と第2微高地の中間にあり，第1低位部と呼称された地区にあたる。旧河道上および微高地上を整地して全面に水田が形成されており，旧河道上には「田」の字形に水田が整然と並び，微高地上は若干の歪が存在する傾向がうかがえる。また，36線を中心とする弥生時代前・中期に機能し，その後埋没した溝—168の上面に造られた水田平面プランは下位の溝—173のプランに規制されており，不自然な形態を呈する。水田域全体は北より南に向かって緩やかに傾斜しており，D-34付近での水田面海抜高は約297.0cm，F-42付近で235.0cmを測り，約62cmの高低差を認めることができる。これは当然古地形にも一因するものであり，灌漑配水に有効な状況を呈している。

「島状高まり」遺構—11のある畦畔—1より西側の水田は海抜高287.0～297.0cmを測り，水田193より畦畔—1に水を落す小溝が設けられている。その配水が流れ込む水田205は海抜261.7～268.8cmを測り両者間には約30cmの水田落差が存在する。また，畦畔—1より東側の水田213等は海抜265.0～280.0cmを測り前者の中間海抜高を呈する。微高地縁辺，「島状高まり」遺構，用水路，大畦畔等に取り付く小畦畔には水口を設けるものが多く，水田196・192，

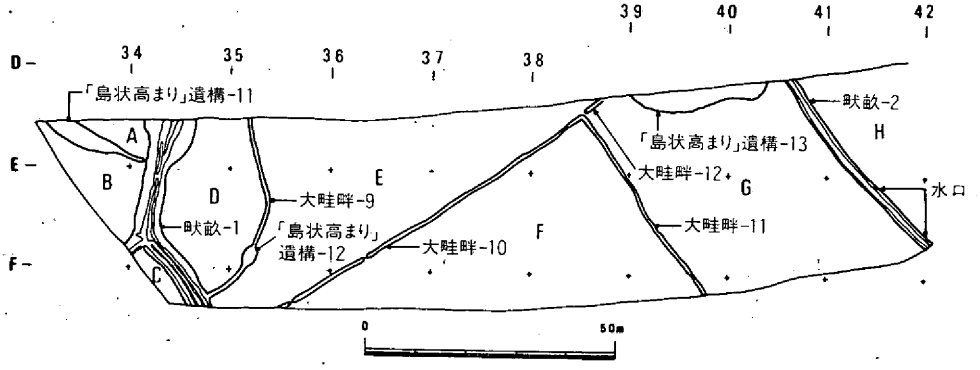


第781図　三ノ坪調査区水田番号（1/1500）

192・193，209・210，210・211，211・212，232・230，221・226，265・266・268・269，273・274，275・276，等の11例がある。水田196・192の関係は他と若干異り，畔路の一部に一段低い凹部を設けて水を横断させている。中央部にみられる大畦畔－10に2か所，大畦畔－10，12間に1か所の計3か所の水口が切られており，下流南東部の水田に配水する機能を果たしている。これらは小畦畔間にも認められるが，前述した「島状高まり」遺構，大畦畔，用水路等の取り付きには目立つが，小畦畔を切り配水する水口は水田214・215，266・267，263・268，280・287，287・293，288・294，301・302，308・311の8か所が確認できる。水田全体の一割にも満たない数であり，用水路より水口，水口より畦畔越しという「かけ流し灌漑」が考えられる。

また，41線を中心に南流する畎畝では2か所の水口が左岸に設けられており，水田307，水田308に配水を行っている。その畎畝を境にして両側水田のレベルが若干異なり，西側の水田が高く，東側水田が低い状況であり，その差は約10cm前後が認められる。

水田面積は最大が水田305の95.13㎡，最小が水田296の20.12㎡を測り，水田一枚が平均約51.27㎡となる。とくに，旧河道上面を中心とする水田241～269は大畦畔－10・11により「L」字形に区画されており，その内側の個々の水田も方形に整然と並ぶ。水田270～303の微高地掘削の水田は整然性の中に不自然な畦畔の接続，方形以外の変形の水田が存在する。



第782図　三ノ坪調査区水田区画（1/1500）

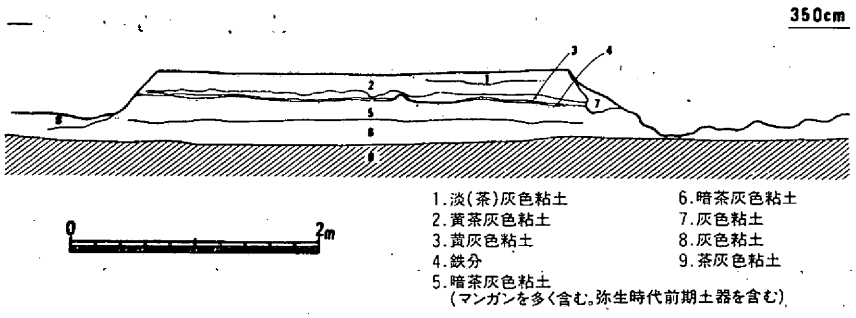
「島状高まり」遺構－11（第783・784図）

「島状高まり」遺構は3か所が確認されており，平面形は楕円が2，帯状が1であり，上部は平坦面を有する。

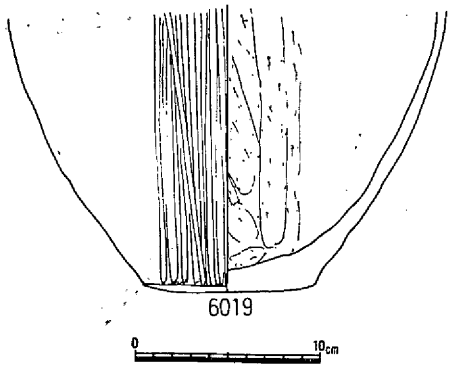
「島状高まり」遺構－11はD-33に位置し，水田A・B区画に挟まれた格好となり，土手樋門地区に所在する「島状高まり」遺構－9・10のどちらかに接続する可能性を持っている。北端より畔路を通して大畎畝の右岸に接続し，農道的な機能を果たしていたと考えられる。検出最大長約21.50m（約600cmの畔路を含む），最大幅約420cmを測り，面積は約49.80㎡である。

「島状高まり」遺構平坦部と水田面（海抜約290cm）との比高差は約40cm，畔路部（海抜約300cm）との比高差は約30cmが認められる。

畔路は下端幅約70cm，上端幅約40cm，高さ約10cmを測り，大畦畔に接続する東端部に幅約20cm，深さ約5cmの水口が設けられている。その水口底は水田面より約5cm高い位置にある。



第783図 「島状高まり」遺物-11（1/60）



第784図 「島状高まり」遺構-11 出土遺物

「島状高まり」遺構—11の東西断面形は台形を呈し，上端幅約330cm，下端幅約420cm，高さ35cmを測る。ほぼ水平な六層よりなり，粘土が中心である。3層は幅7cmの黄灰色粘土からなり，上面に凹凸の乱れが目立ち，その下位に幅約20cmの鉄分を多く含む4層が認められ，海抜約300cmを測る。さらに下位の暗茶灰色粘土5層には大粒のマンガン粒を多く含む。これら3・4・5層の関係は，いわゆる乾田構造を呈すると考えられるが，現状では水田存在の具体性を把握していない。

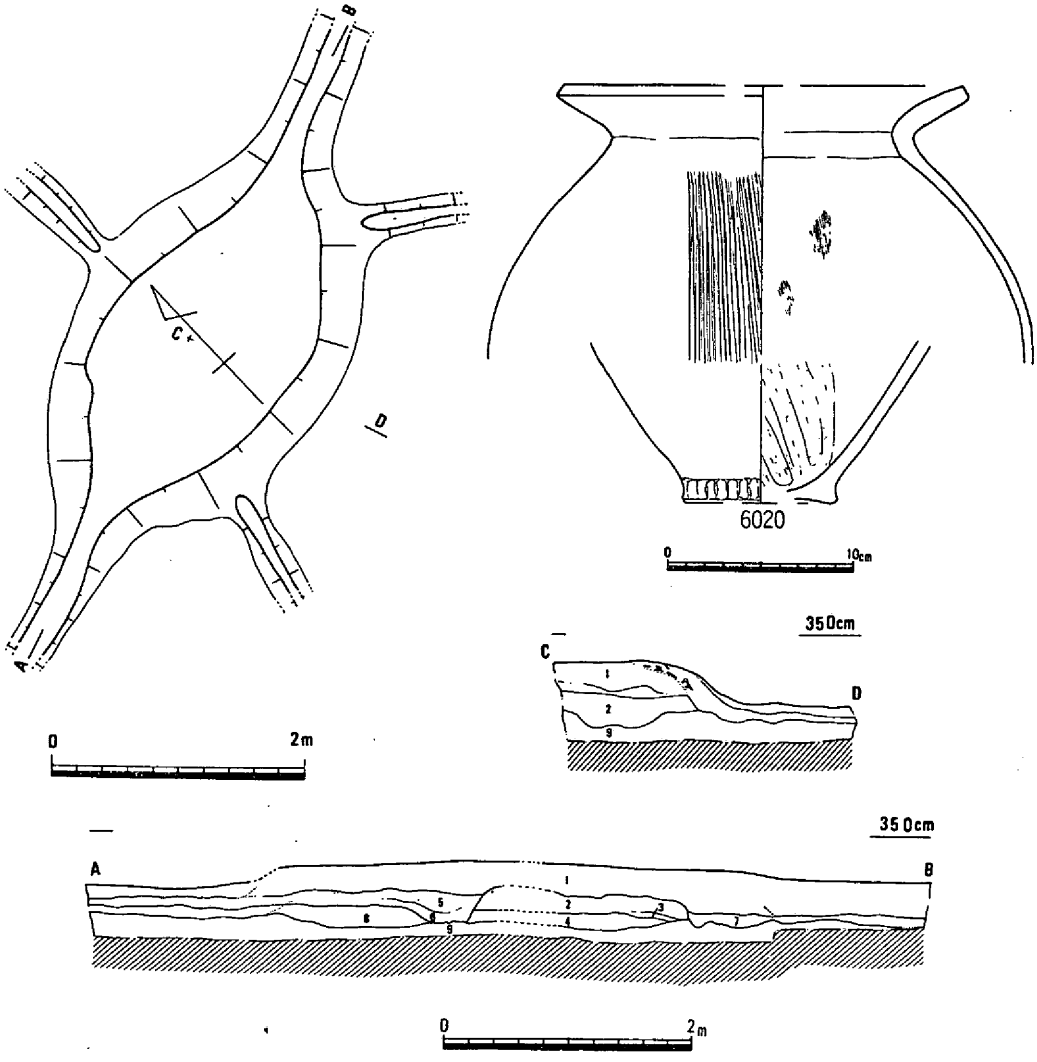
また，「島状高まり」遺構の裾を廻る溝が4本検出されており，東側に1本，西側に3本である。「島状高まり」遺構と関連を有する溝と考えられるが，検出が水田土壌下という現状であり，機能的な具体性に欠けている。

出土遺物は甕の胴部下半6019が上端部1層中に立つ格好で出土しており，百・後・Ⅱの時期が考えられる。さらに下層のマンガン粒を多く含む5層中に縄文時代晩期，弥生時代前期の小土器片が2点出土している。

「島状高まり」遺構の時期は大畦畔，大畦畔等とともに水田遺構を構成する一部分であり，水田埋没期の百・後・Ⅳに比定できる。

「島状高まり」遺構—12（第785図，図版30-1）

E-35の西隅に位置し，そこより大畦畔2本，小畦畔3本が放射状に延びヒトデ状を呈する。35線を中心に若干西方に屈曲しながら大畉畝に接続する大畦畔—9の中間地点に存在する。長軸は約460cm，短軸は約270cm，高さ約35cmを測り，面積は約15.68㎡である。平坦部海抜高は約304cm，それに接続する大畦畔の海抜高約231cm，小畦畔の海抜高約273cm，水田面の海抜高約269cmを測る。層序は前述の「島状高まり」遺構—11と異り，各層に乱れによる凹凸が認められ，どの層にもマンガン粒が多く認められるが，鉄分の層は存在しない。



1　茶灰色粘土　　4.茶灰色粘土(マンガンを含む)　7.灰色粘土
2. 暗灰色粘土(マンガンを含む) 5.暗茶灰色粘土(マンガンを含む) 8.茶灰色粘土(マンガンを含む)
3.茶灰褐色粘土(マンガンを含む) 6.暗灰色粘土　　9.黄茶灰色粘土

第785図　「島状高まり」遺構-12（1/60）・出土遺物

出土遺物は1層の南肩部に貼り付いた甕6020ほぼ一個体分がある。約30点の破片が60×60cmの分布範囲を持つ。1層中ではあるが，破片の垂直分布は「島状高まり」遺構の肩平坦部より裾に向かう傾斜に沿う形で認められ，それに沿う一線が引けるものと考えられる。そうすれば，2層に見られる傾斜部に接続し，土器接着面下および，2・9層は本土器が置かれる以前の「島状高まり」の原形状を呈することになる。そして，百・後・Ⅳの水田期には若干小型の「島状高まり」遺構に土を貼り付けて拡幅された「島状高まり」遺構が機能していたことになる。

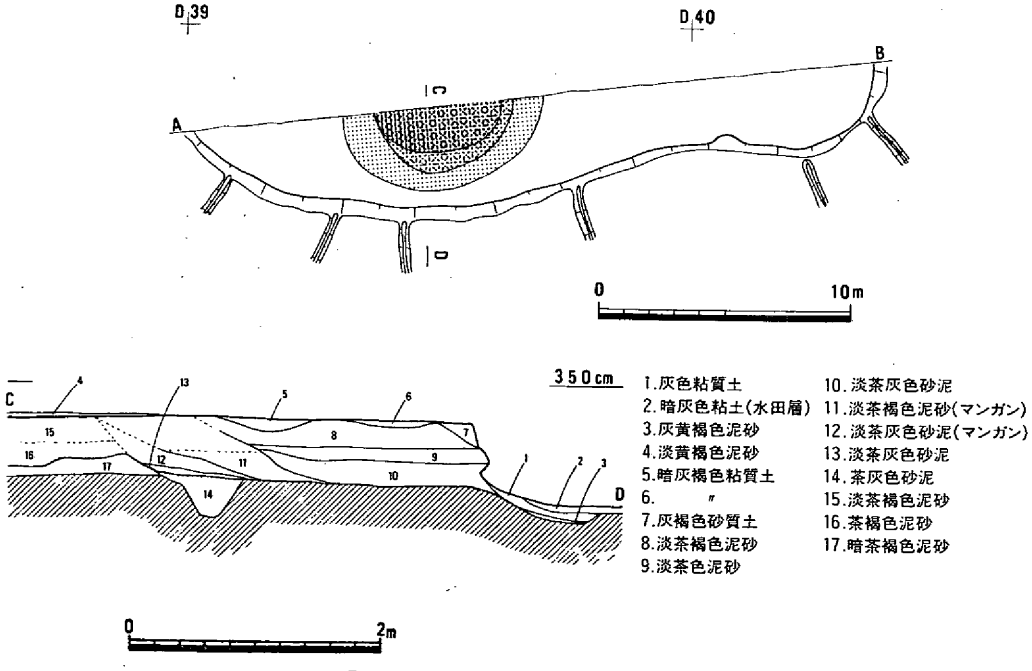
土器の時期は百・後・Ⅱに比定できる。

「島状高まり」遺構－13（第786～788図，図版32・33-1）

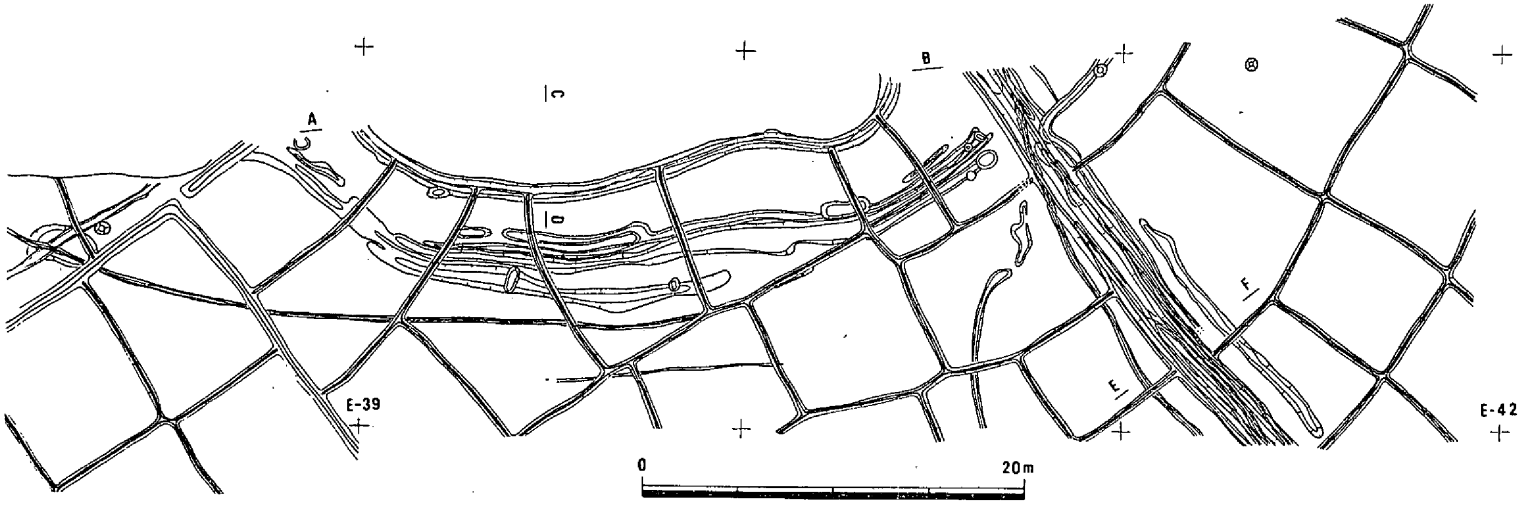
E-39・40に跨がって出土しており，裾部には小畦畔が6本取りついている。大部分が調査区外に所在するものと考えられる。

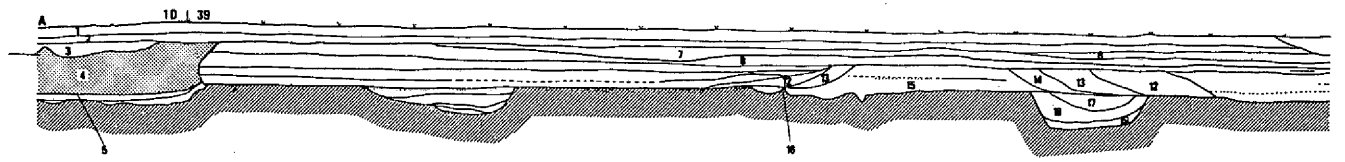
平面形は不整形を呈しており，東西幅約28m，南北幅約470cmを測り，面積は79.16㎡である。水田面との比高差は若干異りを見せるが，平均値60～70cmを測る。他の「島状高まり」遺構より規模が大きく平面形においても若干違いを見せており，微高地の縁辺部が表出している感をも受ける。しかし，第786図の縦横断面では西端より東に約10m付近にて「島状高まり」遺構の中心核と考えられる円錐台形が所在し，その中層（15層）にガラス滓・小石・炭・焼土，弥生時代前期土器片の包含層を形成している。

中核は上端部幅約300cm，下端部幅500cm，高さ50cmを計測することが可能である。そし



第786図 「島状高まり」遺構-13（1/300・1/60）

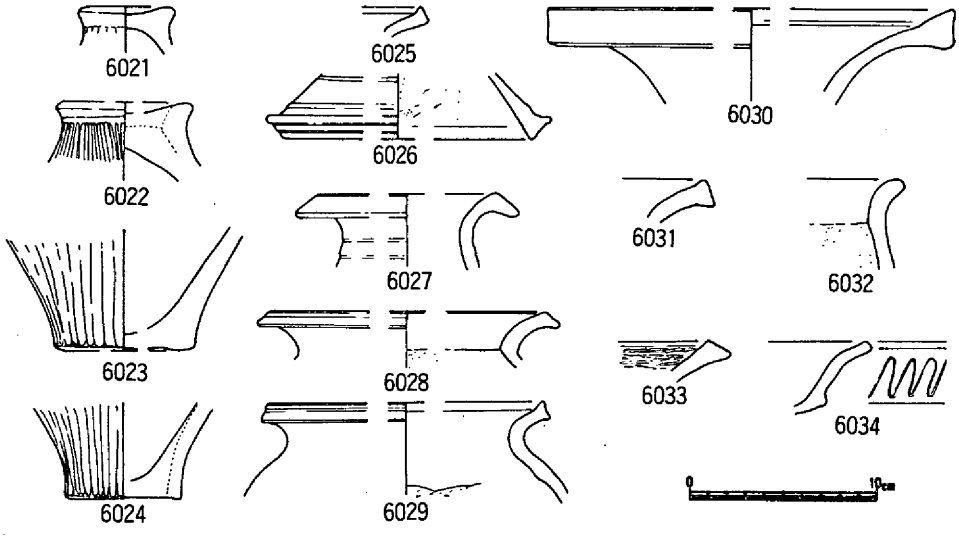




1. 耕土
2. 床土(砂)
3. 暗灰色砂質土
4. 黄褐色微砂(洪水層)
5. 灰色粘土(水田層)
6. 灰白色粘土
7. 淡黄褐色泥砂(砂質)
8. 淡灰褐色泥砂
9. 淡茶褐色泥砂
10. 淡茶黄褐色泥土砂
11. 茶灰色粘質泥砂
12. 淡黄灰褐色泥砂
13. 茶灰色泥砂
14. 淡茶褐色泥砂
15. 小石・炭・焼土・ガラス
16. マンガンの切れ目
17. 淡茶灰色泥砂
18. 暗灰褐色砂泥
(黄褐色土ブロック)
19. 暗茶灰色砂泥
(炭・焼土)
20. 土壙-264(弥生時代前期)

第787図　「島状高まり」遺構-13 (1/400・1/100)

て，徐々に拡幅されており上端部幅約410cmより520cm，下端部幅約550cmより800cmと3～4回の大型化の状況が認められ，さらに下端部が1200cmにまでおよぶ部分が存在する。



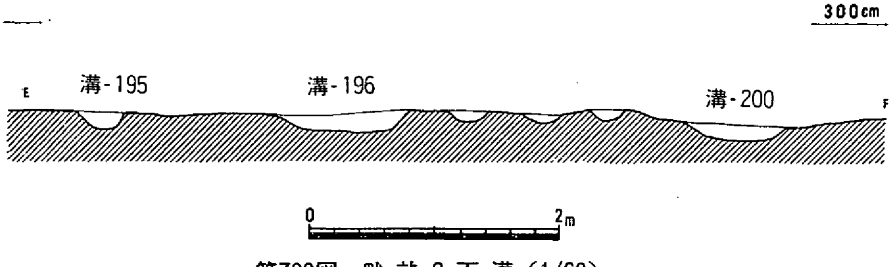
第788図 「島状高まり」遺構-13 出土遺物

出土遺物は小片が各層に認められており，コンテナ1箱分に相当する。時期は百・前・Ⅲより百・後・Ⅲまで確認できる。海抜280cm前後では弥生時代前期土器片が多く，上層にゆくにしたがい新しい傾向がうかがえる。

中核の形成期は百・前・Ⅲ以後に比定され，16層より西に向かってマンガンの凝集層が約780cm延び後期水田により削り取られている。この状況は水田の存在を示唆するものである。

ここで，「島状高まり」遺構の外側に認められる7～8本の溝についてのべると，すべてが「島状高まり」遺構の平面形に沿う格好で巡っている。その状況は水田土壌を除去した段階で検出が可能であり，洪水砂により埋没した水田の時期よりワンステージ古く位置づけられる。

溝幅は約10～130cm，深さ2～8cmを測り，同規模ではないが平均幅50cm前後が多い。また，2本が重複・切り合う形状をも呈しており，外側より内側に向かい溝—201～206の順に縮



第789図 畝 畝-2 下 溝 (1/60)

小し，溝—207が小型化して「島状高まり」遺構に近接して巡る。造田に伴う「島状高まり」遺構の縮小を意味するものと考えられる。

出土遺物は溝—203～206に弥生時代前期土器小片，溝—204・205に弥生時代中期土器小片，溝—204～206に弥生時代後期土器片等がある。溝—205に百・後・Ⅰの高杯片が認められ，最も新しい段階の土器は百・後・Ⅱに比定できる。

畎　畝—1（第790・792・793図，図版-30）

34線を中心に南流し，F-34付近にて東，および南に流路が大きく2分されている。原尾島遺跡では水田内にあって最も規模の大さな用排水機能を有するものであり，畎畝の大型化された機能（大畎畝）を持っている。すなわち，用排水溝，帯状の「島状高まり」遺構の両者の形状を兼備えており，また畔路としての機能も共有している。

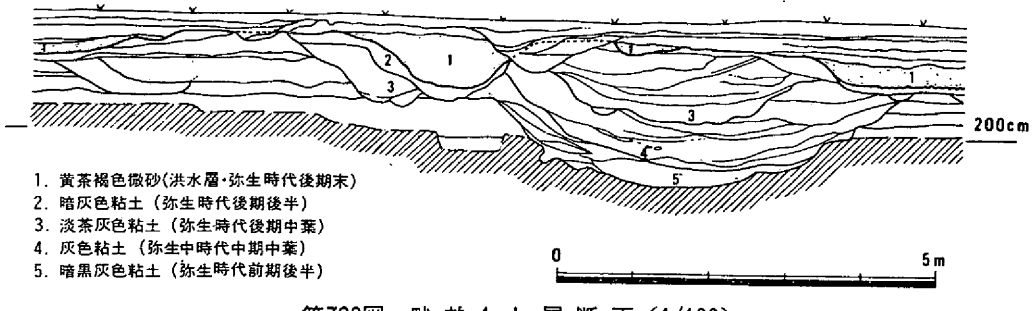
平面形状は「人」の字形を呈し，上流より主流に流れ込む水をまとめて下流の水田および水路に分水導入する形態を取っている。調査時には水田同様に洪水砂による埋没が確認されている。

A—B断面においては大きく2本の溝が認められ，さらに深い北側の溝内は小さい土手により分水される形状を呈している。右岸側の水田面が海抜292.3cm，左岸側の水田面が海抜269.0cmと約20cmの比高差があり，畎畝の左右岸の海抜が319.0cmを測り，A・B区画の水田と約17cm，D区画の水田と約50cmの比高差が認められる。畔路部幅は約140～300cm，溝上端幅は約180cm，下端幅は約80cm，深さ約45cm（海抜200cm）である。溝底の凸部は約7cm盛り上げられている。左岸畔路部にあり，主流に流れ込む溝は幅約120cm，深さ約20cmを測る。

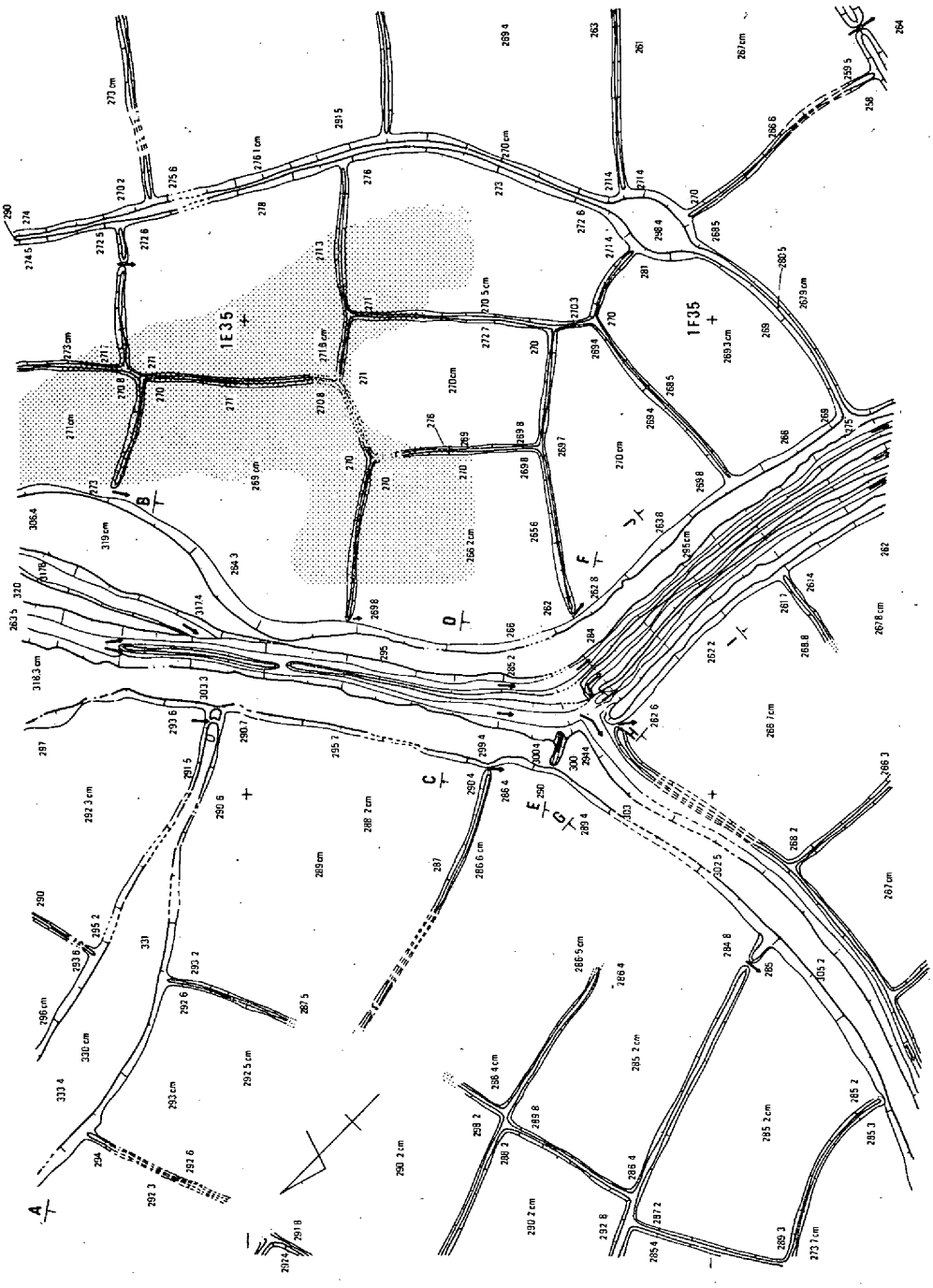
C—D断面では畔路部海抜299.4cm，溝底の海抜240～250cmを測り，若干下降している。

E—F断面は1本で流下してきた溝が左右2本に分流する部分にあたり，水田193からその溝に注ぐ排水溝が畔路に直交する格好で検出されており，全長150cm，上端幅約30cm，深さは海抜299.4cmより海抜264.5cmと溝に向かい下降する。

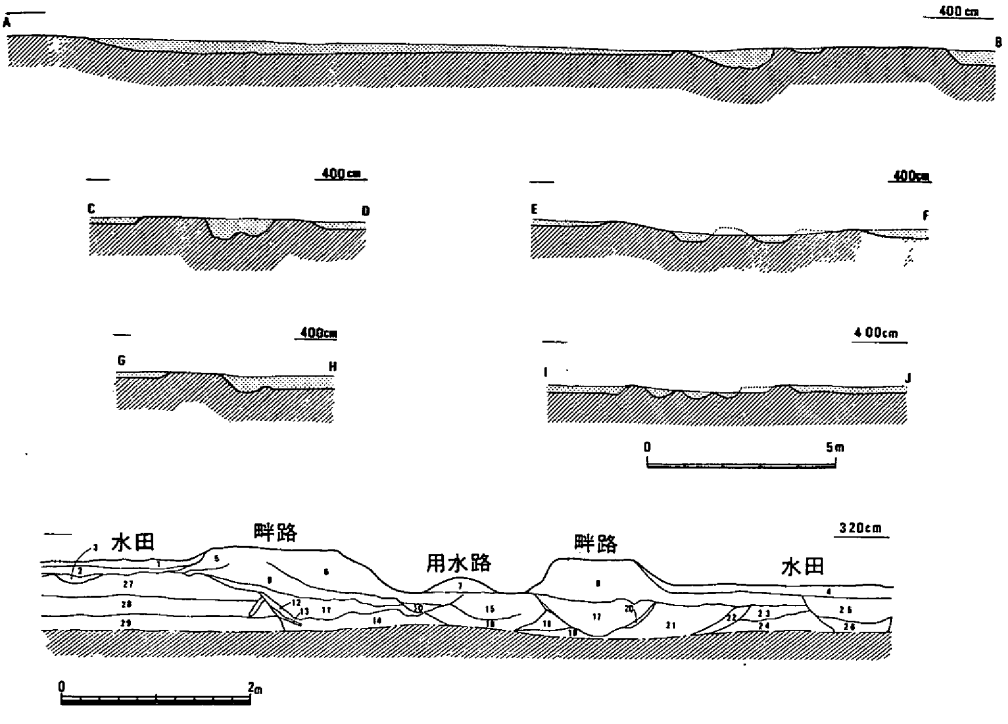
G—H断面は分岐して西に延びる畔路と溝にあたり，水田205の水口および南流する3本の



第790図　畎畝-1 土層断面（1/100）



第791図　水田遺構（1/300）



1 黄灰色砂(洪水砂層)
2 茶灰色粘土(水田土層)
3 暗茶灰色粘土
4 灰色粘土(水田土層)
5 茶灰色粘土
6 黄茶灰色粘土
7 灰色粘土
8 黄茶灰色粘土
9 灰褐色粘土
10 暗灰色粘土
11 灰色粘土
12 灰色砂
13 暗灰色粘土
14 灰色粘土
15 灰色粘土
16 暗灰色粘土
17 灰色粘土
18 暗灰色粘土
19 暗灰色粘土・砂
20 灰色粘土
21 茶灰色砂
22 茶灰色粘土・砂
23 茶灰色粘土
24 茶灰色粘土・砂
25 灰色粘土
26 灰色砂

第792図 畎 畝-1 (1/200・1/80)

溝の右端部溝を閉鎖すれば西に流水する形態をとる。溝底は海抜約254cmを測り，水田205の田面より約10cmほど低い形状を呈する。

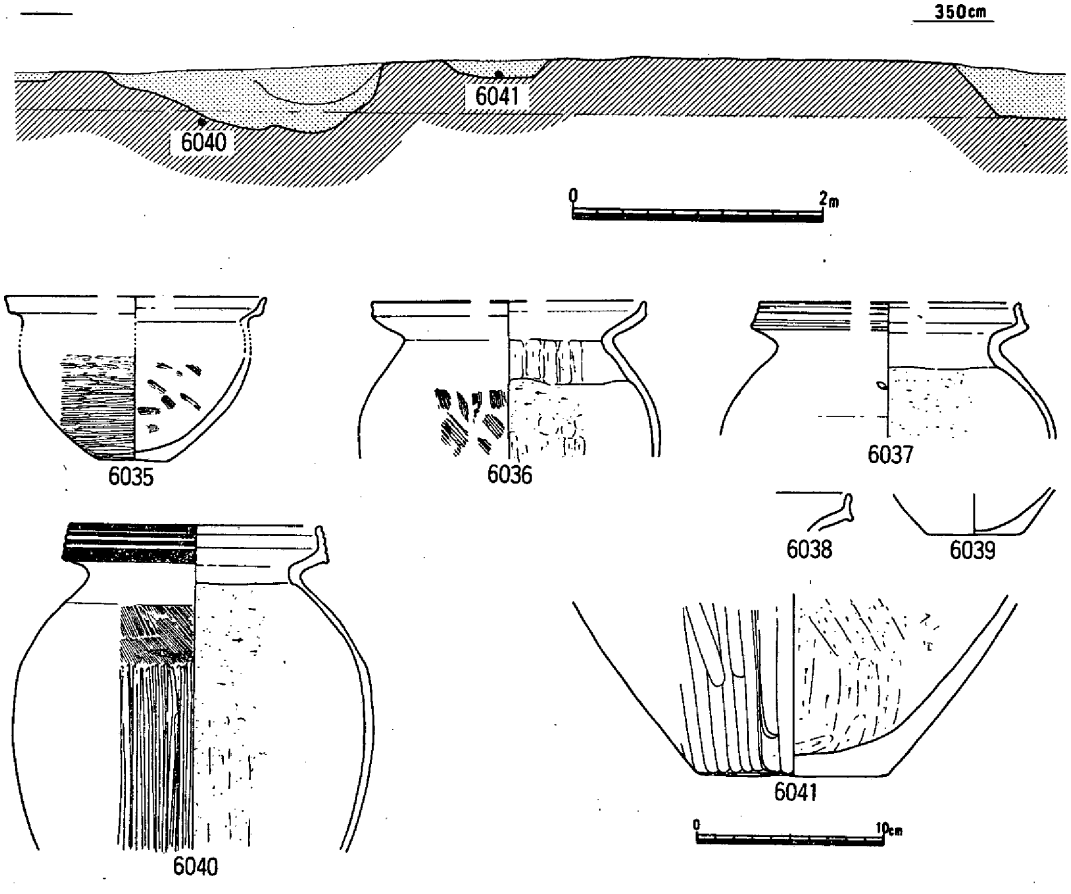
I—J断面は南下する溝・畔路にあたり，右岸畔路幅は約50cmと狭くなり大畦畔の断面形態を呈する。左岸畔路は約100cmを測り，緩やかに下降している。畔路上面の海抜295cm，西端溝底の海抜251cm，中央溝底の海抜246cm，東端溝底の海抜251.3cm，それらに挟まれた2本の土手上部は海抜262cmを測る。水田212（海抜270cm）と水田205（海抜268cm）の比高差はほとんど認められない。

出土遺物は第777図に掲載した土器群より上層にあたり，6035～6039は畎畝の畔路部分上層より出土している。6040が第793図洪水砂による埋没溝より下位の溝に伴い，6041は洪水砂による埋没溝底に配置された状態で出土している。6040が出土した溝は畎畝—1に踏襲されており，削平，改修を受けたと考えられる。部分的に溝のなごりをとどめている。

6035～6040は百・後・Ⅳに比定できる土器であり，洪水砂による水田埋没期より若干古いス

テージに置くことができる。

畎畝の機能を停止した時期は百・後・Ⅳの新相に比定できる。



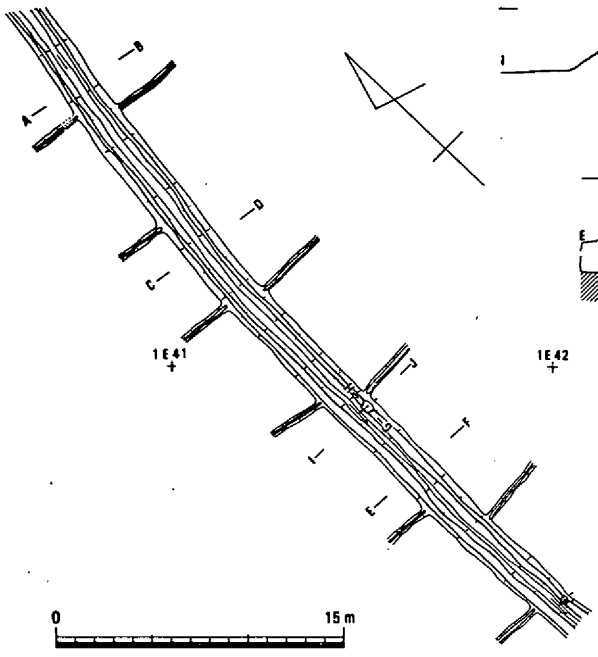
第793図　畎　畝-1（1/60）・関連出土遺物

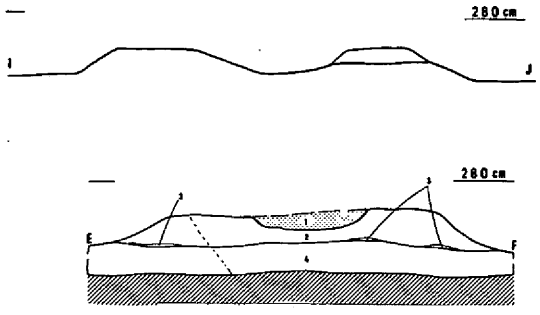
畎　畝－2（第794図，図版31-1）

D-40よりE-42にかけて流下する水田中の溝である。34線を中心に見られた大型の畎畝とは異なるが，機能面においてはほぼ同一の働きをするものと考えられる。本畎畝の位置は旧地形の微高地と低地との境目変換点にあたり，低地部に向かって水口が2か所設けられている。水田307，308に流入するそれである。

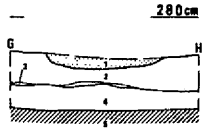
形状は大畦畔を2本少し間を置いて並べ，その間に流水を行うものである。調査区内に延長43mが検出されており，小畦畔が右岸に6本，左岸に4本が取り付いている。

A－B断面よりみてゆくと，右岸部G区画水田の海抜高が250cm，左岸部H区画水田の海抜高が245cmを測り，H区画が一段低い形状を呈する。また，左岸部畔路が海抜264cmを測り，

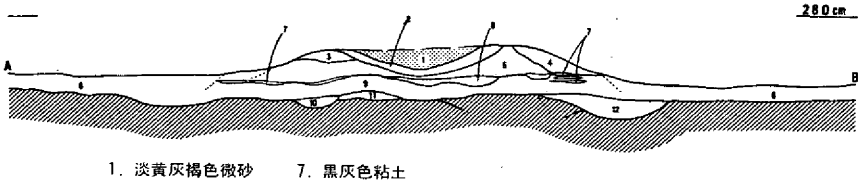




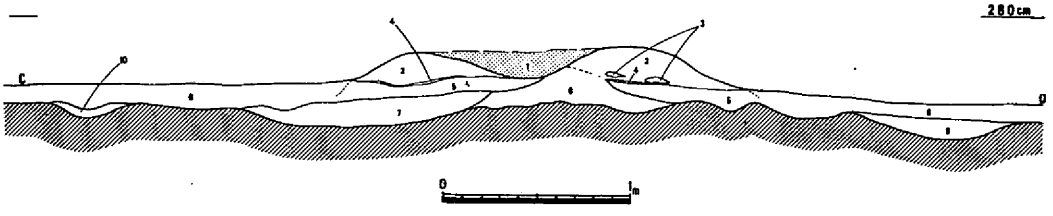
1. 淡黄褐色微砂(Fe,Mnを多量に含む)
2. 淡灰褐色砂質粘土(　〃　)
3. 暗灰色粘土(　〃　)
4. 灰色粘土(Fe.Mn多い)



1. 淡黄灰褐色微砂
2. 淡灰褐色砂質粘土(Fe,Mnを多量に含む)
3. 暗灰色粘土
4. 灰色粘土
5. 黄褐色粘質土



1. 淡黄灰褐色微砂
2. 暗灰色粘質土
3. 淡灰色粘土
4. 灰色粘土
5. 黄灰褐色粘土
6. 暗灰色粘土
7. 黒灰色粘土
8. 灰色砂と砂粒の混った土
9. 暗灰色粘土
10. 暗灰褐色粘土
11. 暗灰色粘土
12. 灰褐色粘質土



1　淡黄灰褐色微砂
2　淡灰色粘土
3. 黄色土ブロック
4. 黒灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 灰色粘土
7. 暗灰色粘土
8　暗灰色粘土(Mn多い)
9. 暗灰色粘土

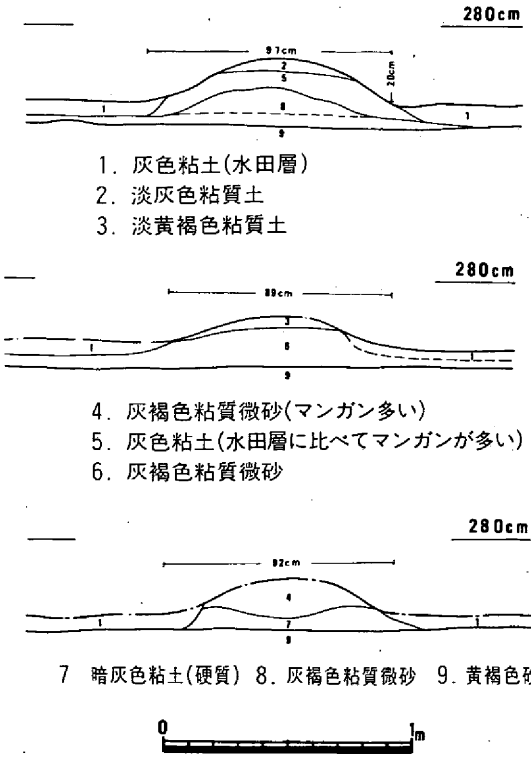
第794図　畝　畝-2（1/400・1/40）

右岸部畔路261cmより高く造られており，その断面は「山」形を呈する。両下端間240cm，右岸畔路部幅約10cm，左岸畔路部幅約20cm，その間の水路部幅約70cm，深さ約12cm（海抜253cm）を測る。7層に黒灰色粘土が水平に確認でき，上層を盛土により構築したものと考えられる。

C－D断面も基本的にはA－B断面と同様であり，溝幅が若干広く95cm，深さ18cmに変化をしている。また，畎畝以前の5～7・9・10層の溝状遺構が水田土壌下，および畎畝下より出土している。

G－H・I－J断面は水路より水田307に水を落す水口である。横幅58cm，縦幅52cm，深さ7cmを測り，水路底より約6cmほど水口底が高い位置にある。水田308に水を落す水口は若干小振りで，38×38×4cmを測る。

百間川兼基遺跡（註3）の303－C・D・Eに所在し，水田を南北に分ける畎畝との比較では本畎畝が全体的に30cmほど幅が狭いようであるが，水路部についてはほぼ同規模を呈している。畔路部は本畎畝が断面形状「山」形を呈するのに比べ，台形を呈しており広い畔路部（約80cm）を形成している。



1．灰色粘土(水田層)
2．淡灰色粘質土
3．淡黄褐色粘質土
4．灰褐色粘質微砂(マンガン多い)
5．灰色粘土(水田層に比べてマンガンが多い)
6．灰褐色粘質微砂
7　暗灰色粘土(硬質)　8．灰褐色粘質微砂　9．黄褐色砂

第795図　大畦畔断面（1/30）

大畦畔・小畦畔（第793・795図）

大きい区画を意識させる大畦畔，個々の田を画する小畦畔が存在する。両者とも水田土壌を盛り，塗り上げたと考えられるが，明確にはその痕跡を把握できにくい。

しかし，大畦畔，小畦畔の下位に黒色有機土が確認されており，下部に板材，草木等を敷いた痕跡とも考えられる。

大畦畔の幅は約80～100cm，高さ約20cmを測り，断面形状は逆台形ではなく，緩やかな「山」形を呈している。

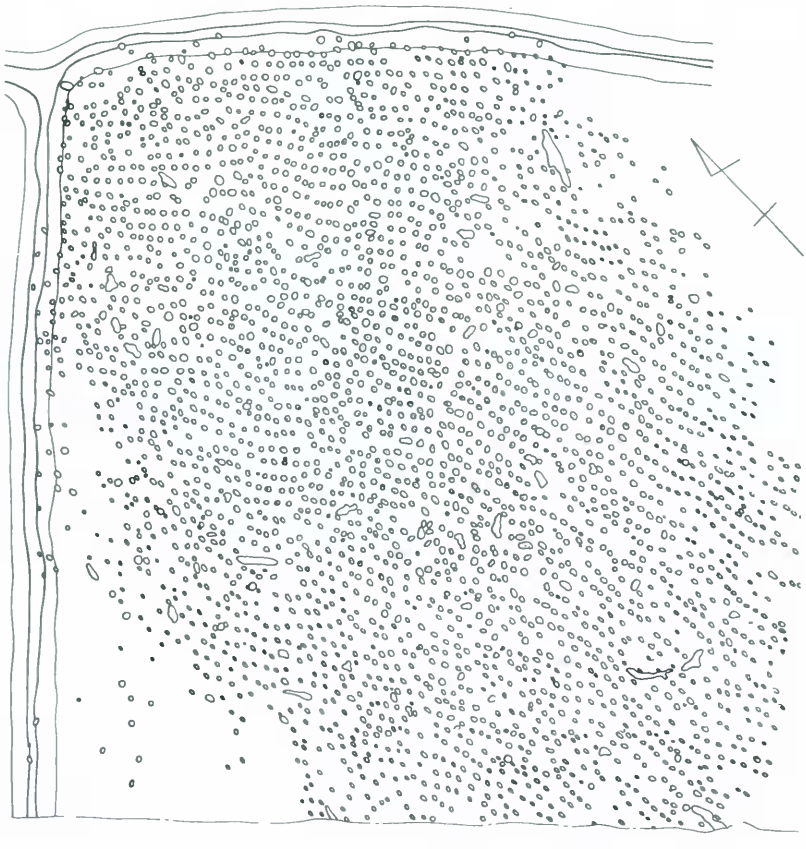
小畦畔は幅約25～40cm，高さ約5～10cmを測り，断面形状は「山」形を呈している。

第796図　稲株痕跡（1/100）

稲株痕跡（第796～798図，図版33-2・34）

D-34，E-34・35付近に位置し，水田209・210・211・214・215・216・217の7枚に跨がり，約165㎡の範囲に検出されている。洪水砂を除去すると田面に楕円形の小穴が畦畔を除き全面に分布し，その小穴内には洪水砂が充満しており，それぞれの小穴上面には鉄分の凝集が認められる。

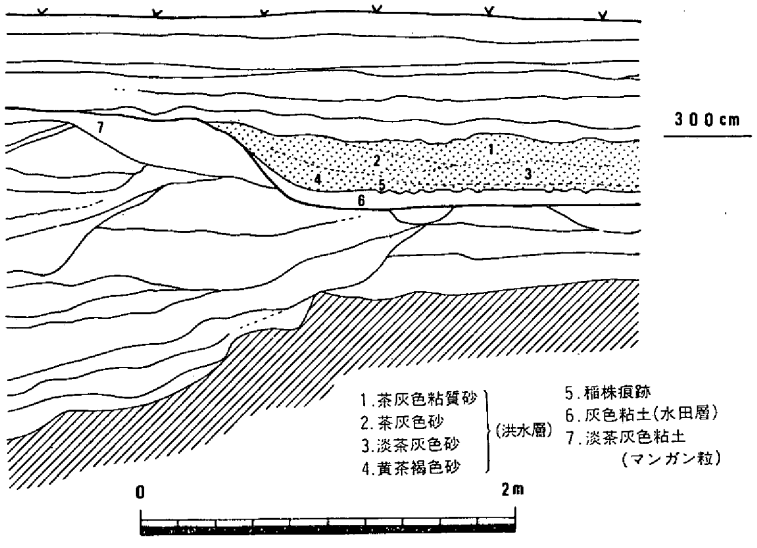
楕円形の小穴は直径約3～8㎝，なかでも約5㎝に均一したものが多く，深さ約2～3㎝を



第797図　水　田217稲株痕跡（1/40）

測り，小穴間の幅は南北12～13cm，東西9～10cmの密植状況を呈する。そして，一坪内に約400株の苗が移植されたようであり，その事実は，水田217（第797図）に顕著に認められる。小穴の南北の並びに約80cm単位の節（空間）が存在し，水平に並ぶ小穴，下方に弧を描いて小穴の単位に個性が認められる。その単位内に約10～12の小穴が認められ，一人植えの範囲と考えることが可能であり，それらが西に向かって下がる帯状の形態をとっており，6条が確認できる。

この小穴を掘ることにより小穴が楕円形を呈する理由，また洪水時における流水方向を知ることができた。すなわち，小穴内形状は北側が深く，南に向って浅くなり田面にまで上がる状況を呈しており，北部上流より襲った洪水および微砂が稲を南に押し倒し，その後の傾倒痕跡が楕円形を呈すると理解した。小穴内砂は稲が腐敗するに伴い徐々に沈下し，水田土壌（灰色粘土）に痕跡を残した稲株と入れ変わったと考えられる。



第798図　水　田209　土　層　断　面（1/40）

土　壌

水田上面には約30cmの洪水微砂層が認められ，色調・土性により1～4層に分けることが可能である。しかし，その異りは漸次変化していったものととらえられ，一瞬のうちに堆積した同時期の水田埋没砂と考えている。

水田土層6は約8cmを測り，2つに分層することが可能である。そのうち上層は約5cmを測り，色調淡緑灰色を呈する。下層は約3cmを測り，色調灰色を呈する。両者とも粘土であり，上層に鉄分の管状集積物が顕著に見られ，下層には鉄分の集積物の周囲にマンガンが付着した斑紋が認められる。

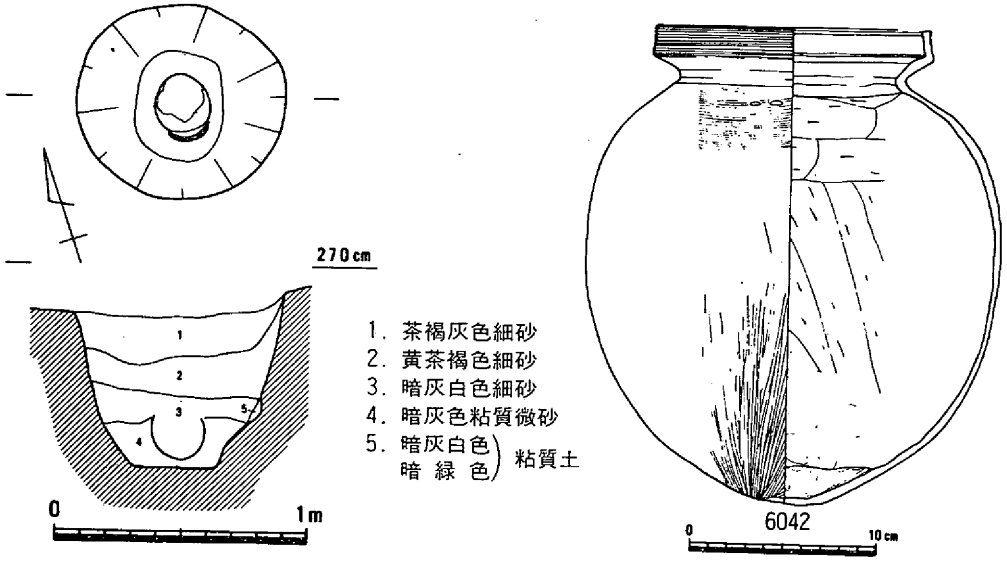
6層下位の暗茶褐色土層（造田時の掘開停止面）上面には管状の斑紋平面が全面にみられ，硬度な面を形成している。（高畑）

6, 古墳時代の遺構・遺物

(1) 井　　戸

井　戸—31（第799図）

F-39の北端に位置し，弥生時代後期の水田層を切り込んでいる遺構であり，平面形態はほぼ円形で，断面形状は擂鉢状の掘り込みがなされ，底面においては隅丸方形を呈する井戸状遺構である。埋土中の4層下層からは横位の状態で甕1点が出土し甕内部には河原石が埋没していた。時代的にこの遺構は弥生時代後期の水田が埋没した砂層上の層から掘り込まれたものであり，古墳時代前期の遺構である。遺物から百・古・Ⅰの時期であろう。遺構は水田面上において確認されたものである。　　(二宮)

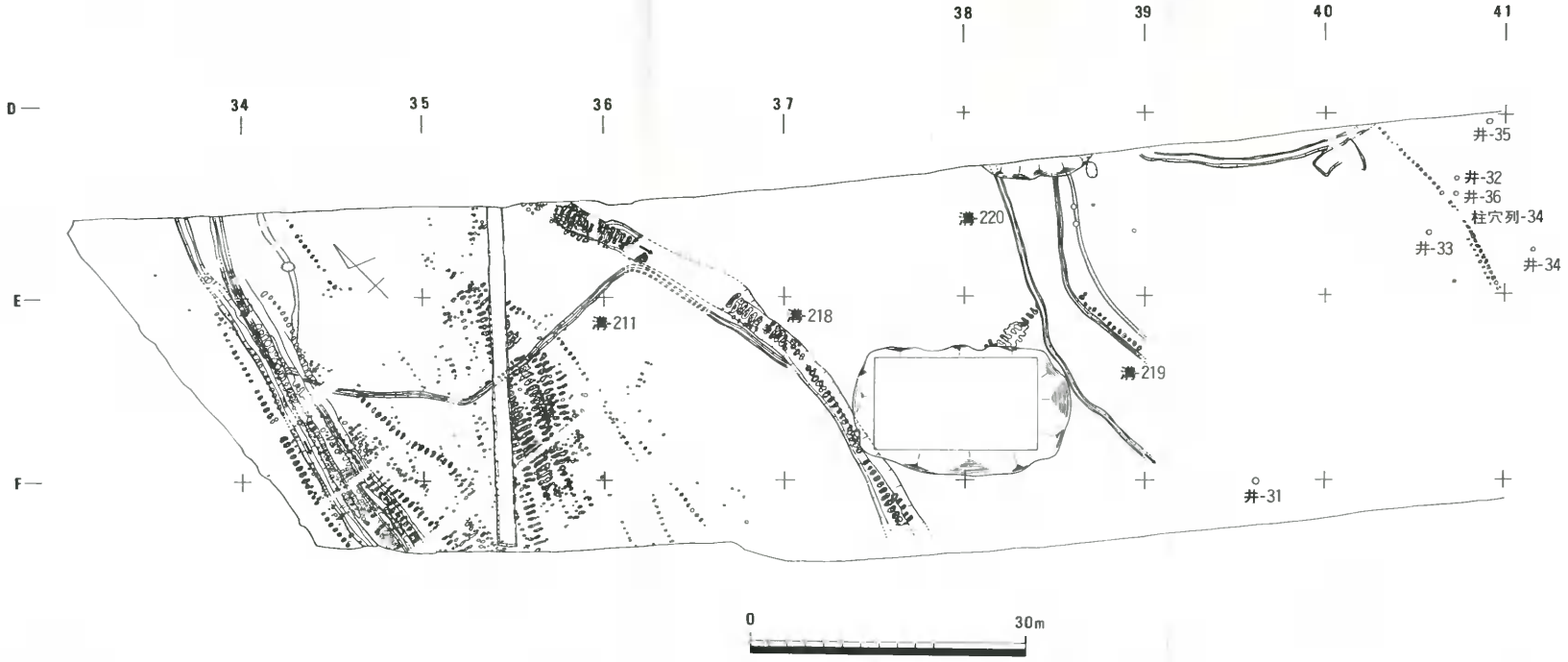


第799図　井　戸-31 (1/30)・出 土 遺 物

井　戸—32（第801図）

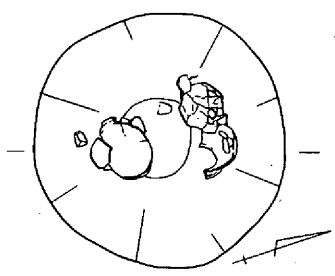
この遺構は，水田上層の砂層面に検出されたものである。規模は，直径約100cmを測り，ほぼ円形を呈する。深さは，約85cmであった。遺構内は，1層～11層の堆積状況が認められ，いずれもレンズ状に堆積していた。この遺構は，形態，規模および堆積状況からみて，井戸として使用されたのち破棄されたものと思われる。

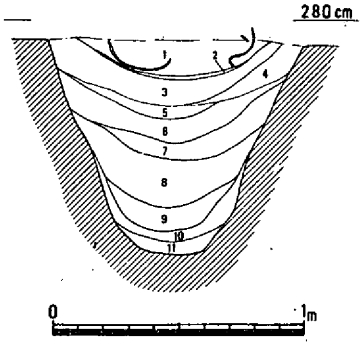
出土遺物は，1層に集中的に検出された。2層～11層からも少量ながら土器が出土した。図示したものは，1層からのものである。出土した土器は，一様にその時期差を求めることができず，百・古・Ⅰの特徴を示すものであった。



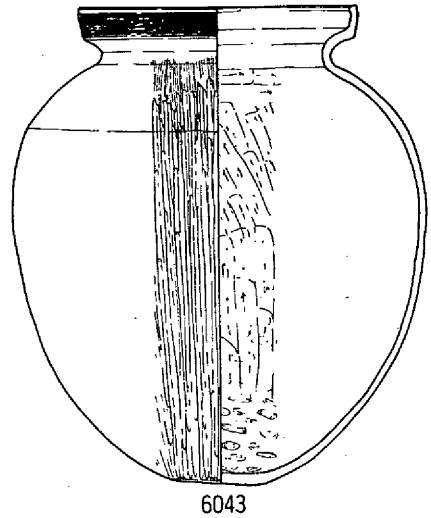
第800図　三ノ坪調査区古墳時代遺構配置図（1/600）

折込 8

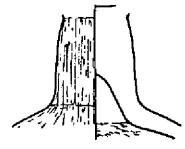




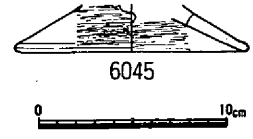
1.茶灰色泥砂
2.炭
3.淡茶灰褐色泥砂
4.灰
5.灰褐色砂質土
6.茶灰褐色砂質土
7.灰褐色粘質土
8.灰緑褐色砂質土
9.灰色粘土
10.暗灰色粘土
(有機物多い)
11.灰白色粘土



6043



6044

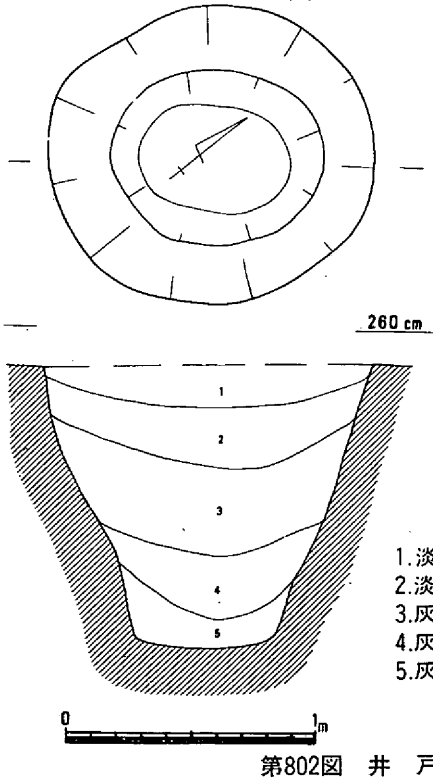


6045

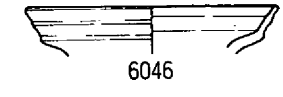
第801図　井　戸-32（1/30）・出 土 遺 物

井　戸—33（第802図）

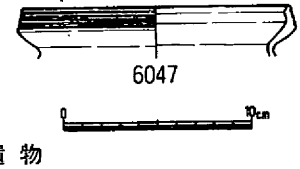
この遺構は，井戸—32と同様に水田上層の砂層面から掘りこまれている。規模は，直径120～130cmを測り，ほぼ円形の平面形を呈する。深さは，約110cmを測る。遺構内は，1層～5層がレンズ状に堆積している。出土遺物は，図示した以外に少量の土器を出土しただけであった。これら出土した土器は，百・古・Ⅰの特徴を示す。



1.淡茶黄褐色砂質土
2.淡青灰色砂質土
3.灰色砂質土
4.灰色ピート泥砂(炭)
5.灰褐色粘質土

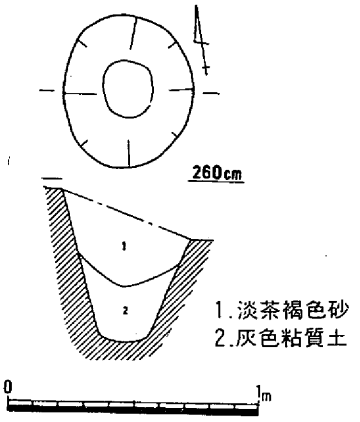


6046

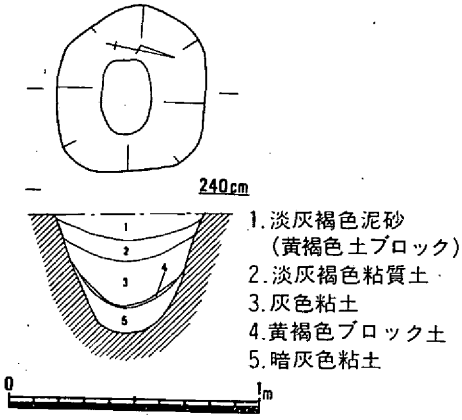


6047

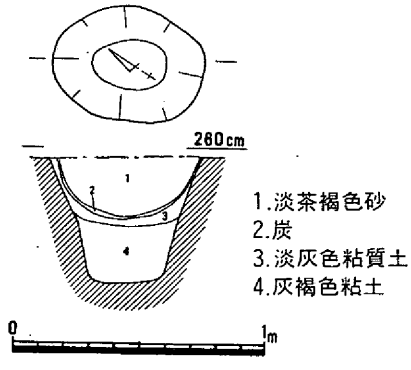
第802図　井　戸-33（1/30）・出 土 遺 物



第803図　井　戸-34（1/30）



第804図　井　戸-35（1/30）



第805図　井　戸-36（1/30）

井　戸—34（第803図）

この遺構は，井戸—35，井戸—36と同様に水田遺構面で検出したものである。しかしながら，これらの遺構は状況からみて，前述した井戸—32，井戸—33と同様に水田上面に堆積した洪水層である砂層面から切りこまれていたものと考えられる。また，これらの遺構の性格についても，井戸として理解されるものであろう。

井戸—4は，規模が50×60cmを測り，やや楕円形を呈する。残存していた深さは，約60cmを測る。底部の規模は，約20cmと比較的小さかった。出土遺物は，ほとんど認められず土器の少片が少量出土したのみであった。時期的には，井戸—32，井戸—33と同時期のものであろうか。

井　戸—35（第804図）

この遺構は，45×55cmとやや楕円形を呈する。深さは，約50cm残存していた。遺構内には，1層～4層が認められ，井戸としての下半部の堆積状況を特徴的に示していた。出土遺物は，ほとんど検出できなかった。

井　戸—36（第806図）

規模は，60×70cmのやや楕円形を呈する。堆積層は，1層～5層までレンズ状に堆積していた。4層には，炭層が認められた。出土遺物は，土器が少量出土した。出土した土器は，百・古・Ⅰの特徴を示す。

以上，井戸—31～井戸—36は，比較的集中するような在り方を示している。これらの井戸の底部をみてみると，井戸—33の海抜約135cmを例外として，だいたい海抜185～205cmの間に掘られていることが注目される。さらに，井戸の数に比べて竪穴式住居の数が少ないことが特徴的である。

（中野）

（2）　溝・柱穴列

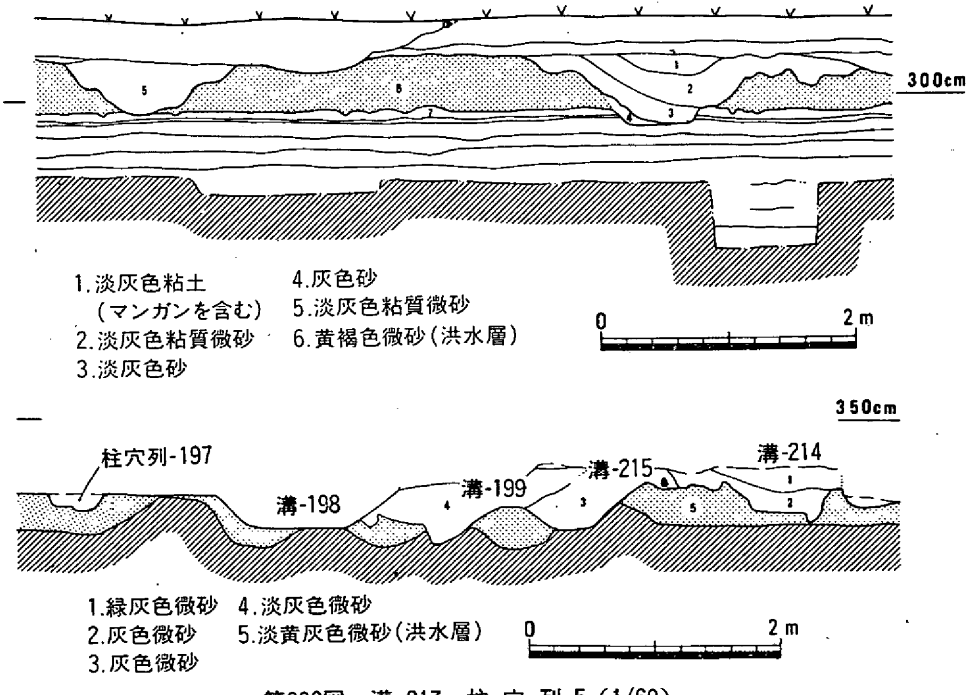
弥生時代と同様に南下する溝が中心となるが，規模が縮少されており，大型の溝が存在しない。しかし，同一地点で切り合い，重複する溝が多く，大きくは37・37・38線を中心にして3か所に分布している。

また，それに併設，あるいは35・36線間付近に単独で機能していたと考えられる柱穴列が溝と同一方向に並ぶ，柱穴内は灰色粘質微砂，淡黒灰色粘質微砂等の土質の近いものが入っている。時期は弥生時代後期末の水田埋没洪水砂上に乗り，古墳時代前半と考えられる暗灰色粘質微砂層を切って造られていることより，古墳時代の中頃から後半期を中心に存在していたと考えられる。個々の溝・柱穴列についての説明は調査区西方より東に向かって行ってゆく。

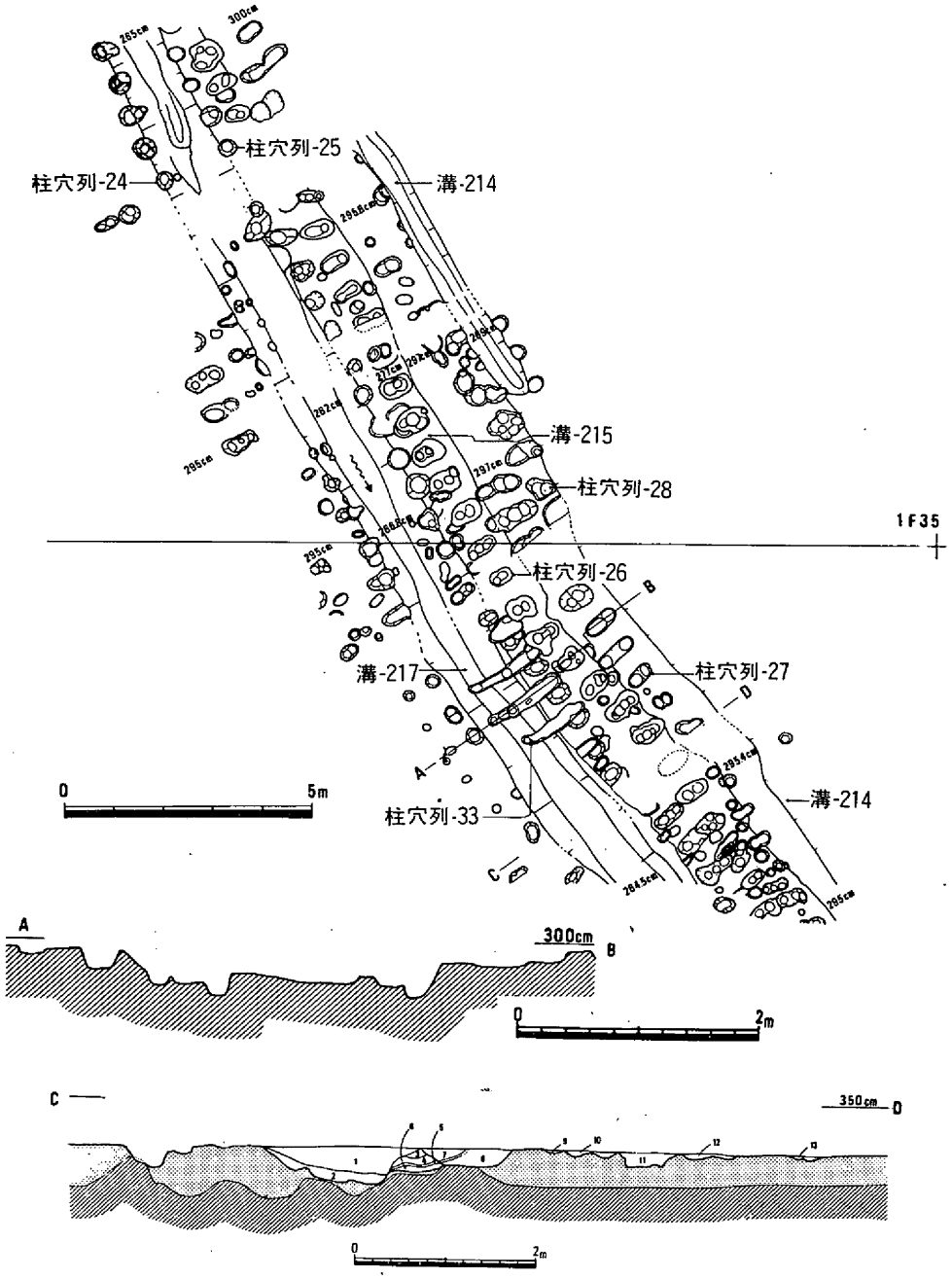
溝—217・柱穴列—5（第806図）

溝・柱穴列等が最も集中する部分であり，なかでも溝—217は土層断面および検出状況より最も新しい時期の溝と考えられ，堆積土は粘質土が中心を占めている。

幅約85cm，深さ約35cmで延長約40mを測る。右岸側の縁より約50～60cmの間をおいて溝に並列する柱穴が存在する。上流高所側は消失しているが，下流に向かって約30mを測る。柱穴は切り合い，接近して検出されており，東西2～4穴を数えることができ，明らかに南北3条の柱穴列が認められる。直径約25～40cm，深さ5～15cmを測り，柱穴底には時おり，長さ約



第806図　溝—217・柱穴列—5（1/60）



1. 灰色砂質土(溝-217)
2. 暗灰色粘質土
3. 淡黄灰色砂質土
4. 淡灰色砂質土
5. 淡黒色砂質土
6. 暗青黒色土(溝-212)
7. 淡灰黒色砂(溝-199)
8. 灰色砂質土(溝-215)
9. 灰色砂質土(柱穴)
10. 灰色砂質土(柱穴)
11. 暗灰色砂質土(溝-214)
12. 暗灰色砂質土(溝-213)
13. 灰色砂質土

第807図　柱 穴 列 (1/150・1/60)

5㎝，幅1～2㎝の木切れ片が横位の状態で散乱して出土している。柱穴底の海抜高は約280㎝を前後するものが多い。時期は明確におさえていないが，周辺出土遺物，切り合い状況等より7世紀の前半を想定できる。

溝—199（第770図，図版26）

溝—198の東側に位置し，同一方向に流走している。上流部での幅は溝—198に比べて広く約200㎝，深さ約50㎝を測る。下流に向かい消失する格好となるが，溝—198により切られることを考慮に入れると，最深部は溝—198と同一場所を重複している可能性が存在する。前述した柱穴列—5も同様に重複の可能性がある。3・4・7層が溝—199の堆積土となり，砂が縞模様状に動いた痕跡が顕著である。

溝—215（第800図）

溝—199により切られており，切り合い関係では3本のなかで最も古い溝となる。幅は60㎝以上を測るが，全体は確認することができず，全長は約20mまでにとどまる。溝—215の右岸肩部が溝—216に切られ，それを溝—217が切る格好で検出されており，8層がそれにあたる。

溝—214（第800図）

溝—21の東側に位置し，流走方向は前者とまったく同様である。全長約28m，幅約75㎝を測り，底部は凹凸が著しく平均した形状を呈していない。浅い所で海抜285㎝，深い所で海抜265㎝を測り，11層がそれにあたる。

溝—213（第800図）

溝—215の東側に位置し，この周辺では東端の溝になる。上部はほとんど削平を受けており，細く浅い形状で残存していた。全長約28m，幅約60㎝，深さ約8㎝を測り，流走方向はまったく前述の4本と同様であり，弥生時代後期末の洪水砂層を溝底としており，12層がそれにあたる。溝—198・199・215・214・213は方向，位置等より同一機能を有していたと考えられ，東より溝底を下げながら西に向かって徐々に移動した状況から，溝—213が古く，溝—198が新しいことが考えられる。

柱穴列—28（第807図）

延長約30mが確認できており，検出状況は溝—198の右岸肩部により柱穴の東半分が削除され，溝—198の内法面に柱穴断面がのぞく。溝—198より古い時期に存在したことが理解できる。柱穴直径約40㎝，底径約20㎝，深さ約15～30㎝を測り柱穴に2～3回（2条）の重複が認められる。柱穴底の海抜高は約280㎝前後のものが多く，比高に極端な差は認められない。柱間は約70㎝等間を測り，溝—198等とも間隔を同じくしている。

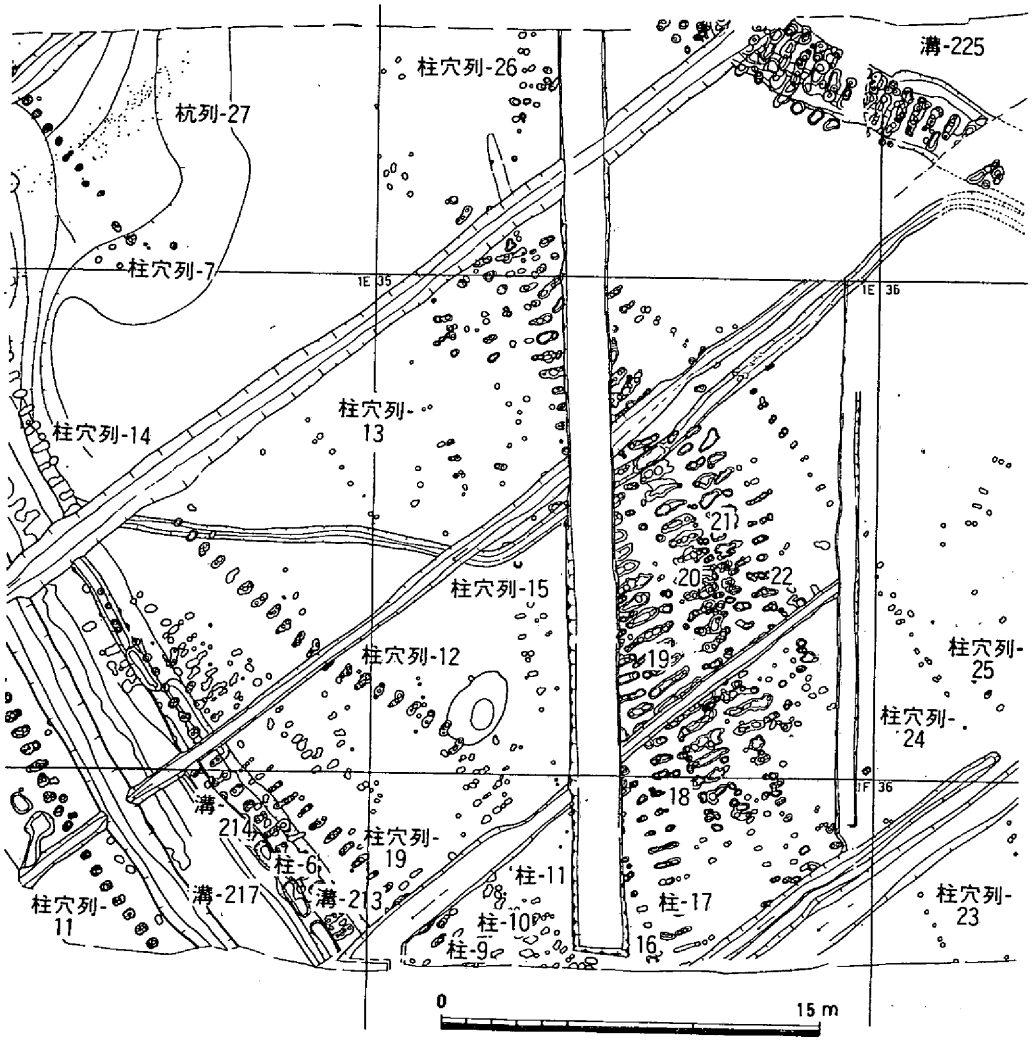
柱穴列—29（第807図）

延長35.5mを確認しており，検出状況は溝—198の左岸肩部によりカットされ，溝—198の

右岸肩部にカットされた柱穴列—28と対比する位置に出土している。柱穴直径約40～50cm，底径約 20cm 前後，深さ約 15cm，柱穴底の海抜高は約 270cm 前後を測るものが多い。柱穴は２～３回の重複が認められ，柱間は約 70cm 等間，柱穴列—28との距離は約140cm となり溝—196 を跨ぐ格好となる。前後関係は淡黒灰色の詰った溝—211を切り，溝—198に切られた柱穴列—33によって切られている。

柱穴列—30（第807図）

柱穴列—29～33と同様に溝—198・214に挟まれたほぼ中央に位置し，柱穴の重複を示す状況が最も著しい柱穴列である。延長約36.5mを測り，他の柱穴列に並行して走る。他の柱穴列との間に大きい切り合いは認められないが，柱穴列—30自体４～５回の重複があり，そのうちの



第808図　溝・柱穴列（1/300）

西端柱穴内に木切れが目立ち，須恵器小片を含んでいる。溝—199下位より検出された柱穴列ということになり，柱穴内に6世紀の第3四半期の須恵器が認められた。柱穴直径約40～50cm，底径約20cm前後，深さ25cm前後を測り，柱穴底の海抜高は約250cmを前後する。

柱穴列—31（第807図）

柱穴列—30の東側に並行し，海抜295cm付近の高所に位置する。延長約22mを確認しており，柱穴は3～4回の重複が認められる。前述した柱穴列の形態，規模等の点においては大差はないが，柱穴底の海抜高が280cm前後を測り，柱穴列—28～30等と比較して高い位置に所在する。

柱穴列—32（第807図）

柱穴列—31の東側に並行し，柱穴に2～4回の重複痕跡をとどめる。全体的に柱穴列—31に類似する。下流部は溝—206に削平を受けて消失した可能性が考えられる。

柱穴列—6（第800図）

溝—198の流走方向に並行する柱穴列では東端にあたり，上流部の柱穴列—14に接続する可能性が考えられる。柱穴列は下流では溝—214・213に挟まれた格好になるが，上流部では削平を受けている。柱穴は3～4回の重複が認められ，柱穴底は海抜285cmを前後する。

柱穴列—8（第800図）

柱穴列は柱穴列—6以西の柱穴列と若干延長方向が異る。上流部が西に，下流部が東に偏く形状を呈する。柱穴列—9～12等がほぼ同一方向に並行する格好となるが，それに切り合いが認められる。延長約12mが検出されているが，上流部にはまったく認められず，前述した溝，柱穴列より古い段階の可能性をもっている。柱穴直径約30cm，底径約15cm前後，深さは10cm以下を測り，若干規模が小さく浅いものが中心になる。柱穴は3～4回の重複があり，柱間は約70cmの等間隔を測る。

柱穴列—9・10（第800図）

柱穴列—213の東側，F—35に位置し，規模，残存状況ともに柱穴列—213に類似する。

柱穴列—11（第800図）

F-35に位置し，延長約9.5mを測り，直線的に伸びて柱穴列—12と一部交差する。柱穴の直径は約20cm，深さ5cm以下であり，底面海抜高は290cm前後を測るものが多い。1回の重複が認められ，主軸はN12° Wの同一方向を示す。

柱穴列—12（第800図）

柱穴列—8～10に近い並びを見せ，一部で「島状高まり」遺構—12の上面を切っている。延長約17.5mを測り，柱穴は1～2回の重複が認められる。柱穴直径約20～30cm，底径約20cm以下，深さ10cm以下である。底面海抜高は285cmを前後するものが多く，比較的まとまった柱

穴規模である。

柱穴列—13（第800図）

E-34に位置し，主軸方位をN12°Wにとる。延長約4.9mのみが確認できており，他は削平，消失したものと考えられる。柱穴直径約20cm，底径約10cm，深さ約5cmを測り，柱穴底面の海抜高は295cmを前後する。柱間は約70cmの等間隔である。

柱穴列—15（第800図）

E-35に位置し，主軸方位をN29°Wにとる。延長約11mが確認できており，柱穴列—13同様の柱穴規模である。柱穴には1回の重複が認められ，柱間は約70cmの等間隔である。

柱穴列—26（第800図）

D-35に位置し，直線的に延びているが3.4mのみの検出である。深さ約5cmをとどめる程度にて南側を消失している。主軸方位はN41°Wにとっている。

柱穴列—7（第800図）

D-34に位置し，主軸方位をN8°Wにとっている。大畦畔の上面に延長約10mが検出されている。一部は小穴内に灰色粘土の詰った中世の杭列に切られている。柱穴直径は約30cm，底径10cm，深さ10～15cmを測り，柱穴底面の海抜高は約300cmを前後する。2回の重複が認められ，東側が新しく西側が古い状況を呈する。柱間は約60～80cmのバラツキが存在する。

柱穴列—16（第800図）

F-35に位置し，5穴にて約3.5mを確認しており，柱間は約70cmの等間隔である。主軸方位はN20°Wにとり，柱穴直径25cm，深さは10cmまでを測る小型である。柱穴内より古墳時代前期の甕の小片が出土しているが，明確な時期は押えがたい。

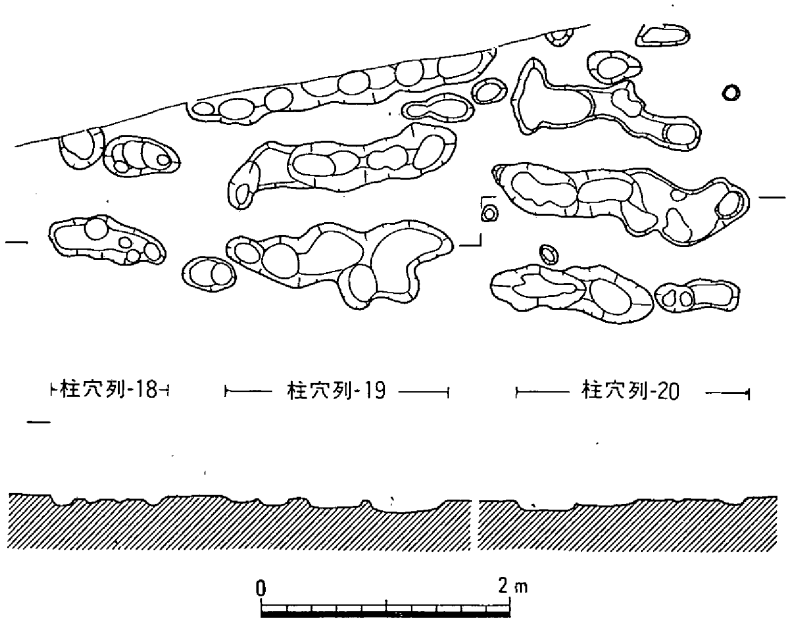
柱穴列—17（第800図）

F-35に位置し，延長約10mが確認されており，主軸方位をN29.5°Wにとる。重複をあらわす柱穴の数は東西約130cm間に6穴を数えるが，大きくは2条に分けることができ，両者とも柱穴底の海抜高は290cm前後を測る。柱穴内には外面に磨り消したタタキメの残る壺の小破片，古墳時代前期の甕の小破片が出土しており，200cm離れた異る柱穴には同一の個体が存在する。

柱穴列—18～20（第809図）

35・36線間に位置し，大きくは3条が中心になったものと考えられるが，各柱穴列とも多数の重複する柱穴を伴い，少ないもので柱穴列—18の約5穴，多いものでは柱穴列—19の東西250cm間に8穴等があり，柱穴列—20は6穴までが確認できる。柱穴底は柱穴列—18の海抜285cmが浅く，柱穴列—20の柱穴が海抜275cmを前後して少し深い傾向にある全体に混在し密集した感を受けるが，各柱穴列とも主軸方位をN21°Wにとり直線的に走るものと考えられ

る。柱穴列—19・20の3穴に柱穴列—18に認められた同一個体のタタキメの土器片が入り，住穴列—20の5穴には古墳時代前器の小土器片が入っていた。



第809図　柱 穴 列-18～20（1/60）

35・36線間の柱穴列においては，溝—198，溝—202等周辺に須恵器の出土例が多いのに比べ，古墳時代前期の小片を含む13の柱穴が目立っている。

柱穴列—21（第800図）

柱穴列—20・22と混在しているが，基本的には柱穴列—23より延長されており約30mを測る。その柱穴列—23は柱穴列—24と東西約420cmの間隔をもち南北に並行して走っており，延長は約36mを測る。その平面の曲りは柱穴列—18～22と異なり，溝・柱穴列—202の曲りに共通点を有し，柱穴が浅く深さがあまり残っていない一群である。柱穴列—24の柱穴内には古墳時代前期の土器小片が検出されている。

溝・柱穴列—218（第810～812図）

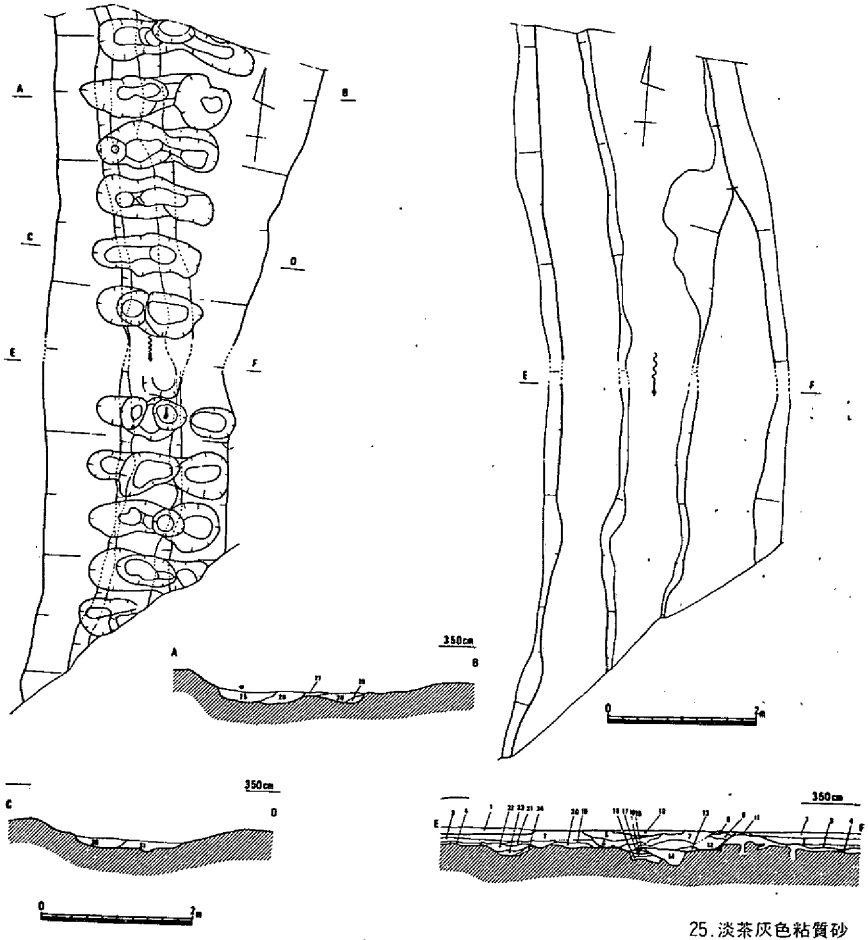
D-35よりF-37に向かって約55m延びる溝と柱穴列群である。最初溝のみの一遺構として扱い，掘り下げるにしたがい柱穴列が重複することに気づいたが同一番号を付して調査を行った。

検出遺構の上位から説明を加えると，まず，灰色粘土を除去した海抜315cm付近で検出した溝があげられ，上流部幅は約60～80cm，下流部幅は約120cm，深さ8.5～14cmを測り緩やかな「U」字形を呈する。基本的には他の溝同様に南下している。そして，その溝は弥生時代の水田遺構に認められた畦畔と同形態を呈し，左右に畔路部を持つ。右岸畔路部の幅約80cm，右岸畔路部の幅100cmを上り，海抜約305cm前後の高さである。第218図の右下断面がそれにあたり，10層が溝に，1層が水田（？），その間が畔路部と考えられる。10層においては6世紀末～

7世紀初頭と考えられる須恵器杯身片が出土している。

溝の下位には幅240～350cmの溝が若干方向を変え存在し，深さ約20cmを測る。溝内には4～5穴の切り合い関係をもつ柱穴が東西約200cm間に存在し，各々の一本が南北に繋がり延長約55mの柱穴列を造り上げている。これら柱穴は砂質土により埋没しており直径約40～65cm，深さ20～50cm，柱間は約70cmの等間隔を測る。そして，柱穴の新旧は畎畝左岸下位の東端柱穴が古く，西に向かって掘り変えられており，西端が最も新しい時期を示すことになる。

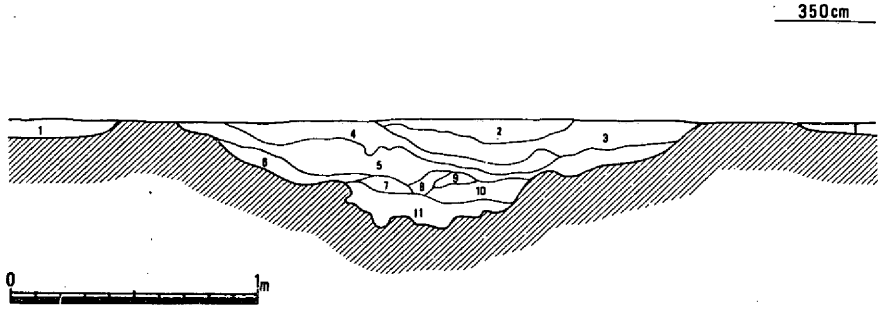
さらに下位にこれらの柱穴列が切った溝が存在し，上端幅90cm，下端幅は40～60cm，深さ20cmを測り断面は箱形を呈する。一部に木切れ片を含むが加工痕の顕著なものは認められない。



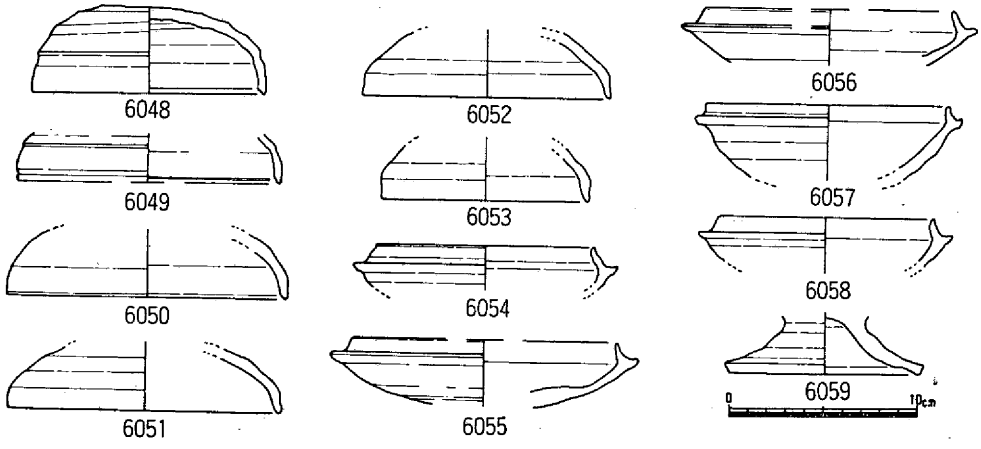
1.暗灰色粘土
2.灰色粘土
3.暗灰色粘質土
4.黒灰色粘質土
5.灰黄色粘土
6.灰白色砂
7.灰色粘質微砂
8.灰白色砂
9.灰色粘質砂
10.暗褐色粘質土
11 黄灰褐色砂
12.灰白色粗砂
13.灰褐色粘質土
14.青灰色粗砂
15.灰色砂質土
16.暗灰色砂質土
17.暗灰褐色粘質土
18.青灰色粘質微砂
19.暗灰色粘質土
20.灰色粘質土
21.黒色粘質土
22.暗灰色粘質土
23.暗灰褐色粘質土
24.灰色粘土
25.淡茶灰色粘質砂
26.淡灰褐色砂
27.茶褐色粘質土
28.青灰色砂
29.暗灰青色砂
30.淡茶灰色粘質砂
31.灰褐色砂

第810図　溝-218（1/100）

出土遺物は柱穴列および溝に須恵器杯蓋・身等の小片が混在しており，一応の時期の目安をあたえてくれる。6世紀前半より7世紀前半期の時期が考えられ，溝・柱穴列の踏襲，長期使用がうかがえる。



1.暗灰色粘土(水田層？)　4.灰色粘質微砂　7.灰青色粘質微砂　10.灰青色粘質微砂
2.暗褐色粘質土(溝-202)　5.灰白色粗砂(柱穴)　8.灰褐色粘質砂　11.暗青灰色粘質微砂
3.灰黄色粘土　6.黄灰褐色粗砂　9.暗灰褐色粘質土　(溝)



第811図　溝-218 (1/30)・出 土 遺 物

溝—211 (第811図)

溝—216の下位にあり同一方向に南下し，E-34，F-34間で南東に屈曲し，さらに20m進み東に屈曲して直線で25m行き，溝—218に沿って南下する。溝—218の中間で溝—218の下位に入る。すなわち，3か所の屈曲部が設けられており，南流する溝である。溝幅約60cm，深さ15～20cmを測り，溝内には淡黒灰色粘質微砂が埋没している。出土遺物は皆無であるが，前述した6～7世紀前半と考えられる溝，および柱穴列に切られていること等から，これより古く，弥生時代後期末より新しいことが考えられる。

溝—320

D-38よりD-39に向かって南下しており，溝幅は約70cm，深さ10cm前後を測る。溝内は暗

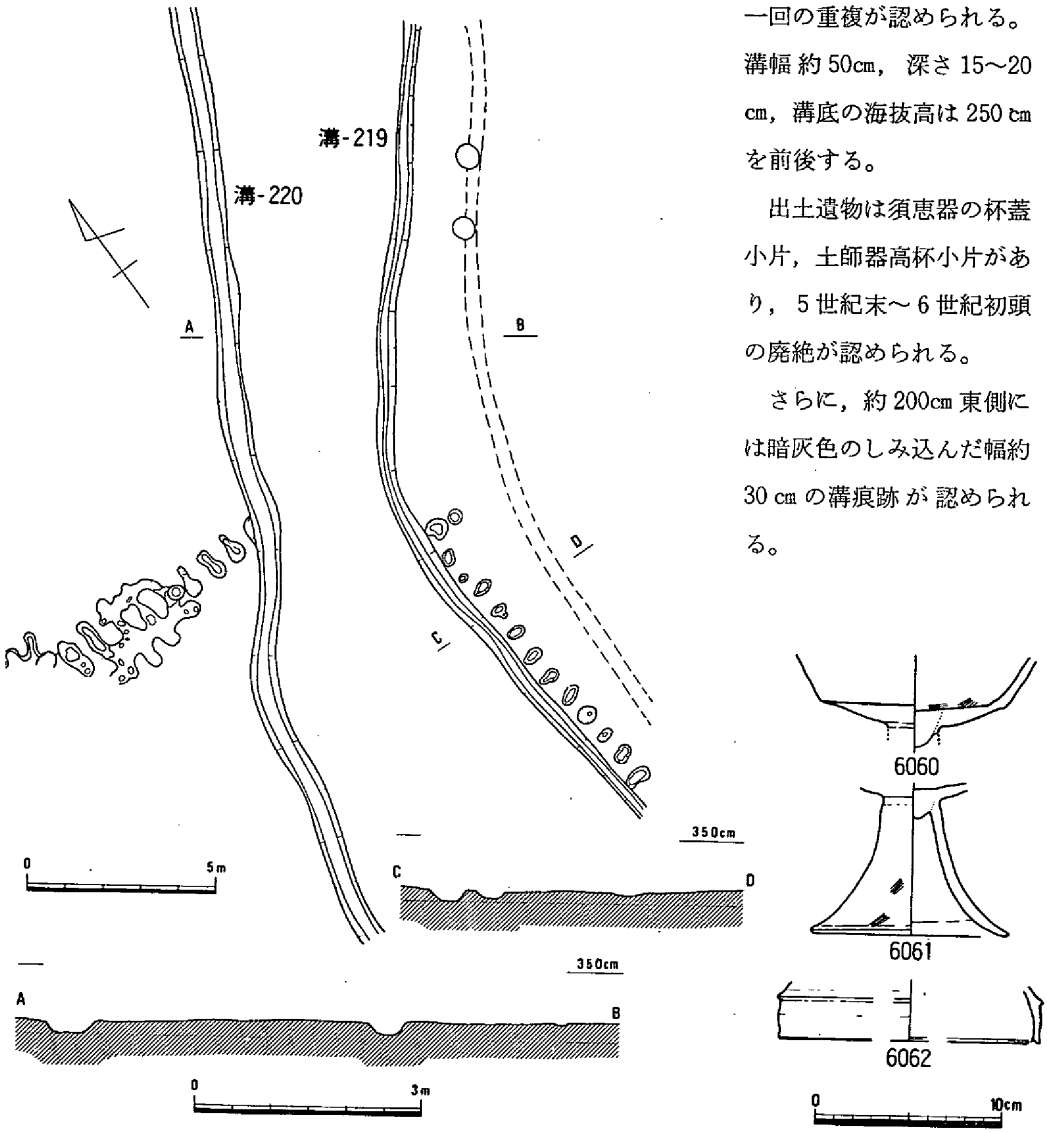
灰色微砂により埋没しており，溝底海抜高は250cmを前後する。

溝—219（第800・812図）

溝—220の東に位置し，ほぼ同様のカーブを描いて南流する。下流では柱穴列が東側に伴い，一回の重複が認められる。溝幅約50cm，深さ15～20cm，溝底の海抜高は250cmを前後する。

出土遺物は須恵器の杯蓋小片，土師器高杯小片があり，5世紀末～6世紀初頭の廃絶が認められる。

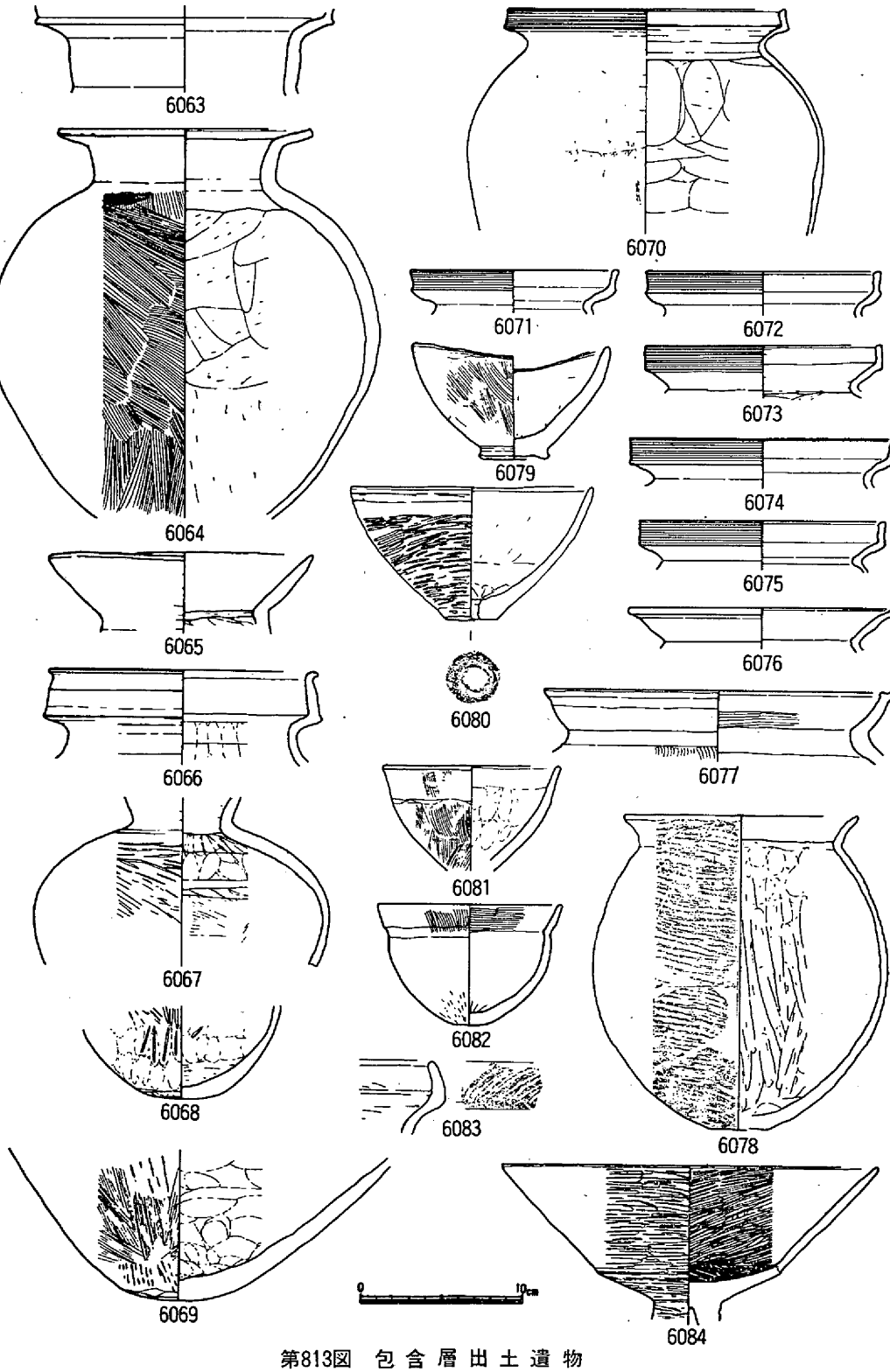
さらに，約200cm東側には暗灰色のしみ込んだ幅約30cmの溝痕跡が認められる。



第812図　溝-219（1/200）・出土遺物

柱穴列—34（第800図）

E-40に位置し，グリッドを対角線状に南下する。延長約24mを測り，4本の柱穴が重複する。柱穴内には淡灰色粘土が充満しており，柱間は60～70cmを測る。溝・柱穴列—218等と比較すると若干新しく，7世紀前半以後に比定できる。



第813図　包含層出土遺物

ここまで述べてきた柱穴列・溝は地域を限定すれば非常な数にのぼり，柱穴列32以上，溝10本以上が確認されている。これらは，すべて南北に主軸を持ち，南下する溝方向に並列している。古墳時代全般を通して機能していた可能性があり，古墳時代前半と考えられる溝—211は古墳時代後半の溝—216・218の下位より検出されており，溝—216・218により同一水路を二分して踏襲されたと考えられる。

柱穴列は溝—211を切る状況で検出されているものが多く，35・36線間の柱穴列も溝—211より若干新しく，溝—216・218までは下らない可能性が考えられる。

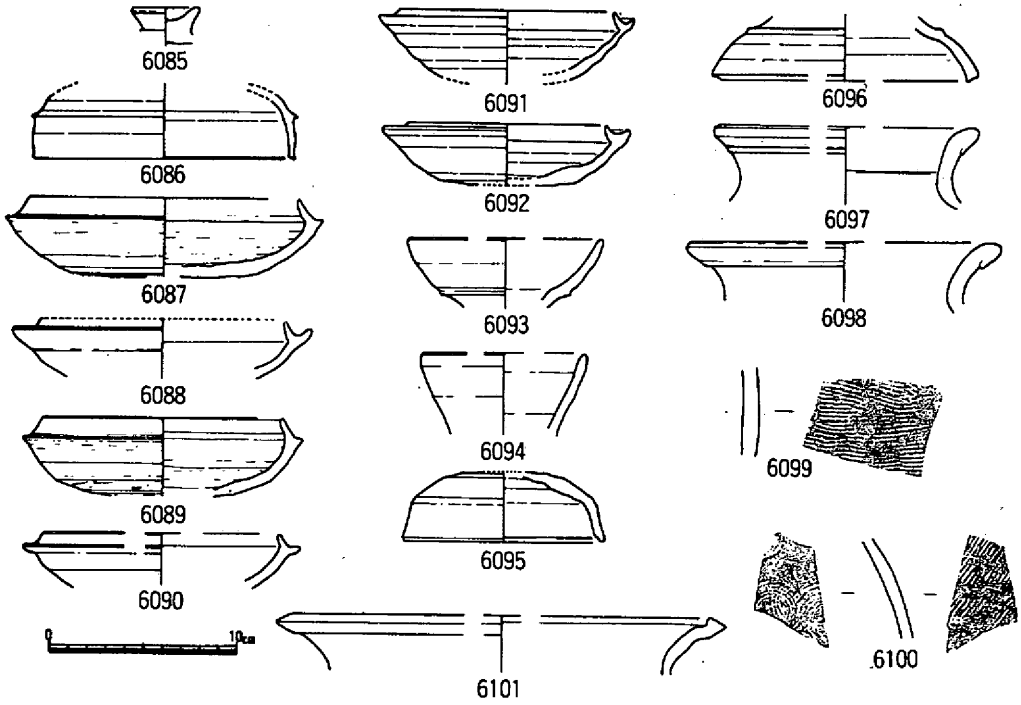
柱穴列の機能は具体化できないが，水路の護岸堤等の補強施設との関連を考えておきたい。

（3） 包含層出土の遺物（第813・814図）

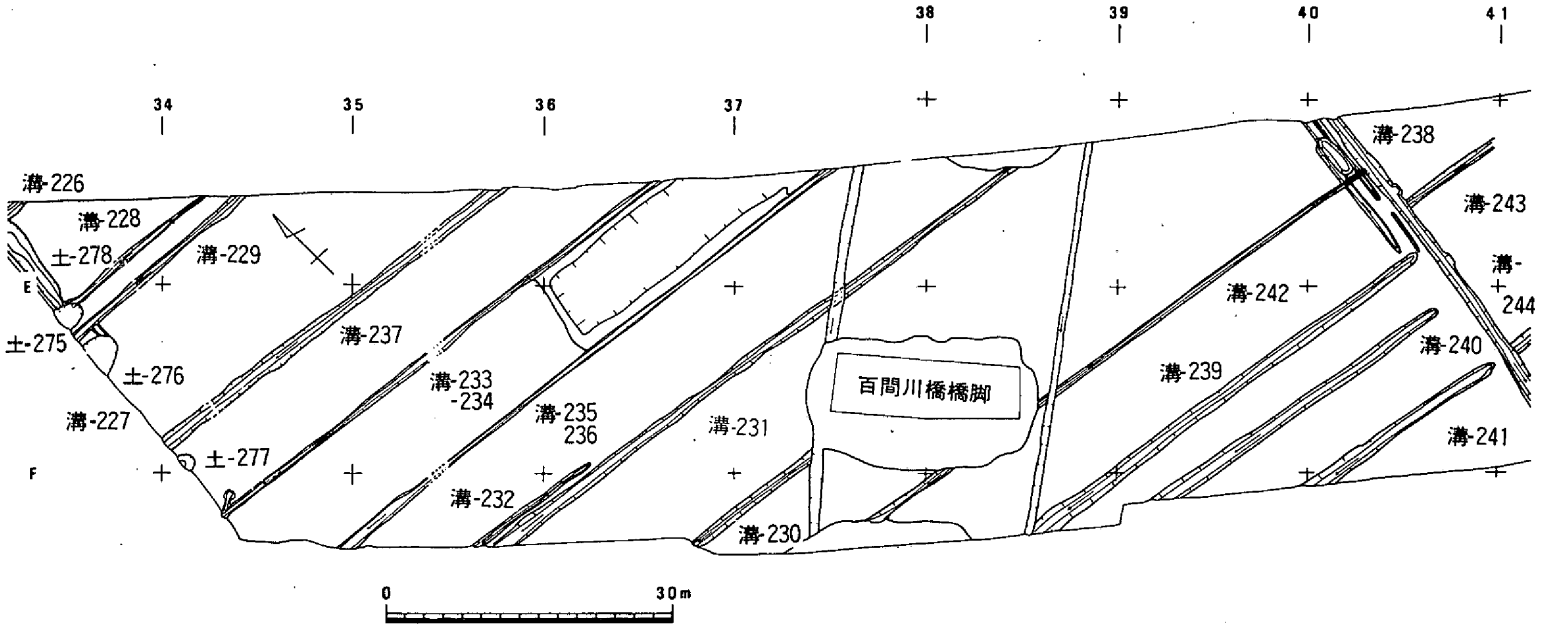
第813図は水田埋没砂上面に堆積した暗灰色微砂層および，その上位より出土した土器が中心である。38線と41線間に多く出土しており，弥生時代後期末の洪水以後の一早い土地利用が考えられる。

時期は百・古・Ⅰに比定できる土器が大部分であり，6077が若干新しい様相を呈する。

第814図の須恵器は小片のみであり，溝—217，溝・柱穴列—218周辺より出土したものが中心を占める。6085・6086・6099・6100等は6世紀前半を示し，他は6世紀後半～7世紀初頭に入るものと考えられるが，6101はさらに時代が下がる可能性がある。



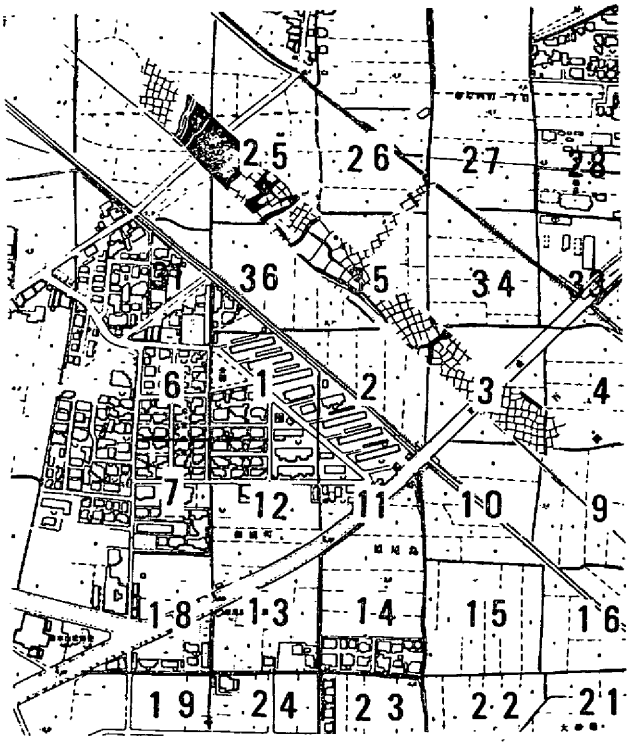
第814図 包含層出土遺物



第815図　三ノ坪調査区中世・近世・近代遺構配置図（1/800）

7. 古代，中・近世，近代の遺構・遺物

調査区西部に中世の溝１本，土壙３基，D-34に東西に走る杭列，近世・近代では南北の溝４本，東西の溝13本，その他の溝２本，土壙１基が検出されている。



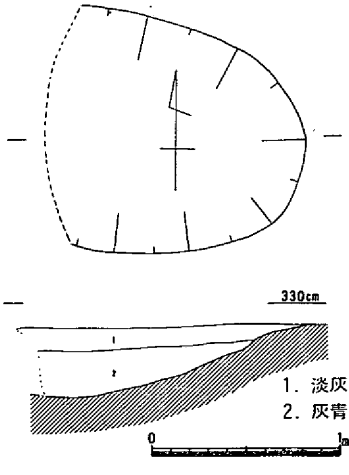
第816図　現存条里坪割

33線より南に延びる溝—227は小字名の「二ノ坪」「三ノ坪」の境界となり，40線より南下する溝は「三ノ坪」「横田」の境界となる。溝—227は下宇治樋門のZ-29に検出された溝—146と接続するものである。この溝を境界にする「二ノ坪」「三ノ坪」は左上隅を起点とする横行連続式の条里制坪割にあてはまるものである。

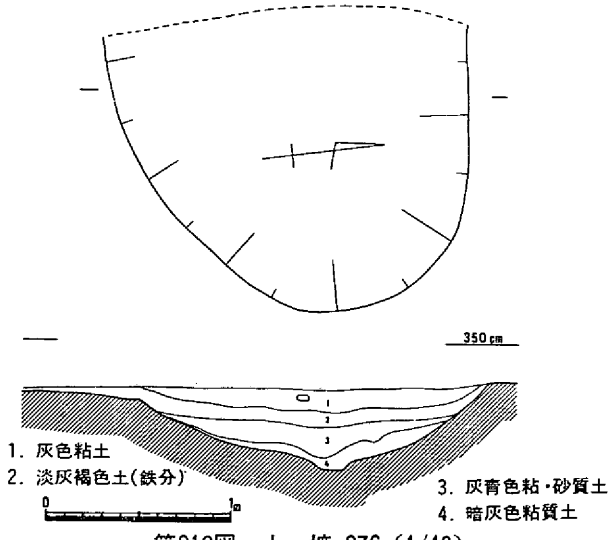
（1）土　壙

土壙—275　（第817図）

E-33に位置し，西端を溝—227によって切られている。現



第817図　土　壙-275（1/40）



第818図　土　壙-276（1/40）

存長135cm，深さ約70cmを測り，楕円形を呈する土壙である。断面形状は擂鉢状を呈しており，埋積土は粘土の二層よりなる。土壙—32等と類似をしている。

土　壙—276（第818図）

E-33中央に位置し，土壙—275同様に溝—227により切られている。現存径195×160cm，深さ93cmを測る楕円形の土壙である。

出土遺物は中世の土器小片が数点出土しているのみであり，それも堆積土に混在しているものである。

（2）　溝

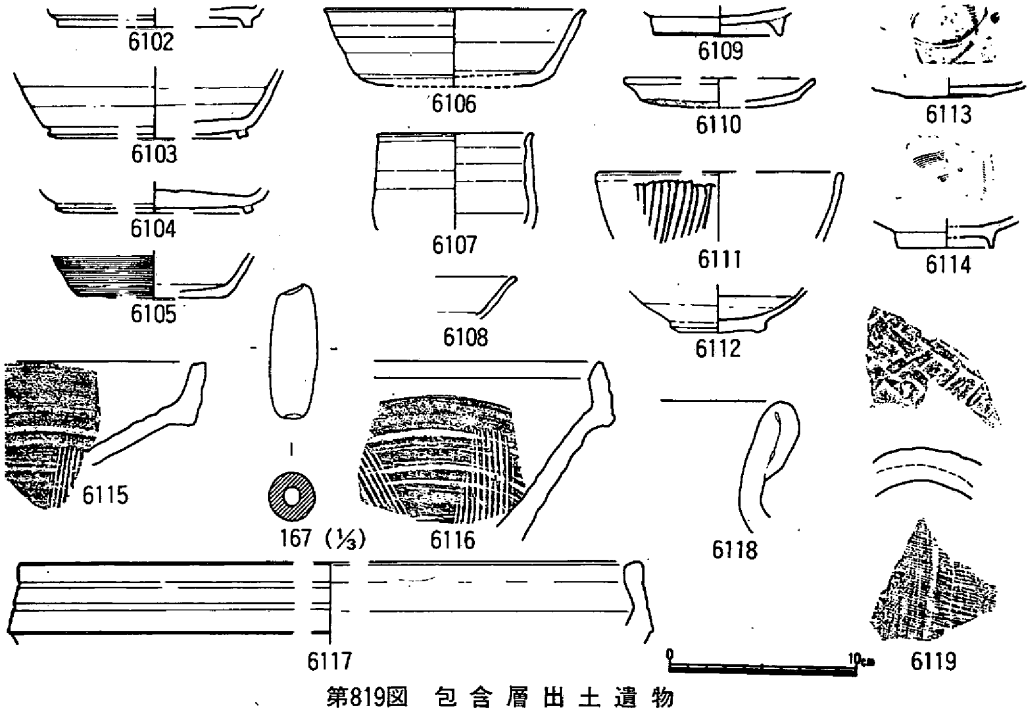
溝—227（第815図）

「二ノ坪」「三ノ坪」の境界線となり，調査前まで現代用水路として機能していたものである。調査時に用水路の付け変えを行い，掘り下げを実施したがグライ化が著しく遡っての溝の使用痕跡は明確にはしえなかった。しかし，溝—227周辺および溝内より6110～6111等が出土しており，少なくとも15～16世紀頃には機能していた可能性を持っている。

（3）　包含層出土の土器（第819図）

須恵器，緑釉陶器，白磁，青磁，備前焼，瓦器，瓦，伊万里焼，唐津焼等の小片が灰白色粘土中および上層で出土している。遺構に確実に伴出する遺物は少なく，遺構自体の存在も薄い。

とくに古代ではそれに相当する遺構は確認できず，中・近世の遺構も現代まで重複の認めら



第819図　包含層出土遺物

れる２・３の溝を除いて，時代の不明瞭なものが多い。この地区全体が古代より引き続き水田として利用された可能性が強く，居住区に比較的認められた遺物がここでは希薄であった。

（高畑）

8. 小　　結

以上，三ノ坪調査区の全体を通して気づく点は，ほとんど居住区として利用された場所ではなく，生産の一端を担う場所であり，それも灌漑用水路を中心として継続機能していたことが理解できる。

従来の第２微高地の西端部にあたり，古地形は南北に延びる微高地，低地からなる。

調査区内は２つの微高地Ａ・Ｂと低地Ａ・Ｂ（第820図）から成り立っており，微高地Ａ・Ｂ間に低地Ａ，微高地Ｂの東に低地Ｂが存在する位置関係にある。しかし，これらの低地Ａ・Ｂは弥生時代前期にはほぼ平坦面に近くなっており，低地Ａ内の西端にのみ河道が一本存在していたことが理解できる。

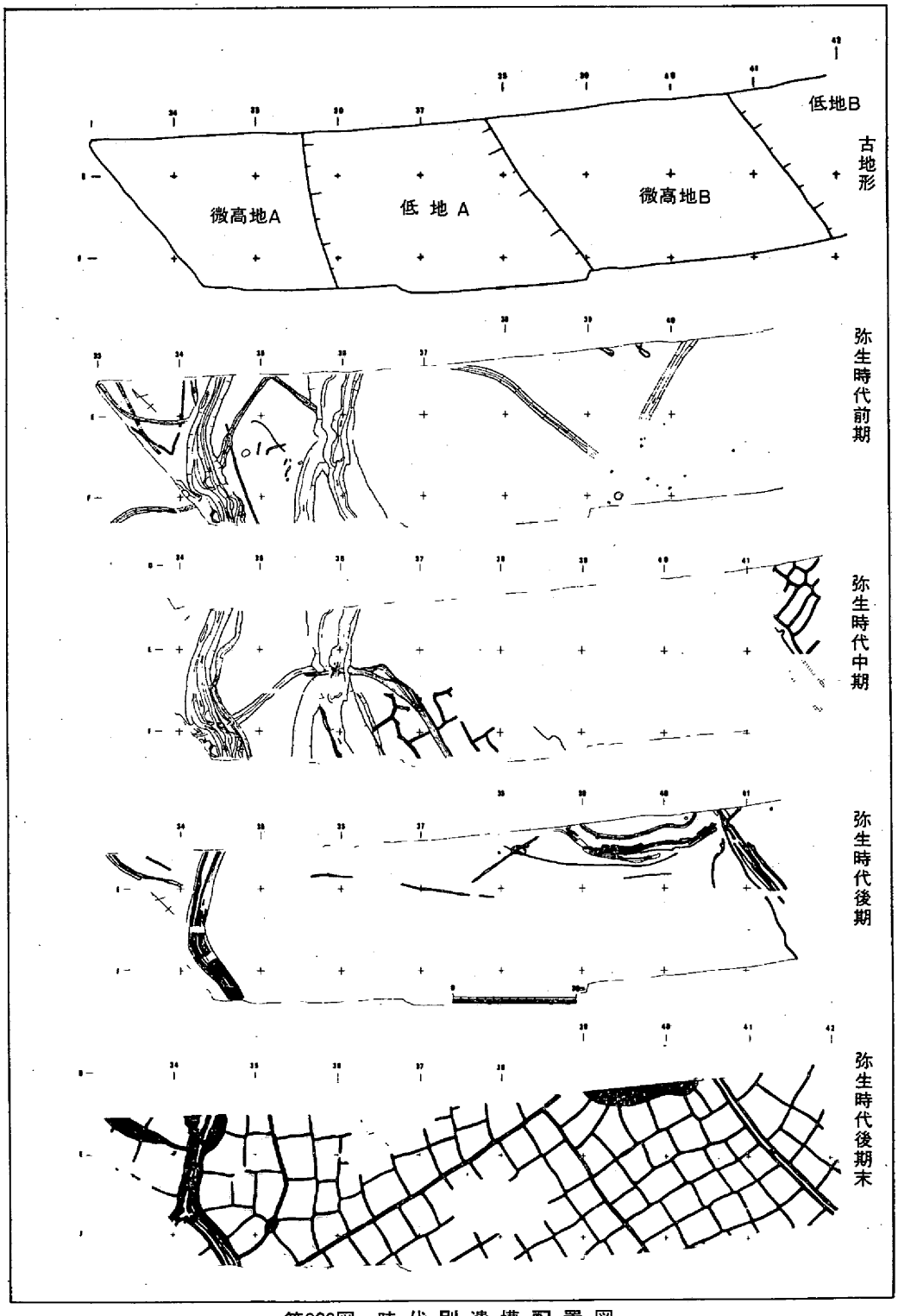
それでは個々の微高地，低地の利用状況について西側より時代を追って述べることにする。

微高地Ａは弥生時代前期に大溝（幹線水路）が掘開され，弥生時代中期前半，後期中葉，後期末，古墳時代前・後期と同一場所に約700年以上の間，灌漑用水路の占地場所として利用されている。当然，それに伴う支線の水路が弥生時代前・中期に導入されており，東西および南の下流域に配水する仕組みがすでに完成している。弥生時代後期末には用水路底もレベルアップし，畔路を伴い，さらに整備された畎畝，および水田として利用されている。

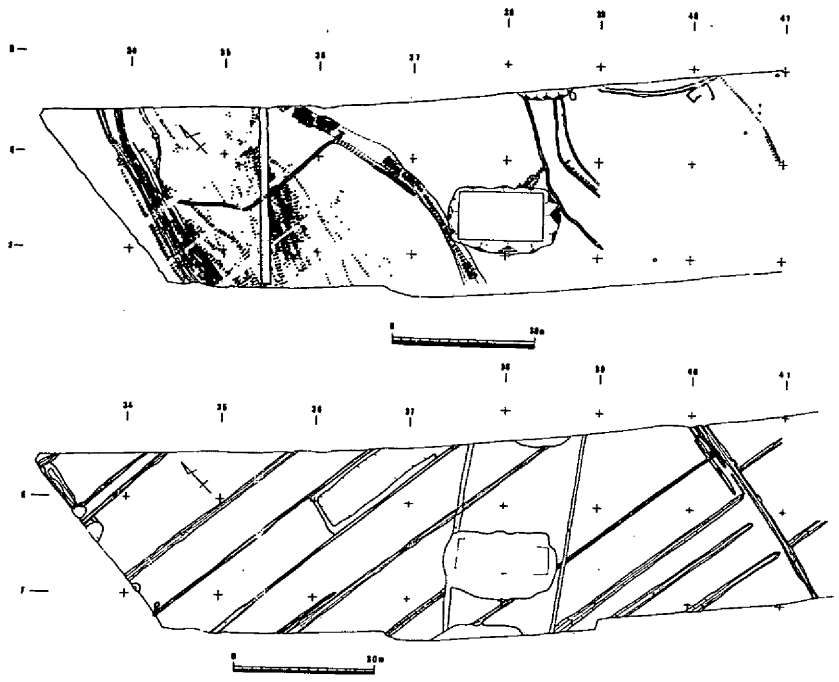
現在の「二ノ坪」「三ノ坪」の坪割の境界線になる溝―277がすぐ西側に存在することも考慮に入れると，弥生時代後期末より現代まで継続した主要流路と水田域に限定されている。

低地Ａは上端幅約60m，深さ約４ｍまで掘開を行ったが河床を検出するには至らなかった。当初，低地Ａの中央部に存在したであろう河道は土砂等の運搬，堆積作用により，徐々に西側に押しやられており，その機能は縄文時代より弥生時代前期・中期前半まで認められ，中期後半にはほぼ埋没し機能を停止していたことがわかる。37・38線を中心として運搬堆積土砂よりなる左岸には第725図で示す層序が確認できており，表土下約350cmにて微高地，低地にかかわらず検出可能な茶褐色腐蝕土（ピート）層がほぼ水平に認められる。その海抜高は約30cmを測り，そこより約100cm上位の平坦面までに縄文時代晩期中葉の土器小片が各層に比較的認められる。さらに上位約50cmの５層には弥生時代前期包含層があり，間層を経て１層が弥生時代中期水田層となる。弥生時代中期水田層の上位約20cmには弥生時代後期末の水田層，そして，古墳時代後期の水田？へと継続が考えられる。

低地Ａは低地Ｂと同様に自然地形の低地を利用した小範囲の弥生時代中期水田の出現を如実に表出した場所である。さらに下位は古い水田をも推定させうる水平堆積層が存在するが，16層



第820図　時代別遺構配置図



第821図　時代別遺構配置図

より上位の種子分析(註4)の結果では何ら検出するには至らなかった。

微高地Bは東西幅約55mを測り，灌漑用水路と水田域に利用されており，水田埋没後に古墳時代前期の井戸が縁辺部にみられる。居住区としての可能性も考えられるが弥生時代後期の開田に際して，大規模な削平を受けており「島状高まり」遺構—13の下位に弥生時代前期の土壙，溝が残存している。溝は南と西に流下する2本があり，E-39あたりで接続あるいは交差する可能性も存在するが調査事情により確認できなかった。溝—224が若干古相を呈する。溝—224は36線上にある溝—231より分水して流走している可能性もあり，前期の段階に井堰による水利施設を裏付ける。弥生時代前期の土壙—262～264は下位層に炭・焼土粒，砂粒等を含み，同機能を果す遺構と考えられ，土壙—262はガラス滓を含む。このガラス滓は百間川今谷遺跡出土の弥生時代中期のガラス滓とは成分が異り，なかでも Na_2O が約3分の1と少なく他に MgO, SrO, ZrO, TiO_2, P_2O_2, S 等を含む。

低位部Bは水田，水路として利用されており，弥生時代中期の溝の位置を弥生時代後期の畎畝が踏襲し，ほぼ同一場所を流走している。また，その位置が現在の小字名「三ノ坪」「横田」との境界線でもある。

（高畑）

註

註1　昭和34年の国道2号線橋脚工事に伴い，地表下300cmの粘土層から縄文時代晩期の土器などが出土し，百間川遺跡B地点と呼称されている。

註2　鎌木義昌，江坂　進「岡山県御津町原遺跡—縄文晩期の土器を中心として—」『瀬戸内考古学』第2号　瀬戸内考古学会　1958

註3　高畑知功他「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982

註4　笠原安夫博士により縄文時代晩期，弥生時代前期試料（200g）5点の種子分析を実施していただき，5点とも「種子なし」の鑑定を頂いた。1980年12月5日。

第4章　ま　と　め

第1節　百間川原尾島遺跡発掘調査概要

岡山平野には，弥生時代の遺跡が多数分布していて，工事などにより，遺物が発見されることが多かった。しかし，遺跡の実態について詳細がわかるようになったのは，それ程古いことではない。古墳などのように外表からでも確認されるのに比べ，集落遺跡は発掘調査などによらなければわからないという事情があり，特に沖積平野では，地表面は水田や宅地として利用されていることから調査そのものが難しい。百間川の河川敷内では，1960年，鎌木義昌氏らによる発掘調査が実施され，弥生式土器を多量に発見しているが，岡山では沖積平野における発掘調査例としても早い方である。その後，国道2号線の工事中に，縄文式土器（晩期）・弥生式土器などが発見されたことから，「百間川遺跡」として知られるようになったが，岡山平野の集落遺跡の状況が判明するのは，さらに後のことである。1960年代の後半から本格化した開発に伴う事前調査などによって，雄町遺跡・津島遺跡の一部が調査され竪穴式住居・水田遺構などがわかってきた。また，岡山平野の広い地域に遺跡が分布しているといったことも知られるようになっている。このような動向のなかで，百間川の改修に伴う事前調査が実施されることになった。したがって，遺跡のひろがりを把握する調査から開始し，それまでわかっていなかった地域からも遺構を見い出している。また，長期間にわたる発掘調査の継続のなかで，発掘調査技術の進展もみられた。群馬県日高遺跡で，弥生時代の水田遺構が発見されたのと同じ頃，百間川においても，弥生時代の水田を検出している。矢板も何も用いないで，耕土と同じ土を盛り上げてつくった畦の検出などは，それまではほとんど気付かれていなかったものである。

岡山平野は，旭川が形成した沖積平野である。多数の分流があり，自然堤防・三角洲が形成され，これらのわずかに高くなったところに遺跡がある。大きな河道は高島から雄町をへて東岡山へ抜けるものと，高島から関をへて兼基へ至るもの，高島から原尾島周辺に抜けるもの，三野から津島へ達するものなどがある。これらの河川も時代によって変遷したものと思われるが，縄文時代後半から弥生時代にかけては，かなりな流れをもっていたものであろう。

百間川原尾島周辺について詳しくみてみると，上流部は砂礫層となっていて，須恵器などを含んでいるが遺構はない。県道瀬戸・宿・岡山線のすぐ上流，国道2号線の上手，それに百間川沢田遺跡の中程において，旧河道が確認された。いずれも，縄文時代晩期以降，急激に水量

を減少したもので，やがて埋没している。

県道瀬戸・宿・岡山線の上流部の旧河道（中須賀調査区）は，10m余りの河道で，東岸は高くなり，竪穴式住居・土壙・溝などが多数検出される。河道の下層からは，縄文時代晩期の土器・弥生時代前期の土器・石器・木器のほか多数の木片があり，岸には大きな木の株がそのまま残っている。砂や粘土で埋っていて，弥生時代前期には，その流れが緩やかなものとなっていたものであろう。西岸には，竪穴式住居などは検出されなかった。

この旧河道から100m上流部では，少し高くなったところがあり，竪穴式住居・井戸・土壙・溝などが集中している。北の祇園用水に近くなると自然の傾斜面がみられ，微高地の端部であることがわかる。南西側は，竪穴式住居などの遺構が切断された状況で検出される。この斜面には，中世の遺物があり，この頃流れていた河川によって削られたことがわかる。この中世の河道は，東川原の周辺を通って住吉町へ通じているのが地形図からよみとれる。したがって，弥生時代の遺構が南西部へどのくらい延びていたのかはわからない。中世の河道は，やがて埋没し，上面には中世の土壙などがある。

中須賀調査区の旧河道から70m余りのところで少し低くなり，水田遺構が検出される。水田層の下部において，弥生時代の遺構が検出されることから，現状より少し広い範囲に高まりが連続していたものであろう。これから南には，水田遺構がひろがる。丸田調査区の旧河道から400mのところにも旧河道がある。国道2号線の北側にあたる三ノ坪調査区である。河道は，当初40m余りの規模であったものが徐々に埋没している。斜面には縄文時代晩期の土器片が包含されている。南側がはやく埋没し，北側10mくらいの幅の河道となった部分に弥生時代前期の遺物が含まれる。その後も埋没が進行し，弥生時代中期には井堰をつくり，用水路として人為的に調整するようになり，弥生時代後期には完全に埋没し，上面には水田遺構がある。この河道の南側には，少し高くなったところがあり，弥生時代前期以降の遺構が展開する。百間川沢田遺跡はこれと連続しているもので，この中央部にも幅40mの旧河道があるが，前の2つの旧河道と同様に，弥生時代後期に埋没し，上面には水田遺構がひろがっている。

以上のように，百間川原尾島遺跡のあたりは，旭川の分流がいくつも流れ，その両岸の自然堤防上には集落遺跡が立地し，周辺部のやや低くなったところには，水田遺構がひろがっている。この景観を一変させたのは，弥生時代終末期におこった大洪水によるものである。一瞬にして，水田・用水路・竪穴式住居などは砂の下に埋没している。この砂は3km余り下流の百間川兼基遺跡の水田をも埋没している。原尾島一帯では数10cmの厚さとなり，それまでの凹凸をほぼ水平なものとしている。その後の遺構は，この上面に形成されているが，居住区域の中心は，かつての自然堤防上などの高まりの上面に位置する傾向は変わらない。

岡山平野が形成された時期は明確ではないが，百間川沢田遺跡では，微高地の斜面におい

て，縄文時代中期および後期の土器片が検出されていることからすれば，すでにその頃から沖積地が形成されていたことであろう。縄文時代晩期の土器は，多数の微高地から検出され，弥生時代の地形とほぼ変わらない状態となっていたものであろう。

縄文時代晩期の土器片は，各微高地から発見されるが，その量は余り多くない。おもに，丸田調査区の旧河道・三ノ坪調査区の旧河道から出土している。微高地上面の包含層中からも，縄文時代晩期の土器片を少量検出しているが，遺構は確認されていない。

弥生時代前期の遺構としては，中須賀調査区において，舟形土壙2基・土壙1基を確認し，包含層中から若干の土器片を出土している。丸田調査区では，河道の東側で，竪穴式住居状遺構1基・土壙12基・溝5本などを検出している。土壙中からは多量のサヌカイト片を出土した。また，河道の中からは丹彩の土器・木製鋤なども出土している。川内調査区では，溝が検出された。また水田層の下部には少量の土器片を含む。三ノ坪調査区の河道中に土器・石器を包含しており，多数の杭を打ち込んでいることから何らかの施設が想定される。河道の東側には，土壙・溝があり，そのうちの1基からは，ガラス滓が焼土・灰とともに出土した。

弥生時代中期の遺構・遺物はあまり検出されなかった。中須賀調査区・川内調査区・三ノ坪調査区から溝が検出された。三ノ坪調査区の溝は，用水路として掘削されたもので，2基の井堰が検出され，土器片・サヌカイト片・木器などを多数出土している。包含層中からも少量の土器片を出土しているが，調査区域外に，この時期の居住区がひろがっているのであろう。川内調査区および三ノ坪調査区では，弥生時代後期の水田遺構の下層から弥生時代中期の水田遺構を検出している。

弥生時代後期は，百間川原尾島遺跡において，特に遺構・遺物の多い時期である。微高地部分には，竪穴式住居・掘立柱建物・井戸・土壙・溝などがあり，少し低くなったところには，水田がひろがっている。中須賀調査区では，竪穴式住居15軒・井戸8基・土壙87基・溝16本などがある。弥生時代後期前葉に属するものは少なく，ほとんどは，中・後葉に属するものである。丸田調査区では，竪穴式住居11軒・掘立柱建物13棟・井戸16基・土壙71基・溝20本などがある。居住区域の両側は水田がひろがる。川内調査区は全域が水田である。三ノ坪調査区は，用水路・井堰・水田がある。用水路は，弥生時代中期以降連続して利用されたものであるが，古い用水路が埋没した上層に掘削している。

出土した遺物には，多量の土器があり，細分編年等の資料としても貴重なものである。ほかにも重要な遺物が多い。中須賀調査区の後期後葉の土壙から小さなガラス滓を多数出土している。百間川今谷遺跡で発見された弥生時代中期のガラス滓との関連が注目される。銅鐸形土製品も2点出土した。1点は中須賀調査区の土壙中から，もう1点は丸田調査区の溝から検出されたものである。いずれも，百・後・Ⅱの古相に属するもので，銅鐸の年代を推定する資料と

しても貴重なものである。金属器としては，銅鏃７本が竪穴式住居・土壙・包含層中から出土し，他に，鉄鏃・鉇などもあり，金属器普及の一端を知ることができる。玉類では，弥生時代後期後葉の竪穴式住居・包含層中から小さなガラス玉が10点出土している。

古墳時代では，すべてを埋めつくした洪水砂の上に再び生活が展開されている。百間川沢田遺跡では，初期の遺構が多数検出されているが，百間川原尾島遺跡では少なく，居住区域が少し離れているものと考えられる。中須賀調査区では，前半期の井戸１基が検出された。丸田調査区では，前半期の竪穴式住居３軒・井戸１基が検出された。三ノ坪調査区では，６世紀後半～７世紀前半の柵列と溝が多数検出される。丸田調査区の用水路は，古墳時代にも同じ地域につくられ，後半期の掘削でほとんど消失しているが，それより古い溝の一部も検出されたことから，継続していることがわかる。後半期になると多数の遺構が検出される。中須賀調査区では，竪穴式住居11軒・土壙３基・溝６本がある。丸田調査区では，竪穴式住居１軒・土壙１基などがある。竪穴式住居では，５世紀後半のものからつくり付けのかまどが検出される。

出土遺物としては，須恵器が多く，比較的古式のものがある。土師器と共伴しており，今後の編年などにおいても貴重な資料となる。古墳時代後半の用水路は，それまでのものより大きく，幅約８ｍとなっているが，この溝の埋土中からは土器の他に多量の遺物を出土した。玉類などもあるが，木器が注目される。木器には，鍬・鋤・きぬた・小型直刀などがある。ほかに竹籠・竪櫛・建築材などもある。

奈良・平安時代の遺構は溝だけで，包含層中から瓦片・土器片が少量出土したにすぎない。

中世の遺構は，中須賀調査区と丸田調査区において検出された。遺構としては，建物・柱列・井戸・土壙・墓などがある。柱列や溝は，条里の溝とされるものに並行している。柱穴は多数検出されるが，建物としてまとめることができたのは，中須賀調査区２棟・丸田調査区３棟にすぎない。井戸は丸田調査区で１基検出され，下駄・漆塗椀・墨書のある木札などが出土した。墓は土壙の中から人骨１体を検出したものである。

出土した遺物はほとんど土器類である。輸入陶磁器である青磁・白磁の他，瀬戸内沿岸の生産地から運ばれた備前焼・亀山焼・魚住焼・瓦器・土師質椀（早島式土器）などがある。他に，石鍋・石製硯・土製硯・土錘・鉄釘・鉄滓・砥石・銅銭などがある。

近世では，寛文年間以降，百間川の築堤が行われたことから，水田関係の遺構に限られる。

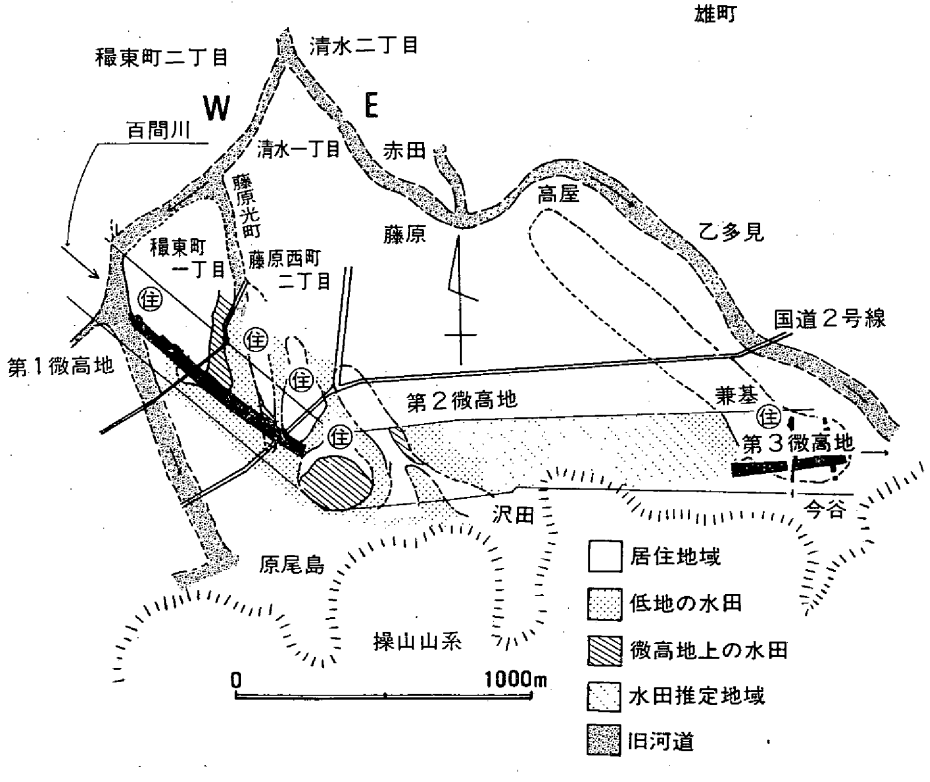
（正岡睦夫）

第2節　水　田　遺　構

概　要（第822図）

百間川河川敷内の調査は足掛8か年におよんでおり，おおよそ100,000㎡以上の発掘調査が実施されている。発掘調査は上流の百間川原尾島遺跡に始まり，沢田，兼基，今谷，そして下流の米田（岩間・当麻遺跡）の遺跡に至り，その範囲は縦約4.5km，横幅約40mを測る。

用地内には大きく三つの微高地・低地と丘陵部が存在しており，上流部より第1微高地（原尾島），第2微高地（沢田），第3微高地（兼基・今谷），丘陵と低位部（米田）が所在する。これらの微高地，および低地の形成には東西に分流する2大流路が大きな役割りを果していたことが考えられる。前者は旭川より枝を分け，南東方向に平野を貫流し，操山山塊を東回りに流走して児島湾に注ぐ河道と，後者は南下して再び本流に注ぎ込み，操山山塊を西回りにて児島湾に注ぐ河道である。これらの流路は南下しつつ幾筋にも分流し，その分岐点の平面形状は「人」字形を呈している。



第822図　微高地形状と弥生時代後期水田の分布（1/25000）

百間川原尾島遺跡（第1微高地）の上流部である清水二丁目付近は「人」字形分流の形態を呈し，東の方向に南下する旧河道E，西の方向に南下する旧河道Wが存在する。そして，百間川原尾島遺跡は河道WEに挟まれた西部に位置し，調査区は延長約800m，幅約40mを測る。

それでは，百間川河川敷内にて発見されている水田遺構を概観し，時代・時期別に説明を加えてゆくことにする。

まず，時期別には弥生時代中期前半，弥生時代後期末，中世の三時期の水田が確認されており，畦畔等の関連遺構が検出されている。

弥生時代中期では百間川原尾島遺跡にて亀甲形の平面を呈する水田小区画，井堰，水路等が有機的関連をもって広範囲に検出されており，上層には若干の間層をおいて弥生時代後期末の水田遺構面が中期水田域，および後期居住域の一部を覆う格好で分布している。このように弥生時代中期・後期の水田が上下に確認できる状況は百間川原尾島遺跡，百間川沢田遺跡（註1）に在り，弥生時代後期末の水田のみの状況は百間川兼基遺跡（註2）があげられる。

中世では水田土層の認定による百間川当麻遺跡（註3），百間川原尾島遺跡等が在り，百間川長谷遺跡（註4）では畦畔を伴い，水田層中より緑釉陶器，白磁等を出土した例がある。

近世では遺構によるものは明らかではないが，「百間川」のできる以前の上道郡図（註5）からは，水田，ふけ等を看取することができる。

近，現代においても水田は継続されていたが今回の百間川改修により河川敷内の水田は消滅した。

I　弥生時代中期の水田遺構（第823・824図）

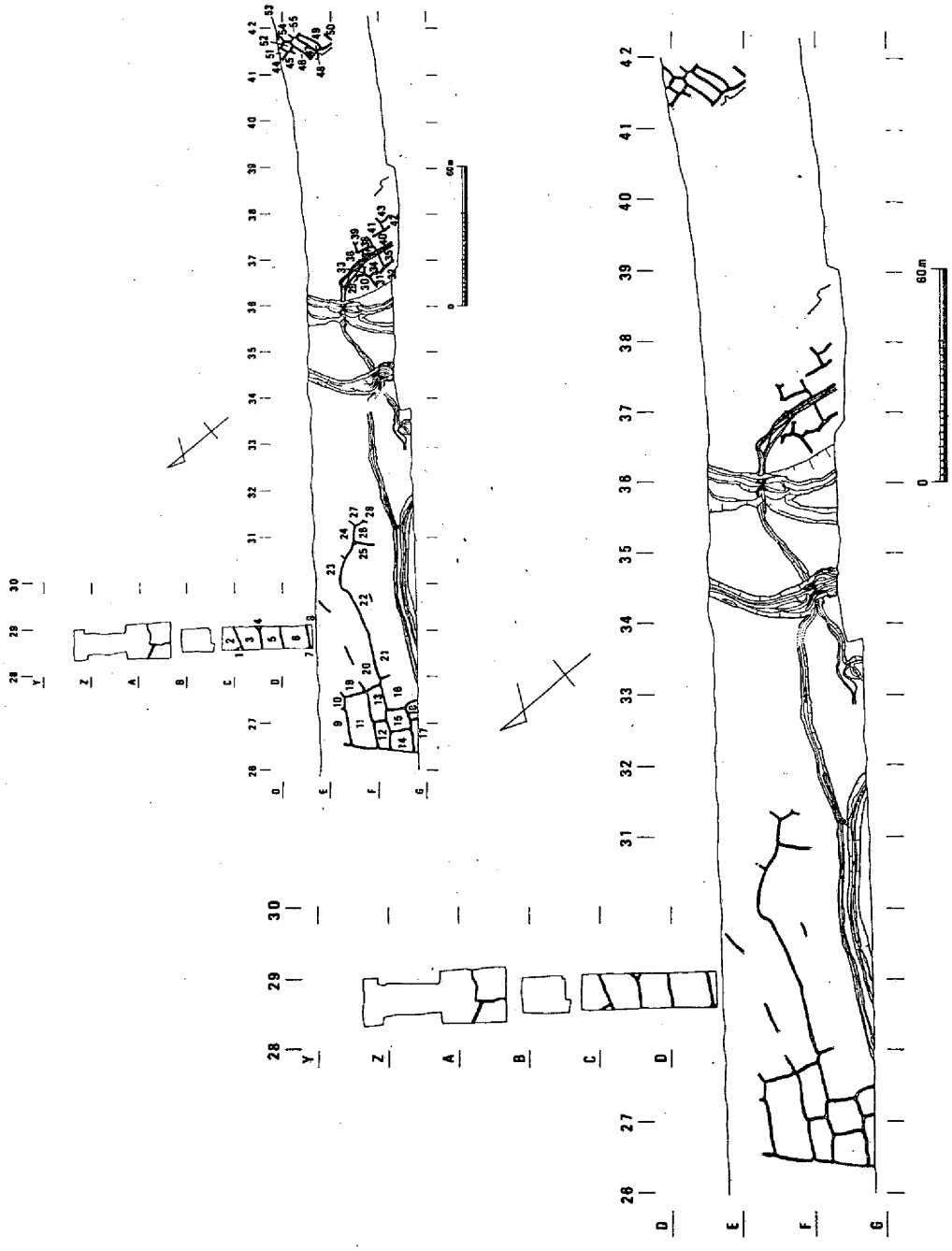
水田遺構は川内調査区に1か所，三ノ坪調査区西端と東端部に分かれる2か所の計3か所が検出されている。

これらは水田，灌漑用水路，井堰等と有機的関連をもって展開している。

川内調査区はB-28より南，E-26～E-32線間に十分ではないが小畦畔が検出されており，その範囲は縦約80m，横約80mを測る。水田層はさらに東に延びて32線付近までの可能性が考えられ，西にも若干高くなり延びており26線付近で消滅している。

造田区画は東西方向に継続して走る小畦畔が基線となり，古地形に沿う格好で付設されており，その間を南北の短い小畦畔で繋ぐ形態を取っている。水田の平面形態は亀甲形を基調とする方形，長方形等が認められるが，総じて曲線的であり，長さの不規則な小畦畔の結合である。弥生時代後期末にみられる「田」字形の整然と並ぶものは現われていないようである。

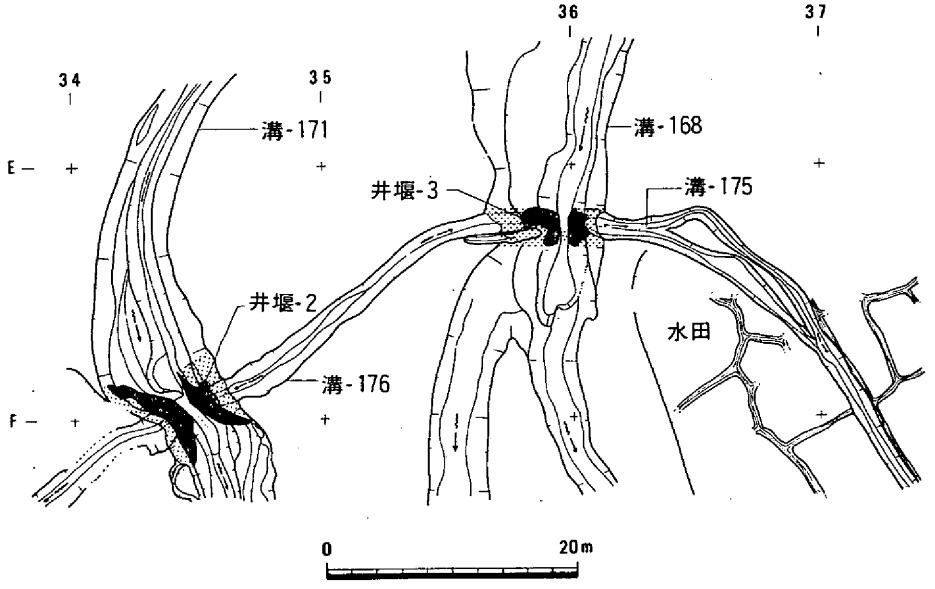
田面は平坦に形成されており，一枚一枚の水田が南東方向に緩やかに傾いている程度で大きな比高差は存在しない。田面海抜高は水田11付近が277cmを前後し，水田18・26等が266cm前後を測る。水田小区画は三ノ坪調査区と比較して全体的に広く，最小で60.76㎡，最大で217.53㎡



第823図　弥生時代中期水田遺構（1/2000）・水田番号（1/3000）

を測る。確認水田枚数は28枚を数える。また，これらの水田に使用する灌漑用水は比高差等を考慮に入れると，南側に延びる溝—115を利用するものではなく，さらに北側上流部よりの引水が実施された可能性がある。小畦畔に付設された水口は水田12の北隅と水田11の東隅の2か所のみであり，配水の方法には「かけ流し灌漑」が実施されたことが考えられる。

三ノ坪調査区では幹線水路，井堰，畎畝，水田等が有機的な関連をもって検出されている。34・35線間と36線に南下する幹線水路が設けられており，（両者とも前期より継続）各々に井堰が付設されている。井堰は偃堤と樋門が直接的な機能と考えられるが，水路に直交する溝の存在を考慮に入れるとさらに他の機能が存在することに気づく。下流域に送水を行ったり，井堰本体による幹線水路の両岸の結合は，とりもなおさず，歩道としての機能を果すものである。第824図を見れば西に送られる水は井堰—3より溝—176を通過して井堰—2に流れ込



第824図　弥生時代中期の配水経路（1/600）

み，井堰—2よりさらに西に移動し，下流の水田域に配水されたことが予想できる。東側に延びて南下する溝—175の東西には水田が併設されており，水田域の中央を走る溝は畎畝状の形態を呈している。溝—175の左岸縁には並行して走る小畦畔が付設されており，縄文時代晩期後半の水田遺構として著名な菜畑遺跡（註6）の水田形態に類似点が見い出せる。水田遺構はE線より南側，36・39線間に位置し，南北幅約40m，東西幅約33.5mの範囲内（1,100㎡）におさまる。東西と南北方向の小畦畔が中心になり16枚（確認枚数より推定）の水田小区画を検出しているが，完全に一枚を検出しきれるものはなく，現状での計測を行った。

水田規模は川内調査区と比較して全体的に小型であり，最小で水田37の21.6㎡（さらに小型もあるが計測不可能），最大で40の53.12㎡を測る。田面の海抜高は畔畝の右岸が229～240cm，左岸が210～231cmを測り，若干の比高差が認められる。小畦畔の下端幅約45cm，上端部幅約14cm，高さ約10cmを測り断面は「山」，あるいは「カマボコ」形を呈する。

三ノ坪調査区内の東端にも亀甲形を基調とする小畦畔からなる水田が12枚（完形が3枚）検出されている。微高地の縁辺と水田に挟まれて南下する小溝が用水路として機能していたことがうかがえる。ほぼ同一場所，同一方向に流走する畦畝が弥生時代後期末の水田に伴って検出されており，弥生時代中期・後期末を通しての同一機能を有する水路部分と考えられる。水田規模は最小で水田52の13.95㎡，最大で水田47の32.86㎡を測り，西端部水田よりも小型である。田面の海抜高は213～223cmを測り，南に若干傾斜している。小畦畔の下端幅は約45cm，上端幅は約14～25cm，高さ約5cmを測る。

以上が水田遺構の概観であり，3地区に分かれて所在する水田遺構にもそれぞれ異なりと共通点を見い出すことができる。

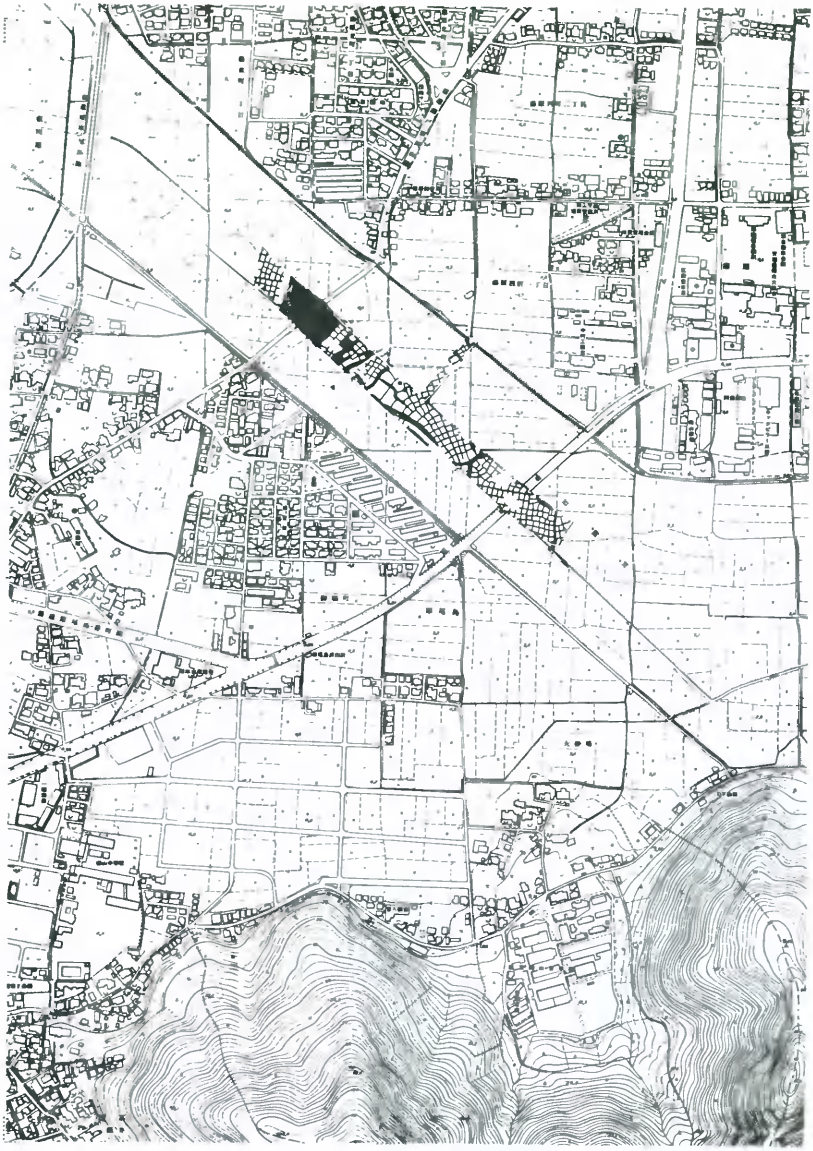
まず，南下する自然流路に規制された微高地地形は，ゆっくりと南に高さを減じながら延び，居住区域は安定した微高地上に営まれ，生産区域である水田は微高地間の低地に営まれる状況は共通している。しかし，同じ低地でありながら川内調査区のように広範囲に大型の水田が分布する地区と，三ノ坪調査区のように微高地に挟まれた谷頭部にわたる狭い範囲に小型の水田が分布する地区の異なる二者が認められる。

この占地は水利・日照等の自然条件の看取と，道具・技術等を駆使する労働力，日常の備蓄等の資本を含む諸条件の安定確保された状況のもとに成立しているものと考えられる。問題はその安定確保の進捗状況であるが，弥生時代中期の水田は微高地の削平を大規模に実施したものではなく，低位部・低地の開墾可能な場所での開田に踏切ったと考えられ，弥生時代後期末の水田にみられるような「島状高まり」遺構を存在させるような微高地の大規模な掘削は実施されていないと考えられる。

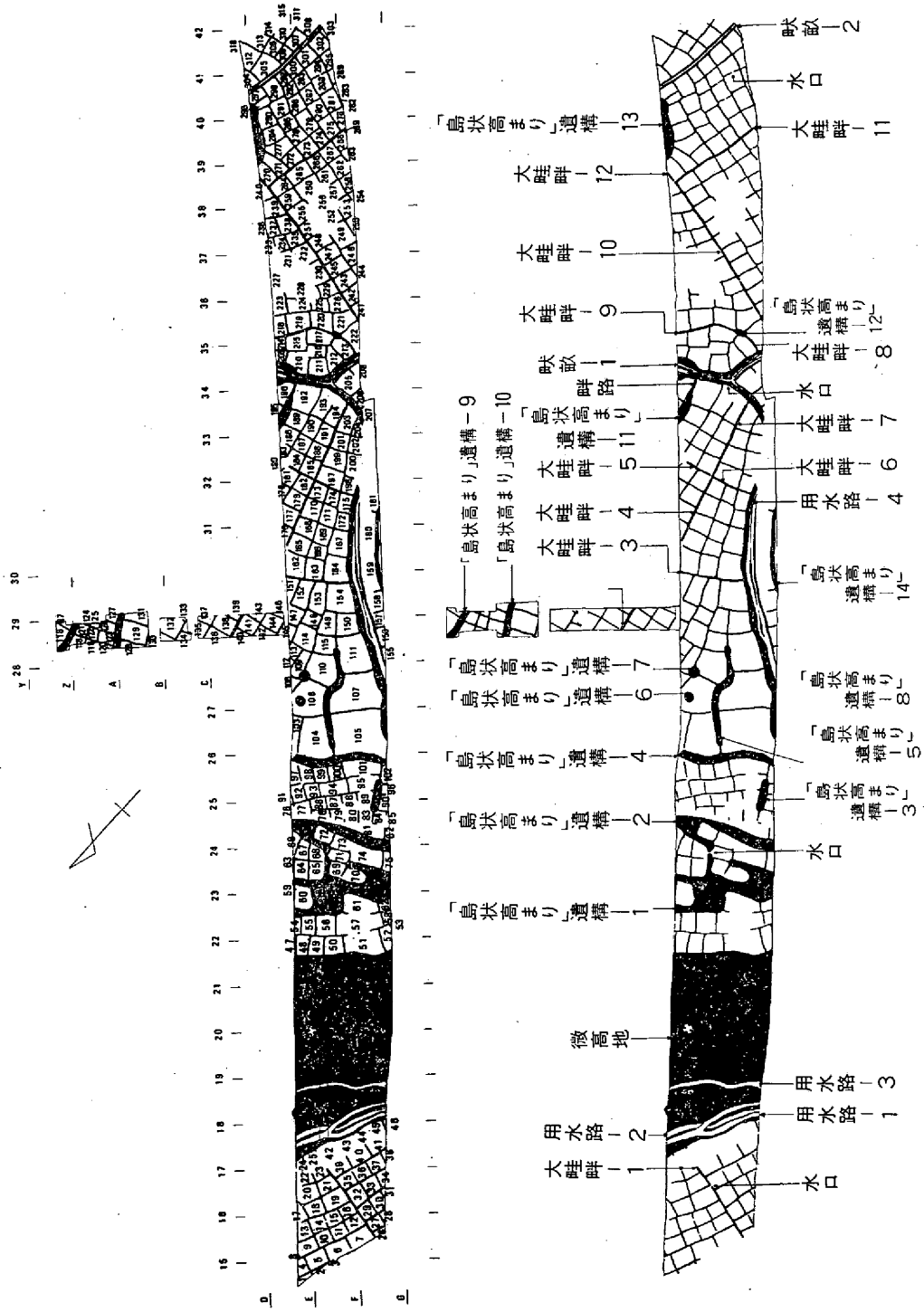
溝一171を例にとっても，弥生時代前期の幹線水路を若干拡幅する格好での改良を実施されているが，基本的には同一水路部を踏襲し，水田域が大幅に拡大されるような開田は実施されていないようである。弥生時代前期の水田についても溝一171の関係等から推察すれば，同一場所で若干小範囲に存在した可能性が強く，弥生時代中期の開田時点で削平を受けたことが考えらる。

II　弥生時代後期末の水田遺構（第825～829図）

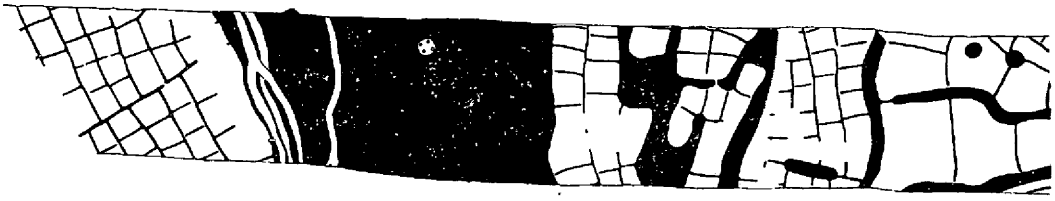
百間川河川敷内における従来の水田遺構の報告（註7）は弥生時代後期末を中心に論じられたものが多い。後期末の水田遺構は現在までに約45,000㎡以上が検出されており，距離にして



第825図　百間川原尾島遺跡水田遺構位置図



第826図　百間川弥生時代後期水田遺構の番号・名称（1/3000）



第827図　弥生時代後期末

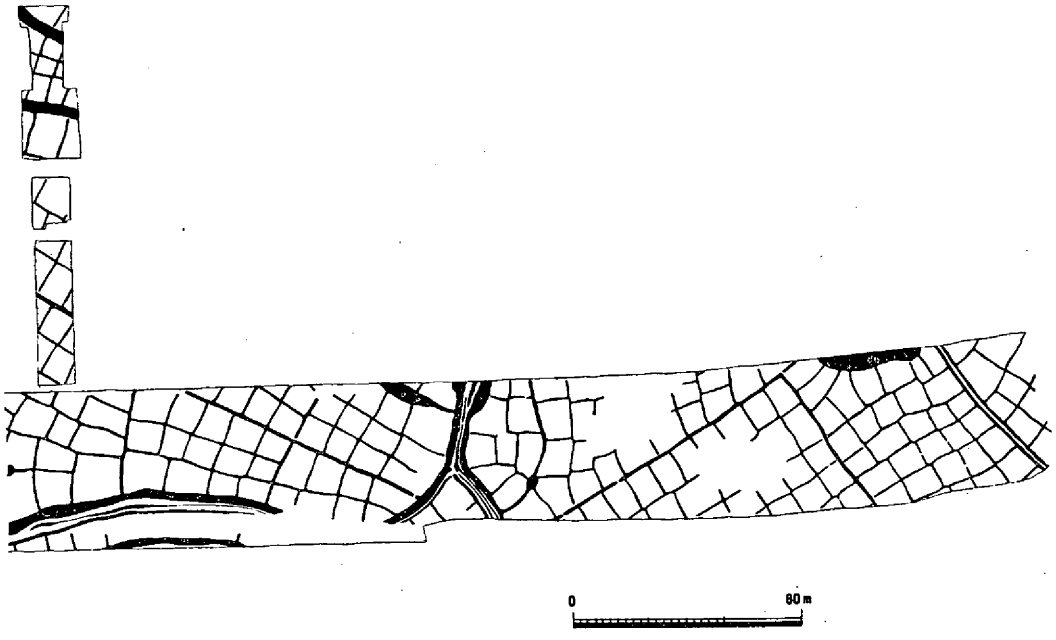
1㎞以上継続することが確認されている（註8）。そして，全体調査面積の約3分の1におよび，前述した弥生時代の中期水田遺構を上回り，より広範囲に分布しており，「田」字形に整然と並ぶ水田景観が展開する。

これらの水田は一瞬にして洪水砂により埋没しており，生活空間における同時性を示す良好な資料を提供している。

今回の百間川原尾島遺跡では幅約40m，延長約800m間に2つの微高地と水田域，および中世河道（微高地・水田域を削り取っている）を検出している。それらの占める比率は微高地約220m，水田域約460m，河道120mとなり，水田域が全体の半分以上を占める状況を呈する。水田域には「島状高まり」遺構が14，大型灌漑用水路3，畎畝2，畔路1，大畔畦12，小畦畔，水田約316枚が存在する。田面のみの面積は合計14,236㎡となり，他の水田遺構が約5,364㎡，なかでも「島状高まり」遺構が多く，7割の面積を占めている。

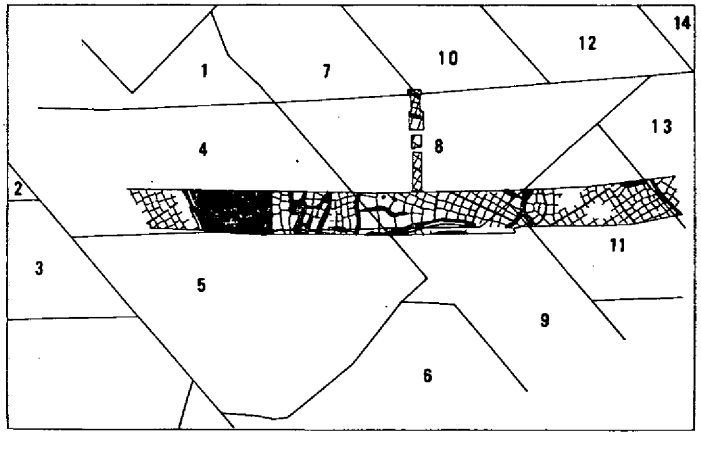
それでは西より丸田，川内，三ノ坪調査区の順序で水田遺構の形状を述べることとする。

丸田調査区は14線中央より26線までの230m幅内におさまり，南西に延びる微高地とその両側に所在する水田遺構からなっている。微高地を境にする東西の水田遺構は対照的な在り方を示しており，西側の水田遺構は河道上，および低地に造られた代表的な例である。その特徴は水田域に「島状高まり」遺構を持たず，水田の平面形態が「田」字形に整然と構成されている点があげられる。規模は最小の水田29が約37.62㎡，最大の水田19が約71.79㎡，平均45.30㎡



水田遺構全体図（1/2000）

を測る。田面海抜高は水田2・3付近が283～292cmと高く，水田20より水田40にかけてが256～275cmと南北筋状に低くなっており，全体的に北より南に緩やかに傾斜していることがうかがえる。水口は流走方向に直交する格好で大畦畔に3か所，小畦畔に16か所（このうち上端が小畦畔に取り付かず，下端のみが取り付く水口が8か所）が付設されているが各小区画に設けられているものではなく，下位水田への配水は田越しをする「かけ流し灌漑」が実施されたと考えられる。



1．舟屋　　8．川内
2．三股ケ　　9．二ノ坪
3．中須賀　　10．上宇治
4．丸田　　11．三ノ坪
5．往来下　　12．出村前
6．五反地　　13．横田
7．大前田　　14．中溝

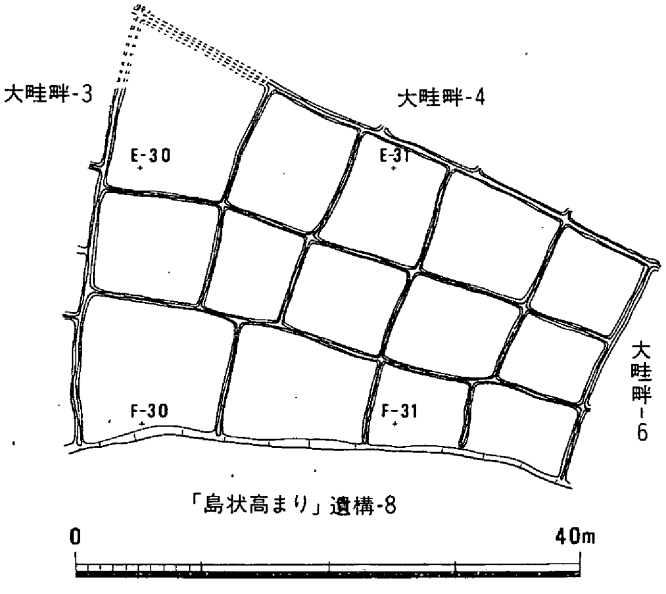
第828図　百間川原尾島遺跡・周辺小字名

造田の手順は平坦面に整地後，東西の大畦畔を付設し，それを基線に直交する形で南北方向に近似する数値幅で小畦畔を延長し，その間に短い小畦畔を東西に取り付けている。小畦畔間に使用されている数値は680～700cmを前後するものが多く利用されている。

さて，微高地を境とする東側の水田遺構は西側の水田遺構と対照的であり，複雑な平面形態を持つ4つの「島状高まり」遺構と，それに規制を受けた格好で水田56枚（破壊されたものを加えると60～62枚）が存在する。その状況は4つの「島状高まり」遺構に挟まれて南北に狭長なるブロックの水田域に分断され，さらに不規則な畦畔により細分されている。その顕著な例は22線中央より24線中央の約40m間に集中してあらわれており，水田60～76がそれにあたる。他の畦畔は，まず流水の方向（微高地の縁端部方向）に直（曲）線に継続して付設され，それに直交して取り付く小畦畔は西側水田域とまったく同一手法で実施されており，17ある水口配置も同様である。水田47～102の延べ面積約2,475㎡に対して，「島状高まり」遺構を中心にした水田遺構の占める面積は約600㎡を測り，田面の約4分の1弱になる。水田規模は最小が水田86の約34.37㎡，最大が水田56の約80.35㎡，平均46.89㎡を測り，西側水田に近い数値を示している。田面は西側水田より約10～20cm位高く，海抜271～308cmを測る。

川内調査区（岡山市藤原）の水田遺構は26線より33線付近までの約140m間である。

「島状高まり」遺構は丸田調査区ほど複雑な様相は呈していないが，土手状の「島状高まり」遺構が5，円形の「島状高まり」遺構が2の合計7つの「島状高まり」遺構が存在し，東西での15区画にバラツキのある101枚の水田からなる。



第829図　水田162～175（1/600）

東辺を三ノ坪調査区の畝畝－1，南辺は「島状高まり」遺構－8（畝畝－1が継続する可能性が考えられる），西辺を丸田調査区の「島状高まり」遺構－4，北辺を「島状高まり」遺構－10等の大型構造物に囲まれ，比較的まとまった水田区画を形成している。その水田域内に大畦畔2～7による6～7枚と推定でさる大区画が形成されており，水田162～175はそのうちの1区画の全貌を明瞭に表出している。その水田規模は最小で水

田174の 33.97㎡，最大で水田167の 86.80㎡であり，平均63.8㎡を測る。大畦畔３，４，６と「島状高まり」遺構－８に囲まれた14枚（水田 162～175）の水田面積は約 980㎡であり，畦畔部を除いた面積は約 920㎡ を測る。水田183～194についても類似する大区画形態を呈する。

このような大区画（水田 162～175）は，現在使用の一反（約 991㎡）に近い数値を示しており，興味ある事実を呈示している。

調査区東端にあたる三ノ坪調査区は33線より42線間の約 180m であり，最も下流域に位置する。前述した丸田，川内調査区に比べ，「田」字形の水田小区画が多く認められ，なかでも35～40線間の南下半は大畦畔 10，11により 直角に配置された大区画内に，小区画水田 241～269（平均53.7㎡）が整然と並び，一見して条里を思わせる感じを与える。

さらに，もう一つの特徴は従来より灌漑用水域として利用されていることである。水田域に２本の畎畝が並行して流走し，その間隔は約120～130mを測り，同一方向に南下している。大型の畎畝－１は複数の配水機能を有し，東西，および下流の水田に水を供給する形態を呈している。小型の畎畝－２は東側の水田に配水する水口２つを設けているのみである。畎畝－１は弥生時代前期（百・前・Ⅲの古相）に開始された 幹線水路（溝－162）であり，同一の場所を中期前半（百・中・Ⅰ），後期（百・後・Ⅱ，Ⅲ）に利用し，そして，弥生時代後期末（百・後・Ⅳ）に至っている。流路幅，深さ等の規模は徐々に縮少されているが，その変化は上流域における整備された配水機能の構造によるものと考えられる。

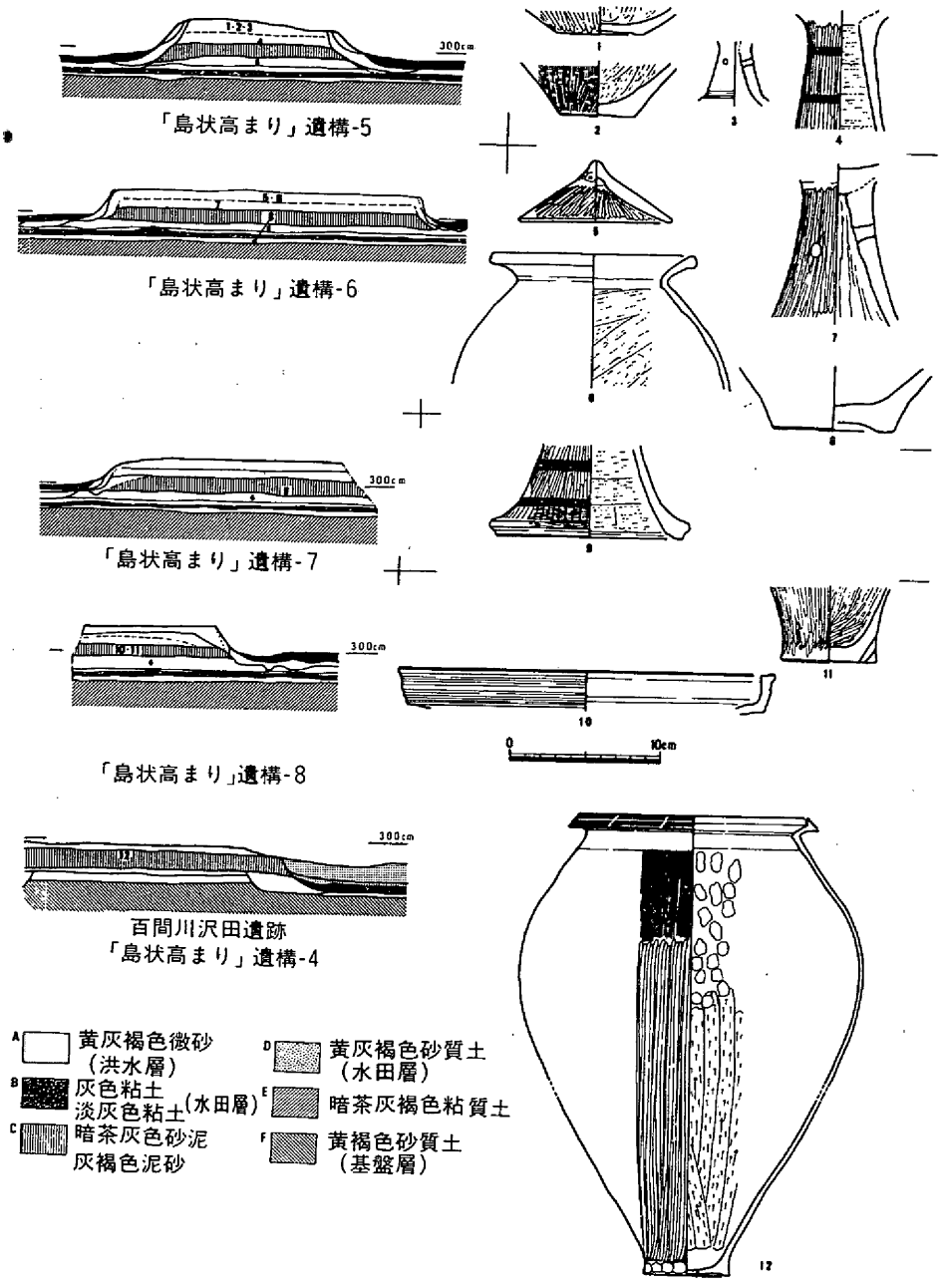
畎畝－２は下層東側に弥生時代中期の水田に伴うと考えられる水路が同一方向に流走しており，同位置の占地等より同一機能が想定でき，従来より水路部としての占地が意識されていたと考えられる。

以上が弥生時代後期末の水田遺構の概観であるが，詳細については各節の水田遺構，および表－６の水田の計測値を参考にして頂きたい。

III　弥生時代水田遺構の時期

水田時期を決定するには伴出する土器によることはいうまでもない。しかし，往々にして水田の性格上，土器の伴う場合は少く，上層・下層の両水田ともその例にもれないものである。そこで，弥生時代中期としている下層の水田について，若干の出土遺物と関連遺構の層序等を中心に考察を加える。まず，水田面と考えられる場所の遺物は認めず，伴出遺物からは時期が決定できない。しかし，川内調査区のC・D-28 の水田層中からは第 679 図に呈示した弥生時代前期土器片が検出されており，その中に貼り付の凸帯を持つ壺 5579 が含まれている。その特徴は百・前・Ⅲの古相を呈しており，造田の上限を示すものと考えられ，水田層下位に弥生時代前期包含層が存在することからも裏付けられる（弥生時代前期包含層を削平して造田を行った可能性がある）。

「島状高まり」遺構―6においても8の壺底（第830図）が弥生時代前期包含層直上より出土している。また，水田層上位の暗茶灰色，灰褐色を基調とする泥砂，C層中には9～11の土器片が含まれており，9が百・後・Ⅰ，10が百・中・Ⅲの新相，11が百・中・Ⅰの新相に比定で



第830図 「島状高まり」遺構内出土遺物

き，C層の下限を弥生時代後期前半におくことができる。

その間に位置する水田層であるD層は弥生時代前期（百・前・Ⅲの古相）と弥生時代後期（百・後・Ⅰの新相）間におくことができる。「島状高まり」遺構―5～8の土層内に求められる時期の手がかりからも，弥生時代中期の幅を与えることができる。この幅をさらに具体化する方法には三ノ坪調査区の水田に伴う溝―175（畎畝）出土の土器小片（甕下半の内面低位部にヘラミガキがある），溝―175に水を供給する井堰―3出土の土器片，さらに同時に機能していたと考えられる井堰―2出土の土器等があげれる。

井堰―3の甕5966は井堰の通水路内に堆積した土中より出土しており，井堰の機能していた時期より後の段階を示すものと考えられ，百・中・Ⅰの新相に比定している。

井堰―2より甕5907，壺5882が出土しており，前者が溝―171の河床に破砕された状態で密着し，後者が井堰の通水溝内底に認められた。時期は百・中・Ⅰの古相に比定できる。その上位の荒砂中より百・中・Ⅰの新相段階の土器が多く出土しており，井堰はこの時期に廃絶したと考えられる。このように見てくると，下層の水田は弥生時代中期前半の時期が考えられ，百・中・Ⅰの古相に比定しておきたい。

しかし，上層に認められた弥生時代後期末の水田のように，一瞬にして埋没した形状を明確に把握できていない状況に危惧を覚えながら筆を置く。

弥生時代後期末に比定している上層の水田にも水田面に伴う遺物は少なく，丸田調査区の微高地西側水田の洪水砂層中より鉢4488（第546図）が一点出土しているのみである。

やはり，水田の時期決定には層序による方法が最良と考え，水田域内に存在する「島状高まり」遺構の形成過程を，水田面の上下の層位出土遺物を絡ませながら時期を追ってみる。

弥生時代中期の水田でも述べたように，前期包含層であるE層の上位に若干の間層をおいて中期水田層のD層が存在する。さらに上位に5～6層の水平堆積が認められ，C層には4・9～12の百・中・Ⅰより百・後・Ⅰ・新相までの土器片が包含されている。まず，C層の下限を百・後・Ⅰにおくことができる。さらに，上位層には1～3・5～7等の百・後・Ⅱの土器片を含み，ほとんど共通した時期に堆積が進んだ形跡を留めている。遺物はプライマリーな状況での堆積と考えられる。

さて，このようにみてみると，「島状高まり」遺構―6～8等は人工の盛土による「島状高まり」遺構ではなく，中期水田の廃絶後に水平堆積した土層を，造田の際に何らかの理由で削り残した部分と理解するのが妥当である。

すなわち，弥生時代後期前半（百・後・Ⅱ）のある時期まで水田域以外に利用されていた微高地低位部分が開田され，大規模な造田が実施されたことを物語っている。そして，それらの

「島状高まり」遺構は，徐々に削り込まれながら縮少しているものと，あまり削り込まれずにほぼ原状を維持したものの2者が存在する。前者には大型の「島状高まり」遺構－5，12，13等があてはまり，後者には「島状高まり」遺構－6，7，12等にその痕跡が顕著に認められる。

例えば，「島状高まり」遺構－1（第568図）にみられるように水田層を除去すると，「島状高まり」遺構の平面プランに沿う格好で3～4重の溝が巡っており，その溝内には百・後・Ⅱ，Ⅲの土器が含まれている。その最も外側の溝を，削り込まれて縮少していった「島状高まり」遺構の最初の外周痕跡と認めることができる。また，この「島状高まり」遺構の縮少に対応する格好で微高地周縁が削り込まれており，徐々に造田が実施されている。「島状高まり」遺構－12についても同様の事実が認められ，外周より約12m，8m，7m，5m，4.5m，1.5mと6～7回の縮少過程が認められる。また，「島状高まり」遺構－12では遺構内に円錐台形の核を持ち，その核を中心に徐々に増幅していった過程を留めている（註9）。

以上で「島状高まり」遺構の形成時期が一応百・後・Ⅱのある時期であることが理解できる。その後も水田は継続して実施されていたと考えられるが，洪水期までの間の水田土層は検出することが不可能であった。

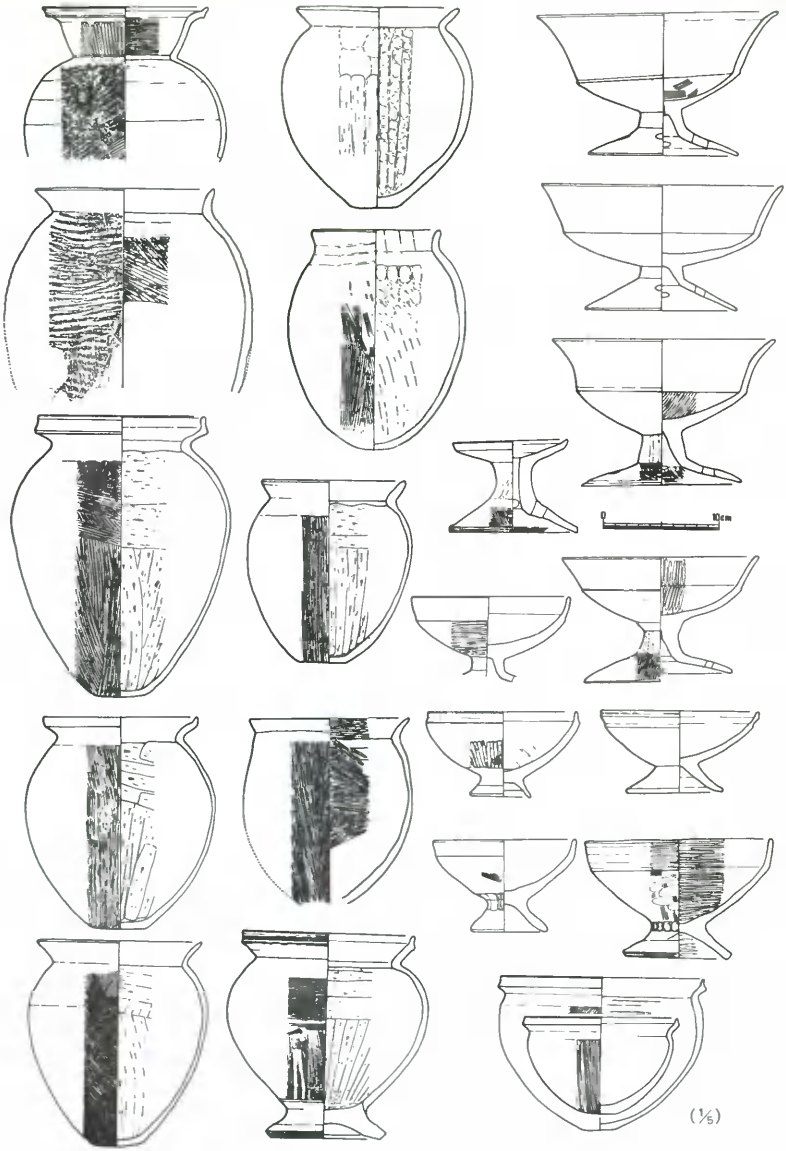
第830図に見られるA層が洪水砂層であり，B層が水田土層である。水田土層中の遺物（第571図）は百・後・Ⅱの土器片が多く，ときおり，百・後・Ⅲの時期の土器片をも含み，水田の継続期間の一端を呈示している。

さらに，水田期に機能していた畎畝－1の畔路部より埋没した状態で，上半に削平を受けた甕5621（第710図），畎畝－1の溝底より下位の溝内から甕6040（第793図）等が出土している。甕5621は甕6040より若干古い様相を呈するが，水田直前の時期を示す土器類であり，百・後・Ⅳの古相に比定できる。

洪水層であるA層上面に堆積している層中より，百・古・Ⅰに比定できる土器（第645図）がでており，溝－44の洪水層上位部にも同時期の土器（第526図）が認められる。このように見てくると水田埋没時期はおのずと表出し，百・後・Ⅳの古相以後に比定することができる。

百間川原尾島遺跡においては水田に伴う遺物は少く，若干決め手を欠くが，これを補足する遺物は百間川兼基遺跡（註10）の凹地に堆積した洪水砂層中より比較的多く発見されている（第831図）。時期は百・後・Ⅳ～百・古・Ⅰに比定している（註11）。

百間川原尾島遺跡の北東方向約2.3kmには近接する雄町遺跡（註12）が所在し，その編年によれば雄町12類に比定できそうである。



第831図　洪水砂層出土遺物

IV 田植えと収穫量

三ノ坪調査区では水田面を覆う洪水砂を除去すると，水田面に整然と規則的に並んだ幅３～８cm，深さ２～３cmの小判形の小穴が検出された。その小穴内には水田面を覆った砂と同一の砂が詰っており，洪水時における稲株の痕跡と考えられる。小穴内の砂を除去すると，北側が深く，ゆっくり南側に向かって上がってゆく形状を呈する。

分布範囲は畎畝－１の東側を中心にして南北に長く延びており，７枚の水田（209～211，214～217）に跨る。分布域の周縁にゆくにしたがい希薄になり，自然に消滅する状態を呈し，確認面積は約165㎡を測る。その中でも分布形状が最も顕著に把握できる水田217の一部を抽出して説明を加える。

水田217は面積約64.23㎡を測り，南辺に「島状高まり」遺構―12・大畦畔，北東・北西・南西辺は小畦畔に囲まれており，ゆがんだ長方形を呈する。掲載した第832図は水田217の北部に限定したものである。

まず，小畦畔Ａを基準に観察すると，小畦畔Ａに並行する小穴列に幅約80cm，小穴数10～12

第832図　弥生時代後期末水田217稲株痕跡（1/60）

からなる一単位が存在する。約80cmを測る単位内の小穴は，横に並びをみせる直線的な小穴列，あるいは上・下方に弧を描き曲線的な並びをみせる小穴列等が認められ，各単位に並びの個性が存在する。その単位が小畦畔Bに並行する格好で7条存在し，帯状に南西方向へ下がる形状を呈している。帯状の単位間には若干の空間域が認められ，その幅は約10cm前後を測る。小穴間の間隔は非常に接近しており，横に並ぶ小穴間は8～9cm，縦に並ぶ小穴間は12～13cmを測り，等間隔には配されていない。

以上の事実を要約すると，小畦畔Aに向って横一列に7名の人間が並び，南西に向って下がりながら「田植え」を実施したことがうかがえる。その方法は一人植えの単位である約80cm間に10～12株が移植されており，非常な密植の状況を呈し，片正条的な植え方である。

また，水田一枚，一枚を単位に移植した可能性が強く，畦越しも行われていない状況を呈する場所が多い（註13）。原則的に畦畔上には苗を植えていないようである。

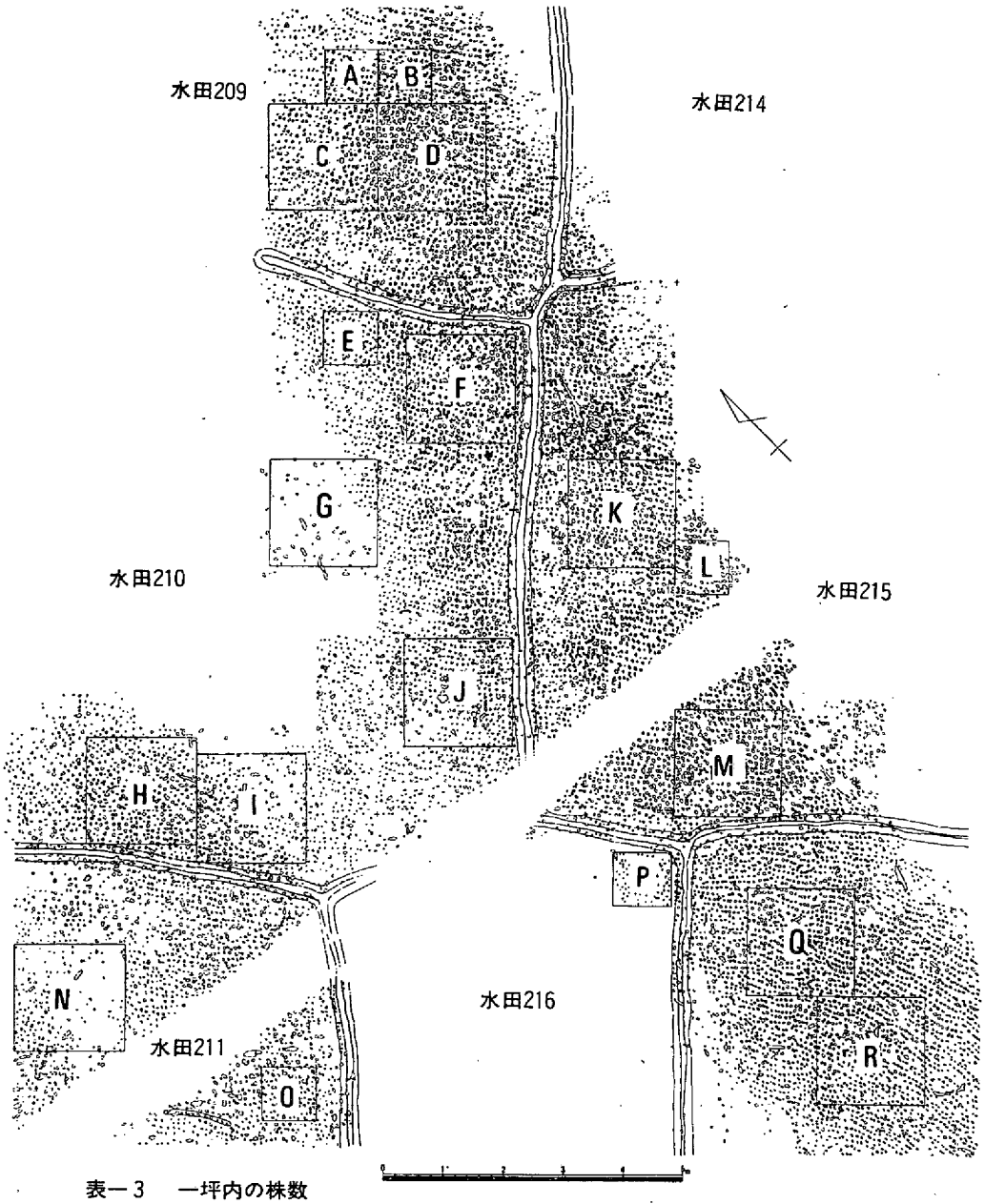
一坪内に400株以上を移植する方法は，現在（平均60株前後）ではほとんどみることはなく，異状な密植（註14）といわざるをえない。当然，最も重要な収量構成要素と認めるべき分蘖効用も低下し，通気性等の点においても矛盾する一面を含んでいる。さらに，非常に狭い株間の幅等を考慮に入れると，田植え後における水田内の浮いた苗の直し，および除草等の作業空間が無い点に気づく。除草等の実施の有無により収穫量におよぼす影響は大きいと考えられるが，整然と規則的に並んだ稲株痕跡以外に洪水砂の入った小穴はほとんど確認されておらず，除草の徹底した状況をも看取することができる。

作業空間の無い点と徹底した除草という相反する事実が表出している。これには，水田面の状態，および除草する時期等についても考えなければならない。また，丸田調査区の微高地西側水田13等に検出された，洪水砂の詰まった多数の足跡の存在は，同時期の水田面に残る稲株痕跡とは対照的な一面を表出している。この事実はとりもなおさず，水田の異なる使用方法に結びつくものである（註15）。

収穫量の問題では，稲株痕跡の検出から従来の収量計算より，さらに一歩進めた状態での結果が得られる可能性がある。第833図に呈示したA～Rまでの方形枡は4分の1坪，および一坪内の稲株痕跡を囲ったものである。

一坪内における株数はD・F・H・K・M・Q・Rの区画（表－3）が原状株数を留めていると考えられる。そのうちで，最少数がHの378株，最多数がKの445株を数え，平均412.4株になる。

一坪内における稲株数を412.4株とし，一株に一穂，一粒の結実を仮定した場合より，現代における一穂の最高200粒でのおおまかな計算を行ったのが表－4である。しかし，計算の基本になる部分の具体性の欠如が多く，例えば，移植する際の一株の茎数，分蘖結果による茎



表－3　一坪内の株数

A	90株	G	90株	M	422株
B	113	H	378	N	192
C	340	I	279	O	104
D	395	J	334	P	92
E	92	K	445	Q	439
F	386	L	89	R	422

第833図　稲株痕跡（1/120）

数，一穂がつける籾の粒数等があげられる。

Aの場合は一苗により一株が成長し，一粒の籾が取れると仮定した例であり，一反で約123,720粒が数えられる。大粒の籾で収穫量を換算すると，4.58升（玄米0.07俵），小粒の籾では2.52升（玄米0.04俵）となる。この数値は田植時の種籾数に匹敵し，まったく生産性のない労働に終止した結果になる。これは奈良時代の下々田（玄米0.63俵）にも及ばず，Aの状況はまず成立しえないと考えられる。

Bの場合は野田畝遺跡（註16）における弥生時代中期末の手捏ね土器の外面に，圧痕として残存する籾12粒を参考にしたものである。百間川河川敷内出土の籾圧痕，炭化米（註17）に近似しており，長幅指数は1.73～2.24の間にあり，平均1.90を測る日本型（註18）であることが看取される。Bにおいても一反の籾収穫量は一俵を前後するものである。

Cの場合は一年放置田における籾数38～62（註19）の平均値50粒をとったものであり，412.5（株）×1（茎）×50（粒）＝20,620粒，一反総数は6,186,000粒となる。籾大粒で5.72俵（玄米3.86俵），籾小粒で3.156俵（玄米2.00俵）の数値がえられる。

D・E・Fは現在の一穂における籾の少位（100粒以下），中位（100～160粒），多位（160以上）の数値を示し，その収穫量をあげたものである。現行の一穂にみられる籾数，平均160粒をみると，一坪に65,984粒，一反で19,795,200粒であり，籾大粒で18.32俵（玄米12.37俵），籾小粒で10.09俵（玄米6.42俵）が収穫できることになる。これは一株（穂）に160粒としたものであって，分蘖茎数は考慮しておらず，一坪内の412.4粒に数本づつでも茎数が増加すると，さらに莫大な数値になるであろう。

表－4　反別収穫量比較表

収穫量／粒数	一株（粒）	一坪（粒）	一反（粒）	籾収穫量(俵) 大粒	籾収穫量(俵) 小粒	玄米収穫量(俵) 大粒	玄米収穫量(俵) 小粒	朝日米 籾	朝日米 玄米	備考
A	1	412.4	123,720	0.11	0.06	0.07	0.04	0.054	0.045	・一株に一穂として、結実が一粒の場合。 ・一反分の苗代種籾数に匹敵する。
B	12	4,948.8	1,480,640	1.37	0.75	0.92	0.48	0.98	0.81	・野田畝遺跡弥生時代中期末のNo.90住居址出土手捏ね土器外面に籾圧痕12粒（註16）。
C	50	20,620.0	6,186,000	5.72	3.156	3.86	2.00	2.72	2.25	・一年放置田での一穂の平均粒数(註19)。
D	100	41,240.0	12,372,000	11.45	6.31	7.73	4.01	5.44	4.51	・一穂に100粒以下(少位) ・一穂に160粒以上(多位) ・一穂に最も多く結実する場合 (註28)。
E	160	65,984.0	19,795,200	18.32	10.09	12.37	6.42	8.70	7.22	
F	200	82,480.0	24,744,000	22.91	12.62	15.46	8.03	10.88	9.03	

（註28）　※　一升中に大粒の籾粒数は27,000粒、玄米粒数は40,000粒
一升中に小粒の籾粒数は49,000粒、玄米粒数は77,000粒

これは，A・B・C・D・E・Fの各段階についても同様のことが言えるわけであるが，自然環境，および肥料，病害虫，除草，成育状況等をまったく考慮に入れられず，数字的にのみ作成したものである。

現代の品種である「朝日米」をとりあげ，籾および，玄米100g に含まれる粒数を計算すると，籾は約3,790粒，玄米では約4,565粒が数えられる（註20)。これを基礎にして，一反における籾の収穫量を表—4により比較すると，「朝日米」の収穫量は本遺跡の小粒籾の収穫量に近似し，玄米においても小粒の収穫量に近い俵数が認められる。

奈良・平安時代では，上田の収穫量（玄米）が2.1俵，中田1.7俵，下田が1.3俵，下々田が0.6俵，さらに江戸時代では上田の収穫量（玄米）が3.75俵，中田3.25俵，下田2.75俵，下々田が2.25俵の数字が示されている（註21)。

本遺跡ではCの段階の玄米小粒による収穫量が，奈良・平安時代の上田収穫量に近く，Bの段階が奈良時代の下々田の収穫量を若干下回り，大粒が若干上回っている。江戸時代における上田収穫量は本遺跡のC・D間に，下々田の収穫量は大粒でB・C間，小粒でC・D間に位置する。D段階においては，玄米収穫量は奈良・平安・江戸時代の上田収穫量を上回る数値が認められる。C・D段階のよりDに近い数値は岡山県における明治11～30年の収穫量に近似するものであり，大正年間の数値がD段階を若干上回る（註22)。

以上のように見てくると，本遺跡における収穫量はDの段階までは延びず，Cの段階までの可能性が強く，B・C間を中心に上下していたと見る方が妥当であろうか。

しかし，一坪内に平均412.4株の稲株の存在は異状であり，今後の調査例を待って検討してみたい。

V 分　　析

百間川河川敷内の遺跡群では，プラント・オパール分析，花粉分析，種子分析年代を ^{14}C 年代を実施した。

（1） プラントオパール分析（第834・835図）

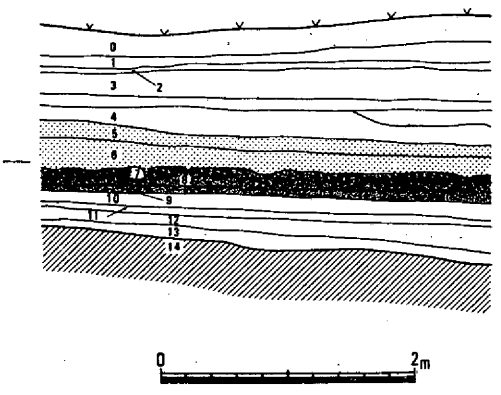
丸田調査区 D-14 の北壁断面と三ノ坪調査区 D-34 の北壁稲株痕跡の2か所の採土を実施した（註23)。そして，分析結果の出ているD-14北壁，それも水田遺構に関連しているもののみについて簡単に述べる。

まず，イネは7層付近より徐々に増加のきざしが認められ，淡灰褐色粘土層である9層ではピークになり，10層で再び減少し，11層で増加しつつ，淡灰色粘質土層である12層で再びピークに達している。13・14層ではほとんど無くなる状況がうかがえる。

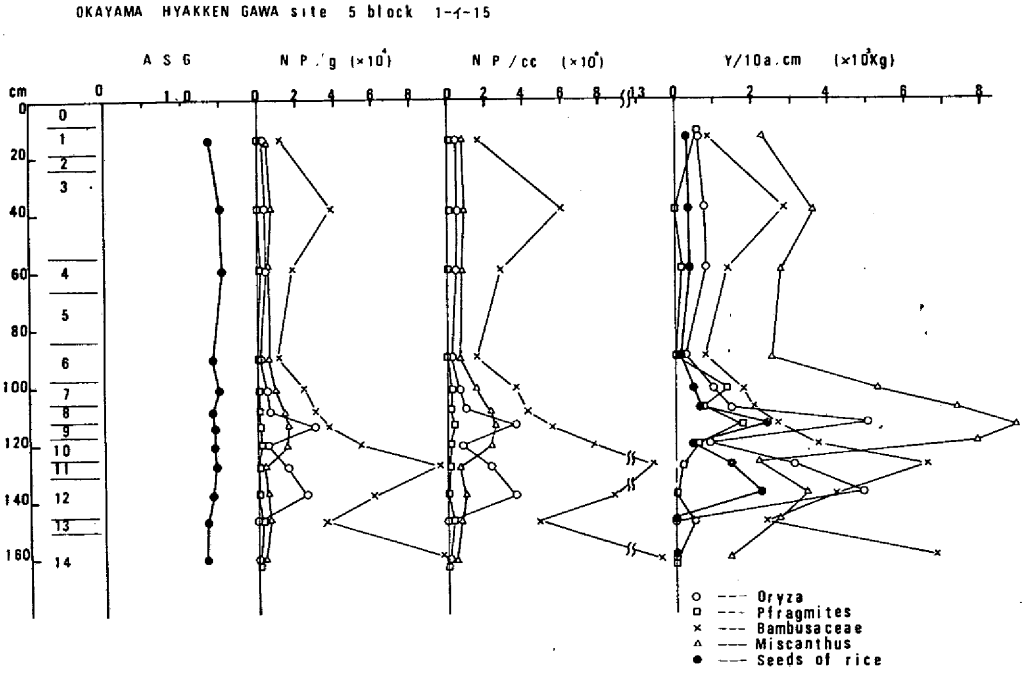
発掘調査結果を併用すると，7層は畦畔が伴う弥生時代後期末の層（水田層1）であり，平面では整然と規則的に並ぶ水田面が検出されている。8層は淡黄灰色粘土層（水田層2）であ

り，7層同様にほぼ水平に整地された面を持っている。この層が水田床土層に匹敵する可能性もうかがえ，その他の調査区の水田土層にも同様の状況が認められる。9層（水田層3）はイネが最も多く検出されており，7・8層同様に東西方向には一応水平堆積状況を呈する。しかし，9層は東にゆくにしたがい土層幅を増しながら下降し（第258図），南壁より北壁に向っても同様の傾向がうかがえる。7～9層のように水田土層の構成が三層からなる例は少な

0.暗褐色砂質土
1.暗灰青色砂
2.淡茶灰色微砂(中世溝)
3.淡灰茶褐色土
4.灰茶褐色土(マンガンを含む)
5.淡灰黄色砂(洪水層)
6.淡褐色砂(洪水層)
7.暗灰色粘質土(水田層)
8.淡黄灰色微砂粘質土(弥生時代後期水田層)
9.　〃　(水田層)
10.茶灰色粘質土
(鉄分・マンガンを含む)
11.暗黒褐色粘質土
12.淡灰色粘質土



第834図　プラント・オパール分析土層（1/60）



第835図　プラント・オパール分析結果

く，ほとんど二層になるものが多い。

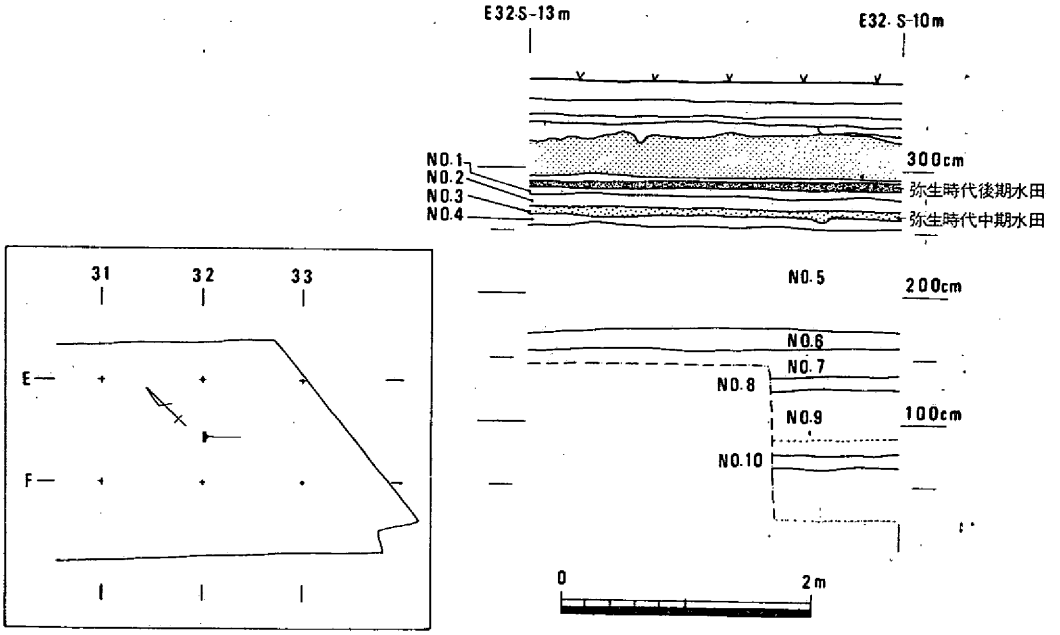
11・12層はその面に水平部を持たず，たわんだ状況を呈しており，畦畔等の確認はできなかった。12層のイネの検出が多い事実は，今後の調査により追求する必要がある。

（2） 花粉分析（第836・838・839図）

前述した丸田調査区の同一場所，川内調査区のE-32の2か所を実施した（註24）。試料はNo.1～No.10までの採土番号を付し，それに準じて説明を簡単に加える。No.1・2は弥生時代後期末の水田層と弥生時代中期前半の水田層間に位置する土層である。No.3の弥生時代中期水田層中とほぼ同量のイネ科の花粉(21%)が検出されており，畦畔等の水田遺構は検出されなかったが，水田土層の可能性は十分考えられる。No.3は弥生時代中期水田層に匹敵し，イネ科の花粉はNo.2(20.8%)に近く，ウラボシ科の花粉(13%)がNo.1・2に比べて多く検出されている。

No.1～3の時期はイネ科を主体とし，周囲にはクリカシ属，コナラ亜属，マツ属，スギ科，コウヤマキ等が生育している。

No.4は弥生時代中期水田層下位に位置するが，大部分がヨモギ属によって占められており，イネ科が8.0%と減少している。No.5～7はイネ科が少なく，数%より10%を呈し，羊歯類とヨモギ属優占の草地であり，樹木は極くまれという結果がでている。No.8～10ではイネ科が26.0%～14.5%を占め，No.8は弥生時代中期の水田層を含むNo.1～3よりイネ科の花粉は多く，その反面，アカガシ亜属，クリカシ属などの照葉樹とコナラ亜属が主体となって広葉樹



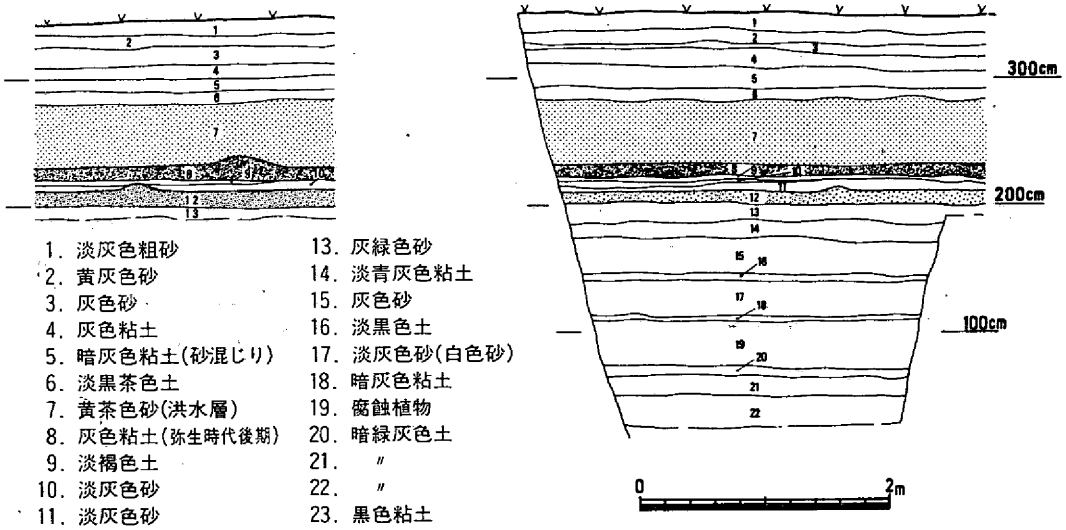
第836図 花粉分析用土層断面（1/60）

林を形成していたと考えられる。№8・9のイネ科はイネそのものの可能性は薄いであろう。全体の構成は№8～10が百間川兼基遺跡（註25）大上田調査区の構成に近似し，№1～3は百間川原尾島遺跡丸田調査区の水田層2の構成に近似するものである。

前述した百間川原尾島遺跡の水田層1（7層）・2（8層）・3（9層）も花粉分析を実施し，水田層1よりイネ科6.3％，水田層2より25.1％，水田層3より3.5％の割合で検出している。さらに下位の12層でも13.4％のイネ科を検出している。プラント・オパール分析との比較では水田層3におけるイネ，イネ科の占める比重は両者とも他に比べて多く，水田関連土層であることが理解できる。しかし，本来の水田層である水田層1ではプラント・オパール分析によるイネの割合は低く，花粉分析でも6.3％と低い数値が出ている。水田層1の状況と異るものに水田層3があり，プラント・オパール分析によるイネの出土量がピークに達しているにもかかわらず，花粉分析では3.5％と低い数値が認められる。水田層2はプラント・オパール分析にて水田層1・3間の数値を示し，花粉分析では25.1％という最も大きい割合を占めている。

以上の結果より百間川原尾島遺跡では，プラント・オパール分析，花粉分析では水田床土に匹敵すると考えられる8層にイネ科が多く，プラント・オパール分析では水田床土に匹敵する下位の9層にイネが多いことが理解できる。

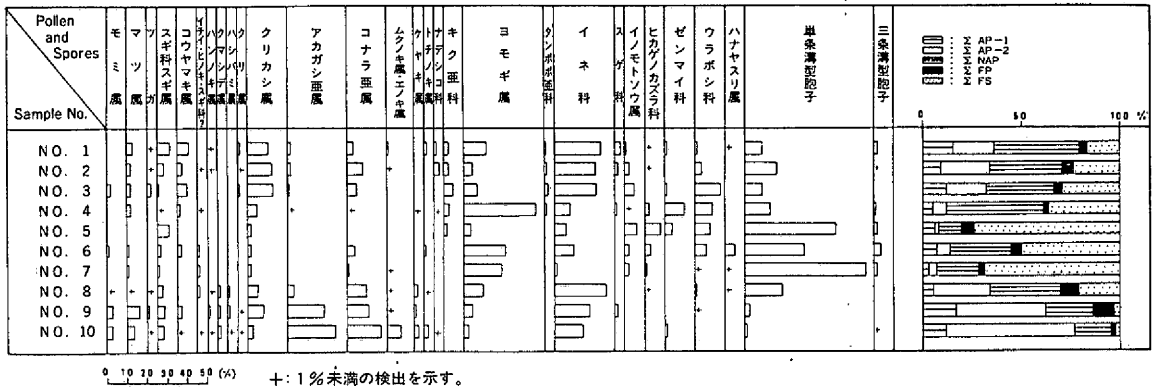
この相異が現在何を意味するかは不明であるが，水田層1～3が水田土層に関連するものであることはまちがいないと考えられる。しかし，水田層1～3の形成過程についての具体性を把握する必要がある。



1．淡灰色粗砂
2．黄灰色砂
3．灰色砂
4．灰色粘土
5．暗灰色粘土(砂混じり)
6．淡黒茶色土
7．黄茶色砂(洪水層)
8．灰色粘土(弥生時代後期)
9．淡褐色土
10．淡灰色砂
11．淡灰色砂
12．暗緑灰色砂(弥生時代中期)
13．灰緑色砂
14．淡青灰色粘土
15．灰色砂
16．淡黒色土
17．淡灰色砂(白色砂)
18．暗灰色粘土
19．腐蝕植物
20．暗緑灰色土
21．〃
22．〃
23．黒色粘土
24．暗灰色土

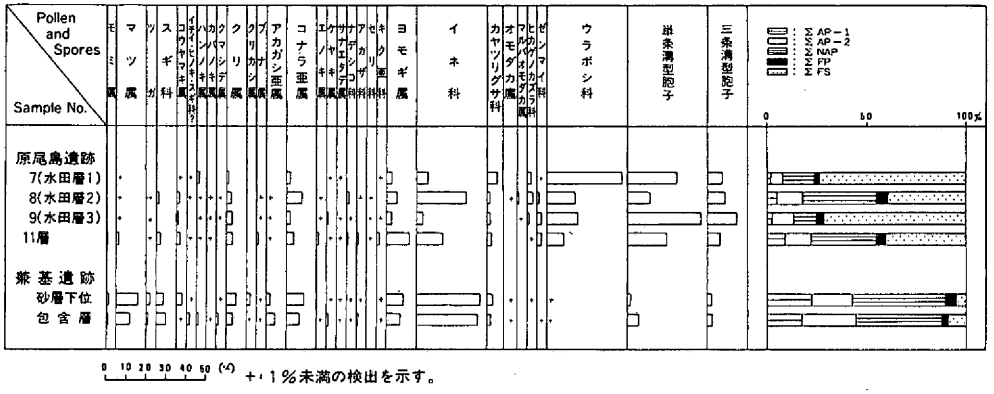
第837図　三ノ坪調査区弥生時代中期・後期末水田土層断面（1/60）

岡山県百間川遺跡発掘調査試料主要花粉胞子化石ダイアグラム　（分析担当：パリノ・サーヴェイ株式会社 調査部）



＋：1％未満の検出を示す。

第838図　百間川原尾島遺跡川内調査区花粉分析



＋：1％未満の検出を示す。

第839図　百間川原尾島遺跡丸田調査区・百間川兼基遺跡大上田調査区花粉分析

（3）種子分析

丸田調査区，三ノ坪調査区にて大型の溝を中心に三か所の分析をお願いした（註26）。

丸田調査区では弥生時代の前期河道（ピート層）の200gを実施した。

バラ科刺（7），ノブドウ（1），クサネム（1），カナムグラ（1），オニスゲ（1），アカザ（5），スゲSP（1），シソS（2），ヘビイチゴ（3），ホタルイ（1），果被？（4），ナワシロイチゴ（1），グミSP（2），ブドウSP（1），小木片多数

同調査区古墳時代の溝—73（第607図）

アキノノゲシ（1），ホタルイ（1），サクラタデSP（8），カタバミ（1），クグガヤツリ（6），スイバ（8），ヒルムシロ（2），イバラモSP（1），ミクリSP（3），オモダカ（1），シャジクモ（1），水草胞子のう？（280），ヤマブドウ（1），カヤツリグサ（2），エノコログサ（1），ノミノフスマ（1），スベリヒユ（1），イワニガナ（1）。

三ノ坪調査区弥生時代前期の溝—162（第742図）

ニガイチゴ（1），ニワトコ（1），タカサブロウ（1），ザクロソウ（3），ノミノフスマ（10），ノミノツヅリ（1），ホタルイ（23），アゼスゲ（1），カタバミ（2），ヤマブドウ（1），ヤブタビラコ（1），カナムグラ片（4），イボクサ（2），オニスゲ（1），イノコヅチ（1），ヒエSP（1），オヘビイチゴ（1），サクラタデSP（3），イヌビエ（8），コゴメガヤツリ（3），コアカソ（1），ヘビイチゴ（1），サナエタデ（7），ホタルイSP（8），シソSP（12），ミゾソバ（1），ボントクタデ（8），イヌタデ（2），チドメグサ（1），ハナイバナSP（1），タデSP（8），モミの基部（4）の以上が検出されている。

（4）液体シンチレーション法による ^{14}C 年代測定

三ノ坪調査区弥生時代中期の井堰—2の杭を試料として測定をお願いした（註27）。

KSU-426　2180±30　BP　という結果を頂き，年輪年代では270BCまたは390BCを得ている。

（高畑知功）

註

註1　井上弘・浅倉秀昭「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査・沢田遺跡U～W区」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会　1983

註2　高畑知功・島崎東「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』51　岡山県教育委員会　1982

註3　松本和男・二宮治夫「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財報告』52　岡山県教育委員会　1982

註4　井上　弘・浅倉秀昭「百間川長谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　岡山県教育委員会　1982

註5　中野美智子「児島湾北岸の新田開発と百間川」『池田家文庫等貴重資料展』　岡山大学付属図書館　1979

註6　中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」『歴史公論』第8巻1号　1982.1

註7　(7)正岡睦夫・柳瀬昭彦「岡山市百間川遺跡の水田址」『月刊文化財』第181号　第一法規出版　1978

百間川原尾島遺跡

(イ)江見正己・中野雅美「岡山県百間川遺跡第2微高地の水田遺構」『日本考古学年報』30　日本考古学協会　1979

(ウ)「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』8・9・10・11・12・13 岡山県教育委員会　1978～1983

(エ)高畑知功「弥生後期の稲株痕発見」『教育事報』 岡山県教育委員会　1981.5

(オ)高畑知功・島崎東「岡山県百間川原尾島遺跡の稲株痕跡・井堰」『日本考古学年報』33　日本考古学協会　1980

(カ)高畑知功「弥生時代の水田跡と灌漑用水路跡」『教育事報』 岡山県教育委員会　1982.9

(キ)正岡睦夫「弥生時代及び古墳時代の水利と水田」『古代学研究』 第98号　古代学研究会　1983

(ク)井上弘・中野雅美「百間川沢田遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　1981

第1調査区において，弥生時代後期末の水田を埋没させた洪水砂中より，鉄製の収穫具（摘鎌）が出土している。稲の根刈り用ではなく，穂摘み具と考えられる。

註8　昭和51年（1979）における第2微高地～第3微高地間の確認調査時点では，グライ化土壌検出をもって遺構の存在を無としていたが，調査の進展に伴い水田遺構が存在することが判明してきた。第2微高地～第3微高地間にも水田の存在する可能性が指摘できるようになり，おおよそ2㎞の継続も考えられる。

註9　第3章4節において三ノ坪調査区の「島状高まり」遺構―12に詳細に述べたが，今後類例を待って，さらに古い時期の水田の存在する具体性を明らかにしてゆかなければならない。また，「島状高まり」遺構―11内の土層に認められる鉄分とマンガンの分離する層位についても検討の必要がある。

註10　前掲註2　P93～95

註11　編年対比表にての百・後・Ⅳ期は甕形土器の「擬凹線」の出現を目安とし，百・古・Ⅰ期は甕形土器の「櫛描平行沈線文」の出現を目安とするの両者が「水田埋没砂」中に共存する事実よりこのような表示を行った。「櫛描平行沈線文」は砂中出土の甕に多条化したものが無く，4～7条施された甕が確認できている。

註12　高橋護・葛原克人・正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会　1972

註13　水田**217**と水田**215**の両水田は，明らかに畦ごしには継続しない小穴配置を示すが，水田**209・210**は畦ごしに継続する状況が一部認められ，一概にはいいがたい部分も存在する。

註14　寒冷地の稲作が専ら密植法によりて増収を企画する場合がある。あるいは質より量的なものを目指して，実施された可能性がある。また，密植法の実施は雑草の繁茂する条件が少いと考えられる。

註15　早急にこの判断は決しがたく，足跡の科学的な証明の必要性を感じるとともに，さらに同時期における稲株痕跡と足跡の共伴関係の類例の増加を待ちたい。それ如何では，休耕田なり，稲以外の作物等を作る場所としての可能性をも有する。

註16　高畑知功・福田正継「野田畝遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21　岡山県教育委員会　1977

註17　前掲註2　P170・171
百・後・Ⅰの土壙—130内より出土の炭化米であり，長さ0.42～0.54cm，幅0.28～0.29cm，厚さ0.19cmを測り，長幅指数は1.73～1.9内におさまる短粒型である。

註18　佐藤敏也『日本の古代米』雄山閣　1971

註19　寺沢薫・知子「弥生時代植物質食料の基礎研究」『考古学論攷』第5冊　奈良県立橿原考古学研究所　1981

註20　現代の「朝日米」をもとに，籾・玄米100gに含まれる粒数を計算していただいた。橿原充二氏に深謝いたします。

註21　沢田吾一『≪復刻≫奈良朝時代民政経済の数的研究』　柏書房　1972

註22　大森信章「10アール当り収量の推移」『岡山の米』岡山県米麦改良協会　1969

註23　宮崎大学助教授の藤原宏志氏により12点の試料のプラント・オパール分析を実施して頂いた（1979年11月）。

註24　花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼をした。百間川原尾島遺跡丸田調査区3点（1979年10月），川内調査区10点（1981年1月）。

註25　前掲註2

註26　種子分析は農学博士，元岡山大学農業生物研究所教授の笠原安夫氏にお願いをした（1980年12月）。

註27　液体シンチレーション法による^{14}C年代測定は京都産業大学理学部教授の山田治氏にお願いした。（ＢＰはＡＤ1950年を０として それ以前の年数を示す数字であり，ＫＳＵは試料の索引番号である。誤差は1標準偏差を取る国際規約に従っており，この範囲での信頼度は68％である。2倍値で95％，3倍値で99.7％になる。^{14}C半減期は5568年を用いている。）

註28　永井威三郎『作物栽培各論』第一巻　1948　全体において第1章いね（稲）を利用，引用させて頂いた。

表－5　弥生時代中期の水田一覧表

番号	面積㎡	海抜m	備考	番号	面積㎡	海抜m	備考	番号	面積㎡	海抜m	備考
1	(0.41)	272.0～273.1		20	(184.58)	262.8～265.2		39	(0.48)	(226.0)	
2	(46.90)	271.9～275.1		21	(48.63)	263.0～267.0		40	(53.12)	220.0	
3	(74.53)	270.8～273.9		22	－	260.9～269.3		41	(13.93)	218.8	
4	(0.39)	270.5～270.6		23	(5.82)	269.4～271.7		42	(11.98)	215.7～219.8	
5	(71.74)	271.0～274.2		24	(45.07)	267.6～270.2		43	(7.37)	210.2～222.2	
6	(91.11)	268.2～273.3		25	(55.36)	267.0～355.9		44	(0.04)	227.6	
7	(0.20)	268.5～268.6		26	(58.65)	266.4～355.5		45	(6.36)	216.5～225.1	
8	(8.70)	259.4～268.5		27	(8.32)	－		46	(11.84)	216.1～221.9	
9	(59.14)	269.0～269.5		28	(0.63)	－		47	32.86	211.7～216.2	
10	(9.98)	－		29	(0.17)	230.5		48	22.91	211.4～221.7	
11	217.53	269.5～273.0	水口	30	(49.88)	229.2～236.3		49	(38.54)	212.0～216.6	
12	60.76	269.5～276.0	水口	31	(27.60)	228.8～240.0		50	－	227.6	
13	82.88	268.0～270.0		32	(29.84)	230.2～236.7		51	9.46	221.7～225.2	
14	74.16	272.5～278.5		33	(6.94)	226.2～231.0		52	13.95	217.7～224.2	水田34の上半分と同一形態をとる
15	76.78	266.0～271.0		34	(30.23)	227.8～231.6	二枚分	53	11.04	213.5～217.4	
16	(130.43)	262.0～269.0		35	(45.17)	229.0～234.2		54	(12.75)	211.7～215.7	
17	(51.44)	270.0～278.0		36	－	226.0		55	(3.88)	212.7～232.0	
18	(28.98)	265.0～266.0		37	(21.60)	221.0					
19	(109.83)	269.5～271.0		38	(23.60)	218.0～221.5					

表－6　弥生時代後期の水田一覧表

番号	面積㎡	海抜m	備考	番号	面積㎡	海抜m	備考
1	(16.93)	286.5～288.5	・中世河道により削平	20	(69.23)	256.0～269.7	・水田面が低い
2	(4.97)	283.2～290.7	・中世河道により削平	21	51.87	267.5～273.6	・水口21↕39(12↕29の水口に類似する)
3	(2.00)	288.5～292.0	・中世河道により削平	22	(27.74)	272.0～283.9	・古墳時代大溝により削平
4	(29.09)	272.4～287.5	・中世河道により削平 ・足跡痕	23	(26.28)	268.4～275.5	・古墳時代大溝により削平
5	60.14	275.7～286.2	・中世河道により削平 ・足跡痕	24	(39.99)	294.6～298.5	・古墳時代大溝により削平
6	(71.56)	277.9～287.2	・中世河道により削平 ・足跡痕	25	(46.83)	294.3～301.3	・古墳時代大溝により削平 ・水口25↕42 微高地取付き部分
7	(72.49)	280.0～285.0	・中世河道により削平	26	(11.62)	283.8～288.0	・中世河道により削平
8	(0.62)	270.0～274.3		27	32.70	275.0～282.0	・水口27↕28
9	(52.56)	269.5～278.5		28	(8.51)	278.0～285.0	・水口27↕28
10	39.45	272.3～276.2	・水口10↕11	29	37.62	273.5～278.0	
11	(39.56)	274.3～278.0	・水口10↕11	30	(40.97)	274.7～278.0	
12	(47.43)	277.0～280.0	・水口12↕29(19↕35の水口とは異なる凹部状の水口)	31	(5.60)	274.7～276.0	
13	(42.66)	270.5～275.0	・足跡	32	(54.89)	274.4～278.0	
14	42.73	273.3～277.0	・水口14↕15	33	(43.65)	274.8～277.9	
15	38.96	272.3～277.0	・水口14↕15	34	(22.77)	275.8～277.4	
16	(34.56)	281.0～284.5		35	43.45	277.5～280.8	
17	(27.58)	254.5～273.8		36	40.28	273.3～276.5	
18	(53.11)	259.5～277.0		37	(44.34)	277.7～280.3	
19	71.79	272.5～278.5	・水口19↕35大畦畔を切る	38	(8.00)	276.0～280.0	

番号	面積(㎡)	海抜(cm)	備考	番号	面積(㎡)	海抜(cm)	備考
39	(64.31)	267.9～273.5	◦古墳時代大溝により削平	88	(36.48)	294.5～296.0	
40	(58.91)	271.0～275.7		89	(43.55)	297.6～300.8	
41	(51.09)	275.9～279.4		90	(21.45)	290.0～296.4	
42	—	294.0～294.8	◦水口25↕42 微高地取付き部分	91	(1.85)	290.2～295.8	◦水口91↕92
43	—	—		92	(44.89)	291.8～295.3	◦水口91↕92 ◦水口92↕93
44	—	—		93	39.71	291.9～295.2	◦水口92↕93 ◦水口93↕94
45	—	278.0～288.0		94	(75.00)	290.5～295.0	◦水口93↕94 ◦水田2枚の可能性あり ◦水口94↕95
46	(3.36)	278.0～288.0		95	(83.20)	296.0～300.0	◦水口94↕95 ◦水田2枚の可能性あり
47	(5.63)	293.4～298.4	◦水口47↕48	96	(10.66)	296.4～302.0	
48	47.09	293.3～297.7	〃	97	(43.56)	292.6～297.6	
49	52.41	293.4～298.0		98	44.32	293.2～298.3	◦水口98↕99
50	77.05	292.5～297.9	◦水口50↕51	99	43.94	293.4～299.8	◦水口98↕99 ◦水口99↕100
51	(147.25)	294.2～298.5	◦水口50↕51 ◦近・現代の攪乱により小畦畔の有無が不明であるも2枚の可能性あり。	100	(42.57)	297.5～300.5	◦水口99↕100
52	(42.00)	291.7～299.5	◦水口51↕52 微高地取付き部分	101	(95.12)	292.5～298.5	
53	(1.05)	292.6～292.9		102	(19.60)	295.4～301.4	
54	(22.53)	291.5～298.1	◦水口54↕55	103	(48.94)	289.5～293.5	
55	52.57	291.1～294.8	〃	104	140.54	289.5～299.0	◦水口104↔106
56	80.35	291.5～297.6	◦水口56↕57	105	(425.15)	288.5～298.0	◦水口105↔107
57	(153.75)	290.3～293.1	◦水口56↕57 ◦水田2枚の可能性あり	106	(199.13)	289.5～297.0	◦水口106↔104
58	(20.52)	290.0～293.1	◦水口57↕58	107	291.36	289.0～295.0	◦水口107↔105、107↔111
59	(1.48)	298.4～300.9		108	(15.27)	291.0～294.0	
60	(77.90)	296.6～305.6	◦水田2枚の可能性あり	109	(57.79)	291.5～294.5	
61	(97.50)	290.5～296.9		110	168.29	290.0～296.0	
62	(21.00)	290.0～297.0		111	188.02	290.5～296.0	◦水口111↔107
63	(1.80)	296.9～300.3		112	(5.03)	292.5～293.0	◦水口112↕113
64	50.76	296.4～303.5	◦水口64↕65	113	(24.43)	291.5～294.5	
65	49.14	295.2～300.4	〃	114	85.23	293.5～297.0	
66	(20.96)	295.6～302.0		115	63.75	—	
67	43.75	295.7～301.6		116	(32.18)	265.0～279.5	◦水口116↕117
68	41.29	297.5～301.3		117	(7.68)	265.0～284.5	◦水口117↕116
69	48.27	301.5～304.5	◦水口69↕71	118	(19.18)	293.5～311.3	
70	(53.00)	299.6～308.8		119	(3.59)	295.0～296.0	
71	45.19	298.0～304.0	◦水口69↔71、71↔73 ◦水口68↕71、「島状高まり」遺構を切る	120	(2.31)	292.0～293.0	
72	(48.00)	297.0～304.5		121	(23.26)	292.0～298.5	
73	(48.60)	297.0～301.0		122	21.44	293.5～296.0	
74	(118.90)	299.0～304.0	◦水田2枚の可能性あり	123	(32.25)	291.0～294.5	
75	(24.00)	302.5～305.5		124	(0.33)	295.0	
76	(1.84)	291.0～294.4		125	(4.92)	295.0～295.5	
77	(17.45)	282.2～295.7		126	(24.93)	291.5～294.0	
78	(42.23)	288.9～294.3		127	(12.74)	291.5～296.0	
79	(28.00)	296.0～297.0		128	(18.93)	289.0～299.0	
80	(34.20)	284.5～295.0		129	(94.61)	288.5	◦水口129↕131
81	(64.35)	284.0～299.6	◦水田2枚の可能性あり	130	(43.75)	292.0～293.5	
82	(12.00)	289.3～300.5		131	(40.14)	288.0～299.0	◦水口131↕129
83	(30.00)	296.7～299.2		132	(67.50)	289.0～293.0	
84	(30.16)	293.3～298.2		133	(1.96)	290.0～296.0	
85	(2.55)	293.5～295.0		134	(15.00)	292.0～293.5	
86	34.37	291.0～294.7	◦水口86↕87	135	(65.00)	282.3～284.5	
87	(34.87)	287.8～293.0	〃	136	(26.27)	283.2～284.5	◦水口136↕138

百間川原尾島遺跡

番号	面積(㎡)	海抜(m)	備考	番号	面積(㎡)	海抜(m)	備考
137	(15.40)	281.8～283.3		186	(67.00)	290.2～293.0	
138	(58.49)	281.4～289.6	◦水口138↕136	187	45.60	291.5～292.5	
139	(4.39)	279.0～287.7		188	46.10	291.4～292.5	
140	(11.04)	284.1～289.0		189	60.38	287.0～293.2	
141	(48.72)	282.5～290.4		190	58.37	288.2～296.8	
142	(19.87)	279.6～283.2		191	53.56	289.4～290.8	
143	(10.80)	281.0～294.0		192	124.88	287.2～293.8	◦水口192↕196 ◦農道を少し踏みこんだ凹状の水口
144	(52.20)	279.1～283.0		193	91.73	286.4～289.4	
145	(42.88)	280.0～282.0		194	68.06	285.0～286.8	
146	(6.875)	280.0～281.8		195	(6.33)	292.0～296.0	
147	(53.20)	295.0～297.0		196	(49.22)	290.8～297.0	◦水口196↔192
148	40.48	295.0～295.5		197	81.28	290.5～293.0	
149	65.19	290.0～295.0		198	(39.59)	287.2～299.5	
150	84.32	288.0～292.0		199	71.34	288.3～291.4	
151	(25.61)	293.0～294.9		200	(68.64)	286.8～289.0	
152	84.02	291.0～296.0		201	(50.50)	285.9～288.1	
153	83.91	289.7～298.0		202	(41.86)	284.1～287.8	
154	146.90	289.6～298.0		203	64.28	284.6～288.3	
155	(7.20)	284.6～286.2		204	(23.40)	280.8～285.3	
156	(22.96)	280.0～282.6		205	68.16	261.7～268.8	◦用水路から直接水をとる口
157	(28.52)	280.8～282.5		206	(22.77)	263.2～267.0	
158	(55.25)	280.7～285.5		207	(2.15)	267.3～268.5	
159	—	279.2～285.3		208	(16.64)	261.4～267.8	
160	—	277.0～285.5		209	(22.10)	270.8～278.4	◦水口209↕210 ◦稲株痕跡
161	—	276.3～279.5		210	(75.59)	264.3～271.0	◦水口210↕209、210↕211 ◦稲株痕跡
162	(69.03)	285.2～295.5		211	(59.54)	266.2～270.0	◦水口211↕210、211↕212 ◦稲株痕跡
163	(67.93)	289.6～295.0		212	55.81	269.3～270.2	
164	(108.08)	289.0～297.6		213	46.77	265.0～280.0	
165	69.15	290.8～296.9		214	(23.46)	271.7～276.5	◦水口214↕215 ◦稲株痕跡
166	47.59	291.0～295.0		215	65.07	271.0～278.0	◦水口215↕214 ◦稲株痕跡
167	86.80	289.4～295.4		216	40.94	269.0～271.7	◦稲株痕跡
168	62.45	294.0～295.4		217	64.23	269.5～276.3	〃
169	55.17	291.0～295.1		218	(45.08)	256.3～274.6	
170	62.72	292.0～295.8		219	76.70	257.2～262.8	
171	54.00	289.4～293.8		220	72.05	256.0～271.4	
172	39.88	280.2～294.2		221	73.81	259.5～267.0	◦水口221↔226 ◦水口221↕241 大畦畔を切る
173	45.54	294.4～296.0		222	(73.84)	269.6～258.0	
174	33.97	284.4～293.5		223	(60.00)	246.5～261.4	
175	38.00	290.4～294.2		224	54.45	250.0～257.3	
176	(12.99)	290.6～294.5		225	35.28	251.3～261.0	
177	(43.72)	290.9～294.8		226	48.15	254.4～266.5	◦水口226↔221
178	(11.39)	291.2～294.5		227	—	243.2～251.3	◦水田が2枚の可能性あり
179	(52.23)	292.6～295.5		228	—	243.2～251.3	
180	(3.30)	292.6～296.5		229	45.45	244.2～253.0	◦水口229↕243 大畦畔を切る
181	(43.76)	292.8～298.3		230	(59.83)	243.7～250.0	
182	48.50	292.8～295.8	◦水口182↕185 大畦畔を切る	231	—	240.0～248.2	
183	(33.60)	291.0～294.8		232	(57.55)	246.0～250.2	◦水口232↔230
184	47.02	292.9～294.2		233	(3.44)	247.9～251.5	
185	51.00	292.4～299.4	◦水口185↕182	234	(32.16)	247.1～250.3	

	面積(㎡)	海抜(cm)	備考		面積(㎡)	海抜(cm)	備考
235	(41.81)	247.0～251.0		284	55.86	249.1～258.7	
236	(0.36)	248.0～254.0		285	42.18	246.1～255.2	
237	(35.39)	249.1～255.7		286	48.60	247.0～257.0	
238	50.45	249.0～252.6		287	46.21	255.3～259.2	◦水口287↔280、287↔293
239	(55.88)	250.2～256.1		288	56.74	245.1～256.7	◦水口288↔294
240	(14.69)	248.2～253.9	◦水口240↕270 大畦畔を切る	289	(16.28)	244.5～252.4	
241	(14.58)	261.0～267.0	◦水口241↕221 大畦畔を切る	290	58.61	254.1～259.8	◦水口290↔296
242	(44.68)	254.0～268.3		291	51.66	245.1～255.1	
243	(55.96)	246.0～256.7	◦水口243↕229 大畦畔を切る	292	29.66	245.1～252.2	
244	(6.39)	248.4～249.0		293	39.99	249.3～255.2	◦水口293↔287
245	59.94	240.8～251.8		294	48.48	245.3～255.4	◦水口294↔288
246	(42.98)	241.0～250.8		295	(36.02)	239.6～245.1	
247	53.07	241.4～252.7		296	20.12	252.1～258.4	◦水口296↔290
248	(48.04)	243.6～251.6		297	(33.87)	249.1～257.7	
249	(81.98)	239.0～243.0		298	52.21	242.6～246.7	
250	(6.97)	238.0～247.0		299	29.25	239.4～244.9	
251	(20.10)	246.0～250.6		300	40.85	239.2～250.0	
252	(6.38)	242.0～245.0	◦百間川橋の橋脚基礎部	301	53.27	245.4～249.4	◦水口301↕302
253	(45.88)	242.2～248.0		302	(57.29)	238.2～244.4	◦水口302↕301
254	(5.04)	240.0～244.7		303	(8.44)	235.0～237.7	
255	(61.80)	247.8～253.0		304	(29.60)	242.8～245.4	
256	(0.45)	—		305	95.13	225.2～242.6	
257	(26.16)	244.0～247.0		306	31.93	224.8～234.4	
258	(30.40)	244.0～250.0		307	49.29	237.5～244.5	◦用水路より直接流入する水口
259	51.25	253.1～256.0		308	53.56	237.6～247.3	◦用水路より直接流入する水口 ◦水口308↔311
260	(54.75)	247.0～254.0		309	39.95	225.2～229.2	
261	(43.58)	246.4～252.0		310	50.00	230.4～234.1	
262	(54.95)	248.0～256.1		311	25.94	232.0	
263	(13.70)	250.0～253.3		312	(63.98)	229.4～244.9	
264	(50.44)	247.9～253.2		313	59.68	229.1～236.4	
265	65.96	250.5～257.2		314	64.69	231.9～237.6	
266	41.41	246.0～255.0	◦水口266↕267(2か所)	315	47.96	232.4～242.6	
267	50.70	250.5～254.5	◦水口267↕266(2か所)	316	(3.96)	234.6～236.4	
268	(38.00)	249.5～253.0	◦水口268↕269、268↔263				
269	(0.65)	249.5～252.0					
270	(48.39)	252.3～260.9	◦水口270↕240 大畦畔を切る				
271	59.60	251.9～259.1					
272	42.28	253.1～256.1					
273	52.90	248.5～254.5	◦水口273↕274(2か所)				
274	37.95	244.8～250.5	◦水口274↕273(2か所)				
275	57.72	245.5～251.8	◦水口275↕276				
276	(38.39)	246.4～251.5					
277	65.77	247.2～259.7					
278	(43.15)	245.2～252.9					
279	65.66	247.1～253.4					
280	52.28	246.0～257.9					
281	56.47	245.2～256.5					
282	(1.14)	244.3～252.5					
283	(3.80)	243.7～244.8					

第3節　銅鐸形土製品について

百間川原尾島遺跡では弥生時代の遺構・遺物を多量に検出しているが，特異な遺物のひとつに銅鐸形土製品がある。近年，全国的に出土例が増加しているが，百間川原尾島遺跡からも2点出土した。いずれも，遺構中からの出土であり，多量の土器を伴っていたことから時期の判明する貴重な例である。

1点は中須賀調査区・土壙—40から出土している。約4分の1の破片で，6.9×3.3cmの大きさである。鈕の部分と下端部は不明であるが，一方の鰭が一部残存し，内向する鋸歯文がある。身には6区画の袈裟襷文を描いている。袈裟襷文は幅がひろく，沈線で区画された内側を斜格子文でうめている。長方形の型持の孔をかなり中央寄りに配している。胎土には径1～2㎜の砂粒を含んでいる。色調は浅黄橙色を呈する。他の土器片と異るところは認められない。土壙中には多量の土器が含まれていて，時期は，百・後・Ⅱの古相（弥生時代後期中葉）に属する。

もう1点は丸田調査区・溝—49から出土した。鈕の部分を欠失している。身部の両側に鰭が付いている。高さ3.9cm，幅3.7cm，厚さ2.6cmの大きさで，中空である。文様は描かれていない。胎土には径1㎜くらいの砂粒を含み，色調は灰白色を呈する。焼成は他の土器片と変わらない。溝の埋土中から出土した土器片によって，時期は，百・後・Ⅱの古相（弥生時代後期中葉）と判断される。

岡山県内では，他に3点出土している。

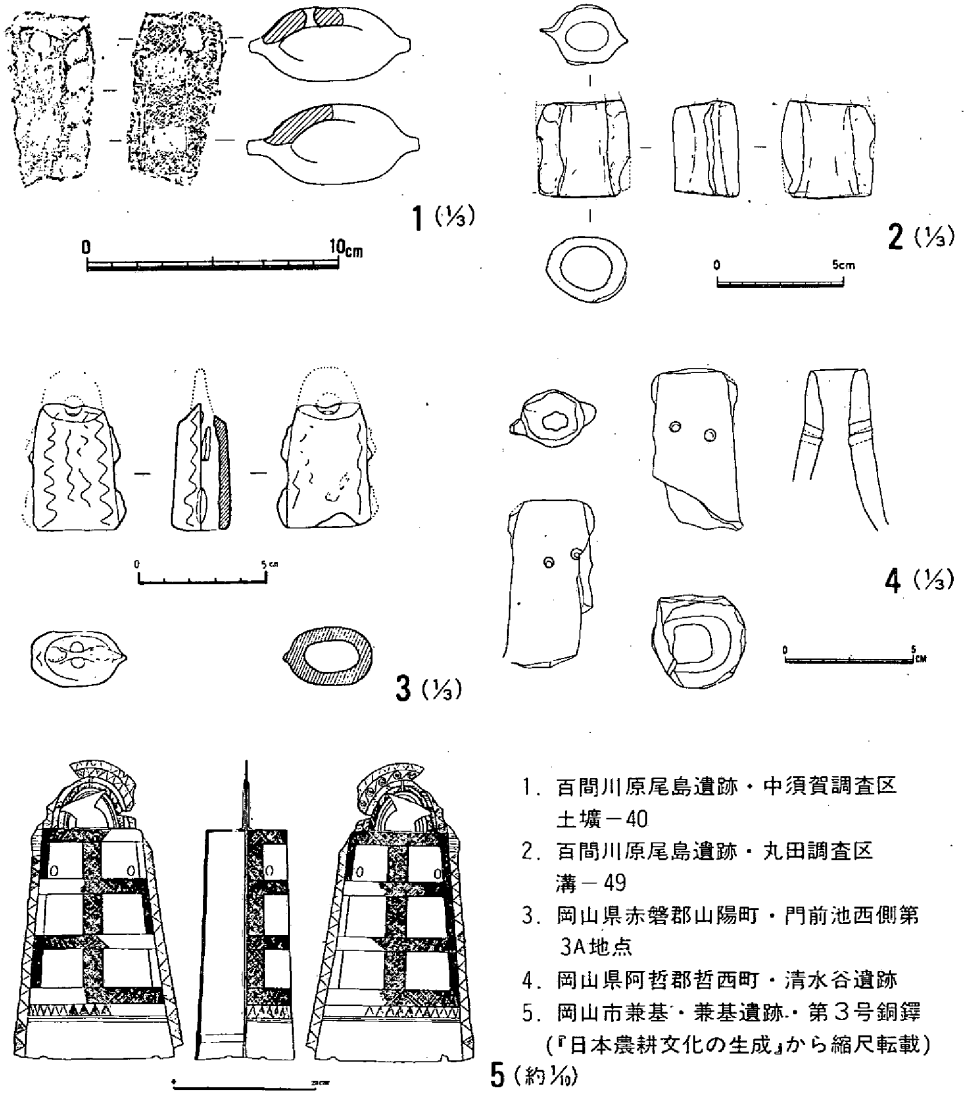
赤磐郡山陽町・門前池遺跡第3A地点では，山裾付近の傾斜した包含層中から出土した。紐を欠失しているが，身の保存状態は比較的よい。現存高4.9cm，上面（舞）2×1.9cm，下端3.4×2.3cmの大きさである。内部は中空で，上面には2個の舌釣の孔がある。鰭は明瞭でないが，両側に2個の突出部があり，飾耳を表現した可能性もある。身には両面に不整形な鋸歯文状の沈線を4条描いている。片方の面は一部消失している。不整形な鋸歯文状の文様は流水文を表現したものらしい。胎土には砂粒を含み，色調は黒褐色を呈する。土器の胎土と変わらない。時期は混在した包含層中のため決め難いが，弥生時代後期の可能性がある。

岡山県阿哲郡哲西町・清水谷遺跡では，弥生時代中期中葉の包含層中から1点出土している。鈕と下端部を欠失している。現存高6.6cm，舞2.5×2.3cm，現存幅3.2cmを測る。型持の孔は両面にそれぞれ2孔ある。直径4.5cmくらいの円形で，斜下方に向ってあけられている。鰭は明瞭でないが，身の上端部に粘土を貼り付けている。これが飾耳になるのか鰭を表現しているのかは明確でない。胎土は他の土器と同様のもので，色調は灰白色を呈する。時期は弥生

時代中期中葉に属するが，そのなかでも古い様相の土器に伴出している。

岡山市津島・上伊福遺跡では包含層中から1点出土している。身の下半部破片であるが，現存高6.1cmである。細かい部分まで詳細に表現している。鰭があり，斜格子の横帯と鋸歯文と直線を重ねた下辺横帯をめぐらす。

全国の出土例についてみると，38点が判明している。愛知県・朝日遺跡では，明確な4点の他にも鋸歯文や綾杉文などを描いた土器片があり，銅鐸形土製品の可能性を示したものが3点ある（文献18）。奈良県・四分遺跡出土の1点については，描かれた文様などから疑問点もあり，一覧表から除いている（註1）。



1．百間川原尾島遺跡・中須賀調査区
　土壙－40
2．百間川原尾島遺跡・丸田調査区
　溝－49
3．岡山県赤磐郡山陽町・門前池西側第
　3A地点
4．岡山県阿哲郡哲西町・清水谷遺跡
5．岡山市兼基・兼基遺跡・第3号銅鐸
（『日本農耕文化の生成』から縮尺転載）

第840図　岡山県内出土銅鐸形土製品

同一遺跡から数点出土した場合もある。分布は北九州から関東まで広域に分布している。北九州での発見は近年のもので，銅鐸鋳型の出土とともに注目されている。現在までの発見例は近畿地方に集中しており，中国・東海地方がこれに次いでいる。

銅鐸形土製品の年代については，遺構の中にあって，多量の土器と共伴したものでないと明確な年代を確認することができない。百間川原尾島遺跡の2点は土壙および溝内から出土し，土器片を多量に伴っていて，同一時期の土器片であることから，弥生時代後期中葉に属している。岡山県・清水谷遺跡の場合は，包含層中の出土であるが，同一時期の包含層中から出土していて，弥生時代中期中葉の初頭に属することがわかる。岡山県内出土の他の2点については詳細な年代がわからない。

全国の出土例についても，ほとんど，弥生時代中期後半から同後期に属するものである。それらのなかで若干古く弥生時代中期中葉に属するものとしては，佐賀県・川寄若宮遺跡，同・利田柳遺跡，大阪府・亀井遺跡などがある。中期前葉まで遡るものは確認されていない。

銅鐸形土製品の出土する遺構としては，竪穴式住居・井戸・土壙・柱穴・溝・包含層などである。いずれも，埋土中からの発見で，他の遺物と共伴している。出土遺構の関係から，その性格について言及したものがある。

大阪府・亀井遺跡では，井戸中から出土し，井戸には杭が打ち込まれていたことから，「銅鐸形土製品による何らかの祭祀が行われ，埋められたことが想定される」（文献10，p.367）としている。また，岡山県・下市瀬遺跡（註2）から出土した小銅鐸が井戸枠付近から出土した例との関連についても言及されている。下市瀬遺跡の場合は，井戸と小銅鐸の年代について疑問があり，参考とするには問題がある。

佐賀県内からは，4点出土しているが，「その中の3例が柱を立てるために掘られた『柱穴』の中より出土している。これは柱を建てる際，意図的に埋納したとも見られ」（文献1，p.71）るとしている。

愛知県・朝日遺跡では，4点出土しており，「いずれも遺物包含層中から検出されたもので，特別に埋納された形跡は認められない」（文献18，p.3）としている。

以上のように，その出土状況から用途を含めた性格について，「井戸と関連する祭祀に用いたもの」「柱を立てる時に埋納したもの」「特別な埋納の形跡は認められない」といった意見が出されている。全国の例を見ると出土する遺構は一定せず，遺構の場合も，他の土器片などとともに廃棄された状況とみられる。この出土状況は，分銅形土製品の場合と類似している。通常の銅鐸が集落から離れたところに埋納されているのとはまったく違った状況にある。このことは，銅鐸形土製品が集落内において，何らかの祭祀に利用されたものであろうが，使用後は他の土器片とともに廃棄されるべきものと理解される。（正岡睦夫）

表—7　銅鐸形土製品一覧表

(37以外は弥生時代)

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	高さcm	特徴	時期	文献
1	川寄若宮	佐賀県神崎郡神崎町川寄若宮	遺物包含層	(3.6)	無文・鈕	中期中頃	1
2	〃	〃　〃	柱穴状土壙	5.9	無文・完形・舞に4孔	中期後半～後期前半	1
3	川寄吉原	〃　川寄吉原	柱穴	(7.2)	人物・動物・舞に2孔	後期	1
4	利田柳	〃　利田柳	〃	(7.8)	無文・型持孔・舞に孔	中期中頃	1
5	高川原	徳島県名西郡石井町高川原	竪穴式住居	7.2	完形・袈裟襷文・鰭	中期後半～後期初頭	2
6	清水谷	岡山県阿哲郡哲西町	遺物包含層	(6.6)	無文・型持孔	中期中葉	3
7	上伊福	〃　岡山市津島	〃	(6.1)	斜格子文・鋸歯文・鰭		4
8	門前池	〃　赤磐郡山陽町	〃	(4.9)	斜格子文・鋸歯文	後期？	5
9	原尾島	〃　岡山市原尾島	土壙	(6.9)	斜格子文・鋸歯文・鰭・型持孔	後期中葉	本報告
10	〃	〃　〃	溝	(3.9)	鰭	〃	〃
11	東奈良	大阪府茨木市東奈良	遺物包含層	(5.1)	無文		6
12	瓜生堂	〃　東大阪市若江西新町	溝状遺構	5.5	完全・両面に「X」の線刻	中期	7
13	鬼虎川	〃　〃　弥生町	遺物包含層		無文・型持穴	前期～中期	8
14	〃	〃　〃　〃	〃	5.5	完形・型持穴	中期	9
15	亀井	〃　八尾市南亀井町	井戸	(3.9)	斜格子文・内面凸帯	中期後半	10
16	〃	〃　〃	溝	(8.1)	簾状文・横帯文	中期～後期	10
17	〃	〃　〃	〃	(6.4)	無文	中期中葉	10
18	〃	〃　〃	遺物包含層	(3.6)	鈕	弥生時代	10
19	池上	〃　和泉市池上町	〃	(5.7)	無文・鈕・鰭	中期	11
20	四分	奈良県橿原市四分町	溝	(4.3)	袈裟襷文・鋸歯文	〃	12
21	〃	〃	遺物包含層	6.9	完形・無文・赤色顔料	後期	12
22	大福	〃　桜井市大福町	〃	(5.5)	袈裟襷文	中期～後期	13
23	唐古・鍵	〃　磯城郡田原本町唐古	〃	(6.6)	無文	後期前半	14
24	桑飼	京都府与謝郡加悦町明石	〃	(4.2)	無文	中期～後期	15
25	上箕田	三重県鈴鹿市上箕田町字祇園田	溝	(8.8)	袈裟襷文・鰭・鈕	後期	16
26	朝日	愛知県西春日井郡清洲町朝日	遺物包含層	(8.8)	斜格子文・鈕・飾耳	〃	17
27	〃	〃	〃	(4.8)	無文・型持孔	中期後半～後期前半	18
28	〃	〃	〃	(5.2)	斜格子文・横帯文	後期前半	18
29	〃	〃	〃	(12.0)	袈裟襷文・型持孔・鈕	中期後半	18
30	西志賀	〃　名古屋市北区貝田町	〃	(3.0)	袈裟襷文・鰭・舞に2孔	中期～後期	19
31	見晴台	〃　〃　南区見晴台	〃	(7.9)	無文・鰭・鈕	後期	20
32	岡島	〃　西尾市岡島町郷西	〃	(5.0)	袈裟襷文	中期～後期	21
33	住崎	〃　〃	表面採集	(7.5)	鰭・型持孔	後期	22
34	阿弥陀寺	〃　海部郡甚目町					石黒氏教示
35	森南	〃　〃					
36	稲荷前	神奈川県横浜市港北区稲荷前	住居	(4.7)		後期	23
37	能ケ谷	東京都町田市能ケ谷	竪穴式住居	(4.0)	無文	古墳時代	24
38	つとるば	千葉県館山市沼					25

註

註1　佐原真氏の御教示による。『飛鳥・藤原宮発掘概報』9　P22・23　奈良国立文化財研究所　1979

註2　岡山県教育委員会「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3　1974

文　献

1　天本洋一・多々良友博「佐賀県川寄・利田遺跡」『日本考古学年報』31　P68～71　日本考古学協会　1978

2　石川重平『高川原遺跡調査報告書』石井町教育委員会・高川原遺跡発掘調査会　1980

3　下澤公明・浅倉秀昭「清水谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22　P185　岡山県教育委員会　1977

4　佐原真「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系日本Ⅱ』P104　平凡社　1960

5　枝川陽「門前池遺跡第2次調査」『岡山県埋蔵文化財調査報告』9　P224・225　岡山県教育委員会　1975

6　才原金弘「表3銅鐸形土製品出土遺跡一覧」『鬼虎川の銅鐸鋳型』第7次発掘調査Ⅰ　P22　東大阪市遺跡保護調査会　1981

7　杉本二郎「E地区の調査」『瓜生堂』P348　大阪文化財センター　1981

8　才原金弘「第4次調査出土の銅鐸形土製品」『鬼虎川の銅鐸鋳型』前掲　P14

9　芋本隆裕「銅鐸形土製品」『鬼虎川の金属器関係遺物』第7次発掘調査報告2　P26～29　東大阪市遺跡保護調査会　1981

10　寺川史郎「銅鐸形土製品」『亀井・城山』P367～370　大阪文化財センター　1971

11　灰掛勲『池上遺跡・池上小学校建設に伴う発掘調査』仮称池上小学校予定地内遺跡調査会　1980

12　奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ　1980

13　泉森皎・亀田博・島田隆昌『大福遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第36冊　P52　1978

14　寺沢薫「ガラス製勾玉・銅鐸形土製品・青銅製品」『昭和52年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』P12　田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編　1978

15　杉原和雄『愛宕山9号墳発掘調査報告書』京都府・加悦町文化財調査報告第1集　P9　加悦町教育委員会　1975

16　真田幸成「銅鐸形土製品」『上箕田弥生遺跡第2次調査報告』P45～48　鈴鹿市教育委員会　1970

17　伊藤秋雄「木器・土製品および金属製品」『朝日遺跡群第1次調査報告』P84～92　愛知県教育委員会　1975

18　中川真文・七原恵史「土製品」『朝日遺跡』愛知県教育委員会　1975

19　吉田富夫・紅村弘『名古屋市西志賀貝塚』文化財叢書　第19号　P32　名古屋市文化財調査保存委員会　1958

20　紅村弘「見晴台包含地」『東海の先史遺跡総括編』P35～37　名古屋鉄道株式会社　1973

21　紅村弘「岡島遺跡」『東海の先史遺跡総括編』P192・193　名古屋鉄道株式会社　1973

22　久永春男「弥生文化各説―中部（東海地方）」『新版考古学講座』4　P109　1969

23　甘粕健「横浜市稲荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』第16巻2号　P66～82　1969

24　関俊彦・宮本常一「能ヶ谷遺跡」P10　能ヶ谷遺跡調査会　1976

25　森谷ひろみ「千葉県館山市沼つとるば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌」『千葉大学教養学部研究報告B-4』P87～199　1971

第4節　中世の遺構・遺物について

百間川原尾島遺跡における中世の遺構・遺物は，おもに3～19ラインの範囲において検出された。遺構は大きくD-6～12およびD・E・F-14～19の微高地部分とそれ以外の河道部分とがあるが，河道部分は，中世のある時期（13世紀代）には完全に埋没している。おもな遺構は微高地部分に集中しており，建物・柱穴列および多数の柱穴・井戸・土壙・溝・墓などが検出され，河道部分では河道埋没後の土壙・溝などが検出されている。

これらの遺構の時期については，必ずしも明確ではないが，溝—25や井戸—30の出土遺物などから，ほぼ12世紀末から16世紀にかけてのものと考えられる。

中世の遺物は，各調査区とも出土しており，全体でコンテナ（54×34×15cm）約100箱を数えたが，川内調査区・三ノ坪調査区においては包含層中より少量出土したのみで，圧倒的に多いのは中須賀調査区および丸田調査区の西部分である。これらの遺物の出土状況をみると，遺構に伴って出土したものは，溝—25がコンテナ約13箱とやや多いものの，他のものはそれぞれ少量ずつ出土しているにすぎない。中世遺物の多くは，D・E-6～12にかけての微高地から中世河道に移る斜面に堆積している包含層中およびD-9・10，E-10・11にみられる近代の池状遺構や現代用水路内から出土している。特に中国製陶磁器の多くは，この現代用水路内から出土しており，その一部は，微高地斜面の包含層中から出土したものと接合関係が認められる。これらの包含層出土の遺物については，層位的な関係は十分に把えることはできなかった。

このように当遺跡出土の中世遺物は，必ずしも良好な出土状況にあるとは言い難いが，量的にみれば，百間川遺跡群のなかでも百間川当麻遺跡（註1）とともに，多量の出土をみている。そこで，ここでは図示した遺物を中心に若干の考察を行ってみたい（註2）。

鍋

いずれも破片のものが多く，全体の器形を知り得るものはほとんどないが，口縁部の形態には幾つかの種類が認められる。すなわち，口縁部が「く」の字状を呈するもの（Aタイプ）と，受け口状に2段に屈曲するもの（Bタイプ）および内耳をもつもの（Cタイプ）である。Aタイプのものは，さらに口縁部内面が丸味をもち，口縁端部に面をもつもの（A-1）と，口縁部内面が凹面を呈し，口縁端部を丸くおさめるもの（A-2）および口縁端部が凹面を呈し，口縁端部に面をもつもの（A-3）がある（註3）。A・Cタイプの鍋はすべて土師質で，Bタイプのものは，ほとんど瓦質である。

A-1タイプとしては，1951・2028～2033・2222，A-2タイプとしては，2163・2221・2224・2226，A-3タイプとしては，2225・5522，Bタイプとしては，1999・2217～2220，Cタイプと

しては，5498がある。

これらのうちA-1～3タイプについては，岡山県内では出土例が多いものであり，当遺跡においても鍋の中では最も出土量が多い。ところで，これらは福田氏も指摘しているように（註4）他遺跡での出土状況から同時期に併存していたと考えられ，ほぼ13世紀初めから14世紀前半のものではないかと考えられる。Bタイプは，岡山県内においては出土例の少ないものであり（註5），当遺跡での出土量も少量である。畿内地方で出土する瓦器鍋と形態上の類似点が認められるようである（註6）。時期的には13世紀から14世紀のものと考えたい。Cタイプの内耳鍋については県内では沖の店遺跡などで出土している。溝—90出土の内耳鍋は共伴遺物より15世紀後半から16世紀後半のものと考えられ，内耳鍋のタイプとしては古相を示すものと考えられる。

以上，鍋では13世紀から14世紀代のものと15世紀後半以降と考えられるものがあり，出土量としては前者が圧倒的に多い。

羽　　釜

口縁部が内傾し，肩部に鍔を貼り付け，その鍔に接して足を貼り付けたもの（1952・2025・2215）と外傾する口縁部をもち，肩部に鍔を貼り付けたもの（2214・2216）とがある。いずれも瓦質である。これらの羽釜は県内での出土例は多くはなく，当遺跡での出土量も少量である。1952・2025・2215は，畿内地方で出土している瓦器の足鍋に類似している(註6)。2024・2025は共伴遺物などより，ほぼ13世紀初頭から中頃のものと考えられる。

土師質高台付椀

従来から「早島式土器」と呼ばれている土器である（註8）。当遺跡からは，多量に出土しているが，小片となったものが多く全体の器形を知り得るものは少ない。

近年，この椀に関する考察が行われており（註2・註8），その時期に関しては，ほぼ12世紀～15世紀にかけてのものと考えられており，新しくなるにしたがって，口径・器高の縮小化がみられることが指摘されている。今回の調査においては，良好な出土状況を示すものは少ないが，ここでは，百間川遺跡群出土資料との比較を基本としながら考えてみたい。

当遺跡出土の土師質高台付椀のなかで，最も古相を示しているのは，2164・2165・2167である。体部は丸味をもつもの2164とやや直線的なもの2165・2167とがあり，高台は高く，外に踏ん張る。2164の体部内面には横方向のヘラミガキが施されている。口径14.2～15.4cm，器高5.0～5.4cm，底径6.2～6.7cmを測る。これらに類似するものは，岡山市「鹿田遺跡」（註9）や百間川当麻遺跡（註1）などで出土している。百間川当麻遺跡井戸3出土の椀（註1）に類似したものとしては2168がある。溝—25出土の，2001・2002や溝—26出土の2134・2135は，百間川当麻遺跡井戸3出土のものと，百間川長谷遺跡の土壙出土のもの（註10）との中間

的な様相を示している。百間川長谷遺跡の土壙出土のものに類似しているものとしては2169がある。1948・1953・1958・2173・5478・5479は百間川岩間遺跡土壙Ⅱ出土のもの（註11）に類似している。2176・2179・2182・5500～5502は口径10.6～11.2cm，器高3.1～3.7cm，底径3.7～5.5cmを測り，百間川岩間遺跡土壙Ⅱ出土のものよりもさらに小型化し，調整も粗雑化している。これらは，草戸千軒町遺跡における出土状況などからほぼ13世紀末から14世紀前半のものではないかと考えたい（註12）。

以上，土師質高台付椀については，おもに12世紀末から14世紀前半のものが多く出土しているといえよう。

備　前　焼

今回出土している備前焼は小片のものが多いが，かなり多量に出土しており，他の亀山焼，勝間田焼，魚住焼，常滑焼などと比べると圧倒的に出土量が多い。

これらの備前焼には，間壁忠彦氏・間壁葭子氏の編年（註13）による第Ⅰ期～第Ⅴ期までのものがあるが，特に注目されるものは，第Ⅰ期・第Ⅱ期と考えられる一群である。

ところで，第Ⅰ期・第Ⅱ期の備前焼については，間壁両氏が紹介されている窯跡灰原出土のものを除くと，報告されている例は多くなく，出土例も少ない現状である。そこで，ここではおもに間壁両氏の指摘されている第Ⅰ期・第Ⅱ期の備前焼の特徴を参考にしながら，今回出土したものを考えてみたい（註14）。

2051・2053・2055～2057・2300～2302・2304・2305・2307・2308・2316～2320・2327は口縁端部に水平の平坦面をもつもの，および，口縁端部をわずかに外方に折り曲げるものの平坦面をもつもので第Ⅰ期の甕であると考えたい。2060・2345・2347・2349・2350・2352・2356は外面にタタキメをもつ胴部片で第Ⅰ期のものであろう。2058・2363～2369は鉢で，口縁端部に面をもつものと，丸くおさめるものとがあり，器厚は1cm以下のものである。第Ⅰ期に属するものと考えたい。

2050・2054・2061・2303・2306・2309～2312・2322・2325・2329・2331は口縁端部が丸味をもって外反する甕で第Ⅱ期のものと考えられる。2059・2344・2348・2351は外面にハケメをもつ胴部片で第Ⅱ期のものと考えておきたい（註15）。2370は口縁端部は肥厚せず，斜めの平坦面をもち，内面には櫛描条線が施された擂鉢である。器厚は1cm未満で，やや内湾しており，第Ⅱ期のものと考えられる。

2052・2313～2315・2319・2321・2322・2324・2326・2327は第Ⅰ期か第Ⅱ期の甕と考えられるが，区分し難いものである（註16）。

底部外面に糸切り痕をもつ椀については全体の器形のわかるものは少ないが，これらは大きく，底部と体部の境界が明瞭なもの2045・2162・2357，および削り出し高台にちかい底部をも

つもの2359と，底部から丸味をもって体部に移るもの2044・2046・2047・2137・2361とに区分できる。第Ⅰ期と考えられる大が池南窯跡・胡那山奥窯跡・坊が谷窯跡・大明神窯跡からは前者のものが出土しており，第Ⅱ期と考えられる合が淵窯跡や耐火煉瓦上窯跡からは後者のものが出土している（註13（ア））。

2048・2049の壺については明確ではないが，第Ⅰ期のものと考えてよいかも知れない。

これら第Ⅰ期・第Ⅱ期の備前焼の色調は灰白色・灰色・青灰色・暗灰色を呈し，胎土中には1～2㎜前後の砂粒を含んでいる。

第Ⅲ期以降のものについては簡単に触れてみたい。今回図示したものの中で第Ⅲ期と考えられるものには，2328・2330・2332～2337・2343・2371～2377などがある。第Ⅳ期の前半と考えられるものには，2338～2339・2341・2378～2382・5507・5508・5509～5514・5629などがある。第Ⅳ期の後半と考えられるものには，2340・2384・5465・5496・5497・5515などがある。第Ⅴ期と考えられるものには，2383・2385・2386・5516・5517・5636・5638・6115～6117などがある。

魚　住　焼（註17）

今回魚住焼と考えられる製品は，小片のものがほとんどではあるが，コンテナ約5箱出土しており，岡山県下の遺跡における出土量としては多く，当遺跡の特色を示しているといえよう（註18）。出土している器種は甕と鉢であるが，鉢が圧倒的に多い。

2436～2440は甕の口頸部である。内外面ともヨコナデが施されているが，頸部外面には平行タタキメが残存している。2074～2076・2441～2446は甕の体部片である。外面のタタキメをみると，2074・2442・2445は粗い平行タタキメ，2075・2441・2443・2446は細かい平行タタキメ，2076・2444は長方形のタタキメが認められる。1957・1966・2077～2082・2447～2473・5518は鉢である。底部外面には糸切り痕が観察できる。図示した口縁部はほとんどが小片であり，口部については明らかではない。口縁部の形態には幾つかの種類が認められる。

これらの魚住焼は，ほぼ12世紀後半から14世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。以下，報告書(註17)に示されている編年を参考にしながら当遺跡出土の魚住焼をみてみたい。2462・2463・2473は12世紀の第3四半期のものではないだろうか。2077・2078・2082・2447～2453・2455・2456などは12世紀の第4四半期のものではないだろうか。2079・2457・2458は13世紀代のものではなかろうか。2459～2461・2464～2471・5518は，ほぼ14世紀代のもので，一部15世紀初頭に下るものもあるかも知れない。2074・2436・2437・2440・2442・2446は12世紀後半，2075・2443・2446は13世紀代のものではないだろうか。しかしながら，これらは包含層出土のものが多く，共伴遺物から年代をおさえることはできなかった。

中国製陶磁器

今回出土した中国製陶磁器はコンテナ約4箱を数え，百間川遺跡群のなかでは最も多量に出土している。出土した中国製陶磁器には，白磁壺・碗・皿，青白磁合子，青磁壺・碗・皿，褐釉壺，染付などがあり，これらのうち量的に多いのは白磁碗であり，その中でも白磁碗Ⅳ類（註20（エ））が最も多い（註19）。

これらは，ほぼ11世紀から16世紀にかけてのものであると考えられる（註20）。

11世紀代に位置づけられるものとしては，2083・2084・2497～2501がある。出土量はわずかである。11世紀後半から12世紀前半に位置づけられるものとしては，2495・2502～2507・2516・2656～2660・5499・6112がある。出土量は少ない。12世紀前半から13世紀代に位置づけられるものとしては，2085～2121・2138・2495・2496・2508～2515・2517～2643・5547・6114がある。出土量が最も多い。12世紀後半から14世紀前半に位置づけられ，特に13世紀前半に出土例の多いものとしては，2122～2127・2661～2675・2685～2705・6113がある（註21）。出土量は少ない。13世紀後半から14世紀代に位置づけられるものとしては，2644～2650・2676～2684・5634がある。出土量は少ない。5461は14世紀中葉から15世紀後半，2708・6111は15世紀後半から16世紀中葉頃まで出土し，16世紀前半から中葉に出土例の多いものである（註22）。5495は15世紀後半から16世紀後半に多く出土するものである（註23）。2709は15世紀後半，2653～2655，2707はほぼ明代のものと考えられる。いずれも出土量はわずかである。

瓦器の椀・小皿についても多く出土しているが，小片のものが多く全体の器形の判明するものはわずかである。これらのうち，2034は尾上実氏の編年（註24）のⅢ-1類に，2236はほぼⅡ-3類に，2240はほぼⅢ-2類に相当するのではなかろうか。全体としても，氏の編年のⅡ-3～Ⅲ-2類にかけてのものが多く，ほぼ12世紀後半から13世紀前半のものが多いといえよう。

亀山焼（註25）は今回コンテナ約5箱出土しているが，いずれも小片で全体の器形の判明するものは，わずかに2069の鉢のみである。亀山焼の編年については未だ十分に確立しているとは言えない現状であるが（註26），今回出土した亀山焼のなかでは，溝一25出土のものが他の共伴遺物の年代からほぼ13世紀前半から中頃のものと考えられる。また，2387～2397・2400～2424などは13世紀から14世紀代のものではないだろうか。また，2398・2399・2425・2426・5520・5521などは15世紀以降のものではないだろうか。いずれにせよ亀山焼についての年代については，明確ではない。

その他，少量ではあるが，勝間田焼2066～2068・2427～2434（註27）や常滑焼2070～2073・2474～2494が出土している。2070・2484は12世紀後半から13世紀前半に，2485は13世紀後半から14世紀代のものではないかと考えられる（註28）。さらに，土師質の皿・小皿なども出土しているが，今回は割愛したい。

土器・陶磁器以外の中世の遺物としては土製品（土錘・円板状土製品・硯）・石製品（石

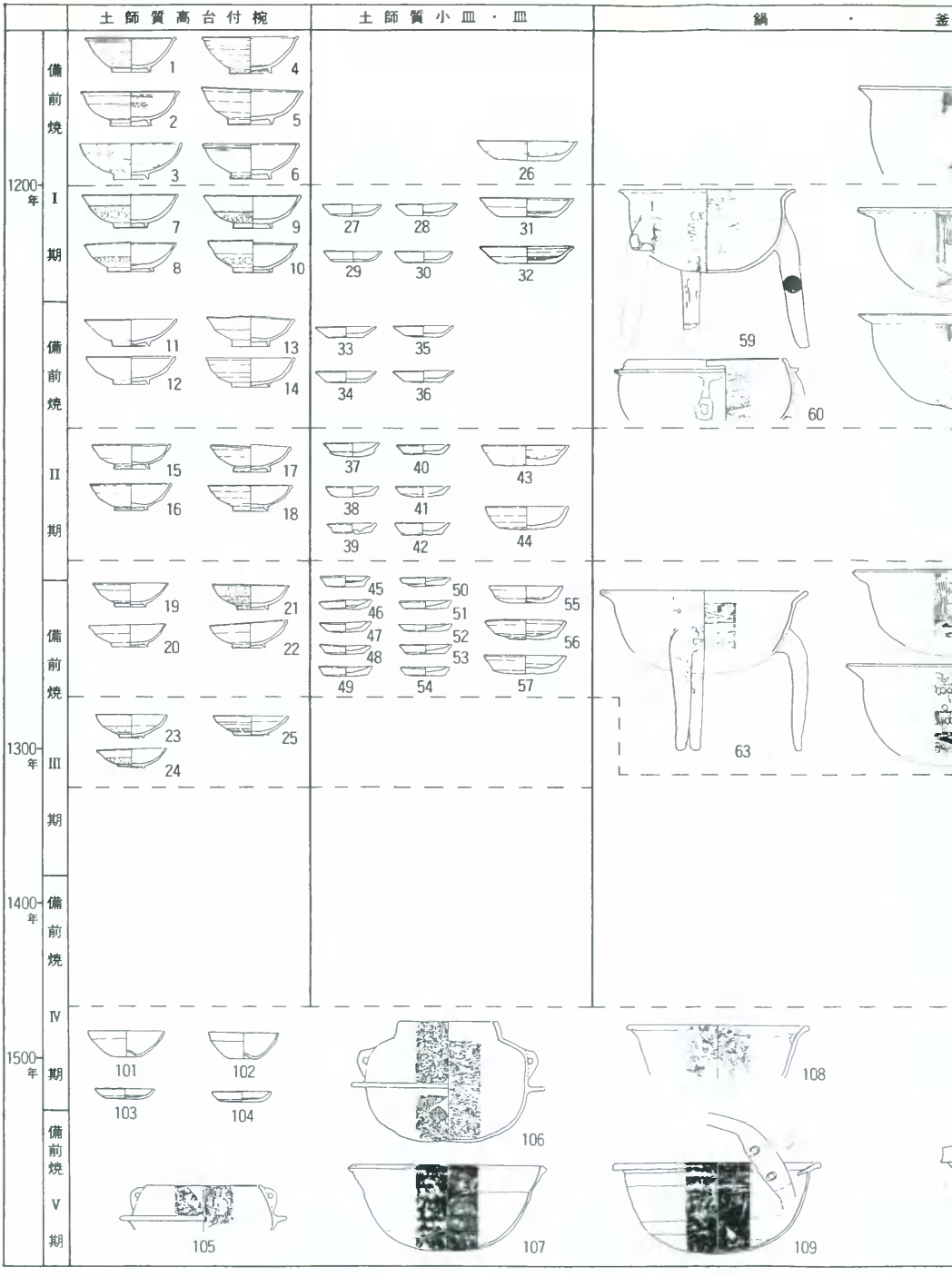
錘・砥石・石鍋・硯）・鉄製品（釘・鎌・鎹・掛金具）が出土している。これらについては各一覧表を参考にしていただきたい。なお，石鍋については岡山県下における出土遺跡地名表を作成した（表—8）。

以上，中世遺物のうち土器・陶磁器を中心に若干の考察を行った。すでに述べたように，今回は量的には多いものの良好な出土状況を示していないため，推論に基づく点が多く十分とはいえないが，これまでに報告されている百間川遺跡群出土の中世遺物とあわせた大まかな編年表を示しておき，今後の考察の手がかりとしておきたい（表—9・10）。ここまで，おもな遺物についてその年代等を考えてきた。最後に，これらをもとに再度遺跡をふり返ってみたい。今回調査した百間川原尾島遺跡のうち，川内調査区・三ノ坪調査区・丸田調査区の東部分に関しては，出土遺物も少量であり，遺構も小さな溝が検出されているにすぎないため，中世の段階では「集落」が形成されていたとは考えられず，水田に利用されていたのではないかと考えられる。一方，中須賀調査区と丸田調査区の西部分については建物や井戸などが検出されており，「集落」が形成されていたことが明らかである。ところで，この2つの調査区の出土遺物をみると全体的な傾向として中須賀調査区が12世紀末から13世紀代のものが多いのに対して，丸田調査区では14世紀～16世紀にかけてのものが多いことが指摘でき，同時期に併存していたものとは考え難い。また，河道については13世紀の中頃から後半にはすでに埋没していたものと想定できる。今回調査した部分は「中世集落」のごく一部にすぎないと考えられるが（註29），その出土遺物をみると，中国製陶磁器や瓦器・魚住焼など他地域で生産されたものが多いこと，および11世紀から16世紀にわたるものがあることなどが特徴的であり，かなりの規模の「集落」が営まれていたことが伺えるが，その性格については十分に把えることはできなかった（註30）。

（平井泰男）

表—8　岡山県内石鍋出土遺跡地名表

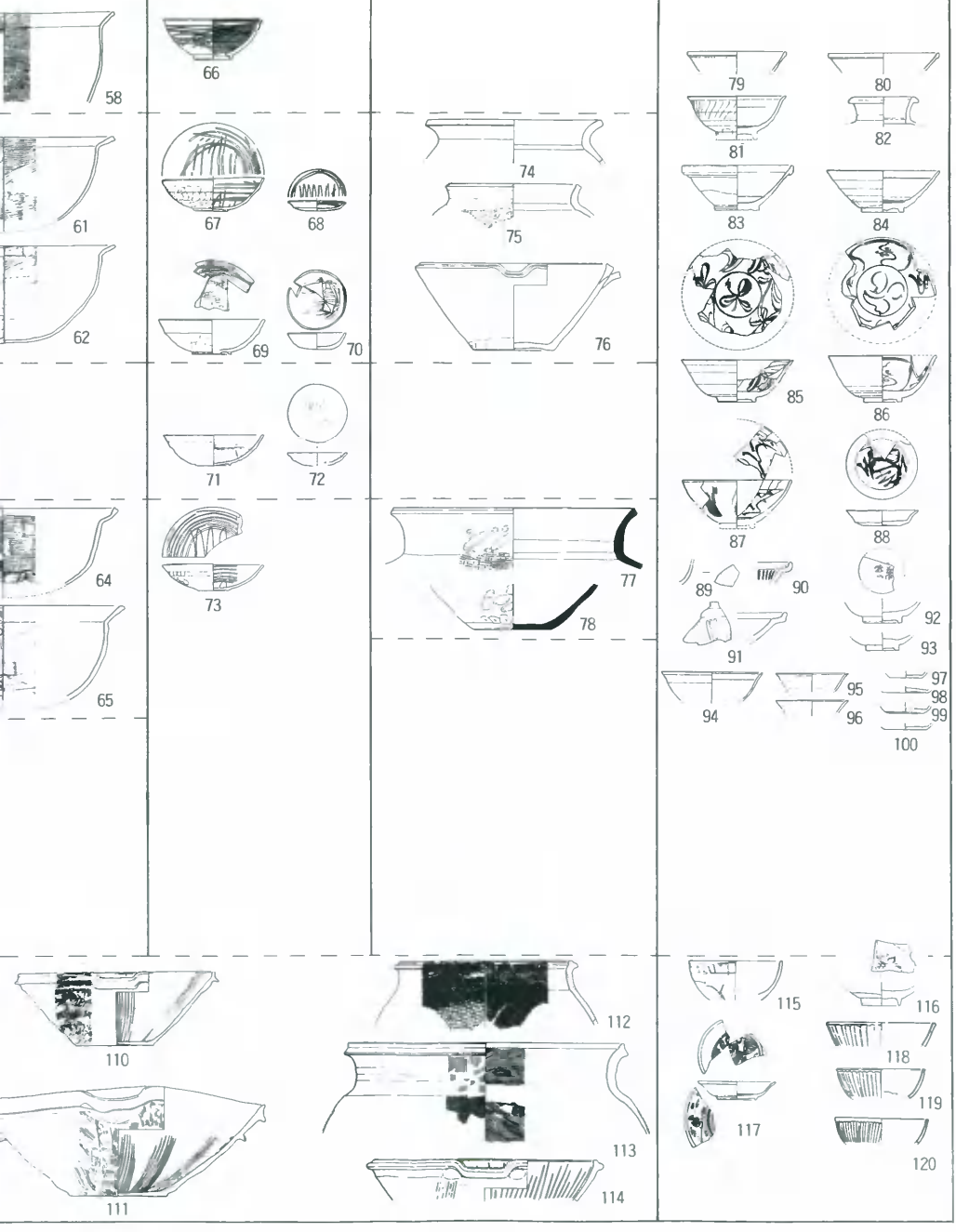
番号	遺跡名	所在地	出土数	文献
1	百枝月廃寺	岡山市百枝月		『上道町史』1973
2	酒津・水江遺跡	倉敷市酒津，水江	1	『倉敷考古館研究集報』第8号，1973
3	川入遺跡	岡山市川入	1	『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977
4	延寿寺跡	岡山市上土田	1	『足守庄荘園遺構緊急調査延寿寺跡第2次発掘調査報告』　1979
5	曾原西A遺跡	倉敷市曾原	1	『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』36　1980
6	百間川当麻遺跡	岡山市米田	1	『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52　1982
7	鹿田遺跡	岡山市鹿田町		『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983
8	上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡	岡山市伊福町	1	ノートルダム清心女子大学カリタスホール建設事業，埋蔵文化財発掘調査委員会，中野雅美氏の教示。
9	百間川原尾島遺跡	岡山市原尾島	11	本報告

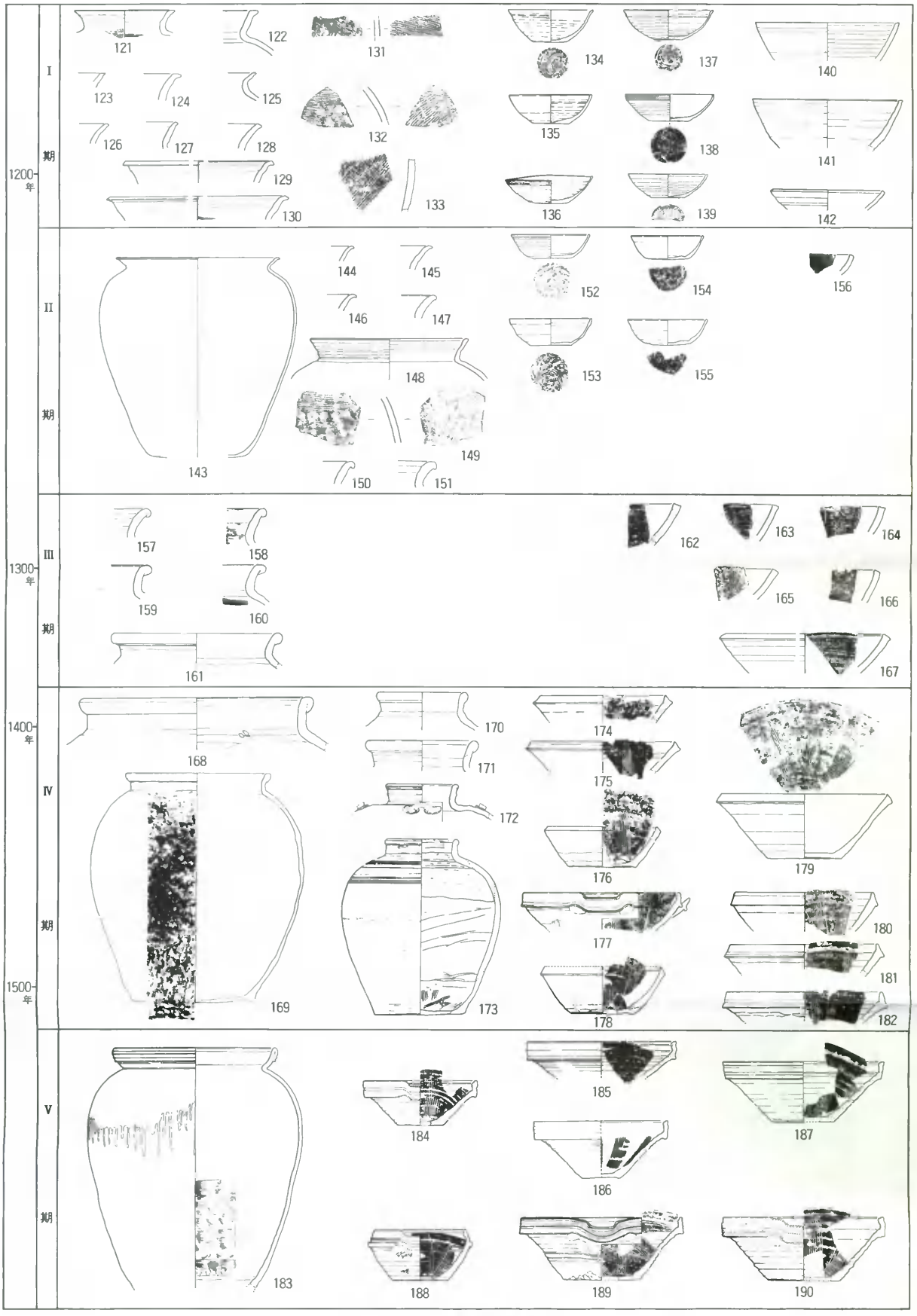

土師質高台付椀
土師質小皿・皿
鍋・釜
1200年
1300年
1400年
1500年
備前焼
I期
II期
III期
IV期
V期
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
59
60
63
101
102
103
104
105
106
107
108
109

瓦器椀・小皿

亀山焼

中国製陶磁器





表－10 備 前 焼 編 年 表

折込10

編年表について

(1) 表一10については，百間川遺跡群出土の備前焼のみを掲載しているが，表一9については，百間川遺跡群出土の資料に上東遺跡（註31）・川入遺跡（註32）・沖の店遺跡（註7）出土の資料を加えて掲載している。

(2) 縮尺は，表一10の一部（**143・169・183**）が1/16であるのを除いて，他は1/8である。

(3) 表一9について

土師質高台付椀（以下椀と呼ぶ）は，百間川当麻遺跡（以下百間川遺跡群については百間川を略す）井戸一3（註1(ア)）を1つの基準として，これより小型化するものについて，当麻遺跡溝一30（註1(イ)），今回の溝一26出土のタイプ，長谷遺跡土壙のタイプ（註10），岩間遺跡土壙Ⅱ出土のタイプ（註11）に今回出土している口径11.0cm前後，器高3.5cm前後のタイプ，および，当麻遺跡井戸一3より口径・器高とも大きく，高台も高く，体部にヘラ磨きの施されている一群を想定した。この一群については，体部が内湾し，器壁のやや厚いものや薄手で体部がやや直線的なものなどがある。これらに類似したものとしては，12世紀後半と考えられている沖の店遺跡1号窯出土の椀があり（ただし，この椀は，器壁が厚く，高台底に面をもち，成形技法の点でも底部に糸切り痕がみられるなどの相違点をもつ），これらの一群もほぼ12世紀後半から末頃に位置づけられるのではなかろうか。そして，この段階では各種の形態をもつものが共存しており（地域差を示すのかも知れない），当麻遺跡井戸一3のタイプから定形化してくるのではないだろうか。

土師質の小皿・皿については，先に想定した椀のタイプの共伴関係から位置づけた。しかしながら，これら土師質の小皿・皿については，大まかな傾向として口径，器高の縮少化はみられるものの，各段階でのバラツキが著しく，椀にみられるようにタイプを想定するのは未だ困難である。成形技法においても，当麻遺跡井戸一3タイプから岩間土壙Ⅱタイプまでに大きな変化は認められない。底部糸切りの小皿については沖の店遺跡でみられるように，15世紀後半には確実に出現しているものの，その初現については明確ではない。

一方，これらと共伴する土鍋については，すでに指摘されているように（註4），ある段階の一括資料のなかに幾つかのタイプの土鍋が共存しており，現状ではそれらの時期的な変化を明確にするには至っていない。土鍋については，百間川遺跡群において全体の器形の判明するものがほとんどないため，今回は上東遺跡P-123およびH-9出土のもの（註31）を，その共伴する椀を参考にして編年表に掲載した。

今回少量出土している瓦質の鍋・羽釜類については，これまで県下においては出土例の少ないものであり，今回調査した溝一25出土のもののみ掲載した。

瓦器については，畿内の研究者によって編年が確立しつつあるが，県内においては椀などとの共伴関係を把え得る資料は未だ多くない。そうした中で当麻遺跡井戸一3は重要な基準となり得るものである。編年表ではこれを基準にして，百間川遺跡群出土の各タイプのものを位置づけたが，先の当麻遺跡井戸一3や今回の溝一25などを除くと良好な共伴関係を示していないため，横の関係は十分ではない。

亀山焼についてはさらに不十分である。13・14世紀代のものと，ほぼ15世紀後半以降のものとの区分は可能であるが，その器種構成や時期的な変化など不明な点が多い。ここでは県下においてその共伴関係の推定できる報告された数少ない資料のうち，当麻遺跡P-14（註1(ア)），今回の溝一25，および川入遺跡P-9（註32）出土のものを掲載したにとどまる。

中国製陶磁器についても，良好な共伴関係を把え得る資料は少ないといえる。その中でわずかながらも共伴関係のわかるものとして，当麻遺跡土壙墓出土の白磁碗Ⅳ-2類，川入遺跡P-9出土の龍泉窯系青

磁碗Ⅰ-4類（註32），当麻遺跡井戸－7出土の白磁碗Ⅳ-2類（註1(イ)），当麻遺跡土壙－30出土の白磁碗Ⅳ類・白磁皿（註1(イ)），当麻遺跡溝－30出土の白磁碗Ⅳ類・Ⅴ類（註1(イ)），川入遺跡井戸－201出土の白磁碗Ⅳ・Ⅴ類（註33），奥坂遺跡№157溝出土の白磁碗Ⅳ類（註34）および今回の溝－25出土の白磁碗Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類，白磁皿Ⅲ類，龍泉窯系・同安窯系の碗・皿・褐釉，溝－26出土の白磁碗Ⅳ類，井戸－30出土の青磁雷文帯蓮弁文碗，溝－90出土の染付皿がある。中国製陶磁器については，その年代幅が広く，共伴遺物との関連が重要になると思われる。今回，編年表に掲載するにあたっては，百間川遺跡群における共伴関係を参考にしながらも各タイプの中国製陶磁器それぞれの出土例の多いと考えられている年代に近いところに位置づけるにとどまっている。

また，15世紀後半以降と考えられるものについては，当麻遺跡において備前焼は多く出土しているものの，それ以外の遺物については必ずしも明確ではない。しかしながら，13世紀・14世紀のものと大きく様相が異なることは伺える。今回は，15世紀後半から16世紀前半と考えられている沖の店遺跡の資料を掲載し参考としている。魚住焼・勝間田焼などについては良好な共伴関係を示すものが少ないため割愛している。

以上述べてきたように，当編年表は不十分なものであり，今後，さらに検討を加えてゆきたい。

(4) 表－10の備前焼の時期区分については，間壁忠彦氏の編年に準拠している（註13）。また，当麻遺跡出土の備前焼については島崎東氏のまとめを参考にしている（註1(ヴ)）。

＜編年表に掲載した図＞

- 百間川原尾島遺跡　中須賀調査区　中世包含層出土遺物（本報告）
  1，2，79～82，84～100，116，121，123，124，126～132，140，142，144～147，149～151，156～160，163～167，170，176，179，180
- 百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　井戸－7（註1(イ)）
  3
- 百間川当麻遺跡　低水路調査区　井戸－6（註1(イ)）
  4，26，138
- 百間川原尾島遺跡　新田サイフォン調査区　D-2（註29）
  5，6，58，136
- 百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　井戸－3（註1(ヴ)）
  7～32，67，68，133，137
- 百間川原尾島遺跡　中須賀調査区　溝－25（本報告）
  11，12，33～36，60，69，70，75，76，122，125，143，148
- 百間川原尾島遺跡　中須賀調査区　溝－26（本報告）
  13，14
- 百間川長谷遺跡　土壙（註10）
  15～18，37～44，153～155
- 百間川岩間遺跡　土壙Ⅱ（註11）
  19～22，45～57
- 百間川原尾島遺跡　丸田調査区　中世包含層出土遺物（本報告）
  23～25，171
- 上東遺跡　P-123（註31）
  59，61，62

◦上東遺跡　H-9（註31）
63～65
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　A地点の遺構に伴わない遺物（註1(ア)）
66，141
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　土壙—30（註1(イ)）
71，72
◦百間川岩間遺跡　Ⅳ区出土遺物
73，134，186
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　P-14（註1(ア)）
74
◦川入遺跡　P-9（註32）
77，78
◦百間川当麻遺跡　低水路調査区　土壙墓—1（註1(イ)）
83
◦沖の店遺跡　2区溝，4区包含層（註7）
101，102，105，107，109～111
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　D-27（註1(ア)）
103，104，161
◦百間川原尾島遺跡　丸田調査区　溝—90（本報告）
108，117
◦百間川原尾島遺跡　丸田調査区　井戸—30（本報告）
115
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　井戸—2（註1(ア)）
118，114，120，162，174，175，178，182，184，185，187～190
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　D地点の遺構に伴わない遺物（註1(ア)）
119
◦百間川原尾島遺跡　中須賀調査区　柱穴内出土遺物（本報告）
135
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　B地点の遺構に伴わない遺物（註1(ア)）
168
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　中世墓（註1(ア)）
169
◦百間川当麻遺跡　右岸用水路調査区　D-21（註1(ア)）
172，177，181，183
◦百間川当麻遺跡　丘陵部調査区　堀—2（註1(ア)）
173

註

註1　(ア)福田正継他「百間川当麻遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　岡山県教育委員会　1981
(イ)井上弘・岡田博・二宮治夫・平井泰男・光永真一「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52　岡山県教育委員会　1982

註2　百間川遺跡群出土の中世遺物についてはすでに福田正継氏によって百間川当麻遺跡出土の土器を中心とする考察が行われている。(福田正継「中世の土器について」前掲註1(ア)。以下福田氏の考察をふまえながら考えてみたい。

註3　土師質鍋の分類については，すでに三蔵畑遺跡出土のものについて行われている。(「三蔵畑遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』6　岡山県山陽町教育委員会　1976)

註4　前掲註2，P463

註5　岡山県内で出土している遺跡としては，大海廃寺（正岡睦夫・岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』25　1978）や二宮遺跡（高畑知功・二宮治夫「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』28　1978）や久米廃寺（栗野克己他「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』24　1978）や法事坊遺跡（橋本惣司「法事坊遺跡」『稼山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979）などがあり，県北部に多いといえよう。

註6　(ア)菅原正明「畿内における中世土器の生産と流通」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会　1983
(イ)菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所 創立30周年記念論文集　文化財論叢』同朋舎　1982

註7　伊藤晃・浅倉秀昭「沖の店遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会　1981

註8　「早島式土器」に関する研究史を整理したものとして，神谷正義「高台付椀に関する二・三の整理」(『三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　1981）がある。

註9　光永真一「岡山大学医学部附属動物実験施設新営工事に伴う排水管等布設工事に伴う立合調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983

註10　井上弘・浅倉秀昭「百間川長谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　1981

註11　下澤公明・江見正己「百間川岩間遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　1981

註12　草戸千軒町遺跡における第Ⅱ期の遺構から出土したものに類似したものが多くみられ，時期推定の参考とした。(松下正司他『草戸千軒町遺跡』福山市教育委員会・広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1966・1969～1981)

註13　(ア)間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」(1)～(3)『倉敷考古館研究集報』第1号・第2号・第5号　1966～1968
(イ)間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集3　日本中世』小学館　1977
(ウ)間壁忠彦「遺跡調査と備前焼」『陶説』第333号　日本陶磁協会　1980

註14　前掲註13(ア)～(ウ)の他に下記の文献を参考にした。
伊藤晃・上西節雄他「備前」『日本陶磁全集10』中央公論社　1977

註15　胴部内外面の調整は，今回出土したものをみても各種あることが明らかであり，これらを第Ⅰ期・第

Ⅱ期に区分するには未だ報告例の少ない現状では難しいと考えられる。**2059・2344**などのハケメはかなり粗いもので第Ⅰ期に含めた方がよいかも知れない。

註16　**2314・2315・2327**は胡那山奥窯址，**2319**は大が池南窯址にやや類似したものがみられる。（前掲註13（ア））これらは，口縁端部に丸味をもたないという点からみれば第Ⅰ期に入るものと考えてよいかも知れない。

註17　大村敬通・水口富夫「魚住古窯址群」『兵庫県文化財調査報告書』第19冊 兵庫県教育委員会　1983
尚，今回出土したものについては，水口富夫氏に実見していただき，多くの御教示を得た。

註18　岡山県下において，これまでに魚住焼と考えられる製品が報告されている遺跡は10数遺跡を数えると思われる。これらには図上で判断したものも多いが，実見したものとしては，桃山遺跡出土の甕（田仲満雄他「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』12　1976，P385）や百間川岩間遺跡出土の鉢（註11のP131）や百間川原尾島遺跡出土の鉢（江見正己他「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』42　1981　P42）や沖の店遺跡出土の鉢（註7のP103）および助三畑遺跡出土の甕・鉢（1981・1982年度邑久町教育委員会発掘調査）などがある。

註19　今回図示したものは小片のものが多く，同一個体のものも含まれているものと思われる。

註20　中国製陶磁器の年代については，生産された年代，日本に輸入された年代，使用年代などを考慮しなければならないため，共伴遺物との関係が重要になると思われるが，今回のものはそうした点は不明なものが多いため，あくまで大まかな年代を推定するにとどまる。年代の推定には以下に掲げる文献をおもに参考にした。

(ア)亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁の分析」『考古学雑誌』第58巻第4号　日本考古学会　1973
(イ)亀井明徳「平安期輸入陶磁器の名称と実体」『考古学雑誌』第61巻第1号　日本考古学会　1975
(ウ)亀井明徳「宋代の輸出陶磁　日本一出土品を中心として一」『世界陶磁全集12　宋』小学館　1977
(エ)横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館　1978
(オ)亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攻』　鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会　1980
(カ)亀井明徳「14・15世紀の貿易陶磁一とくに日本出土の中国陶磁一」『貿易陶磁研究』No.1　日本貿易陶磁研究会　1981
(キ)森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会　1982
(ク)上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会　1982
(ケ)小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会　1982
尚，今回出土したものについては，九州歴史資料館の亀井明徳氏に実見していただき，多くの御教示を得た。

註21　これらのうち，**2666～2671**の龍泉窯系劃花文青磁碗については，13世紀初頭から前半までという年代が考えられている。（鈴木重治「中世墓に副葬された青磁碗の検討」『同志社大学考古学シリーズⅠ　考古学と古代史』　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1982）

註22　前掲註20（オ）
岡山県下において，青磁細蓮弁文碗の報告されている遺跡としては，富山城跡（『富山城跡第2次調

査報告』岡山市教育委員会 1969，P34）や忠田山遺跡（福田正継・中野雅美「忠田山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』23 1978，P586）や百間川当麻遺跡（註1(ア)のP267・298）がある。

また，青磁雷文帯蓮弁文碗の報告されている遺跡としては，植木遺跡（田仲満雄「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 1976，P376）や和田遺跡（伊藤晃・浅倉秀昭「和田遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981，P38）や沖の店遺跡（同前，P120）がある。

註23 前掲註20（ケ）

註24 尾上実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』 藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会 1983

註25 亀山焼については次の文献をおもに参考にした。

(ア)西川宏「亀山焼の再評価」『考古学研究』第11巻3号 1965

(イ)大村敬通・伊藤晃「山陽地方の古代・中世窯」『日本やきもの集成9 山陽』 平凡社 1981

註26 こうしたなかで，草戸千軒町遺跡における他の遺物との共伴例や沖の店遺跡での出土例（前掲註7）などから，今回出土したものは大きく13・14世紀代のものと15世紀後半以降のものとに区分することができるであろう。

註27 勝間田焼については，前掲註25(イ)および岡山県史編纂室の伊藤晃氏より御教示を得た。

註28 赤羽一郎「常滑一知多半島古窯址群一」『世界陶磁全集3 日本中世』 小学館 1977

註29 今回の調査区以外に，1977年度に調査された百間川原尾島遺跡左岸用水調査区・新田サイフォン調査区・新田樋門調査区においても中世の遺構・遺物が検出されている。（江見正己他「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 1980）また，1983年度に実施されているA-9・10，B-9・10，C-9・10の調査区においても中世の建物・井戸・溝・土壙墓が検出されており，遺跡の広がりを伺うことができる。

註30 古文書や地名などからの検討も十分に行うことはできなかったが，永山卯三郎氏によると，当調査区の南東約500mに位置する「小島神社・八幡雄島神社」(「八幡雄島神社」は元，岡山市国富瓶井山安住院にあったとされている。また，瓶井山安住院は雄島別宮の神宮寺である）が，石清水八幡宮の別宮の1つである「雄島別宮」に比定されており，その性格を考えるうえで参考になるかも知れない。（永山卯三郎「第40章 岡山県下に散在せる石清水八幡宮の別宮及び宮寺領」『岡山県通史』 1930）

さらに，当調査区から約2km北東には，「備前国府」推定地があり，また当地域は中世を通じて交通の便のよい地域であったことが知られている。

註31 伊藤晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 第2集 岡山県教育委員会 1974

註32 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977

註33 枝川陽・正岡睦夫・大谷猛「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 第2集 岡山県教育委員会 1974

註34 高畑知功・福田正継他「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 岡山県教育委員会 1983

この節をまとめるにあたっては，中国製陶磁器について九州歴史資料館の亀井明徳氏，魚住焼について兵庫県教育委員会の水口富夫氏，また全般にわたって岡山県史編纂室の伊藤晃氏より多くの有益な御教示をいただいた。記して感謝します。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56

百間川原尾島遺跡 2

（本　文）

1984 年 3 月 20 日 印刷
1984 年 3 月 20 日 発行

編 集 建設省岡山河川工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会
岡山市内山下 2 － 4 － 6

印 刷 山 陽 印 刷 株 式 会 社
岡山市中山下 2 － 5 －50

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 56

百間川原尾島遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 V

(表・図版)

1984
建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 56

百間川原尾島遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 V

(表・図版)

1984
建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

中須賀調査区遺構・遺物一覧表

表－11　中須賀調査区竪穴式住居一覧表

細別／番号	種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	主柱穴	柱間距離(cm) 最大	柱間距離(cm) 最小	中央穴 プラン	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	焼土 焼土	焼土 壁	壁溝	付属施設 ベッド状(イコウ)	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
1	竪穴式住居	円形	580	580	－	4	290	260	長方不整円	70×60 150×70	43 8	－	－	○	－	－	－	－	N－10°－E	百・後・Ⅳ	D－8	甕、鉢、高杯、製塩土器
2	〃	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	－	百・後・Ⅲ	〃	
3	〃	隅丸方形	440	425	14.7	4	180	150	円 楕円	50 90×40	49	－	－	○	－	－	－	－	N－10.7°－E	〃	D－8 D－9	甕、鉢、製塩土器、土玉
4	〃	方形	－	－	－	－	360	－	－	－	－	－	－	○	－	○	－	－	N－63.5°－W	〃	D－9 D－10	壺、甕、鉢、高杯、台付鉢、直口壺、銅鏃、鉄鏃、鏃、石錘
5	〃	不整台形	530	455	16.5	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	－	百・後	D－9	
6	〃	隅丸長方形	675	605	32.2	4 5 4	310 300 280	280 230 210	不整長方	100×90 44×38 44×35	55 40 30	－	－	○	－	－	－	－	N－12.2°－E —— N－0.6°－E	百・後・Ⅲ	〃	壺、甕、鉢、高杯、小型土器、製塩土器、敲石、砥石、石鏃、鉄鏃、ガラス小玉、紡錘車
7	〃	円形	800 725 690	800 725 690	50.2 41.4 37.4	5 5 －	420 330 －	360 270 －	楕円 不整 楕円 不整	105×50 105×90 150×105 140×120	52 65 53 25	－	－	○	○	－	－	－	－	百・後・Ⅳ	〃	壺、甕、鉢、高杯、手焙、製塩土器、鉄鏃、勾玉、紡錘車
8	〃	隅丸台形	540	510	21.7	4	250	190	不整	95×80	37	－	－	○	－	－	－	－	N－72.3°－W	百・後・Ⅲ	〃	壺、甕、鉢、高杯、製塩土器、砥石、敲石、鉄器、紡錘車、土錘
9	〃	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	〃	E－9	甕、鉢、高杯
10	〃	台形	450	310	13.5	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	？	－	－	－	〃	D－10	壺、甕、鉢、高杯、器台、製塩土器、鉄器
11	〃	円形	800	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	－	〃	E－10	長頸壺、甕、鉢、高杯、紡錘車、鉄器片
12	〃	不整長方形	342	261	7.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	百・後・Ⅱ	D－10	甕、鉢、石錘

細別 / 番号	種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	主柱穴	柱間距離(m) 最大	柱間距離(m) 最小	中央穴 プラン	中央穴 幅(m)	中央穴 深さ(m)	焼土 焼土	焼土 壙	壁 体溝	付属施設 ベッド状イコウ	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
13	竪穴式住居	円形	775	—	—	5 7	220 270	210 190	不整	115	40	1	—	○	—	○	—	—	—	百・後・I	D－10 E－10	壺、甕、鉢、蓋、高杯、台付鉢、器台、土製勾玉、管玉、ガラス玉、土錘、石庖丁、石鏃、石槍
14	〃	方形	253	240	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	百・後・II	D－10	壺、無頸壺、甕、鉢、台付鉢、高杯
15	〃	円形	600	600	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	百・後・III	E－11	甕、高杯
16	〃	不整円形	580 820	560 760	50.2	5 6	245 325	185 260	不整円	85×70	45	—	—	○	—	—	—	—	—	百・後・III	D－11	壺、甕、高杯、鉢、製塩土器、砥石、敲石、紡錘車、小玉、管玉、銅鏃、鉄器
17	〃	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	古墳時代	D－7	
18	〃	方形	664	—	—	4	350	315	—	—	—	—	—	○	—	—	○	北辺	N－8°－E	5c末～6c初	D－7 D－8	須恵器（杯、蓋） 土師器（壺、鉢）
19	〃	方形	—	—	—	4	295	245	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N－53°－E	〃	D－8 E－8	土師器（鉢）
20	〃	方形ぎし長方形	400	—	—	4	220	200	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	N－28°－E	〃	D－8	須恵器（鉢） 土師器（甕、高杯、甑）
21	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	〃	〃	須恵器（杯） 土師器（高杯）
22	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	〃	D－9	須恵器 土師器
23	〃	長方形	370	330	9.9	4	135	115	—	—	—	—	○	○	—	—	—	—	N－32.5°－E	〃	〃	須恵器（壺、杯）、 土師器（高杯） 鉄器
24	〃	台形	—	520	—	4	300	220	—	—	—	—	—	○	—	—	○	北西辺	N－48.5°－W	〃	〃	須恵器（壺、甕、杯、高杯、鉢、鉢）、土師器（甕、高杯、鉢、甑）製塩土器、鉄器、土錘、小玉、敲石
25	〃	〃	385	320	12.3	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	古墳時代	〃	
26	〃	方形	430	370	15.43	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	北西辺	—	5c末～6c初	D－11	須恵器（杯、甕） 土師器（甕、椀、甑） 白玉、管玉、鉄器
27	〃	長方形	380	340	12.92	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	北隅	—	5c末～6c初	〃	須恵器（杯、高杯、甕） 土師器（壺、甕、高杯、甑）

表—12　中須賀調査区建物一覧表

番号	規模	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (m²)	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備考
建物—1	2×2	180～195	170～195	375	355	13.3	N—8°—E	円	D—11	中世
〃 —2	-×1	105～160	250	—	250	—	N—86°—E	〃	〃	〃

表—13　中須賀調査区井戸一覧表

(単位cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
1	D—10 E—10	142×136×222	ほぼ円形	壺,甕,鉢,高杯,器台,砥石,紡錘車	百・後・III
2	〃	180×165×180	〃	甕,高杯,鉢	〃
3	D—11	120×120×175	円形	壺,甕	百・後・III
4	〃	200×200×200	〃	壺,甕,高杯	百・後・I～II
5	D—11 E—11	98× 94×140	不整円形	壺,器台	百・後・II
6	E—11	74× 66×115	楕円形	器台	百・後・III
7	D—11	110×110×200	円形	壺,甕,器台,鉢	百・後・II
8	〃	193×190×170	〃	壺,甕,鉢,高杯	百・後・III
9	D— 8	135×—×195	不整円形	〃	百・古・I

表—14　中須賀調査区土壙一覧表

(単位cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
1	D— 9	502×106× 40	舟形	壺,甕	百・前・II
2	〃	405× 70× 48	—	壺,甕,鉢	〃
3	E— 9	100×100× 10	ほぼ円形	壺,甕	〃
4	D— 7	190× 83× 8	長楕円形	壺,甕,高杯	百・後・III
5	〃	144× 90× 14	〃	甕,鉢	〃
6	D— 8	165×150× 20	楕円形	壺,甕,鉢	〃
7	〃	174× 80× 18	—	壺,甕,高杯	〃
8	〃	90× 65× 18	不整楕円形	壺,甕	〃
9	〃	80× 65× 30	長方形	甕,高杯	〃
10	〃	110× 70× 15	長楕円形	壺,甕,高杯,鉢	〃
11	〃	85× 70× 40	不整楕円形	〃	〃
12	〃	130× 85× 20	〃	甕,高杯,鉢,蓋	〃
13	〃	50× 40× 25	楕円形	甕,高杯	〃
14	〃	80× 58× 20	〃	壺,甕,高杯,鉢,器台	〃
15	D— 8 D— 9	—	—	壺	〃
16	D— 9	70× 60× 15	不整楕円形	甕,高杯	〃
17	〃	140×120× 25	不整形	壺,甕,高杯,器台	百・後・I
18	〃	170× 70× 35	長楕円形	甕,高杯,鉢,製塩土器	百・後・IV
19	〃	310×125× 55	不整楕円形	壺,甕,鉢,高杯	百・後・III
20	〃	170× 75× 17	楕円形	甕,高杯	〃
21	E— 9	60× 90× 15	〃	—	百・後・IV～百・古・I

（単位cm）

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
22	D— 9	40× 40× 10	円形	壺,高杯	百・後・II
23	〃	190× 70× 10	舟形	甕,鉢,高杯	百・後・III
24	〃	210×125× 50	不整楕円形	壺,甕,鉢,高杯,石鏃,石錐	〃
25	〃	125× 70× 18	楕円形	壺,甕,鉢,製塩土器	〃
26	〃	115× 80× 31	〃	甕,鉢,高杯,鉄鏃	〃
27	〃	95× 70× 15	不整楕円形	甕,鉢,製塩土器	〃
28	〃	80× 60× 32	楕円形	甕,鉢,高杯	〃
29	D— 9 D—10	70× 50× 45	〃	壺,甕,高杯,鉢,石鏃	〃
30	〃	90× 60× 25	〃	壺,甕,高杯,鉢,台付鉢	〃
31	〃	135×110× 30	〃	〃	〃
32	D—10	125×125× 60	不整円形	〃	〃
33	〃	—	隅丸方形	—	〃
34	〃	—	楕円形	壺,甕,高杯,鉢	〃
35	〃	55× 55× 30	不整円形	甕,高杯,鉢	百・後・I
36	〃	82× 82× 45	〃	甕,高杯,製塩土器	〃
37	〃	195×120× 18	不整楕円形	壺,甕,高杯,鉢,製塩土器	〃
38	〃	130×115× 80	ほぼ楕円形	壺,甕,高杯,台付鉢	〃
39	〃	130×110× 72	楕円形	—	〃
40	〃	190× 81× 29	長楕円形	壺,甕,高杯,器台,銅鐸形土製品	百・後・II
41	〃	130×120× 66	円形	壺,甕	〃
42	〃	136×119×100	やや楕円形	壺,甕,鉢,台付鉢,高杯	百・後・I
43	〃	115×110× 68	不整楕円形	壺,甕,鉢,高杯	百・後・III
44	〃	150×120× 65	楕円形	壺,甕,鉢,高杯,台付鉢	〃
45	〃	48× 48× 10	ほぼ円形	壺,銅鏃	〃
46	〃	170× 65× 18	不整楕円形	甕,高杯,製塩土器	百・後・II
47	E—10	—	〃	壺,甕,鉢,高杯,器台,鉄器	百・後・III
48	〃	112× 90× 36	楕円形	壺,甕,鉢,高杯	〃
49	D—10	140× 71× 12	長方形	〃	百・後・II
50	D—11	153×116× 8	隅丸方形	甕	〃
51	〃	— × — × 27	長楕円形	壺,甕,高杯	〃
52	〃	— × — × 25	〃	甕,鉢,高杯	百・後・III～IV
53	〃	130×105× 45	楕円形	壺,甕,鉢,製塩土器	百・後・II
54	〃	100×100× 33	円形	甕,高杯,鉢	百・後・IV
55	〃	145× 60× 50	不整長方形	壺,甕,高杯,鉄鏃	〃
56	〃	— × — × 15	隅丸長方形	壺,甕,高杯,手捏ね	〃
57	E—11	—	—	壺,甕,高杯	〃
58	D—11	— × — × 40	—	壺,甕,高杯,鉢	百・後・II
59	D—10 D—11	292×157× 16	—	壺,甕,鉢,高杯,台付鉢	百・後・III
60	D—11	121× 60× 35	長楕円形	壺,甕,高杯	百・後・II
61	〃	96× 84× 22	三角形	壺,甕,器台	百・後・III
62	〃	180×170× 32	楕円形	甕,高杯,台付鉢	〃
63	〃	155×115× 32	〃	壺,甕,鉢,高杯,台付鉢	〃
64	〃	—	〃	壺,甕,高杯,手捏ね	〃

百間川原尾島遺跡

(単位cm)

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時　期
65	D—11	117× 73× 22	長方形	甕	百・後・III
66	〃	135× 94× 80	楕円形	壺,甕,高杯,製塩土器	〃
67	〃	—×—× 27	不整形	壺,甕,高杯,鉢,製塩土器	百・後・II
68	〃	—×—× 30	不整長楕円形	壺,甕,高杯,鉢,製塩土器,土錘	〃
69	〃	67× 50× 16	楕円形	甕,鉢,器台,高杯	百・後・III
70	〃	204× 90× 10	—	壺,甕	百・後・II
71	〃	100× 50× 8	長楕円形	—	百・後
72	D—11 E—11	90× 75× 45	—	壺,鉢,高杯,鉄鏃	百・後・III
73	D—11	86× 74× 16	楕円形	甕,高杯	〃
74	D—11 E—11	88× 75× 18	〃	甕,鉢,高杯,台付鉢	〃
75	D—11	132× 90× 35	〃	甕,鉢,高杯	〃
76	〃	113× 73× 20	〃	甕,高杯	〃
77	D—11 E—11	67× 60× 12	不整楕円形	壺,甕,鉢,高杯,製塩土器	〃
78	D—11	390×200× 20	—	壺,甕,高杯,器台,製塩土器	百・後・II
79	〃	123× 90× 18	楕円形	甕,高杯,台付鉢	百・後・III
80	〃	85× 80× 30	円形	壺,甕,高杯,器台	百・後・IV
81	E—11	—×—× 50	不整形	甕,高杯,台付鉢,製塩土器	百・後・I
82	〃	—×—× 30	長楕円形	甕	百・後・III
83	〃	—	—	製塩土器	百・後・II～III
84	〃	98× 64× 17	楕円形	壺,甕,高杯,器台,小型仿製鏡,鉄器	百・後・III
85	〃	160×130× 23	〃	壺,甕,鉢	〃
86	〃	75× 67× 25	〃	壺,甕,鉢,高杯	〃
87	〃	220× 70×—	溝状	—	百・後
88	〃	—	—	—	〃
89	〃	182×107× 22	長方形	甕,台付鉢	百・後・III
90	D—11 E—11	110× 60× 18	長楕円形	壺,甕,鉢,台付鉢	〃
91	D— 8	65× 65× 55	円形	高杯	5C末～6C初
92	D—11	104× 55× 8	舟形	須恵器	7C前半
93	〃	130× 80× 8	楕円形	須恵器（杯,高杯),土師器(椀)	〃
94	D— 4	94× 76× 6	〃	椀	中世
95	E— 4	160×100× 25	〃	勝間田焼,陶硯,土錘	〃
96	〃	165× 90× 5	〃	椀,鍋,羽釜,土錘	〃
97	〃	195×180× 17	不整楕円形	椀,小皿,鉢,土錘	〃
98	E— 5	135× 95× 6	〃	骨片	〃
99	〃	80× 55× 10	楕円形	椀,皿,小皿,鉢,土錘,鉄器	〃
100	〃	—×190× 30	不整形	椀	〃
101	〃	120× 85× 20	楕円形	椀,小皿,土錘	〃
102	D— 7	140× 60× 10	長楕円形	椀	〃
103	〃	140×—× 10	楕円形	〃	〃
104	D—11	165×125× 14	不整形	椀,小皿,鉄器,土錘	〃
105	〃	—	—	椀,小皿	〃
106	〃	—× 80× 12	長楕円形	椀,小皿,土錘	〃
107	〃	142× 90× 22	長方形	椀,小皿	〃
108	〃	150×106× 9	不整楕円形	椀	〃

表—15　中須賀調査区溝一覧表

番号	区　　名	幅　(cm)	深さ(cm)	断面形	出　土　遺　物	時　　期
1	D—8	150	21	皿　形	甕,高杯,器台	百・中・III
2	D—7～8	30	12	U字形	弥生式土器小片	百・後
3	D—7	30	17	皿　形	—	〃
4	〃	20	5	〃	高杯	〃
5	D—7～9	30	25	U字形	壺,甕,鉢,高杯	百・後・III
6	D—7～8	30	5	皿　形	—	百・後
7	D—8	150	50	〃	弥生式土器小片	〃
8	〃	130	40	〃	〃	〃
9	〃	60～100	12	〃	壺,鉢,高杯,台付鉢	百・後・II
10	〃	230	30	〃	弥生式土器小片	百・後
11	〃	230	37	〃	〃	〃
12	〃	70	20	〃	〃	〃
13	D—8～9	130～190	40	V字形	〃	〃
14	D—10・E—10	20	8	皿　形	甕	〃
15	D—11	25	13	U字形	弥生式土器小片	百・後・III
16	〃	31	11	〃	甕	〃
17	〃	28	15	皿　形	壺,高杯,台付鉢	百・後・II
18	D—8～9	125	15	〃	須恵器,土師器,鉄片,鉄滓	7C前半
19	D—9	65	13	〃	須恵器(直口壺,杯蓋,杯身)	6C末～7C初
20	D—11	120	11	〃	須恵器(杯蓋,杯身,高杯)	7C前半
21	〃	20	6	〃	—	〃
22	〃	73	16	〃	須恵器片,土錘	〃
23	〃	70	12	〃	〃	〃
24	E—5	80	20	〃	須恵質鍋,土師質椀	中世
25	D—8～9	300	65	V字形	土師質椀,皿,鍋,瓦器,備前焼他	～13C
26	E—10	60	20	皿　形	〃	12C後半～13C初
27	D—11	35	5	〃	土師質椀,小皿	中世
28	〃	50	10	〃	〃	〃
29	〃	55	13	〃	土師質椀,小皿,土錘	〃
30	〃	65	11	〃	〃	〃

表—16　中須賀調査区遺構番号対照表

遺構番号	地区	図	時期	旧	遺構番号	地区	図	時期	旧
竪穴式住居－1	D－8	14・15	百・後・Ⅳ	9	土壙－13	D－8	72	百・後・Ⅲ	64
－2	〃	14	百・後・Ⅲ	11	－14	〃	73	〃	13
－3	D－8 / D－9	16	〃	14	－15	D－8 / D－9	74	〃	248
－4	D－9 / D－10	17～19	〃	12	－16	D－9	75	〃	164
－5	D－9	20	百・後	24	－17	〃	76	百・後・Ⅰ	231
－6	〃	21～23	百・後・Ⅲ	17	－18	〃	77	百・後・Ⅳ	5
－7	〃	24～26	百・後・Ⅳ	13	－19	〃	78～80	百・後・Ⅲ	3
－8	〃	27～30	百・後・Ⅲ	7	－20	〃	81	〃	204
－9	E－9	31	〃	16	－21	E－9	82	百・後・Ⅳ～百・古・Ⅰ	土1
－10	D－10	32・33	〃	17	－22	D－9	83	百・後・Ⅱ	321
－11	E－10	34	〃	2	－23	〃	84	百・後・Ⅲ	199
－12	D－10	35	百・後・Ⅱ	20	－24	〃	85・86	〃	318
－13	D－10 / E－10	36～38	百・後・Ⅰ	23	－25	〃	87	〃	244
－14	D－10	39・40	百・後・Ⅱ	21	－26	〃	88	〃	203
－15	E－11	41	百・後・Ⅲ	22	－27	〃	89	〃	土27
－16	D－11	42～44	百・後・Ⅳ	3	－28	〃	90	〃	715
－17	D－7	182	5C末～6C初	6	－29	D－9 / D－10	91・92	〃	692
－18	D－7 / D－8	183	〃	5	－30	〃	91・93	〃	693
－19	D－8 / E－8	184	〃	10	－31	〃	94・95	〃	654
－20	D－8	185	〃	8	－32	D－10	96～101	〃	333
－21	〃	186	〃	2	－33	〃	102	〃	559
－22	D－9	187	〃	7	－34	〃	103・104	〃	773
－23	〃	188・189	〃	1	－35	〃	105	百・後・Ⅰ	690
－24	〃	190～193	〃	3	－36	〃	106	〃	686
－25	〃	194	古墳時代	4	－37	〃	107	〃	808
－26	D－11	195～198	5C末～6C初	1	－38	〃	108	〃	789
－27	〃	199～201	〃	2	－39	〃	109	〃	788
井戸－1	D－10 / E－10	45～52	百・後・Ⅲ	673	－40	〃	110～112	百・後・Ⅱ	760
－2	〃	53	〃	766	－41	〃	113	〃	542
－3	D－11	54	百・後・Ⅳ	井2	－42	〃	114～116	百・後・Ⅰ	775
－4	〃	55	百・後・Ⅰ～Ⅱ	井4	－43	〃	117	百・後・Ⅲ	539
－5	D－11 / E－11	56	百・後・Ⅱ	819	－44	〃	118	〃	733
－6	E－11	57	百・後・Ⅲ	778	－45	〃	119	〃	758
－7	D－11	58	百・後・Ⅱ	井3	－46	〃	120	百・後・Ⅱ	761
－8	〃	59～61	百・後・Ⅲ	土32	－47	E－10	121・122	百・後・Ⅲ	749
－9	D－8	202・203	百・古・Ⅰ	56	－48	〃	123・124	〃	641
土壙－1	D－9	7	百・前・Ⅱ	溝20	－49	D－10	125・126	百・後・Ⅱ	土34
－2	〃	10	〃	820	－50	D－11	127	〃	土31
－3	E－9	11	〃	土3	－51	〃	128	〃	土45
－4	D－7	62	百・後・Ⅲ	10	－52	〃	129	百・後・Ⅲ～Ⅳ	土44
－5	〃	63	〃	11	－53	〃	130・131	百・後・Ⅱ	土47
－6	D－8	64	〃	101	－54	〃	132	百・後・Ⅳ	土35
－7	〃	65	〃	100	－55	〃	133	〃	土27
－8	〃	66	〃	74	－56	〃	134	〃	土26
－9	〃	67	〃	103	－57	E－11	135	〃	土29
－10	〃	68	〃	104	－58	D－11	136・137	百・後・Ⅱ	土49
－11	〃	69	〃	79	－59	D－10 / D－11	138	百・後・Ⅲ	700
－12	〃	70・71	〃	97	－60	D－11	139	百・後・Ⅱ	750

遺構番号	地区	図	時期	旧	遺構番号	地区	図	時期	旧
土壙－61	D－11	140	百・後・III	土42	溝－2	D－7	175・176	百・後	溝4
－62	〃	141	〃	土12	－3	〃	－	〃	溝12
－63	〃	142	〃	土19	－4	〃	－	〃	溝6
－64	〃	143	〃	土11	－5	D－7 / D－9	175	百・後・III	溝5
－65	〃	144	〃	土43	－6	D－7 / D－8	－	百・後	溝15
－66	〃	145	〃	土9	－7	D－8	175	〃	溝9
－67	〃	146～148	百・後・II	土10	－8	〃	－	〃	溝11
－68	〃	149・150	〃	土25	－9	〃	176	百・後・II	溝19
－69	〃	151	百・後・III	土13	－10	〃	－	百・後	溝21
－70	〃	152	百・後・II	土19	－11	〃	－	〃	溝22
－71	〃	〃	百・後	土20	－12	〃	－	〃	溝17
－72	D－11 / E－11	153・154	百・後・III	柱470	－13	D－8 / D－9	177	〃	溝18
－73	D－11	155	〃	土30	－14	D－10 / E－10	178	〃	溝29
－74	D－11 / E－11	156	〃	土15	－15	D－11	－	百・後・III	溝11
－75	D－11	157	百・後・III	土16	－16	〃	－	百・後	溝10
－76	〃	158	百・後・III	土14	－17	〃	178	百・後・II	溝9
－77	D－11 / E－11	159	〃	土24	－18	D－8 / D－9	206	7C前半	溝3
－78	D－11	160	百・後・II	土39	－19	D－9	－	6C末～7C初	溝23
－79	〃	161	百・後・III	土38	－20	D－11	207	7C前半	溝8
－80	〃	162	百・後・IV	土8	－21	〃	－	〃	溝7
－81	E－11	163	百・後・II	土2	－22	〃	207	〃	溝6
－82	〃	164	百・後・III	土3	－23	〃	〃	〃	溝5
－83	〃	165	百・後・II～III	土1	－24	E－5	225	中世	溝1
－84	〃	166・167	百・後・III	350	－25	D－8 / D－9	226～232	～13C	溝2
－85	〃	168	〃	土41	－26	E－10	233	12C後半～13C初	溝1
－86	〃	169	〃	土20	－27	D－11	234	中世	溝4
－87	〃	－	百・後	土51	－28	E－11	〃	〃	溝3
－88	〃	－	〃	土50	－29	D－11	235	〃	溝2
－89	〃	170	百・後・III	土40	－30	〃	〃	〃	溝1
－90	D－11 / E－11	171・172	〃	土28					
－91	D－8	204	5C末～6C初	63					
－92	D－11	－	7C前半	土6					
－93	〃	205		土5					
－94	D－4	213	中世	P1					
－95	E－4	214	〃	P3					
－96	〃	215	〃	P2					
－97	〃	217	〃	P1					
－98	E－5	218	〃	P2					
－99	〃	219	〃	P4					
－100	〃	〃	〃	P5					
－101	〃	〃	〃	P7					
－102	D－7	220	〃	221					
－103	〃	221	〃	220					
－104	D－11	222	〃	土1					
－105	〃	223	〃	土3					
－106	〃	〃	〃	土4					
－107	〃	224	〃	255					
－108	〃	－	〃	土2					
溝－1	D－8	12	百・中・III	溝10					

表—17　中須賀調査区玉類一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
16	1	土玉	D－8	竪穴式住居－3	土	31.0	24.0	—	19.43	完存
21	2	小玉	D－9	竪穴式住居－6	ガラス	3.0	3.5	—	0.03	〃
24	3	勾玉	〃	竪穴式住居－7	土	23.5	—	11.5	3.01	〃
38	4	小玉	D—10	竪穴式住居—13	ガラス	3.0	2.5	—	0.04	〃
〃	5	〃	〃	〃	〃	2.5	3.5	—	0.03	〃
〃	6	〃	〃	〃	〃	3.0	2.0	—	0.03	〃
〃	7	管玉	〃	〃	滑石	18.5	6.5	—	1.27	〃
〃	8	勾玉	〃	〃	土	33.0	18.5	15.0	—	
44	9	小玉	D—11	竪穴式住居—16	ガラス	2.5	2.4	—	0.02	完存
〃	10	〃	〃	〃	〃	3.1	—	—	0.02	
〃	11	〃	〃	〃	〃	4.0	3.5	—	0.06	完存
〃	12	管玉	〃	〃	碧玉	13.4	6.6	—	0.93	〃
〃	13	〃	〃	〃	蛇紋岩か石木	19.0	4.6	—	0.54	〃
〃	14	〃	〃	〃	碧玉	20.4	5.4	—	0.72	
179	15	小玉	D－9	弥生時代包含層	ガラス	3.5	3.0	—	0.03	完存
〃	16	〃	D—10	〃	〃	3.5	2.5	—	0.02	〃
〃	17	〃	D－8	〃	〃	4.0	3.0	—	0.02	
〃	18	〃	〃	〃	〃	7.5	5.5	—	0.42	完存
192	19	〃	D－9	竪穴式住居—24	滑石	5.5	2.5	—	0.15	〃
〃	20	〃	〃	〃	〃	4.0	3.5	—	0.13	〃
〃	21	〃	〃	〃	〃	5.0	2.5	—	0.15	〃
〃	22	〃	〃	〃	〃	5.0	4.0	—	0.12	〃
〃	23	〃	〃	〃	〃	5.0	3.5	—	0.10	〃
〃	24	〃	〃	〃	〃	5.0	3.5	—	0.10	〃
〃	25	〃	〃	〃	〃	4.5	1.5	—	0.04	〃
198	26	〃	D—11	竪穴式住居—26	蛇紋岩	3.5	2.0	—	0.05	〃
〃	27	管玉	〃	〃	碧玉	13.8	5.1	—	0.42	
〃	28	〃	〃	〃	蛇紋岩か滑石	19.5	6.3	—	1.01	完存
208	29	勾玉	D－3~17	古墳時代包含層	滑石	21.5	—	6.0	1.95	〃
〃	30	臼玉	D－8	溝—25	〃	5.0	3.0	—	0.10	
〃	31	〃	D－9	古墳時代包含層	〃	4.5	2.5	—	0.03	完存
〃	32	〃	D—11	〃	〃	5.4	2.3	—	0.11	〃

表—18　中須賀調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
21	1	紡錘車	D— 9	竪穴式住居— 6	土	6.50	6.35	1.10	52.92	
24	2	〃	〃	竪穴式住居— 7	〃	4.07	3.62	0.40	—	
30	3	〃	〃	竪穴式住居— 8	〃	4.70	4.65	0.35	10.03	
〃	4	土錘	〃	〃	〃	4.30	2.70	1.50	19.16	
34	5	紡錘車	E—10	竪穴式住居—11	〃	4.64	4.28	0.39	10.15	
38	6	土錘	〃	竪穴式住居—13	〃	3.84	2.48	—	13.20	
44	7	紡錘車	D—11	竪穴式住居—16	〃	4.28	4.12	0.56	11.10	
〃	8	土錘	〃	〃	〃	1.05	0.82	—	412.50	
〃	9	〃	〃	〃	〃	—	0.89	—	130.95	
52	10	紡錘車	D—10	井戸— 1	〃	0.67	6.35	0.60	31.80	
112	11	銅鐸形土製品	〃	土壙—40	〃	0.69	3.30	0.80	—	
150	12	土錘	D—12	土壙—68	〃	4.42	3.46	—	54.81	
174	13	紡錘車	D—10	柱穴	〃	4.30	4.20	0.80	15.80	
180	14	〃	D— 9	弥生時代包含層	〃	4.70	4.20	0.50	11.00	
〃	15	〃	D—10	〃	〃	2.70	2.40	0.50	3.80	
〃	16	舟形土製品	D—11	〃	〃	8.80	4.30	2.02	47.40	
192	17	土錘	D— 9	竪穴式住居—24	〃	3.85	1.50	—	7.10	
〃	18	〃	〃	〃	〃	6.20	1.95	—	21.14	
〃	19	〃	〃	〃	〃	3.55	1.85	—	—	
207	20	〃	D—11	溝—22	〃	5.71	3.95	—	80.10	
〃	21	〃	〃	〃	〃	5.90	1.94	1.79	17.78	
〃	22	〃	〃	溝—23	〃	5.00	1.98	—	18.70	
214	23	硯	E— 4	土壙—95	〃	3.15	2.95	—	19.90	
〃	24	土錘	〃	〃	〃	2.85	0.80	—	1.50	
215	25	〃	〃	土壙—96	〃	3.60	1.20	—	4.70	
〃	26	〃	〃	〃	〃	2.40	1.20	—	3.00	
〃	27	〃	〃	〃	〃	1.90	0.85	—	1.20	
〃	28	〃	〃	〃	〃	1.95	0.80	—	9.50	
217	29	〃	〃	土壙—97	〃	4.20	1.05	—	4.11	
〃	30	〃	〃	〃	〃	3.70	0.75	—	1.80	
〃	31	〃	〃	〃	〃	5.60	1.35	—	9.60	
〃	32	〃	〃	〃	〃	3.60	0.95	—	3.20	
〃	33	〃	〃	〃	〃	3.80	1.10	—	3.20	
〃	34	〃	〃	〃	〃	3.20	1.15	—	3.10	
219	35	〃	〃	土壙—101	〃	5.75	1.20	—	7.60	
〃	36	〃	〃	土壙—99	〃	4.90	1.35	—	7.60	
〃	37	〃	〃	〃	〃	5.20	1.00	—	4.50	
〃	38	〃	〃	土壙—101	〃	4.90	1.15	—	5.00	
〃	39	〃	〃	土壙—99	〃	4.55	0.90	—	3.80	
〃	40	〃	〃	土壙—101	〃	3.60	1.10	—	3.10	
222	41	〃	D—11	土壙—104	〃	3.84	1.20	—	4.85	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
222	42	土錘	D−11	土壙−104	土	3.82	1.09	—	3.13	
〃	43	〃	〃	〃	〃	1.91	1.31	—	2.46	
223	44	〃	〃	土壙−106	〃	3.93	1.33	—	5.67	
232	45	硯	D− 8	溝−25	〃	7.00	7.60	1.35	—	
〃	46	土錘	〃	〃	〃	5.35	1.30	—	8.00	
〃	47	〃	〃	〃	〃	3.95	1.25	—	5.20	
〃	48	〃	〃	〃	〃	3.50	1.45	—	5.80	
235	49	〃	D−11	溝−29	〃	1.37	0.77	—	1.46	
〃	50	〃	〃	溝−30	〃	4.00	1.03	—	2.70	
253	51	〃	D− 6	集石遺構	〃	6.70	4.33	—	107.20	
〃	52	〃	E−11	表採	〃	4.06	3.82	—	37.30	
〃	53	〃	D− 7	攪乱層	〃	5.75	3.70	—	82.90	
〃	54	〃	D−10	〃	〃	5.30	3.80	—	81.20	
〃	55	〃	E−11	包含層	〃	5.80	3.60	—	66.30	
〃	56	〃	D− 8	近世溝	〃	5.60	3.60	—	68.00	
〃	57	〃	D−11	包含層	〃	4.80	3.40	—	57.00	
〃	58	〃	〃	〃	〃	5.32	—	—	34.30	
〃	59	〃	〃	〃	〃	4.40	—	—	19.90	
〃	60	〃	〃	〃	〃	7.55	2.60	—	39.40	
〃	61	〃	E−11	〃	〃	6.85	2.50	—	42.30	
〃	62	〃	D− 8	〃	〃	6.40	2.25	—	33.30	
〃	63	〃	D−10	現代溝	〃	6.15	2.20	—	26.40	
〃	64	〃	D−11	包含層	〃	6.68	1.84	—	26.60	
〃	65	〃	E−11	〃	〃	6.14	2.30	—	31.00	
〃	66	〃	〃	〃	〃	7.15	1.40	—	10.80	
〃	67	〃	D− 6	〃	〃	4.80	1.65	—	5.10	
〃	68	〃	D−11	〃	〃	5.19	0.95	—	3.80	
〃	69	〃	E− 9	〃	〃	5.17	1.14	—	7.10	
〃	70	〃	E−12	〃	〃	5.16	1.00	—	4.60	
〃	71	〃	E− 9	〃	〃	5.32	1.16	—	5.90	
〃	72	〃	D− 7	現代溝	〃	5.25	1.05	—	6.40	
〃	73	〃	E−10	包含層	〃	5.22	1.30	—	7.70	
〃	74	〃	E− 7	〃	〃	4.55	1.15	—	6.20	
〃	75	〃	D−11	〃	〃	4.80	1.15	—	6.60	
〃	76	〃	D− 7	〃	〃	4.60	1.30	—	8.10	
〃	77	〃	E−11	〃	〃	4.30	0.90	—	3.40	
〃	78	〃	E−13	〃	〃	4.45	0.87	—	3.10	
〃	79	〃	E−11	〃	〃	4.70	0.87	—	3.10	
〃	80	〃	D−11	〃	〃	4.48	0.95	—	3.40	
〃	81	〃	D−12	〃	〃	4.47	0.98	—	3.80	
〃	82	〃	D−11	〃	〃	4.05	0.90	—	2.70	
〃	83	〃	〃	〃	〃	4.01	0.88	—	3.20	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
253	84	土錘	D—11	包含層	土	4.55	1.00	—	4.20	
〃	85	〃	D—10	現代溝	〃	3.70	0.95	—	3.00	
〃	86	〃	〃	〃	〃	3.30	1.10	—	2.80	
〃	87	〃	D—11	包含層	〃	4.48	1.47	—	9.10	
〃	88	〃	〃	〃	〃	4.79	1.55	—	11.60	
〃	89	〃	D— 6	〃	〃	5.90	1.05	—	10.30	
〃	90	〃	D— 8	〃	〃	4.40	1.55	—	10.30	
〃	91	〃	E—11	〃	〃	4.55	1.35	—	8.70	
〃	92	〃	D—11	〃	〃	5.38	1.36	—	7.10	
〃	93	〃	E— 9	〃	〃	4.92	1.10	—	4.00	
〃	94	〃	D—10	攪乱土	〃	4.40	1.40	—	8.10	
〃	95	〃	E— 9	包含層	〃	4.13	1.16	—	4.50	
〃	96	〃	E—12	〃	〃	4.23	1.00	—	3.30	
〃	97	〃	E—13	〃	〃	4.08	0.98	—	4.00	
〃	98	〃	D—12	〃	〃	3.59	1.10	—	3.30	
〃	99	〃	D—10	現代溝	〃	3.50	1.10	—	4.00	
〃	100	〃	—	包含層	〃	3.06	0.90	—	2.30	
〃	101	〃	D— 9	〃	〃	8.65	1.80	—	25.30	
〃	102	〃	〃	〃	〃	2.40	1.40	—	3.10	
254	103	硯	D— 7	柱穴	〃	14.30	10.60	2.80	—	
〃	104	〃	D—11	包含層	〃	2.60	2.40	0.90	—	
255	105	円板状土製品	D・E—13	近世溝	〃（備前焼）	6.20	4.00	1.30	83.74	
〃	106	〃	D—10	現代溝	〃（瓦）	4.40	4.20	1.50	32.50	
〃	107	〃	D—11	包含層	〃（備前焼）	4.20	3.70	1.00	24.22	
〃	108	〃	E— 9	〃	〃	2.80	2.50	1.20	12.84	
〃	109	〃	D—10	現代溝	〃	3.30	3.00	0.90	11.44	
〃	110	〃	E— 9	包含層	〃	3.00	2.80	1.10	14.55	
〃	111	〃	E—12	〃	〃（瓦）	4.40	4.30	2.70	61.02	
〃	112	〃	E— 8	〃	〃（備前焼）	3.80	3.50	1.40	28.23	
〃	113	〃	E— 9	〃	〃	3.70	3.50	0.60	18.43	
〃	114	〃	D—10	現代溝	〃	3.00	2.80	0.90	11.91	
〃	115	〃	〃	〃	〃	2.70	2.40	1.00	9.81	
〃	116	〃	E— 7	包含層	中国製青磁	2.00	1.80	0.50	—	
〃	117	〃	〃	〃	土（備前焼）	2.90	2.80	0.90	11.66	
〃	118	〃	E— 9	〃	〃	2.80	2.80	1.10	12.11	
		土錘	E— 4	土壙	〃	2.90	0.90	—	1.87	
		〃	〃	包含層	〃	4.10	0.90	—	2.90	
		〃	〃	〃	〃	3.60	1.10	—	2.60	
		〃	〃	〃	〃	3.60	0.85	—	2.63	
		〃	〃	〃	〃	2.90	1.05	—	2.60	
		〃	〃	〃	〃	2.45	1.10	—	1.40	
		〃	〃	〃	〃	2.10	0.90	—	1.60	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
		土錘	E－4	包含層	土	2.30	0.80	—	1.21	
		〃	〃	〃	〃	2.50	0.80	—	1.60	
		〃	〃	〃	〃	4.70	1.30	—	6.37	
		〃	E－5	〃	〃	4.90	1.15	—	5.04	
		〃	〃	〃	〃	5.75	1.20	—	7.60	
		〃	〃	〃	〃	3.60	1.10	—	3.17	
		〃	〃	〃	〃	4.55	0.90	—	3.82	
		〃	〃	〃	〃	5.20	1.00	—	4.56	
		〃	〃	〃	〃	4.90	1.35	—	7.68	
		〃	〃	〃	〃	2.90	1.00	—	2.55	
		〃	〃	〃	〃	2.90	0.90	—	1.92	
		〃	〃	〃	〃	3.00	1.05	—	3.04	
		〃	〃	〃	〃	3.50	1.05	—	3.00	
		〃	〃	〃	〃	5.30	1.10	—	5.97	
		〃	E－6	溝	〃	4.55	1.20	—	5.90	
		〃	〃	包含層	〃	2.45	1.40	—	2.85	
		〃	〃	〃	〃	5.20	1.30	—	7.10	
		〃	〃	〃	〃	5.80	1.25	—	6.63	
		〃	〃	〃	〃	4.20	1.00	—	3.62	
		〃	〃	〃	〃	3.60	1.35	—	7.18	
		〃	〃	〃	〃	3.10	0.90	—	1.97	
		〃	〃	〃	〃	4.25	1.20	—	7.22	
		〃	〃	〃	〃	3.45	0.90	—	2.15	
		〃	〃	〃	〃	4.30	1.15	—	4.25	
		〃	〃	〃	〃	2.90	1.70	1.00	5.05	
		〃	〃	〃	〃	4.40	1.15	—	4.40	
		〃	E－7	現代溝	〃	4.70	1.10	—	4.96	
		〃	〃	包含層	〃	3.10	1.25	—	3.70	
		〃	〃	〃	〃	4.70	1.15	—	5.63	
		〃	〃	〃	〃	2.10	0.80	—	0.92	
		〃	〃	〃	〃	5.10	1.20	—	5.83	
		〃	〃	〃	〃	3.10	1.10	—	(3.03)	
		〃	〃	〃	〃	2.50	0.95	—	1.85	
		〃	〃	〃	〃	4.45	1.00	—	3.14	
		〃	〃	〃	〃	5.70	1.10	—	5.50	
		〃	〃	〃	〃	4.80	1.30	—	7.61	
		〃	〃	〃	〃	3.40	1.00	—	3.21	
		〃	〃	〃	〃	4.60	1.40	—	7.90	
		〃	〃	〃	〃	3.60	1.15	—	4.13	
		〃	〃	〃	〃	4.70	1.05	—	4.23	
		〃	〃	〃	〃	—	0.90	—	2.11	
		〃	〃	〃	〃	5.20	1.45	—	10.60	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
		土錘	E－7	包含層	土	2.80	0.80	—	1.87	
		〃	〃	〃	〃	4.85	1.15	—	6.50	
		〃	〃	〃	〃	3.30	1.00	—	2.82	
		〃	〃	〃	〃	3.80	0.85	—	2.15	
		〃	〃	〃	〃	2.30	1.00	—	2.04	
		〃	E－8	〃	〃	4.70	1.00	—	3.93	
		〃	〃	〃	〃	4.90	1.35	—	8.17	
		〃	〃	〃	〃	4.00	1.10	—	3.80	
		〃	〃	〃	〃	3.10	1.10	—	3.45	
		〃	〃	〃	〃	4.20	1.05	—	4.32	
		〃	〃	〃	〃	7.10	2.35	—	(44.44)	
		〃	〃	〃	〃	4.90	1.35	—	7.60	
		〃	〃	〃	〃	4.30	1.45	—	8.11	
		〃	〃	〃	〃	1.85	1.20	—	2.10	
		〃	〃	〃	〃	1.80	1.25	—	3.00	
		〃	〃	〃	〃	2.80	1.15	—	3.03	
		〃	〃	〃	〃	3.30	1.10	—	4.30	
		〃	〃	〃	〃	3.20	1.05	—	3.05	
		〃	〃	〃	〃	4.80	1.20	—	5.64	
		〃	〃	〃	〃	4.55	1.20	—	6.81	
		〃	〃	〃	〃	4.80	1.25	—	5.97	
		〃	〃	〃	〃	2.80	1.10	—	2.50	
		〃	〃	〃	〃	4.15	1.05	—	3.85	
		〃	〃	〃	〃	3.40	1.10	—	4.16	
		〃	〃	〃	〃	3.30	0.80	—	1.70	
		〃	〃	〃	〃	2.75	1.00	—	(2.02)	
		〃	〃	〃	〃	2.60	1.40	—	3.04	
		〃	〃	〃	〃	5.95	1.30	—	8.17	
		〃		撹乱土	〃	5.10	1.20	—	(7.63)	
		〃		〃	〃	4.60	1.00	—	(5.04)	
		〃		〃	〃	4.70	1.05	—	4.13	
		〃		〃	〃	3.90	1.00	—	(3.43)	
		〃	D－3	包含層	〃	4.60	1.20	—	5.14	
		〃	〃	〃	〃	2.35	0.85	—	1.17	
		〃	D－6	〃	〃	2.95	1.15	—	3.44	
		〃	D－7	撹乱土	〃	4.40	1.30	—	(6.24)	
		〃	〃	〃	〃	3.80	1.05	—	(4.55)	
		〃	D－8	包含層	〃	5.40	1.35	—	(8.94)	
		〃	〃	〃	〃	7.90	2.85	—	(68.62)	
		〃	〃	〃	〃	2.25	1.40	—	2.85	
		〃	〃	〃	〃	4.35	1.15	—	6.67	
		〃	〃	〃	〃	2.50	1.20	—	1.41	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
		土錘	D－8	包含層	土	3.25	1.10	—	(4.24)	
		〃	D－9	竪穴式住居埋土	〃	2.20	1.25	—	3.80	
		〃	〃	〃	〃	4.30	2.60	1.60	19.16	
		〃	〃	柱穴	〃	8.00	1.70	—	52.93	
		〃	〃	〃	〃	4.40	1.60	—	12.70	
		〃	〃	〃	〃	4.10	1.40	1.00	9.42	
		〃	D－10	土壙	〃	3.65	1.05	—	4.26	
		〃	〃	包含層	〃	4.60	1.30	—	5.40	
		〃	〃	攪乱土	〃	3.45	1.15	—	3.67	
		〃	E－10	現代溝	〃	5.25	1.10	—	(4.59)	
		〃	〃	〃	〃	4.40	1.40	—	(8.47)	
		〃	〃	〃	〃	3.40	1.30	—	(6.31)	
		〃	E－10・11	包含層	〃	4.90	1.00	—	3.81	
		〃	〃	〃	〃	4.00	1.10	—	3.90	
		〃	〃	〃	〃	2.30	0.05	—	2.36	
		〃	E－11	現代溝	〃	4.85	1.10	—	5.10	
		〃	〃	包含層	〃	3.50	1.35	—	5.57	
		〃	〃	〃	〃	4.15	1.05	—	(4.74)	
		〃	〃	〃	〃	4.30	1.25	—	(5.46)	
		〃	〃	〃	〃	3.10	1.15	—	(3.60)	
		〃	〃	〃	〃	3.60	1.30	—	(6.43)	
		〃	〃	〃	〃	2.95	0.80	—	(2.10)	
		〃	〃	〃	〃	2.40	0.85	—	(1.50)	
		〃	〃	〃	〃	2.30	0.80	—	(1.42)	
		〃	〃	〃	〃	4.55	0.85	—	(2.65)	
		〃	〃	〃	〃	3.35	0.90	—	(2.62)	
		〃	E－7	〃	〃	5.00	1.30	—		
		〃	〃	〃	〃	3.50	0.85			
		〃	E－10・11	〃	〃	4.60	1.30	—	6.62	
		〃	D－11	溝－6	〃	5.50	—	—	20.90	
		〃	E－9	淡黄褐色微砂	〃	4.84	1.05	—	3.84	
		〃	〃	包含層	〃	3.84	1.18	—	4.20	
		〃	〃	〃	〃	3.10	1.10	—	2.54	
		〃	〃	〃	〃	5.70	1.19	—	6.54	
		〃	〃	〃	〃	3.97	0.93	—	2.60	
		〃	〃	〃	〃	2.62	0.98	—	1.86	
		〃	〃	〃	〃	2.10	1.18	—	2.01	
		〃	〃	〃	〃	4.04	0.93	—	2.50	
		〃	〃	〃	〃	4.00	1.17	—	3.42	
		〃	E・F－9	〃	〃	4.24	1.17	—	4.56	
		〃	E－9	〃	〃	5.96	—	—	30.35	
		〃	〃	〃	〃	2.24	—	—	1.37	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
		土錘	E・D−10	包含層	土	4.72	1.20	—	4.44	
		〃	〃	〃	〃	2.26	1.13	—	2.10	
		〃	E−10	〃	〃	4.15	1.03	—	3.13	
		〃	〃	〃	〃	4.00	1.12	—	3.74	
		〃	〃	〃	〃	4.52	1.20	—	6.10	
		〃	〃	〃	〃	4.79	1.12	—	3.44	
		〃	D−11	〃	〃	3.32	1.02	—	3.15	
		〃	〃	〃	〃	2.70	0.84	—	1.23	
		〃	〃	〃	〃	2.54	1.00	—	2.17	
		〃	〃	〃	〃	2.20	0.83	—	1.25	
		〃	〃	〃	〃	1.98	1.16	—	1.44	
		〃	〃	〃	〃	1.39	0.68	—	0.56	
		〃	E−11	〃	〃	5.13	1.12	—	5.26	
		〃	〃	〃	〃	3.08	1.29	—	5.33	
		〃	〃	〃	〃	5.69	1.28	—	5.52	
		〃	〃	〃	〃	5.58	1.70	—	14.50	
		〃	〃	〃	〃	3.84	1.02	—	2.90	
		〃	D−11	〃	〃	5.59	1.33	—	8.86	
		〃	〃	〃	〃	4.05	1.18	—	5.01	
		〃	〃	〃	〃	3.90	1.10	—	4.02	
		〃	〃	〃	〃	3.47	0.87	—	2.46	
		〃	〃	〃	〃	4.39	0.96	—	3.10	
		〃	〃	〃	〃	3.79	1.03	—	3.20	
		〃	〃	〃	〃	3.35	1.04	—	3.05	
		〃	〃	〃	〃	3.31	1.00	—	2.96	
		〃	〃	〃	〃	2.93	0.83	—	1.72	
		〃	〃	〃	〃	2.23	0.91	—	1.40	
		〃	E−11	〃	〃	2.96	0.92	—	2.25	
		〃	D−11	〃	〃	2.17	0.97	—	1.18	
		〃	E−11	〃	〃	3.17	0.77	—	1.50	
		〃	〃	〃	〃	4.22	1.06	—	3.63	
		〃	〃	〃	〃	4.25	1.15	—	4.60	
		〃	〃	〃	〃	3.14	0.88	—	1.94	
		〃	〃	〃	〃	2.60	1.08	—	2.46	
		〃	D−11	〃	〃	2.62	0.86	—	2.11	
		〃	〃	表採	〃	3.09	0.99	—	2.37	
		〃	〃	〃	〃	3.74	1.10	—	3.46	
		〃	〃	柱穴	〃	3.46	1.06	—	2.72	
		〃	E−12	表採	〃	4.49	1.26	—	7.45	
		〃	〃	包含層	〃	4.30	0.88	—	3.41	
		〃	〃	〃	〃	2.65	0.88	—	1.75	
		〃	D−12	〃	〃	4.13	1.65	—	12.10	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
		土錘	E−12	包含層	土	3.16	1.10	—	3.60	
		〃	D−12	〃	〃	3.92	1.40	—	7.25	
		〃	〃	〃	〃	3.38	0.96	—	2.44	
		〃	E−12	〃	〃	2.15	0.88	—	1.39	
		〃	D−12	〃	〃	2.68	1.00	—	2.10	
		〃	E・D−13	現代溝	〃	4.30	0.84	—	2.33	
		〃	—	包含層	〃	3.95	0.92	—	3.24	
		〃	E−13	〃	〃	4.04	1.02	—	3.30	
		〃	〃	〃	〃	2.92	1.26	—	3.74	
		〃	—	排土中	〃	5.04	1.10	—	4.60	
		〃	D−11	包含層	〃	3.31	2.49	—	14.55	
		〃	〃	〃	〃	4.26	—	—	11.94	
		〃	〃	〃	〃	2.48	—	—	13.84	
		〃	〃	柱穴	〃	3.19	1.44	—	6.44	

表−19　中須賀調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
10	1	石鏃	D− 9	土壙− 2	サヌカイト	18.0	15.0	0.3	0.53	完存
19	2	石錘	〃	竪穴式住居− 4	花崗岩	88.0	75.0	44.0	408.00	〃
21	3	敲石	〃	竪穴式住居− 6	玢岩	152.0	64.0	37.5	549.00	〃
〃	4	砥石	〃	〃	頁岩	112.0	50.0	47.0	480.00	〃
〃	5	〃	〃	〃	細粒砂岩	36.0	19.5	15.0	16.80	
30	6	〃	〃	竪穴式住居− 8	凝灰岩	58.0	42.0	13.5	49.80	
35	7	石鏃	E−10	竪穴式住居−12	サヌカイト	17.5	12.5	2.5	0.54	完存
38	8	石庖丁	D−10	竪穴式住居−13	〃	22.0	42.0	4.5	3.26	
〃	9	スクレイパー	〃	〃	〃	34.5	29.5	6.5	7.22	
〃	10	石鏃	〃	〃	〃	46.0	16.0	5.0	3.50	
〃	11	〃	〃	〃	〃	21.0	17.0	3.0	1.00	
〃	12	〃	〃	〃	〃	23.0	19.0	2.5	1.10	完存
〃	13	〃	〃	〃	〃	30.5	20.0	4.5	2.33	〃
〃	14	〃	〃	〃	〃	33.0	15.0	5.0	2.10	〃
〃	15	〃	〃	〃	〃	25.0	12.0	4.0	1.20	〃
〃	16	〃	〃	〃	〃	22.0	14.5	3.5	1.17	〃
〃	17	〃	〃	〃	〃	55.0	18.5	6.5	5.32	〃
〃	18	〃	〃	〃	〃	59.0	14.5	6.0	4.22	〃
〃	19	〃	〃	〃	〃	28.5	11.5	3.5	1.07	〃
〃	20	〃	〃	〃	〃	25.5	13.5	3.0	1.03	〃
〃	21	〃	〃	〃	〃	36.0	14.0	4.5	2.50	
〃	22	〃	〃	〃	〃	31.0	13.5	4.0	1.56	完存
〃	23	〃	〃	〃	〃	23.0	11.0	4.5	0.84	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
38	24	石鏃	D—10	竪穴式住居—13	サヌカイト	15.0	13.5	3.0	0.47	
〃	25	〃	〃	〃	〃	31.5	21.0	5.5	3.90	
〃	26	石槍	〃	〃	〃	22.5	18.5	5.5	2.54	
〃	27	〃	〃	〃	〃	25.5	19.5	5.5	3.28	
44	28	すり石	D—11	竪穴式住居—16	安山岩	154.5	971.0	62.3	968.00	完存
〃	29	敲石	〃	〃	花崗岩	123.1	87.2	25.6	420.00	
〃	30	〃	〃	〃	安山岩	107.8	64.7	12.9	146.60	完存
〃	31	砥石	〃	〃	流紋岩	552.0	391.0	197.0	29.50	
〃	32	〃	〃	〃	安山岩	540.0	263.0	308.0	51.10	完存
〃	33	うき	〃	〃	軽石	230.0	222.0	171.0	3.15	
52	34	砥石	D—10	井戸— 1	頁岩	27.5	62.0	46.5	92.20	
86	35	石鏃	D— 9	土壙—24	サヌカイト	37.0	17.0	6.0	4.03	完存
〃	36	石錐	〃	〃	〃	39.0	7.0	4.5	1.20	〃
92	37	石鏃	〃	土壙—29	〃	36.5	11.0	4.5	1.62	〃
138	38	〃	D—11	土壙—59	〃	32.0	13.5	5.0	1.95	〃
150	39	うき	〃	土壙—68	軽石	23.0	22.2	17.1	3.15	
157	40	砥石	〃	土壙—75	礫岩	105.0	111.8	117.0	1617.0	
174	41	〃	D— 9	柱穴	細粒花崗岩	201.0	57.0	40.0	864.00	完存
180	42	石錘	〃	弥生時代包含層	石英斑岩	86.0	86.0	63.0	652.00	〃
〃	43	〃	D— 8	〃	細粒閃緑岩	81.5	60.5	26.5	245.40	〃
〃	44	敲石	D— 9	〃	石英斑岩	69.5	56.0	49.5	287.70	〃
〃	45	砥石	D—11	〃	半花崗岩	166.0	117.0	30.5	1211.0	
181	46	石庖丁	D— 6	〃	サヌカイト	108.5	39.0	8.0	38.84	完存
〃	47	〃	E—11	〃	〃	75.0	29.0	8.5	24.26	
〃	48	〃	E—10	〃	〃	52.0	34.0	5.0	13.10	
〃	49	〃	E—11	〃	〃	(47.0)	(31.0)	6.5	8.80	
〃	50	〃	D—11	〃	〃	31.0	42.4	9.3	15.90	
〃	51	〃	E—11	〃	〃	42.0	28.0	5.0	6.60	
〃	52	〃	E—10・11	〃	〃	102.0	50.5	15.0	88.72	未製品
〃	53	石鏃	D— 9	〃	〃	30.0	14.0	3.5	0.90	
〃	54	〃	D—10	〃	〃	30.0	13.5	4.5	1.60	完存
〃	55	〃	D— 9	〃	〃	43.0	17.0	4.0	2.83	〃
〃	56	〃	D—10	〃	〃	35.0	17.0	4.5	2.97	
〃	57	〃	D—11	〃	〃	27.6	15.0	3.4	1.26	完存
〃	58	〃	D— 9	〃	〃	31.0	19.0	4.5	1.95	〃
〃	59	石錐	D—10	〃	〃	77.0	28.5	10.0	14.06	〃
〃	60	石鏃	〃	〃	〃	58.5	16.5	6.0	4.50	〃
〃	61	〃	D—11	〃	〃	33.0	24.4	4.0	1.53	〃
〃	62	〃	D—10	〃	〃	45.0	20.0	5.5	4.75	〃
〃	63	石錐	D—11	〃	〃	41.7	15.2	6.4	3.50	〃
208	64	双孔円板	サイフォン	古墳時代包含層	滑石	26.0	—	3.8	4.80	〃
〃	65	紡錘車	D—11	〃	〃	—	39.0	19.0	19.24	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	備考
251	66	石鍋	E－8	中世包含層	滑石	—	—	11.0	41.82	
〃	67	〃	D－7	〃	〃	—	—	29.0	162.60	
〃	68	〃	—	〃	〃	—	—	27.5	77.20	
〃	69	〃	—	〃	〃	—	—	20.0	124.22	
〃	70	〃	D－6	〃	〃	—	—	19.5	12.02	
〃	71	〃	E－7	〃	〃	—	—	14.0	19.37	
〃	72	〃	E－11	〃	〃	—	—	15.0	12.11	
〃	73	〃	D－12	〃	〃	51.2	49.4	24.8	52.74	
252	74	敲石	D－13	〃	玢岩	145.7	70.6	69.1	1157.0	完存
〃	75	石錘	D－11	〃	粗粒珪長岩	95.0	73.0	66.0	680.00	〃
〃	76	砥石	D－10	〃	砂岩	115.0	125.0	51.0	872.00	
〃	77	〃	D－12	〃	凝灰岩	60.5	31.6	31.7	61.20	
〃	78	〃	〃	〃	〃	37.0	33.0	18.9	32.20	
〃	79	〃	D－10	〃	砂岩	80.4	65.5	19.0	159.80	
〃	80	〃	D－12	〃	〃	85.8	68.5	52.3	476.00	
〃	81	〃	E－9	〃	流紋岩	50.6	36.2	23.2	51.00	
〃	82	〃	E－11	〃	粘板岩	31.3	35.0	8.0	15.60	
〃	83	〃	F－12	〃	凝灰岩	31.5	34.5	7.0	9.40	
〃	84	〃	E－10	〃	頁岩	33.6	34.4	7.3	13.00	
〃	85	〃	D－12	〃	粘板岩	77.2	49.0	13.8	61.90	
		石庖丁	D－11	土壙－27	サヌカイト	33.3	70.0	3.4	1.04	
		〃	E－10	包含層	〃	27.2	29.0	6.3	6.33	
		〃	D－10	〃	〃	50.3	47.0	7.8	20.00	
		〃	〃	〃	〃	41.4	39.9	6.4	12.00	
		〃	〃	〃	〃	48.0	25.5	5.4	7.50	
		〃	D－8	〃	〃	29.0	31.0	6.0	3.12	
		〃	E－8	〃	〃	27.5	30.0	7.0	5.60	
		〃	D－8	溝－2	〃	16.0	10.0	6.5	1.22	
		〃	D－9	柱穴	〃	18.5	31.5	9.5	3.81	
		石鏃	E－10	竪穴式住居－11	〃	19.3	21.4	3.0	1.34	
		〃	D－11	竪穴式住居－16	〃	31.0	14.8	2.8	1.33	完存
		〃	E－10	柱穴	〃	38.1	17.0	4.8	3.42	
		〃	〃	竪穴式住居－13	〃	37.9	16.0	4.8	2.53	
		〃	〃	〃	〃	26.2	25.0	3.1	1.76	
		〃	〃	〃	〃	23.8	13.5	4.2	1.12	
		〃	〃	竪穴式住居－11	〃	19.0	16.8	3.6	0.71	完存
		〃	D－11	竪穴式住居－16	〃	33.4	14.6	4.6	2.36	〃
		〃	〃	〃	〃	16.0	14.8	3.4	0.63	
		〃	〃	〃	〃	49.0	19.0	6.0	4.50	
		〃	〃	土壙－63	〃	24.4	14.3	2.7	0.97	完存
		〃	〃	柱穴	〃	27.7	15.8	3.3	1.96	
		〃	〃	〃	〃	32.0	14.0	5.3	2.42	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
		石鏃	D—11	包含層	サヌカイト	26.2	16.3	5.4	2.00	
		〃	〃	〃	〃	31.0	16.9	6.0	3.11	完存
		〃	〃	〃	〃	38.0	24.8	3.3	2.66	〃
		〃	〃	〃	〃	34.7	14.4	4.6	2.04	〃
		〃	〃	〃	〃	12.0	10.8	2.4	0.30	
		〃	D—10	〃	〃	33.0	15.0	5.0	2.65	
		〃	〃	〃	〃	29.0	18.5	4.5	3.50	
		〃	D— 9	〃	〃	23.5	27.0	7.0	5.07	
		〃	D—10	土壙	〃	19.5	15.0	2.5	0.70	
		〃	E—10	包含層	〃	26.5	12.0	3.0	1.10	
		〃	E—11	〃	〃	21.0	18.0	3.0	1.26	完存
		〃	D—11	〃	〃	26.5	14.0	3.0	1.26	〃
		〃	D—10	〃	〃	40.0	18.0	3.0	2.80	
		〃	D— 8	溝—25	〃	24.0	16.0	4.0	1.64	
		〃	〃	包含層	〃	24.0	17.0	3.5	1.44	完存
		〃	〃	柱穴	〃	31.0	15.5	3.5	1.56	〃
		〃	〃	土壙	〃	15.5	13.5	2.0	0.45	
		〃	D—8・9	包含層	〃	21.0	13.5	4.5	1.27	
		〃	D— 8・9	竪穴式住居— 4	〃	20.0	13.5	4.0	0.97	完存
		〃	D— 9	〃	〃	17.5	12.5	2.5	0.44	
		〃	〃	〃	〃	34.5	16.0	5.0	2.23	完存
		〃	〃	竪穴式住居— 7	〃	30.0	14.0	4.0	1.55	
		〃	〃	〃	〃	27.5	12.5	2.5	1.14	
		〃	〃	竪穴式住居— 6	〃	21.0	10.0	3.5	0.70	
		〃	〃	溝—18	〃	35.5	19.0	4.5	3.15	完存
		〃	〃	〃	〃	25.0	22.5	4.5	2.51	
		〃	〃	包含層	〃	25.0	15.0	4.0	1.33	完存
		〃	〃	〃	〃	21.0	12.5	2.5	0.90	
		〃	〃	〃	〃	40.5	15.5	4.5	2.84	
		石錐	E—10	柱穴	〃	36.4	18.9	10.6	5.66	
		〃	D— 9	包含層	〃	24.0	14.0	4.0	1.37	
		スクレイパー	D—11	竪穴式住居—16	〃	54.0	44.7	8.2	24.03	
		〃	〃	〃	〃	43.4	39.6	6.6	12.32	
		〃	〃	包含層	〃	24.6	22.5	5.8	2.83	
		〃	E—11	柱穴	〃	51.0	35.0	6.0	13.92	
		〃	D—10	竪穴式住居—13	〃	26.0	22.0	6.1	4.87	
		〃	〃	〃	〃	21.0	30.4	6.6	4.05	
		〃	〃	〃	〃	32.8	17.0	7.0	3.45	
		〃	〃	〃	〃	20.0	21.7	3.3	1.78	
		〃	〃	包含層	〃	47.0	40.9	6.0	14.02	
		石槍	—	排土中	〃	41.0	25.0	6.5	8.27	
		〃	D— 9	包含層	〃	24.3	27.7	9.7	6.36	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
		石槍	D−10	包含層	サヌカイト	29.2	31.2	10.4	11.66	
		楔？	D− 9	〃	〃	16.5	18.6	5.7	2.82	
		〃	〃	〃	〃	9.8	16.5	3.8	0.91	
		砥石	D−11	土壙−62	頁岩	150.0	87.8	50.8	519.00	
		〃	E− 9	包含層	粘板岩	32.5	28.2	6.1	6.48	
		〃	E−11	〃	〃	32.3	32.9	8.3	11.36	
		〃	D−11	土壙−69	細粒花崗岩	291.0	219.0	57.2	4320.0	
		〃	E− 9	包含層	粘板岩	34.3	24.0	7.5	9.28	
		〃	D−11	柱穴	流紋岩	50.0	80.4	30.0	133.43	
		〃	〃	包含層	細粒花崗岩	76.5	55.0	81.7	425.00	
		〃	D−12	〃	粘板岩	83.3	54.5	7.8	48.76	完存
		〃	D−10	〃	半花崗岩	54.4	63.0	13.8	46.22	
		〃	E− 7	〃		—	—	—	20.83	
		〃	E− 8	〃	流紋岩	147.0	59.0	42.5	401.00	
		〃	〃	〃	頁岩	90.0	72.5	44.0	134.10	
		〃	E− 7	〃	凝灰岩	59.0	54.0	33.0	100.95	
		敲石	E− 9	〃	安山岩	90.7	68.8	13.8	139.10	完存
		〃	D−11	〃	細粒花崗岩	108.8	40.9	16.4	128.90	〃
		〃	〃	〃	閃緑岩	69.2	50.5	52.4	211.70	〃
		〃	〃	土壙−86	細粒花崗岩	56.6	53.4	27.6	106.70	〃
		〃	〃	竪穴式住居−16	細粒閃緑岩	39.2	17.5	10.9	11.50	
		〃	D−10	井戸− 1	細粒花崗岩	77.0	61.0	32.0	192.40	
		〃	〃	〃	花崗岩	81.5	70.0	48.5	368.00	
		〃	〃	包含層	流紋岩	104.0	51.5	18.0	126.20	
		〃	E−10	土壙−47	砂岩	57.5	53.0	44.0	195.71	
		〃	E−11	土壙−40	〃	158.0	50.0	39.0	509.00	
		〃	D− 9	竪穴式住居−24	花崗岩	99.5	94.0	34.5	456.00	
		〃	〃	竪穴式住居− 6	安山岩	134.0	49.0	28.0	220.60	
		〃	D−10	竪穴式住居−13	細粒閃緑岩	58.0	23.0	9.0	17.70	
		すり石	D−11	包含層	砂岩	49.7	49.6	22.9	45.60	
		〃	〃	〃	頁岩	86.0	87.2	36.4	522.00	
		〃	〃	〃	〃	116.0	91.1	45.6	298.70	完存
		石錘	E−10	土壙	細粒花崗岩	103.0	64.0	43.0	425.00	
		〃	D−11	包含層	花崗岩	45.0	35.0	27.5	58.90	
		〃	D− 9	竪穴式住居− 4		88.0	75.0	44.0	408.00	
		うき	D−11	柱穴	軽石	36.3	32.6	18.8	3.46	
		〃	〃	包含層	〃	34.7	26.8	26.5	6.12	
		石鍋	D−12	〃	滑石	41.0	35.8	11.8	—	
		〃	E− 7	〃	〃	—	—	12.0	20.76	
		〃	E− 8	〃	〃	—	—	10.5	39.49	
		石庖丁	〃	〃	サヌカイト	27.5	30.0	7.0	5.60	

表—20　中須賀調査区金属器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
19	1	鉇	D— 8	竪穴式住居— 4	鉄	2.65	1.20	0.40	2.24	
〃	2	鏃	〃	〃	〃	4.20	1.75	0.25	7.30	
〃	3	〃	〃	〃	青銅	2.25	0.80	0.30	2.12	
〃	4	〃	〃	〃	〃	1.50	1.30	0.25	1.22	
21	5	〃	D— 9	竪穴式住居— 6	鉄	2.85	0.85	0.20	1.60	
〃	6	不明	〃	〃	〃	6.05	1.10	3.50	4.45	
24	7	鏃	〃	竪穴式住居— 7	〃	3.05	2.35	0.25	6.80	
〃	8	不明	〃	〃	〃	2.90	0.80	0.35	1.68	
30	9	〃	〃	竪穴式住居— 8	〃	2.25	0.65	0.30	0.70	
〃	10	〃	〃	〃	〃	2.85	0.40	0.20	1.18	
33	11	〃	D—10	竪穴式住居—10	〃	2.30	1.05	0.45	3.81	
34	12	〃	E—10	竪穴式住居—11	〃	1.90	1.20	0.18	—	
44	13	鏃	D—11	竪穴式住居—16	青銅	3.80	1.20	0.30	—	
〃	14	〃	〃	〃	〃	—	1.00	0.25	—	
〃	15	〃	〃	〃	〃	2.25	0.45	0.20	—	
〃	16	〃	〃	〃	鉄	2.85	2.40	0.55	4.20	
〃	17	不明	〃	〃	〃	2.76	1.60	0.25	2.47	
〃	18	鏃？	〃	〃	〃	2.60	1.70	0.48	4.50	
〃	19	鏃	〃	〃	〃	2.46	1.70	0.35	2.95	
〃	20	刀子？	〃	〃	〃	3.65	1.64	0.37	3.56	
〃	21	不明	〃	〃	〃	2.42	1.13	0.37	1.67	
〃	22	鉇	〃	〃	〃	1.39	0.71	0.19	0.27	
〃	23	不明	〃	〃	〃	5.16	0.57	0.52	28.60	
〃	24	茎？	〃	〃	〃	4.53	0.64	0.62	4.30	
〃	25	不明	〃	〃	〃	4.54	0.51	0.47	3.20	
〃	26	鏃	〃	〃	〃	3.46	1.05	0.30	2.74	
〃	27	不明	〃	〃	〃	2.88	1.10	0.45	1.60	
〃	28	〃	〃	〃	〃	2.05	0.73	0.68	1.54	
〃	29	刀子？	〃	〃	〃	2.24	0.94	0.43	1.67	
〃	30	茎？	〃	〃	〃	2.84	0.89	0.65	3.00	
〃	31	不明	〃	〃	〃	3.00	0.30	0.30	0.50	
〃	32	〃	〃	〃	〃	2.31	0.93	0.62	1.00	
〃	33	〃	〃	〃	〃	3.43	0.77	0.52	1.71	
〃	34	〃	〃	〃	〃	7.15	1.85	0.47	20.20	
88	35	鏃	D— 8	土壙—26	〃	4.20	1.50	0.30	4.62	
119	36	〃	D—10	土壙—45	青銅	4.00	1.40	0.30	1.31	
122	37	〃	E—10	土壙—47	鉄	1.80	1.05	0.25	0.86	
〃	38	不明	〃	〃	〃	1.90	1.50	0.25	1.84	
〃	39	鉇	〃	〃	〃	4.30	0.70	0.40	0.92	
133	40	鏃	D—11	土壙—55	〃	2.60	1.46	0.34	1.99	
154	41	〃	〃	土壙—72	〃	5.80	2.50	0.39	12.13	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
167	42	鏡	E—11	土壙—84	青銅	8.70	—	0.60	77.95	
〃	43	鉇？	〃	〃	鉄	4.90	0.95	0.30	4.65	
174	44	不明	D—11	柱穴	〃	2.85	0.60	0.50	—	
〃	45	〃	D— 9	〃	〃	1.80	0.65	0.50	0.82	
179	46	鏃	D—10	包含層	〃	2.20	1.40	0.40	1.48	
〃	47	〃	〃	〃	〃	3.20	2.10	0.35	6.71	
〃	48	不明	〃	〃	〃	2.20	1.00	0.25	1.13	
〃	49	鏃	〃	〃	青銅	1.85	0.70	0.30	0.93	
〃	50	不明	D—11	〃	鉄	3.25	1.90	0.30	9.90	
189	51	鏃	D— 9	竪穴式住居—23	〃	3.80	1.60	0.60	6.10	
〃	52	刀子	〃	〃	〃	4.50	1.60	0.60	8.61	
192	53	鏃	〃	竪穴式住居—24	〃	3.05	2.35	0.20	3.64	
〃	54	不明	〃	〃	〃	5.20	1.00	0.25	8.42	
〃	55	〃	〃	〃	〃	4.25	0.55	0.30	2.00	
〃	56	〃	〃	〃	〃	1.90	0.40	0.30	0.58	
〃	57	〃	〃	〃	〃	2.40	0.80	0.20	1.50	
198	58	〃	D—11	竪穴式住居—26	〃	3.40	0.50	0.30	1.24	
〃	59	〃	〃	〃	〃	4.20	1.00	0.50	3.92	
〃	60	〃	〃	〃	〃	3.70	0.80	0.47	1.61	
208	61	〃	〃	包含層	〃	4.10	1.60	0.50	—	
219	62	釘	E— 5	土壙—99	〃	4.30	0.65	0.50	—	
〃	63	〃	〃	〃	〃	3.70	0.30	0.30	—	
〃	64	〃	〃	〃	〃	3.80	0.40	0.35	1.42	
222	65	不明	D—11	土壙—104	〃	4.20	0.80	0.40	5.73	
232	66	釘	D— 8	溝—25	〃	6.80	0.70	0.70	—	
〃	67	鋤先	〃	〃	〃	9.80	6.10	1.20	—	
〃	68	鎹	〃	〃	〃	8.40	0.65	0.60	—	
251	69	古銭	D—13	包含層	銅	2.39	2.39	0.14	3.20	「治平元寶」
〃	70	〃	D—11	〃	〃	2.37	2.37	0.13	2.90	「皇宋通寶」
〃	71	〃	F—10	〃	〃	2.46	2.46	0.14	2.35	「治平元寶」
〃	72	〃	D—11	柱穴	〃	2.55	2.55	0.14	2.85	「元豊通寶」
252	73	釘	E—12	包含層	鉄	4.20	0.80	1.30	—	
〃	74	〃	E— 7	〃	〃	5.30	1.00	0.80	1.50	
〃	75	〃	E— 8	〃	〃	4.15	0.70	0.60	3.00	
〃	76	〃	〃	〃	〃	3.20	1.30	1.20	5.96	
〃	77	〃	D—11	〃	〃	4.10	1.35	1.00	20.15	
〃	78	〃	E— 8	〃	〃	6.40	1.30	1.10	7.48	
〃	79	〃	E— 6	〃	〃	5.10	1.10	0.90	9.30	
〃	80	〃	〃	〃	〃	3.50	1.20	1.20	7.50	
〃	81	〃	E— 8	〃	〃	4.40	0.80	0.80	6.52	
〃	82	〃	〃	〃	〃	4.50	1.00	0.80	5.32	
〃	83	〃	〃	〃	〃	3.30	0.75	0.50	2.62	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
252	84	釘	D−12	包含層	鉄	3.70	0.50	0.50	2.02	
〃	85	〃	E−11	〃	〃	4.20	0.80	0.70	3.14	
〃	86	〃	D− 8	〃	〃	3.40	0.90	0.50	4.05	
〃	87	〃	E− 9	〃	〃	5.40	0.70	0.70	8.85	
〃	88	〃	D−11	〃	〃	3.75	1.10	0.90	6.27	
〃	89	〃	E−10	〃	〃	5.90	0.90	0.65	22.01	
〃	90	鎹	E− 7	〃	〃	5.00	0.65	0.45	6.20	
〃	91	鎌	D−11	〃	〃	5.30	2.80	0.30	11.41	
〃	92	釘	E−11	〃	〃	2.40	0.80	0.70	2.70	
〃	93	掛金具	D−11	〃	〃	5.30	0.55	0.55	6.14	
		釘	E− 4	〃	〃	3.20	1.00	0.50	3.13	
		不明	〃	〃	〃	4.30	0.70	0.30	4.50	
		釘	E− 5	〃	〃	4.30	0.80	0.60	5.77	
		〃	〃	〃	〃	2.10	0.55	0.50	1.42	
		不明	〃	〃	〃	4.15	0.70	0.30	2.20	
		釘	E− 6	〃	〃	3.20	0.90	0.50	4.35	
		〃	〃	〃	〃	3.60	0.85	0.50	2.75	
		〃	D− 6	〃	〃	2.90	0.40	0.30	1.12	
		〃	E− 7	〃	〃	3.40	0.70	0.65	5.03	
		〃	〃	〃	〃	2.35	0.85	0.60	1.43	
		〃	〃	〃	〃	2.00	1.05	0.85	3.80	
		〃	〃	〃	〃	3.00	0.75	0.55	1.43	
		〃	〃	〃	〃	5.20	0.70	0.60	3.80	
		〃	〃	〃	〃	2.60	1.00	0.70	3.10	
		〃	〃	〃	〃	3.05	0.90	0.55	2.60	
		〃	〃	〃	〃	4.10	1.00	0.75	6.50	
		〃	〃	〃	〃	3.90	0.65	0.40	1.70	
		不明	〃	〃	〃	3.35	1.05	0.85	7.22	
		〃	〃	〃	〃	1.80	0.65	0.65	1.10	
		〃	〃	〃	〃	4.60	0.90	0.90	6.75	
		〃	〃	〃	〃	3.95	0.60	0.30	1.80	
		〃	〃	〃	〃	5.20	1.10	0.30	4.48	
		〃	D− 7	〃	〃	3.60	0.65	0.40	4.25	
		釘	〃	〃	〃	5.20	0.70	0.50	5.65	
		〃	〃	柱穴	〃	1.80	0.30	0.30	0.36	
		〃	E− 8	包含層	〃	4.80	0.80	0.55	4.48	
		〃	〃	〃	〃	3.55	0.70	0.70	3.43	
		〃	〃	〃	〃	3.60	0.70	0.60	2.21	
		不明	〃	〃	〃	4.20	2.50	1.10	16.60	
		〃	〃	〃	〃	2.95	1.80	0.55	5.18	
		鋤先	〃	〃	〃	10.00	6.30	0.90	20.40	
		〃	〃	〃	〃	6.40	3.33	0.40	13.37	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
		不明	D— 8	柱穴	鉄	1.40	1.00	0.90	1.63	
		〃	〃	溝—25	〃	3.70	2.80	0.50	11.20	
		〃	〃	包含層	〃	3.60	2.50	1.40	36.22	
		鏃？	E— 9	〃	〃	5.18	0.79	0.58	6.10	
		釘	〃	〃	〃	6.87	0.75	0.52	11.41	
		〃	〃	〃	〃	5.70	1.60	1.40	21.71	
		〃	〃	〃	〃	4.04	1.10	0.45	11.67	
		〃	〃	〃	〃	5.88	1.60	1.30	17.54	
		〃	〃	〃	〃	3.90	1.10	0.60	3.67	
		〃	〃	〃	〃	2.67	1.10	1.00	3.01	
		〃	〃	〃	〃	7.78	1.10	0.60	14.77	
		〃	〃	〃	〃	4.17	0.80	0.65	5.27	
		不明	D— 9	竪穴式住居—24	〃	3.00	1.00	0.30	7.00	
		〃	〃	柱穴	〃	4.10	3.50	1.15	25.38	
		〃	〃	包含層	〃	3.15	2.60	0.90	10.86	
		〃	〃	〃	〃	2.70	1.20	0.50	2.31	
		〃	〃	〃	〃	4.20	2.20	0.80	7.71	
		タガネ	〃	〃	〃	3.50	1.40	0.70	7.50	
		釘	〃	〃	〃	3.80	1.30	1.20	8.24	
		不明	E—10	〃	〃	5.40	5.04	6.60	23.41	
		釘	〃	〃	〃	3.50	1.00	0.90	4.62	
		不明	D—10	柱穴	〃	4.20	1.10	0.70	5.47	
		〃	〃	包含層	〃	3.25	2.00	0.60	7.30	
		〃	〃	溜池状遺構	〃	5.30	3.20	1.00	34.93	
		〃	E—11	近世溝	〃	3.94	2.46	0.64	14.05	
		〃	〃	包含層	〃	3.20	2.20	1.35	13.11	
		〃	〃	〃	〃	2.57	0.63	0.62	2.53	
		〃	〃	〃	〃	2.10	0.72	0.52	1.12	
		〃	〃	〃	〃	1.97	0.62	0.59	1.53	
		〃	〃	〃	〃	2.95	1.92	0.59	5.14	
		〃	〃	〃	〃	2.31	2.05	0.40	4.83	
		〃	〃	〃	〃	2.70	1.95	0.85	4.61	
		〃	〃	〃	〃	2.45	1.90	0.46	5.11	
		〃	〃	〃	〃	3.88	0.80	0.40	6.20	
		〃	〃	〃	〃	2.55	1.12	0.81	4.90	
		〃	〃	〃	〃	4.80	3.20	0.80	16.77	
		釘	〃	〃	〃	1.67	0.72	0.60	1.16	
		〃	〃	〃	〃	3.57	0.82	0.60	5.81	
		〃	〃	〃	〃	3.52	1.25	0.85	13.12	
		〃	〃	〃	〃	3.72	0.70	0.55	3.40	
		〃	〃	〃	〃	3.56	1.15	0.95	5.42	
		〃	〃	〃	〃	4.40	1.55	0.95	20.15	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
		釘	E—11	包含層	鉄	4.96	1.34	1.14	12.02	
		〃	〃	〃	〃	1.85	0.30	0.30	0.80	
		〃	〃	〃	〃	4.80	1.30	1.15	8.78	
		〃	〃	〃	〃	4.61	0.45	0.45	2.30	
		〃	〃	〃	〃	4.54	1.20	0.90	10.25	
		〃	〃	〃	〃	2.25	1.30	0.45	8.28	
		鋤先	〃	〃	〃	6.50	4.40	1.60	82.20	
		鏃	〃	〃	〃	2.90	1.60	0.30	2.28	
		〃	〃	〃	〃	4.28	2.00	3.40	5.78	
		〃	D—11	竪穴式住居—16	〃	—	1.60	0.45	3.64	
		〃	〃	〃	〃	4.62	2.44	0.33	6.25	
		不明	〃	〃	〃	—	1.90	0.50	6.10	
		釘	〃	柱穴	〃	5.68	1.20	1.20	8.11	
		〃	〃	〃	〃	7.25	1.40	1.20	17.12	
		〃	〃	包含層	〃	4.50	0.50	0.50	3.62	
		〃	〃	〃	〃	4.36	1.20	1.10	11.10	
		〃	〃	〃	〃	5.36	0.80	0.70	8.63	
		鋤先	〃	〃	〃	7.57	3.74	0.98	48.37	
		不明	〃	〃	〃	4.54	3.20	1.80	19.20	
		〃	〃	〃	〃	4.53	4.43	0.68	28.90	
		釘	D—12	〃	〃	2.69	1.15	1.10	4.50	
		鋤先	D—13	現代溝	〃	7.07	3.73	1.34	34.90	
		不明	E— 9	包含層	青銅	6.66	1.40	0.58	7.93	
		鏃	D—11	竪穴式住居—26	〃	1.40	0.65	0.50	—	
		古銭	E— 8	包含層	銅	—	—	0.13		「熙寧元寶」
		〃	E—11	〃	〃	2.45	2.45	0.12	2.60	「皇宋通寶」
		釘	D— 7	柱穴	鉄	4.20	1.00	0.80	6.30	
		〃	D— 9	溝—25	〃	3.65	0.60	0.55	2.29	
		不明	〃	〃	〃	2.20	1.55	0.60	3.94	
		釘	〃	〃	〃	2.70	1.20	0.90	4.61	
		〃	〃	〃	〃	3.33	0.65	0.55	2.64	
		〃	〃	〃	〃	3.20	0.75	0.60	3.32	
		〃	〃	〃	〃	5.40	0.75	0.60	5.32	
		〃	〃	〃	〃	6.85	0.80	0.60	9.92	
		不明	D— 8	〃	〃	4.25	2.30	0.75	7.83	

表—21　中須賀調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
包含層（第5図）									
1	深鉢形土器	—	—	—	○口縁部外面にキザミメのある凸帯がある。	褐灰色	細砂	良好	○小破片。
土壙—1（第7図）									
2	壺形土器	—	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
3	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
4	甕形土器	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
5	底部	—	9.0	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	褐灰色	〃	〃	○壺形土器？
6	〃	—	8.0	—	○外面は斜位のヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	○壺形土器。
土壙—2（第10図）									
7	壺形土器	—	—	—	○頸部の沈線部分は削り出し。	黄橙色	細砂	良好	○小破片。
8	甕形土器	21.8	7.1	24.4	○口縁部近くに段がある。	〃	〃	〃	○底部穿孔。
9	〃	21.6	6.5	24.8	○頸部に1本の沈線がある。	〃	〃	〃	〃
10	壺形土器	—	10.4	—	○外面はハケメ。	〃	〃	〃	○小破片。
11	鉢形土器	12.6	—	—		〃	〃	〃	〃
12	甕形土器	—	—	—	○頸部に1本の沈線がある。	〃	〃	〃	〃
13	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
土壙—3（第11図）									
14	壺形土器	17.0	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	
15	〃	—	8.5	—		鈍い橙色	〃	〃	
16	甕形土器	—	8.6	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
17	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	
18	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
19	〃	21.2	7.6	21.1	○外面ハケメ。内面ハケメのちユビナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
溝—1（第12図）									
20	甕形土器	11.4	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
21	底部	6.2	—	—		〃	〃	〃	〃
22	高杯形土器	11.5	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
23	器台形土器	—	—	—		〃	〃	〃	
包含層（第13図）									
24	甕形土器	9.8	—	—	○口縁部に凹線文。	鈍い橙色	細砂、雲母	良好	
25	鉢形土器	13.4	—	—	○玉縁の口縁。	黄橙色	〃	〃	
26	器台形土器	—	20.0	—	○矢の羽の透し。	浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。
竪穴式住居—1（第15図）									
27	甕形土器	13.0	—	—		黄灰色	砂粒含	良好	○外面煤付着。
28	〃	20.5	—	—		赤橙灰色	微砂混	〃	
29	〃	—	10.0	—	○肩部外面ナデ。	淡褐灰色	砂粒含	〃	○肩部打ち欠きによる再利用。
30	〃	16.0	—	—		淡赤橙色	〃	〃	
31	〃	12.0	3.5	13.0	○外面に軽いヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	〃	
32	〃	—	4.5	—	○底部外面ハケメ。	赤橙色	微砂混	普通	○黒斑。
33	高杯形土器	18.0	—	—		淡褐灰色	精製粘土	良好	
34	〃	15.0	—	—		赤橙色	〃	〃	
35	鉢形土器	12.0	6.0	10.0	○口縁部内面はハケメ後にナデ。	灰白色	砂粒含	〃	○黒斑。
36	〃	15.0	—	—		黄灰色	〃	〃	
37	台付鉢形土器	—	5.0	—	○鉢部内面はナデ。	赤橙色	〃	〃	○製塩土器。
38	〃	—	5.0	—		褐灰色	〃	〃	〃
39	小型壺形土器	—	1.0	—	○ナデ。	灰褐色	金雲母含	〃	
竪穴式住居—3（第16図）									
40	甕形土器	15.0	—	—	○胴部内面はヘラケズり。	黄橙色	砂粒含	普通	○外面剥落。
41	〃	14.0	—	—	〃	〃	微砂混	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
42	甕形土器	13.0	—	—	○外面はナデ。	淡黄橙色	微砂含	良好	
43	〃	14.5	—	—	○胴部外面はタテハケメ。	淡褐灰色	微砂混	普通	
44	〃	13.5	—	—		灰白色	微砂多含	〃	
45	〃	—	5.0	—	○底部外面はハケメ。	黄橙色	砂粒含	良好	○黒斑。
46	〃	—	5.5	—	○底部穿孔は焼成前。	灰褐色	微砂混	〃	
47	台付鉢形土器	10.0	—	—		〃	砂粒含	〃	
48	〃	—	4.0	—		赤白色	〃	〃	○製塩土器。
49	〃	—	—	—		暗灰色	砂粒多含	普通	〃
50	底部	—	11.0	—	○底部外面はナデ。	黄橙色	砂礫含	良好	
51	鉢形土器	33.0	9.5	18.0		淡黄橙色	砂粒含	〃	

竪穴式住居—4 （第18図）

52	壺形土器	11.6	—	—	○頸部は縦位のハケメ。	黄橙色	細砂	良好	○小破片。
53	〃	—	—	—	○頸部に凸帯あり。	浅黄橙色	〃	〃	〃
54	甕形土器	8.3	—	—		橙色	〃	〃	〃
55	〃	9.3	—	—		鈍い橙色	微砂	〃	〃
56	〃	15.8	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
57	〃	17.2	—	—		〃	細砂	〃	○土壙中出土。
58	〃	18.8	—	—	○口唇部にキザミメ。胴部にタタキメ。	〃	〃	〃	〃
59	〃	14.5	—	—	○端部が角張る。	鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
60	底部	—	5.0	—	○底部はヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	〃	○土壙中出土。
61	鉢形土器	8.0	—	—		浅黄橙色	細砂	〃	○小破片。
62	〃	12.0	—	—	○外面はハケメ。	〃	〃	〃	○土壙中出土。
63	〃	11.5	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	
64	底部	—	—	—	○底部は瘤状を呈する。	〃	精製粘土	〃	
65	〃	—	9.2	—		浅黄橙色	細砂	〃	○土壙中出土。
66	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	
67	〃	—	6.6	—		黄橙色	〃	〃	○床面出土。
68	高杯形土器	18.3	—	—	○口縁部の湾曲が少ない。	〃	精製粘土	〃	
69	〃	16.2	—	—	○杯部は深い。	〃	〃	〃	○土壙中出土。
70	〃	10.9	—	—	○口縁部はほぼ直立する。	橙色	〃	〃	〃
71	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
72	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	
73	〃	—	—	—		橙色	〃	〃	
74	〃	—	12.4	—		淡赤橙色	微砂	〃	
75	台付鉢形土器	—	3.8	—		黄橙色	精製粘土	〃	○表面磨滅。
76	直口壺形土器	9.2	—	—		〃	〃	〃	

竪穴式住居—6 （第22・23図）

77	直口壺形土器	6.5	—	—		黄橙色	精製粘土	良好	
78	壺形土器	13.5	—	—	○内外面ともナデ。	淡灰褐色	砂粒含	普通	
79	〃	15.5	—	—	〃	淡橙灰色	〃	良好	
80	甕形土器	13.3	4.0	18.5		灰褐色	砂礫含	普通	
81	〃	10.8	—	—		灰白色	砂粒含	良好	○黒斑。
82	〃	14.5	—	—	○内外面ともナデ。	黄橙色	微砂混	〃	
83	〃	18.5	—	—		赤橙色	精製粘土	普通	
84	〃	15.5	—	—	○胴部外面はナデ。	淡黄灰色	砂粒含	良好	
85	〃	15.0	—	—		黄橙色	微砂多含	普通	○剝落顕著。
86	〃	17.5	—	—		淡橙灰色	〃	〃	
87	〃	15.5	—	—		灰白色	〃	〃	
88	〃	14.0	—	—		灰褐色	微砂混	良好	
89	〃	15.0	—	—		淡黄橙色	微砂含	普通	○剝落顕著。
90	〃	23.0	—	—	○胴部外面は平行タタキ後にハケメ。	淡灰褐色	砂粒含	〃	
91	鉢形土器	10.0	—	—	○内面はナデ。	淡赤橙色	砂粒多含	〃	○製塩土器。
92	〃	—	—	—	○内外面とも指頭によるオサエ。	淡灰橙色	精製粘土	〃	
93	台付鉢形土器	—	5.0	—	○鉢部内面はナデ。	淡黄橙色	砂粒含	〃	○製塩土器。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
94	台付鉢形土器	—	3.5	—		赤灰色	砂粒多含	普通	○製塩土器。
95	〃	—	4.5	—		〃	砂粒含	〃	〃
96	〃	—	2.5	—		〃	砂粒多含	〃	〃
97	〃	—	2.0	—		〃	〃	〃	〃
98	底部	—	2.0	—	○内面はハケメ後にナデ。	灰白色	微砂混	〃	○黒斑。
99	〃	—	2.5	—		灰褐色	微砂含	〃	○外面剝落。
100	〃	—	3.5	—	○外面はナデ。	淡橙灰色	砂粒含	〃	
101	〃	—	7.5	—	○底部外面はナデ。	淡赤灰色	〃	〃	○黒斑。
102	〃	—	6.0	—	○底部穿孔は焼成後。	赤褐灰色	〃	良好	
103	台部	—	4.5	—		淡黄橙色	〃	〃	
104	〃	—	5.0	—	○内外面ともナデ。	灰白色	〃	普通	
105	〃	—	4.5	—		〃	〃	〃	○外面剝落。
106	〃	—	7.0	—		褐橙色	〃	〃	
107	底部	—	4.5	—		黒灰色	〃	〃	
108	〃	—	3.0	—		灰白色	砂粒多含	良好	○黒斑。
109	小型壺形土器	4.5	2.5	6.2	○内外面ともナデ。	褐灰色	微砂多含	普通	
110	小型土器	—	2.5	—	○内面はナデ。	明橙色	精製粘土	良好	
111	〃	—	2.0	—	○内外面とも丁寧なナデ。	灰橙色	〃	〃	
112	底部	—	10.5	—		黄橙色	微砂若干	普通	○黒斑。
113	鉢形土器	26.5	—	—		〃	精製粘土	〃	
114	〃	26.0	—	—	○内外面ともナデ。	淡黄橙色	微砂若干	良好	○黒斑。
115	〃	15.5	—	—	〃	赤橙色	精製粘土	普通	
116	〃	13.5	—	—	〃	黄橙色	〃	良好	
117	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	○剝落顕著。
118	〃	9.5	—	—	○外面は縦方向ナデ。	赤黄橙色	砂粒含	普通	
119	台付鉢形土器	10.5	3.0	7.5	○内外面ともナデ。	灰色	砂粒多含	〃	○黒斑。
120	〃	—	9.0	—	○内外面ともハケメ後にナデ。	淡灰橙色	砂粒含	良好	
121	〃	11.5	—	—	○内外面ともナデ。	淡赤橙色	〃	〃	
122	鉢形土器	16.0	3.5	8.6	〃	淡黄橙色	微砂含	普通	○黒斑。
123	〃	17.0	—	—		黄橙色	微砂混	〃	〃
124	台付鉢形土器	14.0	7.0	10.5	○口縁部と台部は横位のナデ。	淡赤灰色	精製粘土	良好	
125	高杯形土器	17.0	—	—	○内外面ともナデ。	黄橙色	〃	普通	
126	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	○黒斑。
127	〃	23.0	—	—	○内外面とも丹塗り。	赤橙色	微砂含	良好	○外面剝落。
128	〃	14.0	—	—		〃	精製粘土	普通	○剝落顕著。
129	〃	16.0	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
130	〃	—	—	—		赤橙色	〃	〃	〃
131	〃	12.0	—	—		〃	〃	〃	〃
132	〃	—	10.0	—	○外面は縦方向,内面は横方向のナデ。	黄橙色	〃	〃	
133	〃	—	10.5	—		赤橙色	〃	良好	
134	〃	16.0	—	—		淡灰橙色	〃	〃	
135	〃	13.0	—	—		黄橙色	〃	普通	
136	〃	10.5	13.5	10.5		赤黄橙色	〃	〃	
137	〃	10.5	10.5	8.0	○口縁部内面はナデ。	黄橙色	〃	良好	
138	甕形土器	24.0	—	—		淡橙色	石粒多含	普通	

竪穴式住居—7（第25・26図）

139	直口壺形土器	10.0	—	—	○内面はナデ。	赤黄橙色	精製粘土	普通	
140	〃	9.0	—	—		鈍い橙色	〃	良好	
141	甕形土器	13.0	—	—		灰褐色	砂粒含	普通	
142	〃	8.0	—	—	○内外面ともナデ。	褐灰色	〃	〃	
143	〃	19.5	—	—		淡橙灰色	微砂混	〃	
144	〃	16.0	—	—		淡灰褐色	〃	〃	
145	〃	16.5	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
146	〃	16.5	—	—		淡灰褐色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
147	甕形土器	15.0	—	—		灰褐色	微砂含	普通	○外面煤付着。
148	〃	15.0	—	—		淡褐白色	〃	〃	
149	〃	15.5	—	—		淡褐灰色	〃	〃	
150	〃	13.0	—	—		黄橙色	微砂混	〃	
151	〃	16.5	—	—	○口縁部内面に指頭による2本の凹線。	橙褐色	微砂含	〃	○外面煤付着。
152	〃	14.0	—	—		褐灰色	砂粒含	不良	○内面剝落。
153	〃	13.0	—	—		淡褐灰色	微砂含	普通	
154	〃	14.5	—	—		淡橙灰色	〃	良好	
155	〃	15.0	—	—		黄橙色	砂粒含	普通	
156	〃	15.5	—	—		淡褐灰色	微砂若干	〃	
157	〃	16.5	—	—		灰褐色	微砂含	良好	○外面煤付着。
158	〃	13.5	—	—		淡橙灰色	砂粒含	普通	
159	〃	14.5	—	—		黄橙色	〃	〃	
160	〃	18.5	—	—		〃	微砂若干	〃	○剝落顕著。
161	〃	16.0	—	—		浅黄橙色	微砂含	〃	
162	底部	—	2.5	—	○底部穿孔は焼成前。	黄橙色	精製粘土	良好	
163	台部	—	4.0	—	○内面はナデ。	淡黄灰色	砂粒含	普通	
164	〃	—	4.0	—	○体部外面は横方向の平行タタキ。	淡褐灰色	微砂含	〃	
165	底部	—	7.5	—	○底部外面はナデ。	赤橙色	砂粒含	〃	○黒斑。
166	〃	—	4.5	—	○底部外面は平行ヘラミガキ。	暗灰褐色	微砂混	〃	
167	〃	—	5.5	—		淡褐灰色	〃	〃	○黒斑。
168	鉢形土器	39.0	—	—	○外面は横位のナデ。	淡黄橙色	微砂含	〃	
169	小型鉢形土器	6.8	4.5	4.2		暗褐灰色	精製粘土	〃	
170	鉢形土器	30.0	—	—		淡黄橙色	微砂質粘土	〃	○剝落顕著。
171	〃	16.5	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃
172	〃	15.5	—	—	○体部内面は横ヘラケズリ後に丁寧なナデ。	〃	〃	良好	
173	台部	—	13.0	—	○体部内面は丁寧なナデ。	暗赤橙色	微砂若干	〃	
174	鉢形土器	12.5	—	—		淡黄灰色	精製粘土	普通	
175	台付鉢形土器	—	3.0	—	○体部外面はナデ。	淡赤橙色	微砂含	〃	○黒斑。
176	鉢形土器	19.3	—	9.5	○体部外面はヘラミガキか？	鈍い橙色	精製粘土	良好	
177	〃	17.5	4.5	7.8		黄橙色	〃	普通	○外面剝落。
178	〃	—	6.0	—	○底部はヘラケズリによる若干のあげ底。	淡褐灰色	砂粒含	良好	○黒斑。
179	高杯形土器	20.0	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
180	〃	17.0	—	—		淡灰褐色	〃	普通	○剝落顕著。
181	〃	15.8	—	—		暗黄橙色	砂粒含	良好	○杯部外面剝落。
182	〃	14.7	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	○杯部剝落。
183	〃	10.5	—	—		黄橙色	〃	普通	○剝落顕著。
184	〃	8.5	—	—	○内外面ともナデ。	〃	〃	〃	
185	〃	14.0	—	—	○内外面とも横位のナデ。	褐灰色	微砂若干	良好	
186	〃	13.5	—	—	○内面は横方向のヘラミガキか？	黄橙色	精製粘土	普通	
187	〃	11.5	—	—		赤橙色	〃	〃	○剝落顕著。
188	〃	10.3	—	—	○杯部外面はナデ。	黄橙色	〃	〃	
189	〃	—	—	—		赤橙色	〃	〃	○剝落顕著。
190	〃	—	11.8	—		鈍い橙色	〃	良好	
191	〃	—	14.0	—	○脚部外面は縦方向のハケメ。	黄橙色	〃	〃	
192	〃	—	13.5	—	○脚部外面は横方向のヘラミガキか？	淡黄灰色	微砂混	普通	
193	〃	—	10.5	—	○脚部内面はナデ。	黄橙色	精製粘土	〃	
194	〃	—	16.0	—	〃	〃	〃	良好	
195	〃	—	17.0	—		〃	〃	普通	
196	〃	—	12.5	—	○外面に丹塗りの痕跡。	淡赤橙色	〃	〃	
197	〃	—	12.0	—		淡橙色	砂粒含	良好	
198	手焙形土器	—	—	—	○凸帯上面にもハケメ。	淡褐白色	微砂含	普通	
199	台付鉢形土器	—	—	—	○外面は平行タタキ。	淡褐灰色	〃	〃	○製塩土器。
200	〃	—	5.0	—		〃	砂粒含	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
201	台付鉢形土器	—	4.0	—		淡橙白色	細砂含	不良	

竪穴式住居—8（第28・29図）

202	壺形土器	18.5	—	—	○口縁部外面に乱れた鋸歯文の線刻。	淡橙灰色	微砂含	良好	
203	〃	20.5	—	—		赤橙色	微砂質	不良	○剝落顕著。
204	〃	19.0	—	—	○内外面とも横位のナデ。	淡橙白色	微砂若干	普通	
205	〃	13.5	—	—	○外面はナデ。	灰白色	砂粒含	〃	
206	〃	16.5	—	—	〃	淡黄灰色	微砂含	良好	
207	〃	16.5	—	—	○口縁部内面は横方向のヘラミガキ。	淡灰褐色	細砂含	〃	
208	〃	11.5	—	—		灰色	微砂含	普通	
209	〃	—	—	—		黄橙色	微砂質	不良	
210	〃	—	—	—	○頸部外面に鋸歯文。	淡橙灰色	微砂多含	普通	
211	〃	—	—	—	○頸部外面に波状文。	淡橙白色	微砂含	〃	
212	直口壺形土器	—	—	—	○内面はナデ。	淡茶灰色	砂粒多含	〃	○黒斑。
213	〃	8.5	—	—		淡赤橙色	精製粘土	良好	
214	台付直口壺形土器	—	10.0	—	○脚部内面はナデ。	淡橙白色	〃	普通	
215	壺形土器	—	8.5	—	○底部外面はヘラミガキ。	淡黄灰色	微砂含	良好	○黒斑。
216	〃	—	8.0	—		黄橙色	微砂質	普通	〃
217	底部	—	3.0	—		橙褐灰色	砂粒含	〃	〃
218	〃	—	8.0	—	○粘土貼り付けによるあげ底。	褐灰色	微砂含	〃	
219	甕形土器	15.5	—	—		淡灰褐色	砂粒含	良好	
220	〃	14.5	—	—		淡褐灰色	細砂含	普通	
221	〃	12.5	—	—		灰白色	砂粒含	〃	○剝落顕著。
222	〃	12.5	—	—		淡橙白色	細砂含	〃	
223	〃	18.5	—	—		灰白色	砂粒含	良好	○黒斑。
224	〃	13.0	—	—		淡黄橙色	〃	普通	
225	〃	15.5	—	—		淡橙白色	〃	良好	
226	〃	14.5	—	—		淡黄橙色	〃	普通	
227	〃	12.5	—	—	○肩部外面は横位のナデ。	淡橙白色	微砂含	良好	○外面煤付着。
228	〃	—	6.0	—	○底部穿孔は焼成後。	淡灰褐色	砂粒含	普通	〃
229	〃	—	6.0	—	○底部は外湾し、外面は平行ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○黒斑。
230	〃	—	6.0	—	○底部外面はヘラミガキ。	〃	砂粒多含	〃	○外面煤付着。
231	台付鉢形土器	—	4.0	—		淡赤灰色	砂粒含	良好	○製塩土器。
232	〃	—	4.8	—		灰白色	砂粒多含	普通	〃
233	鉢形土器	—	12.0	—	○体部内面は縦位のハケメ後にヘラミガキ。	〃	砂粒含	良好	
234	〃	39.5	8.3	20.0	○体部内面上半は縦位のユビナデ。	淡橙灰色	〃	普通	○黒斑。
235	〃	26.5	—	—		赤橙色	精製粘土	良好	○剝落顕著。
236	〃	—	12.0	—		淡橙灰色	砂粒含	不良	○黒斑。
237	台付鉢形土器	10.0	—	—	○内外面ともナデ。	黄橙色	精製粘土	〃	
238	〃	—	2.5	—	〃	暗褐灰色	微砂含	普通	
239	鉢形土器	13.0	—	—	〃	淡黄橙色	精製粘土	良好	○黒斑。
240	〃	15.0	6.3	5.1		黄橙色	微砂質	普通	○剝落顕著。
241	〃	17.5	3.6	7.8	○底部外面もヘラミガキ。	〃	精製粘土	良好	
242	台付鉢形土器	—	10.0	—	○体部内面はナデ。	〃	微砂混	普通	
243	〃	—	11.5	—	○内外面ともナデ。	赤橙色	砂粒含	良好	
244	高杯形土器	15.5	—	—	○脚部外面はヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	普通	
245	〃	16.0	—	—		淡橙白色	〃	良好	
246	〃	—	—	—		淡橙褐色	〃	〃	
247	〃	—	11.0	—	○脚部内面はナデ。	赤橙色	〃	普通	
248	〃	—	12.0	—		淡橙黄色	微砂混	〃	
249	〃	13.8	—	—		黄橙色	精製粘土	良好	
250	〃	13.8	—	—		〃	〃	〃	
251	〃	13.0	—	—		淡黄橙色	〃	〃	
252	〃	11.3	—	—	○杯部外面は丁寧なナデ。	橙褐灰色	微砂含	〃	
253	〃	—	11.0	—		黄橙色	微砂混	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
竪穴式住居—9（第31図）									
254	甕形土器	18.8	—	—		鈍い橙色	細砂	良好	○小破片。
255	鉢形土器	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃
256	高杯形土器	—	—	—		〃	細砂	〃	〃
竪穴式住居—10（第33図）									
257	壺形土器	15.0	—	—		淡褐灰色	砂粒含	普通	
258	〃	19.0	—	—	○口縁部内面は横位ハケメ後にナデ。	橙黄色	微砂多含	〃	
259	〃	18.3	—	—	○口縁部外面上半に列点文有り。	淡赤橙色	砂粒若干	良好	
260	〃	—	—	—	○頸部内面はナデ。	淡橙灰色	砂粒含	普通	
261	〃	—	—	—		暗灰色	細砂若干	〃	
262	〃	—	—	—	○口縁部外面に円形浮文の痕跡。	橙灰色	砂粒含	良好	
263	〃	—	—	—	○凸帯下部に鋸歯文。	淡灰橙色	微砂多含	普通	
264	甕形土器	20.5	—	—	○口縁部外面は横位のナデ。	淡褐灰色	砂粒含	良好	
265	〃	16.0	—	—		〃	微砂含	普通	
266	〃	13.0	—	—	○口縁部内外面は横位のナデ。	淡赤橙色	砂粒含	〃	
267	器台形土器	27.0	—	—	○口縁部内面に外面と同様の列点文。	灰橙色	精製粘土	〃	
268	壺形土器	—	7.5	—	○底部外面はヘラケズリ。	黄褐灰色	微砂含	良好	
269	底部	—	16.5	—	○底部外面はハケメ。	淡褐灰色	砂粒含	普通	
270	台付鉢形土器	—	4.5	—		淡橙灰色	〃	〃	○製塩土器。
271	〃	—	5.0	—		淡灰白色	砂粒多含	〃	〃
272	高杯形土器	—	—	—		橙褐色	砂粒含	〃	
273	〃	—	—	—		淡赤橙色	精製粘土	〃	○剥落顕著。
274	鉢形土器	7.0	—	—	○内面はナデ。	淡橙白色	〃	〃	
275	高杯形土器	—	—	—		橙白色	微砂含	〃	
276	〃	—	—	—		暗褐灰色	〃	良好	
277	〃	—	—	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	黄橙色	細砂含	普通	
278	鉢形土器	—	—	—		灰橙色	砂粒含	良好	
竪穴式住居—11（第34図）									
279	壺形土器	—	6.8	—	○頸部内面もヘラケズリ。	浅黄橙色	細砂	良好	○口縁部欠損。
280	甕形土器	14.8	—	—		〃	〃	〃	
281	鉢形土器	31.6	—	—	○内面はヘラケズリのあとナデ。	〃	〃	〃	○黒斑。
282	甕形土器	17.5	—	—		〃	〃	〃	
283	鉢形土器	—	—	—	○内面はヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	○小破片。
284	甕形土器	10.2	—	—	○口縁端部は丸い。	〃	〃	〃	
285	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
286	〃	—	—	—		淡橙色	〃	〃	〃
287	高杯形土器	—	—	—		橙色	精製粘土	〃	○柱穴内出土。
288	〃	—	—	—	○杯部が深い。	〃	〃	〃	○小破片。
289	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
290	〃	—	7.6	—	○透し孔は4個。	〃	〃	〃	○柱穴内出土。
竪穴式住居—12（第35図）									
291	甕形土器	14.4	—	—	○外面は粗いハケメ。	灰白色	細砂	良好	
292	〃	14.0	—	—		黄橙色	〃	〃	
293	〃	—	4.5	—	○底部ツマミダシ。	浅黄橙色	〃	〃	
294	〃	—	6.8	—	〃	黄橙色	〃	〃	
295	〃	—	4.0	—	〃	灰白色	〃	〃	○煤付着。
296	鉢形土器	10.0	3.4	5.5		褐灰色	〃	〃	
297	〃	11.5	3.5	7.9	○口縁端部は薄くなる。	灰白色	〃	〃	
竪穴式住居—13（第37・38図）									
298	壺形土器	20.0	—	—		灰白色	細砂	良好	○中央穴出土。
299	〃	9.6	—	—	○頸部に沈線あり。	黄橙色	〃	〃	○小破片。
300	甕形土器	14.0	—	—		明褐灰色	〃	〃	○P—10出土。
301	〃	14.0	—	—		灰白色	〃	〃	○中央穴出土。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
302	甕形土器	10.7	—	—	○口縁端部に凹線あり。	灰白色	細砂	良好	○床面出土。
303	〃	9.6	—	—		黄橙色	〃	〃	○P—2出土。
304	〃	15.8	—	—		灰白色	〃	〃	○中央穴出土。
305	〃	11.8	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○床面出土。
306	〃	12.4	—	—	○頸部に竹管文あり。	灰白色	〃	〃	○小破片。
307	〃	12.5	—	—	○口縁端部に凹線文あり。	〃	〃	〃	〃
308	鉢形土器	31.7	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
309	〃	6.2	—	—	○内面は縦位から横位のヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
310	〃	12.5	4.6	5.7	○指頭圧痕が残っている。	〃	〃	〃	○P—5出土。
311	〃	9.0	2.6	7.3	○内面はナデ。	黄橙色	〃	〃	〃
312	底部	—	5.0	—	○底部はあげ底。	鈍い橙色	〃	〃	○P—6出土。
313	〃	—	5.8	—	〃	黄橙色	〃	〃	
314	〃	—	6.5	—	〃	灰白色	〃	〃	
315	〃	—	8.0	—		〃	〃	〃	
316	〃	—	5.0	—	○底面はハケメ。	〃	〃	〃	○P—10出土。
317	〃	—	6.8	—		鈍い橙色	〃	〃	
318	〃	—	3.0	—		黄橙色	〃	〃	
319	蓋形土器	2.8	—	—		灰白色	〃	〃	
320	高杯形土器	18.6	—	—		黄橙色	〃	〃	○床面出土。
321	〃	17.5	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
322	〃	11.5	—	—	○口縁部に凹線文あり。	橙色	〃	〃	
323	〃	13.3	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	○小破片。
324	〃	—	12.0	—		〃	〃	〃	〃
325	〃	—	10.0	—	○脚端部は肥厚しない。	〃	〃	〃	〃
326	〃	—	—	—	○3方向へ穿孔。	鈍い橙色	〃	〃	
327	脚部	—	10.3	—		灰白色	〃	〃	
328	高杯形土器	—	4.5	—		浅黄橙色	〃	〃	
329	〃	—	13.0	—	○脚端部は肥厚。	黄橙色	〃	〃	
330	〃	—	8.0	—	〃	灰白色	〃	〃	○中央穴出土。
331	台付鉢形土器	—	4.2	—	○外面はヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	
332	〃	—	4.0	—	〃	灰白色	〃	〃	
333	〃	—	4.6	—	〃	〃	〃	〃	○中央穴出土。
334	〃	—	4.8	—	〃	〃	〃	〃	
335	器台形土器	—	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
336	壺形土器	3.8	3.2	7.3		〃	〃	〃	○完形品。
337	〃	2.7	—	—	○手捏ね。	〃	〃	〃	
338	〃	3.8	1.7	4.1	〃	〃	〃	〃	○ほぼ完形品。

竪穴式住居—14（第39・40図）

339	壺形土器	17.8	—	—	○頸部の沈線はらせん。	灰白色	細砂	良好	
340	〃	12.0	—	—	○口縁部は肥厚する。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
341	〃	10.4	—	—	○無頸壺形である。	黄橙色	〃	〃	
342	甕形土器	13.0	—	—		〃	〃	〃	
343	〃	12.0	—	—	○口縁部は外湾する。	灰白色	〃	〃	
344	〃	13.6	—	—		黄橙色	〃	〃	
345	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	
346	〃	20.4	—	—		灰白色	〃	〃	
347	〃	15.0	—	—	○外面は粗いハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	
348	〃	13.4	—	—	○口縁端部はやや下方に拡張する。	灰白色	〃	〃	○黒斑。
349	鉢形土器	23.6	—	—	○口縁部に凹線文。	黄橙色	〃	〃	
350	〃	—	—	—	○内外面ともヘラケズリ。	〃	〃	〃	○小破片。
351	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
352	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	橙色	〃	〃	〃
353	〃	—	—	—	〃	灰白色	〃	〃	〃
354	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
355	鉢形土器	—	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	黄橙色	細砂	良好	○小破片。
356	台付鉢形土器	—	3.4	—		浅黄橙色	〃	〃	
357	鉢形土器	15.0	—	—	○胴部に稜線がある。	灰白色	〃	〃	○小破片。
358	底部	—	6.6	—	○底部は少しあげ底。	灰色	〃	〃	
359	〃	—	7.0	—	○底部はあげ底。	黄橙色	〃	〃	
360	〃	—	4.2	—	○底部は外側に湾曲する。	〃	〃	〃	
361	〃	—	4.2	—	○底部は少しあげ底。	灰色	〃	〃	
362	台付鉢形土器	—	4.5	—	○外面はヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	
363	〃	—	4.4	—	〃	浅黄橙色	〃	〃	
364	〃	—	3.8	—	〃	灰白色	〃	〃	
365	〃	—	5.0	—	○円板充填。	浅黄橙色	〃	〃	
366	高杯形土器	22.0	—	—		灰白色	〃	〃	
367	〃	—	7.2	—		浅黄橙色	〃	〃	
368	〃	10.0	—	—	○口縁部に凹線文あり。	灰白色	〃	〃	
369	〃	—	—	—	○杯部外面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
370	〃	—	7.6	—		浅黄橙色	精製粘土	〃	

竪穴式住居—15（第41図）

371	高杯形土器	20.6	—	—		灰白色	精製粘土	良好	○小破片。
372	底部	—	7.0	—		鈍い橙色	細砂	〃	○表面剝離。
373	甕形土器	—	—	—		灰白色	〃	〃	○小破片。

竪穴式住居—16（第43図）

374	壺形土器	21.3	—	—		鈍い橙色	細砂	良好	
375	〃	21.6	—	—		乳白色	〃	〃	
376	〃	21.8	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
377	〃	17.6	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
378	〃	17.8	—	—		〃	〃	〃	
379	甕形土器	14.5	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
380	〃	14.4	—	—		〃	〃	〃	
381	〃	15.0	—	—		灰白色	〃	〃	
382	〃	17.2	—	—		鈍い褐色	〃	〃	○雲母土器。
383	壺形土器	—	—	—	○外面にヘラガキ沈線，ヘラ刺突文。	鈍い黄橙色	〃	〃	
384	甕形土器	14.0	—	—		褐灰色	〃	〃	
385	〃	13.9	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
386	〃	13.9	—	—		〃	〃	〃	
387	〃	13.2	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
388	〃	—	7.6	—		〃	〃	〃	
389	〃	—	4.0	—		浅黄橙色	〃	〃	
390	〃	19.5	—	—		〃	〃	〃	
391	〃	19.2	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
392	〃	16.6	—	—		〃	〃	〃	
393	〃	15.5	—	—		橙色	〃	〃	
394	〃	15.9	—	—		乳白色	〃	〃	
395	底部	—	6.5	—		灰白色	〃	〃	
396	〃	—	9.5	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
397	高杯形土器	13.4	—	—	○杯部内外面とも丁寧なヘラミガキ。	鈍い橙色	精製粘土	〃	
398	〃	14.4	—	—	○杯部内面ヘラミガキ。	橙色	〃	〃	
399	直口壺形土器	8.3	—	—		〃	〃	〃	
400	〃	10.8	—	—		淡橙色	〃	〃	
401	高杯形土器	20.1	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
402	〃	21.6	—	—	○杯部内外面とも丁寧なヘラミガキ。	〃	〃	〃	
403	〃	—	9.6	—	○透し孔は4個。	橙色	〃	〃	
404	〃	—	10.5	—	〃	〃	〃	〃	
405	〃	—	10.8	—	○脚端部に3条の沈線。透し孔は4個。	浅黄橙色	〃	〃	
406	〃	—	10.2	—	○脚部外面は磨滅のため調整不詳。	鈍い橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
407	高杯形土器	—	12.2	—	○磨滅のため調整不詳。	橙色	精製粘土	良好	
408	〃	—	—	—	○凸帯上にはキザミメ。外面に鋸歯文。	淡橙色	〃	〃	
409	鉢形土器	21.0	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
410	〃	10.8	—	—		橙色	〃	〃	
411	〃	16.2	—	7.6	○内外面とも磨滅のため調整不詳。	鈍い橙色	〃	〃	
412	台付鉢形土器	—	3.5	—		灰白色	細砂粒多	〃	○製塩土器。
413	〃	—	4.8	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
414	〃	—	4.1	—		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
415	〃	—	4.6	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
416	〃	—	5.3	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
417	〃	—	4.0	—		淡赤橙色	〃	〃	〃
418	〃	—	4.6	—		褐灰色	〃	〃	〃
419	〃	—	4.3	—		橙色	〃	〃	〃

井戸—1（第46～52図）

420	壺形土器	22.4	7.7	36.6	○頸部内面ヘラケズリ。	黄橙色	細砂	良好	○完形品。
421	〃	16.0	7.2	32.4	○口縁部内面に貝殻圧痕。頸部沈線はらせん	鈍い橙色	〃	〃	〃
422	〃	16.5	—	—	○頸部内面ヘラケズリ。頸部沈線はらせん。	黄橙色	細砂多し	〃	
423	〃	20.4	—	—		灰白色	微砂	〃	
424	〃	20.4	—	—		黄橙色	細砂	〃	
425	〃	17.6	—	—	○口縁部内面に横位のハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	
426	〃	20.1	—	—		灰白色	〃	〃	
427	〃	21.0	—	—	○口縁部内面に横位のヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
428	〃	18.5	—	—		橙色	〃	〃	
429	〃	20.8	—	—	○口縁部内面に縦位のヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
430	〃	20.2	—	—	○頸部内面ヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
431	〃	18.5	—	—	○口縁部内面に斜位のハケメ。	〃	〃	〃	
432	〃	16.3	—	—	○頸部内面に縦位のヘラミガキ。	橙色	微砂	〃	
433	〃	16.3	—	—	○口縁端部に半截竹管文。	黄橙色	細砂	〃	
434	〃	16.2	—	—	○口縁部内面ヘラミガキ。	橙色	〃	〃	
435	〃	17.3	—	—	○口縁端部に棒状刺突文。	浅黄橙色	〃	〃	
436	〃	20.3	—	—	○頸部内面はハケメのあとヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	○黒斑。
437	〃	16.3	—	—	○頸部内面に縦位のヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	〃	
438	〃	23.6	—	—	○口縁部内面に縦位のヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
439	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。
440	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
441	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
442	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
443	〃	12.1	6.4	15.9	○胴部内面はユビナデ。器壁は厚い。	灰白色	〃	〃	○完形品。
444	〃	15.5	—	—	○外面はヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
445	甕形土器	14.0	—	—		灰黄褐色	〃	〃	
446	〃	14.1	—	—	○肩部は縦位のハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	
447	〃	20.3	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。
448	〃	19.0	—	—		〃	〃	〃	
449	〃	12.3	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
450	〃	14.7	—	—	○肩部はやや斜位のハケメ。	灰白色	〃	〃	
451	〃	12.9	—	—	○肩部が張っている。	浅黄橙色	〃	〃	
452	〃	16.1	—	—	○肩部はやや斜位のハケメ。	橙色	〃	〃	
453	〃	14.1	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
454	〃	—	—	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	○煤付着。
455	〃	—	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
456	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
457	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
458	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
459	〃	18.9	—	—		黄橙色	〃	〃	○煤付着。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
460	甕形土器	16.0	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○表面剥離。
461	〃	12.9	—	—		黄橙色	〃	〃	
462	〃	12.7	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
463	〃	14.3	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
464	〃	—	—	—	○外面は縦位のハケメ。	橙色	細砂	〃	○小破片。
465	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
466	〃	—	—	—		橙色	〃	〃	〃
467	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	〃
468	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
469	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
470	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
471	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
472	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
473	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
474	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
475	〃	—	—	—	○口縁部は外湾する。	黄橙色	〃	〃	〃
476	〃	—	—	—	○外面は縦位のハケメ。	〃	〃	〃	〃
477	〃	11.0	—	—	○口縁端部は肥厚しない。	灰白色	〃	〃	
478	鉢形土器	42.7	13.5	25.0	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	黄橙色	小礫を含む	〃	○黒斑。
479	〃	30.5	—	—	○外面はハケメのあとヘラミガキ。	〃	細砂	〃	○焼成前の補修。
480	〃	47.6	—	—	○上半部は内外面ともヨコヘラミガキ。	〃	〃	〃	
481	〃	50.8	—	—	○内外面ともハケメのあとヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
482	〃	38.7	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	黄橙色	〃	〃	
483	〃	32.0	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	○表面磨滅。
484	〃	36.2	8.3	23.2	○片口あり。内面はヘラケズリのまま。	浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。
485	〃	—	—	—	○内面はヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	○小破片。
486	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	浅黄橙色	〃	〃	〃
487	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	〃
488	〃	15.5	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	灰白色	〃	〃	
489	〃	23.8	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	
490	〃	41.5	—	—	○口縁部が肥厚する。	黄橙色	〃	〃	
491	〃	40.8	—	—	○内面はヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
492	〃	35.2	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
493	〃	27.2	—	—	○外面はハケメのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	
494	〃	18.7	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	橙色	〃	〃	
495	〃	18.8	—	—	○口縁端部は肥厚しない。	黄橙色	精製粘土	〃	○小破片。
496	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	細砂	〃	〃
497	〃	11.7	—	—	○内面はヘラケズリのまま。小型のもの。	〃	〃	〃	
498	〃	11.7	—	—	○口縁端部は肥厚しない。	灰白色	〃	〃	
499	〃	12.7	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	○小破片。
500	〃	13.2	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	細砂	〃	○黒斑。小破片。
501	〃	15.4	5.7	10.0	○台付。	〃	〃	〃	○完形品。
502	〃	13.5	4.7	8.4	○底部はあげ底。内面はヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	○復元完形品。
503	〃	6.7	—	—	○台付。	黄橙色	〃	〃	
504	〃	7.7	3.0	6.2	○内面はナデアゲ。	〃	〃	〃	
505	〃	14.4	4.1	7.4	○内外面ともハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	○完形品。
506	〃	16.7	5.8	7.2	○内面はヘラケズリのまま。	黄橙色	〃	〃	○復元完形品。
507	〃	14.7	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
508	〃	8.8	—	—	○口縁部に沈線あり。	黄橙色	精製粘土	〃	○黒斑。
509	〃	—	10.0	—	○内面はヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂	〃	○底部破片。
510	甕形土器？	—	5.3	—		黄橙色	〃	〃	〃
511	壺形土器？	—	6.0	—	○内面はヘラケズリ。	灰褐色	〃	〃	〃
512	底部	—	10.0	—	○外面はハケメのあとヘラミガキ。	橙色	〃	〃	〃
513	〃	—	8.2	—		灰白色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
514	底部	—	4.8	—	○底部はわずかにあげ底。	淡灰褐色	細砂	良好	○底部破片。
515	〃	—	4.5	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃
516	〃	—	5.6	—		〃	細砂	〃	〃
517	〃	—	6.0	—		灰色	〃	〃	〃
518	〃	—	5.2	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	〃
519	〃	—	8.2	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	灰白色	微砂	〃	〃
520	〃	—	6.4	—	○底部外面もヘラミガキ。	〃	精製粘土	〃	〃
521	〃	—	7.4	—		浅黄橙色	細砂	〃	〃
522	〃	—	4.4	—	○底部はツマミダシ。	灰黄橙色	〃	〃	〃
523	〃	—	5.8	—	○底部はあげ底。ツマミダシ。	〃	〃	〃	〃
524	〃	—	4.0	—	○底部はわずかにあげ底。	灰白色	〃	〃	〃
525	〃	—	3.4	—	○底部はツマミダシ。	〃	〃	〃	〃
526	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	〃
527	高杯形土器	22.0	—	—		橙色	微砂	〃	
528	〃	20.0	—	—	○杯部外面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
529	〃	18.0	—	—		橙色	〃	〃	
530	〃	18.6	—	—	○口縁部に暗文様のミガキ。	赤橙色	細砂	〃	
531	〃	16.8	11.8	11.9	○透し孔は4個。	黄橙色	〃	〃	
532	〃	—	—	—		〃	〃	〃	○口縁部小片。
533	〃	—	—	—		〃	精製粘土	〃	〃
534	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
535	〃	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	〃
536	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
537	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
538	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
539	〃	—	—	—	○口縁部外面に暗文様ヘラミガキ。	灰色	〃	〃	〃
540	〃	—	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	〃
541	〃	—	—	—		〃	精製粘土	〃	〃
542	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
543	〃	—	—	—		〃	細砂	〃	〃
544	〃	—	—	—		〃	微砂	〃	〃
545	〃	—	—	—		〃	細砂	〃	〃
546	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
547	〃	—	—	—	○口縁部は内外面に暗文様ヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
548	〃	18.0	—	—		〃	精製粘土	〃	
549	〃	16.0	—	—	○内外面とも縦位のヘラミガキ。	〃	〃	〃	
550	〃	9.8	—	—		〃	〃	〃	○表面磨滅。
551	〃	—	15.4	—		〃	細砂	〃	
552	〃	—	11.3	—		橙色	精製粘土	〃	
553	〃	—	—	—		黄橙色	微砂	〃	
554	〃	—	11.4	—		灰黄褐色	精製粘土	〃	
555	〃	—	12.2	—		黄橙色	微砂	〃	
556	〃	—	10.7	—		〃	細砂	〃	
557	〃	—	—	—		灰黄褐色	〃	〃	
558	〃	—	8.4	—		浅黄橙色	〃	〃	
559	〃	—	—	—		灰黄褐色	〃	〃	
560	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
561	〃	—	—	—		黄橙色	微砂	〃	
562	〃	—	14.6	—		〃	細砂	〃	
563	〃	—	—	—	○透し孔は5個。	鈍い橙色	〃	〃	
564	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
565	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	○表面磨滅。
566	〃	—	—	—		〃	細砂	〃	
567	〃	—	—	—		〃	微砂	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
568	高杯形土器	—	6.6	—	○柱状部は中実。	黄橙色	細砂	良好	
569	〃	—	—	—		〃	〃	〃	○同一個体？
570	〃	—	11.2	—	○脚端部肥厚。	〃	〃	〃	
571	直口壺形土器	7.6	—	—		灰白色	微砂	〃	
572	〃	5.8	—	—		黄橙色	〃	〃	
573	〃	9.0	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
574	壺形土器	—	5.2	—	○胴部はほぼ球形。	明褐灰色	細砂	〃	
575	直口壺形土器	5.8	—	—		浅黄橙色	精製粘土	〃	
576	器台形土器	6.8	—	—		浅黄褐色	細砂	〃	
577	壺形土器	—	—	—	○胴部に凸帯。	黄橙色	精製粘土	〃	
578	コップ形土器	3.9	—	6.0		〃	〃	〃	
579	器台形土器	—	44.0	—	○脚端部は少し立ちあがる。	〃	微砂	〃	

井戸—2（第53図）

580	甕形土器	—	—	—		灰黄褐色	細砂	良好	○小破片。
581	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
582	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
583	〃	—	—	—	○外面は縦位のハケメ。	〃	〃	〃	〃
584	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
585	器台形土器	—	—	—	○脚端部は少し立ちあがる。	灰黄褐色	〃	〃	
586	底部	—	6.0	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
587	〃	—	6.0	—	○底面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
588	台付鉢形土器	9.0	—	—	○外面はヘラケズリ。	〃	〃	〃	
589	〃	—	4.2	—	〃	明褐灰色	〃	〃	
590	〃	—	4.2	—	〃	〃	〃	〃	
591	高杯形土器	—	—	—		橙色	微砂	〃	○小破片。
592	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	

井戸—3（第54図）

593	甕形土器	15.8	—	—		鈍い橙色	細砂	良好	○外面煤。
594	壺形土器	—	—	—		灰白色	〃	〃	
595	甕形土器	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	

井戸—4（第55図）

596	壺形土器	11.2	—	—		鈍い黄橙色	細砂	良好	
597	〃	11.0	7.0	22.8	○頸部はヨコナデ。肩部外面に竹管状工具による刺突文が3個並んでいる。	鈍い橙色	〃	〃	
598	〃	—	—	—	○体部上半粗いハケメのち横ヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
599	甕形土器	13.8	—	—		灰白色	〃	〃	
600	〃	16.4	—	—		〃	〃	〃	○外面煤。
601	〃	16.0	—	—	○外面粗いハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
602	〃	15.6	—	—		〃	〃	〃	
603	〃	—	—	—	○口縁部に2条の凹線。	淡褐灰色	〃	〃	
604		—	7.0	—	○底部外面に編物らしき圧痕。	褐灰色	〃	〃	
605	〃	—	5.6	—		灰黄褐色	〃	〃	
606	〃	—	8.0	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
607	高杯形土器	23.0	—	—		橙色	精製粘土	〃	
608	〃	—	12.9	—		〃	細砂	〃	
609	〃	—	23.0	—	○内外面とも磨滅のため調整不詳。	鈍い橙色	〃	〃	
610	〃	—	7.2	—	○脚部外面ハケメ。透し孔は2個ずつ2か所にある。	鈍い黄橙色	〃	〃	
611		—	4.4	—		乳白色	細砂粒多	〃	
612		—	5.0	—		浅黄橙色	〃	〃	

井戸—5（第56図）

613	壺形土器	14.8	—	—	○頸部に不整な沈線をめぐらす。	浅黄橙色	細砂	良好	
614	器台形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考

井戸―6（第57図）

615	器台形土器	26.8	22.6	24.1	○長方形透しは3個。下方円形透しは5個。	浅黄橙色	細砂	良好	○完形品。

井戸―7（第58図）

616	壺形土器	12.0	—	—		灰白色	細砂	良好	
617	甕形土器	11.8	4.1	13.7		鈍い橙色	〃	〃	
618	〃	13.8	3.1	12.7		〃	〃	〃	
619	〃	—	4.4	—		褐灰色	〃	〃	
620	器台形土器	32.5	27.4	23.2	○口縁上端部には刺突文。透し孔は4個。脚部下半に竹管による刺突文が1か所ある。	淡橙色	精製粘土	〃	
621	鉢形土器	8.1	2.5	4.6	○内外面ともユビナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	

井戸―8（第59～61図）

622	壺形土器	14.6	—	—		黄橙色	細砂	良好	
623	〃	20.5	—	—	○複合口縁。	〃	〃	〃	
624	〃	—	—	—	○頸部に不整な沈線。	褐灰色	〃	〃	
625	甕形土器	17.7	—	—		黄橙色	〃	〃	
626	〃	17.0	6.5	28.6	○頸部は特に小さい。	〃	〃	〃	○籾痕。
627	〃	15.0	6.2	26.7	〃	灰白色	〃	〃	○煤付着。
628	〃	16.2	5.0	27.6		浅黄橙色	〃	〃	〃
629	〃	17.4	—	—	○外面はハケメのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
630	〃	14.7	—	—	○口縁部には凹線文。	〃	〃	〃	
631	〃	14.6	—	—		〃	〃	〃	○煤付着。
632	〃	13.6	—	—		灰白色	〃	〃	〃
633	〃	13.3	—	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	〃
634	〃	11.6	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
635	〃	12.6	3.8	16.3	○底部内面に指頭圧痕。	灰白色	〃	〃	○煤付着。
636	〃	15.8	—	14.9	○底部は外湾する。肩部に圧痕文。	褐灰色	〃	〃	〃
637	〃	14.8	—	—	○肩部に棒状の刺突文がある。	黄橙色	〃	〃	〃
638	〃	16.4	6.0	21.2	○底面にもハケメ。口縁部は拡張しない。	浅黄橙色	〃	〃	〃
639	〃	14.4	4.2	19.4	○口縁部は拡張しない。	灰白色	細砂・小礫	〃	
640	底部	—	3.5	—	○内面はハケメ。底面はハケメ。	浅黄橙色	細砂	〃	
641	鉢形土器	14.0	3.3	7.5		黄橙色	微砂	〃	
642	〃	13.5	3.1	6.7	内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	橙色	精製粘土	〃	
643	〃	14.2	2.4	6.8	〃	〃	〃	〃	
644	〃	14.0	2.7	7.2	○内面はハケメ。	〃	〃	〃	
645	〃	14.9	3.9	5.1		〃	〃	〃	
646	〃	8.7	—	6.4	○手捏ね土器。	灰白色	微砂	〃	
647	〃	17.8	—	—	○内面はヘラミガキ。	鈍い橙色	細砂	〃	○煤付着。
648	〃	26.5	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。
649	高杯形土器	—	13.0	—		橙色	精製粘土	〃	
650	〃	16.5	—	—	○内外面ともこまかい横位のヘラミガキ。	〃	〃	〃	
651	〃	11.2	—	—	〃	〃	〃	〃	

土壙―4（第62図）

652	壺形土器	—	—	—	○口縁端部に凹線文。	灰白色	細砂	良好	○小破片。
653	甕形土器	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
654	〃	—	—	—	○口縁端を上方へ小さく拡張。	〃	〃	〃	〃
655	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	微砂	〃	
656	底部	—	5.6	—	○内面ヘラケズリ。	灰褐色	細砂	〃	○小破片。
657	〃	—	8.2	—	〃	浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。

土壙―5（第63図）

658	甕形土器	—	—	—		灰褐色	細砂	良好	○小破片。
659	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
660	〃	—	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
661	〃	—	—	—	○口縁端部を小さく折り曲る。	灰白色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
662	甕形土器	12.8	—	—	○口唇部にキザミメ。	淡赤橙色	細砂	良好	○小破片。
663	鉢形土器	—	—	—		浅黄橙色	精製粘土	〃	〃
664	〃	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	〃
665	底部	—	5.0	—	○外面ハケメ。	灰白色	〃	〃	〃

土壙—6（第64図）

666	鉢形土器	27.0	—	—	○外面は斜位のヘラミガキ。	黄橙色	微砂	良好	
667	壺形土器	20.0	—	—		〃	細砂	〃	○小破片。
668	甕形土器	15.3	—	—		〃	〃	〃	〃
669	〃	15.4	—	—	○肩部はハケメ。胴部下半はヘラミガキ。	橙色	〃	〃	
670	〃	—	6.2	—		黄橙色	〃	〃	○669と同一。
671	台付鉢形土器	—	5.0	—	○外面はヘラケズリ。	明赤灰色	〃	〃	
672	高杯形土器	—	5.5	—		灰白色	〃	〃	

土壙—7（第65図）

673	甕形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
674	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	〃
675	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
676	〃	—	—	—	○口縁端部は凹線文。	浅黄橙色	〃	〃	〃
677	壺形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
678	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
679	底部	—	6.7	—	○外面はハケメ。	橙色	〃	〃	
680	高杯形土器	—	—	—		灰白色	〃	〃	
681	〃	—	8.3	—		〃	〃	〃	○小破片。

土壙—8（第66図）

682	壺形土器	21.0	—	—		橙白色	砂粒含	普通	
683	〃	10.0	—	—	○口縁部内面は横位のナデ。	暗灰色	微砂含	良好	
684	甕形土器	8.5	—	—	○胴部外面はナデ。	淡灰褐色	〃	普通	
685	〃	14.5	—	—		黄橙色	微砂多含	〃	
686	〃	15.0	—	—		淡赤橙色	微砂質	不良	

土壙—9（第67図）

687	甕形土器	—	—	—		淡黄橙色	微砂若干	不良	○剝落顕著。
688	〃	—	—	—		灰褐色	砂粒含	普通	
689	高杯形土器	24.0	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	○剝落顕著。
690	〃	18.0	—	—		〃	〃	〃	〃
691	〃	—	16.0	—		白橙色	微砂多含	不良	〃

土壙—10（第68図）

692	甕形土器	15.0	6.0	28.5	○底部内面はナデ。	淡褐橙色	砂粒含	普通	○外面煤付着。
693	壺形土器	—	—	—	○口縁部内面は横方向ハケメ後に横位ナデ。	黄橙色	微砂含	〃	
694	鉢形土器	—	4.0	—		〃	砂粒含	〃	○黒斑。
695	高杯形土器	17.0	—	—		赤灰色	精製粘土	不良	○剝落顕著。
696	〃	19.0	—	—		淡赤橙色	〃	普通	
697	鉢形土器	45.0	14.5	36.0	○底部外面はヘラケズリ。	淡茶白色	砂粒含	良好	○口縁部内面下半から体部内面上端に煤付着。

土壙—11（第69図）

698	壺形土器	18.0	—	—		淡橙白色	微砂含	良好	
699	甕形土器	14.0	—	—		淡褐橙色	〃	普通	
700	高杯形土器	—	—	—	○杯部外面は縦方向ヘラミガキ。	茶橙色	精製粘土	良好	
701	〃	—	11.0	—		暗橙灰色	微砂含	普通	○剝落顕著。
702	鉢形土器	—	—	—	○体部外面は縦方向ヘラミガキ。	黄灰色	〃	良好	

土壙—12（第71図）

703	甕形土器	14.5	—	—		淡茶橙色	微砂含	普通	
704	〃	14.0	—	—		茶橙色	〃	良好	
705	〃	13.0	—	—		淡橙灰色	〃	普通	
706	壺形土器	10.0	3.5	5.0	○外面はハケメ後にヘラミガキ。	灰橙色	微砂若干	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
707	高杯形土器	16.0	—	—		黄橙色	精製粘土	普通	○剝落顕著。
708	鉢形土器	21.0	6.0	14.0	○体部下半は剝落。	淡灰橙色	微砂多含	〃	○黒斑。

土壙—13（第72図）

709	甕形土器	14.0	—	—		淡橙白色	微砂多含	不良	
710	〃	14.0	—	—		〃	細砂含	〃	
711	高杯形土器	15.0	—	—		〃	〃	〃	○剝落顕著。

土壙—14（第73図）

712	壺形土器	17.2	—	—		灰白色	細砂	良好	
713	鉢形土器	14.7	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
714	甕形土器	15.7	—	—		赤色	〃	〃	
715	〃	14.4	—	—		黄橙色	〃	〃	
716	〃	13.5	—	—		赤橙色	〃	〃	
717	鉢形土器	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
718	底部	—	6.3	—		鈍い橙色	〃	〃	
719	〃	—	5.6	—		黄橙色	〃	〃	
720	〃	—	5.8	—	○底部は外湾する。	〃	〃	〃	
721	〃	—	8.0	—		〃	〃	〃	
722	器台形土器	—	—	—	○口縁部外面に鋸歯文、半截竹管文を配す。	〃	〃	〃	
723	脚部	—	12.8	—	○低い脚部である。	〃	〃	〃	
724	高杯形土器	18.1	11.6	8.8		〃	微砂	〃	

土壙—15（第74図）

725	直口壺形土器	9.5	—	—	○胴部内面は横位ナデ。	橙黄色	精製粘土	良好	
726	〃	—	5.5	—	〃	淡茶橙色	〃	〃	

土壙—16（第75図）

727	甕形土器	12.5	—	—		褐灰色	微砂含	普通	
728	〃	10.5	—	—		黄橙色	微砂質	〃	
729	〃	—	6.5	—		淡橙灰色	〃	不良	○剝落顕著。
730	鉢形土器	14.0	—	—		灰橙色	精製粘土	良好	

土壙—17（第76図）

731	壺形土器	12.5	—	—		黄橙色	細砂	良好	
732	底部	—	5.2	—	○底部はあげ底。	灰褐色	〃	〃	
733	鉢形土器	16.8	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	灰白色	〃	〃	
734	〃	15.2	8.8	18.0	○頸部は短い。	灰褐色	〃	〃	
735	器台形土器	—	20.4	—	○裾部に凹線文。	黄橙色	〃	〃	○表面磨滅。
736	高杯形土器	23.6	—	—	○杯部内外面は多角形のヘラミガキ。	淡橙色	〃	〃	

土壙—18（第77図）

737	甕形土器	17.5	—	—		黄橙色	微砂含	普通	
738	鉢形土器	13.2	4.0	8.0	○体部内面は指頭によるカキアゲ。	淡黄橙色	精製粘土	良好	○黒斑。
739	高杯形土器	20.0	—	—	○口縁部外面は横位ナデ。	灰橙色	〃	〃	
740	〃	—	11.5	—		淡赤橙色	〃	〃	
741	台付鉢形土器	—	—	—		灰褐色	砂粒含	普通	○製塩土器。
742	〃	—	3.4	—	○脚部は横位のナデ。	〃	〃	〃	〃
743	〃	—	5.0	—		灰白色	細砂多含	良好	〃

土壙—19（第79・80図）

744	壺形土器	19.5	—	—		褐灰色	砂粒含	普通	
745	〃	18.0	—	—		淡橙白色	〃	〃	
746	〃	20.0	—	—		黄褐灰色	微砂含	〃	
747	〃	21.5	—	—		淡橙灰色	砂粒若干	〃	
748	〃	10.5	—	—	○内外面とも横位ナデ。	褐色	砂粒含	〃	
749	〃	22.0	—	—	〃	淡赤橙色	微砂質	〃	
750	〃	20.0	—	—		淡橙白色	細砂含	〃	
751	〃	21.0	—	—		淡橙黄色	微砂質	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
752	壺形土器	16.0	—	—		淡褐灰色	砂粒含	良好	
753	〃	18.0	—	—	○内外面とも横位ナデ。	〃	〃	普通	
754	〃	22.0	—	—		淡黄灰色	〃	〃	
755	〃	20.0	—	—		〃	微砂混	〃	
756	〃	17.5	—	—		褐灰色	〃	〃	
757	〃	19.0	—	—		黄橙色	微砂質	〃	○剝落顕著。
758	〃	16.5	—	—	○内外面とも横位ナデ。	淡灰橙色	砂粒含	〃	
759	〃	17.0	—	—	〃	淡黄灰色	〃	〃	
760	〃	18.0	—	—	○頸部外面から頸部内面上半は横位ナデ。	淡橙白色	微砂含	〃	
761	甕形土器	13.0	—	—		淡褐灰色	砂粒含	〃	○胴部外面剝落。
762	〃	14.0	—	—		褐橙色	微砂含	〃	
763	〃	14.0	—	—		淡橙褐色	〃	〃	
764	〃	14.5	—	—		〃	砂粒含	〃	
765	〃	14.0	—	—		淡黄橙色	〃	〃	○胴部外面剝落。
766	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	○外面剝落。
767	〃	22.0	—	—	○胴部内面ヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
768	〃	20.0	—	—		淡灰褐色	〃	〃	
769	〃	20.0	—	—		淡黄橙色	微砂含	良好	
770	壺形土器	23.0	—	—		黄灰白色	微砂多含	普通	
771	鉢形土器	35.5	—	—	○体部外面はタテハケメ後に丁寧なナデ。	淡黄灰色	砂粒含	良好	
772	甕形土器	14.5	—	—		褐灰色	〃	普通	
773	〃	—	8.0	—	○底部外面はナデ。	橙褐色	〃	〃	○黒斑。
774	〃	—	8.0	—	○底部外面はハケメ。	淡灰褐色	細砂含	〃	
775	〃	—	7.0	—		淡黄橙色	微砂含	〃	
776	〃	—	6.5	—	○底部外面はナデ。	灰褐色	砂粒含	〃	
777	〃	—	7	—	〃	淡褐灰色	〃	〃	
778	〃	—	5.5	—	○外面はナデ。	黄橙色	微砂含	良好	
779	〃	—	5.5	—	〃	橙褐色	砂粒含	普通	
780	鉢形土器	18.0	—	—		淡赤橙色	砂粒若干	良好	
781	〃	—	5.0	—	○底部外面はナデ。	淡橙白色	微砂混	普通	○黒斑。
782	〃	—	3.5	—	○内面は丁寧なナデ。	淡黄橙色	微砂若干	良好	
783	〃	34.0	—	—		〃	微砂質	普通	
784	〃	41.0	—	—		黄橙色	〃	〃	
785	高杯形土器	20.0	—	—		〃	精製粘土	〃	○剝落顕著。
786	〃	—	12.5	—	○脚内面は横方向ハケメ。	淡橙灰色	〃	〃	
787	〃	—	12.5	—		淡黄橙色	〃	良好	
788	〃	—	11.0	—	○脚内面はナデ。	淡橙灰色	〃	普通	○黒斑。
789	〃	—	—	—	○杯部内面はハケメ。	褐橙色	〃	良好	
790	〃	—	—	—	○杯部内面はヘラミガキ。	橙灰色	〃	〃	

土壙—20（第81図）

791	甕形土器	—	—	—		灰白色	細砂	良好	○小破片。
792	壺形土器	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
793	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃

土壙—22（第83図）

794	壺形土器	—	—	—		鈍い橙色	細砂	良好	○小破片。
795	〃	11.3	4.0	14.3		浅黄橙色	〃	〃	○口縁部欠損。
796	高杯形土器	12.8	7.8	12.6	○杯部内外面とも多角形のヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	

土壙—23（第84図）

797	甕形土器	—	—	—		灰白色	精製粘土	良好	○黒斑。
798	鉢形土器	—	—	—	○内面はケズリのあとヘラミガキ。	灰色	細砂	〃	○小破片。
799	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○黒斑。
800	高杯形土器	—	—	—	○内外面とも暗文様ヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
801	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
802	高杯形土器	—	—	—	○脚端部は角張る。	黄橙色	精製粘土	良好	○小破片。
803	底部	—	3.8	—		〃	細砂	〃	

土壙—24（第85・86図）

804	壺形土器	15.5	—	—	○口縁部内面は横位のナデ。	暗黄灰色	微砂含	良好	○黒斑。
805	〃	15.0	—	—	○頸部内面指頭押圧後に左方向へラケズリ。	淡黄橙色	砂粒含	〃	
806	〃	13.5	7.5	27.5	○頸部・口縁部は内外面とも横位のナデ。 ○肩部外面に4本の縦方向のヘラガキ線刻。	橙灰白色	〃	〃	○外面煤付着。
807	〃	16.0	—	—	○頸部・口縁部は内外面とも横位のナデ。	灰黄橙色	微砂含	普通	
808	甕形土器	16.0	—	—	○胴部外面は縦方向ハケメ後にナデ。	淡灰褐色	砂粒含	〃	○黒斑。 ○外面煤付着。
809	〃	16.5	—	—		淡黄橙色	微砂含	〃	○黒斑。
810	〃	16.0	—	—	○胴部外面はハケメ後にナデ。	灰褐色	砂粒含	〃	○外面煤付着。
811	〃	15.5	—	—	〃	淡橙灰色	微砂含	〃	
812	〃	16.0	—	—		〃	砂粒含	〃	○黒斑。
813	〃	14.5	—	—		灰黄橙色	微砂含	良好	
814	〃	15.5	—	—	○口縁部内面に3本の沈線。	淡褐灰色	砂粒含	普通	
815	鉢形土器	22.0	—	—		〃	〃	〃	○剝落顕著。
816	〃	—	—	—	○体部外面は縦方向のヘラミガキ。	暗黄灰色	微砂含	〃	○黒斑。
817	〃	10.0	—	—		黄橙色	砂粒含	〃	
818	〃	10.5	—	—	○紐孔は1孔のみを確認。	灰橙色	砂粒混	〃	○剝落顕著。
819	甕形土器	—	6.0	—	○底部穿孔は焼成後。	淡褐灰色	微砂多含	〃	○黒斑。 ○外面煤付着。
820	台付鉢形土器	—	6.0	—		淡橙灰色	砂粒含	不良	○体部内面は剝落
821	甕形土器	—	5.0	—	○胴部外面は剝落。	灰褐色	〃	普通	○外面煤付着。
822	〃	—	6.0	—	○底部外面はナデ。	褐灰色	微砂多含	〃	
823	高杯形土器	—	—	—	○口縁部外面はヨコヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
824	〃	—	—	—	○口縁端部内外面に各2本の沈線。	淡橙白色	微砂若干	〃	
825	〃	—	16.0	—	○透孔は2孔一対で4か所。	黄橙色	微砂含	〃	
826	〃	—	18.0	—		〃	精製粘土	良好	
827	〃	—	16.0	—		淡褐灰色	砂粒含	普通	○黒斑。

土壙—25（第87図）

828	壺形土器	13.5	—	—		暗黄橙色	微砂多含	不良	
829	〃	10.0	—	—		淡褐灰色	細砂含	普通	
830	甕形土器	13.5	4.5	16.5	○胴部外面上端は横位ナデ。	〃	砂粒含	〃	○外面煤付着。
831	鉢形土器	16.5	—	—		灰褐色	〃	〃	
832	〃	19.5	—	—	○体部内外面とも丁寧なナデ。	淡橙灰色	微砂若干	〃	
833	〃	41.5	—	—		淡橙黄色	砂粒若干	〃	
834	台付鉢形土器	—	3.5	—	○体部内面はナデ。	灰褐色	砂粒含	良好	○製塩土器。
835	〃	—	3.0	—	〃	褐灰色	〃	普通	〃
836	〃	—	3.5	—	〃	灰褐色	〃	良好	〃
837	〃	—	3.5	—	〃	暗灰褐色	〃	普通	〃
838	〃	—	3.5	—	〃	〃	〃	〃	〃
839	〃	—	—	—	〃	灰褐色	細砂含	良好	〃

土壙—26（第88図）

840	甕形土器	15.0	—	—	○胴部外面はナデ。	暗橙灰色	砂粒含	普通	
841	〃	11.5	—	—		白橙色	精製粘土	〃	
842	鉢形土器	14.5	—	—		淡茶橙色	〃	良好	
843	〃	12.5	4.2	7.5	○内面は縦方向のナデ。	橙色	〃	〃	
844	〃	12.8	5.8	9.5	○外面下半は丁寧なナデ。	橙黄色	〃	〃	○黒斑。
845	高杯形土器	—	—	—		〃	〃	普通	○剝落顕著。
846	〃	—	—	—		淡橙灰色	〃	不良	〃

土壙—27（第89図）

847	甕形土器	16.0	—	—	○胴部内面横方向ヘラケズリ。	橙色	精製粘土	不良	○剝落顕著。
848	〃	—	—	—		灰橙色	砂粒含	普通	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
849	鉢形土器	12.0	—	—		茶橙色	精製粘土	良好	
850	〃	7.8	3.5	3.7	○内面は指頭によるケズリ。 ○外面上半はヘラガキによる縦方向の線刻。	灰橙色	〃	〃	

土壙—28（第90図）

851	甕形土器	10.0	—	—		淡褐灰色	微砂含	普通	
852	〃	16.5	—	—		黄橙色	砂粒含	〃	
853	〃	11.5	—	—		橙褐色	微砂多含	〃	
854	底部	—	4.8	—	○底部外面はナデ。	褐灰色	〃	〃	
855	鉢形土器	—	—	—		黄橙色	砂粒含	〃	○剝落顕著。
856	高杯形土器	20.0	—	—		灰橙色	精製粘土	〃	

土壙—29（第92図）

857	壺形土器	19.5	—	—		淡灰橙色	砂粒含	良好	
858	甕形土器	15.0	—	—		灰橙色	微砂含	普通	
859	鉢形土器	14.0	4.5	4.2		黄橙色	微砂若干	〃	
860	高杯形土器	17.0	—	—	○内面は縦方向のヘラミガキか？	淡茶橙色	微砂含	〃	
861	〃	—	—	—	○透孔は4孔。	灰橙色	精製粘土	〃	○外面剝落。

土壙—30（第93図）

862	壺形土器	20.0	—	—		黄灰色	微砂若干	良好	
863	〃	13.5	—	—		淡灰橙色	微砂含	普通	
864	〃	13.8	—	—		淡褐橙色	微砂若干	〃	
865	〃	16.5	—	—		暗橙白色	微砂多含	〃	○剝落顕著。
866	〃	—	9.0	—	○底部外面はナデで，輪圧痕有り。	橙褐灰色	〃	〃	
867	甕形土器	16.3	—	—		淡褐橙色	微砂質	〃	
868	〃	20.0	—	—		暗橙灰色	微砂含	〃	
869	〃	17.0	—	—		灰橙色	精製粘土	〃	
870	〃	10.5	—	—		灰褐色	微砂含	〃	
871	直口壺形土器	—	—	—		灰橙色	黒雲母含	〃	○剝落顕著。
872	鉢形土器	—	—	—	○外面は横方向ハケメ後にヘラミガキ。	黄褐灰色	砂粒多含	〃	
873	台付鉢形土器	8.8	3.5	6.0	○内面はナデアゲ。	橙灰色	砂粒若干	〃	
874	鉢形土器	11.5	—	—	○口縁部外面は横位ナデ。	灰橙色	精製粘土	〃	
875	〃	15.0	—	—		褐橙色	微砂若干	〃	
876	高杯形土器	16.8	—	—	○外面はナデか？	暗灰橙色	精製粘土	〃	
877	〃	18.0	—	—	○内外面とも丁寧なナデか？	黄橙色	微砂若干	〃	
878	〃	—	—	—		淡橙灰色	精製粘土	〃	
879	〃	—	14.0	—		褐橙色	微砂若干	〃	

土壙—31（第95図）

880	壺形土器	19.4	—	—		灰白色	細砂	良好	
881	甕形土器	13.5	—	—	○肩部内面は指頭圧痕。	鈍い橙色	〃	〃	
882	〃	13.7	—	—	○頸部まで内面ヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	
883	〃	17.6	—	—		灰褐色	〃	〃	
884	〃	—	—	—		橙色	〃	〃	○小破片。
885	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
886	鉢形土器	—	4.4	—		〃	微砂	〃	
887	〃	—	4.6	—	○内面はハケメ。	〃	〃	〃	
888	〃	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	
889	高杯形土器	12.0	—	—		橙色	精製粘土	〃	
890	〃	20.3	14.7	13.7	○杯部は深い。	〃	微砂	〃	表面磨滅。

土壙—32（第97～101図）

891	壺形土器	21.5	—	—	○口縁部内面はヨコヘラミガキ後にタテヘラミガキ。	褐灰色	細砂含	普通	○鋸歯文は2個のみ。
892	〃	22.0	—	—	○口縁部内面はヨコハケメ後にタテヘラミガキ。	黄橙色	微砂含	〃	〃
893	〃	22.0	—	—	○頸部内面はヘラケズリ後にタテヘラミガキ	淡橙灰色	砂粒含	〃	

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
894	壺形土器	22.0	—	—	○頸部外面中位と肩部外面にハケメ工具端部による連続刺突文。	淡褐橙色	砂粒含	普通	
895	〃	23.0	—	—		黄橙色	〃	〃	○鋸歯文2個のみ
896	〃	22.5	—	—		褐黄灰色	微砂多含	〃	
897	〃	19.5	—	—	○頸部内面は指頭によるナデアゲ後に上位を右方向のハケメ調整。	橙白色	砂粒含	〃	
898	〃	20.0	—	—	○頸部外面は軽い縦位のハケメ後に沈線。 ○肩部外面に貝殻圧痕文。	褐橙灰色	〃	〃	
899	〃	19.5	—	—		黄橙色	微砂混	〃	
900	〃	21.0	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	灰黄橙色	微砂多含	〃	
901	〃	19.0	—	—	○頸部内面は指頭によるナデアゲ。	淡橙灰色	砂粒含	不良	
902	〃	22.5	—	—		〃	微砂含	良好	
903	〃	28.0	—	—	○口縁部両端面に各1本の沈線。	〃	砂粒含	普通	
904	〃	19.0	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	橙灰色	微砂含	〃	
905	〃	19.0	—	—	○口縁部内外面ともヘラミガキの痕跡。	暗灰褐色	砂粒含	〃	○剝落顕著。
906	〃	21.0	—	—	○外面はナデ。	黄橙色	微砂混	〃	○鋸歯文は1個を確認しえたのみ
907	〃	19.5	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	淡橙白色	砂粒含	良好	
908	〃	21.0	—	—	○頸部内面上半に部分的なヨコヘラミガキ。	淡褐橙色	〃	普通	
909	〃	—	—	—	○頸部外面はタテハケメ後にクシガキ沈線。	〃	微砂質	〃	
910	〃	16.0	—	—	○頸部内面上半は横位のナデ。	淡赤橙色	砂粒含	〃	
911	甕形土器	22.5	—	—		橙褐灰色	微砂含	〃	
912	壺形土器	17.0	—	—		淡橙灰色	微砂多含	〃	○器台に転用した可能性大。
913	〃	13.0	—	—	○頸部外面にヘラミガキ工具の刺突痕。	黄橙色	砂粒含	不良	
914	〃	16.0	—	—		灰白色	微砂含	良好	○黒斑。
915	〃	19.0	—	—		淡橙白色	微砂質	普通	
916	甕形土器	18.0	—	—	○口唇部に1本の沈線。	橙褐色	〃	〃	
917	〃	17.0	—	—	○胴部内面上半は横方向のヘラケズリ。	橙灰色	砂粒含	良好	○外面煤付着。
918	〃	15.0	—	—		〃	微砂含	普通	〃
919	〃	16.0	—	—	○胴部外面下半は剝落。	赤橙色	微砂質	〃	
920	〃	16.0	—	—		褐灰色	〃	〃	
921	〃	15.5	—	—		淡褐灰色	微砂多含	〃	
922	〃	16.5	—	—	○口縁部外面にイタメ。	茶灰色	砂粒含	〃	○黒斑。
923	〃	15.5	—	—		淡黄橙色	〃	良好	
924	〃	14.0	—	—		橙褐灰色	微砂質	普通	
925	〃	14.5	—	—	○胴部外面上半は剝落。	黄橙白色	微砂含	〃	
926	〃	11.0	—	—		淡橙白色	〃	〃	
927	〃	13.0	—	—	○口縁部外面にイタメ。	灰橙色	砂粒含	良好	
928	〃	16.0	—	—		淡橙白色	微砂含	〃	
929	〃	12.0	—	—		灰白色	〃	〃	
930	〃	14.0	—	—		赤橙色	砂粒含	普通	
931	〃	16.0	—	—		淡白橙色	〃	〃	
932	〃	16.5	—	—		淡橙白色	微砂含	良好	
933	〃	18.0	—	—		淡白橙色	砂粒含	普通	
934	〃	15.0	—	—	○胴部外面は粗いハケメ。	灰橙色	〃	〃	○外面煤付着。
935	〃	15.0	—	—		黄橙色	〃	良好	
936	〃	13.5	—	—	○胴部外面に縦方向のハケメ痕跡。	〃	微砂質	普通	○黒斑。
937	〃	12.0	—	—		黄橙灰色	微砂含	良好	
938	〃	14.0	—	—		暗橙灰色	砂粒含	普通	
939	〃	12.0	—	—	○内外面とも横位のナデ。	灰橙色	微砂含	良好	
940	〃	11.0	—	—		黄橙色	砂粒含	普通	
941	〃	14.0	—	—		淡黄橙色	微砂質	〃	○胴部外面剝落。
942	〃	10.0	—	—	○内外面とも横位のナデ。	暗褐灰色	微砂含	〃	
943	〃	16.0	—	—		黄橙色	砂粒含	〃	
944	〃	15.0	—	—		淡橙灰色	微砂混	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
945	甕形土器	14.5	—	—		黄褐灰色	微砂含	良好	
946	〃	16.0	—	—		淡白橙色	砂粒含	普通	
947	底部	—	7.0	—	○底部外面はナデ。	褐灰白色	微砂質	良好	
948	〃	—	7.0	—	○底部外面はハケメ。	橙褐色	砂粒含	〃	
949	甕形土器	—	6.0	—	○底部外面は平行ヘラミガキ。	灰褐色	微砂含	〃	
950	〃	—	6.5	—	〃	褐灰色	〃	〃	
951	〃	—	4.5	—	○底部穿孔は焼成後。	暗灰褐色	砂粒含	普通	
952	〃	—	4.5	—		灰褐色	〃	良好	
953	鉢形土器	40.5	—	—		黄橙灰色	〃	〃	○黒斑。
954	台付鉢形土器	—	4.5	—		暗灰褐色	砂粒多含	〃	○製塩土器。
955	〃	—	3.8	—		淡赤灰色	〃	普通	〃
956	〃	—	6.5	—	○台部内面はナデ。	橙白色	微砂質	〃	
957	〃	—	6.0	—	○台部内外面ともナデ。	黄橙色	砂粒含	良好	
958	〃	—	5.5	—		〃	微砂含	普通	○鉢部内面剝落。
959	鉢形土器	31.0	—	—	○口縁部外面は横位のナデ。	〃	〃	〃	○黒斑。
960	〃	27.0	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	灰黄橙色	微砂含	〃	
961	〃	26.0	—	—	○口縁端部に1本の凹線。	淡白橙色	精製粘土	〃	○剝落顕著。
962	〃	18.5	—	—		灰橙色	〃	〃	○胴部外面剝落。
963	〃	17.0	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	黄褐灰色	砂粒含	〃	
964	〃	17.0	—	—	○内面下半はヘラケズリ後にナデ。	淡赤橙色	〃	〃	
965	〃	22.0	—	—	○鉢部外面に若干のヘラミガキ痕跡。	赤橙色	微砂多含	〃	
966	〃	15.0	—	—	○鉢部外面はナデ。	暗褐灰色	〃	〃	○内面剝落。
967	高杯形土器	25.0	—	—		褐橙灰色	微砂混	〃	
968	〃	15.0	—	—	○口縁部と杯部は胎土が異なる。	黄橙色	精製粘土 微砂粘土	良好	
969	〃	16.5	—	—		赤橙灰色	精製粘土	普通	
970	〃	19.0	—	—		灰橙色	〃	〃	○口縁部内面剝落
971	〃	18.5	—	—	○口縁部外面はナデ後に波状ヘラミガキ。	〃	〃	良好	
972	〃	21.0	—	—		黄橙色	微砂含	普通	
973	〃	22.0	—	—		橙褐灰色	砂粒含	〃	
974	〃	—	—	—	○外面は密なハケメが交叉する。	淡黄橙色	微砂含	〃	
975	〃	11.5	—	—		淡橙灰色	精製粘土	〃	
976	〃	14.0	—	—		茶橙色	砂粒含	良好	
977	〃	12.0	—	—		赤灰橙色	微砂含	普通	
978	〃	—	12.0	—	○脚裾部外面と杯部内面は剝落。	灰白色	〃	〃	
979	〃	—	13.5	—		橙茶色	精製粘土	〃	
980	〃	12.0	—	—		灰褐色	微砂混	〃	○内面剝落。
981	台付直口壺形土器	—	—	—		灰橙色	微砂含	〃	
982	高杯形土器	—	15.0	—		黄橙色	砂粒混	〃	
983	〃	—	—	—	○杯部内面はナデ。	橙茶色	精製粘土	良好	
984	〃	—	—	—	○杯部内面はヘラミガキ。	褐橙色	〃	〃	

土壙—34（第103・104図）

985	壺形土器	21.3	—	—	○口縁部内面はハケメ。	灰白色	細砂	良好	○小破片。
986	〃	16.1	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
987	〃	9.2	—	—	○外面はヘラミガキ。	浅黄橙色	精製粘土	〃	
988	〃	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	○小破片。
989	甕形土器	14.7	—	—		灰白色	〃	〃	
990	〃	16.2	—	—		〃	〃	〃	
991	〃	17.2	3.5	22.0	○外面は粗いタタキメ。	浅黄橙色	雲母が多い	〃	
992	〃	14.0	—	—		褐灰色	微砂	〃	○小破片。
993	〃	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	〃
994	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
995	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
996	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
997	甕形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
998	鉢形土器	16.2	3.1	7.9	○外面はヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
999	〃	—	—	—		〃	精製粘土	〃	
1000	〃	8.8	—	—		〃	細砂	〃	○小破片。
1001	〃	12.6	4.3	5.8		〃	〃	〃	
1002	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○煤付着。
1003	底部	—	4.2	—	○底部穿孔。	灰褐色	〃	〃	
1004	〃	—	6.2	—	○底面ヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
1005	〃	—	5.2	—		〃	〃	〃	
1006	〃	—	6.8	—	○底部穿孔。底面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1007	〃	—	4.7	—		灰褐色	〃	〃	
1008	〃	—	9.2	—		黄橙色	〃	〃	
1009	〃	—	6.5	—	○底面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1010	高杯形土器	17.3	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	○小破片。
1011	〃	16.6	—	—	○杯部は深い。	黄橙色	〃	〃	
1012	〃	16.8	—	—	〃	〃	〃	〃	
1013	〃	—	11.8	—		橙色	細砂	〃	
1014	〃	—	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	
1015	〃	14.0	—	—	○杯部は椀状を呈する。	黄橙色	〃	〃	
1016	〃	12.0	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
1017	〃	—	12.4	—		黄橙色	〃	〃	
1018	〃	—	12.6	—		浅黄橙色	〃	〃	
1019	〃	—	—	—		橙色	細砂	〃	

土壙—35（第105図）

1020	甕形土器	—	—	—		橙白色	砂粒含	普通	
1021	底部	—	8.0	—	○底部外面はナデ。	淡橙灰色	〃	良好	
1022	〃	—	3.5	—	○内外面ともナデ。	淡橙白色	精製粘土	普通	
1023	高杯形土器	18.5	—	—	○内外面とも横位ナデ。	黄橙色	砂粒含	不良	
1024	〃	—	10.0	—		橙褐色	〃	普通	○黒斑。

土壙—36（第106図）

1025	甕形土器	19.0	—	—	○口縁部外面にイタメ。	明灰橙色	砂粒含	普通	
1026	〃	7.0	—	—	○内外面ともナデ。	淡褐灰色	〃	〃	
1027	〃	—	—	—	○胴部外面はハケメ。	〃	〃	〃	○外面煤付着。
1028	高杯形土器	—	—	—	○口縁端面に4本の沈線。	淡灰褐色	微砂含	〃	

土壙—37（第107図）

1029	壺形土器	10.5	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1030	〃	10.4	—	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	鈍い褐色	〃	〃	
1031	甕形土器	14.2	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1032	壺形土器	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1033	甕形土器	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
1034	底部	—	11.3	—		浅黄橙色	〃	〃	
1035	〃	—	13.5	—	○内面はハケメ。	〃	〃	〃	○黒斑。
1036	台付鉢形土器	—	5.5	—	○外面はヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	
1037	〃	7.7	4.5	9.6	○外面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	○一部欠損。
1038	高杯形土器	—	15.8	—	○脚端部は少し立ちあがる。	鈍い褐色	〃	〃	
1039	器台形土器	—	23.4	—	○内面はヘラケズリ。	鈍い橙色	〃	〃	
1040	高杯形土器	—	—	—		鈍い褐色	〃	〃	
1041	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1042	脚部	—	4.2	—	○小竹管文。	明赤灰色	〃	〃	

土壙—38（第108図）

1043	甕形土器	9.0	—	—	○外面は粗いハケメ。	明褐色	細砂	良好	
1044	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1045	底部	—	5.4	—	○外面は粗いハケメ。	褐灰色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1046	底部	—	9.0	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	褐灰色	細砂	良好	
1047	細頸壺形土器	—	—	—	○外面は丹塗り。	黄橙色	〃	〃	
1048	脚部	—	5.8	—		〃	〃	〃	
1049	高杯形土器	—	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
1050	〃	—	—	—	○口縁端部が拡張する。	鈍い橙色	〃	〃	〃
1051	〃	—	10.0	—	○脚部に横位のクシガキ文。	橙色	〃	〃	
1052	〃	—	7.0	—		灰色	〃	〃	

土壙—39（第109図）

1053	甕形土器	9.0	—	—	○外面は粗いハケメ。	明褐色	細砂	良好	
1054	〃	—	—	—	○口縁端部に凹線文。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1055	壺形土器	—	—	—	○口縁部に凹線文。	〃	〃	〃	〃
1056	高杯形土器	21.0	—	—	○口縁部が少し外反する。	鈍い橙色	〃	〃	

土壙—40（第110・111図）

1057	壺形土器	12.0	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	
1058	〃	11.9	—	—	○口縁部に凹線文。	灰白色	〃	〃	
1059	〃	17.1	—	—	〃	〃	〃	〃	
1060	〃	13.2	—	—	○口縁部内面は横位のヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	○小破片。
1061	甕形土器	19.6	—	—		〃	〃	〃	〃
1062	〃	14.3	—	—		〃	〃	〃	
1063	〃	16.0	—	—	○外面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1064	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1065	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
1066	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1067	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
1068	〃	16.0	—	—		黄橙色	〃	〃	
1069	鉢形土器	11.4	—	—	○外面はハケメ。	〃	〃	〃	
1070	底部	—	10.6	—		〃	〃	〃	
1071	〃	—	9.0	—		灰色	〃	〃	
1072	〃	—	5.2	—	○底部穿孔。	黄橙色	〃	〃	○小破片。
1073	〃	—	6.0	—		〃	〃	〃	
1074	〃	—	7.8	—		明褐灰色	〃	〃	
1075	〃	—	4.2	—	○底面はハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	
1076	〃	—	4.0	—	〃	灰白色	〃	〃	
1077	甕形土器	—	13.6	6.4	○内面はヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
1078	高杯形土器	—	8.0	—		〃	〃	〃	
1079	〃	—	12.5	—	○透し孔は5個。	〃	微砂	〃	
1080	台付鉢形土器	12.5	—	—	○外面はヘラケズリ。	橙色	細砂	〃	
1081	〃	—	4.2	—	〃	明褐灰色	〃	〃	
1082	〃	—	4.5	—		橙色	〃	〃	
1083	〃	—	3.8	—		明褐灰色	〃	〃	
1084	〃	8.4	—	—	○口縁部に凹線文。	黄橙色	〃	〃	
1085	高杯形土器	—	6.8	—	○杯部内面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1086	〃	18.5	—	—	○口縁部外面に暗文様のヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1087	〃	—	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
1088	〃	—	19.8	—	○脚の裾部は屈曲しない。	〃	〃	〃	
1089	壺形土器	—	—	—	○胴部に凸帯。外面は丹塗り。	〃	〃	〃	○小破片。
1090	器台形土器	—	24.2	—	○端部は肥厚する。	黄橙色	細砂・小礫	〃	
1091	〃	—	22.5	—	○内面はヨコハケメ，外面はタテハケメ。	橙色	微砂	〃	
1092	〃	—	—	—	○裾部に凹線文。	淡灰色	細砂	〃	○小破片。

土壙—41（第113図）

1093	壺形土器	12.0	—	—	○口縁端部に凹線文。	黄橙色	細砂	良好	
1094	甕形土器	14.8	—	—	○肩部にタタキメ。	鈍い橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1095	甕形土器	—	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1096	底部	—	10.0	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	
1097	細頸壺形土器	4.8	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	
1098	底部	—	9.2	—	〃	浅黄橙色	〃	〃	

土壙—42（第114～116図）

1099	壺形土器	11.6	—	—	○口縁端部には凹線文。沈線はらせん。	黄橙色	細砂	良好	
1100	〃	10.7	—	—	○肩部に半截竹管文。	灰褐色	〃	〃	
1101	〃	14.7	—	—	○口縁端部に凹線文。	灰色	〃	〃	
1102	〃	13.6	—	—	○口縁部直下まで内面ヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
1103	〃	16.0	—	—		灰褐色	〃	〃	
1104	〃	12.8	—	—	○口縁部内面はうすいハケメ。	〃	〃	〃	
1105	甕形土器	16.5	—	—		黄橙色	細砂・小礫	〃	○表面磨滅。
1106	壺形土器	14.7	—	—	○口縁端部に凹線文。	〃	〃	〃	
1107	〃	13.2	—	—		〃	〃	〃	
1108	甕形土器	11.7	—	—	○口縁端部に凹線文。	灰褐色	細砂	〃	
1109	〃	14.2	—	—	○外面はハケメ。	〃	細砂・小礫	〃	
1110	〃	12.2	—	—		橙色	〃	〃	
1111	壺形土器	12.2	7.5	25.9	○頸部にヘラガキ文。	灰褐色	〃	〃	
1112	〃	11.4	—	—	○肩部に刺突文。	灰白色	細砂	〃	
1113	甕形土器	13.0	—	—		灰褐色	〃	〃	
1114	〃	12.0	—	—		〃	細砂・小礫	〃	
1115	〃	24.3	—	—	○肩部はヨコヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1116	〃	15.7	—	—	○口縁端部に凹線文。	〃	細砂	〃	
1117	鉢形土器	11.3	—	—		〃	〃	〃	
1118	〃	13.7	—	—	○外面はヘラケズリ。	灰色	〃	〃	
1119	〃	36.5	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
1120	〃	19.2	—	—		黄橙色	〃	〃	
1121	〃	22.0	—	—	○内面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1122	底部	—	5.3	—		灰褐色	〃	〃	
1123	〃	—	5.6	—	○内面はヘラミガキ。	〃	細砂・小礫	〃	
1124	〃	—	10.8	—		〃	細砂	〃	
1125	〃	—	7.3	—		〃	〃	〃	○表面磨滅。
1126	〃	—	9.5	—	○底部は少しあげ底。	〃	細砂・小礫	〃	
1127	〃	—	9.2	—		〃	〃	〃	
1128	〃	—	6.4	—		〃	細砂	〃	
1129	台付鉢形土器	—	6.6	—	○内面はヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
1130	高杯形土器	22.5	—	—	○口縁端部に凹線文。	灰褐色	〃	〃	
1131	〃	25.2	—	—	〃	〃	〃	〃	
1132	〃	21.8	—	—		〃	〃	〃	
1133	〃	21.0	12.5	17.7	○口縁端部は拡張し、凹線文あり。	黄橙色	細砂・小礫	〃	
1134	〃	12.6	—	—		灰色	細砂	〃	
1135	〃	—	—	—	○脚部は3方向に竹管文。	黄橙色	〃	〃	
1136	〃	—	8.2	—		灰白色	〃	〃	
1137	〃	—	7.8	—		〃	〃	〃	
1138	〃	13.8	7.7	13.3	○脚部は少し立ちあがる。	黄橙色	〃	〃	
1139	脚部	—	9.6	—	○胴部は内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	

土壙—43（第117図）

1140	壺形土器	18.2	—	—	○口縁端部に凹線文。	浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1141	甕形土器	15.4	—	—		〃	〃	〃	〃
1142	〃	14.2	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1143	〃	15.0	—	—		〃	〃	〃	
1144	〃	11.6	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1145	壺形土器	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○小破片。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1146	甕形土器	—	—	—		灰白色	細砂	良好	○小破片。
1147	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
1148	〃	—	—	—		橙色	〃	〃	〃
1149	〃	—	—	—	○口縁端部は肥厚しない。	鈍い橙色	〃	〃	〃
1150	〃	13.2	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1151	〃	14.6	—	—		〃	〃	〃	
1152	鉢形土器	—	—	—		灰褐色	〃	〃	○小破片。
1153	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1154	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
1155	〃	13.5	—	—		〃	〃	〃	
1156	高杯形土器	27.0	—	—	○口縁部内外面に暗文様のヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	
1157	〃	—	—	—		橙色	精製粘土	〃	
1158	〃	—	9.8	—	○脚部内面はハケメ。	〃	〃	〃	
1159	〃	—	9.8	—	○脚端部は肥厚。	〃	細砂	〃	
1160	底部	—	4.2	—	○内面はユビナデ。	黄褐色	〃	〃	
1161	〃	—	8.8	—	○外面は縦位のハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	

土壙―44（第118図）

1162	甕形土器	19.0	—	—	○口縁部に凹線文。	灰褐色	細砂	良好	
1163	〃	14.2	—	—		赤橙色	〃	〃	
1164	〃	11.8	—	—	○口縁部に凹線文。	黄橙色	〃	〃	
1165	鉢形土器	16.8	—	—	○内面はヨコヘラケズリのまま。	〃	〃	〃	
1166	甕形土器	14.8	—	—		灰白色	〃	〃	
1167	鉢形土器	14.6	4.0	8.2	○内面はうすいハケメ。	橙色	精製粘土	〃	
1168	〃	11.8	3.5	4.7		浅黄橙色	〃	〃	
1169	底部	—	8.2	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	灰白色	細砂	〃	
1170	〃	—	4.8	—	○外面は縦位のハケメ。	〃	〃	〃	
1171	高杯形土器	—	10.8	—	○脚端部は肥厚する。	黄橙色	〃	〃	
1172	底部	—	6.6	—	○外面は縦位のハケメ。	〃	〃	〃	
1173	甕形土器	—	—	—	○外面はハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1174	〃	—	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	〃
1175	底部	—	3.3	—	○底部の端をツマミダシ。	橙色	精製粘土	〃	○鉢形土器？
1176	〃	—	3.4	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
1177	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。

土壙―45（第119図）

1178	壺形土器	16.3	8.5	36.6	○胴部上半はハケメ。胴部下半はヘラミガキ	浅黄橙色	細砂	良好	

土壙―46（第120図）

1179	高杯形土器	26.0	—	—	○口縁部外面に暗文様ヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1180	甕形土器	14.4	—	—		〃	〃	〃	
1181	底部	—	4.3	—	○底部端はツマミダシ。	灰褐色	〃	〃	
1182	台付鉢形土器	—	4.0	—	○外面ヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	

土壙―47（第121・122図）

1183	壺形土器	17.0	—	—		赤橙色	細砂	良好	
1184	〃	17.3	—	—	○口縁部内面に半截竹管文。	黄橙色	〃	〃	
1185	器台形土器	16.3	—	—		橙色	〃	〃	
1186	壺形土器	6.4	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。
1187	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
1188	甕形土器	15.4	—	—	○口縁端部に凹線文あり。	鈍い橙色	〃	〃	
1189	〃	10.8	—	—		黄橙色	〃	〃	○表面磨滅。
1190	〃	14.5	—	—	○口縁端部は上方へ少し拡張。	〃	〃	〃	〃
1191	〃	12.5	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○煤付着。
1192	〃	12.0	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	○小破片。
1193	〃	11.6	—	—		鈍い橙色	細砂	〃	〃
1194	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1195	甕形土器	—	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1196	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1197	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
1198	〃	—	—	—		淡黄橙色	微砂	〃	〃
1199	〃	—	—	—		浅黄橙色	細砂	〃	〃
1200	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1201	壺形土器	14.4	—	—	○頸部は短い。	灰白色	〃	〃	
1202	鉢形土器	34.0	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
1203	〃	15.7	—	—	〃	浅黄橙色	〃	〃	
1204	〃	13.4	—	—		黄橙色	〃	〃	
1205	〃	10.8	—	—	○内面はハケメのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1206	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	○小破片。
1207	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	〃
1208	高杯形土器	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1209	底部	—	6.8	—	○底部はあげ底。	〃	細砂	〃	
1210	〃	—	8.6	—	○底面ヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	
1211	〃	—	8.0	—		橙色	〃	〃	
1212	〃	—	9.4	—	○内面はヘラミガキ。	淡灰色	〃	〃	○鉢形土器？
1213	〃	—	3.4	—		鈍い橙色	〃	〃	
1214	〃	—	6.2	—	○底部はわずかにあげ底。	〃	〃	〃	
1215	〃	—	6.0	—	○底部端はツマミダシ。	淡灰色	〃	〃	
1216	〃	—	5.0	—	○内面は縦位のヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	○鉢形土器？
1217	〃	—	6.8	—	○底部はあげ底。	〃	〃	〃	
1218	高杯形土器	22.4	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
1219	〃	19.3	—	—		〃	微砂	〃	
1220	〃	14.4	—	—	○口縁部外面は暗文様のヘラミガキ。	鈍い橙色	精製粘土	〃	
1221	〃	—	12.8	—	○透し孔は4個。	灰白色	細砂	〃	
1222	〃	—	12.6	—	○脚端部は角張る。	黄橙色	〃	〃	
1223	〃	—	—	—	○短脚である。	明赤灰色	精製粘土	〃	
1224	脚部	—	11.6	—	○脚端部は少し立ちあがる。	鈍い橙色	〃	〃	○鉢形土器？
1225	〃	—	10.6	—	○脚端部は肥厚せず。	黄橙色	〃	〃	〃
1226	鉢形土器	2.8	1.3	2.0	○手捏ね土器。	浅黄橙色	微砂	〃	○ほぼ完存。
1227	直口壺形土器	7.7	—	—	○口縁端部に沈線。	黄橙色	精製粘土	〃	
1228	器台形土器	34.0	—	—	○口縁部上面に円形,外面に棒状浮文。	〃	細砂	〃	
1229	〃	23.4	—	—	○口縁部外面に鋸歯文。	橙色	〃	〃	
1230	〃	16.6	—	—	○口縁部上面に半截竹管文。	〃	微砂	〃	○小破片。
1231	台付鉢形土器	—	2.4	—	○外面ヘラケズリ。	灰白色	細砂	〃	

土壙—48（第123・124図）

1232	甕形土器	15.2	5.7	23.6	○外面は粗いハケメ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1233	〃	16.1	—	—		灰白色	〃	〃	
1234	〃	15.7	—	—		灰褐色	〃	〃	○表面は磨滅。
1235	〃	13.3	—	—		〃	〃	〃	同一個体。
1236	〃	—	5.3	—	○底部は少しあげ底。	〃	〃	〃	
1237	〃	13.3	—	—	○口縁端部は上下に拡張。	〃	〃	〃	
1238	高杯形土器	23.2	—	—		明褐灰色	〃	〃	○表面は磨滅。
1239	〃	17.6	—	—		黄橙色	〃	〃	
1240	鉢形土器	41.2	13.8	30.7	○外面は粗いハケメ。	〃	細砂・小礫	〃	

土壙—49（第125・126図）

1241	壺形土器	12.0	6.6	28.6	○頸部下端に棒状刺突文。	橙色	細砂	良好	○復元完形。
1242	〃	25.8	—	—	○口縁部外面に竹管文。	灰白色	〃	〃	
1243	甕形土器	14.0	—	—	○胴部下半の外面はヘラケズリ。	〃	〃	〃	
1244	〃	7.4	4.0	9.1	○口縁端部は肥厚しない。	〃	〃	〃	○完形品。
1245	〃	11.0	5.4	15.5	○口縁部は「く」の字に外反する。	灰褐色	〃	〃	○煤付着。
1246	〃	15.6	6.8	24.5	○外面は縦位のヘラミガキ。	橙色	〃	〃	○復元完形。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1247	甕形土器	10.2	4.8	8.6	○底部端はツマミダシ。	灰白色	細砂	良好	○黒斑。
1248	〃	21.6	—	—	○外面は粗いハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	
1249	〃	16.2	5.7	14.9	〃	灰白色	〃	〃	○煤付着。
1250	〃	13.4	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
1251	〃	10.0	4.6	13.1	〃	浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。
1252	〃	—	6.1	—	○外面はヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	○煤付着。
1253	鉢形土器	17.2	7.8	17.7	○底面はハケメ。	〃	〃	〃	
1254	〃	42.0	12.0	13.4	○把手付。内外面ヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	○黒斑。
1255	高杯形土器	26.0	14.5	19.3	○口縁部外面は暗文様のヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
1256	〃	12.2	—	—	○透し孔は3個。	橙色	〃	〃	
1257	台付壺形土器	13.0	—	—	○内面はヘラケズリのあと一部にハケメ。	灰白色	〃	〃	

土壙—50（第127図）

1258	甕形土器	—	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1259	底部	—	7.2	—	○底部は少しあげ底。	灰色	〃	〃	

土壙—51（第128図）

1260	壺形土器	10.0	—	—	○口縁部に凹線。	鈍い黄橙色	細砂	良好	
1261	甕形土器	12.0	—	—	○口縁部に2条の凹線。	灰白色	〃	〃	
1262	壺形土器	—	6.0	—	○内面ヘラケズリのちヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1263	高杯形土器	33.0	—	—		浅黄橙色	〃	〃	

土壙—52（第129図）

1264	甕形土器	14.0	—	—		鈍い黄橙色	細砂	良好	
1265	〃	—	6.6	—		〃	〃	〃	
1266	鉢形土器	11.6	—	—		浅黄橙色	水漉粘土	〃	
1267	高杯形土器	—	11.0	—		鈍い橙色	〃	〃	○調整不詳。

土壙—53（第131図）

1268	壺形土器	11.6	6.4	—	○口縁部に3条の凹線とヘラガキ鋸歯文。	灰白色	細砂	良好	
1269	〃	14.0	—	—		灰黄橙色	〃	〃	
1270	甕形土器	14.0	5.5	23.9		黄灰白色	〃	〃	○外面煤。
1271	〃	14.8	4.9	21.5		鈍い橙色	〃	〃	〃
1272	〃	12.8	4.8	21.5	○底部外面ハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1273	〃	14.2	—	—		淡赤橙色	〃	〃	〃
1274	〃	—	6.0	—		褐灰色	〃	〃	○内外面煤。
1275	鉢形土器	17.0	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
1276	〃	9.4	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ユビナデ。	淡橙灰色	〃	〃	
1277	〃	13.4	—	—		浅黄橙色	精製粘土	〃	
1278	台付鉢形土器	—	4.1	—		灰白色	細砂粒多	〃	○製塩土器。
1279	〃	—	4.4	—		〃	〃	〃	〃
1280	〃	—	4.5	—		淡赤橙色	〃	〃	〃

土壙—54（第132図）

1281	甕形土器	14.2	—	—		鈍い黄橙色	細砂	良好	
1282	〃	—	—	—		淡褐灰色	〃	〃	
1283	〃	—	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1284	底部	—	5.6	—		淡褐灰色	〃	〃	
1285	高杯形土器	—	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	
1286	底部	—	—	—		鈍い黄橙色	細砂	〃	
1287	高杯形土器	14.2	—	—		淡褐灰色	精製粘土	〃	
1288	鉢形土器	13.4	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○調整不詳。

土壙—55（第133図）

1289	甕形土器	12.4	—	—	○口縁部に4～5条の凹線。	灰白色	細砂	良好	
1290	高杯形土器	17.8	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	○調整不詳。
1291	〃	—	12.0	—		赤褐色	〃	〃	
1292	〃	—	12.8	—		浅黄橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1293	直口壺形土器	9.7	—	—		鈍い橙色	精製粘土	良好	

土壙—56（第134図）

1294	壺形土器	14.2	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	鈍い黄橙色	細砂	良好	
1295	甕形土器	13.0	—	—		淡褐灰色	〃	〃	○外面煤。
1296	〃	13.0	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1297	底部	—	—	—		橙色	精製粘土	〃	
1298	壺形土器	14.8	—	—		灰橙色	細砂	〃	
1299	甕形土器	14.0	—	—	○口縁部に3条の凹線。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1300	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1301	〃	—	—	—	○口縁部に2～3条の凹線。	淡褐灰色	〃	〃	
1302	小型鉢形土器	4.9	—	2.8		鈍い黄橙色	〃	〃	
1303	〃	5.0	—	3.4		〃	〃	〃	
1304	高杯形土器	15.5	—	—	○口縁端部に沈線がめぐる。	鈍い橙色	精製粘土	〃	

土壙—57（第135図）

1305	壺形土器	18.6	—	—		鈍い黄橙色	細砂	良好	
1306	〃	20.5	—	—	○口縁部に5条の凹線。	〃	〃	〃	
1307	甕形土器	16.4	—	—		〃	〃	〃	
1308	〃	14.6	—	—	○口縁部指頭オサエ。	〃	〃	〃	
1309	〃	14.6	—	—		〃	〃	〃	
1310	〃	—	5.6	—		鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
1311	高杯形土器	17.8	—	—	○内外面とも磨滅のため調整不詳。	〃	水漉粘土	〃	
1312	〃	17.8	—	—		橙色	精製粘土	〃	

土壙—58（第137図）

1313	壺形土器	10.4	—	—		灰白色	細砂	良好	○外面煤。
1314	〃	13.0	5.0	13.0	○底部外面はヘラケズリのちユビナデ。	鈍い橙色	〃	〃	〃
1315	〃	—	7.0	—	○外面ハケメのちヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1316	甕形土器	14.1	—	—	○外面は粗いハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	
1317	〃	12.8	—	—		〃	〃	〃	
1318	〃	13.6	5.1	23.4	○底部外面ハケメ。	〃	〃	〃	○ほぼ完形。
1319	〃	14.2	4.6	25.3	○底部焼成後穿孔。	鈍い黄橙色	〃	〃	○ほぼ完形。煤。
1320	〃	9.4	—	—	○外面ヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
1321	〃	—	5.2	—		褐灰色	〃	〃	○外面煤。
1322	〃	—	4.8	—		〃	〃	〃	
1323	〃	14.1	5.0	22.0	○底部焼成後穿孔。	鈍い橙色	〃	〃	○ほぼ完形。煤。
1324	〃	13.7	4.6	21.7		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1325	〃	13.7	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○外面煤。
1326	〃	13.1	4.9	14.0	○口縁部は指頭オサエ,ユビナデ。	灰黄橙色	〃	〃	○底部外面敲痕。
1327	鉢形土器	15.4	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1328	〃	19.0	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1329	高杯形土器	—	16.8	—		〃	〃	〃	

土壙—59（第138図）

1330	壺形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	
1331	甕形土器	15.7	—	—		灰白色	〃	〃	
1332	鉢形土器	—	—	—	○内面はヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1333	底部	—	12.2	—	〃	黄橙色	〃	〃	〃
1334	〃	—	5.4	—	○外面はハケメ。	灰褐色	〃	〃	
1335	高杯形土器	—	—	—		灰色	〃	〃	○小破片。
1336	〃	16.2	—	—	○内面はうすいハケメ。	浅黄橙色	精製粘土	〃	
1337	〃	—	—	—	○脚端部は肥厚する。	鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
1338	鉢形土器	—	3.5	—	○外面はハケメ。	黄橙色	〃	〃	
1339	台付鉢形土器	—	4.2	—	○外面はヘラケズリ。	明赤灰色	細砂	〃	
1340	鉢形土器	8.6	—	—		浅黄橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—60（第139図）									
1341	壺形土器	16.7	—	—	○口縁端部に凹線文。	黄橙色	細砂	良好	
1342	甕形土器	15.0	—	—		橙色	〃	〃	
1343	〃	18.8	—	—		灰白色	〃	〃	
1344	底部	—	4.5	—	○底部下端はツマミダシ。	鈍い褐色	〃	〃	
1345	〃	—	7.0	—		黄橙色	〃	〃	
1346	〃	—	6.0	—	○底部はあげ底。	灰色	〃	〃	
1347	甕形土器	12.3	3.6	14.7	〃	黄橙色	〃	〃	
1348	〃	12.8	4.2	17.0	○外面は粗いハケメ。	〃	〃	〃	
1349	壺形土器	—	—	—	○胴部が張り，凸帯2条を配する。	浅黄橙色	〃	〃	
1350	台付鉢形土器	—	9.8	—	○内面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1351	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	
1352	壺形土器	—	6.2	—	○外面は縦位のヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
土壙—61（第140図）									
1353	壺形土器	11.6	7.1	28.0	○胴部は長い。肩部に列点文。	灰白色	細砂	良好	○復元完形。
1354	甕形土器	9.4	—	—	○外面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1355	底部	—	4.8	—	○底部端はツマミダシ。	黄橙色	〃	〃	
1356	器台形土器	—	—	—	○裾部に凹線文。	〃	〃	〃	○小破片。
土壙—62（第141図）									
1357	甕形土器	—	—	—	○内面はヘラケズり。	鈍い橙色	細砂	良好	○小破片。
1358	鉢形土器	—	—	—	○内面はヘラケズりのあとヘラミガキ。	灰色	〃	〃	〃
1359	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1360	底部	—	4.2	—		〃	〃	〃	
1361	〃	—	4.8	—	○底部は少しあげ底。	〃	〃	〃	
1362	〃	—	6.0	—		浅黄橙色	〃	〃	
1363	台付鉢形土器	—	3.0	—		黄橙色	〃	〃	
1364	高杯形土器	—	10.2	—	○透し孔は4個。	〃	〃	〃	
1365	〃	—	—	—	○口縁部内面に暗文様のヘラガキ。	黄橙色	細砂	〃	○小破片。
1366	〃	—	—	—		橙色	精製粘土	〃	〃
1367	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
土壙—63（第142図）									
1368	壺形土器	19.2	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	
1369	甕形土器	14.0	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。
1370	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
1371	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1372	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
1373	鉢形土器	—	—	—	○内面はヘラケズりのあとヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	〃
1374	〃	—	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
1375	底部	—	7.4	—		〃	〃	〃	
1376	〃	—	2.7	—		浅黄橙色	〃	〃	
1377	台付鉢形土器	—	4.0	—		橙色	〃	〃	
1378	〃	—	5.8	—	○内面はヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	
1379	高杯形土器	—	—	—	○内面は暗文様のヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	〃	○小破片。
土壙—64（第143図）									
1380	甕形土器	14.1	—	—		灰白色	細砂・礫	良好	
1381	底部	—	5.7	—		黄橙色	細砂	〃	
1382	甕形土器	10.4	—	—		灰白色	微砂	〃	
1383	〃	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	○小破片。
1384	〃	—	—	—		〃	精製粘土	〃	〃
1385	〃	—	—	—		鈍い橙色	細砂	〃	〃
1386	壺形土器	3.0	—	5.3	○手捏ね土器。	浅黄橙色	〃	〃	
1387	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1388	底部	—	3.3	—	○底部は少しあげ底。	灰白色	細砂	良好	○小破片。
1389	高杯形土器	—	11.0	—		黄橙色	精製粘土	〃	

土壙—65（第144図）

1390	甕形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1391	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃

土壙—66（第145図）

1392	壺形土器	16.1	—	—	○口縁部は外へひらく。	鈍い橙色	細砂	良好	
1393	甕形土器	13.7	—	—	○口縁端部は肥厚しない。	橙色	精製粘土	〃	○表面磨滅。
1394	台付鉢形土器	—	3.4	—	○外面はヘラケズリ。	褐灰色	細砂	〃	
1395	高杯形土器	17.5	—	—	○杯部は深い。	橙色	精製粘土	〃	
1396	〃	17.6	—	—	〃	〃	〃	〃	○表面磨滅。

土壙—67（第147・148図）

1397	壺形土器	—	—	—	○外面ハケメのち縦ヘラミガキ。	鈍い黄橙色	細砂	良好	
1398	甕形土器	14.5	8.5	20.4		鈍い橙色	〃	〃	
1399	〃	14.9	—	—	○外面粗いハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1400	〃	13.8	—	—		〃	〃	〃	○外面煤。
1401	〃	15.1	—	—		〃	〃	〃	
1402	〃	15.5	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
1403	〃	14.3	8.2	—		灰白色	〃	〃	〃
1404	〃	16.7	5.9	25.3		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1405	〃	14.7	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1406	〃	14.1	—	—		〃	〃	〃	○外面煤。
1407	〃	14.1	5.3	23.4	○底部焼成後穿孔。	灰白色	〃	〃	〃
1408	〃	14.7	5.4	23.4		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1409	〃	—	5.4	—		〃	〃	〃	
1410	〃	—	4.8	—	○外面ハケメのちヘラミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
1411	〃	—	4.6	—		〃	〃	〃	○外面煤。
1412	〃	—	6.2	—		浅黄橙色	〃	〃	
1413	〃	13.0	4.8	21.5		鈍い黄橙色	〃	〃	○外面煤。
1414	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	
1415	〃	15.9	—	—	○口縁端部に3条の凹線。	浅黄橙色	〃	〃	
1416	〃	16.1	4.8	23.8		鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
1417	〃	—	2.8	—	○外面ヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1418	〃	10.9	3.3	9.9	○内面指頭オサエ，ナデアゲ。	鈍い橙色	〃	〃	
1419	〃	12.6	—	—	○口縁部指頭オサエ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1420	〃	10.2	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1421	〃	16.1	—	—		淡褐灰色	〃	〃	○外面煤。
1422	高杯形土器	22.0	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1423	〃	—	12.6	—		〃	〃	〃	
1424	〃	—	13.2	—		〃	〃	〃	
1425	〃	—	14.1	—		乳灰白色	〃	〃	
1426	〃	—	14.3	—		灰白色	〃	〃	
1427	〃	—	13.8	—		黄灰白色	〃	〃	
1428	〃	—	—	—	○透しは4孔。	浅黄橙色	〃	〃	
1429	直口壺形土器	7.8	—	—		〃	〃	〃	
1430	鉢形土器	14.9	5.6	8.7	○内外面ともヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1431	〃	13.4	4.3	9.5		鈍い橙色	〃	〃	
1432	〃	16.4	4.7	7.7		鈍い黄橙色	〃	〃	
1433	台付鉢形土器	—	7.8	—		〃	〃	〃	
1434	〃	—	4.3	—		〃	細砂粒多	〃	
1435	〃	—	4.8	—		〃	〃	〃	
1436	〃	—	4.4	—		鈍い赤褐色	〃	〃	
1437	〃	—	4.4	—		淡褐灰色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1438	鉢形土器	26.3	—	—		鈍い橙色	細砂	良好	
1439	〃	31.2	—	—	○外面はハケメのちヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1440	台付鉢形土器	16.6	10.2	18.3		鈍い黄橙色	〃	〃	

土壙—68（第150図）

1441	壺形土器	20.6	—	—	○円形浮文は2個のみ残存。	鈍い橙色	細砂	良好	
1442	〃	19.6	—	—		淡橙色	〃	〃	
1443	甕形土器	15.4	—	—		淡褐灰色	〃	〃	
1444	〃	15.8	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1445	〃	16.0	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1446	〃	10.8	—	—		灰白色	〃	〃	
1447	壺形土器	—	8.4	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1448	甕形土器	—	6.2	—		淡褐灰色	〃	〃	
1449	〃	—	3.5	—		褐灰色	〃	〃	
1450	〃	—	5.2	—		灰白色	〃	〃	
1451	〃	—	4.9	—		〃	〃	〃	
1452	〃	16.4	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1453	〃	17.8	—	—		灰白色	〃	〃	
1454	〃	12.0	—	—	○口縁部に4条の凹線。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1455	〃	14.4	—	—	○口縁部に3～4条の凹線。	鈍い橙色	〃	〃	
1456	〃	14.0	—	—	○口縁部に3条の凹線。	浅黄橙色	〃	〃	
1457	〃	15.4	—	—	〃	淡褐灰色	〃	〃	
1458	〃	17.3	—	—	〃	〃	〃	〃	
1459	〃	—	4.6	—		鈍い橙色	〃	〃	
1460	〃	—	4.6	—		灰白色	〃	〃	○外面煤。
1461	〃	—	10.0	—		鈍い橙色	〃	〃	
1462	鉢形土器	9.1	2.3	3.6		灰白色	〃	〃	
1463	高杯形土器	28.0	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
1464	〃	29.8	—	—	○口縁下端部に凹線。	〃	〃	〃	
1465	〃	—	—	—	○脚柱部にヘラガキ沈線とクシガキ波状文。	淡橙色	〃	〃	○透し孔は6個。
1466	〃	—	10.6	—	○透し孔は2段。上が3個、下が4個。	〃	精製粘土	〃	
1467	〃	—	13.6	—		〃	細砂	〃	
1468	〃	—	15.0	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1469	〃	—	16.3	—		褐灰色	〃	〃	
1470	〃	—	16.6	—		淡橙色	〃	〃	
1471	〃	—	19.5	—		鈍い橙色	〃	〃	
1472	〃	—	20.0	—	○外面ヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1473	〃	—	23.1	—		鈍い橙色	〃	〃	
1474	〃	—	—	—		淡橙色	精製粘土	〃	
1475	台付鉢形土器	9.6	—	—	○内面はユビナデアゲ。	灰白色	細砂粒多	〃	○製塩土器。
1476	〃	—	4.4	—		淡赤橙色	〃	〃	〃
1477	〃	—	4.1	—		赤橙色	〃	〃	〃
1478	〃	—	4.4	—		淡赤橙色	〃	〃	〃
1479	〃	—	4.0	—		〃	〃	〃	〃
1480	〃	—	4.5	—		淡褐灰色	〃	〃	〃
1481	〃	—	4.6	—		淡赤橙色	〃	〃	〃
1482	〃	—	4.2	—		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1483	〃	—	4.6	—		〃	〃	〃	〃
1484	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	〃
1485	〃	—	4.2	—		〃	〃	〃	〃
1486	〃	—	4.6	—		赤褐灰色	〃	〃	〃
1487	〃	—	4.4	—		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1488	〃	—	4.2	—		淡黄赤橙色	〃	〃	〃
1489	〃	—	4.6	—		淡褐灰色	〃	〃	〃
1490	〃	—	5.2	—		褐灰色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—69（第151図）									
1491	甕形土器	16.8	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	
1492	〃	14.4	—	—	○内面はユビナデ。	黄橙色	〃	〃	
1493	〃	11.8	4.7	12.2	○口縁部はツマミダシ。	〃	〃	〃	○復元完形。
1494	鉢形土器	10.6	3.6	9.5	○内外面とも小さなヘラミガキ。	〃	精製粘土	〃	
1495	〃	13.2	—	7.7		橙色	〃	〃	○底部欠損。
1496	〃	11.0	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1497	鉢形土器	—	—	—		〃	細砂	〃	○小破片。
1498	底部	—	10.8	—	○外面はハケメのうえからヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1499	〃	—	6.8	—		鈍い橙色	細砂・小礫	〃	○粗雑。
1500	器台形土器	—	—	—	○口縁端部上面に半截竹管文。	橙色	精製粘土	〃	○小破片。
1501	高杯形土器	17.7	—	—	○内外面とも横位のヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1502	〃	18.1	11.5	10.8	○口縁端部はうすい。	〃	〃	〃	
土壙—70（第152図）									
1503	壺形土器	8.0	—	—	○口縁部はほとんどひろがらない。	浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1504	甕形土器	8.9	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1505	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1506	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	〃
1507	〃	—	—	—	○口縁端部に凹線文。	灰白色	〃	〃	〃
1508	底部	—	7.3	—		〃	〃	〃	
1509	〃	—	4.2	—	○底部に穿孔。	褐灰色	〃	〃	○1500と同一。
土壙—72（第154図）									
1510	壺形土器	11.6	—	—	○口縁端部に凹線文。	黄橙色	細砂	良好	
1511	〃	—	3.6	—	○胴部は著しく張る。	〃	〃	〃	
1512	鉢形土器	15.3	4.8	11.5	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1513	〃	18.7	—	—	○内面はヘラケズリのまま。	鈍い橙色	〃	〃	○黒斑。
1514	〃	20.0	5.9	10.9	〃	灰白色	細砂・小礫	〃	
1515	底部	—	4.8	—		灰褐色	細砂	〃	
1516	〃	—	7.0	—		橙色	〃	〃	
1517	小型鉢形土器	4.0	—	—	○口縁部に穿孔。	褐灰色	〃	〃	○小破片。
1518	高杯形土器	11.8	9.4	12.0		橙色	〃	〃	
1519	〃	9.2	11.0	12.3		黄橙色	〃	〃	○一部欠損。
1520	〃	10.2	10.2	10.3		浅黄橙色	〃	〃	○ほぼ完形。
1521	〃	—	12.5	—		〃	〃	〃	
土壙—73（第155図）									
1522	甕形土器	16.0	6.0	26.9	○肩部に刺突文。	黄橙色	細砂	良好	○煤付着。
1523	〃	—	—	—	○外面はハケメ。	灰白色	〃	〃	○小破片。
1524	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
1525	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリ。	鈍い橙色	〃	〃	〃
1526	底部	—	5.6	—	○底面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
1527	高杯形土器	—	12.3	—		浅黄橙色	精製粘土	〃	
土壙—74（第156図）									
1528	甕形土器	16.0	—	—		黄橙色	細砂	良好	
1529	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	○小破片。
1530	底部	—	8.0	—	○底面は外湾し、ヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
1531	鉢形土器	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
1532	台付鉢形土器	—	4.2	—	○内面はハケメ。	浅黄橙色	細砂	〃	
1533	高杯形土器	—	—	—	○脚部の長さは短い。	黄橙色	精製粘土	〃	
土壙—75（第157図）									
1534	甕形土器	14.6	—	—	○口縁部に4条の凹線。	灰白色	細砂	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1535	壺形土器	—	—	—	○口縁部に3条の凹線。	浅黄橙色	細砂	良好	
1536	〃	—	—	—	○口縁部に4条の凹線。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1537	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
1538	〃	14.8	—	—		乳白色	〃	〃	
1539	底部	—	3.0	—	○外面ヘラミガキ。	鈍い橙色	精製粘土	〃	
1540	〃	—	4.0	—		灰白色	細砂	〃	
1541	〃	—	4.9	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1542	甕形土器	—	4.6	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1543	底部	—	6.0	—		〃	〃	〃	
1544	高杯形土器	—	—	—	○内外面とも磨滅のため調整不詳。	橙色	水漉粘土	〃	
1545	〃	15.0	—	—		淡橙色	精製粘土	〃	
1546	鉢形土器	12.6	—	—	○外面はヘラミガキか？	〃	〃	〃	

土壙—76（第158図）

1547	甕形土器	13.0	—	—	○口縁端部に凹線文。	黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1548	〃	15.2	—	—		灰白色	〃	〃	
1549	〃	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1550	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1551	底部	—	5.0	—	○底部端に指頭圧痕がある。	灰褐色	〃	〃	〃
1552	〃	—	3.8	—		黄橙色	〃	〃	〃
1553	甕形土器	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
1554	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1555	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
1556	高杯形土器	—	—	—		〃	精製粘土	〃	〃
1557	〃	—	—	—		浅黄橙色	細砂	〃	〃
1558	〃	—	10.5	—		橙色	精製粘土	〃	

土壙—77（第159図）

1559	壺形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1560	甕形土器	—	—	—		橙色	〃	〃	〃
1561	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	〃
1562	鉢形土器	—	—	—	○内面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
1563	高杯形土器	—	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	〃
1564	台付鉢形土器	—	4.5	—	○外面はヘラケズリ。	〃	細砂	〃	

土壙—78（第160図）

1565	壺形土器	15.8	—	—	○口縁部外面に凹線文。	黄橙色	細砂	良好	
1566	甕形土器	14.0	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
1567	〃	15.8	—	—		灰白色	〃	〃	〃
1568	高杯形土器	27.2	—	—	○口縁部外面には暗文様のヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1569	器台形土器	—	—	—	○口縁部外面に鋸歯文。	黄橙色	〃	〃	○小破片。
1570	高杯形土器	—	—	—		〃	〃	〃	
1571	器台形土器	—	—	—	○裾部に凹線文。	〃	〃	〃	○小破片。
1572	底部	—	5.6	—		灰褐色	〃	〃	
1573	〃	—	7.5	—		灰白色	〃	〃	
1574	〃	—	4.6	—		〃	〃	〃	
1575	〃	—	5.3	—		黄橙色	〃	〃	
1576	台付鉢形土器	—	4.0	—	○外面ヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	

土壙—79（第161図）

1577	甕形土器	14.5	—	—		灰白色	細砂	良好	
1578	高杯形土器	17.6	—	—	○杯部は深い。外面は細かいヘラミガキ。	橙色	精製粘土	〃	
1579	底部	—	3.6	—		灰白色	細砂	〃	

土壙—80（第162図）

1580	壺形土器	19.2	—	—	○ヨコナデ。	鈍い黄橙色	細砂	良好	
1581	甕形土器	16.0	—	—		〃	〃	〃	○外面煤。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1582	高杯形土器	19.0	—	—		鈍い橙色	水漉粘土	良好	
1583	甕形土器	14.9	—	—		浅黄橙色	細砂	〃	
1584	〃	15.0	—	—	○口縁部に3条の凹線。	鈍い黄橙色	〃	〃	○外面煤。
1585	〃	—	3.4	—		灰白色	〃	〃	
1586		9.4	—	—	○杯部内外面とも丁寧なヘラミガキ。杯部中央には径約2㎜の孔が貫通している。	鈍い橙色	精製粘土	〃	

土壙—81（第163図）

1587	甕形土器	14.8	—	—	○口縁部に3～4条の凹線。	灰白色	細砂	良好	
1588	高杯形土器	—	—	—	○内面ヨコヘラミガキ。外面縦ヘラミガキ	鈍い橙色	〃	〃	
1589	〃	—	—	—	○内外面とも縦ヘラミガキ。	褐灰色	〃	〃	
1590	鉢形土器	—	3.5	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
1591	〃	—	6.3	—		灰白色	〃	〃	
1592	台付鉢形土器	—	4.0	—		〃	細砂粒多	〃	○製塩土器。
1593		13.4	—	—		鈍い橙色	精製粘土	〃	

土壙—82（第164図）

1594	甕形土器	17.2	—	—		鈍い黄橙色	細砂	良好	

土壙—83（第165図）

1595	台付鉢形土器	11.2	—	—	○内面ユビナデか？	灰白色	細砂粒多	良好	○製塩土器。
1596	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	〃

土壙—84（第166図）

1597	器台形土器	9.0	—	—	○内外面とも横位のナデ。	淡褐橙色	精製粘土	良好	
1598	壺形土器	—	4.8	—	○底部は若干の上げ底。	灰褐色	微砂含	普通	○黒斑。
1599	底部	—	7.2	—		〃	砂粒含	〃	
1600	甕形土器	—	—	—	○内外面とも横位のナデ。	橙白色	細砂含	〃	
1601	〃	—	—	—	〃	淡褐橙色	微砂若干	〃	
1602	〃	—	—	—	〃	淡橙白色	砂粒含	〃	
1603	壺形土器	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
1604	高杯形土器	—	—	—	〃	暗橙灰色	砂粒若干	〃	
1605	〃	—	—	—	○外面は横方向のヘラミガキ。	茶橙色	精製粘土	良好	
1606	〃	—	13.5	—	○端部上面に2本の沈線。	灰橙色	〃	普通	○剥落顕著。

土壙—85（第168図）

1607	壺形土器	18.8	—	—	○口縁部内面はヘラミガキ。	橙色	細砂	良好	
1608	甕形土器	13.3	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
1609	〃	14.8	—	—		〃	〃	〃	
1610	〃	15.0	—	—		黄橙色	〃	〃	
1611	〃	15.0	—	—		〃	精製粘土	〃	
1612	〃	—	—	—		灰白色	細砂	〃	○小破片。
1613	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	〃
1614	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
1615	鉢形土器	15.5	—	—	○外面はヨコヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1616	〃	7.5	—	—	○胴部下半は縦位のヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1617	〃	—	—	—	○内面はヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
1618	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土、	〃	〃
1619	底部	—	5.7	—		〃	細砂	〃	○表面磨滅。
1620	〃	—	4.2	—	○底面はハケメ。	〃	〃	〃	
1621	〃	—	6.2	—		浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。
1622	脚部	—	9.8	—	○脚部の高さは低い。	黄橙色	〃	〃	

土壙—86（第169図）

1623	壺形土器	18.0	—	—		黄橙色	細砂	良好	
1624	甕形土器	13.6	—	—		灰白色	〃	〃	
1625	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。
1626	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1627	鉢形土器	—	—	—	○外面はハケメ。	黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1628	高杯形土器	—	—	—		橙色	精製粘土	〃	

土壙—89（第170図）

1629	甕形土器	14.4	—	—		黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1630	台付鉢形土器	—	3.5	—		褐灰色	〃	〃	
1631	壺形土器	—	—	—		黄橙色	微砂	〃	○小破片。

土壙—90（第171・172図）

1632	壺形土器	10.7	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	
1633	〃	10.5	6.1	18.9	○口縁端部は肥厚しない。	黄橙色	〃	〃	
1634	甕形土器	11.7	—	—	○外面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1635	〃	12.7	—	—	○外面は粗いハケメ。	〃	〃	〃	
1636	〃	12.5	6.2	18.7	○口縁部は短く、器壁は厚い。	鈍い橙色	〃	〃	○煤付着。
1637	〃	11.3	6.3	15.7		黄橙色	〃	〃	
1638	〃	13.3	5.6	16.4	○外面は粗いハケメ。	〃	〃	〃	
1639	〃	12.7	—	—	○頸部は著しくしまっている。	浅黄橙色	〃	〃	
1640	〃	12.5	—	—		黄橙色	〃	〃	
1641	鉢形土器	14.0	6.5	16.5	○外面は粗いハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	
1642	〃	14.0	7.2	11.3	○内面はヘラケズリ。	〃	〃	〃	○復元完形。
1643	〃	17.8	—	—	〃	灰色	〃	〃	○頸部に穿孔。
1644	底部	—	6.7	—	○外面はハケメとタタキ。	灰白色	〃	〃	○黒斑。
1645	〃	—	5.5	—	○底部下端はツマミダシ。	〃	〃	〃	
1646	〃	—	6.8	—	○内面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	○黒斑。
1647	〃	—	6.0	—	○底面はヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
1648	〃	—	4.7	—		灰色	〃	〃	○黒斑。
1649	〃	—	6.0	—		〃	〃	〃	〃
1650	鉢形土器	23.0	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
1651	台付鉢形土器	18.3	6.2	14.6	○鉢部は内外面ともヘラケズリ。	橙色	〃	〃	○復元完形。
1652	〃	14.0	6.2	11.6	○外面はヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
1653	高杯形土器	—	11.5	—	○外面はヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	
1654	台付鉢形土器	10.8	4.5	7.9	○内外面ともハケメ。	灰白色	〃	〃	○復元完形。

柱穴出土遺物（第173・174図）

1655	壺形土器	23.3	—	—	○頸部内面はハケメ。	黄橙色	細砂	良好	
1656	〃	22.5	—	—	○口縁部内面はヘラケズリ後にハケメ。	灰橙色	砂粒含	普通	○黒斑。
1657	〃	15.0	—	—		〃	〃	〃	
1658	〃	18.2	—	—	○口縁端部に凹線文。	浅黄橙色	細砂	良好	
1659	〃	14.8	—	—	○口縁部内面にハケメ。	淡橙白色	微砂含	普通	
1660	〃	12.2	—	—	○口縁端部に凹線文。	黄橙色	細砂	良好	
1661	〃	—	—	—	○体部内面はナデ。	〃	精製粘土	普通	
1662	〃	3.5	2.2	6.7	○外面はヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1663	甕形土器	12.6	—	—	○体部外面はナデ。	淡茶橙色	砂粒含	普通	
1664	〃	17.8	—	—		淡褐灰色	微砂含	〃	
1665	〃	17.2	—	—	○口縁部は上方へ湾曲する。	浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1666	〃	14.8	—	—		淡橙白色	砂粒含	不良	
1667	〃	12.4	—	—		淡褐橙色	〃	普通	
1668	〃	11.6	—	—	○外面はうすいハケメ。	灰白色	細砂	良好	
1669	〃	13.3	—	—		淡黄橙色	微砂含	普通	
1670	〃	14.7	—	—	○胴部内面はヘラケズリ。	淡橙褐色	細砂含	〃	○外面煤付着。
1671	〃	16.4	—	—		淡黄橙色	微砂含	〃	〃
1672	〃	13.8	—	—		黄橙色	砂粒含	良好	
1673	〃	15.2	—	—		〃	微砂多含	不良	○黒斑。
1674	〃	16.2	—	—	○胴部内面はヘラケズリ。	〃	砂粒含	普通	
1675	〃	15.8	—	—		淡橙白色	〃	〃	
1676	〃	16.4	—	—	○器壁がうすい。	橙色	細砂	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1677	甕形土器	13.8	—	—	○外面はハケメ。	橙色	細砂	良好	○煤付着。
1678	〃	9.8	5.2	—	○底部内面はヘラケズリ後にハケメ。	淡褐灰色	微砂含	普通	
1679	〃	—	—	—	○胴部内面はヘラケズリ。	〃	砂粒多含	不良	
1680	〃	—	—	—	○胴部外面はナデ。	黄橙色	微砂混	普通	○外面煤付着。
1681	〃	—	—	—		〃	砂粒含	〃	
1682	底部	—	5.6	—	○底部外面はハケメ。	暗灰褐色	微砂混	〃	○黒斑。
1683	〃	—	4.6	—	○底部外面はナデ。	褐灰色	微砂含	〃	
1684	〃	—	6.6	—	○底部外面はハケメ。	灰褐色	砂粒含	〃	
1685	〃	—	8.0	—	○底部内面はヘラケズリ後にヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1686	脚部	—	9.9	—		褐灰色	〃	〃	
1687	鉢形土器	27.1	—	—		黄橙色	細砂	良好	
1688	〃	25.4	—	—	○内外面とも粗いハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	
1689	〃	19.2	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
1690	〃	18.7	—	—	○口縁部外面は横位のナデ。	灰橙色	微砂含	普通	
1691	〃	13.0	4.5	6.7	○内外面ともヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1692	〃	10.2	2.8	5.6	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	灰橙色	精製粘土	普通	
1693	台付鉢形土器	—	4.7	—	○外面はヘラケズリ。	浅黄橙色	細砂	良好	○籾痕。
1694	〃	—	5.8	—	〃	黄橙色	〃	〃	
1695	鉢形土器	—	—	—		〃	砂粒含	普通	
1696	蓋形土器	3.5	12.5	16.6	○内外面ともヘラミガキ。	褐灰色	細砂	良好	
1697	高杯形土器	35.6	—	—		黄橙色	微砂多含	不良	○剝落顕著。
1698	〃	21.4	—	—	○外面は横位のナデ。	淡褐橙白色	砂粒含	普通	
1699	〃	19.3	—	—		淡黄橙色	精製粘土	〃	
1700	〃	18.8	—	—		黄橙色	〃	〃	○内面剝落。
1701	〃	18.5	—	—		〃	〃	〃	○剝落顕著。
1702	〃	19.8	—	—		灰褐色	〃	〃	
1703	〃	17.8	—	—		黄橙色	〃	不良	○剝落顕著。
1704	〃	—	9.8	—		淡橙灰色	〃	普通	○内面剝落。
1705	〃	—	11.9	—	○内面は横位のナデ。	淡褐灰色	微砂含	〃	
1706	〃	—	11.4	—	○内面はナデ。	淡赤橙色	〃	〃	
1707	器台形土器	25.8	—	—		黄橙色	砂粒含	〃	
1708	〃	23.8	—	—		〃	〃	〃	
1709	〃	—	20.2	—	○胴部は内面ヘラケズリ。	〃	細砂	良好	
1710	椀形土器	7.2	—	7.5	○口縁部に穿孔。	〃	微砂	〃	
1711	小型鉢形土器	2.7	1.7	2.8	○手捏ね土器。	鈍い橙色	精製粘土	〃	○ほぼ完存。
1712	ひさご形土器	—	—	—	○把手部にヘラガキがある。	灰白色	細砂	〃	○小破片。

溝—4・5・9（第176図）

1713	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	精製粘土	良好	
1714	壺形土器	19.8	—	—		灰橙色	微砂含	普通	
1715	〃	20.0	—	—	○内外面ともナデ。	黄橙色	微砂混	良好	
1716	甕形土器	15.8	—	—	○口縁端部に凹線文。	淡黄灰色	〃	普通	
1717	〃	14.5	—	—		灰白色	〃	良好	
1718	〃	11.8	—	—	○口縁端部に凹線文。	〃	砂粒含	普通	
1719	〃	16.0	—	—		淡灰褐色	微砂混	〃	○外面煤付着。
1720	壺形土器	—	—	—	○外面はタタキメ後にハケメ。	淡褐灰色	砂粒含	〃	
1721	鉢形土器	20.3	—	—	○内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	淡黄灰色	微砂混	良好	
1722	甕形土器	—	—	—		〃	〃	〃	
1723	底部	—	9.6	—	○内面はヘラミガキ。	赤橙色	砂粒含	〃	
1724	〃	—	10.0	—		淡黄橙色	〃	〃	○黒斑。
1725	〃	—	6.0	—	○底部外面はハケメ。	〃	〃	〃	〃
1726	鉢形土器	52.5	—	—	○内面はヘラミガキ。	黄橙色	微砂混	〃	〃
1727	高杯形土器	—	—	—	○杯部内面はヘラミガキ。	黄灰色	砂粒含	普通	
1728	〃	—	—	—	○内外面ともナデ。	赤橙色	精製粘土	良好	
1729	〃	—	11.8	—	〃	灰白色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1730	壺形土器	20.2	—	—	○口縁端部は肥厚する。	黄橙色	細砂	良好	
1731	鉢形土器	—	—	—		灰白色	〃	〃	○小破片。
1732	底部	—	10.5	—		浅黄橙色	〃	〃	
1733	脚部	—	4.6	—		鈍い橙色	〃	〃	
1734	高杯形土器	—	11.8	—		灰白色	〃	〃	

溝—14・16・17（第178図）

1735	甕形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1736	底部	—	6.0	—	○内面はヘラケズリ。	〃	〃	〃	〃
1737	壺形土器	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
1738	甕形土器	14.0	—	—		黄橙色	〃	〃	
1739	〃	—	—	—		〃	〃	〃	○小破片。
1740	台付鉢形土器	—	4.6	—	○外面はヘラケズリ。	〃	〃	〃	〃
1741	〃	—	4.5	—	〃	浅黄橙色	〃	〃	
1742	底部	—	4.8	—		黄橙色	〃	〃	○小破片。
1743	高杯形土器	—	—	—		〃	〃	〃	

包含層（第179・180図）

1744	甕形土器	15.2	6.6	28.0	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	灰褐色	砂粒含	普通	
1745	〃	18.0	—	—	〃	〃	〃	〃	
1746	壺形土器	—	7.5	—	○肩部にヘラガキ文。	黄褐色	細砂	良好	
1747	〃	—	—	—	○口縁端部に円形浮文。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1748	〃	—	—	—	○口縁部は波状文と円形浮文。	灰白色	〃	〃	〃
1749	鉢形土器	12.0	4.4	8.3		〃	〃	〃	
1750	壺形土器	—	—	—	○胴部下半に凸帯。	黄橙色	〃	〃	
1751	鉢形土器	11.3	—	4.1	○内外面ともヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	○復元完形。
1752	高杯形土器	15.2	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
1753	鉢形土器	15.2	—	—	○玉縁。内面はヘラケズリのあとヘラミガキ	〃	〃	〃	
1754	〃	—	—	—	○胴部下半に凸帯。	〃	微砂	〃	
1755	〃	37.0	13.5	16.1	○片口。	〃	細砂	〃	○内面炭化物。
1756	高杯形土器	—	12.2	—	○脚端部は立ちあがり。丹塗り。	〃	細砂・雲母	〃	
1757	底部	—	6.5	—	○底部端に穿孔。	灰白色	細砂	〃	
1758	〃	—	3.6	—	○底部穿孔。	黄橙色	〃	〃	
1759	台付壺形土器	—	8.2	—	○肩部に稜線がある。	〃	〃	〃	

竪穴式住居—18（第183図）

1760	杯蓋	14.2	—	—	○口縁端部に稜線がある。	明青灰色		良好	○小破片。
1761	〃	12.6	—	—	〃	灰白色		〃	
1762	〃	—	—	—	〃	青灰色		〃	○小破片。
1763	〃	—	—	—	〃	灰白色		〃	〃
1764	杯身	—	—	—		灰黄色		〃	〃
1765	高杯	—	—	—		黄橙色	細砂	〃	〃
1766	甕形土器	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1767	壺形土器	11.2	—	—	○丸底。内面はナデ。外面はうすいハケメ。	淡赤橙色	微砂	〃	

竪穴式住居—19（第184図）

1768	鉢形土器	—	—	—	○外面は粗いハケメ。	黄橙色	細砂	良好	○小破片。

竪穴式住居—20（第185図）

1769	杯蓋	12.0	—	4.6	○ロクロ回転は右。	灰色	砂粒含	堅緻	○外面に自然釉。
1770	〃	11.8	—	—	〃	青灰色	微砂若干	〃	〃
1771	杯身	11.5	—	4.8	〃	淡青灰色	微砂混	〃	
1772	〃	11.0	—	4.8	〃	〃	砂粒含	良好	
1773	杯蓋	10.0	—	—	〃	青灰色	〃	堅緻	
1774	甕形土器	13.5	—	—	○外面は剥落。	黄橙色	〃	普通	○黒斑。
1775	高杯形土器	—	—	—		〃	〃	〃	○剥落顕著。
1776	甕形土器	27.5	—	—	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	〃	〃	〃	○内面煤付着。 ○黒斑。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
竪穴式住居—21（第186図）									
1777	杯蓋	—	—	—		灰色	微砂混	堅緻	
1778	〃	—	—	—		青灰色	砂粒無し	〃	
1779	高杯形土器	15.0	—	—	○内外面ともナデ。	黄橙色	微砂混	普通	
竪穴式住居—23（第189図）									
1780	杯身	11.0	—	4.4	○ロクロ回転は右。 ○底部外面に線刻。	青灰色	砂粒含	堅緻	○口縁端部内面の磨滅顕著。
1781	杯蓋	—	—	—		〃	砂粒無し	〃	○外面に自然釉。
1782	直口壺	—	—	—	○頸部外面に波状文。	〃	微砂混	〃	〃
1783	高杯形土器	15.0	—	—	○口縁部は内外面ともナデ。	黄橙色	微砂含	良好	
竪穴式住居—24（第191・192図）									
1784	杯蓋	12.0	—	4.9	○ロクロ回転は右。	灰色	砂粒含	堅緻	
1785	〃	12.0	—	—	〃	〃	微砂混	〃	
1786	〃	13.0	—	—	〃	青灰色	砂粒含	〃	
1787	〃	13.0	—	—	〃	灰色	〃	〃	
1788	〃	11.5	—	—	〃	〃	〃	〃	
1789	〃	12.8	—	—	〃	〃	微砂混	〃	○外面に自然釉。
1790	杯身	12.0	—	—	○杯部外面下半はヘラケズリ。回転は右。	青灰色	砂粒含	〃	
1791	〃	11.0	—	5.5	○ロクロ回転は右。	灰白色	微砂混	良好	
1792	〃	—	—	—	〃	灰色	砂粒含	堅緻	
1793	〃	10.2	—	4.9	〃	青灰色	微砂混	〃	
1794	〃	11.0	—	5.2	〃	暗灰色	〃	良好	
1795	〃	11.0	—	5.3	〃	灰色	砂粒含	〃	
1796	〃	10.3	—	—	〃	青灰色	微砂混	堅緻	
1797	〃	10.6	—	—	〃	灰色	〃	〃	
1798	〃	11.8	—	4.3	〃	青灰色	砂粒含	〃	
1799	〃	11.0	—	—	〃	〃	微砂混	〃	
1800	〃	10.5	—	4.8	〃	〃	〃	〃	○外面に自然釉。
1801	高杯	—	8.0	—		暗灰色	〃	〃	〃
1802	〃	—	9.5	—		灰色	〃	〃	
1803	〃	—	9.5	—	○透しは内外面とも面取り。	〃	〃	〃	
1804	〃	—	8.8	—	○ロクロ回転は右。	〃	〃	〃	
1805	〃	15.8	8.8	11.3	○杯部外面下半に2本の沈線。	暗灰色	砂粒含	〃	○杯外面と脚内に自然釉。
1806	直口壺	11.3	—	—	○胴部外面下半は平行タタキ。	〃	微砂混	〃	○口縁部内面と肩部外面に自然釉
1807	𤭯	12.6	—	17.3	○肩部から胴部上半の外面にカキメ。	灰色	砂粒含	〃	○肩部外面・口縁部内面・底部内面に自然釉。
1808	甕	17.3	—	—	○胴部内面は同心円文タタキをスリケシ。	〃	〃	〃	
1809	〃	22.0	—	—		〃	〃	良好	
1810	〃	18.8	—	—		〃	微砂混	堅緻	
1811	鉢	21.6	—	9.6		〃	〃	〃	○内外面自然釉。
1812	甕形土器	16.8	—	—	○内外面とも横位のナデ。	灰白色	砂粒含	良好	
1813	〃	12.8	—	—		赤橙色	微砂混	普通	○剥落顕著。
1814	〃	10.5	—	—	○口縁部内面にハケメ痕跡。	褐橙色	砂粒含	良好	
1815	〃	11.0	—	—	○外面はナデ。	灰褐色	〃	普通	
1816	高杯形土器	16.5	—	—	○内外面ともナデ。	黄橙色	微砂混	良好	
1817	〃	16.5	—	—	○内面はナデ。	淡褐灰色	砂粒含	普通	
1818	〃	13.0	—	—	○内面はナデ後に暗文。	赤橙色	精製粘土	良好	
1819	〃	—	—	—	○透孔は3孔。	〃	〃	普通	○外面剥落。
1820	鉢形土器	7.2	3.5	4.4	○内外面ともナデ。	淡黄橙色	微砂混	良好	
1821	〃	7.0	—	3.4		褐灰色	砂粒無し	普通	○剥落顕著。
1822	〃	—	—	—	○内面はナデアゲ。	淡灰橙色	砂粒含	〃	○製塩土器。
1823	〃	—	—	—	○外面はナデ。	淡褐灰色	微砂混	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1824	甑形土器	25.5	—	—		灰白色	砂粒含	普通	○内面炭化物付着
1825	〃	23.8	—	—	○内外面ともナデ。	淡黄橙色	微砂混	〃	

竪穴式住居—26（第197・198図）

1826	高杯蓋	11.9	—	5.3	○つまみがつく。稜線は明瞭。	灰色		堅緻	○3分の2片。
1829	杯蓋	12.3	—	4.7	○稜線は明瞭。	〃		〃	○3分の1片。
1828	〃	11.8	—	4.5		〃		〃	
1829	〃	12.8	—	5.2		〃		〃	
1830	杯身	11.3	—	5.1		灰白色		不良	○2分の1片。
1831	〃	9.4	—	—		灰色		堅緻	○3分の1片。
1832	〃	10.7	—	—		〃		〃	○4分の1片。
1833	〃	11.4	—	—		灰白色	細砂	不良	○5分の1片。
1834	〃	10.2	—	5.1		灰色	〃	堅緻	○4分の1片。
1835	〃	10.6	—	5.3		〃		〃	○3分の2片。
1836	〃	10.5	—	5.2		〃	細砂	〃	○復元完形。
1837	〃	10.0	—	4.2		〃		〃	○一部欠損。
1838	〃	11.3	—	4.4		灰白色		不良	○完形品。
1839	〃	10.6	—	4.7		〃	細砂	堅緻	〃
1840	〃	11.1	—	5.3		〃	〃	〃	〃
1841	〃	10.8	—	5.1		灰色		〃	○一部欠損。
1842	甕形土器	11.7	—	—		赤灰色	細砂	良好	
1843	〃	13.8	—	—	○内面は粗いハケメ。	灰白色	〃	〃	○煤付着。
1844	〃	12.2	—	—	○内面はユビナデ。	黄橙色	〃	〃	○小破片。
1845	〃	—	—	—		〃	〃	〃	○煤付着。
1846	鉢形土器	5.7	—	—	○外面はタタキメ。	〃	〃	〃	
1847	〃	16.0	—	—	○内外面ともハケメ。	〃	〃	〃	○4分の1片。
1848	甑形土器	—	—	—	○内面はナデ。外面はハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1849	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○把手の部分。
1850	〃	17.3	—	—		橙色	〃	〃	

竪穴式住居—27（第200・201図）

1851	杯蓋	11.3	—	—		灰色	細砂	良好	○外面自然釉。
1852	杯身	10.3	—	—		灰白色	〃	〃	
1853	〃	11.4	—	—		灰色	〃	〃	
1854	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	
1855	高杯	—	9.3	—	○透しは3か所。	灰色	〃	〃	
1856	甕	—	—	—	○外面平行タタキ。内面は同心円文タタキのちユビナデ。	〃	〃	〃	
1857	〃	—	—	—	○外面は格子タタキののちユビナデ。内面はユビナデでタタキメを消している。	灰白色	〃	〃	
1858	〃	—	—	—	○外面は平行タタキ。内面はユビナデでタタキメを消している。	灰色	〃	〃	
1859	壺形土器	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
1860	甕形土器	14.8	—	17.5	○口縁部内面にハケメ痕跡がわずかに残る。	明褐灰色	細砂	〃	○外面煤。
1861	〃	22.9	—	—		橙色	精製粘土	〃	
1862	甑形土器	—	—	—		浅黄橙色	細砂	〃	
1863	高杯形土器	13.8	8.8	10.5		鈍い橙色	〃	〃	
1864	甑形土器	—	—	—	○外面ハケメ。	〃	〃	〃	
1865	鉢形土器	6.4	—	—	○外面下半部に平行タタキ。	灰白色	〃	〃	○製塩土器。
1866	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
1867	〃	—	—	—	○外面は火をうけており調整不詳。	浅黄橙色	〃	〃	〃
1868	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
1869	〃	—	—	—	○外面は平行タタキ。	灰白色	〃	〃	〃
1870	甑形土器	26.4	—	—	○体部下半には部分的にヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1871	甕形土器	24.4	—	29.8	○底部外面は指頭オサエ。ユビナデ。	灰白色	細砂	良好	

井戸—9（第203図）

1872	壺形土器	19.5	—	—	○内外面とも横位ナデ。	淡橙白色	砂粒多含	普通	
1873	〃	15.0	4.0	29.5	○胴部外面はハケメ後に丁寧なナデ。	黄橙色	砂粒含	良好	○黒斑。
1874	〃	10.5	3.0	18.5	○口縁部外面は横位ナデ。	〃	微砂質	普通	〃
1875	甕形土器	14.0	—	—		淡灰褐色	砂粒含	良好	○外面煤付着。
1876	〃	14.0	—	—		淡黄灰色	細砂含	〃	
1877	〃	—	—	—		褐灰色	砂粒含	〃	
1878	鉢形土器	9.5	4.0	7.0	○底部外面ヘラミガキ。	淡褐橙色	精製粘土	〃	
1879	〃	15.0	—	—	○外面上半は横位ナデ。	黄橙色	〃	普通	
1880	〃	11.0	—	—	○体部内面は丁寧なナデ。	橙褐色	〃	〃	
1881	〃	11.0	3.0	7.0	○外面はナデ。	赤橙色	微砂混	〃	○黒斑。
1882	〃	15.5	3.5	6.5	○内面は丁寧なナデ。	淡褐灰色	精製粘土	良好	〃
1883	高杯形土器	13.0	—	—		黄橙色	〃	普通	○剝落顕著。
1884	〃	—	13.0	—		〃	〃	〃	
1885	〃	22.0	—	—		褐橙色	微砂混	良好	
1886	〃	19.0	16.0	14.5		〃	〃	普通	○黒斑。
1887	〃	18.0	16.0	13.0		〃	〃	〃	
1888	〃	—	16.0	—		黄橙色	精製粘土	〃	
1889	〃	—	17.5	—		〃	〃	良好	

土壙—91（第204図）

1890	高杯形土器	13.5	—	—	○杯部内外面ともナデ。	灰白色	細砂含	普通	

土壙—93（第205図）

1891	杯蓋	13.4	—	—	○天井部外面ヘラケズリ。	灰白色	細砂	良好	
1892	高杯	14.9	—	—		〃	〃	〃	
1893	直口壺	8.3	—	—	○頸部に2本の沈線。	〃	〃	〃	
1894	椀形土器	16.4	—	—	○内面ユビナデ。	鈍い橙色	〃	〃	

溝—18（第206図）

1895	杯蓋	11.1	—	—	○稜線が明瞭。	灰白色		堅緻	○4分の1片。
1896	杯身	9.5	—	4.6	〃	〃		〃	〃
1897	杯蓋	13.7	—	4.6		〃		〃	
1898	〃	14.0	—	3.5		青灰色		〃	
1899	〃	14.5	—	4.5	○つまみが付く。	灰白色		〃	
1900	杯身	14.0	—	—		青灰色		〃	○小破片。
1901	〃	11.7	—	3.7	○立ちあがりは小さい。	灰白色		〃	○自然釉。
1902	〃	17.0	—	—		〃		〃	○小破片。
1903	〃	11.5	—	—	○立ちあがりは小さい。	青灰色		〃	〃
1904	〃	10.6	—	—	〃	灰白色		〃	〃
1905	〃	—	—	—	〃	〃		〃	〃
1906	碗	—	—	—	○くびれ部の径は小さい。	〃		〃	○自然釉。
1907	壺	16.6	—	—		〃		〃	○小破片。
1908	〃	10.4	—	—		青灰色		〃	〃
1909	鉢	23.5	—	—		灰白色		〃	
1910	甕形土器	17.4	—	—		浅黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1911	〃	12.8	—	—	○外面は粗いハケメ。	〃	〃	〃	〃
1912	鉢形土器	12.4	—	12.1	○内面はナデ。	灰白色	微砂	〃	
1913	甕形土器	11.4	—	—		浅黄橙色	細砂	〃	
1914	〃	13.8	—	—	○内面はユビナデ。	〃	〃	〃	
1915	〃	—	—	—	○底部は鍋底状を呈する。	〃	〃	〃	
1916	瓶形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	○把手の部分。

溝—20・22・23（第207図）

1917	杯蓋	12.9	—	4.3		灰色		良好	
1918	杯身	11.4	—	4.4		〃		〃	○自然釉。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1919	杯身	11.5	—	—		灰色	細砂	良好	
1920	杯蓋	—	—	—		灰白色	〃	〃	○小破片。
1921	杯身	—	—	—		〃		〃	〃
1922	〃	—	—	—		〃		〃	〃
1923	高杯	12.2	—	—		〃		〃	

包含層（第208図）

1924	底部	—	—	4.0	○底部は突出する。	鈍い橙色	細砂	良好	○木葉圧痕。
1925	杯蓋	12.5	—	4.6		灰色	〃	〃	
1926	杯身	10.9	—	5.2	○稜線は明瞭。	青灰色	〃	〃	○自然釉。
1927	〃	10.2	—	4.8	○ロクロ左。	〃	〃	〃	
1928	杯蓋	13.4	—	4.1	○口縁端部は丸い。	灰白色		〃	
1929	〃	13.8	—	4.1	〃	明青灰色		〃	
1930	杯身	12.0	—	—	○立ちあがりは小さい。	灰白色		〃	○小破片。
1931	〃	11.6	—	—	〃	灰色		〃	〃
1932	壺	11.6	—	—	○口縁部は外にひらく。	〃		〃	○断面は茶色。
1933	〃	—	—	—		青灰色		〃	
1934	広口壺	—	—	—	○頸部外面に2段のクシガキ波状文。	〃	緻密	〃	
1935	〃	—	—	—		オリーブ色	細砂	〃	○小破片。
1936	甕	—	—	—	○内面に車輪文のタタキメ。	灰白色	〃	〃	
1937	〃	—	—	—	〃	青灰色	〃	〃	
1938	〃	—	—	—	〃	灰白色	〃	〃	
1939	〃	—	—	—	〃	灰色	〃	〃	
1940	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
1941	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
1942	〃	—	—	—	〃	青灰色	〃	〃	
1943	〃	—	—	—	〃	灰色	〃	〃	
1944	〃	—	—	—	〃	淡灰色	〃	〃	
1945	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
1946	〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	〃	

土壙—95（第214図）

1947	甕	—	—	—		暗灰色	砂粒含	堅緻	

土壙—96（第216図）

1948	椀	12.0	5.3	4.3	○内面は丁寧なナデ。	淡橙白色	砂粒含	良好	
1949	〃	10.8	4.8	4.0	〃	橙白色	〃	〃	
1950	〃	—	5.2	—	〃	灰白色	〃	〃	
1951	鍋	34.8	—	—	○口縁部は内外面とも横位ナデ。	灰橙色	細砂混	〃	○外面煤付着。
1952	羽釜	18.4	—	—	○内外面ともナデ。	暗青灰色	微砂含	〃	

土壙—97（第217図）

1953	椀	11.5	5.6	5.0	○内面は丁寧なナデ。	淡橙白色	砂粒含	良好	
1954	〃	12.5	—	—	〃	〃	〃	堅緻	
1955	〃	12.0	—	—	〃	橙白色	〃	良好	
1956	小皿	8.1	7.0	1.4	○底部外面に板目痕跡。	白橙色	微砂若干	普通	
1957	鉢	—	—	—	○口縁部外面に重ね焼き痕跡。	淡灰色	砂粒含	良好	

土壙—99・100・101（第219図）

1958	椀	11.5	5.0	4.0	○内面は丁寧なナデ。	淡橙白色	砂粒含	良好	
1959	〃	12.6	5.0	3.5	〃	灰白色	〃	〃	
1960	〃	12.0	—	—	〃	淡橙白色	〃	〃	
1961	〃	—	5.0	—	○杯部内面に重ね焼き痕跡。	淡灰橙色	〃	〃	
1962	〃	—	5.0	—		淡橙白色	〃	〃	
1963	皿	12.6	8.8	2.7	○内外面とも横位のナデ。ロクロ回転は右。	淡灰橙色	微砂含	〃	
1964	小皿	7.8	6.0	1.6	〃	〃	砂粒含	〃	
1965	〃	8.2	6.4	1.6	○底部にヘラオコシ痕跡。ロクロ回転は左。	淡赤橙色	微砂若干	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1966	鉢	21.8	—	—	○内外面とも回転ナデ。ロクロ回転は右。	灰色	細砂含	堅緻	

土壙—102（第220図）

1967	椀	—	—	—		灰白色	細砂	良好	○小破片。
1968	〃	—	—	—	○外面指頭オサエ。	〃	〃	〃	〃
1969	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1970	〃	—	5.6	—		〃	〃	〃	
1971	〃	—	8.4	—		淡橙色	微砂	〃	○小破片。

土壙—103（第221図）

1972	椀	—	—	—		灰白色	細砂	良好	○小破片。
1973	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃

土壙—104（第222図）

1974	椀	—	6.0	—		乳白色	細砂	良好	
1975	〃	—	6.5	—		淡褐灰色	〃	〃	
1976	〃	—	6.8	—		乳白色	〃	〃	
1977	〃	13.2	—	—		黒灰色	緻密	〃	○瓦器。
1978	〃	—	—	—		乳白色	細砂	〃	
1979	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
1980	皿	8.2	6.2	1.5		鈍い黄橙色	精製粘土	〃	
1981	〃	9.5	7.8	1.4		灰黒色	緻密	〃	○瓦器。
1982	〃	8.6	4.6	1.5		〃	〃	〃	〃
1983	〃	10.0	—	—		暗灰色	〃	〃	〃

土壙—105・106（第223図）

1984	椀	—	—	—		乳白色	細砂	良好	
1985	〃	—	6.1	—		〃	〃	〃	
1986	〃	—	6.4	—		〃	〃	〃	
1987	皿	6.2	4.6	1.1		灰白色	〃	〃	
1988	椀	—	—	—		乳白色	〃	〃	
1989	〃	—	6.8	—	○見込みに重ね焼きの痕跡。	〃	〃	〃	
1990	〃	—	5.9	—		〃	〃	〃	
1991	皿	8.9	6.2	1.6	○底部外面に板目痕。	淡橙色	精製粘土	〃	
1992	〃	—	—	—		黒灰色	緻密	〃	○瓦器。
1993	椀	—	4.4	—		灰黒色	〃	〃	〃

土壙—107（第224図）

1994	椀	—	—	—		灰白色	細砂	良好	○小破片。
1995	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1996	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1997	皿	—	—	—		〃	〃	〃	〃
1998	椀	—	—	—		〃	〃	〃	〃

溝—24（第225図）

1999	鍋	26.2	—	—		暗灰色	砂粒含	堅緻	
2000	椀	—	5.2	—	○内面は丁寧なナデ。	淡橙白色	〃	良好	

溝—25（第227～232図）

2001	椀	14.1	5.6	4.2	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	灰白色	砂粒含	良好	
2002	〃	13.8	5.5	4.4	○内面は丁寧なナデ。	黄白色	〃	〃	
2003	〃	13.8	—	—	○内面は丁寧なナデ。外面下半は指頭オサエ。	淡黄灰色	〃	〃	
2004	〃	14.4	—	—	○内外面とも回転ナデ。	灰白色	微砂含	堅緻	
2005	〃	14.6	—	—	○内面は丁寧なナデ。	〃	砂粒含	普通	
2006	〃	13.4	—	—	○口縁端部にヘラによるケズリ調整。	〃	〃	良好	
2007	〃	13.7	5.5	5.4	〃	淡灰黄色	〃	堅緻	
2008	〃	—	—	—	○内面は丁寧なナデ。	灰白色	細砂含	良好	
2009	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
2010	小皿	9.0	6.2	1.8	○ロクロ回転は左。内面はナデ。ヘラキリ。	淡黄橙色	微砂含	堅緻	

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2011	小皿	9.0	6.0	1.8	○ロクロ回転は左。内面はナデ。ヘラキリ。	淡黄橙色	微砂含	堅緻	
2012	〃	9.2	5.8	1.7	〃	〃	〃	〃	
2013	〃	9.0	5.7	1.8	〃	〃	〃	〃	
2014	〃	9.0	6.8	1.6	○ロクロ回転は左。	淡赤橙色	〃	普通	
2015	〃	9.2	6.6	1.4		淡橙灰色	微砂若干	〃	
2016	〃	8.7	7.0	1.7	○ロクロ回転は左。ヘラキリ。	灰橙色	微砂含	良好	
2017	〃	8.0	5.4	1.5	〃	淡黄灰色	細砂若干	〃	
2018	〃	7.0	5.7	1.2	〃	黄灰白色	砂粒含	〃	
2019	〃	7.2	5.8	1.4	〃	〃	〃	堅緻	
2020	〃	—	5.2	—	○ロクロ回転は左。ヘラキリ。内面回転ナデ	淡褐黄色	精製粘土	普通	
2021	〃	—	5.2	—	○内面は回転ナデ。ヘラキリ。	〃	微砂含	〃	
2022	〃	7.0	7.0	1.7		〃	精製粘土	〃	
2023	脚部	—	—	—		暗灰色	砂粒含	良好	
2024	羽釜	17.5	—	—		〃	〃	普通	○剝落顕著。
2025	〃	24.5	—	—	○体部外面はナデ。	灰色	微砂含	良好	
2026	鍋	45.0	—	—	○内面～口縁部外面は横位のナデ。	〃	微砂多含	〃	
2027	〃	35.6	—	—	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	〃	砂粒含	堅緻	
2028	〃	36.3	—	—	〃	灰褐色	〃	良好	○外面煤付着。
2029	〃	29.0	—	—	○口縁部外面はヘラによるケズリ。	暗褐灰色	〃	〃	〃
2030	〃	—	—	—	○内面は横方向のハケメ。外面はナデ。	暗灰褐色	細砂多含	〃	〃
2031	〃	—	—	—	○内面は横方向，外面は縦方向のハケメ。	〃	〃	〃	〃
3032	〃	—	—	—	○内面は横方向，体部外面は縦方向のハケメ。	〃	〃	〃	
2033	〃	—	—	—	○内面および体部下半は横方向，体部上半は縦方向のハケメ。	暗褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
2034	椀	15.7	5.7	5.4	○口縁部外面は横位のナデ。	暗灰色	砂粒含	〃	
2035	〃	14.7	—	—	○杯部外面下半は指頭によるオサエ。	〃	〃	〃	
2036	〃	14.7	—	—	○杯部外面にも暗文。	〃	〃	〃	
2037	〃	—	3.5	—		〃	〃	〃	
2038	〃	—	4.7	—	○杯部外面は無調整。	〃	微砂含	〃	
2039	〃	—	4.5	—	〃	〃	砂粒含	〃	
2040	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
2041	小皿	8.8	—	2.5	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	〃	〃	〃	
2042	〃	9.3	—	2.1	〃	〃	細砂含	堅緻	
2043	〃	9.3	—	1.7	〃	〃	〃	良好	
2044	皿	—	6.6	—	○内面および杯部外面は回転ナデ。回転右。	灰色	砂粒含	〃	
2045	〃	—	5.8	—	〃	〃	細砂含	堅緻	
2046	〃	—	6.3	—	〃	淡灰色	砂粒含	良好	
2047	〃	—	5.5	—	〃	〃	〃	〃	
2048	壺	—	—	—		灰青色	〃	堅緻	
2049	〃	—	8.2	—	○内面は回転ナデ。	淡橙白色	〃	〃	
2050	甕	28.8	—	—	○胴部内外面ともケズリ後にナデ。	暗灰色	〃	〃	
2051	〃	—	—	—	○胴部内面はヘラケズリ。	灰色	砂粒若干	〃	○自然釉。
2052	〃	—	—	—	○胴部内面はヘラケズリ後にナデ。	暗灰色	小礫含	〃	〃
2053	〃	—	—	—	○内外面とも横位のナデ。	紫灰色	砂粒若干	〃	
2054	〃	—	—	—	○内外面とも回転ナデ。	暗灰色	砂粒含	〃	
2055	〃	—	—	—	○内外面とも横位のナデ。	灰色	〃	〃	
2056	〃	—	—	—	○内外面とも回転ナデ。	灰白色	緻密	良好	○自然釉。
2057	〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	〃	
2058	鉢	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
2059	甕	—	—	—		暗青灰色	〃	〃	
2060	〃	—	—	—	○内面はヘラケズリ後にナデ。	灰色	砂粒若干	〃	
2061	〃	59.0	35.0	75.0	○内外面ともヘラケズリ後にナデ。	〃	砂粒含	〃	
2062	〃	19.3	—	—		灰白色	微砂含	普通	○剝落顕著。
2063	〃	—	—	—	○内面は同心円文をスリケシている。	灰色	砂粒含	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2064	甕	—	19.5	—	○内面は同心円文をスリケシている。	青灰色	砂粒含	堅緻	
2065	〃	—	—	—	○内面は横方向のナデ。	〃	〃	〃	
2066	〃	—	—	—	○内面は横方向のヘラケズリ。	灰白色	微砂若干	良好	
2067	〃	—	—	—	○内面は横方向のナデ。	暗灰色	砂粒若干	堅緻	
2068	〃	—	13.0	—	○内面は回転ナデ。	〃	細砂若干	〃	
2069	鉢	28.0	12.0	13.2	○内外面とも回転ナデ。	〃	砂粒含	良好	○底部ゲタ痕。
2070	甕	35.0	—	—		褐色	細砂含	堅緻	
2071	〃	—	—	—	○内面ヘラケズリ。	〃	砂粒含	〃	○同一個体か？
2072	〃	—	15.6	—		〃	細砂含	〃	○緑色自然釉。
2073	底部	—	9.6	—	○高台はケズリダシ。ロクロ回転は右。	〃	微砂含	〃	
2074	甕	—	—	—	○内面は横位のナデ。	淡白橙色	細砂多含	〃	
2075	〃	—	—	—	○内面はナデ。	青灰色	〃	良好	
2076	〃	—	—	—	○内面は同心円文をナデ消している。	灰色	砂粒含	堅緻	
2077	鉢	—	—	—	○内外面とも回転ナデ。口縁部に重ね焼き痕。	暗灰色	礫含	〃	
2078	〃	—	—	—	○内外面とも回転ナデ。	〃	細砂含	良好	
2079	〃	—	—	—	○内外面とも回転ナデ。口縁部に重ね焼き痕。	灰色	〃	〃	
2080	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
2081	〃	—	11.0	—	○内外面とも回転ナデ。ロクロ回転右。	〃	砂粒含	堅緻	
2082	〃	—	—	—	○外面は縦方向ハケメ。	暗灰色	細砂多含	良好	
2083	碗	—	—	—		灰白色	緻密	堅緻	
2084	〃	—	—	—	○釉は薄い。	淡緑白色	〃	〃	
2085	〃	16.0	—	—	○ロクロ回転右。	灰色	〃	〃	
2086	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	
2087	〃	15.5	—	—		〃	〃	〃	
2088	〃	15.2	—	—		〃	〃	〃	
2089	〃	16.7	—	—		乳灰色	〃	〃	
2090	〃	16.0	—	—		灰色	〃	〃	
2091	〃	15.7	—	—		〃	〃	〃	
2092	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2093	〃	—	—	—		乳白色	〃	〃	
2094	〃	—	—	—	○釉は薄い。	淡灰色	〃	〃	
2095	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	
2096	〃	—	—	—		淡灰色	〃	〃	
2097	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	
2098	〃	—	6.4	—	○釉は内面のみ。ロクロ回転左。	乳白色	〃	〃	
2099	〃	—	5.7	—	○見込み部分に鋭い沈線。ロクロ回転左。	〃	〃	〃	
2100	〃	—	5.7	—	○見込み部分に沈線と段。ロクロ回転左。	淡乳灰色	〃	〃	
2101	〃	—	5.5	—	○見込み部分に鋭い沈線。ロクロ回転右。	乳白色	〃	〃	
2102	〃	15.7	—	—		淡灰色	〃	〃	
2103	〃	15.7	—	—		灰色	〃	〃	
2104	〃	14.4	—	—		灰白色	〃	〃	
2105	〃	15.0	—	—		淡灰色	〃	〃	
2106	〃	14.7	—	—	○外面に回転ナデの痕跡。	灰色	〃	〃	
2107	〃	—	—	—	○口縁部輪花。	乳白色	〃	〃	
2108	〃	—	—	—		淡灰色	〃	〃	
2109	〃	—	—	—	○内面に沈線文。	淡灰青色	〃	〃	
2110	〃	—	—	—		乳白色	〃	〃	
2111	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2112	〃	—	—	—	○釉に貫入が多い。	灰色	〃	〃	
2113	〃	—	—	—		淡緑白灰色	〃	〃	
2114	〃	—	—	—		淡灰緑色	〃	〃	
2115	〃	—	5.3	—	○釉は高台外面におよんでいる。回転左。	淡乳白色	〃	〃	
2116	〃	—	5.5	—	○見込み部分に沈線。釉に貫入多い。回転左	淡乳灰色	〃	〃	
2117	〃	—	5.5	—	〃	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2118	碗	—	5.2	—	○ロクロ回転左。釉に貫入多い。	乳白色	緻密	堅緻	
2119	〃	—	4.5	—	○ロクロ回転左。見込み部分に沈線。	淡乳灰色	〃	〃	
2120	〃	—	5.8	—	○見込み部分に沈線。釉に貫入多い。回転左	淡黄灰色	〃	〃	
2121	皿	—	3.6	—	○見込み部分に重ね焼きの砂粒と沈線。畳付部分にも砂粒。釉に貫入が多い。	淡緑白色	〃	〃	
2122	碗	13.5	—	—	○釉に貫入が多い。	淡褐緑灰色	〃	〃	
2123	〃	—	4.0	—	○見込み部分に鋭い沈線。	淡緑黄灰色	〃	〃	
2124	〃	—	—	—	○外面の釉に貫入が多い。	緑灰色	〃	〃	
2125	〃	—	—	—	○釉に貫入が多い。	淡緑灰色	〃	〃	
2126	皿	—	—	—		淡灰緑色	〃	〃	
2127	〃	—	4.5	—	○底部はあげ底。釉に貫入が多い。	〃	〃	〃	
2128	壺	—	—	—		灰褐緑色	微砂含	〃	
2129	軒丸瓦	—	—	—	○複弁八葉蓮華文。	暗灰色	〃	良好	
2130	椀	14.6	6.6	4.7	○口縁端部内面に稜線。見込みに重ね焼き痕。	乳白色	砂粒含	〃	
2131	小皿	7.5	6.8	1.4	○底部外面はヘラキリのち回転ユビナデ。	灰白色	〃	〃	
2132	〃	9.0	5.2	2.1	○底部は指頭オサエ。	灰黒色	緻密	〃	
2133	椀	—	—	4.1	○体部は内外面ともヨコナデ。	青灰色	細砂含	堅緻	

溝—26（第233図）

2134	椀	13.9	6.0	4.8	○見込み部分に重ね焼き痕跡。	乳白色	細砂	良好	○完形品。
2135	〃	14.0	6.0	4.6		〃	〃	〃	
2136	〃	13.6	—	—		灰色	〃	〃	○瓦器。
2137	〃	14.8	6.2	4.5	○口縁部に重ね焼きの痕跡。	灰白色	〃	〃	○備前焼。
2138	碗	—	—	—		〃	緻密	堅緻	○白磁。
2139	〃	14.0	—	—		灰黒色	細砂	良好	○瓦器。

柱穴内出土遺物（等236図）

2140	椀	15.0	6.8	4.0	○底部外面ヘラキリ。	乳白色	微砂	良好	
2141	〃	11.2	—	—		〃	〃	〃	
2142	〃	—	5.6	—		〃	〃	〃	
2143	〃	—	6.3	—		〃	〃	〃	
2144	〃	—	7.3	—		〃	〃	〃	
2145	小皿	8.0	7.0	1.4	○底部外面に板目痕。	淡灰橙色	精製粘土	〃	
2146	〃	8.2	6.2	1.4	○底部外面ヘラキリのち板目痕。	〃	〃	〃	
2147	〃	8.6	6.2	2.1	〃	浅黄橙色	〃	〃	
2148	〃	8.6	6.2	1.7	○底部外面ヘラキリ。	淡灰橙色	〃	〃	
2149	〃	8.2	5.6	1.3	〃	乳白色	微砂	〃	
2150	〃	9.8	6.6	2.0	〃	〃	精製粘土	〃	○完形品。
2151	〃	8.8	6.8	—	○底部外面ヘラキリか？	淡橙色	〃	〃	
2152	〃	8.2	5.8	—	○底部外面ヘラキリ。	〃	〃	〃	
2153	〃	8.8	7.0	2.1	○底部外面ヘラキリのち板目痕。	淡灰橙色	〃	〃	
2154	〃	9.0	7.3	2.1	〃	〃	〃	〃	
2155		8.4	5.4	3.4	○底部外面ヘラキリのちユビナデ。	灰白色	微砂	〃	○ほぼ完形品。
2156		8.8	4.8	3.0	〃	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
2157	皿	13.4	7.4	2.7		淡橙色	精製粘土	〃	
2158	椀	16.4	—	—	○体部外面に指頭オサエ。	乳白色	微砂	〃	
2159	小皿	8.8	—	—		灰黒色	緻密	〃	
2160	椀	—	4.4	—		灰白色	〃	〃	
2161	〃	—	4.0	—		灰黒色	〃	〃	
2162	〃	16.6	5.2	5.6	○底部外面イトキリ。	灰白色	〃	〃	
2163	鍋	—	—	—		褐灰色	微砂	〃	○内外面煤。

包含層出土遺物（第237～251図）

2164	椀	15.4	6.5	5.4	○体部内面一部横ヘラミガキ。体部下半指頭オサエ，ユビナデ。	外面灰白色 内面黒褐色	微砂	良好	
2165	〃	15.0	6.7	5.3	○体部外面下半指頭オサエ、ユビナデ。底部外面指頭オサエ，ユビナデ。体部内面ユビナデ。	灰白色	〃	〃	○ほぼ完形品。 ○重ね焼き痕跡。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2166	椀	15.0	7.4	4.9	○体部内面ユビナデ。底部外面ユビナデ。	灰白色	微砂	良好	
2167	〃	14.2	6.2	5.4	〃	〃	〃	〃	○重ね焼き痕跡。
2168	〃	14.8	6.6	5.0	〃	〃	〃	〃	
2169	〃	13.4	6.0	4.2	〃	〃	〃	〃	○重ね焼き痕跡。
2170	〃	—	—	4.0		〃	〃	〃	
2171	〃	12.9	—	—	○体部内面ユビナデ。	〃	〃	〃	
2172	〃	12.5	6.4	3.8	○体部内面および底部外面ユビナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
2173	〃	11.4	5.0	3.7	〃	灰白色	〃	〃	
2174	〃	12.0	5.6	3.6	○体部内面ユビナデ。体部外面下半指頭オサエ,ユビナデ。	〃	〃	〃	
2175	〃	—	5.8	3.5	〃	〃	〃	〃	
2176	〃	11.0	4.6	3.3	〃	〃	〃	〃	
2177	〃	—	5.2	3.8	〃	〃	〃	〃	
2178	〃	11.4	4.4	3.4	〃	〃	〃	〃	○内外面煤。
2179	〃	11.2	3.8	3.5	〃	鈍い黄橙色	〃	〃	○内面煤。
2180	〃	11.8	4.6	3.2	○体部内外面ユビナデ。底部外面指頭オサエ,ユビナデ。	灰白色	〃	〃	○内外面煤。
2181	〃	11.4	5.2	3.0	○体部内面および底部外面ユビナデ。高台にヨコナデは施されていない。	〃	〃	〃	
2182	〃	10.8	4.3	3.5	○体部内面および底部外面ユビナデ。体部外面下半指頭オサエ,ユビナデ。	〃	〃	〃	
2183	〃	11.2	—	—	○体部内面ユビナデ。	〃	〃	〃	
2184	〃	—	6.0	—	○体部内面および底部外面ユビナデ。	〃	〃	〃	
2185	〃	—	5.4	—	○体部内面および底部外面ユビナデ。見込み部分に重ね焼き痕跡。	〃	〃	〃	
2186	〃	—	5.2	—	○体部内面および底部外面ユビナデ。	〃	〃	〃	
2187	小皿	6.2	5.6	1.3	○底部外面ヘラキリ。	橙色	〃	〃	○ほぼ完形品。
2188	〃	7.2	6.2	1.5	○底部外面ヘラキリのちユビナデ。	灰白色	〃	〃	○完形品。
2189	〃	7.6	5.4	1.4	〃	〃	〃	〃	〃
2190	〃	8.4	6.2	1.4	○底部外面板目痕。	鈍い橙色	精製粘土	〃	
2191	〃	8.2	7.2	1.1	○底部外面ユビナデ。	灰白色	微砂	〃	
2192	〃	8.4	6.4	1.1	○底部外面ヘラキリ,板目痕。	鈍い橙色	精製粘土	〃	
2193	〃	8.9	6.4	1.5	〃	灰白色	〃	〃	
2194	〃	8.8	6.4	1.8	○底部外面ユビナデ,板目痕。	〃	微砂	〃	
2195	〃	7.8	6.0	1.0	○底部外面ヘラキリ。	〃	〃	〃	
2196	〃	7.8	5.5	1.3	〃	〃	〃	〃	
2197	〃	8.6	6.6	1.5	○底部外面ヘラキリのちユビナデ。	鈍い橙色	精製粘土	〃	
2198	〃	8.3	6.4	1.5	〃	灰白色	〃	〃	
2199	〃	8.9	7.0	1.4	○底部外面ヘラキリ,板目痕。	橙色	〃	〃	○完形品。
2200	〃	8.8	6.8	1.4	○底部外面指頭オサエ,ユビナデ。	鈍い橙色	〃	〃	
2201	〃	9.0	7.0	1.7	○底部外面板目痕。	浅黄橙色	〃	〃	○完形品。
2202	〃	8.1	6.0	1.4	○底部外面ヘラキリ。	〃	〃	〃	〃
2203	〃	9.4	—	2.4	○体部内面ハケナデ。体部外面ユビナデ。	灰白色	微砂	〃	○内面煤。
2204		—	6.0	—	○ヨコナデ。	明褐灰色	精製粘土	〃	
2205		—	6.5	—	〃	鈍い黄橙色	〃	〃	
2206	皿	9.2	5.2	2.0	○底部外面ヘラキリ。	灰白色	〃	〃	○完形品。
2207	〃	9.6	6.0	3.0	〃	鈍い橙色	〃	〃	
2208	〃	12.6	8.6	3.1	〃	浅黄橙色	〃	〃	
2209	〃	13.6	9.0	2.8	○底部外面ユビナデか？	〃	〃	〃	
2210	〃	12.9	9.3	2.8	○底部外面ユビナデ,板目痕。	鈍い黄橙色	〃	〃	
2211	〃	13.8	8.6	2.7	○底部外面ヘラキリ,板目痕。	浅黄橙色	〃	〃	
2212	〃	14.0	10.0	2.5	○底部外面板目痕。	鈍い橙色	〃	〃	
2213	〃	14.7	12.0	2.6		浅黄橙色	〃	〃	
2214	羽釜	26.0	—	—		灰黒色	微砂	〃	○瓦質。
2215	〃	15.6	—	—		黒灰色	〃	〃	〃
2216	〃	22.0	—	—		灰白色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2217	鍋	—	—	—		褐灰色	微砂	良好	○外面煤。
2218	〃	—	—	—	○体部外面指頭オサエ,ユビナデ。内面ナデ。	灰白色	〃	〃	○瓦質。
2219	〃	31.8	—	—	○体部内面横方向のナデ。	〃	〃	〃	〃
2220	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2221	〃	31.0	—	—		明褐灰色	〃	〃	○内外面煤。
2222	〃	30.0	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
2223	〃	34.2	—	—		〃	細砂	〃	○外面煤。
2224	〃	38.8	—	—	○口縁部と体部内面上半ヨコナデ。	淡褐色	〃	〃	〃
2225	〃	37.0	—	—		灰白色	微砂	〃	〃
2226	〃	43.6	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
2227		—	—	—		灰色	〃	〃	○瓦質。
2228		—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○土師質。
2229	椀	16.0	—	—	○内外面とも細かい暗文。	灰白色	緻密	〃	○瓦器。
2230	〃	16.0	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2231	〃	14.6	—	—	○外面にわずかに暗文。	灰黒色	〃	〃	〃
2232	〃	14.6	—	—		〃	〃	〃	〃
2233	〃	15.0	—	—		〃	〃	〃	〃
2234	〃	16.0	—	—		灰色	〃	〃	〃
2235	〃	—	4.8	—	○内面に暗文。	灰黒色	〃	〃	〃
2236	〃	15.0	6.0	5.3		黒色	〃	〃	〃
2237	〃	15.8	—	—	○内面に暗文。	灰黒色	〃	〃	〃
2238	〃	15.6	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2239	〃	15.2	—	—		〃	〃	〃	〃
2240	〃	15.2	4.7	3.7		〃	〃	〃	〃
2241	〃	14.8	—	—		黒色	〃	〃	〃
2242	〃	—	—	—	○口唇部内面に沈線。内外面とも細かい暗文	黒灰色	〃	〃	〃
2243	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2244	〃	15.4	—	—		灰黒色	〃	〃	〃
2245	〃	17.0	—	—		〃	〃	〃	〃
2246	〃	15.2	—	—	○内面に暗文。	〃	〃	〃	〃
2247	〃	14.5	—	—	〃	黒色	〃	〃	〃
2248	〃	14.2	—	—		〃	〃	〃	〃
2249	〃	14.2	—	—	○内面に暗文。	灰黒色	〃	〃	〃
2250	〃	13.9	—	—	〃	黒色	〃	〃	〃
2251	〃	—	6.4	—		灰黒色	〃	〃	〃
2252	〃	—	6.5	—		〃	〃	〃	〃
2253	〃	—	5.3	—		灰色	〃	〃	〃
2254	〃	—	4.6	—		灰黒色	〃	〃	〃
2255	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	〃
2256	〃	—	5.0	—		〃	〃	〃	〃
2257	〃	—	4.6	—		〃	〃	〃	〃
2258	〃	—	4.2	—		〃	〃	〃	〃
2259	〃	—	4.4	—		〃	〃	〃	〃
2260	〃	—	3.6	—		〃	〃	〃	〃
2261	〃	—	8.0	—	○内面に細かい暗文。	暗灰色	〃	〃	〃
2262	〃	—	7.2	—		灰黒色	〃	〃	〃
2263	〃	—	6.0	—	○内面に暗文。	〃	〃	〃	〃
2264	〃	—	5.4	—	〃	暗灰色	〃	〃	〃
2265	〃	—	5.4	—		淡灰色	〃	〃	〃
2266	〃	—	5.2	—		灰色	〃	〃	〃
2267	〃	—	5.0	—	○内面に平行の暗文。	灰黒色	〃	〃	〃
2268	〃	—	5.2	—	○内面に暗文。	灰色	〃	〃	〃
2269	〃	—	4.8	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2270	〃	—	4.6	—		灰色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2271	椀	—	4.6	—	○内面に暗文。	灰黒色	緻密	良好	○瓦器。
2272	〃	—	4.3	—	〃	〃	〃	〃	〃
2273	〃	—	3.6	—	○内面に平行の暗文。	〃	〃	〃	〃
2274	小皿	—	—	—	○底部外面指頭オサエのちユビナデ。	〃	〃	〃	〃
2275	〃	8.6	7.4	1.0	〃	黒灰色	〃	〃	〃
2276	〃	9.4	7.6	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2277	〃	8.0	6.8	—	〃	〃	〃	〃	〃
2278	〃	8.8	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2279	〃	8.5	—	—	〃	黒色	〃	〃	〃
2280	〃	8.8	—	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2281	〃	9.0	—	—	〃	黒色	〃	〃	〃
2282	〃	—	—	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2283	〃	9.4	7.6	2.1	○内面に暗文。	〃	〃	〃	〃
2284	〃	9.4	—	—	○底部外面指頭オサエのちユビナデ。	黒灰色	〃	〃	〃
2285	〃	9.4	—	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2286	〃	9.3	—	—		灰色	〃	〃	〃
2287	〃	9.2	—	—	○底部外面指頭オサエのちユビナデ。	灰黒色	〃	〃	〃
2288	〃	9.0	7.4	1.9	〃	暗灰色	〃	〃	〃
2289	〃	9.0	—	—		灰黒色	〃	〃	〃
2290	〃	9.0	—	—		黒色	〃	〃	〃
2291	〃	8.6	—	—	○底部外面指頭オサエのちユビナデ。	灰黒色	〃	〃	〃
2292	〃	9.0	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2293	〃	8.8	7.2	1.4	〃	〃	〃	〃	〃
2294	〃	9.0	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2295	〃	8.5	—	—		灰色	〃	〃	〃
2296	〃	8.0	—	—	○底部外面指頭オサエのちユビナデ。	灰黒色	〃	〃	〃
2297	〃	7.8	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2298	〃	7.4	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2299	〃	8.0	—	—	○底部外面指頭オサエのちユビナデ。	〃	〃	〃	〃
2300	甕	—	—	—	○ヨコナデ。	外面褐色	微砂	堅緻	○備前焼。
2301	〃	18.6	—	—	○体部外面平行タタキ。	灰白色	〃	〃	〃
2302	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2303		—	—	—	○ヨコナデ。	〃	細砂	〃	〃
2304		—	—	—	〃	〃	緻密	〃	〃
2305	甕	—	—	—	〃	〃	微砂	〃	〃
2306	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2307	〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	〃	〃
2308	〃	—	—	—	〃	〃	緻密	〃	〃
2309	〃	—	—	—	〃	赤褐色	〃	〃	〃
2310		—	—	—	〃	赤灰色	〃	〃	〃
2311	甕	—	—	—	〃	灰色	細砂	〃	〃
2312	〃	—	—	—	〃	暗灰色	微砂	〃	〃
2313	〃	—	—	—	〃	鈍い赤褐色	〃	〃	〃
2314	〃	—	—	—	〃	灰白色	緻密	〃	〃
2315	〃	—	—	—	〃	灰色	微砂	〃	〃
2316	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2317	〃	—	—	—	〃	外面灰白色	〃	〃	〃
2318	〃	—	—	—	〃	灰白色	細砂	〃	〃
2319	〃	—	—	—	〃	暗灰色	微砂	〃	〃
2320	〃	—	—	—	〃	〃	緻密	〃	〃
2321	〃	—	—	—	〃	灰色	微砂	〃	〃
2322	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2323		—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2324	壺	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ。	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2325	甕				○ヨコナデ。	淡灰色	微砂	堅緻	○備前焼。
2326	〃	—	—	—		黒灰色	〃	〃	〃
2327	壺	20.2	—	—	○体部外面細かいハケメ。体部内面ヨコナデ	暗灰色	細砂	〃	〃
2328	〃	11.8	—	—		暗青灰色	〃	〃	〃
2329	甕	—	—	—	○ヨコナデ。	灰白色	緻密	〃	〃
2330	壺	13.2	—	—		黒褐色	微砂	〃	〃
2331	甕	—	—	—	○ヨコナデ。	赤灰色	〃	〃	〃
2332	〃	—	—	—	〃	灰色	〃	〃	〃
2333	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2334	壺	15.8	—	—		〃	細砂	〃	〃
2335	〃	—	—	—	○ヨコナデ。	暗赤褐色	微砂	〃	〃
2336	甕	—	—	—	〃	灰色	緻密	〃	〃
2337	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2338	壺	18.2	—	—	〃	暗赤褐色	〃	〃	〃
2339	〃	16.0	—	—	〃	灰色	〃	〃	〃
2340	甕	25.6	—	—		暗赤灰色	〃	〃	〃
2341	〃	—	—	—	○ヨコナデ。	赤灰色	細砂	〃	〃
2342	〃	—	—	—	〃	赤褐色	微砂	〃	〃
2343	〃	—	—	—	〃	暗赤灰色	〃	〃	〃
2344		—	—	—	○内外面とも粗いハケメ。	灰白色	緻密	〃	〃
2345		—	—	—	○外面平行タタキ。内面細かい横ハケメ。	〃	微砂	〃	〃
2346		—	—	—	○外面平行タタキ。内面粗いハケメ。	黒灰色	〃	〃	〃
2347		—	—	—	○外面平行タタキのちハケメ。内面ハケメ。	灰白色	緻密	〃	〃
2348		—	—	—	○内外面とも粗いハケメ。	灰色	〃	〃	〃
2349		—	—	—	○内面指頭オサエ,ユビナデ。	灰白色	〃	〃	〃
2350	甕	—	—	—	○外面平行タタキのちハケメ。内面粗いハケ	〃	〃	〃	〃
2351		—	—	—	○内外面ともハケメ。	青灰色	〃	〃	〃
2352		—	—	—	○外面格子目風タタキ。内面ナデ。	淡灰色	〃	〃	〃
2353		—	—	—	○外面平行タタキ,内面丁寧なナデ。	灰色	〃	〃	〃
2354		—	—	—	○外面タタキ。内面ハケメ。	〃	微砂	〃	〃
2355		—	—	—	○外面平行タタキ。内面指頭オサエ。	青灰色	〃	〃	〃
2356		—	—	—	○外面格子目風タタキ。内面指頭オサエナデ	灰色	〃	〃	〃
2357	椀	14.8	6.2	4.5	○口縁部に重ね焼き痕跡。	〃	緻密	良好	〃
2358	〃	17.0	—	—		青灰色	〃	〃	〃
2359	〃	—	5.8	—		〃	〃	〃	〃
2360	〃	—	7.6	—		〃	〃	〃	〃
2361	〃	—	6.8	—		〃	〃	〃	〃
2362	杯	—	4.2	—	○ヨコナデ。	灰白色	〃	〃	〃
2363	鉢	26.9	—	—	〃	灰色	微砂	〃	〃
2364	〃	—	—	—	〃	灰白色	〃	〃	〃
2365	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2366	〃	—	—	—	○ヨコナデのち不定方向のナデ。	〃	〃	〃	〃
2367	〃	—	—	—		暗灰色	〃	〃	〃
2368	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	〃
2369	〃	20.4	—	—		淡灰色	〃	〃	〃
2370	擂鉢	—	—	—	○片口。	赤褐色	〃	〃	〃
2371	〃	—	—	—		灰色	緻密	堅緻	〃
2372	〃	—	—	—		暗赤灰色	微砂	〃	〃
2373	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2374	〃	—	—	—		暗青灰色	〃	〃	〃
2375	〃	—	—	—		明褐灰色	〃	〃	〃
2376	〃	20.6	12.6	7.5		暗赤灰色	細砂	〃	〃
2377	〃	—	—	—		灰色	微砂	〃	〃
2378	〃	—	—	—		暗青灰色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2379	擂鉢	—	—	—		暗赤褐色	微砂	堅緻	○瀬戸前焼。
2380	〃	31.0	13.8	12.1	○体部下半外面ヘラケズリ。底部ユビナデ。	赤褐色	〃	〃	〃
2381	〃	—	—	—		鈍い赤褐色	細砂	〃	〃
2382	〃	—	—	—		暗赤褐色	微砂	〃	〃
2383	〃	—	—	—		鈍い赤褐色	〃	〃	〃
2384	〃	—	—	—		暗赤褐色	〃	〃	〃
2385	〃	—	—	—		暗赤灰色	〃	〃	〃
2386	〃	—	—	—		暗赤褐色	〃	〃	〃
2387	甕	25.0	—	—	○体部内面青海波文ナデ消し。	灰色	〃	良好	○亀山焼。
2388	〃	—	—	—	○ヨコナデ。	灰黒色	〃	瓦質	〃
2389	〃	—	—	—	○頸部外面指頭オサエ。	青灰色	〃	堅緻	〃
2390	〃	—	—	—		灰白色	〃	瓦質	〃
2391	〃	26.0	—	—	○口縁部外面指頭オサエのちヨコナデか?	灰黒色	〃	〃	〃
2392	〃	—	—	—	○口縁部内面に沈線。	灰白色	〃	〃	〃
2393	〃				○体部外面上半タタキのち指頭オサエ,ナデ。	黒灰色	細砂	〃	〃
2394	〃	33.2	—	—	○頸部外面指頭オサエのちヨコナデ。	〃	微砂	〃	〃
2395	〃	—	—	—	○口縁部外面指頭オサエのちヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
2396	〃	—	—	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2397	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2398	〃	—	—	—	○内外面とも磨滅。	灰色	〃	〃	〃
2399	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2400	〃	44.4	—	—	○口縁部外面指頭オサエのちヨコナデ。	灰黒色	〃	〃	〃
2401	〃	—	—	—	○内面指頭オサエ,ユビナデ,一部にハケメ。	〃	〃	良好	〃
2402	〃	—	—	—	○体部外面格子目タタキ。内面不詳。	灰色	〃	瓦質	〃
2403	〃	—	—	—	○体部外面格子目タタキ。内面ユビナデ。	〃	〃	良好	〃
2404	〃	—	—	—	○体部外面格子目タタキ。内面細かいハケメ。	〃	〃	〃	〃
2405	〃	—	13.0	—	○体部外面格子目タタキ。一部ナデ消し。	灰白色	〃	瓦質	〃
2406	〃	—	—	—	○内面青海波文をナデ消し。	灰黒色	〃	〃	〃
2407	〃	—	—	—	〃	黒色	〃	あまい	〃
2408	〃	—	—	—	〃	黒灰色	〃	瓦質	〃
2409	〃	—	—	—	〃	灰色	粗砂	〃	〃
2410		—	—	—		〃	微砂	良好	〃
2411		—	—	—		〃	〃	〃	〃
2412		—	—	—	○体部外面平行タタキ。内面ヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
2413		—	—	—	○内面青海波文ナデ消し。	〃	細砂	〃	〃
2414		—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2415		—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2416		—	—	—	〃	灰白色	〃	〃	〃
2417		—	—	—	〃	〃	緻密	〃	〃
2418		—	—	—	○内面指頭オサエのち一部粗いハケメ。	〃	細砂	〃	○亀山焼?
2419	鉢	—	—	—	○体部外面指頭オサエのちユビナデ。	灰黒色	微砂	瓦質	○亀山焼。
2420	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2421	〃	—	—	—		黒色	〃	〃	〃
2422		—	—	—		灰黒色	〃	〃	〃
2423	鉢	30.0	—	—	○口縁端部に沈線。内面細かいハケメ。	〃	〃	〃	〃
2424	〃	—	12.8	—		〃	〃	〃	〃
2425	〃	—	—	—	○体部外面指頭オサエのちヨコナデ。	黒色	〃	〃	〃
2426	〃	—	—	—	○体部外面指頭オサエのち粗いハケメ。	灰色	〃	〃	〃
2427	甕	30.0	—	—	○口縁部外面にヘラを押しあてた痕跡。	〃	〃	堅緻	○勝間田焼。
2428	壺	18.2	—	—	○ヨコナデ。	暗灰色	〃	〃	○勝間田焼。自然釉
2429	甕	—	—	—	○体部内面ハケメ。	灰色	〃	〃	○勝間田焼。
2430	〃	—	—	—	○ヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
2431	〃	—	—	—	○体部外面格子目タタキ。内面ヨコナデか?	〃	〃	〃	〃
2432		—	—	—	〃	青灰色	緻密	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2433		—	—	—	○体部外面格子目タタキ。内面ヨコナデか?	灰色	微砂	堅緻	○勝間田焼。
2434		—	—	—	○体部外面格子目タタキ。内面細いハケメか	暗青灰色	緻密	〃	〃
2435	甕	24.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面青海波文ナデ消し。	灰色	〃	良好	
2436		—	—	—	○口縁部外面平行タタキ。	〃	〃	〃	○魚住焼。
2437		—	—	—	〃	灰黒色	〃	〃	〃
2438	甕	27.0	—	—	〃	灰白色	微砂	〃	○魚住焼?
2439	〃	—	—	—	○体部外面格子目風平行タタキ。	〃	〃	堅緻	○魚住焼。
2440	〃	—	—	—	○口縁部外面に平行タタキがわずかに残存。	黒色	〃	良好	〃
2441		—	—	—	○内面青海波文のちハケメ。	暗青灰色	〃	堅緻	○魚住焼?
2442		—	—	—	○内面指頭オサエのちヨコナデ。	黒色	〃	あまい	○魚住焼。
2443		—	—	—	○体部外面平行タタキ。内面細かいハケメか	灰黒色	〃	良好	〃
2444		—	—	—	○体部外面長方形のタタキメ。	灰色	〃	〃	〃
2445		—	—	—	○体部外面平行タタキ。内面ハケメか?	外面黒色	〃	〃	〃
2446		—	—	—	○体部外面平行タタキ。	灰色	〃	〃	〃
2447	鉢	26.4	—	—	○体部内面ヨコナデのち細かいハケメか?	〃	〃	〃	〃
2448	〃	—	—	—	〃	灰白色	〃	〃	〃
2449	〃	—	—	—	〃	青灰色	〃	〃	〃
2450	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2451	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2452	〃	—	—	—	○ヨコナデのちハケメか? 重ね焼き痕跡。	灰色	〃	〃	〃
2453	〃	—	—	—	○重ね焼き痕跡。	灰白色	〃	〃	〃
2454	〃	28.0	—	—	○ヨコナデのちユビナデか?	淡灰色	〃	〃	〃
2455	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2456	〃	26.0	—	—	○体部内面ヨコナデのち細かいハケメか?	青灰色	〃	〃	〃
2457	〃	—	—	—	○片口。	灰白色	〃	〃	〃
2458	〃	—	—	—	○ヨコナデのちユビナデか?	青灰色	〃	〃	〃
2459	〃	27.4	—	—	○ヨコナデのちハケメか?	灰白色	〃	〃	〃
2460	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2461	〃	31.2	—	—		青灰色	〃	〃	〃
2462	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2463	〃	—	—	—	○片口。	淡灰色	〃	〃	〃
2464	〃	—	—	—		青灰色	〃	〃	〃
2465	〃	—	—	—	○重ね焼き痕跡。	〃	〃	〃	〃
2466	〃	—	—	—		暗灰色	〃	〃	〃
2467	〃	—	—	—	○重ね焼き痕跡。	青灰色	〃	〃	〃
2468	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2469	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2470	〃	—	—	—	○体部内面ハケメ。	青灰色	〃	〃	〃
2471	〃	—	—	—	○重ね焼き痕跡。	淡灰色	〃	〃	〃
2472	〃	—	—	—	○内面ヨコナデのちハケメ。底部外面イトキリ。	青灰色	〃	〃	〃
2473	〃	—	8.6	—	○底部外面イトキリ。	暗青灰色	〃	〃	〃
2474	甕	—	—	—	○内面ヨコナデ?	鈍い褐色	〃	堅緻	○常滑焼。
2475	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2476	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	〃
2477	〃	—	—	—		暗灰色	〃	〃	〃
2478	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2479	〃	—	—	—		黒灰色	〃	〃	〃
2480	〃	—	—	—	○内面指頭オサエのちヨコナデ?	灰色	〃	〃	〃
2481	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	〃
2482	〃	—	—	—	○内面ヨコナデ?	褐灰色	〃	〃	〃
2483	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2484	〃	—	—	—		鈍い赤褐色	〃	〃	〃
2485	〃	—	—	—		灰赤色	〃	〃	〃
2486	〃	—	—	—		鈍い黄褐色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2487	甕	—	—	—		灰赤色	微砂	堅緻	○常滑焼。
2488	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	〃
2489	〃	—	—	—	○内面ヨコナデ？	灰黄褐色	〃	〃	〃
2490	〃	—	—	—	○内面指頭オサエのちヨコナデ？	灰褐色	〃	〃	〃
2491	〃	—	—	—		鈍い赤褐色	〃	〃	〃
2492	〃	—	—	—	○内面ヨコナデ？	淡黄色	〃	〃	〃
2493	〃	—	—	—		暗赤褐色	〃	〃	〃
2494	〃	—	—	—		褐色	粗砂	〃	〃
2495	壺	9.0	—	—		灰白色	緻密	〃	○白磁。
2496	〃	—	—	—	○外面に耳。	〃	〃	〃	〃
2497	小壺	—	2.9	—	○内面および外面上半に施釉。内外面とも貫入。釉と露胎の境が橙色に変色している。	〃	〃	〃	〃
2498	碗	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2499	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2500	〃	—	—	—	○内外面とも細かい貫入。	〃	〃	〃	〃
2501	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2502	皿	—	4.0	—	○体部外面下半および底部外面露胎。内面にヘラガキ文。内外面とも粗い貫入。	〃	〃	〃	〃
2503	〃	10.8	4.2	2.5	○内面および外面上半に施釉。内外面とも貫入。底部外面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	〃
2504	〃	—	3.3	—	○外面の釉の端部が橙色を帯びる。内面に貫入あり。外面および底部ヘラケズリ。	オリーブ黄色	〃	〃	〃
2505	〃	—	3.4	—	○内面および外面上半施釉。内面に貫入。底部外面ヘラケズリ。	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2506	〃	—	3.6	—	○見込みに段。体部外面下端および底部外面露胎。	灰白色	〃	〃	〃
2507	碗	16.6	—	—		〃	〃	〃	〃
2508	〃	15.0	—	—		〃	〃	〃	〃
2509	〃	13.8	—	—		〃	〃	〃	〃
2510	〃	15.4	—	—		〃	〃	〃	〃
2511	〃	14.8	—	—		〃	〃	〃	〃
2512	〃	16.0	—	—	○体部外面下半ヘラケズリ痕。	〃	〃	〃	〃
2513	〃	15.5	—	—	○見込み部分に沈線。	〃	〃	〃	〃
2514	〃	15.2	—	—		〃	〃	〃	〃
2515	〃	16.6	7.7	6.6	○見込み部分に沈線。高台部分露胎。	〃	〃	〃	〃
2516	〃	14.8	—	—		白色	〃	〃	〃
2517	〃	15.0	—	—	○内外面とも粗い貫入。	灰白色	〃	〃	〃
2518	〃	—	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2519	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2520	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2521	〃	15.6	—	—	○口縁部内外面に貫入。	〃	〃	〃	〃
2522	〃	—	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2523	〃	14.8	—	—		〃	〃	〃	〃
2524	〃	15.0	—	—	○体部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2525	〃	15.6	—	—		〃	〃	〃	〃
2526	〃	16.3	—	—		〃	〃	〃	〃
2527	〃	15.0	—	—		〃	〃	〃	〃
2528	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2529	〃	15.8	—	—	○体部外面上部に1条の沈線。	〃	〃	〃	〃
2530	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2531	〃	—	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2532	〃	14.2	—	—		〃	〃	〃	〃
2533	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2534	〃	—	—	—	○体部外面下半露胎。	〃	〃	〃	〃
2535	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2536	〃	15.8	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2537	碗	15.6	—	—		灰白色	緻密	堅緻	○白磁。
2538	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2539	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2540	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2541	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2542	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2543	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2544	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2545	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2546	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2547	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2548	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2549	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2550	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2551	〃	—	—	—	○内外面とも細かい貫入。	〃	〃	〃	〃
2552	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2553	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2554	〃	—	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2555	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2556	〃	—	—	—	○内外面とも細かい貫入。	〃	〃	〃	〃
2557	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2558	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2559	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2560	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2561	〃	—	—	—	○内外面とも細かい貫入。	〃	〃	〃	〃
2562	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2563	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2564	〃	—	—	—	○内外面とも細かい貫入。	〃	〃	〃	〃
2565	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2566	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2567	〃	—	7.8	—	○見込み部分に鋭い沈線。体部外面に浅い沈線。畳付部分磨滅顕著。	〃	〃	〃	〃
2568	〃	—	6.6	—	○見込み部分に鋭い沈線。	〃	〃	〃	〃
2569	〃	—	7.0	—	○見込みに沈線。畳付磨滅顕著。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2570	〃	—	6.8	—	○見込みに途中で切れる沈線。見込みに砂粒が少量付着。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2571	〃	—	7.2	—	○高台および体部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2572	〃	—	7.0	—	○外面にヘラケズリによる凹凸。外面露胎。畳付磨滅顕著。	〃	〃	〃	〃
2573	〃	—	7.2	—	○見込みに沈線。畳付磨滅顕著。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2574	〃	—	6.8	—	○見込みに砂粒少量付着。畳付磨滅顕著。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2575	〃	—	7.2	—	○外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2576	〃	—	7.2	—	〃	〃	〃	〃	〃
2577	〃	—	7.0	—	○見込みに鋭い沈線および砂粒付着。畳付磨滅顕著。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2578	〃	—	6.8	—	○見込みに鋭い沈線。畳付磨滅。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2579	〃	—	6.8	—	〃	〃	〃	〃	〃
2580	〃	—	7.0	—	○外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2581	〃	—	6.2	—	○見込みに鋭い沈線。畳付磨滅。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2582	〃	—	5.8	—	○見込みに浅い凹線。体部外面にヘラによる刻み。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2583	〃	—	6.4	—	○見込みに沈線。	〃	〃	〃	〃
2584	〃	—	6.8	—	○見込みに沈線。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2585	〃	—	6.4	—	○見込みが白い泡状を呈す。畳付および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2586	〃	—	6.0	—	○見込みに沈線。高台および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2587	碗	—	6.2	—	○見込みに沈線。外面ほぼ露胎。	灰白色	緻密	堅緻	○白磁。
2588	〃	—	6.4	—	○見込みに浅い沈線。	〃	〃	〃	〃
2589	〃	—	6.0	—	○見込みに浅い沈線およびわずかに砂粒付着。外面に細かい貫入。	〃	〃	〃	〃
2590	〃	—	5.8	—	○体部外面下半および高台、底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2591	〃	—	6.4	—	○見込みに浅い沈線および砂粒付着。	〃	〃	〃	〃
2592	〃	—	6.2	—	○内面に貫入。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2593	〃	—	6.2	—	○畳付および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2594	〃	—	6.6	—	○外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2595	〃	15.4	5.4	6.6	○体部外面下半から高台にかけて露胎。見込み部分に浅い段。見込み部分に砂粒が少量付着。	浅黄色	〃	〃	〃
2596	〃	—	—	—	○体部内面に細く浅い1条の沈線。体部外面にヘラガキ沈線。	灰白色	〃	〃	〃
2597	〃	15.0	—	—	○見込み部分に沈線風の段。体部内面に浅い沈線。体部外面にヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	〃
2598	〃	15.8	6.4	6.4	○体部内面に浅い沈線。見込みに段。畳付部分に目あと。見込み部分の釉を輪状にかき取っている。釉はごく一部高台の外面にかかっているが基本的には高台は露胎。内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2599	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2600	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2601	〃	17.0	—	—		〃	〃	〃	〃
2602	〃	15.6	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2603	〃	14.8	—	—	○体部内面にクシガキ沈線文。	〃	〃	〃	〃
2604	〃	17.2	6.4	6.4	○高台および底部外面露胎。体部内面に浅い沈線。見込みの釉を輪状にかき取る。	〃	〃	〃	〃
2605	〃	15.4	—	—		〃	〃	〃	〃
2606	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2607	〃	17.0	—	—	○内面に細く浅い沈線。	〃	〃	〃	〃
2608	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2609	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2610	〃	—	—	—	○内外面とも貫入。	〃	〃	〃	〃
2611	〃	—	—	—	○内面にクシガキ沈線文。	〃	〃	〃	〃
2612	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2613	〃	—	6.8	—	○見込みに沈線。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2614	〃	—	7.0	—	○畳付および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2615	〃	—	6.8	—	○見込みに沈線。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2616	〃	—	6.8	—	○見込みに鋭い沈線。畳付磨滅。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2617	〃	—	6.6	—	○見込みに鋭い沈線。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2618	〃	—	6.6	—	○畳付磨滅顕著。内面ほぼ露胎。	〃	〃	〃	〃
2619	〃	—	6.6	—	○高台磨滅顕著。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2620	〃	—	6.0	—	○高台および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2621	〃	—	6.0	—	○見込みに砂粒少量付着。外面ほぼ露胎。	〃	〃	〃	〃
2622	〃	—	6.4	—	○外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2623	〃	—	5.2	—	○内面にヘラおよびクシガキ文。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2624	〃	—	4.8	—	○内外面とも釉。	〃	〃	〃	〃
2625	〃	—	5.6	—	○内面に浅い沈線。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2626	〃	—	6.0	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2627	〃	—	6.4	—	〃	〃	〃	〃	〃
2628	〃	—	6.0	—	〃	〃	〃	〃	〃
2629	〃	—	6.6	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。見込みの一部に砂粒付着。外面ほぼ露胎。	明オリーブ灰色	〃	〃	〃
2630	〃	—	6.8	—	○見込み部分の釉を輪状にかき取る。外面ほぼ露胎。	灰白色	〃	〃	〃
2631	〃	—	6.0	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。見込みおよび畳付が白い泡状を呈す。外面ほぼ露胎。	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2632	碗	—	6.2	—	○外面露胎。見込みの釉を輪状にかき取る。見込みの一部および畳付が白い泡状を呈する。内面に貫入。	オリーブ灰色	緻密	堅緻	○白磁
2633	〃	—	6.2	—	○見込みの釉を輪状にかき取り，その部分に砂粒が付着し、白い泡状を呈する。内面に細かい貫入。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2634	〃	—	5.2	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。高台および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2635	〃	—	5.6	—	○見込みの釉を輪状にかき取り，その部分が白い泡状を呈する。高台および底部外面露胎。畳付磨滅顕著。	〃	〃	〃	〃
2636	〃	—	6.6	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。外面ほぼ露胎。	〃	〃	〃	〃
2637	〃	—	6.4	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。その部分に目あと。見込みに貫入。体部外面下半および高台，底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2638	〃	—	5.0	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。畳付および底部外面露胎。内外面とも貫入あり。	白色	〃	〃	〃
2639	〃	—	4.6	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。外面露胎。	灰白色	〃	〃	〃
2640	皿	—	4.8	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。見込みに白い泡多い。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2641	〃	—	5.0	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。畳付に白い泡，外面ほぼ露胎。	〃	〃	〃	〃
2642	〃	—	4.0	—	○見込みの釉を輪状にかき取る。その部分および高台部分が白い泡状を呈す。外面露胎	〃	〃	〃	〃
2643	〃	—	5.0	—	○見込みに段。外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2644	碗	—	—	—	○内面に細く浅い沈線。口禿。	〃	〃	〃	〃
2645	皿	10.8	—	—	○口禿。	〃	〃	〃	〃
2646	〃	—	6.6	—	○内外面とも釉。	〃	〃	〃	〃
2647	〃	—	4.8	—	○内外面とも釉，貫入。	〃	〃	〃	〃
2648	〃	—	6.2	—	○内外面とも釉。	〃	〃	〃	〃
2649	〃	—	5.0	—	○体部外面下半および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2650	〃	10.8	—	—	○口禿。	〃	〃	〃	〃
2651	〃	12.0	—	—	○内外面とも釉，貫入。	〃	〃	〃	○白磁か？
2652	〃	—	—	—	○底部外面露胎。内面ヘラガキ文。	白色	〃	〃	○白磁。
2653	碗	—	—	—	○内外面および畳付まで施釉。	〃	〃	〃	〃
2654	蓋	—	—	—	○内外面ともうすい釉。	〃	〃	〃	○白磁か？
2655		—	5.6	—	○内面，外面とも釉。	灰白色	〃	〃	〃
2656	合子	7.6	—	—	○外面および内面上端部に釉。天井部に印花草花文。	〃	〃	〃	○白磁。
2657	〃	6.2	—	—	○外面のみ釉。外面に蓮弁文。	〃	〃	〃	○青白磁。
2658	〃	4.0	—	—	○受部外面のみ露胎。体部外面に蓮弁文。	淡青灰白色	〃	〃	〃
2659	〃	5.2	4.4	2.0	○受部内外面および体部下端部および底部外面露胎。内面に貫入。	淡青白色	〃	〃	〃
2660	〃	6.0	—	—	○受部外面のみ露胎。体部外面に蓮弁文。	青白色	〃	〃	○青白磁？
2661	壺	12.0	—	—	○内外面とも釉。貫入あり。	明緑灰色	〃	〃	○青磁。
2662	〃	—	—	—	〃	明オリーブ灰色	〃	〃	〃
2663	碗	—	—	—	○外面にヘラガキ蓮弁文を描き，さらにその上から櫛目を縦に施している。内面にもヘラおよびクシガキ文を施す。内外面とも釉	オリーブ灰色	〃	〃	〃
2664	〃	—	—	—	○内面にヘラおよびクシガキ文。外面は無文。内外面ともうすい釉。	〃	〃	〃	〃
2665	〃	—	—	—	○内面にヘラおよびクシガキ文。外面は無文。内外面ともうすい釉。外面に貫入。	〃	〃	〃	〃
2666	〃	15.8	—	—	○体部内面に2花1葉の片彫りの蓮華文が描かれていたものと思われる。見込み部分は不明。内外面とも釉。	〃	〃	〃	〃
2667	〃	17.0	5.8	6.5	○体部内面に2花1葉の片彫りの蓮華文か？見込み部分にも片彫りの蓮華文が1つ描かれている。底部外面のみ露胎。内外面とも貫入。	灰緑色	やや粗い	〃	〃
2668	〃	16.4	—	—	○体部内面に2花1葉の蓮華文か？	青緑灰色	緻密	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2669	碗	15.6	—	—	○内面にヘラガキ文。内外面とも釉で貫入あり。	灰オリーブ色	緻密	堅緻	○青磁。
2670	〃	—	—	—	〃	青緑灰色	〃	〃	〃
2671	〃	—	6.2	—	○見込みに片彫りの蓮華文。底部外面露胎。	淡緑灰色	〃	〃	〃
2672	〃	16.2	6.0	7.1	○3本の沈線によって体部内面を5分割し，その中に飛雲文を描くものと思われる。見込みにも蓮華文のくずれたものと思われる片彫りの文様が描かれている。ほぼ畳付および底部外面以外全面に施釉。内外面ともに貫入あり。	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2673	〃	—	—	—	○内面にヘラガキ文。内外面とも釉。	明オリーブ灰色	〃	〃	〃
2674	〃	—	—	—	○内面にヘラガキ飛雲文か　内外面とも釉で貫入が多い。	オリーブ黄色	〃	〃	〃
2675	〃	—	—	—	○内面にクシガキ文およびくずれた飛雲文？	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2676	〃	—	—	—	○内面にクシガキ文。内外面ともうすい釉。	〃	〃	〃	〃
2677	〃	—	—	—	○内面にヘラガキ文。内外面とも釉。	淡黄緑灰色	〃	〃	〃
2678	〃	—	—	—	○外面にヘラガキ蓮華文。内外面とも釉。	オリーブ黄色	〃	〃	〃
2679	〃	—	—	—	○外面に錆蓮弁文。内外面とも釉。	青緑灰色	〃	〃	〃
2680	盤	—	—	—	○体部内面に蓮弁文。内外面とも釉。貫入多い。	オリーブ灰色	〃	〃	〃
2681	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
2682	碗	—	6.0	—	○見込みに文字のスタンプ文があるが解読できない。底部外面のみ露胎。	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2683	〃	—	5.0	—	○体部外面にわずかに蓮弁らしき文様の凹凸あり。釉は体部内外面、高台、畳付，一部底部外面までかかっている。見込みにわずかな貫入。	オリーブ灰色	〃	〃	〃
2684	〃	—	6.4	—	○見込みにスタンプ文らしき文様あり。釉は内面および一部外面畳付や底部外面までたれている。	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2685	〃	16.8	—	—	○体部内面上位に浅い沈線。体部内面にヘラガキ文とクシガキ文。体部外面に縦方向のクシガキ文。体部外面下端部のみ露胎。内外面とも貫入。	オリーブ黄色	〃	〃	〃
2686	〃	17.0	—	—	○体部内面上位に浅い沈線。体部内面にヘラガキ文とクシガキ文。体部外面に縦方向のクシガキ文。内外面とも釉。	オリーブ灰色	〃	〃	〃
2687	〃	16.6	—	—	○体部内面上位に浅い段。体部内面にヘラガキ文とクシガキ文。体部外面に縦方向のクシガキ文。内外面とも釉。	浅黄色	〃	〃	〃
2688	〃	—	5.8	—	○体部内面にヘラガキ文とクシガキ文。体部外面に縦方向のキシガキ文。体部外面下位および高台，底部外面露胎。	灰白色	〃	〃	〃
2689	〃	—	—	—	○体部外面に縦方向のクシガキ文。内面にヘラガキ文とクシガキ文。内外面とも釉。	オリーブ灰色	〃	〃	〃
2690	〃	—	—	—	○体部内面上位に浅い沈線。内面にヘラガキ文とクシガキ文。外面に縦方向のクシガキ文。内外面とも釉。	灰黄色	〃	〃	
2691	〃	—	—	—	○内面にヘラガキ文とクシガキ文。外面に縦方向のクシガキ文。内外面とも釉。	淡青灰白色	〃	〃	〃
2692	〃	—	—	—	○内面にヘラガキ文とクシガキ文。外面に縦方向のクシガキ文。外面下半部のみ露胎。	オリーブ黄色	〃	〃	〃
2693	〃	—	—	—	〃	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2694	〃	—	5.2	—	○内面にヘラガキとクシガキ文。外面に縦方向のクシガキ文。高台部および底部外面露胎。	〃	〃	〃	〃
2695	〃	—	5.4	—	○体部外面に縦方向のクシガキ文。畳付および底部外面露胎。内外面とも貫入。	暗緑色	〃	〃	〃
2696	皿	10.8	5.4	2.4	○内面にヘラによる片彫りとクシガキ文。底部外面以外に釉。内外面とも貫入。	灰オリーブ色	〃	〃	〃
2697	〃	—	5.0	—	○内面にヘラによる片彫りとクシガキ文。体部外面下半および底部外面露胎。	オリーブ灰色	〃	〃	〃
2698	〃	—	—	—	○内面にクシガキ文。体部外面下半および底部外面露胎。体部内外面貫入。	〃	〃	〃	〃
2699	〃	—	3.8	—	○内面にヘラによる片彫りとクシガキ文。底部外面以外に釉。	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2700	皿	—	—	—	○内外面とも釉。	灰オリーブ	緻密	堅緻	○青磁。
2701	〃	—	—	—	○内外面とも釉，貫入あり。	〃	〃	〃	〃
2702	〃	—	4.4	—	○底部外面のみ露胎。内面にヘラによる片彫りとクシガキ文。内外面とも貫入あり。	青緑灰白色	〃	〃	〃
2703	〃	—	4.6	—	〃	青緑灰色	〃	〃	〃
2704	〃	10.0	—	—	○内外面とも釉，貫入あり。	オリーブ灰	〃	〃	〃
2705	〃	—	—	—	○内外面とも釉，底部外面のみ露胎。	緑灰白色	〃	〃	〃
2706	〃	11.4	—	—	○内底部および外面下半部が露胎。	明オリーブ灰色	〃	〃	○青磁か？
2707	水瓶	—	—	—	○外面釉。頸部につまみあり。	明緑灰色	〃	〃	○青白磁か？
2708	碗	—	—	—	○外面に細蓮弁文。	淡青緑灰色	〃	〃	○青磁。
2709	〃	—	5.8	—	○見込みに印花文らしい文様があるがはっきりしない。底部外面のみ露胎。	淡青緑色	〃	〃	〃
2710	天目茶碗	—	2.8	—	○内面および外面上半に釉。釉は厚い部分で2～3㎜。畳付はイトキリ。	黒色	〃	〃	
2711	香炉	—	—	—	○底部外面露胎。体部外面貫入。3足。	灰白色	〃	〃	○白磁。
2712	平瓦	—	—	—	○内面布目痕。外面格子目タタキ。	〃	細砂	良好	
2713	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
2714	軒丸瓦	—	—	—	○複弁蓮華文軒丸瓦片。	明褐灰色	〃	〃	
2715	丸瓦	—	—	—	○内面布目痕。外面格子目タタキ。	青灰色	〃	〃	

丸田調査区遺構・遺物一覧表

表－22　丸田調査区竪穴式住居一覧表

番号＼細別	種類	形	規模(cm) 長軸	短軸	床面積(㎡)	主柱穴	柱間距離(cm) 最大	最小	中央穴 プラン	幅(cm)	深さ(cm)	焼土 焼土	壁溝	付属施設 ベッド状イコウ	貯蔵穴	カマド	位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
28	竪穴住居式	楕円形	500	420	—	2	— —	— —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	百・前・III	E－23	壺
29	〃	円形	580 460	540 460	— —	4 4	300 300 240 200	280 278 238 190	不定円形	72×60	52	—	—	○	—	—	—	—	N－72°－W N－82°－W	百・後・II	E－18	壺、鉢、高杯、鉄器敲石、石錘
30	〃	〃	500	500	—	4	— —	240 210	長隅丸方形	70×50	38	—	—	○	—	—	—	—	N－76°－W	〃	〃	壺、甕、鉢、高杯、製塩土器
31	〃	—	—	—	—	—	— —	— —	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	〃	F－19	壺、甕
32	〃	円形	835 655 596	765 653 565	—	4(8)	139～185 (200～226) 190～224		—	65×30	30 10 —			○ ○ —	—	—	—	—	N－89°－W 二	〃	E－20	壺、甕、鉢、高杯、石器、ガラス小玉
33	〃	〃	—	—	—	—	— —	— —	—	—	45	○	—	○	—	—	—	—	—	〃	F－21	甕、鉢、高杯、製塩土器
34	〃	〃	640 520	620 520	31.20 21.20	5 4	— —	— — 240 210	不整円形	98×80	38		—	○	—	—	—	—	— N－84°－W	百・後・IV	E－18	壺、甕、鉢、高杯、製塩、土器、砥礫車
35	〃	隅丸方形	375	375		4	— —	140 —	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N－63°－W	百・後・III	〃	壺、甕、鉢、高杯、鉄鎌、敲石
36	〃	〃	460	450		4	220 240	260 200	〃	56×60	57	—	—	○	—	—	—	—	N－63°－W	百・後・IV	E－20	壺、甕、鉢、高杯、製塩土器
37	〃	—	—	—	—	—	— —	— —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	百・後・III	D－20	壺、甕、鉢、高杯、製塩土器
38	〃	円形	530 430	— —		4 4	200 180 180 190	200 230 170 180	楕円形 〃	110×62 40×30	50	— —	— —	○ ○	— —	— —	— —	— —	N－20°－W N－58°－W	百・後・III 百・後・II	E－21	高杯、器台、甕、鉄器
39	〃	〃	512	496		6	250 240	220 220				—	—	—	—	—	—	—	N－72°－E	百・後・III	〃	壺、甕、鉢、高杯、器台
40	〃	隅丸方形	520	515	24.93	4	250 240	250 250	方形	53×45	35	—	—	○	—	—	—	—	N－59°－W	百・古・I	E－18	壺、甕、鉢、高杯
41	〃	〃	460 420	400 320	17.00 12.18	4	150 160	150 150	円形	—	30	—	—	○	—	—	—	—	N－60°－W	〃	D－18	甕
42	〃	〃	520	—	—	4	230 240	240 240	方形	58×50	30	—	—	○	—	—	—	—	N－65°－W	〃	〃	壺、甕、鉢、鉄鏃
43	〃	方形	690	670	—	4	400 340	360 350	—	—	—	—	—	—	—	—	○	北辺	N－81°－W	6世紀前半	F－18	須恵器(杯身、杯蓋、高杯)土師器(甕、甑)白玉

表—23　丸田調査区建物一覧表

番　号	規模	柱間寸法(cm)		桁　行	梁　間	面積	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備　考
		桁	梁	(cm)	(cm)	(m²)				
建物— 3	1×1	260	210～230	260	230	5.98	N—65°—W	円	E—18	百・後・II
〃 — 4	1×1	240	200	240	200	4.80	N—50°—W	〃	〃	〃
〃 — 5	1×1	250	190	250	190	4.75	N—40°—W	〃	F—18	〃
〃 — 6	1×1	250	220	250	220	5.50	N—55°—W	〃	〃	〃
〃 — 7	1×2	160～170	275	350	275	9.62	N—73°—E	〃	E—20	百・後・I～II
〃 — 8	1×2	180～185	235～260	350～360	235～260	8.78	N—52°—W	〃	E—20～E—21	〃
〃 — 9	1×1	300～330	210	300～330	210	6.61	N—50°—W	〃	E—21	〃
〃 —10	1×2	260～280	200～210	260～280	230	6.21	N—58°—W	〃	〃	〃
〃 —11	1×1	300	260	300	260	7.80	N—57°—W	〃	F—18	百・後・II
〃 —12	1×2	175～190	329～355	374～395	329～355	14.00	N—37°—W	楕　円	E—21	〃
〃 —13	1×2	170～210	255	364	255	9.28	MN—47°—W	円・楕円	F—20	弥生時代後期
〃 —14	1×2	217～235	295	437	295	12.89	MN—27°—E	長楕円	〃	百・後・II
〃 —15	1×2	180	290	360	290	10.44	MN—34°—E	円	F—21	弥生時代後期
〃 —16	2×3	160～200	200～220	340～390	620	22.01	N—10°—E	〃	D—14～15 ・E—14～15	14世紀中～末
〃 —17	1×2	540～560	300	540～560	600	32.15	N—8°—E	〃	E—15	〃
〃 —18	3×4	—	—	640	1000	77.00	〃	〃	D—15～16 ・E—15～16	〃

表—24　丸田調査区柱列一覧表

番　号	区　名	柱穴本数	柱間(cm)	全長(cm)	方　向	柱穴掘方	時　期
柱列— 1	F—20	3	108	230	MN—54°—W	円・楕円	弥生時代後期
〃 — 2	F—21	3	265	640	MN—82°—W	不整円	百・後・III
〃 — 3	F—20	3	180～190	390	MN—27°—E	円	弥生時代後期
〃 — 4	F—21	4	140～155	445	MN—46°—W	〃	〃

表—25　丸田調査区井戸一覧表

(単位cm)

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時　期
10	D—17	—　×200	不　明	壺・鉢	百・後・II
11	F—18	130×130×173	円　形	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
12	〃	96×　80×126	長楕円形	壺・製塩土器	〃
13	〃	—　×40	不定円形	甕	〃
14	E—19	100×100×　65	円　形	甕・高杯・製塩土器	〃
15	E—20	98×　98×　54	〃	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
16	D—20	160×150×116	〃	壺・甕・鉢・高杯	〃
17	〃	128×128×122	〃	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	百・後・I
18	E—21	140×140×180	〃	壺・鉢・製塩土器	百・後・II
19	F—20	135×110×214	〃	壺・甕・高杯・製塩土器	〃
20	〃	144×144×183	〃	壺・甕・器台・製塩土器	〃
21	E—21	120×115×108	〃	壺・甕・鉢・高杯	〃

(単位cm)

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平　面　形	出　　土　　遺　　物	時　　期
22	F—21	100× 86×103	楕　円　形	甕・製塩土器	百・後・II
23	〃	100× 95× 78	〃	鉢・器台・製塩土器	〃
24	〃	130×120×155	円　　形	壺・高杯・製塩土器	〃
25	F—22	91×125×125	楕　円　形	製塩土器	〃
26	E—18	115× 85×145	長　円　形	壺	百・古・I
27	E—19	150×150× 70	円　　形	須恵器・土錘	6世紀後半
28	F—21	90× 75× 58	楕　円　形	甕	百・古・I
29	〃	170×157× 65	〃	甕	〃
30	E—16	103×103×160	円　　形	備前焼・椀・木簡・下駄・足駄	14世紀中～後半

表—26　丸田調査区土壙一覧表

(単位cm)

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平　面　形	出　　土　　遺　　物	時　　期
109	E—18	470×120×40	不定長楕円形	壺・甕・鉢・蓋・石器	百・前・II
110	F—18	115× 70×30	不整長円形	壺	〃
111	E—19	95× 48×19	長楕円形	壺	〃
112	F—19	140× 60×15	〃	壺・甕・鉢・石器	〃
113	D—17	—　×42	不　定　形	—	弥生時代前期
114	D—18	—×100×45	長楕円形	—	〃
115	F—18	50× 30×27	楕　円　形	—	〃
116	〃	75× 55×14	〃	—	〃
117	〃	350×120×80	不　定　形	—	〃
118	〃	—× 50×—	〃	—	〃
119	〃	95× 55×60	〃	—	〃
120	E—20	515×　—	〃	—	〃
121	E—17	—　×50	—	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	百・後・II
122	E—18	120× 70×12	長楕円形	甕・鉢・器台	〃
123	E—17	50× 30×20	楕　円　形	高杯	〃
124	D—18	83× 53×19	〃	壺・鉢・高杯・製塩土器	〃
125	〃	120× 76×52	〃	壺・甕・鉢・高杯	〃
126	E—18	150×180×25	不定円形	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
127	〃	150×180×70	〃	甕・高杯・製塩土器	〃
128	〃	86× 56×32	楕　円　形	壺	〃
129	〃	150×120× 6	〃	甕・鉢	〃
130	〃	110× 35×12	溝　　状	甕・高杯	〃
131	〃	80× 75×15	不　定　形	甕・高杯	〃
132	〃	—　×20	—	甕・鉢・高杯	〃
133	〃	—× 80×25	溝　　状	甕・鉢・高杯・製塩土器・鉄器	〃
134	〃	130× 60×50	〃	甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
135	E—19	—　×20	—	壺・甕・鉢・高杯・器台	〃
136	E—18	—　×10	—	甕・製塩土器	〃
137	F—19	—×130×45	楕　円　形	壺・甕・鉢・高杯	〃
138	E—19	75× 55×15	長楕円形	甕・高杯・製塩土器	〃

（単位cm）

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
139	E－19	105× 95×45	不定形	壺・甕・鉢・高杯	百・後・III
140	〃	150×－×20	〃	甕・鉢・高杯	百・後・II
141	F－19	－	－	壺・甕・鉢・高杯	百・後・III
142	F－18	127× 68×28	不定形	甕・鉢	百・後・II
143	〃	113× 66×39	長楕円形	甕・高杯	〃
144	〃	46× 40×21	楕円形	鉢・高杯	〃
145	F－19	83×－×40	〃	壺・甕・鉢	〃
146	F－18	67× 64×35	円形	壺・高杯	〃
147	〃	－× 55×21	長楕円形	甕・高杯	〃
148	F－19	－　×20	－	鉢・高杯	百・後・III
149	F－18	82× 61×22	不整楕円形	高杯	〃
150	E－20	86×－×13	楕円形	甕・鉢・高杯	百・後・II
151	〃	－× 80×42	不整楕円形	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
152	D－20	190× 92×24	瓢形	石錘	〃
153	〃	74× 46×22	不整円形	壺・鉢	〃
154	F－20	72× 30× 5	不整形	甕・高杯	〃
155	E－20	210× 70×14	長円形	壺・甕・鉢・高杯・鉄器	〃
156	〃	252× 80×20	〃	壺・甕・高杯	〃
157	F－20	240×－× 8	－		百・後・II～百・後・III
158	〃	240×240×16	不整形	壺・甕・鉢・高杯	百・後・II
159	〃	260×150×10	〃		〃
160	〃	290×95～140×28～50	楕円形	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
161	D－20	132× 73×18～20	長楕円形	製塩土器・砥石	〃
162	〃	160×160×10	円形	－	百・後・I～百・後・II
163	〃	170×150×28	〃	－	〃
164	〃	100× 90×40	不整円形	－	百・後・II
165	E－20	－　×20	－	－	〃
166	〃	115× 85×25	長円形	甕	〃
167	〃	199× 90×32	不整長円形	壺・鉢・高杯	〃
168	E－21	222× 80×25	長円形	壺・製塩土器	〃
169	D－20	145× 70×20	〃	－	百・後・I～百・後・II
170	D－21	145×140×40	円形	甕・鉢・高杯	百・後・II
171	D－20	95× 75×13	不整円形	－	〃
172	E－21	160×23～50×2～12	溝状	壺・甕・高杯・製塩土器	〃
173	〃	－×7～16	〃	製塩土器	〃
174	〃	90× 70×12	不整長円形	－	百・後・IV～百・古・I
175	〃	84× 61×27	隅丸方形	壺	百・後・II～百・後・III
176	E－20	217×135× 5	不整形	壺	百・後・II
177	〃	210×120× 8	長円形	壺・鉢・製塩土器	〃
178	E－21	146×115×21	不整円形	壺・高杯・製塩土器	〃
179	E－20	－　×14	隅丸方形	－	〃
180	〃	80× 37× 8	不整長円形	壺・甕・高杯・製塩土器	〃
181	D－21	114× 70×48	〃	甕	〃

（単位cm）

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平　面　形	出　土　遺　物	時　　期
182	E—21	100× 66×10	長　円　形	甕・高杯	百・後・II
183	〃	132×110× 9	楕　円　形	—	〃
184	〃	— ×110×38	—	甕・高杯	〃
185	〃	107× 99×63	円　　形	壺・甕・高杯	〃
186	〃	215× 61×26	不整楕円形	鉢	〃
187	F—21	110× 90×18	楕　円　形	壺・製塩土器	〃
188	E—21	104× 77×35	隅丸方形	高杯	〃
189	F—21	80× 73×22	楕　円　形	壺・甕・鉢・高杯	〃
190	〃	110× 90×18	〃	壺・甕・鉢・製塩土器	〃
191	〃	— ×7～30	隅丸方形	壺・鉢	〃
192	〃	70× 70×55	円　　形	壺・甕・高杯	〃
193	〃	200×170×17	不定円形	壺	〃
194	〃	— ×7	—	高杯	〃
195	〃	75× 68×65	円　　形	壺・甕・製塩土器	〃
196	D—17	63×35× 6	長楕円形	—	弥生時代後期
197	D—18	190× 90×25	楕　円　形	—	〃
198	〃	— × 70×—	—	—	〃
199	E—18	80×— × 6	楕　円　形	—	〃
200	〃	90× 60×10	長楕円形	—	〃
201	〃	135× 70×10	不　定　形	—	〃
202	〃	125× 75×25	長楕円形	—	〃
203	〃	75× 45×—	〃	—	百・後・II
204	〃	100× 60×—	〃	—	〃
205	〃	175×155×10	楕　円　形	—	弥生時代後期
206	〃	— ×65×55	—	—	〃
207	〃	166× 55×17	長楕円形	—	〃
208	D—20	—	不　定　形	—	〃
209	〃	70× 50×10	長楕円形	—	〃
210	E—20	235×160×10	〃	—	〃
211	D—20	60× 68×10	円　　形	—	〃
212	E—21	— × 7	—	—	〃
213	D—19	— × 7	—	—	〃
214	D—21	— ×100×20	溝　　状	—	〃
215	〃	50× 40×—	楕　円　形	—	〃
216	D—22	50× 35× 5	〃	—	〃
217	E—21	152× 53×50	〃	—	〃
218	〃	100× 70×—	—	—	百・後・II
219	〃	102× 53×27	楕　円　形	—	〃
220	〃	160×137×23	不整円形	—	弥生時代後期
221	〃	60× 58×30	隅丸方形	—	〃
222	〃	160×(57)×40	楕　円　形	—	〃
223	〃	75× 70×55	円　　形	—	〃
224	〃	105× 77×43	不　整　形	—	〃

（単位cm）

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平　面　形	出　土　遺　物	時　　期
225	E－21	76× 73×32	円　　形	—	弥生時代後期
226	〃	97× 95×23	隅丸方形	—	百・後・II
227	〃	147×130×32	隅丸三角形	—	〃
228	〃	98× 95×10	隅丸方形	—	〃
229	〃	77× 75×28	不整円形	—	〃
230	〃	90× 73×25	楕　円　形	—	〃
231	〃	100× 79×43	〃	—	〃
232	〃	190×190×13	不　整　形	—	〃
233	〃	200×190×—	不整円形	—	弥生時代後期
234	〃	75× 55×30	楕　円　形	—	〃
235	〃	130× 65× 9	不整楕円形	—	〃
236	〃	330×264×10	不　整　形	—	〃
237	〃	93× 40×20	不整楕円形	—	〃
238	F－21	—　× 7	隅丸長方形	—	百・後・I
239	〃	118× 60×16	長楕円形	—	〃
240	F－22	86× 86×31	円　　形	—	弥生時代後期
241	〃	85× 85×29	〃	—	〃
242	F－21	112× 81×67	楕　円　形	—	百・後・I
243	〃	135×－×10	長楕円形	—	〃
244	F－22	110× 85×12	楕　円　形	—	〃
245	F－21	60× 60×26	円　　形	—	弥生時代後期
246	〃	99× 90×17	楕　円　形	—	百・後・II
247	〃	49× 45×20	円　　形	—	百・後・III
248	〃	73× 69×13	楕　円　形	—	百・後・II
249	F－22	63× 52×41	〃	—	〃
250	F－20	110×－×23	円　　形	—	〃
251	F－21	155×－×16	—	—	百・後・III
252	〃	—　×43	—	—	百・後・I
253	〃	—　×32	—	—	百・後・II
254	F－19	295×－×20	長楕円形	—	百・古・I
255	D－20	70× 60×63	円　　形	—	6世紀後半
256	F－21	106×92×26.5	楕　円　形	—	百・古・I
257	〃	80× 80×27	円　　形	—	〃
258	〃	100×－× 8	〃	—	〃
259	〃	—　×15	—	—	〃
260	〃	137×－×10	長楕円形	—	〃

表—27　丸田調査区土壙墓一覧表

（単位cm）

番　号	地　区	規　模(cm)	人　骨	出　土　遺　物	時　　期
土壙墓— 1	E－16	(110)×(70)×—	遺存	土師質小皿	14世紀中～末頃

表—28　丸田調査区溝一覧表

(単位cm)

番号	区　名	幅	深さ	断面形	出土遺物	時期
31	D—17～F—18	120～160	20	レンズ状	壺・甕・石器	百・前・II
32	D—17～E—17	30～60	10	〃	—	〃
33	D—17～E—18	70	20	〃	甕	〃
34	D—17～F—18	120～150	20	〃	壺・石器	〃
35	D—18～F—18	140～180	15～20	〃	石器	〃
36	E—18～E—19	50	25	逆台形	—	〃
37	E—17～F—18	80～180	20～40	皿状	壺・甕・鉢・高杯	百・後・II
38	D—17～E—17	70～80	90～100	逆台形～レンズ状	壺・甕・鉢・高杯・器台	〃
39	〃	70～110	30	逆台形	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	百・後・IV
40	D—17～F—18	140		U字形	壺・甕・鉢・高杯・砥石	〃
41	〃	180～250	130	U字形・V字形	壺・甕・鉢・高杯・器台	〃
42	〃	220～250	82～86	U字形	壺・甕・鉢・敲石	〃
43	E—17～F—18	140～180	93～113	V字形	高杯・製塩土器	〃
44	D—18～F—18	140～190	80～100	〃	壺・甕・鉢・高杯	百・後・II
45	D—19～E—19	50～70	15～20	皿状	〃	〃
46	E—20	30～130	10～25	レンズ状	壺	百・後・III
47	〃	200～280	6～9	〃	壺・甕・製塩土器・鉄器	百・後・II
48	E—21	70～100	35～60	U字形・レンズ状	壺・甕・高杯・製塩土器・石錘	〃
49	E—20～E—21	—	—	レンズ状	壺・甕・高杯・製塩土器・銅鐸形土製品	〃
50	E—21	—	—	〃	甕・高杯・鉢	〃
51	〃	50～60	10～16	〃	壺・甕・高杯・製塩土器	〃
52	F—21	50	14	〃	鉢・高杯・甕	〃
53	〃	35	13	V字形	甕・高杯	〃
54	〃	25	12	逆台形	甕	〃
55	D—22～F—22	110	55～64	〃	弥生式土器（弥生時代前期）底部片	—
56	F—21	60～90	3～10	皿状	高杯	百・後・II
57	D—22～F—22	50	5	レンズ状	甕・高杯	〃
58	〃	60	10	〃	—	〃
59	〃	60	30	逆台形	壺・甕・鉢・高杯・製塩土器	〃
60	E—22	50	33	V字形	〃	〃
61	〃	50～80	30	逆台形	壺・甕・鉢	〃
62	E—18	35～50	6	U字形	—	—
63	〃	15～22	17	〃	甕	弥生時代後期
64	〃	10～20	2～3	レンズ状	—	〃
65	F—19	25～50	20～30	U字形	—	〃
66	〃	120～150	9～10	レンズ状	壺・甕・鉢・高杯	百・後・II
67	D—20	20	—	—	—	弥生時代後期
68	D—21～E—23	25	5～6	—	—	〃
69	E—22	—	—	—	—	—
70	E—22～E—23	—	—	—	—	—
71	D—14	—	15	逆台形	須恵器片	6世紀前半
72	D—16～F—17	60	10	皿状	須恵器（杯蓋）・白玉	〃

（単位cm）

番号	区　名	幅	深さ	断面形	出土遺物	時期
73	D－16～F－17	600	－	逆台形	土師器・須恵器・木器・玉類	百・古・Ⅲ～7世紀初
74	D－19～F－19	100～200	60	〃	土師器・須恵器	6世紀前半～7世紀初
75	E－18～E－19	－	54	〃	〃	～6世紀前半
76	〃	－	－	〃	土師器（壺・甕・鉢）	百・古・Ⅰ
77	F－20	60～125	12～26	レンズ状	須恵器・土錘	6世紀前半
78	D－21～F－21	60～70	10～20	〃	須恵器・土師器・土錘	6世紀後半
79	〃	60～125	12～26	〃	須恵器・土師器	6世紀前半
80	D－22～F－22	75～90	14～41	〃	〃	6世紀初頭
81	〃	50～70	10～13	〃	須恵器	6世紀前半
82	F－21	25～35	7～9	〃	土師器	〃
83	〃	45	12～14	〃	須恵器	〃
84	〃	10～20	4～7	〃	〃	〃
85	〃	－	2	〃	〃	〃
86	D－25～F－25	100	25～30	逆台形	－	6世紀
87	D－19	－	－	皿状	土師器・須恵器・土錘・鉄鏃	奈良時代
88	D－14	20～50	～16	レンズ状	－	14世紀後半
89	D－18～E－19	160～250	－	逆台形	須恵器・土師質椀・土師質小皿	〃
90	D－19～F－19	250	80	レンズ状	備前焼・染付・土錘	15世紀
91	D－22～F－20	100	45	逆台形	備前焼擂鉢・磁器	近世
92	E－20	320	110	〃	磁器	〃
93	D－19～F－20	230	50	－	備前焼擂鉢・磁器・唐津	〃
94	E－23	110	27	皿状	－	弥生時代後期
95	E－24	175	9	〃	－	〃
96	D－14～E－15	170	150	逆台形	－	近・現代
97	D－17～F－15	150	90	〃	－	〃
98	F－16	150～180	－	〃	－	〃
99	〃	150～200	－	〃	－	〃
100	F－18	100～120	－	〃	－	〃
101	D－20～E－19	110～150	120	〃	－	〃
102	E－19	45	11	〃	－	〃
103	〃	50	10	〃	－	〃
104	D－21～E－20	70	37	〃	－	〃
105	E－20～E－21	100	53	〃	－	〃
106	E－21～E－23	56	22	皿状	－	〃
107	D－23～F－20	115	42	椀状	－	〃
108	E－23	260	75	逆台形	－	〃
109	D－25～E－24	100～200	70	〃	－	〃
110	F－23・24	120		〃	－	〃
111	〃	100		〃	－	〃

表—29　丸田調査区・遺構番号対照表

遺構番号	地区	図	時期	旧	遺構番号	地区	図	時期	旧
竪穴式住居—28	E—23	266	百・前・Ⅲ	No59	井戸—25	F—22	410	百・後・Ⅱ	SE02
—29	E—18	305	百・後・Ⅱ	SH09	—26	E—18	597	百・古・Ⅰ	SE02
—30	〃	315・316	〃	SH05	—27	E—19	599	6世紀後半	井戸-2
—31	F—19	322	〃	住居-1	—28	F—21	600	百・古・Ⅰ	SE01
—32	E—20	323・325	〃	No14	—29	〃	601	〃	SE02
—33	F—21	326	〃	—	—30	E—16	656	14世紀中～後半	SE01
—34	E—18	328	百・後・Ⅲ	SH06	土壙—109	E—18	267	百・前・Ⅱ	SX03
—35	〃	331	〃	SH07	—110	F—18	269	〃	SX10
—36	E—20	336	百・後・Ⅳ	SH01	—111	E—19	270	〃	SK13
—37	D—20	340	百・後・Ⅲ	SH02	—112	F—19	271	〃	前期土壙
—38	E—21	343・345	百・後・Ⅲ 百・後・Ⅱ	SH03	—113	D—17	—	弥生時代前期	SX02
—39	〃	346	百・後・Ⅲ	SH04	—114	D—18	411	〃	SX04
—40	E—18	590・591	百・古・Ⅰ	SH03	—115	F—18	414	〃	SX05
—41	D—18	593	〃	SH02	—116	〃	415	〃	SX06
—42	〃	594	〃	SH01	—117	〃	416	〃	SX07
—43	F—18	595・596	6世紀前半	SH04	—118	〃	417	〃	SX08
建物—3	E—18	351	百・後・Ⅱ	SB04	—119	〃	419	〃	SX09
—4	〃	352	〃	SB06	—120	E—20	423	〃	SX11
—5	F—18	353	〃	SB09	—121	E—17	424	百・後・Ⅱ	土器だまり
—6	〃	354	〃	SB10	—122	E—18	425	〃	SK04
—7	E—20	355	百・後・Ⅰ～Ⅱ	—	—123	E—17	426	〃	SK51
—8	E—20～E—21	356	〃	—	—124	D—18	426	〃	SK08
—9	E—21	357	〃	—	—125	〃	428	〃	SK09
—10	〃	358	〃	—	—126	E—18	428	〃	SK24
—11	F—18	359	百・後・Ⅱ	SB11	—127	〃	432	〃	SK22
—12	E—21	360	〃	No84	—128	〃	434	〃	SK52
—13	F—20	361	弥生時代後期	SB02	—129	〃	436	〃	SK25
—14	〃	362	百・後・Ⅱ	SB01	—130	〃	437	〃	SK32
—15	F—21	363	弥生時代後期	SB03	—131	〃	439	〃	SK42
柱列—1	F—20	364	〃	SA02	—132	〃	440	〃	SK48
—2	F—21	365	百・後・Ⅲ	SA05	—133	〃	441	〃	SK46
—3	F—20	366	弥生時代後期	SA04	—134	〃	443	〃	SK29
—4	F—21	367	〃	SA01	—135	E—19	444	〃	SK02
井戸—10	D—17	368	百・後・Ⅱ	SE03	—136	E—18	—	〃	SK44
—11	F—18	369	〃	SK50	—137	F—19	—	〃	SK27
—12	〃	373	〃	SE04	—138	E—19	448	〃	SK01
—13	〃	374	〃	SE06	—139	〃	449	百・後・Ⅲ	SK11
—14	E—19	375	〃	井戸-1	—140	〃	450	百・後・Ⅱ	SK12
—15	E—20	376	〃	SE01	—141	F—19	376	百・後・Ⅲ	SK16
—16	D—20	379	〃	SE02	—142	F—18	379	百・後・Ⅱ	SK41
—17	〃	393	百・後・Ⅰ	SE03	—143	〃	393	〃	SK45
—18	E—21	399	百・後・Ⅱ	SE04	—144	〃	399	〃	SB07-P—1
—19	F—20	400	〃	SE05	—145	F—19	400	〃	SK38
—20	〃	403	〃	SE06	—146	F—18	403	〃	SK34
—21	E—21	404	〃	No18	—147	〃	450	〃	SK35
—22	F—21	406	〃	SE04	—148	F—19	444・451	百・後・Ⅲ	SK37
—23	〃	407	〃	SE05	—149	F—18	452	百・後・Ⅲ	SK33
—24	〃	409	〃	SE03	—150	E—20	453	百・後・Ⅱ	SK01

遺構番号	地区	図	時期	旧	遺構番号	地区	図	時期	旧
土壙－151	E－20	454	百・後・II	SK40	土壙－200	E－18	－	弥生時代後期	SK15
－152	D－20	457	〃	SK02	－201		－	〃	SK18
－153	〃	458	〃	SK03	－202		－	〃	SK19
－154	F－20	459	〃	SK04	－203	E－18	－	百・後・II	SK21
－155	E－20	460	〃	SK05	－204	〃	－	〃	SK23
－156	〃	461	〃	SK06	－205	〃	－	弥生時代後期	SK26
－157	F－20	462	百・後・IIから百・後・III	SK07	－206	〃	－	〃	SK43
－158	E－20	463	百・後・II	SK08	－207	〃	－	〃	SK47
－159	F－20	466	〃	SK09	－208	D－20	－	〃	SX01
－160	〃	466	〃	SK10	－209	〃	－	〃	SK18
－161	D－20	469	〃	SK11	－210	E－20	－	〃	SK24
－162	〃	470	百・後・Iから百・後・II	SK27	－211	D－20	－	〃	－
－163	〃	471	〃	SK42	－212	E－21	－	〃	SK29
－164	〃	472	百・後・II	SK46	－213	D－19	－	〃	SK45
－165	E－20	473	〃	SK14	－214	D－21	－	〃	SK53
－166	〃	474	〃	SK15	－215	〃	－	〃	SK54
－167	〃	475	〃	SK20	－216	D－22	－	〃	SK57
－168	E－21	47	〃	SK17	－217	E－21	－	〃	No.17
－169	D－20		百・後・Iから百・後・II	SK23	－218	〃	－	百・後・II	No.23
－170	D－21	479	百・後・II	SK60	－219	〃	－	〃	No.24
－171	D－20		〃	SK38	－220	〃	－	弥生時代後期	No.26
－172	E－21	480	〃	SK37	－221	〃	－	〃	No.27
－173	〃		〃	SK36	－222	〃	－	〃	No.28
－174	〃		百・後・IIから百・古・I	SK32	－223	〃	－	〃	No.29
－175	〃		百・後・IIから百・後・III	SK28	－224	〃	－	〃	No.33
－176	E－20	484	百・後・II	SK41	－225	〃	－	〃	No.49
－177	〃	485	〃	SK30	－226	〃	－	百・後・II	No.57
－178	E－21	486	〃	SK25	－227	〃	－	〃	No.68
－179	E－20		〃	SK48	－228	〃	－	〃	No.69
－180	〃		〃	SK39	－229	〃	－	〃	No.70
－181	D－21	489	〃	SK55	－230	〃	－	〃	No.75
－182	E－21		〃	SK56	－231	〃	－	〃	No.88
－183	〃		〃	SK52	－232	〃	－	〃	No.85
－184	〃	492	〃	No.76	－233	〃	－	弥生時代後期	No.86
－185	〃	493	〃	No.20	－234	〃	－	〃	No.98
－186	〃	494	〃	No.21	－235	〃	－	〃	No.89
－187	F－21	495	〃	No.23	－236	〃	－	〃	No.90
－188	E－21	496	〃	No.25	－237	F－21	－	〃	No.92
－189	〃	497	〃	No.93	－238	〃	－	百・後・I	SK07
－190	F－21	498	〃	SK05	－239	F－22	－	〃	SK08
－191	〃	499	〃	SK06	－240	〃	－	弥生時代後期	SK09
－192	〃	500	〃	SK13	－241	F－21	－	〃	SK10
－193	〃	501	〃	SK17	－242	〃	－	百・後・I	SK12
－194	〃	502	〃	SK20	－243	〃	－	〃	SK14
－195	〃	503	〃	SK11	－244	F－22	－	〃	SK15
－196	D－17	－	弥生時代後期	SK05	－245	F－21	－	弥生時代後期	SK16
－197	D－18	－	〃	SK06	－246	〃	－	百・後・II	SK18
－198	D－18	－	〃	SK10	－247	〃	－	百・後・III	SK19
－199	E－18	－	〃	SK14	－248	〃	－	百・後・II	SK22

百間川原尾島遺跡

遺構番号	地区	図	時期	旧	遺構番号	地区	図	時期	旧
土壙－249	F－22	－	百・後・II	SK23	溝 － 68	D-21～E-23	－	弥生時代後期	SD16 No.43
－250	F－20	－	〃	SK24	－ 69	E－22		－	SD12
－251	F－21	－	百・後・III	SK25	－ 70	E-22～E-23		－	SD09
－252	〃	－	百・後・I	SK26	－ 71	D－14	604	6世紀前半	SX01
－253	〃	－	百・後・II	SK27	－ 72	D-16～F－17	605	〃	溝－1
－254	F－19	602	百・古・I	SK39	－ 73	〃	606・607	百・古・III～7世紀	大溝
－255	D－20	603	6世紀後半	SK19	－ 74	D-19～F-19	635・636	6世紀前半～7世紀	SD01
－256	E－21	－	百・古・I	No.37	－ 75	E-18～E-19	－	～6世紀前半	SD02
－257	〃	－	〃	SK01	－ 76	〃	－	百・古・I	SD03
－258	〃	－	〃	SK02	－ 77	F－20	638	6世紀前半	SD11
－259	〃	－	〃	SK03	－ 78	D-21～F-21	639	6世紀後半	SD05 No.13 SD08
－260	〃	－	〃	SK04	－ 79	〃	640	6世紀前半	SD04 SD12 SD05
溝 － 31	D-17～F-18	295	百・前・II	SD18	－ 80	D-22～F-22	641	6世紀初頭	SD03 SD02
－ 32	D-17～E-17	296	〃	SD21	－ 81	〃	642	6世紀前半	SD02 SD01
－ 33	D-17～E-18	297	〃	SD20	－ 82	F－21	643	〃	SD10
－ 34	D-17～F-18	298	〃	SD22	－ 83	〃	643	〃	SD09
－ 35	D-18～F-18	299	〃	SD23	－ 84	〃	643	〃	SD07
－ 36	E-18～E-19	300	〃	－	－ 85	〃	643	〃	SD06
－ 37	E-17～F-18	505	百・後・II	SD34	－ 86	D-25～F-25	644	6世紀	SD01 溝－1
－ 38	D-17～E-17	506	〃	SD12	－ 87	D－19	648	奈良時代	大溝-3
－ 39	〃	507	百・後・IV	SD10	－ 88	D－14	－	14世紀後半	－
－ 40	D-17～F-18	507	〃	SD11	－ 89	D-18～E-19	659	〃	大溝-2
－ 41	〃	507・512 513	〃	SD09・09E・W	－ 90	D-19～F-19	661	15世紀	溝－1
－ 42	〃	512	〃	SD08 北半	－ 91	D-22～F-20	665	近世	No.5
－ 43	E-17～F-18	512・523	〃	SD08 南半	－ 92	E－20	665	〃	No.2
－ 44	D-18～F-18	525	百・後・II	SD05	－ 93	D-19～F-20	－	〃	No.8
－ 45	D-19～E-19	527	〃	溝状遺構	－ 94	E－23	－	弥生時代後期	－
－ 46	E－20	529	百・後・III	SX02	－ 95	E－24	－	〃	No.52
－.47	〃	530	百・後・II	SX04	－ 96	D-14～E-15	－	近・現代	－
－ 48	E－21	531	〃	SK31	－ 97	D-17～F-15	－	〃	－
－ 49	E-20～E-21	533	〃	No.77	－ 98	F－16	－	〃	－
－ 50	E－21	535	〃	No.45	－ 99	〃	－	〃	－
－ 51	〃	536	〃	No.32	－100	F－18	－	〃	No.51
－ 52	F－21	537	〃	SD17	－101	D-20～E-19	－	〃	No.9
－ 53	〃	537	〃	SD16	－102	E－19	－	〃	No.10
－ 54	〃	537	〃	SD15	－103	E－19	－	〃	No.9
－ 55	D-22～F-22	538	－	SD17 No.50 SD04	－104	D-21～E-20	－	〃	No.7
－ 56	F－21	－	百・後・II	SD22	－105	E-21～E-20	－	〃	No.6
－ 57	D-22～F-22	540	〃	SD18 No.58 SD12	－106	E-23～E-21	－	〃	No.4
－ 58	〃	540	〃	SD15 No.44 SD03	－107	D-23～F-20	－	〃	No.3
－ 59	〃	540	〃	SD15 No.44 SD03	－108	E－23	－	〃	No.1
－ 60	E－22	550・551	〃	SD11	－109	D-25～E-49	－	〃	－
－ 61	〃	550	〃	SD10	－110	F－24～23	－	〃	－
－ 62	E－18	－	－		－111	〃	－	〃	－
－ 63	〃	－	弥生時代後期	SD33					
－ 64	〃	－	〃	SD28					
－ 65	F－19	－	〃	SD27					
－ 66	〃	－	百・後・II	－					
－ 67	D－20	－	弥生時代後期	SD06					

表—30　丸田調査区玉類一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
305	33	勾玉	E—18	竪穴式住居—29	蛇紋岩	14.45	5.00	4.20	0.84	
〃	34	〃	〃	〃	蛇灰岩	16.90	5.00	4.00	1.10	
〃	35	小玉	〃	〃	ガラス	3.00	5.00	—	0.06	
324	36	〃	E—20	竪穴式住居—32	〃	3.70	4.05	—	0.06	
〃	37	〃	〃	〃	〃	2.00	3.80	—	0.04	
〃	38	〃	〃	〃	〃	2.50	3.80	—	0.02	
〃	39	〃	〃	〃	〃	2.50	2.89	—	0.09	
〃	40	〃	〃	〃	〃	2.35	3.45	—	0.04	
328	41	〃	E—18	竪穴式住居—34	〃	—	4.90	3.15	0.06	
346	42	管玉	E—21	竪穴式住居—39		9.00	6.00	—	0.40	
〃	43	小玉	〃	〃	ガラス	—	3.75	2.50	0.02	
〃	44	〃	〃	〃	〃	—	4.15	2.35	0.02	
534	45	〃	E—20	溝—49	〃	2.45	4.75	—	0.05	
568	46	〃	E—22	「島状高まり」遺構—1b 土器溜り	〃	3.90	4.05	—	0.07	
595	47	臼玉	E—19	竪穴式住居—43	滑石	—	6.20	3.75	0.17	
605	48	〃	〃	溝—72	〃	—	5.00	3.15	0.10	
609	49	管玉	D—16～E—19	溝—73	碧玉	28.60	—	10.10	5.84	
〃	50	〃	〃	〃	〃	25.00	—	8.50	3.50	
〃	51	〃	〃	〃	〃	27.00	—	8.00	2.87	
〃	52	勾玉	〃	〃	メノウ	31.00	11.50	9.50	6.00	
〃	53	管玉	〃	〃	蛇紋岩	23.00	8.00	—	2.46	
〃	54	〃	〃	〃	〃	20.00	8.00	—	2.12	
〃	55	〃	〃	〃	〃	19.00	9.00	—	2.43	
〃	56	〃	〃	〃	〃	25.00	9.00	—	3.10	
〃	57	〃	〃	〃	〃	27.00	9.00	—	3.87	
〃	58	〃	〃	〃	〃	21.00	8.00	—	2.46	
〃	59	〃	〃	〃	〃	22.00	8.00	—	2.32	
〃	60	〃	〃	〃		16.00	6.80	—	1.03	
〃	61		〃	〃		5.40	6.10	—	0.20	
〃	62		〃	〃		6.00	6.00	—	—	
〃	63	土玉	〃	〃	土製	7.00	8.00	—	0.44	
〃	64	〃	〃	〃	〃	6.00	8.50	—	0.42	
〃	65	〃	〃	〃	〃	8.00	8.00	—	0.47	
〃	66	〃	〃	〃	〃	20.50	12.00	—	2.04	
〃	67	〃	〃	〃	〃	20.00	13.00	—	2.54	
〃	68	臼玉	〃	〃	滑石	6.00	6.50	—	0.27	
〃	69	〃	〃	〃	〃	5.00	5.00	—	0.13	
〃	70	〃	〃	〃	〃	3.00	4.50	—	0.07	
〃	71	〃	〃	〃		2.00	4.50	—	0.02	
〃	72	〃	〃	〃	方解石	3.00	—	—	0.05	
635	73	有孔円板	D—19～F—19	溝—74	滑石	17.30	17.30	4.00	2.20	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
635	74	臼玉	D-19~F-19	溝—74	滑石	—	0.80	—	0.10	
〃	75	〃	〃	〃	〃	3.00	5.00	—	0.10	
〃	76	〃	〃	〃	〃	3.00	6.20	—	0.13	
647	77	双孔円板	F—19	包含層・(灰褐色土)	〃	24.00	23.00	3.00	2.10	
		小玉	E—20	竪穴式住居—32	ガラス	2.15	3.75	—	0.01	
		〃	〃	〃	〃	4.00	5.10	—	0.05	
		〃	〃	〃	〃	4.50	3.40	—	0.04	
		〃	E—22・23	「島状高まり」遺構—1	〃	3.80	5.05	—	0.04	
		管玉	F—21	溝—74	滑石	8.45	5.00	—	—	

表—31　丸田調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
305	119	不明	E—18	竪穴式住居—29		(4.70)	3.50	3.50	57.07	
328	120	〃	〃	竪穴式住居—34		2.23	0.83	0.30	0.40	
〃	121	〃	〃	〃		1.45	0.80	0.30	0.22	
330	122	紡錘車	〃	〃		6.00	5.20	1.00	23.93	
534	123	銅鐸形土製品	E—20~E—21	溝—49		3.86	3.74	2.64	27.40	
600	124	土錘	F—21	井戸—28		(3.40)	1.70	—	77.40	
624	125	〃	D—16~F—17	溝—73		8.00	2.10	—	40.26	
〃	126	〃	〃	〃		7.40	2.20	—	40.02	
〃	127	〃	〃	〃		6.40	2.10	—	30.27	
〃	128	〃	〃	〃		(6.90)	2.30	—	38.32	
〃	129	〃	〃	〃		6.60	2.70	—	43.07	
〃	130	〃	〃	〃		7.00	2.50	—	47.65	
〃	131	〃	〃	〃		6.80	3.20	—	32.74	
〃	132	〃	〃	〃		6.20	2.20	—	26.02	
〃	133	円板	〃	〃		5.00	4.00	1.20	19.82	
〃	134	〃	〃	〃		4.30	3.30	0.70	7.75	
638	135	土錘	F—20	溝—77		6.02	1.50	—		
〃	136	〃	〃	〃		4.20	1.00	—		
639	137	〃	D—21~F—21	溝—78		4.20	1.05	—		
647	138	〃	F—17	古墳時代包含層		8.00	2.80	—	51.69	
〃	139	〃	〃	〃		9.60	3.30	—	91.54	
〃	140	〃	E—19	〃		6.40	2.00	—	23.83	
〃	141	〃	〃	〃		5.80	1.40	—	11.12	
〃	142	動物形土製品	F—21	〃		7.60	3.60	3.20	—	
649	143	土錘	D—19	溝—87		4.90	1.00	—	5.44	
657	144	〃	E—16	井戸—30		(2.40)	(1.10)	—	2.71	
660	145	〃	D—18~E—19	溝—89		(0.47)	0.12	—	7.36	
661	146	〃	D—19~F—19	溝—90		4.50	1.10	—	4.33	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
661	147	土錘	D—19～F—19	溝—90		(3.90)	1.20	—	4.10	
663	148	〃	F—14	中世包含層		4.40	1.30	—	6.82	
〃	149	〃	E—19	〃		4.30	1.10	—	3.90	
〃	150	〃	〃	〃		4.20	1.20	—	5.70	
〃	151	〃	〃	〃		4.50	0.90	—	2.70	
〃	152	〃	〃	〃		4.00	0.90	—	2.93	
〃	153	〃	〃	〃		4.10	1.00	—	3.66	
663	154	〃	〃	〃		(3.80)	1.10	—	3.40	
〃	155	〃	F—15	〃		4.50	1.40	—	9.67	
〃	156	〃	E—19	〃		3.90	1.10	—	5.60	
〃	157	〃	F—17	〃		(3.80)	1.30	—	6.77	
〃	158	〃	〃	〃		(2.60)	1.10	—	2.71	
〃	159	〃	E—19	〃		2.60	0.80	—	1.94	
〃	160	〃	〃	〃		(3.40)	1.50	—	7.35	
〃	161	円板	E—23	〃		3.40	—	1.10	16.18	
〃	162	〃	F—15	〃		2.90	—	1.70	17.59	
667	163	土錘	E—21	〃		4.45	1.35	—	7.80	
〃	164	〃	E—19	〃		4.77	1.00	—	3.50	
		〃	〃	〃		(3.90)	0.90	—	3.02	
		〃	〃	〃		(2.50)	1.30	—	3.81	
		〃	〃	〃		(2.50)	0.70	—	1.12	
		〃	〃	〃		2.30	3.30	—	2.30	
		〃	E—21	〃		5.50	1.46	—	8.10	
		〃	E—19	〃		4.60	1.33	—		
		〃	E—20	〃		5.26	1.98	—		
		〃	〃	〃		4.10	1.01	—		
		把手？	E—18	〃		4.60	1.20	1.00	5.74	
		不明	〃	〃		(4.50)	1.50	1.40	11.32	
		紡錘車	F—22	〃		—	5.315	5.70		

表—32　丸田調査区石器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
264	86	石鏃	E—23	包含層	サヌカイト	190.0	58.4	18.7	282.00	
266	87	石鏃	〃	竪穴式住居—28	〃	25.5	(17.0)	3.0	0.90	
268	88	〃	E—18	土壙—109	〃	(21.0)	16.0	2.1	0.74	
〃	89	〃	〃	〃	〃	26.0	20.0	5.5	2.08	
〃	90	〃	〃	〃	〃	(11.0)	20.0	3.0	0.55	
〃	91	〃	〃	〃	〃	20.0	14.0	2.0	0.50	
〃	92	〃	〃	〃	〃	19.0	14.0	3.0	0.64	
〃	93	〃	〃	〃	〃	21.0	16.0	3.0	0.91	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
268	94	石鏃	E−18	土壙−109	サヌカイト	(27.0)	10.0	5.5	1.70	
〃	95	石錐	〃	〃	〃	49.0	28.0	6.0	5.36	
〃	96	石庖丁	〃	〃	〃	(29.0)	39.0	12.0	12.43	
〃	97	不明	〃	〃	〃	(16.0)	27.0	16.0	3.30	
〃	98	〃	〃	〃	〃	18.0	15.0	6.0	2.32	
271	99	石錐	F−19	土壙−112	〃	23.0	21.0	4.0	1.00	
〃	100	スクレイパー	〃	〃	〃	30.0	23.0	6.0	6.07	
〃	101	〃	〃	〃	〃	26.0	26.0	6.0	3.30	
〃	102	〃	〃	〃	〃	25.0	28.0	6.0	5.50	
286	103	〃	D−16～F−17	河道	〃	22.0	33.0	6.0		
〃	104	打製石庖丁	〃	〃	〃	54.0	34.0	10.0		
〃	105	〃	〃	〃	〃	60.0	42.0	9.0	23.90	
〃	106	スクレイパー	〃	〃	〃	74.0	45.0	11.0	37.90	
〃	107	〃	〃	〃	〃	90.0	40.0	11.0	34.90	
〃	108	〃	〃	〃	〃	79.0	58.0	12.0	50.83	
〃	109	〃	〃	〃	〃	86.5	48.5	10.0	54.05	
287	110	磨製石庖丁	〃	〃		(52.0)	52.0	7.0		
〃	111	石鏃	〃	〃		79.0	63.0	12.0	100.02	
〃	112	砥石	〃	〃		62.0	23.0	23.0		
〃	113	敲石	〃	〃	流紋岩	114.0	46.0	23.5	203.73	
〃	114	凹石	〃	〃	花崗岩	93.0	—	53.0	710.00	
〃	115	石斧？	〃	〃	安山岩	66.0	30.0	30.0		
288	116	砥石	〃	〃	砂岩	200.0	140.0	90.0		
295	117	石鏃	D−17～F−18	溝−31	サヌカイト	20.3	(16.0)	3.0	0.73	
〃	118	〃	〃	〃	〃	19.0	15.0	3.2	0.84	
〃	119	磨製石庖丁	〃	〃	砂岩	(42.0)	(21.0)	5.5	6.48	
298	120	石錐	〃	溝−34	サヌカイト	61.0	13.0	6.5	5.44	
299	121	打製石庖丁	D−18～F−18	溝−35	〃	(57.0)	41.0	7.0	18.23	
301	122	石鏃		包含層	〃	22.0	17.0	3.5	0.84	
〃	123	〃		〃	〃	34.0	17.0	3.5	1.99	
〃	124	磨製石庖丁		〃	結晶片岩	(53.0)	46.0	9.0	26.50	
314	125	敲石	E−18	竪穴式住居−29	半花崗岩	250.0	67.0	49.0	1,259.00	
〃	126	石錘	〃	〃	閃緑岩	53.0	44.0	3.1	129.29	
〃	127	敲石	〃	〃	安山岩	142.0	68.0	57.0	676.00	
〃	128	石錘	〃	〃	花崗岩	71.0	64.0	51.0	297.43	
324	129	砥石	E−20	竪穴式住居−32	細粒花崗岩	196.0	81.5	58.0	1600.00	
〃	130	スクレイパー	〃	〃	サヌカイト	66.5	33.0	11.0	37.10	
〃	131	〃	〃	〃	〃	(47.8)	(24.6)	11.3	8.80	
〃	132	石鏃	〃	〃	〃	(23.6)	(12.9)	2.3	0.70	
〃	133	〃	〃	〃	〃	28.65	23.2	4.5	3.10	
335	134	敲石	E−18	竪穴式住居−35	花崗岩	182.0	66.0	55.0	841.0	
〃	135	〃	〃	〃	安山岩	117.0	41.0	33.0	221.0	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
335	136	敲石	E—18	竪穴式住居—35	流紋岩	127.0	36.0	25.0	169.52	兼砥石
349	137	砥石	E—21	竪穴式住居—39		340.0	220.0	110.0		
350	138	〃	〃	〃		253.0	180.0	80.0	5,040.00	
376	139	〃	E—20	井戸—15		118.0	89.1	67.9		
409	140	石錘	F—21	井戸—24		72.1	46.5	21.0		
421	141	敲石	E—18	土壙—126		160.0	63.0	30.0	—	
431	142	〃	〃	土壙—133	半花崗岩	104.0	57.0	24.0	178.93	
433	143	〃	〃	土壙—134	細粒花崗岩	84.0	38.0	32.0	131.00	
457	144	石錘	D—20	土壙—152		52.5	42.1	38.5		
469	145	砥石	〃	土壙—161	砂岩	235.0	120.5	107.5	2,240.00	
508	146	〃	D—17～F—17	溝—39	結晶片岩	136.0	63.0	27.0	253.00	
510	147	〃	D—17～F—18	溝—40		73.5	65.0	40.0	263.75	
516	148	〃	〃	溝—41	流紋岩	84.0	37.5	17.0	80.76	
518	149	石錘	〃	〃	花崗岩	48.0	49.0	35.0	118.76	
522	150	敲石	〃	溝—42		145.0	63.0	48.0	559.00	
531	151	石錘	E—21	溝—48		102.5	80.8	65.0	800.00	
534	152	〃	E—20～E—21	溝—49	花崗岩	83.0	55.0	49.5	276.60	
〃	153	〃	〃	〃	〃	68.0	59.5	35.0	205.50	
536	154	石鏃	E—21	溝—51	サヌカイト					
551	155	〃	E—22	溝—60	〃	18.0	13.5	2.5	0.15	
〃	156	〃	〃	〃	〃	32.0	12.0	7.0	2.65	
〃	157	石錘	〃	〃		63.9	56.2	36.3	175.61	
585	158	〃		柱穴		78.0	74.9	56.8		
〃	159	敲石		〃		114.5	45.3	16.5		
588	160	石鏃	E—20	包含層	サヌカイト	20.0	19.0	3.0	0.90	
〃	161	〃	E—19	〃	〃	21.0	13.0	2.5	0.51	
〃	162	〃	E—20	〃	〃	19.0	13.0	2.2	0.42	
〃	163	〃		〃	〃	18.0	16.0	2.3	—	
〃	164	〃	E—19	〃	〃	17.0	13.0	3.0	0.45	
〃	165	〃	E—18	〃	〃	27.0	13.0	4.0	1.31	
〃	166	〃	F—19	〃	〃	26.15	16.4	4.8	1.50	
〃	167	〃	D—17	〃	〃	25.0	16.0	4.0	1.57	
〃	168	〃	D—18	〃	〃	30.0	18.0	6.0	3.12	
〃	169	〃		〃	〃	23.5	16.3	3.5	1.80	
〃	170	〃	E—21	〃	〃	30.2	16.5	3.3	1.20	
〃	171	〃	E—19	〃	〃	22.0	13.0	4.0	0.81	
〃	172	〃	E—21	〃	〃	(18.4)	(17.0)	2.2	0.70	
〃	173	〃	E—18	〃	〃	32.0	16.0	40.0	1.56	
〃	174	〃	E—20	〃	〃	40.0	12.5	4.0	2.10	
〃	175	〃	E—16	〃	〃	(44.0)	16.0	5.0	3.45	
〃	176	〃	E—18	〃	〃	36.0	16.0	4.0	1.86	
〃	177	打製石庖丁	E—19	〃	紅簾片岩	(36.0)	41.0	6.2	15.02	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
588	178	磨製石庖丁	E—19	包含層		(70.0)	39.0	7.0	21.24	
〃	179	スクレイパー	—	〃	サヌカイト	55.0	32.5	9.0	20.00	
〃	180	〃	E—17	〃	安山岩	73.0	45.5	20.5		
〃	181	〃	F—22	〃	サヌカイト	69.3	34.0	10.0	24.20	
〃	182	打製石庖丁	F—20	〃	〃	(8.0)	52.0	13.8	46.50	
〃	183	石斧	E—17	〃	玢岩	(80.0)	84.0	48.0	545.00	
〃	184	軽石	E—18	〃	—	57.0	53.0	25.0	17.13	
647	185	砥石	E—19	〃	頁岩	67.0	29.0	14.0	46.52	
662	186	硯	E—15	〃	滑石	71.0	39.0	16.5	79.72	
		石鏃	D—18	〃	サヌカイト	33.0	15.0	4.0	2.10	
		〃	—	〃	〃	36.0	20.0	6.0	—	
		〃	—	〃	〃	22.0	17.0	3.0	0.92	
		〃	—	〃	〃	17.0	15.0	3.0	0.65	
		〃	E—17	〃	〃	15.0	12.0	2.0	0.40	
		〃	〃	〃	〃	22.5	18.0	4.5	2.04	
		〃	E—18	〃	〃	17.0	14.0	2.0	0.43	
		〃	〃	〃	〃	20.0	17.0	3.0	0.87	
		〃	D—17	〃	〃	(12.0)	12.0	2.0	0.30	
		〃	〃	〃	〃	(24.0)	16.0	4.0	0.97	
		〃	E—19	〃	〃	21.0	18.0	3.5	0.92	
		〃	E—18	〃	〃	28.0	(9.0)	5.0	1.64	
		〃	D—18	〃	〃	(18.0)	13.0	3.0	0.63	
		〃	〃	〃	〃	22.0	17.0	3.0	0.76	
		〃	〃	〃	〃	20.0	20.0	5.5	1.77	
		〃	D—17	〃	〃	16.0	15.0	2.0	0.53	
		〃	E—18	〃	〃	21.0	13.0	3.0	0.84	
		〃	〃	〃	〃	22.5	16.0	4.0	1.00	
		〃	〃	〃	〃	20.0	16.5	3.0	0.72	
		〃	〃	〃	〃	15.0	15.0	3.0	0.32	
		〃	F—18	〃	〃	27.0	13.0	4.0	1.06	
		〃	E—18	〃	〃	21.0	14.0	3.0	0.96	
		〃	〃	〃	〃	(23.0)	18.5	3.1	1.17	
		〃	〃	〃	〃	(31.0)	16.0	3.6	2.30	
		〃	〃	〃	〃	17.5	16.0	2.0	0.60	
		〃	〃	〃	〃	24.0	(11.1)	2.0	0.62	
		〃	F—17	〃	〃	23.0	16.0	3.0	1.00	
		〃	E—18	〃	〃	20.0	17.0	3.8	0.80	
		〃	E—17	〃	〃	—	19.5	3.5	0.83	
		〃	〃	〃	〃	24.0	15.0	4.0	1.33	
		〃	E—20	〃	〃	16.5	12.0	2.0	0.41	
		〃	F—20	〃	〃	16.5	14.0	4.0	0.70	
		〃	E—20	〃	〃	(15.0)	12.0	3.0	0.57	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
		石鏃	E−20	包含層	サヌカイト	(21.0)	11.0	3.0	0.98	
		〃	〃	〃	〃	16.0	13.5	2.0	0.44	
		〃	〃	〃	〃	21.0	(14.0)	3.5	0.48	
		〃	〃	〃	〃	34.0	12.0	7.0	2.82	
		〃	〃	〃	〃	18.0	13.0	3.0	0.71	
		〃	〃	〃	〃	(23.0)	12.0	3.5	1.01	
		〃	E−19	〃	〃	(16.0)	13.0	3.5	0.50	
		〃	F−19	〃	〃	15.0	13.5	3.0	0.40	
		〃	E−19	〃	〃	20.0	14.0	3.0	0.55	
		〃	〃	〃	〃	(16.0)	14.0	4.0	1.03	
		〃	E−20	〃	〃	(19.0)	(10.0)	3.5	0.74	
		〃	〃	〃	〃	26.0	18.2	7.0	—	
		〃	E−21	〃	〃	26.0	20.2	3.6	1.50	
		〃	F−19	〃	〃	11.7	10.7	3.0	0.30	
		〃	F−20	〃	〃	15.35	13.0	2.9	0.40	
		〃	〃	〃	〃	—	—	—	0.80	
		石錐	E−17	〃	〃	(47.0)	27.5	6.0	7.54	
		〃	D−17	〃	〃	36.0	21.0	5.5	2.91	
		〃	F−19	〃	〃	34.05	22.9	7.55	5.40	
		ポイント(?)	F−20	〃	〃	34.45	—	3.85	2.20	
		打製石庖丁	E−19	〃	〃	(46.0)	47.0	8.5	4.36	
		〃	〃	〃	〃	(29.0)	31.0	8.0	8.72	
		〃	D−17	〃	〃	(38.0)	44.0	7.0	6.59	
		〃	E−20	〃	〃	(31.0)	38.5	7.0	10.04	
			E−19	〃	〃	(54.0)	41.0	9.0	29.74	
		磨製石庖丁	E−16	〃	粘板岩	(58.0)	(29.0)	9.0	31.70	
		〃	F−19	〃	サヌカイト	—	39.05	7.2	13.60	
		スクレイパー	E−19	〃	〃	(22.0)	34.0	5.0	6.41	
		〃	〃	〃	〃	41.0	20.0	5.0	5.13	
		〃	E−17	〃	〃	(46.0)	32.0	9.0		
		〃	〃	〃	〃	68.0	62.0	6.0	29.40	
		〃	E−19~20	〃	〃	44.0	35.0	5.0	10.51	
		スクレイパー(?)	E−18	〃	〃	33.0	34.0	5.5	7.71	
		スクレイパー	F−17	〃	〃	103.0	68.0	10.0	66.27	
		〃	F−19	〃	〃	58.0	35.0	9.0	16.43	
		〃	E−19	〃	〃	(41.0)	27.0	6.0	6.63	
		〃		〃		49.0	40.0	12.0	24.04	
		〃	E−19	〃	サヌカイト	(20.0)	28.0	8.0	5.95	
		石槍	E−20	〃	〃	(34.0)	22.5	7.0	6.27	
		スクレイパー	E−18	〃	〃	56.0	31.0	8.5	18.10	
		〃	E−19	〃	〃	53.0	30.0	7.0	14.75	
		〃	〃	〃	〃	47.5	33.0	6.5	10.62	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
		スクレイパー	F−20	包含層	サヌカイト	—	—	—	9.20	
		〃	E−20	〃	〃	—	—	—	1.30	
		〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.80	
		敲石	E−19	〃	安山岩	113.0	43.0	20.0	148.25	
		〃	E−16	〃	細粒花崗岩	86.0	63.0	18.0	116.93	
		〃	E−20~21	〃	安山岩	10.5	64.0	46.0	558.00	
		〃	〃	〃	流紋岩	(37.5)	33.5	22.0	50.04	
		〃	F−18	〃	〃	113.5	32.0	15.0	87.16	
		〃	E−19~20	〃	花崗岩	121.0	60.0	43.0	513.00	
		〃	F−20	〃		(61.0)	61.0	55.0	—	
		砥石	E−18	〃		111.0	62.0	41.0	—	
		〃	E−19	〃		(31.0)	(27.0)	(8.0)	6.72	
		〃	E−16	〃		89.0	41.0	32.0	93.20	
		〃	〃	〃		104.4	78.0	18.0	—	
		〃	E−19	〃	凝灰岩	47.0	34.0	36.0	130.24	
		打製石庖丁	E−17	〃		71.0	42.0	19.0	—	
		石錘	E−19	〃	花崗岩	87.0	69.0	48.0	435.00	
		〃	E−21	〃		48.0	49.0	35.0	118.76	
		〃	E−20	〃		56.0	44.0	38.0	131.62	
		〃	E−22~23	〃		64.0	55.0	34.0	175.61	
		〃	E−20	〃		102.5	77.0	61.0	—	
		砥石	F−14	〃		92.0	78.0	15.0	—	
		〃	E−20	〃		120.0	100.0	100.0	—	
		〃	E−21	〃	半花崗岩	175.0	116.0	71.0	2005.00	
		〃	E−19	〃	頁岩	43.0	23.0	19.0	20.50	
		スリ石	E−18	〃		74.0	66.0	41.0	245.80	
		〃	D−15	〃		31.0	30.0	7.5	7.74	
		〃	F−17	〃		23.0	31.0	5.0	4.74	
		〃	E−18	〃		35.0	23.0	6.0	5.85	
		不明	D−18	〃		37.0	41.0	12.0	16.90	
		〃	E−17	〃		34.0	19.0	4.0	31.70	
		〃	〃	〃		37.0	33.0	9.0	9.98	
		〃	E−20	〃		29.0	20.0	7.0	4.35	
		〃	E−17	〃		29.0	21.0	7.5	6.07	
		〃	F−19	〃		24.0	21.0	7.0	4.60	
		〃	〃	〃		28.0	27.0	10.0	8.14	
		〃	〃	〃		25.0	28.0	6.0	5.50	
		〃	〃	〃		29.0	22.0	5.0	3.92	
		〃	〃	〃		30.0	17.0	4.0	2.55	
		〃	E−19	〃		81.0	33.0	11.0	34.86	

表—33　丸田調査区金属器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
305	94	鏃	E—18	竪穴式住居—29	鉄	3.10	2.60	0.50	5.63	
306	95	不明	〃	〃	〃	2.40	0.85	0.30	1.53	
321	96	鏃	D—17~18	竪穴式住居—30	〃	5.50	1.65	0.40	4.78	
〃	97	〃	〃	〃	〃	6.40	2.20	0.33	7.12	
332	98	〃	E—18	竪穴式住居—35	〃	(3.00)	1.80	0.15	1.91	
336	99	不明	E—20	竪穴式住居—36	〃	3.20	1.30	0.80	1.02	
〃	100	〃	〃	〃	〃	2.40	—	0.60	1.90	
344	101	〃	D—21	竪穴式住居—38	〃	2.00	1.30	0.20	0.80	
346	102	〃		竪穴式住居—39	〃	2.70	1.40	0.50	3.34	
〃	103	〃		〃	〃	2.75	1.80	0.31	3.13	
430	104	〃		土壙—133	〃	1.70	1.10	0.60	1.15	
460	105	〃	E—20	土壙—155	〃	(5.00)	1.50	0.20		
508	106	〃		溝—39	〃	1.75	0.98	0.25		
〃	107	〃		〃	〃	5.20	1.18	0.30		
530	108	鏃		溝—47	〃	(2.60)	1.70	0.30	2.86	
594	109	〃	E—18	竪穴式住居—42	〃	5.60	1.30	0.30	3.07	
647	110	鎺	F—19	灰茶褐色砂	銅	2.115	—	0.27 0.31	2.10	
649	111	鏃		溝—87	鉄	7.90	1.80	0.20	6.90	
657	112	釘		井戸—30	〃					
		不明	E—19		〃	2.10	1.20	0.65	2.05	
		〃	〃		〃	3.60	0.70	0.70		
		〃		暗灰色粘質土	〃	2.70	1.70	0.40	2.12	
		〃	E—19		〃	2.20	1.10	—	1.24	
		〃	〃		〃	1.30	0.65	0.30	0.35	
		〃	〃	堆積砂	〃	3.40	3.00	1.10	8.31	
		〃		灰褐色土	〃	2.00	0.70	0.80	1.44	
		〃	E—19	〃	〃	1.60	1.10	0.20	0.93	
		〃			〃	5.80	1.60	1.75	46.20	
		〃			〃	2.30	1.60	0.55	2.10	
		〃			〃	10.60	4.20	0.60	35.54	
		〃			〃	3.20	0.30	—		
		〃			〃	4.40	1.00	0.90	3.34	
		鏃			〃	3.70	2.10	0.50	5.40	
		不明			〃	3.20	1.30	0.35	4.66	
		〃			〃	1.20	0.80	0.70	0.66	
		〃			〃	4.50	2.80	1.10	21.20	
		〃	F—20		〃	1.90	0.30	0.40	0.43	
		〃			〃	3.00	2.60	1.90	13.60	
		〃			〃	3.00	0.60	0.45	0.76	
		〃			〃	4.40	3.50	2.60	25.47	
		〃			〃	2.90	1.80	2.00	6.66	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
		鏃？			鉄	—	—	—	22.20	
		輪			〃	5.50		0.70	15.47	
		不明	E−19		〃	3.30	0.55	0.28	1.80	
		〃			〃					
		〃			〃	3.10	1.50	0.40		
		〃			〃	5.20	1.10	3.50		
		〃								

表—34　丸田調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
包含層（第264図）									
2716	浅鉢形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。外面ヘラガキ沈線。	褐色	細砂多し	良好	
2717	〃	—	—	—	○口縁部キザミメ。	暗灰褐色	〃	〃	
2718	深鉢形土器	—	—	—	○外面条痕文，内傾接合。	暗茶灰色	白色小砂粒	〃	
2719	〃	—	—	—	○口縁端部押圧痕。外面条痕。	〃	砂粒多	〃	
2720	〃	—	—	—	○内面下半条痕。他はナデか？	鈍い橙色	〃	やや甘	
竪穴式住居—28（第266図）									
2721	壺形土器	12.3	—	—	○あまり開かない口縁。	淡赤褐色	白色小砂粒	良好	
2722	〃	—	—	—	○内面指頭圧痕文。	灰褐色	〃	〃	
2723	〃	—	7.6	—		淡褐色	〃	〃	○外面剥落。
2724	壺・甕形土器	—	(8.4)	—		灰白色	〃	〃	
2725	〃	—	(10.2)	—		〃	〃	〃	
土壙—109（第268図）									
2726	壺形土器	12.8	—	—	○外面頸部と肩部にヘラガキ沈線めぐる。	暗黄褐灰色	小石多く含	良好	
2727	〃	16.6	—	—	○外面頸部ヘラガキ沈線間に竹管文めぐる。	暗黄灰色	白色小石含	〃	
2728	〃	—	—	—	○口唇部外面に細かいキザミメ。	灰褐色	〃	〃	
2729	〃	—	—	—	○頸部外面にヘラによる沈線。	黄灰色	〃	〃	
2730	〃	—	—	—	〃	灰褐色	〃	〃	
2731	〃	—	—	—	○胴部外面の凸帯は，貼り付け後押圧される	〃	〃	〃	
2732	〃	—	—	—	○口縁部内面竹管文。	〃	〃	〃	
2733	〃	—	—	—	○内面押圧。	灰橙色	〃	〃	
2734	甕形土器	23.3	7.9	—	○外面下方からの粗いハケメ。	茶灰色	粗砂含	〃	
2735	〃	22.6	—	—	○外面細かいタテハケメ。	黄色	大砂粒含	〃	
2736	〃	22.8	—	—	○外面細かいナナメハケメ。	暗褐色	細砂含	〃	○外面煤付着。
2737	〃	18.4	—	—	〃	淡灰色	粗砂多く含	〃	〃
2738	〃	20.3	—	—	〃	暗褐色	大砂粒含	〃	
2739	〃	—	—	—	○頸部外面列点文めぐる。	〃	粗砂含	〃	
2740	蓋形土器	14.0	—	—	○内外面ヘラミガキ。	灰黄色	大砂粒含	〃	
2741	鉢形土器	19.9	—	—		黄灰色	〃	〃	○内外面剥落。
2742	〃	9.0	—	—	○外面ヘラミガキ。	黄色	〃	〃	
土壙—110（第269図）									
2743	壺形土器	11.6	—	—	○内外面ヘラミガキ。	暗灰褐色	大砂粒含	良好	
2744	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ，内面押圧とヨコナデ。	淡灰黄色	砂多く含	〃	
土壙—111（第270図）									
2745	壺形土器	16.0	7.6	28.5	○内面体部はヘラミガキ，板状工具のナデ調整。	橙黄白色	砂粒多含	良好	○完形片。
土壙—112（第271図）									
2746	甕形土器	21.0	—	—	○内外面ヘラミガキ，口縁部ヨコナデ。	灰黄色	砂粒多く含	良好	○外面煤付着。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2747	鉢形土器	24.6	—	—	○内面平滑に仕上がる。	暗灰色	砂粒多く含	良好	
2748	〃	13.9	7.4	12.2	○口縁部穿孔(2孔一対)。	灰黄色	砂粒多い	〃	○内外器表面剥落
2749	壺形土器	—	—	—	○外面ヘラガキ文様，外傾接合。	暗灰色	〃	〃	

河道（第273～293図）

2750	浅鉢形土器	—	—	—	○山形隆起部分で口縁部に浅いキザミメ。	暗黄褐色	砂粒多含	良好	○精製土器。
2751	〃	31.5	—	—	○内面は浅い条痕文をナデ調整で消す。	黒褐色	雲母多含	普通	〃
2752	深鉢形土器	—	—	—	○口縁上端面ジグザグに棒状押圧文をめぐる	灰黒色	微砂多含	〃	
2753	〃	—	—	—	○口縁上端面に刺突文をめぐらす。	灰色	〃	〃	
2754	〃	—	—	—	○山形隆起部に棒状工具で押圧を加える。	褐灰色	雲母多含	〃	
2755	〃	—	—	—	○口縁部には押圧文，体部には煤が付着する	暗褐灰色	砂粒含む	〃	○口縁山形隆起部
2756	〃	—	—	—	○口縁上端には棒状工具による押圧文。	褐灰色	微砂多含	〃	
2757	〃	—	—	—	○体部は横方向のヘラケズリ調整。	黒褐色	〃	〃	
2758	〃	—	—	—		灰黄色	〃	良好	
2759	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2760	〃	—	—	—	○口縁部には斜行のキザミメをめぐらす。	灰黒褐色	雲母多含	不良	
2761	〃	—	—	—		灰黄褐色	砂粒多含	良好	
2762	〃	—	—	—		灰黄色	〃	〃	
2763	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
2764	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2765	〃	—	—	—	○体部外面はヘラケズリ調整を施す。	暗黄褐色	微砂多含	〃	
2766	〃	—	—	—		〃	〃	普通	
2767	壺形土器	—	—	—	○口縁端面にキザミメ。	暗灰色	砂粒多含	〃	
2768	〃	—	—	—		黄白色	微砂多含	良好	
2769	〃	—	—	—	○体部外面は横位の条痕文。	黄褐色	砂粒多含	〃	
2770	〃	—	—	—	○内面はヨコナデ調整。	黒灰色	微砂多含	〃	
2771	鉢形土器	—	5.0	—	○体部外面はナデ，ヘラケズリ調整。	暗褐色	砂粒多含	普通	○あげ底。
2772	深鉢形土器	20.4	—	—	○体部上半は横位の条痕文，下半ヘラケズリ	暗橙褐色	微砂多含	良好	○口縁部にはキザミメ。
2773	〃	29.0	—	—	○口縁部の隆起部分にキザミメが加飾される。	灰褐色	雲母多含	〃	○ふきこぼれ煤付着。
2774	〃	39.9	—	—	○体部上半部は浅い横位の条痕文が施される。	黄褐白色	〃	〃	○体部上半煤付着。
2775	〃	—	—	—	○体部内面はナデ調整で仕上げる。	淡灰褐色	砂粒多含	〃	○タール状付着物。
2776	〃	34.1	—	—	○体部上半は横位の条痕文，下半ヘラケズリ	灰褐色	微砂多含	〃	○全面煤付着。
2777	〃	36.6	—	—	〃	暗灰褐色	〃	〃	〃
2778	〃	34.7	—	—	○体部下半は横方向のヘラケズリ。	灰橙褐色	雲母多含	〃	○ふきこぼれ煤付着。
2779	壺形土器	8.5	—	—	○内外面ともに細かいヘラミガキ調整。	黄橙白色	微砂多含	〃	
2780	〃	15.8	—	—	○ヘラガキ沈線4条をめぐらす。	黒灰色	砂粒多含	〃	
2781	〃	15.2	—	—	○内外面に丁寧なヘラミガキ調整。	灰褐色	微砂多含	〃	
2782	〃	11.0	—	—	○弧文を描いたとみられるヘラガキ線あり。	灰赤色	〃	〃	○比較的高火度焼成。
2783	〃	6.5	—	—	○上面はユビオサエ調整。	暗灰褐色	砂粒多含	〃	○中層下位出土。
2784	壺形土器	—	4.5	—	○体部上位に段がつく。	暗灰色	〃	〃	○ピート層下層。
2785	〃	8.4	6.8	(13.0)	○内面は板状工具によるナデ仕上げ。	灰黄色	微砂多含	〃	
2786	〃	13.0	—	—	○頸部上位にヘラガキ沈線1条をめぐらす。	黄褐色	砂粒多含	〃	○ピート層下層出土。
2787	〃	15.0	—	—	○口縁部外面に指頭オサエ痕残す。	淡灰黄褐色	微砂多含	〃	〃
2788	〃	—	—	—	○口縁内面に肥厚帯。	褐灰色	砂粒多含	〃	
2789	〃	—	—	—	○3条のヘラガキ沈線下位に重弧文を描く。	灰褐白色	〃	〃	○ピート層下層。
2790	〃	—	—	—	○体部上位に段がつく。細いヘラミガキ調整	黒褐色	〃	〃	○河道最下層出土。
2791	〃	13.7	—	—	○頸部に段がつく。	灰白色	〃	〃	
2792	〃	12.2	—	—	○頸部にケズリダシ凸帯をめぐらす。	黒褐色	粗砂多含	普通	
2793	〃	15.9	—	—	○ケズリダシ凸帯上にヘラガキ沈線がめぐる	灰黒褐色	砂粒多含	〃	○ピート層下層。
2794	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯上にヘラガキ沈線1条。	灰色	〃	良好	○内面下位に煤付着。
2795	〃	15.0	—	—	○頸部・体部にケズリダシ凸帯をめぐらす。	淡黄白色	〃	やや軟	
2796	壺形土器(彩文土器)	14.8	—	—	○頸部に貼付け押圧文帯をめぐらす。体部上位に丹塗りで彩文，表面は黒褐色の化粧。	黒褐色	〃	良好	○丹は暗赤色。外傾接合。
2797	壺形土器	15.8	—	—	○ケズリダシ凸帯上にヘラガキ沈線めぐらす	淡灰白色	〃	〃	○口縁上端に穿孔。
2798	〃	—	—	—	○外面は丁寧なヘラミガキ調整。	灰褐色	粗砂含む	〃	○被痕付着。

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2799	壺形土器	—	5.1	—	○内面はナデ調整。	灰黄色	粗砂含む	良好	○あげ底。
2800	〃	—	—	—	○断面三角形のヘラガキ沈線2条をめぐる。	暗褐灰色	砂粒多含	〃	
2801	〃	—	—	—	○段状のヘラガキ沈線2条をめぐらす。	黒褐色	〃	〃	○タール状煤付着
2802	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯。	灰色	〃	〃	〃
2803	〃	13.0	—	—	○ケズリダシ凸帯上にヘラガキ沈線が巡る。	灰白色	〃	〃	
2804	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
2805	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	○外面煤付着。
2806	〃	—	—	—	○沈線の一部に赤色顔料付着。	淡灰褐色	〃	〃	
2807	〃	—	—	—		黄灰色	〃	〃	
2808	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯上に2本のヘラガキ沈線。	灰褐色	〃	〃	
2809	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯上にヘラガキ沈線。	黄灰色	微砂含む	〃	○外面煤付着。
2810	〃	—	—	—		〃	砂粒多含	〃	
2811	〃	—	—	—	○貼付け粘土帯上に5条以上のヘラガキ沈線	灰褐色	砂粒含む	普通	○河道上層出土。
2812	〃	—	—	—		黄灰色	砂粒多含	良好	○外面煤付着。
2813	〃	13.2	(7.5)	—	○ケズリダシ凸帯。内面斜行ナデ後、ミガキ	灰白色	〃	〃	○ほぼ完形片。
2814	〃	12.4	—	—	○口縁部に穿孔。	暗褐灰色	〃	〃	
2815	〃	12.8	—	—		灰褐色	〃	〃	
2816	〃	15.6	—	—	○外面は粗いハケ調整後，ヘラミガキ。	黄灰色	〃	〃	
2817	〃	13.6	—	—		淡褐色	〃	〃	
2818	〃	14.6	—	—		灰褐色	〃	〃	
2819	〃	12.8	—	—	○口縁端部には1条のヘラガキ沈線がめぐる	褐灰色	微砂多含	〃	
2820	〃	15.3	—	—		黄灰色	砂粒多含	〃	
2821	〃	—	—	—		橙褐色	〃	〃	
2822	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2823	〃	—	—	—		黒色～灰色	〃	普通	
2824	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線。	明橙色	〃	良好	
2825	〃	—	—	—		橙褐色	〃	〃	
2826	〃	14.0	—	—		灰黄色	〃	〃	
2827	〃	15.2	—	—	○内外面細かいヘラミガキ。	暗橙褐色	粗砂多含	〃	
2828	〃	—	—	—	○体部外面はハケ調整の後，ヘラミガキ。	暗灰褐色	砂粒多含	〃	
2829	〃	—	—	—	○体部上位に段がつく。	黒褐色	〃	〃	
2830	〃	—	—	—	○口縁部内面に棒状工具による刺突文を飾る	黄灰色	〃	〃	
2831	〃	—	—	—	○刺突文を加飾する。	〃	〃		
2832	〃	—	—	—	○貼り付け押圧文帯の下にはヘラガキ沈線あり。	淡灰色	〃	〃	○外面煤付着。
2833	〃	—	—	—	○貼り付け凸帯に押圧文を飾る。	灰褐色	〃	〃	
2834	〃	—	—	—	○体部外面は横位のヘラミガキ調整。	灰色	〃	〃	
2835	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
2836	〃	—	—	—		灰黄褐色	〃	〃	○外面煤付着。
2837	〃	—	—	—	○貼り付け凸帯をめぐらしキザミメを加える	黄灰色	〃	〃	
2838	〃	—	8.1	—	○内外面共にヘラミガキ調整。内面上位ナデ	灰黄色	〃	〃	○内面に煤付着。
2839	〃	—	—	—	○2条のキザミメ凸帯を体部上位にめぐらす	明黄灰色	〃	〃	
2840	〃	—	—	—	○内面には押圧調整痕を残す。	灰褐色	〃	〃	○ピート層中層出土。
2841	〃	—	—	—		黄灰色	〃	〃	
2842	〃	—	—	—		橙褐色	〃	〃	
2843	〃	23.7	—	—	○内面に貼り付け凸帯渦文を飾る。	明灰褐色	〃	〃	○ピート層出土。
2844	〃	—	—	—	○頸部に断面三角形の貼り付け凸帯をめぐらす。	灰褐色	〃	〃	
2845	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2846	〃	—	—	—	○押圧文を加えた貼り付け凸帯をめぐらす。	淡黄灰色	砂粒含む	〃	
2847	〃	—	—	—		橙褐色	〃	〃	
2848	〃	—	—	—		黄灰色	砂粒多含	〃	
2849	〃	—	8.0	—	○内面下位は粗いハケメ調整後，ヘラミガキ。	灰褐色	粗砂含む	〃	○東法面出土。
2850	〃	—	8.2	—	○外底部にヘラガキ沈線で十字を描く。	橙褐色	粗砂多含	〃	
2851	〃	—	—	—	○断面三角形の貼り付け凸帯を飾る。	灰黄色	精良	〃	
2852	鉢形土器	20.4	10.0	8.0	○内面・外底部はヘラミガキ調整。完形片。	黄白色	粗砂多含	〃	○やや器表荒れ。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2853	壺形土器	—	6.1	—	○外底部はヘラミガキ調整を施す。	暗灰色	砂粒多含	良好	
2854	〃	—	9.0	—	○外底部は磨滅。	灰色	〃	〃	
2855	〃	—	8.0	—		灰黄色	〃	〃	○内面に炭化物付着。
2856	〃	—	7.6	—		褐色	〃	〃	○内面に煤付着。
2857	鉢形土器	—	10.0	—		暗灰黄色	〃	〃	
2858	鉢形土器？	—	6.0	—	○外底部はヘラミガキで仕上げる。	灰褐色	〃	〃	○煤付着。
2859	壺形土器	—	7.0	—		灰黄色	〃	〃	
2860	〃	—	8.0	—	○外傾接合部分で剥離。	褐灰色	〃	〃	
2861	〃	—	9.5	—	○外底部はナデ仕上げで平滑。	淡灰色	〃	〃	
2862	〃	—	7.4	—	○内面は縦位のヘラミガキ調整。	橙白色	〃	〃	
2863	〃	—	6.6	—	○底部外面はナデ仕上げ。	淡黄灰色	微砂多含	〃	
2864	〃	—	8.5	—		淡黄褐色	砂粒多含	〃	
2865	〃	—	4.0	—	○体部下位はタテハケ調整。	淡褐色	〃	〃	
2866	鉢形土器	—	7.6	—		暗灰色	〃	〃	
2867	壺形土器	—	6.4	—	○内面は部分的なヘラミガキ。	黒褐色	粗砂多含	〃	
2868	〃	—	8.6	—	○内面は粗いハケ調整。	〃	砂粒多含	〃	
2869	〃	—	8.0	—		灰褐色	〃	〃	
2870	〃	—	9.0	—		黄灰色	〃	〃	○二次焼成。
2871	〃	—	7.4	—	○内面は太目のヘラミガキ調整。	〃	〃	〃	
2872	〃	—	9.0	—		灰色	〃	〃	
2873	〃	—	8.0	—	○内外面ヘラミガキ調整。	〃	〃	〃	
2874	〃	—	8.0	—	○外面は斜行ヘラミガキ調整。	灰黄色	〃	〃	
2875	〃	—	10.0	—		灰褐色	〃	〃	
2876	〃	—	7.0	—	○内面はナデ仕上げ。	淡灰黄色	〃	〃	○ややあげ底。
2877	〃	—	16.0	—	○底部外面はヘラミガキで仕上げる。	暗灰色	〃	〃	○内外面に煤付着。
2878	甕形土器	—	—		○体部上位にケズリダシ凸帯をめぐらす。	灰褐色	〃	〃	○類例稀少。煤付着。
2879	〃	—	—	—	○口縁端面は平たい。外面は横ヘラミガキ。	黄灰色	微砂多含	〃	
2880	〃	—	—	—		灰褐色	砂粒多含	〃	○外面に煤付着。
2881	〃	—	—	—	○外傾接合痕を明瞭に残す。	褐灰色	〃	〃	〃
2882	〃	—	—	—		黒褐色	〃	〃	
2883	〃	—	—	—		褐灰色	粗砂含む	〃	○外面煤付着。
2884	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線の断面は丸い。	暗灰色	砂粒多含	〃	〃
2885	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯。	〃	〃	〃	
2886	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2887	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線の間にヘラ状工具で刺突文。	灰褐色	〃	〃	
2888	〃	—	—	—	○体部上位には刺突列点文2条をめぐらす。	暗灰黄色	〃	〃	○外面に煤付着。
2889	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
2890	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2891	〃	—	—	—		黄灰色	〃	〃	
2892	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
2893	〃	—	—	—		黄灰色	〃	〃	
2894	〃	—	—	—	○内外面平滑な仕上げ。	暗灰褐色	〃	〃	
2895	〃	—	—	—	○口縁部にキザミメをめぐらす。	灰色	〃	〃	○外面煤付着。
2896	〃	—	—	—		褐灰色	粗砂含む	〃	○外面に厚く煤付着。
2897	〃	—	—	—		灰褐色	砂粒多含	〃	
2898	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	○煤付着。
2899	〃	—	—	—		〃	〃	〃	〃
2900	〃	—	—	—		淡褐灰色	〃	〃	〃
2901	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
2902	〃	—	—	—	○口縁部にはやや粗いキザミメをめぐらす。	灰色	〃	〃	
2903	〃	—	—	—		暗褐灰色	粗砂含む	〃	
2904	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	○外面煤付着。
2905	〃	19.8	—	—	○口縁部にはキザミメをめぐらす。	灰褐色	砂粒多含	〃	○西法面出土。
2906	〃	20.0	—	—	○体部外面は斜方向の細かいハケ調整を施す。	灰色	〃	〃	○外面煤付着。

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2907	甕形土器	21.1	—	—	○内面は縦位のナデ仕上げ。	淡灰褐色	粗砂多含	良好	○外面煤付着。
2908	〃	22.7	6.6	19.9	○内面は粘土輪積み単位に応じた押圧調整。	黄灰色	砂粒多含	〃	○完形片。あげ底。
2909	〃	—	—	—	○外面は斜方向のハケ調整。	灰褐色	〃	〃	
2910	〃	16.9	—	—	○内外面ともにタテナデ調整。	黄橙白色	〃	〃	
2911	〃	20.0	—	—	○内面は板状工具によるタテナデ調整。	灰白色	〃	〃	○外面に煤付着。
2912	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯。	淡褐色	〃	〃	○ピート層上層出土
2913	〃	16.3	—	—	○口縁部キザミメは所々途切れる。外面斜ナデ。	暗黄橙褐色	雲母多含	〃	○東岸法面出土。
2914	〃	23.2	—	—	○外面はタテナデ調整。	灰褐色	砂粒多含	〃	○煤付着。
2915	〃	—	—	—	○口縁部に1条の沈線とキザミメをめぐらす	灰黄色	〃	〃	○外面煤付着。
2916	〃	—	—	—		黒褐色	〃	〃	
2917	〃	—	—	—	○体部外面は細かいハケ調整。	褐灰色	〃	〃	
2918	〃	—	—	—	○ヘラガキ平行沈線は1か所で接続する。	〃	〃		
2919	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線は9条以上。	淡黄灰色	〃		
2920	〃	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
2921	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線の間に2列の棒状工具刺突文	淡黄灰色	〃	〃	
2922	〃	—	—	—	○口縁部は貼付逆L字状。外面はタテハケ調整	淡褐灰色	微砂多含	〃	○外面煤付着。
2923	〃	—	—	—	○口縁部には棒状圧痕文をめぐらす。	〃	〃	〃	
2924	〃	—	—	—	○横位のヘラガキ沈線と竹管文をめぐらす。	橙褐色	金雲母多含	〃	○逆L字口縁。
2925	〃	—	8.0	—	○穿孔は焼成後。内面には厚い煤が付着。	灰黄色	砂粒多含	〃	○底部穿孔。
2926	〃	—	8.2	—	○穿孔は焼成後，内外面から行う。	灰黄褐色	〃	〃	〃
2927	〃	31.0	—	—	○体部上位には太めのヘラガキ沈線1条。	暗灰色	粗砂多含	〃	
2928	〃	32.5	—	—	○内面には斜行ナデ仕上げ。	灰褐色	砂粒多含	〃	○厚い煤が付着。
2929	〃	22.0	—	—	○口縁部は貼り付けで，キザミメをめぐらす	〃	〃	〃	○内外面に煤付着。
2930	〃	25.5	—	—	○内面は横位のナデ仕上げ。	黒褐色	〃	〃	○煤多量に付着。
2931	〃	—	7.4	—	○焼成後，底部に穿孔。	黄白色	〃	普通	
2932	〃	—	8.0	—	○焼成後に内外面から穿孔。	灰橙色	〃	良好	
2933	〃	12.4	—	—	○小さい連続刺突文とキザミメ凸帯が巡る。	黒褐色	〃	〃	○一部内傾接合。
2934	壺形土器	—	—	—		淡黄色	粗砂含む	〃	
2935	〃	—	—	—	○頸部に段がつく。	黄灰色	砂粒多含	〃	
2936	〃	—	—	—	○ケズリダシ凸帯。	暗灰褐色	〃	〃	
2937	〃	—	8.3	—	○内面は板状工具によるナデ仕上げ。	暗灰色	〃	〃	
2938	〃	—	—	—	○口縁端部に1条のヘラガキ沈線がめぐる。	淡褐色	〃	〃	
2939	〃	—	—	—	○口縁部は丸くおさまる。ケズリダシ凸帯風	黄灰色	〃	〃	
2940	〃	—	7.2	—	○内面は平滑なナデ仕上げ。	灰色	粗砂多含	〃	○内外面煤付着。
2941	〃	—	7.3	—		淡灰褐色	〃	〃	
2942	〃	—	6.8	—	○体部下位には押圧痕を残す。	灰黄色	〃	〃	
2943	〃	—	7.4	—	○体部外面は板状工具によるタテナデ調整。	〃	〃	〃	
2944	〃	—	7.7	—	〃	灰白色	〃	〃	○内面に煤付着。
2945	〃	—	8.0	—	○内面はナデ仕上げ。	灰色	微砂多含	〃	○煤付着。
2946	〃	—	8.0	—		黄灰色	砂粒多含	〃	
2947	壺形土器？	—	8.0	—	○内面はヘラミガキ調整。	灰白色	〃	〃	
2948	甕形土器	—	7.8	—	○体部外面は板状工具によるタテナデ調整。	灰褐色	微砂多含	〃	
2949	〃	—	7.2	—	〃	灰黄褐色	砂粒多含	〃	
2950	〃	—	10.0	—	○体部下位はタテハケ調整上からヘラミガキ	淡灰色	〃	〃	○外面煤付着。
2951	〃	—	6.4	—	○内面はハケ調整後，ナデ仕上げ。	灰色	粗砂含む	〃	
2952	〃	—	6.8	—	○外面は粗いハケ調整後，ナデ仕上げ。	暗灰黄色	微砂多含	〃	
2953	〃	—	6.0	—		灰褐色	砂粒多含	〃	○煤付着。
2954	壺形土器	46.5	—	—	○張出しの弱い体部中位にヘラガキ沈線1条	橙白色	粗砂多含	やや軟	○外傾接合。
2955	〃	—	—	—	○有軸木葉文。	白灰褐色	〃	良好	
2956	〃	—	—	—	○無軸木葉文。ヘラガキで十字形を区画し，その後，木葉文を描く。ケズリダシ凸帯。	黄褐白色	雲母多含	〃	○河道最下層出土。
2957	〃	—	—	—	○有軸木葉文。	黄褐色	砂粒多含	〃	
2958	〃	—	—	—	〃	灰色	微砂多含	〃	
2959	〃	—	—	—	○有軸木葉文。体部上位に段がつく。	淡橙褐色	〃	〃	
2960	〃	—	—	—	○ヘラガキ斜線文か？	灰黄色	砂粒含む	〃	○煤付着。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2961	壺形土器	—	—	—	○浅い重弧文，縦方向の区画線4本以上。	灰黄色	砂粒含む	良好	
2962	〃	—	—	—	○木葉文（無軸）か？	黄灰色	砂粒多含	〃	○内外面煤付着。
2963	甕形土器	—	—	—	○太目のヘラガキ鋸歯文と平行沈線文。	灰白色	〃	〃	
2964	〃	—	—	—	○斜線文。	黄橙白色	〃	〃	
2965	〃	—	—	—	○複線鋸歯文。	灰褐色	〃	〃	○外面煤付着。
2966	壺形土器	—	—	—	○浅い重弧文。	暗褐灰色	〃	〃	
2967	〃	—	—	—	○浅くて細い重弧文を描く。	黒褐色	〃	〃	
2968	〃	—	—	—	○重弧文。内面にはユビオサエ痕残す。	淡黄褐色	〃	〃	
2969	〃	—	—	—	○重弧文。	黒褐色	〃	〃	○内面煤付着。
2970	〃	—	—	—	○4条1単位とするヘラガキ文。	灰色	粗砂含む	〃	
2971	〃	—	—	—	○やや粗雑な縦方向のヘラガキ沈線を飾る。	黄灰色	砂粒多含	〃	
2972	〃	—	—	—	○キザミメと沈線で飾られた楕円形の隆起文。	褐灰色	砂粒含む	〃	○丁寧な調整。
2973	〃	—	—	—	○キザミメをもつ貼り付け凸帯文。	〃	〃	〃	
2974	甕形土器	—	—	—	○口縁上端のヘラガキ沈線の間に刺突文。	橙黄白色	砂粒少量含	軟質	○煤付着。
2975	壺形土器	—	2.5	—	○1条の沈線上に楕円形の粘土を貼り巡らす	赤褐色	微砂多含	良好	○指頭調整。
2976	〃	—	—	—	○大小の水玉状の丹彩を施す。赤橙色。	黒褐色	石英多含	〃	
2977	〃	—	—	—	○水玉状の丹彩を施す。赤橙色。	黄白色	砂粒含む	〃	
2978	〃	—	—	—	〃	黒褐色	〃	〃	○河道最下層出土
2979	〃	—	—	—	○やや弧を描く丹彩を施す。	黒色	砂粒多含	〃	○河道東岸法面出土。
2980	〃	—	—	—	○竹管文をめぐらしそのすぐ上位に帯状丹彩	黒褐色	石英多含	〃	○ピート層下層出土。
2981	〃	—	—	—	○口縁部の内外面に丹彩。穿孔あり。	〃	〃	〃	
2982	〃	—	—	—	○斜行する帯状丹彩を施す。	暗褐色	砂粒多含	〃	
2983	〃	—	—	—	○口縁部の内外面に丹彩。暗赤色を呈する。	黒褐色	〃	〃	○河道下層出土。
2984	〃	—	—	—	○外面はハケ調整で仕上げ，内面に丹が残存	灰褐色	〃	〃	○赤色顔料の容器か？

河道最終流路（第294図）

2985	壺形土器	13.2	—	—	○内面はヘラミガキで仕上げる。	暗灰褐色	細砂含む	良好	
2986	〃	15.0	—	—	〃	黄白色	〃	普通	
2987	〃	—	8.0	—	○内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
2988	〃	13.6	—	—	○頸部外面ヘラミガキ。	黄灰色	砂粒含む	〃	
2989	甕形土器	17.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄白色	微砂多含	〃	
2990	〃	17.0	—	—	○4か所に棒状浮文を飾る。内面ハケ調整。	暗灰色	〃	〃	○外面煤付着。
2991	〃	14.0	—	—	○外面はハケ調整。	淡灰色	〃	良好	〃
2992	壺形土器	—	—	—	○クシガキ平行沈線文を飾る。下位に波状文	黄白色	砂粒多含	やや軟	
2993	高杯形土器	—	9.6	—	○内面にシボリメ痕を残す。	灰褐色	微砂多含	良好	

溝—31（第295図）

2994	壺形土器	14.0	—	—	○内外面ヘラミガキ。	黄褐色	白色砂含む		
2995	甕形土器	19.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面タテナデ。	黄灰色	〃		
2996		—	—	—	○内外面ヨコナデ。	〃	砂粒多い		○混入か？

溝—33（第297図）

2997	甕形土器	22.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	大砂粒含		
2998	〃	15.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面タテナデ。	暗灰褐色	砂粒多い		

溝—34（第298図）

2999	壺形土器	17.7	—	—	○内外面ヘラミガキ。	灰褐色	大砂粒含む		
3000	〃	11.4	—	—	○口縁部ヨコナデ，頸部にケズリダシ凸帯。	黄灰色	〃		○穿孔有り。
3001	甕形土器	—	—	—	○口縁部上面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		○器表面剝落。
3002	壺形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3003	—	—	8.0	—	○内面押圧痕あり。	〃	〃		

包含層（第301図）

3004	壺形土器	—	—	—	○内面指頭圧痕残す。				
3005	〃	—	—	—	○肩部外面竹管文をめぐらす。				

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3006	甕形土器	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。				
3007	〃	—	—	—	〃				
3008	鉢形土器	10.2	4.8	5.8	○外面ヘラミガキ。	淡灰黄色	砂粒多い		

竪穴式住居—29 床面（第308図）

3009	壺形土器	19.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂	良好	○中央部溝。
3010	〃	—	—	—	○外面ハケメ。頸部内面押圧。	〃	〃	〃	○中央穴。
3011	鉢形土器	16.0	6.0	9.7	○口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	灰黄褐色	〃	〃	
3012	〃	18.0	4.2	7.2	○口縁部ヨコナデ。底部ヘラミガキ。	灰黄色	〃	〃	
3013	〃	35.9	10.8	18.8	○口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
3014	台付鉢形土器	—	4.8	—		〃	〃	〃	
3015	〃	10.2	4.0	7.8	○外面ナデ。底部端に乾燥台の痕跡。	黄灰色	〃	〃	
3016	高杯形土器	—	15.8	—	○内面シボリ。端部ヨコナデ。外面ハケメ。	〃	〃	〃	○柱穴。

竪穴式住居—29　住居外周溝北東部（第309図）

3017	壺形土器	12.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄色	細砂	良好	
3018	甕形土器	16.5	—	—	〃	黄灰色	〃	〃	
3019	甕形土器	14.7	—	—	〃	〃	〃	〃	
3020	甕形土器(甑)	—	5.6	—	○外面不明。底部焼成後に穿孔。	〃	〃	〃	
3021	鉢形土器	32.0	—	—	○口縁部外面ヨコナデ。	〃	大砂粒含む	〃	
3022	〃	39.2	—	—	○口縁部にヨコナデ。	〃	細砂	〃	
3023	〃	32.0	—	—	〃	黄褐色	砂粒多い	〃	
3024	台付鉢形土器	—	4.9	—	○外面ヘラケズリ。	灰黄色	大砂粒多い	〃	○製塩土器。
3025	〃	—	3.8	—	○外面押圧。	〃	〃	〃	〃

竪穴式住居—29　住居外周溝南半部（第310図・311図）

3026	蓋形土器	—	11.0	—	○内外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂	良好	
3027	壺形土器	13.7	—	—	○頸部内面シボリ。口縁部ヨコナデ。	〃	〃	〃	
3028	〃	21.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部外面タテハケメ。	淡茶灰色	〃	〃	
3029	壺型土器	17.7	—	—	〃	暗灰黄色	〃	〃	
3030	〃	13.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。その後外面ヘラミガキ。	灰黄色	〃	〃	
3031	甕形土器	13.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。肩部外面押圧	明灰褐色	〃	〃	
3032	〃	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	灰褐色	〃	〃	
3033	〃	13.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡黄灰色	〃	〃	
3034	〃	—	4.0	—	○底部押圧。	灰茶色	〃	〃	
3035	〃	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面押圧。	暗灰茶色	細砂多い	〃	
3036	〃	—	3.0	—		〃	〃		
3037	鉢形土器	14.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ヘラミガキ。	灰黄色	細砂	良好	
3038	〃	16.7	5.4	10.1	○口縁部ヨコナデ。外面押圧。	淡黄灰色	〃	〃	
3039	台付鉢形土器	—	6.3	—	○台部内面ヨコナデ。鉢部ヘラミガキ。	暗灰茶色	〃	〃	
3040	〃	—	5.9	—	〃	灰黄色	〃	〃	
3041	鉢形土器	14.1	—	—		赤灰色	〃	〃	○器表面剥落。
3042	〃	15.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
3043	〃	11.9	3.7	7.3	○体部内外面ナデ。	灰黄色	〃	〃	
3044	〃	—	5.0	—	○底部ナデ。内外面ヘラミガキ。	淡黄灰色	〃	〃	
3045	〃	11.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ナデ。外面ナデ。	淡黄灰褐色	〃	〃	
3046	台付鉢形土器	—	9.0	—	○台部ヨコナデ。面取り。	黄灰色	〃	〃	
3047	〃	—	4.8	—	○鉢部ヘラケズリ。	〃	粗砂	〃	○製塩土器。
3048	〃	—	4.7	—	〃	〃	〃	〃	〃
3049	〃	—	4.1	—	○台端部押圧。	〃	〃	〃	〃
3050	〃	—	3.6	—		灰黄色	〃	〃	〃
3051	高杯形土器	23.5	—	—	○内外面ヘラミガキ。	淡黄灰色	細砂	〃	
3052	〃	24.7	—	—	〃	灰褐色	〃	〃	
3053	〃	27.8	—	—	○口縁部外面ヨコナデ。	暗灰褐色	〃	〃	
3054	〃	17.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰色	〃	〃	
3055	〃	24.6	—	—	○口縁部外面ヘラガキ波状文。	灰黄色	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3056	高杯形土器	8.8	—	—	○内外面ヘラミガキ。	灰色	細砂		
3057	〃	—	16.4	—	○内面シボリ・ナデ・ハケメ。	灰黄色	〃		
3058	〃	—	—	—	○外面ヘラガキによる沈線。	灰褐色	〃		
3059	〃	—	—	—	○内面ヨコナデ・ヘラミガキ。	灰黄色	〃		
3060	鉢形土器	48.8	11.0	22.5		〃	〃		

竪穴式住居—29　住居外周溝南西部（第312図）

3061	壺形土器	13.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	細砂		
3062	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁内部竹管刺突文。	黄灰色	〃		
3063	甕形土器	11.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
3064	〃	15.3	—	—	〃	灰褐色	〃		
3065	〃	8.4	—	—	〃	灰黄色	〃		
3066	〃	11.8	—	—	○口縁部内面シボリメ。外面押圧。	〃	〃		
3067	〃	—	5.8	—	○底部ヘラケズリ。	灰褐色	〃		
3068	〃	—	6.0	—	〃	〃	〃		
3069	鉢形土器	11.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	〃		
3070	高杯形土器	—	15.8	—		灰褐色	〃		

竪穴式住居—29　住居外周溝西部（第313図）

3071	甕形土器	11.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡黄灰褐色	細砂		
3072	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面押圧。	黄赤褐色	〃		
3073	鉢形土器	19.1	—	—	○内面ナデアゲ。	淡黄灰褐色	〃		
3074	高杯形土器	26.0	—	—	○内外面ヘラミガキ。	〃	〃		

竪穴式住居—30　床面・柱穴・住居外周溝（第317図）

3075	壺形土器	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		○柱穴中。
3076	〃	19.8	—	—	○頸部内面押圧。	〃	〃		
3077	〃	—	—	—	〃	黄褐色	〃		
3078	甕形土器	16.0	7.0	27.5	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	〃		○周溝中。
3079	〃	—	5.0	—	○底部ヘラケズリ。	〃	〃		〃
3080	高杯形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	黄褐色	〃		○柱穴中。
3081	〃	—	—	—	〃	灰黄色	〃		○周溝中。
3082	台付鉢形土器	18.0	—	—	〃	赤褐色	〃		〃
3083	〃	—	12.2	—	○外面ハケメ。内面ヨコナデ。	〃	〃		〃
3084	鉢形土器	19.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	黄灰色	〃		〃
3085	高杯形土器	—	16.0	—	○外面ハケメ。	〃	〃		○床面。
3086	台付鉢形土器	—	5.0	—	○外面ヘラケズリ。	黒色	粗砂		○周溝中。
3087	〃	—	3.8	—	〃	灰黄色	〃		〃

竪穴式住居—30　関連溝（第318～321図）

3088	壺形土器	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	茶灰色	微砂		
3089	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		
3090	〃	15.8	—	—	○口縁上端面に凹凸めぐる。内面ヘラミガキ	〃	〃		
3091	壺形土器	—	7.3	—	○外面ハケメ。頸部内面押圧。	〃	〃		
3092	〃	—	—	—	○頸部内面ナデ。	〃	〃		
3093	〃	20.0	—	—	○頸部内面ナデ。頸部外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3094	〃	—	7.3	—	○外面ハケメの後ヘラミガキ。	〃	〃		
3095	〃	9.1	—	—	○頸部内面ヨコヘラケズリ。	淡黄褐色	〃		
3096	〃	15.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄褐色	〃		
3097	甕形土器	15.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	黄灰色	〃		○外面焼付着。
3098	〃	16.3	—	—	〃	〃	〃		
3099	〃	15.0	—	—	〃	〃	〃		
3100	〃	15.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	灰黄褐色	〃		○壺か？
3101	甕形土器	14.3	4.6	23.0	○肩部にタタキ。外面太めのハケメ。	黄褐色	〃		
3102	〃	13.4	—	—		灰黄色	〃		
3103	〃	25.0	9.0	41.0	○口縁部ヨコナデ。底部ヘラミガキ。	黄褐色	粗砂含		
3104	〃	—	5.0	—	○外面ハケメ。	〃	粗砂		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3105	甕形土器	—	11.4	—	○外面ヘラミガキ。	黄灰色	大砂粒含む		
3106	台付鉢形土器	—	11.4	—	○台はヨコナデ。	灰黄色	細砂		
3107	鉢形土器	10.0	—	—	○内外面ナデ。	黒灰色	〃	良好	
3108	〃	10.4	4.0	7.4	○外面ナデアゲ。内面押圧とナデアゲ。	灰黄色	微砂	〃	
3109	〃	12.3	5.0	8.8	○外面ナデアゲ。内面ナデ。底部ナデ。	黄灰色	〃	〃	
3110	高杯形土器	29.0	—	—		黄褐色	細砂		○調整不明。
3111	〃	18.7	—	—	○内外面ヘラミガキ。	〃	白色砂含む		
3112	〃	—	18.1	—	○外面ヘラミガキ。丹塗り。内面シボリ。	黒灰色	微砂含		
3113	〃	—	—	—	○内面シボリ。外面タテハケメ。	淡灰色	細砂含		

竪穴式住居—31（第322図）

3114	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰茶色	細砂		
3115	〃	—	—	—	〃	黄灰色	〃		
3116	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	暗茶色	〃		
3117	壺形土器	—	3.0	—	○胴部以上欠損。内面ナデ。底部一部ケズリ	黄灰色	大砂粒含む		
3118	台付鉢形土器	—	5.0	—	○外面粗いヘラケズリ。	灰茶色	粗砂		

竪穴式住居—32（第324図）

3119	壺形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰色	白色小砂粒	良好	
3120	〃	(11.9)	—	—		淡褐色	〃	〃	
3121	甕形土器	—	—	—		淡黄灰色	微細	〃	
3122	〃	—	—	—	○口縁端外面2条の凹線。	灰白色	白色小砂粒	〃	
3123	〃	—	—	—	○内面凹線状。	明褐色	〃	〃	
3124	鉢形土器	—	—	—		暗褐色	〃	〃	
3125	甕形土器	—	(3.6)	—	○内面ヘラケズリ。	灰黒色	〃	〃	
3126	壺形土器	—	4.0	—	○丁寧な仕上げ。	赤褐色	精製粘土	〃	
3127	鉢形土器	(19.1)	—	—	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	茶灰褐色	白色小砂粒	〃	
3128	高杯形土器	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
3129	〃	—	—	—		黄灰色	〃	〃	
3130	〃	—	—	—		暗茶褐色	〃	〃	
3131	甕形土器	—	(4.8)	—	○外面極細のハケメ。	淡灰褐色	〃	〃	
3132	〃	(12.2)	—	—		淡灰茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
3133	〃	—	—	—		淡茶色	〃	〃	
3134	〃	—	—	—	○垂れぎみの口縁。	灰白色	〃	〃	
3135	〃	—	—	—	○内面ヘラケズリ。	淡褐色	〃	〃	
3136	高杯形土器	—	—	—	○外面縦位のヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土	〃	
3137	〃	—	(11.2)	—		暗黄灰色	白色小砂粒	〃	
3138	〃	—	(11.9)	—	○穿孔7孔。	暗褐色	〃	〃	
3139	鉢形土器	—	—	—	○外面凹凸が著しい。	暗赤褐色	〃	〃	
3140	高杯形土器	—	—	—	○内面ハケメ。	赤褐色	精製粘土	〃	
3141	甕形土器	—	—	—		暗灰色	白色小砂粒	〃	
3142	高杯形土器	—	(14.0)	—		淡褐色	〃	〃	○外面煤付着。
3143	台付鉢形土器	—	2.9	—		淡灰褐色	白色小砂粒	〃	
3144	壺形土器	—	(3.4)	—		赤褐色	精製粘土	〃	
3145	高杯形土器	—	—	—	○くびれ部ヘラガキ沈線。	暗灰茶色	白色小砂粒	〃	○外面煤付着。
3146	甕形土器	—	(5.6)	—		暗灰色	〃	〃	○黒斑。
3147	鉢形土器	—	—	—	○内面極細のハケメ。	灰白色	〃	〃	
3148	甕形土器	—	—	—		淡灰黄色	〃	〃	
3149	壺形土器	—	(15.0)	—	○内面円滑な仕上げ。	淡褐色	〃	〃	
3150	〃	—	(10.0)	—		乳灰色	〃	〃	
3151	高杯形土器	(13.0)	—	—		黄橙色	〃	〃	
3152	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	淡褐色	〃	〃	
3153	甕形土器	(13.8)	—	—	○外面極細のハケメ。	暗茶灰色	〃	〃	○外面煤付着。

竪穴式住居—33　（第327図）

3154	鉢形土器	19.8	6.7	17.0	○口頸部外面ヨコナデ。体部内面・底面ナデ。	鈍い黄橙色	砂粒細砂多	良好	○柱穴内出土。完形。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3155	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端面明瞭。	橙色	砂粒あり	やや甘	○小破片。埋土出土。
3156	壺形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。端面に凹線2条。	浅黄橙色	〃	良好	○小片。炭付近出土。
3157	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端部さらに強く外反	鈍黄橙色	砂粒細砂多	〃	○小破片。埋土出土。
3158	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端上に平面。	〃	砂粒多	〃	○埋土出土。
3159	鉢形土器	—	—	—	○内面ナデ。口縁端水平面。口縁端ヨコナデ	浅黄橙色	細砂多	〃	○床直出土。小片。
3160	高杯形土器	—	—	—	○外反部外面ヨコナデ。外反部中膨らみ。	鈍黄橙色	砂粒細砂多	〃	○小破片。埋土出土。
3161	〃	—	—	—	○外反部外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
3162	〃	—	—	—	○脚端に面をもつ。ヘラガキ線鋸歯文。	浅黄橙色	細砂多	〃	〃
3163	〃	—	—	—	○脚端部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	黒褐色	砂粒細砂多	〃	○小片。炭付近出土。
3164	〃	—	9.9	—	○外面脚部にごく浅い沈線。	橙色	細砂多	やや甘	○¼弱残存。埋土出土。
3165	〃	—	—	—	○脚端外面に沈線。端部ヨコナデ。脚端明瞭	鈍黄橙色	〃	良好	○中央ピット出土
3166	鉢形土器	—	5.0	—	○外面指頭圧痕。内面ナデ。	灰褐色	砂粒多	〃	○製塩土器。埋土出土。
3167	壺形土器	—	5.7	—	○底面の外縁は鈍い。	橙色	細砂多	〃	○埋土出土。

竪穴式住居—34（第329・330図）

3168	鉢形土器	14.7	5.3	6.1	○口縁部ヨコナデ。内面ハケメ。外面ナデ。	灰黄色	精製土	良好	○古。
3169	壺形土器	18.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。口唇部竹管による刺突。	黄灰白色	〃	〃	○中。
3170	甕形土器	13.9	—	—	〃	茶灰色	細砂	〃	〃
3171	〃	15.2	—	—	〃	淡灰白色	〃	〃	〃
3172	鉢	15.0	—	—	○内外器表面剝落して調整不明。		〃	〃	〃
3173	〃	20.0	—	—	○内面ヘラケズリの後ナデ。		〃		〃
3174	壺形土器	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面シボリ。	灰褐色	〃		○新。
3175	〃	12.4	—	—	〃	〃	〃		○新、柱穴中。
3176	〃	11.1	—	—		黄灰色	〃		○新、覆土中。
3177	〃	19.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。口唇上面竹による刺突。	黄灰白色	〃	堅緻	○新。
3178	〃	13.6	6.0	24.7	○口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰色	〃		○煤付着。
3179	〃	11.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面丹塗り。	暗茶色	雲母多く含	堅緻	○煤付着、柱穴中
3180	〃	12.0	—	—	〃	灰黄色	大砂粒含		○煤付着。
3181	〃	15.2	—	—	〃	茶灰色	細砂		〃
3182	〃	13.9	—	—	〃	〃	〃		〃
3183	〃	13.8	—	—	〃	灰褐色	大砂粒含		〃
3184	〃	—	5.6	—	○底部ヘラミガキ。外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		〃
3185	高杯形土器	19.0	—	—	○杯体部ヘラケズリ。他はヘラミガキ。	淡赤褐色	精製土		〃
3186	〃	18.5	—	—	〃	赤灰色	〃		〃
3187	〃	15.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	赤灰褐色	〃		〃
3188	〃	—	7.9	—	○外面ヘラミガキ。	赤褐色	〃		〃
3189	飾り高杯形土器	—	—	—	○体部に刺突文。内面ナデ。	〃	細砂含む		○煤付着。柱穴中
3190	〃	—	10.5	—	○内面ヨコナデ。	茶灰色	〃		〃
3191	高杯形土器	—	11.5	—	○内面ヨコナデ。外面ハケメ。	暗黄褐色	精選土		○煤付着。
3192	〃	—	11.8	—	○内面ハケメ。外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		〃
3193	飾り高杯形土器	20.0	—	—	○口縁部竹管による刺突文。	赤褐色	〃		〃
3194	〃	—	18.9	—	○外面ヘラミガキ。内面ヨコナデ。	灰褐色	〃		〃
3195	高杯形土器	20.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	赤灰色	〃		〃
3196	〃	—	12.0	—	○4本の浅い沈線めぐる。	灰褐色	〃		〃
3197	〃	—	11.0	—	○外面ヘラミガキ。	黄灰色	〃		〃
3198	鉢	15.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	〃		〃
3199	〃	12.0	—	4.9	〃	暗茶色	細砂含む		〃
3200	〃	11.8	—	—	○内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	明黄灰色	〃		〃
3201	台付鉢形土器	10.9	3.1	6.9	○内面不定方向のハケメ。	黄色	精選土		〃
3202	鉢形形土器	10.9	3.9	6.3	○内面ナナメハケメ。外面不明。				〃
3203	〃	25.5	—	—	○内外面ハケメ。	暗灰褐色	細砂含		〃
3204	台付鉢形土器	13.6	—	—	○内面ヘラケズリの後ヘラミガキ。	淡灰黄色	〃		〃
3205	〃	—	10.0	—	○台内外面ヨコナデ。	黄灰色	大砂粒含む		○煤付着。柱穴中
3206	鉢形土器？	28.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	〃	細砂		○煤付着。
3207	鉢形土器	39.3	9.5	17.7	○内面ヘラミガキ。外面ハケメ。	〃	〃		〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3208	鉢形土器	34.6	11.5	25.6	○内面ヘラミガキの後ヘラミガキ。	暗灰褐色	細砂		○煤付着。柱穴中
3209	台付鉢形土器	—	5.2	—	○鉢部外面ヘラケズリ。	灰黄色	粗砂		○製塩土器。
3210	〃	—	4.8	—	○台外面押圧。	〃	粗砂多い		〃
3211	〃	4.0	—	—	○内面ナデ。鉢部外面ヘラケズリ。	〃	〃		〃
3212	〃	—	3.6	—	〃	〃	〃		〃

竪穴式住居—35（第332図）

3213	甕形土器	13.2	—	—					
3214	〃	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂含		
3215	〃	15.5	—	—	〃	淡灰白色	大砂粒含む		
3216	鉢形土器	18.6	—	—	○内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		
3217	高杯形土器	16.3	—	—		〃	砂粒多い		
3218	〃	—	—	—	○杯部内外面ヘラミガキ。	黄灰褐色	精選土		
3219	鉢形土器	9.3	—	—	○内外器表面剝落して調整不明。	暗灰褐色	〃		
3220	高杯形土器	—	9.8	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	灰褐色	〃		
3221	〃	—	10.6	—	〃	〃	〃		

竪穴式住居—35住居外周溝（第333・334図）

3222	壺形土器	15.0	7.3	—	○口縁部ヨコナデ。口縁外面一部ヘラミガキ	淡黄灰褐色	細砂		
3223	〃	17.6	—	—	〃	〃	〃		
3224	〃	—	4.4	—	○外面ヘラミガキ。内面板状工具によるナデ	淡黄赤褐色	精選土		
3225	甕形土器	15.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	淡黄灰褐色	細砂		
3226	〃	13.8	—	—	〃	灰黄色	〃		
3227	〃	15.3	—	—	〃	淡黄灰褐色	〃		○外面煤付着。
3228	〃	11.9	—	—	〃	〃	〃		〃
3229	〃	13.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	〃	〃		
3230	〃	20.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰褐色	〃		
3231	高杯形土器	20.6	—	—	○口縁部外面ヨコナデ。	淡黄茶褐色	精選土		
3232	手捏ね土器	4.5	2.2	2.0	○内外面ともに指頭による押圧。	灰黄褐色	細砂		
3233	甕形土器	—	4.5	—	○底部外面指頭による押圧。	淡黄灰褐色	〃		
3234	鉢形土器	20.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
3235	〃	18.9	5.8	8.3	○口縁部外面ヨコナデ。	暗灰褐色	〃		
3236	壺形土器	18.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面指頭による押圧	暗灰黄褐色	〃		
3237	甕形土器	16.8	5.4	—	○口縁部ヨコナデ。底部外面指頭による押圧	淡灰黄褐色	〃		
3238	〃	—	5.4	—	○底部外面指頭による押圧。	淡黄褐色	〃		
3239	〃	14.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰黄褐色	〃		
3240	〃	—	7.3	—	○外面ハケメ。	暗灰褐色	〃		
3241	鉢形土器	15.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色	〃		
3242	甕形土器	13.8	—	—	○外面肩部までヨコナデ。	黄灰色	〃		
3243	〃	13.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	〃		
3244	〃	—	5.6	—	○底部外面ヘラミガキ。	灰色	〃		
3245	鉢形土器	13.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	灰褐色	精選土		
3246	高杯形土器	—	9.4	—	○脚柱部外面ヘラによる面取り。	〃	〃		

竪穴式住居—36（第338・339図）

3247	鉢形土器		4.8		○底部は円板充塡。	灰褐色	砂粒多含	普通	○製塩土器。
3248	蓋形土器	13.0	—	4.35	○精製土器。頂部はヘラケズリ。黒斑あり。	明橙色	精良	良好	○鉢の蓋か？完形
3249	鉢形土器	9.8	4.3	6.5	○精製土器。底部は台状をなす。	黄橙白色	〃	〃	○復元実測。
3250	〃	10.6	3.7	6.9	○精製土器。	黄橙色	〃	〃	○完形片。
3251	〃	12.2	3.7	6.0	○精製土器。内面はハケ調整の後ヘラミガキ	黄橙白色	〃	〃	○完形品。
3252	〃	14.6	3.3	9.2	○精製土器。内外面共，ヘラミガキで仕上げる	明橙色	〃	〃	〃
3253	高杯形土器	13.8	—	—	○精製土器。脚部はさしこみ式。	黄橙色	〃	〃	
3254	〃	17.1	—	—	○精製土器。	明橙色	〃	〃	
3255	〃	16.0	—	—	○精製土器。脚部はさしこみ式でいびつ。	暗橙褐色	〃	〃	
3256	〃	17.0	—	—	○精製土器。	黄橙色	〃	〃	
3257	〃	19.0	—	—	〃	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3258	高杯形土器	17.8	—	—	○精製土器。体部外面はヨコナデ仕上げ。	黄橙色	精良	良好	
3259	〃	16.3	11.2	9.3	○精製土器。杯部下半は放射状のヘラミガキを施す。筒部は短く，ヘラケズリで面取り。	淡橙色	〃	〃	○完形片。
3260	〃	17.7	12.0	10.6	○精製土器。脚はさしこみ式。	明橙色	〃	〃	〃
3261	〃	17.4	—	—	〃	〃	〃	〃	○やや大型。
3262	〃	—	12.5	—	○精製土器。	〃	〃	〃	
3263	〃	—	14.9	—	〃	黄橙白色	〃	〃	
3264	〃	—	14.0	—	〃	〃	〃	〃	
3265	甕形土器	14.8	5.8	22.5	○外底部はユビナデ。	灰橙褐色	砂粒多含	普通	○完形片。煤付着
3266	〃	15.1	6.1	27.0	○内底部には爪の跡を残す。器壁は薄く仕上げられ，外面はタテナデ調整で仕上げられる。	黄白色	微砂多含	良好	○下半に煤付着。○完形片。
3267	鉢形土器	—	4.6	—		黄橙白色	粗砂多含	普通	○製塩土器。
3268	高杯形土器	13.9	—	—	○精製土器ではない。	橙白色	粗砂含	良好	
3269	甕形土器	15.5	4.5	21.2	○器表面は火を受けて剥落部が多い。	灰褐色	砂粒多含	〃	○完形品。
3270	〃	16.4	7.4	32.6	○体部上半はハケ，下半はそれをヘラミガキで消す。体部上位で人為的に破砕した痕跡がある。	橙白色	〃	〃	〃

竪穴式住居—37（第341・342図）

3271	壺形土器	—	—	—	○外面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。	灰橙褐色	微砂を含む	良好	
3272	〃	4.3	6.3	2.6	○内外面ともに押圧・ナデで仕上げる。	淡橙褐色	〃	〃	○完形品。黒斑。
3273	高杯形土器	28.4	—	—	○内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整。	橙褐色	〃	〃	
3274	鉢形土器	—	11.0	—	○内面はヘラケズリ。	黄白色	微砂多含	〃	
3275	〃	16.0	4.7	8.2	○内面は丁寧なヘラケズリ。	淡黄白色	〃	〃	
3276	〃	—	4.6	—		橙黄色	砂粒多含	〃	○製塩土器。
3277	〃	—	4.8	—		橙黄白色	〃	〃	〃
3278	〃	—	4.0	—	○円板充塡。	灰黒色	〃	〃	〃
3279	〃	—	3.7	—	〃	暗灰褐色	〃	〃	〃
3280	〃	—	4.6	—	〃	橙黄白色	〃	〃	〃
3281	〃	—	4.0	—		〃	〃	〃	〃
3282	〃	—	5.7	—		赤褐色	〃	〃	〃
3283	〃	—	4.0	—		黄褐色	〃	〃	〃
3284	〃	—	5.0	—		赤黄褐色	〃	〃	〃
3285	〃	—	3.8	—		灰黄褐色	〃	〃	〃
3286	甕形土器	—	3.5	—		淡黄褐色	〃	〃	〃
3287	〃	16.0	—	—	○内面には指頭押圧痕を残す。	明黄橙色	微砂多含	普通	○P3出土。煤付着。
3288	鉢形土器	—	4.0	—	○製塩土器。	赤褐色	粗砂多含	良好	○土壙出土。
3289	〃	19.0	—	—	○外面は丁寧なヘラミガキ調整。	黄褐色	微砂多含	〃	〃

竪穴式住居—38（第344図）

3290	高杯形土器	—	—	—	○口縁部外面に粗いクシガキ波状文を描く。	淡黄橙白色	微砂多含	普通	○器台の可能性あり。
3291	〃	26.0	—	—	○内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整を施す。	黄橙褐色	〃	〃	
3292	甕形土器	8.3	3.4	6.5	○体部外面はヘラミガキ。内面はヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒含む	良好	○ミニチュア土器。
3293	高杯形土器	—	13.2	—	○縦方向にヘラガキ条線を飾る。	黄褐色	砂粒多含	〃	○器台の可能性。

竪穴式住居—39（第350図）

3294	鉢形土器	8.2	2.8	4.4	○全体に丁寧なナデ調整で仕上げる。	明黄橙色	精良	軟質	○床面出土。
3295	高杯形土器		—	—	○内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整。	明橙黄色	〃	普通	○P1・2接合。
3296	〃	20.4	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	○中央穴出土。
3297	鉢形土器	13.9	5.2	12.75	○体部外面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。	黄褐色	微砂を含む	良好	○P3出土。完形。
3298	器台形土器	—	—	—	○凸帯上面に櫛歯様工具による刺突文を施す	明赤橙色	〃		○精製土器。
3299	高杯形土器	—	—	—		黄橙白色	〃	普通	〃
3300	〃	—	11.5	—		黄橙色	微砂多含	良好	
3301	鉢形土器	5.3	—	—	○体部下半はヘラケズリ。	黄白色	微砂を含む	〃	
3302	壺形土器	11.0	—	—		黄褐色	砂粒多含	〃	
3303	〃	13.0	—	—	○内面上位にヨコハケ調整痕を残す。	明橙色	微砂多含	〃	
3304	甕形土器	15.3	—	—	○口縁部には凹線5条をめぐらす。	明橙褐色	砂粒多含	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3305	甕形土器	15.0	—	—		淡橙黄色	微砂多含	良好	○P7出土。
3306	高杯形土器	23.6	—	—	○精製土器。	明橙色	〃	〃	○P4出土。
3307	器台形土器？	—	—	—	○口縁上端に竹管の刺突列点文をめぐらす。	黄橙白色	〃	軟質	○床面出土。

建物—13（第351図）

3308	壺形土器	12.0	—	—	○頸部内面シボリ。肩部外面ヘラミガキ。	灰橙色	細砂		

建物—14（第362図）

3309	甕形土器	13.2	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部外面ナデ。	灰白色	良好	良好	○1/8残存。
3310	壺形土器	—	6.6	—	○底面はナデか。体部外面ヘラミガキ。	淡灰褐色	石粒砂粒多	〃	○底部角に穿孔。
3311	台付鉢形土器	—	5.3	—	○内面ナデ。外面指頭圧痕顕著。脚端未調整	鈍い黄橙色	石粒多	〃	○製塩土器。

建物—15（第363図）

3312	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	浅黄橙色	砂粒細砂多	良好	○小破片。
3313	壺形土器	—	6.5	—	○底面ナデ。外面ハケの後ヘラミガキ。	黒褐色	〃	良好堅	○1/3残存。

柱列—2（第365図）

3314	壺形土器	13.0	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部外面ハケ内面ヘラケズリ。	明褐色	砂粒細砂多	良好堅	○1/8残存。
3315	〃	—	—	—	〃	灰白色	〃	良好	○小破片。
3316	甕形土器	—	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部外ハケ内ヘラケズリ	明褐灰色	〃	〃	〃
3317	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。立上がり中央で少し屈折	鈍い褐色	細砂多	良好堅	〃
3318	甕形土器？	—	—	—	○底部周辺オサエ。外面擦痕。内面強いナデ	浅黄橙色	砂粒細砂多	良好	〃
3319	壺形土器	—	2.55	2.0	○3方向穿孔。全面オサエ，ナデ。	黒褐色	〃	〃	○ほぼ完存。
3320	台付鉢形土器	—	—	—	○内外面ナデ。	浅黄橙色	石粒砂粒多	やや甘	○小破片。
3321	高杯形土器	—	—	—	○口縁外面縦方向，内面横方向のヘラミガキ	〃	砂粒細砂多	良好	〃
3322	〃	—	—	—	○内外面剥落のため調整手法不明。	灰白色	〃	やや甘	〃
3323	高杯形土器？	—	—	—	○外面ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	褐灰色	〃	良好	〃
3324	高杯形土器	—	—	—	○円板充填法。外面ヘラミガキか？	浅黄橙色	〃	〃	
3325	〃	—	—	—	○筒内面ナデ。裾ヨコナデ。杯部内面ナデ。	〃	〃	〃	
3326	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。脚端に凹線2条。	鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
3327	〃	—	—	—	○端部ヨコナデ。内面ナデ。脚端沈線3条。	浅黄橙色	細砂多	〃	〃

井戸—10（第368図）

3328	壺形土器	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部太めのハケメ。	淡灰色	細砂含む		
3329	〃	19.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部ハケメとミガキ。	黄灰色	細砂		
3330	〃	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰色	〃		
3331	鉢形土器	34.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面体部ヘラケズリ。	黄灰色	〃		

井戸—11（第369～372図）

3332	壺形土器	18.1	4.8	27.6	○底部内面ナデアゲ。底部外面ヘラミガキ。	黄褐色	細砂		○頸部にヘラ痕。
3333	甕形土器	16.0	6.1	26.2	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	淡黄褐色	〃		○外面煤付着。
3334	〃	15.1	4.8	24.6	〃	〃	〃		〃
3335	〃	17.4	—	—	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	赤褐色	大砂粒含む		〃
3336	〃	16.8	—	—	〃	灰褐色	砂粒含む		〃
3337	〃	14.1	5.1	25.1	○口縁部ヨコナデ。底部焼成後穿孔。	淡黄赤褐色	〃		○胴部外煤付着。
3338	〃	15.2	—	—	○外面下半ヘラミガキ。	淡黄褐色	細砂		○外面煤付着。
3339	〃	17.1	5.4	23.0	○口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色	〃		〃
3340	〃	11.6	4.2	17.2	〃	赤褐色	〃		○胴部煤付着。
3341	〃	12.5	4.2	18.0	○外面ハケメ。底部指頭圧痕。	淡黄褐色	〃		○外面煤付着。
3342	〃	13.3	4.5	17.9	○口縁端部沈線1本めぐる。	〃	〃		〃
3343	〃	9.9	4.4	15.8	○口縁端部補修痕1か所。	〃	〃		〃
3344	〃	14.7	—	—	○口縁端部沈線1本めぐる。		〃		
3345	〃	13.2	3.7	19.5	○頸部内面指頭圧痕。	暗褐色	〃		○外面煤付着。
3346	鉢形土器	30.4	—	—	○内外面ともヘラミガキ。口縁端部凹線3本	黄灰色	〃		
3347	〃	—	8.8	—	○外面ハケメ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ	淡黄赤褐色	砂粒含む		
3348	台付鉢形土器	11.5	4.4	7.9	○外面ヒビ割レ。内面ナデ。	淡黄褐色	細砂		
3349	〃	11.8	5.3	7.1	○外面ヘラケズリ。内面ハケメ。	〃	〃		
3350	〃	11.7	5.4	8.5	○外面ハケメ後ナデ。内面ナデアゲ。	〃	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3351	台付鉢形土器	8.4	3.8	6.0	○手捏ね土器。	淡黄褐色	細砂		
3352	鉢形土器	15.7	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ケズリ後ヘラミガキ	〃	〃		
3353	〃	18.0	—	—	○外面ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ。	黄灰色	〃		
3354	〃	16.0	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	茶灰色	細砂含む		
3355	台付鉢形土器	—	10.8	—	○外面上部ヘラミガキ。	灰黄色	〃		
3356	高杯形土器	26.0	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	淡黄灰褐色	〃		
3357	〃	27.4	—	—	○内外面ともハケメ後ヘラミガキ。	淡黄赤褐色	砂粒含む		
3358	〃	26.0	16.7	17.1	○口縁部内面沈線5本。脚部穿孔4か所。	淡灰黄褐色	細砂		
3359	〃	—	14.8	—	○外面ミガキ。内面シボリメ。	淡黄褐色	〃		○黒斑。
3360	小型壺形土器	4.3	2.1	5.4	○手捏ね土器。	黄灰色	〃		
3361	〃	4.1	2.8	6.5	〃	〃	〃		
3362	小型器台形土器	6.0	7.0	5.0	〃	〃	〃		
3363	高杯形土器	13.4	—	—	○口縁外面ヨコナデ。	淡黄褐色	〃		
3364	〃	12.1	—	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄灰褐色	〃		
3365	〃	12.1	11.2	11.5	○口縁部ヨコナデ。脚外面斜位ナデ。	淡黄褐色	〃		
3366	〃	20.9	13.6	13.8	○口縁部ヨコナデ。脚部穿孔4か所。	〃	〃		
3367	台付鉢形土器	12.0	—	—	○外面ヘラケズリ。	黄灰色	粗砂		○製塩土器。
3368	〃	12.2	—	—	〃	〃	〃		〃
3369	〃	—	4.6	—	〃	〃	〃		〃
3370	〃	—	5.2	—	〃	灰茶色	〃		〃

井戸—12（第373図）

3371	壺形土器	16.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂		
3372	〃	16.0	—	—	○頸部以下ヘラミガキ。内面ナデ。	灰色	〃		
3373	〃	—	7.4	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3374	台付鉢形土器	—	3.8	—	○外面ヘラケズリ。	淡灰白色	〃		

井戸—13（第374図）

3375	甕形土器	10.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	細砂		

井戸—14（第375図）

3376	壺形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	黒褐色		良好	○水鳥の線刻。
3377	〃	19.0	—	—	○頸部内外ともヘラミガキ。	灰褐色		〃	
3378	甕形土器	17.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃		〃	
3379	〃	16.0	—	—	○口縁部肥厚気味。ヨコナデ。	茶灰褐色		〃	
3380	〃	13.0	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	黒灰褐色		〃	
3381	高杯形土器	14.4	—	—	○内外面ヘラミガキ。	淡灰褐色		〃	
3382	〃	—	—	—	○脚部に3段のヘラガキ施文。	〃		〃	
3383	〃	—	9.0	—	○孔は2段。	〃		〃	
3384	〃	—	12.0	—	○ヘラガキによる施文。	淡赤褐色		〃	
3385	鉢形土器	12.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡赤黄褐色		〃	○製塩土器。
3386	〃	—	5.0	—	○脚部ヘラケズリ，ナデ，オサエ。	〃		〃	〃
3387	〃	—	4.7	—		〃		〃	〃
3388	〃	—	4.0	—		〃		〃	〃
3389	〃	—	4.7	—		〃		〃	〃

井戸—15（第377・378図）

3390	高杯形土器	19.6	—	—	○体部外面は浅い凹線がめぐる。	明橙色	微砂含む	良好	
3391	〃	—	14.3	—	○脚部には2段4孔の透孔めぐる。	黄橙色	微砂多含	普通	
3392	〃	—	11.5	—	○脚部外面は粗いハケ調整。	白黄橙色	砂粒多含	良好	○高杯の可能性。
3393	鉢形土器	—	5.0	—	○底部は円板充填。	橙黄色	〃	〃	○製塩土器。
3394	〃	—	5.8	—	〃	黄橙色	〃	〃	〃
3395	〃	—	5.6	—	〃	赤褐色	〃	〃	〃
3396	高杯形土器	10.3	7.45	10.45	○全体的にナデ仕上げ。	橙褐白色	微砂多含	〃	○完形品。
3397	壺形土器	12.0	—	—	○内面に接合痕を残す。	淡黄白色	〃	普通	
3398	〃	—	—	—	○体部はタテハケ調整後タテミガキ。	淡橙褐色	微砂含む	良好	○復元実測。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3399	壺形土器	—	—	—	○頸部下端にキガミメ凸帯をめぐらす。	橙黄白色	粗砂多含	良好	○復元実測。
3400	鉢形土器	12.1	—	—	○内面は平滑なナデ仕上げ。	明橙白色	精良	普通	
3401	〃	16.2	—	—	○外面にはタール状となった煤が付着する。	明黄橙色	〃	良好	○穿孔2(1対)。
3402	〃	17.3	—	—	○体部下半は斜行タタキのあと粗いタテハケ	淡橙褐色	砂粒多含	〃	〃
3403	〃	19.0	6.6	9.7	○体部外面はヘラミガキ調整を基調とする。	黄橙白色	微砂多含	〃	○復元実測。
3404	〃	13.1	—	—	○体部には横方向のタタキ調整痕を残す。	黄白色	精良	〃	
3405	甕形土器	6.0	2.4	9.0	○全面鈍い光沢を放つ。	黒色	微砂含む	〃	○完形品。
3406	〃	8.9	—	—	○体部外面はカキメ風のタテ方向の調整。	橙褐色	砂粒含	〃	
3407	鉢形土器	34.1	—	—	○内外面共に粗いハケ調整を施す。	黄褐白色	砂粒多含	〃	
3408	甕形土器	13.4	—	—	○体部外面はタテハケ調整を施す。	灰褐色	微砂多含	〃	○煤付着。
3409	〃	15.4	—	—	〃	黄灰褐色	〃	〃	○タール状煤付着。
3410	〃	16.5	—	—	〃	橙褐色	砂粒多含	〃	○口縁部に煤付着。
3411	〃	15.2	—	—	〃	黄褐白色	〃	〃	○体部に煤付着。
3412	〃	18.0	—	—	○体部はヨコ・斜行ハケ調整を施す。	黄橙白色	〃	〃	○煤付着。
3413	〃	—	5.2	—	○体部内面はカキメ風ヘラケズリ調整を施す	黒褐色	微砂多含	〃	○内面に炭化米付着。
3414	〃	—	6.3	—	○外底部はあげ底。外縁には指頭痕がめぐる	灰褐色	砂粒多含	〃	○煤付着。

井戸—16（第381～392図）

3415	高杯形土器	13.1	—	—	○口縁端部は平坦。	灰褐色	砂粒を含む	やや軟	
3416	〃	16.6	—	—	○指頭オサエ痕がめぐる。	黄橙白色	〃	普通	
3417	〃	16.9	—	—	○口縁部肥厚。	暗茶橙色	〃	良好	
3418	〃	16.8	—	—		黄橙色	比較的良好	〃	○脚部は太い。
3419	〃	14.1	—	—	○器表面ナデ調整。	橙褐色	砂粒微砂	普通	
3420	〃	24.8	—	—	○外面はナデ調整。口縁内面はヨコナデ。	暗黄褐白色	砂粒多含	良好	
3421	〃	25.3	—	—		白黄色	精良	〃	
3422	〃	26.4	—	—	○杯部外面はヘラケズリ風ヘラミガキ。	淡黄橙色	砂粒を含む	〃	○内面火を受けすすける。
3423	〃	27.6	—	—	○口縁と杯部の境直下外面はヘラケズリ。	橙褐色	砂粒多含	〃	○黒斑。
3424	〃	27.4	—	—	○外表面剝落著しい。口縁部内外面ヨコナデ	淡黄灰白色	微砂多含	〃	○口縁内面に黒斑
3425	〃	28.4	—	—	○口杯部外面器表荒れ。	灰白色	粗砂多含	〃	○黒斑部分大。
3426	〃	28.9	—	—	○内面は横位の細かいヘラミガキ調整。	黄白色	微砂を含む	〃	
3427	〃	27.8	—	—	○二次焼成による器表面剝落著しい。	黄橙白色	砂粒多含	普通	○口縁内外面に煤付着。
3428	〃	29.2	—	—	○杯部内外面ヨコナデの後ミガキを施す。	黄白色	微砂多含	良好	○内面に黒斑。
3429	〃	—	—	—	○内面にシボリメ残る。外面タテヘラミガキ	黄橙白色	緻密	軟	
3430	〃	—	9.3	—	○内面にシボリメ残る。	黄灰白色	微砂多含	良好	○煤付着。
3431	〃	—	9.8	—	○内面上位にシボリメ残る。9本1単位のクシガキ波状文を脚端にめぐらす。透孔は3孔穿孔。	黄橙白色	微砂を含む	やや軟	○円板充塡。
3432	〃	—	—	—	○分銅形土製品の縁辺にみられる細かい刺突文を3重にめぐらす。	〃	精良	良好	
3433	〃	—	10.8	—	○内面上位にシボリメ残る。	暗橙褐色	砂粒多含	良好	○円板充塡。
3434	〃	—	10.4	—	○3孔1組の透孔を3か所にめぐらす。	明白橙色	精製土	普通	
3435	〃	—	11.8	—	○内面上半にシボリメ残る。	黄白色	砂粒多含	良好	○円板充塡。
3436	〃	—	—	—	○内面はシボリメ痕をよく残す。	灰白色	砂粒を含む	普通	〃
3437	〃	—	10.2	—		白淡黄橙色	砂粒多含	良好	
3438	〃	—	14.7	—	○外面ヨコナデ仕上げ。	淡灰黄褐色	微砂粒多含	〃	○口縁に煤付着。
3439	〃	—	15.2	—	○外面ヘラミガキ。内面ヨコナデ。	暗灰褐色	砂粒多含	〃	
3440	〃	—	—	—	○外面タテヘラミガキ。内面にシボリメ残る	黄白色	緻密	良好	
3441	〃	—	18.1	—	○2孔で1組の透孔。	白褐色	砂粒多含	〃	○蓋転用→煤付着(内面)。
3442	〃	—	16.4	—	○穿し穴は4か所。内面上位にシボリメ。	黄灰色	〃	〃	○円板充塡。
3443	〃	—	14.8	—	○外面ヘラミガキ。内面にシボリメ残る。	灰橙褐色	砂粒わずか	〃	
3444	〃	—	14.5	—	○透孔は2孔で1組4か所，脚外面上半はタテハケメ。浅い凹線文をめぐらす。	橙黄色	微砂多含	普通	○蓋に転用→煤付着。
3445	〃	—	—	—		灰白色	砂粒を含む	良好	
3446	〃	—	18.3	—	○透孔は4孔以上穿孔。	黄橙白色	精良	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3447	高杯形土器	27.1	18.0	21.5	○杯部は外面ヨコナデ調整、下半及び内面はヘラミガキで仕上げる。脚部は粗いタテハケ調整。数多い透孔が4段にわたってめぐる。	黄橙色	精良	普通	○完形片。
3448	〃	30.1	17.8	19.6	○外面および、杯部内面は丁寧なヘラミガキ調整で仕上げる。脚部内面は横位のヘラケズリ。	黄白色	砂粒を含む	良好	○完形品。
3449	〃	28.9	17.5	21.0	○脚部はタテハケ調整後、縦位のヘラミガキ調整を加える。内面にシボリメ痕あり。	〃	微砂砂粒多含	〃	〃
3450	〃	—	18.4	—	○外面透孔付近まではヘラケズリ。	明赤橙色	精製粘土	不良	
3451	〃	—	14.1	—	○脚部外面タテハケ後ヘラミガキ。シボリ有	黄橙白色	微砂を含む	普通	○脚部約½に黒斑。
3452	器台形土器	20.7	18.4	15.8	○下半には方形の透孔を4か所、2個1組の円孔を3か所をめぐらす。口縁部には雑な鋸歯文、下位にはすり消された鋸歯文痕跡あり。	灰褐色	砂粒を含む	〃	
3453 a	壺形土器	14.4	—	—	○体部の最大径部位のやや上にケズリダシ凸帯を2条めぐらし3本1組のキザミメをもつ棒状浮文を6か所に飾る。	黄橙色	精製粘土	良好	○精製土器。無頸壺。
3453 b	〃	—	16.9	—	○3453aと同一個体とみられる。内面は横位のハケ調整。貼り付け凸帯と脚端の間には、3本1組の棒状浮文を4か所めぐらす。	〃	〃	〃	〃
3454	高杯形土器	—	—	—		橙白色	微砂を含む	普通	○筒部。
3455	壺形土器	10.4	—	—	○口縁部は浅い凹線がめぐる。	黄橙色	〃	良好	
3456	〃	13.1	—	—	○外面にタール状物質付着。	黄橙白色	微砂多含	普通	
3457	〃	15.0	—	—	○頸部外面タテハケの後ヨコナデ仕上げ。	淡灰橙褐色	砂粒多含	良好	
3458	〃	15.0	—	—	○口縁部は浅い凹線がめぐる。	黄白色	石英多含	普通	
3459	〃	18.3	—	—	○頸部外面に煤付着。	黄橙白色	砂粒多含	良好	
3460	〃	13.8	—	—	○頸部と体部の境やや下位や内面にヘラ刺突文。黄白色。	〃	〃	不良	
3461	〃	14.7	—	—	○内面に頸部接合痕。	淡橙白色	微砂多含	普通	
3462	〃	14.6	8.7	23.9	○外面器表荒れ。内面ヘラケズリか? 完形片	黄白色	砂粒を含む	良好	○体部中位に黒斑。
3463	〃	14.1	—	—	○棒状刺突文を内外面にめぐらす。	〃	微砂多含	〃	
3464	〃	—	—	—	○頸部はタテナデの後浅い凹線。	〃	〃	〃	
3465	〃	10.3	16.4	27.2	○赤色塗彩は口縁上端面、頸部と体部の境の凸帯の端面、体部上位の溝文、台部上位の円筒部の凹線文部分、台端部の4か所にみられ、主に指頭によった塗彩を行なっている。溝文の部分は塗彩後、隙間をヘラミガキ仕上げ。	白黄灰色	砂粒多含	〃	○完形片。台付長頸壺。
3466	〃	13.0	5.6	26.1	○外底部不調整。全体にヘラミガキを基調とし内面は指頭押圧痕。ヘラケズリ痕を残す。	黄橙白色	微砂多含	〃	○完形片。3452と同質。
3467	〃	18.6	8.7	35.8	○体部上位付近はハケメの後粗いヘラミガキを施す。体部外面下位付近と外底部に黒斑。	淡橙黄色	砂粒多含	〃	○体部中位に煤付着。完形片。
3468	〃	13.0	13.5	31.2	○口縁上面部に6個1組の竹管文を6か所めぐらす。台部に穿孔6個。	黄橙白色	〃	普通	〃
3469	〃	14.0	—	—	○頸部に螺旋状凹線。頸部内面上位シボリメ	〃	微砂多含	良好	
3470	長頸壺形土器	13.1	7.3	30.0	○体部と頸部の境に列点文をめぐらす。頸部内面下半にシボリメが残る。	〃	〃	〃	○体部下半に黒斑。
3471	〃	15.2	7.3	28.2	○頸部の一部と体部最大径部分に煤付着。頸部と体部の境に列点文。頸部内面下位に接合痕。	〃	〃	〃	
3472	壺形土器	—	8.1	—	○体部外面はハケメ調整後部分的にヘラミガキ。	淡黄白色	砂粒多含	〃	○外面に黒斑。
3473	〃	—	10.6	—	○二次焼成により外表面剥落。	淡黄白色	粗砂多含	普通	○外面に煤付着。
3474	〃	—	5.3	—	○外面一部器表剥落。煤付着。	黄橙色	微砂多含	〃	
3475	台付鉢形土器	—	9.6	—	○底端部上面タール状物質付着。内面ミガキ	黒灰色	砂粒を含む	良好	○円板充塡。
3476	蓋形土器	—	—	—	○内面にシボリメ。	淡橙褐色	精製土	普通	
3477	小型鉢形土器	—	2.9	—		黄橙白色	微砂を含む	良好	
3478		—	7.9	—	○外面はヨコナデの後粗いタテミガキ。	黄白色	微粗砂多含	〃	
3479	蓋形土器	—	13.3	—	○外面上半にシボリの際の凹凸が残る。内面にシボリメ残る。頂上部は丁寧なナデ仕上げ。	淡黄褐白色	精良	普通	○底端部付近に煤付着。
3480	小型鉢形土器	9.1	3.7	5.0		白橙色	砂粒僅小	良好	
3481	〃	16.0	—	—		橙黄白色	砂粒多含	〃	
3482	高杯形土器	10.0	6.0	8.8	○器表外面はナデ調整。	黄白色	精良土	軟	○復元実測。

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
3483	高杯形土器	12.3	5.9	8.4		黄褐白色	微粗砂含む	普通	
3484	〃	10.7	—	—	○体部外面磨滅。	明赤橙色	精良緻密	軟	
3485	〃	8.7	6.5	9.7	○鉢部外面斜め方向のハケ調整。	白黄橙褐色	微粗砂含む	普通	
3486	〃	11.9	7.3	11.0	○外面は弱いタテハケ、ナデ仕上げ。	淡赤橙色	砂粒多含	〃	○器表内面磨滅。
3487	〃	—	7.0	—	○外面軽い調整(ハケ?)。内面下半ヨコハケ	灰黄白色	微砂多含	良好	
3488	鉢形土器	12.2	5.4	11.0	○外面底部付近は火を受け，赤色を呈す。	黄白色	粗砂を含む	〃	○外面炭化物付着。
3489	〃	14.2	—	—	○口縁から体部上位にかけての外面に黒斑。	〃	微粗砂多含		
3490	〃	14.8	6.2	10.4	○頸部と体部境に穿孔2か所。表面大半磨滅	黄橙色		良好	○完形品。
3491	〃	15.3	5.8	12.2	○外面下半ヨコナデ後ヘラミガキ。内面ナデ	暗黄白色	微砂を含む	普通	
3492	〃	14.9	5.3	12.5	○口縁と体部の境に穿孔2か所。	淡褐灰色	微砂多含	〃	
3493	〃	15.6	5.6	10.2	○口縁と体部の境やや下位に2個1組穿孔2か所。	赤橙色	粗砂多含	良好	
3494	〃	14.2	7.6	14.6	○口縁と体部の境に穿孔2か所。	灰黄白色	砂粒多含		○黒斑。
3495	〃	17.5	8.0	14.3	○口縁上端面は浅い凹線文がめぐり丸味をもつ体部下半はヘラケズリ調整，底部は厚い。	黄橙白色	〃	良好	○完形品。
3496	〃	18.4	8.8	13.3	○歪みの多い完形。	黄白色	〃	〃	○器表外面剥落。
3497	〃	17.6	—	—	○口縁部と体部の境付近に黒斑。	〃	微砂多含	〃	○完形。
3498	〃	19.5	—	—	○体部最大形やや上位に黒斑。	黄橙白色	〃	〃	
3499	〃	21.6	—	—	○体部上位は横位のヘラミガキ調整。	黄白色	砂粒多含	〃	
3500	〃	17.8	8.5	16.7	○外底部磨滅。	黄橙色	〃	普通	○完形品。
3501	〃	20.0	—	—	○体部外面は細かいヘラミガキ。	橙白色	〃	〃	○円板充填。
3502	〃	19.6	7.6	13.6	○体部外面最大径付近より下位は細かいハケメ。	黄橙色	〃	良好	○外底部に黒斑。
3503	〃	20.5	9.5	19.9	○火を受けて器表面剥落。	黄橙白色	長石多含	普通	
3504	台付鉢形土器	12.7	3.7	16.3	○体部外面の大半は縦位のヘラケズリ，内面上位は細かい横位のハケ調整を施す。	灰褐色	砂粒多含	良好	○完形片。底部は円板充填。
3505	〃	12.3	4.6	16.8	○体部外面はヘラケズリ。	〃	〃	やや良	○完形片。
3506	〃	12.4	4.8	16.8	○体部外面はヘラケズリ調整。内面はかなり下位まで恣意的なハケ調整。	〃	〃	良好	〃
3507	〃	12.2	4.9	17.5	○内面の大半はハケ調整を施す。	白褐色	〃	〃	○完形片。
3508	〃	12.5	—	—	○外面器表うすく剥落。	淡黄白色	〃	〃	○外面煤付着。
3509	〃	10.8	—	—	○内面ナデアゲ。	褐灰色	〃		
3510	—	5.6	—	—	○内面ナデ。	〃	〃	良好	
3511	台付鉢形土器	12.8	—	—	○外面上半は不調整。	暗赤灰色	〃	普通	
3512	〃	13.8	—	—	○内面上位はヨコハケ、下半はナデアゲ。	灰橙色	〃	〃	○口径は大きい。
3513	〃	—	4.0	—	○外底部中央は棒状工具で穿孔。	黄白色	〃	良好	
3514	〃	—	5.2	—	○外面指頭圧痕。黒斑状煤付着部分あり。	灰黄白色	〃	〃	○小型鉢か?
3515	〃	—	5.0	—	○内面はナデアゲ痕を残す。	黄白色	〃	〃	
3516	〃	—	4.2	—		灰黒色	〃	〃	
3517	〃	—	5.5	—		灰褐色	〃	〃	
3518	〃	—	4.8	—		橙黄白色	〃	〃	○黒斑あり。
3519	〃	—	5.3	—		赤橙色	〃	〃	
3520	〃	—	5.2	—		黒灰色	〃	〃	
3521	〃	—	5.4	—		黄橙白色	〃	〃	
3522	〃	—	5.9	—		〃	〃	〃	
3523	〃	—	5.4	—		黄白色	〃	〃	
3524	〃	—	5.2	—		暗黄白色	〃	〃	
3525	〃	—	5.6	—		橙白色	〃	〃	
3526	〃	—	5.0	—		黒褐色	〃	〃	
3527	〃	—	5.3	—		赤黄色	〃	〃	
3528	〃	—	5.8	—		赤褐色	〃	〃	
3529	〃	—	4.8	—		赤橙白色	〃	〃	○部分的に煤付着。
3530	〃	—	4.6	—		黒灰色	〃	〃	
3531	〃	—	5.0	—		黒褐色	〃	〃	
3532	〃	—	5.1	—		黒灰色	〃	〃	
3533	〃	—	5.1	—		黄橙白色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3534	台付鉢形土器	—	6.0	—	○脚部外面圧痕多く残す。	黄白色	砂粒多含	良好	
3535	〃	—	5.1	—	○内面ナデ。	〃	〃	〃	
3536	〃	—	5.5	—	○内壁オサエ。	〃	〃	〃	○外面に黒斑。
3537	〃	—	5.1	—		黄橙白色	〃	〃	○製塩土器。
3538	〃	—	5.0	—		黄白色	〃	〃	
3539	〃	—	5.1	—	○内面ナデアゲ。	灰黒色	〃	〃	
3540	〃	—	6.2	—		灰褐色			
3541	小型甕形土器	6.1	—	7.5	○体部内面ユビナデ。口縁と体部境穿孔1。	橙灰色	微粗砂多含	良好	○ミニチュア土器
3542	〃	8.6	—	—	○口縁と体部の境やや下位内面にヘラ先痕。	黄橙白色	微砂を含む	〃	
3543	〃	10.4	—	—		〃	〃	普通	
3544	〃	10.8	—	—	○体部外面は粗いナデ調整。	暗黄灰色	砂粒多含	良好	○外面に煤付着。
3545	甕形土器	11.0	5.1	18.0	○外底部ヘラケズリ。	黄橙白色	〃	〃	○完形片。
3546	〃	9.8	4.9	13.0	○外面に多量の煤が付着し，表面剥落。	暗褐色	〃	〃	○完形品。
3547	〃	12.5	5.6	14.0	○外底部に布目圧痕を残す。	灰黄褐色	〃	普通	〃
3548	〃	14.6	4.8	17.0	○器壁は極めてうすい。体部下半器表荒れ。	黄白色	〃	やや良	〃
3549	〃	13.2	5.8	19.9	○体部外面は粗いタテハケメ(ワラ状)。	黒褐色	〃	良好	〃
3550	〃	12.3	5.6	20.6	○加熱による器表のいたみ激しい。	〃	〃	二次的	○煤多量に付着。
3551	〃	11.7	5.0	21.3	○外面の大半に多量の煤付着。外底部不調整。	橙黄色	〃	良好	○完形品。
3552	〃	12.2	5.0	21.2	○体部に煤付着。器表荒れ。	黄褐白色		〃	○完形片。
3553	〃	11.4	4.7	21.6	○体部外面はナデ調整。外表面の剥落目立つ	灰黒褐色	微粗砂含む	普通	○外面に煤付着。
3554	〃	13.4	5.5	21.9	○体部上半は細いハケメ。下半は粗いハケメ	黄白色	砂粒多含	良好	○体部中位に黒斑
3555	〃	14.2	5.0	22.4	○体部最大径付近より下位に煤付着。	淡橙褐色	微粗砂含む	やや良	○完形片。
3556	〃	12.3	—	—	○口縁部体部中央部に煤付着。	黄橙白色	砂粒多含	良好	
3557	〃	13.9	—	—		暗褐黄色	微粗砂多含	軟	
3558	〃	14.4	—	—		黄白色	微砂を含む	〃	
3559	〃	12.8	—	—		灰黒褐色	微砂多含	良好	
3560	〃	13.4	—	—	○外底部は円板で，指頭押圧痕がめぐる。	黄橙色	砂粒多含	〃	○完形片。
3561	〃	13.3	5.5	23.4		淡黄白色	〃	〃	○復元実測。
3562	〃	13.3	—	20.2	○外面器表荒れ剥落。	淡赤橙色	〃	〃	○二次焼成を受ける。
3563	〃	16.4	—	—	○外面器表剥落。煤付着タール状光沢あり	淡灰褐色	微砂多含	〃	○完形片。
3564	〃	15.2	7.0	23.3	○外面全面に煤付着。外底部不調整。	淡黄橙白色	砂粒多含	普通	
3565	〃	15.6	—	—	○体部上半部に黒斑。煤付着。	黄白色	〃	〃	
3566	〃	11.8	—	—		黄橙白色	微砂多含	〃	
3567	〃	13.6	—	—		〃	砂粒多含	良好	
3568	〃	14.4	—	—	○外面煤付着。器表面の剥落目立つ。	黄白色	砂粒を含む	〃	
3569	〃	14.8	—	—	○口縁部は指頭オサエ痕を多く残す。	灰褐色	微砂を含む	〃	
3570	〃	—	6.3	—	○器表面は全体的に磨滅。内底部はオサエ。	暗灰色	微粗砂多含	普通	
3571	〃	—	7.5	—	○外底部あげ底。ナデ仕上げ。	赤橙褐色	砂粒を含む	〃	○完形片。
3572	〃	14.6	6.0	23.4	○体部上半に煤付着。	橙黄白色	砂粒多含	良好	〃
3573	〃	15.9	5.5	26.5	○体外面に煤付着。外底部はハケメ。	黄白色	〃	普通	〃
3574	〃	15.1	6.6	26.9		黄橙白色	〃	良好	
3575	〃	16.0	—	—		黄白色	微砂多含	軟	○黒斑。
3576	〃	14.5	—	—	○体部は整った倒卵形を示す。底部はうすい	黄褐白色	粗砂多含	良好	○完形片。
3577	〃	14.4	5.8	27.1	○体部外面煤付着。器壁も荒れる。	灰橙褐色	〃	〃	
3578	〃	15.4	—	—	○体部外面まばらなタテハケの後ナデ調整。	黄橙色	砂粒多含	〃	○体部内面に煤付着。
3579	〃	16.0	—	27.9	○体部外面煤多量に付着。	淡黄褐色	〃	〃	
3580	〃	17.5	—	—		黄白色	微砂多含	〃	
3581	〃	15.9	—	—	○体部外面約¼に煤付着。	橙灰色	砂粒多含	〃	
3582	〃	16.5	6.1	30.6	○体部最大径より下位と口縁外面に煤付着。	淡橙褐色	微砂多含	〃	○器表部分的に剥落。
3583	〃	16.3	7.1	30.4	○体部外面下半器表荒れ。内面下半煤付着。	黄白色	砂粒多含	〃	
3584	〃	17.3	7.0	32.5	○体部外面煤付着。外底部軽いナデ。	黄橙白色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
井戸—17（第394～398図）									
3585	高杯形土器	13.5	6.8	9.5	○脚端に押圧痕。脚部内面にはシボリメ	明黄橙色	砂粒多含	普通	○円板充塡。
3586	〃	19.8	—	—	○杯部外面はハケメ調整の後ヘラミガキ。	淡橙黄色	砂粒を含む	良好	
3587	〃	19.0	—	—	○口縁上端面にごく浅い凹線を3条めぐらす	淡橙黄白色	〃	〃	
3588	〃	25.8	—	—		橙褐色	砂粒多含	不良	○器表面磨滅。
3589	〃	—	—	—	○脚部上位にクシガキ平行沈線を描く。	暗灰褐色	粗砂多含	普通	○円板充塡。
3590	〃	—	10.7	—		淡橙白色	砂粒多含	〃	
3591	〃	30.0	—	—	○内外面共に丁寧なヘラミガキ調整を施す。	白橙色	〃	良好	○杯部完形品。
3592	〃	—	—	—	○脚部内面にシボリメを残す。円板充塡。	黄褐白色	〃	〃	
3593	〃	—	13.4	—	〃	黄白色	微砂含む	〃	○脚部完形品。
3594	〃	19.5	12.6	14.4	○全面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。		精製土	〃	○飾り高杯。完形品。
3595	〃	19.0	8.6	14.0	○脚部下位にはタテハケ後クシガキ文を加える	黄橙白色	石英粒多含	〃	○完形片。
3596	鉢形土器	12.2	—	—		黄橙色	砂粒多含	〃	○製塩土器。
3597	〃	14.9	—	—		灰褐色	〃		〃
3598	〃	—	4.0	—		黄橙白色	〃	普通	○脚部完存。
3599	〃	—	3.0	—	○2個の穿孔あり。	橙白色	〃	〃	○脚部完。製塩土器
3600	〃	—	5.2	—	○脚端は平たく，幅広い。	黄橙色		良好	○脚部完存。
3601	〃	—	3.9	—		〃		〃	〃
3602	〃	—	4.5	—		赤橙白色		〃	〃
3603	〃	11.3	6.3	7.9	○体部には黄白色の斑紋がみられる。	赤橙色	粗砂多含	〃	○完形品。二次焼成。
3604	〃	13.5	—	—	○外部外面はヨコナデ。	淡褐灰色	砂粒を含む	〃	
3605	〃	15.6	—	—	○体部外面はナデ調整の後にヘラミガキを施す。	淡暗灰色	砂粒多含	普通	○器表面磨滅。
3606	甕形土器	9.2	4.0	8.6	○台付に穿孔。体部内外面共ヘラミガキ調整	黄白色	微砂含む	良好	○完形品。
3607	鉢形土器	14.8	—	—	○口縁部と体部の境に穿孔（現存2個）。	褐灰色	砂粒を含む	〃	
3608	〃	17.8	—	—		赤黄白色	砂粒多含	普通	
3609	壺形土器	8.8	4.9	14.5	○体部上位ヘラミガキ，下半はタテハケ調整	橙褐色	〃	〃	○完形品。
3610	〃	10.5	5.2	23.8	○体部下半は火を受け器表が剝落，赤変する。	黄褐白色	〃	〃	○完形品。煮沸使用。
3611	〃	12.7	6.3	22.5	○タテハケ調整後，ヘラミガキを加える。	黄白色	粗砂多含	良好	○外底部はヘラ調整。
3612	〃	—	6.9	—	○頸部下端に竹管文をめぐらす。外面煤付着	黄橙白色	砂粒多含	〃	○図化部分完存。
3613	〃	11.7	—	—	○体部と頸部の境やや上位浅い凹線を巡らす	淡黄灰色	〃	〃	○一部器表面剝落
3614	〃	12.6	—	—	○口縁部内面に1個のみ竹管文を飾る。	黄白色	微砂多含	〃	○口頸部完存。
3615	〃	18.7	—	—	○6個1単位の竹管文は11か所めぐる。	黄褐白色	砂粒多含	〃	〃
3616	〃	—	10.6	—	○体部にはわざと穿たれた不整形の孔がある	淡橙褐色	〃	〃	○図化部分は完存
3617	鉢形土器	17.2	—	—	○体部外面はハケメ調整の後ヘラミガキ。	黄白色			
3618	〃	23.6	—	—	○体部内面はタテハケ調整痕を残す。	赤橙白色	砂粒多含	普通	○器表面磨滅。
3619	〃	36.5	10.0	16.1	○体部内外面に煤付着，内面は多量。	黄橙白色	〃	良好	○外底部は磨滅。
3620	〃	10.65	5.3	15.6	○体部下半の器表荒れ激しい。	橙黄色	微砂多含	〃	○完形品。煤付着。
3621	〃	10.7	—	—		淡黄白色	砂粒を含む	〃	
3622	〃	12.8	—	—		〃	砂粒多含	〃	
3623	〃	12.7	—	—		灰黄白色	〃	〃	○二次焼成を受ける。
3624	〃	13.0	—	—	○体部外面はタテハケの後，ナデを施す。	白灰色	砂粒を含む	〃	
3625	〃	14.4	—	—	○体部外面二次焼成により表面剝落。	淡灰黄色	〃	〃	○外面に煤付着。
3626	甕形土器？	14.0	—	—		黄白色	砂粒多含	普通	○煤の付着なし。
3627	甕形土器	—	5.4	—	○外底部はあげ底。	淡灰色	砂粒を含む	〃	〃
3628	〃	15.5	—	—		橙黄白色	〃	良好	
3629	〃	18.6	—	—		淡橙白色	〃	〃	○煤付着。
3630	〃	13.4	—	—		黄白色	砂粒多含	〃	
3631	〃	13.6	—	—	○体部最大径付近に黒斑。	淡黄白色	〃	〃	○煤付着なし。
3632	〃	14.8	—	—		橙黄白色	微砂多含	〃	○二次焼成を受ける。
3633	〃	—	5.6	—	○外底部あげ底。	灰黄白色	砂粒多含	〃	○煤付着なし。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3634	甕形土器	—	6.2	—	○外底部あげ底。	灰褐色	砂粒多含	良好	○煤の付着なし。
3635	〃	12.4	—	—	○体部外面下半はハケメ調整後ヘラミガキ。	茶灰白色	微砂多含	〃	〃
3636	鉢形土器	28.4	—	—		橙黄白色	砂粒多含	〃	〃
3637	甕形土器	13.0	—	—	○体部下半はナデ調整。	灰橙褐色	微砂多含	〃	
3638	〃	11.7	5.2	20.7		黄白色	微砂を含む	〃	○煤付着目立たず
3639	〃	16.0	5.8	22.7	○体部最大径付近より下位に煤付着。	淡黄白色	砂粒多含	普通	
3640	〃	13.7	4.6	27.2	○二次焼成による器壁面剝落著しい。	赤灰色	〃	良好	○煤付着。
3641	〃	15.6	5.0	28.1	○下半外底部を除いて煤付着。	黄橙白色	粗砂多含	〃	○内面こげつきあり。
3643	〃	16.4	6.5	33.9	○体部は横位のタタキ成形後粗いハケ調整。	淡黄橙白色	砂粒多含	〃	○完形片。

井戸—18（第399図）

3644	鉢形土器	—	6.0	—	○底は円板充塡。	黄白色	砂粒多含	良好	○製塩土器。
3645	〃	12.1	3.3	4.8	○ナデ調整を仕上げる。	橙白色	微砂を含む	〃	○完形片。
3646	壺形土器	18.9	—	—	○頸部はタテハケ調整痕を残す。	〃	微砂多含	〃	
3647	〃	—	6.5	—	○底部は内側から穿孔。	暗黄白色	砂粒多含	〃	○外底部に黒斑。

井戸—19（第401図）

3648	鉢形土器	—	5.8	—	○脚端部には植物繊維の圧痕がつく。	黄褐白色	砂粒多含	良好	○製塩土器。
3649	〃	—	5.0	—	○2孔1組の貫通小孔が3か所に認められる	淡橙黄色	精良	不良	
3650	〃	—	5.8	—	○外面はナデ仕上げ。	白褐色	〃	良好	
3651	高杯形土器	—	10.3		○ヨコナデ仕上げ。	黄橙白色	微砂多含	普通	
3652	甕形土器	—	4.3	—	○底部はあげ底でユビナデ調整。	橙褐色	〃	〃	
3653	高杯形土器	—	—	—	○浅い凹線文をめぐらし脚部を飾る。	淡灰褐色	砂粒多含	〃	○蓋として転用か
3654	〃	—	—	—	○外面はていねいなタテナデ仕上げ。	黄白色	〃	〃	○装飾的な高杯か
3655	甕形土器	16.5	—	—	○外面はヨコナデ仕上げ。	黄橙白色	精良	良好	
3656	高杯形土器	18.6	—	—	○蓋と関連すると思われる小孔あり。	赤灰色	微砂を含む	普通	
3657	壺形土器	13.8	—	—	○口縁部にはキザミメが施される。	橙黄白色	〃	〃	
3658	〃	14.5			○頸部にはカキメ風のタテハケ調整。	黄橙白色	微砂多含	良好	
3659	〃	12.6	6.5	25.4	○口縁内面に頸部と同一工具による列点文5	淡黄褐色	〃	〃	○完形品。
3660	高杯形土器	27.8	16.7	17.7	○脚部内面にはシボリメ痕を残す。	〃	砂粒多含	〃	○完形片。
3661	蓋形土器	9.8	—	6.7	○細かいヘラミガキで仕上げる。	橙褐色	微砂多含	〃	○内面シボリメ。
3662	高杯形土器	—	15.5	—	○2個1組の透孔が2段にわたり4か所ずつ穿たれる。二次焼成を受けている。	黄橙色	砂粒多含	〃	○蓋として転用。煤が付着する。

井戸—20（第403図）

3663	器台形土器	44.8	—	—	○口縁部にヘラガキで鋸歯文を描く。	橙黄白色	砂粒多含	良好	○口縁端面剝落。
3664	壺形土器	14.5	—	—	○頸部はタテヘラミガキ調整を施す。	黄白色	微砂を含む	普通	
3665	〃	16.2	—	—		橙白色	〃	良好	
3666	鉢形土器	—	4.3	—	○内面はナデアゲ。体部はやや外方がきつい	黄白色	砂粒多含	〃	○製塩土器。
3667	甕形土器	18.0	—	—	○体部上位はヨコナデ仕上げ。	黒褐色	〃	〃	○頸部に煤付着。
3668	壺形土器	—	6.7	—	○体部はタテハケ調整後ヘラミガキを施す。	黄白色	〃	〃	

井戸—21（第405図）

3669	壺形土器	13.4	6.2	25.0	○外面下半ヘラミガキ，上半ハケメ。	淡灰黄色	細砂多含		
3670	〃	17.5	—	—		黄灰色	〃		
3671	〃	16.5	—	—	○肩部外面ハケメ。	灰褐色	〃		
3672	甕形土器	15.6	—	—		黄灰色	〃		
3673	〃	—	5.5	—	○外面ハケメ。	灰黄色	〃		
3674	壺形土器	—	7.0	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3675	鉢形土器	17.0	3.5	9.4	○内外面ともにヘラミガキ。	灰褐色	〃		
3676	〃	7.0	2.5	5.4		〃	〃		
3677	甕形土器	13.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	〃		○外面煤付着。
3678	鉢形土器	—	—	—	○内面ヘラケズリ。	灰白色	〃		
3679	高杯形土器	21.6	—	—	○口縁内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		
3680	〃	—	6.7	—	○脚内面シボリメ。	灰黄色	砂を含まず		
3681	〃	—	8.5	—		淡黄色	細砂含む		
3682	〃	—	—	—	○脚内面シボリメ。	黄褐色	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3683	高杯形土器	—	13.0	—	○外面ハケメ。	黄褐色	細砂含む		
3684	〃	—	20.0	—		黄灰色	〃		
3685	〃	—	19.0	—		灰黄色	〃		

井戸—22（第406図）

3686	甕形土器	19.0	—	—	○内外面ナデ。	淡褐色	粗砂を混入	良好	○外面煤付着。
3687	台付鉢形土器	—	5.5	—	○指頭整形。	白黄淡褐色	〃	〃	○製塩土器。

井戸—23（第408図）

3688	鉢形土器	41.8	12.0	20.8	○内面ヘラミガキ，外面ハケメ，上半ナデ。	暗灰淡黄色	粗砂を混入	良好	
3689	〃	36.0	9.0	21.4	○内面ヘラケズリ，ヘラミガキ，外面指オサエ後ヘラケズリ，端部ハケメ。	白淡黄色	細・粗砂	〃	
3690	器台形土器	24.4	23.8	27.9	○内面下部ヘラケズリ，胴上半ユビナデ，外面下部ヘラオサエ後ナデ。縦斜のハケ後凹線。	白黄淡褐色～暗灰褐色	細・粗砂を混入	〃	
3691	台付鉢形土器	—	5.6	—	○内面・外面下部は指頭整形，外面上半はヘラケズリ。	暗赤褐色	粗砂を混入	〃	○製塩土器。
3692	〃	—	5.7	—		〃	〃	〃	〃
3693	〃	—	—	—		暗黄灰白色	〃	〃	〃
3694	〃	—	5.8	—			〃	〃	〃

井戸—24（第409図）

3695	壺形土器	9.4	—	—	○内面ヘラケズリ，外面ヘラミガキ。	白黄淡茶色	微砂を混入	良好	
3696	高杯形土器	—	13.2	—	○内外面ナデ。	白淡黄色	細砂を混入	〃	○内面褐色化粧土
3697	台付鉢形土器	—	5.7	—	○指頭整形。	暗灰淡黄色	粗砂を混入	〃	○製塩土器。

土壙—121（第411～413図）

3698	壺形土器	15.9	—	—	○口縁部内面ヘラミガキ。頸部外面太いハケメ	灰黄色	細砂		
3699	〃	14.4	7.3	26.2	○外面ハケメ後ヘラミガキ。頸部内面シボリ	〃	〃		
3700	〃	14.5	6.3	27.4	○外面ハケメ，頸部内面ナデ。底部ケズリ。	〃	〃		
3701	〃	10.5	6.5	21.8	○外面ハケメ，部分的にヘラケズリ。	黄灰色	〃		○黒斑2か所。
3702	〃	9.7	5.9	16.3	○外面縦位ハケメ後縦位ヘラミガキ。	〃	細砂含む		
3703	〃	—	4.2	—	○外面ヘラミガキ，内面ナデ。底部ケズリ。	茶灰色	細砂		
3704	甕形土器	13.4	5.0	21.5	○内面ヘラケズリ。	黄灰色	砂粒多い		○表面剥落。
3705	〃	13.3	—	—	○外面タタキ後縦位ハケメ。口縁補修痕有。	灰茶色	〃		
3706	〃	14.7	—	—	○口縁部内面ヨコハケメ。頸部指頭圧痕。	淡灰黄色	砂粒多い		○外面煤付着。
3707	〃	14.0	—	—	○外面細いハケメ。内面ヘラケズリ。	黄灰色	砂粒含む		〃
3708	〃	—	5.0	—	○底部指頭圧痕，外面砂粒移動痕有。	淡灰色	砂粒多い		〃
3709	〃	—	5.4	—	○底部焼成後の穿孔あり。底部ヘラケズリ。	暗灰色	〃		
3710	〃	16.0	—	—	○外面タテハケメ，後ヘラミガキ。	灰黄色	砂粒含む		
3711	〃	13.9	—	—		〃	微細質		○表面剥落。
3712	鉢形土器	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケ後肩部ミガキ。	〃	砂粒含む		○外面黒斑。
3713	〃	16.8	—	—	○内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	黄灰色	微細		〃
3714	〃	14.0	—	—	○底部の接合状況明瞭。内面 いナデ。	〃	細砂含む		
3715	〃	13.4	—	—	○内面下半ヘラケズリ。	暗灰色	細砂		○外面調整不明。
3716	〃	33.4	—	—	○内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。外面ハケメ	黄灰色	〃		
3717	〃	34.4	—	—	○外面タタキ後細かいハケメ。	〃	〃		
3718	高杯形土器	17.9	11.2	11.8	○内外面ともヘラミガキ。脚部穿孔3か所。	黄褐色	砂粒多い		
3719	〃	—	19.7	—	○外面一部押圧痕。沈線7本。	黄灰褐色	微砂		
3720	〃	28.6	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	暗灰黄褐色	細砂		
3721	〃	29.9	17.3	19.0	○内外面ともヘラミガキ。脚部穿孔5か所。	赤灰色	微砂質		
3722	台付鉢形土器	—	5.0	—	○外面ヘラケズリ。	茶灰色	粗砂		○製塩土器。

土壙—122（第414図）

3723	壺形土器	14.0	6.0	25.0	○口縁部ヨコナデ。肩部内面指頭による押圧	暗茶灰色	細砂		
3724	〃	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部以下太めのハケメ。	黄灰色	〃		
3725	鉢形土器	19.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3726	台付鉢形土器	10.4	4.7	—	○台外面指頭による押圧。他は不明。	赤灰色	細砂含む		
3727	器台形土器	—	25.5	—	○端部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—123（第145図）									
3728	高杯形土器	29.8	—	—	○内外面ヘラミガキ。脚内面シボリ。	淡黄褐色	細砂		
土壙—124（第416図）									
3729	壺形土器	20.7	—	—	○口縁部内面ハケメ，外面指頭による押圧。	淡黄褐色	細砂		
3730	高杯形土器	25.4	—	—	○内外面ヘラミガキ。口唇部ヨコナデ。	黄灰色	〃		
3731	鉢形土器	13.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3732	台付鉢形土器	10.7	4.8	9.8	○口縁部ヨコナデ。内面不明。	赤灰褐色	〃		
3733	高杯形土器	(20.0)	—	—	○口縁部剝離。	黄灰色	〃		○甕の蓋に転用。 ○内面端部煤付着
3734	台付鉢形土器	—	4.2	—	○外面ヘラケズリ。	黄形土器	粗砂		○製塩土器。
土壙—125（第418図）									
3735	壺形土器	13.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	細砂		
3736	〃	13.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面シボリ。	灰色	大砂粒含む		
3737	〃	11.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面ナデ。	黄褐色	〃		
3738	〃	13.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面シボリ。	淡灰白色	〃		
3739	甕形土器	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	灰黄色	〃		
3740	〃	13.5	—	—	〃	黄灰色	細砂		
3741	〃	12.1	—	—	○口縁部内面粗く押圧。外面不明。	灰黄色	〃		
3742	〃	14.2	4.4	14.1	〃	灰黄褐色	大砂粒含む		○底部外面敲痕。
3743	小型甕形土器	—	2.2	—	○内面ナデアゲ。外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		○黒斑。
3744	鉢形土器	—	6.6	—	○底部外面ナデ。	暗灰黄色	大砂粒含む		
3745	高杯形土器	—	13.9	—	○外面ヘラミガキ。	黄褐色	細砂		○4孔。
3746		—	7.3	—	○内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		○6孔。
土壙—126（第420～422図）									
3747	壺形土器	12.4	6.8	26.5	○外面細かいハケメ後ナデ。頸部内面ミガキ	黄褐色	微砂		
3748	〃	15.0	8.6	27.9	○外面状工具によるナデ。	灰色	砂粒含む		
3749	〃	9.6	6.8	22.0	○外面ヘラミガキ。頸部内面指頭押圧。	灰黄色	〃		
3750	〃	13.6	—	—	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰褐色	〃		○外面黒斑。
3751	〃	6.5	—	—	○外面ヘラミガキ。内面指頭押圧。	暗灰茶色	〃		
3752	甕形土器	18.0	6.1	26.4	○口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ。	灰茶色	〃		
3753	〃	15.4	6.2	25.0	○口縁部内面ヘラミガキ。内面ナデ。	灰褐色	微砂多い		
3754	〃	16.2	5.5	22.4	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ。底部ナデ。	黄褐色	砂粒含む		○外面黒斑。
3755	〃	11.7	6.0	14.5	○底部外面圧痕残す。	暗灰色	〃		○内面煤付着。
3756	鉢形土器	17.6	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	暗灰褐色	細砂含む		
3757	〃	17.3	4.5	10.6	○内外面底部ともヘラミガキ。	黄灰色	砂粒含む		
3758	台付鉢形土器	10.6	6.1	7.5	○口縁部ヨコナデ。台部ヨコナデ。	黄褐色	〃		
3759	〃	9.2	5.7	6.5	○外面ハケメ。内面蜘蛛の巣状ハケメ。	赤褐色	白色砂粒		
3760	〃	10.8	6.8	7.1	○外面脚部指頭圧痕残る。内外面ともナデ。	灰褐色	砂粒多い		
3761	高杯形土器	22.0	—	—	○口唇部切面浅い沈線入る。他はヘラミガキ	〃	細砂含む		
3762	〃	25.0	15.8	17.0	○脚部内面シボリメ。穿孔4か所。	灰褐色	〃		
3763	〃	12.7	7.2	9.3	○脚部内面ヨコナデ。他はヘラミガキ。	淡赤灰褐色	砂粒含む		
3764	〃	29.5	18.5	19.6	○杯部内外面ヘラミガキ。脚部外面ハケメ。	灰黄褐色	細砂含む		
3765	〃	8.4	—	—	○内外面押圧。	黄褐色	細砂		
3766	台付鉢形土器	12.0	—	—	○内面ナデ。外面ヘラケズリ。	黄灰色	粗砂		○製塩土器。
3767	〃	12.0	—	—	〃	〃	〃		〃
3768	〃	—	4.6	—	〃	〃	〃		〃
3769	〃	—	4.9	—	〃	〃	〃		〃
3770	〃	—	5.1	—	〃	〃	〃		〃
3771	〃	—	3.6	—	〃	〃	〃		〃
3772	〃	—	4.5	—	〃	〃	〃		〃
3773	〃	—	4.0	—	〃	〃	〃		〃
3774	鉢形土器	42.0	11.7	20.3	○外面ナデ。内面ヘラケズリ。底部ケズリ。	〃	砂粒含む		
3775	〃	39.7	8.7	21.0	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	〃	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—127（第423図）									
3776	甕形土器	12.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		○外面煤付着。
3777	〃	12.8	—	—	〃	灰褐色	〃		
3778	〃	—	4.8	—		暗灰色	〃		
3779	高杯形土器	28.7	—	—	○内外面ともにヘラミガキ。	灰黄色	〃		
3780	〃	23.0	—	—	〃	黄褐色	〃		
3781	〃	13.0	14.0	13.9	○脚部内面不明。他はヘラミガキ。	灰褐色	〃		○3孔。
3782	台付鉢形土器	—	4.8	—	○外面粗いヘラケズリ。	茶灰色	粗砂		○製塩土器。
3783	〃	—	4.9	—	〃	灰黄色	〃		〃
3784	〃	—	5.0	—	〃	〃	〃		〃
3785	〃	—	4.2	—	〃	灰褐色	〃		〃
3786	〃	—	5.4	—	〃	黄灰色	〃		〃
土壙—128（第424図）									
3787	壺形土器	17.4	—	—	○頸部内面下半ヘラケズリ。外面ハケメ。	黄灰色	細砂含む		
土壙—129（第425図）									
3788	甕形土器	15.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂		
3789	〃	—	5.5	—	○外面ハケメ。	黄灰色	〃		
3790	鉢形土器	16.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
土壙—131（第426図）									
3791	甕形土器	15.0	—	—	○肩部内面ナデ。外面太いハケメ。	灰黄褐色	細砂		
3792	高杯形土器	—	16.0	—	○外面ハケ後ヘラによる多条沈線。	黄灰色	〃		
土壙—130・131（第427図）									
3793	甕形土器	20.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		
3794	〃	—	—	—	○肩部内面一部ナデ。外面ハケメ。	〃	〃		
3795	高杯形土器	—	—	—	○脚柱部ヘラミガキ。内面不明。	暗茶灰色	〃		
3796	〃	—	—	—	○脚屈曲部外面ヘラガキ沈線。	灰褐色	〃		
土壙—132（第429図）									
3797	甕形土器	16.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ナデ。	黄灰色	大砂粒含む		
3798	〃	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面太めのハケメ。	淡灰黄色	砂粒含む		
3799	〃	14.0	—	—	〃	灰黄色	〃		
3800	鉢形土器	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ヘラミガキ。	赤褐色	細砂		
3801	〃	11.0	—	—	○内外面ヘラミガキ。	黄灰色	〃		
3802	台付鉢形土器	11.7	4.0	7.6	○内外面ヘラミガキ。台部内面ナデ。	灰褐色	〃		
3803	高杯形土器	31.0	—	—	〃	灰黄褐色	〃		
土壙—133（第430図）									
3804	甕形土器	14.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄砂	大砂粒含む		
3805	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	黄灰色	〃		
3806	〃	18.5	—	—	〃	暗灰黄色	〃		
3807	〃	14.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		436と同一個体か?
3808	〃	11.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面押圧。	赤灰褐色	細砂		
3809	〃	—	5.0	—	○外面粗いハケメ。底部外面ヘラケズリ。	暗灰黄色	大砂粒含む		
3810	〃	—	10.3	—	○外面ハケメ。	灰黄色	〃		
3811	鉢形土器	15.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
3812	〃	17.1	5.0	10.7	○口縁部外面ヨコナデ。他はヘラミガキ。	灰黄褐色	〃		○底部外面種子痕
3813	〃	28.8	—	—	○内面ヘラケズリ後タテヘラミガキ。	灰黄色	〃		
3814	高杯形土器	26.8	—	—	○口縁部内面下半ヨコナデ。	黄灰色	〃		
3815	〃	27.8	—	—	○内外面ヘラミガキ。	赤褐色	〃		
3816	台付鉢形土器	—	3.5	—	○外面ヘラケズリ。	橙色	粗砂		○製塩土器。
3817	〃	—	3.8	—	〃	灰黄色	〃		〃
3818	〃	—	4.2	—	〃	〃	〃		〃
土壙—134（第433図）									
3819	甕形土器	13.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂含む		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3820	甕形土器	13.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗灰色	細砂		
3821	高杯形土器	13.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ヘラケズリ。	茶灰色	〃		
3822	鉢形土器	18.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
3823	〃	20.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ後ミガキ	黄灰色	〃		
3824	高杯形土器	25.5	—	—			〃		○調整不明。
3825	〃	—	16.9	—	○外面ヘラミガキ。内面ヨコナデ。	灰褐色	〃		
3826	〃	—	—	—	○外面ハケ後ミガキ。内面シボリ、ハケメ。				
3827		12.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	茶灰色	細砂		
3828	台付鉢形土器	10.0	—	—	○外面ヘラケズリ。内面ナデ。	〃	粗砂		○製塩土器。
3829	〃	—	4.3	—	〃	灰黄色	〃		〃
3830	〃	—	4.1	—	〃	〃	〃		〃
3831	〃	—	4.7	—	〃	〃	〃		〃

土壙—135（第434・435図）

3832	甕形土器	13.9	—	—	○体部内面上位には指頭押圧調整痕を残す。	黄橙白色	微砂多含	良好	
3833	〃	15.3	—	—	○体部は細かいハケ調整。	赤橙色	砂粒多含	普通	○煤付着。
3834	〃	13.8	—	—		黄橙色	〃	〃	○こげつきあり。
3835	〃	15.4	5.8	22.9	○頸部には板状圧痕付着。体部下半は火を受ける。	黄白色	微砂多含	良好	○完形品。
3836	〃	—	5.3	—	○器表は極めて荒れている。	黄褐白色	砂粒多含	不良	○煤付着。二次焼成。
3837	壺形土器	—	7.1	—		灰褐色	微砂含む	良好	
3838	甕形土器	—	5.2	—		灰黒褐色	砂粒含む	普通	○煤付着。
3839	高杯形土器	24.7	—	—		黄橙白色	微砂多含	良好	○残存部完存。
3840	〃	28.0	18.8	16.7	○脚部内面にはシボリメをわずかに残す。	〃	〃	〃	○完形片。
3841	器台形土器	18.2	13.4	18.3	○体部は丁寧なヘラミガキを施す。	灰黄橙色	砂粒含む	〃	○完形品。
3842	〃	—	26.8	—	○筒部には浅い螺旋状の凹線文を飾る。	淡黄橙色	精良	〃	
3843	壺形土器	13.6	—	—	○内面には4個の棒状工具による刺突文がある。	黄橙白色	砂粒多含	〃	
3844	甕形土器	8.7	—	—		黄白色	精良	普通	
3845	鉢形土器	16.0	6.9	13.7	○内面はスプーン状工具によるカキアゲ。	淡黄橙色	砂粒多含	良好	○完形品。
3846	壺形土器	—	6.4	—	○体部外面はタテヘラミガキ調整。	暗灰白色	〃	〃	○残存部は完存。
3847	鉢形土器	23.7	7.7	15.0	○体部内面上位には指頭押圧調整痕を残す。	黄橙色	微砂多含	〃	○タール状炭化物。

土壙—136（第436図）

3848	甕形土器	13.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂		
3849	〃	—	6.0	—	○外面ハケメ。	黄灰色	〃		
3850	台付鉢形土器	—	4.2	—	○外面ヘラケズリ。	暗灰色	粗砂		
3851	〃	—	4.0	—	〃	黄灰色	〃		

土壙—137（第438図）

3852	壺形土器	16.0	—	—	○内面ヘラミガキ。外面押圧。	淡灰白色	細砂含む		
3853	〃	18.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部外面ヘラガキ沈線。	黄褐色	細砂		
3854	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面不明。	茶褐色	〃		
3855	〃	9.8	—	12.4	○口縁部ヨコナデ。	淡灰白色	〃		
3856	甕形土器	—	7.0	—	○内面ハケ後ヘラケズリ。	淡黄灰色	〃		
3857	〃	15.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰白色	〃		
3858	〃	—	6.0	—	○底部外面ナデ。	黄灰色	〃		
3859	〃	—	7.0	—	○底部外面ハケ。	灰黄色	〃		
3860	〃	16.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ハケ後ヘラケズリ。	淡黄灰色	〃		
3861	鉢形土器	20.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ハケ後ヘラケズリ	灰黄色	〃		
3862	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ後ミガキ	〃	〃		
3863	台付鉢形土器	9.8	—	—	○内外面ヘラミガキ。肩部外面刺突文。	黄灰色	〃		
3864	鉢形土器	13.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。外面ハケ	暗灰黄色	〃		
3865	高杯形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡黄灰褐色	〃		
3866	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	灰褐色	〃		
3867	〃	—	—	—	○内面ナデ。外面ハケメ。胴部穿孔。	黄灰色	〃		○3孔（篩り高杯）。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—138（第439図）									
3868	甕形土器	14.4	4.9	18.5	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	暗灰色	細砂含む		
3869	〃	9.8	5.3	10.6	○口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	黄灰色	細砂		
3870	〃	—	4.8	—	○外面ハケメ。内面不明。	茶灰色	〃		
3871	高杯形土器	27.6	15.4	19.4	○脚内面シボリ。他はヘラミガキ。	黄灰色	〃		
3872	台付鉢形土器	—	2.8	—	○外面ヘラケズリ。	暗灰色	〃		
土壙—139（第440図）									
3873	台付鉢形土器	8.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	黄褐灰色	精選土		
3874	甕形土器	16.0	—	—	〃	灰白色	〃		
3875	〃	—	—	—	〃	暗灰茶色	細砂含む		
3876	台付鉢形土器	12.0	4.3	6.9	○外面タテ方向のひび。内面ハケメ。	淡赤褐色	精選土		
3877	鉢形土器	8.2	—	—	○内外面ヘラミガキ。	暗灰褐色	細砂		
3878	〃	13.0	—	—	〃	赤灰色	精選土		
3879	高杯形土器	13.0	—	—	〃	暗灰黄色	〃		
3880	〃	—	12.6	—	○内外面ハケメ。	赤灰褐色	〃		
3881	〃	—	—	—	○内面ハケメ。外面ミガキ。	淡黄色	〃		
3882	〃	—	10.8	—	○内面シボリ・ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	淡赤灰色	〃		
土壙—140（第422図）									
3883	壺形土器	—	4.0	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。底部外面ミガキ。	黄灰色	大砂粒含む		
3884	甕形土器	13.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄褐色	細砂		
3885	〃	13.0	—	—	〃	灰黄色	〃		
3886	〃	14.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	〃	〃		
3887	〃	13.0	—	—	〃	暗黄灰色			
3888	〃	13.9	—	—	〃	灰黄褐色			
3889	鉢形土器	20.1	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	暗灰褐色	細砂		
3890	〃	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ。	褐色	〃		
3891	〃	12.4	—	—	○外面ハケメ。内面指頭による押圧・ナデ。	灰黄色	大砂粒含む		
3892	〃	11.6	—	—	○内面ナデ後ヘラケズリ。	暗灰黄色			
3893	高杯形土器	21.9	—	—	○体部外面ハケメ，後ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
3894	〃	24.7	—	—	○脚部内面シボリ・ハケメ。他はヘラミガキ	赤褐色	〃		○4孔。
3895	〃	—	11.0	—	○内面ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	暗灰黄色	〃		〃
土壙—141（第443図）									
3896	壺形土器	18.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗灰褐色	細砂		
3897	甕形土器	13.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	灰黄色	〃		
3897	鉢形土器	15.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。口縁に穿孔。	黄橙色	〃		○2孔一対か？
3899	〃	16.4	—	—	○口縁部外面断続するヨコハケメ。	黄灰褐色	精選土		
3900	高杯形土器	—	13.0	—	○内面ハケメ。外面ミガキ。	灰黄色	〃		
3901	〃	—	16.4	—	○外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		○内面煤付着。
3902	鉢形土器	12.0	—	—	○内面ナデ・ミガキ。外面ミガキ。	灰色	〃		
3903	〃	13.0	—	—	○内面，押圧、ナデ。外面ハケメ。	灰黄色	〃		
土壙—142（第445図）									
3904	甕形土器	13.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面不明。	灰黄色	細砂		
3905	〃	—	6.6	—	○外面板によるナデ。	暗灰色	〃		
3906	〃	—	5.4	—	○外面ハケメ。	黄灰色	〃		
3907	〃	—	5.0	—	○外面ハケメ。底部外面押圧。	淡灰白色	大砂粒含む		
3908	鉢形土器	16.0	4.0	(9.0)	○口縁部外面ヨコナデ。	黄灰色	細砂		
土壙—143（第446図）									
3909	甕形土器	—	5.9	—	○外面ハケメ。	灰黄色	大砂粒含む		○外面煤付着。
3910	高杯形土器	28.0	—	—	○内面調整不明。	〃	細砂		
土壙—144（第447図）									
3911	甕形土器	14.6	—	—	○口縁部押圧。胴部外面平滑に仕上げられる	赤褐色	細砂		
3912	高杯形土器	—	17.3	—	○内面シボリ・ハケメ。外面ミガキ。	灰黄色	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—145（第448図）									
3913	壺形土器	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰黄色	細砂含む		
3914	甕形土器	12.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	赤灰褐色	〃		
3915	台付鉢形土器	15.0	6.4	11.3	○内面一部ハケメ。台部外面指頭押圧。	黄褐色	〃		
3916	〃	12.0	5.3	8.2	○口縁外面ヘラケズリ。内面ナデ。	赤褐色	〃		
3917	〃	12.0	5.3	9.2	○内面ハケメ。台部外面指頭押圧。	〃	〃		
3918	壺形土器	—	7.6	—	○外面ハケ，後ヘラミガキ。	黄灰褐色	〃		
土壙—146（第449図）									
3919	壺形土器	5.7	4.0	8.7	○内面ナデ。外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
3920	高杯形土器	15.0	—	—	○内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	灰黄色	〃		
3921	〃	—	—	—	○体部外面押圧。内面ヨコナデ。	淡灰黄色	〃		
土壙—147（第450図）									
3922	甕形土器	17.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	大砂粒含む		○外面煤付着。
3923	高杯形土器	28.0	—	—		淡灰色	細砂		
土壙—148（第451図）									
3924	鉢形土器	17.2	—	—	○口縁および内面ヨコナデ。外面ハケメ。	淡黄灰褐色	細砂		○胎土に雲母含む。
3925	〃	18.8	—	—	○口縁外面ヨコナデ。他はヘラミガキ。	淡黄赤褐色	〃		〃
3926	〃	11.7	4.2	7.0	○内外面ともにハケメ。	〃	〃		
3927	高杯形土器	11.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面ハケメ。	淡黄灰色	〃		
3928	〃	—	—	—	○竹管で装飾を施す。内面ヨコナデ。	淡黄褐色	〃		
土壙—149（第452図）									
3929	高杯形土器	—	13.1	—	○脚柱部外面ヘラミガキ。他はハケメ。	淡赤褐色	精選土		○補修痕。
土壙—150（第454図）									
3930	甕形土器	—	3.8	—	○内面ナデアゲ調整。	白灰褐色	砂粒を含む	良好	
3931	鉢形土器	13.5	6.0	8.9	○体部内面ハケメの後ナデ。	白灰黄褐色	微砂を含む	普通	○完形品。台付。
3932	甕形土器	13.1	—	—	○体部内面一部に指頭圧痕。	淡黄灰褐色	微砂	〃	
3933	〃	—	4.7	—		暗灰褐色	砂粒多含	良好	
3934	〃	—	5.4	—		淡黄灰褐色	〃	〃	
3935	〃	15.5	—	—	○外面煤付着。口縁部側面に1条凹線。	灰黄褐色	微砂	〃	
3936	〃	14.7	—	—		灰褐色	砂粒多含	〃	
3937	〃	15.1	—	—		〃	砂粒を含む	〃	
3938	〃	17.0	—	—		灰黄褐色	砂粒多含	〃	
3939	鉢形土器	30.7	—	—	○内面中位に指頭圧痕。	白灰褐色	砂粒を含む	〃	
3940	〃	40.9	—	—		〃	〃		
土壙—151（第455・456図）									
3941	高杯形土器	16.4	—	—	○口縁部と杯部の境直上に浅い2条凹線。	明橙色	砂粒を含む	普通	
3942	〃	19.0	—	—		淡褐灰色	砂粒多含	良好	
3943	〃	25.2	—	—		黄橙色	〃	普通	
3944	〃	24.0	—	—	○器表面一部磨滅。	〃	〃	〃	
3945	〃	12.2	—	—		淡褐橙白色	砂粒を含む	〃	
3946	鉢形土器	13.9	—	—	○口縁部下位外面に浅い2条凹線。外表面荒れ。	淡橙色。	砂粒多含	良好	
3947	〃	14.7	—	—	○内面ナデ調整。	淡黄橙色	〃	〃	
3948	〃	11.8	4.6	6.5		赤橙色	〃	〃	○完形品。
3949	〃	10.4	3.7	7.1	○内外面ナデ仕上げ。	淡灰黄白色	〃	〃	〃
3950	〃	16.7	—	—	○外面ハケ調整の後，部分的にナデを施す。内面はナデアゲ調整。	黄橙色	〃	普通	○二次焼成を受ける。
3951	〃	—	4.8	—		淡褐灰白色	粗砂多含	〃	
3952	〃	—	5.5	—	○円板充填脱落部にシボリメ残る。	淡橙灰色	砂粒多含	良好	
3953	〃	—	5.2	—	○器表面磨滅。	淡橙黄色	精良	不良	
3954	〃	—	4.8	—		淡橙灰色	粗砂多含	普通	
3955	〃	—	4.7	—	○器表面ナデ仕上げ。	淡橙黄色	微砂多含	良好	
3956	〃	—	7.7	—	〃	淡橙色	砂粒を含む	〃	○円板充填。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3957	壺形土器	7.1	—	—	○頸部内面ナデ調整。	淡灰黄白色	微砂多含	良好	
3958	鉢形土器				○内外面ともにタテナデ仕上げ。	灰黄白色	〃	〃	
3959	甕形土器	12.4	—	—	○口縁部内面ヨコハケ。	黄橙白色	砂粒を含む	〃	○二次焼成を受ける。
3960	鉢形土器	18.2	—	—	○体部内面タテヘラケズリ後タテヘラミガキ	淡橙白色	砂粒多含	〃	○口縁外面に黒斑。
3961	〃	18.4	—	—	○口縁部と体部の境に穿孔2個。一方は貫通しないが，一方は不明。	灰橙白色	〃	〃	
3962	〃	—	7.8	—	○外底部ナデ調整。	淡橙黄白色	微砂多含	〃	
3963	甕形土器	12.9	—	—	○口縁部はつまみあげてオサエ痕をよく残す	灰黄橙色	〃	〃	
3964	〃	—	6.2	—		黄灰橙色	砂粒多含	〃	
3965	壺形土器	—	8.5	—	○体部外面はハケ調整。内面ヘラケズリ。	橙黄白色	〃	普通	○二次焼成を認めない。
3966	鉢形土器	—	5.5	—		淡赤橙色	〃	良好	○外表面荒れ。
3967	〃	—	4.6	—	○内面ハケメの後，ヘラミガキを施す。	黄白色	微砂多含	〃	
3968	甕形土器	—	5.9	—		淡橙白色	砂粒多含	〃	○3960と同一個体か？
3969	〃	10.3	—	—		淡黄橙色	砂粒多含	〃	
3970	〃	15.0	—	—		淡橙黄白色	〃	〃	○二次焼成を受ける。
3971	〃	14.9	—	—		〃	砂粒を含む	〃	〃
3972	〃	14.6	—	—		〃	砂粒多含	〃	〃
3973	〃	16.0	—	—		淡黄白色	〃	〃	〃
3974	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	
3975	〃	17.1	—	—	○体部外面ハケメ調整の後，やや粗いヘラミガキ内面に口縁部接合痕。	淡橙灰黄色	微砂多含	〃	○二次焼成認めない。
3976	〃	14.7	—	—		淡橙灰色	砂粒多含	〃	○二次焼成を受ける。
3977	〃	—	4.6	—		黄灰白色	〃	〃	
3978	〃	—	5.2	—	○外底部ナデ調整。	淡黄灰色	〃	〃	○煤の付着なし。
3979	〃	—	5.0	—		淡黄白色	〃	普通	
3980	〃	—	4.9	—	○体部外面にハケ調整。	灰黄色	〃	良好	○外面に黒斑。
3981	〃	—	8.0	—	○外底部ハケ調整。	淡赤灰色	〃	〃	
3982	〃	—	5.2	—		淡黄橙色	〃	〃	
3983	〃	—	4.6	—		淡橙黄色	微砂多含	〃	○二次焼成を受ける。
3984	鉢形土器	25.4	—	—	○体部外面タテハケの後斜行ヘラミガキ。口縁部内面下半ヘラミガキ。	淡赤黄褐色	砂粒を含む	〃	

土壙—153（第458図）

3985	壺形土器	14.8	—	—	○外面ナデ。内面器表荒れ。	淡黄赤褐色	砂粒を含む	普通	
3986	鉢形土器	15.8	—	—		淡灰黄褐色	微砂	〃	
3987	〃	15.0	—	—	○内面ナデアゲ。	淡黄赤褐色	〃	良好	○外面に黒斑。

土壙—155（第460図）

3988	高杯形土器	9.0	—	—		橙黄色	微砂多含	普通	○器表面磨滅。
3989	〃	—	—	—	○外面タテハケ調整。	〃	砂粒多含	良好	
3990	鉢形土器	12.6	—	—	○外面ハケ調整。内面上半カキメ風調整。	白黄色	微砂を介む	〃	
3991	高杯形土器	—	10.8	—	○外面ヨコナデ。	暗黄橙色	微砂多含	〃	
3992	壺形土器	12.1	5.3	20.9	○体部上位ヨコナデ。中位より下方はタテナデ。外底部ヘラケズリ。	白橙色	微砂を含む	やや良	○完形品。
3993	甕形土器	10.2	3.2	11.7	○体部内面上半ヘラケズリ，下半ナデ。	黄橙色	砂粒多含	普通	○煤付着。完形品。
3994	〃	16.1	—	—	○体部外面粗いハケ。内面一部接合痕あり。	淡黄色	微砂を含む	良好	○外面煤付着。
3995	〃	14.9	—	—	○内面ヘラケズリ，器壁磨滅。	黄橙色	砂粒多含	普通	〃
3996	〃	14.1	5.3	23.2	○体部外面は部分的なタテハケ。他はナデ。外底部ヘラ先調整。体部外面中位に黒斑。	淡白黄色	微粗砂多含	良好	○完形品。

土壙—156（第461図）

3997	高杯形土器	11.8	—	—	○口縁部外面に2条凹線。	淡黄赤褐色	砂粒を含む		○精製土器。
3998	甕形土器	15.1	—	—		橙黄白色	精良	普通	
3999	〃	14.5	—	—		淡橙色	砂粒多含	軟	
4000	〃	16.2	—	—	○口縁内外面煤付着。体部外面粗いタテハケ	黄褐色	〃	普通	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土壙—158（第464・465図）									
4001	高杯形土器	10.4	—	—		淡灰黄白色	砂粒を含む	良好	
4002	〃	—	—	—	○貼り付け凸帯をめぐらし，キザミメを入れる	灰黄白色	微砂多含	普通	○内面上位シボリメ。
4003	〃	—	15.0	—	○内面ナデ調整。外面タテハケ。器表荒れ。	淡橙黄白色	〃	良好	
4004	〃	25.8	—	—		灰黒色	〃	〃	
4005	〃	28.2	—	—		黄白色	〃	〃	
4006	〃	28.2	—	—		淡橙白色	微砂を含む	良好	
4007	壺形土器	6.6	—	—	○口縁上端面に2条凹線をめぐらす。	淡橙黄白色	微砂多含	〃	
4008	〃	14.4	—	—	○口縁部と頸部の境内面に貝殻押捺文。	淡橙色	微砂を含む	〃	
4009	高杯形土器	—	—	—	○内面上位にヘラガキ鋸歯文を飾る。	灰黄白色	微砂多含	〃	○飾り高杯。
4010	〃	—	—	—	○外面上位にヘラガキ鋸歯文を飾る。	白灰黄褐色	〃	〃	〃
4011	壺形土器	19.3	—	—	○口縁部側面に稚拙な複線鋸歯文。	淡黄白色	微砂を含む	普通	
4012	〃	12.4	—	—		淡黄橙白色	〃	〃	
4013	鉢形土器	17.5	3.9	7.7	○内外面ともにヘラミガキ仕上げ。	赤褐色	砂粒を含む	良好	○完形品。
4014	〃	19.5	—	—	○外面ミガキ。体部内面ケズリ後ヘラミガキ。	灰黄白色	〃	〃	
4015	〃	4.6	—	—					
4016	壺形土器	—	7.1	—	○外面ヘラミガキ。内面上半ケズリ上をナデ。	淡赤黄白色	微砂多含	〃	○体部下位に黒斑。
4017	〃	—	10.3	—		淡橙黄白色	砂粒多含	普通	○器表面荒れ。
4018	甕形土器	14.3	—	—	○体部外面ハケメ。口縁部外面に煤付着。	〃	微砂多含	良好	
4019	〃	15.2	—	—		淡灰白色	砂粒多含	〃	○外面一部に煤付着。
4020	鉢形土器	17.9	—	—	○体部最大径より上位ハケメ。下位ヘラミガキ。	白灰黄褐色	〃	〃	
4021	甕形土器	17.9	—	—		黄橙色	〃	普通	
4022	〃	16.8	—	—	○口縁部外面に煤付着。	淡橙黄色	砂粒を含む	良好	
4023	〃	16.2	—	—		黄白色	微砂多含	〃	○器表面荒れ。
4024	壺形土器	17.2	—	—		灰黄白色	砂粒多含	〃	
4025	甕形土器	—	3.6	—	○外表面磨滅。	淡赤黄白色	砂粒を含む	〃	○外面一部に煤付着。
4026	〃	15.3	4.7	19.8	○体部外面粗いタテハケ。外底部不調整。	黄白色	粗砂少	普通	
4027	〃	—	5.3	—	○外底部あげ底。	淡褐灰色	砂粒を含む	良好	
4028	〃	—	5.6	—		淡黄灰白色	微砂多含	普通	○外底部に黒斑。
4029	〃	—	6.4	—	○体部外面下端にはオサエ痕あり。	淡黄灰色	〃	良好	
土壙—160（第467・468図）									
4030	鉢形土器	—	5.0	—	○体部内面ハケメ。	淡橙黄白色	砂粒多含	普通	
4031	〃	—	4.1	—		淡橙白色	〃	〃	
4032	〃	—	4.5	—	○体部内面ナデ調整。	灰黒色	〃	良好	
4033	〃	8.1	—	—		黄橙色	〃	普通	○二次焼成。
4034	〃	12.8	3.8	6.7		淡橙黄白色	〃	良好	○器表面やや磨滅。
4035	壺形土器	8.9	—	—	○体部外面ハケ調整後タテヘラミガキ。体部内面細かいハケ調整。脚部内面シボリメ痕。	淡黄橙色	〃	普通	
4036	器台形土器	19.7	—	—	○口縁部側面に連続複線鋸歯文と凹線2条。口縁上端面に凹線2条。	明橙色	〃	不良	
4037	高杯形土器	23.5	—	—	○外面ヨコナデ。内面ヨコナデ後粗いミガキ。	淡橙白色	砂粒を含む	良好	
4038	〃	26.8	—	—	○外面ヨコナデの後ヘラミガキ。	灰黄白色	微砂多含	〃	
4039	〃	29.0	—	—		明橙色	〃	不良	○器表面磨滅。
4040	〃	22.9	13.9	15.1	○透し現存3孔。透しの間に約6個の列点文。杯部脚部外面ハケ調整後ミガキ仕上げ。	橙黄白色	〃	良好	○脚部内面上位にシボリメ痕。
4041	鉢形土器	—	10.0	—	○台部ヨコナデ調整。	灰黄白色	砂粒多含	〃	
4042	甕形土器	12.2	5.0	14.0	○体部外面タテハケ。	淡橙白色	〃	普通	○器表面磨滅。
4043	壺形土器	12.8	—	—	○体部外面ハケ調整の後ヘラミガキ仕上げ。	淡橙黄白色	砂粒を含む	良好	
4044	甕形土器	14.4	—	—	○二次焼成を受け外面に煤付着。	淡褐灰色	微砂多含	〃	
4045	鉢形土器	16.0	—	—	○体部外表面荒れる。	明橙色	精良	普通	
4046	甕形土器	16.2	—	—		淡橙白色	砂粒多含	良好	○二次焼成認めない。
4047	〃	16.8	—	—		白灰色	微砂多含	〃	○煤付着。
4048	〃	—	5.0	—	○二次焼成による煤付着と一部器表剝落。	淡橙黄白色	砂粒多含	〃	
4049	〃	15.0	—	—		橙灰黄色	〃	〃	○煤付着。
4050	〃	15.6	—	—		淡橙白色	〃	〃	○二次焼成認めない。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4051	甕形土器	16.2	5.6	28.0	○体部中位より上方に煤付着。	淡赤灰褐色	微砂を含む	良好	

土壙—161（第469図）

4052	台付鉢形土器	—	7.0	—				良好	○製塩土器。

土壙—166（第474図）

4053	甕形土器	—	3.7	—	○体部外面ハケメの上をナデ仕上げ。内面ナデ。	淡黄褐色	微砂多含	良好	
4054	壺形土器	—	11.1	—	○外面ナデ。	灰黄白色	〃	〃	
4055	〃	—	11.5	—	〃	〃	〃	〃	

土壙—167（第475図）

4056	鉢形土器	16.5	4.1	6.2	○外底部ヘラミガキ。	黄橙色	微砂多含	良好	○比較的精製。
4057	壺形土器	—	4.3	—	○体部内面ナデアゲ調整。外面ヘラミガキ。	淡黄赤褐色	〃	〃	
4058	器台形土器	20.9	—	—	○口縁部側面に連続複線鋸歯文と3個1組の列点文。内面に2条波状文。	白灰黄褐色	微砂	〃	
4059	高杯形土器	36.0	—	—		黄灰黄褐色	砂粒を含む	〃	○器表面荒れ。
4060	鉢形土器	—	7.8	—	○外面ハケメの後ケズリ状ミガキ。	暗灰黄褐色	〃	普通	

土壙—168（第476図）

4061	壺形土器	11.6	—	—	○外面ナデ調整の後粗いヘラミガキ。		砂粒を含む		
4062	甕形土器	—	7.1	—		暗灰褐色	〃		
4063	鉢形土器	—	5.7	—		淡黄赤褐色	砂粒多含		○製塩土器。
4064	〃	—	5.3	—		赤褐色	〃		〃
4065	〃	—	6.0	—		〃	〃		〃
4066	〃	—	5.5	—		〃	〃		〃
4067	〃	—	5.8	—		〃	〃		〃
4068	〃	—	6.8	—		〃	〃		〃
4069	〃	—	5.8	—		〃	〃		〃
4070	〃	—	5.9	—		〃	〃		〃
4071	〃	—	5.6	—		〃	〃		〃
4072	〃	—	5.9	—		〃	〃		〃
4073	〃	—	5.9	—		〃	〃		〃

土壙—170（第478図）

4074	甕形土器	12.7	—	—	○体部上半ハケメの後、ナデを施す。	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	
4075	高杯形土器	25.0	—	—	○杯部外面上半ヘラケズリ痕を残す。	黄橙白色	微砂多含	〃	
4076	甕形土器	13.4	—	—		黄白色	微砂	〃	

土壙—172（第480図）

4077	鉢形土器	—	4.5	—		赤褐色	砂粒多含	普通	○製塩土器。
4078	高杯形土器	—	17.0	—	○内面にシボリメ痕残る。	黄橙白色	微砂	〃	
4079	甕形土器	15.9	—	—		白灰褐色	砂粒を含む	良好	
4080	壺形土器	10.6	—	—	○頸部と体部の境付近内面にシボリメ痕。		粗砂を含む	〃	

土壙—176（第484図）

4081	甕形土器	16.1	—	—		白灰褐色	砂粒を含む	良好	

土壙—177（第485図）

4082	鉢形土器	—	4.5	—		暗灰赤褐色	砂粒多含	普通	○製塩土器。
4083	〃	—	4.6	—		黄白色	〃	不良	〃
4084	〃	11.1	4.8	7.7	○体部下半タテハケ後斜行ヘラミガキ完形品	明橙色	微砂多含	〃	○外面中位に黒斑。
4085	甕形土器	11.1	—	—	○体部外面タテハケ、内面ヘラミガキ。	淡栓褐色	精良	良好	
4086	壺形土器	13.4	—	—		橙褐色	砂粒含む	〃	
4087	鉢形土器	20.0	—	—	○外面下半ナデ。内面下半斜行ヘラミガキ。	橙白色	精良	普通	
4088	壺形土器	—	9.0	—	○外面粗いタテミガキ状調整。	明橙色	砂粒多含	〃	○外底部に黒斑。

土壙—178（第486図）

4089	鉢形土器	—	5.1	—		暗灰褐色	砂粒多含	普通	○製塩土器。
4090	甕形土器	—	5.3	—	○外底部ハケ調整。	灰褐色	砂粒を含む	〃	
4091	壺形土器	—	4.7	—		淡黄褐色	〃	〃	
4092	高杯形土器	—	—	—	○上位の4条凹線上に丹彩を施す。	黄橙白色	〃	良好	○彩色高杯。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4093	壺形土器	—	8.4	—	○内外面タテハケの後ヘラミガキ。	黄橙色	微砂多含	良好	

土壙—181（第489図）

4094	甕形土器	15.8	—	—		灰黄褐色	微砂多含	良好	○体部外面煤付着。

土壙—184（第492図）

4095	甕形土器	(21.0)	—	—	○外面極細のハケメ。	灰白色	白色小砂粒	良好	○黒斑。
4096	〃	—	—	—		淡黒灰色	〃	〃	
4097	高杯形土器	—	15.7	—	○穿孔は上下で12孔。	灰白色	〃	〃	

土壙—185（第493図）

4098	壺形土器	—	—	—	○外面ハケメ，のち凹線。				
4099	鉢形土器	13.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。				
4100	—	—	—	—					
4101	高杯形土器	24.3	—	—	○内面ヘラミガキ。				

土壙—186（第494図）

4102	台付鉢形土器	17.5	6.5	7.8	○内面ヘラミガキ。外面粗いナデ。	黄灰色	細砂多含		○黒斑。

土壙—187（第495図）

4103	壺形土器	14.0	—	—	○肩部外面ハケメ。頸部内面押圧痕。	黄灰色	細砂多含		
4104	〃	—	7.0	—	○底部あげ底。外面ハケメ。	灰黄色	〃		
4105	台付鉢形土器	—	5.5	—	○外面粗いヘラケズリ。	淡灰色	粗砂含む		○製塩土器。
4106	〃	—	4.5	—	〃	灰褐色	〃		〃
4107	〃	—	4.3		〃	灰黄色	〃		〃

土壙—188（第496図）

4108	高杯形土器	26.5	—	—	○杯部内外面ヘラミガキ。	灰褐色	細砂含む		

土壙—189（第497図）

4109	壺形土器	(14.7)	—	—		黄橙色	白色小砂粒	良好	
4110	台付鉢形土器	11.0	5.4	7.5		赤褐色	精製粘土	〃	○土器の回転右。
4111	甕形土器	—	(5.0)	—	○内面ヘラケズリのち円滑な仕上げ。	黒褐色	白色小砂粒	〃	
4112	高杯形土器	18.2	—	—	○内外面縦位のヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土	〃	
4113	〃	—	—	—		暗赤褐色	〃	〃	
4114	〃	—	—	—		赤褐色	〃	〃	

土壙—190（第498図）

4115	壺形土器	5.5	—	—	○内外面下部指頭整形，外面上半ハケナデ。	白黄淡褐色	細砂を混入	良好	
4116	甕形土器	11.4	—	—	○内面体部ヘラケズリ。他は指頭整形・ナデ。	〃	〃	〃	○端部外面黒褐色。
4117	鉢形土器	7.0	2.5	3.5	○内外面ともに指頭整形後緻密なナデ。	淡黄茶褐色	〃	〃	○手捏ね土器。
4118	台付鉢形土器	—	3.5	—	○内外面ともに指頭整形。底部ヘラオサエ。	暗赤褐色	粗砂を混入	〃	○製塩土器。

土壙—191（第499図）

4119	甕形土器	14.2	—	—	○内面ナデ。外上ハケナデ。下ヘラミガキ。	灰暗褐色	精製粘土	良好	○外面黒褐色。
4120	鉢形土器	—	—	—	○内面上半ヘラミガキ，内面下半クシメ。	淡黄茶色	細砂を混入	〃	○外面は淡黄灰白色。

土壙—192（第500図）

4121	甕形土器	13.3	—	—	○内外面ともに指頭によるナデ。	白黄淡茶色	細砂を混入	良好	○4本の退化凹線。
4122	〃	9.6	3.1	11.4	○内面体部ヘラケズリ，外面ヘラミガキ。上半はユビナデ，底部内外は指頭整形。	黄淡茶色	〃	〃	○口縁に退化凹線をみる。
4123	高杯形土器	—	16.2	—	○内外面裾はナデ，外面ヘラミガキ。	白黄色	細粗砂混入	〃	

土壙—193（第501図）

4124	壺形土器	13.2	—	—	○内面ナデ。外面粗いハケナデ。	黒茶褐色	砂粒を混入	良好	
4125	甕形土器	—	—	—	○内外面ナデ調整。	暗黄灰色	細砂を混入	〃	○外面煤付着。

土壙—194（第502図）

4126	高杯形土器	—	9.1	—	○内面ナデ，外面ハケ，裾端部ヨコナデ。	暗茶褐色	砂っぽい	やや良	○化粧土・透孔途中。

土壙—195（第503図）

4127	壺形土器	16.1	7.3	27.0	○内外面ヘラケズリ，上半ナデ。外面体部ヘラミガキ，上半ナデ。	暗茶褐色～黒茶褐色	細・粗砂粒を混入	良好	○部分的に褐色～淡褐色化粧土を残す。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4128	甕形土器	14.0	—	—	○内面体部ヘラケズリ・上半指頭整形。外面体部ハケナデ・上半ヨコナデ。	暗灰淡茶褐色	細砂を混入	良好	○外面体部に若干の煤付着。
4129	〃	13.7	6.0	24.5	○内面体部ヘラケズリ，上半指頭整形。外面体部ハケナデ・上端部ヨコナデ。	白淡茶褐色 暗茶褐色	〃	〃	○外面煤・内面炭化物の付着。
4130	台付鉢形土器	—	4.7	—	○内外面ともに指頭整形。	暗茶灰白色	粗砂を混入	〃	○製塩土器。

溝—37（第505図）

4131	壺形土器	12.6	—	—	○外面一部ハケメ。口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		○1層。
4132	甕形土器	12.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	砂粒含む		〃
4133	〃	15.6	—	—	○内面指頭圧痕。	黄灰色	細砂		〃
4134	壺形土器	7.8	4.3	9.2	○口縁部ヨコナデ。内面ナデ・シボリ。	灰色	砂粒含む		○頸部穿孔一対。
4135	甕形土器	—	7.4	—	○底部外面押圧痕。	黄灰色	細砂		○1層。
4136	〃	—	5.5	—	〃	〃	砂粒含む		〃
4137	鉢形土器	9.6	4.8	7.2	○口縁部ヨコナデ。内面ナデ，押圧。	灰白色	〃		〃
4138	〃	8.0	3.9	9.0	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ後ナデ。				○2層。
4139	高杯形土器	12.9	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
4140	〃	21.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	灰黄色	砂粒含む		
4141	〃	22.9	—	—	○内面横位ハケメ後縦位ヘラミガキ。	淡黄赤褐色	細砂		
4142	〃	24.7	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	黄灰色	〃		○1層。
4143	〃	—	12.4	—	○脚内面シボリ・ハケメ。	灰黄色	〃		〃
4144	〃	—	16.2	—	○内面シボリ後，ヘラケズリ，ヨコナデ。	灰褐色	〃		
4145	台付鉢形土器	—	5.5	—	○外面ヘラケズリ。	淡灰黄褐色	砂粒多い		○製塩土器。
4146	〃	—	5.6	—	〃	淡黄赤褐色	〃		〃
4147	高杯形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	精選粘土		
4148	〃	—	—	—	○孔数不明。	〃	〃		

溝—38（第506図）

4149	壺形土器	14.6	—	—	○内外面ともヨコナデ。	灰黄褐色	砂粒含む		○上層。
4150	〃	—	6.5	—	○底部外面ハケメ。	黄灰色	細砂		〃
4151	〃	8.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰白色	砂粒含む		○下層。
4152	〃	—	4.0	—	○器表面剥落で調整不明。	黄灰色	〃		
4153	甕形土器	13.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	灰黄色	〃		○溝底。
4154	〃	13.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	細砂		○外面煤付着。最上層。
4155	〃	14.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	黄褐色	精選粘土		
4156	〃	14.0	—	—	〃	黄灰色	細砂含む		
4157	〃	—	6.0	—	○外面ハケメ。	暗灰色	砂粒多い		
4158	鉢形土器	15.3	—	—	○胴部下半横ヘラミガキ。他はヨコナデ。	黄灰色	細砂		
4159	〃	15.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		
4160	台付鉢形土器	—	7.6	—	○内面ヘラケズリ。外面ヘラによるナデ。	灰黄色	砂粒多い		○上層。
4161	高杯形土器	15.8	—	—	○内外面ともヨコナデ。後ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
4162	〃	19.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	〃	〃		○淡黄褐灰色土。上層。
4163	〃	18.7	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	灰褐色	〃		○淡黄褐灰色砂。
4164	〃	14.1	—	—	〃	〃	〃		○上層。
4165	〃	—	—	—	○外面ヘラケズリ。内面ハケメ。	〃	精選粘土		○最上層。
4166	〃	20.6	—	—	○内外面ともヨコナデ。一部ヘラミガキ。	〃	〃		○上層下位。
4167	〃	—	—	—	○脚内面ヘラケズリ。外面ヘラミガキ。	黄灰色	小石含む		○上層。
4168	〃	—	14.0	—	○外面ハケメ後ヘラミガキ。	黄褐色	精選土		○最上層。
4169	器台形土器	15.0	17.0	17.0	○器表面剥落して調整不明。穿孔4か所。	灰褐色	粗砂含む		

溝—39（第508図）

4170	壺形土器	12.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	精選土		○下層。
4171	〃	18.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はハケメ。	灰褐色	細砂含む		
4172	〃	22.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面ヘラケズリ。	黄灰色	砂粒含む		○上層。
4173	甕形土器	15.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	〃		○淡褐灰色砂層。
4174	〃	—	4.8	—	○底部外面ナデ。胴部下半ヘラミガキ。	淡灰褐色	細砂		○外面煤付着。
4175	〃	14.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4176	甕形土器	13.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗灰黄色	細砂含		○溝底面。
4177	〃	12.9	—	—	〃	黄灰色	〃		○外面煤付着。
4178	〃	—	—	—	〃	淡灰褐色	〃		
4179	〃	—	6.0	—	○底部外面ナデ。胴下半部ヘラミガキ。	黄灰色	砂粒含む		○外面煤付着。
4180	〃	—	5.7	—	○外面押圧。底部内面ナデ。	灰褐色	細砂含む		
4181	〃	12.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	〃		
4182	鉢形土器	8.8	3.4	7.1	○内面ナデ。	淡灰黄色	砂粒含む		○下層。
4183	〃	9.0	4.0	5.4	○内外面ともナデ。	灰褐色	精選土		○溝底。
4184	〃	24.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ナデ。外面ハケメ。	灰黄色	砂粒含む		○中層下位。
4185	〃	17.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	〃	細砂含む		○中層。
4186	高杯形土器	19.8	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	黄褐色	精選土		○下層下位。
4187	〃	—	—	—	○杯部内外面ともヘラミガキ。	淡灰褐色	〃		○下層。
4188	〃	—	—	—	○脚内面シボリ。他はヘラミガキ。	灰褐色	精選粘土		○溝底。
4189	〃	—	11.0	—	○外面ヘラミガキ。内面シボリ・ナデ。	灰黄褐色	〃		○中層。
4190	〃	—	12.8	—	○内外面ともハケメ。孔数不明。	〃	〃		○溝底南半部。
4191	〃	—	9.0	—	○外面押圧。	淡灰白色	砂粒多い		○下層。
4192	台付鉢形土器	—	4.0	—	○外面ヘラケズリ。	黄灰色	粗砂		○製塩土器。
4193	〃	—	4.8	—	○外面ヘラケズリ。内面ナデ。	暗灰色	〃		〃
4194	小型壺形土器	—	—	—	○手捏ね。	淡灰褐色	細砂		○溝底。
4195	小型甕形土器	5.7	2.0	6.5	○手捏ね。内面調整不明。	灰黄褐色			〃

溝—40（第509図）

4196	壺形土器	12.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄褐色	砂粒多い		
4197	〃	19.1	—	—	〃	淡灰黄色	細砂含む		
4198	〃	13.1	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部と肩部の境に刺突文	黄褐色	〃		○中層下位。
4199	〃	—	6.1	—	○外面タテハケメ後ヘラミガキ。底部ハケメ	黄灰色	〃		○下層上位。
4200	〃	17.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	〃		○下層微砂質粘土
4201	〃	13.8	—	—	○口縁部内面ヘラミガキ。頸部外面太いハケメ	灰褐色	〃		○灰黄褐色土層。
4202	〃	14.9	—	—	○内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	暗灰茶色	〃		○西肩部淡褐灰色土層。
4203	〃	10.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰白色	〃		
4204	〃	10.7	5.3	—	○外面ハケメもしくはナデ。底部押圧痕。	淡灰色	砂粒含む		
4205	高杯形土器	6.9	—	—	○頸部下端ヘラ先による鋸歯文。	淡灰褐色	精選土		
4206	壺形土器	8.2	—	—	○口縁部外面凹線3条。頸部内面ヨコナデ。	〃	〃		
4207	小型壺形土器	2.5	2.0	3.5	○手捏ね。	〃			
4208	甕形土器	11.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。肩外面板状工具ナデ。	淡黄灰色	細砂		
4209	〃	13.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	灰黄褐色	〃		○外面煤付着。
4210	〃	17.2	—	—	○外面ヨコナデ後ハケメ。	黄灰色	〃		○上層。
4211	〃	14.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ。	灰褐色	白色砂粒		○灰黄褐色土層。
4212	〃	—	6.0	—	○底部押圧痕。	〃	〃		
4213	〃	—	6.5	—	○底部外面ヘラミガキ。	〃	砂粒含む		○下層。
4214	〃	11.0	—	—	○口縁端部磨滅，口縁部ヨコナデ。	灰黄色	〃		○上層。
4215	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰茶色	細砂		○下層。
4216	〃	15.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	〃	〃		〃
4217	〃	11.1	—	—	○口縁部外面太いハケメ。内面ヨコナデ。	黄灰色	〃		
4218	〃	11.6			○外面板状工具による押圧痕。	〃	〃		○上層。
4219	台付鉢形土器	10.9	4.6	5.6	○内外面ともハケメ。台部押圧。底部ナデ。	〃	〃		
4220	〃	17.0	—	—	○外面粗いハケメ。口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	精選土		
4221	〃	10.3	3.6	8.5	○口縁部外面ヨコナデ。他はヘラミガキ。	〃	細砂		
4222	〃	7.9	3.2	8.7	○外面一部ハケメ。内面ナデ。	灰褐色	〃		○下層。
4223	高杯形土器	—	—	—	○脚内面を除き他はヘラミガキ。	〃	精選土		○土手上層。
4224	〃	11.0	—	—	○接合部外面ヘラケズリ。脚下半ハケメ。	〃	白色砂粒		○灰黄褐色土層。

溝—39・40（第511図）

4225	○高杯形土器	—	24.4	—	○脚部穿孔2孔一対3か所。口縁端部貝殻による押圧文。	淡灰褐色	細砂		○図上復元。 ○飾り高杯

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—41（第515図）									
4226	壺形土器	20.0	—	—	○外面ハケメ後沈線。内面ヘラミガキ。	灰黄色	砂粒含む		
4227	〃	7.4	—	—	○頸部内面ヨコナデ。内面以外ヘラミガキ。	灰褐色	精選土		
4228	〃	7.0	—	—	○胴部内面下半ヨコナデ。他はヘラミガキ。	〃	〃		○下層。
4229	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。肩部外面太いハケメ。	灰白色	細砂含む		○初次堆積腐植灰色粘土。
4230	〃	15.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケ後ミガキ。	黄灰色	砂粒多い		○暗灰黄色粘土。上層。
4231	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰白色	細砂含む		
4232	〃	18.0	—	—	○外面ヨコハケメ。	灰黄色	細砂多い		
4233	〃	13.0	—	—	○頸部内面シボリメ。外面ヘラミガキ。	黄灰色	白色砂粒		
4234	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ？	灰褐色	細砂		
4235	甕形土器？	15.6	—	—	○内部ナデ。外面ヘラミガキ。	灰黄色	〃		○暗灰黄色粘土。
4236	甕形土器	15.0	6.5	20.9	○底部外面ヘラケズリ。	黄灰色	微砂質		○外面煤付着。
4237	台付壺形土器	—	4.6	—	○内面ヘラケズリ。外面ヘラミガキ。	〃	細砂		○暗灰色粘土下。
4238	甕形土器	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄褐色	〃		〃
4239	〃	14.0	—	—	〃	淡灰褐色	砂粒含む		○最下層。
4240	〃	—	7.2	—	○外面調整不明。	暗灰色	細砂多い		○暗灰色粘土下層下。
4241	鉢形土器	15.0	4.7	8.0	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
4242	〃	11.8	3.7	5.5	〃	黄灰褐色	〃		○暗灰黄色粘土下
4243	〃	15.8	5.4	6.9	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。内面ミガキ	黄褐色	〃		○暗灰色粘土下層下。
4244	〃	23.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	淡灰黄色	精選粘土		
4245	〃	—	4.6	—	○内外面ともヘラミガキ。	〃	〃		
溝—41南半西流路（第517・518図）									
4246	壺形土器	20.0	—	—	○頸部内面ヨコナデ後ヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
4247	〃	19.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗灰褐色	〃		
4248	甕形土器	17.8	—	—	〃	暗茶褐色	雲母含む		○内外面丹塗り。
4249	〃	15.0	—	—	〃	灰黄色	白色砂粒		○下層上位。
4250	〃	15.0	—	—	〃	淡灰褐色	細砂		
4251	〃	16.0			〃	灰黄色	砂粒含む		
4252	〃	14.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	〃	細砂含む		
4253	〃	15.0	—	—	〃	淡灰白色	〃		
4254	〃	11.0	—	—	○頸部外面凹線1条。	暗灰褐色	雲母含む		○丹塗り。
4255	〃	14.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	砂粒多い		
4256	高杯形土器	13.9	—	—	○口縁部内外面ヘラミガキ。	暗灰黄色	精選土		
4257	鉢形土器	22.6	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	明黄灰色	細砂		○淡青灰色土。
4258	高杯形土器	27.8	—	—	〃	黄灰色	〃		
4259	〃	17.8	—	—	〃	淡灰色	精選土		
4260	〃	—	12.4	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	明灰褐色	〃		
4261	鉢形土器	23.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面太いハケメ。	淡黄灰色	〃		
4262	高杯形土器	16.0	—	—	○内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		○最下層。
4263	鉢形土器	48.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂含む		
4264	〃	33.0	—	—	〃	黄橙色	〃		
4265	〃	—	11.9	—	○外面ハケメ。底部外面ヘラケズリ。	〃	細砂		○下層.暗灰色粘土。
4266	高杯形土器	21.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
4267	〃	—	14.7	—	○外面ハケメ。内面ヨコナデ。	黄褐色	砂粒含む		○暗灰色粘土。
4268	器台形土器	15.8	—	—	○口縁部板状工具によるヨコナデ。	灰褐色	精良		
4269	〃	—	31.0	—	○外面ヘラミガキ。内面ヨコハケメ。	〃	砂粒多い		
溝—41南半東流路（第519図）									
4270	壺形土器	9.7	4.6	22.5	○頸部内面ヘラケズリ。胴部ヘラミガキ。	黄灰色	砂粒多い		○胴下半焼成後の穿孔。
4271	甕形土器	15.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗茶灰色	雲母含む		○内外面丹塗り。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4272	甕形土器	13.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗灰黄褐色	細砂		○淡黄褐灰色微砂粘土。
4273	〃	13.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	灰褐色	〃		○下層粘土層。
4274	〃	—	—	—	○胴部外面凸帯巡る。	〃	雲母多い		○移入土器。
4275	〃	—	—	—	〃	〃	〃		〃
4276	〃	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	淡灰褐色	砂粒含む		○溝底。
4277	〃	12.0	—	—	○口縁部外面クシガキ沈線。	明黄灰色	細砂		
4278	鉢形土器	5.0	2.5	3.5	○内面ナデ。		〃		
4279	壺形土器	—	6.4	—	○外面ヘラミガキ。底部焼成後穿孔。	灰褐色	〃		○暗灰青色粘土直下。
4280	甕形土器	16.8	—	—	○外面部分的にヘラミガキ。	灰黄色	砂粒多い		
4281	高杯形土器	24.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。	灰褐色	精選土		
4282	〃	22.0	—	—	○口縁部内外面ヘラミガキ。	〃	〃		
4283	鉢形土器	15.8	4.8	6.5	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	〃		
4284	高杯形土器	18.9	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	灰褐色	〃		○下層灰青色粘土。

溝—42（第520・521図）

4285	壺形土器	18.7	—	—	○頸部内面シボリメ後ヘラケズリ。	黄褐色	白色砂粒含		○法面灰黄色砂質土。
4286	〃	17.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	灰黄色	細砂含む		○淡灰黄色砂中。
4287	〃	16.4	—	—	○頸部内面ヘラ状工具によるミガキ。	淡黄灰色	砂粒含む		
4288	〃	14.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		○上層。
4289	〃	14.2	—	—	〃	暗灰黄色	砂粒含む		○最下層。
4290	〃	12.8	—	—	○口縁外面クシガキ。	灰黄色	細砂		
4291	〃	15.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面押圧ナデ。	〃	〃		○上層。
4292	甕形土器	17.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面丹塗り。	?	雲母含む		
4293	〃	14.5	—	—	○頸部外面タタキ。口縁部内面押圧。	黄灰色	砂粒含む		○下層暗灰青色粘土。
4294	〃	17.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
4295	〃	12.8	—	—		灰黄色	細砂含む		○下層。
4296	〃	13.0	—	—	○外面調整不明。口縁部ヨコナデ。	〃	砂粒含む		〃
4297	〃	13.8			○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	細砂		〃
4298	〃	16.0	—	—	〃	灰黄色	〃		〃
4299	〃	15.7	—	—	○内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。外面ハケメ	〃	砂粒含む		○下層上位淡褐灰色微砂含粘土。
4300	〃	—	5.0	—	○底部外面ナデ。胴部外面ハケメ。	淡灰白色	精選粘土		○西側法面淡灰黄色砂。
4301	〃	11.4	—	—	○肩部内面押圧痕。内面ヘラケズリ後ミガキ	淡黄白色	細砂含む		○最下層。
4302	〃	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰黄色	大砂粒含む		○法面淡灰黄色砂。
4303	〃	14.0	—	—	○口縁部剝落して調整不明。	暗灰褐色	細砂		
4304	〃	14.8			○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	〃		
4305	〃	13.8			〃	〃	砂質		
4306	〃	13.5			〃	灰色	細砂		○最下層。
4307	〃	14.0	—	—	〃	淡灰黄色	砂粒含む		○中層暗灰青色粘土。
4308	〃	15.0	—	—	○胴部外面斜位ハケメ後ヘラミガキ。	灰黄色	砂粒多い		○~淡褐灰色粘土。
4309	〃	23.4			○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	〃	〃		
4310	鉢形土器	12.8	4.8	9.0	○口縁部ヨコナデ。外面ナデ。	淡灰色	細砂		○中層。
4311	〃	10.8	—	—	○内面ヨコハケメ後ヘラミガキ。	灰褐色	精製粘土		○下層。
4312	〃	22.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	〃	〃		○最下層淡灰青色粘土。
4313	〃	17.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ケズリ後ヘラミガキ。	灰色	細砂		○上層淡褐灰色砂
4314	台付鉢形土器	—	9.5	—	○台部外面部分的にヘラミガキ。内面押圧痕。	淡灰褐色	雲母含む		○上層。
4315	鉢形土器	18.6	5.8	8.5	○内外面ともにヘラミガキ。	黄褐色	砂粒含む		○西層。
4316	〃	19.9	—	—	○内面器表面剝落して調整不明。	灰褐色	精選土		○上層。
4317	〃	10.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	〃	〃		
4318	〃	34.0	—	—	○口縁部ヨコナデ外面ハケメ。	黄灰色	細砂		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—43（第524図）									
4319	高杯形土器	16.8	—	—	○口縁部内面調整不明。他はヘラミガキ。	灰褐色	精選土		○～淡褐灰色粘土。
4320	〃	17.8	—	—	○口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。	〃	〃		
4321	〃	—	—	—	○杯部と脚部の境にヘラケズリ。	淡灰褐色	〃		
4322	〃	14.2	—	—	○外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		○西壁下。
4323	〃	17.5	—	—	○杯部外面ヘラケズリ後タテヘラミガキ。	〃	〃		○西壁。
4324	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ後3本沈線。	〃	細砂含む		
4325	〃	18.0	—	—	○内外面ともヘラミガキ。	茶色	精選土		○西壁。
4326	〃	16.7	—	—	○外面波状ヘラミガキ。	黄褐色	〃		
4327	〃	—	10.4	—	○外面タテハケメ後ミガキ。内面ヨコナデ。	淡灰白色	砂粒含む		
4328	〃	20.8	—	—	○口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。	灰褐色	精選土		
4329	〃	—	14.7	—	○内面調整不明。外面ハケメ。4孔。	淡灰褐色	〃		
4330	〃	—	10.4	—	○脚部外面ハケメか？	灰黄褐色	〃		
4331	〃	—	—	—	○杯部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	黄褐色	〃		○西壁下。
4332	〃	—	—	—	○孔数不明。	淡灰黄色	〃		○上層。
4333	〃	—	14.0	—	○内外面ハケメ。	灰褐色	〃		
4334	〃	28.9	—	—	○内面鋸歯文連続しない。他はハケメとミガキ。	〃	〃		○屑口，飾り高杯。
4335	〃	—	—	—	○上面接続強化のためのキザミ。透し孔4穴。	〃	〃		○上層。
4336	〃	—	10.4	—	○外面ヘラミガキ。内面調整不明。4孔。	〃	〃		○淡褐灰色砂。
4337	〃	—	11.0	—	○内面ハケメ。外面不明。	〃	〃		
4338	台付鉢形土器	—	3.9	—	○外面押圧。内面ナデ。	〃	粗砂含む		○製塩土器。
4339	〃	—	4.0	—	○外面押圧。	〃	〃		〃
溝—44（第526図）									
4340	甕形土器	23.0	5.0	45.5	○底部内面ヘラケズリ後押圧。	暗灰黄色	砂粒含む		
4341	壺形土器	—	—	—	○粘土紐接合痕残る。外面ヘラミガキ。	灰褐色	精製粘土		
4342	鉢形土器	17.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ヘラミガキ。	淡灰白色	細砂		
4343	高杯形土器	16.8	—	—	○内面ハケメ。外面ヘラミガキ。	灰黄褐色	精製粘土		
4344	甕形土器	15.0	4.5	25.1	○口縁部クシガキ沈線。肩部外面刺突文3個。	暗灰褐色	雲母含む		
溝—45（第528図）									
4345	壺形土器	16.0	9.0	28.5	○口縁部ヨコナデ。	暗灰茶褐色	細砂		
4346	甕形土器	14.0	5.9	23.0	○口縁部ヨコナデ。肩部，底部外面ナデ。	暗灰色	砂粒多く含		○外面煤付着。
4347	〃	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ。	淡黄灰褐色	細砂		〃
4348	〃	15.5	6.0	22.9	○口縁部ヨコナデ。肩部外面ナデ。	黄灰色	細砂多い		〃
4349	〃	16.5	6.5	26.7	○口縁部ヨコナデ。外面粗いハケメ。	灰黄色	〃		
4350	高杯形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	細砂含む		
4351	〃	23.5	—	—	○脚内面シボリ，他はヘラミガキ。	灰黄褐色	精良		
4352	鉢形土器	9.0	2.5	5.3	○口縁部のヨコナデ以外はヘラミガキ。	灰褐色	細砂含む		
4353	〃	16.0	5.2	8.0	○口縁部ヨコナデ。他はヘラミガキ。	〃	細砂多い		
溝—46（第529図）									
4354	壺形土器	—	—	—	○頸部内面にシボリメ痕残る。	淡黄赤褐色	砂粒を含む	良好	
溝—47（第530）									
4355	鉢形土器	—	5.2	—		灰黒色	砂粒多含	良好	○製塩土器。
4356	〃	—	5.4	—		暗灰黄褐色	〃	〃	〃
4357	〃	—	6.4	—		白黄褐色	粗砂多含	〃	〃
4358	〃	—	5.2	—	○体部内面ナデアゲ調整。	暗灰黄褐色	〃	〃	〃
4359	壺形土器	—	12.5	—	○外面ハケ調整。内面ナデ。	暗灰褐色	砂粒を含む	〃	
4360	〃	—	7.5	—	○外面ヘラミガキ。	灰黄褐色	〃	〃	
4361	甕形土器	13.2	—	—		灰黒色	微砂多含	普通	
4362	〃	16.6	—	—		橙褐色	砂粒多含	〃	
4363	〃	17.4	—	—		黄橙白色	微砂多含	良好	
溝—48（第532図）									
4364	壺形土器	12.0	—	—	○頸部に細いヘラガキ沈線文。弧文をめぐらす。	淡橙黄色	微砂含む	良好	○弥生時代前期土器。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4365	甕形土器	8.0	—	—	○体部外面ヘラミガキ。内面ナデアゲ調整。	灰黄橙色	微砂多含	良好	○外面に煤付着。
4366	鉢形土器	—	5.2	—		黄橙白色	粗砂多含		○製塩土器。
4367	〃	—	4.9	—	○体部内面ナデアゲ。	灰褐色	〃	〃	〃
4368	高杯形土器	14.7	—	—	○口縁上端部に丹塗りを施す。	黄褐色	微砂多含	〃	
4369	〃	20.6	—	—	○口縁部外面ヨコナデ後波状ミガキ。他もミガキ。	橙褐色	粗砂を含む	〃	
4370	〃	11.0	—	—		明黄橙色	比較的精良	普通	
4371	鉢形土器	12.2	6.5	8.2	○台部内面上半にシボリメ痕。体部外面ナデ。	淡白黄褐色	微砂のみ	良好	
4372	高杯形土器	—	10.7	—	○外面ヘラミガキ。内面上半シボリメ残る。	黄橙色	微砂多含	〃	
4373	壺形土器	11.3	—	—	○口縁上端部に丹塗りを施す。	橙白色	微砂を含む	〃	
4374	甕形土器	—	4.9	—	○体部ナデアゲ調整。	黄橙色	微砂のみ	普通	
4375	〃	11.2	—	—	○体部外面細かいハケ調整。	淡黄橙白色	粗砂多含	〃	
4376	〃	—	10.0	—		白黄色	粗砂を含む	良好	○体部外面剝落。
4377	壺形土器	21.8	—	—		黄白色	微砂を含む	〃	
4378	〃	—	7.7	—	○外面部分的ヘラミガキ。外底部ナデ調整。	〃	精良	普通	

溝—49（第534図）

4379	壺形土器	16.0	—	—	○口縁内面ヘラミガキ。	灰褐色	細砂含む		
4380	甕形土器	13.6	—	—	○外面ハケメ。口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
4381	〃	15.8	—	—	〃	灰黄色	細砂多含		
4382	〃	16.0	—	—	〃	灰褐色	〃		
4383	小型壺形土器	6.2	—	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃		
4384	鉢形土器	9.5	3.4	4.0					
4385	台付鉢形土器	—	4.5	—		灰色	砂粒多含		
4386	高杯形土器	17.0	—	—	○内外面ともにヘラミガキ。				
4387	〃	11.0	—	—	○内面ヘラミガキ。				
4388	〃	12.0	—	—	○外面ヘラミガキ。				
4389	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面シボリ。	灰黄色	細砂含む		
4390	〃	—	—	—	○外面粗いハケメ。内面シボリ。	〃	〃		
4391	〃	—	7.0	—	○外面ヘラミガキ。内面シボリ。ヘラケズリ	〃	〃		
4392	〃	—	15.0	—	〃	淡灰白色	〃		
4393	〃	—	—	—	○外面鋸歯文めぐる。				○飾り高杯。
4394	器台形土器	—	—	—	○口縁端部に鋸歯文めぐる。	黄灰色	細砂含む		
4395	台付鉢形土器	—	4.0	—	○外面ヘラケズリ。				
4396	〃	—	5.0	—	〃				

溝—50（第535図）

4397	甕形土器	(13.3)	—	—	○内面ヘラケズリ後、細いハケメ。	茶褐色	白色小砂粒	良好	
4398	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	黄橙色	〃	〃	
4399	〃	—	—	—		灰茶色	〃	〃	
4400	〃	—	—	—		暗灰茶色	〃	〃	
4401	〃	—	—	—		黄褐色	〃	〃	○外面煤付着。
4402	〃	—	6.5	—		淡茶灰色	〃	〃	○内面炭化物付着
4403	〃	—	(5.6)	—	○内面深いヘラケズリ。	淡茶褐色	〃	〃	
4404	壺形土器	—	5.6	—		黄褐色	〃	〃	○外面剝落。
4405	〃	—	(8.3)	—	○外面タタキか？	鈍い黄橙色	精製粘土	〃	
4406	高杯形土器	—	—	—		暗茶褐色	〃	〃	
4407	壺形土器	—	2.6	—		灰白色	白色小砂粒	〃	○内外面剝落。
4408	高杯形土器	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
4409	〃	—	—	—	○6条のヘラガキ沈線。	〃	白色小砂粒	〃	
4410	鉢形土器	(39.9)	—	—		赤褐色	〃	〃	○黒斑。

溝—51（第536図）

4411	壺形土器	10.5	—	—	○口縁端肥厚，丸くおさめる。体部内面ケズリ。	灰白色	砂粒を含む	良好	
4412	甕形土器	—	—	—	○外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	〃	砂粒細砂含	〃	○小破片。
4413	壺形土器	—	—	—	○口縁端に明瞭な面をもつ。調整手法不明。	〃	砂粒細砂多	〃	〃
4414	〃	—	—	—	○頸部ヘラガキ沈線。頸部ナデ。内面指頭痕。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4415	甕形土器	18.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端面上半に沈線1条。	灰白色	砂粒を含む	良好	
4416	〃	13.6	—	—	○口縁端面凹線3条。口頸部ヨコナデ。	浅黄橙色	〃	〃	○金雲母目立つ。
4417	〃	—	—	—	○口縁外面ヨコナデ。内面調整不明。上半肥厚。	〃	砂粒細砂多	〃	○小破片。
4418	高杯形土器	12.7	—	—	○杯部内面ナデ。手捏ね風。口縁端肥厚。	〃	精良	〃	
4419	〃	—	—	—	○内面ヘラケズリか？外面調整不明。	橙色	砂粒細砂多	〃	○小破片。
4420	〃	—	10.8	—	○外面・端面ヨコナデ。粗雑なハケ状工具施文。	鈍い橙色	〃	〃	○1/8残存。
4421	台付鉢形土器	—	4.0	—	○円板充填鉢部下端外面滑らか。	浅黄橙色	石粒砂粒多	〃	○製塩土器。
4422	〃	—	2.5	—	○円板充填脚端に面をつくる。	灰黒色	〃	〃	〃
4423	〃	—	4.3	—	○鉢底部にヘラ先によったような刺突あり。	暗灰色	〃	〃	〃
4424	鉢形土器	—	2.9	—	○内面ナデ。底部周辺指頭圧痕めぐる。	灰白色	砂粒含む	〃	○小型壺の可能性。

溝—52～54（第537図）

4425	鉢形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面下半ケズリ後にミガキ。	灰白色	砂粒細砂多	良好	○小片。
4426	高杯形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面調整不明。	橙色	〃	〃	〃
4427	底部	—	7.6	—	○底部は平坦。内面はナデとヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	○1/8残存。
4428	高杯形土器	—	—	—	○穿孔4方向。杯底部の柱状部内側に針穴あり。	明赤灰色	〃	〃	
4429	〃	—	—	—	○穿孔3方向。杯部接合部分ミガキ残す。	灰黄褐色	〃	〃	
4430	底部	—	4.2	—	○内外面ヘラミガキ。底部内面指頭圧痕を残す。	浅黄橙色	〃	〃	○½残存。
4431	壺形土器	—	—	—	○肩部外面竹管文。内面上半ナデ，下半ケズリ。	〃	精良		○⅓残存。
4432	高杯形土器	—	—	—	○口縁端を拡張して水平面。口縁部ヨコナデ。	橙色	〃	良好	○小片。
4433	甕形土器	—	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部外面ナデ。	浅黄橙色	砂粒細砂多	〃	〃

溝—55（第538図）

4434	壺形土器	—	8.0	—	○内面強くナデる。	浅黄橙色	石粒多	良	○外面調整不明。

溝—56（第539図）

4435	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ調整。口縁端に面をつくる。	灰白色	砂粒細砂多	良好	○小片。
4436	高杯形土器	—	—	—	○内外面の調整不明。屈折部の稜は鋭い。	淡橙色	〃	〃	〃
4437	〃	—	—	—	○内外面の調整不明。口縁端は肥厚して丸い	灰褐色	〃	〃	〃

溝—57（第541図）

4438	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	橙色	白色小砂粒	良好	
4439	高杯形土器	—	—	—	○内面シボリ。	〃	〃	〃	○外面剥落。

溝—59（第542図）

4440	壺形土器	21.5	—	—	○頸部下段に貼り付け凸帯。	淡黄茶褐色	砂粒を混入	良好	
4441	〃	—	—	—		黄橙色	砂粒を含む	〃	
4442	〃	—	—	—		橙褐色	〃	〃	
4443	〃	19.8	—	—	○口縁外面鋸歯文。上端に同形の刺突文。	白淡茶色	〃	〃	○褐色化粧土認める。
4444	〃	—	—	—	○貼り付け凸帯，内面ユビオサエ・ヨコナデ。	白淡黄茶色	若干の砂粒	〃	○外面炭化物付着。
4445	〃	15.6	—	—		黄白色	砂粒多含	〃	
4446	〃	—	—	—	○外面に竹管文を施す。	白淡茶褐色	砂粒混入	〃	
4447	甕形土器	14.9	—	—	○口縁部外面に3本の退化凹線。	白淡黄色	〃	〃	
4448	〃	17.5			○口縁外面に2本の凹線。	白淡茶褐色	〃	〃	
4449	〃	(14.3)	—	—		暗灰黄色	〃	〃	
4450	〃	16.1	—	—	○口縁外面に1本の退化凹線。	白灰淡茶色	〃	〃	
4451	〃	15.3	—	—	○外面ハケナデ。内面ヘラケズリ，ナデ調整。	白淡茶褐色	〃	〃	
4452	〃	14.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。				
4453	〃	16.2	—	—	○外面横斜のハケメ。内面体部ヘラケズリ。	暗茶褐色	砂粒少量混	良好	○口縁内外ナデ調整。
4454	〃	(14.3)	—	—		灰茶色	〃	〃	
4455	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	
4456	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
4457	高杯形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	〃	
4458	壺形土器	(5.9)	—	—		鈍い黄橙色	白色小砂粒	〃	
4459	高杯形土器	(18.3)	—	—	○内面ヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土	〃	
4460	鉢形土器	11.0	—	—	○内面ヘラケズリ後，ヘラミガキ。				

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4461	鉢形土器	—	—	—		赤黄褐色	精製粘土	良好	
4462	甕形土器	—	(5.6)	—	○外面下位極細のハケメ。	暗灰色	〃	〃	○外面煤付着。
4463	〃	—	(6.6)	—	〃	〃	白色小砂粒	〃	
4464	鉢形土器	(17.4)	—	—	○内面は円滑な仕上げ。	淡茶褐色	精製粘土	〃	
4465	高杯形土器	—	—	—	○外面下半粗いハケメ。上半ナデ調整。	白黄淡茶色	微砂を混入	〃	○全体に炭化物付着。
4466	〃	—	(6.5)	—		〃	〃	〃	○黒斑。
4467	壺形土器	—	7.2	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	白黄茶色	砂粒を混入	〃	○精製粘土使用。
4468	甕形土器	—	5.4	—	○外面指頭整形。内面クシメ，ヘラケズリ。	内面は黒色	砂粒少量混	〃	○外面に煤付着。
4469	高杯形土器	—	—	—		茶褐色	白色小砂粒	〃	
4470	〃	—	(15.1)	—		鈍い黄橙色	精製粘土	〃	
4471	〃	—	(16.9)	—	○内面ヨコナデ。	黄橙色	白色小砂粒	〃	
4472	器台形土器？	—	14.8	—	○外面ハケナデ。内面ユビオサエ後ナデ。	淡黄茶色	砂粒若干混	〃	
4473	高杯形土器	—	(12.0)	—		黄灰色	〃	〃	
4474	〃	—	—	—		淡赤褐色	精製粘土	〃	
4475	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	暗茶褐色	白色小砂粒	〃	
4476	〃	—	—	—	○脚内面シボリメ。	〃	〃	〃	
4477	器台形土器		25.2		○外面ナデ，2本の凹線，内面ヘラケズリ。	淡灰白色	〃	〃	○精製粘土使用。
4478	台付鉢形土器	—	3.2	—		暗灰茶色	〃	〃	
4479	〃	—	4.2	—		淡黄褐色	〃	〃	
4480	〃	—	4.0	—		〃	〃	〃	
4481	〃	—	3.8	—	○内外面ともに指頭整形，外面上部ヘラケズリ。	白灰淡黄色	砂粒を混入	〃	○製塩土器。
4482	〃	—	5.8	—	〃	暗赤褐色	〃	〃	〃

水田（第546図）

4483	甕形土器	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂含む		
4484	〃	—	—	—	〃	黄灰色	精良		
4485	〃	—	6.0	—	○外面ハケメ。	灰黄色	精製粘土		
4486	〃	—	5.4	—	○外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂含む		○外面煤付着。
4487	鉢形土器	30.0	—	—	○口縁部ヨコナデ，他はヘラミガキ。	〃	〃		
4488	〃	9.0	2.4	12.8	○内面ナデ，外面ハケメ，口縁外面ナデ。	淡灰黄色	〃		○外面黒斑。完形。

溝—60（第552・553図）

4489	高杯形土器	19.0	—	—		橙白色	微砂を含む	普通	
4490	〃	30.5	—	—	○口縁部と体部の境直上に1条凹線。	淡黄灰色	〃	良好	
4491	〃	—	—	—	○脚部上位にシボリメ痕。脚部中位付近より1組4個以上の竹管文を推定8組加飾する。	黄白色	砂粒を含む	〃	○円板充填。
4492	壺形土器	8.7	—	—	○頸部と体部の境に1条の貼り付け凸帯。	橙褐色	微砂多含	〃	
4493	〃	23.3	—	—	○口縁上端面に6個以上円板を貼り付け，竹管を押す。頸部と体部の横に凸帯を貼り付け，キザミを入れる。	黄白色	砂粒多含	〃	
4494	〃	—	7.5	—		橙白色	微砂多含	〃	
4495	台付鉢形土器	—	13.8	—	○体部外面はハケ調整の後ヘラミガキを施す。	黄橙白色	砂粒を含む	普通	○二次焼成を受ける。
4496	底部	—	8.0	—	○内面下部に煤付着。外底部粗いハケ調整。	淡黄橙色	粗砂を含む	良好	〃
4497	壺形土器	19.2	12.0	52.1	○口縁部に8個1組の竹管文。口縁上端面に3個1組の竹管文。頸部と体部の境に凸帯を貼り付け，キザミを入れる。外底部粗いケズリ。	黄白色	砂粒を含む	〃	○完形品。

溝—61（第554図）

4498	壺形土器	—	12.1	—	○外底部圧痕。	黄白色	微砂多含	良好	
4499	鉢形土器	18.2	—	—		淡黄白色	砂粒を含む	〃	○二次焼成を受ける。
4500	甕形土器	18.0	—	—	○外底部あげ底。	黄橙白色	粗砂多含	〃	〃

「島状高まり」遺構—1a土器溜り（第555～567図）

4501	高杯形土器	—	—	—	○縦方向に1組2個以上の透しが3組あり。ただし最上部の透しは貫通しない。	淡黄灰白色	砂粒を含む	普通	○内面にシボリメ痕。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4502	高杯形土器	—	26.5	—	○筒部上位にシボリメ痕。筒部と脚部の境に連続キザミメ文。脚部外面ハケ調整の後ミガキ。	淡橙白色	微砂多含	良好	
4503	器台形土器	20.3	—	—	○口縁外面部に連続線刻鋸歯文あり。7個残存。	〃	砂粒を含む	普通	○二次焼成を受ける。
4504	高杯形土器	—	—	—	○透し3孔現存。筒部上位にシボリメ痕。	淡黄橙白色	〃	良好	〃
4505	〃	21.5	—	—	○口縁上端面に1条凹線。	淡橙黄色	〃	不良	○器表面磨滅。
4506	〃	12.6	—	—	○内外面丁寧なヘラミガキ調整。	淡橙色	微砂を含む	良好	○円板充塡。
4507	〃	29.5	—	—	○口縁部と杯部の境やや上位に2条の凹線。	淡橙白色	砂粒を含む	〃	
4508	〃	31.5	—	—	○外面はハケ調整後，ヘラミガキ。	橙黄白色	微砂多含	普通	○口縁外面に黒斑。
4509	〃	16.0	—	—		黄橙色	〃	良好	
4510	〃	16.4	12.5	14.8		黄白色	砂粒多含	不良	○器表面磨滅。
4511	〃	30.4	17.6	13.5	○脚部に4条1単位の凹線をめぐらす。	黄橙白色	〃	〃	○完形片。
4512	〃	—	11.0	—		〃	微砂を含む	〃	
4513	〃	29.7	17.5	21.6	○脚部縦ハケ調整。	黄白色		普通	○円板充塡。
4514	小型器台形土器(?)	—	11.4	—	○脚部括れ部に凸帯を貼り付ける。外面ナデ調整。	淡橙黄白色	砂粒を含む	〃	
4515	台付鉢形土器(?)	—	—	—					
4516	高杯形土器	—	15.9	14.2	○外面縦ハケの後縦ヘラミガキ。内面上位にシボリメ痕残る。	淡橙黄色	微砂を含む	良好	○蓋に転用。
4517	〃	—	20.2	—	○内面上位にシボリメ痕。外面縦ハケ。	淡黄灰色	〃	〃	
4518	〃	15.8	12.5	15.1	○3条1単位の凹線文を2段にめぐる。	淡橙褐色	精良	〃	○完形片。
4519	〃	—	16.3	—		黄橙色	砂粒を含む	不良	○器表剥落。
4520	壺形土器	—	—	—	○器体の全面は二次焼成で剥落。	黄白色	粗砂多含	〃	
4521	甕形土器	10.9	—	—	○内面ハケ調整の後にヘラミガキ。	淡橙白色	微砂を含む	普通	○二次焼成を受ける。
4522	壺形土器	13.1	—	—	○内面に接合痕が残る。内面ナデ調整。	〃	〃	〃	
4523	〃	11.4	—	—		黄橙白色	砂粒多含	〃	○外表面磨滅。
4524	〃	12.3	—	—		淡黄橙色	砂粒を含む	不良	
4525	〃	11.9	—	—	○内外面ともにナデ調整。頸部下位に接合痕。	黄白色	〃	普通	○二次焼成を受ける。
4526	〃	10.5	—	—	○頸部外面にやや斜行する凹線4条あり。	淡橙白色	〃	〃	
4527	〃	12.2	—	—	○口縁部と体部の境やや下位に連続刺突文。	淡橙色	砂粒多含	〃	
4528	〃	13.4	—	—		淡黄橙色	微砂多含	〃	
4529	〃	11.8	—	—	○体部外面ハケ調整の後ヘラミガキ。	〃	粗砂を含む	不良	○二次焼成を受ける。
4530	〃	14.0	—	—	○頸部と体部の境付近に複線鋸歯文をえがく。	淡橙黄白色	微砂多含	良好	
4531	〃	14.8	—	—		淡橙白色	砂粒を含む	不良	
4532	〃	12.0	—	—	○体部外面ハケ調整の後，粗い縦方向のヘラミガキ。	黄褐白色	微砂を含む	良好	
4533	〃	13.3	—	—	○頸部と体部の境に1条凹線。	黄白色	砂粒を含む	普通	
4534	〃	—	5.9	—	○内面ナデアゲ調整。	黄橙色	微砂を含む	良好	○二次焼成を受ける。
4535	〃	13.1	6.8	26.8		黄白色	〃	〃	
4536	〃	12.8	5.5	13.2		黄橙白色	砂粒多含	〃	
4537	〃	12.4	—	—		黄白色	微砂を含む	〃	
4538	〃	14.6	—	—	○頸部内面に接合痕残る。	橙黄色	砂粒多含	不良	○器表面荒れ。
4539	〃	16.0	—	—		淡橙色	〃	〃	
4540	〃	19.8	—	—	○頸部と体部の境に凸帯を貼り付けキザミメを施す。体部上位に描き損じの複線鋸歯文2か所。	黄橙白色	粗砂多含	良好	
4541	〃	—	6.2	—	○体部外面ハケ調整の後縦ヘラミガキ。	淡橙白色	砂粒を含む	〃	○二次焼成を受ける。
4542	甕形土器	—	8.2	—		黄橙色	砂粒多含	〃	
4543	〃	—	6.9	—	○体部外面ハケ調整の後縦ヘラミガキ。	橙黄白色	砂粒を含む	〃	○二次焼成を受ける。
4544	壺形土器	—	9.1	—		〃	微砂を含む	〃	〃
4545	台付甕形土器	—	12.6	—		淡黄白色	砂粒多含	普通	
4546	〃	—	9.2	—	○器表面剥落。	黄灰色	〃	〃	○二次焼成を受ける。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4547	壺形土器？	—	5.8	—	○体部外面ハケ調整の後ヘラミガキを施す。	橙黄白色	砂粒を含む	普通	○二次焼成を受ける。
4548	壺形土器	—	8.8	—	○外底部ケズリ調整の後ミガキを施す。	橙黄色	微砂多含	良好	
4549	〃	—	10.3	—		橙黄白色	粗砂を含む	〃	
4550	鉢形土器？	—	12.1	—	○外底部あげ底。	淡黄白色	砂粒多含	〃	
4551	壺形土器	13.4	—	—		黄白色	微砂多含	不良	○器表面磨滅。
4552	〃	12.5	—	—	○体部内面に接合痕残る。	淡黄橙白色	砂粒多含	良好	
4553	〃	15.7	—	—	○体部外面ハケ調整の後，粗いヘラミガキ。	淡橙白色	砂粒を含む	〃	
4554	〃	15.4	9.5	31.7	○体部外面縦ヘラミガキ。煤の付着ナシ。	灰黄白色	微砂	〃	○完形片。
4555	〃	15.0	—	—	○頸部はハケ調整。	黄橙色	微砂を含む	〃	○体部に煤付着。
4556	〃	—	7.7	—	○器表面磨滅。	黄橙白色	砂粒多含	不良	○二次焼成を受ける。
4557	小型甕形土器	9.3	—	—		灰白色	〃	普通	
4558	甕形土器	—	7.5	—	○体部外面ハケ調整の後粗いヘラミガキを施す。	黄白灰色	微砂を含む	良好	
4559	〃	—	6.3	—		淡赤黄色	砂粒を含む	〃	
4560	壺形土器	—	8.3	—		橙黄色	砂粒多含	不良	○器表面磨滅。
4561	長頸壺形土器	11.3	—	—	○頸部外面上位に6条の浅い凹線をめぐらす。	淡黄橙色	微砂を含む	良好	
4562	〃	—	6.4	—	○体部最大径やや下位に幅約2.5cmの間隔で水平方向に2本の凸帯を貼り付け，その間に3本1組の凸帯を縦方向に推定9組貼り付ける。外面下半はハケ調整の後タテミガキ仕上げ。	橙白色	微砂多含	〃	
4563	〃	14.3	—	—	○頸部から体部はハケ調整。頸部内面シボリ痕。	黄褐色		〃	○二次焼成を受ける。
4564	〃	16.5	—	—	○頸部と体部の境に連続キザミメ文。	淡黄橙色	微砂多含	普通	
4565	〃	16.4	—	—	○頸部内面上位に浅く細い5条凹線。頸部内面ハケ調整の後一部にナデを施す。	暗黄白色	微砂を含む	良好	
4566	〃	—	—	—	○頸部と体部の境に2個1組の連続竹管文。	淡橙色	〃	〃	
4567	〃	16.7	—	—	○頸部と体部の境に連続刺突文。	暗灰黄色	粗砂多含	〃	
4568	〃	22.5	—	—	○頸部と体部の境に凸帯を貼り付けキザミメを施す。体部外面タテハケの後ヘラミガキ。	黄橙白色	微砂を含む	〃	
4569	〃	15.0	8.4	36.5	○口縁部は3本1単位のキザミを加飾する棒状文7か所。さらに鋭い工具で鋸歯文を6か所以上えがく。口縁部内面には連続刺突文。頸部と体部の境には，キザミメを加えた貼り付け凸帯をめぐらし，その直上には¼周ほどの連続刺突文。直下には全周する連続刺突文をめぐらす。体部上位には，10か所程度な鋸歯文を飾る。	淡黄褐色	砂粒多含	〃	
4570	〃	—	9.0	—	○内面ケズリ調整の後ヘラミガキ。	橙黄色	微砂を含む	〃	
4571	〃	—	9.1	—		淡黄橙色	粗砂を含む	普通	○二次焼成を認める。
4572	〃	—	8.1	—	○体部外面ハケ調整の後ヘラミガキ。	明黄灰色	微砂多含	良好	○煤付着。
4573	鉢形土器	15.5	—	—		黄褐灰色	砂粒を含む	普通	
4574	〃	15.6	—	—		黄赤色	〃	〃	○二次焼成を受ける。
4575	〃	17.2	5.5	11.3		赤褐色	微砂を含む	良好	
4576	〃	16.9	—	—	○体部外面やや粗いハケ調整。	淡橙黄色	砂粒を含む	〃	
4577	〃	18.2	—	—	○体部外面ハケ調整の後ナデを施す。	淡黄白色	〃	〃	
4578	〃	21.0	—	—		淡橙黄色	〃	〃	
4579	〃	19.2	7.6	16.5		〃	〃	〃	
4580	〃	28.9	9.3	15.9		灰黄褐色	〃	〃	
4581	〃	17.3	8.4	21.0		黄橙白色	微砂多含	普通	○外底部に黒斑。
4582	〃	30.0	—	—	○口縁上端部にくぼみをもつ。	淡黄灰色	〃	良好	○二次焼成を受ける。
4583	台付鉢形土器	—	7.5	—	○円板充塡。	黄橙色	砂粒多含	不良	○器表面磨滅。
4584	鉢形土器	45.8	—	—	○器表面磨滅。	橙黄白色	粗砂を含む	普通	○二次焼成を受ける。
4585	台付鉢形土器	—	3.9	—		赤黄色	粗砂多含	〃	
4586	〃	—	3.8	—		〃	〃	〃	
4587	〃	—	4.1	—		赤褐色	〃	〃	
4588	〃	—	3.9	—		赤黄褐色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4589	台付鉢形土器	—	3.9	—		赤黄色	粗砂多含	普通	
4590	〃	—	3.1	—		黄白色	〃	〃	
4591	〃	—	3.9	—		淡褐灰色	砂粒多含	〃	
4592	〃	—	3.8	—		黄褐色	粗砂多含	〃	
4593	〃	—	4.9	—		橙黄白色	〃	〃	
4594	〃	—	5.3	—		灰橙黄色	〃	〃	
4595	〃	—	4.8	—		黄橙色	〃	〃	
4596	〃	—	5.5	—	○内面ナデアゲ調整。	〃	〃	〃	
4597	〃	—	4.2	—		赤黄褐色	〃	〃	
4598	〃	—	5.1	—		灰黒色	〃	〃	○二次焼成認めない。
4599	小型台付鉢形土器	9.9	3.9	6.1		淡灰黄褐色	微砂を含む	良好	
4600	〃	10.3	5.2	8.9		淡黄灰色	砂粒を含む	〃	○二次焼成を受ける。
4601	〃	13.6	3.6	7.9	○内面はユビナデ調整。	灰黄白色	微砂を含む	〃	
4602	甕形土器	8.0	—	—		淡黄橙色	砂粒を含む	不良	○器表面磨滅。
4603	〃	—	3.3	—		灰黄白色	粗砂を含む	良好	○二次焼成を受ける。
4604	〃	9.6	3.2	10.7		白黄灰色	砂粒多含	〃	
4605	〃	11.5	—	—		黄橙白色	微砂を含む	普通	
4606	〃	10.4	—	—		灰黄白色	砂粒を含む	〃	○器表面剝落。
4607	〃	10.7	—	—		灰橙色	〃	〃	
4608	〃	12.1	—	—		黄白色	〃	〃	
4609	〃	13.3	—	—	○口縁上部内面直下に1条凹線。	淡橙白色	〃	〃	○煤付着。
4610	〃	14.2	—	—		淡黄橙色	砂粒多含	不良	○器表面荒れ。
4611	〃	13.0	—	—		淡黄白色	〃	普通	○煤付着。
4612	〃	15.0	—	—		灰黄褐色	〃	良好	
4613	〃	13.5	—	—		淡黄橙色	粗砂を含む	普通	○煤付着。
4614	〃	13.2	3.8	17.8		淡灰黄色	砂粒多含	良好	○完形片。
4615	〃	13.8	—	—	○体部内面上位に接合痕を残す。	黄橙色	砂粒を含む	不良	
4616	〃	13.3	—	—		淡橙灰色	砂粒多含	普通	
4617	〃	14.6	—	—	○体部外面粗いハケ調整。	淡黄橙色	砂粒を含む	〃	○煤付着。
4618	〃	13.9	—	—	○器表面磨滅。	黄白色	砂粒多含	不良	〃
4619	〃	15.8	—	—	○口縁部と体部の境やや下位に1条凹線。	淡黄灰色	砂粒を含む	良好	
4620	〃	15.2	—	—		黄白色	〃	普通	
4621	〃	14.1	4.8	19.4	○体部外面に二次焼成による剝落が見られる。	淡橙黄白色	〃	良好	○煤付着。
4622	〃	11.5	5.0	20.8		淡灰黄色	〃	〃	○完形片。
4623	〃	13.7	—	—		暗黄白色	〃	〃	
4624	〃	15.6	—	—		淡黄白色	〃	〃	
4625	〃	16.9	—	—	○体部外面ハケ調整。	淡黄橙色	砂粒多含	〃	
4626	〃	17.4	—	—		淡黄白色	微砂を含む	普通	○二次焼成認めない。
4627	〃	18.8	—	—	○器表面磨滅。	〃	微砂多含	〃	〃
4628	〃	—	5.7	—		〃	砂粒を含む	〃	
4629	〃	—	5.0	—		黄橙白色	〃	良好	
4630	〃	—	5.1	—		黄白色	〃	普通	
4631	〃	—	5.5	—	○外底部あげ底。	淡黄白色	〃	良好	
4632	〃	—	6.4	—		黄橙白色	砂粒多含	普通	
4633	〃	—	7.2	—		黄橙色	〃	〃	
4634	〃	—	5.5	—		橙黄白色	砂粒を含む	〃	○煤付着。
4635	〃	17.0	—	—		淡橙白色	〃	良好	
4636	〃	15.7	—	—	○頸部と体部の境に段差あり。体部外面ナデ。	黄橙白色	〃	普通	
4637	〃	16.9	—	—		淡橙色	砂粒多含	〃	○口縁部に煤付着。
4638	〃	15.0	—	—	○体部外面ヘラミガキ。	淡黄橙色	微砂を含む	良好	
4639	〃	15.8	—	—		黄褐灰色	砂粒を含む	普通	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4640	甕形土器	14.5	—	—		淡黄褐色	砂粒多含	良好	○煤付着。
4641	〃	15.5	—	—		橙黄色	微砂多含	普通	○器表面磨滅。
4642	〃	—	4.0	—		黄橙色	砂粒多含	〃	
4643	〃	13.0	—	—		淡褐黄色	〃	〃	
4644	〃	14.2	—	—	○口縁内面上部に1条凹線あり。	淡黄白色	砂粒を含む	〃	○煤付着。
4645	〃	14.9	—	—	○内面に頸部接合痕残る。	淡黄褐色	〃	〃	
4646	〃	14.2	—	—		淡黄橙色	〃	不良	○器表面磨滅。
4647	〃	14.9	—	—		灰赤色	砂粒多含	〃	○二次焼成を受ける。
4648	〃	16.8	—	—	○口縁部と体部の境内面やや下位に接合痕。	淡黄色	微砂を含む	普通	○二次焼成認めない。
4649	〃	—	5.2	—			砂粒を含む	〃	○二次焼成を受ける。
4650	〃	—	5.0	—	○外底部ハケ調整の後ナデを施す。	淡黄灰色	〃	〃	
4651	〃	—	5.0	—	○外底部あげ底。	淡褐橙黄色	砂粒多含	〃	
4652	〃	—	4.6	—		黄褐白色	砂粒を含む	〃	○煤付着。
4653	〃	—	5.2	—		淡黄橙色	微砂多含	〃	
4654	〃	—	6.6	—		暗赤褐色	〃	〃	
4655	壺形土器？	—	4.1	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄橙色	微砂を含む	良好	
4656	甕形土器	—	6.8	—	○外底部ナデ調整。	淡白黄色	〃	〃	
4657	〃	21.6	—	—		黄橙色	砂粒を含む	不良	○器表面磨滅。
4658	〃	19.7	—	—	○体部外面粗いタテハケ調整で仕上げる。	〃	微砂を含む	良好	○煤付着。
4659	〃	—	7.0	—		橙黄色	砂粒を含む	普通	
4660	〃	—	6.7	—		暗黄橙色	粗砂を含む	良好	
4661	〃	—	7.6	—		黄白色	砂粒多含	普通	
4662	〃	—	6.2	—		淡褐色	砂粒を含む	〃	
4663	〃	—	5.8	—		淡黄橙色	微砂を含む	〃	
4664	〃	—	9.9	—		〃	〃	良好	
4665	壺形土器？	—	10.0	—		淡黄灰色	砂粒多含	普通	
4666	甕形土器	—	7.9	—		黄橙色	微砂多含	〃	
4667	〃	—	9.0	—		黄灰色	粗砂を含む	良好	
4668	〃	13.5	—	—	○体部外面ハケ調整の後，ヘラミガキを施す。	橙赤褐色	砂粒を含む	普通	○二次焼成認めない。
4669	〃	14.2	—	—		淡橙灰色	砂粒多含	〃	○煤付着。
4670	〃	15.0	—	—		黄橙色	〃	〃	〃
4671	〃	14.3	—	—		黄赤褐色	微砂多含	〃	

「島状高まり」遺構－1b土器溜り（第568図）

4672	壺形土器	(16.0)	—	—		明黄橙色	白色小砂粒	良好	
4673	甕形土器	—	5.6	—	○内面ヘラケズリ。	暗茶褐色	〃	〃	
4674	〃	(13.7)	—	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
4675	〃	(12.8)	—	—		黄橙色	〃	〃	
4676	〃	(13.7)	—	—		〃	〃	〃	
4677	〃	(15.8)	—	—		赤褐色	精製粘土	〃	
4678	壺形土器	—	—	—	○口縁部内外面ヨコナデ。	灰白色	白色小砂粒	〃	
4679	鉢形土器	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
4680	甕形土器	—	—	—		黄橙色	〃	〃	
4681	〃	—	5.3	—	○外面底位指頭圧痕。	淡褐色	〃	不良	○雑なつくり。
4682	鉢形土器	—	—	—		茶灰色	〃	良好	
4683	高杯形土器	(18.0)	—	—	○口縁外面ヨコナデ後に波状のヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
4684	〃	—	—	—	○穿孔上下で8孔。	暗灰茶色	〃	〃	
4685	〃	—	—	—		〃	精製粘土	〃	
4686	〃	—	—	—		黄橙色	白色小砂粒	〃	
4687	〃	—	—	—	○角張った脚端。	暗灰茶色	〃	〃	
4688	台付鉢形土器	—	5.4	—		褐灰色	〃	〃	
4689	〃	—	4.8	—		〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4690	台付鉢形土器	—	9.7	—	○円板充填。	暗黄茶褐色	白色小砂粒	良好	

水田下層（第571図）

4691	壺形土器	(13.5)	—	—	○外面極細ナデ。	黄橙色	白色小砂粒	良好	
4692	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	
4693	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
4694	高杯形土器	—	—	—		赤褐色	精製粘土	〃	
4695	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
4696	〃	—	—	—		淡赤黄褐色	白色小砂粒	〃	
4697	〃	(21.8)	—	—	○口縁部内面に凹線文。	〃	〃	〃	
4698	〃	—	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	
4699	〃	—	—	—		暗灰色	〃	〃	○杯部煤付着。
4700	〃	—	—	—	○外面に円形竹管文，鋸歯文。	暗灰白色	白色小砂粒	〃	
4701	甕形土器	(17.4)	—	—	○内面ヘラケズリ後ナデ。	淡茶灰色	〃	〃	
4702	〃	(15.4)	—	—		〃	〃	〃	
4703	〃	16.2	—	—		乳白色	〃		
4704	〃	13.8	—	—		黒褐色	〃		
4705	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	茶灰色	〃	良好	
4706	〃	—	—	—		灰色	〃	〃	
4707	高杯形土器	—	—	—		赤褐色	精製粘土	〃	
4708	甕形土器	—	—	—		淡赤褐色	〃	〃	○均一小砂粒。
4709	〃	—	—	—		黄橙色	白色小砂粒	〃	
4710	〃	—	—	—		暗茶灰色	〃	〃	
4711	〃	—	—	—		乳灰白色	〃	〃	
4712	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	
4713	〃	—	—	—	○外面縦位のハケメ。	淡茶褐色	角閃石・雲母	〃	○胎土が異る。
4714	〃	—	—	—		灰黄色	白色小砂粒	〃	
4715	〃	—	5.2	—		黄灰色	〃	〃	
4716	〃	—	(7.2)	—		明褐色	〃	〃	
4717	〃	—	3.2	—	○内面横位のハケメ。	〃	〃	〃	
4718	〃	—	(4.4)	—	○外面底部ヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
4719	鉢形土器	(13.9)	—	—	○胴部内外面ヘラミガキ。	暗灰白色	精製粘土	〃	
4720	〃	(6.5)	—	—		赤褐色	〃	〃	
4721	甕形土器	4.2	2.4	5.0	○内外面ナデ。	暗茶褐色	白色小砂粒	〃	
4722	台付鉢形土器	—	4.1	—		茶褐色	〃	〃	
4723	壺形土器	—	2.9	—		灰黄色	〃	〃	
4724	鉢形土器	—	—	—	○外面横位のハケメ。	淡茶灰色	〃	〃	○外面煤付着。

「島状高まり」遺溝—1c土器溜り（第574～581図）

4725	壺形土器	19.6	—	—	○頸部内面は上部ヘラミガキ，以下ナデ調整。	淡灰黄色	微砂	普通	
4726	〃	22.0	—	—	○内面ヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	
4727	〃	13.8	—	—	○口縁端面および頸部に凹線が巡る。	〃	〃	〃	○丹塗り。
4728	〃	13.1	—	—	○外面は横および斜め方向のハケ調整。	〃	〃	良好	
4729	〃	19.1	—	—	○頸部内面上半はヨコナデ，以下ヘラミガキ。	淡橙灰色	〃	〃	○調整不鮮明。
4730	〃	16.6	—	—	○外面11本の凹線，3か所に刺突文が巡る。	白淡黄茶色	砂粒を含む	〃	○転用器台か？
4731	〃	—	12.1	—	○外面ハケ調整後ヘラミガキ，内面ナデ調整	淡橙灰色	微砂	〃	
4732	〃	10.7	—	—	○外面ハケ調整，内面屑部以下ヘラケズリ。	淡灰黄色	砂粒を含む	普通	○体部に黒斑。
4733	〃	14.9	—	—	○内面ヘラケズリ，外面上半ヘラ下半ハケメ。	黄茶褐色	〃	良好	○頸部にヘラ突き。
4734	〃	14.2	7.2	25.5	○頸部内面はナデ，上半にハケメ。	淡黄灰色	細砂	普通	○外面一部に黒斑。
4735	〃	14.2	—	—	○内面ヨコナデ。	黄灰色	微砂	〃	○器面剥離。
4736	〃	14.3	—	—	○頸部下位にヘラガキの沈線が1条巡る。	淡黄灰色	細砂	良好	○頸部調整不鮮明。
4737	〃	11.8	—	—	○頸部外面ヘラミガキ。	淡灰黄色	〃	やや甘い	
4738	〃	—	5.3	—	○屑部内面はユビナデ，調整不鮮明。	暗黄灰色	〃	良好	○外面一部に黒斑。
4739	〃	—	7.4	—	○底部はユビオサエ，体部内面ヘラケズリ。	淡黄灰色	〃	普通	〃
4740	〃	—	—	—	○外面刺突はヘラ状工具で，6個以上の単位。	黄灰色	砂粒を含む	良好	○調整不鮮明。

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
4741	壺形土器	16.1	—	—	○頸部外面ハケ調整。	淡赤褐色	細砂	普通	
4742	〃	14.7	—	—		淡黄橙色	微砂	〃	○器面剝離。
4743	〃	14.0	—	—		淡灰黄色	〃	良好	○調整不鮮明。
4744	〃	11.2	5.4	21.5	○頸部内面ユビオサエ。	淡黄灰色	〃	普通	
4745	〃	10.5	5.0	18.7	○体部内面はナデアゲによる調整。	淡灰黄色	〃	良好	○調整不鮮明。
4746	〃	13.8	—	—	○少し拡張した口縁端面に凹線が3条巡る。	灰黄色	〃	〃	
4747	〃	18.0	—	—	○口縁部はヨコナデ，頸部外面はハケ調整。	淡赤褐色	〃	普通	
4748	〃	19.1	—	—	○外面はハケ調整か細かいヘラミガキ。	淡黄褐色	細砂	〃	○器面剝離。煤付着。
4749	〃	13.3	—	—	○頸部はヨコナデ。	灰黄色	微砂	〃	○一部に黒斑。
4750	〃	11.5	—	—	○頸部はヨコナデ後外面に凹線が7条巡る。	淡灰色	細砂	やや甘い	○一部に煤付着。
4751	〃	16.1	—	—	○頸部内面ユビナデ，口縁頸部外面ヨコナデ。	黄橙灰色	〃	良好	
4752	〃	17.4	—	—	○内外面ヨコナデ調整。	白淡黄色	砂粒を含む	〃	
4753	〃	13.4	—	—	○外面ヘラミガキ，頸部にハケメ。	淡灰黄色	細砂	普通	
4754	〃	13.8	—	—	○頸部ナデ調整，肩部以下内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	微砂	〃	
4755	〃	13.8	—	—	○口縁部はヨコナデ。	淡灰黄色	細砂	〃	
4756	〃	12.0	—	—	○口縁端面に2条の凹線。	茶灰色	〃	〃	
4757	〃	13.3	—	—	○ヨコナデ。	淡灰黄色	〃	〃	
4758	〃	16.0	—	—	○口縁，頸部ヨコナデ。肩部内面ナデ調整。	〃	微砂	良好	○調整不鮮明。
4759	〃	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ，肩部内面ユビナデ。	黄橙色	〃	〃	
4760	〃	11.7	5.2	—	○体部外面はハケ調整後，タタキの手法による調整がなされている。	外，灰茶色 内，暗灰色	小石粒を含む細砂	普通	○黒斑がみられる ○内面に煤付着。
4761	底部	—	6.5	—	○外面ハケ調整後，ヘラミガキ。	淡灰黄色	細砂	〃	○外面に煤付着。
4762	〃	—	9.1	—		黄褐色	〃	〃	○外面に黒斑。
4763	〃	—	10.0	—	○内面ヘラケズリ。外面ハケメ。	淡黄灰色	〃	〃	
4764	〃	—	7.9	—	○内面はヘラケズリかナデによる調整。	淡黄褐色	〃	〃	○丹塗り。煤付着。
4765	甕形土器	15.2	—	—	○口縁部は内面ユビナデ。端部外面ヨコナデ。	明黄桃色	〃	良好	
4766	〃	16.0	—	—	○頸部外面に爪先痕が巡る。	淡黄桃色	微砂	普通	
4767	〃	18.5			○口縁部外面に3条の凹線が巡る。	白淡灰黄色	砂粒を含む	良好	
4768	〃	18.8	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	茶灰色	細砂	普通	○煤付着。
4769	〃	17.6	—	—	○口縁端面に3条の凹線が巡る。	灰黄色	〃	〃	
4770	〃	17.8	—	—	○体部内面ナデ？	淡赤灰褐色	〃	〃	○器面剝離。
4771	〃	15.8	—	—	○口縁端面に3条の凹線。頸部外面に爪痕。	淡灰黄色	微砂	〃	
4772	〃	17.4	—	—	○口縁端面に3条の凹線が巡る。	淡黄灰色	細砂	〃	
4773	〃	14.0	—	—	○口縁端面に4条の凹線が巡る。	〃	微砂	良好	
4774	〃	12.5	6.0	28.4	○頸部内面はナデ。	〃	細砂	普通	○外面煤付着。
4775	〃	15.9	—	—		黄灰色	〃	〃	○調整不鮮明。
4776	〃	16.3	—	—		淡赤褐色	微砂	〃	○黒斑。
4777	〃	16.0	—	—	○口縁端面に2条の凹線。	淡灰茶色	砂粒を含む	〃	
4778	〃	16.1	—	—		淡灰黄色	細砂	〃	○煤付着。
4779	〃	17.8	—	—	○外面ハケメ？	〃	〃	〃	○口縁部に丹塗り。
4780	〃	17.4	—	—	○器面剝離調整不鮮明。	淡赤褐色	微砂	〃	○外面煤付着。
4781	〃	15.3	—	—		赤褐色	細砂	良好	○煤付着。
4782	〃	14.0	—	—		淡赤褐色	中砂	〃	○内外面煤付着。
4783	〃	16.2	6.1	25.8		黄灰色	細砂	〃	○煤付着。
4784	〃	14.4	—	—		灰黄色	〃	〃	○内外面煤付着。
4785	〃	14.2	—	—	○内面ヘラケズリ。	淡灰黄色	〃	普通	○外面調整不明。
4786	〃	19.7	8.0	36.6	○口縁端面に3条の凹線が巡る。	〃	〃	〃	○煤付着，丹塗り。
4787	〃	16.0	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	淡黄桃色	〃	〃	
4788	〃	13.1	—	—	〃	赤灰褐色	〃	〃	
4789	〃	13.0	—	—	○体部内面ヘラケズリ。器面剝離。	淡赤褐色	〃	やや不良	○丹塗り？
4790	〃	13.2	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	〃	〃	普通	○器面剝離。
4791	〃	14.4			○体部内面ヘラケズリ。外面ナデ調整。	暗茶褐色	砂粒を含む	良好	
4792	〃	11.4	—	—	○体部内面ヘラケズリ？	淡橙灰色	細砂	やや不良	○器面剝離。
4793	〃	12.6	—	—	○口縁端面に1条の凹線が巡る。器面剝離。	黄灰色	〃	普通	○煤付着。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4794	甕形土器	13.5	4.2	17.8	○内面肩部ユビナデ，以下ヘラケズリ。	淡黄灰色	微砂	普通	○黒斑。
4795	〃	13.0	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	暗灰褐色	〃	良好	
4796	〃	11.9	—	—	〃	淡灰褐色	細砂	普通	○煤付着。
4797	〃	13.1	4.1	14.6	○体部内面ヘラケズリ、外面ハケメ。	淡赤褐色	〃	〃	
4798	〃	12.6	4.3	20.0	〃	淡灰黄色	微砂	良好	
4799	〃	10.7	—	—	○体部内面ヘラケズリ？	暗灰褐色	〃	〃	○調整不鮮明。
4800	〃	11.9	—	—	○体部内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキ。	〃	細砂	〃	○内面に黒斑。
4801	〃	11.7	—	—	○体部外面ハケメ。	黒褐色	〃	やや不良	
4802	〃	14.2	—	—	○体部外面ヘラミガキ，内面ヘラケズリ。	淡灰黄色	〃	普通	○外面煤付着。
4803	〃	9.3	—	—	○体部外面ヘラミガキ，内面ナデアゲ？	灰黄色	微砂	良好	○外面丹塗り。黒斑。
4804	〃	13.0	4.8	17.9	○体部内面ヘラケズリ，外面ハケメ。	淡灰黄色	細砂	普通	○煤付着。
4805	〃	11.5	5.5	22.2	○体部内面ヘラケズリ，外面粗いハケメか？	〃	中砂	やや不良	○煤付着。黒斑。
4806	〃	12.8	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	淡黄灰色	微砂	普通	
4807	〃	11.7	—	—	○体部外面ハケメ，内面ユビナデ。	黒灰色	中砂	やや不良	○煤付着。丹塗り。
4808	〃	10.1	3.6	13.8	○体部外面ハケメ。	淡橙灰色	微砂	普通	○器面剥離。
4809	〃	17.7	—	—	○体部外面ユビナデ，内面ナデおよびハケメ。	淡黄橙色	細砂	〃	
4810	〃	—	4.1	—	○内面ヘラケズリ。	淡灰黄色	〃	〃	○器面剥離。
4811	〃	—	4.7	—		淡黄灰色	〃	〃	○煤付着。
4812	〃	—	6.3	—	○内面ヘラケズリ。	淡赤褐色	微砂	〃	○外面煤付着。
4813	〃	—	5.4	—	○外面ハケ調整後ヘラミガキ。	暗黄灰色	細砂	良好	○煤付着。
4814	〃	—	4.2	—		灰茶色	〃	〃	〃
4815	〃	—	4.6	—		灰色	〃	普通	
4816	〃	—	5.3	—	○外面ハケメ，下部はタタキによる調整。	淡黄灰色	微砂	〃	○外面煤付着。
4817	底部	—	8.0	—	○外面ハケ状工具によるケズリ。	赤褐色	細砂	〃	○焼成後底部穿孔。
4818	〃	—	7.2	—		灰色	〃	やや不良	○外面煤付着。
4819	甕形土器	—	4.9	—		暗灰茶色	〃	普通	○煤付着。
4820	底部	—	6.5	—	○外面ヘラミガキ？	赤褐～暗灰色	〃	〃	○外面黒斑。
4821	〃	—	6.6	—	○内面ヘラケズリ？	淡黄褐色	〃	〃	○黒斑。
4822	〃	—	6.4	—		黄灰色	〃	〃	○外面煤付着。
4823	〃	—	8.1	—	○内面ヘラケズリ。	淡灰色	〃	〃	
4824	〃	—	7.3	—		灰黄色	微砂	〃	
4825	高杯形土器	19.8	—	—	○杯部外面ヘラケズリ後ハケメ。内面ナデ？	淡赤褐色	〃	良好	
4826	〃	18.0	—	—	○杯部内外面ヘラミガキ。	淡茶灰色	細砂	〃	
4827	〃	(30.0)	—	—	○口縁端面に3条の凹線が巡る。	淡黄灰色	微砂	〃	
4828	〃	(24.1)	—	—	○杯部外面はハケメ？	淡灰黄色	〃	普通	○丹塗り。
4829	〃	(37.8)	—	—	○内面はヨコナデ後ヘラミガキか？	赤褐色	細砂	良好	○一部丹塗り？
4830	〃	(35.6)	—	—		淡灰黄色	中砂	普通	○内面に黒斑。
4831	〃	(34.7)	—	—		黄灰色	〃	〃	
4832	〃	27.3	—	—		淡黄灰色	細砂	〃	○器面剥離。黒斑。
4833	〃	27.5			○内外面ともにヘラミガキ。	茶褐色	砂粒を含む	良好	
4834	〃	25.2	—	—	○杯部内外面，口縁部内面ヘラミガキ。	黄橙色	微砂	普通	
4835	〃	17.6	—	—	○内面ヘラミガキ。	〃	細砂	〃	
4836	〃	27.2	—	—	○杯部内面ヘラミガキ？外面ナデ？脚柱部外面ハケまたはナデ調整。円形透孔は4個。	淡黄桃色	砂粒を含む	〃	○杯部内面の一部に丹塗り。黒斑。
4837	〃	—	17.4	—	○円形透孔は上段4個，下段5個。	淡灰黄色	微砂	良好	
4838	〃	—	15.1	—	○内面シボリのちヘラケズリ。外面ハケナデ	淡茶褐色	砂粒を含む	〃	
4839	〃	—	15.8	—	○裾部外面に4条の凹線が巡る。調整はハケ	淡赤褐色	微砂	普通	○円形透孔は4個。
4840	〃	—	12.3	—	○内面ハケメ，外面ヘラケズリ，ナデ調整。	淡灰黄白色	砂粒を含む	良好	
4841	〃	—	16.9	—	○3条の凹線が3段巡る。外面調整はハケ？	淡黄橙色	微砂	普通	○円形透孔は5個。
4842	〃	—	15.2	—	○櫛状工具のハケメが巡る。外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂	良好	○黒斑。
4843	〃	—	—	—	○内面ヘラミガキ。	淡黄色	〃	やや不良	○内面に黒斑。
4844	〃	13.6	—	—	○杯部内面ヘラミガキ。外面はハケか？	淡黄灰色	砂粒を含む	普通	○一部に煤付着。
4845	〃	—	—	—	○円形透孔は上段3個，下段6個で巡る。	淡黄橙色	細砂	良好	○外面丹塗り。
4846	〃	—	11.0	—	○外面ヘラミガキ？　円形透孔は5個。	淡茶灰色	〃	普通	○器面剥離。
4847	〃	—	10.4	—	○外面ハケメ。円形透孔は4個。	淡灰黄色	〃	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4848	高杯形土器	—	15.4	—	○外面ヘラミガキ。	淡茶灰色	細砂	普通	○内面器面剥離。
4849	〃	—	23.0	—	○円形透孔は4個。外面調整はハケメ。	〃	〃	やや不良	
4850	〃	—	25.5	—	○裾部外面に鋸歯文。	淡灰黄茶色	砂粒を含む	良好	
4851	〃	—	12.6	—	○脚柱部外面ヘラミガキ。裾部内面ハケメ。	淡赤褐色	水簸粘土	〃	○円形透孔は4個。
4852	〃	—	11.4	—	○内面ナデ調整、外面クシメ。	暗灰黄白色	砂粒を含む	〃	
4853	〃	—	—	—		淡灰黄色	細砂	普通	
4854	台付鉢形土器	9.4	5.4	6.7	○体部外面ハケメ。内面、台部はナデ調整。	淡黄橙色	微砂	〃	
4855	壺形土器	—	3.2	—	○上半は竹管による施文。	淡灰橙色	細砂	〃	○ミニチュア土器。
4856	台付鉢形土器	—	3.4	—	○外面ヘラケズリ。	淡黄灰色	粗砂	〃	○外面煤付着。
4857	鉢形土器	(37.8)	—	—	○外面、口縁部ヨコナデ。以下ハケメ。	淡黄橙色	細砂	〃	○器面剥離。
4858	〃	(30.2)	—	—	○器面剥離。	赤灰褐色	〃	〃	○外面煤付着。
4859	〃	(27.0)	—	—	○調整はナデか？	淡茶褐色	〃	良好	
4860	〃	12.0	—	—	○体部外面ハケメ。内面はミガキか？	淡黄桃色	微砂	〃	○外面に黒斑。
4861	〃	12.8	—	—	○体部ヘラミガキ。	淡灰黄色	〃	〃	
4862	〃	12.2			○体部外面はヘラミガキか？	淡黄灰色	〃	普通	
4863	〃	10.9	4.0	9.1	○屈曲部にハケメが残る。外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂	良好	
4864	〃	17.5	5.4	5.7	○ハケ調整後ヘラミガキ。	淡黄褐色	微砂	〃	○外面に黒斑。
4865	壺形土器	10.0	—	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄灰色	〃	〃	○煤付着。丹塗り。
4866	壺形土器	12.4	—	4.1	○ナデ整形後ヘラミガキ。	黒色	細粗砂含む	〃	○上部つまみあげ。
4867	台付鉢形土器	—	3.8	—	○外面粗いヘラケズリ。	赤灰褐色	粗砂	普通	○製塩土器。
4868	〃	—	4.3	—	○内外面指頭整形。	暗茶褐色	砂粒を含む	〃	〃
4869	〃	—	4.6	—	○粗いヘラケズリ。	黄灰色	粗砂	〃	〃
4870	〃	—	4.0	—	〃	〃	細砂	〃	○煤付着。製塩土器。

「島状高まり」遺溝—3 (第583図)

4871	壺形土器	10.4	—	—	○凹線は螺旋状に巡る。	黄灰色	砂粒を含む	普通	
4872	〃	13.6	—	—		淡茶灰色	〃	良好	○煤付着。
4873	〃	11.0	5.6	(23.3)	○外面肩部の刺突はヘラ状工具による。	明黄褐色	〃	普通	○器面剥離。

柱穴 (第584～586図)

4874	壺形土器	13.0	—	—	○頸部中位に接合痕残る。	明橙色	砂粒多含	やや軟	
4875	〃	11.5	—	—	○頸部内面ヘラケズリ後、ヘラミガキ。	茶褐色	雲母を含む		
4876	〃	16.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰色	砂粒含む		
4877	〃	20.0	—	—	○口縁部内面貝殻圧痕。頸部内面ヘラケズリ。	灰白色	細砂含む		
4878	〃	11.5	—	—	○口縁下端に浅い凹線。内面下半粘土輪積巻上。	明黄橙色	砂粒多含	良好	
4879	〃	9.6	—	—	○内外面ヘラミガキ。	暗灰色	細砂		
4880	〃	7.4	4.0	12.8	○体部上位に補強のための粘土帯を貼り付ける。	淡黄灰白色	砂粒多含	良好	○完形品。
4881	甕形土器	14.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂		
4882	〃	15.0	—	—	〃	暗灰色	砂粒多い		
4883	〃	14.0	—	—	〃	灰黄色	〃		
4884	〃	17.0	—	—	〃	〃	〃		
4885	〃	16.0	—	—	〃	赤灰褐色	精選土		
4886	〃	11.1	—	—		淡黄褐色	微砂		
4887	〃	13.0	5.3	13.9	○外底部一部ミガキ。体部外面ヘラミガキ。	白橙褐色	微砂多含	良好	○外面中位に黒斑。
4888	〃	—	5.0	—	○外面ハケメ。	灰褐色	細砂		
4889	〃	—	5.8	—	〃	暗灰褐色	〃		
4890	〃	—	5.6	—	○体部外面ヘラミガキ。	黄灰色	細砂含む		
4891	〃	—	4.4	—	○外面ハケメ。	〃	〃		
4892	〃	—	5.8	—					
4893	〃	13.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄褐色	細砂含む		
4894	〃	12.0	—	—	〃	〃	〃		
4895	鉢形土器	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	〃	〃		
4896	高杯形土器	28.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はヘラケズリ。	灰黄色	細砂		
4897	〃	29.7	—	—	○口縁部内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		
4898	〃	18.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。				

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
4899	高杯形土器	—	10.8	—	○脚内面ヘラケズリ。				
4900	〃	23.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	細砂		
4901	〃	20.6	—	—	○内外面ヘラミガキ。	〃	精良		
4902	〃	20.6	—	—	○外面下半ヘラケズリ。他はヘラミガキ。	〃	〃		
4903	〃	—	—	—	○口縁部外面ヨコナデ。	〃	細砂		
4904	〃	—	17.0	—	○外面ヘラミガキ。脚さし込式透孔5孔か？	明黄橙色	精良	良好	
4905	〃	—	20.3	—	○筒部上半にシボリメ痕。さし込み式円筒部。	淡橙色	微砂多含	〃	
4906	〃	—	—	—	○脚内面シボリ，他はヘラミガキ。	黄灰色	細砂		
4907	〃	—	13.5	—	○脚外面ヘラミガキ。	〃	〃		
4908	〃	—	—	—	○脚内面ヘラケズリ，外面4条と5条の沈線。	灰黄色	〃		
4909	〃	—	13.0	—	○脚内面ヘラケズリ，外面ハケメ。	赤灰褐色	〃		
4910	〃	15.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面下半ヘラケズリ。	灰褐色	精選土		
4911	〃	15.6	—	—	〃	赤褐色	〃		
4912	〃	—	9.6	—	○脚内面ハケメ。外面ヘラケズリ，ミガキ。	黄褐色	〃		
4913	〃	—	12.0	—	○内外面ハケメ。	灰黄色	細砂		
4914	鉢形土器	16.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面一部ヘラミガキ。	黄灰色			
4915	〃	11.2	4.4	8.7					
4916	〃	10.4	5.1	7.8	○外面押圧，内面ヨコナデ。	黄灰色	細砂		
4917	台付鉢形土器	—	4.8	—	○外面ヘラケズリ。		砂粒多く含		
4918	高杯形土器	43.0	—	—	○内外面にヘラミガキ。	暗灰色	〃		
4919	鉢形土器	10.5	3.0	4.6	○口縁部ヨコナデ，他はヘラミガキ。	黄褐色	精選土		
4920	〃	16.0	5.4	—	○内外面ともにヘラミガキ。	〃	〃		
4921	〃	15.7	—	—	○口縁部ヨコナデ，他はヘラミガキ。	赤灰褐色	〃		
4922	〃	30.2	—	—	〃	灰黄色			
4923	壺形土器	14.8	—	—	○口縁ヨコナデ。頸部内面ハケ，シボリメ。	浅黄橙色	精良	良好	○1/6残存。
4924	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端拡張面凹線3条。	黒褐色	砂粒細砂多	〃	○小破片。
4925	〃	—	—	—	○口頸部内外面ヨコナデ。口縁端面凹線2条。	灰白色	〃	〃	〃
4926	〃	15.6	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部外面ナデ。	褐灰色	〃	良好堅	○1/6残存。口縁煤。
4927	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	黄橙色	細砂多	良好	○小破片。
4928	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ。	灰白色	砂粒細砂多	良好堅	〃
4929	〃	—	—	—	○外面ヨコナデ。口縁端面上半に凹線1条。	暗褐色	〃	良好	〃
4930	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁端面中央くぼむ。	鈍い赤褐色	精良・緻密	〃	〃
4931	〃	19.1	—	—	○口頸部ヨコナデ。	褐灰色	砂粒細砂多	〃	○1/8残存。
4932	〃	—	—	—	〃	鈍い褐色	〃	〃	○小破片。
4933	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	褐灰色	〃	〃	〃
4934	〃	17.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	浅黄橙色	〃	良好堅	○1/8強残存。
4935	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁端面内湾気味。	灰褐色	〃	良好	○小破片。
4936	〃	13.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ。	浅黄橙色	〃	良好堅	○1/6残存。
4937	〃	13.0	—	—	○外面ヨコナデ。口縁内面ナデかヘラミガキ	鈍い橙色	〃	〃	○1/5残存。
4938	〃	—	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	灰褐色	〃	良好	○小破片。
4939	台付鉢形土器	—	—	—	○内外面ナデ。	鈍い赤褐色	石粒砂粒多	〃	○小片。製塩土器。
4940	〃	—	—	—	○内外面ナデ・オサエ。外面下半ヘラケズリ	赤褐色	砂粒細砂多	〃	〃
4941	〃	—	—	—	○外面ナデ・オサエ。内面ナデで一部ハケ。	灰赤褐色	石粒砂粒多	〃	〃
4942	〃	—	—	—	○内面・底面ナデ。外面指頭圧痕顕著。	橙色	砂粒多	〃	○¼残。製塩土器。
4943	〃	—	3.8	—	○内面ナデ。外面指頭圧痕顕著。	鈍い黄橙色	精良	〃	○脚台部完存。
4944	〃	—	8.5	—	○内外面ナデ。	淡橙色	〃	〃	○1/8弱残存。
4945	〃	—	7.8	—	○内面ナデ。外面ナデ・オサエ。指頭圧痕顕著。	淡褐色	〃	〃	○1/4強残存。
4946	底部	—	—	—	○外面ハケの後ナデ。	暗褐色	砂粒細砂	〃	○小破片。
4947	〃	—	—	—	○底面ナデ。内面ナデ。	黒褐色	砂粒細砂多	〃	○1/8残存。
4948	鉢形土器	—	—	—	○口縁ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ後ミガキ。	鈍い黄橙色	〃	堅	○小破片。
4949	〃	—	—	—	○口頸部ヨコナデ。体部内面ナデか？	〃	〃	良好	〃
4950	高杯形土器	20.5	—	—	○杯体部から少し立上がった後外反する。	鈍い橙色	細砂多	良好堅	○1/8残存。
4951	〃	—	—	—	○外面剥落。先端はさらに外反。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
4952	壺形土器	—	—	—	○内外面剥落。	黄橙色	石粒多	良好	○小片。弥生時代前期。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4953	高杯形土器	—	—	—	○筒外面ハケ,内面ナデ。据外面ヨコナデ。	鈍い橙色	砂粒細砂多	良好	○筒部完存。
4954	〃	—	—	—	○筒外面ハケ、内面シボリメ。屈折部沈線4条。	赤橙色	〃	〃	〃
4955	〃	—	10.0	—	○脚端部内外面ナデ。	浅橙色	〃	〃	○1/8残存。
4956	〃	—	—	—	○外面調整不明。脚端にヘラガキ沈線1条。	橙色	〃	〃	○小破片。
4957	〃	—	—	—	○内面ヨコナデ。脚端外面ハケ。脚端沈線2条。	灰白色	〃	〃	〃
4958	器台形土器	—	—	—	○口縁拡張面ヨコナデ。拡張面ヘラガキ鋸歯文。	鈍い黄橙色	〃	良好堅	〃
4959	〃	—	—	—	○脚端ヨコナデ。外面ヘラミガキ。ヘラガキ文。	黄橙色	〃	良好	〃

包含層（第587図）

4960	壺形土器	(11.7)	—	—	○内外面ヨコナデ。	暗灰白色	精製粘土	良好	
4961	〃	(15.5)	—	—	○外面ハケメ上に沈線。	灰茶色	白色小砂粒	〃	
4962	〃	(12.8)	—	—		〃	〃	〃	
4963	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	
4964	甕形土器	(18.7)	—	—		褐色	〃	〃	
4965	〃	(16.0)	—	—	○外面極細のハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
4966	〃	—	5.4	—	○外面底部ヘラケズリ。	橙色	〃	〃	
4967	〃	(15.9)	—	—		暗灰色	〃	〃	
4968	〃	(17.3)	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
4969	〃	(14.0)	—	—		黄橙色	〃	〃	
4970	〃	(14.7)	—	—		灰茶色	〃	〃	
4971	〃	(9.2)	—	—	○内面ヘラケズリ。	茶褐色	〃	〃	
4972	〃	—	—	—	○外面極細のハケメ。	橙色	〃	〃	
4973	壺形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	黄橙色	〃	〃	
4974	高杯形土器					〃	〃	〃	○調整不明。
4975	〃	(25.3)	—	—	○口端部5条の凹線。	灰白色	〃	〃	
4976	〃	(21.9)	—	—		黄橙色	精製粘土	〃	○器面剝落。
4977	〃	(21.9)	—	—	○口縁内外面ヨコナデ。	淡褐色	〃	〃	
4978	〃	—	(13.6)	—	○下位穿孔は10穴。	灰褐色	白色小砂粒	〃	
4979	〃	—	(16.2)	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
4980	〃	—	7.6	—	○穿孔は5穴。	黄橙色	精製粘土	〃	
4981	〃	—	(18.9)	—	○外面極細のハケメ。	〃	白色小砂粒	〃	
4982	〃	—	—	—	○穿孔は5穴。	淡褐色	〃	〃	
4983	鉢形土器	(18.3)	—	—		赤褐色	〃	〃	
4984	〃	(17.5)	—	—	○穿孔は2穴。	灰白色	〃	〃	
4985	〃	(13.8)	—	—		暗茶褐色	〃	〃	
4986	〃	(12.1)	—	—	○外面下半ヘラ面取り、内面ハケメ。	黄橙色	〃	〃	
4987	〃	(12.6)	—	—	○外面粗いハケメ。	褐色	〃	〃	○黒斑。
4988	台付鉢形土器	—	—	—	○内面極細のハケメ。	暗灰色	〃	〃	
4989	鉢形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	黄橙色	〃	〃	
4990	〃	7.5	3.1	5.0	○内外面指頭圧痕文。	〃	〃	〃	
4991	〃	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土	〃	
4992	台付鉢形土器	—	3.6	—		灰褐色	白色小砂粒	〃	
4993	〃	—	5.2	—		〃	〃	〃	
4994	〃	—	9.0	—	○外面ヨコナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
4995	壺形土器	(19.6)	—	—	○口縁端部竹管文。	淡褐色	〃	〃	

竪穴式住居—40（第592図）

4996	壺形土器	9.3	—	—		灰黄色	精選土		○内外面調整不明。
4997	〃	—	—	—	○外面ハケメ。内面ハケメ、ナデ。	黄褐色	〃		
4998	甕形土器	13.6	—	—	○口縁外面クシガキ沈線。外面ヘラミガキ。	灰黄色	細砂		○外面煤付着。
4999	〃	14.6	—	—	○口縁外面クシガキ沈線。外面ハケメ後ミガキ。	暗灰褐色	〃		
5000	〃	—	—	—	○底部外面ヨコヘラミガキ。	〃	〃		
5001	台付鉢形土器	12.6	5.4	9.0	○内外面ハケメ。台外面押圧。	赤褐色	精選土		
5002	鉢形土器	12.7	—	—	○内外面ヘラミガキ。	〃	〃		
5003'	高杯形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。穿孔4か所。	灰褐色	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5004	高杯形土器	—	—	—	○脚柱部ヘラによる面取り。	黄灰色	精選土		
5005	〃	—	10.7	—	○外面ヘラミガキ。	灰黄色	〃		

竪穴式住居—41（第593図）

5006	甕形土器	—	—	—	○口縁部外面クシによる沈線。	灰褐色	細砂		

竪穴式住居—42（第594図）

5007	壺形土器	—	—	—	○内面ナデ。	黄褐色	精選土		
5008	甕形土器	12.8	—	—	○口縁部外面クシガキ沈線。	〃	細砂		
5009	〃	—	—	—	○底部外面ヨコヘラミガキ。	暗灰褐色	〃		○柱穴中。
5010	壺形土器	—	—	—		灰褐色	精選土		
5011	鉢形土器	—	3.2	—	○内外面押圧。	赤灰褐色	細砂含む		

竪穴式住居—43（第596図）

5012	杯蓋	—	—	—	○天井部外面ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	青灰色	細砂含む	良好	○ロクロ回転左。
5013	〃	—	—	—	〃	〃	〃	堅緻	〃
5014	〃	15.4	—	3.9	〃	〃	〃	良好	○ロクロ回転右。
5015	〃	14.8	—	4.1	〃	灰青色	大砂粒含む	〃	○ロクロ回転左。
5016	〃	14.8	—	4.3	〃	青灰色	〃	〃	○ロクロ回転右。
5017	〃	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃	〃	
5018	〃	—	—	—	〃	〃		〃	
5019	杯身	—	—	—	〃	灰青色		〃	
5020	〃	—	—	—	〃	青灰色	微砂	堅緻	
5021	〃	—	—	—	〃	〃	〃	良好	○柱穴中。
5022	高杯	—	—	—	○外面カキメ。内面シボリ。長脚一段。	〃	細砂	〃	○透孔3方向。
5023	甕形土器	12.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	大砂粒含む		
5024	〃	14.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。	茶灰色	〃		
5025	〃	16.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	暗茶色	〃		
5026	〃	15.1	—	—	〃	暗灰褐色	〃		
5027	〃	—	—	—	〃	淡茶色	〃		
5028	〃	—	—	—	〃		〃		
5029	〃	—	—	—	○口縁部内面ハケメ。	灰茶色	粗砂		
5030	〃	—	—	—	○口縁部内面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰黄色	大砂粒含む		○外面煤付着。
5031	甑形土器	26.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ハケメ。	灰茶褐色	〃		
5032	〃	—	12.0	—	○端部外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	〃	〃		

井戸—26（第598図）

5033	壺形土器	16.6	8.0	32.8	○口頸部ヨコナデ。外面ハケメ。一部ミガキ。	淡灰色	大砂粒含む		

井戸—27（第599図）

5034	杯蓋	13.9	—	4.5	○天井部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	青灰色	細砂	良好	○ロクロ回転左。
5035	杯身	12.5	—	4.7	○底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰色	良好	〃	○ロクロ回転右。
5036	〃	12.8	—	4.2	〃	灰青色	〃	〃	〃

井戸—28（第600図）

5037	甕形土器	14.2	—	23.9	○内面下半指頭，上半ヘラケズリ。外面下半ヘラミガキ，上半ハケナデ。口縁内外ナデ。	暗灰淡黄白色	細砂を混入	良好	○外面縦。内面下半に炭化物付着。

井戸—29（第601図）

5038	甕形土器	20.1	—	—	○内外面ヨコナデ。	茶褐色	細砂を混入	良好	○内面明茶色化粧土。

土壙—254（第602図）

5039	甕形土器	—	3.8	—	○底部外面ヘラミガキ。内面押圧。	暗黄灰色	細砂		
5040	高杯形土器？	—	—	—		黄灰色	〃		○内外面調整不明。
5041	高杯形土器	16.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	赤褐色	精選土		
5042	〃	—	14.8	—	○外面ハケメ。	〃	〃		

土壙—255（第603図）

5043	蓋	10.7	—	4.0	○ロクロ右回り。ヨコナデ調整。	淡灰色	微砂含む	普通	○須恵器。
5044	高杯	13.5	—	—		青灰色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5045	鉢形土器	15.9	—	—		淡黄色	微砂多含	良好	
5046		18.6	—	—	○片口をつまみだす。	淡黄橙色	〃	〃	

溝—72（第605図）

5047	杯蓋	—	—	—	○天井部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	青灰色	細砂	堅緻	○ロクロ回転右。
5048	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃	良好	〃

溝—73（第610～624図）

5049	壺形土器	19.8	—	35.3	○口縁部内外面ハケメ。体部内面ヘラケズリ	灰黄色	細砂		
5050	〃	18.5	—	31.7	○内面指頭圧痕残る。外面ハケメ。	暗黄褐色	細砂多い		○外面煤付着。
5051	椀形土器	8.4	—	—	○内面ヨコナデ。外面不定方向ヘラミガキ。	灰黄色	細砂		
5052	不明	—	3.8	—	○内面ヘラケズリ。	黄橙色	〃		○外面丹塗り。
5053	小型丸底壺形土器	10.8	—	7.0	○体部外面ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	黄褐色	精選土		
5054	壺形土器	11.4	—	15.6	○内面ハケメ。一部指頭圧痕。外面ヨコナデ。	灰褐色	細砂		
5055	〃	10.7	—	16.3	○口縁部内面ハケ後暗文風ヘラ。外面ケズリ。	黄褐色	精選土		
5056	甕形土器	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	黄灰色	砂粒含む		
5057	〃	13.8	—	—	○口縁部クシガキ文。外面暗文状ヘラミガキ。	灰黄色	細砂		
5058	〃	13.5	—	—	○口縁部内面ハケメ。	暗灰褐色	〃		○外面煤付着。
5059	〃	—	—	—	○口縁部内外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃		
5060	〃	—	—	—	○内面一部ナデ。外面ハケメ。	茶灰色	砂粒含む		○外面煤付着。
5061	〃	28.0	—	—	○外面ハケメ後ヘラミガキ。	暗灰色	細砂多い		
5062	〃	18.8	—	—	○内面ナデアゲ。外面肩部ヘラミガキ。	灰褐色	微砂多い		
5063	鉢形土器	22.6	11.7	14.9	○底部ハケメ。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	〃	砂粒含む		
5064	〃	22.0	7.8	13.7	○内外面ともハケメ。接合痕残す。	灰黄色	細砂		○外面煤付着。
5065	甕形土器	17.0	—	—	○内面ナデアゲ。外面ハケメ。接合痕残す。	〃	細砂多い		〃
5066	〃	14.2	—	—	○内面ナデアゲ。外面粗いハケメ。	灰褐色	小石含む		〃
5067	〃	14.7	—	—	○内面一部指頭圧痕。外面ハケメ。	灰黄色	砂粒含む		〃
5068	〃	13.4	—	—	○口頸部内面ハケメ。圧痕残す。外面ナデ。	〃	〃		○煤付着。
5069	〃	18.0	—	—	○口縁部および肩部内面ハケメ。	灰色	砂粒多い		
5070	〃	19.8	—	33.5	○口縁部内面ヨコハケメ。体部内面イタナデ。	灰褐色	白色砂粒		○外面煤付着。
5071	〃	21.0	—	—	○口縁部内面ヨコハケメ。内面ナデ。	灰黄色	砂粒含む		
5072	〃	15.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヨコハケメ。	淡灰黄色	大砂粒含む		
5073	〃	18.6	—	—	○頸部内面ヨコハケメ。肩部ハケメ。	灰白色	小石含む		○外面煤付着。
5074	〃	19.9	—	34.7	○内面ヨコハケ後タテ方向ナデアゲ。	暗灰色	〃		〃
5075	〃	20.0	—	—	○内面ヨコハケ後ナデアゲ。	黄褐色	砂粒多い		〃
5076	〃	16.0	—	—	○内面比較的細かいヨコハケメ。	灰黄色	細砂		〃
5077	〃	17.0	—	—	○内面ヘラケズリ，外面に押圧痕残す。	〃	細砂多い		
5078	〃	16.0	—	—	○口縁部内面ハケメ。体部内面ナデアゲ。	暗茶色	細砂		○外面煤付着。
5079	〃	13.4	—	16.6	○内面板状工具によるナデ後粗いヘラ痕。	黄灰色	砂粒多い		
5080	〃	15.8	—	—	○外面比較的細かいタテハケメ。内面ナデ。	茶灰色	砂粒含む		○外面煤付着。
5081	〃	12.0	—	—	○内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗灰褐色	〃		
5082	〃	13.5	—	—	○内面ヨコハケメ。ナデアゲ。	暗灰色	〃		○外面煤付着。
5083	〃	27.6	—	—	○内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	黄灰色	砂粒多い		
5084	〃	18.8	—	—	○内面ナデ。外面単発的なハケメ。	灰黄色	〃		○外面煤付着。
5085	〃	14.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面ヨコハケメ。	灰褐色	粗砂		
5086	〃	14.2	—	—	○内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗灰褐色	〃		
5087	〃	15.0	—	—	〃	灰黄色	細砂		
5088	〃	17.5	—	—	○内面ヘラケズリ。外面太めのハケメ。	黄褐色	白色細砂		○外面煤付着。
5089	〃	17.4	—	—	○内面ナデアゲ。ハケメ，口縁部ヨコナデ。	灰黄色	砂粒多い		〃
5090	〃	21.0	—	—	○内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	〃	粗砂		
5091	鉢形土器	24.1	—	15.5	○内面丁寧なナデ。外面ハケメ。	灰褐色	細砂		○外面煤付着。
5092	釜形土器？	12.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面押圧。耳付着。	暗灰色	〃		〃
5093	甕形土器	19.1	—	—	○内面粗いヘラケズリ。外面ナデ。	灰茶色	粗砂		○内面煤付着。
5094	鉢形土器	28.2	—	—	○内面ハケメ。外面圧痕残る。一部ハケメ。	黄灰色	細砂		○外面煤付着。
5095	甑形土器	23.4	—	—	○内面ハケメ後ナデアゲ。底部内面押圧。	灰黄色	砂粒多い		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5096	甑形土器	19.0	—	—	○内面一部ナデアゲ。外面口縁部イタナデ。	灰黄色	砂粒多い		
5097	〃	—	9.0	—	○内面ヘラケズリ。外面太めのハケメ。	淡灰色	〃		○外面底部煤付着
5098	鉢形土器	30.2	—	—	○内面板状工具によるナデ。外面ナデ。	黄灰色	粗砂		○外面煤付着。
5099	甑形土器	31.0	—	—	○内面ヘラケズリ。外面粗いハケメ。	赤灰色	〃		
5100	〃	27.3	—	—	○内面単発的なヘラケズリ。外面ナデ。	茶灰色	〃		○外面煤付着。
5101	高杯形土器	—	—	—	○内外面ともナデ。脚部内面ナデ。	灰白色	細砂		
5102	〃	—	—	—	○内面調整不明。外面指頭圧痕残す。	黄褐色	大砂粒含む		○表面丹塗り。
5103	〃	—	—	—	○内外面ともナデ。一部圧痕残す。	赤灰色	小石含む		
5104	〃	13.9	—	—	○内外面ともナデ。外面下半押圧。	灰黄色	精選土		
5105	〃	15.5	—	—	○杯内面ヨコナデ。脚柱部内面ヘラケズリ。	茶灰色	細砂		
5106	〃	16.6	—	—	○表面剝落して調整不明。脚部内面シボリ。	黄褐色	大砂粒含む		○表面丹塗り。
5107	〃	—	10.2	—	○内面シボリメ。端部ヘラケズリ。	淡灰黄色	〃		○外面丹塗り。
5108	椀形土器	12.0	—	—	○内面カキアゲナデ後ハケメ。外面ミガキ。	淡黄褐色	精製粘土		
5109	〃	12.6	—	—	○内面ナデアゲ。外面不定方向のヘラケズリ	黄褐色	精選土		
5110	〃	11.6	—	—	○外面浅い沈線3本。体部ヘラケズリ。	灰褐色	細砂		
5111	〃	11.0	—	—	○口縁端部浅い凹線。部分的に折り返し。	灰黄色	雲母含		○一部黒斑。
5112	〃	12.8	—	6.9	○外面一部ヘラケズリ。粘土紐左回転巻上げ。	赤灰色	細砂		○底に黒斑。
5113	〃	10.4	—	—	○内面ヘラケズリ。体部外面指頭圧痕残す。	灰白色	大砂粒含む		
5114	〃	11.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。指頭圧痕残す。	灰褐色	細砂多い		
5115	〃	7.6	—	7.3	○内面指頭圧痕残す。外面粗いハケメ。	灰白色	粗砂		
5116	〃	16.0	6.6	4.8	○内面暗文風のヘラミガキ。外面ヘラミガキ。	灰黄色	粗砂含む		
5117	小型楕形土器	5.8	—	6.9	○内面ナデ。外面タタキ。	〃	精選土		○製塩土器。
5118	〃	7.4	—	—	○内面ユビオサエ。外面タタキ。	〃	石粒多く含		〃
5119	〃	—	—	—	○内面ユビオサエ。外面ナナメタタキ。	黄灰色	砂質		〃
5120	〃	—	—	—	○内面ユビオサエ。外面タタキ。	暗赤褐色	砂含む		〃
5121	〃	8.0	—	4.1	〃	赤灰色	砂質		〃
5122	〃	8.4	—	—	〃	灰黄色	〃	堅緻	〃
5123	〃	8.6	—	—	〃	灰白色	〃		〃
5124	〃	8.0	—	—	〃	灰黄色	粗い砂質		〃
5125	〃	10.0	—	—	○内面ユビオサエ。外面粗いタタキ。	黄灰色	砂質	堅緻	〃
5126	〃	4.0	—	(7.0)	○内面ナデ。外面指頭圧痕多く残す。	灰青色	砂粒含む	〃	○須恵質製塩土器。
5127	〃	—	—	—	○内面ナデ。	灰黄色	砂質		○製塩土器。
5128	〃	—	—	—	○内外面ともナデ。	灰褐色	粗砂		〃
5129	〃	—	—	—	○内面圧痕。外面タタキ。	暗灰褐色	砂粒多い		〃
5130	〃	—	—	—	○内面ナデ。外面タタキ。	灰黄色	〃		〃
5131	〃	—	—	—	〃	暗灰褐色	砂質		〃
5132	〃	—	—	—	○外面タタキ。	〃	〃		〃
5133	鉢形土器	18.8	—	9.1	○内面板状工具によるナデ。外面ヘラミガキ。	淡黄褐色	細砂		
5134	〃	14.0	—	—	○内外面押圧，ナデ。	暗灰褐色	粗砂	堅緻	
5135	〃	—	—	—	○内面ハケメ。	灰黄色	〃	〃	
5136	竈	—	—	—	○内外面ともナデ。一部ヘラケズリ調整。		砂粒多含		
5137	〃	—	—	—	○内面ハケメ。外面部分的にヘラミガキ。	黄灰色	〃		○一部黒斑。
5138	円筒埴輪	—	—	—	○内面ナデ。外面タテハケメ。	灰褐色	砂粒含む		○土師質。
5139	杯蓋	12.6	—	—	○内面手持ちによるヘラケズリ。	暗青灰色	精製粘土	堅緻	○細片。
5140	〃	12.5	—	4.4	○内外面ヨコナデ。天上部外面ヘラケズリ。	青灰色	小石含む	良好	○ロクロ回転左。
5141	〃	12.0	—	—	〃	灰色	小砂粒含	〃	○ロクロ回転右。
5142	〃	12.4	—	—	○内外面ヨコナデ。	青灰色	精製粘土	〃	○上面緑色釉。
5143	〃	11.9	3.1	5.9	○内外面ヨコナデ。天上部外面ヘラケズリ。	〃	白色小砂含	〃	○ロクロ回転左。
5144	〃	12.4	—	5.3	〃	〃	細砂	〃	〃
5145	〃	12.7	—	4.2	〃	灰青色	細砂含	〃	〃
5146	〃	13.3	—	4.3	〃	青灰色	砂粒	〃	○ロクロ回転右。
5147	〃	13.0	—	5.3	〃	〃	小砂粒含	〃	○ロクロ回転左。
5148	〃	13.0	—	4.5	〃	暗青灰色	小石含む	〃	〃
5149	〃	13.3	—	4.4	〃	青灰色	精製粘土	堅緻	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5150	杯蓋	13.8	—	4.7	○内外面ヨコナデ。天上部外面ヘラケズリ。	灰青色	小砂粒多い	良好	○ロクロ回転右。
5151	〃	13.4	—	5.1	〃	灰色	砂粒多い	不良	
5152	〃	13.6	—	4.2	〃	黒灰色	小砂粒含	〃	○ロクロ回転左。
5153	〃	14.0	—	4.4	〃	暗青灰色	白色砂粒	良好	○ロクロ回転右。
5154	〃	14.0	—	4.4	〃	黒灰色	精製粘土	〃	〃
5155	〃	13.8	—	4.3	〃	暗灰青色	白色細砂含	〃	〃
5156	〃	14.3	—	3.7	〃	青灰色	小石含む	〃	〃
5157	〃	14.2	—	4.5	〃	〃	砂粒	〃	○ロクロ回転左。
5158	〃	14.8	—	4.5	〃	灰青色	小石含む	〃	〃
5159	〃	15.8	—	4.1	〃	黒色	砂粒多い	〃	○ロクロ回転右。
5160	〃	15.8	—	4.5	〃	青灰色	〃	〃	〃
5161	〃	15.6	—	5.2	〃	灰青色	粗砂小石含む	〃	〃
5162	〃	15.0	—	4.6	〃	〃	精製粘土	〃	〃
5163	〃	15.0	—	4.2	〃	青灰色	砂粒含む	〃	〃
5164	〃	15.2	—	4.2	〃	黒青灰色	細砂多い	〃	○ロクロ回転左。
5165	〃	15.0	—	4.8	〃	灰色	砂粒多い	不良	○ロクロ回転右。
5166	〃	14.6	—	5.4	〃	黒灰色	〃	良好	〃
5167	〃	15.0	—	4.7	〃	灰白色	〃	不良	○ロクロ回転左。
5168	〃	13.8	—	—	〃	暗灰色	砂粒含む	良好	○ロクロ回転右。
5169	〃	15.6	—	—	〃	灰白色	小石含む	不良	〃
5170	〃	13.9	—	4.9	〃	青灰色	砂粒多い	良好	〃
5171	〃	14.1	—	4.9	〃	淡灰褐色	砂粒	不良	〃
5172	〃	12.7	—	4.3	〃	暗灰色	粗砂	良好	〃
5173	〃	13.9	—	4.5	〃	〃	細砂多く含	〃	○ロクロ回転左。
5174	〃	14.9	—	4.0	〃	灰緑色	白色細砂	〃	○ロクロ回転右。
5175	〃	14.0	—	3.7	〃	淡灰色	砂粒多い	不良	〃
5176	〃	13.7	—	3.9	〃	灰青色	〃	良好	〃
5177	〃	13.2	—	4.1	〃	〃	砂粒大	〃	〃
5178	〃	13.5	—	3.7	〃	青灰色	白色砂粒含	〃	〃
5179	〃	13.2	—	4.0	〃	灰白色	小石含む	不良	〃
5180	〃	12.8	—	4.5	〃	灰色	砂粒多い	良好	〃
5181	〃	13.1	—	—	〃	青灰色	砂粒含	堅緻	〃
5182	〃	13.0	—	3.8	〃	灰青色	〃	不良	〃
5183	〃	13.0	—	—	〃	暗灰色	小砂粒含	良好	〃
5184	〃	12.8	—	3.6	〃	灰色	細砂	〃	〃
5185	〃	12.5	—	4.1	○内外面ヨコナデ。天上部外面未調整。	〃	細砂含	不良	〃
5186	〃	10.0	—	3.7	○内外面ヨコナデ。天上部外面ヘラオコシ。	青灰色	小石含む	良好	〃
5187	杯身	11.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。	灰色	細砂	〃	
5188	〃	9.6	—	—	○内面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	青灰色	〃	〃	○ロクロ回転右。
5189	〃	11.0	—	—	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	〃	精製粘土	〃	○ロクロ回転左。
5190	〃	10.6	—	4.5	〃	〃	小砂粒	〃	○ロクロ回転右。
5191	〃	12.2	—	4.7	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。底部「×」印あり。	灰色	砂粒	〃	〃
5192	〃	12.0	—	4.2	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	灰青色	細砂多い	〃	〃
5193	〃	12.6	—	4.6	〃	〃	小石含む	良好(?)	〃
5194	〃	12.6	—	4.5	〃	〃	細砂	良好	〃
5195	〃	12.0	—	5.4	〃	〃	砂粒	〃	〃
5196	〃	11.5	—	4.4	〃	〃	小石含む	〃	〃
5197	〃	11.9	—	5.2	〃	灰褐色	砂粒多い	〃	
5198	〃	12.0	—	5.0	〃	〃	〃	〃	○ロクロ回転右。
5199	〃	12.4	—	5.6	〃	灰青色	小砂粒多い	〃	〃
5200	〃	12.8	—	4.2	〃	〃	砂粒多い	〃	〃
5201	〃	12.5	—	5.2	〃	灰色	大砂粒含	〃	〃
5202	〃	13.0	—	5.5	〃	灰青色	細砂多い	〃	〃
5203	〃	13.0	—	4.6	〃	青灰色	小砂粒多い	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
5204	杯身	12.9	—	4.3	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	灰色	細砂	良好	○ロクロ回転右。
5205	〃	13.0	—	—	〃	暗灰色	〃	〃	〃
5206	〃	11.8	—	4.6	〃	灰白色	〃	〃	〃
5207	〃	12.6	—	—	〃	灰青色	白色砂粒	〃	〃
5208	〃	12.5	—	4.9	〃	灰白色	細砂多い	不良	○ロクロ回転左。
5209	〃	13.2	—	4.4	○内外面ヨコナデ。底部外面粗いヘラケズリ	灰色	小砂粒多い	〃	〃
5210	〃	12.8	—	4.3	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	青灰色	小石含む	良好	○ロクロ回転右。
5211	〃	13.4	—	5.0	〃	暗青灰色	細砂多い	〃	〃
5212	〃	14.6	—	5.0	〃	灰色	〃	〃	〃
5213	〃	14.0	—	5.1	〃	暗灰色	小石含む	〃	〃
5214	〃	14.0	—	4.4	〃	灰青色	砂粒多い	〃	〃
5215	〃	13.6	—	4.0	〃	暗青灰色	微砂粒		〃
5216	〃	12.7	—	4.3	○内外面ヨコナデ。立ち上がり部外面浅い沈線。底部ヘラケズリ。底部に「＋」記号。	青灰色	小石含む	良好	〃
5217	〃	12.3	—	4.2	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	〃	精製粘土	〃	○ロクロ回転左。
5218	〃	11.8	—	5.5	〃	〃	小石含む	〃	〃
5219	〃	12.7	—	4.3	〃	灰白色	大砂粒含	不良	○ロクロ回転右。
5220	〃	11.9	—	4.6	〃	青灰色	砂粒	良好	〃
5221	〃	11.1	—	4.2	〃	灰青色	小石含む	〃	〃
5222	〃	11.8	—	4.7	○外面ヨコナデ。丹付着。	緑灰色	砂粒	〃	○底部調整不明。
5223	〃	11.8	—	—	○内外面ヨコナデ。外面釉付着して調整不明	青灰色	細砂	〃	○ロクロ回転右。
5224	〃	12.3	—	3.8	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	〃	砂粒多い	〃	〃
5225	〃	12.6	—	4.4	〃	淡灰色	細砂粒含	不良	〃
5226	〃	12.7	—	3.6	〃	赤灰色	砂粒多い	良好	〃
5227	〃	12.0	—	4.1	〃	青灰色	小石含む	〃	〃
5228	〃	12.0	—	3.9	〃	淡灰色	砂粒含	〃	〃
5229	〃	12.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。	灰色	細砂	〃	〃
5230	〃	11.7	—	—	〃	〃	白色砂粒含	〃	〃
5231	〃	11.9	—	3.5	○内外面ヨコナデ。底部外面未調整。	灰白色	精製粘土	不良	〃
5232	〃	11.0	—	4.2	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	〃	細砂多い	良好	○ロクロ回転左。
5233	〃	11.6	—	—	○内外面ともヨコナデ。	灰色	細砂	〃	○ロクロ回転右。
5234	〃	12.0	—	3.9	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	灰青色	砂粒	〃	〃
5235	〃	11.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。	灰白色	小石含む	不良	〃
5236	〃	10.6	—	—	〃	〃	白色細砂	良好	〃
5237	〃	11.6	—	—	〃	灰色	細砂	〃	〃
5238	〃	11.4	—	—	○内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	〃	白色微砂含	〃	〃
5239	〃	10.0	—	3.5	○内外面ともヨコナデ。底部外面粗いナデ。	灰白色	白色砂粒	〃	
5240	有蓋高杯	9.9	8.7	9.4	○杯底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	青灰色	細砂含	〃	○ロクロ回転右。
5241	〃	11.0	8.7	10.0	〃	黒灰色	白色砂粒	〃	〃
5242	〃	11.0	8.4	10.3	〃	灰青色	細砂	〃	〃
5243	〃	10.1	8.8	9.1	○脚部外面カキメ。杯底部外面ヘラケズリ。	青灰色	小石含む	〃	○ロクロ回転左。
5244	〃	10.4	9.4	9.8	〃	灰色	細砂粒	〃	〃
5245	〃	—	8.6	—	○杯底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	暗青灰色	精製粘土	〃	○ロクロ回転右。
5246	〃	10.1	—	—	〃	青灰色	細砂	〃	〃
5247	高杯	—	8.7	4.4	〃	暗灰色	細砂多い	〃	〃
5248	〃	—	9.2	—	○内外面ともヨコナデ。	青灰色	〃	〃	〃
5249	〃	—	8.6	—	〃	灰青色	細砂	〃	○ロクロ回転左。
5250	無蓋高杯	—	10.0	—	○脚部外面カキメ。杯部外面ヘラケズリ。	灰色	砂粒多い	〃	
5251	高杯	—	9.0	—	○内外面ともヨコナデ。	黒灰色	精製粘土	〃	
5252	〃	—	—	—	○透しは3方向。外面ヨコナデ。	灰色	〃	〃	
5253	〃	—	15.3	—	○内外面ともヨコナデ。	灰青色	砂粒多い	〃	
5254	無蓋高杯	13.3	7.4	7.5	○杯底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	〃	精製粘土	〃	○ロクロ回転左。
5255	〃	12.3	7.3	7.5	〃	淡灰色	細砂	〃	○ロクロ回転右。
5256	〃	13.0	—	4.6	○杯部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰色	砂粒多い	不良	〃
5257	高杯	—	7.8	—	○杯底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰白色	細砂	〃	○ロクロ回転左。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5258	高杯	—	10.7	—	○内外面ともヨコナデ。	灰色	砂粒多い	良好	○ロクロ回転右。
5259	〃	—	9.0	—	〃	青灰色	細砂多い	〃	○ロクロ回転左。
5260	無蓋高杯	13.2	10.0	8.6	○杯底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰白色	小石含む	不良	○ロクロ回転右。
5261	高杯	—	8.2	3.1	○内外面ともヨコナデ。	暗青灰色	細砂	良好	
5262	〃	—	9.0	—	〃	灰色	細砂多い	〃	○ロクロ回転右。
5263	〃	—	8.5	—	〃	灰白色	〃	不良	〃
5264	無蓋高杯	9.1	7.0	8.0	○杯部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰色	細砂	良好	〃
5265	蓋	10.6	—	3.6	○内面ヨコナデ。天上部外面ヘラケズリ。	青灰色	細砂多い	〃	〃
5266	有蓋短頸壺	9.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
5267	蓋	10.2	—	3.5	○内外面ヨコナデ。天上部外面ヘラケズリ。	〃	微砂	〃	〃
5268	有蓋短頸壺	8.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	灰色	砂粒多い	〃	〃
5269	壺(長頸)	—	—	—	○内外面頸部シボリメ。指あて痕。底部押圧痕。	灰青色	細砂多い	〃	〃
5270	頸	9.2	—	—	○頸部外面波状文。他はヨコナデ。	青灰色	細砂	〃	〃
5271	〃	—	—	—	○外面上半カキメ，下半ヘラケズリ。	暗青灰色	白色小砂粒	〃	〃
5272	〃	—	—	—	○頸部外面波状文。脚部カキメ。内面ナデ。	〃	精製粘土	〃	
5273	〃	13.8	—	16.0	○頸部外面波状文とカキメ。底部ヘラケズリ。	灰色	細砂	〃	○ロクロ回転右。
5274	〃	—	—	—	○胴部外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	〃	白色小砂粒	〃	〃
5275	〃	—	—	—	○頸部内面シボリ。底部外面ヘラケズリ。	暗青灰色	精製粘土	〃	〃
5276	長頸壺	—	—	—	○底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰色	小砂粒	〃	〃
5277	椀	12.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。底部ヘラケズリ。	灰褐色	小石含む	〃	〃
5278	提瓶	8.6	—	—	○内外面ともヨコナデ。	暗青灰色	白色小砂粒	〃	
5279	〃	8.8	—	—	〃	暗灰青色	白色砂粒	〃	
5280	〃	5.3	—	18.7	○内外面に粘土紐接合痕。外面カキメ。	暗灰色	小石含む	〃	○ロクロ回転右。
5281	甕	25.0	—	—	○内外面ともヨコナデ。	暗青灰色	精製粘土	堅緻	
5282	〃	16.0	—	—	○内面ヨコナデ。外面カキメ。	暗灰色	砂粒多い	良好	
5283	〃	21.0	—	46.0	○内面同心円文頸部消し。頸部外面波状文。	灰青色	細砂含	〃	○ロクロ回転右。
5284	〃	16.2	—	—	○内外面ともヨコナデ。	青灰色	細砂多い	〃	〃
5285	〃	21.0	—	—	○内面同心円文。外面平行タタキ，カキメ。	灰青色	砂粒多い	〃	
5286	〃	15.5	—	—	○肩部内面指頭圧痕残す。外面カキメ。	暗灰色	小砂粒多い	不良	
5287	〃	41.6	—	—	○内面同心円文。頸部外面弱い波状文。	青灰色	白色砂粒	良好	
5288	〃	18.3	—	31.4	○内面同心円文。外面平行タタキ，カキメ。	灰色	細砂	不良	
5289	〃	17.9	—	—	○内面同心円文。外面タタキ，カキメ。	灰青色	〃	〃	
5290	器台	—	22.9	—	○内面指頭圧痕残る。外面タタキ，波状文。	〃	精製粘土	良好	○ロクロ回転左。
5291	横瓶	12.1	—	24.4	○内面に車輪文タタキ。外面タタキ。カキメ。	茶褐色	小石含む	〃	
5293	甕	32.8	—	56.9	○頸部ヘラガキ斜線。	緑灰色	精製粘土	〃	

溝—74（第635図）

5294	杯身	12.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。	灰青色	白色砂含む	良好	○ロクロ回転左。
5295	〃	10.8	—	—	〃	暗青灰色	細砂	堅緻	○ロクロ回転右。
5296	〃	11.6	—	—	〃	灰青色	〃	良好	〃
5297	杯蓋	13.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	青灰色	〃	〃	
5298	杯身	13.2	—	—	〃	灰青色	〃	〃	
5299	〃	10.1	—	—	〃	灰白色	〃	〃	○ロクロ回転右。
5300	〃	9.8	—	4.0	○口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	灰色	〃	〃	〃
5301	〃	9.6	—	3.4	○口縁部ヨコナデ。底部平滑に仕上がる。	〃	〃	〃	〃
5302	無蓋高杯	—	—	—	○体部外面クシガキ波状文。	暗青灰色	〃	堅緻	
5303	甕	18.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	青灰色			
5304	〃	33.1	—	—	○頸部外面カキメ。ハケ原体の刺突。	〃	細砂	堅緻	
5305	甑形土器	22.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ハケ後ナデ。	灰白色	粗砂		
5306	〃	23.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面板状工具によるナデ	黄灰色			
5307	甕形土器	15.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	砂粒多い		
5308	〃	15.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面太めのハケメ。	黒灰色			

溝—75（第636図）

5309	短頸壺	10.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。肩部外面カキメ。	青灰色	細砂		
5310	鉢形土器	17.0	—	8.2	○口縁部内面ハケメ。体部外面ハケメ。	赤褐色	〃		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5311	甕形土器	—	—	—	○口縁部外面ハケメ。				

溝—76（第637図）

5312	壺形土器	16.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ。	暗灰黄色	大砂粒含む		○下層。
5313	甕形土器	17.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	黄灰色	細砂		〃
5314	〃	15.0	—	—	○口縁部外面クシガキ。肩外面ハケメ。	黄灰褐色	〃		
5315	〃	9.4	—	—	○口縁部外面ヘラミガキ。				
5316		—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	黄褐色	白色砂含む		
5317	甕形土器	24.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。	明灰黄色	〃		○下層。
5318	鉢形土器	34.1	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	暗灰褐色	細砂含む		

溝—77（第638図）

5319	杯蓋	11.9	—	—	○体部はやや外方へ踏ん張る。ロクロ回転右。	灰色	砂粒細砂含	良好	○1/6弱残存。
5320	〃	—	—	—	○体部は内湾する。天井部・体部間の凸帯鈍い。	〃	精良	〃	○小片。
5321	〃	—	—	—	○天井部・体部間凸帯鋭い。ロクロ回転右か？	〃	〃	〃	〃
5322	〃	—	—	—	○天井部・体部間の凸帯はごく小さく鈍い。	〃	砂粒細砂含	〃	〃
5323	杯身	—	—	—	○受部先端丸くおさめる。	灰紫色	精良	〃	〃

溝—78（第639図）

5324	甕	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端部内面へ肥厚。	明褐灰色	砂粒細砂多	良好	○小破片。土師器
5325	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁部丸くおさめる。	浅黄橙色	石粒砂粒多	〃	〃
5326	杯蓋	13.4	—	—	○口縁内面凹線状の段。天井部下端凸帯鋭い	青灰色		〃	○須恵器。ロクロ回転右
5327	〃	—	—	—	○天井部下端凸帯やや鋭さを欠く。ロクロ回転右。	灰色	細砂かなり	〃	○須恵器。½弱残存。
5328	〃	—	—	—	○体部高い。天井部下端凸帯薄いが鋭い。	〃	砂粒細砂含	〃	○須恵器。小破片。
5329	〃	—	—	—	○体部高い。天井部下端凸帯鈍い。	〃	細砂含む	〃	〃
5330	〃	—	—	—	○体部・天井部境は凹線。口縁部内面の稜鈍い	〃	細砂多	〃	〃
5331	〃	—	—	—	〃	暗灰色	砂粒細砂含	〃	〃
5332	高杯蓋	—	—	—	○つまみ。ヨコナデ。中央突出。	灰色	細砂わずか	〃	○須恵器。完存。
5333	杯身	—	—	—	○立上がり先端面をもつ。図示部分ヨコナデ。	青灰色	〃	〃	○須恵器。小破片。
5334	〃	—	—	—	○立上がり薄手。受部内湾。	灰紫色	細砂含む	〃	〃
5335	〃	11.7	—	—	○立上がり低く，断面三角形。ヘラケズリ½程度。	淡灰色	砂粒細砂多	〃	○須恵器。¼残存。
5336	提瓶？	4.4	—	—	○ヨコナデ。ロクロ目。口縁部かすかに内湾。	灰色	細砂かなり	〃	〃
5337	甕	—	—	—	○体部外面下半ナデ。上半はヨコナデ。	〃	〃	〃	○須恵器。小破片。

溝—79（第640図）

5338	杯蓋	—	—	—	○ロクロ回転右。天井部下端凸帯突出する。	灰色	砂粒細砂多	良好	○須恵器。⅛強残存。
5339	〃	14.3	—	—	○ロクロ回転右。口縁端に面をもつ。	〃	砂粒細砂含	〃	○須恵器。¼弱残存。
5340	〃	—	—	—	○天井部・体部間は段。口縁内面の端面不明瞭。	〃	〃	〃	○須恵器。小破片。
5341	〃	—	—	—	○天井部・体部間はわずかな段。口縁内面に面。	〃	〃	〃	〃
5342	〃	—	—	—	○天井部と体部の境は鈍い稜のみ。	灰白色	細砂多く含	〃	〃
5343	〃	—	—	—	○ロクロ回転左。天井部と体部の境は鈍い凸帯。	灰色	〃		〃
5344	〃	—	—	—	○ロクロ回転右。口縁内面に明瞭な面。	暗青灰色		良好	〃
5345	杯身	—	—	—	○ロクロ回転左か？受部厚く，先端は丸い。	灰色	砂粒細砂多	〃	〃
5346	〃	—	—	—	○立上がり先端丸くおさめる。内面に面。	青灰色	〃	〃	〃
5347	〃	—	—	—	○受部内湾。内面立上がり接合部屈折的。	灰色	精良 緻密	〃	〃
5348	〃	—	—	—	○受部かすかに外反。	青灰色		〃	〃
5349	〃	—	—	—	○受部先端尖り気味に丸くおさめる。	淡青灰色		〃	〃
5350	〃	—	—	—	○底部カキメ。受部先端丸い。受部上面平坦。	灰色		〃	〃
5351	甕	—	—	—	○内外ヨコナデ。口縁部外面クシガキ波状文。	黒灰色	細砂を含む	〃	○須恵器。1/5残存。
5352	〃	—	—	—	○体部内面下半ヘラで掻いたような調整。	灰色	〃	〃	○須恵器。小破片。
5353	高杯	—	—	—	○柱状部接合挿し込み式。内外面ヘラミガキ。	橙色	精良・緻密	〃	○土師器。1/6強残存。

溝—80（第641図）

5354	杯蓋	—	—	—	○ロクロ回転左か。天井部下端の凸帯鈍い。	青灰色	精良	良好	○須恵器。小破片。
5355	〃	—	—	—	○口縁端内面。凹線風の段。	淡青灰色	精良・緻密	〃	〃
5356	壺	—	—	—	○クシガキ波状文，その上に凸帯2条。	灰色	砂粒かなり	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—81（第642図）									
5357	杯身	—	—	—	○ロクロ回転左。受部上面平坦。	青灰色	精良・緻密	良好	○須恵器。小破片。
5358	壺	10.5	—	—	○口縁端部肥厚。口縁端部に丸味あり。	灰色	砂粒細砂多	〃	○須恵器。¼残存
5359	高杯	—	—	—	○脚部外面カキメ。杯底部内面仕上げナデ。	〃	精良	〃	〃
5360	〃	—	9.0	—	○脚端部全体に鋭さを欠く。方形透し孔。	灰赤色	〃	〃	○須恵器。1/6残存。
溝—82～85（第643図）									
5361	甕	—	—	—	○外面平行タタキメ。内面同心円文。	淡灰色	精良	良好	○小片。
5362	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
5363	杯蓋	—	—	—	○口縁端部内面に軽い段をもつ。	灰色	細砂を含む	〃	〃
5364	鉢形土器	—	—	—	○内面ヘラミガキ後にハケ。外面粗いミガキ。	橙色	精良	〃	〃
5365	高杯形土器	12.2			○杯体部内面ハケの後にヘラミガキ。	〃	〃	〃	○¼残存。
土器溜り（第645図）									
5366	甕形土器	(14.0)	—	—	○外面縦位のヘラミガキ。クシガキ沈線4本。	暗灰褐色	白色小砂粒	良好	○外面煤付着。
5367	〃	(14.6)	—	—	○外面クシガキ沈線8本。	茶灰色	〃	〃	
5368	〃	(13.5)	—	—	○外面横・斜位のハケメ。クシガキ沈線8本。	暗赤褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5369	〃	—	—	—	○外面クシガキ沈線4本。	暗灰色	〃	〃	
5370	〃	—	—	—	○外面クシガキ沈線6本。	暗茶灰色	〃	〃	
5371	〃	—	—	—	○外面クシガキ沈線8本。	暗黒茶灰色	〃	〃	
5372	壺形土器	—	2.9	—		赤褐色	精製粘土	〃	○黒斑。
5373	甕形土器	(26.2)	—	—		茶灰褐色	白色小砂粒	〃	○均一小砂粒。
5374	〃	(17.0)	—	—	○内外面同一工具によるナデ。	淡茶褐色	精製粘土	〃	○胎土が異る。
5375	〃	(14.1)	—	—	○内面ヘラケズリ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
5376	〃	(15.2)	—	—	○内外面ヨコナデ。	黄褐色	〃	〃	
5377	高杯形土器	—	—	—		赤黄褐色	〃	〃	
5378	〃	—	—	—		淡赤黄褐色	白色小砂粒	〃	
包含層（第646・647図）									
5379	甕形土器	16.2	—	—		淡黄褐色	砂粒多含	良好	
5380	甕	14.4	—	—	○体部外面ヨコナデ。	暗褐色	微砂多含	〃	
5381	〃	30.1	—	—	○口縁部ヨコナデ調整。	灰褐色		〃	○外面煤付着。
5382		—	—	—	○口唇部外面ヘラ状工具による面取り。	〃	細砂含む	堅緻	
5383	甕	—	—	—	○口縁部外面三角凸帯めぐる。他はヨコナデ。	〃	石英細粒含	〃	○淡灰褐色土出土。
5384	〃	—	—	—	○外面縄蓆文。内面平滑に仕上がる。	暗紫灰色	〃	〃	○暗褐色粘質砂。
5385	〃	—	—	—	○外面縄蓆文。内面ナデ調整。	〃	〃	〃	○表採。
5386	〃	—	—	—	○外面縄蓆文。内面平滑。	〃	〃	〃	○表土～茶灰色土。
5387	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	○淡黄灰色粘土層。
5388	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	○近世溝中。
5389	〃	—	—	—	○外面縄蓆文ナデ消し。一部に残る。	〃	〃	〃	○表採。
5390	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	○表土～茶灰色土。
5391	〃	—	—	—	○外面タタキ。	〃	〃	〃	○灰茶褐色土。
5392	〃	—	—	—	○外面縄蓆文。凹線。内面不定方向のナデ。	暗灰色	細砂	良好	
5393	〃	—	—	—	○外面縄蓆文。内面ナデ。	暗紫灰色	〃	堅緻	
5394	〃	—	—	—	○多面平行タタキ。内面同心円文消去ナデ。	〃	〃	〃	○須恵器か？
5395	〃	—	—	—	○外面細かい平行タタキ。内面平滑。	暗褐色	微砂	〃	○灰茶褐色土。
5396	〃	—	—	—	○外面大きめの縄蓆文。内面平滑。	茶灰色	〃		○軟質。
5397	〃	—	—	—	○外面縄蓆文。内面平滑。	灰白色	〃		○瓦質。
5398	高杯	—	(12.0)	—	○内外面ヨコナデ。	紫灰色	紫灰色粒含	堅緻	
5399	蓋	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。天井部外面若干粗い。	〃	砂粒多く含		
5400	壺	—	—	—	○外面粗いヨコナデ。内面丁寧なヨコナデ。	灰青色	精良	良好	○暗褐色土層。
5401		—	—	—	○外面粗いナデ？。内面，不定方向のナデ。	〃	〃	〃	○茶黄色砂質土。
5402		—	—	—	〃	〃	〃	〃	
5403		—	—	—	○外面タタキ？。内面不定方向のナデ。	〃	〃	〃	
5404		—	—	—	〃	〃	〃	〃	○灰茶褐色土層。
5405		—	—	—	○外面細平行タタキ。内面不定方向のナデ。	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5406	壺	—	—	—	○内外面ヨコナデ。頸部外面波状文。	灰青色	精良	堅緻	
5407	〃	—	—	—	〃	暗青灰色	〃	〃	
5408	甕	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	紫灰色	〃	〃	
5409	直口壺	—	—	—	○内外面ヨコナデ。頸部外面波状文。	淡灰白色	細砂	〃	
5410	〃	11.4	—	—	○内外面ヨコナデ。	暗青灰色	〃	〃	
5411	杯蓋	11.6	—	4.3	○天井部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	暗灰色	〃	良好	
5412		—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰紫褐色	〃	〃	
5413	高杯	—	10.9	—	○内面シボリ。脚端部ヘラケズリ。	灰黄色	大砂粒含む	〃	
5414	椀	13.8	6.0	4.8	○外面ナデ。内面ヨコハケメ。	淡灰黄色	粗い		
5415	蓋	14.6	—	—		灰青色	粗砂を含む	やや良	○須恵器。
5416	杯	13.8	—	—		青灰色	微砂のみ	普通	〃

溝一87（第649図）

5417	杯蓋	11.8	—	4.4	○天井部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	暗青灰色	精選土	堅緻	○ロクロ回転右。
5418	〃	11.8	—	4.6	〃	暗灰色	白色砂含む	〃	○ロクロ回転左。
5419	〃	11.9	—	4.8	〃	青灰色	細砂	良好	〃
5420	〃	11.7	—	—	〃	暗青灰色	大砂粒含む	〃	○ロクロ回転右。
5421	〃	13.7	—	—	〃	灰青色	細砂	〃	〃
5422	杯身	12.5	—	—	○底部ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰色	〃	〃	○ロクロ回転左。
5423	〃	14.9	10.6	4.0	〃	青灰色	細砂多い	堅緻	○ロクロ回転右。
5424	〃	14.7	10.4	3.7	〃	淡灰青色	白色細砂含	〃	〃
5425	〃	—	11.8	—	○底部ヘラケズリ。	淡灰色	〃	〃	〃
5426	〃	12.2	8.3	3.5	○底部ナデ。その他ヨコナデ。	灰色	細砂含む	不良	
5427	〃	12.0	8.7	3.2	○底部ヘラオコシ、ナデ。その他ヨコナデ。	灰青色	大砂粒含む		○ロクロ回転左。
5428	横瓶	11.4	—	—	○口頸部ヨコナデ。胴部タタキ。	淡灰白色	細砂	堅緻	
5429	〃	9.5	—	—	○口頸部ヨコナデ。胴部外面カキメ。	灰青色	大砂粒含む	〃	
5430	甕	22.6	—	—	○口頸部ヨコナデ。外面カキメ。	暗青灰色	〃		
5431	〃	23.0	—	—	○全面ヨコナデ。	緑灰色	〃	堅緻	
5432	〃	22.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗青灰色	細砂	〃	
5433	杯	12.8	—	—	○底部外面一部に砂の移動痕。他はヨコナデ	淡灰色	大砂粒含む		○丹塗り。
5434	〃	11.9	8.2	3.1	○底部外面ナデ。他はヨコナデ。	灰褐色	〃		〃
5435	〃	15.0	10.6	3.5	○底部外面粗いナデ。他はヨコナデ。	灰白色	細砂含む		〃
5436	皿	17.8	15.8	1.9	○底部外面ナデ。他はヨコナデ。	淡灰色	〃		〃
5437	〃	15.8	14.0	1.4	〃	〃	〃		〃
5438	〃	14.9	8.0	2.0	○底部外面ヘラケズリ後ナデ。他はヨコナデ	灰褐色	大砂粒含む		〃
5439	変形土器	24.3	—	—	○口縁部内外面ハケメ。内面平滑。	淡灰色	〃		
5440	〃	17.4	—	—	○口縁部内面調整不明。外面ハケメ。	灰褐色	細砂含む		
5441	〃	17.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ハケメ。	淡灰白色	〃		

包含層（第650・651図）

5442	杯蓋	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰色	白色砂含む	良好	○E－19堆積砂。
5443	〃	17.8	—	—	〃	灰白色	細砂	堅緻	〃
5444	〃	20.2	—	—					
5445	杯身	17.3	11.6	6.4	○底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	青灰色	細砂	良好	○E－19堆積砂。
5446	〃	—	11.4	—	〃	灰色	〃	〃	〃
5447		—	—	—	○口縁部ヨコナデ。緑釉。	〃	〃	堅緻	〃
5448		—		—	○内外面ヨコナデ。	青灰色	〃	〃	〃
5449	杯	12.2	8.4	3.6	○底部ナデ。他はヨコナデ。	灰白色	〃	良好	
5450	〃	12.0	8.5	3.9	○底部ヘラオコシ。他はヨコナデ。	灰色	精良	〃	
5451	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰白色	細砂	不良	
5452	〃	12.0	8.2	3.5	○底部外面一部を除いて、他はヨコナデ。	〃	〃	良好	○内外面丹塗り。
5453	甕	17.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗灰青色	〃	〃	
5454	台付長頸壺	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	灰色	〃	〃	
5455	〃	—	—	—	○内面同心円文残る。	〃	〃	〃	
5456	〃	—	14.4	—	○底部内外面ナデ。体部外面ヘラケズリ。	灰白色	細砂	堅緻	
5457	平瓦	—	—	—		黒灰色	〃	不良	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5458	丸瓦	—	—	—		黒灰色	砂含む	不良	
5459	平瓦	—	—	—		〃	〃	〃	

建物—17（第654図）

5460	甕	—	31.0	—	○内面ナデ。外面底部よりナデアゲ。	灰褐色	山土を含む	良好	○備前焼。

井戸—30（第657図）

5461	碗	13.7	—	—	○いわゆる雷文帯青磁碗である。口縁部は丸味をもっておさまり，緩やかに底部に至る体部が観察される。釉調は明るい淡灰緑色を呈し鈍い光沢を放つ。素地胎土は白色である。	淡灰緑色	精良	堅緻	○復元実測。青磁
5462	鍋	—	—	—	○土師質土器で外面はやや斜行するタテハケ調整。内面には細かいヨコハケ調整が認められる。	淡橙褐色	砂粒多含	良好	○外面煤付着。
5463	皿	—	—	—	○備前焼と推定される皿で，内外面共にヨコナデ調整を施す。口縁部は丸くおさまり，急激に底部へ移行する。器高は推定約4cm。	淡赤色	砂粒含む	〃	○内外面共に煤が付着し，黒色を呈する。灯明皿か。
5464	擂鉢	—	—	—	○やや下方に拡張する口縁部をもつ。カキメは1条6本以上。	暗赤灰色—赤褐色	〃	堅緻	○備前焼。
5465	大甕	—	—	—	○口縁部は玉縁をなす。	灰赤褐色	山土を含む	良好	〃
5466	擂鉢	—	14.8	—	○内面には6本1条とするカキメを放射状にめぐらす。体部外面は指頭によるヨコナデ調整をめぐらす。	灰赤褐色	石英・長石などの砂粒多含	〃	○内面は使用によって滑らかになっている。備前焼。

土壙墓（第658図）

5467	小皿	7.5	5.8	1.3	○底部外面ヘラオコシ。他はヨコナデ。	淡灰白色	精選土		
5468	〃	6.9	5.1	1.2	〃	灰白色	細砂含む		
5469		7.4	6.2	1.5	〃	灰褐色	精選土		

溝—89（第660図）

5470	高杯	—	7.8	—	○内外面ヨコナデ。	暗灰色	細砂含む		
5471	杯蓋	13.0	—	—	〃	灰白色	〃	良好	○ロクロ回転右。
5472		12.9	—	—	〃	淡灰青色	〃	〃	
5473		11.3	—	—	〃	〃	〃	〃	
5474	杯身	—	11.1	—	〃	青灰色	〃	〃	
5475	椀	16.2	9.7	5.2	○内面ヘラミガキ。外面体部押圧。	灰黄褐色	精良	〃	○内面黒色。
5476	〃	14.8	—	—	○内面平滑。外面ヨコナデ。体部外面押圧。	灰黄色	細砂		
5477	〃	—	6.6	—	○高台部ヨコナデ。内面平滑。	灰白色	〃		
5478	〃	11.8	4.9	4.0	○内面平滑。体部外面押圧。高台部ヨコナデ	淡灰白色	大砂粒含む		
5479	〃	12.0	4.9	4.0	〃	〃	〃		
5480	〃	11.6	—	—	○内面平滑。体部外面押圧。	淡黄灰色	〃		
5481	〃	11.8	—	—	〃	黄灰色	細砂		
5482	〃	11.8	4.7	3.1	〃	淡灰黄色	〃		
5483	〃	11.8	—	—	〃	黄灰色	〃		
5484	〃	11.8	—	—	〃	淡灰白色	〃		
5485	〃	—	5.0	3.4	〃	淡黄色	大砂粒含む		
5486	〃	—	6.3	—	○内外面ヨコナデ。	灰褐色	微砂		
5487	〃	—	5.6	—	○高台部ヨコナデ。	灰白色	大砂粒含む		
5488	〃	—	5.4	—	〃	〃	〃		
5489	〃	—			〃	黄灰色	〃		
5490	小皿	7.7	4.7	1.5	○底部ヘラキリ。他はヨコナデ。	〃	精選土		
5491	〃	7.8	5.8	1.2	○底部イタメ圧痕。他はヨコナデ。	〃	〃		
5492	〃	7.0	5.0	1.2	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃		
5493	〃	7.8	6.2	1.2	〃	淡灰色	〃		
5494	〃	7.0	4.7	1.2	〃	黄灰色	〃		

溝—90（第661図）

5495	小皿	11.4	5.7	2.8	○見込に「玉取獅子」外面「牡丹唐草」文。	淡青白色	精良	堅緻	
5496	擂鉢	—	—	—	○内面ヨコナデ。条線8本。	暗灰褐色	山土含む	〃	
5497	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5498	内耳鍋	27.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はハケメ。	鈍い黄橙色	細砂	良好	○外面煤。

包含層（第662図）

5499	碗	—	—	—	○口縁部折り曲げ。見込みに沈線めぐる。	淡灰白色	精良	堅緻	○旧河道。
5500	椀	10.9	3.7	3.7	○内面平滑。口縁外面ヨコナデ。下半押圧。	〃	大砂粒含む		〃
5501	〃	10.6	5.5	3.1	〃	〃	〃		〃
5502	〃	10.7	4.2	(3.2)	〃	〃	〃		○遺構検出面。
5503	小皿	8.6	5.6	1.3	○底部外面イタメ。他はヨコナデ。	灰黄色	精選土		○淡灰褐色砂層。
5504	〃	6.2	4.0	1.0	○口縁部ヨコナデ。	灰褐色	〃		○柱穴。
5505	〃	6.0	—	1.2	○底部外面ナデ。他はヨコナデ。	〃	〃		〃
5506	〃	6.3	—	1.2	〃	〃	〃		〃
5507	壺	19.4	—	—	○口縁端部折り曲げ。後ヨコナデ。	紫灰褐色	山土多く含	堅緻	○近世溝。備前焼。
5508	〃	14.0	—	—	〃	暗赤褐色	〃	〃	○表採。備前焼。
5509	擂鉢	—	—	—	○内外面ヨコナデ。内面やや粗めの条線。	〃	〃	〃	○遺構検出面。備前焼。
5510	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	灰褐色	〃	〃	〃
5511	〃	—	—	—	〃	暗灰紫色	〃	〃	〃
5512	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。内面やや粗めの条線。	灰褐色	〃	〃	○柱穴。備前焼。
5513	〃	28.5	—	—	○内外面ヨコナデ。	紫灰褐色	〃	〃	○遺構検出面。備前焼。
5514	〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	〃	〃
5515	〃	—	—	—	〃	灰褐色	〃	〃	○備前焼。
5516	〃	—	—	—	〃	淡灰紫色	〃	〃	〃
5517	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。太めの粗い条線。	紫灰褐色	田土。精良	〃	○遺構検出面。備前焼。
5518	こね鉢	28.5	—	—	○内外面ヨコナデ。	灰色	細砂多い		○重ね焼き痕。
5519	鍋	22.7	—	—	○口縁部ヨコナデ。他はハケメ。	〃	〃		○灰褐色砂層。
5520	鉢	—	—	—	○内面ヨコハケメ。	灰色	〃		○柱穴検出面。
5521	擂鉢	—	—	—	○内面ヨコハケメ。外面太めのタテハケメ。	灰白色	精良		○柱穴検出層。
5522	鍋	—	—	—	○内外面ハケメ。	淡灰褐色	〃		〃

溝一91，92（第665図）

5523	擂鉢	—	—	—		淡赤褐色	白色小砂粒	良好	○備前焼。
5524	鉢	(19.2)	—	—	○垂れ気味の口縁。	淡青白色	緻密	〃	○伊万里。
5525	皿	16.2	6.8	5.0		濃青色	〃	〃	
5526	鉢	13.3	—	—		橙色	〃	〃	○酒津焼か？
5527	猪口	7.4	3.3	3.0		白色	〃	〃	○磁器。
5528	—	(6.8)	5.3	(2.4)	○体部面取り，11面。外面釉薬。	青緑色	〃	〃	○再利用。青磁。
5529	湯呑	5.6	3.4	6.5	○内面に呉須による線取り文様あり。	濃青色	〃	〃	

溝一93（第666図）

5530	擂鉢	(26.8)	—	—	○内面カキメ8本。	灰褐色	緻密	良好	○備前焼。
5531	〃	—	—	—		褐色	白色小砂粒	〃	〃
5532	茶碗	11.2	6.3	6.5	○外面桧付はボカシ呉須，見込みにもあり。	灰白色	緻密	〃	
5533	〃	—	4.6	—	○呉須絵。	〃	〃	〃	○「大明年制」。
5534	〃	—	3.6	—	〃	〃	〃	〃	○見込み「寿」。
5535	小壺	—	—	—		褐色	白色小砂粒	〃	
5536	皿	—	4.4	—		灰緑色	〃	〃	○唐津焼。
5537	〃	—	4.3	—		〃	〃	〃	〃

包含層（第667図）

5538	鉢	(16.6)	—	—			白色小砂粒	良好	
5539	壺	(7.6)	—	—		青灰色	緻密	〃	○青磁。
5540	鉢	—	6.4	—		明灰色	〃	〃	○酒津焼か？
5541	小皿	4.85	2.05	1.4		灰白色	〃	〃	○白磁。
5542	皿	(12.0)	—	—		〃	〃	〃	
5543	壺	(8.6)	—	—		黄橙色	白色小砂粒	〃	
5544	茶碗	(9.2)	—	—		灰白色	緻密	〃	
5545	鉢	—	—	—		茶灰色	微砂	〃	○雷文。
5546	擂鉢	—	—	—		茶褐色	白色小砂粒	〃	○備前焼。
5547	碗	—	7.2	—	○内面貫入。	灰白色	緻密	〃	○白磁。

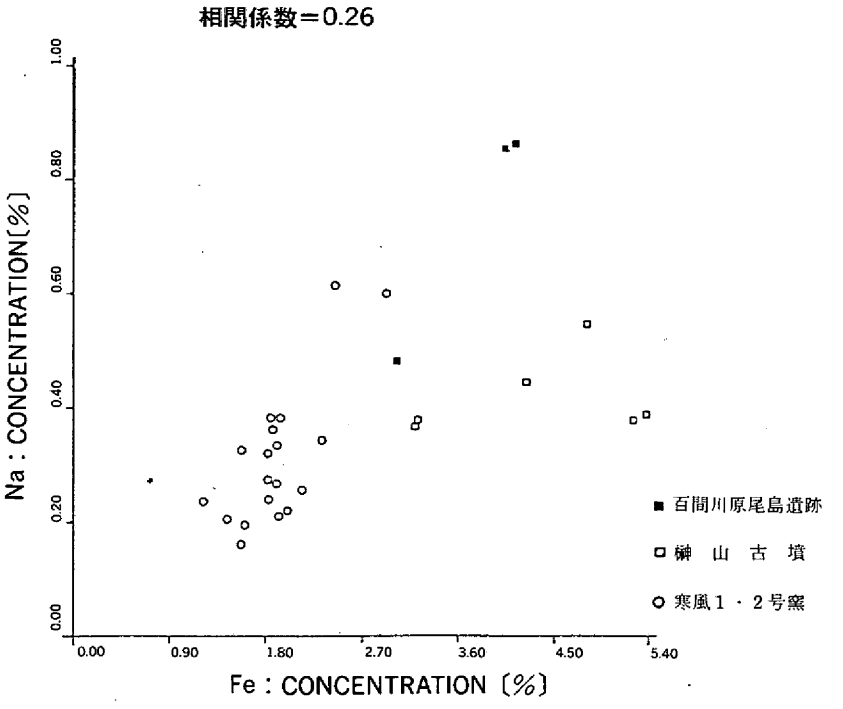
表—35　丸田調査区出土土器胎土分析値(1)

Sample		Na %	K %	Rb ppm	Cs ppm	Mg %	Ba ppm	Al %	Sc ppm	La ppm	Ce ppm	Nd ppm	Sm ppm	Eu ppm	Tb ppm	Yb ppm
BE VI−1−1		0.864	1.44	113	9.38	2.03	348	6.81	13.2	30.6	63.4	36.1	6.99	1.11	1.02	2.77
百間川	2	0.487	2.05	119	11.4	2.59	352	10.7	14.7	47.4	93.4	60.1	9.82	1.35	1.14	3.62
原尾島遺跡	3	0.857	1.72	110	9.82	1.89	279	6.04	13.2	30.6	61.6	57.1	6.94	1.09	0.78	2.66
	4	0.382	1.70	111	8.98	1.86	480	8.95	15.1	44.9	99.0	77.3	9.01	1.47	0.98	3.01
	5	0.371	1.47	106	7.57	1.89	480	8.89	14.2	44.1	89.8	59.8	8.98	1.37	1.07	2.95
榊山古墳	6	0.373	1.81	148	11.1	1.82	349	9.90	11.1	23.7	45.7	−	4.44	0.61	0.53	2.08
	7	0.362	2.17	144	11.2	1.85	467	10.4	11.0	23.3	45.2	−	4.30	0.62	−	2.18
	8	0.438	1.35	96.0	6.94	1.94	412	9.27	12.8	39.4	80.5	81.7	7.79	1.15	0.67	2.47
	9	0.538	2.33	104	8.79	2.16	387	8.65	14.7	45.9	94.2	82.0	9.60	1.68	1.17	3.61
AE VI−1−1		0.376	1.76	142	10.8	1.73	456	9.18	13.2	45.7	104	65.2	8.92	1.18	0.90	4.19
	2	0.376	1.39	111	9.56	1.75	375	9.46	11.9	39.1	84.9	76.4	7.91	1.00	1.16	3.44
	3	0.595	1.73	129	11.1	2.25	466	11.1	15.7	61.1	143	69.6	11.9	1.58	1.43	4.98
	4	0.313	1.56	119	10.6	1.71	355	9.35	12.4	36.6	77.4	110	7.54	0.97	1.15	3.50
寒風1号窯	5	0.608	1.55	126	9.31	2.02	375	10.3	13.3	48.9	100	97.8	9.59	1.30	1.35	4.11
	6	0.159	1.44	117	9.11	1.58	333	8.90	9.93	29.7	63.8	−	5.90	0.72	0.84	3.06
	8	0.191	1.98	135	10.3	1.56	463	8.77	10.5	37.8	82.4	50.8	8.16	1.01	1.06	3.54
	9	0.201	2.00	139	10.4	1.60	360	9.27	10.3	40.9	83.8	53.9	8.97	1.02	0.99	3.59
	11	0.206	1.66	108	7.78	1.76	298	9.99	8.74	23.5	52.3	−	4.76	0.61	0.65	2.61
	12	0.215	1.21	117	7.23	1.39	328	7.80	9.05	27.0	59.2	−	5.37	0.65	0.89	2.61
	13	0.327	1.92	160	14.1	2.17	490	11.9	15.2	63.7	154	77.0	13.2	1.98	1.72	4.78
	14	0.268	1.78	127	9.49	1.62	397	8.43	10.1	29.4	66.2	27.9	5.95	0.79	0.74	3.09
	15	0.356	1.82	125	9.96	1.73	419	8.48	12.3	49.3	108	91.4	11.1	1.61	1.37	4.40
	16	0.250	1.49	117	9.30	1.95	365	11.2	12.3	39.2	92.6	68.1	8.62	1.14	1.11	3.72
寒風2号窯	17	0.337	1.72	135	11.2	1.78	391	10.6	12.8	67.2	142	87.1	14.2	2.15	1.51	5.03
	18	0.261	1.27	139	9.81	1.65	377	9.62	11.5	36.3	80.9	44.7	7.73	0.93	0.85	3.42
	19	0.233	1.45	126	8.62	1.28	403	7.67	8.80	32.5	68.9	30.5	6.67	0.85	0.94	2.99
	20	0.319	1.38	183	10.9	1.92	497	11.3	11.6	47.0	108	67.4	10.9	1.13	1.49	4.79
	21	0.233	1.41	124	9.02	1.44	391	8.57	10.3	32.0	67.8	39.2	6.71	0.76	0.95	3.06

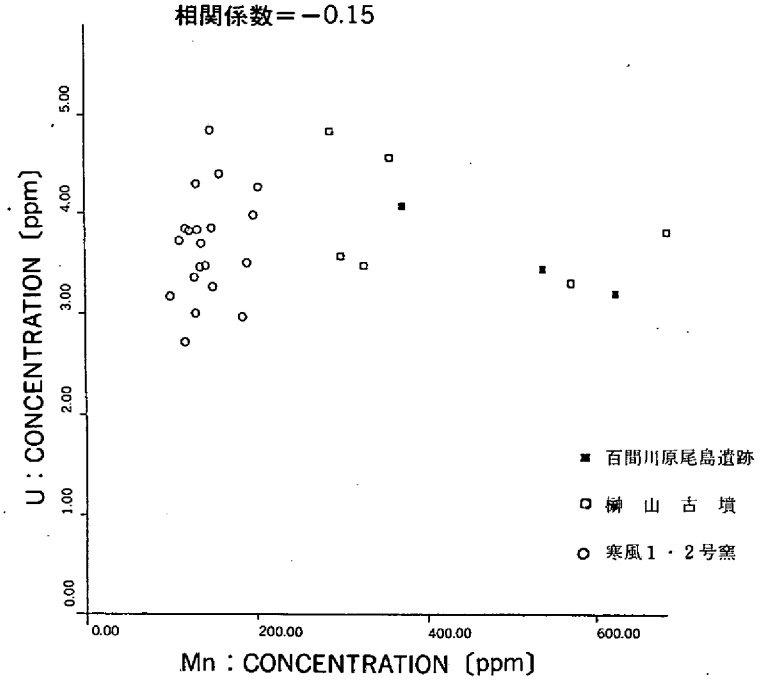
表—36　丸田調査区出土土器胎土分析値(2)

Sample	Lu ppm	Hf ppm	Th ppm	U ppm	Ti %	V ppm	Cr ppm	Mn ppm	Fe %	Co ppm	Ta ppm	Mo ppm	Se ppm	Sb ppm	As ppm
BE VI−1−1	0.51	7.13	11.9	3.44	0.45	103	66.1	535	4.12	12.8	1.39	5.73	−	1.09	7.47
百間川 2	0.72	6.81	15.1	4.06	0.43	136	62.2	366	3.08	8.43	1.63	9.13	3.23	1.53	17.1
原尾島遺跡 3	0.50	6.68	12.1	3.21	0.45	123	64.6	621	4.04	11.9	1.06	10.4	−	1.23	7.48
4	0.57	7.86	16.6	4.57	0.56	118	69.4	354	5.36	19.4	1.60	13.7	2.82	1.48	12.1
5	0.54	7.20	16.4	4.83	0.63	141	65.5	284	5.24	15.4	1.32	13.4	3.96	1.55	12.4
6	0.43	6.40	14.9	3.57	0.36	101	47.9	298	3.20	6.15	1.28	8.09	−	1.54	8.27
榊山古墳 7	0.42	6.26	13.8	3.48	0.45	108	48.5	325	3.19	5.89	1.55	8.94	−	1.35	7.80
8	0.48	6.95	14.3	3.31	0.56	129	60.0	568	4.18	17.3	1.50	11.2	−	1.43	7.56
9	0.55	6.70	14.2	3.81	0.41	113	62.2	692	4.72	16.5	1.53	6.83	−	1.41	10.1
AE VI−1−1	0.71	8.48	18.5	4.29	0.39	73.2	41.5	130	1.82	4.30	1.67	5.87	−	1.80	5.37
2	0.64	8.90	16.9	4.39	0.41	77.1	34.7	156	1.90	4.53	1.58	4.79	−	1.54	4.60
3	0.83	7.91	21.6	4.26	0.37	87.3	45.0	202	2.84	6.88	1.17	6.98	−	1.73	10.2
4	0.64	9.81	16.8	3.85	0.37	67.9	35.5	147	1.79	3.87	1.43	4.62	2.92	1.47	6.31
寒風1号窯 5	0.66	6.88	17.9	3.50	0.35	77.2	38.0	189	2.38	5.51	1.31	7.13	1.92	1.76	6.47
6	0.47	6.71	12.5	2.72	0.36	59.7	31.8	117	1.56	2.52	1.06	2.60	−	1.43	3.03
8	0.65	6.83	16.5	3.97	0.34	57.1	30.7	196	1.59	3.47	1.07	2.90	2.77	1.49	1.74
9	0.68	6.43	17.5	3.85	0.36	58.8	31.3	117	1.43	2.85	1.02	3.50	−	1.81	10.0
11	0.43	6.72	12.8	3.00	0.42	75.9	27.9	129	1.90	3.61	0.95	2.34	1.64	1.18	1.57
12	0.50	7.43	14.1	3.36	0.32	61.4	31.3	128	1.98	3.64	1.25	5.28	−	1.35	2.31
13	0.68	4.62	17.9	3.17	0.26	64.1	29.2	99.2	1.87	4.47	1.00	2.27	−	1.06	7.81
14	0.52	7.55	14.8	3.46	0.45	72.0	34.3	134	1.80	3.72	1.54	3.20	−	1.56	6.91
15	0.68	7.52	15.1	3.82	0.31	60.3	38.8	120	1.84	5.21	0.75	−	−	0.94	4.87
16	0.59	6.83	18.3	3.26	0.35	69.4	37.0	149	2.11	4.48	0.92	2.90	−	1.14	3.79
寒風2号窯 17	0.67	6.50	21.4	3.83	0.29	69.1	30.7	131	2.27	5.37	1.00	2.99	−	1.66	9.40
18	0.60	6.77	16.5	3.69	0.38	72.0	39.8	136	1.88	4.04	1.08	6.01	−	1.42	4.56
19	0.49	7.10	14.1	2.97	0.34	60.0	32.7	183	1.22	2.53	0.94	3.58	2.54	1.32	2.12
20	0.72	6.40	20.3	4.83	0.33	67.3	34.8	147	1.56	3.68	1.20	4.32	4.64	1.86	11.3
21	0.55	6.93	14.2	3.48	0.37	68.9	37.7	140	1.81	4.27	1.27	5.84	−	1.47	6.55

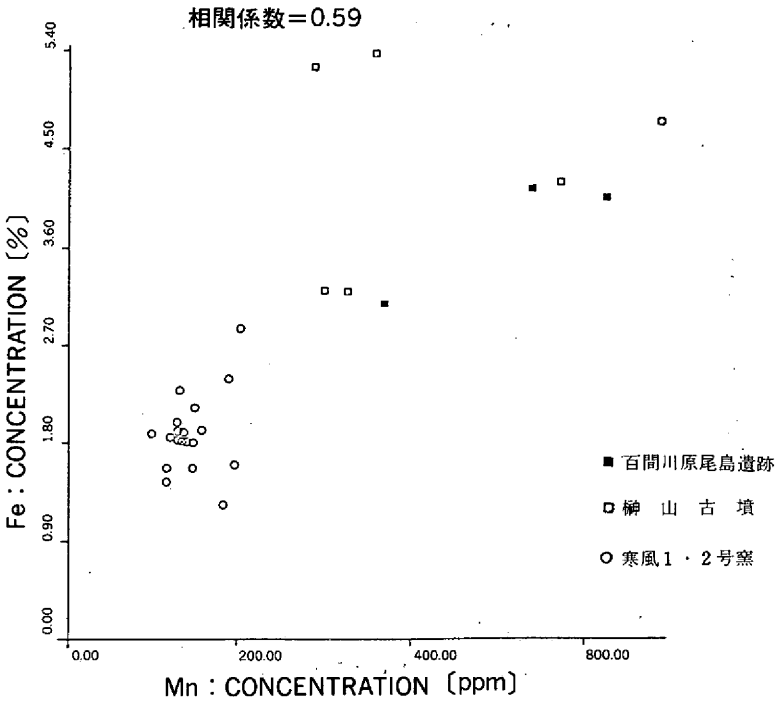
（小山睦夫「放射化分析による陶磁器の胎土の成分と産地分析」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』昭和58年3月による。一部改変。）



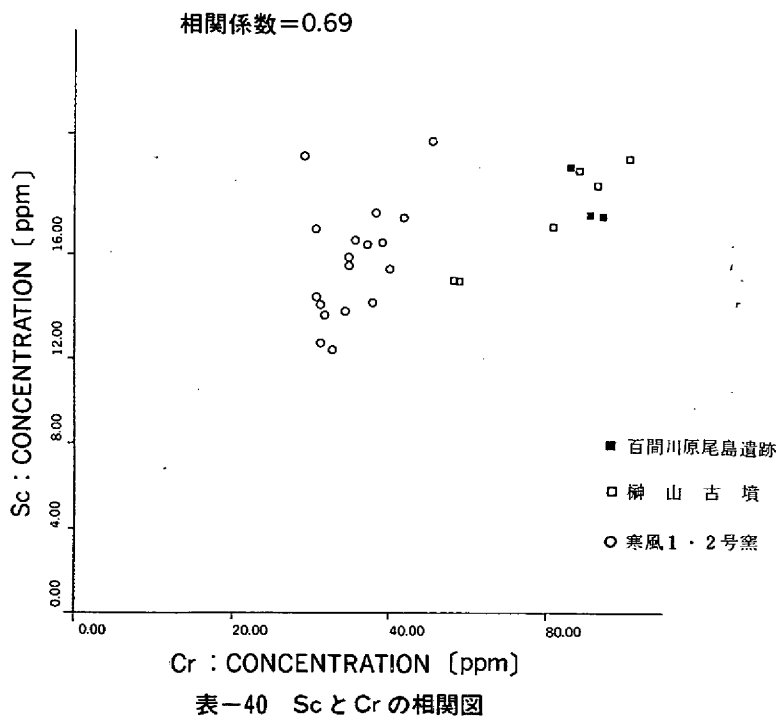
表－37　NaとFeの相関図



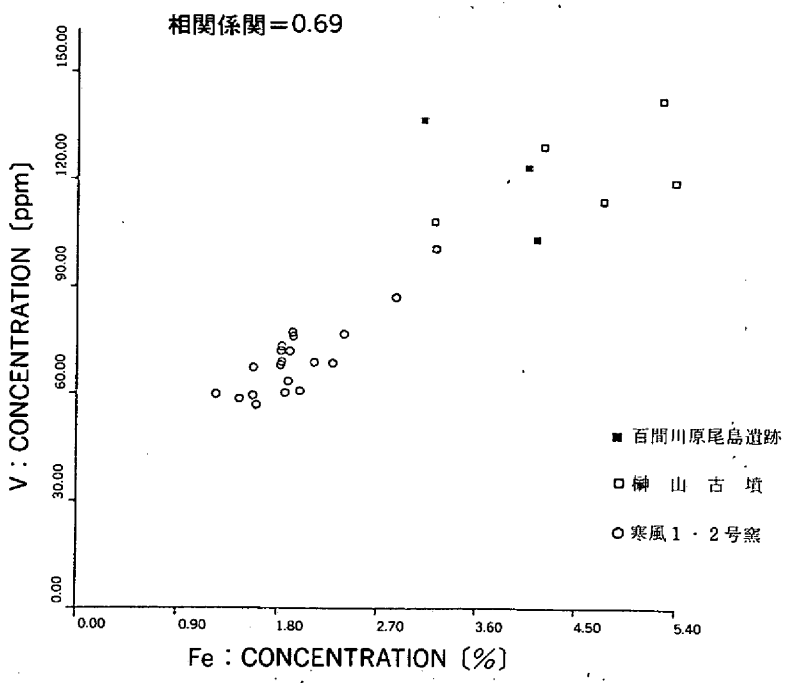
表－38　UとMnの相関図



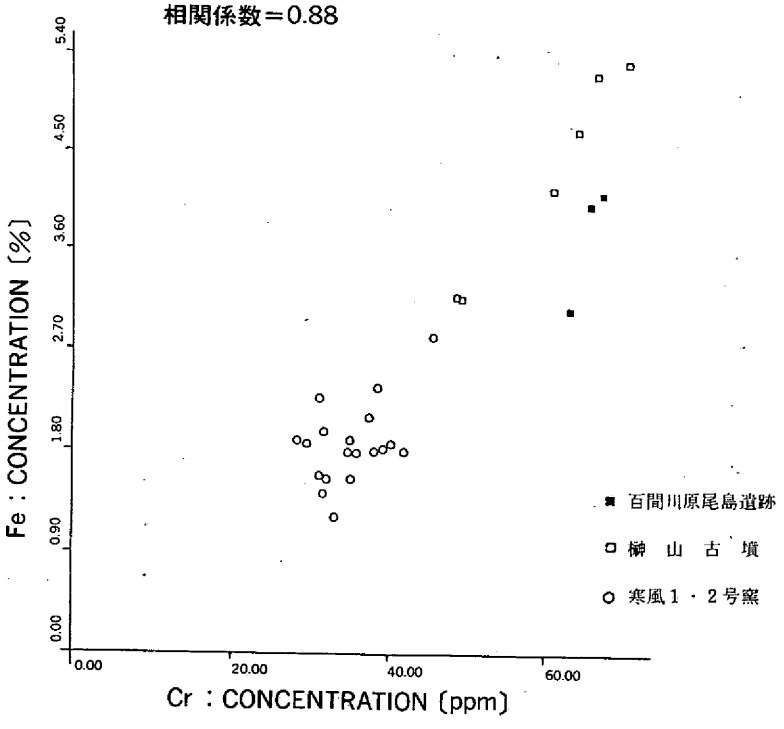
表－39　FeとMnの相関図



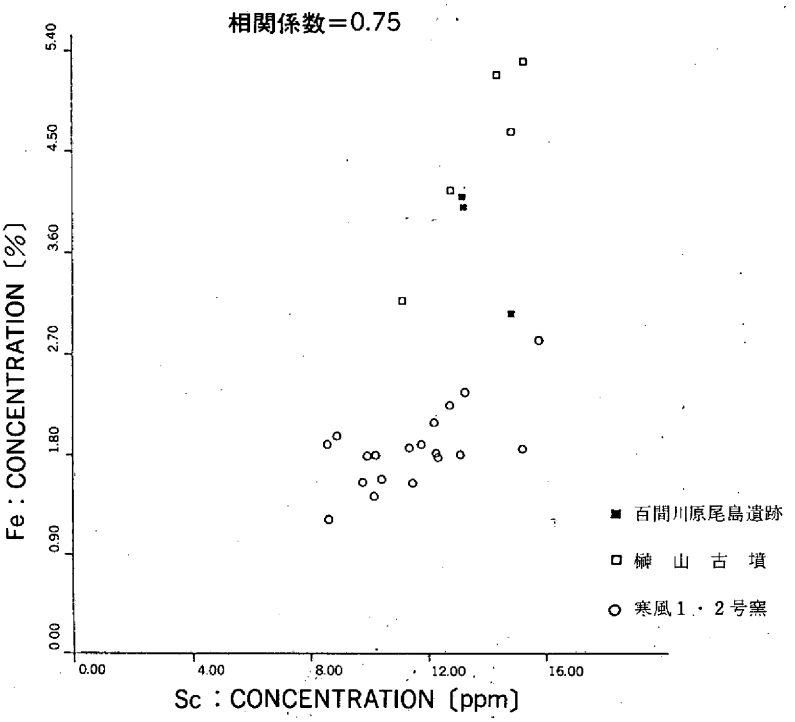
表－40　ScとCrの相関図



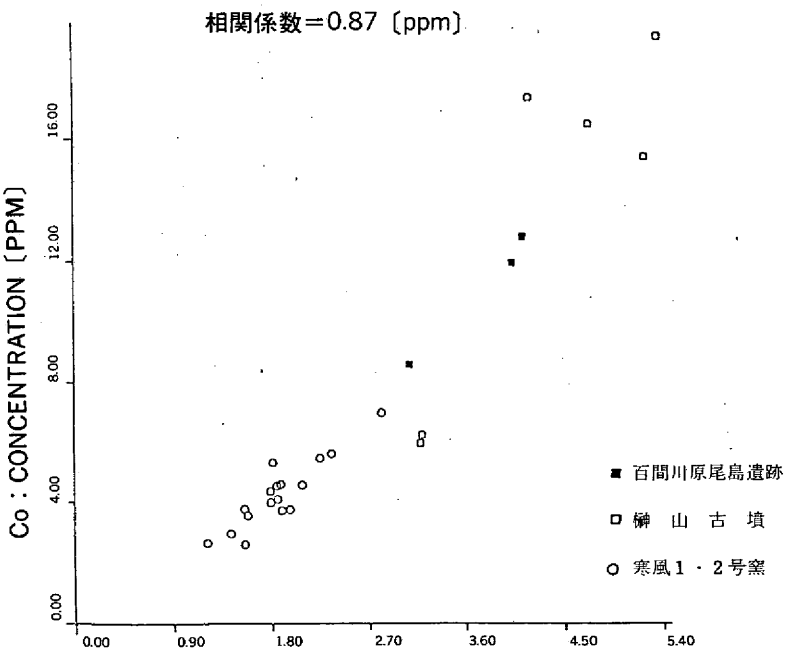
表－41　VとFeの相関図



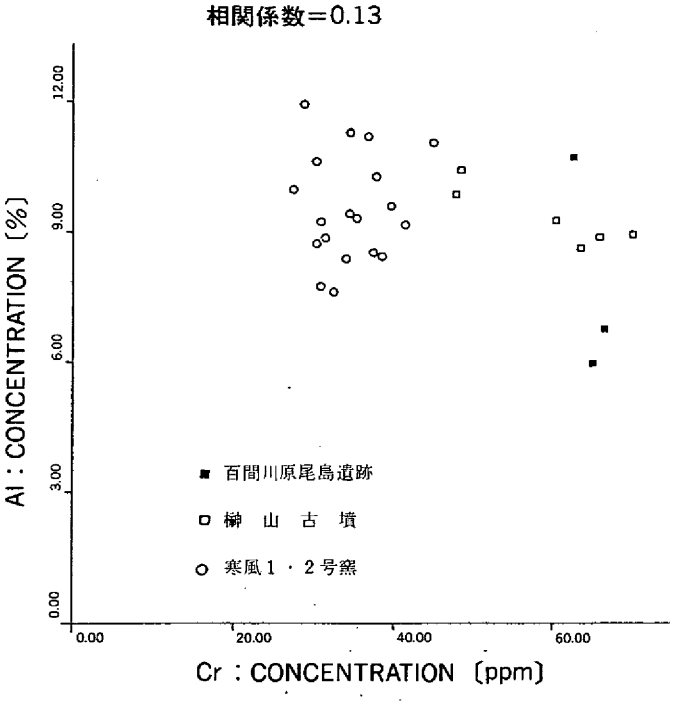
表－42　FeとCrの相関図



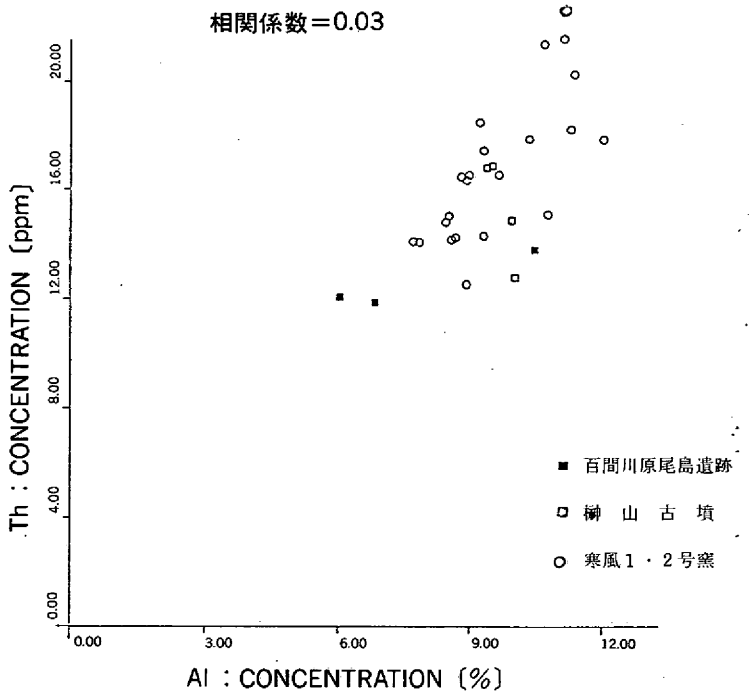
表－43　FeとScの相関図



表－44　CoとFeの相関図



表－45　Al と Cr の相関図



表－46　Th と Al の相関図

表—47　丸田調査区木器観察表

遺物番号	掲載図	名称・用途	法量(cm)	特徴	樹種	木取法	手法・備考
1	第291図	鍬？	残存長29.7 最大幅12.9 厚0.5～1.5	○板材を刃先の扁平な手斧状の石器を用いて削平し，柄との装着部は厚く削り残している。側縁から先端にかけては使用によるとみられる，丸味をもつ。裏面の周縁部には弱い鎬様の稜線が左右対称にめぐる。	カシ	板目材	○上端は出土時における欠損。木表の残存は良好。板物。
2	第292図	かけや	残存長54.9 幅10.9～11.5 柄径3.4	○丸木を用い，中ほどで柄部分を細く削りだしている。杭などの打ちこみに使用されたとみられ，上半部は表裏ともに打痕が認められ，くぼんでいる。	〃	心持材	○下端部は欠損，出土時全長60cm。丸物。
3	第376図	建築材	全長42.5 幅10.9 厚2.3	○上面はやや凸面をなす。側縁に2.3×3.8cmの不整な貫通する柄穴を穿つ。	モミ	板目材	○面取り材。木表はやや遺存が悪い。
4	第402図	丹塗装飾板	全長20.1 最大幅3.4 厚0.7	○木表面に丹塗りが施されるが，やや剝落が目立つ。穿孔は貫通しており，楕円形を呈する。細い鋭利な刺突具を使用して穿孔されたとみられる。孔は縦方向約2cm，横方向1.5～2cm間隔で穿たれる。	〃	〃	○板物。
5	第625図	竪櫛	残存長1.7 最大幅2.2 厚0.1～0.15	○細い竹ヒゴを束ねて折り曲げ，頂部縦横に細い糸で緊縛し，その後，黒漆を塗布したものである。	タケ	——	○比較的小型品。歯数は20本。
6	〃	把手	残存長5.5 径0.9	○樹皮が取り除かれた棒状材を弧状に折り曲げ，幅約1cmの樹皮を巻きつける。	テイカカズラ	心持材	○籠など容器の把手か？編み物。
7	〃	籠	底辺1辺約7.0	○経4㎜，緯1.5㎜の表皮を取り去った竹条を通常のザル目編みとしたもので，下位は2本越え，2本潜りで編みあげる。底面は丸味をもった方形を呈し，上端部はほとんど口縁部に近い。	タケ	——	○編み物。
8	第626図	槌の子（紡織具）	全長11.7 径4.8	○棒状材の樹皮を取り除き，中央部に切りこみをいれて紐などと結びつける錘となる。木質はやややせている。	ヤブツバキ？	心持材	○丸物。樹種は10と同様。完存。
9	〃	〃	全長13.3 径5.4～5.6	○8と同様である。木口は斧状の鋭利器で叩き切る。くびれ部はやや細い。	？	〃	○丸物。
10	〃	〃	全長13.2 径6.2	○8と同様。木表はややせている。	ヤブツバキ	〃	○丸物。完存。
11	〃	〃	全長13.9 径6.8～7.5	○竪杵状をなし，やや大型である。切削痕は明瞭に残る。	？	〃	○丸物。中央部で折損。
12	〃	〃	全長12.3 径7.2～8.3	○11と同様であるが，ややすづまりの形態を示す。中央切り込みは丁寧。	カシ？	〃	〃
13	〃	〃	全長15.3 径4.6～4.9	○やや細長い竪杵状を呈し，両端は切断後，面取りを行う。	カシ	〃	○丸物。完存。
14	第627図	刀形	残存長33.0 刃幅1.9 刃厚0.4	○把頭の形態から頭椎大刀を模したことが推定される。刀背・刃方のいずれも直線をなすが切先方は欠失する。残存部は小刀様の鋭利な工具で丁寧な削平を行う。刃関は明瞭に削りだされる。	ヒノキ	柾目材？	○切先部分は出土時生じたもの。板物。
15	〃	刀形？	長6.7，刃幅1.8 刃厚0.2	○切先は丸味をもつ。刃方は鋭く削られず，全体に薄板状をなす。	〃	柾目材	○刀形と断定できない。板物。
16	〃	刀形	残存長23.3 刃幅1.6 刃厚0.3	○刀背は直線をなし，刃方は切先に向けて緩やかな弧を描く。刃関は明瞭ではないが背関にあたる部分に切り込みをいれる。全体に小刀による丁寧な削平を行う。通常の直刀と推定される。	〃	〃	○茎部（把）部分は切損。板物。
17	〃	舟形	全長15.0 最大幅3.0 高1.1	○船首は舟べりから中央より緩やかに狭まる，図の右方と考えられる。舳先はやや鋭く上向くとみられ，艫はそれより低い。舟底は平坦である。	〃	〃	○舳先の先端を欠失。川舟か。刳り物。内面は断面三角形を呈する。
18	〃	火鑽臼	全長11.4 幅2.0 厚1.5	○框状の角棒を板状に加工する。両端は丸味をもって整形される。臼孔は上面から穿たれて，円筒状をなす。杵の回転孔は径8㎜で底の外縁がやや深くくぼんでおり，ウツノキ（空の木）が用いられた可能性が強い。残存する臼孔は5個で部分的に焼け焦げている。	スギ	板目材	○比較的小型の火鑽臼でほぼ中央で折損し，上半部も割れて欠失する。面取り材。
19	〃	糸巻	全長27.7 最大幅2.9 厚0.6～0.9	○糸巻枠材で，横木と軸木を組み合される。上・下端はやや斜めに切断される。中央部には2つの枘穴が鳳刃錐様工具による穿孔が施され，心々長7.7cm，孔径3㎜，深さ1.8cmを測る。この2孔間の上位には幅2.3cmのV字形の切り込みがある。	ヒノキ	〃	○板物。
20	〃	把手？	残存長5.0 頂部幅3.5～3.7	○木表は丁寧に面取りされ，方形の枘穴があけられる。頂部は丸味をもってほぼ正方形を呈する。	ニレ	柾目材	○面取り材。

遺物番号	掲載図	名称・用途	法量(cm)	特徴	樹種	木取法	手法・備考
21	第627図	不明	高3.1 幅2.8 厚1.6	○上端は欠損するが木表には丁寧な面取りが施され，直方体をなす。	カヤ	板目材	○面取り材。
22	〃	把手？(鋤)	残存長9.7 最大幅8.7 最大厚3.0	○鋤の把手となる可能性が強い。鋭利な刃物によって丁寧な面取りを行い，背面は平滑である。	カシ	柾目材	〃
23	〃	棒状材	長14.3 幅(径)1.8 厚1.1	○尖頭棒あるいは棒状木製品とも呼称される。上端が切断された棒状加工材である。	ヒノキ？	板目材	〃
24	〃	〃	長19.8 幅(径)2.1 厚1.5	○21と同様であるが，上端部は丸味をもち，現状で使用された可能性が強い。先端は欠失。	モミ	〃	〃
25	第628図	盤状木製品	全長33.7 幅9.8 厚0.7（平均） 深0.5	○案の一種の可能性もある。外底面の短側辺は斜めに削りとって舟底状をなす。内面の短側辺内側には，外縁下端から約1cm内側に鋭利な刃物による切り込み線をいれる。また短側辺の内側底面には径0.3cmの2孔一組の貫通孔が穿たれ，底面中央よりやや左に偏した位置には心々長で6.5cm離れて同様の穿孔がある。	ヒノキ	〃	○木理に沿って2つに割れる。穿孔は紐などをとおして，吊るためか。刳物。
26	〃	板材	残存長10.3 幅1.3 厚2.0	○薄板の残片で，幅がほぼ同じである。曲物の側板部材となる可能性が強い。	〃	柾目材	○板物。
27	〃	〃	残存長14.5 幅1.45 厚0.2	○24と同様である。表裏ともに丁寧に削平する。	〃	〃	〃
28	〃	〃	残存長12 幅3.4 厚1.5	○木表の削平は完了していない。下端は切損。	スギ？	板目材	○面取り材。
29	〃	〃	残存長14.7 上端幅2.9 下端幅3.3 厚0.8	○木表の削平は丁寧に行われる。木口にも面取りされる。完存品。	ヒノキ？	柾目材	○板物。
30	〃	角材	残存長15.0 幅3.9 最大厚2.4	○下端は欠失。上端・側辺はやや粗い面取りを行う。表面は比較的丁寧な削平を行う。	カシ？	〃	○面取り材。
31	〃	〃	残存長13.8 幅3.0 厚1.9	○上・下端は切損。裏裏・側辺はやや粗い削平を行う。	？	〃	〃
32	〃	棒状材	残存長21.1 幅2.8 最大厚1.8	○上端は丸味をもつ。下端は欠失するが，表面は丁寧な面取りを行う。	？	〃	〃
33	第629図	有頭棒	残存長33.6 頂部幅3.0 厚(最大)2.5	○頂部は方形の平滑な加工が施され，下方は徐々に丸味をもち厚くなる。側面も丁寧な削平・面取りを行う。	クヌギ	〃	〃
34	〃	板材	残存長25.5 幅3.5 厚0.4	○木表はやや粗く面取りされる。薄い板で，曲物側板の可能性もある。上端に径2mmの貫通孔が認められるが，1個のみ残存する。	スギ	板目材	○板物。
35	〃	枘持材	残存長14.1 幅4.0 厚2.0	○上方に斜行する枘をつくる。下方は切損。上端は切断，面取りを行う。	シイノキ	〃	○面取り材。
36	〃	枘持材？	残存長12.2 幅7.3 厚1.0	○表・裏ともに比較的丁寧な削平を行う。下方に枘穴と推定される一部が残る。	モミ	柾目材？	○板物。
37	〃	横斧膝柄	装着部残存長49.0 全長51.5 柄径1.9	○鉄器を装着するとみられる台部の中央は長広く丸味をもって残し，柄の心の中心にあたる。この装着部は柄と丁字形をなさず，やや鈍角をなす。柄下位には長2.7cm程樹皮を残しているが作為的なものか。下端面は丸味をもつ。	クヌギ	心持材	○面取り材。約7か所で折損。
38	第630図	鋤	残存長19.9 最大幅6.5 厚1.5	○鉄製鋤先を装着するため，下半部には肩を削り出し下位を削って周縁を薄くしている。上方は焼け焦げて炭化している。木理に沿って半裁。	カジ	板目材	○板物。
39	〃	〃	残存長16.3 最大幅6.6 厚1.3	○38と同一個体の可能性が強い。	〃	〃	〃
40	〃	〃	残存長30.0 厚0.9～1.2	○柄と別々につくられ，上方穿孔部分でとめ，さらに重ねあわせた上端を緊縛して使用したと考えられる。枘穴は，1.3×1.8cmを測る。木表は比較的丁寧に削平される。	〃	〃	〃

遺物番号	掲載図	名称・用途	法量(cm)	特徴	樹種	木取法	手法・備考
41	第630図	鋤形木製品	残存長32.5 柄長16.0 柄厚2.0	○柄はそのままのびて棱として残る。スコップのような用途が考えられる。木表はやや荒れている。	カシ	板目材	○板物。先端は切損。
42	第631図	不明板材	残存長15.0 幅27.0 厚4.2	○下端部は両端から削りおとし，断面三角形を呈し稜をなす。上面は木理に直行して切断する。	サクラ	〃	○板物。理没前に乾燥して木理に沿ってひび割れが生じる。
43	〃	踏み鋤状木製品	全長78.0 柄長61.0 柄幅38.0 柄厚3.0	○上端は木理に対して斜めに切断，把手とする。柄部は断面形，楕円形を呈す。下端部は，丁寧に面取りされ端面はやや裾広がりとなる。踏み鋤状の形態を示すが，小型であり材質にも問題がある。下端部を最終的に切断すると考えて，大鎌の柄とする可能性もある。	シイノキ	〃	○面取り材。7片に折損。
44	〃	棒状木製品	全長48.4 幅1.6 厚0.8	○心持ち材を半截したもので心部が溝状をなす。下端は丸く整形される。木表は樹皮を取り除かれ丁寧な削痕を残す。上端は切損。	？	〃	○面取り材。
45	〃	〃	全長13.4 径8.5	○斧状の鋭利器で，心持材を10回前後切りこみ，切断したもの。やや大型の鵜の子か。	カシ？	心持材	○丸物。
46	第632図	〃	全長93.4 径3.1～3.3	○樹皮・枝を取り除いた白木の棒状材。枝の切断面は鋭利な金属利器によるものと推定される。上端面は，使用による丸味が生じ，下端（石突状）となる可能性もある。	カヤ	〃	○丸物。伏状木製品か。
47	〃	建築材（枘持材）	全長70.5 幅12.3 厚5.8～6.0	○上端に枘，それから木理に沿って幅2.0～2.3cm，深さ4.2cm，長さ15cmの切りこみがあり，近接して不整形な方形を呈する軸穴状の枘穴（深さ4cm，約3.5×4.8cm）が穿たれる。下方は，焼け焦げて炭化している。	モミ	板目材？	○面取り材。側面の一端は，木地をそのまま残す。
48	第633図	不明木製品（未製品）	全長53.0 頂部厚11.3 柄部下端径8.5	○上端は受部とし柄と組みあわせて工具（利器）を装着すると思われる。断面長方形を呈する突出物を削り残す。柄は，手斧状の鋭利な工具で，八角形の面取りを行う。下端は方錘形に突出させている。	カエデ	板目材	○面取り材。製品としてどういう用途があるのか不明であるが，耕具の可能性もある。
49	第634図	田舟	全長147.5 残存幅24.0 高8.0～10.0 把手幅5.0 把手厚3.5～4.0	○復元推定幅は約35cm。内面は大半が手斧状の工具によって削平されるが，部分的には，木地面をそのまま残している。外底面は，木地をよく残し，側面は粗い削平調整後，手斧状の工具で丁寧にはつる。底面，側面は1～3cmを測り，薄手につくられる。長軸の両端には棒状の把手（持ち運び用）が2個ずつ削りだされていると推定。	モミ	〃	○剝物。木理に沿って割れている。通常スギ材が多いとされている。
50	第656図	木簡	全長15.1 上端幅2.2 下端幅1.25 厚0.2～0.3	○薄板を短冊形に切り取り，表裏に墨書された呪符木簡である。木表・木口の仕上げは鋭利な小刀状工具により丁寧に行われる。	スギ	板目材？	○板物。現状は，黒変して墨書文字は肉眼では判読できない。
51	〃	漆塗椀	口径15.3 高8.9 高台径7.3	○丁寧に挽きだされた木地に黒漆を塗布し，外面には朱漆りにより鳥様の漆絵を描く。内面には朱漆を塗布する。高台は厚く，周縁は外方する。体部外面の漆の剝落は顕著である。	クリ	横木取り	○挽物。一部欠損するがほぼ完形品である。
52	〃	〃	口径13.5 残存高7.1	○48と同様の横挽ロクロによる成形を行う。体部外面の漆は大半が剝落している。底部に至るにつれ，器壁は薄くなり，口縁端部は薄く上方する。	クリ？	〃	○挽物。
53	第657図	足駄	全長22.7 台幅9.6 残存高2.8	○周縁は丸味をもって丁寧に面取りされ，表面・裏面ともに鋭利な工具による切削等を行う。差歯の取り付けは鋸で溝状切り込み部に枘穴とともに行う。鼻緒孔には，鼻緒に用いられた繊維が遺存している。	ホオノキ（前・後歯も）	板目材	○面取材り。木表の遺存は良好。
54	〃	下駄	全長19.9 台幅12.1 歯幅12.5 高5.8 台厚0.8	○いわゆる連歯下駄で，歯は削り残されたもの。周縁は隅丸であるが直線的な面取りが施される。鼻緒孔のうち，前壺はやや右に寄っており左腹きの可能性が強い。	カツラ	〃	○面取材り。破損が甚しいがほぼ全容を把握できる。
55	第660図	横櫛	残存長8.1 高3.6 厚0.8 歯長2.5	○鋸で細い歯をひきだす。むねの頂部は稜をなし側面には装飾的な切り込み線が横方向にみられる。3cmあたりの歯数は約37本。	イスノキ	柾目材	○服飾具。
56	〃	曲物	残存長7.4 高5.7	○側板縫合部の破片。ヒノキの柾面の薄板を用い，樺皮ぬいには幅5mmの桜樹皮を用いている。内面には，側板を円形に折り曲るための刻み目（けびき）が鋭利な刃物によっていれられる。	ヒノキ	〃	○食膳具。

川内調査区遺構・遺物一覧表

表—48　川内調査区土壙一覧表

（単位cm）

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
261	A—28	30× 40× 8	長方形	壺	弥生時代後期

表—49　川内調査区溝一覧表

番号	区　名	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
112	F—28～30，E—33	180～260	30	皿状	土器片，石鏃	弥生時代前期
113	E—33	—	50	—	土器片	〃
114	F—32・33	100～160	25～30	皿状	〃	〃
115	F—28～32	80～310	40～50	〃	甕，石鏃	弥生時代中期
116	F—28～31	290～460	40～110	〃	壺，甕，高杯，石庖丁，石鏃	弥生時代前期後半～中期末
117	F—32・33	150～230	40	〃	壺，甕，高杯	弥生時代前期～中期
118	Y—28，Z—28	20～30	40～50	U字形	—	弥生時代後期
119	〃	〃	〃	〃	—	〃
120	Z—28・29 A—28・29	30～40	18～20	〃	—	〃
121	〃	〃	〃	〃	—	〃
122	Z—28	〃	〃	〃	—	〃
123	Z—28・29 A—28・29	50～60	40	逆台形	—	〃
124	Z—28・29	—	—	U字形	甕	〃
125	Z—28・29 A—28・29	20	10	〃	甕，鉢	〃
126	〃	50～60	8～10	〃	—	〃
127	A—28・29	40～50	23	逆台形	—	〃
128	〃	〃	〃	〃	—	〃
129	A—28	20	20	U字形	—	〃
130	B—28	35～40	30	〃	—	〃
131	C—28・29	220	50	皿状	—	〃
132	〃	80～85	45	方形	—	〃
133	C—28・29，D—31 E—31～33	25～40	10	U字形	石鏃	〃
134	C—28・29，D—30 E—31～33，F—33	20～80	10～20	〃	—	〃
135	D—28	30～40	10	〃	—	〃
136	D～E—26	222	58	〃	—	弥生時代中期～百・後・I
137	E—26・27	40～100	5～10	〃	—	弥生時代後期
138	E—25～F—28	56	30	逆台形	壺	百・後・I
139	F—26・27・30	40～50	5～10	U字形	—	弥生時代後期
140	F—27～31	60～100	50	〃	壺，鉢	百・後・II
141	F—29・30	—	—	〃	鉢，石鏃	〃
142	E—29	30～40	5	〃	—	弥生時代後期
143	D—32	40～50	25	〃	—	〃
144	D—30，E—30～32 F—32	20～30	15	〃	石鏃	〃

番号	区名	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
145・a	F—28～31	150～190	80	U字形	甕,高杯	弥生時代後期
145・b	F—27～31	140～240	100	〃	甕	〃
146	Y—29	420	80	〃	甕,擂鉢	
147	Y—29, Z—29	90	60	逆台形	—	古墳時代
148	Y—29	60	10～30	U字形	—	〃
149	〃	80	〃	〃	—	〃
150	〃	—	〃	〃	—	〃
151	〃	—	〃	〃	甕,平瓦	古墳時代～奈良時代
152	〃	—	10	〃	—	古墳時代
153	D—25～F—27	60～150	28～45	〃	甕,擂鉢,盤	14C代～近代
154	D—27～F—28	50～65	10～15	〃	—	古墳時代以降
155	F—31	40～60	15	〃	—	〃
156	D—32, E—32	30～50	20	〃	—	〃
157	E—32・33	40～55	5	〃	—	〃

表—50　川内調査区石器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
671	187	石鏃	F—30	溝—112	サヌカイト	18.90	17.80	3.30	0.76	
674	188	〃	E—32・33	溝—115	〃	31.10	14.70	3.40	1.50	完形
675	189	〃	E・F-29・30	溝—116	〃	23.40	16.80	3.40	1.04	〃
676	190	磨製石庖丁	F—31	〃	粘板岩	80.00	41.70	7.20	40.12	〃
〃	191	〃	F—29	〃	〃	47.70	40.60	6.70	18.36	
〃	192	〃	F—31	〃	安山岩	45.60	47.40	5.80	15.10	
679	193	石鏃	B・C・D—28・29	黒茶褐色土	サヌカイト	24.55	13.40	3.20	0.90	
〃	194	〃	〃	弥生時代中期水田層	〃	18.05	14.60	3.75	0.70	
〃	195	〃	F—26	〃	〃	45.50	15.00	3.50	2.41	
690	196	〃	D—32	溝—133	〃	22.00	20.00	3.30	1.21	完形
〃	197	〃	D—31	〃	〃	24.00	14.40	4.60	0.95	〃
695	198	〃	F—29	溝—141	〃	18.00	15.20	4.40	0.86	
697	199	〃	E—32	溝—144	〃	25.70	14.30	3.30	0.92	完形
712	200	砥石	F—31	溝—145・a	安山岩	127.65	96.65	61.10	1180.0	
721	201	打製石庖丁	F—31	弥生時代後期水田層	サヌカイト	109.20	41.70	12.30	71.57	完形
〃	202	石鏃	E—31	〃	〃	18.00	12.20	2.30	0.40	〃
〃	203	〃	E—28	表採	〃	47.70	15.80	7.90	4.81	〃
		打製石庖丁?	B・C・D—28	弥生時代中期水田層	〃	—	55.65	10.40	12.20	
		石鏃	E—32	表採	〃	29.60	17.80	4.50	2.07	完形
		〃	E—33	溝—115	〃	26.00	29.00	2.60	1.23	
		石槍?	F—31	溝—116?	〃	49.50	39.60	11.00	14.20	
		砥石?	E・F-29・30	溝—116		11.12	4.48	1.82	—	
		敲石	F—31	溝—116?	細粒閃緑岩	66.50	37.00	22.60	84.58	
		〃	E—29	溝—115	閃緑岩	91.20	72.50	17.80	149.40	完形

表—51　川内調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—115（第674図）									
5548	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面縦のハケメ。	灰白色	微砂	良好	
溝—116（第675図）									
5549	壺形土器	12.8	—	—	○口頸部ヨコナデ。	灰白色	微砂	良好	
5550	〃	13.6	—	—	○頸部外面縦ハケメ。	淡茶灰色	〃	〃	
5551	〃	12.0	—	—	○頸部外面縦ハケメのちクシガキ文。	灰黄色	〃	〃	
5552	〃	17.0	—	—	○体部外面ハケメ。	灰白色	〃	〃	
5553	甕形土器	12.6	—	—	○体部内面ユビナデか？	〃	〃	〃	
5554	〃	14.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃	〃	
5555	〃	15.4	—	—	○ヨコナデ。	〃	〃	〃	○外面煤。
5556	〃	18.0	—	—		〃	〃	〃	○調整不詳。
5557	〃	20.2	—	—	○外面ハケメ。内面指頭オサエのちハケメ。	〃	〃	〃	
5558	〃	23.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
5559	〃	—	5.5	—	○底部外面ユビナデ。	淡褐灰色	〃	〃	○内面煤。
5560	〃	—	9.8	—	○内面ユビナデ。外面ヘラミガキ。	暗灰褐色	〃	〃	
5561	〃	—	6.4	—	○内面ヘラケズリ。外面ヘラミガキ。	淡茶灰色	〃	〃	
5562	〃	—	8.8	—	○内面ユビナデか？	暗黒褐色	〃	〃	
5563	〃	—	5.6	—	○底部端面ヨコナデ。内面ユビナデ。	淡灰黄色	〃	〃	
5564	〃	—	5.2	—		灰白色	〃	〃	○調整不詳。
5565	鉢形土器	19.8	—	—	○内面ヘラミガキ。	暗灰褐色	〃	〃	
5566	高杯形土器	—	9.2	—	○円板充填。	灰白色	〃	〃	
5567	壺形土器	27.6	—	—	○口縁端部凹線文および棒状浮文。	〃	〃	〃	
5568	甕形土器	20.2	—	—	○口縁端部凹線文。	〃	〃	〃	
5569	〃	18.0	—	—	〃	〃	〃	〃	○外面煤。
5570	〃	15.9	—	—		〃	〃	〃	
5571	壺形土器	—	—	—	○外面にヘラガキ平行沈線および木葉文。	〃	細砂	〃	
溝—117（第677図）									
5572	壺形土器	—	—	—	○外面クシガキ文。	鈍い橙色	微砂	良好	
5573	甕形土器	16.1	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰白色	〃	〃	
5574	高杯形土器	—	—	—	○2孔単位の穿孔。口縁端部キザミメ。	〃	〃	〃	
5575	壺形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○内面不詳。
5576	甕形土器	—	—	—	○ヨコナデ。キザミメをもつ貼り付け凸帯。	鈍い黄橙色	〃	やや甘	○九州東部産か？
弥生時代中期水田掘り下げ中出土遺物（第679図）									
5577	壺形土器	—	—	—	○内外面剥離。先端わずかに内湾。	鈍い黄褐色	石粒砂粒多	良好	○小破片。
5578	〃	—	—	—	○口縁部下端に穿孔あり。外面ヘラミガキ。	明赤褐色	〃	〃	〃
5579	〃	—	—	—	○頸部に貼り付け凸帯。凸帯上にキザミメ。	鈍い黄褐色	〃	〃	〃
5580	〃	—	—	—	○肩部にケズリダシ凸帯あり。	灰白色	砂粒多	やや甘	〃
5581	〃	—	—	—	○肩部に3条のヘラガキ沈線。内面ナデか？	〃	〃	〃	〃
5582	〃	—	10.8	—	○外面ヘラミガキ。内面ナデか？	暗赤褐色	石粒砂粒多	良好	○½弱残存。
土壙—261（第682図）									
5583	壺形土器	—	—	—	○沈線4本。	淡褐色	細砂	良好	
5584	〃	—	—	—	○4本の沈線の下方はヘラミガキ。	〃	〃	〃	
溝—124（左）・125（右）（第684図）									
5585	壺形土器	—	—	—	○胴部内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	淡褐色	微砂	良好	
5586	〃	—	—	—	○ヘラによる施文がみられる。	〃	細砂	〃	
5587	鉢形土器	—	—	—	○外面工字文か？	褐色	〃	〃	
溝—138（第693図）									
5588	壺形土器	13.8	—	—	○頸部に凹線文。	灰白色	微砂	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—140（第694図）									
5589	鉢形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	淡灰黄色	微砂	良好	
5590	〃	—	—	—		淡黄色	〃	〃	
5591	壺形土器	—	12.8	—		淡灰黄色	〃	〃	
溝—141（第695図）									
5592	鉢形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡黄灰色	微砂	良好	○外面煤。
5593	高杯形土器	22.4	—	—	〃	〃	〃	〃	
「島状高まり」遺構—5（第704図）									
5594	底部	—	5.6	—	○底部外面ユビナデ。	淡橙灰色	砂粒	良好	
5595	〃	—	5.0	—		灰橙色	〃	〃	
5596	高杯形土器	—	—	—		淡灰橙色	〃	〃	
5597	〃	—	—	—		灰橙色	〃	〃	
「島状高まり」遺構—6（第705図）									
5598	甕形土器	13.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡褐灰色	砂粒	良好	
5599	高杯形土器	—	—	—		灰橙色	〃	〃	
5600	蓋形土器	10.0	—	4.1	○内外面とも放射状のヘラミガキ。	橙灰色	〃	〃	
5601	甕形土器	—	8.0	—		灰白色	砂粒多い	〃	
「島状高まり」遺構—7（第706図）									
5602	高杯形土器	—	12.4	—		灰褐色	砂粒	良好	
「島状高まり」遺構—8（第707図）									
5603	高杯形土器	24.8	—	—		淡灰橙色	微砂	良好	
5604	甕形土器	—	6.4	—	○外面ハケメのちヘラミガキ。	〃	細砂	〃	
「島状高まり」遺構—9（第708図）									
5605	鉢形土器	30.2	—	—	○体部内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	淡褐色	微砂	良好	
5606	〃	37.8	—	—	○体部外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡赤褐色	〃	〃	
5607	壺形土器	—	—	—	○口縁端部に凹線。	淡褐色	〃	〃	
5608	底部	—	6.7	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	○煤付着。
「島状高まり」遺構—10（第709図）									
5609	鉢形土器	—	—	—	○外面工字文か？内面ヘラケズリ。	褐色	細砂	良好	○5587と同一個体。
5610	壺形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部に沈線。	淡赤褐色	微砂	〃	
5611	〃	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。頸部に沈線。	淡褐色	〃	〃	
5612	〃	—	—	—	○外面にヘラガキの弧状および平行沈線文。	褐色	〃	〃	
5613	〃	—	—	—	○外面にヘラガキの弧状文。	〃	〃	〃	
5614	〃	16.1	—	—	○口縁部内面に3条の凹線。	淡褐色	細砂	〃	
5615	鉢形土器	19.3	—	—	○外面ハケメ。	〃	〃	〃	
5616	〃	—	—	—	○内面ヘラケズリ。	〃	微砂	〃	
5617	〃	—	—	—	〃	乳褐色	細砂	〃	
5618	〃	—	8.2	—	○脚部内面ヘラケズリ。	淡褐色	〃	〃	
5619	壺形土器	15.2	—	—		淡赤褐色	〃	〃	
5620	底部	—	6.0	—	○内面ヘラケズリ。	〃			
畝畝—1（第710図）									
5621	甕形土器	14.6	6.0	24.2	○口縁端部3条の凹線。	鈍い橙色	微砂	良好	
5622	高杯形土器	—	—	—		橙色	精製粘土	〃	
5623	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
溝—145・a（第712図）									
5624	甕形土器	15.8	5.5	25.6	○口縁端部に2条の凹線。内面ヘラケズリ。	淡茶灰色	微砂	良好	○外面煤。
5625	高杯形土器	30.4	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
溝—145・b（第713図）									
5626	甕形土器	13.7	—	17.8	○外面ハケメのちタタキメ。内面ヘラケズリ	乳灰白色	微砂	良好	○外面煤。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—151（第716図）									
5627	平瓦	—	—	—	○凹面布目（5×6本）。凸面縄目。	灰褐色	細砂	良好	
5628	甕形土器	15.8	—	—		〃	微砂	〃	
溝—146（第717図）									
5629	擂鉢	—	—	—		茶褐色	細砂粒	良好	
5630	〃	—	—	—	○8本単位のカキメ。	〃	〃	〃	
5631	甕形土器	—	—	—	○内面は粗いナデ。	灰青色	〃	〃	
5632	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
5633	支脚	—	—	—		灰色	微砂	〃	
溝—153（第718図）									
5634	盤	—	—	—		緑白色	緻密	堅緻	○二次的な火をうけている。
5635	甕	—	—	—		灰茶褐色	細砂	〃	
5636	擂鉢	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
5637	〃	—	—	—		暗灰色	〃	〃	
5638	〃	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
5639	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
5640	〃	—	—	—		赤茶褐色	〃	〃	

三ノ坪調査区遺構・遺物一覧表

表—52　三ノ坪調査区遺構番号対照表

遺構番号	地区	図	時期	旧	遺構番号	地区	図	時期	旧
井戸－31	F－39	799	百・古・I		溝　－163	D・E－37・38	745	百・前・III	12
－32	D－40	801	〃		－164	D・E－39・40	746－749	〃	28
－33	〃	802	〃		－165	D－34	727	〃	90
－34	D－41	803	〃		－166	E－36	〃	百・前	91
－35	D－40	804	〃		－167	D・E－33	〃	〃	92
－36	〃	805	〃		－168	E・F－35	〃	〃	94
－37	D－34	800	—	14	－169	E・F－36	〃	〃	95
土壙－262	D－39	728・729	百・前・III	土－1	－170	D・E・F－34	753	百・中・I	70
－263	〃	730・731	〃	土－2	－171	〃	756・758〜761	〃	80A
－264	〃	732	〃	—	－172	E・F－35	762〜766	〃	73
－265	E－34	754	百・中・II	78	－173	E・F－35・36		〃	75
－266	E－35	755	百・中	74	－174	E・F－36・37	753	〃	59
－267	〃	〃	〃	79	－175	〃	767	〃	60
－268	D－38	771	百・後	土－1	－176	E－34・35	753	〃	71
－269	〃	772・773	百・後・II	土－3	－177	E－33	770	百・後	61
－270	D－41	774	百・後	土－2	－178	D・E・F－34	775〜777	百・後・II	62
－271	E－34	770	〃	81	－179	〃		〃	63
－272	〃	〃	〃	82	－180	〃		〃	64
－273	D－35	〃	〃	85	－181	〃		〃	65
－274	D－41	〃	〃	土－2	－182	〃		〃	66
－275	E－33	817	中世	30	－183	〃		〃	96
－276	〃	818	〃	31	－184	〃		〃	97
－277	E－34	815	〃	32	－185	〃	770	〃	98
－278	D－33	〃	近・現代	10	－186	〃	〃	〃	99
溝　－158	D・E・F－35・36	733・735〜736・752	百・前・III	100	－187	〃	〃	〃	67
－159	D・E－33・34	737	百・前・II	89	－188	〃	〃	〃	68
－160	D・E・F－34	738・739	百・前・III	69	－189	E・F－36	753	百・中	76
－161	D－35	740	〃	88	－190	E－35	〃	〃	77
－162	D・E・F－34	742・743〜744・756	〃	80B	－191	E－34	〃	〃	83
溝　－192	D・E－33・34	770	百・後	84	溝　－241	E・F－40	815	近・現代	—
－193	E－37	770	百・後・II	P－8	－242	D・E・F－40・41	〃	〃	—
－194	D－37・38	〃	百・後・IV	10	－243	D－40	〃	〃	—
－195	D－40	〃	百・後	1(13)	－244	E－41	〃	〃	—
－196	〃	〃	〃	2(14)	柱穴列— 5	E・F－33・34	806	古墳・後期	15
－197	〃	〃	〃	3(15)	－ 6	E・F－34	800	〃	19
－198	〃	〃	〃	4(16)	－ 7	D－34	〃	〃	20
－199	〃	〃	〃	5(17)	－ 8	E・F－34・36	〃	〃	23
－200	〃	〃	〃	6(18)	－ 9	F－35	〃	〃	25
－201	D－38・39・40	812	〃	19	－10	F－35	〃	〃	26
－202	〃	810〜812	〃	11	－11	E・F－35	〃	〃	27
－203	〃	812	〃	20	－12	E・F－34・35	〃	〃	28
－204	〃	〃	〃	21D	－13	E－34・35	〃	〃	29
－205	〃	770	〃	22E	－14	D・E・F－33	〃	〃	33
－206	〃	〃	〃	23F	－15	E－35	〃	〃	34
－207	〃	〃	〃	24G	－16	E・F－35	〃	〃	35
－208	〃	〃	〃	25H	－17	〃	〃	〃	36

遺構番号	地　区	図	時　期	旧	遺構番号	地　区	図	時　期	旧
−209	〃	〃	〃	126	−18	〃	809	〃	37
−210	D40	〃	〃	727	−19	E・F−36	〃	〃	38
−211	D-E−33・34・35・36	800	〃	54	−20	D・E・F−35	〃	〃	39
−212	E−34	〃	〃	53	−21	E−35	800	〃	40
−213	F−34	〃	〃	24	−22	E−35	〃	〃	41
−214	〃	〃	〃	22	−23	E・F−36	〃	〃	42
−215	〃	〃	〃	21	−24	E・F−35・36	〃	〃	43
−216	D-E・F−34・35	〃	〃	17	−25	E・F−36	〃	〃	44
−217	〃	〃	〃	16	−26	D−35	〃	〃	45
−218	D-E・F−35・36・37	810・811	古墳時代後期	11	杭　列 −27	D−34	〃	〃	46
−219	D・E−38	806	〃	2	柱穴列 −28	D・E・F−35	807	〃	47
−220	〃	〃	〃	3	−29	〃	〃	〃	48
−221	E・F−37	〃	〃	4	−30	〃	〃	〃	49
−222	D−39・40	〃	〃	7	−31	〃	〃	〃	50
−223	D・E−33	815	近・現代	13	−32	〃	〃	〃	51
−224	D・E−33・34	〃	〃	12	−33	D・E・F−35	〃	〃	52
−225	D-E・F−35・36・37	〃	〃	11	「鳥坂寺より」遺構−11	D−33	783 784	百・後・Ⅳ	86
−226	D−33	〃	〃	9	〃 −12	E−35	785	〃	57
−227	D-E・F−33・34	〃	〃	8	−13	D−39・40	786〜788	〃	—
−228	D・E−33・34	〃	〃	7	獣　畝 − 1	D-E・F−33・34	790・792 793	〃	87
−229	〃	〃	〃	6	− 2	D-E・F−40・41	794	〃	—
−230	D-E・F−37・38・39・40	〃	〃	5	大畦畔 − 8	E・F−34・35	793 795	〃	—
−231	E・F−35・36・37・38	〃	〃	4	− 9	D・E−35	〃	〃	—
−232	E・F−35・36	〃	〃	3	−10	D-E・F−35〜38	〃	〃	—
−233	D-E・F−34・35	〃	〃	2 a	−11	D-E・F−38・39	〃	〃	—
−234	〃	〃	〃	b	井　堰 − 1	D−35・36	733 734	百・前・Ⅲ	
−235	E・F−34・35	〃	〃	c	− 2	E・F−34	753	百・中・Ⅰ	
−236	E・F−34・35・36	〃	〃	d	− 3	E−35・36	〃	〃	
−237	D・E−34・35	〃	〃	1					
−238	D−40	〃	〃	—					
−239	D-E・F−38・39・40	〃	〃	—					
−240	E・F−39・40	〃	〃	—					

表—53　三ノ坪調査区土壙一覧表

（単位cm）

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平　面　形	出　土　遺　物	時　期
262	D—39	200×70×40	長楕円形	甕,石鏃	百・前・III
263	〃	310×135×51	〃	壺,甕,鉢,石匙,スクレイパー	〃
264	〃	158×(110)×45	不整円形	—	—
265	E—34	(160)×16×35	長　方　形	甕	百・中・II
266	E—35	106×60×30	〃	—	—
267	F—35	68×52×23	〃	—	—
268	D—38	90×80×42	不整円形	—	百・後
269	〃	(80)×(80)×30	円　形	甕	百・後・II
270	D—41	70×69×28	〃	—	百・後
271	E—34	205×167×60	楕　円　形	土器小片	〃
272	〃	—	〃	〃	〃
273	D—35	472×76×28	長楕円形		〃
274	D—41	360×210×18	楕　円　形	—	〃
275	E—33	(135)×(135)×70	〃	—	中世
276	〃	195×160×93	〃	—	〃
277	E—34	(200)×(150)×72.5	〃	—	〃
278	D—33	900×200×99	隅丸長方形	—	近・現代

表—54　三ノ坪調査区溝一覧表

（単位cm）

番号	区　名	幅×深さ	断面形	出　土　遺　物	時　期
158	D・E・F—35・36	1500×100	皿　形	甕,壺,深鉢,石庖丁	百・前・III
159	D・E—33・34	35×40	U字形	壺,甕	百・前・II
160	D・E・F—34	240×28	皿　形	壺,	百・前・III
161	D—35	115×25	〃	甕	〃
162	D・E・F—34	710×120	〃	壺,甕,スクレイパー,石鏃,石庖丁,敲石,深鉢,蓋	〃
163	D・E—37・38	200×45	〃	鉢,壺,甕,磨製石斧	〃
164	D・E—39・40	250×80	〃	壺,甕,石匙,石錘,石鏃,凹石,敲石,蓋	〃
165	D—34	137×17.8	〃	—	〃
166	E—36	80×20	〃	—	百・前
167	D・E—33	85×11.5	U字形	—	〃
168	E・F—35	800×110	〃	—	〃
169	E・F—36	150×20	皿　形	—	〃
170	D・E・F—34	37×13.8	U字形	—	百・中・I
171	〃	700×120	皿　形	壺,甕,高杯,鉢,蓋,台付鉢	〃
172	E・F—35	190×60	〃	壺,甕,高杯,石剣,石鏃,スクレイパー,石庖丁,紡錘車,台付鉢,鉢	〃
173	E・F—35・36	980×150	〃		〃
174	E・F—36・37	120×10	〃	—	〃
175	〃	120×15	〃	—	〃
176	E—34・35	150×20	V字形	—	〃
177	E—33	—	皿　形	—	百・後

(単位cm)

番号	区　名	幅×深さ	断面形	出土遺物	時期
178	D・E・F—34	67×21	皿形	壺, 甕, 高杯, 石鏃, 台付鉢, 台付甕	百・後・II
179	〃	57×19	〃		〃
180	〃	36×4	〃		〃
181	〃	48×13	〃		〃
182	〃	57×4	〃		〃
183	〃	50×3.2	〃		〃
184	〃	72×12	〃		〃
185	〃	27×9	〃	—	〃
186	〃	97×22	〃	—	〃
187	〃	50×7	〃	—	〃
188	〃	50×11	〃	—	〃
189	E・F—36	110×15.7	〃	—	百・中
190	E—35	45×2.0	〃	—	〃
191	E—34	50×5.0	〃	—	〃
192	D・E—33・34	95×40.3	V字形	—	百・後
193	E—36	29×7.9	皿形	—	百・後・II
194	D—37・38	70×12	〃	—	百・後・IV
195	D—40	31×14.3	〃	—	百・後
196	〃	113×9.7	〃	—	〃
197	〃	42×6.5	〃	—	〃
198	〃	31×43	〃	—	〃
199	〃	40×6.1	〃	—	〃
200	〃	80×9.2	〃	—	〃
201	D—38～40	17×1.0	〃	鉢, 高杯	〃
202	〃	32×6.5	〃		〃
203	〃	125×7.7	〃		〃
204	〃	53×10.9	〃		〃
205	〃	53×9.0	〃	—	〃
206	〃	56×8.5	〃	—	〃
207	〃	64×7.5	〃	—	〃
208	〃	65×5.5	〃	—	〃
209	〃	103×10.5	〃	—	〃
210	D—40	58×10	〃	—	〃
211	D・E—33・36	60×20	逆台形	—	古墳時代
212	E—34	100×10	皿形	—	〃
213	F—34	60×8	〃	—	〃
214	〃	75×(20)	〃	—	〃
215	〃	(60)×(20)	〃	—	〃
216	D・E・F—34・35	200×50	〃	—	古墳時代後期
217	〃	85×35	〃	須恵器	〃
218	D・E・F—35～37	160×80	〃	須恵器, 鉢	〃
219	D・E—38	50×20	逆台形	須恵器(杯蓋), 土師器高杯	〃
220	〃	70×10	皿形	—	〃

（単位cm）

番号	区名	幅×深さ	断面形	出土遺物	時期
221	E・F—37	70×14.2	皿形	—	〃
222	D—39・40	103×10.5	〃	—	百・古・I
223	D・E—33	—	—	—	近・現代
224	D・E—33・34	100×37.7	皿形	—	〃
225	D・E・F—35～37	—	—	—	〃
226	D—33	185×41	逆台形	—	〃
227	D・E・F—33・34	215×46.6	〃	—	〃
228	〃	125×44	〃	—	〃
229	D・E—33・34	100×37.7	〃	—	〃
230	D・E・F—37～40	67×68.5	〃	—	〃
231	E・F—35～38	100×63.9	〃	—	〃
232	E・F—35・36	84×53.8	〃	—	〃
233	D・E・F—34・35	130×46.8	〃	—	〃
234	〃	80×22	〃	—	〃
235	E・F—34・35	80×56.4	〃	—	〃
236	E・F—34～36	140×31.1	〃	—	〃
237	D・E—34・35	215×57.5	〃	—	〃
238	D—40	140×—	—	—	〃
239	D・E・F-38・39・40	200×—	—	—	〃
240	E・F—39・40	200×—	—	—	〃
241	E・F—40	200×—	—	—	〃
242	D・E・F—40・41	200×—	—	—	〃
243	D—40	140×—	—	—	〃
244	E—41	160×—	—	—	〃

表—55　三ノ坪調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
765	165	紡錘車	E—36	溝—172	土器片	3.21	2.90	0.63	6.40	
〃	166	〃	D—36	〃　(下層)	土	6.17	5.99	1.55	67.80	
819	167	土錘	E—40	包含層	〃	7.01	2.63	2.63	49.50	

表—56　三ノ坪調査区石器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
729	204	石鏃	D—39	土壙—262	サヌカイト	21.4	17.3	3.3	0.83	鏃II
〃	205	〃	〃	〃	〃	18.9	16.1	3.8	0.83	鏃I
〃	206	〃	〃	〃	〃	24.0	17.6	3.2	0.96	鏃V
730	207	石匙	〃	土壙—263	〃	56.9	43.6	7.1	17.53	
〃	208	スクレイパー	〃	〃	〃	65.3	30.25	13.0	24.37	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
736	209	石庖丁	D—35	溝—158	サヌカイト	37.7	50.1	7.4	20.00	
744	210	スクレイパー	E—34	溝—162	〃	56.2	31.6	7.6	12.90	
〃	211	〃	F—34	〃	〃	42.7	44.2	7.2	18.30	
〃	212	石庖丁	〃	〃	粘板岩	37.4	52.5	6.8	15.50	
〃	213	石鏃	〃	〃	サヌカイト	24.8	15.0	2.9	1.00	鏃V
〃	214	〃	〃	〃	〃	24.0	16.0	2.9	0.83	鏃II
〃	215	〃		〃	〃	20.9	11.7	2.9	1.60	鏃III
〃	216	敲石		〃		45.5	44.0	26.0	—	
745	217	磨製石斧	D—37	溝—163	玢岩	33.4	68.2	45.2	149.50	
749	218	石匙	D—40	溝—164	サヌカイト	64.9	20.7	4.8	5.70	
〃	219	石錘	〃	〃	〃	76.8	74.9	40.4	247.13	
〃	220	石鏃	〃	〃	〃	19.1	14.6	2.6	0.63	鏃II
〃	221	凹石	〃	〃	花崗岩	83.8	72.3	38.0	350.00	
〃	222	敲石	〃	〃	半花崗岩	110.0	42.1	38.7	310.00	
762	223	石剣	E—36	溝—173	サヌカイト	166.0	30.6	13.6	86.00	
765	224	石鏃	〃	〃	〃	15.7	13.7	2.1	0.45	鏃II
〃	225	〃	〃	〃	〃	21.3	12.5	3.0	0.70	鏃I
〃	226	スクレイパー	〃	〃	〃	55.6	57.7	6.5	16.90	
〃	227	石庖丁	E—39～40	水田層	〃	81.2	30.0	8.7	27.10	
769	228	〃	D—41	大畦畔中	粘板岩	77.5	51.0	7.7	38.40	
〃	229	〃	E—35	水田層下	サヌカイト	77.6	34.6	9.4	31.40	
〃	230	〃	F—22	〃	〃	81.2	30.0	8.7	27.20	
〃	231	〃	E—37	〃	〃	75.1	50.0	6.5	26.82	
〃	232	石錐	D—34	包含層	〃	43.6	12.5	4.9	2.10	
〃	233	石鏃	E—34	柱穴	〃	13.9	12.1	2.4	0.40	鏃I
〃	234	〃	E—35	溝—212	〃	37.95	11.0	3.9	1.80	鏃VIa
〃	235	〃	〃	水田層下	〃	38.0	12.4	5.0	2.30	鏃VIb
〃	236	石庖丁	〃	〃	〃	79.5	50.6	11.3	59.50	
〃	237	石鏃	E—40	水田層	〃	20.9	13.75	3.8	1.53	鏃II
〃	238	〃	D—40・41	大畦畔中	〃	12.7	10.9	2.9	0.41	〃
〃	239	〃	D—39	包含層	〃	18.1	15.0	3.9	1.05	〃
〃	240	〃	E—40	〃	〃	20.9	13.75	3.8	0.90	〃
〃	241	〃	〃	溝—195	〃	27.8	18.7	4.0	1.85	〃
〃	242	〃	D—38	包含層	〃	22.5	20.0	3.6	1.23	〃
〃	243	〃	D—38・39	〃	〃	22.7	12.7	2.5	0.75	〃
〃	244	〃	D—39・40	水田層	〃	20.6	18.1	3.7	1.36	〃
〃	245	〃	D—40	溝—198	〃	17.9	13.3	2.7	0.67	鏃I
〃	246	〃	D—37	柱穴	〃	18.0	15.4	2.8	0.80	〃
〃	247	〃	D—40	溝—198	〃	38.4	20.2	5.3	4.21	鏃III
777	248	〃	E—34	溝—178～184	〃	21.6	13.3	3.3	0.93	鏃I
〃	249	〃	D・E・F—34	〃	〃	17.6	13.2	3.5	0.80	〃
〃	250	〃	〃	〃	〃	17.9	14.5	2.2	0.60	〃

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
777	251	石鏃	E−34	溝178～184	サヌカイト	18.5	13.0	3.1	0.62	鏃V
		石斧	D−39	微高地内包含層中（暗灰褐色土）	玢岩	48.3	23.7	10.2	16.00	
		石庖丁	D−41	水田層(弥生時代後期)	?	96.3+α	49.1+α	6.0	32.90	
		石錘	F−37・38	トレンチか？	?	78.1	68.2	20.1	145.17	
		スクレイパー？	D−39	黄色基盤上面	サヌカイト	39.7	22.2	9.2	6.84	
		スクレイパー	D−38 E−39	排水溝中	〃	69.0	52.9	6.2	23.24	
		石鏃	E−37	水田層掘り下げ中	〃	20.8+α	16.5	4.5	1.47	
		?	D−34・38	黄色土上面	〃	27.3+α	24.9	5.7	4.23	
		石鏃	E−37	水田(弥生時代中期)上層	〃	28.0+α	11.4+α	5.1	1.53	
		〃	E−41	水田層の下層(弥生時代後期)	〃	33.7	17.6	3.4	2.15	
		〃	D−39	水田層（弥生時代後期)	〃	13.8+α	12.1	2.0	0.40	
		〃	?	—	〃	18.0+α	13.8	3.2	0.90	
		敲石	D−39・40	溝−164	花崗岩	—	88.8	81.5	2320	
		不明	D−39	包含層	サヌカイト	64.2	45.0	19.55	51.16	
		〃	〃	〃	〃	37.2	30.1	9.15	14.80	
		石庖丁	D−40	現代溝	〃	39.1	30.3	10.6	9.92	
		〃	D−38		〃	41.5	25.55	6.2	8.41	
		スクレイパー？		溝−164	〃	24.7	18.0	2.99	1.56	
		〃	D−39・40	水田層(弥生時代後期)	〃	47.8	40.7	6.6	12.67	
		不明	D−41	〃	〃	36.5	29.8	7.1	0.67	
		〃	D−40	大畦畔下層	〃	24.3	21.9	5.1	3.13	
		スクレイパー？	〃	溝−164	〃	32.6	21.2	3.1	2.42	
		不明	D−39	土壙−263	〃	63.1	28.7	12.6	25.10	
		〃	D−40	溝−197	〃	26.9	22.5	4.7	2.80	
		スクレイパー	D−40・41	大畦畔中上層	〃	46.8	32.4	10.75	13.10	
		楔形石器	D−39	微高地内包含層	〃	23.7	18.4	7.2	4.62	
		石庖丁	D・E−37 D・E−38	水田層(弥生時代後期)	〃	45.4	38.7	10.4	27.34	
		スクレーパー	D−39	土壙−263	〃	37.1	28.2	4.6	5.77	
		〃	D−39・40	溝−164	〃	61.2	35.5	9.2	12.72	
		不明	D−39	黄色基盤土	〃	53.7	24.0	5.6	10.17	
		〃	D−40	溝−196	〃	53.8	53.5	19.0	53.11	
		石庖丁？	〃	水田層掘り下げ(弥生時代後期)	〃	46.2	35.95	9.0	21.00	
		不明	〃	〃	〃	35.1	24.15	8.5	6.90	
		スクレーパー？	D−38	〃	〃	24.4	18.9	4.3	2.07	
		〃	D−40	〃	〃	34.2	12.1	4.0	1.65	
		〃	表採	—	〃	37.2	23.1	5.5	4.76	
		不明	D−38	P−3	〃	20.6	18.7	4.3	2.06	
		〃	D−39・40	溝−164	〃	35.9	24.6	8.9	8.10	
		〃	D−40	溝−195土器溜り1付近	〃	15.9	15.8	4.5	1.41	
		〃	D−39	土壙−263	〃	28.0	26.55	6.8	5.73	

表—57　三ノ坪調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5641	—	—	—	(2.8)	○外面ナデ。	明褐灰色	小砂粒	良好	
5642	深鉢形土器	—	—	(5.6)	○内外面ユビナデ。	褐灰色	〃	〃	
5643	—	—	—	(3.0)	○外面擦痕。内面横位のナデ。	明褐灰色	〃	〃	
5644	—	—	—	(2.3)		暗褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5645	深鉢形土器	—	—	(3.7)	○外面条痕。	黄灰白色	〃	〃	
5646	〃	—	—	(3.8)	○外面条痕，爪形文。	鈍い赤褐色	〃	〃	○外面より穿孔。
5647	—	—	—	(2.3)	○内面ハケメ。外面擦痕か？	褐灰色	〃	〃	
5648	深鉢形土器	—	—	(4.0)	○外面擦痕。内面ユビナデ。	暗褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5649	—	—	—	(2.2)	○外面擦痕。	灰黒色	〃	〃	
5650	深鉢形土器	—	—	(4.6)	○外面指頭圧・擦痕。内面ハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5651	—	—	—	(3.9)	○外面擦痕。	褐灰色	〃	〃	〃
5652	—	—	—	(5.1)	○外面指頭圧，擦痕。	鈍い黄橙色	〃	〃	○内面煤付着。
5653	—	—	—	(1.4)	○外面擦痕。	〃	〃	〃	
5654	浅鉢形土器	—	—	(3.6)	○内外面丁寧なヘラミガキ。	暗褐灰色	精製粘土	〃	
5655	—	—	—	(3.6)	○外面擦痕。内面ハケメ。	鈍い黄橙色	小砂粒	〃	
5656	—	—	—	(2.3)	○外面擦痕。内面ナデ。	灰白色	〃	〃	
5657	—	—	—	(2.2)	○内外面ヘラミガキ。	黒褐色	精製粘土	〃	
5658	深鉢形土器	—	—	(5.5)	○外面擦痕，内面ナデ。内傾接合。	灰黒色	小砂粒	〃	
5659	〃	—	—	(5.0)	○外面擦痕，内面貝殻条痕か？	明褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5660	〃	—	—	(3.7)	○内面ナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
5661	〃	—	—	(3.0)	○内外面ユビナデ。	〃	〃	〃	
5662	浅鉢形土器	—	—	(3.8)	○外面下位条痕，上位ヘラミガキ。	暗褐灰色	精製粘土	〃	
5663	—	—	—	(3.1)	○外面擦痕，内面ナデ。	鈍い橙色	小砂粒	〃	
5664	甕形土器	—	—	(3.9)	○外面指頭圧。	鈍い黄橙色	〃	〃	
5665	壺形土器	—	—	(2.7)	○外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
5666	〃	—	—	(2.1)	○細い線刻，有軸木葉文。	灰白色	〃	〃	
5667	甕形土器	—	—	(4.9)		〃	〃	〃	
5668	深鉢形土器	—	—	(4.3)	○外面擦痕，内面ナデ。	〃	〃	〃	
5669	—	—	—	(1.7)	○内面沈線。	褐灰色	〃	〃	○煤付着。
5670	深鉢形土器	—	—	(3.4)		〃	〃	〃	
5671	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
5672	〃	—	—	—	○外面条痕，内面ナデ。	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
土壙—262（第729図）									
5673	甕形土器	—	—	(2.3)		灰茶色	小砂粒	良好	○外面煤付着。
5674	〃	—	—	(3.4)		鈍い橙色	〃	〃	
5675	〃	—	—	(4.0)	○外傾接合。	明褐色	白色小砂粒	〃	
5676	〃	—	—	(3.6)		〃	雲母を含む	〃	
5677	〃	—	—	(4.1)		淡灰茶色	白色小砂粒	〃	○外面煤付着。
5678	〃	(22.9)	—	(9.7)	○口縁部若干波状に屈曲。	淡黄白色	〃	〃	
5679	〃	22.0	7.0	27.8		暗褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5680	〃	(20.0)	—	(15.1)		鈍い橙色	〃	〃	○器面剝落。
5681	〃	(18.5)	—	(4.4)		〃	〃	〃	
5682	〃	—	(7.4)	(6.5)		灰黄褐色	〃	〃	
5683	〃	—	8.0	(7.2)		〃	〃	〃	
土壙—263（第731図）									
5684	壺形土器	7.0	—	—	○口縁部下端にキザミメ。	鈍い黄橙色	砂粒	良好	
5685	〃	—	—	—		灰白色	〃	〃	
5686	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線。	明赤褐色	〃	〃	
5687	〃	—	—	—	○外面に6本のヘラガキ沈線。	鈍い橙色	〃	〃	
5688	〃	—	—	—	○外面に3条の貼り付け凸帯。キザミメは不詳。	〃	〃	〃	
5689	甕形土器	26.0	—	—	○体部外面粗いハケメ。	明赤褐色	〃	〃	
5690	壺形土器	—	12.6	—		鈍い橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5691	甕形土器	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線。	灰白色	細砂粒	良好	○外面煤。
5692	〃	—	—	—	○口縁部にキザミメ。体部外面ヘラガキ沈線	〃	粗砂粒	〃	〃
5693	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	〃
5694	〃	—	—	—	○外部ヘラガキ沈線。	明褐灰色	〃	〃	〃
5695	〃	—	—	—	○外部ヘラガキ沈線および刺突文。	褐灰色	細砂粒	〃	
5696	鉢形土器	—	—	—		鈍い黄橙色	粗砂粒	〃	
5697	壺形土器	—	6.8	—		淡褐灰色	〃	〃	
5698	甕形土器	—	7.0	—		浅黄橙色	細砂粒	〃	
5699	〃	—	9.0	—		鈍い赤褐色	粗砂粒	〃	

溝—158（第735図）

5700	深鉢形土器	(24.0)	—	(3.5)	○内外面ハケナデ。	黒褐色	白色小砂粒	良好	○外面煤付着。
5701	壺形土器	—	—	(4.0)	○内外面ヘラミガキ。	〃	細砂。雲母	〃	○外面黒斑。
5702	深鉢形土器	—	—	(8.0)	○外面条痕，内面ミガキ。口縁端キザミメ。	暗灰白色	石英。長石	〃	
5703	〃	(27.6)	—	(19.5)	○外面上位ハケナデ，下位ケズリ。	茶黒灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5704	〃	(19.0)	—	(4.5)	○外面タテハケメ，内面横位のハケメ。	暗黒褐色	〃	〃	〃
5705	〃	(17.2)	—	(4.7)	○外面タテハケメ，ハケメの上にヘラガキ。	黒褐色	〃	〃	〃
5706	〃	—	—	(4.5)	○外面縦位の鋭い沈線。	暗黒褐色	長石粒多い	〃	〃
5707	〃	—	—	(3.5)	〃	〃			〃
5708	〃	—	—	(4.8)	〃	〃			〃
5709	壺形土器	—	—	(4.0)	○外面ヘラミガキ，内面ハケメ。	暗茶褐色	白色小砂粒	良好	○内傾接合。
5710	甕形土器	—	—	(6.5)	○外面縦位のヘラミガキ，内面ヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
5711	〃	—	—	(3.9)	○口縁平坦部ヨコナデ。	暗茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5712	〃	—	—	(9.5)	○口縁端部キザミメ。凸帯剝落。	暗灰色	〃	〃	〃
5713	〃	(33.0)	—	(15.5)	○内外面極細のハケメ，口縁内外面ヨコナデ。	暗灰褐色	〃	〃	〃

溝—158（第736図）

5714	壺形土器	12.2	8.2	23.6	○ケズリダシ凸帯，内面下半ハケメ。	黒褐色	白色小砂粒	良好	○頸部に2孔。

溝—159（第737図）

5715	壺形土器	16.2	—	(19.0)	○胴部内面指頭ナデ。	黄灰褐色	白色小砂粒	良好	○黒斑。
5716	〃	—	—	(3.0)		灰白色	〃	〃	
5717	〃	—	—	(2.1)		淡灰茶色	〃	〃	
5718	甕形土器	—	—	(2.0)	○内面指頭圧痕。	灰茶色	〃	〃	

溝—160（第739図）

5719	壺形土器	13.7	6.7	25.5	○粘土紐接合痕をとどめる。外傾接合。	淡灰茶色	白色小砂粒	良好	○完形品。黒斑。

溝—161（第740図）

5720	甕形土器	—	—	(1.7)		黄橙色	白色小砂粒	良好	
5721	〃	—	—	(3.5)	○タテハケ後に沈線。	橙色	〃	〃	

溝—162（第743・744図）

5722	深鉢形土器	—	—	(3.5)		淡灰茶色	雲母	良好	
5723	〃	—	—	—	○屈曲部に押引き。	〃	石英粒多い	〃	○磨滅。
5724	壺形土器	(13.6)	—	(3.1)		橙色	長石粒	〃	
5725	〃	(28.5)	—	(7.0)	○内面押圧。	灰茶色	白色小砂粒	〃	○5731と同一個体か？
5726	〃	—	—	(5.0)	○外面押圧。	茶灰色	〃	〃	
5727	〃	—	—	(10.0)	○内面ハケメ単位幅3cm。	灰白色	〃	〃	
5728	〃	(18.8)	—	(2.8)	○内面円滑な仕上げ。	〃	〃	〃	
5729	〃	—	—	(3.2)	○ケズリダシ凸帯。	茶灰色	〃		
5730	〃	—	—	(4.0)	○内外面ヘラミガキ。	灰茶色	精製粘土	〃	○弥生時代中期。
5731	〃	(27.1)	—	(4.3)		暗茶褐色	白色小砂粒	〃	○5725と同一個体か？
5732	〃	—	—	(9.2)	○内面ハケ状のミガキ。	〃	〃	〃	
5733	〃	—	—	(15.2)	○貼り付け凸帯。	黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5734	〃	—	—	(11.0)	○内面極細のハケメ。	灰茶色	〃	〃	
5735	〃	—	(16.0)	(12.0)	○内面円滑な仕上げ。	暗茶灰色	〃	〃	○内面剝落。
5736	〃	—	—	(2.6)		〃	〃	〃	○内外面剝落

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5737	壺形土器	—	—	(2.8)		橙色	白色小砂粒	良好	
5738	甕形土器	—	(8.0)	(3.1)	○底部の造りが厚い。凸底。	〃	〃	〃	
5739	壺形土器	—	10.9	(5.2)		黄橙色	〃	〃	○底部に擦痕。
5740	〃	—	(17.2)	(3.8)	○外面底周縁は円滑。	灰白色	〃	〃	○黒斑。
5741	甕形土器	(38.5)	—	(7.4)	○内面指頭圧後にヘラミガキ。	〃	〃	〃	
5742	〃	(38.5)	—	(6.2)	○口縁部内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	
5743	〃	—	—	(2.5)		橙色	〃	〃	
5744	〃	—	—	(3.4)		〃	〃	〃	
5745	〃	—	—	(2.5)	○接合部が目立つ。	茶褐色	〃	〃	
5746	〃	—	—	(4.0)			〃	〃	
5747	〃	—	—	(4.3)	○キザミメが単位になる。	茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5748	〃	—	—	(4.2)	○内面ヘラミガキ。	暗茶褐色	〃	〃	
5749	〃	—	—	(6.9)		〃	〃	〃	○外面煤付着。
5750	壺形土器	—	—	(6.0)	○内面極細のハケメ。	〃	〃	〃	
5751	甕形土器	—	—	(5.8)		鈍い橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5752	〃	—	—	(5.4)	○内面極細のハケメ。	暗茶褐色	〃	〃	〃
5753	〃	—	—	(4.3)	○内面円滑。	黄橙色	〃	〃	
5754	〃	—	—	(4.0)		〃	雲母を含む	〃	
5755	蓋形土器	—	—	(4.2)		灰白色	白色小砂粒	〃	

溝—163（第745図）

5756	壺形土器	—	—	—		鈍い橙色	白色小砂粒	良好	
5757	〃	—	—	—		乳灰白色	〃	〃	
5758	〃	—	—	—	○8条のヘラガキ沈線。	暗黄白色	〃	〃	
5759	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
5760	〃	—	—	—	○貼り付け凸帯。	淡褐灰色	〃	〃	
5761	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線。	灰白色	〃	〃	
5762	〃	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
5763	甕形土器	(23.4)	—	—		暗黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5764	〃	(16.0)	—	—	○11条のヘラガキ沈線。	褐灰色	〃	〃	〃
5765	〃	—	—	—	○7条のヘラガキ沈線。	乳白色	〃	〃	
5766	〃	—	—	—		褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5767	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	〃
5768	鉢形土器	—	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
5769	壺形土器	—	7.6	—		灰白色	〃	〃	
5770	〃	—	9.4	—		黄橙色	〃	〃	
5771	甕形土器	—	7.8	—	○磨滅のため調整不詳。	鈍い橙色	〃	〃	
5772	〃	—	7.8	—		褐灰色	〃	〃	
5773	〃	—	7.4	—		灰白色	〃	〃	○内外面煤付着。
5774	〃	—	7.0	—		鈍い黄橙色	〃	〃	○底部に擦痕。
5775	〃	—	7.0	—		灰白色	〃	〃	

溝—164（第746～748図）

5776	壺形土器	—	13.2	—	○頸部ヘラガキ沈線。	灰白色	細砂	良好	
5777	〃	—	11.8	—		〃	〃	〃	
5778	〃	15.0	—	—	○口唇部に刺突文。	鈍い橙色	粗砂粒	〃	
5779	〃	31.0	—	—	○口縁部内面に貼り付け凸帯文。	暗赤褐色	〃	〃	
5780	〃	—	—	—	○頸部にヘラガキ沈線。	暗黄橙色	〃	〃	
5781	〃	—	—	—	○外面に4本の浅いヘラガキ沈線。	赤褐色	〃	〃	
5782	〃	—	—	—	○外面に7本のヘラガキ沈線。	暗赤褐色	〃	〃	
5783	〃	—	—	—	○外面にヘラガキ沈線。	暗黄橙色	〃	〃	
5784	〃	9.0	—	—	○頸部内部にシボリ痕跡。	褐灰色	〃	〃	
5785	〃	—	—	—	○外面に棒状浮文，貼り付け凸帯文。	〃	〃	〃	
5786	〃	—	—	—	○2条の貼り付け凸帯にキザミメを施す。	暗褐灰色	〃	〃	
5787	〃	—	—	—	○外面6本の貼り付け凸帯および棒状浮文。	鈍い橙色	〃	〃	
5788	〃	—	—	—	○外面に4本のキザミメを持つ貼り付け凸帯。	赤褐色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5789	壺形土器	—	—	—	○ケズリダシ凸帯上に1本の沈線。	褐灰色	粗砂粒	良好	
5790	甕形土器	23.2	—	—	○口縁部は折り返し。	〃	〃	〃	
5791	〃	23.6	—	—	○浅いヘラガキ沈線。	灰白色	〃	〃	
5792	〃	24.4	—	—	○12本のしっかりしたヘラガキ沈線。	鈍い黄橙色	細砂粒	〃	
5793	〃	21.5	—	—	○16条の浅いヘラガキ沈線。	赤褐色	粗砂粒	〃	○外面煤付着。
5794	〃	23.6	—	—	○20本のヘラガキ沈線。	灰白色	〃	〃	
5795	〃	39.2	—	—	○口縁端部にキザミメ。17条のヘラガキ沈線。	〃	細砂粒	〃	
5796	〃	24.2	—	—	○外面ヘラミガキ。17条のヘラガキ沈線。	黒褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5797	〃	27.8	—	—		鈍い黄橙色	粗砂粒	〃	
5798	〃	26.6	—	—		灰白色	〃	〃	
5799	〃	21.4	—	—		褐灰色	細砂粒	〃	○外面煤付着。
5800	〃	20.0	—	—		橙色	粗砂粒	〃	
5801	〃	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。	灰白色	〃	〃	
5802	〃	—	—	—	○内部ナデアゲ。4本のヘラガキ沈線。	淡褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5803	〃	—	—	—	○しっかりしたヘラガキ沈線。	褐灰色	〃	〃	
5804	〃	—	—	—	○10本のしっかりしたヘラガキ沈線。	灰白色	〃	〃	
5805	〃	—	—	—	○10本のヘラガキ沈線。	浅黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5806	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線。	鈍い橙色	〃	〃	
5807	〃	—	—	—	○しっかりしたヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	
5808	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線。	浅黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5809	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ、内面ハケメ。	褐灰色	粗砂粒	〃	
5810	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線および刺突文。	鈍い黄橙色	〃	〃	
5811	〃	—	—	—	〃	灰白色	〃	〃	○外面煤付着。
5812	〃	—	—	—	〃	鈍い黄橙色	細砂粒	〃	〃
5813	〃	—	—	—	○外部ヘラガキ沈線、波状文。	〃	粗砂粒	〃	〃
5814	蓋形土器	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
5815	壺形土器	—	11.4	—	○底部外面に糸痕。	赤橙色	〃	〃	
5816	甕形土器	—	8.0	—		褐灰色	細砂粒	〃	
5817	〃	—	7.4	—		淡褐灰色	粗砂粒	〃	
5818	〃	—	7.3	—		灰黄橙色	〃	〃	
5819	〃	—	6.0	—	○底部外面に糸痕。	黄褐灰色	〃	〃	
5820	〃	—	7.1	—		鈍い橙色	〃	〃	○内面煤付着。
5821	〃	—	7.0	—		褐灰色	〃	〃	
5822	〃	—	6.3	—		〃	〃	〃	
5823	〃	—	7.0	—		黄灰白色	〃	〃	○内面煤付着。
5824	〃	—	6.2	—		鈍い橙色	〃	〃	
5825	〃	—	7.5	—		乳灰白色	〃	〃	○内面煤付着。
5826	〃	—	7.5	—		鈍い黄橙色	〃	〃	
5827	〃	—	8.8	—	○内面ヘラミガキ。	褐灰色	〃	〃	
5828	〃	—	6.5	—		鈍い橙色	〃	〃	
5829	〃	—	5.9	—	○底部焼成穿孔。	淡赤褐色	〃	〃	
5830	〃	—	6.4	—		鈍い橙色	〃	〃	
5831	〃	—	6.6	—	○円孔は1個のみ残存。	鈍い黄橙色	〃	〃	

包含層（第750・751図）

5832	壺形土器	(15.7)	—	(3.0)		褐灰色	白色小砂粒	良好	○内外面剥落。
5833	〃	(13.5)	—	(4.3)	○ケズリダシ凸帯。	〃	〃	〃	
5834	〃	—	8.8	(31.0)	○外面ハケメ後ヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
5835	〃	10.0	—	(3.4)		暗褐灰色	〃	〃	
5836	〃	—	—	(3.3)		灰白色	〃	〃	
5837	〃	—	—	(4.0)		〃	〃	〃	
5838	〃	—	—	(3.5)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5839	〃	—	—		○内面ヨコハケ。	〃	〃	〃	
5840	〃				○内面円滑。	橙色	〃	〃	
5841	〃					灰白色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5842	壺形土器	—	—	(4.3)		灰白色	白色小砂粒	良好	
5843	〃	—	—	(6.7)	○外面わずかに段，ケズリダシ凸帯。	鈍い黄橙色	〃	〃	
5844	〃	—	—	(3.8)		〃	〃	〃	
5845	〃	—	—	(5.1)		灰白色	〃	〃	
5846	〃	—	—	(4.9)	○外面2条の貼り付け凸帯。	褐灰色	〃	〃	
5847	〃	—	5.9	(4.0)	○内面ハケメか？	暗褐灰色	〃	〃	
5848	甕形土器	(25.1)	—	(5.5)		鈍い橙色	〃	〃	
5849	〃	23.9	7.0	27.2	○外面16～17条のヘラガキ沈線。内面ユビナデ。	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
5850	〃	(20.8)	—	(9.4)	○1本ずつ引いた8条のヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	〃
5851	〃	(21.8)	—	(9.4)		鈍い橙色	〃	〃	〃
5852	〃	—	—	(6.2)		鈍い黄橙色	〃	〃	〃
5853	〃	—	—	(5.2)		褐灰色	〃	〃	
5854	〃	—	—	(6.0)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5855	〃	—	—	(2.1)		灰白色	〃	〃	
5856	〃	—	—	(3.8)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5857	〃	—	—	(4.7)	○外面11条のヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	
5858	〃	—	—	(4.0)		褐灰色	〃	〃	
5859	〃	—	—	(3.2)		灰白色	〃	〃	○黒斑。
5860	〃	—	—	(3.0)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5861	〃	—	—	(6.0)	○外面8条のヘラガキ沈線。	黄褐灰色	〃	〃	○口縁剝落。
5862	〃	—	—	(2.6)		灰白色	〃	〃	○黒斑。
5863	〃	—	—	—					
5864	〃	—	—	(5.6)		鈍い橙色	白色小砂粒	良好	
5865	〃	—	—	(2.5)		褐灰色	〃	〃	
5866	〃	—	—	(3.5)		〃	〃	〃	○鉢か？
5867	〃	—	—	(4.2)		赤橙色	〃	〃	
5868	〃	—	—	(4.0)	○外面に6条の鋭く深い沈線。	褐灰色	〃	〃	
5869	〃	—	—	(4.5)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5870	〃	—	—	(3.7)		褐灰色	〃	〃	
5871	〃	—	—	(4.5)		〃	〃	〃	
5872	〃	(20.0)	—	(7.1)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5873	〃	—	—	(16.5)			白色小砂粒	良好	
5874	〃	(9.7)	—	(3.0)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5875	〃	—	—	(2.6)		灰白色	〃	〃	
5876	〃	—	—	(3.7)		鈍い黄橙色	〃	〃	
5877	〃	—	—	(4.4)		〃	〃	〃	
5878	鉢形土器	(17.5)	—	(2.0)		灰白色	〃	〃	
5879	—	—	—	(1.7)		浅黄橙色	〃	〃	
5880	鉢形土器	—	—	(3.6)		灰白色	〃	〃	

土壙—265（第754図）

5581	甕形土器	—	3.4	(2.5)		茶灰色	白色小砂粒	良好	

溝—171（第759～761図）

5882	壺形土器	28.2	—	(10.0)	○内面ヘラミガキ。	橙色	白色小砂粒	良好	
5883	〃	(14.1)	—	(7.3)	○キザミメ貼り付け凸帯，ヨコナデ。	淡黄暗褐色	〃	〃	
5884	〃	14.6	—	(5.8)	○内外面ヨコナデ。	淡黄暗灰褐色	〃	〃	
5885	〃	(18.4)	—	(6.5)		淡黄黒褐色	〃	〃	
5886	〃	(12.7)	—	(6.3)	○内面指頭圧の上にヨコナデ。	淡黄白灰褐色	〃	〃	
5887	〃	(17.5)	—	(6.7)	○外面頸部クシガキ。	暗茶褐色	〃	〃	
5888	〃	—	—	—		黄橙色	〃	〃	
5889	蓋形土器	—	—	(3.0)		黒灰色	〃	〃	○突起部に手擦。
5890	甕形土器	—	—	(14.0)	○外面タテハケ後ヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	
5891	〃	(16.4)	—	(2.1)	○内面横位のヘラミガキ。	淡黄白褐色	〃	〃	
5892	〃	(16.2)	—	(2.1)	○口縁外面凹線文。	暗茶褐色	〃	〃	
5893	〃	(17.0)	—	(2.1)		〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5894	壺形土器	—	—	(8.4)	○内外面縦位の極細ハケメ。	茶褐色	白色小砂粒	良好	
5895	〃	—	—	(9.8)		褐色	〃	〃	
5896	〃	—	—	(6.1)		暗灰白色	〃	〃	
5897	〃	—	—	(6.7)		〃	〃	〃	
5898	鉢形土器	(7.6)	—	(5.2)		暗茶黒褐色	〃	〃	
5899	甕形土器	(17.8)	—	(3.0)	○口縁部に2本の凹線。内面ナデ。	淡黄白褐色	〃	〃	
5900	高杯形土器	(16.2)	—	(3.3)	○外面底位部にヨコナデ。	暗灰色	〃	〃	
5901	台付鉢形土器	—	9.4	(7.1)	○円板充填。	白灰褐色	〃	〃	○黒斑。
5902	壺形土器	—	(9.9)	(3.7)	○底部外面にハケメ。	茶灰色	〃	〃	
5903	〃	—	6.2	(3.6)	○外面極細のハケメ。	茶褐色	〃	〃	○弥生時代前期か？
5904	〃	—	12.6	(4.0)		〃	〃	〃	
5905	〃	—	(10.2)	(3.6)	○外面底位部にナデ。	淡黄灰褐色	〃	〃	
5906	〃	—	(16.1)	(4.9)	○底部外面は極細のハケメ。	白灰褐色	〃	〃	○黒斑。
5907	甕形土器	61.5	—	(30.5)	○外面縦ハケ後にクシガキ波状文。	黄橙色	〃	〃	○5908と同一個体か？
5908	〃	—	9.4	(13.5)	○外面底部へラミガキ。	〃	〃	〃	
5909	〃	(17.3)	—	(16.8)	○口縁部内外面一部ヨコナデ。	鈍い橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5910	〃	(18.7)	—	(5.5)		暗茶褐色	〃	〃	〃
5911	〃	(20.9)	—	(7.9)	○口縁部外面ヨコナデ。	黒褐色	〃	〃	〃
5912	〃	(17.6)	—	(6.6)	○口縁部内外面一部ヨコナデ。	鈍い橙色	〃	〃	
5913	〃	(18.7)	—	(5.6)	○口縁部内面ヨコナデ後にへラミガキ。	暗茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5914	〃	(15.1)	—	(6.0)	○口縁部内面へラミガキ後ヨコナデ。	淡灰白色	〃	〃	
5915	〃	(15.0)	—	(4.3)		灰白色	〃	〃	○外面煤付着。
5916	〃	(19.7)	—	(2.6)	○口縁部内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	○内外面煤付着
5917	〃	—	6.4	(4.9)	○外面底部極細のハケメ。	〃	〃	〃	○内面ススケ。
5918	〃	—	5.7	(6.6)	○外面底部極細のハケメ、底部穿孔。	暗灰褐色	〃	〃	〃
5919	〃		5.9	(6.9)	〃	黒灰色	〃	〃	〃
5920	〃	—	5.5	(10.5)	〃	〃	〃	〃	〃
5921	〃	17.7	—	(6.7)		暗灰茶褐色	〃	〃	
5922	〃	(23.0)	—	(7.3)	○口縁部内外ヨコナデ。	黒褐色	〃	〃	○内外面煤付着。
5923	〃	33.8	—	(6.6)	○口縁部外面ヨコナデ。	淡灰褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5924	〃	(14.2)	—	(4.6)		灰白色	〃	〃	
5925	〃	(16.3)	—	(3.2)		鈍い橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5926	〃	(21.2)	—	(7.6)		〃	〃	〃	
5927	〃	—	—	(8.5)		黒褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5928	〃	—	4.7	(7.3)		暗灰褐色	〃	〃	○内面煤付着。
5929	〃	—	4.4	(9.9)	○外面底位部ヨコナデ。	暗灰色	〃	〃	〃
5930	〃	—	6.1	(7.2)		灰茶褐色	〃	〃	〃
5931	〃	—	5.2	(6.7)		黒灰色	〃	〃	○鈍重な感じ。
5932	〃	—	(9.2)	(11.8)	○内面ハケメ、ハケメ幅2.8cm。	〃	〃	〃	
5933	〃	—	5.4	(10.6)	○内面底ユビナデ。	灰白色	〃	〃	
5934	〃	—	(8.4)	(12.0)		黄橙色	〃	〃	○内面煤付着。
5935	—	—	9.2	(10.8)		暗茶褐色	〃	〃	○火を受ける。
5936	甕形土器	—	8.7	(5.6)	○外面低位部指頭圧の上にへラミガキ。	淡黄赤褐色	〃	〃	○黒斑。
5937	〃	—	(9.5)	(4.3)		橙色	〃	〃	○内面煤付着。
5938	〃	—	(7.2)	(5.0)		暗灰色	〃	〃	
5939	壺形土器	—	5.4	(4.0)	○外面低位部ヨコナデ。	暗灰褐色	〃	〃	
5940	〃	—	(6.8)	(4.1)		淡灰褐色	〃	〃	
5941	〃	—	8.2	(4.0)		暗褐色	〃	〃	○内面煤付着。

溝—172・173（第762）

5942	壺形土器	—	5.5	(12.0)		淡黄暗灰褐色	白色小砂粒	良好	○胴部黒斑。
5943	〃	—	7.9	(6.3)	○外面低位部ヨコナデ、底は極細のナデ。	黒灰褐色	〃	〃	
5944	甕形土器	(17.8)	—	(3.5)		橙色	〃	〃	
5945	〃	—	(6.1)	(5.5)	○内面円滑仕上げ。	淡黄灰褐色	〃	〃	
5946	台付鉢形土器	—	10.5	6.9	○円板充填。	橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5947	高杯形土器	23.7	—	(6.7)		淡黄暗灰褐色	白色小砂粒	良好	

溝—172・173（第763・765図）

5948	浅鉢形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	淡灰色	細砂	良好	
5949	〃	—	—	—	〃	灰色	〃	〃	
5950	鉢形土器	(32.1)	10.5	17.0		暗灰白色	白色小砂粒	〃	○内面底に擬痕。
5951	壺形土器	—	—	—	○内面に三条の貼り付け凸帯。	暗茶灰色	〃	〃	
5952	〃	—	—	—	○外面に三条の貼り付け凸帯。	橙色	〃	〃	
5953	〃	—	—	(5.6)	○外面キザミメ貼り付け凸帯。	黄橙色	〃	〃	○黒斑。
5954	〃	(13.2)	—	(3.3)	○外面頸部に非常に細いヘラガキ沈線。	鈍い橙色	〃	〃	
5955	〃	(15.1)	—	(5.6)		茶褐色	〃	〃	
5956	〃	—	8.7	(4.1)	○内外面ハケメ。外面底もハケメ。	黒褐色	〃	〃	
5957	甕形土器	—	—	(5.9)	○内面は円滑に仕上げ。	黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
5958	〃	—	—	(3.0)		暗灰褐色	〃	〃	
5959	〃	—	—	(7.3)	○ハケ状工具に近い沈線。	暗茶褐色	〃	〃	
5960	鉢形土器	(46.4)	—	(14.5)	○外面ヨコハケ。	黄橙色	〃	〃	
5961	甕形土器	(31.8)	—	(8.6)	○一単位1.8cm幅のクシガキ沈線。内面ハケメ。	橙色	〃	〃	
5962	壺形土器	—	—	(6.4)	○内外面斜位のハケメ。	暗灰褐色	〃	〃	
5963	甕形土器	(19.5)	—	(6.2)	○内面ハケメ上をヘラミガキ。	橙色	〃	〃	
5964	〃	(19.6)	—	(4.5)	○内面ミガキ後ナデ。	黄橙色	〃	〃	
5965	壺形土器	—	(7.3)	(4.5)	○内面ハケメ、ケズリ状痕跡。	茶褐色	〃	〃	
5966	甕形土器	(23.0)	—	(15.8)	○外面胴部は櫛状工具による刺突文。	暗灰茶褐色	〃	〃	
5967	〃	(15.1)	—	(6.3)	○内面ナデの上にヘラミガキ。	暗茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
5968	壺形土器	—	9.0	(4.1)		白灰淡褐色	〃	〃	
5969	甕形土器	—	7.6	(18.0)		鈍い橙色	〃	〃	
5970	壺形土器	7.2	—	(11.3)	○外面肩部貝殻腹縁文。内面極細のナデ。	橙色	〃	〃	
5971	甕形土器	—	12.0	(4.8)	○内面指頭ナデ。	褐色	〃	〃	○内外面煤付着。
5972	〃	—	6.0	(4.1)	○外傾接合。	橙色	〃	〃	
5973	〃	—	(7.9)	(3.4)		〃	〃	〃	○内面煤付着。
5974	〃	—	5.1	(4.8)		鈍い橙色	〃	〃	○底部穿孔。
5975	高杯形土器	(28.1)	—	(2.9)	○口縁端部凹線。	黄橙色	〃	〃	○混入か？

溝174・175（第766図）

5976	甕形土器	(17.0)	—	(4.2)		淡黄白灰褐色	白色小砂粒	良好	
5977	〃	—	(4.9)	(4.7)		橙色	〃	〃	

包含層（第769図）

5978	壺形土器	10.8	—	3.7		灰白色	白色小砂粒	良好	
5979	〃	(17.0)	—	(2.1)		淡茶褐色	〃	〃	
5980	〃	—	—	(5.6)		灰白色	〃		

土壙—269（第773図）

5981	甕形土器	14.6	—	(8.0)	○外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	灰白色	白色小砂粒	良好	
5982	〃	—	5.9	(9.6)		〃	〃	〃	
5983	〃	16.9	—	(8.3)		鈍い黄橙色	〃	〃	

溝—178～184（第777図）

5984	高杯形土器	(19.0)	—	(7.9)	○内外面ヘラミガキ。	灰白色	白色小砂粒	良好	
5985	〃	—	(11.3)	(3.3)	○4孔。	橙色	〃	〃	
5986	壺形土器	(19.7)	—	(2.4)		〃	〃	〃	
5987	〃	(13.3)	—	(9.2)	○内面ヘラケズリは深くえぐっている。	〃	〃	〃	
5988	〃	(29.4)	—	(5.4)	○内面ハケメ。	〃	〃	〃	
5989	甕形土器	(13.8)	—	(3.2)		灰白色	〃	〃	
5990	壺形土器	(12.0)	—	(2.9)		暗灰褐色	〃	〃	
5991	鉢形土器	(16.1)	—	9.3	○内面ヘラケズリ後ナデ。	淡茶褐色	〃	〃	
5992	〃	(13.3)	—	(7.0)	○内面指頭ナデ。	橙色	〃	〃	
5993	高杯形土器	—	—	(4.8)	○脚内下半ヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5994	高杯形土器	—	—	(5.0)	○円板充填か。脚内シボリメ。	黄橙色	白色小砂粒	良好	
5995	〃	(15.1)	—	(4.1)	○丁寧な造り。	赤褐色	精製粘土	〃	
5996	〃	—	—	(5.6)	○脚穿孔上下で6孔。	灰白色	白色小砂粒	〃	
5997	〃	(9.8)	—	(6.1)		褐色	〃	〃	
5998	台付鉢形土器	—	3.8	(3.4)	○円板充填。	橙色	〃	〃	○製塩土器。
5999	甕形土器	—	—	(4.6)		黄橙色	〃	〃	
6000	台付甕形土器	—	(11.0)	(5.0)		灰白色	精製粘土	〃	
6001	甕形土器	—	4.5	(5.5)		淡茶褐色	白色小砂粒	〃	
6002	〃	—	3.7	(4.2)	○外面極細のハケメ。	橙色	〃	〃	

土器棺—1（第778図）

6003	甕形土器		(10.7)	(45.5)	○外面タタキメ後にハケメ。内面下位ユビナデ。	鈍い橙色	白色小砂粒	良好	

包含層（第779図）

6004	壺形土器	—	—	(6.1)		黄橙色	白色小砂粒	良好	
6005	〃	13.3	—	(3.2)		鈍い黄橙色	〃	〃	
6006	〃	16.2	—	(4.1)		黄橙色	〃	〃	○器面剝落。
6007	甕形土器	12.2	—	(5.1)	○頸部シボリメ。	淡褐灰色	〃	〃	
6008	〃	16.7	—	(5.8)		鈍い黄橙色	〃	〃	○外面煤付着。
6009	〃	—	—	(2.1)		灰白色	〃	〃	
6010	台付鉢形土器	—	4.6	(2.3)	○外面ヘラケズリ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
6011	〃	—	4.6	(3.1)	○円板充填。	淡緑灰色	〃	〃	○製塩土器。
6012	〃	—	4.6	(2.5)	〃	乳灰白色	〃	〃	
6013	甕形土器	(18.5)	—	(3.2)		黄橙色	〃	〃	
6014	〃	(17.5)	—	(2.9)		〃	〃	〃	
6015	〃	14.9	—	(3.2)	○口縁端2条の凹線。	乳灰白色	〃	〃	
6016	〃	14.5	—	(4.3)	○外反し垂れる口縁部。	淡褐灰色	〃	〃	
6017	〃	(14.2)	—	(4.1)		橙色	〃	〃	
6018	〃	12.9	—	(3.6)	○口縁端3条の凹線。	黄橙色	〃	〃	

「島状高まり」遺構—11（第784図）

6019	甕形土器	—	9.1	(14.3)	○内面凹状のヘラケズリ。	橙色	白色小砂粒	良好	

「島状高まり」遺構—12（第785図）

6020	甕形土器	(21.2)	(8.0)	(23.2)	○外面低位部指頭圧痕。	黄橙色	白色小砂粒	不良	○剝落が著しい。

「島状高まり」遺構—13（第788図）

6021	蓋形土器	5.1	—	(2.6)		暗茶褐色	金雲母多い	不良	○剝落が著しい。
6022	〃	7.3	—	(4.2)		黄橙色	白色小砂粒	良好	○黒斑、鈍重。
6023	甕形土器	—	7.5	(6.5)	○内面円滑な仕上げ。	暗黄褐色	〃	〃	
6024	〃	—	6.2	(5.1)		橙色	〃	〃	
6025	〃	—	—	(1.7)		黄橙色	雲母を含む	〃	
6026	高杯形土器	—	(13.0)	(3.4)	○外面細いヘラガキ沈線。	灰黄白色	白色小砂粒	〃	
6027	壺形土器	(9.6)	—	(4.2)		黄橙色	〃	〃	
6028	甕形土器	(14.6)	—	(3.0)		暗茶灰褐色	〃	〃	
6029	〃	(14.5)	—	(5.4)		褐色	精製粘土	〃	
6030	壺形土器	(21.1)	—	(5.2)		黄橙色	白色小砂粒	〃	
6031	甕形土器	—	—	(2.3)		黄橙色	〃	〃	
6032	〃	—	—	(4.8)		黄灰色	〃	〃	
6033	高杯形土器	—	—	(2.4)		橙色	〃	〃	
6034	〃	—	—	(3.7)		黄灰白色	〃	〃	

甑—1（第793図）

6035	鉢形土器	(14.3)	3.7	(8.5)		赤褐色	精製粘土	良好	○丹塗り。
6036	甕形土器	(14.4)	—	(8.3)	○内面指頭圧痕後ヘラケズリ。	橙色	白色小砂粒	〃	
6037	〃	(13.6)	—	(7.3)	○内面円滑なヘラケズリ。	〃	〃		○肩部に刺突文。
6038	〃	—	—	(2.1)		〃	精製粘土	〃	
6039	〃	—	5.0	(2.5)		褐色	白色小砂粒	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
6040	甕形土器	13.3	—	(9.7)	○口縁部5条のヘラガキ沈線。	暗灰褐色	白色小砂粒	良好	○外面煤付着。
6041	壺形土器	—	10.0	(9.7)		灰白色	〃	〃	○器面剝落。

井戸—31（第799図）

6042	甕形土器	13.7	—	25.3	○外面上位ハケメ，斜位より横位。	茶灰黒色	白色小砂粒	良好	○外面煤付着。

井戸—32（第801図）

6043	甕形土器	13.9	4.6	25.05	○口縁端部クシガキ沈線。				
6044	高杯形土器	—	—	(7.0)					
6045	〃	—	12.2	(2.5)					

井戸—33（第802図）

6046	壺形土器	(13.0)	—	(2.5)					
6047	甕形土器	(14.0)	—	(2.7)					

溝—218（第811図）

6048	杯蓋	12.3	—	4.6	○天井部内面青海波文タタキメ。	灰色	白色小砂粒	良好	○ロクロ回転左。
6049	〃	(13.8)	—	(2.6)		暗青灰色	〃	〃	○器壁セピア色。
6050		(14.6)	—	(3.5)		灰色	〃	〃	
6051	〃	(14.4)	—	(3.3)		灰白色	〃	〃	
6052	〃	(13.0)	—	(3.5)		〃	〃	〃	
6053	〃	(10.9)	—	(2.8)		〃	〃	〃	
6054	杯身	(11.5)	—	(2.4)		灰色	〃	〃	
6055	〃	(14.0)	—	(3.4)		〃	〃	〃	
6056	〃	(1.0)	—	(3.0)		〃	〃	〃	
6057	〃	(12.7)	—	(4.0)		灰白色	〃	〃	
6058	〃	(11.2)	—	(2.5)		〃	〃	〃	
6059	台付盤	—	9.9	(3.3)		〃	〃	〃	

溝—219（第812図）

6060	高杯形土器	(13.0)	—	(5.0)	○杯部内面底ハケメ。	明褐色	精製粘土	良好	
6061	〃	—	10.5	(8.2)	○脚部内面ヘラケズリ後ナデ。	黄灰褐色	〃	〃	
6062	杯蓋	(13.8)	—	(3.0)	○天井部稜線がカブリ風。	淡灰色	白色小砂粒	〃	

包含層（第813・814図）

6063	壺形土器	(18.0)	—	(5.0)		鈍橙色	白色小砂粒	良好	
6064	〃	(15.2)	—	(23.2)	○外面ハケメ。	淡黄色	〃	〃	
6065	〃	(15.4)	—	(4.8)	○内面ヘラケズリ。	暗黄褐色	〃	〃	
6066	〃	(15.3)	—	(5.8)	○内面頭部シボリメ。	暗茶褐色	〃	〃	
6067	〃	—	—	(10.1)	○外面ヘラミガキ，内面上位指頭圧痕。	黄淡茶褐色	精製粘土	〃	
6068	〃	—	(4.0)	(5.7)	○内面指頭圧痕。	暗褐色	白色小砂粒	〃	
6069	〃	—	(3.0)	—	○外面タタキ後ハケメ，内面指頭圧痕。	黄淡褐色	〃	〃	
6070	甕形土器	15.9	—	(13.5)	○内面ヘラケズリ。	黒灰茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
6071	〃	(12.5)	—	(2.5)	○口縁部内外面ヨコナデ。	鈍黄橙色	〃	〃	
6072	〃	(14.0)	—	2.8		〃	〃	〃	
6073	〃	(13.6)	—	(3.2)	○内面ヘラケズリ。	暗茶褐色	〃	〃	○外面煤付着。
6074	〃	(16.0)	—	(3.0)		淡灰褐色	〃	〃	
6075	〃	(14.7)	—	(3.0)	○口縁部8条のクシガキ沈線文。	鈍黄橙色	〃	〃	
6076	〃	(15.7)	—	(2.7)	○口縁部内外面ヨコナデ。	褐灰色	〃	〃	○庄内式。
6077	〃	(20.9)	—	(4.3)	○口縁端部に凹線。	鈍橙色	〃	〃	
6078	〃	14.0	3.5	18.8	○外面平行タタキ。内面ユビナデ。	暗茶褐色	〃	〃	
6079	鉢形土器	11.5	3.9	7.0	○口縁上端ユビオサエ。	白淡黄色	精製粘土	〃	
6080	〃	14.7	3.2	7.9	○外面タタキメ。	淡茶褐色	白色小砂粒	〃	○焼成前穿孔。
6081	〃	(10.6)	—	(6.2)		淡灰色	〃	〃	
6082	〃	11.1	1.9	7.2	○外面低位部ヘラケズリ。内面ハケメ圧痕。	鈍橙色	雲母を含む	〃	
6083	〃	—	—		○外面ヘラガキ沈線。	淡茶褐色	白色小砂粒	〃	
6084	高杯形土器				○内外面ヘラミガキ。	赤茶褐色	精製粘土	〃	
6085	有蓋高杯蓋	—	—			青灰色	白色小砂粒	〃	○ロクロ回転左。

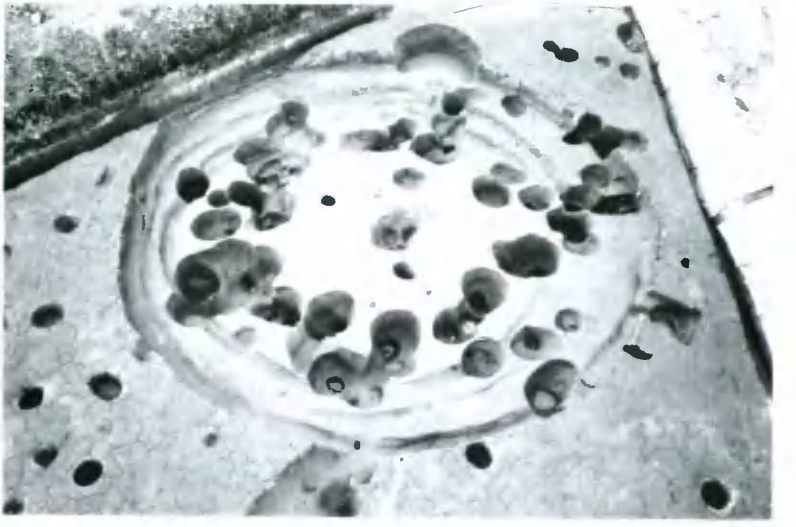
遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
6086	杯蓋	(13.8)	—	(3.4)		灰白色	白色小砂粒	良好	
6087	杯身	(14.2)	—	(4.2)		青灰色	〃	〃	
6088	〃	(12.8)	—	(3.1)		淡青灰色	〃	〃	
6089	〃	(12.5)	—	(4.1)		青灰色	〃	〃	
6090	〃	(12.3)	—	(3.0)		淡青灰色	〃	〃	
6091	〃	(11.3)	—	(3.7)		灰白色	〃	〃	
6092	〃	(10.5)	—	(3.3)		〃	〃	〃	
6093	〃	(10.2)	—	(3.6)	○口縁部内外面ヨコナデ。	淡青灰色	〃	〃	
6094	提瓶	(8.5)	—	(4.3)		灰色	〃	〃	
6095	蓋	(10.6)	—	(3.7)		青灰色	〃	〃	○ロクロ回転右。
6096	脚	—	(13.0)	(3.4)		淡灰色	〃	〃	
6097	甕	(13.5)	—	(4.3)		暗灰色	〃	〃	
6098	〃	(16.5)	—	(3.8)		〃	〃	〃	
6099	〃	—	—	(4.7)		青灰色	〃	〃	○外面釉。
6100	〃	—	—	(5.3)		〃	〃	〃	○細筋青海波文。
6101	壺形土器	(22.1)	—	(3.0)	○内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	
6102	杯身	—	(10.3)	(1.2)		灰色	〃	〃	
6103	〃	—	(9.4)	(3.7)		淡灰色	精製土に近い	〃	
6104	〃	—	9.7	(1.4)		淡青灰色	白色小砂粒	〃	○ロクロ回転右。
6105	〃	—	(7.5)	(2.3)	○外面カキメ。内面底仕上げナデ。	青灰色	〃	〃	
6106	〃	(13.8)	(8.9)	(4.2)	○ヘラキリ未調整。体部内外面火ダスキ。	灰白色	〃	〃	
6107	蓋	(8.2)	—	(5.0)		灰色	〃	〃	
6108	皿	—	—	(2.2)		黄緑灰色	精製粘土	〃	
6109	椀	—	6.6	(1.5)	○内面底ユビナデ。	黄橙色	白色小砂粒	〃	○早島式土器。
6110	小皿	(9.9)	(8.6)	(1.5)		淡黒色	〃	〃	○瓦器。
6111	碗	(12.7)	—	(3.6)	○ヘラガキの細蓮弁文。薄い釉薬。	淡緑灰色	精製粘土	〃	○青磁。貫入。
6112	〃	—	4.1	(2.4)	○外面底を除いて釉薬。	明緑灰色	〃	〃	○白磁。
6113	皿	—	4.3	(0.8)	○外面底に筋が入る。	淡緑灰色	〃	〃	○青磁。
6114	碗	—	(5.0)	(1.6)		〃	〃	〃	〃
6115	擂鉢	—	—	(5.4)		茶褐色	白色小砂粒	〃	○備前焼。
6116	〃	—	—	(9.4)	○カキメ11本。	青灰色	〃	〃	〃
6117	〃	32.9	—	(4.3)		茶褐色	〃	〃	○備前焼。胡麻。
6118	壺	—	—	(7.0)		〃	〃	〃	〃
6119	丸瓦	—	—	—		灰白色	〃	〃	○剝離痕。

1．中須賀調査区 9 ～ 11　弥生時代遺構（北西から）

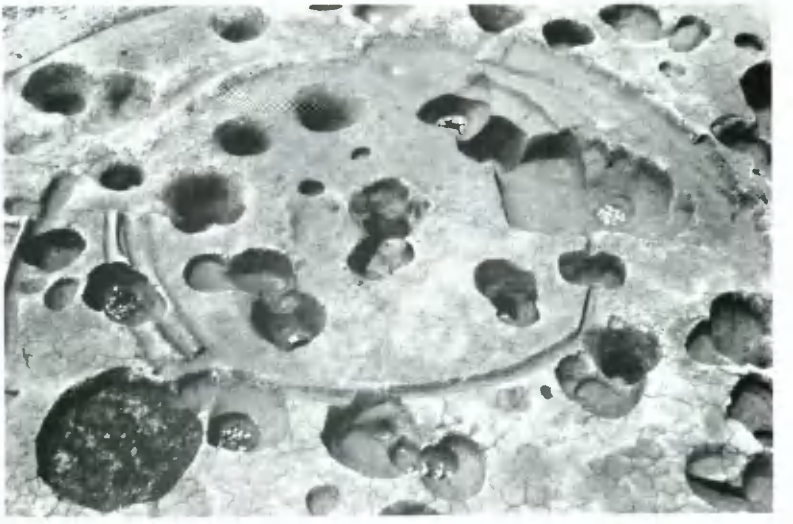
2．中須賀調査区11～12　弥生時代遺構（南から）

図版 2

1．竪穴式住居－7（南西から）



2．竪穴式住居－16（南東から）



1．竪穴式住居－13（東から）

2．竪穴式住居－14（西から）

図版 4

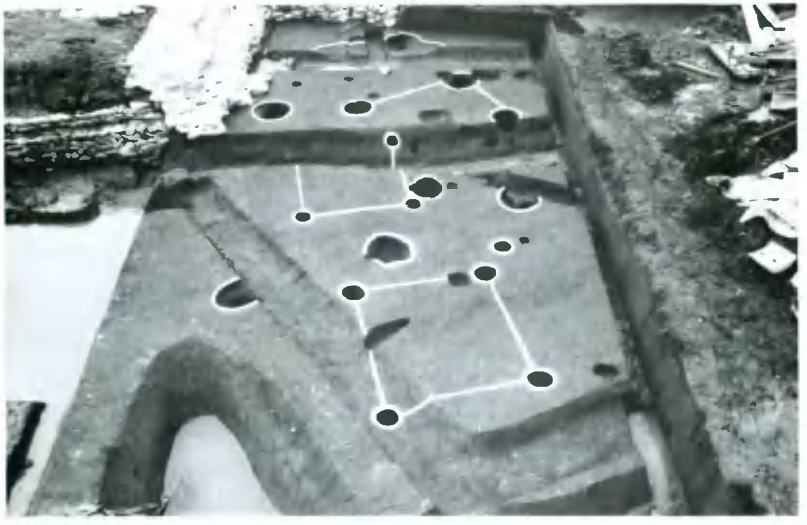
1．竪穴式住居－24（南東から）

2．竪穴式住居－26（南西から）

1．土　壙－2（南から）

2．土　壙－49（南東から）

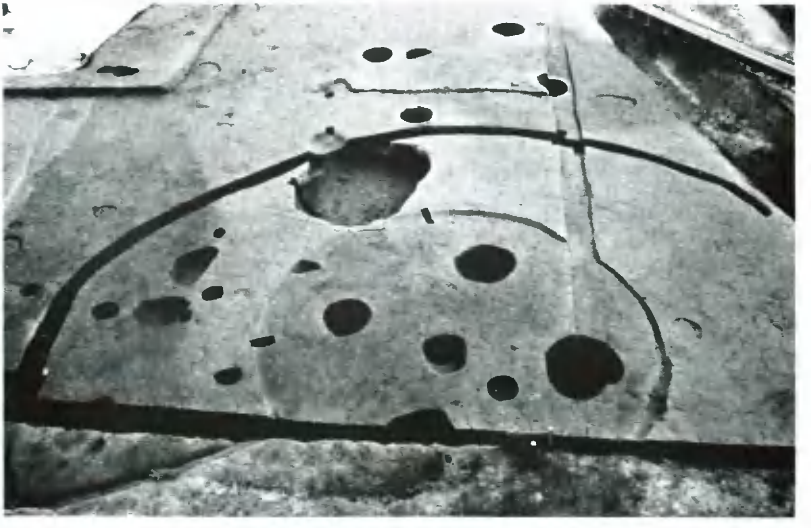
図版 6



1．建　物－4・5・6（北西から）

2．丸田調査区（竪穴式住居・井戸）遺構検出状況（南東から）

1．竪穴式住居－29・34（南から）

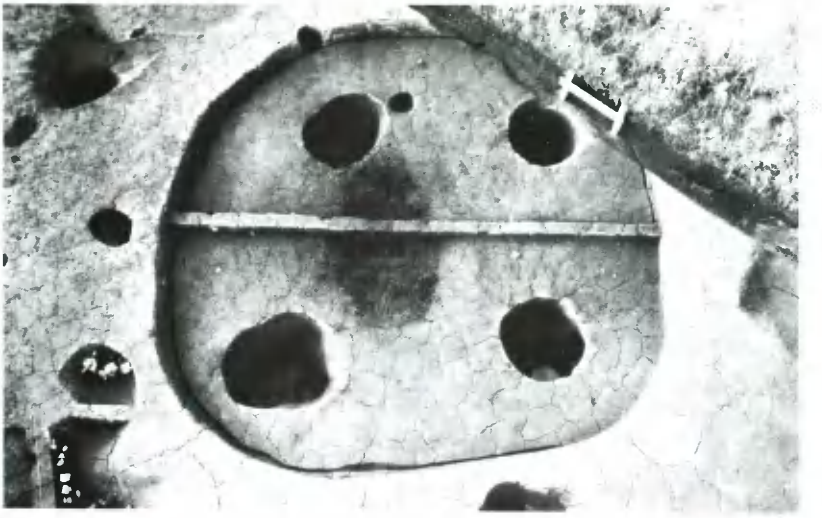


2．竪穴式住居－30（北から）

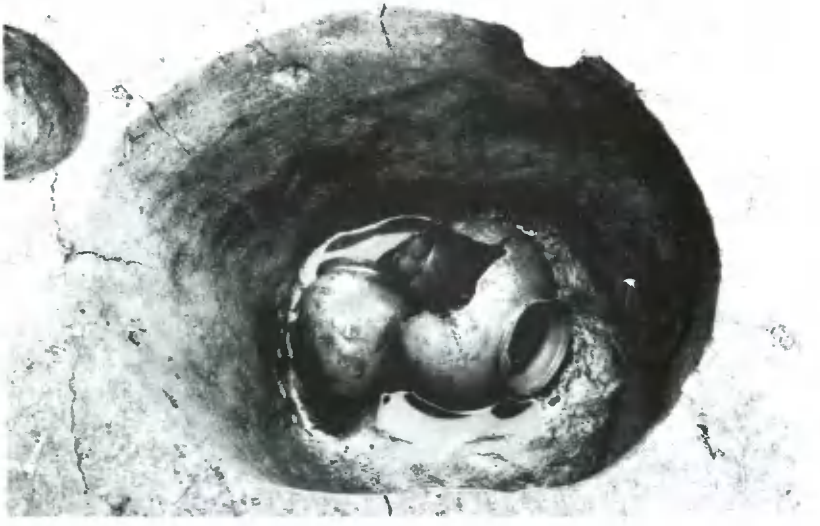
図版 8

1．竪穴式住居－34（南から）

2．竪穴式住居－35（南から）



1．竪穴式住居－36（南東から）



2．竪穴式住居－36　P－3（西から）

図版10

1．竪穴式住居－40（南から）

2．竪穴式住居－40　床面敷石（西から）

1．竪穴式住居－41（南から）

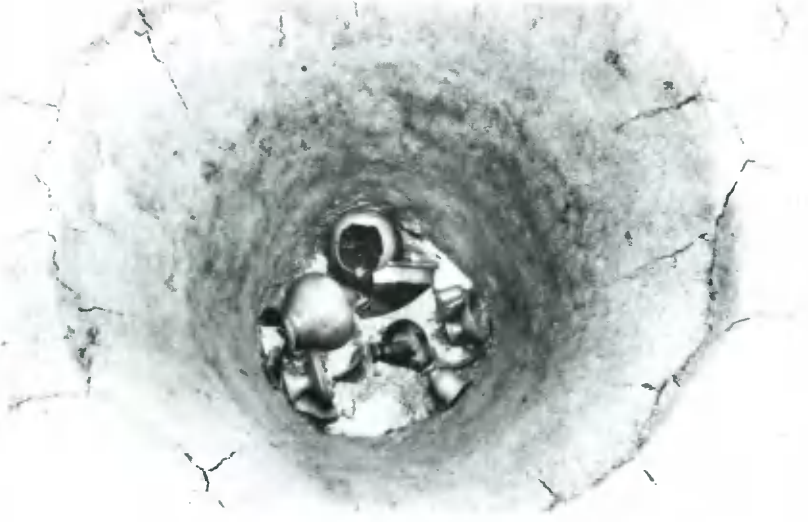
2．竪穴式住居－42（西から）

図版12

1．竪穴式住居－43（南から）

2．竪穴式住居－43　かまど（東から）

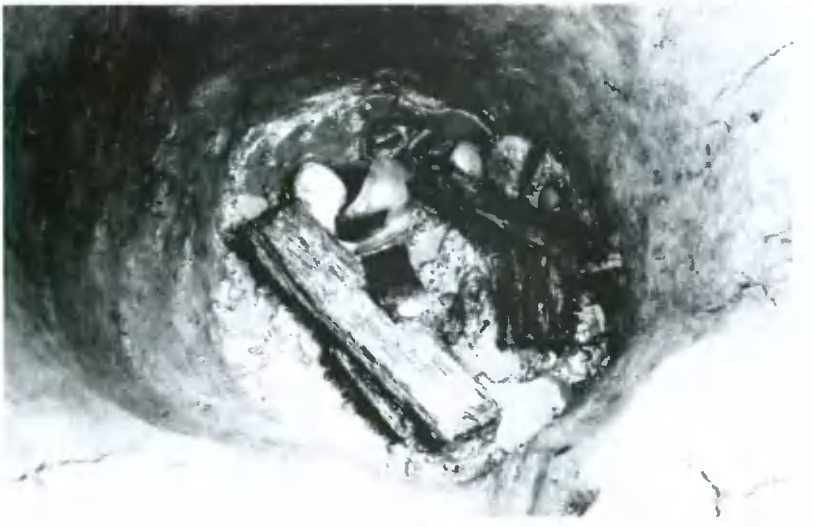
1．井　戸－11（東から）



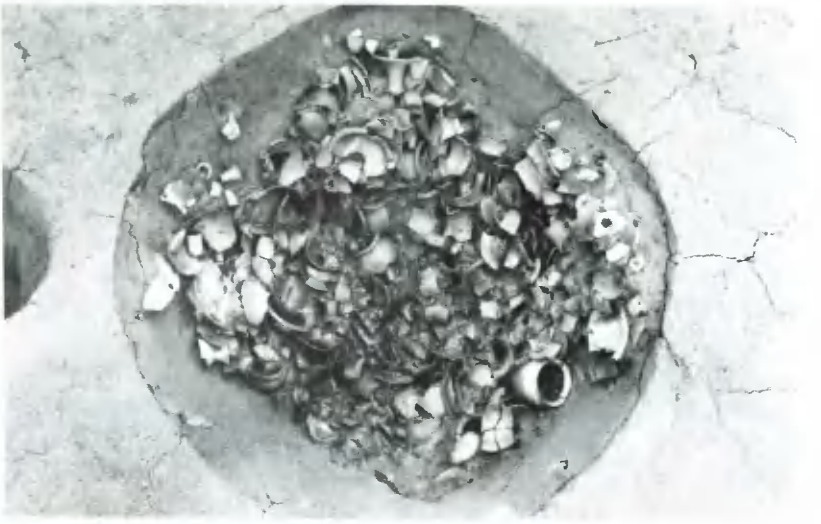
2．井　戸－17（南から）

図版14

1．井　戸－15　遺物出土状態（東から）



2．井　戸－15　下層遺物出土状態（東から）

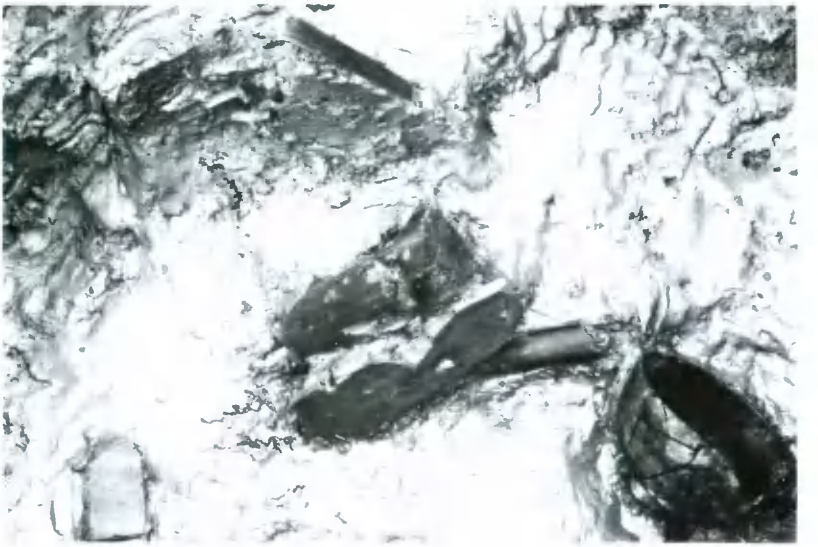


1．井　戸－16　土器埋積状況（西から）

2．井　戸－16　下層遺物出土状態（北から）

図版16

1．井　戸－30　検出状況（北から）



2．井　戸－30　木簡・足駄・漆塗椀出土状態（南西から）

1．土　壙－126（南から）

2．土　壙－155（東から）

図版18

1．溝－41～43（北から）

2．溝－41　土層断面（南から）

1．E－15～17　弥生時代後期水田（北から）

2．溝－41からの取水口（水田取水口）（北から）

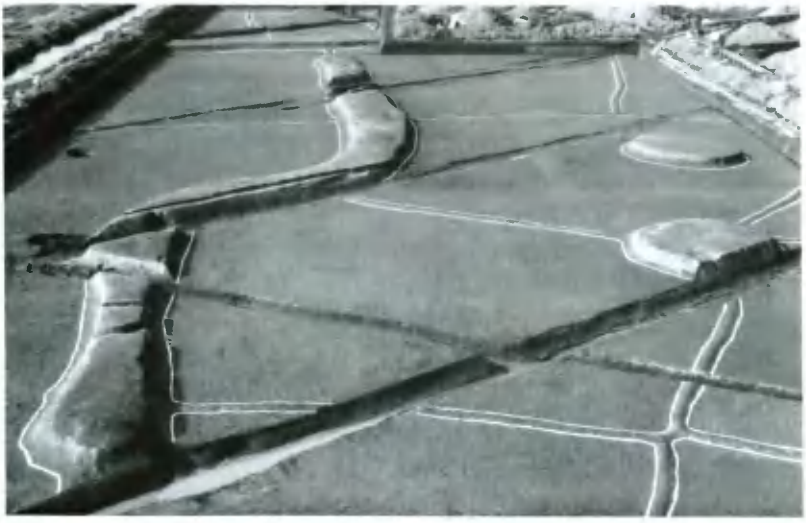
図版20

1．E－22～24　弥生時代後期水田（南東から）

2．「島状高まり」遺構－1　外周溝（北西から）

川内調査区　弥生時代後期水田（航空写真）

図版22



1．川内調査区　「島状高まり」遺構と弥生時代後期水田（南東から）

2．川内調査区　弥生時代後期水田（南東から）

1．川内調査区　弥生時代後期水田（北から）

2．川内調査区　弥生時代中期水田（南東から）

図版24

1．川内調査区（土手樋門地区） 弥生時代後期水田（南西から）

2．川内調査区 溝群（北西から）

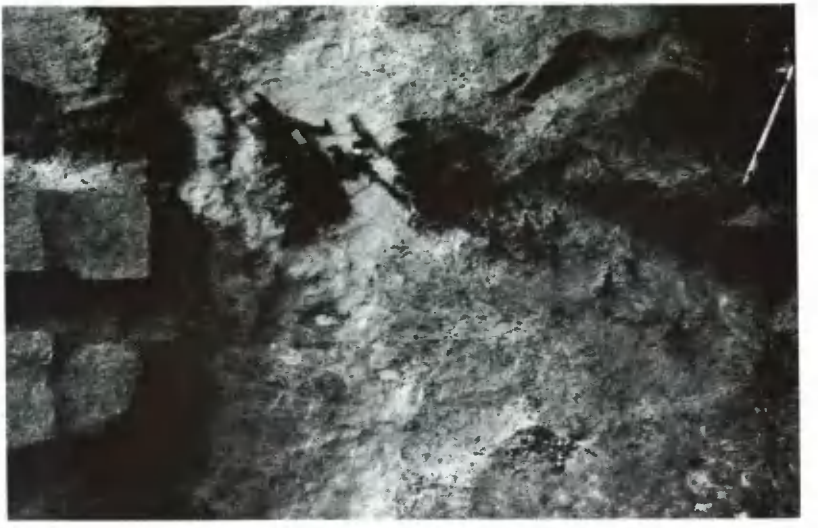
1．土　壙－262（南西から）

2．土　壙－262（南西から）

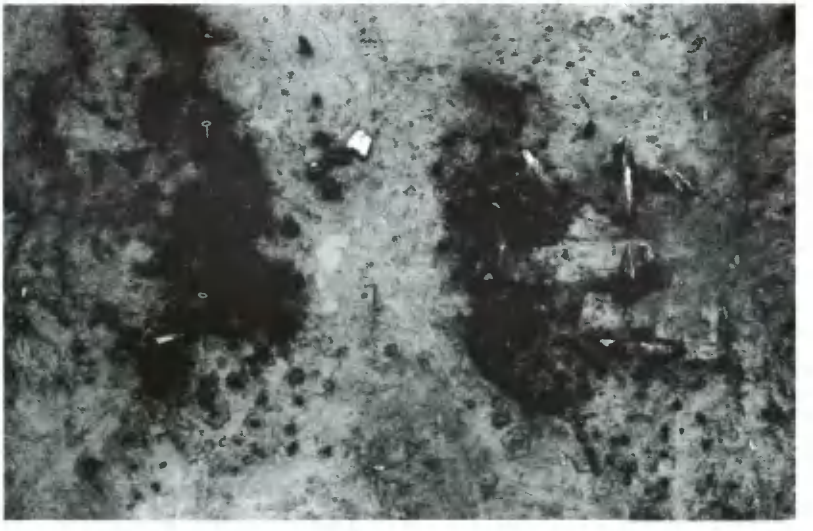
図版26

1．柱穴列（南東から）

2．柱穴列（北から）



1．井　堰－2（北から）



2．井　堰－2（北から）

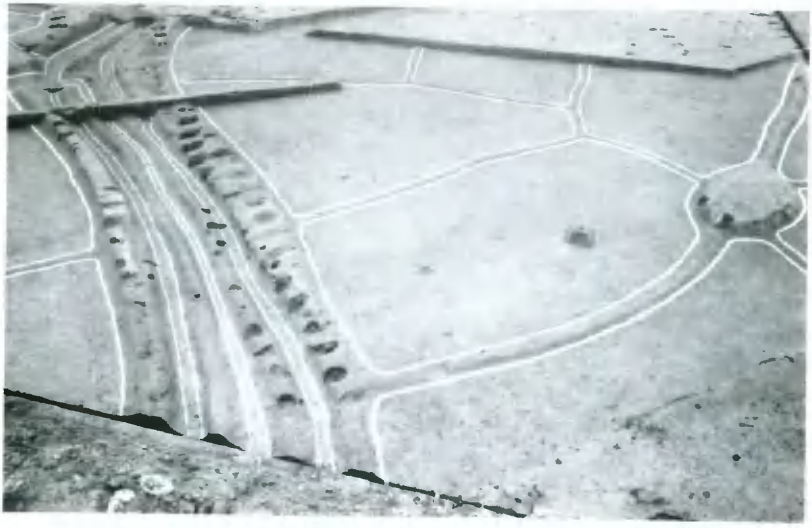
図版28

1．井　堰－3（北東から）

2．E・F－36・37　弥生時代中期水田（北から）

三ノ坪調査区　弥生時代中期水田（北西から）

図版30



1．畝畝－1・弥生時代後期水田・「島状高まり」遺構－12（南西から）

2．溝－162・171，畝畝－1などの断面（北から）

1．E－40・41　弥生時代後期水田（北西から）

2．E－39・40　弥生時代後期水田（南東から）

図版32

1．D－39～41　弥生時代後期水田（北西から）

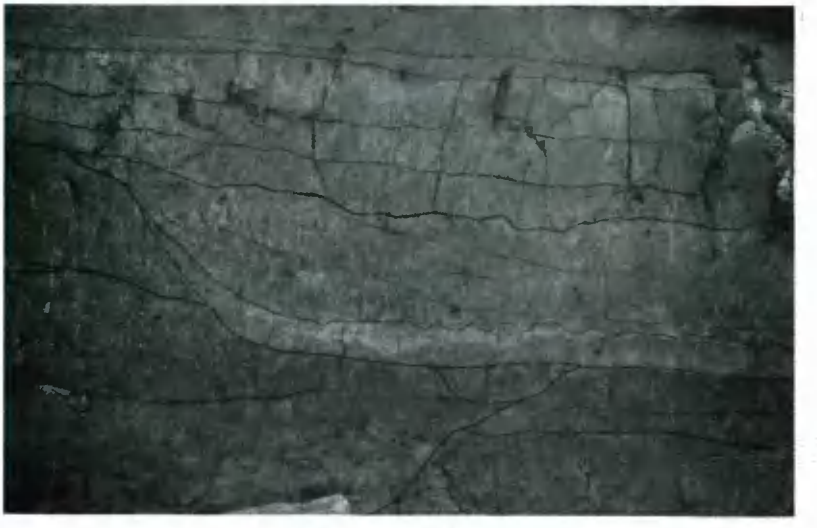
2．D－39～41　弥生時代後期水田（南東から）

1．「島状高まり」遺構－13（南東から）

2．稲株痕跡（南東から）

図版34

1．稲株痕跡（南東から）



2．水田土層（稲株痕跡）断面（南西から）

5702

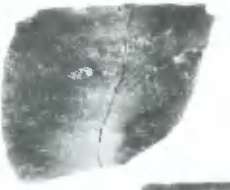
5722

5707

5708

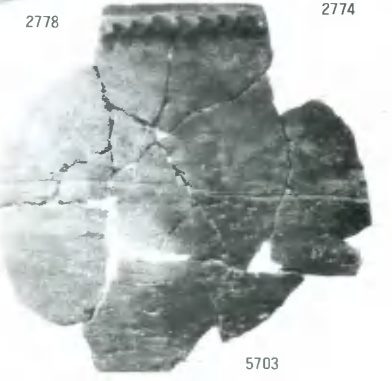
5704

2777


2778

2774

2775


5703

縄文式土器（晩期）

図版36

5714

8

5679

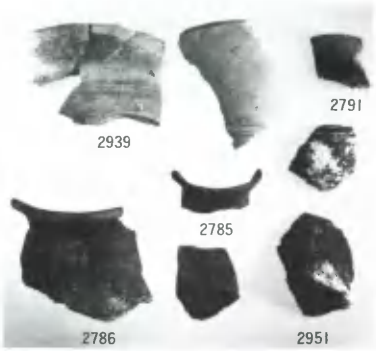
5715

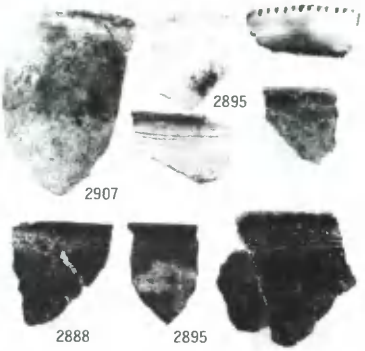
5680

2813

2852

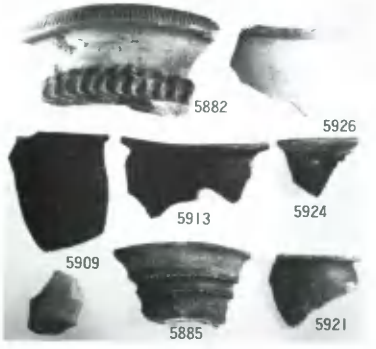
弥生式土器（前期）


2939
2791
2785
2786
2951


2895
2907
2888
2895

2909
2903
2908
2898
2929

5741
5742
5726
5736
5744
5727
5733


5882
5926
5913
5924
5909
5885
5921

5907

弥生式土器（前・中期）

図版38

1241

1111

1246

1253

830

1133

弥生式土器（後期）

420

421

597

806

1319

628

弥生式土器（後期）

図版40

弥生式土器（後期）

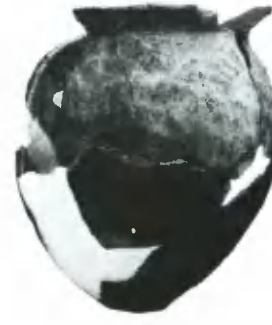
692

1232

1246

1324

1318



638

弥生式土器（後期）

図版42

弥生式土器（後期）

3435

3444

3447

3448

3449

3452

3466

3462

3453 a ・ b

3471

3470

弥生式土器（後期・井戸－16）

図版44

3467

3468

3479

3480

3482

3485

3486

3488

3490

3465

3491

3492

3493

3494

弥生式土器（後期・井戸－16）

3495

3496

3497

3500

3502

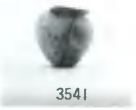
3503

3504

3505

3506

3507


3541

3546

3545

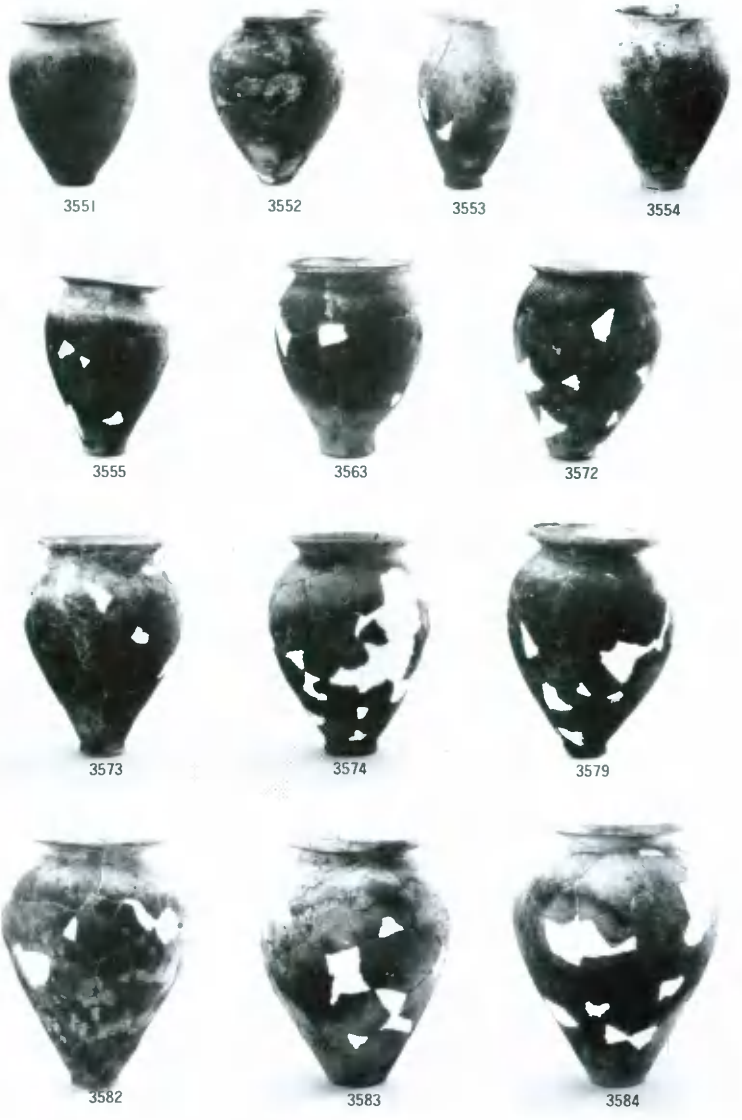
3547

3548

3550

弥生式土器（後期・井戸－16）

図版46



弥生式土器（後期・井戸－16）

3585

3594

3595

3603

3606

3609

3610

3614

3611

3612

3620

3616

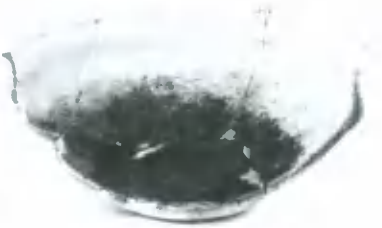
3615

3638

弥生式土器（後期・井戸－17）

図版48

3640



3619

3641

3660

3662

3642

3643

3659

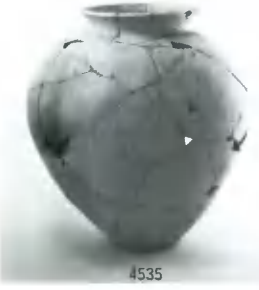
弥生式土器（後期・井戸－17・19）

4492

4497

4513

4518



4535

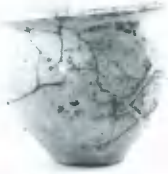
4540

弥生式土器（後期）

図版50

4568

4569


4579

4580

4604

4614

4621

4622

弥生式土器（後期・土器溜り）

4554

4555

4562

4563

4564

4567

弥生式土器（後期・土器溜り）

図版52

3248

3250

3251

3252

3261

3259

3260

3265

3266

3269

3270

3272

3297

弥生式土器（後期・竪穴式住居－36・37・39）

5055

5054

1871

1860

1863

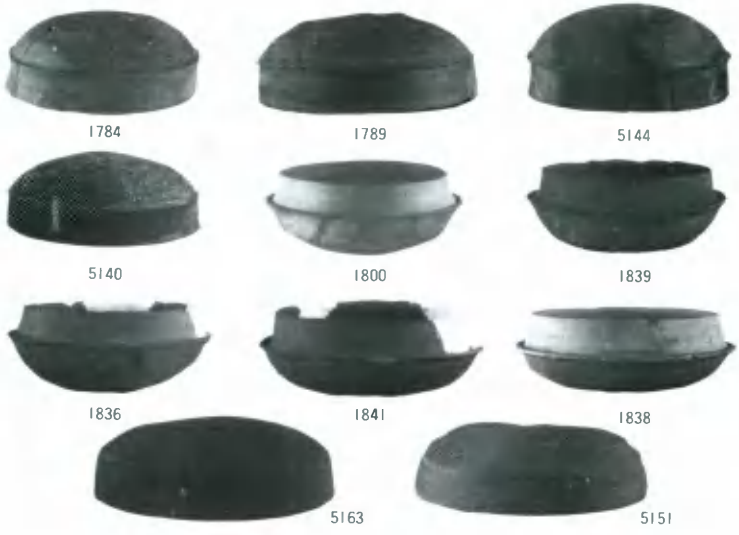
1870

5074

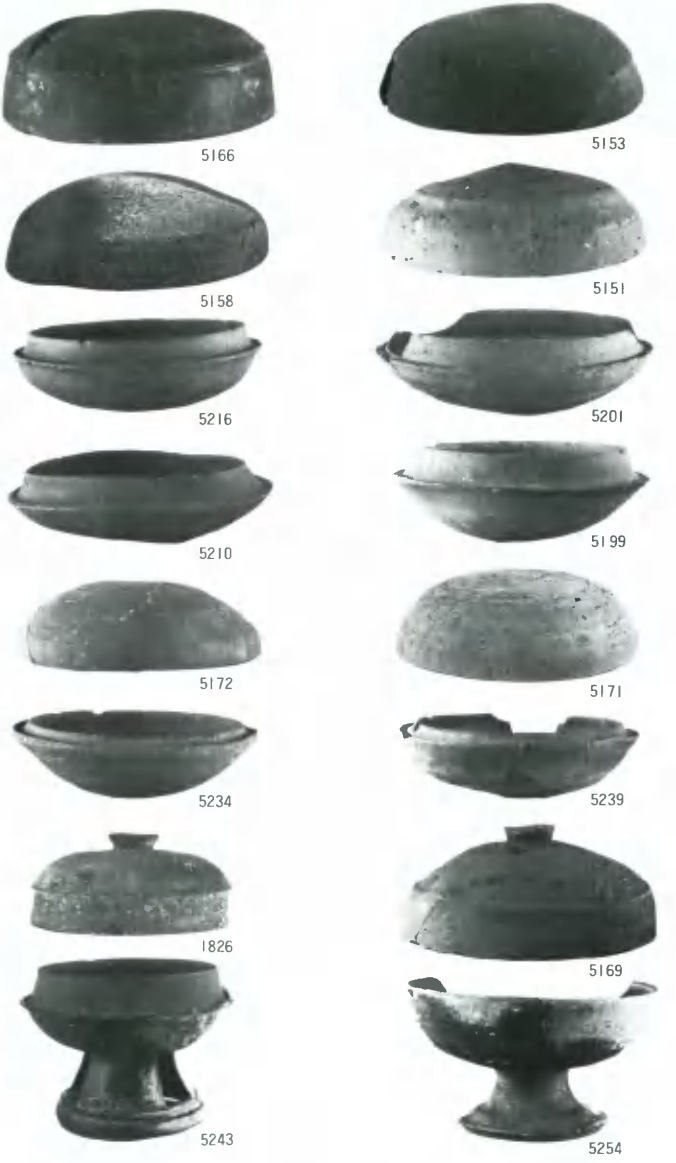
5070

古墳時代土師器

図版54



古墳時代陶質土器（上段）・須恵器（下段）


5166
5153
5158
5151
5216
5201
5210
5199
5172
5171
5234
5239
1826
5169
5243
5254

古墳時代須恵器

図版56

5264

1811

5292

1806

1807

5283

5288

古墳時代須恵器

2165

2176

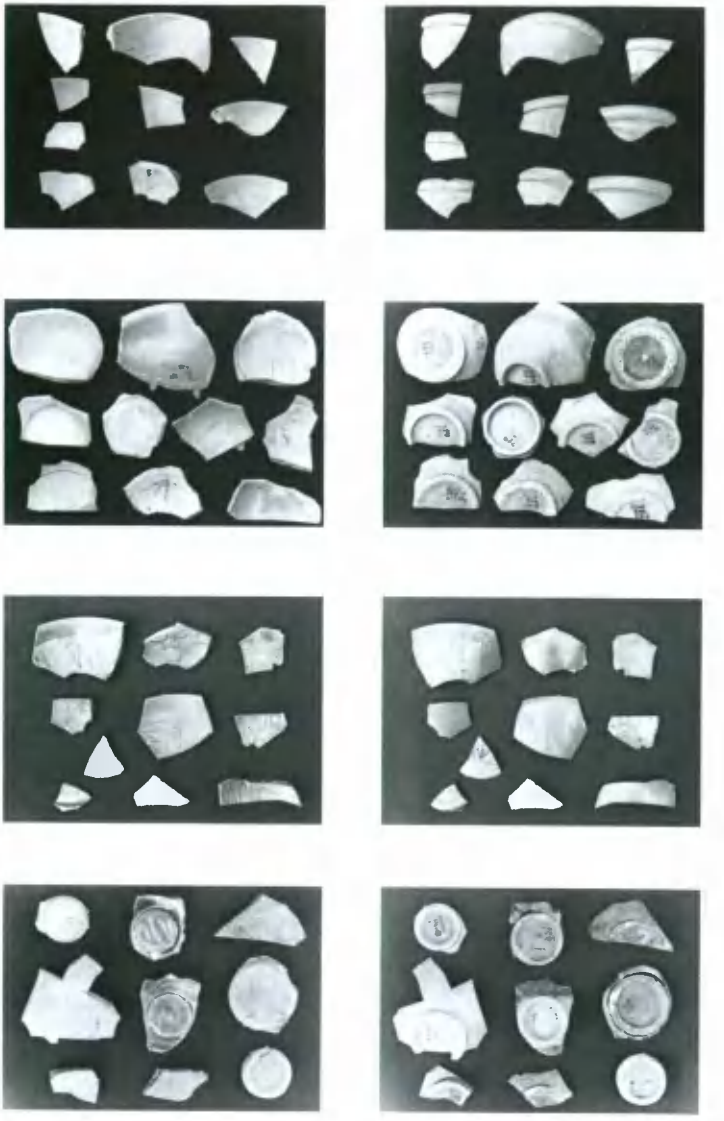
2188

2196

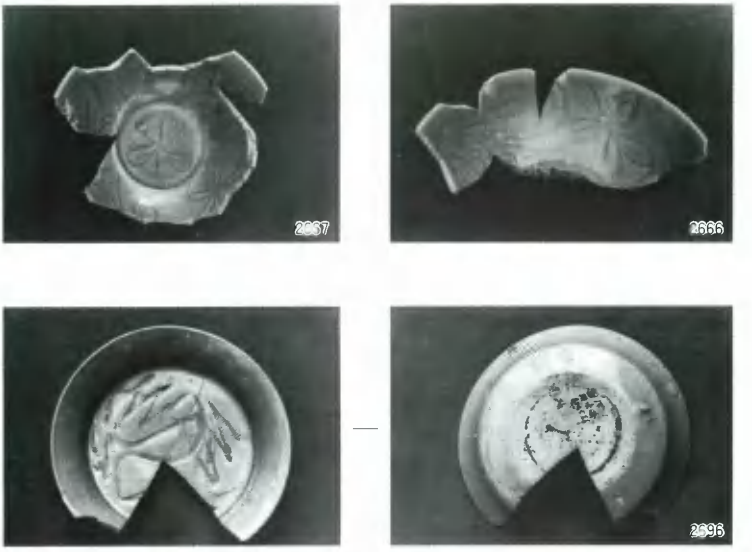
5478

2206

図版58



中須賀調査区出土中国製陶磁器(1)



1．中須賀調査区出土中国製陶磁器(2)

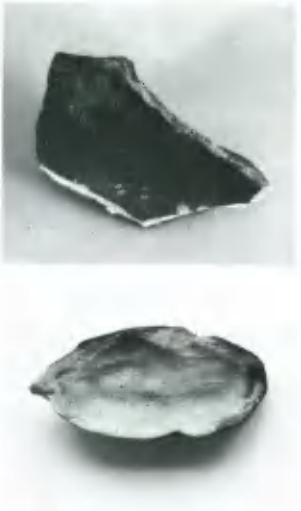
2．中須賀調査区出土石鍋

図版60

1．玉類(1)

2．玉類(2)

1．銅鐸形土製品



2．絵画土器・舟形土製品

3．土錘

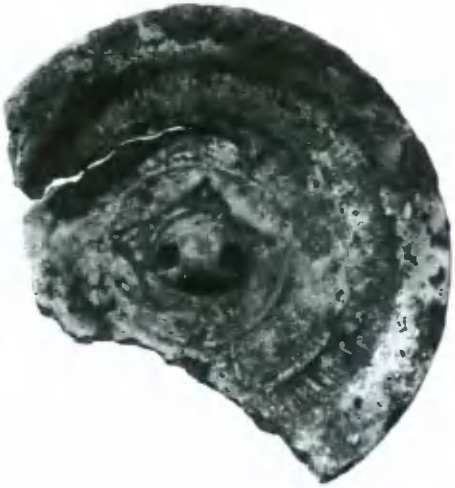
図版62

硯・紡錘車・石鏃・石錐・石庖丁・石匙

1．石剣・石鏃・石庖丁

2．砥石・石硯

図版64



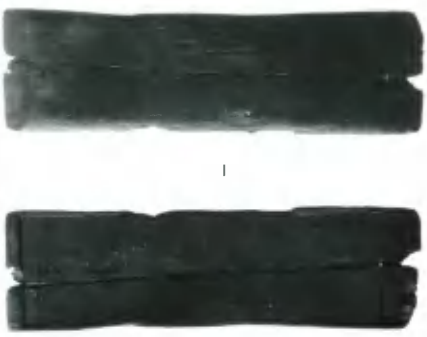
1．小型仿製鏡（原寸）

2．銅鏃　　3．鉄鏃

木製品（河道・井戸・溝－73）

図版66

木製品（溝－73）



25

25部分拡大

27

29

30

33

34

35

45

木製品（溝－73）

図版68

37

37部分

42

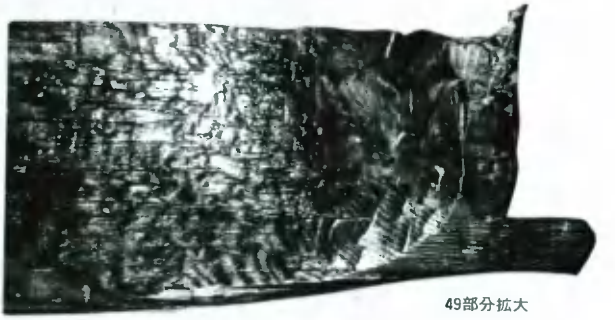
43部分

43

木製品（溝－73）

木製品（溝－73）

図版70



49部分拡大

50表

50裏

51

52

55

56

木製品（溝－73・井戸－30・溝－89）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56

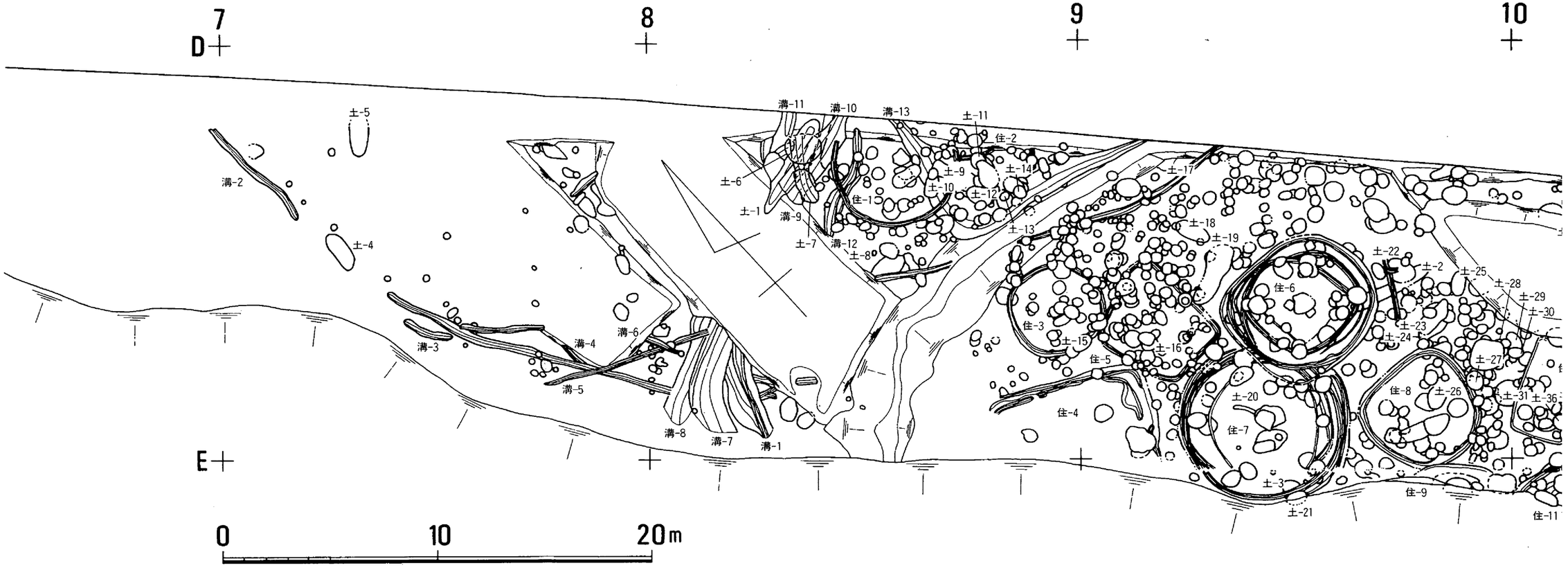
百間川原尾島遺跡 2

（表・図版）

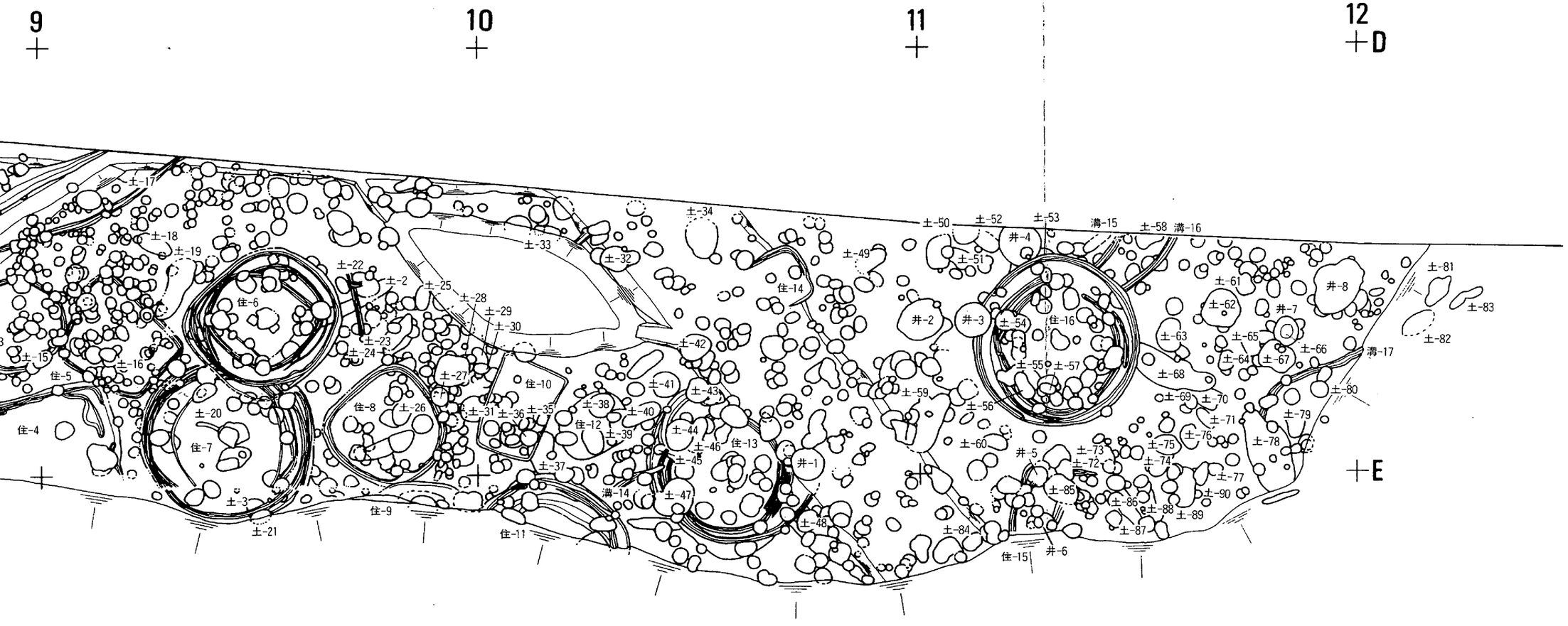
1984 年 3 月 20 日 印刷
1984 年 3 月 20 日 発行

編 集 建設省岡山河川工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会
岡山市内山下 2 － 4 － 6

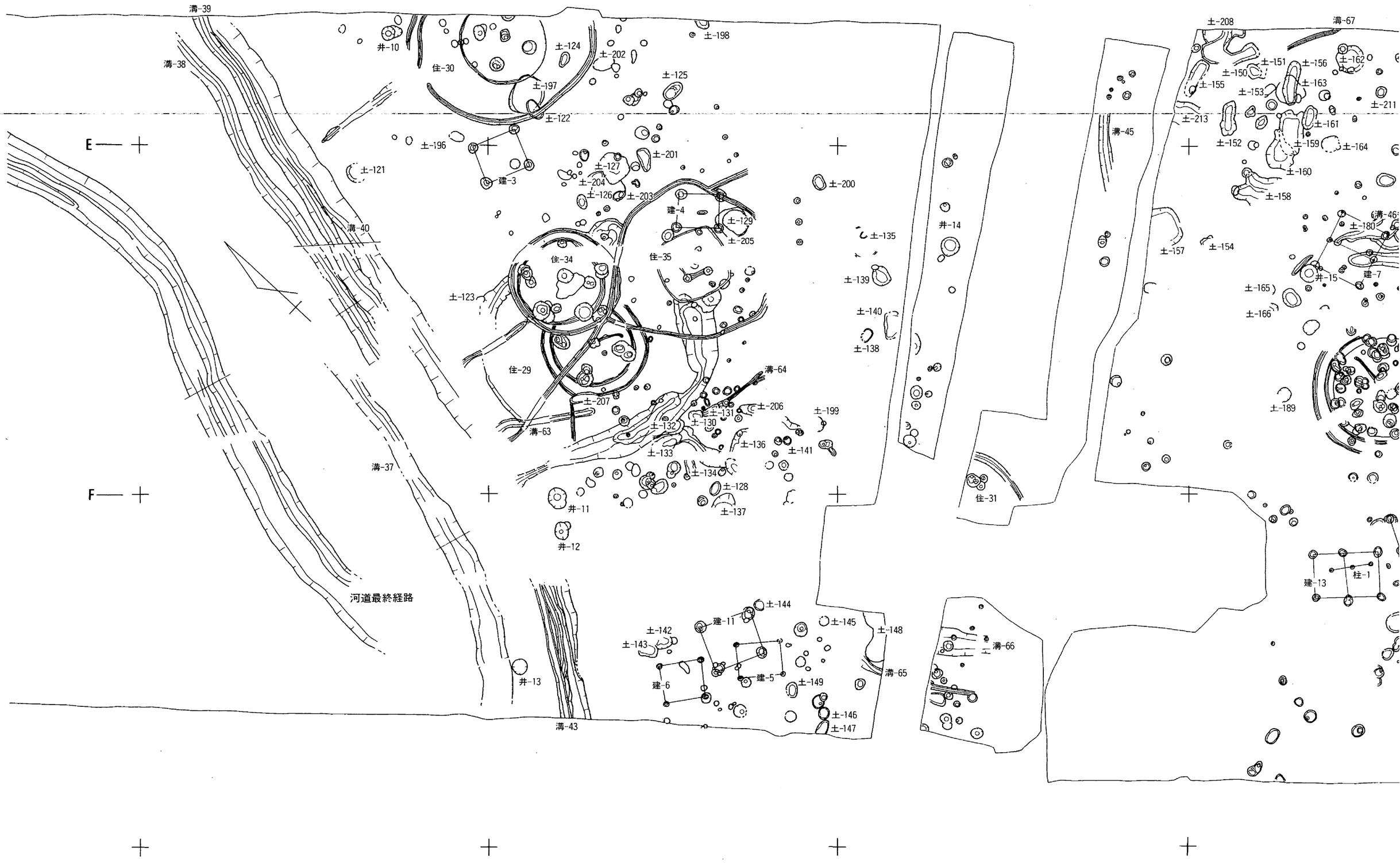
印 刷 山 陽 印 刷 株 式 会 社
岡山市中山下 2 － 5 －50



付図１　中須賀調査区弥生時代遺構配置図（1/200）

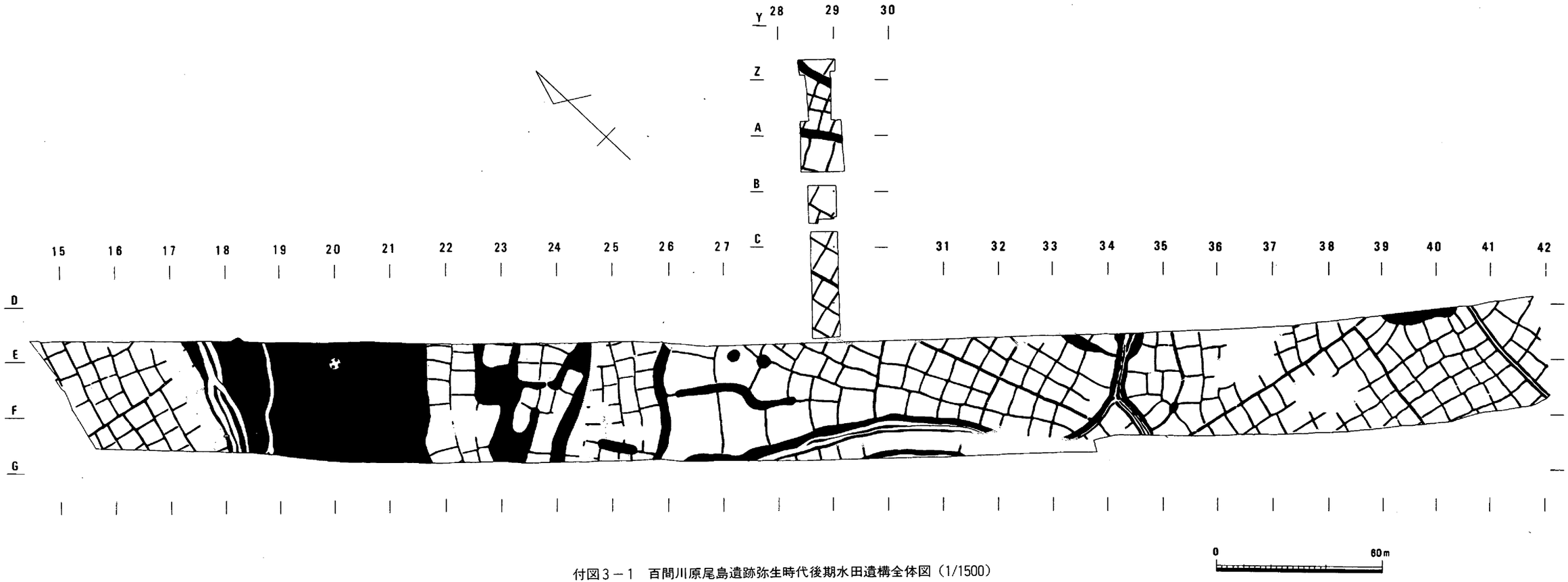


付図１　中須賀調査区弥生時代遺構配置図（1/200）

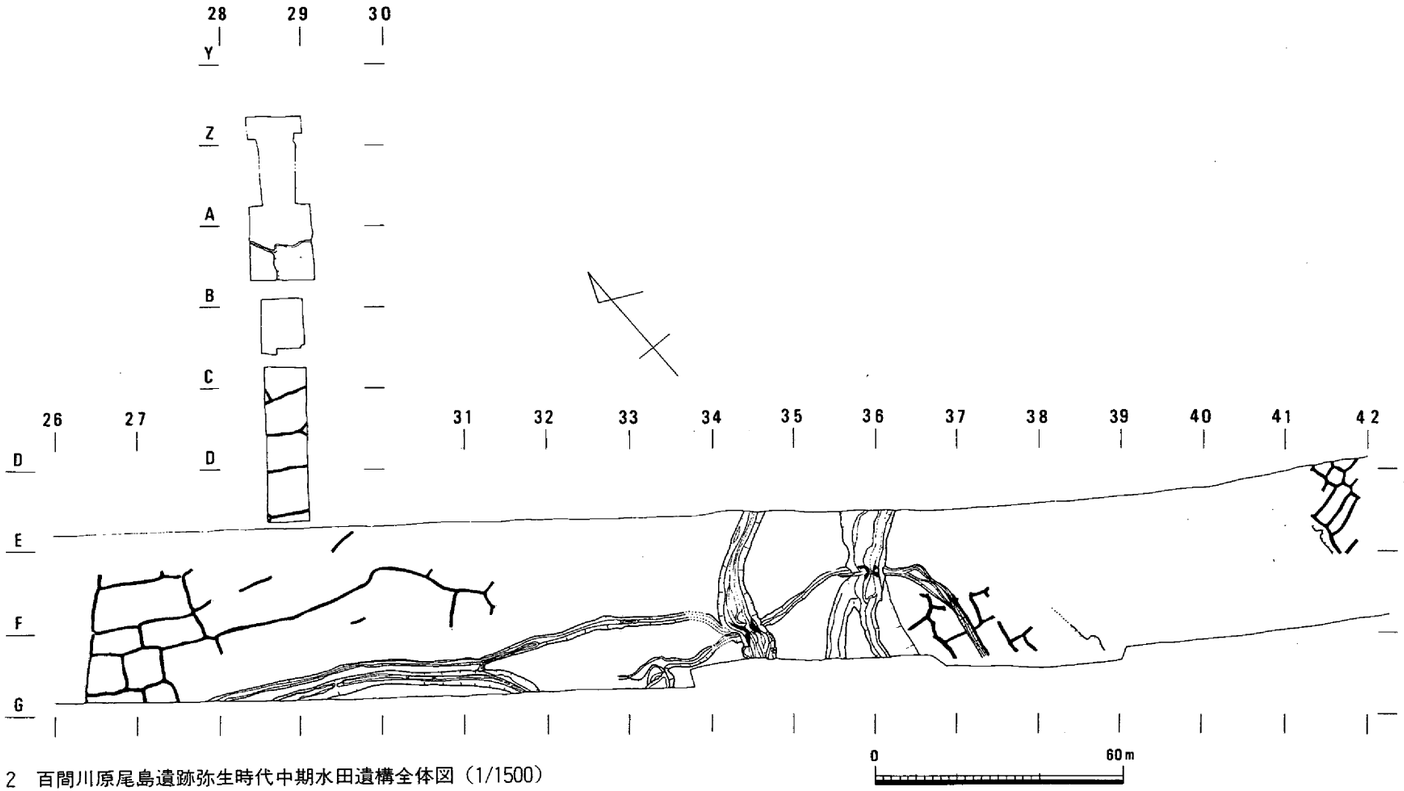


付図２　丸田調査区弥生時代後期遺構配置図（1/200）

付図２　丸田調査区弥生時代後期遺構配置図（1/200）



付図３－１　百間川原尾島遺跡弥生時代後期水田遺構全体図（1/1500）



付図３－２　百間川原尾島遺跡弥生時代中期水田遺構全体図（1/1500）